# 天からの贈り物

アスラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天からの贈り物

【Ｎコード】
Ｎ８０９４Ｉ

【作者名】
アスラ

【あらすじ】
孤独に生きる高校生、崎村高雅が天国の使い、アリアと出会う。彼女との出会いをきっかけに彼の世界は大きく変わっていく。ちょっとファンタジー要素が入った主人公最強のストーリーです。

## 主人公紹介（前書き）

誤字や脱字はチェックしていますが万が一あるかもしれませんのでご了承ください。

# 主人公紹介

朝日が昇り、小鳥が桜の木の上で合唱していた。
高「・・・・今日から2年か・・」
俺の名前は崎村高雅（さきむらこうが）。読者（てめー）と同じ人間だ。
高「・・・・学校（カス）か。くだらね奴のたまり場に行ってやるか」
さて、どんな人間どもが出てくることか。正直、読者（てめー）と話すのはもう嫌だ。と、言うことで俺はここから当分無言だ。

・・・変わって、作者が紹介します。

彼の名前は崎村高雅。今日から高校2年。
ある程度アニメやゲームも知っている。
結構万能キャラ。しかし、苦手なものはある。（それは、後にわかるでしょう）
こう読者（あなた）に当たるのはちょっとした理由があります。
彼は小学生に頃に家族と親戚を全員失った。
その内容をこれからお話しましょう。
そこに理由もありますから。

高雅が小学4年生の時。

今日は高雅の誕生日。ある大型ショッピングモールのレストランで家族と親戚全員で食事を迎えていた。
母「高雅、好きなものを食べていいからね。それから、ハイこれ。誕生日プレゼント」

高「わーい、やったー」
兄「いいなー高雅。うらやましいなー」
父「ちゃんと、勇人の時にも買ってあげるよ」
兄「はあ～、誕生日が待ち遠しいな」
何も起こらないと思っていたが、最悪が起ってしまった。
「大変だーー!!。火事だーー!!」
突然の叫び声で人々はパニックになった。
「何だって、早く逃げろーー」
「うわーーん!!。ママどこーー!!」
人がうじゃうじゃ外へ駆けだしている。
母「あなた、私達も」
父「そうだな。おい、逃げるぞ」
高雅達もそれに釣られて逃げ始める。
しかし、逃げている途中・・・
高「うわ!?、どいてよ。」
高雅は人込みによって、はぐれていく。
高「お父さん!!、お母さん!!、兄ちゃん!!」
そして、本当の最悪が訪れた。

ガララ!!!

突如、天井が壊れ人を大量に押し潰した。
「う・・うわーーー!!!」
高「!?・・」
高雅は絶句した。その瓦礫の中には家族と親戚がいた所だから。
高「父さん!!、母さん!!、兄ちゃん!!」
さらに、空いた天井から火が落ちてきて、瓦礫が燃え始めた。
高「く・・どいてよ!!。皆を助けなきゃ」
高雅は人をかき分けて燃えている瓦礫に近づく。
しかし、あるおばさんが高雅の前に立ち塞がる。

「僕!!、一人なの?。とにかくおばさんと逃げましょ」
高雅はおばさんに捕まった。
高「離してよ!!」
そんな言葉を無視して、おばさんは高雅を抱えて逃げた。

高雅は生き延びた。あのおばさんのおかげで。
しかし、失ったものはあまりにも大きかった。
高「・・・・ひっく・・」
火事の後、高雅は家に帰って泣いていた。
高「皆・・・死んだんだ・・・」
高雅は受け入れようとしているが、さすがに小学生にはきつい。
高「ん・・・これは・・・」
ふとテーブルを見ると、そこには通帳が置いてあった。
高「母さん、持って行くの忘れたんだ」
高雅は興味本位で通帳の中を見た。そこには・・・
高「さ・・・３０億円!?」
あり得ない大金が書いてあった。
いくら高雅でもその額がとてつもないことは知っていた。
高「こんなにあれば、一人でも生きていける。学校にも通える」
暗かった心に光が差し込んできた。そこに・・

ピーンポーン

インターホンが鳴った。
高雅は取りあえず出てみると見ず知らずのおじさんがいた。
「やあ、高雅君かい?」
そのおじさんは馴れ馴れしく高雅に話しかける。
「お気の毒に。君のお母さんが死に際に僕に電話をかけたんだ」
高「・・・・」

高雅は黙々と聞いていた。通帳を手にしながら。
「おや、これは通帳か?。ちょっと貸せ」
謎のおじさんは高雅から通帳を取り上げた。
「うひょー!!。噂通りの３０億だぜ!!。これは一生遊んで暮らせるな」
高雅はこの時、こいつはダメだという感じがした。
高「・・・・返せ」
「ダメだ。子供にこの額は危ない。うへへへ、何しようかな?」
高「・・・・人間は自分さえよければいいんだ」
「はあ!?、何だって?」
高「返せ!!」
高雅は飛びついた。しかし、軽く避けられる。
「なんだ!?、ガキがふざけやがって。おらっ!!」
謎のおじさんは蹴ろうとした。しかし・・・

ガシッ

高雅はそれを受け止めた。
「な・・何!?」
高「こいつは悪い奴・・・悪い奴は人間・・・人間は制裁する・・・」
高雅は小さい体にかかわらず謎のおじさんをジャイアントスイングする。
「う・・うわあああ!?。なんだこのガキ!?。化け物か!?」
高「どりゃあああああ」

ドガッ!!

高雅は壁に叩きつけたと同時に通帳も奪い返した。
「く・・このガｋ〈ドガッ!!〉ぶへ!?・・・」

高雅は顔面を殴った。
高「まだ俺の制裁は終了してないぜ」
「ひ・・・ひいいいい。許してください。お願いします」
謎のおじさんは完全に立場逆転されていた。
高「さあ、行くぜ!!・・・」
高雅はその後、顔の形が変わるまでボコボコにした。

それから、高雅は人間を信用できなくなってしまった。
友達も全員絶好し、人間を拒むように生き続けた。
高雅は自分の才能のお陰で自炊、勉強、スポーツもある程度こなしてきた。

まあ、これが彼の人生の歩みの欠片です。
さあ、これから彼の人生は予想不可能なことに巻き込まれるでしょう。
それを読者(あなた)が見守ってください。

## 主人公紹介（後書き）

人によっては読みにくいなどあると思いますが、この書き方で書いていきます。

## 日常終了のお知らせ（前書き）

言い忘れていましたが、更新は1週間以内に1回はします。結構気まぐれなので1週間の内に何回するかはコロコロ変わります。

# 日常終了のお知らせ

緑淵高校（みどりふち）

特に有名な高校ってわけではない。普通の進学校だ。
高雅はクラス替えの掲示板を見て、すぐさま自分のクラスへ向かった。
高「誰もいねえな・・・」
高雅は人に会うのをなるげく避けるため、1時間前には登校している。
高「寝るか」
自分の席に着いた途端、高雅は眠ろうとした。しかし・・・

ガララッ

高「!?・・」
女「へ・・・あ・・おはよう・・ございます」
気の弱そうな女子が入ってきた。
高「・・・これから1年間、俺に話しかけるな」
高雅は脅すように忠告した。
女「へ・・・う・うん・・・」
入ってきた女子は怯えながら頷き、席に着いた。高雅は何もなかったのように眠りに着いた。

キーンコーンカーンコーン

高雅はチャイムの音によって目覚めた。その光景は・・・

高「うわ、カスがいっぱいだ・・・」
つい、口からこぼしてしまった一言。それを聞いていた不良がいた。
不Ａ「ああ、今お前何って言ったか？」
不Ｂ「カスはどっちか弁えてんのか？」
高「あーあ、聞こえちゃったんだ」
不良っぽい男２人が高雅に近づく。
不Ａ「おい、調子こいてんじゃねーぞっゴラ！！」
不良の声で教室が凍りつく。
不Ｂ「この方は１年の時に不良の頂点にいたお方だぞ。知らねえとは命知らずだな」
高「つまり、世界をろくに見てないで浮かれている馬鹿とその尻に着いて行く大馬鹿ってことか」
不Ａ「んだとゴラ！！」
不良は高雅に拳を振り上げた。

ボゴッ！！

高雅はもろに顔面を殴られた。高雅は勢いによりイスから倒れた。
教室がざわめく。
高「・・・これで防衛が認められるな。制裁を下してやる」
不Ａ「ははは、弱いなおｍ〈ドゴッ！！〉ふべ！？・・」
高雅は目に見えない早さの蹴りを不良の腹に食らわした。
不Ｂ「この野郎、死ね！！」
もう一人の不良はイスを持ち上げた。
高「おいおい、ここは公共の場だぞ。言葉づかい弁えろ」

ドゴッ！！

不Ｂ「へぶし！？・・」
高雅の音速パンチが不良の顔面を壊した。

２人の不良は完全にのびた。
高「そうだ、ついでにお前らに忠告してやる」
高雅はクラス全員に聞こえるように喋った。
高「俺と関わるな」
教室は静まりかえった。

ガララ

そこにちょうど良く先生が来た。
先「皆さん、早く席に着いてください・・って、これはどういうことですか!?」
先生がのびている二人を見て駆け寄った。ちなみに、先生は女。
高「俺がやった」
高雅は何の躊躇いもなく自白した。
先「あなたは・・・確か、崎村高雅ね。後で進路指導室へ来なさい」
高「やだ」
高雅はきっぱり断った。
先「はぁ!?」
高「俺、早退します。今日決めるクラス役員とかは適当でいいですよ」
先「ちょっと、待ちなさ・・・・」
先生の言葉が言いきる前に高雅は鞄を取り教室を出た。

帰り道、高雅は自転車をこぎながら愚痴っていた。
高「なんで、不良を倒したら生徒指導室行きだ!?。ふざけやがって。これだから人間ってやつは・・・」
そう愚痴りながら家に帰宅。
高雅は玄関にカギを挿した。すると・・・

？「あなたがコウガって人？」
高「ん、誰だ・・・って!?」
高雅が後ろを向くとそこには
高「う・・・浮いてる!?・・・」
高雅と同じくらいの女性で髪が青くて長い人が浮いていた。
ア「私はアリア。あなたの人生を見直させるためにあなたの親から頼まれたの」
高「・・・はぁ!?」
高雅の頭は意味不明状態。ただ一つ思ったことは・・・
高「こいつは・・・か○たの類か？」
ア「？、？？、？？？」
アリアの頭の上に大量の？マークが飛んでいる。
高「とりあえず・・・じゃ」
高雅はバタンと音を立てながら家に入った。
高「一体何なんだあれは!?。幻覚か？」
ア「違うわよ。ちゃんとした実態よ」
高「ってうわあああ!?。壁をすり抜けた!?」
ア「当然よ。これくらい私には簡単なことよ」
高「不法侵入し放題だな」
ア「とりあえず、これからあなたと一緒に過ごすわ」
高「勝手に決め付けるな。いくら人間じゃなくても、俺は嫌だ」
ア「こっちにも約束があるのよ。仕方ないけど、無理やりに契約してもらうわ」
高「な・・ちょ・・おま・・・」
アリアは高雅の手を取り、呪文のような言葉を唱えた。その後に目的の言葉を言った。
ア「我とこの者の絆をここに結ぶ」
すると高雅とアリアの胸から光を帯びた紐が出てきた。
高「な・・なんなんだ・・・一体」
二つの紐は結ばれていく。結ばれた途端、消えてしまった。

ア「契約完了っと」
高「おい、何をした!?」
ア「これから、私はあなたの使い、属にいうパートナーね」
高「また勝手なことを・・・・ってなんだこりゃ!?」
高雅の手には羽のような紋章が描かれていた。
ア「それは契約の印。証拠みたいなものよ」
高「お前は一体何者だ!?」
ア「さっきも言ったでしょ。私はアリア。天国の使いよ。あなたの親から人生を見直させるように頼まれたの」
高「証拠はどこにある?」
ア「あなたのお兄さんの名前は勇人君で、お父さんが文夫で、お母さんが紗奈恵でしょ?」
高「な・・・当たってる・・・まさか・・」
ア「だから本当だって言ってるでしょ」
高雅は少しだけアリアの存在を認めようとした。
高「・・・もう、好きにしろ。人間じゃないなら別にどうでもいい」
ア「よろしくね、コウガ。じゃあ、私は休憩するから」
そういうと、突然アリアは光に包まれた。その光は高雅の腕を包んでいく。
高「うわ!?、今度は何だよ!?」
すると、光が消えていく。高雅の腕には虹色のブレスレットが巻きつけられていた。
ア「この形状が一番落ち着くのよ」
高「形状変化可能ってまじかよ。本物なんて見た事ねえぞ。もういいや・・・・」
高雅は色々聞きたいことはあったがめんどくさいのでまた寝ることにした。

こうして、高雅とアリアの出会いは果たされた。

# 何でもあり

あれから一日経過。

高雅はアリアのことを昨日の中（うち）にある程度理解した。

高「簡単に言えば、何でもありキャラだな」

ア「それって褒めているの？馬鹿にしてるの？」

高「さー、どうでしょう」

ア「答えてよ」

高「オット、モウコンナジカンダ。ガッコウヘイカナイト」

ア「ちょっと、あからさまに棒読みしてるでしょ！？」

高雅はアリアのことを無視して学校へ向かおうとした。

ア「ちょっと待って」

高「まさか、学校に来るなんて言うんじゃねーだろうな？」

ア「あれ、よくわかったね」

高「駄目だ。絶対来るな」

ア「なんでよ？」

高「パターン的に問題を起こしそうだからだ」

ア「大丈夫よ。人間界のことぐらい天国で勉強してるから。黙って何もしなければいいのでしょ？」

高「アニメとかは、そう言って黙らないパターンが多いからな」

ア「大丈夫よ。小説だから」

高「納得できるか！！。・・・って、何勝手にブレスレットになってんだよ！？」

ア「いいでしょ別に。大体、契約しちゃったんだから常にあなたの半径５００メートルにはいないといけないのよ」

高「そういうことは先に言え！！大体、そのリアルな数字は・・・ってやば！！。早く行かねえと人に会う！！」

高雅は自転車をかっ飛ばした。

高校到着。高雅は教室へ向かっている途中、先生が2・3人立っていた。
すると、高雅を見て先生が近づいてきた。
先A「君が崎村高雅君かい？」
高「そうですけど、何か？」
先B「昨日のことで少しお話があります。進路指導室へ来てください」
高「あっ、忘れてた」
高雅は昨日のことを思い出した。
ア「何？、なんかやったの？」
高「お前は黙れ」
ア「何よ、ケチ」
高「んだとっ！！」
先C「何だ！？、今、女の声が・・・」
高「！？」
高雅はブレスレットに向かって小声で話した。
高「おい、お前の声って俺以外に聞こえるのか？」
ア「うん、そうだけど」
高「そういうことは先に言えって！！」
先A「何をしている！？。早く来い！！」
一人の先生が高雅の腕をがっちりと掴んだ。
高「いてて、腕を引っ張るな」
高雅は先生に連れて行かれた。

高校到着早々に進路指導室。
ここは、校則違反や問題のある生徒が連れてこられる拷問部屋。
高「おい作者、拷問部屋は言いすぎだろ」

でも、言うことを聞かなかった人は爪を剥がされたことがあるぞ。
高「何だよその設定!?。どこぞの昭和５８年!?」
ア「さっきから誰と話しているの？」
高「何でもない」
先「崎村君。早いわね」
目の前の先生は担任だった。
高「さっさと終わらせてくれ。反省文でも拷問でも」
先「・・・教室に戻っていいわよ」
高「!?」
先「さっき、杉野（すぎの）さんから聞いたの。あなたは殴られてやり返しただけって」
高「・・・・・・」
先「だから、今回は許すけどなるべく加減してあげてね」
高「はいはい。あいつらが俺と関わらなかったらですけど」
高雅は適当に言って教室へ向かった。

教室へ向かう途中
ア「杉野って誰だろうね」
高「さー、知らねえ」
高雅はどうでもよさそうに返事をした。
教室の目の前の扉に着いた。

ガララ

高雅は普通に開ける。するとある一人の女子と目が合った。
女「あ・・・」
高（さっき聞いて、他に誰もいないってことは杉野はこいつのことか）
高雅は頭で理解した。そして杉野に近づいた。
杉「お・・・おはよう・・・」

高「わざわざ報告ご苦労。そのお陰でめんどいことは避けられた」
杉「う・・うん・・」
高雅はそれだけ言って席について眠ろうとした。
それを妨害するかのようにアリアが話しかけてくる。
ア「ちょっと、あれじゃかわいそうだよ」
高「知るか。お礼は言ったんだからいいんだ」
ア「それでも、言い方ってものがあるよ」
高「黙れ。ずっと黙っているって言ったじゃねえか」
ア「それはそれ。これはこれ」
高「てめー、ある意味何でもありキャラだな」
ア「いいから、ちゃんとお礼を言って方がいいよ」
高「うるさいな。人間とは話したくないんだ」
高雅は顔を机に潰して寝た。
杉「崎村君、独り言多い・・・・」
杉野はその光景を見ていた。

授業中

先「このXに2を当てはめると?の式ができ・・・」
今は数学の時間。数学の先生は担任だ。高雅は爆睡中。
高「Ｚｚｚ・・・・」

ピシッ!!

高「いた!?」
時速３０キロのチョークが高雅の頭に当たった。
先「崎村君、この問題を解いてくだｓ「１３」正解・・・」
教室がざわめく。寝ていたはずの高雅が即答したからだ。
高（こんな簡単な問題でざわめくなよな・・・）

そう思いながらまた眠ろうとした。

ピシッ！！

高「んぎゃ！？」

先「誰が寝ていいなんて言いましたか？ちゃんと起きてなさい」

高「へいへい」

先「返事は『はい』」

高「はいはい」

先「一回だけ」

高「何、この王道なパターンは？」

キーンコーンカーンコーン

先「じゃあ、ここまでね。総務、号令」

総「きりーつ、気をつけー、礼」

全「ありがとうございました」

先生は教室を出た。

その瞬間・・・

生徒A「ひゃっほー、昼休みだー」

B「購買部に行くぜー」

C「抜け駆けさせねー」

D「らららこっぺぱーーーーーん」

大量の生徒が廊下を走って行く。

高「弁当ぐらい作れよな」

高雅は弁当を持つ。そして、教室の外へ出た。

屋上

高「春風が気持ちいな・・・」
高雅は春風を堪能しつつ、食事を済ませていた。
高「あー、風になりてーなー・・・」
ア「何、現実逃避してるのよ」
高「誰が喋っていいと許したか？」
ア「いいじゃない、誰もいないことだし」
高「うるさいな」
そう言うと高雅はポケットからゲームを取り出した。
ア「それって・・・ゲーム機っていう物よね？」
高「ああ、ＰＳＰだ。暇つぶしには最適だからな」
ア「でも、そういうのって学校に持ってきちゃいけないんじゃ・・・」
高「ばれなきゃいいんだよ」
ゲームの電源を入れた瞬間・・・
不「おらっ！！さっさと来い！！」
突然の怒り声。
高「うわ～、何このイベント？」
とりあえず、不良を確認する。すると、アリアが一足先に気づいた。
ア「あれって杉野ちゃんじゃないの」
高「・・・誰？」
ア「ほら、朝に会った女子よ」
高「わかってる。ただ言ってみただけ」
すると、高雅はゲームをポケットに収めた。そして・・・
高「おい、先着がいるんだけど・・・」
高雅は挑発みたいに言った。てか挑発だ。
杉「あ・・・」
不「何だテメーは？」
高「ここの先着人だ」
ちなみに、不良は前回とは違う。３年の不良だ。体格は高雅より上だ。

高「他をあたったら見逃すけど」
ア「ちょっと、それじゃ杉野ちゃんを見捨てるき!?」
高「別にどうでもいいだろ。いや待てよ・・・・にっ」
高雅は不気味に笑った。
高「いいこと思いついた。おい、そこのでかっぱち。俺を殴れよ」
不「んだとゴラ!!」
不良は拳を振り上げ・・・

ボゴッ!!

高「がは・・・」
その拳を高雅の顔面に当てた。
高「これで防衛が許される。おいアリア。ちょっと武器になれ」
ア「え!?、何で!?」
高「いいから黙って剣にでもなれ」
アリアは高雅の言う通りに剣になった。
杉・不「!?」
二人は驚いた。そりゃ、突然ブレスレットが剣になればね。
高「血祭りの時間だ」

ドゴッ!!

不「ぐはっ!?・・・」
高雅は音速で柄の部分で腹を殴った。不良はうずくまる。
高「これで、逃げられないな。過剰防衛ぎりぎりまで切り裂いてやる」
高雅は鬼のような声と顔で言った。
杉「・・あ・・・・ああ・・」
杉野は恐怖のあまり失神した。
高「・・・これでいいな。アリア、戻っていいぞ」

ア「う・・うん」
アリアは理解することなくブレスレットに戻った。
高「とりあえず、この脇役（ふりょう）に制裁を」
高雅は不良の歯を1本取った。

# 急展開

あの不良の後、高雅は杉野を保健室へ連れて行き、適当に・・・
高「なんか、貧血で倒れたみたい」
と言って、すぐさま教室へ戻った。
それからのこと・・・
高「うへー、人間を抱えちゃったよ」
ア「そりゃそうでしょ。気絶させちゃったんだもん」
高「まあ、これで俺に怯えて近づかなくなるだろう」
ア「まさか、私を武器にしたのってそれが狙いだったの？」
高「もち」
ア「はぁー、これじゃ私はダメな方を手伝っただけじゃない」
高「ご苦労」
ア「うれしくないよ」
高「それにしても、お前の口調は少し変わったような」
ア「そうかな？」
高「だって、最初に会った時、なんかクーデレキャラっぽい口調だったじゃん」
ア「くー・・・でれ・・？、？？、？？？」
アリアは頭にハテナを浮かべた。
高「猫でも被っていたのか？。まあ、どうでもいいけど」

キーンコーンカーンコーン

午後の授業が始まった。

そして、放課後。
高「帰ったら適当にゲームでもするかな・・・ん」

大きく背伸びしながらこれからのことを考えていた高雅の前に・・・
不「おうおう、あの時はやってくれたな」
昼休みの不良がやってきた。
高「・・・誰？」
高雅は適当にボケ、挑発する。
不「ムカつくぜ、そのすました顔が！！」
高「殴ったらやり返すぞ。歯1本じゃ済まさないから覚悟しろよ」
不「なら、一撃で倒すまでだ」
不良はどこからか金属バットを取り出した。
不「死ねや、おら！！」
不良は金属バットを思いっきり振った。

スカッ

不「な・・・消えただと」
高雅はその場から消えた。周りにもいない。
不「あの野郎、逃げやがったな」
高「何言ってんの？、馬鹿なの？、死ぬの？」

ゴチン！！

不「げふん！？」
不良の頭に虹色のタライが落ちてきた。不良はのびた。
高「着地っと。アリア、よくやった」
ア「どういたしまして」
高雅は攻撃の瞬間に跳んでいた。そして、空中でアリアを羽に変えて少し浮遊した後に、アリアをタライに変え、落とした。そのまま、自分も着地というわけ。
高「殴ろうとした意思があったからこれも防衛の中だな」
ア「ところで、どうして少しの間、浮かんでいたの？」

高「意味など無い」
ア「えええええ・・・」
高「ほら、さっさとブレスレットに戻れ」
ア「うん。それでさ、もう一つ質問」
アリアはブレスレットに戻りながら聞いた。
高「何だ？」
ア「どうして、今まで殴られてからやり返したの？さっきみたいに攻撃の意志さえ得られれば防衛になるのでしょ？」
高「わざとに決まってんだろ」
ア「どうして、ね？」
高「人間の意志ってものを確かめたいんだ。本気の意志さえあれば俺なんて一撃でのびるからな」
ア「へー、そうやってよくできた人間を探しているってわけ？」
高「そんな感じだ。もう質問は無いな？早く帰ってモンハンでもしよ」
そうして、高雅は帰ることにした。

次の日

先「今日は抜き打ちテストをしてもらうます」
全「えええええええええええええええええ」
また、数学の授業。そして誰もが嫌う抜き打ちテスト。
高「このブーイングの量からして、皆は復習してないな」
高雅は余裕に構えていた。テスト用紙が配られる。
先「それでは、初め」

カキカキスラスラ・・・ジーーベシッ！！

数分後、テスト終了。不正行為はあった。
高「カンニングする程の問題か、あれ？」
先「それでは、帰りのホームルームに返しますので」

キーンコーンカーンコーン

先「それでは総務、号令」
総「きりーつ、気をつけー、礼」
全「ありがとうご（略）」
先生が教室を出た瞬間・・・
生徒Ａ「行くぞーおめらーー」
Ｂ「全俺が購買部を呼んでいる」
Ｃ「俺の焼きそばぱーーーーーーん」
Ｄ「ららららこっぺぱあああああああああん」
何人かの生徒が一斉に外へ駆けだした。
高「うぜえええええ。てか、何で４時間目が全部数学なんだよ」
と言いながら高雅も外へ出る。もちろん、購買部目当てではない。
今日は人気（ひとけ）の無い木陰で食べている。
ア「相変わらず、人のいない所で食べるのね・・・」
高「当然だ。人間（あいつら）と一緒なら飯が不味くなる」
ア「言い過ぎじゃないの？」
高「俺にとっては事実だ」
ア「それにしても、コウガってちゃんと弁当作るのね」
高「まあな。自分の好きなのが入れられるし」
ア「そう言いながら、バランスが取れた料理よね」
高雅の弁当は肉・野菜・魚が全てバランス良く入っている。
高「俺はただ好きな物ばっかり入れる哀れな人間じゃない」
ア「ははは、そこは感心だね」
高「うるせい」
ア「照れちゃって・・・ん？ねえ、あれは何？」

高「ブレスレット何だからあれじゃわからねえよ。具体的に言え」
ア「空から・・・何か落ちてきてるよ」
高「んん？・・・」
高雅は空を見上げた。見上げた先は何かが落ちていた。そして・・・

ドガーーン！！！

グラウンドに墜落した。
ア「何かしら？。行ってみよ？」
高「やだ」
ア「またきっぱりと・・・」
高「ああいう所には人間が集まるんだよ。そんなとこに行けるか」
高雅は食べ終わった弁当を包みながら言った。
高「変なもんが墜落したなら、午後の授業は無いだろう」
高雅は横になった。眠るつもりらしい。
ア「ほんと、寝るの好きね、コウガは」
高「気が落ち着くからな・・・Ｚｚｚ・・・・」
ア「早っ！？。のび〇君の次に早いよ」
高雅は眠りに落ちた。

数時間後

高「んん～～ん。よく寝た・・・って何ぃ！？」
高雅は寝ボケることなく目を覚ました。その理由は・・・
高「校舎が・・・破壊してる！？」
そこにあったはずの校舎が瓦礫と化していた。
高「おいアリ・・・ってあれ！？」
高雅の腕には虹色のブレスレットが無かった。
高「やな予感がするが・・・グラウンドへ行くか」

高雅はグラウンドへ足を進めたその時だった。
？「食らいやがれ！！」
高「！？・・・おっと」
突如、高雅に向かって灰色の槍が飛んできた。
高雅は避けた後、すぐさま飛んできた方向を見た。そこには・・・
不「はははは。復讐の時間だ！！」
昨日の不良がいた。

さて、この後どうなる！？

高「ええ！？、区切り悪！！」

# 時代遅れの敵

不「テメーを殺す時が来たようだぜ」
高「いきなり、ブサイクな声で始まったな」
不「そう言っていられるのも今のうちだ」
？「へへへ、流石、虹の契約者だ」
高「！？」
高雅が驚くのも無理はない。
なぜなら、槍が喋り始めたからだ。
高「こいつ、まさかアリアと同じ天の使いか！？」
？「せーかいー」
すると、槍は人間の形になってゆく。
ゲ「俺の名はゲイボルグ。よろしくそしてさようなら」
高「続けて喋ると何て言いようか分かりにくいな」
不「ゲイボルグ、さっさと戻れ」
ゲ「へいへい、偉そうな契約者だな」
ゲイボルグは槍に戻りながら不良の手に戻った。
不「刺殺してやる」
高「そんなことしたら、退学じゃすまんぞ」
不「知らねえよ。お前を殺せばそれでいい」
高「はぁ～、めんどくせ」
不「おら、行くぜーーーー！」
不良はゲイボルグを高雅に向けて走り出した。
高「ぶっｗｗｗｗなんだその構えは？モンハンの突進よりだっせ～」
不良は腰がふらつき、ゲイボルグが震えている。高雅はそれを見て笑っていた。
ゲ「だっせ～な、ほんと。なら、力を貸してやる」
突然、ゲイボルグが灰色に輝き始めた。

ゲ「契約の力、発動！！」
不「うお！？、何だ！？」
高「！？」
不良は立ち止った。そして、灰色の光に包まれる。
ゲ「これでましになっただろ」
光が消え、不良の姿が現れる。不良は背中に喧嘩上等大きく書かれた学ランとシルバーが体中に巻いていた。
高「うわ～、だっさ。しかもシルバーって・・・こりゃ、ニコ動の○戯が喜ぶな」
ゲ「イメージした姿になるのだが・・・こいつ、センスわりー」
力を貸した本人も引いていた。
不「おお、あこがれの学ラン、お気に入りのシルバーだ。一度でいいからこんな姿になりたかったんだよな～」
高・ゲ「・・・・・・」
不「ふはは、この姿に恐れて声も出ないか」
高「あちゃー、完全に時代遅れだ」
ゲ「まあ、姿がどうであれ力は上がったはずだ」
不「おら、行くぜー！！」
高「テンション上がったな～・・・ってうお！？」
不良は音速のスピードで高雅に突っ込んだ。高雅はそれを紙一重でかわす。
高「普通の人間じゃ避けれなかったな」
不「どこを見ている？、ここだぜ」
高「何！？」
不良はもう高雅の後ろに回っていた。

ザシュッ！！

高「うぐ・・・」
高雅は避けようとしたが、さすがに近距離の為、避けきれなかった。

高「いっててて・・・」
高雅は横腹を抑えながら苦しそうにしている。
不「おらおら!!、俺のターンは終了してないぜ!!」
高「こうなれば・・・」
高雅は目を閉じた。
不「死を覚悟したか!?、情けねえ奴だな」
不良はゲイボルグを構えて高雅に突っ込んだ。
不「死ねーーーー!!」

ガシッ

不「何!?」
高雅は目を閉じたまま、突っ込んできた槍を掴んでいた。
高「ふん!!」
不「あっ!?」
高雅は思いっきり引っ張り、不良からゲイボルグを取り上げた。
高「形勢逆転だな」
すると、横からある声が聞こえた。
ア「コウガ!!、その槍に付いている宝石を壊して!!」
高「アリア!?。お前、どこに行ってたんだよ!?」
ア「いいから早く宝石を壊して!!」
ゲ「やべーな、ここは引くか」

パリーン!!

高雅は瞬時にゲイボルグに付いている宝石を壊した。
ゲ「何、逃げれなかっただと!?」
高「残念だったな」
ゲ「何でだよ!?ここは普通、逃げて後でまた戦うってパターンだろ」

高「知るか、アニメの見過ぎだ」
ゲ「ちぇ・・・流石、虹の契約者だ・・・」
そう言い残し、ゲイボルグは消えた。
ア「コウガ、怪我してるわ。すぐに治してあげる」
アリアは力を使って高雅の怪我を治した。
高「サンキュ。さーて、この脇役どうしよ・・・ってあれ!?」
そこにいたはずの不良の姿がなかった。
高「あいつ、逃げ足速いんだな」
ア「違うわ、使いが死んだから契約者も死んだのよ。姿を残さずに」
高「ふーん、まあザコ処理が亡くなって楽になったな」
高雅は軽く背伸びをした。
高「さーて、これからどうするかな?」
ア「とりあえず、コウガらしく帰って寝たら」
高「じゃあ、そうするか。学校はどうせ明日にでも元に戻るだろう」
高雅は学校をほっといて帰ることにした。

家に着いた高雅はアリアに色々聞いていた。
高「なあ、お前はあの時どこにいたんだ?」
ア「ちょっと天国に戻ってたの。嫌な予感がしたから」
高「あの墜落物と関係あるのか?」
ア「うん・・・どうやら、地獄の使い達がここに来たみたいなの」
高「地獄の使いって・・・あの槍野郎みたいな奴か?」
ア「そう、他にもまだ数人いるの」
高「まさか・・・全部やっつけろって言うんじゃないだろうな?」
ア「さすがコウガ。わかってるね」
高「やだ!!。てか、これは非日常もんでバトルもんじゃねえだろ」
ア「バトルも非日常も同じよ」
高「ちくしょーー!!」

高雅はとにかく大声で吠えた。落ち着きを取り戻した所で再び質問した。
高「はぁ・・後、虹の契約者って何か特別なのか？」
ア「さあ、それは分からないわ」
高「ふーん、でもただの契約ならあんなに評価しないだろうし・・・」
ア「あっ、そうそう忘れてた」
アリアは突然何かを思い出した。
高「どした？」
ア「明日、天国に来てもらうわ」
高「つまり、俺に死ねということか。ほーほー」
ア「そういう意味じゃないから。ちゃんと死なないで連れていくから」
高「そうかいそうかい。じゃあ、俺は死ぬ前に遺書でも書くかな」
ア「だから死なないって！！。信じてよ！！。大体、誰に遺書を書くのよ！？」
高「これを読んでいる誰かへ。私、崎村高雅は・・・」
ア「もー、いい加減にしてよ！！」
高「冗談に決まってんだろ。さっさと飯作って寝るぞ」
高雅は台所へ向かった。

次回、高雅は天国に逝きます。
高「ちょっと遺書書いてくる」
ア「だから、ちゃんと帰って来れるってー！！」

# 高雅、逝きまーす

翌日、高雅は庭でアリアが魔法陣みたいなのを描くのを見ていた。
高「何やってんだ？」
ア「天国への道を導いてもらってるの。これに気づけばすぐに行けるようになるよ」
高「ふ～ん。ところで、昨日は色々あって忘れてたけど・・・」
ア「ん、何？」
高「お前って、俺の半径５００メートルに居ないといけないんだろ。天国は俺の半径５００メートルに在るのか？」
ア「う～ん、何て言うか・・・ちょっと次元が違うっていうか・・・距離が不明だから」
高「おいおい、何でもありだな・・・」
ア「あっ、来たみたいよ」
急に魔法陣が光り始めた。
ア「ささ、早く魔法陣に乗って」
高「あ・・・ああ」
高雅は少し躊躇しながら入った。
ア「それじゃ、手を握って。どこかに落ちないように」
高「何で落ちるんだ？しかもどこに落ちるんだよ？」
ア「どこかはどこかよ。いいから早く」
高「はいはい」
高雅はアリアの手を握った。
高「・・・・・・」
ア「ん？どうしたの？」
高「いや・・・手を握るのってなんか久しぶりだなって・・・」
ア「それは、一人で生きていたからよ」
魔法陣がさらに輝き始めた。
高「う・・・」

高雅は余りの眩しさに目を閉じた。

高「んん・・・ってな!?」

高雅が目を開けた時、そこは豪勢な部屋の中だった。

？「お待ちしておりました、アリア様」

突然、執事みたいな天使が現れた。

ア「出迎えありがとう、セバスチャン」

高「アリア、あの人は誰だ?」

セ「申し遅れました。私はセバスチャンと申します。今後お見知りおきを」

高「どうもはじめまして、崎村高雅です」

セ「アリア様からお話は聞いております。ささ、玉座の方へ」

ア「ええ、わかってる」

アリアと高雅はセバスチャンと別れをして、玉座へ向かった。

巨大な扉の前。

高「にしては、天国って宮殿みたいなんだな。もっと、雲の上にいるって感じだと思ってた」

ア「ここは私の家で、外はそんな風に近いかな」

高「お前っていいとこのお嬢様だったのか?」

ア「うん・・・うれしくないけど・・・」

高「ふ～ん・・・それにしても、でかい扉だな。天国には巨人でもいるのか?」

ア「私は見たことないけど。多分、前にいたと思うよ」

アリアはそう言いながら扉に手を掛けた。

ア「お母様、お父様、ただ今戻りました」

すると、扉がゆっくり開き始めた。そこには・・・
兵「捕えろーー！！」
高「・・・はぁ！？」
突然、兵と思われる天使が剣を抜き、高雅に向かって大量に押し寄せて来た。
ア「な・・・何！？」
アリア自身も理解していなかった。
高「アリア！！、剣になれ！！。相手も剣なら不足はない」
ア「わ・・・わかったわ」
アリアは剣になり、高雅の手に収まった。
高「行くぜ！！。秘奥義、殺劇舞〇〇！！」
高雅は分かる人には分かる奥義を真似してやってみせた。
大量にいた兵が一気に全滅した。
高「ぜえぜえ・・・一体、何の真似だよ、アリア！？」
ア「私も分からない。言われていたことと違う」
？「だらしない兵のことだわ」
ア「！！・・・お母様！！」
高雅はいつの間にか玉座にいた。
そこは広大な広間で、目の前には約６０段はある巨大な階段があった。その頂点に二人の天使がいた。
ア「お母様、お父様、一体どういうことですの！？」
母「愚かなる我が娘、アリアよ。一体なぜその者と契約した？」
ア「お母様、それは愚問です。私は依頼をこなしているからこの者と契約しただけです」
父「何故、お前はそんな者の使いの依頼をこなしている？。最初から決まっていた者はどうした？」
高「おい、お前何か隠しているのか？」
高雅もアリアへの質問攻めに加わった。
ア「それは、あんな人間なんて嫌だったからです」
高「俺は綺麗に無視か」

ア「常に自分の欲望のために動く人間なんて、私は嫌いです」
高「今の台詞でお前のファンが何人減ったんだろう・・・」
母「そこの者、少し黙っておれんのか？目障りである」
高「ムカッ。アリア、お前の気持ちをぶつけてやれ」
ア「コウガ？」
高「俺を殺そうとした奴なんて、ぎゃふんと言わせてやれ」
ア「・・・ありがとう、コウガ」
アリアは親に向き合い、話した。
ア「私はサキムラコウガの使い。契約者の言うことは絶対です」
父「それが何だと言うのかね」
高「つまり、こいつは俺の使いだ。異論は認めん」
母「そなたの意見なんてどうでｍ「お前がどうでも良くてもアリアはダメなんだ」お・・・お前だと～～～」
高「なんだよ、名前が無いならお前としか呼べないだろ、お前」
高雅は“お前”と言う言葉を強調させて言った。
母「この無礼者が！！娘共々殺してくれるわ！！」
アリアの母は突然片腕を剣に変え、高雅に向かって飛んで来た。
高「アリア、お前って親に嫌われてんのか？娘に向かって殺すってすごい親だな」
ア「いいのよ。嫌われて好都合だから。行くよ」
アリアは高雅に言われる前に剣になった。
高「待て、剣はダメだ。木刀になれ」
ア「ど・・・どうして？」
高「こういう奴は切るよりぶん殴りたい」
母「死ね！！。下種（げす）共よ！！」

ドガッ！！

母「ふぎゃ！！・・・」
高雅は飛んでくる天使を木刀で叩き落とした。

父「貴様！！、我が愛おしい愛人を！！。死んで詫びろ！！」
高「おやおや、親がそろってキャラ崩壊したよ」
ア「逃げよ、コウガ。こんな所にもう居たくない」
高「はいはい、俺も同じこと思ってたよ」
父「待て！！、下種共！！」
高雅とアリアは玉座を出て行った。

高「魔法陣到着」
ア「早く行こ、あんな分からずやな親なんてもう顔も見たくない」
高「それに、下種って言われたしな」
魔法陣が輝き始め、現世に戻ろうとした時に・・・
セ「アリア様！！」
ア「セバスチャン！？、どうしたの？」
セ「少しお待ちください」
セバスチャンは高雅とアリアの手を握った。
セ「・・・できました。これで、コウガ様もお喜びになることでしょう」
ア「何をしたの、セバスチャン？」
セ「意思会話が行えるようにしておきました。お二人は離れていても会話ができます」
ア「ありがとう、セバスチャン。やっぱり、セバスチャンは大好き」
セ「恐縮です、アリア様」
高「意思で会話ができるのは色々便利だな。ありがとうございます」
セ「どういたしまして。これから、アリア様をよろしくお願いします」
魔法陣の輝きが絶頂に達した。

高雅とアリアは家に無事帰還し、部屋で今日起こったことを話していた。
高「なんか、めちゃくちゃだったな」
ア「ごめんね、危険な目に合わせて。本当にごめん」
高「それはそうと、どうして俺なんか契約者にしようとしたんだ？」
ア「・・・あなたの親に会ったのも理由だけど、本当の決め手はコウガが私と似た境遇だったからよ」
高「似た境遇ってなんだ？」
ア「私もね、一人だったんだ」
アリアは自分の過去を簡単に話し始めた。
ア「家があんなんだったから友達もできなくて、信用というものを失い始めていたの。セバスチャンは私のことを分かってくれていたけど、親がセバスチャンにあんまり会わせなかった。それで家が嫌になって出て行って、さ迷っているとあなたの親に会ったの。そしたら、息子を救って欲しいと頼まれたの」
高「ふ～ん、唐突な話をしたな、俺の親」
高雅は少し興味が湧いてきた。
ア「最初は人間の言うことなんてムカつくって思ってたけど、あなたを少し見ていたら自分を見ている感じがしたの」
高「俺って、知らずに覗き見されていたんだな」
ア「一人で人を信用しないところが一緒だった。だから、私はあなたと、コウガと仲良くなりたいと思ったの」
高「そういうことか・・・でも、覗き見は許せんな」
ア「ううう・・・」
高「う～ん、そうだな。罰を受けてもらおうかな」
ア「一体、何？」
高雅は一息置いてから話した。
高「これから、俺の許可無しにどっか行くな」
ア「え？・・・」

アリアは少しキョトンとしていた。
高「地獄の使いとかがいるだろ。そんな奴に一人で戦うのは危ないからな」
高雅は少し照れながら言った。その姿は、他に目的があるようだ。
ア「・・・うん、離れない。ちゃんと側に居る」
アリアは高雅の手を握った。
高「人間の姿で触れるな!!。蕁麻疹(じんましん)が出るだろ!!」
ア「あら、行く時は別に何もなかったじゃない」
高「な・・・それは・・・あの時は俺の機嫌が良かったからだ」
ア「ふふ、ほんとは握ってほしいのでしょ?。ツンデレのコウガ、かわいいね」
高「黙れ!!、やっぱ半径４９９メートル以内に入るな!!」
ア「男に二言は無いって聞いたことがあるよ」
高「関係ねーー!!」
高雅は怒ったまんまベットに飛び込んだ。
アリアはその姿を見守っていた。
ア「・・・あなたの親に会ったおかげで、私は最高の契約者を見つけたみたい」
アリアは高雅に聞こえないように呟いた。

☆おまけ☆

高「お前の決まっていた契約者はどんな人だったんだ?」
ア「とにかくブサイクでゲームばっかりしてて働かないでよくパソコン見て『萌え〜』って言っている人だったわ」

高「・・・ニート乙」
ア「それに比べて、高雅は意外と他人のことを考えているのね」
高「はぁ!?何言ってんだよ。俺のどこが考えてんだよ!?」
ア「あら、本編見てたらわかるじゃない、ツンデレキャラ君」
高「う・・・うるせー。俺はもう寝る」
ア「ふふふ、もう少し素直になれば人生の見直しも楽になるのに」

## 合宿編　その1、フラグ！？

ア「明日から合宿だね」
高「ああ、楽しみだな」
ア「あら、人間嫌いのコウガが合宿を楽しみなんて不思議なことを言うのね」
高「学校の考えに興味はない。あるのは未開の地に行くというワクワク感だけだ」
ア「あははは・・・コウガって子供っぽいところがあるのね」
高「うるせー！！」
えー、唐突な始まり方ですいません。
前に学校が壊されてしまい、今は修復中。高雅が天国から帰って来たその後に、明日から合宿という連絡を受けた。学校側は長期休暇にするより合宿先で勉強を進めるつもりらしい。
高「長い期間、家を留守にするから完全閉鎖しとくか」
すると、高雅はリモコンのような物を取り出した。
高「ポチッとな」

ガシャンガシャンガシャン・・・

窓全てにシャッターが下りた。
高「これでよしっと。明日に備えてもう寝るか」
ア「・・・すごいガードね」
高「そりゃ、大金の通帳があるからな。こんぐらいは当たり前だ」
高雅は星や月の光が入らない闇の部屋で眠った。

次の日

高雅達はバスに乗り、合宿先に向かっていた。
高「～♪」
高雅はウォー○マンで音楽を聴きながら外の景色を楽しんでいた。
ア「コウガ、あれはやり過ぎだったんじゃない？」
高「いいんだよ。人間にはあれくらいやっとかないとダメだ」

時が戻って出発前。
高雅は適当に人気のない前の席に座っていたが、突然ある生徒が話しかけて来た。
生徒A「崎村高雅ー！！。俺は貴様と仲良くなりたいぞー！！」
高「話しかけるな。耳が腐る」
B「いいからいいから、仲良くやって行こうぜ。と言うことで、隣いいな？」
生徒Bが隣に座ろうとした、その瞬間・・・

ボゴッ！！

B「はう！？・・・」
腹にストレートパンチ炸裂。生徒Bは蹲(うずくま)った。
高「近寄るな、汚らわしい」
A「うおー！！、購買部の同志、生徒Bよ。大丈夫か？」
高「名前無いんだ。かわいそうだな」
C「まだまだ、俺様がいるぜー！！」
生徒Cが高雅に飛びかかって来た。

ドガッバギッグシャ！！

A「うおー！！、購買部の同志、生徒Cよ。大丈夫か？」
返事がない。ただの屍のようだ。

C「待て！！、勝手に殺すな！！」
D「次は俺だ！！。俺の渇きを癒せえええええええ！！！」
今度は生徒Dが来た。

ドゴッ！！

D「ぶべ！？・・・」
生徒Dは顔面を蹴られて、後ろの席にぶっ飛ばされた。
A「うおー！！、購買部の同志、生徒Dよ。大丈ｂ「いい加減にどっか行けーー！！」ぎゃあああああ」
高雅はそこに転がっていた人間達を思いっきり後ろの席にぶっ飛ばした。
A・B・C・D「俺達、扱いヒドス」
ちなみに、杉野がその光景を見ていた。その感想は・・・
杉「この狭いバスの中でどうやったらあんな動きができるのかな？」
そこは、想像でお願いします。

んで、現在。
高「ふぁ～、寝ようかな。まだ、１時間は掛かるそうだし」
高雅は景色に飽きてきたのか眠ろうとしたその時・・・
杉「あの・・・崎村君・・・」
高「俺は寝る。話しかけるな」
杉「で・・・でも、もうお昼だよ」
高「それで何だよ？」
杉「これ・・・崎村君の分だよ・・・」
杉野は弁当を高雅に渡そうとした。
気付けば皆は配布された弁当を食べている。
高「わざわざどうも。そこに置いて、さっさと座れ」
杉「う・・・うん。それじゃ・・・」

ガタッ！！

杉「きゃあ！？」

杉野は突然の揺れでバランスを崩した。

ガシッ！！

杉「え・・・」

高雅がバランスを崩した杉野を支えていた。

高「俺の弁当をダメにする気か、てめー」

杉「あ・・・ごめんね・・・」

A「ヒューヒュー、これはフラグが立っｔ〈ザクッ！！〉・・・」

生徒Aの頭には爪楊枝（つまようじ）が刺さっていた。

B「おい、しっかりしろ生徒A！！。死ぬな！！」

高「ほんと、騒がしい奴らだな。テメーら全員、もういっぺん三途の川を見せてやる」

A・B・C・D「ひえええええええ」

高雅は後ろの席にいる生徒４人を懲らしめ始めた。

杉「・・・言えなかったなぁ・・・お礼」

杉野はそう呟き、席に着いた。

数時間後、高雅達は無事に（ある４人以外）合宿場所のホテルに着いた。

近くには山と海もある少し田舎染みた場所にポツンと建っている。

先「皆ー、ちゃんといるー？」

女子A「崎村君がいませーん」

先「あの子は、本当にどうしたものやら」

高雅は既に、生徒の集まる場所から姿を消していた。

その高雅はと言うと・・・
高「潮風サイコー」
海を堪能していた。
ア「ふふふ、さっきのコウガは可愛かったな～」
高「はぁ!?、いつ俺が可愛いところを見せたんだ?」
ア「ほら、杉野ちゃんを助けたところ。あれは完全なツンデレキャラだったよ」
高「何言ってんだ?。あの時は弁当のため、仕方なく杉野を助けたじゃないか」
ア「じゃあ、どうして弁当だけを取らなかったの?それが目的なら杉野ちゃんはほっといたらいいじゃない」
高「ふざけんな!!。俺はそんな最低な人間なんかじゃない!!」
ア「やっぱり、高雅は優しいね」
高「う・・・うるせー!!」
ア「あっ、デレた。ふふふ」
高「ったく。とりあえず、ぶらぶら散歩するか」
高雅は風が教えてくれる道をただ歩き回った。

戻って杉野達は・・・
先「これから、自由行動とします。皆、山と海には近づいては行けません」
A「どうしてですか?」
先「最近、不可思議なことが起きてるみたいなの。だから、このホテルから外に出てはいけません。いいですね?」
全「は～い」
皆はそれぞれ散らばって行った。
杉「崎村君、どこにいるのだろう?・・・ちょっとさがしてみよう」
杉野は高雅を探すと同時にホテル内を探検し始めた。

標高１０００メートルの所に髪の色が赤い人・・・ではないが人らしき者がいた。
？「ふふふふふ、あの子達から契約者でも選ぶかしら」
その者はホテルに向かって急降下し始めた。

さあ、謎の天使ｏｒ悪魔が登場し、これから一体何が起きるのでしょう。
高「そんなこと、読者が知るわけねーだろ」
それもそうですね。あははは・・・

# 合宿編　その2、ＫＹ

今は夜。
高雅はホテルの屋上で満天の星空をアリアと見ていた。
高「やっぱ、田舎だけあって星が綺麗に見えるな」
ア「そうね、何もかも忘れてしまいそう」
高「ふぁ～、寝みーな」
ア「ここで寝たら風邪引くよ」
高「わーってるよ。でも、寝みーもんは寝みーんだ・・・」
ア「あらあら、困った契約者だね」
すると、高雅の眠りを覚ます声が聞こえた。
A「さあ、諸君。我々の目の保養のために一肌脱がないか？」
男全「おおー！！」
高「ほえ、何だ何だ！？」
突如、下の方から聞こえてくる男達の歓声を確認すべく、高雅は下の方を覗いた。
A「この岩の向こうには何があるか言うまでもない」
そこには男達が裸で集まっていた。
高「この先、何が起こるか大体予想がつくな」
A「さあ、同胞（はらから）よ。我々の力を今見せる時だー！！」
B「行くぞーーー！！」
男全「うおーー！！」
男達は岩を登り始めた。
高「あいつら、何人が進路指導室行きになるかな？。と言っても今は進路指導室は無いか」
高雅だけがこの結果を分かっていた。
A「よっしゃ！！、一番乗り・・・」
最初は元気よく言っていたがその声は次第に弱くなっていった。
B「どうした？・・・何！？」

男先「ようこそ」
そこには男の先生が何人も立っていた。
A「しまった、罠か!?。皆逃げろーー!!」
しかし、時すでに遅し。後ろにも先生が立っていた。
男先「彼の言う通りになるとは・・・お前ら!!、学校が治ったら爪を剥がしてやるからな!!」
全「ちくしょーーーーーー!!」
高雅はその雄叫(おたけ)びを面白半分で聞いていた。
高「ぷぷ、単純な奴らだ」
ア「ほんと、人が悪いね。コウガは」
高「悪い人間はこれくらいの制裁は必要だ」
実は、高雅が既に先生に連絡済みだった。
高「1年の時の合宿と同じことをするとは・・・学習の無い奴らだ」
ア「前にもあったの?」
高「場所が違うが、これと似たようなことがあった。さて、また星を堪能するか」
そう言って、高雅は仰向けに寝そべった。

月が映る海辺に二人の人影があった。
片方は緑淵高校の者で女子、片方は赤い髪の者だ。
?「さあ、契約するわよ」
女「本当に願いが何でも叶うのでしょうね?」
?「ええ、本当よ。さあ、行くわよ」
そう言うと赤い髪の者と女子の胸から光を帯びた紐が出てきた。
そして結ばれる。
?「契約完了ね。よろしくね、嬢ちゃん」
女「あんたの名前は何よ?」
ラ「私はラビリンスよ。よろしくね」

女「変な名前ね」
ラ「あなたのお名前は何？」
女「いいわよ嬢ちゃんで。別に名前で呼ばなくても」
ラ「あらそう」
女「それより、早く願いを叶えてよ」
ラ「その前に、やってもらうことがるわ」
女「なによそれは？」
ラ「それはね・・・」
ここに一つ、契約が交わされた時だった。

時間が経ち、今は0時。
完全に人気が無くなった時を見計らって、高雅とアリアはそれぞれの風呂場にいた。
そして、岩を挟んで会話していた。
ア「ん～、気持ちい～」
高「家と変わらねーだろ」
ア「そんなことないよ。星空が見えるお風呂なんて素敵じゃない」
高「もう星は堪能したから別にどうでもいい」
ア「何よ、つまらない」
高「そういう性格だからな。俺はもう上がるぜ。あんまり長風呂すんなよ」
ア「わかってるよ」
そう言って、高雅は風呂を上がった。
アリアは空を眺めていた。
ア「・・・どうしたらコウガは皆と仲良くなるかな・・・」
ただ、それだけを考えていた。すると・・・

ガラガラッ

ア「へ！？」
突然、扉が開く音がした。
ア「まさか、こんな夜中に誰が？。とりあえず、隠れなきゃ」
そう言って、アリアは岩に化けた。
しかし、アリアは重大なことを忘れていた。
ア（・・・って虹色だからこれじゃ不自然だよ）
アリアは完全に追い詰められていた。
ア（ど～しよ～。こうなったら・・・）
アリアは瞬時に鳥にでも化けて逃げようとしたその時・・・
杉「不思議な岩・・・やっぱホテルにはこれくらいの出し物があるんだ」
ア（・・・へ！？）
入ってきたのは杉野だった。杉野は虹色の岩を見て、何とも思っていなかった。
ア（どうして杉野ちゃんが今お風呂に入るんだろう？・・・そうだ）
アリアは何か閃いたようだ。
ア（上手く行けば、コウガと仲良くさせるチャンス）
アリアは心の中でグッと決心した。そして・・・
ア「おめでとう！！」
杉「ええ！？」
そう言いながら岩からいつもの姿に戻った。
ア「あなたはこの風呂に入る１００万人目だよ」
杉「ええ・・・えええええええ！？」
アリアは上手くこじつけたつもりだろうが杉野にとっては意味不明だった。
杉「な・・・何！？・・・一体何なの！？」
ア「とりあえず自己紹介。私はアリアで、天使よ」
杉「あ・・・杉野です・・・杉野龍子（すぎのりゅうこ）です・・・」
ア「リュウコちゃんね、よろしくね」

龍「はい・・・ところで、天使って・・・本当ですか？」
ア「本当だよ。天使は何にでもなれるのよ。それより、あなたはお礼を言いたい人がいるのじゃないの？」
龍「どうしてそれを！？」
ア「私は天使だから何でも知っているのよ。それで、いるのでしょ？」
龍「・・・はい・・・崎村君って言う人に助けられて・・・お礼の一つも言えなかったのです」
ア「じゃあ、コウガに会わせてあげる」
龍「コウガ！？」
ア「サキムラの下の名前だよ。会わせてあげるから、ついて来て」
龍「待ってください。裸ではちょっと・・・」
ア「あっ、ゴメンね。それじゃあ、着替えてきてね」
龍「はい・・・」
そう言って龍子は脱衣所に向かった。

アリアと龍子は屋上へ向かっていた。
龍「あの・・・本当に会えるのですか？」
ア「うん、会えるよ。屋上にいるから」
アリアはただそれだけを言って階段を上がっている。龍子もそれについてきている。
すると、階段を全て登りきった所の扉にさしかかる。
ア「ここだよ。さあ、ごたいめーん」
そう言ってアリアは扉を開けた。
その先には高雅が仰向けで星空を見ていた。
高「遅かったな、アリア。一体何を・・・」
高雅の言葉が龍子を見た瞬間止まった。
高「何で杉野がいるんだよ！！」
ア「いいから、リュウコちゃんの話を聞いてあげてよ」

高「りゅうこ!?」
龍「あの・・・私の下の名前、龍子って言うの」
高「ふ~ん、それで、話は何だ?聞いてやるよ」
龍「うん・・・話って言うのは・・・」
すると、空からＫＹ（空気読まない奴）が現れた。
ラ「見つけたわよ、虹の契約者」
高・ア「!?」
高雅とアリアは瞬時に声がした空を見た。龍子も遅れて見る。
そこには、赤い翼を生やした女子生徒がいた。
高「お前、地獄の使いか?」
ラ「正解よ。それじゃあ、ご褒美あげるわ。嬢ちゃん」
女「はいはい」
すると、赤い羽根が1枚ひらひらと落ちてきた。それが屋上に着いた途端・・・

ドガーン!!

高「な!?」
大爆発が起きた。爆風に巻き込まれなかったものの、屋上が崩れていく。
高「やっべ・・・落ちる!!」
龍・ア「きゃあああああ」
3人は一つ下の階に落ちた。
高雅とアリアは着地したが、龍子は上手く着地できなかった。
高「アリア!!、あいつを倒すぞ!!」
ア「待って。リュウコちゃんが足を挫いたみたいなの」
高「まじかよ」
すると、不可思議なことが起き始めた。
高「!?、瓦礫が戻って行く!?」
壊されたはずの屋上が自然と戻って行った。

ラ「あなた達はそこで迷い死ぬのよ。おーっほっほっほ・・・」
人をあざ笑う声は再生した屋上によってかき消された。
高「ちょっとあいつら倒してくる。アリアは杉野を頼む」
ア「わかったわ」
そう言って高雅は階段がある所へ走り出した。しかし・・・
高「あれ!?、ここに階段があったはずだろ?」
高雅は階段があったはずの場所にいたがそこには壁になっていた。
そして、ふと敵の言葉を思い出した。

”あなた達はここで迷い死ぬのよ。”

高「・・・そういうことかよ」
高雅はアリア達がいる所へ戻った。
ア「あら、もう倒したの?」
高「違う。それよりやばいぞ。今このホテルは相手の手の中にある」
ア「それってどういう・・・」
高「敵の思うように改造されて迷宮になってんだよ」
ア「嘘!?」
高「多分、マジだ。とりあえず、出口を探すぞ」
ア「でも、リュウコちゃんはどうするの?足を挫いているのに」
高「・・・これはしたくなかったがしょうがない」
龍「へ・・・わっ!?」
高雅は龍子をおぶった。
高「さあ、迷宮をさ迷うぞ」
そう言って、迷宮と言うホテルを駆けだした。

☆おまけ☆

高「アリアは何で杉野はちゃんと呼んでいるが、崎村や龍子、俺の名前は何でカタカナ読みなんだ?」
ア「天国で人間の名前をより多く覚えなさいって言われてたけど、全然で」
高「それで、崎村や龍子とかは知らなかったってことか」
ア「まあ、杉野は覚えてたけどコウガやリュウコは知らなかったのよ」
高「へー、てっきり作者のミスかと思ったんだが」
作「ええ!?そんなことありませんよ・・・そんなこと・・・」
高「・・・図星だな」
作「・・・ごめんなさい」

# 合宿編　その3、迷路

三人は迷宮と化したホテルをもう3時間もさ迷っていた。
高「ちくしょー、一体どうなってやがる」
高雅はわけが分からない迷宮をさ迷い続け、少しキレ始めた。
高「ここはさっき来た所じゃねえかよ」
ア「落ち着いてコウガ。どう考えても不自然だよ」
高「何が？」
ア「あんな大きな爆発があったならホテルの人は結構起きているはずよ」
高「それで？」
ア「何人かが私達と同じようにさ迷っているとしたら、誰かと合流してもおかしくないんじゃ？」
高「確かに、あの爆発じゃ少なくとも１００人は起きただろうな。それで？」
ア「へ！？」
高「それで何だよ？。他に何かあるのじゃないか？」
ア「いや・・・ただ不自然だな～って」
高「おいおい」
龍「あの・・・」
高「何だ、杉野？」
龍「あそこに、階段が・・・」
龍子が指を指した方向には階段があった。
高「でかした杉野。行くぞ、アリア」
高雅は階段に向かって走った。
高「これで、一気に1階に下りれば出口・・・」
ア「どうしたの、コウガ？。元気がなくなってきて」
高雅の元気を奪ったのは階の表示だった。そこには・・・

∞／∞

高「なんじゃこりゃあああああああああ」
高雅は叫んだ。
叫び声はただむなしく響くだけだった。
ア「これは・・・一体」
高「もういい、ブチギレた!!。アリア!!、バズーカにでもなって壁をぶち破れ!!」
ア「ダメよ。もし人がいたら危ないじゃない」
高「人間が一人や二人死んだってどうでもいい!!。だから早ｋ「どうでもよくないよ!!」な!?・・・」
ア「本当にどうでいいと思ってるの!?。人間はコウガが思っているほどカスじゃないのよ!!」
高「いいや、カスだ!!。自分だけがよければいいと考えているクズだ!!」
ア「じゃあ、コウガだってクズよ!!」
高「だとゴラッ!!」
ア「当然よ!!。人間を少し殺してもいいって勝手に思い込んでるコウガはクズよ。コウガが思っている人間と同じよ」
高「・・・っく」
高雅は自分の言ったことは自分にも当てはまることを理解した。
その瞬間、自分に腹が立ち、同時に自分の未熟も生まれた。
高「・・・やっぱ、俺も含めて人間なんてクズなんだ・・・」
龍「・・・崎村君はクズなんかじゃない・・・」
高「杉野?」
龍「だって、私を何度も助けてくれた。もしクズだったらそんなことできないよ」
高「・・・お前はいい人間だな」
龍「・・・私もクズだよ・・・ちっぽけで・・・崎村君が思うクズと同じ」

高「少なくとも俺が思う人間じゃない」
龍「え・・・」
高「お前は俺よりまともだ。そのまともな心を大切にしろ」
龍「・・・うん」
龍子は小さく頷いた。
高「ふー、二人のお陰でちょっと頭が冷えたな」
ア「それじゃ、また歩こう」
そう言って三人は再び歩き始めた。

あれから、さらに3時間後。
高雅達は龍子をベンチに下ろし、休憩を取っていた。
高「・・・ダメだこりゃ。もう外は日が昇り始めてるだろうな」
ア「疲れてきたね」
龍「どうしましょ・・・」
三人は軽く絶望に達していた。
高「何一つわからないままさ迷って、無駄な体力使っただけかよ」
ア「窓一つ見つからないなんてね」
龍「・・・もしかして、敵は私達を見ているのではないでしょうか？」
高・ア「え!?」
龍「だって・・・こんなに動いて窓一つ見つからないのは・・・その・・・敵が常に見つけられないように改造しているのではないでしょうか？」
高「つまり、俺らがゴールに一歩近づけば、敵はゴールを一歩遠ざけているってことか。その確率もあるな。地獄の使いも何でもありかもしれないし」
ア「じゃあさ、ゴールが動く前にこっちが動けばいいのかしら？」
高「成程な。じゃあ、本当にそうか確認するか」

ア・龍「？」
高「何かいいのは・・・これかな」
そう言って高雅は近くに会った公衆電話を持ち上げた。
高「今から俺の何でもありを発動するぜ」
すると、高雅は公衆電話を大きく振りかぶって・・・
高「どりゃあああああああああ！！！」
ぶん投げた。公衆電話にも関わらず、その速さは裕に３００キロは出ている。
ア「すごい・・・」
公衆電話は次々と壁を貫通して行く。
そして、ふとアリアは気づいた。
ア「・・・ってこれ、人がいたら危ないじゃない！！」
高「今頃気づいたのかよ」
龍「・・・・・・」
高雅は壊れていく壁を見ながらツッコミを入れた。
高「・・・見えた！！」
ア・龍「ええ！？」
高「今、窓があった部屋が見えた。行くぞ」
高雅はすぐに龍子をおぶって、走り出した。
ア「ま・・・待ってよ」
アリアもそれに続く。しかし・・・
高「やっぱり、壁が再生していく」
壁が再生していき、窓の部屋まで後一つのところで壁が道を封じる。
高「アリア、剣になれ」
ア「うん。でも、両手がふさがってるよ」
高「いいから、剣になれ」
アリアは剣になり、高雅の足元に落ちた。
高「行くぜ」
そう言って高雅は足で剣を取り、そして・・・

シュンッ！！

その足で壁に大きな円を描いた。
描かれた先には綺麗な穴が開いた。
高「またつまらぬ物を斬ってしまった」
ア「そんな、ありふれた決め台詞はいいから早く行くよ」
アリアは元の姿に戻り、穴の先へ行く。
遅れて高雅と龍子も続く。
だがそこは、窓があった部屋ではない。
ア「あら？、おかしいわね？。さっき窓があったはずじゃない？」
高「これで確証ができたな」
ア「でも、謎が解けたからと言ってどうやって高速で壁を壊し、かつ私達が進む方法なんて・・・」
高「う～ん、俺の両手を使わずに高速に壁を破壊して進む方法か・・・あっ、閃いた！！」
ア・龍「何！？」
アリアと龍子は同時に聞いてきた。
高「昔のアニメで投げた柱に乗るシーンがあったんだ。詳しくは初代の龍玉を見てくれ。それを真似してみよう」
ア「でも、柱に乗っただけだったら乗ってる人は壁にぶつかるよ」
高「大丈夫、そこはお前が剣になって俺が斬るから」
ア「両手はふさがってるんじゃないの？」
高「さっき足で斬っただろ。どうにかなるって」
そう言って高雅は何か丈夫で乗れるものを探し始めた。
高「これでいいか」
高雅が見つけたのは教室によくある机だった。
ア「・・・いくらなんでもそれは無理があるんじゃない？」
高「公衆電話が大丈夫だったんだからどうにかなるって」
ア「高雅もだんだん何でもありキャラになってきてるわね・・・」
高雅は何の躊躇（ためら）いもなく準備をした。

高「杉野は剣になったアリアを持ってそこにいろ」
龍「うん、わかった・・・」
高「行くぞーーー・・・せりゃあああああああああ！！！」
机を平行にぶん投げた。時速は同じく３００キロある。
高「着地」
高雅はもう龍子をおぶって机に乗っていた。
龍「・・・あれ！？・・・いつの間に！？」

ドガン！！

一つ目突破。
高「ちんたらやってられねえからな」
龍「あれ！？・・・剣はもう崎村君に渡っｔ・・・」

ドガン！！

二つ目突破。
高「もうちょっと早く物を言え」
龍「だって・・・早すｇ・・・」

ドガン！！

三つ目突破。
高「何か言いたいのか？」
龍「いや・・・だからはｙ・・・」

ドガン！！

四つ目突破。
高「何？なんか言った？」

龍「・・・何でもあｒ・・・」

ドガン！！

五つ目突破。

高「聞こえないけど？」

龍「・・・・」

ドガン！！

六つ目突破。

そこは窓がある部屋であった。

高「窓発見。作戦成功だな。よっと・・・」

高雅はすぐに飛び降りたが・・・

高「わーー、慣性の法則で横に飛ぶーー」

まだ早さが残っていたため慣性の法則が働いた。

ア「世話が焼けるわね」

ボフンッ！！

アリアはマットに変身し、高雅と龍子を受け止めた。

高「サンキュー、アリア」

ア「どういたしまして」

高「んじゃ、あいつらをぶっ倒しに行くか。杉野はここで待ってくれ」

龍「うん・・・気をつけて・・・」

高「よし、行くぞアリア！！」

ア「いつでもいいよ」

高雅はアリアを翼に変え、窓ガラスを破って外に出た。

そして、高雅とアリアは敵のいると思われる朝日に照らされている空へ飛び立った。

## 合宿編　その4、真の契約（前書き）

この話にはグロテスクな表現が入っています。
しかも、しょぼくしようとしましたがやっぱグロイです。
しょぼいのは大丈夫と思っていた方は少し覚悟してお読みください。

# 合宿編　その4、真の契約

高雅は空に映る陰に向かって飛んでいた。
その影は、ホテルを迷宮に化した元凶だ。
高「見つけたぜ、迷宮野郎」
ラ「失礼わね、野郎じゃなくて女よ」
高「知るか」
女「それよりさ、私の願いはいつ叶えてくれるのよ？」
ラ「そうね、そこにいる物を殺せばいいわよ」
女「本当でしょうね？」
ラ「ええ、本当よ」
高「何やり取りしてんだ？。行くぞ」
高雅は敵に向かって急接近した。
高「アリア、まずは地面に叩き落とすぞ」
ア「わかった」
ラ「こっちも迎え撃つわよ」
女「はいはい」
敵も高雅に向かって接近し始めた。
高「真っ向勝負か。おもしれえ」
女「あなたに恨みはないけど死んでもらうから」
高「けっ、勝手な人間は制裁しないとな」
高雅は拳を後ろに下げた。
高「おらっ！！」
距離が無くなった瞬間をねらって高雅は拳を前に出した。
しかし、敵は軽く避ける。
女「ふふふ、男ってたんじゅｎ「と見せかけて、キャッチ」きゃ！？」
高雅は瞬時に振り向き、敵の翼を捕えていた。
さっきの拳は囮だったという訳。

高「バーロー。俺は単純な人生を送ってねえよ」
すると、高雅は敵の翼を持ったまま、急降下しだした。
いや、正確にはアリアを翼から剣に変えていた。
高「くらえ！！」

ズバッ！！

高雅は敵の片翼を斬り落とした。
ラ「ぎゃあああああああああ」
ラビリンスは痛みに絶叫した。
女「ちょっと、落ちるじゃない！！」
高「そりゃ、ドンマイ」
高雅は敵の言葉を適当に促し、アリアを再び翼に変えて敵が落下していくところを見ていた。
敵は砂煙を上げ、地面に落下した。
高「片翼の部位破壊完了」
ア「気をつけて。まだ戦えるみたいよ」
高「まじかよ。まだクエストクリアじゃないのかよ」
ア「さっきから何言ってるの？」
高「ｍｈｐ２Ｇ」
ア「何それ！？」
高「帰ったら教えてやるよ。それより、やっと動き出したぜ」
すると、落ちた跡から紅蓮の炎が燃え上がっていた。
高「あれは何だ？」
ア「わからない。一体何なの？」

ビュンッ！！

高「いっつ・・・」
突如、高雅に向かって紅蓮の矢が飛んで来た。

高雅は直撃を避けたが、腕をかすってしまった。
高「あっぶねー」
ア「大丈夫!?。血が出てるよ」
高「かすっただけだ。相手は弓使いのようだ。なら、接近戦に持ち込むぞ」
ア「わかった」
高雅は敵に向かって急降下した。

ビュンビュンビュン・・・

次々に矢が放たれていく。
しかし、高雅は華麗にかわしていく。
高「いやっほー」
ア「コウガには緊張感がないの?。矢が飛んできてるんだよ」
高「当たる気がしねーよ。大体、弓使いでもまだ見習い過ぎる」
ア「へ!?」
高「矢がぶれ過ぎだ。軽く10センチは外してる。こんな弓使いはヘッポコだ」
ア「よくわかるね」
高「見たらわかるもんだ。そろそろ剣になれ。着地と同時に斬る」
ア「うん、わかった」
高雅は矢をかわし続け、遂に炎の目の前に着地した。
炎の中には人影がある。
高「その炎ごと斬ってやる」
高雅は剣を構えた。
高「これで、終わりだ!!」

ヒュンッ!!

高雅は人影を炎ごと斬ったが人を斬る感触がなかった。

高「何!?。どこに行きやがった!?」
高雅はあたりを探したがどこにも見当たらなかった。
高「まさか、危険を感じて逃げたか?。情けねーなー」
高雅は警戒を解いたその瞬間・・・
女「ひぎゃあああああああああ」
高・ア「!?」
突如聞こえた悲痛の叫び。
それはさっきの敵のものだ。
高「くそ、声が聞こえただけで場所が分からねえ」
ア「でも、今の声からして近くにいるはずよ」
高雅は再び探し始めた。しかし、どうしても見つからない。
高「・・・まさか、消えてたりするのか」
ア「え!?」
高「よく考えろ。こんなに探して見つからないなら消えている可能性はあるだろ」
ア「確かにそうだけど・・・」
女「やめてえええええええええ。お願い!!、願いなんてもういいから・・・い・・いやあああああああああああああああああああああ」
ただ単に不気味な叫び声だけが聞こえていた。
高「一体何なんだよ!?」
ラ「ただの契約よ」
高・ア「!?」
さっきまで姿を現さなかった敵が出てきた。
契約者の女子は顔を両手で隠して、ラビリンスは人間の姿だ。
高「契約?。紐を繋ぐことであんな悲鳴を上げるわけないだろ」
ラ「そんな契約ではないわ。真(まこと)の契約よ」
高・ア「真の契約!?」
高「・・・って、お前も知らねえのかよ」
ラ「あらあら、ラギュラバルともあろう方が知らないなんてね」

ア「うるさい！うるさい！！うるさい！！！」
高「それはお前みたいなキャラが言う言葉じゃない。んで、ラギュラバルって何？」
ア「人間で言う上の名前よ。それより、真の契約って何か教えてよ」
ラ「簡単よ。ある条件を満たした契約よ。それによって莫大な力を得られるわけ。条件はそれぞれ違うけれどね」
高「で、お前の条件は何だったんだ？。そこにいる女子は顔を隠しているが何か関係あるのか？」
女「っ！！、いや！！。来ないで見ないで近寄らないで！！」
女子はあくまで両手を離さない。
ラ「いい加減に手を離したらどう？。それじゃ、私を扱えないわよ」
女「うるさい！！。私はこんなの望んでないわよ！！」
ラ「嬢ちゃんの望みなんて知らないわよ。でも、もう充分だったわ」
ラビリンスは女子の手を取った。
ラ「最後に見せてあげなさい。あなたの顔を」
女「やめて、離して！！いやあああああ」
ラビリンスは女子の手を顔から除けた。その光景は・・・

両目が無くなっていた。

高「うわ、グロ・・・」
ア「ひどすぎる・・・」
ラ「仕方ないわよ。私の真の契約は両目を私に捧げる。美味しく頂いたわ、嬢ちゃんの目は」
そう言いながら、ラビリンスは口を手で拭いた。
高「どうやら、こいつは相当腐っているようだな」
ア「許さない。嫌がっても無理やり危険な契約を交わすなんて」
ラ「あなた達にもう負けはしないわ。それに、もう嬢ちゃんは要らないわ」

シュンッ！！

ラビリンスは女子の首を手で斬った。
飛んだ首は血を撒き散らしながら地面に落ちる。
ラ「もう、用はないものなんていつまであっても邪魔なだけよ」
ラビリンスの行動に高雅とアリアは激怒した。
高「てめー、命を玩(もてあそ)びやがって！！。絶対ぶっ殺す！！」
ア「私も久しぶりに怒ったわ！！」
ラ「いいわ、第2回戦と行こうかしら。真の契約の力をとくとご覧になるといいわ」
高「へっ、契約者が死んでも、なお契約の力かよ」
ア「そんなツッコミはいいから、行くわよ」

高雅ＶＳラビリンス、続く

## 合宿編　その４、真の契約（後書き）

この話で無理だった人はもう読まないことをお勧めします。
今まで読んでくださってありがとうございます。

大丈夫という方はこれからも楽しんでいってください。

## 合宿編　その5、強さの三要素

ただ今、交戦中。
ラ「この攻撃をかわしてごらん」
ラビリンスは両手の指１０本から次々と矢を連射した。
無数の矢がコウガに向かって飛んでくる
高「何という弾幕だよ。こりゃ、隠れるか」
高雅はとっさに物陰に隠れた。
高「これは近づき難いな」
ア「どうするの？」
高「真の契約とやらは本当に凄いみたいだな」
ア「感心してないでどうするのよ？」
高「大丈夫だ。あういう奴は力に溺れるから頭を使えばすぐに倒せる。簡単にぶっ倒してやるよ」
ア「どこから湧いてくるのよ、その自信は？」
高「最初は俺らが勝っていた。それで、あいつは真の契約を使った。んで、今は余裕に俺らを追い詰めている」
ア「と、言うことは？」
高「調子に乗っている今が倒し時ってわけ。さっき、キレて理性を失ったふりもしたし、相手は完全に調子に乗っているだろうよ」
ア「あれって嘘だったの！？」
高「キレたのは本当だ。そら、そろそろ来るぞ」
ア「それで、作戦はあるの？」
高「もち」
高雅はアリア（剣）に親指を立てた。
ア「じゃあ、信じようかな」
アリアもその言葉を聞いて納得した。
ラ「隠れても無駄よ。この攻撃は広範囲だからね」
ラビリンスはさっきの攻撃を止め、力をためていた。

ラ「終わりね。この攻撃はかわせないもの」
ラビリンスがそう言った瞬間・・・

チュドーーン!!!

大爆発が起きた。
ラビリンスの目の前は巨大なクレーターが出来上がっていた。
ラ「これで終わりね。呆気ないものだったわね」
高「そうですか、呆気ないものですか？」
ラ「ええ、とっても呆気ないもの・・・って何で生きてるのよ!?」
高「気づくの遅いな。上を見ろよ。もう、俺の攻撃を用意してるぜ」
ラ「なんですって!?」
ラビリンスはすぐに上を見た。
ラ「・・・何よ、何もないじゃない」
高「当たり前だろ。嘘ついたからな」
ラ「あなたは何が言いたいわけ・・・」
ラビリンスは視界を空から高雅に向いた瞬間・・・

ズバッ!!

高雅がラビリンスを縦一閃で斬った。
ラ「が・・・」
高「頭使え、迷宮野郎。最強は力、知識、技術を一つも怠ってない奴のことを言うんだよ」
ア「女子(あのこ)を殺した罪をその身で償ってきなさい」
ラ「ぎゃあああああああああ」
ラビリンスは朝日の光が浄化したかのように消滅した。
高「ふう、なんか第2回戦は呆気なかったな」
ア「そうね。これで、ホテルも戻ったはずよね」
高「だろうな。それと、この穴どうする？」

高雅はドでかい穴に指をさして聞いた。
ア「いかにも不自然よね。こんな所に一晩でクレーターができるなんて」
高「穴を埋めるって言ってもはっきり言って不可能だし・・・」
ア「隕石にしちゃうって無理なの？」
高「う～ん、大きさが大体直径１キロだから、石の大きさは結構でかくせないけんから無理」
ア「じゃあ、このままほっとく？」
高「・・・そうするしかなさそうだ。よし、とりあえず寝るか」
ア「そういえば、一睡もしてないよね？」
高「適当にどっか日当たりがいい所で一休みするか」
ア「その前に、リュウコちゃんにもう終わったって伝えなきゃ」
高「はぁ～、めんどくせ」
ア「めんどくさくても行くの。ほら、早く」
高雅は渋々ホテルへ戻った。

ホテル内部。

高雅はアリアをブレスレットに戻し、ホテルをさ迷っていた。
高「窓があった部屋はどこだ？」
ア「ちゃんと見取り図覚えておこうよ」
高「うるせー、こうなるなんて思っていなかったんだ」
適当にさ迷っているとある生徒に会った。
A「おお、崎村じゃねえか」
高「何か用？。用件は５秒以内に言え」
A「相変わらずひどいな。それより、散歩してたらいいもの見つけ

たから来いよ」
高「ざけんな。そんな暇はない」
A「そう言うなって。一緒に美女の眠りを拝めようぜ。ちょうどそこのベンチで寝てるんだよ」
高「お前一人で拝めとけ」
ア（待って、コウガ）
高（何だよ）
ア（もしかしてリュウコちゃんかも知れないよ。リュウコちゃんも寝てないし）
高（なるほどな。その可能性が高いな）「おい、やっぱ案内しろ」
A「え!?・・・ああ、いいぜ。こっちだ」
高雅は生徒Aについて行った。
歩くこと2分、その先には・・・
龍「・・・すやすや・・・」
龍子が壁に体を寄せて寝ていた。
A「見ろ、あのかわいい杉野がこんな所で・・・って何やってんのお前!?」
高雅は普通に竜子の所へ行こうとしていた。
高「わざわざご苦労、じゃ」
高雅は適当に生徒Aに別れを告げ、龍子のもとに寄った。
龍「・・・ううん・・・あっ」
高「起きたか」
龍「え・・あ・・・うん」
龍子は少し赤面しながら頷いた。
高「別に眠っている所見られたぐらい恥ずかしがるなよ」
ア「コウガは女心が分かってないね」
高「知るか。とりあえず、もう終わったぞ。それを伝えに来た」
龍「うん・・・ありがとう」
高「別にお前の為じゃない。自分の為だ。だからお礼を言われる筋合いはない」

龍「それでも・・・ありがとう。おぶってくれたりもしてくれたから・・・」
高「・・・じゃあ、俺はもう行くぜ」
龍「まって・・・あの、聞きたいことが」
高「何だよ?」
龍「その・・・アリアさんとはどういう関係なの?・・・」
高「・・・・・」
正直、高雅は何と言えばいいかわからなかった。
高（天使って正直に言っても信じないだろうな）
龍「あの・・・聞かれたくないことなら別に・・・」
ア「私はコウガの人生を見直させるために天国から来たの」
高「アホ、そんなの信じるわけないだろ!!」
龍「・・・具体的にどういうことをしているのですか、アリアさん?」
ア「簡単に言ったら人間嫌いをなくして友達を作ることかな」
高「違うぞ杉野。こいつはこのホテルの神様だ」
ア「何で嘘をつくのよ?」
高「うるさい、黙れ」
龍「あの・・・私が友達に・・・・・・」
高「いやだ。人間はこりごりだ」
ア「コウガだってリュウコちゃんはいい奴だって認めたじゃん」
高「それとこれとは別だ。とにかく、俺は人間が嫌いだ」
龍「じゃあ・・・認められるようにがんばるから」
高「なんでそこまで俺と仲良くなりたいんだよ?」
龍「・・・いつも助けてもらってるから・・・お礼がしたいの・・・だから」
竜子の真剣な思いに、高雅は頭を抱えて考えた結果・・・
高「わーったよ。これ以上拒否ったらまたクズの人間みたいになるからな」
ア「軽いんだかツンデレなのだか」

高「もういいだろ。俺は寝る。じゃあな」
高雅はこの場から逃げるようにどこかへ行った。
龍「ありがとう・・・私も部屋に帰ろう」
龍子も一人で普通に歩いて帰った。
その光景はあまりにも不自然だった。
ア「あら、リュウコちゃんは足を挫いていたんじゃ・・・」
アリアだけがその光景に気づいた。
ア「もしかして、まだ裏があるのかしら・・・まあ、今は疲れを癒そうかな」
アリアは考えるのをやめた。

もうちょい、合宿編は続きます。

☆おまけ☆

A「俺は一体何だったんだ?」
作「たんなる使い捨て」
A「ひどっ!!。作者鬼畜」
作「そんなこと言ったら消すぞ」
A「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」

# 合宿編　その6、自然大好きっ子

高雅は日当たりのいい草原で戦いの疲れを癒していた。
高「それにしても、杉野は何で俺に付きまとうんだろう？」
ア「どうして？」
高「だって、あいつが不良に絡まれた時に俺が怖い人間だってわからせたのにな」
ア「でも、結局はいいじゃない。初めての友達でしょ」
高「正確には、身寄りを失ってからの初めてだ」
ア「そうでした」
高「んなことより、あいつは信じたんだろうか」
ア「何を？」
高「お前と俺の関係だ」
ア「信じたんじゃない。目の前で変身したりしたんだし」
高「変な誤解だけはやめてほしいな」
ア「変な誤解って？」
高「俺が人間じゃないとか、超人とかさ」
ア「超人はあってるんじゃないの・・・ってあれ！？」
ふと見たら高雅は既に眠っていた。
ア「ほんと、のび〇君並みの早さね。私も少し寝ようかな」
そう言ってアリアも座ったまま眠り始めた

高「Ｚｚｚ・・・」
ア「・・・すやすや・・・」
二人は気持ちよさそうに眠っている。
それを妨害するかのように助けを求める叫び声が聞こえた。
？「助けてーーーー！！」
ア「・・ん？・・・あっ！！」

ふと目を開けて、前に向けるとそこには、少年が猪に追われていた。
全長２メートルの巨大な猪だ。
ア「起きて！！コウガ！！。大変よ！！」
高「ふにゃ・・・飯の時間か？・・・」
ア「寝ボケないで！！。あの子を助けるよ！！」
高「あの子・・・なっ！！」
高雅は前を見て、すぐに状況を掴んだ。
高「草原に猪なんて、しかもデカッ！！。とりあえず行くぞ、アリア」
ア「いつでもいいよ」
高雅はアリアを翼に変え、少年のもとへ飛んだ。
距離は１５０メートルぐらい。
しかし、今のスピードでは間に合わない。
高「スピード上がらねえのか！？。間に合わねえぞ」
ア「これが全速力よ」
？「うわあああああああ」

ドンッ！！

最悪通りのシナリオになってしまった。
少年は空中に突き飛ばされ、地面に強くうった。
高「ちくしょー、間に合わなかったか」
ア「あの猪、また突進するつもりよ」
猪はまだ懲りてないのかUターンし再び少年へ突進した。
高「これ以上はさせねえ」
高雅は少年と猪の間に着地した。
高「人間を裁くのは、テメーの仕事じゃねえ」
高雅はアリアを金棒に変え、構えた。
そして、距離が無くなった瞬間・・・

バギッ!!

思いっきりぶん殴った。猪は巨大な体格にも関わらず5メートルは吹っ飛んだ。

高「ナイス、ホームランだな」

ア「そんなことより、あの子は?」

高「おっと、そうだったな」

高雅はすぐさま少年のもとへ駆け寄った。

高「おい、大丈夫か!?。しっかりしろ」

返事がない。ただのしかb「それ以上書いたらこの小説を破壊するぞ」・・・自重します。

ア「まだ、心臓は動いているよ」

アリアが少年の胸に手を置き、心臓の状況を確かめた。

高雅も、軽く抱えて頭の後ろなどを確認する。

高「頭とかは打ってないっぽいな。とりあえず、介抱しよう」

ア「あら、人間にしては積極的な行動だね」

高「ガキならまだちゃんとした人間になれるからな」

ア「ふーん・・・あっ、コウガ。この子の手の甲を見て」

高「ん・・・これは・・・」

その少年の手の甲には不思議な紋章のようなものが描かれていた。

それは紛れもなく契約の印だった。

高「これって、契約者ってことだよな?」

ア「うん。じゃあ、この子に使いがいるってことになるね」

高「一体、天国と地獄のどっちだろうな?」

ア「そんなこと、わからない・・・はっ!?、コウガ!!。後ろ!!」

突然、アリアが高雅に注意を促すが、高雅は理解できず・・・

ドガッ!!

高「いっつ・・・」
不意に後頭部を殴られた。
高「だ・・・誰だ・・・」
高雅は後ろを見た。
そこには、金髪の男が立っていた。
？「ほう、まだ意識があるとは中々頑丈だな」
高「く・・・そ・・・」
高雅は痛みに耐えきれなくなったのか、目を閉じて気絶した。
ア「コウガ！！、しっかりして！！」
？「貴様ら、わが契約者に何をした？」
ア「あなたがこの子の使いね。私達はこの子を助けたまでよ」
？「その証拠はどこにあるって言うのか？」
ア「あれを見てよ」
アリアは指を指した。
その方向には猪がのびて倒れていた。
ア「あなたの契約者が猪に追われていたのよ。最悪にも突き飛ばされてしまったけど・・・」
？「本当か？」
ア「本当よ。それで、私達はこの子を助けたのよ」
？「・・・何ーーーーーーーー！！？？」
ア「へ！？」
？「すまない、悪いことをした。この通り！！」
謎の使いはさっきまでの態度とは打って変わってアリアに土下座した。
ア「え・・・あ、わかってくれたならいいです」
アリアはなぜか敬語を使ってしまった。
？「おお、蓮田（れんた）を助けてくれて、かつ俺っちの悪行を許してくれるとは」
ア「それより、この二人をどうにかしようよ」
？「それなら、ちょちょいのちょいだ。ほーーら」

すると、謎の使いは手を大きく振った。
その瞬間・・・
高「んん・・・あれ、俺って何で寝てたんだ?」
高雅は目が覚めた。
ア「コウガ!?、頭大丈夫!?」
高「なんかめっちゃ腹立つな、その言葉」
ア「そういう意味じゃなくて、怪我の方よ」
高「ああ、後頭部か・・・ってあれ、全然痛くない」
?「当然だ。俺っちの治療パワーは天下一品だ」
高「ああ!!、この野郎、よくも不意打ちしてくれたな!!」
?「まったまった、ちょっとまてって」
ア「待ってコウガ。この使いは結構いい使いよ」
?「そうだぜ。お前を治療してやったんだぜ」
高「俺を気絶させたのもお前だよな」
?「悪い!!。この通り!!」
謎の使いはまた土下座をした。
高「お前、名前は何だ」
ロ「俺っちの名前はログナ。よろしくな」
ログナが手を伸ばして握手を求めるが、その前に少年が意識を取り戻し始めた。
蓮「う・・・うーん・・・」
ロ「おーー、蓮田。大丈夫か!?」
蓮「あ・・・ログナ、大変だよ」
ロ「何だよ、また自然破壊の奴か?」
蓮「うん。こーーんなに大きい穴があるんだよ」
蓮田は腕を大きく広げながら表現した。
ロ「それは、早く直さないとな」
高「もしかして、クレーターのことか?」
蓮「わっ!!、お兄ちゃん、誰!?」
蓮田は見知らぬ人間が怖いのか、咄嗟にログナの後ろに隠れた。

高「驚かせてわりいな。俺は崎村高雅。君と同じ契約した者だ」
そう言いながら高雅は自分の手の甲を見せた。
蓮「ああ！！、僕とちょっと違う」
ア「私はアリア。この人の使いよ」
蓮「お姉ちゃんがこのお兄ちゃんの使い？。かわいいね、お姉ちゃん」
ア「ふふ、ありがと」
蓮「あっ、僕の名前は斎藤蓮田（さいとうれんた）だよ」
ロ「よーし、自己紹介が済んだ所で。蓮田、その穴へ案内してくれ」
蓮「うん。こうが兄ちゃん達も来る？」
高「いや、俺達はいい」
ア「えー、せっかくだから見に行こうよ」
高「じゃあ、お前一人で行け。もうすぐ午後になるようだし、さすがに午後の授業は参加しないと欠課が増えるからな」
ロ「なんだ、あんたは学生だったのか？」
高「ああ。昨日、徹夜で地獄の使いと戦ったからちょっと寝てただけだ」
その言葉を聞いた瞬間、ログナは震えた声で高雅に聞いてきた。
ロ「あ・・・あんた、もしかしてラビリンスとかいう奴を倒したのか！？」
高「まあな、力に溺れるザコだったけど」
ロ「すげーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
ログナの声はエコーがかかるほどの叫びだった。
高「うるさいな。落ち着けよ」
ロ「ありがとう、あんたのお陰でここの自然は破壊されないぜ」
高「お前ら、自然保護隊みたいなもんか？」
ロ「まあな。ラビリンスが壊しまくるから俺らが直していたんだ」
ア「ところで、あなたは天国と地獄のどっちの使いなの？」
ロ「おう、俺っちは天国の方だぜ」
蓮「ねえねえ、早く行こうよ」

蓮田が急かすようにログナの袖を引っ張る。
ロ「そうだった。じゃあな、コウガっち」
高「ムカつく呼び名だな。アリアはどうするのか、行くのか？」
ア「授業は私にとってつまらないし、行ってみる。ホテルからそう遠くないし、ログナの力がどんなものか詳しく知りたいし」
高「わかった。じゃあ、また後でな」
高雅はホテルへ行き、蓮田達はクレーターの所へ向かった。

## 合宿編　その7、知ったら損することもある

高雅はホテルの授業用の部屋の前にいた。
高「午後の授業は何だっけ?。まあ、教科書が無くても大体分かるけいいか」
そう言って高雅は扉に手を掛けて開けようとした瞬間・・・

ガララ!!

急に扉が勢いよく開いた。
A「来たな、崎村」
扉を開けた先にはAがドーンと待ち構えていた。
高「ん?・・・おわ!?」
突然、生徒Aが高雅を隠し持っていた縄でぐるぐる巻きにした。
高「何だよこれ!?。離せ!!」
A「逃がさねえぜ。午後の授業は一緒に受けてもらうぜ」
高「そのつもりで来たんだが」
A「へ!?」
二人の間に沈黙が流れた。
A「・・・ははは、そうだったのか。それにしても、何も用意してないじゃないか」
高「午後の授業がわからねえからな」
A「そうかい。午後の授業は山登りだぜ」
高「・・・はぁ!?。んな、呑気に山登ってて勉強は大丈夫なのか?」
A「そうえば、崎村は知らなかったな。学校はもう直ったぞ。明日には帰って普通に授業をするから勉強合宿から普通の合宿に戻ったのさ」
高「学校直ったの!?。早ッ!!。カー〇ィの〇〇〇城には劣る早

さだが早すぎだろ！？」
Ａ「と、言うことで。さっさと行こうぜ」
高「やだ、山登りするぐらいなら寝る」
Ａ「そう言うと思って縄を巻いてんだよ。さあ、強制連行だ」
高「ちくしょーーーー」
高雅は生徒Ａに連れて行かれた。

一方、変わって蓮田達は・・・
蓮「あーるーこー、あーるーこー。わたーしはーげんきー♪」
蓮田がある有名な歌を歌いながら歩いていた。
すると、ふとアリアがログナに話しかけた。
ア「そう言えば、あなたはどうしてレンタ君の使いになったの？」
ロ「それはな・・・蓮田が一人で泣いていたからだ」
ア「じゃあ、誘拐の可能性もあるわけね」
ロ「こらあああ、人の話を最後まで聞け！！。蓮田の家族が亡くなったから泣いてたんだ！！」
ア「あ・・・そうだったの。なんか気まずい話ね」
ロ「そっちは何でだよ？。こっちも話したから教えてくれるのが筋だろ」
ア「私も同じようなものかな。コウガの身寄りが皆亡くなったからかな」
ロ「似たもん同志だな、俺ら」
ア「うん・・・」
空気が重くなったのを悟ってログナは話を１８０度変えた。
ロ「それよりさ、お前の契約の力はどんなんだ？。やっぱ髪の色からして静寂の力か？」
ア「へ！？、別に静寂の力なんて知らないけど、剣になったり翼になったり・・・」
ロ「それは皆ができる普通の力で契約の力じゃない。もしかして、

真の契約で戦ったのか？」
ア「いや、私はただ変身で武器になったりして、後はコウガが戦ってくれたわ」
ロ「それ、マジ！？。そしたら、お前はかなりすげー契約者と契約したもんだぜ」
ア「そうなの！？。・・・あっ、でも虹の契約者って言われてたみたいだから結構すごいかも」
ロ「はぁ！？、お前、虹の力持ってんの！？」
ア「うん、すごいでしょ？」
アリアは自慢するように胸を張るが、ログナから帰ってきた答えは意外なものだった。
ロ「何言ってんの？。ヘボだよヘボ。完全に馬鹿れされてるぞ、それ」
ア「ええ！？」
ロ「あのな、虹の力って幼稚園児が使うもので俺達みたいな青年は一つの能力があるもんだぞ。まあ、例外もあるがな。んで、大体髪の色で力は決まるもんだ」
ア「そうだったんだ」
ロ「身近な例外はラビリンスだな。髪の色が赤いのは大体、活性の力のはずだがあいつは創造の力だったからな」
ア「へ～。あっ、よく思えば、学校なんてあんまり行ってなかったかも・・・」
ロ「はぁ～、あんたは契約者に助けられてんだな」
ログナはあまりにショボイことなのかため息をついた。
ロ「虹の力はまだろくに力を使えんガキがやるもんだ。お前、再生の力を使ったことがあるか？」
ア「うん、コウガが軽い怪我をした時に・・・」
ロ「精々、なおせて軽い切り傷ぐらいだ。虹は万能な代わりにあまりにも力が低いからな」
ア「そうだったの！？」

ロ「契約の力も真の契約も知らないでよく勝てたもんだな・・・」
ア「そんな、哀れな人を見るような目で見ないで・・・」
アリアは自分が恥ずかしくなり、半泣き状態だ。
ロ「はいはい、泣かない泣かない。教えてやるから」
ア「ううう・・・」
ロ「まずは、契約の力だな。まあ簡単に言えば、自分の力を契約者と合わせることだな。んでもって力倍増ってわけ」
ア「う～ん。それで、真の契約は？」
ロ「ようは、ある条件を満たすと使いが完全体になることだ。条件はその使い一人ひとり違うけどな。そして、その時だけ天の規制が無くなるってわけ」
ア「あっ・・・そう言えば、あの時は怒って気づかなかったけどラビリンスは契約者を殺しても自分は生きていた」
ロ「そんなとこだな。わかったら早く自分の力を目覚めさせるんだな」
ア「うん・・・これから戦うって言うのにコウガばっかりに任せられないもん」
ロ「おっ、かっこいいこと言うなぁ。そのいきで頑張れよ」
蓮「僕空気なんだけど・・・もう着いたよ」
二人は蓮田に言われて気付き、ふと目の前を見ると巨大なクレーターの前にいた。
ロ「あははは、わるかったよ蓮田。んで、あれが言っていた穴か。んじゃ、早速いくか、蓮田」
蓮「うん、いいよ」
ログナはクレーターのど真ん中の空中に、蓮田はその下に着いた。
そして・・・
ロ「こんな穴なんてちょちょいのちょいだぜ」
ログナの手に光が集まり、その光をクレーターの真ん中に落とした。
落ちた先の蓮田がその光を受け取った。
蓮「全てを無きことに、全てを元のままに」

その瞬間、蓮田が光り輝いた。
光に包まれた蓮田が空中へ浮いた。
そして、クレーターが綺麗に元の状態に戻っていく。
ア「すごい、これが契約の力なの」
ロ「まあな、契約者と使いが力を合わせて出来ることだ」
ア「あれ、いつの間に戻っていたの？」
ロ「ついさっき。まあ、すぐに迎えに行くけど」
そう言って、ログナは光り輝いている蓮田の下へ飛んだ。
ア「いつか、力が使える日が来るかな・・・」
ロ「ただいま～」
ア「はや！？」
ログナは蓮田を抱え、戻ってきていた。
ア「あれ、レンタ君はどうしたの？」
ロ「力を使うと体に負担が掛かるのか寝ちまうんだよな」
蓮「・・・くー・・・」
蓮田は気持ちよさそうに眠っていた。
ロ「さあ、もうお終いだ。どうせラビリンスが消えたから暇だしコウガっちの所へ行こうぜ」
ア「うん。じゃあ、今連絡するね」
ロ「おいおい、どうやってするんだ？」
ア「私とコウガはどこにいても会話が可能な意思会話ができるの。ちょっと待ってて」
ロ「へー、便利なものだな」
アリアは高雅へ意思会話を始めた。
ア（コウガ、聞こえる？）
高（・・・ん、アリアか。どうした？）
ア（こっちはもう終わったからそっちに行こうかなって思ったわけ）
高（姿を出さなかったらいいけど、今はホテルじゃないぞ）
ア（どこにいるの？）

高（山の中だ。んじゃ）
高雅は学校の皆と山登り中。
しかし、その光景は例えるなら凶悪な犯罪者を多数の警官が連れていくような光景だ。
高「なあ、この縄をほどいてくれよ」
A「ダメだ。どうせ逃げられるからな」
高「ちぇえ」
A「ほどいてほしかったら俺と友達になってくれ」
高「こんなことするような奴を友達になんてするかよ」
A「お前がなんと言おうが俺はあきらめねえからな」
高「知るか。もうのんびり歩くのも飽きたし、さっさと登るぞ」
A「はあ!?・・・・ってうわあああ!?」
高雅はダッシュで山を登り始めた。
生徒Aを引きずりながら。
A「ぎゃあああ。いてえ、いてえって。やめろおおおお」
高「俺のささやかな逆襲だ」
そう言って高雅は生徒Aを引きずりながら山を駆け登った。

## 合宿編　その8、知らない人について行くと・・・

登山の最中、杉野は友達の夢（女子）と話しながら登っていた。
友「ねえ大丈夫、龍子?。あんた、さっきから息上がってるよ」
龍「大丈夫だよ、夢ちゃん・・・このくらいでへこたれたりしないから・・・」
夢「無理ならすぐにいいなよ」
龍「うん・・・」
A「うわあああああああ、助けてくれえええええええ」
突然、高雅が横を風のごとく過ぎ去り、その後ろを生徒Aが空を切るスピードで抜ける。
高「しつけえな。さっさと手を離せばいいじゃねえか」
A「だが断る!!」
高「なら、頑張れ」
高雅は忍者のように跳びながら山を登った。
A「ぎゃあああ。だが断るううううう」
夢「あいつもよく崎村にちょっかい掛けるな」
龍「何か・・・知っているような言い方だね・・・夢ちゃん」
夢「知ってるも何も、あいつとは同じ中学だったからね」
龍「そうだったんだ・・・」
夢「あいつはかっこいいけど、近づいたら女であろうと半殺しにする凶悪で優しさの欠片も無い奴だからね。あいつには近づかない方がいいよ」
龍「そんなことない!!」
夢「へ!?・・・」
この近くにいる全員がざわめく。
夢「ちょっと、声が大きいよ」
龍「はっ!!」
龍子は今気づいたようだ。

龍「え・・・あ・・・うう・・・」
龍子は皆の視線を浴び、俯いて赤面した。
男「おい、じろじろ見るなよ」
突如、謎の男が龍子をかばった。
龍「へ!?・・・」
男「さあ、行こう」
突然、龍子の手を取って歩き始めた。
龍「あっ・・・夢ちゃん」
龍子は夢に助けを求めるように呼んだ。
夢「いいじゃん、結構かっこいいし勇敢だし。友達になったら私を紹介してね」
龍「そんな・・・」
龍子は謎の男に連れて行かれた。

龍「待って・・・待ってよ」
龍子は謎の男に連れていかれたがそこは登山ルートではなく人気のない場所だった。
龍「離して!!」
龍子は男の手を振り切った。
男「ここまでくればいいな・・・杉野!!」
男は急に龍子の肩を掴んだ。
龍「きゃあ!?」
男「ずっと前から好きだった。付き合ってくれ!!」
龍「え!?」
男「なあ、答えてくれ!!」
龍子は突然のことだったが、自分の気持ちに素直に答えた。
龍「え・・・その・・・ごめんなさい」
男「そんな・・・」
龍「ごめんなさい。だから・・・元の場所に帰ろう?」

男「・・・・・・・・・・だ・・・」
龍「え!?」
男「何故だ!?。俺はお前を守った!!。これからも守り続ける!!」
男の肩を握る手が強くなる。
龍「い・・・痛い・・・離して!!」
男「頼む!!、考え直してくれ!!。俺はこんなにもお前のことを思っているのだぞ」
龍（いや・・・誰か・・・助けて!!）
その願いを叶えてくれるかのようにある二人がやって来た。
?「うぁぁぁぁぁあああああああああ」
男「な・・・なんだあれ!?」
雪だるまではなく泥だるまが転がってきていた。
そしてその後ろに・・・
高「おま・・・足滑らせてんじゃねえよったく!!」
高雅はその泥だるまの一定の距離を保ちながら高雅が追いかけていた。
いや、正確に言ったら高雅は引っ張られている。
おわかりの通り、転がっていたのは生徒Aだった。
しかも、転がっているにもかかわらず縄を離していない。
高「おいおい、そこの奴どけえええええ」
A「うわあああああああああああああ」
男「うわっ、こっち来るなあああああああ」

ドガッ!!

男は泥だるまに巻き込まれた。
高「あちゃー、反射神経悪かったか・・・ってお!?」
高雅はバランスを崩してしまった。
高「おわっととと・・・あれ!?、まだ人いたの?」

龍「崎村君!?」
高「杉野!?。とりあえず、今すぐどけえええええええ」
龍「ええ!?」

ドガッ!!

龍「きゃあ!!」
高「わりい、杉野。後でちゃんと謝るから」
高雅は龍子とぶつかり、そのまま体勢を立て直し、泥だるまを追いかけていく。
龍「・・・助かった?・・・」
しかし、龍子はまだ最悪が残っていた。
龍「・・・ここ・・・どこ?・・・」
わけのわからない獣道を通ってきたせいで道はよく覚えられず、挙句の果てに一人ぼっちという展開。
龍「とりあえず、来たと思う道を戻れば皆に会えるよね・・・」
龍子は自信ゼロで来た道を戻ろうとした。

高「ふぅ〜、ひどい目あったっぜ。ったく、お陰でふもとまで降りちまったな」
高雅はやっと止まった泥だるまの前で土をはたき落していた。
すると、泥だるまから頭が一つ出てきた。
男「おいこら!!。何をしてくれる!!」
高「ああ、悪い。このアホが休憩中に足を滑らせたもんだから」
男「せっかく、告白していたのに〜〜」
高「へぇー、杉野に告白してたんだ。大体、登山中に告白するとは

また変な展開だな」
男「うるせー、やっとの思いで告白したというのによ」
高「そりゃ、悪いな。後はその団子に埋もれてるやつにでも当たっとけ。んじゃな」
男「待てやゴラ！！」
男の怒り声に高雅もそれ相当の声で返す。
高「ああ！？、人間ごときが俺に偉そうにするんじゃねえよ！！」
そう言いながら拳を構える。
男「ひっ！！」
高「・・・・・・・ダメだ、こいつ。殴る価値が無い」
高雅はへっぴり腰になった男を見て殴るのを止め、無視してどっか行った。
A「ぷはあ、ここは・・・どこだ？」
もうひとつの頭が出てきた。
そして、それを見た男が黒いオーラを出していた。
男「覚悟しろよ、この虫野郎！！！！！！」
A「はあ！？、急に何！？」
男「くらえ！！！！！、滅びのバー○トスト○ーム！！！！！」
A「どこから、んな青い目の龍を出してんだ！？。大体、前者のセリフとちgぎゃあああああああああ」
生徒Aのライフポイントは0になった。

飛んで、夕方。
登山していた生徒達はふもとに戻っていた。
先「皆ちゃんといますかー？」
先生が点呼を取る。
B「生徒Aが灰になっていて、崎村がいませーん」
先「その二人はもういいわ」

B「おいおい、それは先生失格だろ・・・」
夢「先生!!、大変です!!。龍子がいません!!」
先「なんですって!?」
C「あっちのクラスでは謎の男がいないらしいぜ」
先「困りましたわね。こうなったら皆は部屋に帰って、私達で探してきます」
先生は他の先生を集めて再び山に入った。

一方、高雅はと言うと・・・
高「アリア達は一体どこだ?」
アリア達を探すために山をさ迷っていた。
ふと空を見た。空は茜色に焼けていた。そして、あることに気づいた。
高「・・・あっ、わざわざ探さなくても、意思会話でわかりやすい場所を教えて、そこで待ち合わせればよかったな。俺ってバカだな」
高雅は頭を掻きながらアリアに連絡した。
高(おーい、アリア。聞こえるか?)
ア(コウガ!?、一体どこにいるのよ!?。いくら山を探してもいないし)
高(まだ山の中。今からホテルに帰るから屋上で待ち合わせな)
ア(わかったわ。私達も山から下りてそこに行くわ。ちゃんといてよ)
場所と目的だけを伝え、アリアとの連絡を終えた。
高「これでよしっと。んじゃ、下りるか」
高雅は山を下り始めた。

龍「ここ・・・どこ?・・・」
龍子はあれからずっとさ迷い続けていた。
だが、来た道に戻る所かふもとにも辿りつかなかった。
龍「おかしい、ちゃんと下りているはずなのに・・・」

ザザザッ

龍「!?」
突然、近くの草むらが揺れ始めた。
龍「誰!?・・・」
龍子は怯えながらも草の方に声をかけた。
?「その声は・・・杉野!?」
草むらから人が出てきた。
龍「あ・・・」
男「探したよ。さあ、一緒に山を下りよう」
龍「う・・・うん・・・」
出てきたのはさっきの謎の男だった。
龍子は人に会える喜びを感じながらも、どこか不安を感じていた。
男「僕が来たからにはもう大丈夫だから」
すると、また草むらが揺れた。
男「誰だ!!」
かっこよく言う男だが出てきたのは・・・
熊「グルルル・・・」
熊だった。
男「ぎゃあああああああああああ・・・〈バタッ〉」
男はさっきの威勢とは裏腹に恐怖で気絶した。
龍「ちょっと・・・しっかりして・・・」
熊「グアアア」
龍「はっ!?」
熊は龍子に飛びかかってきた。

龍「う・・・」
龍子は目をつぶって顔を防いだ。

バゴッ!!

龍「うぐ・・・」
熊のパンチが思いっきりヒットし、ぶっ飛ばされて木にぶつかる。
龍「い・・・痛い・・・」
龍子はあまりの痛さに立ち上がることができなかった。
熊「グルルル」
龍「私・・・死ぬのかな・・・」
さらに、龍子の意識が消え始めていた。
龍子が最後に見た光景は熊が徐々に接近している光景だった。

## 合宿編　その9、思いやり（前書き）

この話は色々な名言でネタを作っている所があります。まあ、今までも所々ありましたが今回は結構あります。
人によっては解らないかもしれませんが・・・

ちなみに、これで合宿編は終わりです。

## 合宿編　その9、思いやり

龍子は気絶して絶体絶命の状態。
熊「グアアアアアアア」
熊を巨大な手を龍子に振りかぶった。

ガシッ！！

熊「グオッ！？」
高「何で山を下りていたら熊ちゃんが杉野を殺そうとしているんだ？」
突然現れた高雅が熊の手を片手で防いでいた。
熊「グオオオオオオオ！！」
熊は空いている片方の手を振り上げた。

ガシッ！！

熊「グオッ！？」
またもやそれを片手で手を受け止める。
高「そこの転がっている脇役を殺すなら何もしなかったが・・・」
熊「グオッ！？」
高雅は両手を持ったまま熊を逆立ちしているように持ち上げた。
高「いい人間を殺そうとするのは・・・許せねえな。おらっ！！」

バギャッ！！バギッ！！バギャッ！！バギッ！！・・・

高雅は思いっきりぶん投げた。
ぶっ飛んだ熊が豪快に木々をなぎ倒していく。
高「人間を殺したいならな・・・・」

高雅はそこに転がっていた男を拾って熊がぶっ飛んだ方向に差し出しながら言った。
高「こいつを殺せ！！！！」
男「ちょっと待てえええええええええええ」
高「なんか文句あるのか？」
男「ありまくりだ！！。命を粗末にするな！！」
高「俺の予想だと、お前みたいな好きな人を守れないキャラは死んだ方がいいと読者が言ってるぞ」
男「あれは、死んだふりで隙をついｔ「て逃げようとしたんだろ」
違う！！」
高「何が違うのか？、思いっきり土を引きずった跡が杉野と反対方向にあるぞ」
男「そ・・・それは・・・」
高「そんじゃ、死んでくれ」

ポイッ

男を熊が倒れている所へ投げた。
男「うわあああああああ」

ガシッ

誰かが男をキャッチした。
男「おお、どなたか存じませんがありが・・・」
振り向いた目先には熊がいた。
男をキャッチしたのは熊だった。
高「熊ちゃん、ＧＯＯＤ　ＪＯＢ☆」
熊「ｂ」
熊は高雅に向かって親指を立てた。
男「お前ら、何で仲がいいんだ！？」

高「自然界では弱肉強食だからだ」
男「納得できるかーーーーー。くそ、ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ」
男は必死にあがくが熊にとっては無意味。
そのままどこかへさらわれた。
高「これで良し、後は・・・って、もう来てたか」
ア「当然でしょ。あんなすごい音や砂煙があったらね」
振り向いた先には既にアリア達が駆けつけていた。
熊を豪快にぶっ飛ばしたのはこの為だった。
ア「で、一体何があったの？」
高「人間を一人制裁しただけだ。それより、杉野を治してくれ。木に思いっきり叩きつけられてる」
ロ「それなら俺っちに・・・ってこのかわいこちゃんは前に足を治した奴じゃないか」
高「お前、杉野を知ってるのか？」
ロ「ああ。ホテル探索してたらさ、可愛く寝ててさあ。しかも足を挫いていたから治してやったわけ」
ア「足を治したのはやっぱりあなただったのね」
蓮「ログナ、この人のこと好きなの？」
ロ「そりゃあ、こんなかわいい奴はそうそういないからな。もうフォーリンラブだぜ」
ア「コウガ、早くしないと取られちゃうよ」
高「知らねえよ、そんなこと。さっさと治して帰ろうぜ」
ロ「はいよ。こんなのちょちょいのちょいさ」
そう言うと、ログナは龍子の怪我を一瞬で治した。
しかし、それで龍子の意識が回復するわけではない。
高「とりあえず、杉野をおぶってホテルに帰るか。またな、蓮田、ログナ」
蓮「ばいばーい」
ロ「また、明日なー」
高「明日は帰るからもう会えないぞ」

蓮「そ・・・そんな～」
蓮田は涙目になった。
ロ「なら、お前らについて行くわけだな」
高「ちょっと待て。どうしてそうなる！？」
ロ「だってよ、もうラビリンスがいないのにここにいる必要が無いぜ。だから、お前んとこの近くの山にでも引っ越すってわけ」
高「お前はいいかもしれないが蓮田はどうするんだよ？。親とか無断ｄ「ストオオオオオプ、コウガ！！」ふご！？・・・」
アリアは咄嗟に高雅の口をふさいだ。
蓮「僕、お父さんとお母さんはいないよ」
高「！？」
ア「あちゃー、遅かった」
アリアはあきらめて高雅のふさいでいた手を離した。
蓮「小さい時に事故に遭ったんだ。僕だけが生きていて、お父さんとお母さんは死んじゃったんだ」
ロ「こぉらぁあああ！！！。何、蓮田の黒歴史を復活させてんだ！！！！」
ログナが苛められた弟を庇うかのようにブチギレた。
高「ああ・・・わりい、何も知らなくてあんなこと言って」
蓮「いいよ・・・慣れてるから」
高「・・・慣れんなよ。そんなことに・・・」
ロ「さーさー、蓮田君。僕達はもう帰りましょうね～」
ログナは蓮田に気を使ってこの重い空気をブチ壊そうとした。
蓮「ログナ、僕は大丈夫だよ。だから、安心して」
ロ「うおおおおおおお、なんと強いんだ蓮田よ。俺っちはモーレツに感動しているぞおおおおおお」
ログナは号泣した。
ア「喜怒哀楽の激しい人ね」
すると、高雅は蓮田に近づいた。
そして・・・

蓮「え!?・・・」
蓮田の頭を撫でてやった。
高「強がるなよ。こういう時こそ頼るもんだ」
蓮「僕は大丈夫だって・・・」
高「ガキが調子乗ってんじゃねえ。子供は思いっきり甘えてればいいんだ」
蓮「こうが・・・お兄ちゃん・・・」
高「笑う時は笑い、怒る時は怒り、泣きたい時は・・・泣きまくれ。我慢する必要なんて無いんだよ」
すると、蓮田の涙腺が崩れ始めた。
蓮「ううう・・・ぐすん・・・こうがにいちゃん・・・」
高「よく今まで頑張ったな。よしよし」
蓮「ううう・・・うわーーーーーーーん」
蓮田は今まで我慢していた分、全てを解放した。
高雅は背中をさすりながら蓮田を受け入れる。
ロ「あいつ、すげーな」
ア「うん、コウガはすごい」
ロ「あんたは激レアな契約者を見つけたもんだな」
ア「そんなこと・・・もう知ってる・・・」
空に輝く月と星達がこの４人を見守っていた。

その後。

高雅は龍子をホテルまでおぶって帰り、謎の男は神隠しに遭ったと伝えた。
そして今、高雅は屋上にいた。
高「ここの星空とも今日でお別れだな」

ア「そうね。それにしても、人をおぶっても文句を言わなくなったわね」
高「うげ、人間おぶったよ」
ア「無理して言わない。それに、レンタ君の時はちょっと感動したかな」
高「あんなベタな展開でかよ？」
ア「ベタでもいいじゃない。そういうのが本当にあるのってとてもいいことだから」
高「ふ〜ん。そう言えば話が変わって、俺ん家の近くに中々良い展望台があったな」
ア「ほんと！？。いつかそこに連れてって」
高「気が向いたらな」
ア「何よ、その曖昧な返事は？」
他愛のない話を破るようにある声が聞こえた。
B「おめえらああああ。リベンジしたいと思わないかあああああああ」
全「おおおおおおおおおおお」
高「またかよ・・・」

男子風呂場、露天風呂の場所。
尋常じゃないハイテンションの男達が集まっていた。
B「この岩の奥には何があると思うかああああああ」
C「それはああああああ既に知っていることだああああああ」
D「行くぞおおおおおお野郎共おおおおおおおおお」
全「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
男達は岩を登り始めた。
B「もうすぐてっぺん・・・」
C「どうした、生徒B・・・」

もう説明する必要もありませんよね？
男先「今日の俺は紳士的だぜえ」
B・C「逃げろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
時すd（略）
男先「死ぬかぁ！！、消えるかぁ！！、土下座してでも生き延びるかぁ！！」
全「すみませええええええええん」
全員が土下座したと思われたが一人だけしてなかった。
B「こうなったら、これを使うしか・・・」
C「馬鹿野郎！！、アイテムを使うな！！」
時s（略）
男先「アイテムなんぞ、使ってんじゃねええええええええええええ」
全「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
男子生徒終了のお知らせ。

高「ほんと、成長しない奴らだな」
ア「今回の先生、なんか禍禍（まがまが）しい斧持っていたよ」
高「あっそ」
高雅には何も興味が無かった。
もちろん、高雅が仕組んだことだから。
高「これで男子風呂に人は来なくなったな。俺は先に入るぜ」
ア「行ってらっしゃい」
高雅は一人で風呂場へと向かった。
一人になったアリアはあることを考えた。
ア「・・・私の力・・・どうやったら引き出せるのだろう？」
アリアは一人悩んでいた。
そこに、ある声が聞こえた。

セ（アリア様、聞こえますか？）
声の主はセバスチャンだった。
突然の声にアリアは少し驚く。
ア（セバスチャン！？。えっ！？、意思会話ってセバスチャンにもできたの！？）
セ（はい。ところで現在の状況はいかがでございますか？）
ア（別に何とも無い。地獄の使いを一人やっつけたぐらい）
セ（左様でございますか。それはうれしきことです）
ア（ねえセバスチャン、私の力ってどうやったら解放するの？）
セ（遂に自分のことを理解されましたか）
ア（うん。それで、私の力は何なの？）
セ（それが分からないのです。アリア様の力はわたくしには解放できませんでした）
ア（やっぱ、学校にろくに行ってないのが悪かったのかな？）
セ（アリア様の力はラギュラバル家でも特殊でして。学校でも解放できたとは思われません）
ア（そうだったんだ）
セ（お役に立てず、申し訳ありません）
ア（いいのよセバスチャン。何か分かったら連絡するね）
セ（そうですか。それでは、また）
セバスチャンは連絡を断った。
ア「さあて、私もお風呂に・・・入れないか、まだ」
現在１９時。
まだ生徒の入浴時間だ。
ア「しかたがない。また星でも見ておこうっと」
アリアは再び空を見上げた。

次の日。

高「急に飛んだな」
気にしたら負けです。
ちなみに、今はバスの中で、席決め中。
A「俺は崎村の隣だ!!」
高「却下!!」

バゴッ!!

A「げふん!!」
生徒Aが後ろの席までぶっ飛んだ。
A「せっかく復活したって言うのによ・・・がくっ」
B「次は俺の番だ!!」

ドガッ!!

B・C・D「ぐぎゃあああああ」
高「どうせならまとめてやらねえとな」
高雅は生徒Bをぶっ飛ばすと同時にC・Dもぶっ飛ばした。
高「これで落ち着けるな」
龍「あの・・・」
高「ああ?」
龍「その・・・隣・・・いい?」
夢「あんた、死ぬ気なの!?。あれの二の舞になっちゃうよ」
龍「あっ・・・夢ちゃん・・・」
夢は龍子の手を引っ張って、なるべく高雅から遠くの席へ座った。
高「・・・命拾いしたな。杉野」
高雅はバスの中全員に聞こえるように言った。
ア(ちょっと、何であんなこと言うのよ?)
高(これがあいつの為なんだよ)
ア(どうして!?)

高（俺みたいな残虐な変わり者といたら、あいつが他の奴らから嫌われるだろうが）
ア（そんなこと考えてたなんて、やっぱコウガは優しいね）
高（そんな分けないだろ。自分のためだよ）
高雅はウォー○マンのイヤホンを耳に付け、外を見た。
高「そう言えば、蓮田達はどうやって移動するのか？。ついてくるって言ってたし・・・」
そう呟きながら見た目先には・・・
高「・・・あれって・・・蓮田！？」
ア（え！？、見せてよ）
高雅はブレスレットを窓際にやった。
ア（本当だ。でも、あれじゃあ・・・）
高（気にしたら負けだ。あれは子供の夢だからな）
蓮田は小さくて黄色い飛行機にまたがって飛んでいた。
B「おい、子供が飛行機に乗って飛んでるぞ！！」
夢「きゃー、あの子かわいいー」
ア（目立ちまくりだね）
高（そうだな。でも俺も子供だったらああしてるな）
ア（レンタ君、かわいいね）
高（その純粋さゆえ、こうなっているがな）
その後、蓮田はバスの周りを飛びまわりながらついて行き、皆の注目の的となった。
高雅は状況を把握してつまらないのか眠った。

それからは何事もなく学校へ到着し、生徒はそれぞれの家へと帰った。
皆が学校に帰って来た時に思ったことは「まじで直ってる」でした。

☆おまけ☆

男「俺って・・・どうなるんだ？」
ここは熊の巣。
熊「グーー」
熊は男を人形のように抱いて寝ていた。
男「逃げられねえええええええええええ」
熊「グ・・・グルルルル」
男「ひいいいいいいい、起きたあああああああ」
そりゃ、そんだけ叫べばね。
それに、寝起きの熊は不機嫌だよ。

シャキーン（爪が出てくる音）

男「やめてくれ！！、頼む！！、この通り！！、許して！！、お願い！！、ＨＥＬＰ！！、Ｉ　ＤＯ　ＮＯＴ　ＷＡＮＴ　ＴＯ　ＤＥＡＤ！！」
その後、男の行方を知る者は誰もいなかった・・・。

合宿編ｅｎｄ

# 心変わり

あれから時がちょっと過ぎ、5月初旬。
アリアは高雅に力のことは話していない。そのまま、高雅は地獄の使いを倒し続け、経験を積んでいた。
そのさなか、高雅の心が変わり果てていった。
そして、今も心が変わっていっている最中だ。
高「これで、終わりだーーーーー」
使「ぎゃあああああああああ」
高「ははははは、ちょろいちょろい」
ア「・・・・・・」
高「何不満な顔をしてるんだよ?。もっと喜べよ。敵を倒していることによ」
ア「最初は嫌がっていたのに、どうして今は地獄の使いと戦うことがそんなに楽しそうなの?」
高「制裁を下すべき奴を倒してうれしいことはない」
使「ぐぐ・・・ぐ・・・」
高「まだ息があったか。さっさ死ね」
ア「ちょ・・・コウガ!!」
高雅は足を上げそして・・・

グシャッ!!

使いの頭を潰した。
ア「ひどいよ・・・」
高「さーて、帰るか」
アリアの声は高雅には届いていなかった。
高雅は完全に戦闘慣れになっていた。そして、完全に殺すため残虐な戦い方を繰り広げて来た。それを繰り返しているうちに、高雅は

だんだんと制裁と言う名の殺戮（さつりく）に快楽を覚えてしまった。
高「次はどんな奴が来るかな？。楽しみで仕方がないぜ」
高雅の心が戦いのたびに残虐な闇へと包まれていった。

学校。

何も変わっていない学校。変わっていることは数人の男子の爪が剥げていることだけ。
先「この式を因数分解してください。それでは・・・」
高「Ｚｚｚ・・・」

ピシッ！！

高「いった！？」
先「このｎ「（Ｘ－２）（Ｘ－４）」正解・・・」
高「んじゃ、お休み・・・」

ピシッ！！

高「たぁ！？」
先「誰が寝ていいって言いましたか？」
高「わかりましたよ・・・Ｚｚｚ・・・」
先「言っているそばから寝るなーーー」
先生はキレた。すると、生徒Ａが割り込んできた。
Ａ「高雅よ！！、今こそ力を合わせてサボり、そして俺ときずｎへドガシャン！！〉」
高雅は生徒Ａに向かって机をぶん投げた。
高「気易く下の名前で呼ぶんじゃねえ！！。次言ったらただじゃ済

まさねえぞ！！」
A「もう・・・済んでない・・・がく」

キーンコーンカーンコーン

先「それでは、総務号令」
総「きりーつ、きをつけー、礼」
全「あり（略）」
そして、いつもの恒例のこと。
B「行くぞーーーー」
C「えびくおおおおおおおおおおう」
D「起きるんDA！！A！！」
高「“エイ”って読むか“あ”って読むかわからん言い方だな」
E「俺も混ぜてくれ！！」
高「新キャラ、キタコレ」
D「よおし、今日からAの変わりにEが仲間だ」
いつものメンツはAの変わりにEになった。新たなメンツが購買部に走る。
A「待て・・・俺も・・・」
Aも遅れて追いかけた。
高「さあて、俺も移動するか」
高雅も席を立とうとしたその時・・・
龍「ねえ・・・崎村君・・・」
高「あ？」
高雅は脅すような声で言う。
そして駆けつける夢。この光景はもうこのクラスの当たり前になっていた。
夢「だーかーらー、あんたは死にたいの！？」
龍「だから、違うって・・・」
高「・・・・・」

ア（素直になればいいのに）
高（知るか）
高雅は龍子が見ているのを背中にしてクラスを出た。

ついた場所は学校の中ではない。そして、人気のない木陰だ。高雅は午後の授業はサボるつもりらしい。
アリアはもうサボりを気にしないようにしている。（↑アリアよ、それでいいのかよ・・・）
高雅は木漏れ日を見ながら言った。
高「だんだん暑くなってきたな」
ア「ふふ、そうね。5月でも日が照ったら結構熱くなるね」
アリアはこの時がとてつもなくうれしく感じている。
戦っていない高雅はいつもの優しいところがある高雅だからだ。
高「はあ、早くGWになって欲しいな」
ア「どうして？」
高「家でごろごろできるから」
ア「単純な理由ね」

ガサガサ・・・

突然、風が吹いてもいないのに木の葉っぱがざわめき始めた。
高「ん？・・・なんか不自然だな」
高雅が木の葉っぱを睨んだ瞬間・・・
蓮「やっほー、こうがにいちゃん、アリアおねえちゃん」
ロ「にゃっほー、コウガっち、アリアっち」
高「のわっ！？」
蓮田とログナがブラーンと宙づりで現れた。高雅は驚いて後ろに倒

れた。
高「何やってんだお前ら!?」
蓮「えへへ、ちょっと用があって会いに来たよ」
ロ「そういうわけで、遊ぼうぜ」
高「どうして、お前らと遊ばなきゃならねえんだ。めんどくせえよ。大体、用って言うのは遊ぶことなのか?」
ロ「そんなわけないじゃん。んじゃ、本題」
高「本題も遊ぼうじゃねえのか?」
ロ「そんなことありませ~ん。俺っちがちょっと野暮用で天国に行った時に耳に入れた話だぜ」
高「んで、一体何を聞いたんだ?」
ロ「ああ・・・なんでも、あんたら二人を殺すために天国の兵を現世に送ったらしい」
高・ア「なっ!?」
ロ「しかも、殺した者は永遠の幸せを約束するらしい」
高「なんじゃそれ!?」
ロ「いやー、どうしてもお前らを殺したいみたいだぜ、ラギュラバルの王様達は」
高「あのバカ親ども、俺らの殺意が消えてなかったんだな。こりゃ、分からせてやんねえとな」
ロ「あんたら、王様になんかやったと?」
高「会ったらみたらアリアを殺すとか言ったんだよ」
ア「なんか自分の都合のいいようにまとめてない?」
高「それにしてもよ、自分の娘を殺すってどうよ?。おかしいだろ?」
ロ「娘・・・え!?、もしかしてアリアっちはラギュラバル家?・・・」
ア「そうよ」
高「知らなかったんだ・・・」
ロ「まじかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

ログナは雄叫びをあげた。
すると、アリアはあるもの気づいた。
ア「ん？・・・ねえ、なんか空から来てるわよ」
高・蓮・ロ「ん？」
空を見上げると、そこには何千人もの天国兵がいた。
兵「いたぞー！！」
高「早速お出ましのようだ」
ア「どうしてそう余裕なの？」
高「一度倒した相手が何人来ようと負けはしねえよ」
兵「全軍、突撃ーーーーーー！！！！」
兵が高雅に向かって急降下し始めた。
ア「どうするの？」
高「相手が正面から来てるんだぜ。正々堂々と正面から行こうじゃねえか」
ア「かっこいいこと言ってるけど、それって単なる自殺行為だよ・・・」
高「蓮田達は隠れとけ。さあて、ボコボコにしてやんよ」
蓮「うん。気をつけてね、こうがにいちゃん」
ロ「俺っち達は回復専門だからな。戦いに向いてないから、とんずらするぜ」
蓮田達と別れを告げた高雅は突っ込んでくる兵を睨みつけていた。

高雅ＶＳ無数の天国兵

普通に考えたら無謀な戦いだが、この小説は主人公最強のことを忘れてはならない。
高「ははははは、体がうずうずしてきたぜ。早く殺りてーー」
ア「コウガ・・・」
高「アリア、さっさと剣になれ」
ア「・・・・」

アリアを渋々剣になり、それを受け取った高雅は敵の接近に構えた。
高「さあ、闇のデュエルの始まりだ！！」
ア「コウガ・・・もう正気じゃない・・・」

ただ今、兵と交戦中。

高「だははははは、弱すぎるなぁ。歯ごたえが無さ過ぎなんだよ！！」
ア「・・・・・」
無数の兵を殺している高雅の顔は病んでいった。

グシャッ、ザシュッ、ズバッ、メッキャ・・・

無数の兵だったのが数えられるまで減っていた。
そして、あたりには千切れた腕や頭、内臓までもが転がっていた。
高「もう終わるな。つまらない戦いだ。殺し足りないぜ」
ア「ねえ・・・どうしたのコウガ・・・何で殺すの？。この人達は本当はいい人だよ」
高「じゃあ、天国は改善しないとな。まずは、あのダメな親どもを殺して・・・」
ア「コウガ・・・ねえ、コウガ！！・・・」
高「うっせいな。黙っとけ！！」
高雅はおもいっきり剣を投げ捨てた。
ア「きゃあ！？」
高「てめーの力が無くても、後はもう俺だけで殺れる」
そして、高雅は残り少ない兵を殺しに行った。
高「ははははは、俺に喧嘩売ったことを後悔するんだな」
高雅は完全に殺るき満々の目になっていた。
ア「コウガ・・・どうして・・・こんな風に・・・」
アリアは変わり果てた高雅の殺す姿を見て涙を流した。
その涙は血の溜まった地面に染みて消えていった。

# アリアの決断

あの後、高雅は敵を完全に全滅させた。
家に帰って高雅は爆睡、アリアはセバスチャンに連絡していた。
ア（・・・セバスチャン・・・）
セ（はい、どうかされましたか？）
ア（私・・・コウガの使いに向いてないかも・・・）
セ（一体、何がありましたのですか？）
ア（コウガが・・・うう・・・コウガが・・・こわれていくよ・・・）
アリアは涙ぐんでいた。
セ（落ち着いてください、アリア様。もっと具体的にお教えできますか？）
ア（ぐすん・・・地獄の使いを倒し続けているうちにコウガが残虐になっていったの・・・）
セ（・・・・・・・）
セバスチャンは何も言わずに黙って聞いた。
ア（そりゃあ、今までも殺したりしてたけど・・・最近、殺し方がひどくなってきたの。制裁とか言いながら自分の思うがままに殺したい放題・・・もう・・・考えるだけで・・・うう）
セ（それで、アリア様はどうされますか？）
ア（どうするって？）
セ（コウガ様をこのままにしておきますか？）
ア（そんなの嫌だ！！。残虐なコウガなんて嫌だ！！。私は優しいコウガの方がいい！！）
セ（では、アリア様がどうかされませんといけません）
ア（え・・・）
セ（アリア様がコウガ様をどうかされてしまった。そのことを自覚していますね？）

ア（それは・・・一応）
セ（わたくしがコウガ様を元に戻すことは不可能です。それができるのはコウガ様の人生を見直すためにやってきたアリア様だけです）
ア（セバスチャン・・・）
セ（前にも教えていたはずです。自分でやったことはちゃんと責任を取るようにと）
ア（うん、そうだよね。ありがとう、セバスチャン。少しだけ自信がついたよ）
セ（そうですか。何か手伝えることがあるなら何でもおっしゃってください）
ア（ありがとう、セバスチャン。じゃあね）
アリアはセバスチャンとの連絡を断った。
ア「自分がやったことは責任を取る、か・・・すっかり忘れてたよ」
すると、ドアが開き高雅が入ってきた。
今起きたばっかなのか、寝ぐせでサイ〇人みたいになっている。
高「おいアリア。ちょっと買いもん行くぞ」
ア「あ・・・うん、わかった。それより、寝ぐせひどいよ。ちゃんと直して方がいいよ」
アリアはブレスレットになり、高雅の腕に巻きついた。
そして、速攻で寝ぐせを直し、玄関の窓から外を見ていた。
高「結構暗いな・・・寝過ぎたな」
ア「寝るのが好きだからね」
高「さすがに夜は寒そうだし、ジャケットぐらい着るか」
高雅はジャケットをはおり、近くのスーパーへ向かった。

近所のスーパー。

高「今日の飯は何にしようかな～」
高雅は材料を見ながら今日の夕飯を考えていた。

ア（適当にハンバーグとかでいいじゃない）
高（お前、食べんでも大丈夫だからって適当に決めんじゃねえ）
今頃だけど、アリアは何も食べてません。
ア（栄養なんてこと、天使に必要無いから）
高（まーた、何でもありなことを・・・ん？）
すると、高雅の目にある者（もの）が止まった。
不「おいゴラ！！、何ぶつかってんだ？、ああ！？」
不良だ。不良は気の弱そうな成人男性に喧嘩を売っていた。
成「ひい、すみません」
不「ゴメンで済んだら警察なんていらねえんだよ！！ああ！？」
高「おいこら、こんな場所でどなんじゃねえよ、カス」
高雅は不良の肩を掴んだ。
不「ああ！？、何だてｍ〈ドガッ！！〉ふご！？」
高雅の不意打ちパンチが顔面に炸裂。
その勢いのまま、不良は倒れた。
高「お前の話なんて聞いてねえんだよ」
不「この・・・くそが！！」
不良はすぐに立ち上がり、高雅に向かって拳を振り上げた。
高「うっせえな。さっさと倒れろや！！」

ドガッ！！

高雅のクロスカウンターが不良の顎（あご）を破壊した。不良はまた倒れた。
高「おめえみたいな人間がこの世をダメにするんだ。だから・・・死ね！！」
高雅は足を振り上げた。その姿がアリアの何かを悟らせた。
ア「ダメーーーー！！」
アリアは咄嗟にブレスレットから人間の姿に変わり、高雅を抑えた。
周りの人たちが突然、人が現れたことにざわめく。
ア「ダメよコウガ！！。こんな所で殺したりしちゃいけない！！」

高「離せよ、アリア。場所なんて関係ない。邪魔するなら、お前もただじゃ済まさねえぞ」
高雅の目が戦いの時の目になっていた。
そこに、空気ブレイカーが現れた。
ロ「えー、神出鬼没の俺っち、通りまーす」
ア「ログナ!?、どうしてここに?」
突如ログナがどこからもなく現れた。
しかし、今は蓮田を連れて来てない。
ロ「俺っちはどこにでも現れるからねえ」
ア「どうでもいいから、コウガを止めて!!」
ロ「そっちから聞いておいてそんな言い方はひどいな。まあ、今の状況は大体飲み込んだ」
ログナはあたりを見回しながら言った。
そして、高雅と向かい合わせる。
高「お前も俺の邪魔をするのか?。知り合いでも容赦しねえぞ」
ロ「大丈夫さ。なんだって俺っちとコウガっちは友達だから容赦されるぜ」
不(・・・今だ!!)
ア「きゃあ!?」
高・ロ「なっ!?」
不良は高雅達の隙をついてアリアを人質に取った。
不「動くなよ!!、動いたらこの女のいのｔ〈ガシッ!!〉ひっ・・・」
高「おいおい、戦いは向いてねえんじゃねえのか?」
ロ「向いてないさ。ただ、喧嘩と戦いは違うからねえ」
今起こったことを解説すると、高雅が不良に向かって音速パンチを放ったが、それをログナが止めたということ。
不「あ・・・ああ・・・」
不良はあまりの出来事に腰が抜けて座り込んだ。
その隙に、アリアはすぐさま抜け出した。

ロ「俺っちだって男だぜ。なめんなよ」

ガシッ!!

ロ「不意打ちが好きだな、コウガっち」
ログナはもう片方の不意打ちパンチを防いだ。
高「へへ、ちょうど歯ごたえがある奴と戦いたかったもんだ」
高雅の目が再び戦いの目に変わっていった。
ロ「コウガっち・・・堕ちたんだ・・・」
その目を見て、ログナは呟いた。そして・・・
ロ「あっ!!!、あれ何だ!!!!」
高「ん!?」

ボゴッ!!

高「うが・・・」
高雅の一瞬の隙がログナの不意打ちパンチを高雅の腹を突いた。
ロ「ははははは、不意打ちパンチはコウガっちだけが使える技じゃないぜ・・・」
高「く・・そが・・・」
高雅はふらつき、その場に気絶した。
ア「すご・・・」
ログナの意外な強さを見て、アリアはふと言葉をこぼした。
ロ「アリアっち、手を貸してくれ。コウガっちを運ぶぞ」
ア「う・・・うん」
蓮「ログナ〜、遅いよ〜・・・ってあれ?、こうがにいちゃん?」
ロ「悪い、蓮田。コウガっちはそこで会って、突然寝ちゃったんだ」
ア「そんな無茶な話信じるの?」
蓮「そうなんだ」
ア「純粋だね・・・ほんと・・・」

アリアは蓮田の無邪気さに呆れながらも、どこか羨ましかった。
ロ「んじゃ、レッツゴー！！」
ログナ達はどこかとりあえず高雅の家に向かった。
不良や店員、客の注目を振り払いながら。

高雅の家。

ロ「ここがコウガっちの家かー」
ログナは落ち着かない猫のようにうろちょろ見回っていく。
ア「ちょっと、荒らしたりしないでよ」
蓮「こうがにいちゃんのベットふかふかだー」
蓮田は布団にダイブして、ボヨンボヨン跳ねていた。
ア「レンタ君、ベットから離れてね。コウガを寝かせるから」
蓮「はーい」
蓮田はベットからどき、アリアは高雅をベットに寝かせた。
ア「・・・・・・」
ロ「アリアっち、お前の静寂の力でコウガっちの心の闇を収めちまえよ」
ア「私・・・まだ力を使えない」
ロ「まだ使えなかったの！？。う～ん・・・どうしよっかねえ」
ア「ねえログナ、普通は力ってどうやって解放できるの？」
ロ「ん～、学校行ってりゃ勝手にできたからな。わかんねえ」
ア「・・・・・・・」
ロ「そう言えば、なんか人を思えとか思っていたような・・・あっ！！、思い出した！！」
ア「えっ！！、思い出すの早くない！？。それで、どうやるの！？」
ロ「大切な人を思うんだよ！！。子供の時は家族を思えば簡単にできたんだった」

ア「あ・・・セバスチャンに悪いことしたかな・・・」
大切な人を思う。子供のころのアリアにとって大切な人はセバスチャンだったはず。セバスチャンもその方法を知っていただろう。しかし、力が解放されなかったっと言うことはセバスチャンは大切な人ではないということだ。
ロ「さあアリアっちよ、大切な人を思いたまえ!!」
ア「えっと・・・私は大切な人なんて・・・」
蓮「アリアおねえちゃんはこうがにいちゃんが嫌いなの?」
ア「そんなわけない!!」
ロ「じゃあ思え。思いっきり思え。限りなく思え」
ア「う・・・うん」
アリアは目を閉じ、高雅を思い始めた。
ア(コウガ・・・)
これまで以上に強く思うが、何ら変化もない。
ア「・・・ダメ、何も感じない」
ロ「え~、どうすんの?。コウガっちが戦うたびにああなっちゃうぜ」
ア「そんなの・・・嫌だ・・・」
蓮「いっそ、戦わなければいいのにね」
ア「・・・それよ!!」
蓮・ロ「へっ!?」
ア「コウガが戦わなければいいのよ。ああ、何でそんな簡単なことに気づかなかったんだろ・・・自分が恥ずかしいよ」
アリアは自分の頭をむしゃくしゃに掻いていた。
ア「もうこれからコウガを戦わせない」
ロ「ちょっと待った。散々地獄や天国に喧嘩売って戦いを回避できるなんて無理だろ」
ア「じゃあ・・・私が一人で戦う」
ロ「ばっきゃろおおおおおお、力も解放してないのにどうやって戦うんだよ!?」

ア「大丈夫よ、腕を剣に変えるくらいできるし、動きはコウガの見てたから大体分かるよ」
？「じゃあ、早速見せてもらおう」
ア・ロ・蓮「！？」
突如聞こえた謎の声。そして奇妙な音が鳴り響く。
ロ「やっべえ、外から力を感じる・・・逃げるぞ！！」
ログナは高雅を担ぎ、アリア達は外へ駆けだした。その瞬間・・・

チュドーン！！

高雅の家が綺麗に吹き飛んだ。
蓮「こうがにいちゃんの家が・・・」
？「避けたか」
元高雅の家の上空には黒色の翼を生やした男性がいた。
ア「何者！？、地獄の使い！？」
デ「我の名はディバイト。貴様の言った通りの地獄の使いだ」
ロ「でぃ・・・ディバイト！？」
敵の名前を聞いた瞬間、ログナの顔色が青ざめた。
ロ「やべえぞアリアっち。ディバイトと言ったら・・・」
ア「私もそれくらい知ってる」
蓮「何何？何なの？」
デ「それでは、早々に決着をつけましょう」
ディバイトの翼は突如男性を包み込んだ。
ア「どうしよう・・・よりによってディバイトなんて・・・」
ロ「隙を見て逃げるぞ」
ア「う・・・うん」
この時のアリアは正直、隙が見つかるとは思っていなかった。
この後、アリア達は速攻で絶体絶命に陥ることを知らない。

ロ「お～い、ネタバレしちゃだめ・・・・うわっ！？・・・・」

# 記憶

ディバイトの攻撃によってアリア達はボロボロになっていた。
デ「ははは、もう終わりのようだな。呆気ない者だ。たった話が変わっている間にやられるとはな」
ア「うう・・・強すぎる」
ロ「俺っちもう無理」
蓮「痛いよ・・・うう・・・」
アリア達全員が地面に伏せ、瀕死の状態でいた。
デ「ところで、そこに転がって起きない小僧は何なんだ?」
ディバイトは男性を操り、高雅に指を指して言った。
デ「生意気だな。勝負中に寝ているとは。そんなに寝たいなら永遠に寝かしてやろう」
ア「!?、させない!!」
アリアはボロボロにも関わらず高雅の壁になった。
デ「貴様、我に勝てると思っているのか?。例えその契約者が起きたとしても無駄なことだ」
ア「コウガを殺させない。私はコウガの使いだから」
デ「ほう、使いの心としては悪くないがその行動が自殺ということを理解しているのか?」
ア「く・・・」
アリアはディバイトの言っていることが本当のことだということが悔しかった。
ア「理解してても、絶対にどかない」
デ「まあ、ラギュラバル家の奴を我は黙って見逃すような者ではない」
ア「どういうk〈ガシン〉きゃあ!?」
ディバイトはアリアに鎖で繋がれた首輪を投げ付けた。首輪はアリアの首に巻きついた。

デ「ラギュラバルと言えば、先代から伝わる力がある。どんなものかは知らんが我はそれが欲しいからな。貴様は生かしてやろう」
ア「何これ!?。外れない!?」
デ「先に言っておくがそれは我の破壊の力を込めている。下手に扱えば首が無くなるだろう」
ア「う・・・」
アリアは首輪から手を離した。その瞬間・・・

グシャッ!!

ロ「はが!?・・・」
デ「不意打ちとしては問題なかったが我にそのようなことは通用せん」
ログナが後ろから近づいていたのをディバイトは気づいていた。
そして、ディバイトは男性を操り、ログナの腹の心臓部に風穴を開けた。
ロ「ちっくしょ・・・やっぱ・・・ダメ・・か」
ア「ログナ!?・・・」
蓮「ロ・・・ログナーーーーーーーーー」
蓮田は涙交じりの叫び声をあげた。
しかし、その声は届かず、ログナは完全に息を引き取った。
デ「そこのガキ、黙れ。さもなくば殺すぞ」
ア「レンタ君。少し静かにして・・・お願い・・・」
ディバイトの言葉が本当だと思い、アリアも蓮田に静かにするよう促せる。
蓮「うぐ・・・ひぐ・・・うう・・・」
デ「いい子だな。さて・・・次は・・・」
そう言いながら、男の体を高雅の方へ向けさせる。
ア「!?、ダメ!!」
それを悟り、アリアは男性を抑え込んだ。

しかし、その力はディバイトにとって、あまりにも幼い。
デ「お前は生かしてやると言っているのだ。お前も少し黙っておけ」
すると、男性は鎖を握り・・・

バリリリ!!

ア「きゃあああああああああああ」
黒い稲妻を走らせた。
アリアは体が麻痺し、倒れた。
デ「さあ、待たせた小僧。永眠の時間だ」
男性が少しずつ高雅に近づく。
ア「や・・・やめ・・・て・・・」
すると、アリアにある記憶がよみがえった。

そこは天国のどこか。そして、アリアの運命が変わった瞬間の場所。
その時のアリアは泣いていた。そこにある人が現れた。
?「お嬢ちゃん、どうしたの?。なんで泣いてるの?」
ア「うるさい、話しかけないで」
?「何かあったの?」
ア「話しかけないでって言ったでしょ!!」
?「・・・あなたも似ているわね」
ア「何よ!!。しつこいわね」

バシッ!!

ア「っ!?」
突如、アリアをビンタした。
アリアは目を丸くして、再びある人の方を向く。

？「何甘えたこと言ってるの？。本当に一人でどうにかなると思っているの？」
ア「あ・・・あんた、ラギュラバル家に逆らってただで済むと・・・」
？「うるさいわね！！。子供が偉そうなこと言ってんじゃないわよ！！」
ア「ひっ・・・」
ある人の声は威圧があり、アリアは圧倒されていた。
？「人を拒んでやっていけると思っているの！？。いつまでもそうやって生意気な口を聞いていられるとでも思っているの！？」
ア「ちょ・・・くる・・・」
ある人はいつの間にかアリアの首を持ち上げていた。
？「あ・・・ごめんなさい。なんか、息子を怒ってるみたいで」
その人は我に返ると、すぐにアリアを下ろした。
ア「げほっ・・・ごほ・・・」
？「一つ教えてあげる。人は一人では生きられないのよ」
ア「そんなこと・・・嘘に決まっている。それに、私は人じゃない」
？「じゃあ、あなた一人でここに生まれてこれたの？」
ア「それは・・・」
？「少なからずでも、誰かのお陰で生まれてこれたはず。天使でも人でも一緒。一人だけで生きることなんて不可能よ。後、あなたは大切な人がいるでしょ？」
ア「それは・・・一応・・・」
？「私の息子はね、それを知らないの。教えてあげたいけど私にはもう無理なの」
ア「それは残念ね」
？「はぁ、一度でいいから現世に化けて出たいわ・・・ねえ、あなたは天使よね？」
ア「そうよ。あんたとは違うわ」
？「じゃあ、ダメもとで言うけど。息子の使いｎ「いや」即答ね」

ア「当たり前でしょ。人間なんてどうせろくなもんじゃないんだから」
？「じゃあ、ちょっと息子の生活を覗いて見て。そしたらまた聞くから」
ア「まあ、見るだけならいいけど、どうせ決意は変わらないわ。それと、どうやって見るのよ？」
？「はい、これ」
アリアは石のような物を渡された。
ア「何よこれ・・はっ！？」
その瞬間、アリアの頭の中に何かが映った。
ア「これは・・・何なの？・・・ひどい」
？「それが私の息子の姿。嫌いなものを壊す、一人で何でも抱え込むような性格よ」
この時のアリアはまるで未来の自分を見ているような気持ちだった。
ア「ダメ！！。そんなこと・・・はっ！？」
アリアは気づいた頃にはつい声に出していた。
？「どう、息子の使いになってくれる？」
ア「・・・何が狙いなの？」
？「狙いって言うことじゃないけど、息子の人生の見直しが狙いかしら」
ア「・・・いいわ。こっちの人間の方がやりがいがありそうだし」
？「そう、お願いするわ。あっそうそう、息子の名前は崎村高雅よ。高雅って呼んであげて」
ア「コウガ？、変な名前ね。まあ、過度な期待をしないでね」
？「後、恋愛感情を抱いちゃってもいいわよ」
ア「な！？・・・バカなことを言わないで！！」
？「ふふふ、あなたと高雅なら息が合いそうだけど」
ア「人間ごときに恋愛感情なんて抱かないわよ！！」
？「じゃあ、高雅の人生の見直しだけをお願いするわ」
ア「最初も言ったけど、過度な期待をしないでね」

？「はいはい、いってらっしゃい」
こうしてアリアは現世に行き、高雅とであった。

ア「だ・・・ダメ・・・」
刻一刻と高雅に近づく男性。
それは、高雅との別れのタイムリミット。
ア「嫌だ・・・失いたくない・・・」
最初は適当な気持ちも少しあった。何ならもっとダメにしてしまおうという気持ちもあった。
だけど、今は違う。
一人で生きられないことを教えてあげたい。もっと人生を見直せてあげたい。もっと友達を作って欲しい。
いや、今のアリアはそんなこと思っていない。思っていることはただ一つ・・・

もっと高雅と一緒にいたい。

ア「コウガ・・・コウガ・・・」
デ「何も話さずに消えてしまうとは残念なことだな。さらばだ」
男性が黒い剣をゆっくりと振り上げる。
デ「敵は簡単なうちに片づけた方がよいからな」
そして、振り下ろされる黒い剣。その時・・・
ア「コウガーーーーーーーーーーーーー」

当然、この状況を覆す何かが起こった。

高「おいおい、当然なんて言うなよ」
高雅が起きている時点でもう当然は確定条件だ。
高「あっそ。じゃあ、次回はお望み通りにしようかね」

# 無双

ガンッ！！

デ「何！？」

男性の攻撃はただ地面をえぐっただけだった。

ア「コウガ・・・」

高「おはよ～、アリア。んで、何でこうなってんだ？」

高雅はいつの間にかアリアの所にいた。

デ「馬鹿な！？、さっきまで気絶していたはず！？」

高「何だあいつ？。ところでお前、何をしたんだよ？。また、紐が出てるぞ」

ア「え！？・・・あっ」

気づけば、アリアの胸と高雅の胸からあの時の紐が出ていた。

さらに、高雅の契約の印が輝いている。

高「これってさ、なんかパワーアップってパターンじゃねえか？」

ア「正確には、力が解放されるからパワーアップとは違うけど・・・ってあれ！？、どうして解放するってわかるんだろう？」

デ「我はのんびり話を聞くような時間は与えんぞ」

ディバイトは男性を操り、既に剣を抜き、こちらを向いていた。

高「おっと失礼。あとちょっと待ってくれ」

デ「ふん、なら少しは命を時間を伸ばしてやろう」

高「ども、んじゃ・・・」

高雅は倒れているログナのもとに歩み寄った。

デ「ほう、仲間の死を嘆くか？」

そして、距離が無くなった瞬間・・・

ドゴッ！！

突如、高雅はログナを思いっきり蹴っ飛ばした。
ログナは綺麗な弧を描き、宙を舞って落ちた。
ア「ちょっと、何やってるのよ!?」
高「復讐だ。こいつが俺を気絶させたからな」
ア「それでも・・・」
高「はいはい、異論はそこまでにしろって。客人が待ってるんだ」
高雅は男性・・・いや、黒い剣を睨んだ。
デ「それでは始めよう」
高「アリア、行くぜ!!」
ア「でも、なんか変身ができないよ」
高「がく、せっかくテンション上げて行こうとしたのによ」
デ「その首輪は能力を封じｒ「ふん!!〈バリン〉」何!?」
高雅はすぐに鎖を引き千切った。
デ「素手で鎖を引き千切るだと!?」
ア「どれだけ強いのよ・・・」
高「いやー、なんかさっきから力が湧いてくるんだよ。やっぱ、これのせいか?」
高雅は紐に指を指しながら言った。
ア「それは、分からない。けど、何か感じる」
高「じゃあ、その感情を出しきれ。そしたら、きっとパワーアップだな」
ア「うん・・・」
アリアが目を閉じた。
すると、アリアから神々しいオーラがあふれ、残っていた首輪が破裂した。
デ「どういうことだ!?一体何が・・・」
ア「契約の力・・・発動!!」
アリアが青い光と化し、高雅を包みこむ。
デ「何だ!?、この神々しい力は!?」
高雅を包んだ光が徐々に消えて行く。

そして、光が完全に消えきった時・・・
デ「っ!?、いない!?。どこに!?」
高雅とアリアはその場にいなかった。
ディバイトが探していると・・・

ズババ!!

デ「何!?」
ディバイトが気づいた時には既に男性には傷があった。
高「おいおい、もう始まってるんだろ」
デ「く・・・ふふふ、少し油断したようだ」
ディバイトは少し焦ったがすぐに冷静さを取り戻した。
そして、高雅は柄が紐で繋がれた蒼い双剣を手にしていた。
高「へえ、結構いい切れ味だな。この紐も伸縮可能で使いやすいし、気にいったぜ」
ア「何だろう、この感じ?。どんどん力が込み上げてくる」
デ「その力、計らせてもらおう」
ディバイトが翼となり、男性を包み込む。
ア「あの攻撃は・・・」
デ「この攻撃はかわせまい」
すると、翼から槍のような触手が大量に現れる
デ「さあ、どうする?」
大量の触手が高雅に向かって攻撃してくる。
高「こりゃ、避けるの無理だな」
ア「そんなきっぱり言わないでよ」
高「ばーか。避けるのは無理だが・・・」

ガガガガ・・・

高「防ぐことはできるぜ」

高雅の目の前には水のように蒼い盾が触手を吸収していた。
ア「何でこんなことができるって分かるの!?」
高「不思議と全部、頭の中に流れ込んでくるんだ」
デ「ニヤリ」
ア「!?・・・コウガ!!、後ろ!!」
高「ん?・・・なっ!?」
高雅の後ろから余りの触手が来ていた。
高「やっべ、盾が間に合わねえ」

ガガガガ・・・

高「あれ!?」
いつの間にか盾が出来上がっていた。
もちろん、高雅がやった訳ではない。
ア「どうやら、私にもできるみたいね」
犯人はアリアだった。
高「それじゃあ、反撃するぜ。アリア、防御は任せる」
ア「こっちは任せて、思いっきり行ってらっしゃい」
高雅は残像を残すほど、マッハのスピードで敵に近づいた。
デ「速いだと!?」
高「くらえ!!」
高雅は両刀を構える。
デ「だが、反応できないわけではない」
ディバイトは防御をせず、瞬時に高雅の横に触手で攻撃する。
ア「させない!!」

ガガガガ・・・

しかし、アリアによって蒼い盾が触手を防ぐ。
デ「くっ」

高「甘かったな」
完全にフリーになった男性に剣を振った。

ザシュッ！！

そして、男性の両腕を断ち切った。
しかし、男性は苦しい表情にはなったが声を上げなかった。
デ「く・・・やるな」
高雅はいったん距離を取った。
殺気を放ったまま、ディバイトに聞いた。
高「さっきから気になったが、その男は何で喋らない？」
デ「我は前に一度だけ真の契約を発動したことがある。我の条件は・・・声を消すこと」
高「へー、そりゃ納得」
デ「次はこちらが聞こう。その力は何だ？。決して静寂の力だけではないな」
高「う～ん、よく分かんねえな」
デ「我の鎖を破壊するなら同じ破壊の力、先ほどの速さを出すなら速度の力。まるで何もかもあるみたいだな」
高「そんじゃ、何でもできるし、俺最強からこの力は“無双”とでも名づけるか」
デ「無双、か・・・ふっ、面白い」
高「それじゃ、お互いお話が済んだところで・・・」
デ「始めるとするか・・・」
高雅のマッハスピードとディバイトの触手が同時に動き始めた。
高雅は触手を斬り伏せ、瞬間的に男性に近づいた。
高「くらえ！！」
デ「同じ攻撃をくらう程、我は甘くない」

ズガガガガ！！

大量の触手が地面から現れ、高雅を貫いた。
デ「ははは、まだ未熟者だな」
高「お前がな！！」
デ「何！？」

ザシュッ！！

デ「ぐわあああああああああ」
本物の高雅は既に後ろに回り込んでおり、黒い両翼を断ち切った。
デ「く・・・感触はあったのに・・・まさか、創造の力で分身を作ったか！？。いつの間に！？」
高「まだまだ。おらおらおらおらおら・・・」

ズバズバズバズバ・・・

高雅は攻撃を止めずに男性に乱舞を浴びさせる。
デ「く・・・ここは、引くか」
高「逃がすか！！・・・ってわ！？」
突如吹き荒れる突風に高雅は飛ばされた。
高「く・・・ちぇ、逃げ足が速いな」
もう一度見た時は男性とディバイトの影も形もなかった。
高「ま、いいか。まだやることはある」
そう言うと、高雅はログナに近づいた。
ア「・・・やってみるの？」
高「ああ。なんか感じるからな。行くぜ」
高雅はログナの風穴に手を置いた。
そして・・・
高「再生の力・・・はあ！！」
ロ「おや、何で俺っち寝てたんだ？」

高・ア「復活はやっ！？」
ログナの傷が無くなっており、意識も戻っていた。
蓮「ログナーーーーーーーーー」
蓮田が泣きながら飛びついた。
ログナはそれを受け止め、頭を撫でてやった。
ロ「おいおい、抱きつくなよ。ただ寝てただけ・・・あっ、俺っち死んだはずじゃ」
高「気づいたか、バカ」
ロ「およよ、いつの間に起きちゃったの？」
高「お前が死んでる間だ。お礼ぐらい言って欲しいな。お前を復活してやったんだから」
ロ「ありがとう、コウガっち。やっぱコウガっちはいい奴だな」
高「な！？、お・・・お前の為じゃない。蓮田の為だ」
ア「ふふ、ツンデレね、コウガ」
高「うるせえええええええええ」
ロ「ははは。お礼に家ぐらい再生してやるよ」
高「んじゃ、頼むわ。もう疲れた」
そう言うと、ログナは高雅の家をすぐに再生させた。
高「じゃあな、蓮田、ログナ」
蓮「ばいばい」
ロ「ばああ～い」

別れを告げた高雅はさっさと家に入り、ベットに倒れこんだ。
高「はあ、疲れた」
ア「お疲れ様。それよりすごいね。あのディバイトに圧勝だよ」
高「あほ。あいつは全然本気じゃない」
ア「え！？、そうなの！？」
高「言ってただろ。計らせてもらうって。完全に様子見の動きだっ

た。まあ、その間にぶっ倒そうとしたんだけどな」
ア「そうだったんだ・・・ねえ・・・コウガ」
高「ん、何だ？」
すると、アリアの様子が変わり、少し恥ずかしそうに聞いてきた。
ア「もし・・・もしだけどね・・・恋愛的意味で人間以外を好きになったりする？」
高「・・・変な質問だな。そうだな・・・わっかんね。その時による」
ア「・・・・・」
高「まあ、人間なんかより他の奴の方が俺はいいな」
ア「え・・・だ・・ダメだよ。ちゃんと人間を好きにならなきゃ」
高「へいへい、わかりましたよ～」
ア「何よ、その曖昧な返事は？」

ぐ～

不意に高雅のお腹が鳴った。
高「腹減った～」
ア「そうえば、スーパーで何も買ってないよね？」
高「ダメ・・・俺・・死ぬ」
ア「ちょっと!?、空腹で死なないでよ!?」
高「あ～、なんか天使達がこっちにおいでってしてるのが見える・・・」
ア「きゃー。コウガ!!、しっかりしてー!!」
アリアの心配する声が夜空に鳴り響いた。

# タライ万歳

現在、学校の中。
そして、いつもの数学の授業。
変わっていることは、あの戦い以来、アリアの変身するものが全て蒼色になっている。
つまり、今付けているブレスレットも蒼色だ。
・・・へっ?、青と蒼の違い?。そんなの気持ちの問題だ!!

高（なあ、アリア。ディバイトって何もんだ?。お前のセリフからしてなんかすごい奴なのか?）
ア（まあ、かなり嫌な噂が挙がってるわ。何でも、地獄の人間をとにかく殺し続けた残忍な奴だって）
高（へー。まあ、想像したらあの触手で皆、串刺しにしてそうだな）
ア（それを一人でやるから“残虐の黒狼（こくろう）”と言われていたわ。また戦うかもしれないし、気をつけないと）
高（まあ、何度かかってこようが負けねえよ）
先「崎村君!!、聞いていますか!!」
高「うおっ!?、ビビった!!」
先「何ぼっとしているのですか!?、このm「a＝3、b＝－1」正解・・・」
高「もっと、難しいのじゃないと手応え無いぜ」
先「く・・・生意気を・・・」
いつも、先生の負け。そこを割り込むように・・・

ガララッ

扉が開いた。
？「失礼します」

それは別のクラスの生徒のようだった。
先「あなたは・・・生徒会長の姫花凛(ひめかりん)さん。どうしてここに?、今は授業中ですよ」
凛「すみません、崎村さんはいますか?」
高「ん?、俺に用か?」
高雅が声をかけた瞬間、ずいずい近づいて来て・・・
凛「進路指導室に来てもらいます」
高雅の腕を掴み、連行した。
高「な!?、ちょ・・・離せよ!!」
高雅は内心サボれると思い、振り払おうとするふりをしながら連行された。

ここは進路指導室。
ここでは、爪を剥がすために使われる部屋。
高「こらこら、ちゃんと進路の相談も乗ってくれるぞ。大体、そんだけの部屋なわけねえだろ!!」
凛「何を言っているのですか?」
高「何でも。ところで何の用だ?」
凛「用も何も、あなたの行動は目に余りますわ!!」
すると、凛はバンッ!!とある紙を机に叩きつけた。
高「何何・・・おー、これは俺の出席日数の表じゃん」
凛「その表を見て何か思いませんか?」
高「・・・別に、ちゃんと出席する日数は足りてるぞ」
凛「ただ足りていればいいってものじゃありません!!。サボりも多いし、欠席はもう10回以上もしていますわ」
高「これだけのために授業をサボったのかよ、お前・・・」
凛「これだけとは何ですか!?。このような行為を見過ごすわけに

はいきませんのですわ」
高「大丈夫、下には下がいるから」
凛「下を見てはいけません！！。常に上を見ていなくてはなりませんのよ！！。大体、――――――」
高（はーっ、始まったよ、説教。）
ア（ほら、ちゃんと聞かなきゃ。元々、コウガが悪いんだから）
高（はぁー、この状況を覆すイベントでも起きねえかな～）
でしたら、叶えて差し上げましょう。
高「やな予感・・・」

ガララッ・・・バン！！

急に、思いっきり扉が開かれた。
扉は勢い余ってストッパーにぶつかった。
そこには、顔をヘルメットで隠した見る限り怪しい人が入ってきた。
凛「ちょっと！！、ノックもしないで入ってくるとは無礼にも程があｒ〈バンッ！！〉きゃあ！？」
強「動くな！！、俺は強盗だ！！。お前らは人質になってもらう。大人しくしろ！！」
強盗は黙らせるように床に銃を撃った。
高「何で、学校に強盗が・・・こりゃ、とんだイベントだな」

ピンポンパンポン

放「ただいま、学校に強盗が入りました。生徒は教室で待機していｔ「おせーよ！！」」
高雅は放送にツッコミを入れた。
強「とりあえず、あんたらを縄で縛らせてもらう」
凛「待ちなさい。人質に取るなら私だけにしなさい！！」
強「ああ！？、何調子に乗ってんだよ！！」

高「おい会長さん。あんたバカだろ。普通、人質は二人いた方がいいだろうが。なのに易々と逃がすわけねえだろ」
凛「それでも、私は生徒会長よ。生徒を守る義務があるわ」
高「先生じゃあるまいし、大人しくいてねえと撃たれるぞ」
強「いいから、さっさとこの縄に巻かれろ!!」
強盗は高雅と凛を背中合わせにして一緒に巻こうとした。すると高雅が口を開いた。
高「なあ、二人一緒は危険だろ。普通、個人個人にイスに巻きつけるもんだと思う」
凛「ちょっと、強盗にアドバイスなんて何考えていますの!?」
強「はん、いいこと言って生かしてもらいだけだろう。だが、その案は採用してやろう」
高雅と凛は別々のイスに座り、強盗に縄で巻きつけられた。
ア(ねえ、何で強盗にアドバイスなんかしたのよ?)
高(あのままだと人間と背中合わせになるからな)
ア(それだけの為に・・・)
高(まあ、お前にも後で働いてもらうから)
ア(?、??、???)
高(懐かしいリアクションだな。どんなリアクションか全然分かりにくいけど)
高雅が作戦を練っている最中に凛が心配したのか話しかけた。
凛「崎村さん、ちゃんと私が守りますから安心してくださいね」
高「んじゃ、さっさとどうにかしろ」
凛「わかっていますわ!!。少しは落ち着きなさい!!」
強「おいこら!!、静かにしろや!!」
凛「ひっ・・・」
凛は強盗に脅かされていた。
すると、強盗はいやらしい目つきになった。
強「・・・それにしてもお前、かわいいな」
凛「何よ・・・ちょっと、変な目で見ないでよ」

強「へへへ、少しぐらいいいじゃねえか・・・」
凛「嫌・・・来ないで・・・ちょっと、そこはダメ!!」

ドガッ!!

突如、強盗の後頭部にイスが当たった。
強「ぐおっ!?・・・誰だゴラ!!」
高「んん～、イスに座っておくのもきついな」
高雅はのんびり背伸びをしていた。
強「なっ!?、お前!!、どうやって抜け出した!?」
高「こうやってな、ここをこうして、こうやったわけ」
強「分かるか!!、ふざけやがって!!」
強盗は高雅に銃を向けた。
高「キャー、コロサレルー」
強「とことんふざけやがって・・・死んでしまえ!!」
高「ヒャー、モウダメダー」

ガンッ!!

強「ふげっ!?」
強盗の頭の上には蒼いタライがあった。
強盗はのびた。これが後のタライ最強伝説である。
高「ヤッター、ゴウトウヲヤッツケター。ジャ、オレハタライトゴウトウヲカタズケルカラ」
高雅は決まっていた言葉を話し、進路指導室を出た。
凛「・・・一体・・・何ですの?」
凛は状況を一ミリも理解してなかった。

高雅はいつもの人気のない木陰でアリアを実体化させて弁当を食べていた。
ア「さすが、コウガ。考えてるね」
高「んえ、何が？」
ア「だって、別々に座るのは敵の目の隙をついて抜け出すためでしょ」
高「ピンポーン。まあ、正解率９０％の問題だし、正解して当然か」
ア「少しは褒めてよ・・・」
高「こんぐらい、あたりまえだ」
高雅は弁当を食べていると目の前からある人がやって来た。
凛「見つけましたわ」
突如、凛がやってきた。アリアは反射的に木の後ろに隠れた。
高「んあ、なんでお前がいるんだ」
凛「えと・・別に感謝なんかしてませんけど・・・あの・・言わないと生徒会長の恥ですから・・・その・・・」
高「さっさと帰れ、ツンデレ」
ア（人のこと言えないよね・・・）
凛「何ですって！！。人が感謝していると言うのに・・・」
高「さっき、感謝してないって言ったんじゃなかったっけ？」
凛「く・・・もう知らないわ！！」
凛はプンプンと怒りながら帰って行った。
高「ふぁ～、ちょっと寝ようかね」
ア「もうすぐ、チャイムが鳴るわよ」
高「関係ねえよ・・・Ｚｚｚ・・・」
ア「その速さに、もうツッコまないよ」
アリアはあきらめて空を見上げた。
ア「はあ・・・今日も蒼いわね・・・」
雲ひとつない晴天が木陰の隙間からアリアと高雅を照らしていた。

## テスト勝負　不正行為あり

今日の学校は空気が違った。
なぜなら、中間テストの時間だから。
高「・・・・・・」
高雅は黙って黙々と答案を埋めていった。
ア（どうなの、ちゃんと解けてる？）
高（おい、見たら反則負けだからな）
ア（大丈夫よ。いくら何でもありキャラでも透視はできないから）
実はアリア（ブレスレット）は今カバンの中でタオルでぐるぐる巻きになっている。
その訳は昨日にさかのぼる。

高「はぁ～、テストかー。簡単でつまんねえな～」
ア「それを聞いたら何人がコウガに殺意を抱くかな？」
高「そしたら全員まとめてかかってきやがれってんだ。大体、２年生最初のテストなんて基礎ばっかしだからな。それに、ほとんどの先生が甘いし、ちゃんと基礎さえおさえておけば高得点は取れる」
ア「じゃあさ、私と勝負しようよ」
高「はぁ！？。お前は学校の勉強わかるのかよ？」
ア「ほとんどがセバスチャンに教わったことばっかしだから大丈夫。だから勝負しよ？」
高「ふ～ん。まあ、いいぜ。しかし、勝負と言っちゃ何か賭けをしねえとな」
ア「賭け？」
高「う～ん・・・じゃ、俺が勝ったら１週間パシリな」
ア「じゃあ、私が勝ったら友達１００人作ってね」

高「なっ！？・・・わかったよ。俺が勝てばいいだけだし」
ア「ふふふ、現世の知識なんて簡単よ」
高「お前も殺されるような台詞を吐いたな。じゃあ、帰った後に問題用紙を貸すからそれを解く。学校ではお前にタオルでも巻くからカンニングはできんぜ。文句ないな？」
ア「いいよ、その話乗った」
高「へへ、テストにやりがいが出てきたぜ」
こんな約束をしていた昨日の夜だった。

キーンコーンカーンコーン

先「はい。それでは、後ろの人は答案を集めてきてください」
全てのテストが終了した。
ア（どうだった、コウガ？）
高（全部９０以上は確実。凡ミスなければ１００）
ア（うぐぐ・・・そんなに自信あるの？）
高（言ったろ。基礎さえおさえれば高得点だって。パシリ生活を覚悟するんだな）
ア（私をなめないでよ。コウガだって、もう友達１００人作った方がいいんじゃない？）
高（へっ、強がりやがって）
A「さーーーきーーーむーーーらーーー、どうだった？」
高「黙れ落ちこぼれ。テメーに話すことなんてねえよ」
先「こら、A君。まだ挨拶をしていませんよ」
高「もうAについてツッコまなくてもいいよな、読者の皆？」
先「崎村君も静かに。それでは、総務号令」
総「きりー（略）」
全「さようなら」

高雅は足早に教室を出ようとした。それを邪魔するかのように扉の前にある人物が立っていた。
凛「崎村さん、あなたに勝負を挑みますわ」
高「何だ、決闘でもするのか？。ボコボコにするぞ」
凛「違いますわ！！。テストですわ、テスト！！」
高「大事なことだから二回言ったな」
凛「勝負なので賭けもありますわ。私が勝ったらあなたは今日から無遅刻無欠席無早退ですわ」
高「俺が勝ったら二度と俺に関わるな」
凛「むむ・・・分かりましたわ。そんなの勝てばいいだけですわ」
高「じゃあ、そこをどけ。俺は帰るんだ」（なんか、昨日の俺が見えたな）
凛「精々、首を洗って待つことですわ。をーっほっほっほ・・・」
凛の高笑いが廊下に響いた。
凛は視線を気にせず、堂々と帰って行った。
高「さーて、帰るか」
高雅は何事もなかったように帰ろうとした時・・・
A「高雅ーーーー、何故お前があの美女会長に勝負をいどmヘザクッ！！〉・・・」
生徒Aの数ミリ横にはカッターが刺さっていた。
高「言ったよね、A君。今度言ったらただじゃ済まさないって・・・」
高雅は声を低くして恐ろしいオーラを出していた。
ついでに、キャラがあの6月のはぅ～のヤンデレである。
A「タンマ！！、カッターをどこから取り出した！？。それにキャラが変わってるぞ」
高「短い間だったけど・・・サヨウナラ」
高雅はどこからもなく鉈を取り出した。
A「怖いって！！マジ怖いって！！。目がヤバいって！！。てか、どっからそれ出した！？」

そして、思いっきり振り下ろそうとしたが、突然、高雅の気が静まっていった。
高「!?・・・気が変わった。あばよ」
A「え!?」
高雅は生徒Aをそのままにして急に帰った。
A「・・・死ぬかと思った・・・」

帰宅後、高雅は早速アリアにテストを解かせている。
高「どうだアリア。俺に勝てる自信はあるか?」
高雅は問題を解いているアリアの部屋に入り、現在の状況を聞いた。
ア「当然よ。現世のテストなんて簡単よ」
高「ふーん。とりあえず、差し入れ」
高雅は机の空いてる所にお茶を置いた。
ア「あら、気がきくね」
高「どうせ結果が出ればパシリ放題だからな」
ア「ふふ、ツンデレね」
高「うるせー。俺はリビングでゲームでもしてるからな。時間になったらまた来るから」
ア「分かった」
高「そうえば、お前あの時邪魔しただろ?」
ア「何の話?」
高「とぼけんな。生徒Aの命を散らそうとした時、俺に静寂の力を流しこんだだろ?。バレバレなんだよ」
ア「あははは、まあね。だってA君が死にそうだったもん」
高「ふん、まあいいや。精々頑張るんだな」
高雅は扉を閉め、リビングへ向かった。
ア「さあ、コウガの為にも頑張らなくちゃ・・・もっとも、こっちには絶対勝つ方法があるからね。ふふふ・・・」

アリアは一人、不気味に笑っていた。

1週間後

遂にテストの結果が帰ってきた。
ア（どう、総合点は？）
高（お互い一緒に見せるんだ。それまで待ってろ）
ア（えー、ケチ）
高（何とでも言え）
A「崎村ーーーーー、どうだっｔ〈ピラッ〉・・・ゴフッ!!」
生徒Aは高雅の結果表を見た瞬間、吐血して倒れた。
一方、こちらは女子の方。
夢「ねえ、龍子。どうだった？」
龍「あっ・・・ちょっと、夢ちゃん・・・」
夢は強引に龍子の結果表を奪ったその瞬間・・・
夢「・・・ゴフッ!!」
またもや吐血者が一名。
龍「ゆ・・・夢ちゃん!?。大丈夫!?」
夢「あ・・・あんたがこんなにも遠い存在とは思わなかった・・・がく」
龍「ええ!?・・・夢ちゃん、しっかり!!」

ガララバンッ!!

突如、乱暴に扉が開かれる。
凛「崎村さん!!、結果はどうでしたの!?」
現れたのは凛だった。
しかも、今は授業中である。

高「お前、いくら生徒会長だからって授業をすっぽかすなよ。お前もサボりじゃねえか」
凛「それとこれとは別ですわ。早くその結果表を渡しなさい」
高「お前も見せろ」
高雅と凛はお互いに結果表を渡しあった。
ちなみに、凛の結果は・・・

現文／古　９０点／９２点　数？／Ｂ　９２点／８９点　現社　８７点
化　８５点　生物　９５点　英語　８８点

総合点　７１８点　学年順位　３位

高「へー、結構やるじゃん」
高雅が凛の結果を見終わって自分の結果表を返してもらおうとした。
しかし、凛は高雅の結果表をじっと見つめたまま動いていなかった。
高「ん・・・こいつ、固まってやがる」
取りあえず、高雅は自分の結果表を抜き取り、固まった凛に結果表を返した。
高「邪魔だな～。・・・ここにいたら鬱陶しいな。なぁ、これどうする？」
高雅は固まった凛に指を指しながらクラスの皆に聞いた。
しかし、誰も答えず、ただ固まっている。
先「あの～、今はあくまでも授業中ですよ・・・」
高「これって燃えるゴミか？」
全「捨てるんかいΣ！！」
高「ははは、冗談だよ。冗談」
Ａ「そのゴミ袋は何だ？」
高「・・・あるぇー、何だろうな？」
Ａ「めっちゃ白々しいぞ！！」

先「授業中・・・」
高「んじゃ、凛(これ)を燃やしてくる」
全「やめろーーーー」

キーンコーンカーンコーン

先「・・・総務号令」
総「（略）」
先「はぁ～、今日は空気だったわ」
先生は渋々教室を出た。
高「さーて、帰るか」
ア（早く帰って結果を見せてよ）
高（やたら自信あるんだな）
ア（ふふふふ、コウガの泣く姿が目に浮かぶ・・・）
高（あっそ、返り討ちにしてやるよ）
高雅は少しウキウキ気分で家に帰った。

家に帰りついた高雅は颯爽(さっそう)と部屋に入り、アリアに結果表を渡した。
高「ほらよ、お楽しみの物だ」
ア「どうも。後これ、私の点数と総合点が書いてあるから」
高「ん、どれどれ」

高雅
現社　９７点・化　９６点
他１００点

総合点　７９３点　学年順位　２位

アリア
全部１００点

総合点　８００点

高「異議あり！！！！！！」
ア「はい、サキムラ弁護人」
高「一体、なんのチートを使った！？」
ア「何も使ってないよ。だから言ったじゃない。現世のテストは簡単だって」
高「お前の答案用紙を見せろ！！」
ア「そう来るかと思って、はい」
アリアは高雅に自分の答案用紙を見せた。
高「消しゴムで消した後もない」
ア「ふふふ、ちゃんと友達を１００人作って来てね」
高雅があきらめかけた時、あることに気づいた。
高「あっ・・・ふふふ。アリア、お前の負けだ」
ア「な・・・何を言っているのよ！？。ショックで頭おかしくなった！？」
高「ばーか、答案に名前が無いんだよ」
ア「そ・・・そんなバカな！？」
アリアは自分の答案用紙を見た。確かに、どの答案用紙にも名前が一つもない。
高「名前が無い奴は０点。つまりお前の負けだ！！」
ア「そ・・・そんな～」
アリアはその場にひざまついた。
高「１週間パシリ・・・と言いたいが、実質負けてるから賭けは無しにしてやるよ」
ア「へ、本当！？」
高「男に二言はねえよ」

ア「ふふ、ありがとう」
高「別に、お互い負けてる所があるだけだからな」
ア「ツンデレね。最近は少しずつデレてきてるけど」
高「うるせーなー、俺は飯でも作るから適当にくつろいでろ」
高雅は顔が見えないようにして部屋を出ていった。
とはいっても、アリアはその表情が分かっていたけど。

☆おまけ☆

セ「それにしても、アリア様の聞いてくることは奇妙でした」
作「どうしました、セバスチャン？」
セ「何でも、ゲンジモノガタリの作者は誰かとか、ＮａＣｌは何だとか」
作「それが、アリアの必勝法ですから」
セ「？、アリア様の必勝法？」
作「話しはここまでです。それでは、まだ気にしていると思われている人物がいますので」
これが、アリアの必勝法でした。

作「皆さんお待ちかね、次は龍子の番です。夢が血を吐いて倒れる点数とは・・・」

現文　９８点
後１００点

総合点　７９８点　学年順位　１位

作「私が書いたものですが・・・ごふっ！！」

龍子、いと強し。

## 杉野家

もうすぐ六月になる時期。
だからと言って何もない。
本当に何もない。
そして今日は日曜日。
高雅はアリア（実体化）と散歩をしていた。
高「こうやって散歩するのも悪くねえな」
ア「そうだね。ほんと、平和が一番ね」
高「んな、バトルもんが言うセリフ言うなよ。ここはあくまで非日常だ」
ア「そんなの、変わらないわよ」
何気ない、平和な会話。
それを壊すかのようにある気合いの声が聞こえた。
？「どりゃあああああああああああ」
ア「ん？、何かしら、この声？」
ふと足を止めて周りを見渡すと、一際（ひときわ）大きい同情が目に入った。
高「ここからだな。何何・・・龍門道場っていうのか」
看板を見ていた高雅に不運なことが・・・

バギッ！！

ア「コウガ！！、危ない！！」
高「へ！？・・・〈ドガッ！！〉うげ！？」
突如、扉を破壊してぶっ飛んで来た人に高雅はぶつかった。
ア「コウガ、大丈夫！？」
他「はっ！？、すみません！！。大丈夫ですか！？」
飛んできた人は何事もなかったが、高雅はうちどころが悪く、気絶していた。

すると、中から大将らしき人物が出てきた。
大「しまった、人がいたか。とりあえず介抱しよう」
大将はすぐに高雅を抱えた。
ア「ちょっと、高雅をどうする気なの？」
大「おっと、彼女とデート中だったか。安心しろ、介抱するだけだ。お譲ちゃんもおいで」
ア「断ってもそのつもりよ」
アリアは大将の後をついて行き、道場へ入った。

高「・・・んぐ・・・ここは？」
ア「コウガ！！、気がついた！？」
高「アリア・・・そうえば、俺って気絶して・・・」
大「気がついたか」
高「お前・・・誰だ？」
大「私は杉野大輔（すぎのだいすけ）だ。主らのデートの邪魔をして申し訳ない」
高「いや、ただの散歩だから。それにしても・・・」
高雅は道場や練習風景を見まわした。
そして、ふと疑問が浮かび上がった。
高「剣道で人がぶっ飛んでくるって・・・」
実はこの道場は剣道の道場だった。
大「がははは、わしの剣道は一味違うからな」
高「それに、賞状やトロフィーが一つも見当たらないけど」
大「そんな見せかけな物など、この道場に要らんからな」
高「ふ～ん。かっこいいこと言うけど、実は全然だったり」
少し鹹かった言葉を言うと、大輔に火を灯してしまった。
大「ならば、わしと手合わせするか・・・ほれ！！」
大輔は剛速球並みの速さで高雅に竹刀を投げた。
高「よっと、いいぜ」

高雅はそれをものともせずに取る。
大「中々やるな。さあ来い」
高「俺は型なんて知らねえぞ」
大「気にすることはない。この道場に型など要らん」
高「それって道場として大丈夫か・・・」
ア「コウガー、頑張れー」
アリアが無邪気に応援する。
高雅はそれを聞きながら独自の構えを取った。
大「ほう、竹刀を逆手で持つとは不思議だな」
高「これは、俺の様子見の構えだ」
大「舐められたものだな・・・どりゃあああああああああああ」
高「!?」
大輔がライオンのように恐ろし気迫を出しながら突進した。
高雅はそれに少しだけひるんだ。
高「中々の威圧感だ。だけどな～・・・勿体ねえ」
高雅は前ステップをした。
ただそれだけで・・・

ドゴッ!!

大「おぶ!?」
大輔の腹に竹刀の柄の部分が食い込んだ。
高「姿勢をもっと低くしろよ。あと、眼だけでやることがまるわかりだ」
大「み・・・見事」
そして、大輔はその場に倒れた。
周りの教え子たちはあんぐりと口を開けていた。
他「あいつ、大将を倒したぞ」
他「何という強さだ。裏大将をも超えているんじゃねえか」
裏大将。

その言葉が高雅の心を動かした。
高「裏大将と戦わせてくれ」
他「い・・・いくらなんでもそれは・・・」
大「いや、ぜひ戦ってくれ」
高「起きるのはや!?」
大「今すぐ呼んでくる。待っておれ」
他「ちょ・・大将!!」
教え子の言葉を無視して大輔は外へ駆け出した。
他「行っちゃった。裏大将がどこにいるか分からずに・・・」

5分経過。

高雅はアリアと教え子たちの練習を見ていた。
高「・・・暇だな・・・」
そう呟き、欠伸を一つする。
その退屈を潰すかのようにある客人がやって来た。
敵1「ちわーっす。道場破りで~す。看板もらいにきました~」
敵2「死にたい人はどうぞこちらへ~」
道場破りが扉をぶち壊してやって来た。
他「あ・・・あいつは今道場の中では噂の道場破り」
高「ほー、あれが道場破りねえ」
他「大将がいない時に・・・くそっ」
敵1「おや、女もいるじゃねえか」
敵2「ヒュー、かわいいな」
ア「へ?、私?」
道場潰し共がアリアに近づいて来る。
他「させないぞ」
それを妨げるように教え子が間に入ってきた。
敵1「邪魔だ!!」

バシッ！！

他「ぐわ！！」

竹刀で思いっきりぶっ飛ばされ、壁に打ちつけられ気絶した。

敵１「お譲ちゃん、俺達と来いよ」

道場破りの一人がアリアに手を伸ばしながら言った。

高「アリア、行きたいか？」

ア「嫌に決まってるでしょ。そんな愚問しないでよ」

敵１「俺達と一緒の方が楽ｓ〈バシッ！！〉ふが！？・・・」

不意に食らった一撃で一人はぶっ飛ばされ、アリアの視界から消えた。

高雅が既に構えており、瞬速の一太刀が道場破りを一人倒したのだ。

高「嫌だって言ってんだから素直に帰れ。フラレマン」

挑発染みた口調で言うと、簡単に挑発に掛かった。

敵２「テメー、よくもー」

高「運が悪かったな。俺が居なければ良かったのにな。最も、あの大将がいたら別だけど」

敵２「調子に乗るなあああああ」

道場破りが高雅に竹刀を連続で振り回している。

高雅はそれを紙一重で軽々避ける。

高「ほう、剣道じゃ俺の負けだな。だが、戦いは俺の勝ちだな」

敵２「ふざけてんじゃねえええええ」

道場破りが気合いの一撃を叩きこもうとしたが、それは空を斬っただけだった。

敵２「何！？、どこへ！？」

高「後ろだ、後ろ」

敵２「この野郎・・・あれ！？」

道場破りは振り向いたが、そこに高雅はいなかった。

高「素直に振り向くとは、情けない」

高雅はいつの間にか道場破りの後ろに回り込んでいた。

そして・・・

バシッ!!

敵2「ふぎゃ!?・・・」

高雅の後頭部への一太刀がもう一人の道場破りを倒した。

高「甘すぎるっつーの」

大「見事だあああああああああ」

いつの間にか帰ってきていた大輔がでかい声を上げていた。

高「わっ!?、ビビるじゃねえか」

さすがの高雅もその声に驚いた。

大「ははははは、すまない。それより、裏大将を連れてきたぞ」

高「見つけられたんだ・・・」

よく見ると、大輔の後ろには少し小柄な・・・女がいた。

しかも、それはよく知っている人物だった。

高「あいつって・・・杉野!?」

ア「あっ、リュウコちゃん」

龍「この声・・・崎村君とアリアさん!?」

大輔の影から現れたのは龍子だった。

高「まさか・・・裏大将ってお前!?」

龍「ち・・・違う。私は・・・剣道知らない」

高「じゃあ、誰・・・はっ!?」

高雅は瞬時に振り向き、竹刀を構えた。

?「さすが、大将を倒すだけはあるね。あたしの微かな殺気に気づくとは」

そこには、竹刀を持って悠々と構えている人がいた。

しかも、相手は女だ。

高「お前が裏大将か?」

虎「いかにも、あたしは杉野虎子(すぎのとらこ)。いざ参る」

虎子と名乗る人は高速で高雅に近づいた。

その速さは大将よりも早く、威圧があり、隙がなかった。
高「やっぱ、大将とは違うな。こりゃ、骨が折れそうだ」
高雅は無闇に動くよりも、あえて何もせず、ただ待った。
虎「ほう、待ち型かい。あたしは攻め型だからお互い相性がいいねえ。おらおらおら・・・」
虎子の猛攻を高雅は全て流す。
しかし、高雅の顔はどこか引きつっていた。
虎「やるね、あたしの猛攻をこんなに綺麗に流すのはあんただけだよ」
高「そりゃ、どうも。だけど、流すので精一杯だ」
高雅は虎子がミスるのをただ待ち続けた。
高（やべーな、ミスる気配がない。こりゃ、持久戦になりそうだ）
高雅は自分との闘いに備える。
しかし、すぐにチャンス到来した。
虎「はぁ・・・はぁあああっくっしゅ」
突如虎子がくしゃみをした。
その隙を逃す訳がない。
高「もらい！！」
虎「あ！？」

バシッ！！

高雅の払い斬りが虎子の横腹をとらえた。
虎「・・・ふっ、あたしの負けね。あんたは強すぎるねえ」
高「あれはお互いミスるまで続いていたに違いない。俺がミスったら俺の負けだった」
虎「気にいった。あんた、名前は何だい？」
高「崎村高雅だ。俺も、こんなに強い人間に会ったのは初めてだ」
高雅と虎子はお互いに握手した。
大「うおおおおおおおおおお、俺はうれしいいいいいいいい

いいいいぞおおおおおお」
龍「崎村君・・・強いね」
ア「さすが、コウガね」
大「ぜひとも、わしの娘を渡したいものだ」
龍「お・・・お父さん・・・／／／」
高「そう言うのは適当に言うもんじゃない。さてと、そろそろ帰るか」
ア「それもそうね。長居しちゃったし」
龍「あっ・・・私、送るね」
高「別に要らねえよ」
ア「別にいいじゃない。友達なんだし」
高「・・・わーったよ。好きにしろ」
龍「それじゃあお父さん、お母さん。崎村君とアリアさんを送ってくるね」
高雅とアリアと龍子は道場を出た。

帰り道。
龍子はアリアと会話していた。
ア「ねえ、リュウコちゃんはコウガのこと好き?」
龍「へ!?・・・ええ!?・・・え!?／／／」
突然の衝撃の質問に龍子は頭が爆発しそうなほど真っ赤になっていた。
ちなみに高雅は先に進んでおり、聞いてない。
龍「ど・・・どうしてそんなことを!?」
ア「だってさ、友達でしょ。友達なら好きじゃないの?」
龍「あ・・・」
アリアの質問の意図を知った龍子は少し落ち着いた。

龍「・・・えっと・・・その・・・友達としてなら・・・好き」
ア「なら、これからも仲良くしてあげてね」
龍「うん・・・そのつもり。もちろん・・・アリアさんも」
ア「え!?・・・はは、ありがとう。私とも仲良くしてね」
龍「うん」
そう言って、アリアと龍子は改めて握手した。
高「おい杉野、どこまでついて来るんだ?。もう結構歩いたぞ」
既に道場とはかなり離れており、高雅も見送りにしては長すぎると思っていた。
龍「それじゃあ・・・私はここで・・・またね、崎村君、アリアさん」
高「じゃあな」
ア「またねー」
龍子は家に帰っていった。
高雅達も自分の家に向かって歩き始めた。
高「なんだ。なんか嬉しそうだな、アリア」
ア「ふふ、私に新しい友達ができたから」
高「そうか」
高雅はそれだけ聞いてアリアから目を放した。
アリアは心の底から微笑んでいるのを気づかずに。
ア「新しい友達・・・人間はクズだけじゃないよ、コウガ」
アリアは高雅に聞こえないように呟いた。

# 魔球合戦

六月の梅雨の時期の学校。
ここ最近は雨が連続で降っている。
高「なんか毎回雨だと色々とやる気が無くなるな」
高雅は外を眺めながら次の授業の用意をしていた。
ア（ねえ、早くしないとチャイムが鳴るよ）
高（分かってるって）
次の授業は体育。
高雅は体操服に着替えていた。
ちなみに、アリアはタオルで巻いて見えないようにしている。
高（着替え完了。さあて、アリア。リストバンドになれ）
ア（わかった）
高雅は蒼いリストバンドを付け、体育館へ向かった。

この授業は最後に他クラスと全員で対決するという少し変わった授業である。
もちろん、今日もそれがある訳で・・・
先「今日はドッジボールで対決だ！！」
A「行くぞ崎村。俺達の連携ぷｒ「やだ」即答するな！！」
高「敵じゃないのが残念だ。敵だったらお前を開始５秒以内で片づけるのによ」
A「こえ―よ。何で目がマジなんだよ！？」
先「おら、早くコートに行け」
高雅達はコートに立った。
このドッジボールは外野なしのサバイバルルールである。

ちなみに人数は・・・

高チーム　２５人
敵チーム　３０人

人数では不利だと思われがちだがコートが狭いため人数が多いほど避けるスペースが無くなる。
さらに、運がよければまとめて倒すこともできる。
Ａ「よっしゃー、一気に５人まとめて倒してやろうぜ」
Ｂ「俺達のコンビネーションを見せてやろうぜ」
ＡとＢはのんびりとお互いの意気込みを言いあって士気を上げていたが・・・
高「おーい、もう始まってんだぞ」
Ａ・Ｂ「へっ！？」

ドガガ！！

敵の投げたボールがＡとＢを二人まとめて当たった。
Ａ・Ｂ「・・・・・」
高「さっさと退場しろ、アホ共」
ＡとＢがテクテクとコートを出た。
Ｃ「俺が仇をうってやるからな。行くぞＤ」
Ｄ「よーし、来い！！」
Ｃ「しゃー、行くぞ。必殺」
Ｃ・Ｄ「ダブルス○イラ○ハリ○ーン！！」

ドガガガガ

ＣとＤが放った必殺技は一気に１５人当たった。
Ｃ「よっしゃー。どうだ、俺達の力は？」

しかし、敵チームは誰一人外野に行かない。
D「おい、どうして外野に行かねえんだ？」
先「あれは蹴りだから当たり判定は無しだ」
C・D「何いいいいいいいいいいいいいい！？」
敵「隙あり！！」

ドガガ！！

CとD外野送り。
E「ふふふ、俺が目立つ時が来た」
Eはボールを取り、ホームラン宣言のように敵陣にボールを持った手を伸ばした。
E「俺一人でお前ら全員を倒してやる」
全「おお～」
軽く歓喜の声が上がった。
E「行くぜ、俺の魔球を受けてみやがれ！！」
Eは思いっきりボールを投げようとしたが・・・

スポッ・・・パシッ、ドガ！！

全「・・・うわ～」
解説しよう。Eが投げようとしたがすっぽ抜けてしまい、すぐさまボールを拾った敵が投げてEを当てた。
敵「ははははは、もう5人も減ったぜ」
高「さあ、どうする？。もうキャラは背景しかいないぞ」
ア（そんなかわいそうなこと言っちゃダメだよ）
高「事実だろ」
高雅はボールを取った。
高「ん～・・・」
高雅は何の目的もなしに見まわした。

A「パスパス」
高「わかった。ほい」

ビュンドガ！！

A「が！？・・・」
高雅の投げたボールはAの腹に食い込んでいた。
全員がその光景を唖然と見ていた。
その理由は腹が食い込んでダサイってわけではない。高雅の球が見えなかったからだ。
高「あっ、つい加減するの忘れてた」
ア（嘘だッ！！）
高（そういえば、そろそろひぐらしが鳴く時期だな）
Aは再起不能になった。高雅はAが担架で運ばれていくのを見ていた。
高「・・・ざまぁｗｗｗ」
ア（ひどすぎない？）
今、高雅のクラス達は本当の敵は高雅なのかもしれないと思った。
敵「あいつ・・・強いな」
C「隙あり返し！！」

パシッ

Cのボールは呆気なく取られた。
C「何故だあああああああああ」
敵「テメーなんざぁ、眼中にねえよ。それより・・・おい、テメー」
高「断る」
敵「まだ何も言ってねえだろ！！」
高「黙れ。それ以上関わったらお前も担架に乗せるぞ」
敵「上等だ。おら！！」

敵が高雅に向かって投げた。
高「・・・後悔しやがれ」
高雅は取ったボールの勢いを殺さずにそのまま一回転して投げ返した。

ドガ！！

敵「ぎゃあ」
敵にボールが当たった。しかし、ボールが地面に付かずに暴れている。

ドガガガガガガ・・・・・

敵「ぎゃあああ」
敵「うわあああああああああ」
敵「なんじゃこりゃあああああああああああ！？」
ボールが次々と敵を倒していく。
高雅はちゃんと考えていたのか担架送りはあの挑戦を叩きつけた敵一人だけだった。
そして、敵は1人になった。
高「・・・・・こんなに倒すなんて俺も予想外だ」
敵「・・・・やるな」
生き残った敵が高雅を褒めた。
高「よく生き延びきれたな。運がいいな」
敵「運じゃない。実力さ」
敵がボールを取った。
高「ん？」
敵「お前だけができるわけじゃないぞ」
敵がボールを投げた。それは高雅と同じ魔球だった。
高「なっ！？」

他「うあああああああああああ」
他「いってえええええええええ」
他「きゃあああああああああああ」
高雅チームは高雅と龍子の二人になった。
先「開始早々、こんな魔球を拝めるとは・・・」
高「ヒュー、やるな。なんか杉野も生き残ってるし」
龍「・・・・・・」
龍子は何が起こったか分かっていなかった。
高「それじゃ、こっちの番だな」
高雅はボールを拾い、龍子のとこへ向かった。
高「よし、作戦会議だ」
龍「へっ!?・・・どうするの?」
高「こうするんだ。お前なら別に知ってるから何とも思わないだろ?」
龍「まあ・・・そうだけど・・・イカサマじゃない?」
高「いいから、頼むぜ」
龍「う・・・うん」
高雅は龍子にボールを渡した。
敵「いつまで待たせるつもりだ?」
高「オッケー。行くぜ」
高雅は振り向くと同時にボールを構えた。
高「俺の魔球は視覚を狂わす。くらえ!!、奥義!!、ブルースカイ(即席で作った)」
高雅は魔球・・・ではない。たんなる剛速球(軽く２００キロオーバー)を投げた。
敵「な・・・何だこれ!?、球が蒼く見えるだと!?・・・だが、避けられないことはない」
敵は高雅の剛速球を避けた。ボールは壁にぶつかり、そこらへんに停止した。
敵「へっ、動体視力じゃ負けないぜ。残念だったｎ＞ポテッ＜え!

？」
敵は唖然とした。龍子が敵にボールをぶつけていたからだ。
敵「おい、ボールはどっか飛んで行っただろうが」
高「残念。俺が投げたのはリストバンドだ」
敵「な・・・何いいいいいいいい」
ボールが落ちた所を見ると確かにリストバンドだった。
高「頭使え、バーカ」
敵「この俺が・・・リストバンドと間違えるとは・・・」
先「そこまで、試合終了。クラスＡの勝ち」
Ａ「すげえええええええええ」
Ｂ「かっきいいいいいいいい」
Ｃ「やるううううううううう」
Ｄ「ひょえええええええええ」
Ｅ「きえええええええええええ」
高「後半二人は単なる叫び声だな」

キーンコーンカーンコーン

先「よし、号令」
（略）
高雅はすぐさまリストバンドに駆け寄った。
高（お疲れ、アリア）
ア（いたたた。もう嫌よ、こんな役なんて）
高（これからもあるかもな。嫌なら契約解除でもすれば？）
ア（それは絶対嫌！！）
高（んな、強く言うなよ）
高雅はリストバンドを腕に付けた。
実は最初はボールだったが、途中でリストバンドに戻ったわけ。だから、リストバンドがボールに見えたのは嘘。
高「さてと、俺も帰るかってあれ！？」

龍「あの・・・アリアさん・・・大丈夫？」
高「心配ない。元気過ぎて死にそうだって」
ア「はいはい、嘘はダメ」
高「おいおい、喋んなよ」
ア「大丈夫よ、私たち以外人はいないよ」
龍「アリアさん・・・大丈夫？」
ア「うん、大丈夫よ。心配してくれてありがとう」
龍「友達だから・・・当たり前だよ」
ア「ねえリュウコちゃん。私のこと呼び捨てでいいよ。私もリュウコって言うから」
龍「え・・・うん、わかった、アリア」
ア「改めてよろしく、リュウコ」
高「おーい、そろそろ帰ろうぜ。ここにいたら俺が空気になっちまう」
ア「わかったわよ」
龍「それじゃあ、私は更衣室だから」
高「なんで、女子だけ更衣室があるんだ？」
ア「別にどうでもいいじゃない。教室が男だらけなら更衣室と同じでしょ」
高「ここに変装した女がいるけどな」
ア「しょ・・・しょうがないじゃない。私はコウガの使いなんだから。大体、ちゃんと見えないようにしてるから大丈夫よ」
高「半径５００メートルならいいんだろ。だったら杉野と一緒にいろ」
ア「ちょ・・・コウガ！？」
高雅はアリアのことを無視して龍子にリストバンドを投げた。
高「アリアをよろしく」
龍「へ！？・・・あの」
高雅は反論が来る前に教室へ戻った。
ア「ったく、コウガったら。まあ、今日だけでもよろしくね」

龍「アリアさんも!?」
ア「呼び捨て」
龍「あ・・・アリアも?」
ア「こうなったからには、しょうがないよ。とりあえず早く着替えよ」
龍「あっ、もう休み時間が終わっちゃう」
龍子は急いで更衣室へ行った。

この日を境に学校では、高雅はよくアリアを龍子に預けるようになった。
アリアがそれを不満とは知らずに。

# 新しい家族

6月だが今日は晴れている。
高雅は河原で釣りをしていた。ちなみに、アリアは実体化してる。
それと、今日は日曜日なので学校は休みである。

高「大漁大漁。気分がいいぜ」
ア「すごいね。バケツに収まりきれてないね。ちゃっかり跳ねて逃げてる魚もいるし」
高「別にどうでもいい。どうせ逃がすつもりだし」
ア「キャッチアンドリリース精神があるね」
高「当然。さてと、そろそろ帰るか」
高雅は気分がよくなった所で釣りをきりあげた。
もちろん、魚はちゃんと逃がした。
高「帰りに菓子でも買うかな」
歩みだそうとしたその瞬間、アリアが何かに気づいた。
ア「コウガ、あれ見て」
高「ん・・・なんだありゃ？」
高雅とアリアの目の先には草陰で小さい動物が倒れていた。
それは、体格は２０センチぐらいで顔の周りがライオンのように毛むくじゃらの小さな動物だ。
高「何だこの生き物は!？、見る限り四足歩行の動物だが生まれて１カ月もしてないほど小さいぞ」
ア「そんなことより、怪我してるよ」
その動物は所々に怪我をしていた。
ア「再生の力で怪我を治そうよ」
高「まあ、見る限り現世の動物ではなさそうだし、別にいいか」
高雅はアリアの力を使い、回復させようとした。
？「・・・グ・・グ」

高「お、起きているようだな。安心しろ。今、怪我を治してやるから」
？「グ・・・グガ」
突如、高雅に向かって飛びかかって来た。
高「ひょいっと。その鳴き声を聞く限り喉も潰れてるようだな」
高雅は軽く避けた。謎の動物は着地してすぐに振り返った。
？「グル・・・グ・・・」
しかし、力尽きたのか謎の動物はまた倒れた。
高「結構ひどい怪我だから動くなよ」
？「グル・・ッ！？」
謎の動物はあるものに気づいた。
？「見つけたよ、メリア」
高「んあ、誰だ？」
高雅は声がする方へ振り向いた。
？「僕はその飼い主さ。それを早くこっちへ渡しな」
高雅はもう一度謎の動物を見た。それは嫌がっているような目つきだった。
高「本人は嫌がってるようだけど。それに、お前は誰だ？」
リ「はっ、人間が偉そうに。僕はリッチ。人間ごときが僕へ歯向かうな」
高「アリア、これどっち？」
リ「こ、これだと！？」
ア「これは天国の方よ。お金持ちで偉そうにしている貴族よ」
アリアは最低限のことだけ伝えた。
高「とりあえず、こいつは渡さねえよ。嫌がってるみたいだし」
ア「あなた、動物（このこ）に何をしたの？。随分と怪我をしてるけど」
リ「人聞きが悪いな。ただの仕付だよ」
高「仕付で血だらけとは過剰な愛情表現だな」
リ「関係ないな。君と僕は違う。それだけで十分だ」
高「俺は単なる弱い者苛めしか見えないけど。俺はそれを見逃すよ

うな奴じゃないよ」
ア「コウガの意見に同意」
リ「じゃあどうする？。僕からそれを奪うつもりかい？」
高「おっ、いい案じゃねえか。それ賛成」
リ「僕はこれでも喧嘩は強いよ」
高「喧嘩？、バカかお前。ものを賭けるなら決闘だろ」
リ「なら、そっちは何を賭けるのかい？」
高「なら、俺の使いの胸を触っていいぞ」

ガツン！！！

ア「ダメに決まってるでしょ！！！」
高雅の頭にでかいタンコブができた。
高「痛・・・大丈夫だって。負けねえから」
リ「大した自信だね・・・いいだろう。なら、始めようじゃないか」
ア「ちょっと、こっちはＯＫ出してないよ！！」
すると、リッチの姿が消えた。
高「アリア、行くぞ」
ア「分かったわよ、もう。契約の力、発動」
蒼い双剣が高雅の手に納まった。
高「相手は契約者無しのただの天使だから余裕だろ」
リ「調子に乗るな！！」

バゴッ！！

いつの間にか、リッチのパンチが高雅の腹を突いた。
リ「ふふふ」
高「・・・ただ速かったらパンチの威力が上がると思ってるのか？」
リ「何！？」

リッチは本当に消えたわけではない。速度の力により目では追いきれない程の高速移動しているだけである。
高雅にしてみれば本当にそれだけである。
高「悪いがこっから俺のコンボで終わらせてやる」
高雅がそう言った瞬間、双剣を片手で持ち、すぐにリッチの殴っている手を取って逃がさないように捕えた。

ドゴッ！！

リ「ぶ！？」
高雅の膝蹴りが腹に炸裂。
高雅はすぐに両手に双剣を持ち、振りかざした。

ザシュッ！！・・・ザシュッ！！

リッチの胸にクロス斬り。その勢いのまま平行に横切りを喰らわせた。
リッチは倒れ、戦うほど力は無くなっていた。
攻撃と同時に静寂の力によってリッチの速度の力が抑制されているからである
高「生かしてはやる。ただ、戦利品としてこの動物はもらうぞ」
高雅はすぐにメリアという動物に近づいた。
高「悪いな、空気にして。今、治してやるからな。行くぞ、アリア」
メ「ガ・・・グ・・・」
メリアは大人しくしていた。
高雅はアリアの再生の力を使い、メリアの怪我を全て完治させた。
高「これでよしっと。じゃあな、後は自由に暮せ」
メ「何故、我を助けた？」
高・ア「喋った！？」
メ「ふん、我が喋るだけでそこまで驚くことか。それより、何故助

けた？」
高「何故って・・・傷だらけでボロボロで見たこともない動物を助けるのに理由がいるか？」
メ「我は助けてくれと言ってはない」
高「助けないでくれとも言ってない。てか、言えなかったな」
メ「お主は不思議な考えをしておる。突然襲い掛かって来た獣を助けるとは」
高「別に勘違いで襲って来たことなんてどうでもいいぞ」
メ「気づいておったのか！？」
高「そりゃ、怯えてる目だったからな。俺の予想で何かにやられて隠れていたってところだと考えていたし」
メ「ふっ、気にいった。お主の恩を返すことを踏まえて我を部下にしないか？」
高「つまり、俺のペットになるってことか。いいのか？、せっかく自由になったのに」
メ「元々、我に帰る場所など無い。親も仲間もいない」
高「ふ～ん。じゃあ、俺が新しい家族になってやるよ」
メ「家族！？」
高「そういうこと。よろしくな、メリア」
レ「それは奴が勝手に付けた名だ。本当の名はレオだ」
高「んじゃ、改めてよろしくな、レオ。そうえば自己紹介がまだだったな。俺は崎村高雅。高雅って呼んでくれ。ちなみにこいつはアリア。今は力使って疲れてブレスレットだけど、人間や色んなものになれるから」
ア「よろしくね、レオちゃん」
レ「我をちゃん付けで呼ぶな！！。天使ごときが」
ア「だって、声に似合わずかわいいんだもん」
もう一度言おう。レオは体格が２０センチで顔の周りがライオンのように毛むくじゃらの四足歩行で誰もが頭や肩に乗せたくなるほどかわいいのだ。

え、なんか増えてる?。気にしたら負けさ。
レ「我は天獣の中で王に君臨する者だ。気易くちゃん付けなどするな」
ア「ゴメンね、レオ君」
レ「君付けも許せーーーん!!」
高「はいはい、そこまでにしろって。とりあえず、帰るからほら」
そう言って高雅はレオに軽く足を出した。
レ「これはどういう意味だ?」
高「とりあえず、足に乗れ」
レオは言われるがままに高雅の足に乗った。その時・・・
高「よっと」
レ「うお!?」
高雅はリフティングのようにレオを上げて頭に乗せた。
レ「こ・・・コウガ殿。いくらなんでも、ここはコウガ殿に失礼では!?」
高「気にするな。別に部下でもペットでもない、家族なんだから。大体、一度でいいからちっちゃくてかわいい動物を頭に乗せたかったし」
レ「そ・・・そうか。コウガ殿が言うのでならば・・・」
高「んじゃ、マイホームへレッツゴー」
ア「テンションが上がってるね」
高「ポケ○ンとかやってて、こういうことを一度でいいからやってみたくてさ。それが叶ったらテンションが上がって来たぜ」
ア「ほんと、ちょっとは子供っぽい所があるね」
高「と、言いつつお前も乗せてみたいだろ?」
ア「それは・・・うん、乗せてみたい」
高「ダメ。レオは俺の家族だからだ」
ア「ちょっと、私は家族じゃないの!?」
高「お前は俺の使いだよ~ん」
ア「私も家族みたいなものでしょ!?」

高「んなことは認めませ～ん」
レ（コウガ殿の家族は賑やかであるな）
高雅はレオを頭に乗せたまま家に帰った。

こうして、崎村家に新しい家族が生まれた。

## 新しい家族（後書き）

やっと更新できた。
親が休みだからパソコンを独占していて書く時間があまりにも少なくて・・・。
とりあえず、謝罪を。すみませんでした。
後、明けましておめでとうございます。

## 作者からの一言（前書き）

タイトルがこんなんですが、ちゃんとお話であります。
しかし、中間あたりから作者の言葉があります。

## 作者からの一言

今は1学期最後のテストである期末テスト中。
高雅は前回と同様にアリアと勝負をしてる。
当然、賭け付きである。
高（今回はぜってー負けねえからな）
ア（私だって負ける気ないよ。そう言えば、前回は2位だったけど1位は誰だったの？）
高（知らねえよ。だが、そいつにも負けられねえ）
高雅は以前よりも燃えていた。

テストが終了し、高雅は猛スピードで帰宅した。
玄関にはレオが出迎えてくれた。
レ「おお、コウガ殿。テストはどうだったであるか？」
高「上々だ。さあ、アリア。早くするぞ」
ア「焦らない。私は逃げも隠れもしないから」
高雅はすぐにアリアをテストの部屋に連れて行った。
高「ほら、問題用紙だ。時間が経ったら来るからな」
ア「分かったよ。せめて、友達１００人作る練習でもしてれば？」
高「ぬかせ。そう言うのは、やってからにしろ」
高雅は部屋を出て、アリアは問題を解き始めた。

数分後。
ア「う～ん、ここは何だっけ？・・・取りあえず、セバスチャンに聞こうかな」

アリアがセバスチャンに連絡をしようとしたその時に・・・

ガチャ

レ「テストはどうであるか、アリア殿?。コウガ殿からの差し入れである」

レオが入って来た。器用に頭でお茶を運んでいた。

ア「あら、わざわざありがとう」

アリアはレオからお茶を受け取り、セバスチャンに連絡しようとした。

ア（セバスチャン、聞こえる?）

すると、レオが口を開いた。

レ「アリア殿、それは不正行為と言うものではないか?」

ア「へ!?、何のこと?」

レ「今、誰かに教えてもらおうとしたではないか」

ア「ど・・・どうして分かったの!?」

レ「我はどのような力も視覚的に見ることができるのだ」

ア「そうだったの・・・あっ、コウガには内緒にしｔ「もう手遅れだ」え!?」

アリアは声がする方を見ると、扉の前には高雅が立っていた。

高「前回、全部満点が少し怪しかったからレオに盗聴器を付けてみたんだ」

高雅はレオの毛の中から盗聴器を取り出してアリアに見せた。

高「まさか、意思会話でセバスチャンに連絡できたとはな」

ア「待ってコウガ、これは違うの」

高「どこも違わねえぞ!!。もう即刻罰ゲームだ!!」

ア「きゃあああああああああ」

罰ゲームで高雅がやったことはアリアにメイド服でパシリだった。
何故、メイド服があるかと言うと創造の力によって生みだしたからだ。
・・・力の無駄遣いですね。
高「これは、挿絵が無いことががっくしするぐらいすげーな」
すみません。作者の絵が絶望的に下手なもので。
高「この期に及んで言うけど、キャラの特徴が全然書いてないのは読者の想像に任せようという手段である」
けして手抜きではありません。読者の想像した好きなキャラの方がいいかなという勝手な思い込みです。
つまり、アリアが貧乳と思えば貧乳に。巨乳と思えば巨乳になります。
ア「そんなこと言わないでよ!!」
高「正直言って・・・かわいいな」
ア「もー、あまり見ないでよ／／／」
高「軽く、色んな人を萌え殺すほどの威力だな」
レ「アリア殿。似合っておられるぞ」
ア「褒めてもうれしくないよ／／／」
もちろん、メイド服も自由に想像してください。
ア「あまり想像しないでよ／／／」

高「そんじゃまあ、ページが余ったから新キャラ、レオの質問コーナーにでもするか」
レ「何でもくるがよい」
高「そんじゃ、まずは・・・天獣って何?」
レ「簡単に言えば天国に住む生き物だ。天獣だけで天国を独立して

いたが、ある事件をきっかけに天獣は殆ど絶滅してしまったのだ。
我は唯一の生き残りである」
高「ありゃりゃ、それはお気の毒に。じゃあさ、独立するってことは天使とは仲悪かったのか？」
レ「特に悪いわけでもなかった。むしろ良好関係だ」
高「それじゃ別の質問。レオってどんぐらい強いのか？」
レ「どのくらいの強さが基準なのかは分からないが、コウガ殿には及ばないだろう。しかし、我が成長すればきっとコウガ殿にも勝る力が出るだろう」
高「ふ～ん、成長すれば勝手に強くなるのか？」
レ「決してそういう訳ではないが我は天獣の中でも王に君臨しておるから何もしなくても最強になれる」
高「すげーな。成長したレオが楽しみだぜ」
レ「だが、我が最強にまで成長するには後1億年かかる」
高「1億か・・・その姿を拝(おが)む日はなさそうだな」
ア「次は私ね。成長したら大きさはどのくらいになるの？」
レ「現世の言葉で言うなら6メートルぐらいにはなる」
ア「じゃあさ、成長したら乗せてね」
レ「それは1億年後だが」
ア「作者に頼んで次回は1億年後からにしようよ」
高「待てこら!!、俺が居なくなるって!!。大体、アリアは生きているのか!?」
ア「私は何でもありキャラのことをお忘れかな」
高「ずる!!すっげえええ、ずる!!」
ア「じゃあ、作者さん。次回は1億年後からね」
ラジャー、OK。
高「待て、早まるな!!。俺はどうするんだよ!?。それに杉野や蓮田は!?」
では、次回から1億年後編をお送りします。
高「やめろおおおおおおおお」

はい、もちろん嘘です。
しかし、レオは近いうちに大きくなるでしょう。
レ「ほ・・・本当か!?。どうやって!?」
それは後ほど分かりますよ。

☆おまけ☆

テストの結果表が配られた放課後の様子。
A「崎村ーーーーー、俺はすげーーーーぞ、5位だぞーーーーー＞ピラッ＜ごぶっ!!」
Aは血を吐いて倒れた。
高「またかよ。芸が無いな」

ガララ!!

凛「崎村さん!!、一体何点でありますの!?」
高「おい、二度と俺に関わらない約束はどうした?」
凛「そんなことどうでもいいですわ。いいから見せなｓ＞ピラッ＜・・・・・」
凛は石像と化した。
ア（ところで高雅はどうだったの?）
高（また2位だ。まったく、1位は誰なんだか）
1位はもちろん、血を吐いた夢を見ておどおどしている物静かなキャラでした。
誰か言う必要はありませんよね?

## 作者からの一言（後書き）

次回は新しい編を書こうと思います。決して1億年後編ではありません。

## 天獄戦争編　その1、宣戦布告（前書き）

この編は名前からして多分めっちゃバトルになると思います。

# 天獄戦争編　その1、宣戦布告

早朝の6時。
高「ふあ～、もう朝か」
高雅はいつものように弁当を作ろうと台所へ向かった。
行く途中のリビングでアリアとレオが起きていた。
アリアとレオはテレビを見ている。
高「あれ、早いなお前ら」
ア「コウガ！！、これを見て」
アリアは血相を変えて高雅にテレビを見るように促した。
高「何だよ一体」
高雅もテレビを見た。そこには・・・

一つの町が灰と化していた。

高「ありゃりゃ、原爆でも落ちたのか？」
ア「そんなわけない。だったらあんなに人が生きているわけないよ」
TVに人は軽く千人は超えるほど映っていた。
レ「コウガ殿、右側に映っている物を見てくれないか」
高「ん・・・なんだありゃ！？」
映っていたのは直径10メートルの黒い球体であった。
高「灰の塊じゃないな。あれは何なんだ？」
レ「あれは獄入(ごくいり)の玉である」
高「それって何？」
レ「見ておれ。すぐに解かるだろう」
高「へ！？」
すると、獄入の玉が不気味に光りだした。
TV「何でしょうあれは！？。不思議な物体が光輝いております。あれは一体なんdザーーーーーーー」

突然、テレビは砂嵐に変わった。
高「おいおい、肝心なところが見えなかったじゃないか。何が起きたんだ？」
レ「あの周辺が地獄に飲み込まれたのだ」
高「マジで！？」
レ「獄入の玉は現世の数で半径１キロメートルを地獄に落とすのだ」
ア「そんなことをして何になるの！？」
レ「主な目的は地獄の土地の拡大に使われているのだが、現世で使われることは絶対にない。ましてや人をあんなに地獄に落とすなど言語道断である」
高「それが今あってるぞ」
レ「これは地獄の奴らの宣戦布告だ。こんなことをして天国が黙ってはいないだろう」
高「ということは戦争ってこと！？。それはたまげた話だな」
ア「でも、何で急に！？」
レ「我にも分からない。ただ、これから第２次天獄戦争が始まるだろう」
高「おい、前にもあったのかよ！？」
レ「それは４千年前だ。あの頃の３代目の閻魔（えんま）が無差別に現世を大量に地獄に落とし入れたのだ。それを止める為に天使と天獣が地獄に向かったのだ。それが天国と地獄の最初の戦争、第１次天獄戦争だ。あの時は天国側の勝利に収めた」
高「それが、また起こっているってことか。にしてはよく知ってるな、４千年前のこと」
レ「天獣もバカではない。歴史のことぐらい頭に入っておる」
高「へー。まあ、俺達には関係ないだろう」
ア「ちょっと、あの中にはいい人だっているのよ！？」
高「どっちにしろ俺は人間が嫌いだ。関係ないね」
ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ・・・

誰かがインターホンを連打した。
高「うっせいな。誰だよ」
高雅が玄関の扉を開けた瞬間・・・
ロ「コウガっちーーーーーー、助けてくれーーーーー」
高「ぐはっ！？」
ログナが高雅に飛びかかった。
後から蓮田も家に入って来た。
ロ「どうしようコウガっち。俺っち徴兵されちゃったぜ」
高「いいからどけ！！！」
ログナは少し落ち着いて状況を判断した。
ロ「おっと。すまねえ、コウガっち。んで、どうすればいい？」
高「さっさと戦争へ行け」
ロ「俺っち戦いは苦手だぞ」
高「どうせお前は医療組にでもなるだろうよ。だから死ぬことはない。安心して行け」
蓮「でも、僕も行かなくちゃいけないんだ」
高「子供まで徴兵とは・・・大変だな」
蓮「こうが兄ちゃんは呼ばれなかったの？」
高「指名手配の奴を呼んだりはしないようだな」
蓮「そうえばそうだったね」
レ「コウガ殿、一体だれがお見えになったのだ？」
レオとアリアが高雅の様子を見に出てきた。
ロ「おりょりょ、あの絶滅した天獣が居るじゃん」
レ「お初にお見えにかかる。レオと申す」
ロ「またまたコウガっちはすげーの手に入れたのな」
蓮「ちっちゃいライオンが喋ってる。かわいいー」
蓮田がレオに触ろうとした。
レ「目にかかったばかりの者に触れるでない！」
蓮「わっ、ごめんなさい」

ア「レンタ君、喋ってることを気にしないのね」
ロ「俺やアリアっちのように異世界人がいるからね。ちょっとやそっとじゃ驚かなくなっちゃったんだな」
ア「何だか、こんな子供を普通から離れさせる罪悪感が・・・」
ロ「それでさコウガっち・・・ってあれ!?、コウガっちはどこに行った?」
いつの間にか高雅は姿を消していた。
ア「あれ、本当にどこに行ったの?」
レ「気配を消すとは、さすがコウガ殿」
するとアリア達がやって来た扉が開いた。
そこには学校に行く用意のできた高雅がいた。
高「じゃ、俺は学校に行くから」
ロ「はやっ!?。待ってくれコウガっち。俺と蓮田を見捨てないでくれよ」
高「なあ、レオ。天国が地獄に負けると思うか?」
レ「いや、例え天獣が加勢しなくても天国の方が地獄より力は上であろう」
高「大丈夫だとよ。だから行って来い。お前らはどうせ医療組だから死にはせんから」
ロ「だからよ~」
高「それに、戦争でお前の再生の力を見せれば勲章ぐらいもらえるだろ」
ロ「本当か!?」
高「俺が保障してやるから行って来い」
ロ「よ~し、やってやるぜ!!。行くぞ、蓮田」
蓮「わわ、待ってよー」
ログナは蓮田の腕を引っ張り、高雅の家を出た。
高「これでよし。ほら行くぞ、アリア」
ア「なんか呆気なくコウガの口車に乗ったね」
アリアはブレスレットになり、高雅は学校へ向かった。

レオはもちろんお留守番。

学校到着。
もちろん早いためクラスには誰もいない。
高「今日は杉野より早かったな」
高雅は自分の席に着き、すぐさま寝る用意をした。
ア「相変わらず寝るのね。他にやることｎ「ない」即答ね・・・」
高「いいんだよ。目的は人に会わないためなんだから」
アリアはそれ以上は何も言わずに、高雅は眠りについた。

1時間後。
ア（コウガ、起きて）
高「むにゃむにゃ・・・後5分・・・」
ア（そんな、ありふれた言葉はいいから起きてよ！！）
高「ん・・・ふあ～・・・あれ？」
高雅は目を覚まし、辺りを見たが生徒が異常に少なかった。
それに、先生もまだ来ていない。
既に登校するべき時間も過ぎ、チャイムも鳴り終わった後だ。
高（なんだ！？、集団で風邪でも引いたのか？）
今、来ているのは杉野と夢、あとオマケの購買部達だけだ。
A・B・C・D・E「オマケとは何だ！！！！」
高「うるせーな・・・それにしても、こんなに休みが多いなら学級閉鎖になるだろうな」
ア（どうしたんだろう急に？。まさか、あのニュースと関係が・・・）

高（あの町は遠くの場所だぞ。緑淵町に関係ある可能性はほぼゼロだ）
すると、廊下の方から誰かが走って来る音がした。
高「おや、だれか遅刻した者が頑張ってるな」

ガララ！！

勢いよく扉を開けたのは高雅の予想を裏切った人物だ。
凛「はぁ・・・はぁ・・・み・・皆さん・・早く・・はぁ・・・逃げてください！！」
扉を開けたのは凛だった。息切れを起こしながらも無理に喋っている。
高「あれ？、会長さんだ。しかも慌ててるな」
凛「この・・学校は・・はぁ・・・危険です！！」
高「何が危険なんだ・・・ッ！？。おい、後ろ！！」
すると、凛の後ろから巨大な黒い手が見えた。
凛「え！？・・・きゃあ！？」
黒い手が凛を捕えた。
黒い手はそのまま凛を持っていった。。
A「何だよ今の！？。新種のマ○ハンドか！？」
高「マ○ハンドに腕が付いてるわけない。しかもあのサイズなら軽く5メートルの巨人だ」
B「なんで学校に巨人がいるんだよ！？」
高「知るか！！。お前らはそこにいろ！！。俺が囮役と会長を助けるから隙を見て逃げろ」
A「分かった。君のことは忘れない！！」
B・C・D・E・夢「こいつ、最低だ・・・」
高雅は廊下に出た。
ちょっと離れた所に予想通りの体調5メートルの黒い巨人がいた。
片手には凛、片手には体格に合う大剣を持っていた。

巨人はまるで高雅が来るのを分かっていたように仁王立ちして待っていた。
ア（どうするの、コウガ？）
高（あんまり人前で力を使いたくないが、やむを得んからな）
高雅が契約の力を発動しようとした瞬間・・・
D「待てい！！」
突如Dがやって来た。
D「俺も共に闘おう」
勇敢にもDが戦闘に参加した。
高・ア（いらねー・・・）

次回、Dが活躍する!?

# 天獄戦争編　その2、地獄の目的

今ここに

高雅・Ｄ　ＶＳ　謎の巨人

の戦いが幕を開けようとしていた。

高「おい、命が欲しかったらさっさと教室に戻れ」

Ｄ「それはこっちのセリフでもあるぞ。無駄にかっこつけて怪我しても知らんぞ」

高「お前、これは遊びじゃないぞ」

凛「あなた達、私に構わず早く逃げなさい！！」

Ｄ「大丈夫だ。君は僕が守る」

凛「え！？・・・」

Ｄの王道のセリフによって、凛の顔が少し赤くなった。

高（どっちが、かっこつけてんだが・・・）

Ｄ「行くぞ化け物。てりゃあああああああああ」

Ｄが一人で巨人に突っ込んだ。

もちろん、武器も何も持っていない。

つまり、単なる自殺行為である。

巨「グゴオオオオオオオオオオ」

巨人が大剣を大きく振りかぶった。

Ｄ「バカめ。お前みたいな巨人がこの廊下で剣を振り上げたら天井に引っ掛かるだろ」↑フラグ

振りかぶった大剣は天井に引っ掛かった・・・わけが無い。

天井を貫いて、まるで天井が無いように普通に振りかぶっている。

Ｄ「あれ、もしかして、俺って死亡フラグもろ立ってる？」

はい、その通りです。

巨「グオオオオオオオオオオオオオオ」

巨人が大剣を振り落とす。
D「あ、俺、ＴＨＥ　ＥＮＤ？」

ガンッ！！

巨「グオッ！？」
巨人の大剣は蒼いシールドによって防がれた。
・・・にも関わらず、Ｄは死の恐怖により気絶した。
高「使えねえ・・・と言いたいが囮としては良かったよ」
高雅は契約の力を既に発動しており、巨人の後ろにいた。
高「おい、でかっぱち。死にたくなければその人を放せ」
巨「グゴオオオオオオオオオオ」
巨人は聞く耳を持たず、振り向きと同時に大剣を振り上げた。
高「お前、状況判断できてねえのかよ」
その瞬間・・・

ズバッ！！

巨「グオオオオオオオオオオオオ」
巨人はさっきの威勢の声とは違い、悲痛の声を上げた。
大剣を握っていた腕が斬り落とされていた。
高「Ｄではないが、バカだなお前」
実は、高雅はあれから一歩も動いていない。
後ろに回っていたのは創造の力で作った分身だ。
背を向けたその瞬間を狙って本物の高雅が瞬速で斬ったのだ。
高「分かったか、巨人。これが力の差だ」
巨「グウウウウウウウウウ」
巨人は高雅を見て怯えていた。
すると巨人は凛を放した。
高「な～んだ。言葉の分かる奴だったのか」

凛はすぐに巨人から離れ、高雅の下へ向かった。
凛「崎村さん、それは一体なんですの！？」
高「遂に来たか、この日が」
高雅はいつかは来ることを分かっていたように溜息を一つこぼした。
高「まあ、色々話すことがあるから。まず、俺の教室に行け。まだ皆逃げてないようだし、この際今いる全員まとめて話す」
凛「分かりましたわ」
凛は教室へ向かった。
高「俺らも行くか。その前に・・・」
高雅は巨人の下に歩み寄った。
そして、巨人にこう呟いた。
高「隙を見て、俺と会長さんを斬るつもりだったんだろ」
それを聞いた巨人がビクッとした。
高「しかし、体が動かなかった、だろ。見え見えなんだよ。お前の体は俺が斬った時、静寂の力で溺れさせてあるから指一本動かせねえよ。残念だったな」
高雅はそこに転がっていたDを拾って教室へ向かった。

教室に戻った高雅は取りあえず教室にいる奴を安心させるために、教壇に立ってこう言った。
高「巨人さんはぎっくり腰で動けなくなったぞ」
教室内でこの話を信じた人：０人
D「大丈夫かい、凛？。怪我はないｋ「うるさい！！、私に近寄るないで！！」ど、どうして！？」
凛「一瞬でもときめいた私がバカでしたわ」
D「もしかして・・・・俺に惚れた！？。マジ！？、本当！？。もう、何時でもキスしに来ちゃっていいかｒ〈ドガッ！！〉はぐ！

？」
凛「ふざけないで！！。あなたのような見かけ倒しの人に唇を渡すものですか！！」
凛の必殺みぞ打ちパンチによって、Ｄはまた気絶した。
龍「ねえ・・・もう・・教えてあげて・・・アリアさんのこと」
高「今、その気なんだけどね」
夢「何、アリアって！？。まさか、崎村の彼女？」
高「この状況でどうやったらそう判断するんだ。アホッ子」
夢「なぁ！？。昔のあだ名で言うなーーーー」
Ａ「何だよアホッ子って？。ダッセー」
夢「今すぐに死ね！！！！」
夢がＡに関節技をかけた。
Ａ「ぎゃあああああああああああ。ギブギブギブ＞ボギッ！！＜のわあああああああああああ」
高「あーあ。今の音、完全に骨いったよ」
凛「いい加減にしなさい。早く本題に移りなさい」
高「焦るな会長さん」
凛「私は会長という名ではありませんわ。姫花　凛と言う名がありますわ」
高「じゃあ、焦るな姫花」
凛「この状況で焦るなと言う方が無理ですわ」
高「いかなる状況でも落ち着くことは大切だぞ」
ア「もう、早くしようよ」
購買部組・夢・凛「何、今の声は！？」
知らない者全員が声をそろえて言った。
高「説明は全てお前がしろよ」
ア「どうしてよ！？。コウガも手伝ってよ！！」
高「取りあえず、人間の姿にでもなれ」
すると、腰のベルトに挿していた双剣が光り輝く。
Ｃ「一体、何なんだよ！？」

そして、高雅の隣にアリアが実体化した。
ア「初めました、皆さん」
高「おい、初めましたって何だ?」
ア「あっ!!、間違えちゃった」
A「崎村あああああああああああああああ」
Aが骨がいっているにも関わらず、ずいずいと高雅に近づいて来た。
A「お前は人外キャラ萌えだったのかあああああああああああああ」

ボギッ・・・バギッ・・・

注意:これはボコッた音ではありません。
高雅の指を鳴らす音が異常にでかかっただけです。
つまり、ボコる下準備。
A「今日の俺はそんな脅しに怯まないぞ。この野郎、羨ましすぎるふご!?」
高雅はそこにあった野球ボールをAの口に詰め、襟を掴んで廊下へ連行した。

ドガッ、バギッ、グチャッ・・・しばらく、お待ちください・・・グシャッ、グギッ、メキッ

高「あー、スッキリした」
高雅は手をパンパンとはたきながら戻って来た。
Aは原形を留めておらず、モザイクが必要なほど哀れな姿になっていた。
ア「と・・・取りあえず、何から話そうか?」
凛「あなたは誰なのかと崎村さんとの関係は何なのかしら?」
ア「私はアリア。こう見えて天使よ。えっと・・・コウガと一緒にいるのはコウガの人生を見直しさせるためだけど、最近は妙に地獄

の使い達に絡まれてね」
凛「なら、先ほどの巨人は地獄の使いだということかしら？」
ア「あれは違う。あれは創造の力で作られた、言わば人形かな」
凛「そうぞうの・・・ちから？」
ア「私達使いには何か力があるの。力は使いそれぞれだけど色々あるの」
E「なあ、天使と使いってどう違うの？」
ア「殆ど変わらないけど、現世を行き来できるのが使いって感じかな」
C「天使なのに黄色い輪っかや羽が無いのはなんで？」
ア「天使全てがそういう作りじゃないってことかな」
高「なんか、だんだん余分なことを聞いてねえか？」
夢「そんな話が信じられるわけないじゃん」
夢が割り込んできた。
高「ほー、アホッ子のくせに現実を見るか」
夢「うるさい！！。とにかく、そんな話が信じられるわけないじゃん。どうせあんたの悪戯でしょ？」
高「俺がこんな大規模な悪戯をする訳が無い」
D「とか言いながら、実は女子にもてたいからかっこいい所を見せようとしたんじゃねえのか？」
高「さっき、かっこ悪かったからってそんなこと言う奴は一生もてんぞ。てか、起きてたんだな」
D「うるせー。絶対お前より先に彼女を作ってやる！！」
高「どうでもいい挑戦だな。後、そろそろ質問タイムを終わらせていいか？。敵さんが来たようだし」
そう言うと高雅はここにいる全員に窓の外を見せるように促した。
B「げっ！？、何じゃあれ！？」
その光景はさっき倒した（正確には瀕死）巨人が何十人も校舎に近づいていた。
ア「なんて数なの！？」

高「そんなことはどうでもいい。問題はなんで今になって懸命に襲ってくるかを考えろ」
ア「え!?、どうして!?」
高「こんな何時でもできるようなことを今になってするってことは何か理由があるはずだ」
ア「・・・天獄戦争と関係でも・・・」
アリアの小さな呟きを高雅は聞きとり、あることが閃いた。
高「まさか、俺達を殺す方法の一つかもな」
ア「どういうこと!?」
高「俺の考えが正しければ、すぐに天国兵が来るはずだ」
D「おい!!、空から何かがやって来るぞ」
それは高雅の予想通りの天国兵が何千人を連れてやって来た。
高「まあ、これで地獄の大まかな考えが分かった」
ア「それは一体・・・」
高「まあ、もう読者の6割が理解してると思うが言ってやるよ」

緑淵町(ここ)で天獄戦争をして、俺とアリアを殺すことだ。

アリアは戦争、それ以外は殺すという言葉に反応して絶句し、凍りついたように固まった。
そして、少し経ってアリアが口を開いた。
ア「え!?、コウガは緑淵町(ここ)とは関係ないって・・・」
高「前話をよく聞け。俺は可能性がほぼゼロって言ったんだぞ。ないとは言ってない」
凛「崎村さん、あなた達を殺すってどういうk」

ガシャーン!!

凛の声をかき消すように扉が破壊された。
そして、そこにはあの巨人が何人もいた。

高「あちゃー、来ちゃったな。今度は団体戦か」
高雅はそう言いながらアリアを双剣に変えた。

また、巨人と高雅の戦いが幕を開けようとしていた。

# 天獄戦争編　その3、見直す高雅

今度は

高雅　ＶＳ　巨人（複数）

の戦いが幕を開けようとしていたが・・・

高「逃げるぞ～」

高雅はなにか抜けているような声で皆に言った。

Ａ「おい、剣まで持っておきながら読者の期待を裏切るつもりか！？」

高「テメー、何で勝手に話が変わる間に復活してるんだよ！？。大体、読者の裏を突いたつもりだと作者は思ってるぞ」

高雅よ、フォロー、サンクス。

Ａ「知ったことあるかい！！。だったら俺が戦ってやる」

急きょ変更します。

Ａ　ＶＳ　巨人（複数）

戦闘開始！！！

Ａ「おい待て、なにマジになってんだよ！！。しかも早過ぎだ！！。うわあ、巨人達がめっちゃガン見してるし」

さあ、読者の期待を裏切らないように戦ってくれ、我らがＡよ！！。

Ａ「待ってくれ！！。ゴメン、マジで許してくれ！！」

もう手遅れ。巨人達、突撃。

巨達「グオオオオオオオオオオオオ」

Ａ「ぎゃあああああああああああ」

Ａは全力で巨人達から逃げた。

その光景は、リアル○ごっこに等しいだろう。

Aのお陰で高雅達の視界から巨人達が全部消えた。
高「よし、作者とAが作ったこの隙に、どっか安全な場所へ移るぞ」
凛「でしたら、一階の校長室に地下室がありますわ。校長と教頭がもしもの時に自分だけ助かるように作ってあったはずですわ」
高「この編が終わったら校長と教頭を制裁してやる」
高雅は心に強く誓った。
D「それじゃ、俺が前を行って安全を確認してから来てくr「早く行きますわよ」おい、待ってくれよー」
全員は1階の校長室へ移動し始めた。
ちなみに、高雅達のクラスは3階です。
はい、今考えました。すみません。

行く途中の階段。
高「何も会わなければいいけどな～」
B「おい、フラグ立てんじゃねえ!!」
兵「貴様ら!!、何者だ!?」
階段を下りる途中で天国兵が1人だけ現れ、高雅達に剣を向けて問った。
問いの答えを返すこともなく、兵は理解した。
兵「お前は・・・王に逆らいし者、コウガか!?」
高「ご名答。俺って、天国でも二つの名が生まれてんだな」
C「お前、天国で何やらかしてんだよ!?」
兵「王の誓いにより、貴様を殺す!!」
兵が剣を構えて、駆け上がりだした。
D「へへ、崎村は巨人を倒したんだぜ。お前なんかすぐに倒せるぜ」
高「じゃあ、Dのお望み通り秒殺してやるよ」
すると、高雅はDを持ち上げた。

D「おい、ちょっと待て。これってあの岩男のＰＡのパクリか！？」
高「ああ。あの岩男のＰＡだ」
そして勢いよく・・・
高「ガッ○シュート！！！！」

ドガッ！！

投げた。
兵「ぐわっ！！」Ｄ「げふん！！」
兵の頭とＤの頭が互いにぶつかった。
Ｄ「かっこよく・・・ダブル○ーローがよかった・・・がくっ」
兵、ついでにＤを秒殺。
高「よし、先に進むぞ」
凛「ふふふ、ざまぁみろですわ」
龍「Ｄ君・・・かわいそう・・・」
夢「大丈夫よ龍子。ああいうのは、このために生きているもんよ」
龍「・・・もっとかわいそう・・・」
ちなみに、Ｄはちゃんと引きずって持って行きました。

ちょっとトラブッたけど無事に校長室に到着。
高「ほんで、姫花。一体どこに地下室の入口があるのか？」
凛「そこまでは分かりませんわ。手当たり次第に探すしかありませんわ」
高「あっ、見つけた」
高以外「はやっ！？」
高雅が絨毯（じゅうたん）を退（ど）けると、そこには石でできた扉があった。
Ｄ「よし、俺が開けて確認しよう」

高「お前、早起きスキルあるだろ」
Dが扉の取っ手を掴む。
D「ふんっ、うぐうううううううううううううううう」
Dが顔を真っ赤にしてまで引っ張ったが全く開かない。
D「ダメだ。なんて堅い扉なんだ」
龍「あの・・・これは・・・」
D「ダメだよ。女の子には絶対に無理だ」
Dの言葉を無視して、こんどは龍子が取っ手を掴んだ。すると・・・

ギイイイ・・・

鈍い音をしながらも呆気なく開いた。
そこには暗闇に続く階段が見えた。
龍「引くんじゃなくて・・・押す・・・」
高「よくある、押してダメなら引いてみろの逆だな」
D「・・・・・・・・・・」
凛「かっこ悪いですわね」
D「ザクッ!!」
E「一番乗り!!」
Eは秘密基地に入る子供のようにはしゃいで行った。
高「あいつにはレディーファーストっていう意思は無いのかよ」
凛「崎村さん。もしかすると校長や教頭が入っているかもしれませんわよ」
高「それは無い。二人が入っているなら絨毯で隠されてないはずだ」
夢「それじゃあ、片方が入ってて片方が隠したかもよ」
高「互いに自分の為しか考えてないならその可能性はゼロに等しい。取りあえず、早く入りな」
龍「でも・・・全員が入ったら・・・扉が隠せない・・・」
高「俺は入らねえぞ。ちょっと、探索でもしたいし。それに狙いは

俺だろ。俺が暴れまわれば全員そっちを向くだろう」
凛「・・・・あの、私・・・」
高「一体どした？」
凛「大変申し難いのですが・・・トイレに・・・」
高「緊張の欠片も無い発言だな」
凛「仕方ありませんわ。人間である以上は便意を感じますわよ。ですから、先に入っててもらいますか？」
龍「うん・・・分かった・・・」
龍は地下室への扉を閉めた。
高「俺が護衛してやるよ」
凛「べ・・別にそんなことされなくても大丈夫ですわよ」
高「一応、巻きこんでしまった責任があるんだ。だから、守らせてくれ。な？」
ア「それに、コウガの大切な友達だし」
凛「え！？・・・」
高「誰がそんなことを決めたんだ、おい？」
ア「私に決まってるでしょ」
高「偉そうに言うな！！！！」
凛「し・・仕方ありませんわね。ど・・・どうしてもって言うのであれば友達になってあげてもよろしくてよ」
高「嫌。だから絶縁だ」
ア「二人とも、素直じゃないね」
高・凛「うるせー！！」「うるさいですわ！！」
ア「息ぴったりだね」
高「もういい、俺は行くぞ」
凛「ちょっと、私を護衛するのはどうされましたの！？」
高「そんな約束忘れた」
高雅はすぐに校長室を出た。
凛は絨毯で扉を隠してから高雅を追いかけた。

結局、高雅はあの後に凛の護衛に付いた。
そして、女子トイレに向かう途中。
ア「ほんと、ツンデレだね」
高「お前、顔面一発ぶん殴らせろ」
人のこと言えず、緊張の無い話をしている高雅とアリアに凛が割り込んできた。
凛「崎村さん。前に言った“俺とアリアを殺す”とはどういう意味ですの？」
凛は前回聞けなかったことを聞いてきた。
高「そのまんまの意味だ」
凛「どうして殺されなくてはならないですの？」
高「天国の姫を木刀で殴ったからと地獄の奴らを倒しているからな」
凛「そうだったのですの・・・それを一人で・・・」
高「一人はまた違うな」
凛「え！？、仲間がおりますの？」
高「おらんよ。ただ、アリアがいるから一人じゃない」
ア「コウガ・・・」
凛「そうですわね。一人じゃありませんわね」
ア「そうだよ。コウガは一人じゃないよ。リュウコが友達だもん。もちろん、リンちゃんもね」
凛「わ・・私も！？」
高「だから、勝手に決めるんじゃねえよ！！」
ア「いいじゃない。元々、私はコウガの人生の見直しに来たんだから」
すると、凛は小声で呟いた。
凛「友達に・・・・・なりたい・・・・」

高「ん、何か言ったか？」
凛「へっ！？・・・・し・・仕方ありませんわね。そこまで言うのであるのならば特別に友達になってあげますわよ」
高「おい、人の話を聞いていたのか？」
凛「さ・・さあ、早く行きますわよ」
高「てか、もう着いたけど」
凛「そ・・・そうですの。なら、早く行ってください」
そう言って凛は顔を見せないように下を向きながらトイレに入った。
ア「よかったね。新しい友達ができて」
高「お前が勝手にしたんだろうが」
すると、高雅は窓の外を見ながら“人間”を思い始めた。
高「・・・・人間って・・・ダメな奴ばかりじゃないんだな。最近、そう思うことが多くなってきたな」
ア「気づくの遅いよ・・・ふふ、やっと見直してくれたね。お陰で疲れたよ」
高「一体何に疲れるんだよ？」
ア「気にしない、気にしない」
高「ったく・・・ッ！？、誰だ！？」
突然、高雅は来た道に向かって声を上げた。
その先には物陰から影が映っていた。
影は高雅に気づかれたせいか、逃げ出した。
高「逃がすか！！」
高雅はすぐに追い始めた。
凛「なんですの一体！？」
凛がトイレを済まし、高雅の声に気づいて慌てて出て来た。
その時だった。

ガラガラガラ・・・！！！

高「なっ！？」

ア「えっ！？」
突如、凛と高雅の間の天井が崩れた。
高「まさか、狙いは姫花！？」
凛「きゃあああああああああああ」
そして、すぐに凛の悲鳴が聞こえた。
高「姫花！？、おい姫花！！！」
ア「コウガ、急いで！！」
高「分かってる！！」
高雅は剣先を瓦礫に当てた。その瞬間・・・

パーン！！

瓦礫が木っ端微塵に吹き飛んだ。
破壊の力によって瓦礫を分子にまで粉々に破壊したのだ。
高「姫花！！、どこだ！？」
元瓦礫のあった先に姫花の姿は無かった。
高「何でだ！？。何で姫花が狙われる必要がある！？」
ア「コウガ！！、あれを見て！！」
高「だからあれじゃ分からねえって前に言っただろ」
ア「窓の外！！。巨人がリンちゃんを連れて行ってるよ！！」
高「何！？」
高雅はすぐに窓の外を見た。
そこには凛が巨人によって連れて行かれていた。
高「あの方向は体育館か」
ア「急いで、コウガ！！」
高「分かってｒうわっ！？」
窓から飛び降りようとした瞬間に窓が壁になった。
高「誰かが創造の力を使いやがったか」
ア「だったら破壊するまでよ」
高「はなから、そのつもりだ」

高雅は破壊の力で創造の壁を破壊し外へ出た。
高「姫花、無事でいろよ」
高雅は体育館へ走り出した。

ここは屋上。
そこには、二人の使いとある人物がいた。
？「虹の契約者があの建物へ向かうぞ～」
？「うるしゃい。そんなことは見れば分かるゅのだ」
？「んでさ～、これはどうするの？」
凛「んぐ・・・・んん・」
凛が口を塞がれて捕まっていた。
屋上にいた人物は銀髪の男性と紫髪の少女と凛だ。
？「もちろん、総司令官に送るゅのだ」
？「でもさ～、こいつってあの虹の契約者の友達だってよ～」
？「それは本当なのでしゅか？。だったら利用するゅのだ」
怪しい笑みを浮かべた謎の使い。

次回、神出鬼没の彼が現る。

## 天獄戦争編　その4、戦う理由

体育館の入口の前。
高雅が扉に手をやるとアリアがそれを止めるように言った。
ア「待ってよコウガ。罠かもしれないよ」
高「罠でも姫花を助けねえと。あいつに何かがあったら俺の所為だからな」
ア「そう・・・わかったよ」
アリアはそれ以上は何も言わずに覚悟を決めた。
高「行くぞ」

ガララ・・・

高「あれ!?」
ア「これは一体!?」
体育館の中は怪我をした天国兵で埋め尽くされていた。
それを回復させるために医療組が必死になって治療している。
余りにも忙しいのか、高雅のことには気づいてなかった。
一人除いて・・・
高「おい、天国は地獄に負けているのかよ!?」
ロ「コウガっちーーーーーーーー」
高「ふごっ!?」
前回予告していたキャラが高雅の真横からタックルして圧し掛かって来た。
蓮「こうが兄ちゃん、また会えたね」
ロ「話が全然違うじゃねえか!!。めちゃくちゃピンチじゃねえか!!」
ログナは高雅の襟元を掴んで頭を振りながら訴えていた。
高「おい・・・ちょ・・・気分が・・・悪・・うっぷ・・・」

高雅は吐きそうになり、口を両手で塞いだ。
ロ「おっと、すまねえ。つい気が動転してたもんだから」
ログナは手を放し、高雅から降りた。
ア「ねえログナ。女の人間を持った黒い巨人がここに来なかった？」
ロ「おいおい、そんなのがここにいたらパニクッてるに決まってんだろう」
高「やっぱり・・・罠！？」
蓮「罠？」
高雅がそう言った瞬間・・・

ブオン！！

突如、昼間にも関わらず真っ暗になった。
そこにいる人々が慌てふためき、ざわめく声が聞こえていた。
高「な・・・何だ！？」
ロ「うおーー、真っ暗だーー」
ア「何が起きてるの！？」
蓮「暗いよー、怖いよー」
完全に光が消えており、目が慣れても何も見えない。
ロ「きっと、地獄に呑まれたんだーー。うわーーーん、お母ちゃーーーん」

パチッ

その音とともに明かりが点いた。
高「電気点けれればいいだけだろうが」
高雅は体育館の電気のスイッチの場所を暗記しており、暗闇の中でも普通に電気を点けることができる。
しかし、分かっていても簡単にはできない。
高雅が主人公だからできる技である。

高「しかし、これはさっきの壁と同じやつだな」
高雅が見渡す限り、外へと繋がるあらゆる出口が壁となっていた。
？「はい、注目～」
突如、ステージの方から声が聞こえた。
その声に反応し、全員はステージの方を向いた。
そこには、あの銀髪の者がいた。
？「どうも～、地獄の者です～」
高「誰だ、あいつ？」
シ「名前はシューロです～。それでは本題ｎ＞ゴンッ！！＜いって～」
？「とろいのでしゅ。さっさとするゅのだ」
突然、何処からともなくあの紫髪の少女が現れた。
高「あのチビ、どっから出てきたんだ！？」
？「聞こえてるゅぞ、虹の契約者！！」
高「あちゃー、地獄耳だったか」
紫髪の少女が指を突き付けて言った為、天国側もようやく高雅に気づいた。
それだけで、天国側はまた慌てだした。
高「落ち着かねえ奴らだな」
シ「それよりさ～、虹さんよ～。あんたはこれを探してんだろ～」
高「ん・・・ッ！？、姫花！？」
凛「んぐ・・・んん・・・」
シューロの手にはさっきまでいなかった姫花が捕まっていた。
高「姫花を返せ！！！！」
シ「じゃあさ～、取引しないか～？」
高「く・・・わかった。話を聞いてやるよ」
どうせ、ろくでもないことだと高雅は考えていた。
シ「じゃ～さ～、あんたの使いと交換ってことでどうだ？」
高「アリアを！？」
シ「ちなみに釘を指しておくけど、３０秒で答えなかったらこの子

死ぬぞ～」
高「なっ！？」
シ「２９～」
シューロはカウントダウンを始めた。
ア「コウガ、私をあいつに渡して」
高「ふざけるな！！。そんなことができるか！！」
高雅は頭をフル回転して考えた。
このまま凛を殺すと、後で再生の力で復活させることができるが敵は地獄の使い。そのぐらいの対策はしている可能性もある。大体、凛に死の恐怖を味あわせたくない。
だったらでアリアを渡すと、その後に攻撃されれば敵は2人、呆気なく殺されるだろう。そして、その後に凛やログナ、蓮田も殺されてしまう。
シ「１５～」
高「・・・・・・」
ロ「・・・・！？」
高「わかった。アリアを渡そう」
高雅は腰の双剣を抜いた。
？「さあ、早くそれを置いてはなれるゅのだ」
高雅はステージに近づき、双剣を置こうとしたその瞬間・・・
ロ「ぎゃーーー、ディバイトがいるーーーーー」
ログナは天を指しながら叫んだ。
天国側全員が天を向く。
シ「何！？」
シューロは天を見上げたが、もう一人は見上げなかった。
？「ふっふっふっふ、そんなハッタリに騙され＞チョンチョン＜るゅと思っているゅのか。まだまだ甘いの＞チョンチョン＜なんじゃ！？。さっきからうっとおしいのだ」
シ「いや、本当にいるぞ～」
？「にゃにゅ！？」

高「噛んだのかマジなのか分かんねえな」
紫髪の少女も天を見上げた。そこには男性に黒い羽を生やしたディバイトがいた。
？「そ・・・総司令官!？。いつからそこにいましゅたのですか！？」
高「つい１０秒前に俺が創った」
シ・？「あっ!？」
高雅は既に敵の裏側に着いていた。
ロ「よーし、俺っちが解説しよう。実はコウガっちが“上に向かってディバイトがいるって言え”という文字を背中に創造していたのだ」
そして、高雅の計画通りになったというわけだ。
高「凛を返してもらう」
そう言った瞬間に高雅の姿が残像に化した。
敵はそれに気づいていない。
シ「この、潰れてしまえー!!」
シューロは突然、大岩を高雅（残像）の頭上に創造した。
大岩は落下し、高雅（残像）を潰した。
シ「ふはははは、これは勲章をもらえるぞー」
高「だったら俺が、テメーの背中にでっかい勲章を刻んでやるよ!!」
シ「何!?、何で後ろにー!!」

ズバババババ!!

シ「ぎゃあああああああああ」
高雅の瞬速の乱舞がシューロの背中を刻みつけた。
その傷は緑淵高校の校章だった。
痛みによって凛を放したのを、高雅は見逃さなかった。
高「姫花を返却させてもらう」

高雅はすぐに凛を抱え、距離を取った。
シ「いっててててて～」
？「何やってるゅんだ！！。それでも地獄の使いなのか！？」
シ「だったら、メビーは見破ったのかよー！？」
メ「うるゅしゃい！！。現場指揮官に逆らっちゃダメ！！。総司令官に言われたのをわしゅれたのですか！？」
シ「俺はテメーが現場指揮官なんて認めてねえんだよー！！！」
メ「にゃんだとー！！！。部下のくせに偉そうだぞ！！」
シ「お前はガキのくせに偉そうだー！！」
高「そろそろいいか？」
シ・メ「えっ！？」
シューロとメビーはそろって高雅の方を向いた。
高「色々教えてくれて、ありがとな」
高雅は双剣を束にして両手で持ち、双剣は少し黒みかかった蒼色に輝いていた。
高「集え、響け、全てを滅する刃と化せ・・・」
この技、あれのパクリです。
高「〇スト・〇ォン・ドラ〇ブ！！！！」
剣先を敵に向けた瞬間、巨大な蒼と黒のレーザーのようなものが放たれた。
高雅はオリジナルで破壊と静寂の力をつけているので、色は本物とは違います。
メ「後は任せるゅのだ」
シ「おい！！、逃げるんじゃねえよ・・・う・・うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
高雅の放った技により、ステージが吹き飛んで空が見えていた。
高「いっちょ上がり」
高雅は双剣を腰に挿し、凛の縄を解(ほど)いてやった。
凛「・・・・ぷはー」
高「大丈夫か、姫花？。怪我とかしてないか？」

高雅は本気で心配していた。
凛「だ・・・大丈夫ですわ・・・・」
高「そうか。よかった」
凛「う・・・／／／」
凛は高雅を安心させるために顔を見て答えたが、高雅の安心した顔を見て少し照れた。
高「なあ、ログナ。あの、紫髪のチビが使っていた力、分かるか？」
ロ「確か、紫髪は空間の力のはずだと思うけど」
高「空間の力か・・・具体的にどういう力なんだ？」
ロ「空間を操り、場所を移動したり物を取り出したり出来る」
高「つまり、人が移動可能な４次元ポケットか」
ロ「なんじゃそりゃ！？」
高「それよりさ、力って何個あるんだよ？」
ロ「不明。余りにも多すぎる為、天国じゃそう答えてる」
高「ふ～ん・・・お、そろそろ撤退しなきゃな」
すると、破壊した壁から天国兵がぞろぞろこちらに向かって来るのが見えた。
高「それじゃ、またな。行くぞ、姫花」
凛「わかりましたわ・・・ひゃあ！？」
突然、高雅は凛を抱えた。
もちろん、お姫様抱っこである。
凛「何をしますの！？／／／・・・早く下ろしてください！！」
高「出口があっこしかねえんだよ。一気に兵共を駆け抜けるからしっかり掴まれよ」
凛「わ・・・わかりましたわ・・・／／／」
そう言って凛は高雅にぎゅうっと掴まった。
凛「勘違いしないでください。仕方なく掴まってあげているだけですからね／／／」
高「さっきから顔真っ赤にしてるぞ」
凛「う・・・うるさいですわ！！。早く行きますわよ！！」

高「へいへい、わかったよ」
そう言って高雅は高速で兵を駆け抜け、校長室へ向かった。

校長室へ向かう途中。
高雅は天国兵を撒いて、アリアと話をしていた。
高（なあ、アリア。レオは天国の方が地獄より力は強いって言ってたよな？）
ア（うん、そうだよ）
高（現状況じゃ、ボロ負けじゃね？）
ア（私もそう思ってる。地獄が何か切札を隠していたってことかな？）
高（その可能性もある。まあ、どっちみち、この戦争を早く止めないとな）
ア（そうだね。大切な友達が危ないもんね）
高（ち・・違う。友達じゃなくて俺の睡眠の為だ！！）
ア（それだけなら、さっさと遠くに逃げてるはずだよ。なのに、ここにいるってことは・・・）
高（だー！！！、うるせー！！。それ以上、何も言うなーー！！）
ア（あははは。ほんと、ツンデレなんだから）
なんやかんや話しているうちに、高雅達は校長室に着いた。
高「到着っと」
高雅は凛を下してやった。
凛「あ・・・ありがとうございますわ」
高「言ったろ。俺には巻き込んだ責任があるって。ただそれだけだ」
凛「それでも、あなたのお陰で私は生きることができましたわ。このご恩はいつか必ず返しますわ」
高「別にそこまでしなくてもいいけどな。取りあえず、早く入れ」

凛「崎村さんはどうされますの？」
高「この戦争を止める。じゃないと、ぐっすり寝れそうにないからな」
凛「ふふふ。では、頑張って来てください。私達はここで待っていますわ」
凛はそう言って地下室へ入った。
高「じゃあな。次に会う時は平和になってる時だな」
凛「そうですわね」
凛は扉を閉め、高雅は絨毯で扉を隠した。
高「さあて、総司令官さんを探しますかー」
そう言って、高雅は校長室を離れた。

## 天獄戦争編　その5、ピンチそして・・・（前書き）

展開が・・・

高雅は校舎から外に出た。
そして、喜びの歓喜を上げていた。
高「やっと、邪魔な奴らから解放されたぜ」
ア「酷くない？」
高「じゃあ、足手まといが消えたぜ」
ア「同じだよ！！」
高「とまあ、無駄話はここまでにして」
ア「何よ？」
高「まずは、ディバイトがどこにいるかだな」
ア「だったら、あのメビーとかいう子から聞けばいいじゃない」
高「そいつもどこにいるか分からねえんだぞ」
ア「大丈夫よ。あっこにいるから・・・あっ、あっこは屋上ね」
すると、高雅は屋上を見上げた。
メ「げげ、ばれちゃってるゅ！？」
高「・・・・・」
高雅は可哀そうな目でメビーを見ていた。
理由はメビーの姿がめっちゃくちゃ派手だったから。
もう、目がちかちかしそうな程に派手だった。
高「安心しろ。お前はあの攻撃から逃げたって分かってるからお前を探すつもりだった」
メ「そ・・・そうにゃのか！？。てっきりもう倒されたと思ってたのだ」
メビーはそれを聞いてめちゃくちゃ安心していた。
高（・・・・よほど無視されたくなかったんだな。てか、そんなに気づいて欲しいなら自分から来いよ）
メ「だとしたら話は早いのだ！！。死にぇ！！」
メビーは殴る構えをした。

ただし、まだ屋上にいるため攻撃が当たる訳ない。
高「おいおい、めっちゃ空間の力を使いますって言ってるじゃねえか。ほんと、ガキだな」
すると、高雅の予想通りに目の前の空間が歪みだし、拳が現れた。
それを、呆気なく捕まえる。
メ「にゃんだと!?・・・うひゃ!?」
高雅はすぐに腕を引っ張り、本体を空間移動させた。
高雅はメビーを地面に投げ捨て、剣先を首に向けた。
高「おい、総司令官はどこにいるんだ?」
メ「おまえなんかに教えてやるゅもんか」
するとメビーは巨大な空間を歪めた。
高「何だ!?」
すると、空間からありえない人・・・いや、使いが現れた。
ラ「お久しぶりね、虹の契約者」
高「ら・・・ラビリンス!?」
いや、ラビリンスだけではない。高雅が倒してきた使いがうじゃうじゃ湧いて出て来た。
ア「どうして!?」
ラ「ふふふ、甘いわね。使いの命はこれよ」
ラビリンスはポケットから宝石を取り出した。
ラ「これを砕かない限り、体さえ再生すれば私達は生き続けることができるのよ」
高「と、いうことは・・・今までゲイボルグしか倒してねえってことかよ!!」
ア「体が消滅しても生きるなんて」
高「おいアリア!!。ちゃんとそういうことは教えろよ!!」
ア「私だって知らなかったのよ。まさか、体が無くなっても生きるなんて」
メ「爪が甘いのでしゅ。さあ、奴をやっつけるゅのだ」
地獄の使い達が一斉に高雅に襲い掛かってきた。

高「へっ、契約者がいなきゃ力はろくに使えねえだろ。そんな奴が束でかかって来たって負けるかよ」
ラ「あら、契約者ならいるわよ」
高「何！？」
すると、遅れて歪んだ空間から人が出て来た。
高「おい。あいつら、緑淵高校の制服じゃねえか！？」
ア「中には先生もいるよ」
そう。空間から出てきたのは全て緑淵高校に関係する者だった。
しかし、皆は目が死んでいて、洗脳されていた。
高「無理やり契約したって訳かよ。力の為に」
ア「酷い・・・」
ラ「この時を待っていたわ。真の契約、発動」
ラビリンスはすぐに契約者の下へ近づき、両目を抉り、食べた。
他の使いも真の契約を発動しようとしている。
様々な契約の仕方の光景は地獄絵図に等しいだろう。
高「テメーら！！、いい加減にしやがれ！！」
高雅は剣を構え、止めに懸かろうとするが一足先に契約を終えたラビリンスが立ち憚る。
ラ「させないわよ。早く死になさい」
ラビリンスは無数の矢を創造し、高雅に向けて放った。
高「それが通用するわけねえだろ」
高雅は蒼い盾で防ぎ、速度の力で間合いを一気に詰めた。
高「もらった！！」
ラ「いいのかしら。私が死んだら、契約者も死ぬのよ」
高「く・・・」
高雅は少し躊躇してしまった。
ラ「その一瞬が命取りよ」
ザクッ！！

高「うがっ！？」
ア「コウガ！？」
高雅の腹には一本の矢が刺さっていた。
高「う・・・ぐ・・・・くそ、昔なら躊躇することはなかったのに・・・」
ア「コウガ！！、大丈夫！？」
高雅は腹に刺さった矢を抜き捨てた。
ラ「ほらほら、休んでいいとは言ってないわよ」
周りを見ると、契約を終えた使いが続々と集まっていた。
高「やべーな・・・これは・・・マジでやべーな」
ラ「お別れね。呆気ない者だわ」
すると、使い全員が武器を高雅に向けて構えた。
ラ「サヨウナラ」
高「やなこった」
高雅は速度の力で空中へ逃げた。
ラ「甘いわよ」
ラビリンスはすぐに逃げた高雅に向かって矢を放った。
高雅は盾でそれを防ぐ。
高「はぁ・・・はぁ・・・」
ア「大丈夫！？。すぐに再生の力で・・・」
高「そんな時間があるならとっくにやってるよ」
既に高雅の周りには翼を生やして追って来た使いが囲み、横から狙っていた。
メ「虹の契約者も、もうおしまいにゃのだ」
一斉に高雅に攻撃を仕掛けてくる。
高雅はそれをなんとか避ける。
高「くそ。あいつらの契約を解除できれば」
シ「喰らえ！！」
シューロはトゲの着いた巨大なボールを大量に創造した。
高「うわあ！？」

その球を高雅に向けて放つ。
高雅は全て紙一重で避ける。しかし、次々と他の使いの攻撃がやって来る。
高雅は空中を速度の力で逃げ続けている。
高「ちくしょー。これじゃ攻撃にも移れねえ・・・うっ」
すると、高雅の視界が突然眩みだした。
高「やべ、出血で意識が・・・」
ア「コウガ!!、しっかりして!!」
アリアも再生の力を使おうと試みるが、盾を創ったり、速度の力で避けたりで再生する暇がない。
ア「どうしよう。このままだとコウガが死んじゃう」
兵「貴様ら!!。思い通りにはさせんぞ!!」
すると、追い打ちを掛けるかのように天国兵も現れた。
このまま天国兵が地獄の使いを殺してしまっても人は消えてしまう。
絶体絶命に追い込まれてしまった高雅。
高「はぁ・・・もう・・・ダメか・・・・」
高雅が諦めかけたその時・・・
セ（コウガ様。しっかりしてください!!）
高（せ・・・セバスチャン!?。何で急に!?）
突然、セバスチャンから意思会話を使って話してきた。
意思会話は多人数で話すことはできないため、アリアは聞こえてない。
セ（あなた方の様子は天国（こちら）でも見ています。それより、真の契約を発動するのです）
高（だけどよ、アリア自身が発動の仕方をしらないんじゃあ無理だろ）
セ（その方法を見つけました）
高（マジ!?、どうやんだ!?）
セ（しかし、本当かどうか分かりません。その本では全ての力を司る使いの解放方法と書いておりましたので。それがアリア様とは限

りません）
高（それでもいい。何をすればいいんだ）
セ（それは・・・契約者の口を捧げよ、とのことです）
高（アリアに俺の口を取らせろってことかよ。口って取れる物か？）
セ（いえ、現世で言う“セップン”というものです）

高雅の頭の中：
セップン・・・せっぷん・・・接吻・・・・・・ってキス！！！？？？。

待てこら！！。確かに唇を奪うとか言うけど何か違うだろ！！。普通は男が女の唇を奪うって感じだろ！！。明らかに逆だろ！！。大体、何でこんなにも強い力がキス一つで解放されんだよ！！？？。もっとこう・・・寿命を半分捧げるとかさ、地獄共（あいつら）の中にもいたけど腕を捧げるとかさ、臓器一個捧げるとかさ。遥かにアリアの力はすげーのにこんな方法じゃ不釣り合いだろ。地獄の奴らは理不尽だーーーーって叫ぶぞ。それに、キスとか早すぎだろ！！。まだ３０話も経ってないのにこの展開は何だ！！？？。それに俺はアリアのことなんか・・・・・・思ってないとは言い切れない・・・・・だーーーーーーーーー？？？？？？？？？・・・

セ（コウガ様？）
高（・・・わかった。やってみる）
高雅は取りあえずやってみようと決めた。そして、セバスチャンとの連絡を断とうとした。
セ（お待ちください。もし、解放することができるのであったなら、その力の中に虚無の力があるはずです。それを使えば契約を強制的に無かったことにすることができます）
高（それは、逆転の兆（きざ）しが見えてくるな。だが・・・アリアはどう思うだろう・・・俺なんかとキスして・・・）
セ（大丈夫ですよ。では、頑張ってください）

そう言ってセバスチャンは高雅との連絡と断った。
ア「コウガ、さっきから黙り込んでどうしたの?。まさか、もう血が無くて意識が!?」
高「いや、後2分は持つ。その間に隙を作るぞ」
ア「分かった」
まるで○方の弾幕のように次々と攻撃が来る最中、高雅はあるものを創造した。
高「出てこい!!、ウ○ムル○ス!!」
それは亀のような白い怪物だ。
まあ、分かる人ならこれで十分でしょ。
分からない人ならガ○ラでも想像してください。
それを創った場所は敵が大量にいる頭上だった。
高「押し潰せーーー」

ドゴーーン!!

とてつもなく鈍い音がした後にもの凄い量の砂煙が上がった。
重量は死なない程度に創ってある。
他の使いは天国兵と殺りあっていた。
今、高雅を攻撃する者はいない。
高「よし、今のうち・・・うっ・・・」
ア「コウガ!?」
高「やべ・・・2分・・・・・・もた・・・な・・」
視界が黒く染まり始めたその時・・・
ロ「コウガっち!!」
高「!?・・ログナ!?」
気づけばログナと蓮田が駆けつけていた。
蓮田との契約の力によって高雅の血と傷が一瞬で再生した。
高「サンキュー、ログナ」
高雅はすぐに安全な場所に着地し、アリアを人間の姿に戻した。

ア「どうしたの!?。何をするの?」
高「今から真の契約を発動する」
ア「でも、やり方が分からないよ」
高「さっき逃げてる最中にセバスチャンと意思会話をしていたんだ。その時に教えられた」
ア「だから、黙っていたのね。それで、そのやり方は?」
高「・・・・っ～～～／／／」
ア「コウガ?」
高雅は思い出しただけで頭をがむしゃらに掻き、顔が赤くなった。
そして、決心をした。
高「こうするんだ!!／／／」
高雅はアリアの肩を掴んだ。
ア「へ!?・・・・んっ!?」
ほぼ強引に高雅とアリアの唇が重なった。
ア「!?、!!?!?、!!!!??」
アリアは何も理解できず、頭の中が真っ白になってゆく。
すると、アリアが蒼く輝き始めた。
メ「にゃんじゃ、あれは!?」
ロ「ヒューヒュー、お熱いねー・・・だけど、あの光。まさか真の契約を発動するとはねえ。一体、どんなものなんだか」
蓮「こうが兄ちゃんとアリアお姉ちゃんがキスしたら光ったよ、ログナ。キスってすごいね」
ロ「実際は光らないぞ。そこをちゃんと踏まえておけよ」
すると、光の輝きがだんだん小さくなっていった。
光が消えた時、そこには何も変わってない蒼い双剣を持った高雅がいた。
高「さーて、反撃開始だ!!」

## 天獄戦争編　その5、ピンチそして・・・（後書き）

明日から学校行事であの旅行に行ってきます。
ですから、１週間更新できません。
もし、１週間経っても更新しない場合は怪我したか・・・です。

## 天獄戦争編　その6、早とちり（前書き）

無事、旅行から帰って来ました。怪我もなく微妙な一週間でした（笑）。

# 天獄戦争編　その6、早とちり

光が消え、現れた高雅に変わった様子は見ては分からない。
アリアも契約の力と全く同じ双剣だ。
高「すげー、どんどん頭に力が浮かんでくる」
ア「・・・・・・・・」
高「もしもし、アリア。聞いてるか」
ア「へ!?・・・え!?・・・ふ・・ふえ!?／／／」
高「落ち着け!!。そんなに焦るとこっちまで恥ずかしくなる。せっかく、前話をかっこよく終わらせたのに」
ア「ごごごご・・ゴメン／／／」
蒼い剣は少し赤くなっていた。
高「とにかく、まずはあいつらを止めるぞ」
ア「う・・・うん。わかっちゃ」
高「・・・大丈夫か・・・」
すると、あの召喚したでか亀が消え、潰されてたものが高雅に向かって来た。
ラ「よくもやったわね!!」
シ「ぶっ殺してやるぞー!!」
敵軍が次々と攻撃を構えて向かって来た。
高「じゃあ、手始めに・・・」
すると、高雅は何かの衝撃に耐えるように片足を後ろに出し、片手で両刀を持って、空いている手を前に出した。
高「虚無＋波動＋静寂の力!!」
すると、高雅の出した手から目には見えない巨大な波動を出した。
それは、前にいるもの全てに当たるような大きさだ。
ラ「う・・・何?。あれが攻撃?。まるで赤子に押されるようだったわ」
実は、波動の力は形が小さく、かつ力が強いほど威力が上がるもの

で、巨大すぎるものは威力が激減する。
当然、高雅はこのことを踏まえている。
ラ「さあ、止どめよ・・・あら!?、力が・・・はい・・らない!?」
突然、高雅に攻撃しようとした使い全員が倒れた。
それだけではない。それ以外の使いも天国兵も無理やり洗脳したと思われる緑淵高校の人達も、あろうことかメビーまでも倒れていた。
ラ「な・・・何をしたの・・・」
高「テメーらには最大の静寂の力を与えた。そして、緑淵(あいつら)高校人には虚無の力を与えた」
ラ「きょ・・・虚無ですって!?」
ラビリンスはありえないような顔をした。
高「もう、お前らの契約は消えているはずだろうな」
ラ「お・・・おのれ・・・」
高「もう、お前らには用は無い」
高雅はもう一人倒れている元へ歩み寄った。
高「おい、総司令官・・・いや、ディバイトの場所を言え!!」
メ「う・・・うるゅしゃいのでしゅ!!。まだ負けてないのでしゅ!!」
高「この期に及んで何を言う。さっさと言え」
メ「死んでも絶対言わないのでしゅ!!」
高「これ以上話しても無駄か・・・」
高雅は目を瞑(つぶ)り力を溜め始めた。
高「破壊＋波動の力」
すると、高雅を中心に円状に波動が伝わった。
そして・・・
パリパリパリパリ・・・・
使い達の命である宝石が次々と壊れていく。

メ「にゃ・・・にゃんだとーーーーーーーーー」
高「あばよ、ちゃんと宝石壊したからもう会うことはないだろう」
メ「ち・・・ちゅくしょーーー・・・」
メビー、その他の使い消滅。
ちゃんと緑淵高校の人達は生きている。
ちなみに天国兵も生かしてある。
高「終わったな。戻っていいぞ、アリア」
高雅がそう呼びかけるがアリアは返事をしない。
ア「ポカ～ン」
高「なに口に出して言ってんだよ。早く戻れよ」
ア「へ!?・・・う・・うん」
アリアは人間の姿に戻った。
高「まだ顔が赤いぞ。早く落ち着けよ」
ア「だ・・・だって・・・私の・・ファーストk「だーーー!!、それを言うな!!。俺が悪かったから!!」え!?・・・」
高雅はそれ以上は聞きたくなく、無理やり割り込んだ。
高「そうだよな。ファーストキスは大切な人・・・いや、天使か、としたかったよな。天使も人間と同じ考えだとは知らずに悪い!!」
高雅は深々と頭を下げた。
ア「そ・・そんなことは・・・・・・ないよ・・・／／／」
高「え!?」
高雅は顔を上げてアリアを見た。
アリアは自分が言ったことにふと気付いた。
ア「だ・・・だから、契約者と使いの仲なんだからいいよ。仕方がなかったんだし許してあげるよ」
高「・・・・いや、許されるわけねえ」
ア「へ!?」
高「そんな理由で俺とのキスをいやいやさせてしまった。これほど重罪なことはねえよ」
ア「べ・・・別に嫌じゃ・・・」

ロ「はいー、空気ブレイカーの俺登場！！」
ログナが前振りもなく乱入した。
ア「・・・・・」
ロ「え、何アリアっち？。そんな空気読めよ的な目で見ちゃって」
蓮「すごいね。敵をあっという間に倒しちゃった」
高「はは、そうだな。だけど、目的が達成できなかった」
ロ「どうせ、総司令官の場所探しだろ。だったら当てがあるぜ」
高「本当か！？」
ロ「今、緑淵商店街だっけ？、そこが激戦区になってるみたいだぞ」
高「そうか・・・そこに行ってみる価値はあるな」
ロ「ちゃちゃっと行って、総司令官ぶっ飛ばして、こんな戦争終わらせてくれ」
高「ああ・・・あっ！！、一つ頼みがあるんだが」
ロ「何何？」

斯く斯く然然・・・

ロ「ＯＫＯＫ。絶対行くぜ！！」
高「任せたよ。んじゃ行くぞ、アリア」
ア「うん、分かったよ・・・・」
アリアは落ち着きを取り戻したが俯いており、どこか元気が無くなっていた。
高「どした？。元気ないぞ」
それを覗き込むように高雅が声をかける。
その距離、わずか３０センチ
ア「べ・・別に何でもないよ。だだだ・・だから心配しなくても大丈夫だよ／／／」
それに驚き慌てふためき、顔を逸らすアリア。
高「・・・やっぱ、ファーストキスは大切だよな・・・」
ア「そうじゃなくｔ「もういい、何も言うな。とにかく、商店街に

行くぞ」うん・・・」
アリアは契約の力で双剣になり、高雅の腰に挿した。
高「さあ、激戦区に向けて出発だ」
高雅は創造の力で空中の所々に足場を創り、速度の力でそこを跳びながら駆けた。
ア（コウガがファーストキス・・・嫌じゃないのに・・・）

一方、こちらは地下室でございます。
中は薄暗く、教室一つ分の広さはあります。
A「あーーー、暇だーーーー」
夢「うるさい。静かにしなよ」
B「腹減った～」
C「ゲームして～」
D「ニコ動見て～」
E「二次元行きて～」
何もない部屋で購買部組はほぼ現実逃避気味になっていた。
夢「たっく、だらしないったらありゃしない」
龍「でも・・・食料が無いのはちょっと・・・」
凛「そうですわね。一体何日掛かるか分からないですもの」
空腹に苦しみながら会話をしていると・・・

ギイイイイ・・・

全「!?」
突然、扉がゆっくりと開き始めた。
凛「まさか!?、気づかれてしまいましたの!?」
龍「どうしよう!?・・・」

D「ここは俺の出番だ！！！」
Dが調子に乗って扉を引っ張ると・・・
ロ「のわあああああああああ」
D「ぐわっ！？」
ログナがDを巻き添えにして階段を転がり落ちて来た。
ロ「いててて、手荒な歓迎だな」
凛「あなた、誰ですの？」
ロ「俺っちはコウガっちの味方、ログナーマン！！」
一同、意味不明な顔をしていたが一人だけ理解して爆笑していた。
D「ぶはははは。それ、○イバーマンの真似だろ？」
ロ「おお、知っているのか？」
D「遊○王ＭＡＤじゃ人気だからな」
ちなみに、何故ログナがこんなことを知っているかと言うと、高雅の家に遊びに行った時に見たからである。
・・・はい、これも即席設定です。ごめんなさいｏｒｚ。
凛「ふざけないでくださる！！。私達をどうするつもりですの！？」
ロ「落ち着けって。かわいい顔が台無しだぞ。俺っちはさっきも言った通りコウガっちの味方で食料を届けたわけ」
凛「本当ですの？。毒とか入っているのではありませんの？」
ロ「疑り深いお譲さまだな、こりゃ」
凛「そもそも、崎村さんの味方である証拠はどこにありますの？」
ロ「じゃあ、俺っちが敵である証拠はどこにある？。大体、敵だったらお前ら人間如き、すぐに殺すか捕えたりするだろ」
凛「その物の言い方、あなたは人間ではないってことですわよね？」
ロ「俺っちは天国の使いだ。アリアっちと同じな」
蓮「ログナ、大丈夫？」
蓮田が扉からひょっこり顔を出して様子を伺った。
凛「子供！？」
ロ「おう、この通り無傷だぜ。しかし、中々信用されなくてな」
蓮「だったらこれを使って。こうが兄ちゃんから預かった物だから」

そう言って蓮田は小さなバッチをログナに投げ渡した。
ロ「よっと・・・これは、何だ？」
凛「それは、崎村さんのネームバッチ！？。どうして！？」
ロ「だから、俺っちがコウガっちの仲間だからだ」
凛「・・・・まさか、殺して奪った・・・」
ロ「どうしてそうなるんだよ！？・・・おや？」
その瞬間、バッチが光り始めた。そして・・・
高「えーあー、上手く聞こえてるかな？」
バッチから高雅の姿が立体映像として映し出されていた。
凛「崎村さん！？」
高「まあ、聞こえてなくても取りあえず用件を言うか」
凛「崎村さん、一体どういうことですの！？」
高「ゴホン、これは俺の声が録音された立体映像つきのネームバッチだ。ちょっと、力を使っていじったわけ」
凛「どういうことですの！？」
高「ちなみに、これは録音なので実際に俺と喋っているわけではない。そこんとこ注意してくれ」
凛「そういうことは初めに言って欲しいものですわ。お陰で無視されてるみたいで腹が立ってしまいましたわ」
高「まあ、どうせ早とちりした姫花が今頃腹を立てていることだろう」
ロ「すげー。予想通りだぞ」
凛「うるさいですわ！！」
高「んじゃ、本題に入るぞ。俺は今から激戦区に行って来る。てか、もう向かってると思うけど。詳しくは、そこにいるログナって言う裏切り者から聞いてくれ」
凛「ログナさん、裏切り者ってどういう意味ですの？」
ロ「ちっがーーーう。コウガっちが嘘を言ってるんだよ！！。おい待て。カッター取り出すなよ。殺気がバリバリ出てるんだけど！！」
凛「崎村さんの仇！！！！」

凛がカッターを振り回しながらログナを追いかけた。
ログナは全力疾走で地下室を出たが、凛は諦めずに追いかけた。
高「どうせ、姫花の早とちりでログナを追いかけまわしてることだろうな」
龍「これって・・・本当に録音・・・なの？」
高「ちゃんと、ログナとそこにいるはずの子供の蓮田はいい奴だから安心しろ。そいつらが届けた弁当を食いながら戦争が終わるのを待ってろ」
A「よっしゃーーー。飯だーーーーー」
Aに続き購買部組が弁当を取り、むしゃくしゃ食べ始めた。
高「ちなみに、8個の弁当の中(うち)5個にご飯の中にワサビを仕込んでるからな」
購組「ぎゃあああああああああああ」
購買部組が涙を流しながら鼻を押さえていた。
高「どうせ、腹減った購買部共が最初に取るから上5個に仕込んでおいたが、上手くいった？」
夢「ほんまにリアルタイムじゃないの？」
高「じゃ、俺からは以上。決して外に出るなよ」
すると、高雅の立体映像は消えた。
龍「姫花さん・・・外に出ちゃったよ」
夢「・・・そうだよね・・・取りあえず、弁当でも食べとこうよ」
夢と龍子は凛のことを心配しつつ、もがき苦しむ購買部組を横目に見ながら弁当を食べた。

# 天獄戦争編　その7、幻

高雅はビルの屋上を駆けては次のビルへ跳び、とどかなければ創造の力で足場を作ってまた跳ぶの繰り返しだった。
行く途中には両兵の屍が大量に転がっていた。
ア「ねえ、どうして空間の力でその商店街へ一気に行かないの？」
高「行く途中にどっちかの総司令官に会えるかもしれないだろ。大体、もう真の契約を解除してるだろ。そんぐらい分かれよな」
ア「ご・・ゴメン」
高「別に謝るほどじゃねえよ。それより、もうすぐ着くぞ」
ア「うん。だんだん嫌な声が聞こえてくるよ」
緑淵商店街に近づくにつれて威勢の声と悲痛の声が聞こえてきた。
高雅は緑淵商店街が見えるビルの屋上に止まって、様子を見た。
高「さすが、激戦区だな。半端ない数だ」
そこは陸も空も兵に覆われている場所であった。
もはや商店街は殺しと死体が転がっている地獄絵図と化している。
ア「酷い・・・」
高「戦争なんて皆こんなもんさ」
兵「貴様、ここで何をしている！？」
高雅の周りに天国兵が数人囲んでいた。
高雅は相手をせずにあたりを見まわしている。
すると、アリアが何かを見つけた。
ア「ねえ、あれ・・・3時の方向に天国兵が集まっている場所があるよ」
高「多分、天国側の拠点だろう。取りあえず、そこに行ってみるか」
兵「貴様はコウガか！？。ならば容赦はしない！！」
天国兵が高雅に襲い掛かってきた。
ちなみに、全員片手剣である。
高「さっさと行くぞ、アリア。こんなザコキャラに構ってる暇など

ない」
ア「そうだよね。早く戦争を終わらせてリュウコやリンちゃんと遊ぼう」
高「そんな気は更々（さらさら）ねえよ」
高雅は空に跳び上がり、双剣を構えた。
兵はすぐに反応して高雅を追いかけた。
高「テメーらと戦ってる暇がねえんだよ。
すると高雅は双剣に創造＋静寂の力を加え、刃が１０メートルの蒼い双剣を創った。
高「おらよ！！」
高雅がそれを振り回す。
それは絶大な範囲を誇る剣だ。
兵「く・・・のわ！！」
兵をなぎ払うように斬る。
それだけで高雅にまとわり付く兵は全滅した。
高「よーし、天国の拠点らしき場所に行くぞ」
高雅は空中に足場を創造し、天国の拠点らしき場所まで駆けた。

天国兵の拠点は騒々しく慌てふためいていた。
兵「やばい。もうそこまで地獄共が攻めて来てる」
兵「総司令官！！。どうすればよいのですか！？」
天国兵の士気は消えかかっていた。
総「ええい、慌てるな！！。まだ防衛ラインは何一つ突破されておらんだろうが！！」
兵「しかｓ「しかしがあるか！！。喋る暇があるなら敵兵を一人でも多く倒せ！！」は・・はい」
兵達は渋々部屋を出た。

総司令官は寄って来た兵を捨てるかのように戦場に赴かせた。
総（だが、このままではまずいな。何か策を打たなければ・・・）
一人になり考え始めたその矛先に扉が強く開けられる。
兵「総司令官、大変です！！」
総「何だ！？。私は忙しいのだ。早くしろ」
兵「そ・・それｇ〈グシャ！！〉ぎ・・・」
兵の胸から心臓を握った手が貫通していた。
その手はそのまま心臓を握り潰した。
？「天国共はこの程度か。弱くなったものだ」
崩れ落ちる兵の陰から見えた者は・・・
総「でぃ・・・ディバイト！？」
デ「久しぶりだ。お互い総司令官とは大変なものだ」
総「何故ここに！？。防衛ラインは何一つ突破されてないはずだ」
デ「貴様の情報部隊は不届きだな。この拠点は既に落とされているぞ」
総「何だと！？。そんなバカな！？」
デ「ふっふっふ・・・後は貴様だけだ」
ディバイトが片手を剣に変えて近づく。
総「く・・・来るな！！」
総司令官も腰の鞘（さや）に挿しておいた刀を抜き、構える。
デ「ふっふっふ・・・」
総「来るなーーーー！！！！」

ザシュッ！！

総司令官の斬撃がディバイトの首を跳ねた。
総「やった・・・やったぞ。敵の総司令官を倒したぞ」
デ「そうか。それは良かったな」
すると、扉からぞろぞろとディバイトの軍団がやって来た。
デ「ふっふっふ・・・」

総「うわあああああああああああ・・・」

変わって廊下。
潜入した高雅は適当に彷徨(さまよ)っていた。
高「中は手薄だな。外はめっちゃ兵がいたのに中は全然だな」
ア「それだけ危ないってことじゃないの？」
高「そしたら普通は逆だろ。でもよ、天国の方が力が強いんじゃねえのかよ？」
ア「確かに。レオ君はそう言ってたよね」
天国側が負けている理由を考えていると・・・

うわあああああああああ・・・

断末魔が聞こえた。
高「な・・・何だ!?」
ア「今の声・・・聞いたことがある」
高「俺もなんかある。えっと・・・そう、アリアの親父だ」
ア「会いたくないけど取りあえず行ってみよ」
高雅は断末魔が聞こえた方へ駆けた。
高「なんか、やな予感がするな」
ア「別に親が死んだって関係無い」
高「酷いな・・・まあ、相手も殺そうとしてたもんな」
ア「そうよ。あんなのは親なんかじゃない」
すると、半開きの扉があった。
高「ここか？」
高雅はそっと扉を開けた。そこには・・・
高「な・・・これは・・・」

血がそこらじゅうに飛び散り、天国兵の死体が山積みになっていた。
高「何だこれ!?。首がねえのもあるぞ」
ア「コウガ、上!!」
高「何!?」
高雅はアリアに促されて上を見た。
そこにはアリアの父親がジャンプ斬りをしようとしていた。
父「死ねえええええええええええ」
高「おっと。当たるかよ」
高雅は軽いステップで避けた。
父「まだ創造の力で創っておったか」
高「何言ってんだ、こいつ?」
父「王として、貴様をこの世から消してやる!!」
高「おいおい、目が死んでるぞ」
ア「何だか、コウガを見ていないみたいよ」
高「う~ん・・・幻覚でも見てんじゃねえか?」
ア「幻覚!?。一体誰が!?」
高「さあ~、そこまで分かるかよ」
父「貴様、死んでしまえええええええええええええ」
アリアの父親は刀を赤く光らせた。
高「ん、炎の刀でも創る気か?」
ア「違う。あれは活性の力だと思う」
高「ふ~ん、よくわかるな。何でだ?」
ア「前にログナから教えてもらったの。赤は活性の力だって」
高「そうえば、あいつは力を髪の色で判断してたな」
父「見せてやろう。これが私の最高の力だ!!」
高「いきなり本気宣言かよ。・・・おわ!?」
いきなり地鳴りが発生した。
ア「コウガ、今度は外!!」
高「はあ!?」
高雅は窓から外を見た。

そこにはラ〇シャ〇ロン級の巨大な龍が存在していた。
分からない人は神龍でもいいよ。
それでも分からない人は適当に。
高「投げやりだな。それよりアリア、どこが活性の力だよ!?。めっちゃ創造じゃん!!」
ア「例外もあるってログナは言ってたよ」
高「都合がよすぎるだろ・・・あっ」
巨大な龍が尻尾を拠点の上に振り上げていた。
高「マジかよ・・・」

ドゴーン!!

尻尾が拠点を押し潰した。
高「あぶなかったな」
高雅は外に逃げ出していた。
兵「あれは・・・総司令官のドラゴン!?」
兵「総司令官が動き出したぞ!!」
兵「これで地獄の奴らもお終いだな」
外にいた兵達はドラゴンに気づき士気が上がっていた。
父「まだこんなに分身を創っておったか。キングレックスよ、全てを焼き払え!!」
アリアの父親はドラゴンの頭の上に乗っていた。
すると、ドラゴンの口周りの空気がメラメラと揺れ始めた。
高「あれ、絶対に炎を吹くな」
次の瞬間、高雅の予想通りにドラゴンは炎を吹いた。
超広範囲の炎は目の前を全て火の海に変えた。
兵「ぎゃあああああああああ」
兵「な・・・何故だ・・う・・うわあああああああああああ」
拠点付近にいた兵は全て燃えてしまった。
父「ははははは・・・これなら分身ごと燃えてしまっただろう。ふ

ふふ・・・勝ったぞ。地獄の総司令官を討ったんだ」
高「ご立腹のようだな」
父「何！？」
高雅は空中に足場を創造して悠々と立っていた。
炎を吹く瞬間にドラゴンの後ろに回り込んでいたのだ。
高「取りあえず、黙らせてやる」
高雅は双剣を構えた。

# 天獄戦争編　その8、気持ち

地面が火の海に化している中にドラゴンは立っていた。
夕日と共に見るその景色は橙色一色だ。
高「取りあえず、あのドラゴンに静寂の力でも打ち込んで大人しくさせた後、頭におる現実逃避中のダメ親を打ちのめすか」
ア「そうよ。娘が恐ろしいことを見せつけよ！！」
高「俺の毒舌はスルーかよ。それに、娘って恐ろしいものか？」
ア「そんなことはいいから行くよ！！」
父「キングレックスよ。奴を倒すのだ！！」
キ「グオオオオオオウウウウウウウウウ」
空へ雄叫びを上げると小隕石が次々と振りかかって来た。
高「創造の力か。じゃあ、パクらせてもらうか」
高雅も空へ剣をかざすと小隕石を降らせた。
お互いが出した小隕石は次々と空中でぶつかり合い、砕け散った。
小粒まで小さくなった石が火の海に降り注ぐ。
高「今度はこっちから行くぜ」
高雅は片方の剣を空高く投げ上げた。
父「何だ一体？」
アリアの父親もドラゴンも投げた剣を目で追う。
それが高雅の狙いだ。
高「こうまで上手くいくと情けないな」
高雅は既にドラゴンの腹の下に潜り込んでいた。
高「これで黙っとけ！！」
静寂の力を最大まで溜めこんだ剣を腹へ突き刺そうとするが・・・

ガキン！！

高「っ～～～！！」

刺さることは無かった。
高「うう・・・かてーな。腕が痺れる」
父「ははははは。そんなことはお見通しだ。キングレックスの体は活性の力で鉄壁になっておる」
高「だが静寂の力が入っているはずだ。もうこのドラゴンは動けない」
父「甘い考えになったな、ディバイトよ」
高・ア「ディバイト!?」
その言葉に二人は隙を見せてしまった。
父「今だ、キングレックスよ!!」
ドラゴンは自分の腹にめがけて炎を吹いた。
高「うわっ!?、あぶねえ!!」
咄嗟に盾を創り炎を吸収した。
高「静寂の力が効いてない!?」
父「貴様の力はこっちの静寂の力で中和してある。まさに絶対防御」
高「マジかよ・・・ちなみに、俺の攻撃はまだ続いていたりするぜ」
父「何だと!?」
高雅が最初に投げた剣はアリアの父親に頭上めがけて落ちてきていた。
すると、ドラゴンが炎を吹くのを止め、頭を動かし剣を避けた。
父「キングレックスの知力は人間の1万倍とも言われておる。そんな行動などキングレックスの前では無意味だ・・・おや、どこに行った?」
高雅は落ちて来た剣を取り、いったんビルの屋上に隠れていた。
高「厄介なドラゴンだな。一体どうすればいいのだか」
ア「ねえ、虚無の力って契約解除以外に使えないの?」
高「感じた限りじゃ全てを無に変えるって感じだったな。もしかしたら敵の力を消すこともできるかもな」
ア「だったら真の契約をつk「ダメだ」どうして?」
高「またキスをしなくちゃならねえんだぞ」

ア「そ・・・それはそうだけど・・・このままじゃ勝てないかもしれないよ」
高「まだ決まった訳じゃない。大体、俺とキスなんて嫌だろ？」
ア「そ・・そんなことはｎ「それは使いだからだろ。もっと自分に素直になれ」だ・・だから・・・」
父「見つけたぞ！！」
見つけると同時にドラゴンがビルにパンチをした。
支える力を失ったビルは崩れ落ちてゆく。
高「うわとととと・・・」
バランスを崩した高雅は無防備だった。
ア「コウガ、危ない！！」
隙を突いたドラゴンは高雅を尻尾で巻きつけようとしていた。
高「なっ！？・・・ぐわ！！」
力強く巻きつけられた高雅は双剣を落としてしまった。
ア「コウガ！！」
アリアは人間の姿になり、高雅に近づいた。
高「バカ！！。来るな！！」
ア「え！？・・・はっ！？」
アリアが気づいた時には既にドラゴンの手が間近に会った。

ドゴッ！！

アリアはもろに喰らい、５００メートル先のビルまで吹き飛ばされた。
ア「がっ・・・」
ビルに叩きつけられたアリアは地面に落ち、気を失った。
高「アリアーーーーーーーーーー！！！！」
父「今度はこっちの番だ。殺れ、キングレックスよ」
ドラゴンは尻尾を大きく振り回した後・・・

ドゴーーン！！

巨大な砂煙を上げながら地面に叩きつけた。

高「ぶはっ・・・」

高雅はあまりの衝撃に口から血を吐いた。

高「ぎ・・・が・・・・・が・・」

絶大な痛みにまともな声を出すことができない。

父「王に逆らう哀れな者よ。死んで償うがよい」

ドラゴンは再び尻尾を振り上げ、アリアがいるビルの方へ高雅を投げた。

高雅もビルに叩きつけられ、地面に落ちた。

高「あ・・が・が・・ぐ・・・」

辛うじて意識が残っていた。

高「う・・ぐ・・・・ぶえっ！！」

喉に残っていた血を全て吐き出した。

高「はぁ・・・はぁ・・・普通は・・死んでるよな・・・・やべー・・体中の感覚がねえ・・・・痛みを通り越してるのか・・・・」

高雅は残っていた力で首を動かした。

その先には手の届く距離にアリアが眠っていた。

高「・・・・何で俺ってこんなことしてんだろ・・・」

ふと思った疑問は高雅の意識を遠のかせるものだった。

高「親が・・・こいつを送って・・・・巻き込まれたんだよな・・・・こうなることを・・・・・親は・・わかってたんだろうか・・・・俺を・・どうにか殺して・・一緒に・・・なりたかったんだろうか・・・・それなら・・・もう・・がんば・・る・・ひつ・・よ・・う・は・・・・・」

高雅はゆっくりと瞼(まぶた)を閉じていった。

ア「ち・・違う・・・」

高「！？」

高雅は重い瞼に関わらず目を一瞬で見開いた。

目先にはアリアがこっちを見ている姿があった。
ア「そんな訳ない・・・よ・・私は・・・・コウガの・・人生を・・・・見直させ・・・るた・・めに来た・・・のよ・・・」
高「おか・げで・・・死に・・・かけだ・・・けど・・・」
ア「・・・・ごめんなさい・・・・」
高「・・・いまさ・・ら・・あやま・・・て何に・・・なる・・・」
ア「そうだ・・・よね・・・・私ね・・・・・ふぁーす・・・・・・ときす・・コウガ・・・・でよかった・・・」
高「え・・・・」
ア「だって・・・・コウガの・・こと・・・・s「よっ」・・・・」
アリアの声は神出鬼没キャラによって消された。
ロ「どうした?。油断してやられたか?」
高・ア「・・・・・・・・・」
ロ「大丈夫だ。その目つきは回復してくれってことだろ。まっかせとけ」
ログナは勝手に解釈して高雅とアリアの傷を再生した。
すると高雅とアリアはすぐに立ち上がり・・・

バゴッ!!

ロ「んが!?」
高雅はログナの頬に右フック一発喰らわせた。

バシン!!

ロ「んぎょ!?」
アリアはログナの頬に左ビンタを喰らわせた。
ログナの両頬にはパーとグーの後がくっきり残っていた。
高「出るなって言ったはずだろうが!!。俺の音声を聞いてなかったのか!?」

ア「空気読んでよ!!。まったく!!」
ロ「ご・・ごめん。マジでごめん。聞いてる途中で疑り深いお譲ちゃんが襲いかかって来て最後まで聞いてなかったんだよ。後アリアっちの方は・・・意味不明」
高「まあ、お前の神出鬼没スキルのお陰で助かったからこれで済ましてやる」
ア「私は許してないけど・・・」
高・ロ「へ!?」
アリアは片腕を剣に変え、ログナに向けた。
ア「あなたは恋する乙女の敵よ!!!」
アリアはログナに襲い掛かった。
ロ「ぎゃあああああああああああ。第2回があったかあああああああああああ」
ログナは全力疾走で逃げて行った。
高「アリア、追うなよ。優先順位を考えろよ」
ア「わかってるよ」
アリアは追わずにログナの背中を見ていた。
高「とにかく、空気になってる敵さんを倒すぞ」
ア「でも、どうやって倒すの?」
高「出し惜しみせずに真の契約を使うか?」
ア「どうして疑問形なの?」
高「俺は別にいいけど。お前はどうなんだよ・・・その・・・キスするの///」
高雅は目を逸らしながら言った。
ア「いいよ」
高「きっぱり言ったな」
ア「だって、さっきも言ったでしょ。ファーストキスはコウガで良かったって」
高「どういう意味だよ?」
ア「だから、コウガのことがす・・・」

アリアはたった二文字の言葉を考えるだけで顔が赤くなった。
高「す?、何だよ?」
ア「す・・・す・・・・・すごくかっこいいからだよ。そんな人とキスしたら誇らしいでしょ?／／／」
高「そんなもんか?」
ア「そんなもんなの。だからほら・・・」
アリアは目を瞑って顔を近づけた。
高「なんか納得いかねえな。まあ、やっていいってことだよな」
高雅はアリアの肩を持ち、優しく唇を重ねた。
前回同様、アリアは光り輝き何も変わらない双剣になった。
高「さあて、わざわざ待ってくれている敵さんを倒しますか」
ア「私達の本当の力を見せてやろうよ」
高雅はドラゴンの所まで一気に駆けた。

☆おまけ☆

駆けている途中、アリアはこんなことを思っていた。
ア(どうして好きって言えなかったのだろう。どうしてあの時は言えたんだろう。結局ログナに邪魔されたけど・・・。でも、言うことができていた。違いは何だったんだろう)
ア「・・・恋ってほんと複雑・・・」
高「なんか言ったか?」
ア「な・・何でもないよ」
高「そうか。ちゃんと次回は集中しろよ。一気に倒すからな」
ア「わかった」

# 天獄戦争編　その9、間違い

気がつけば既に夜になっていた。
月が照らすまでもなく、炎の明かりは商店街全てを照らしていた。
その先にはドラゴンもいる。
高「・・・あれ、なんか変じゃね？」
ア「どこが？」
高「頭にいる変人が」
アリアの父親は頭を抱え、もがき苦しんでいた。
父「ぐううううおおおおおおおお」
高「なんで辛そうなんだ？」
ア「分からないけど、チャンスだよ」
高「じゃ、容赦無しに行くぜ」
高雅は両方の剣先をドラゴンに向けた。
高「虚無＋波動の力！！」
剣先から細く、鋭い波動が放たれる。
キ「ブオオオオオ」
ドラゴンが危険を察し、盾を創造した。
高「虚無に力で挑むなど無意味だ！！」
波動は呆気なく盾を貫き、ドラゴンをも貫いた。
キ「グオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・・・」
悲痛の叫びを上げたドラゴンは消滅した。
高「あれ、虚無ってここまで強いのか！？」
ア「・・・もしかしたら、ドラゴン自体も創造の力だから消えたんじゃないの？」
高「ああ、成程な」
父「うわあああああああああああ」
足場が無くなったアリアの父親は無抵抗に落下していく。
父「ぐふっ・・・」

着地もせずに、腹から地面に落下した。
高雅はアリアの父親に近づいた。
父「うがあああああああああああ」
高「こいつ、地面に叩きつけられた痛みに対して嘆いてないぞ」
ア「どういうこと!?」
高「分からない。ディバイトが関係してるかもな。取りあえず、この殺人狂を直すか」
高雅はアリアの父親に触れた。
高「虚無の力」
父「あああああ・ああ・あああ・・・・あ・・・」
アリアの父親はゆっくりと意識を失った。
高「何かの力で暴走していたんなら、これで直った筈だ」
ア「・・・最後は呆気ないものね」
高「それより、これから天国はどうするんだろうな。兵は殆ど焼け死んだし、もう戦う士気も無いし」
ア「天国の負けかな」
デ「そう、天国の負けだ」
高「!?」
振りかえるとそこにはディバイトが悠々と立っていた。
デ「久しぶりだな、小僧」
高「やっと会えたぜ。おい、戦争を止めろ」
デ「単刀直入に言ったな。では、戦争を止めたら貴様は死ぬと約束できるならやってやろう」
高「話した俺がバカだった。力づくできかせてやる」
高雅は双剣をディバイトに向けた。
デ「我を倒したところで戦争が終わると思っているのか。哀れだな」
高「何故だ?。総司令官が死ねば士気が殆ど消え失せるだろ。そしたら終わったの同然だ」
デ「我が総司令官だと誰が決めた?」
高「テメーの仲間がテメーを見て総司令官だとほざいたんだ。間違

いないはずだ」
デ「それは本当に我の仲間か？」
高「当たり前だろ。地獄の使いだぞ。仲間以外に何がある！？」
デ「・・・・そうか・・・・小僧、貴様は間違いをしているぞ」
高「何処がだよ！！。百点満点だろうが！！」
デ「貴様が殺したのは天国の使いだ」
高「何だって！？」
デ「貴様が殺してきたものは全て天国の使いだ。お前はそれに気づいていなかった。実に哀れな者だ」
高「そんな訳ねえ。そんな訳・・・・ねえ・・・」
デ「では、そこの使いにでも聞いてみるといい」
高「おいアリア。今の話は本当なのかよ！？」
ア「・・・・・本当よ」
高「な！？・・・」
高雅はその答えを疑った。
すると、アリアは人間の姿になって高雅の前に立った
高「な・・・・なんで嘘をついていたんだよ！？」
ア「私の本当の目的は・・・・・親を殺すことだったの・・・・・ごめんね・・・黙ってて。本当のことを言ったらコウガが協力してくれそうになかったから」
高「じゃ・・・・じゃあ、なんで他の使いを殺す必要があった！？」
ア「私達が殺してきた使いは全て父に慕っていた。それらも殺す必要があったから・・・」
高「そんな・・・」
デ「もう一度問う。我が総司令官だと誰が言った？」
高「・・・・・・」
デ「小僧、もっと疑え。全てのことを疑え。本物が欲しければ一人で全てを抱え込み、疑う続けるといい」
高「一人・・・・そうか・・最初の状態が正しかったのか・・・」
ア「コウガ、私はもう一人で大丈夫。今までありがとう。そしてご

めんなさい。その償いに私を殺して。宝石を壊せば私は償われるから」
高「・・・・・・・・」
ア「宝石はこのポケットの中にあるから。コウガが全てにケリをつけて」
高「・・・・・・・」

ア「コウガ!!、返事をしてよ!!。コウガ!!」
アリアは人間の姿に戻り高雅を揺すっていた。
コウガの目は焦点があってなく、まるで目を開けたまま眠っているようだ。
ア「どうしたの!?。返事をしてよ!!・・・・・きゃ!?」
突然、高雅の手がアリアのポケットに入りこんだ。
ア「な・・・何をするの!?。まさか・・・・」
アリアは察して高雅の手を抑える。
ア「ダメ。私の宝石を取らないで・・・・・きゃ!!」
アリアの力も虚しく、高雅はアリアの命である宝石を取った。
高「ケリを・・・・・つける」
ア「コウガ!!。目を覚まして!!。コウガーーーーーーーーーーーー!!!!」

高「お前は罪深き奴だったな」
ア「そうだね。色々と悪いことばっかりしてた。だから、それを壊して私を償わせて」
デ「ふふふふ・・・」
ディバイトは気づかれない内に何処からとなく現れた黒い炎に呑みこまれて消えた。
高「そうえば、これ壊したら俺も消えるな」
ア「天国で家族と再会させてあげる。手伝ってくれたお礼だよ」
高「これは・・・お前の復讐物語だったのか・・・つまらねえ人生を送らされたもんだ」
ア「分かった?。人に甘えるようなことはダメなことだって。一人で生きていたコウガはよく甘えたいと考えていたんだよ。だから教えてあげたの。これが本当の人生の見直しよ」
高「ふん・・・もう人生なんて懲り懲りだ」
高雅は拳を構えた。

ア「やめて、コウガ!!。壊さないでよ!!」
アリアは必死に高雅にしがみつき、抵抗している。
ア「わかってるの!?。それを壊したらコウガだって消えちゃうことを!?」
高「・・・・・一人・・・・・」
ア「え!?・・・」
高「一人・・・・・間違いではない・・・これが・・・・・正しい」
ア「一人は間違いよ!!。人は一人では生きられないのよ」

高「疑う・・・・・全てを・・疑う・・・」
ア「それもダメ!!。信頼できる人ができなくなっちゃうよ。さっきから何を言っているの!?。コウガ、目を覚ましてよ!!!!」

高「・・・・おい、静寂の力を使うなよ。上手く壊せねえじゃねえか」
ア「ゴメン。やっぱり死にたくないって気持ちが抑えきれない。でも、それを破って。私の為に」
高「勝手な使いだな・・・ふん!!」
高雅は本気で力を入れ始めた。
ア「・・・さよなら、哀れな人間よ」

ア「だ・・・ダメだ・・・・・・・抑えきれない」
アリアの力も既に限界を超えようとしていた。
ア「嫌だ・・・死にたくないよ・・・まだ・・・生きていたいよ」
諦めていたその時だった。
レ「アリア殿!!、コウガ殿!!」
ア「その声・・・レオ君!?。どうしてここに!?」
レ「君付けのことを言いたいが、それよりアリア殿。すぐにコウガ殿の精神を再生させるのだ!!」
ア「ど・・・どういうこと!?」
レ「コウガ殿は精神を破壊され、夢幻の力で幻覚を見ている。精神

さえ回復すればきっと声が届くはずだ」
ア「わ・・・わかった。やってみる」
アリアは契約の力を発動し、高雅の精神を再生させた。
レ「後はコウガ殿次第だ。コウガ殿が幻覚に気づけば・・・」
ア「コウガ!!、聞こえる!?。コウガ!!」
レ「しっかりするのだ、コウガ殿!!」
ア「コウガは一人じゃない。私やレオ君やリュウコやリンちゃんや一応購買部の人達だっているよ」
レ「一応は酷くないか、アリア殿?」
レオの疑問を無視してアリアは言い続けた。
ア「皆コウガのことを思ってるよ。だから目を覚まして。一人で抱え込まないで!!」

ア「・・・が・・・・・・こ・・・が・・」
高「ん、なんか言ったか、アリア?」
ア「何も言ってないよ。だから早く壊して。何時までもこんな責任を持っておきたくないよ」
高「だけど、さっきからずっと喋ってるじゃねえか。けど、この声はなんか違うって言うか・・・・」
ア「もう、早く壊してよ!!。親に会いたいでしょ!?」
高「少し黙ってろ。お前より、こっちの方が聞こえがいいんだよ」
高雅は耳を傾けた。
高「・・・これ・・・アリアの声だよな。んで、なんか呼んでるような・・・」
ア「さっさと壊せよ!!!!」
高「なっ!?」

アリアは片手を剣に変え、高雅に襲い掛かって来た。
高「こいつ、偽物か!?。だとしたら、ここは幻覚の世界か!?」
ア「気づいたか。ならば、殺すまで」
アリアが勢いをつけて高雅に突っ込む。
高「おもしれえ」
高雅はそれを避けようとしない。
ア「怖気(おじげ)づいたか!!」

ザシュッ!!

一つの首が宙を舞う。
それは、アリアのものだった。
高雅は瞬間でアリアの剣を持ち、そのまま首を斬った。
高「甘いな。これでも最強なもんでね。後・・・」
高雅は一息つけてから言った。
高「心配してくれる奴がいるなら負けられないしな」
デ「ならば、学校へ来るがよい。そこで待っておる」
高「ディバイト!?。何処だ・・・うお!?」
その瞬間、高雅が光に包まれた。

ア「コウガ!!、コウガ!!!!」
高「・・・うるせーな。鼓膜が破れるだろうが」
ア「こ・・・コウガなの!?。本当にコウガなの!?」
高「俺以外に何があるんだよ」
ア「よ・・・よかった・・・本当に良かった・・・」
アリアは落ち着きの安堵に涙を流した。

高「おい!?、泣くことか!?」
レ「コウガ殿、アリア殿は本気で心配してくれていたのだぞ」
高「れ・・・レオ!?。なんでここにいるんだよ!?」
レ「王の力が見えたものでな。心配になって来てみたのだ」
高「ちっこいのによくここまで来たな・・・ってうお!?、アリア!?」
突然、アリアが高雅の胸に飛び込んで来た。
ア「少し・・・このままでいさせて」
高「おい、涙で服が濡れｒ「コウガ殿、アリア殿は頑張ったのだ。少しぐらい甘えさせてあげてもいいだろう」・・・」
レ「それに、我が来るまでアリア殿は一人で頑張ったのだ。好きにさせてあげたらどうだ?」
高「・・・わーったよ」
高雅はアリアの頭を撫でた。
その時、手に持っているものに気づいた。
高「・・・ん、そうえば、なんで俺って宝石持ってんだ?」
ア「あ、それ私の。コウガが幻覚を見てる時に私から奪ったの」
高「俺って、現実のアリアまで殺そうとしてたのか・・・」
ア「殺すって・・・幻覚で私を殺そうとしてたの!?」
高「まあね」
ア「まあねって、そんな気軽に言わないでよ!!。私に対してどういう意味なの!?」
高「さあね」
ア「同じような言葉を並べて誤魔化さないでよ!!」
高「おいおい、さっきまで泣いてたのは何なんだよ?」
ア「それとこれとは別よ!!。いいから教えてよ!!」
高「やだね」
ア「拒否権を使っちゃダメ!!」
レ「ゴホン!!」
高・ア「あっ」

レオの咳払いで高雅とアリアのやりとりは中止になった。
レ「今はじゃれあっている暇がある時ではないと思うが」
高「そうだな。よし、学校へ行くぞ」
ア「どうして？」
高「そこでディバイトが待ってる。幻覚内であいつが言ってたからな」
レ「ならば、やることは一つしかないな」
高「ディバイトをぶっ倒して戦争を終わらせる」
ア「それじゃ、学校へ行こう」
アリアは双剣になり、レオは高雅の頭の上に乗った。
高「あっ、この王はどうする？」
ふと思い出したように気絶している王に指を指した。
ア「ほっといても大丈夫よ。多分」
レ「心配無い。見る限りではここら一体に力は見えない。しかし、ある所に集結している」
高「おそらく、学校だろうな。それじゃあ、行きますか」
高雅は速度の力で来た時同様に学校へ戻った。

# 天獄戦争編　その１０、無意味

学校に到着した高雅は屋上であるものを見ていた。
高「めっちゃ多いな。軽く５００人はいるな」
グラウンドには地獄の使い&兵が集まっていた。
レ「どうするのだ?。あの数を相手にするには手厳しいぞ」
高「なーに、あれくらい瞬殺できるって」
レ「一体どうするのだ?」
高「アリア、真の契約を使うぞ」
ア「うん、分かった」
高雅はアリアと口づけを交わし、真の契約を発動させた。
高「後は・・・」
高雅は手に黒くて紐が出ている球体を創りあげた。
レ「それは爆弾か。それに中にｈ「おっと、ネタバレは後でだ」?」
高「それじゃ点火」
高雅が指パッチンをすると火が点いた。
高「空間の力でグラウンドに・・・ポイッと」
空間の力で爆弾が爆発するタイミングを見計らってグラウンドに落とした。
高雅はノリで耳を塞いだ。

ドガーン!!

純粋な爆発音だが爆弾の中身は鬼畜そのものだった。

パリパリパリパリ・・・

次々と壊れゆく宝石の音が聞こえた。
ぎゃー、とか、うわー、とかも聞こえたがすぐに納まった。

グラウンドにいた地獄の使い&兵は全滅した。
高「なっ、言っただろ」
レ「爆弾の中に波動と破壊の力、そして空間の力でいきなり現れれば対処はできないだろう」
高「さて、ザコ処理はどうでもいいけど問題のディバイトは何処にいるのだか」
ア「外で見当たらないなら中ってことになるのかな？」
高「中か・・・あいつらの近くでは戦いたくないな」
ア「コウガって本当に優しいね」
高「バカ！！。邪魔だからだ！！」
ア「強く否定するところがまたツンデレね」
高「うるせー！！」
レ「とにかく、今はディバイトを探すのだ」
高「分かってる」
高雅は屋上の扉から学校の中に入った。

４０分後。
高雅は学校内を3周は探したがディバイトに遭遇しなかった。
高「あいつ・・・本当に何処にいるんだよ・・・」
レ「少しでも力を使っていれば分かるのだが・・・」
高「はぁー、ビビって逃げたのか？」
捜索に飽きてきた高雅はため息を吐いた。
すると、アリアがふと気が付いた。
ア「ねえ、まだ一つだけ探してない所があるよ」
高「嫌だ。考えたくねえ」
ア「私だってそうだけど・・・やっぱり見たほうが・・・」

高「・・・分かったよ。一度だけ行くか」
高雅が探索してない所は皆がいる地下室だった。
高雅は空間の力で地下室の扉前まで移動した。
高「レオを見せると面倒だからレオは隠れてくれ」
レ「分かった。我は廊下に居よう」
レオは高雅の頭から飛び降りて廊下に出た。
高「頼むから居るなよ」
ゆっくりと扉の取っ手に手を掛ける。

ギイイイ・・・

高雅が開けて最初に見たものは・・・
龍「さ・・・崎村君?・・・」
龍子だった。
A「崎村だって!?。マジで!?」
陰からAも現れた。
それに続いて次々と他の人も現れてくる。
B「やったのか!?」
C「これで帰れるぞ!!」
D「早くニコ動へログインさせろーーー!!」
E「やっほい。戦争が終わったぞ!!」
夢「ほんまに終わったんか!?」
蓮「こうが兄ちゃん、ログナ知らない?」
皆が次々と聞いて来る。
高「待てこら。俺は聖徳太子じゃねえぞ。いっぺんに言うな」
高雅は一つだけ不審な点を見つけた。
高「なあ、姫花は何処だ?」
龍「それが・・・ログナって人・・・追いかけてから・・・」
夢「帰ってきてないのよ」
高雅は嫌な想像をしてしまった。

ア「コウガ、もしかしたｒ「言うな。聞きたくない」そうだよね・・・」
高「お前ら、まだ終わってないからもう少し此処にいろ。後は総司令官を倒すだけだから。」
A「まだ終わってねえのかよ。早くしろよな」
高「だったら手伝え！！」
高雅は自分勝手なAを地下から引きづり出した。
A「やめろよ。普通の人間を巻き込むなよ」
高「んだと！！」
A「お前がいるからこうなったんだ！！。俺達は何にも悪くねえのによ！！」
高「言わせておけば！！」
高雅は拳を振りかざした。
A「俺を殴る暇があるなら早く終わらせろよ！！。こっちは辛いんだよ！！。お前みたいに化け物並みに強くねえから怖いんだよ」
高「ば・・・化け物だと・・・」
A「そうだ化け物！！。さっさとどっか行けよ！！。迷惑なんだよ！！」
高「・・・・・くっ！！」

バンッ！！

A「ぐえ・・・」
高雅はAを壁に投げ捨て、校長室を出た。
すると龍子と夢がAに近づいて話した。
龍「A君・・・今のは酷いよ・・・」
A「俺だって分かってる。敵の総司令官に向けて、あいつの本気を出させてやったんだ」
龍「・・・本気？・・・」
A「ああ。あいつは何も思ってないほうがめちゃくちゃ強いんだ。

俺たちに会いに来たってことはきっと俺達を思ってるんだと思った。
俺だってあんなこと言ったのが辛いんだ」
夢「ホンマか？。自分の気持ちをただぶつけただけと違うんか？」
A「んな訳ねえだろ！！。そこまで最悪な人間じゃねえよ！！」
龍「・・・私は・・・友達を・・・・思った方が・・・きっと強いと思う・・・」
A「あいつは特別だ。今まで突っかかって来たから分かる」
龍「・・・・・」
龍子はそれ以上は追及しなかった。
A「さあ、地下に戻って待っとこうぜ」
Aは地下に戻って行った。
夢「行こう、龍子」
龍「うん・・・」
遅れて夢と龍子も地下に戻った。

校長室を出た高雅は引き続きディバイトを探していた。
高「マジで見つからねえな。本当にここに居るのか？」
ア「何だか落ち着いてるね。さっきので怒ってると思ったのに」
高「あのな、あいつのことを一々関わっていたら限(きり)がねえんだ。あいつは適当に流すのがポイントだ」
つまり、Aのやったことは無意味でしたｗｗｗ
ア「そうなんだ。納得」
レ「何があったのだ？」
高「何でもねえよ。ただ会話があっただけ」
レ「そうか？。怒鳴り声も聞こえたようだが」

高「テンションが上がってただけだ」
レ「どうも納得できないんだが」
高「まあ、あれだ。気にしたら負けだ」
などと何気ない話をしていると・・・
ア「コウガ!!、前!!」
高「ん?・・・あっ!!」
目線の先には凛の後ろ姿があった。
高「姫花!!」
凛「!?、崎村さん!?。生きていらっしゃったのですか!?」
高「人を勝手に殺すな!!」
凛「・・・よかったですわ・・・」
凛が涙ぐんで高雅に駆けよって来た。
レ「コウガ殿!!」
高「分かった。やっぱりか」
ア「何?、どういうこと?」
高「こういうことだ」
凛との距離が無くなった瞬間・・・

ザシュッ!!

凛の首を跳ねた。
ア「!?、どうして!?」
高「あのな、よく考えろよな。既に3周もして見つかってねえのにいきなり見つかれば怪しいだろ。後、レオが俺に注意をさせるように呼べば完全に誰かが創った偽物が判明するんだよ」
ア「そうか。じゃあ・・・」
高「ああ、ディバイトの可能性が大だ」
凛?「名推理だな。小僧」
高・ア・レ「!?」
突然、凛の首が浮き、喋りだした。

声の主はディバイトだ。
高「首が浮くなんてホラーだな。んで、お前はどこにいるんだ?。そして凛をどうした?」
デ「我は屋上にいる。そこにその娘もいるだろう」
高「逃げるなよ」
デ「なら、早く来ることだ」
高「来たぞ」
高雅はすぐに空間の力で屋上に移動いた。
そこには凛とディバイトが立っていた。
デ「ほう、空間の力も使えたか。さすがは無双と言ったところだな」
高「姫花!!、何でそんな奴と一緒にいるんだよ!?」
高雅が呼びかけるが凛は返事をしない。
デ「紹介してやろう。新しい契約者、姫花凛だ」
高「何だって!?嘘だろ!?」
デ「なら、これを見るといい」
ディバイトは凛の手の甲を見せた。
そこには契約の印があった。
高「前の契約者はどうしたんだよ!?」
デ「一度真の契約を使ったら使えなくなるからな。あれは捨てた」
高「捨てただと!?」
デ「それに、この娘からわざわざ契約してくれと言ったのだ。そうだろ?」
ディバイトが凛にそう聞いた。
凛「・・・ええ・・・」
高「嘘だろ。何で!?」
レ「落ち着くのだコウガ殿。あの者は夢幻の力で操られておる」
高「夢幻って幻覚を見せるものじゃねえのかよ!?」
レ「確かに夢幻の力はその者に幻覚を見せる。しかし幻覚と現実の動きが一致するのだ。それを利用すれば操ることも可能だ」
高「あの時の俺と同じか」

レ「そうだ。さらに精神を破壊することで完全に幻覚の世界に迷い込ませることができる」
ア「コウガも同じ手にかかっていたのよ」
高「へー、そうだったんだ」
デ「理解できたか、小僧？」
高「ああ、バッチリにな」
高雅は剣先を凛に向けた。
デ「おっと、虚無を使うつもりだな。だが、これでどうだ？」
すると、凛がゆっくりと動き出しフェンスを越え始めた。
高「なっ！？、待て！！」
デ「動くな。妙な行動を起こしたら凛（こいつ）は死ぬぞ」
高「この外道が！！」
デ「戦いというものは勝てばいいだけだ」
ディバイトが片手を剣に変え、高雅に近づいてくる。
絶体絶命の時だった。
高「絶体絶命？。絶好のチャンスの間違いだろ」
デ「何だと！？」
高「ははははは・・・」
高雅は高らかと笑っていた。

# 天獄戦争編　その１１、不発

高「ははははは・・・」
まだ笑っていた。
ア「コウガ！？、壊れちゃったの！？」
レ「コウガ殿！！、気をしっかり持つのだ！！」
高「安心しろ。いたって正常だ」
デ「ふん・・・」
ディバイトが鼻で息をしたその時、凛は落下した。
高「ありゃりゃ、姫花を落としたみたいだな」
デ「小僧、何故そんなに余裕でいられるのだ？」
高「いや、いられないほうがおかしいだろ。だってよ・・・」
高雅は一置きして言った。
高「あれ、姫花じゃねえぞ」
デ「何だと！？。そんなはず、ある訳がない」
高「お前は本当に姫花と契約を結んだのか？」
デ「当然だ！！。我が読んだ通りにことは運ばれていった。小僧も全て読み通りに動いた。狂いはないはずだ」
高「成程。俺はお前の手の上で踊っていたわけか？」
デ「そうだ。我の読み通り、小僧が天国を壊滅に陥れ、小僧を殺すということが」
高「そうか・・・ところで、俺がぶっ倒したのは天国だっけ？」
デ「何を言う！？。小僧自身が天国の総司令官を討ったはずだ！！」
高「だーかーらー、それは本当に天国の方なのかって？」
デ「どういう意味だ！？」
高「きっぱり言う。俺は地獄を滅ぼしたつもりだ」
この言葉によってディバイトの冷静さは消えてしまった。
デ「バカを言うな！！我が読み違いなどすｒ「だったら誰か読んでみろよ。地獄の誰かを」いいだろう」

ディバイトは無線機を取り出した。
高「ちゃっかり現世の代物を使ってんのかよ・・・」
デ「これは力を使う必要がないからだ」
そしてスイッチを押して喋った。
デ「全てに命ずる。今すぐに我が元へ来るのだ!!」
高「どこか言わなくても大丈夫なのか?」
デ「ふふふ、我々を舐めるでない。我の絶大な力は隠さなければすぐに分かる」
すると、ディバイトはいきなりどす黒いオーラを放った。
高「すげー。軽く戦闘力5万ぐらいはあるオーラだな」
デ「いずれ仲間が来るだろう。その時に血祭りに上げてやろう」
高「待ってやるよ。最も、来ることはないがな」
高雅とディバイトは待ち続けた。

時を戻して凛が落ちたその後。
凛が落ちた所にも高雅がいた。
いや、こっちが本物の高雅である。
高「ラスボスがこんなに思い通りにいっていいものか?」
ア「いいじゃないの。こんなにも思い通りにいってるから」
高雅は落ちて来た凛をキャッチして抱えていた。
凛は気絶している。
高「なあレオ。ひとつ質問をいいか?」
レ「何だ、コウガ殿?」
高「夢幻の力で見せた幻覚内の行動は現世と同じって言ったよな?」
レ「ああ、確かにそう言ったが」
高「俺さ、あいつの幻覚内でアリアを殺しちゃったんだけど、なん

でアリアは生きてるんだ？」
ア「ちょっと、私を殺したってどういうことよ！？」
高雅はアリアのことを無視してレオの回答を聞いた。
レ「それは、アリア殿の声が聞こえた後にやったのか？」
ア「まあ、そうだな」
レ「ならば、それはただの幻覚だ。現世で同じ行動をすると言っても、それは完全に幻覚の世界に落ちた時になるものだ。それを省くために破壊の力と平行して使われることが多いのだ。アリア殿の声が聞こえたのであれば、ある程度は幻覚のことを意識していたはずだ」
高「へー、そうだったのか」
ア「それで、私を殺したってどういうことよ？」
高「しつけーな。偽物のお前なんかより本物の方がよかったんだ。だから偽物をぶっ倒しただけだ」
ア「そう・・・なの・・・」
蒼い双剣は赤みがかった。
高「赤くなるワードが入ってたか？」
レ「それよりコウガ殿。その方は夢幻と破壊の力が掛かってあるぞ」
高「じゃあ、再生と虚無の力で」
高雅は凛の精神を再生し、夢幻の力を消した。
凛「う・・・ううん・・・」
高「おや、気づいたか？」
凛「崎村さん？・・・・・・・」
凛は頭の状況を確認した。
結果：高雅に抱えられている。
凛「・・・きゃあああああああああ」
高「ぶっ！？」
凛は高雅を突き飛ばした。
高雅は尻もちを突き、凛はちゃっかり着地した。
レオは危険を察し、既に頭から降りていた。

凛「なななな・・・何をしていますの!?。ささ・・崎村さん!?」
高「お前、命の恩人にこれはねえだろ」
凛「命の恩人って・・・どうして私を抱えているのですか!?」
高「よく思い出せ。俺と別れて、自分がやって来た行動を」
凛「私は・・・ログナって人が現れて、その方からもらった崎村さんのネームバッチで裏切り者だとわかったから追いかけて・・・見失って戻ろうとしたら・・・・」
高「その後はどうしたんだよ?」
凛「・・・分かりませんわ。何か夢を見ていたような」
高「俺の読みすげー」
高雅は地下にいった時からこのことを読んでいた。
凛がディバイトに捕まったことを。
ア「自分で自分を褒めるとか痛いよ」
高「うるせーな。でも、まさかここまで読み通りとはな」
レ「確かに、コウガ殿の読みは称えるべきだ」
凛「犬が喋った!?」
レ「我は犬ではない!!。天獣だ!!。弁えろ人間!!」
高雅はレオを抱え、頭に乗せて説明した。
高「こいつはレオっていう・・・生き物だ」
高雅は少し迷って答えた。
凛「見れば分かりますわ。もっと具体的に教えてくださる」
高「う~ん・・・俺の家族の一員だ」
凛「そういう意味ではありません」
高「だって、どうせ忘れるし・・・ん!?」
突然、高雅は屋上からでかいオーラを感じた。
それについてレオが切り出した。
レ「コウガ殿。それよりもディバイトの方は?」
高「まあ、ここまで順調だったからこれ以上は望まねえけど、強いていうならこの後の展開も思い通りに・・・ってな」
ア「さすがに、あれは無理だと思うけど・・・」

高「まあ、見てみようじゃねえか」
そう言って、高雅は目の前の空間を捻じ曲げ、屋上を映し出した。
高「この後どうなる、俺の幻覚は？」

幻覚世界はあれから１０分経過していた。
デ「何故来ないんだ！？」
地獄の者は一向に来る気配はない。
当然、幻覚だからであるが、一部現実でやって来たので高雅が倒していたのである。
だから、この幻覚は邪魔されることはなかった。
高「だから、俺が滅ぼしたって言っただろ」
デ「ふざけるな！！。小僧は我の思い通りに動いたはず。なのに・・・」
高「動いていたのは本当に俺か？」
デ「どういう意味だ！？」
高「例えば・・・俺の分身（そうぞう）だったとか」
デ「まさか・・・小僧、このことを分かっていたのか！？」
高「もち。後はお前を倒せばお終いだ！！」
高雅は双剣を構え、ディバイトに向かって走り出した。
だが・・・

ガッ！！

高「のわっ！？」
足が躓（つまづ）き、豪快にこけてしまった。

その時に双剣を離してしまった。
高「しまっ・・・」
双剣は床を滑り、ディバイトの目の前で止まった。
デ「ふん！！」

パリーン！！

ディバイトは双剣に付いてあった宝石を壊した。
高「マジかよ・・・」
高雅は消えていった。
デ「ふはははははは。哀れな奴め。最後に足を払われるとわな。ふはははははははは・・・」
ディバイトはずっと高笑いしていた。
幻覚の中で。

高「だはははははは・・・」
こっちも、腹を抱えて大爆笑していた。
ア「何だかここまで上手くいくと・・・ぷっ」
アリアも笑いを堪えていた。
高「ひー・・・はー・・・腹筋崩壊したぜ。ここまで・・・ぶはははは」
ア「コウガ・・・笑い過ぎ・・・うふふふ」
高「お前もさり気なく笑ってるじゃねえか」
ア「だって・・・あはははは」
アリア、ギブアップ。

凛「意味が分かりませんわ。どういうことですの？」
レ「我が代わりに説明しよう」
レオは高雅とアリアが説明できる状態ではないと察し、代わりに説明した。
レ「コウガ殿は敵が屋上にいると知った途端に敵に幻覚を与えたのだ。しかし、途中で気づかれてしまうものだと思っていたが全て、事が思い通りにいき喜んでおるのだ」
凛「しかし見た所、崎村さんが負けてしまわれたのでは？」
レ「現実はコウガ殿が空間の力で敵の命である宝石を奪い、自分の偽武器を創って、宝石の部分に敵の宝石をはめ込んで色をアリア殿の宝石に変えていたのだ。それをわざとこけ、敵の前にやった途端に思い通りに壊したわけだ」
凛「つまり、崎村さんの策略って訳ですか・・・」
凛が納得した所で高雅とアリアが落ち着きを取り戻し、高雅が話しを切り出した。
高「さーて、最後の仕上げにかかるか」
凛「一体、何をするつもりですの？」
高雅は人置きしてから喋った。
高「簡単に言えば、今日を消す」
凛「な・・・何ですって！？」
あまりのことに、凛は思考が追いついていない。
しかし高雅は普通に説明する。
高「まず、日本全員の今日の記憶を消して、巻き込まれて死んだ人や町も再生して、天国と地獄共を元の場所に返して、ニュースになっていた町は空間の力で戻す。まあ、そんなところだ」
凛「な・・・何をおっしゃっていますの？。訳が分かりませんわ」
高「無理もない。まあ、忘れるから心配するな」
そう言って凛に背を向けて跳ぶ用意をした。
凛「待ってください！！。私はどうなりますの！？」
高「心配するな。後遺症も無いし、ちゃんと家に送ってやるから」

そう言って高雅は空高く跳んだ。

高度５００メートル。
月と星が照らす空に高雅は足場を創り、立っていた。
高「さあ、行くぞ。準備はいいか、アリア？」
ア「何時でもいいよ」
高雅は双剣を真上にある月に向けてかざした。
高「再生＋波動＋空間＋破壊の力！！！！」
その瞬間、高雅を中心に波動が日本全体に轟き、高雅、アリア、レオ以外の記憶が破壊され、町や被害に遭った人が再生し、全てが元の場所へ空間移動した。
高雅は自分の部屋に移動していた。
高「・・・終わったな・・・」
ア「少しだけもの寂しいね」
レ「しかし、これが最善の手であったのは事実だ」
高「まあな。俺もこれしかいい手が思いつかなかったし」
ア「・・・せっかく友達ができたのに・・・」
高「きっと、またなれるって。だから落ち込むな」
高雅がアリアを励ました。
すると、アリアは笑い出した。
ア「ふふふ、まさかコウガからこんな言葉が聞けるなんてね」
高「べっ・・別にどうだっていいなら気にしねえけどさ」
ア「完璧なツンデレね」
高「うるせー！！」
レ「ふふふ、賑やかであるな」

高「もう寝る！！。明日も普通に学校があるからな！！」
高雅は布団に潜り込んだ。
ア「お休み、コウガ」
レ「今日はお疲れであったな、コウガ殿」
高「今日はもうねえよ」
アリアとレオも高雅の部屋を出た。

こうして、第2次天獄戦争は起らなかった。

天獄戦争編　ｆｉｎ

## 天獄戦争編　その１１、不発（後書き）

戦いばかりだったので次回から少しコメディーに行きたいと思ってます。新キャラも登場する予定です。

## 新キャラ紹介　？

あれから何日か過ぎた。
高雅は暑い夏にも関わらずに、いつもの木陰で昼休みを過ごしていた。
高「あぢ～。何で夏はこんなに熱いんだよ～」
ア「だったら教室に居ればいいじゃない。クーラーが効いてるのに」
あっ、ちなみにアリアは人間状態です。
高「人間といた方がもっと暑苦しい」
ア「もう慣れてるくせに・・・ねえ、コウガ」
高「何だよ？」
ア「私をリュウコに貸すの・・・止めてくれる？」
高「何でだよ？。着替える時とかめんどくさくねえし、杉野との関係も深まるじゃねえか」
ア「それでも・・・私、コウガと離れるのが嫌」
高「なっ！？・・・そんなこと言われると恥ずかしいだろ！！」
そんなこと関係なしにアリアは高雅の手を取って頼んだ。
ア「お願い。私のわがままを聞いてよ」
高「・・・・・・」
高雅は目を逸らし、少し考えてから答えた。
高「・・・分かったよ。好きにしろ」
ア「ありがとう、コウガ／／／」
高雅は見えていなかったが、アリアは顔を少し赤くしてとびっきりの笑顔だった。
ア「ん？・・・あれは・・・」
アリアは何かがこっちに向かってくるのに気づいた。
それはよく知っていたのでアリアはすぐにブレスレットに戻った。
A「ぜぇ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・見つけたぞ崎村！！。俺はお前に一つ聞きたいぞ！！」

それは皆お馴染、購買部のAだ。
高「俺の視界から5秒以内に消えろ。暑苦しい」
A「ふふふふ。果たしてこれを見た後に同じことが言えるかな?」
するとAは手の甲を見せた。
そこには、契約の証が描かれていた。
A「どうだ!!。さあ、これを見た感想は!?」
高「俺の視界から5秒以内に消えろ。暑苦しい」
A「おい!!、一字一句間違ってねえじゃねえか!!。大体、少しは驚けよ!!」
高「そのタトゥーが俺と何の関係がある」
A「とぼけるな!!。お前も似たタトゥーがあるじゃねえか!!。つまり、お前も俺と同じだ!!」
高「じゃあ一つ問う。天国と地獄、どっちの使いと契約した?」
A「えーっと・・・天国だ。いいだろう?」
高「・・・っち。地獄だったら秒殺してやったのによ」
A「おい!!、聞こえているぞ崎村!!。お前が調子に乗っていられるのも今日で区切りにしてやる。行くぞ、タイト!!」
するとAの腕に付いてあった赤いミサンガが人間の姿になった。
A「紹介してやる。俺の使いのタイトだ」
現れたのは侍風の赤髪の男性だ。
タ「お初にお目にかかる。拙者はタイトと申す。お主は何と申す?」
高「崎村高雅だ。しかし、お前も不運だな」
A「どういう意味だ!!。大体、お前はリアクションが違いすぎるぞ!!。もっとこう・・・どうやって知りあったとか、かっこよくて羨ましいとかさ」
高「さーて、そろそろ授業が始まるな。俺は戻るぞ。独り言は程々にしとけよ」
A「ふざけるな!!。こうなれば・・・作者!!、俺の回想シーンへ突入だ!!」
えー、脇役キャラの回想なんてつまらねえだろ。

A「頼む！！。俺の感動の回想シーンを！！」
・・・わかった。軽く書きましょう。
A「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ！！」
高「無駄に発音がいいな。さすが５位」

ある夜の公園だった。
そう、俺（Ａ）は夜の公園を散歩していた。
その時だった。公園で女の子が一人でいたのだ。
俺は一人は危ないと思い、声をかけようとした。
だが、手が遅れてしまい、その女の子は不良共に囲まれてしまった。
ここで逃げたら男が廃（すた）ると思い、俺は不良に喧嘩を挑んださ。
当然、俺の力は脇役すぎて勝てなかった。
だが、女の子を逃がすことはできた。
俺はここでやられてしまうと思ったよ。
その時、その人は現れた。
不「何だ、テメーは？」
タ「・・・拙者は悪人を斬る者だ」
あの時は揺るぎない正義感がオーラとして見えたね。
その威厳、マジで凄かった。
その人が剣を一回だけ振るうと不良共の髪の毛を一本残らず斬り落とした。
その動作、マジで見えなかった。
不良はそれにビビり、逃げて行った。
その様態、マジでダサかった。

するとその人は俺に近づき、こう言ったのさ。
タ「お主の善なる行為、見事なり。我と契約を結んではくれぬか？」
俺は迷わず契約したさ。
へっ、契約の意味分かってんのかって？。考え過ぎはよくないぜ。
そして俺は手の甲の模様を見た時に真っ先に崎村のことを思った。
あいつも同じようなものがあった、と。
つまり、崎村が主人公ならば俺と同じ。そう、俺は主人公の力を手に入れたのだ。
俺も主人公最強になれたのだ。
フフフフ・・・ハハハハハハハハ・・・

回想終了っと。
A「どうだ！！、俺の感動の回想は！？」
高「つまり、前半部は幼女を攫(さら)おうとしたら不良共に先取られて、取り返そうとしたら幼女が逃げて、ついでにボコられて、そこの侍さんに都合のいいように解釈された訳か。んで、後半部は自惚れだな」
A「おい！！、どこからそんな解釈ができるんだよ！？。超感動もんだろうが！！」
いや、普通に感動ものじゃありません。
しかも後半部はあってるし。
タ「主よ、そんな邪心を持っていたのか？」
タイトがAの背中に刀を突き付けて問う。
A「待て、タイト！！。そんな訳ねえだろうが！！」
タ「問答無用！！。その歪んだ信念、拙者が立ち切ってやる！！」
A「ちょ・・・ここは公共の場だ。刀はやめ・・・ぎゃあああああ

あああああああああああああ」
タ「逃がすか！！」
Aは全速力で逃げ出した。
タイトも、すかさず追う。
高「あの侍、騙されやすいだろうな」
ア「それよりも早く戻ったら。もうすぐチャイムが鳴っちゃうよ」
高「はぁー、やっぱサボろうかな」
ア「何でそうなるの？」
高「あいつでテンションが下がったから」
ア「元々、テンション無かったよね？」
高「気にしたら負けだって何回も言わせるな。帰ってレオとじゃれるか」
ア「全く・・・コウガは・・・」
結局、高雅は早退した。

あの後、Aの体はセロハンテープでくっ付けられてあり、その姿で午後の授業を受けた。
・・・普通、死んでるけど、作者の力で生かしてあります。
・・・ツッコまないでください・・・

## 新キャラ紹介　？

今日の学校は終業式だった。
なので、学校も午前で終了。
学校帰りに高雅とアリア（人間状態）は緑淵商店街を歩いていた。
高「やっと一学期が終わった」
ア「でも、夏休みと言ったら宿題がどっさりあるのよね？」
高「もう全部終わった」
ア「はやっ！？。てか、いつの間に！？」
高「全ての宿題が夏休み始まる前から配られるからな、適当にやった」
適当と言いつつも全体で９．５割正解している。
ア「ほんと、すごいね、コウガは。何でもできるみたいだし」
高「お前ほどじゃねえよ」
不Ａ「テメーら、誰の許可を取っていちゃついてんだ！？」
久しぶりの不良登場。
ちなみに、数は２匹．
不Ｂ「見せつけてんじゃねえぞ、おい！！」
高「久々、制裁の時だな」
高雅は指をボギバギ鳴らしながら不良に近づいた。
ア「コウガ、加減はするようｎ「ぎゃあああああああああ」って、無理みたいね」
高「よーし、片付いた」
高雅は手をパンパンと叩(はた)いていた。
高「行くぞ、アリア。晩飯の材料を買って帰るぞ」
ア「待ってよ、コウガ」
アリアは先に行く高雅に小走りで追いつき、再び歩き始めた。
少しの間だけ商店街の注目になっていたが。

夕方、帰宅中。
アリアはブレスレットになり、高雅はチャリを漕いで家に帰っていた。
その途中・・・
？「おい。貴様、止まれ」
ガードマンらしき全身黒いスーツでサングラスをかけた人に声を掛けられた。
高「なんだよ？」
高雅は偉そうな口調に半ギレだった。
ガ「この辺で少女を見なかったか？」
高「見てねーよ。さっさと退け」
ガ「貴様、年上の者と話すとｋ「うるせえな！！、さっさと退け！！」怪しいな。貴様、誘拐犯じゃないだろうな？」
高「偉そうに止めておきながら人を誘拐犯扱いとは・・・マナーがなって無いのはどっちだよ！！」
高雅は完全にキレていた。
すると、ガードマンらしき人は胸の内ポケットからある物を取り出した。
ガ「正直に言え。そうすれば警察に突き出すだけで許してやる」
それはピストルだった。（注：本物です）
高雅の額に突き付けながら脅す。
だが、高雅は顔色一つ変えない。
すると、高雅はピストルを握り・・・
高「それで勝ったつもりか？」

ベギッ！！

ピストルを圧し折った。（注：本物です）

ガ「何！？。銃を折るだと！？」

高「通してくれるか？。次は脊髄を折るぞ」

高雅の目に、ガードマンの顔はサングラスを掛けても分かるぐらい青ざめて高雅に道を譲った。

高「武器があれば勝てると思うなよ」

そう言い残し、高雅は再び漕ぎ始めた。

家まであと曲がり角一つ。

高「帰って、飯を作って、ゲームやって、勉強して・・・」

高雅は家に帰ってからやることを考えていた。

その時・・・

キキッ！！ーーーーー・・・ドンッ！！

高「おや、事故だ」

最後の曲がり角で衝突事故が発生した。

しかも、人間と車の衝突事故だ。

撥ねられたのは小学生ぐらいの少女だった。

血が溢れんばかり出ていた。

高「やべーな、ありゃ」

すると、止まった車のエンジンが再び鳴りだした。

高「まさか・・・ひき逃げする気か！？」
高雅の予想通り、車は猛スピードでその場から逃げた。
高「・・・青のランエボの５４－５４か」
高雅は車の種類とナンバーを暗記した。
高雅は撥ねられた少女に駆けよった。
高「おい、大丈夫か！？」
？「・・・はぁ・・・はぁ・・・」
高「すげ、意識もあるし呼吸もしてる。これなら救急車を呼ぶだけでいいな」
？「・・・だ・・ダメ・・・」
高「ん？、何でだよ？」
高雅は冷静に聞いていた。
普通、ダメと言っても救急車を呼ぶのが当たり前だが、高雅は理由を聞いた。
？「ど・・・どうせ死ぬの・・・」
高「何でだ？。そりゃ、大量出血で死ぬ可能性はあるけどさ」
？「ち・・・違う・・・・・・ガン・・・なの・・・」
高「ガンか・・・でも、もっと生きたいと思わないのか？」
？「でも・・今日・・・命日なの・・・だから・・・む・・・だ・・・」
高「・・・・・・」
高雅は黙ってあたりを見回し、人がいないことを確認した。
高「なあ、もし生きれるなら生きたいか？」
？「・・う・・・・ん・・・」
少女は弱弱しく頷き答え、意識が消えた。
高「なあ、人間の寿命を延ばしたら砂になって消えるなんてことないよな？」
ア「どこの死神になったの？。そんなルールは存在しないよ」
高「だったら、話は早いな」
アリアが契約の力を発動し、高雅は双剣の先を少女の真上から向け

た。
すると、剣先から水滴のようなものが溜まり、少女の胸の上に落ちた。
その瞬間、少女の傷が再生していった。
高「血もちゃんと再生させたし、死んだ細胞も再生し、ついでに活性の力で強くしたし、文句はないだろ？」
ア「もちろん。で、この子をどうするの？」
高「当てがある。そこにまずは連れて行く」
高雅は双剣を腰に挿し、少女を背負った。
当然、当てというのはあのガードマンのことである。
などど説明している内にもう着いていたりする。
もちろん、速度の力を使った訳だが。
高「おい、テメー」
ガ「ひっ！？、何ですか？」
高「さっきまでとは態度が豪(えら)く違うな。取りあえず、こいつ」
高雅は首で自分の背中を見せるように促した。
ガ「か・・・香凛(かりん)お譲様！！」
ガードマンはすぐに高雅から香凛を受け取った。
ガ「ああ・・・もう・・・お亡くなりに・・・」
高「ちなみに、生きてるぞ」
ガ「へっ！？」
高「後、ガンも治ってるから」
ガ「な・・・何でガンのことも！？。大体、治ったってどうやって！？」
高「どうにか、してだ。じゃ、俺は腹減ったからもう帰る」
ガ「ちょ・・ちょっと・・・」
ガードマンが言う前に高雅は既に消えていた。
ガ「何だったんだ、あの学生は？」
ガードマンだけが理解することができなかった。

## 新キャラ紹介　？（後書き）

あんまり説明できてない気が・・・。
取りあえず、次回は香凛の家族を出そう。

高雅は暇を使って適当に散歩していた。
高「夏休みはほんと暇だな～」
ア「でも、学校よりマシなんでしょ？」
高「まあな。でも、ほんと暇だ～」
とか言っているが、それもつかの間。
突然、黒い高級そうな車が高雅の目の前に停まった。
高「ん、何だ？」
車からあの時のガードマンに似たような人が2名ほど出てきて、高雅に近づいた。
ガA「あなたが崎村高雅様ですね？」
高「様？、お前ら誰だ！？」
ガB「香凛様があなたに直接会って礼を述べたいと仰られている。どうか、ご同行願いたい」
高「かりん？・・・あっ、あの少女か」
ガA「取りあえず、断ってでも連れて行きます」
高「は！？、拒否権なしかよ！！」
ガB「お許しください。香凛様が絶対に連れて来いと仰ったもので」
高「力づくで連れていけると思ってるのか？」
高雅が戦闘準備に取り掛かる。
ガA「あなたの実力は他の仲間から聞いています。正規の戦い方では、私達はあなたに勝てません。ですから・・・」
すると、内ポケットからスイッチのようなものを取り出した。
高「何をする気だ？」
ポチッとスイッチを押す。
すると、マンホールから怪しい煙が発生した。
ア「きゃ！？」
高「うおっ！？、何だ！？」

ガードマン達はすぐにガスマスクをする。
ア「あれ・・・何だか・・・ねむ・・く・・・・・」
高「くそ・・・睡眠ガスかよ・・・く・・・・」
高雅とアリアはその場に倒れこんだ。
ガA「お許しください。我々は香凛様に絶対と誓いましたので」
ガB「ところで、この女はどうする?」
ガA「崎村様の彼女であろう。一応、ともに連れて行こう」
ガードマン達は高雅とアリアを車に乗せ、走らせた。

高「・・・・ん・・・うう・・・ここは?」
気が付くと見知らぬベットで眠っていた。
高「・・・あいつの家か・・・」
寝起きに関わらず、高雅はすぐに理解した。
高「靴が置いてある。よっぽど広くて豪邸だろうな」
ふと部屋を見渡せば、ちょっと離れた場所にあるベットでアリアも眠っていた。
すると、ドアが不意に開けられた。
香「あっ!!、起きてるの!!」
こんなことになった根源の香凛である。
高雅は起き上がり、ベットに座る。
高「おいテメー、いくらなんでもやり過ぎだろ」
香「何がなの?」
香凛は首を横に傾ける。
高「これは完全に人攫いだ」
香「カリン、そんなつもりはないの。ただお礼が言いたいだけなの」

高「別に大したこと・・・だよな。よく思うと」
そりゃそうです。
だって怪我を治すだけでなくガンを治してしまったからね。
しかも、道端で。（まあ、このことは香凛本人は知らないけど）
香「ガンと怪我を治してくれてありがとうなの。でも、どうやって治したの？」
高「その前に、何で俺だと思うんだ？」
香「だって、医者はもう死ぬって言って諦めたから・・・えっと・・・」
高「崎村だ」
香「下の名前は何なの？」
高「高雅だ」
香「じゃあ、高君なの。それで、高君しか考えられないの」
高「年上を軽々しく呼ぶな」
香「それより、高君はどうやってカリンを助けたの？」
高「それは・・・えっと・・・」
高雅は『天使の力で助けた』とか言えるとは思っていない。
取りあえず、適当に嘘を考えていた。
ア「私の力を使ったの」
それをブチ壊すアリアだった。
高「おい！！、そんなこと言ったら、ただの変人だと思われるぞ！！。てか、いつ起きた！？」
ア「ついさっき。それに、いずれ、知ってしまうからいいじゃない」
香「どういうことなの？」
アリアは屈(かが)んで香凛の目線に合わせた。
ア「私はアリア。こう見えて天使よ。よろしくねカリンちゃん」
香「天使！？、すごーい」
高「おれ、この子の将来が心配になって来た・・・」
すると、ドアからまた誰かが入って来た。
凛「失礼します。香凛、これをお客様と一緒に・・・」

コップとお菓子を持ったまま固まっている凛がいた。
高「え!?、姫花!?。じゃあ、まさかここ・・・姫花の家!?」
凛「さ・・・崎村さん!?。じゃあ、香凛を助けたっていうのは・・・」
香「ありがとうなの、凛姉ちゃん。それより凛姉ちゃんすごいの。アリア姉ちゃんは天使なの」
凛「アリア?、そのような異国の人の名前は知りませんわ」
ア「えっと、初めまして。私はアリア。天使よ」
凛「あなた、私をバカにしていますの?」
ア「本当よ。信じてよ」
凛「信じられません。香凛、このような人とは付き合ってはいけません」
ア「そんな・・・」
高「諦めろ。これが現実だ」
ア「でも、あの時はすぐに受け入れてたよ」
高「状況が違うんだ。それに、あの時はもう無い」

ビー、ビー、ビー・・・

突然、警報が鳴った。
高「な・・・何事だ!?」
香「心配ないの。きっと野良犬が迷い込んだだけなの」
凛「最近、野良犬がセンサーに引っ掛かることが多い事ですわね」
高「なーんだ。そうなのか・・・」
高雅は靴を履き、一応窓から外の様子を確認する。
すると、一足先にアリアが気づいた。
ア「コウガ、何かが向かってくる」
高「わかってる。アリア、行くぞ」
高雅は野良犬では無いことを判断した。
香「何処に行くなの?」

高「俺に対してのお客さんだ」
凛「何故わかりますの？」
高「そこの天使が教えてくれたからだ」
凛「崎村さんも私をバカにするつもりですの？」
高「そもそも、俺よりバカだし」
凛「何ですって！！」
高「おっと、こうしてる内に敵さんがこっちに気づいて来たようだ」
再び窓から外を見ると誰かがこちらに向かっていた。

バリーン！！

凛・香「きゃあ！？」
その者は豪快に窓ガラスを割って入って来た。
？「見つけたぜ！！、コウガ！！」
その者は堂々と額に宝石が付いてあった。
高「誰だ？。お前に名乗った覚えはないが」
ジ「俺は地獄の使い、ジゴクエーだ！！」
高「あーあ、遂に敵までも使い捨てになったか」
ジ「んなことは関係ねえ！！。命よこせや！！」
高「アリア、行くぞ」
ア「うん」
アリアは双剣になった。
凛「ひ・・・人が刀に・・・」
香「やっぱり、アリア姉ちゃんは天使なの」
高「いや、形状変化だけで天使と決めるのは間違いだと思うぞ」
ジ「無視するなや！！」
ジゴクエーが高雅に突っ込んで来た。
高「悪いがソッコーで消えてもらう」
ジ「生意気をーーーーぶっ！？」
ジゴクエーは突然現れた壁に思いっきりぶつかる。

その衝撃で宝石は砕けた。
高「もろ!?」
ジゴクエーは無残にも消えていった。
ア「今までの中で最短記録だね」
アリアは人間の姿に戻った。
香「かっこいーなの」
高「実際、壁を出しただけで、かっこいいとこは何一つなかったけど」
凛「崎村さん、どういうことか説明してくださる?」
高「はいはい、分かりましたよ」

斯く斯く然然

凛「・・・・・」
高「信用できてねえ顔だな」
凛「しかし、目の前で起こったことを見ぬふりをする訳にもいきませんわ」
香「よし、私、決めたなの」
凛「どうしましたの、香凛?」
香「私、高君のお嫁さんになるの!!」
凛・ア「ええーーーー!!??」
高「どっからそういう決断ができるんだ?」
凛とアリアが香凛の提案を懸命に否定する。
凛「ちょっと香凛。あなた、まだ小学4年生でしょ!?。年の差がありすぎますわ」
香「愛に年の差なんて関係ないの。テレビでいってたの」
ア「そ・・それに、そんな大切なことはもっとよく考えないと」
香「大丈夫なの。高君はかっこよくて優しくて強いの。だから決定なの」
ア「大丈夫じゃないの!!。お互いの意思が必要なの!!。勝手に

決めちゃダメなの！！」
高「おい、口調が移ってるぞ」
香「じゃあ、高君。結婚してくださいなの！！」
香凛が深く頭を下げる。
凛「崎村さん、あなたは分かっていますよね？」
ア「コウガ、分かってるよね、よね？」
凛とアリアが恐ろしいオーラを出しながら尋ねてきた。
高「おい、別の口調が移ってるって！！。それに、俺はロリコンじゃねえ！！」
香「嫌なの・・・」
香凛が目をうるうるさせながら訴える。
普通の男性なら負けているが高雅は違う。
高「そんな目をしたってお断りだ」
ア「さすがコウガ」
凛「分かっていらっしゃったようですわね」
すると、香凛が体を震わせながら呟く。
香「・・・・めない・・・・」
高「ん？、何だって」
香「カリン、諦めないの！！」
香凛は勢いよくドアを開けて出て行った。
高「・・・何か、後味が悪いな。取りあえず、もう帰るか」
凛「でしたら玄関まで案内しますわ」
高雅達も部屋を出て玄関へ向かった。

高雅達は門まで歩いている。

玄関から門までも１００メートルはあった。
凛「ところで崎村さん。帰り道は分かっていますの？」
高「・・・分からねえ」
凛「そうだと思いましたわ。ここは緑淵町の隣町ですから」
高「適当に飛んで帰るかな」
凛「何を言っていますの！！。ちゃんと使用人に送らせてあげますわ」
高「そうか。わざわざありがとな」
凛「べっ・・・別に崎村さんの為ではありませんわ。どうせ、香凛が無理やり連れて来たと思いますから、姫花家としてのお詫びですわ／／／」
ア「リンちゃんもツンデレだね」
凛「アリアさん、聞こえていますわよ」
凛がアリアを睨みつける。
アリアは苦笑いで誤魔化した。
高「それより、何で俺をすぐに見つけることができたんだ？」
凛「香凛はあれでも天才ですわ。特に絵なんて右に出るものはいませんわ」
すると、凛が一枚の絵を取り出した。
そこにはリンゴが描かれていた。
高「ほえー、これはすげーな。近くで見ても絵か分からねえな」
ア「ほんと、つい手を出してしまいそうだね」
凛「きっと崎村さんの自画像を描いて、それを使って姫花家で名前を調べ上げ、住所も調べればすぐに分かりますわ」
高「おい、プライバシーはどうしてくれるんだよ？」
凛「それより、崎村さん」
高「何だ？」
すると、凛が目を泳がせながら言った。
凛「この前のテストで負けてしまい、関わるなと言っていましたが・・・それを踏まえてですが・・・こんなことを言うのは勝手かもし

れませんが・・・その・・・・」
高「はっきり言え」
凛は大きく深呼吸をして、高雅の目を見て言った。
凛「私と友達になってくれませんか？」
高「確かに勝手な話だな」
その言葉を聞いた凛はまた顔を逸らした。
凛「私は男の方と友達になったことがありません。崎村さんとはよく話せるというか・・・その・・・心を許せるというか・・・／／／」
高「別にいいぞ」
凛「・・・へっ！？」
あまりにも呆気ないことに凛は開いた口が塞がらなかった。
高「最近、人間というものを見直すようになってな。お前なら別にいいぞ」
凛「あ・・・ありがとうございます」
高「ただし、条件がある」
凛「な・・・何ですの？」
高「アリアのことを天使と踏まえた上で、アリアとも友達になれ」
ア「コウガ・・・」
凛「・・・分かりましたわ」
凛は少し考えたがすぐに条件に乗った。
高「じゃあ、改めてよろしくな」
高雅が手を差し伸べる。
凛「こ・・・こちらこそよろしくお願いしますわ／／／」
恥ずかしながらも高雅の手を握る。
ア「私も、よろしくね」
凛「ええ、よろしくお願いしますわ」
アリアと凛も握手をする。
こうして、ここに新しい絆が生まれた。
高「・・・とか言って歩いている内に、いつの間にか門の前に着い

たな」
門のすぐ前には車が一台停まっていた。
高雅とアリアはそれに乗った。
凛「それでは崎村さん、アリアさん、ごきげんよう」
高「じゃあな」
ア「またね、リンちゃん」
車は発進し、高雅とアリアは姫花家を後にした。

## 芽生える恋！？（前書き）

今回は短めです。

A「勝負だ!!、崎村!!」
騒がしい声で始まってしまい、申し訳ありません。
高雅は買い物へ出掛けているとAとあってしまい、現在に至る。
高「やだ。さっさと退け」
A「ここで退いたら男じゃねえ。それともなんか?。俺に負けるのが怖くて逃げているのか?」
高「じゃあ、そういう設定でいいから退け」
A「お前が良くても俺がよくねえ!!。こうなったら力づくでやってやらあ!!」
高「はぁ〜、面倒くせえよ。俺はお前みたいに暇人じゃねんだよ」
あなたも十分暇人です。
A「知ったことがあるか!!。テメーから主人公の座を奪い取ってやる。行くぞ、タイト!!」
タ「拙者は主に従う。すまないが手合わせ願う」
タイトが契約の力を発動した。
すると、Aの恰好が侍姿になっていった。
手には1．8メートルぐらいの長い日本刀になったタイトを持っていた。
高「そうえば、契約の力は契約者が思った姿になるんだったな」
A「ほら、お前も発動しねえと二等分にしてやるぞ」
高「お前な、ここは道端だぞ。誰かに見られたらどう責任取るつもりだ?」
A「知らん!!」
高「お前・・・ったく、まいったな〜」
周りを見てないAに呆れながら、高雅は困り果てていた。
A「覚悟ーーーーー!!」
Aが思いっきり突っ込んで来た。

しかし・・・
A「うおっ!?・・・〈ガンッ!!〉ぶ・・・」
着なれてない袴(はかま)で生地を踏み、豪快にこけた。
さらに打ち所が悪く、そのまま気絶した。
高「・・・ダッサ」
ア「ほんと、ダサいね」
高「あれ、アリア。いたのか?」
ア「ずっとコウガの腕にいたよ!!。勝手に空気にして・・」
高「悪いな。さーて、買い物に行きますか」
A「逃がさーん!!」
Aが復活した。
高「お前、Dから早起きのスキルもらっただろ」
ア「それで、どうするの?」
高「・・・仕方がないけど、やむを得ないからな」
高雅もアリアの契約の力を発動しようとした。
その時・・・
香「高君、みーっけなの!!」
高「姫花の妹!?。どうしてここに!?」
香「カリンはカリンなの。姫花の妹じゃないの」
香凛が高雅をポカポカ叩きながら注意する。
その姿を見たAの様子がおかしくなる。
A「・・・いい・・・」
高・香「ん?」
A「かわいいーーーー!!」
高「はぁ!?」
Aが香凛に対してデレデレになっていた。
A「いい、めっちゃいい。その容姿、その身長、その胸。最高だーー!!」
高「やばい、こいつロリコンだ・・・」
A「お譲ちゃん、こっちにおいで。アメあげるから」

Aの顔は『誘拐します』と言わんばかりの笑顔だった。
高「こいつ、最も最悪なロリコンだな」
香「いやなの。だって臭いの」
高「なんとストレートな」
Aはすぐに香水を取り出した。
A「〈プシュー〉さあ、これで臭くないよ。こっちにおいで」
高「おい、アメはどうした」
香「そんな安物の匂いじゃ嫌なの」
高「さすがお譲さまだな」
A「ええい、早く来い！！！」
高「ふっきれたな。この最低誘拐ロリ野郎」
Aは目的を変更し、日本刀（タイト）を捨てて、香凛に襲い掛かる。
その顔は完全な犯罪の顔だった。
A「ぐへへへへ・・・ぐおっ！？・・・〈ガンッ！！〉ぶ・・・」
全くさっきと同じ要領である。
高「学習しねえ奴だな」
香「この人、バカなの」
すると、高雅はAが捨てた日本刀に近づいた。
高「なあ、何で黙ってたんだ？。こんなに悪いことばっかしてるのによ」
タ「いや、主が『現世では自分より年下の子に何かするのは悪いことじゃない』と教わったのだ」
高「・・・あの野郎・・・アリア」
ア「やっと活躍できる・・・」
アリアは契約の力を発動した。
そして、日本の犯罪になる事が全て乗った分厚い本を創造した。
そして、アリアはまたブレスレットに戻った。
ア「え！？。私、もうお終い！？」
アリアを無視して高雅はタイトの目の前に本を置く。
高「これが、日本の悪いことが全て乗った本だ。もし、あいつが悪

いことを行った時は容赦なくぶった切れ」
タ「そうか。忝い（かたじけな）」
高「漢字が多いけど、読めるのか？」
タ「心配無い。拙者は漢字を全て覚えいておる」
高「へー、漢検1級は取れそうだな」
タイトは人間の姿になり、契約の力を解除した。
そして礼をして、Aと本を担いだ。
タ「それでは、拙者はこれを読むことにする。ごめん」
そう言って、タイトは帰って行った。
すると、香凛が高雅の手を握った。
高「・・・何の真似だ？」
香「今からデートなの。エスコートよろしくなの」
だが、香凛の作戦も失敗に終わる。
ガ「見つけました、香凛様。勝手に抜け出してはいけません」
ガードマンが香凛を抱えた。
香「やだなの！！。今からデートなの！！」
ガ「今からお勉強の時間です。ですから帰ります」
香「嫌なの！！。離してなの。高ーーーーくーーーーん」
大げさな声で高雅を呼ぶが反応せず、黙って連れて行かれるのを見ていた。
高「・・・なんか疲れたな。買い物は明日にしよ」
高雅も家に帰った。
ア「私、出番が少なかった・・・」

☆オマケ☆
高「オマケと言っても単なる注意か。読者（おまえ）がロリコンか知らねえけど、絶対にあんなロリコンになるなよ。でないと、こうなるぞ」

タ「主よ、拙者を騙すとは・・・覚悟ができているのであろうか」
A「待て、話せば分かる。だから剣を納めｔぎゃあああああああああ」
高「・・・まあ、小説（ここ）はテープ人生だが、お前らの世界は警察行きだからな。ちゃんと自制を掛けるようにな。んじゃ、次回も読んでくれよな」

# 海と蛸　前編

リビングで日向ぼっこしている高雅は“夏”について考えていた。
高「夏か・・・あのイベントは避けねえとな」
そう言っている内にそのイベントを誘う(いざな)一人の使いがドアを開けてやって来た。
ア「コウガ、うm「いやだあああああああああ」コウガ!?」
あまりのオーバーリアクションにアリアは目を丸くした。
高「無理だ!!。それだけは無理だ!!」
ア「まだ用件は言ってないけど・・・」
高「それだけ言えば分かる。と、いうことで逃走だ!!」
ア「あっ!!、待ってよ!!」
高雅はアリアの脇を瞬時にすり抜け、玄関へ向かった。
しかし、逃げることは許されていなかった。
高雅は勢いよく玄関の扉を開けたが・・・
香「高君、海に行こうなの」
凛「べ・・・別に香凛が崎村さんとも行きたいって言うから仕方なく誘っているのですよ。私は別に何も思っていませんからね」
香凛と凛がいた。
高「却下」
バタンとでかい音を立てて扉を閉めた。
凛「ちょ・・・どういうことですの!?」
凛がドアをドンドン叩くが高雅は聞いてない。
高「ならば部屋の窓からだ!!」
高雅は自分の部屋へ向かった。
しかし、部屋の中にある人物がいた。
ロ「おう、コウガっち。ニ〇動見せてもらってるぜ。それよりさ、海に行こうぜ」
蓮「こうが兄ちゃん、海に行こうよ」

ログナと蓮田がいた。
高「・・・どうやって入った？」
ロ「俺達天使は壁抜けぐらい簡単だぜ」
高「そういや、アリアもやってたな。それより、後で不法侵入で通報してやる」
そう言って高雅は別の場所へ向かった。
高「次は和室だ！！」
特急で和室へ向かう。
そして、和室の障子を開けた先にも・・・
A「勝負だ！！、崎村！！。今日は仲間の前でかっこいい所を見せてやるぜ！！」
購組「うおおおおおおおおおおおおお」
なぜか購買部組がいた。
高「後でぶっ殺してやる」
高雅は別の場所へ向かった。
高「だったら裏口だ！！」
高雅は裏口へと駆けて行った。
しかし許される訳がなかった。
開けた先には・・・
龍「あっ・・・崎村君・・・その・・・」
夢「一緒に海に行かない？」
龍子と夢がいた。
高「ふざけるなあああああああああああ」
また別の場所へ。
高「だったら台所の窓だ」
次こそは、と思う高雅を作者（うんめい）は許さない。
窓の前には・・・
レ「コウガ殿。この暑い日は海に出かけるのがいいのではないか？」
レオがいた。
高「レオ、退け！！」

レ「いや、退きたいのだが、何故か退くことが許さない気がするのだ。すまない」
高「意味分かんねーよ!!」
そう言って別の場所へと行く。
高「最後はトイレの窓だ。いい加減、誰もいないはずだ」
そう言ってトイレへと向かう。
はっはっは、作者(おれ)を甘く見るなよ。
この小説は何でもありだぜ。
高「やな予感・・・」
高雅がトイレの窓を開けた先には・・・
セ「コウガ様。お久しゅうございます。あなた達に会いに来ました」
高「何で、セバスチャンがいるんだよおおおおおおお」
ア「セバスチャン、コウガを捕まえて!!」
セ「畏(かしこ)まりました」
高「なっ!?」
セバスチャンは高雅を取り押さえた。
高「くそ、離せ、離さんか!!」
高雅はふと、どっかのフリーのカメラマンの台詞を言っていた。
すると、ぞろぞろとオールスターズがやって来た。
そして、アリアが思っていたことを口にする。
ア「コウガ、もしかして泳げないの?」
高「・・・・そうだよ・・・・」
高雅は恥ずかしそうに答えた。
凛「崎村さんにも苦手なことがありますのね」
香「高君も泳げないの」
A「だっせーーーーー。あっはははははははは・・・」
タ「主よ、人のできぬ事をそこまで嘲笑うのは失礼ではないのか」
A「わかった!!。わかったから刀を仕舞ってくれ!!」
龍「別に・・・泳げなくても・・・恥ずかしくない・・・」
夢「そうだよ。あたしだってそんなに泳げないんだから」

セ「コウガ様、人は苦手なことが一つや二つはあるものです」
ロ「でも、克服しねえとな」
凛「それもそうですわね。苦手と言うものは乗り越えなければなりませんわ」
香「だから、高君と海にレッツゴーなの」
高「おい、勝手に決めるな」
ア「いっその事、ここの皆と一緒に行こうよ」
A「いいのか!?。だけどよ、この人数はさすがに無理じゃねえのか?」
凛「今からもっと大きな車を持ってきてもらいますわ。その間に準備してここに集合してくだされば大丈夫ですわ」
蓮「僕なんかもいいの?」
香「多い方が楽しいの。だから来ていいの」
ロ「でもよ、水着なんて持ってねえぞ」
凛「心配ありませんわ。こちらで用意しますわ」
ロ「そいつは、ありがてえぜ」
A「よっしゃ―。行くぜ、仲間達よ」
購組「おーーーーーー!!」
高「ふざけるなあああああああああああ」
数十分後、購買部組は水着を取りに行き、戻って来た頃にはリムジンのような車が来ていた。
そして、高雅は拒否権なく海へと連行された。
A「海だあああああああああああああああああ」

高「うっせえ！！」

ドゴッ！！

A「ぐわっ！！」

高雅のドロップキックが炸裂！！。

・・・と、まあ取りあえず海に着いた。

ちなみに、車の中でアリア達の自己紹介もあった。

そのお陰でアリア達天使組はここにいる皆に知られることができた。

後、女子組は着替え中。

着替え終わった男子組は先に海を拝めていた。

高雅も強制的に着替えさせられた。

高「それにしても、人が一人もいねえ海とか、危険じゃねえのか」

海に人は誰もいなかった。

もちろん、夏ですよ。

いきなり冬になった訳じゃありません。

凛「違いますわ。ここは姫花家の敷地の一つですわ」

その声に反応して男子組が全員振りかえる。

ア「あれ、コウガも何気に着替えてるってことはやる気があるみたいね」

高「ちげーよ。無理やり着替えさせられたんだ」

男子全員（高雅、タイト、セバスチャン以外）は完全に鼻の下が伸びていた。

購組「目の保養キターーーーーーーーーーーーーーー」

高「てか、敷地って。やっぱ、金持ちはやっぱ違うな」

高雅は購買部組を無視して質問した。

凛「それはそうと、崎村さんがどれくらい水に慣れているか知りたいですわ」

高「はいはい。まあ、見たら教える気が失せるだろう。おい、浮き輪貸してくれ」

香「はいなの」
高雅は香凛から浮き輪を受け取り、海へ歩いて行った。
A「だっせー、浮き輪がねえと海に入れねえのｋ〈シャキ〉ごめんなさい」
タイトが腰に挿していた刀を少し抜いただけでAは自重した。
・・・てかタイトよ。水着で刀を挿してたのかよ。
高「見てろ。これが俺の泳げねえ理由だ」
高雅は波に逆らいながらもゆっくりと沖へ歩いて行った。
凛「あら、水が怖いってわけでもありませんわね」
すると、浮き輪が水面に着いたが・・・
ア「・・・何かおかしくない？」
高雅はもう首まで沈んでいるが浮き輪で浮いていない。
遂には頭も沈みきった。
夢「・・・浮か・・・・ない・・・」
高雅が沈みきって３０秒後。
高雅が同じように歩いて戻って来た。
高「分かったか。俺は異常なカナヅチだ」
そう、高雅はどんなに浮き輪やビート板を持っていても沈んでしまう体質である。
もはやカナヅチのレベル越えてます。（笑）
高「浮くことができない奴が泳ぐなんて夢のまた夢の話だ。分かったか。俺はもう着替えるから後はお前らで楽しめ」
高雅は浮き輪を香凛に返して海の家に向かった。
凛「ちょっとお待ちなさい。まだ諦めていませんわ」
ア「私だって同じだよ。絶対に泳げるようにしてあげるから頑張ろうよ」
A「俺だって手伝ってやってもいいぜ。そしたら一万円ｗ〈ジャキン！！〉分かった。分かったから剣を納めてくれ」
セ「コウガ様、諦めてはいけません。わたくしもできるだけ手伝います」

高「あのな、浮かねえのにどうやって泳げばいいんだよ？」
香「浮き輪をいっぱい付けるの」
すると、香凛は何処からともなく浮き輪を大量に出した。
凛「香凛、どうして浮き輪がこれほどありますの？」
香「えへへ、皆欲しかったから買ってもらっちゃったの」
と頭を掻き、笑いながら答える香凛。
凛は溜息を吐き、完全に呆れていた。
ロ「ほんじゃ、早速行ってみよー」
高「無駄だけどな」
高雅は持てるだけ浮き輪を持ち、また沖に向かって歩き出した。
だが高雅が浮くことはなく、全ての浮き輪が力無く沈んでいった。
また歩きながら帰ってくる高雅の姿に皆はどうするか迷っていた。
高「諦めろって。これは無謀すぎｒおわっ！？」
突然、高雅がこけてしまい、豪快な水しぶきを上げつつ浮き輪をばら撒いた。
Ａ「だっせー。ぎゃっははははははｈ〈ザシュ！！〉はぎゃあああああああああ」
Ａ、二等分の刑。
作者の特殊能力、死者蘇生（テープくっつけ）。
ア「・・・あれ、コウガが起き上がってこない」
浮き輪がぷかぷか浮いているが高雅の姿は見えなかった。
こけた場所の深さは高雅の腰ぐらいの深さだ。
ア（あれ、そもそも腰ぐらいの深さなら普通はこけないような・・・）
アリアは何か矛盾していると考えていると高雅の声が聞こえた。
それは意思会話である。
高（アリア！！、海から離れろ！！）
ア（！！、コウガ！？。どういうこと！？）
高（いいから、早くしろ！！）
ア（どうして！？。詳しく教えてよ！！）

意思会話に夢中になっているアリアは海中に蠢く影が見えていなかった。

セ「！！、アリア様、危ない！！」

ア「え！？」

突然、海中から吸盤の付いた赤い触手がアリアに襲いかかって来た。

セバスチャンがアリアを間一髪のところで助け、それに気づいていたタイトがすかさず斬り落とした。

ア「ありがとう、セバスチャン。あれは・・・タコの足！？」

タイトが斬り落としたのはタコの足そのものだった。

ただし、太さで直径2メートルはある代物だ。

タ「気をつけろ。水中に何か巨大な生物がおる」

ロ「最も、タコだろうけどな」

蓮「タコってこんなに大きい足だったんだね」

ロ「おい蓮田。これは異常なタコの足だ。普通のタコの足はもっと小さいぞ」

タ「・・・来る」

バシャーン！！

蛸「ウフォオオオオオオオオオオオ」

タイトの感じた通りにタコの姿が海中から現れた。

全長３０メートルはある未知の大きさだ。

購組「でけえええええええええええええ」

凛「何ですの、あれは！？」

香「大きなタコさんなの」

夢「感心せんで、早よ逃げるよ！！」

非戦闘員は逃げてゆき、残ったのはＡ＆タイト、蓮田＆ログナ、セバスチャン、アリアだけだ。

Ａ「しゃーーーーー。行くぞ、タイト」

タ「分かったでござる」

テンションの高いAがタイトの契約の力を発動した。
A「ふっふっふ、今度こそ主人公最強の力を見せてやるぜ」
それは次回の話で。
A「次回は俺の一人活躍だぜ」

## 海と蛸　中編（前書き）

なんか長引いて3編になっちゃった。

# 海と蛸　中編

ここはタコの腹の中。
高「・・・まさか、喰われるとかな・・・」
捕食されてしまった高雅は出口を探していた。
高「早くしねえと消化液が出てきて溶けてしまうな。てか、何であんな巨大なタコがいるんだよ・・・」
まあまあ、非日常だから問題ないって。
高「繋がりがなかったら大問題だぞ」
大丈夫。ここまで読んでくれるほど心の広い読者なら理解してくれるって。
高「真面目にやれ！！」
・・・はい、ちょっとしゃしゃりすぎました。反省します。
高「で、何が原因でこうなった？」
それ言ったらネタバレじゃん！！。
高「気にするな。そういう小説もありだ」
アッ、ソトノヨウスヲカカナクチャ。
高「・・・逃げたな。仕方がない、アリアと連絡でもしとくか」

A「さあ、お待ちかね。世代の交代の時がやって来たぜ」
超自惚れのAがかっこつけてはしゃいでいた。
ア「大丈夫？。いくらなんでも一人じゃ・・・」
A「俺は主人公だぜ！！。キーワードに主人公最強があるんだぞ。

負ける訳がないって」
ア「何言ってるの？」
A「行くぜーーー！！」
アリアを無視し、Aはタコに向かって跳んだ。
しかし、Aの身体能力は一般的だ。（ちなみに、高雅もちょっと上なだけ）
なのに速度の力も無ければ、足を活性化して強化しない。
つまり、跳ぶと言っても誰でもできる平均的な立ち幅跳びって訳。
A「・・・あれ？」
タ「何を遊んでおる！！。真面目にせぬか！！」
A「いや・・・だって、普通は異世界の奴と関われば身体能力ってバカみたいに上がるんじゃ・・・」
はっ？、別に高雅はアリアと契約してもそのままの力ですけどなにか？
あんたファンタジーの見過ぎ。
A「ええ！！。嘘だろ！！」
タ「何をしておる！！。敵が攻撃を仕掛けてるぞ！！」
A「え！？」
気づいた時には5センチ先にタコの足があった。
A「あっ、俺死んだ」

バギャッ！！

骨が砕けるような音を立てながら、Aは吹っ飛ばされ、砂浜に埋まった。
ロ「あいつ使えねえな・・・よっと」
ログナはタコの足を交わしながら哀れなAを見ていた。
蛸「ブフォオオオオオオオオオオ」
タコは超広範囲の墨を吐いた。
ただしその圧力は家が吹き飛ぶほど強いものだった。

ロ「うお！？」
蓮「わあ！？」
ログナと蓮田は巻き込まれ、壁に叩きつけられ気絶した。
ア「ログナ、レンタ君！！」
セ「アリア様！！」
ア「！？、きゃあ！！」
アリアが注意をそらしたその瞬間にタコはアリアを捕えた。
セ「アリア様！！・・・ぬおっ！？」
セバスチャンは片手を剣に変え戦っているが、複数の足をまとめて相手をするので手一杯だ。
ア「うぐ・・・ぐ・・・」
絶体絶命に追い込まれいった。

非戦闘員は車に乗り、遠くで見守っていた。
凛「一体、どうなっていますの！？」
凛が双眼鏡を持ったDに聞く。
D「なんかやばいぞ。アリアって言う人が捕まって、Aがぶっ飛ばされて、墨吐いて暴れてるぞ」
香「高君は大丈夫なの？」
D「いや、分からない。まだ姿が見えない」
香「高君・・・」
香凛は今にも泣きそうになっていた。
凛「大丈夫ですわ、香凛」
香「凛姉ちゃん？」

凛「香凛の病気を治した人がやられる訳ありませんわ」
香「科学的根拠はどこにあるの？」
凛「う・・・ここで天才ぶりを見せてはいけませんわ」
香「子供扱いしないでほしいの。カリンは高君を信じてるの」
凛「でしたら、さっきの涙目は何でしたの？」
香「！！、カリン、泣いてないの！！。凛姉ちゃんのバーカ！！」
凛「何ですって！！。姉に向かってその態度は何よ！！」
D「おや、言葉遣いが変わってる・・・ってそんなことより、ストップストップ！！」
姫花同士の喧嘩を購買部組が止めに懸かる。
夢「何やってんだか」
龍「二人とも・・・崎村君のこと・・・思ってるから」
夢「じゃあ、龍子は思ってないって言うの？」
龍「違う・・・暴れても・・・崎村君のことは・・・変わらない」
夢「大人ね、龍子は」
龍「違う・・・ただ怖いだけ・・・」
そう言って龍子は、Dが置いた双眼鏡を覗き、海の方を見る。
龍「・・・皆・・・無事に・・・」

ア「う・・・ううう・・・」
じわじわと締め付けられるアリアは限界に達しようとしていた。
ア（やばい・・・骨が・・・）
高（おーい、アリアー。聞こえるかー？）
ア（コウ・・ガ・・・）

高（その物言いは逃げてないな）
ア（ゴ・・・ゴメン）
高（謝るな。それよりさ、どうにかしてAにタコの頭を斬ってもらえねえか？。食べられてしまってな）
ア（ゴメン・・・無理っぽい）
高（何で？。今、捕まってるからか？）
ア（それも・・・そう・・だけど・・・もうAはやられ・・・ちゃった・・・から）
高（大丈夫だ。あいつはタイトに鍛えられてるから）
ア（え！？）
その時、期待の声が聞こえた。
A「うおおおおおおおおおおおお」
ア（！？）
Aがタコに向かって走って来ていた。
学習したのか、袴でも上手く走れており、活性の力で足の力を増強していた。
A「とーーーーーーーーーーーーう」
天高く跳び上がるAはタコの頭上の空にいた。
A「これが主人公の力だあああああああああああああ」
重力の加速を利用し、さらに活性の力を腕に込める。

ザシュッ！！

そのまま、タコの頭を一閃した。
A「へへ・・・やった・・・ぜ・・・」
Aはそのまま無抵抗に落ちていった。
タ「主よ！！」
タイトがすぐに契約の力を解除し、Aを抱え、その場を離れる。
力を無くしたタコはアリアを放して崩れ落ちた。
ア「よかった。これで無事に・・・」

その言葉は目の前の光景によって潰された。
ア「・・・嘘でしょ・・・」
真っ二つの頭が再生を行っていた。
ア「そんな・・・」
セ「アリア様!!、右から来ています!!」
ア「へ!?」
完全に脱力状態のアリアは避けることができる訳なかった。

バゴッ!!

ア「あう!!」
砂浜へと叩き落とされてゆく。
セ「アリア様!!」
落下地点にセバスチャンが先回りしていた。
物凄い砂煙をあげながらもアリアをしっかりと受け止めた。
セ「大丈夫ですか、アリア様!?」
ア「うん・・・ちょっと痛いけど・・・」
ちょっとの痛みではないとセバスチャンは分かっていた。
なんせ、大木でぶん殴られるようなものだからだ。
確実に骨の何本かは折れているに違いない。
セ「無理をなさらないでください」
ア「大丈夫だって・・・いた・・」
アリアは自力で立とうとしたが痛みによって立つことはできなかった。
高「大丈夫か?」
ア「!!、コウガ!?、いつの間に!?」
高「ついさっきここに来た。頭かち割ってくれた時に脱出したけど」
ア「そう・・・よかった・・・」
高「契約の力を使えるか?」
ア「もちろｎ「嘘つけ」え!?」

高「さっきから必死に痛みこらえながら顔を引きつってるじゃねえか」
ア「そ・・・そんなことないよ」
高「おれを誤魔化せるとでも？」
ア「・・・・・・」
アリアは何も答えることができなかった
蛸「フォオオオオオオオオオオオオオオ」
高「おやおや、あまり待ってくれるタコじゃねえようだ。セバスチャン、剣になってくれねえか？」
ア「！！、まさか、セバスチャンと戦うつもり！？」
高「もち。お前は休憩しとけ」
ア「私はだいじょうｂ〈グイッ〉いた！！」
高雅は赤く腫れ上がっている部分を手で押した。
高「説得力ねえよ。で、セバスチャンは？」
セ「分かりました。コウガ様にお任せします」
そう言ってセバスチャンは緑色の剣になった。
高「じゃあ、お前には攻撃が当たらないようにするから安心してろ」
ア「待って、私もまだ・・・」
アリアの声は高雅に届いていなかった。
ア「私・・・ただの足手まといなの・・・」
そんな疑惑がアリアを襲い続けた。

# 海と蛸　後編

タコは大分ご立腹になっていた。
どたどた足を振り回しては高雅に斬られていた。
ペースは完全に高雅のものになっている。
高「なあ、セバスチャンの力は何だ？」
セ「わたくしの力は速度です。ですが、コウガ様は使うことができません」
高「何でだ？」
セ「簡単な理由です。契約をしておられないからです」
高「成程な。そりゃ納得」
セ「ただし、私自身なら使うことができます」
高「・・・じゃあ、早速頼むぜ」
高雅は剣を天高く投げ上げた。
セバスチャンは速度の力を使い、高く高く上ってゆく。
だが、剣は気づいた時にはタコを真っ二つにしていた。
高「解説すると、重力＋速度で落下速度をマッハぐらいにまで跳ね上げ、そのまま斬った訳」
代わり解説、乙。
セ「しかし、これではまた再生されてしまいますぞ」
高「戻ってくるの早いな。まあ、確かにそうだな」
タコはまた再生を始めていた。
高「何か策があればいいけどな・・・」
ペースはこっちのものだが倒すことのできないなら結果は負けてしまう。
高雅は再生するタコを見ながら策を練っているが思いつかない。
すると、高雅の肩に手の感触が感じた。
高「ん？、アリア！？。大人しくしろって」
ア「だって、再生されるなら静寂か虚無を使わないと勝てないよ。

だから私も戦う」
高「あのな、そんな怪我だらけでどうやって戦うつもりだ？」
ア「大丈夫よ。契約の力を使えば再生の力で回復できるから」
高「あれはあくまで再生だ。骨折とかは治るが、腫れは治らねえぞ」
ア「それでもいい。腫れは痛みだけだから我慢できる。だからお願い」
高「お前な、何でそんなに戦いたいんだよ？。戦闘狂にでもなったのか？」
ア「違う。・・・ただ・・・見捨てないで欲しい・・・」
高「はぁ！？」
高雅は理解してないがアリアは言い続けた。
ア「だって・・・コウガが私の代わりにセバスチャンを使ったから・・・私、見捨てられると思うから・・・」
高「おいおい、意識し過ぎだって」
ア「お願い、私を使って！！。痛みなら我慢するから！！。戦いに支障は出さないから！！」
高「・・・・・・・・」
高雅は険しい顔をしながら黙り込む。
そして、セバスチャンに聞いた。
高「なあ、セバスチャン・・・」
セ「いいですよ」
高「・・・お見通しか。一人で戦っててくれ」
セバスチャンは高雅の手から離れ、一人でタコへ向かった。
ア「コウガ・・・」
アリアは認めてもらったと思い、安心したが・・・

バゴッ！！

ア「ッ！？」
高雅がアリアの頬を思いっきり殴った。

高「・・・私を使え？・・・ふざけるなよ」
ア「コウガ？」
アリアは頬を抑え、高雅の顔色を窺う。
高雅は怒りに満ちていた。
高「お前は自分を物としか思ってないのかよ！！。自分の価値を何だと思ってやがる！！」
今までに見せたことのない激しい憤怒。
アリアは怯え、目の前の高雅が本物か疑っていた。
高「お前は誰かの奴隷になればそれでいいのかよ！！。自分の身が果てようがそれでいいと思ってるのかよ！！。んな、間違いだらけの気持ちを持ってんじゃねえよ！！」
ア「間違ってｎ「間違いだ！！。もし、お前に何かあったら、誰が悲しむのか分かってんのかよ！！」え！？・・・」
高「お前は人の心配をブチ壊してるだけだ！！。もっと甘えやがれ！！。人の恩恵を受け止めろ！！」
ア「・・・・・・」
アリアは頬に一筋の涙を流した。
高「・・・反省したか？」
高雅はさっきまでのと裏腹に優しく尋ねた。
ア「・・ぐす・・・ごめんなさい・・・」
高「分かればいいんだよ」
高雅はアリアの頭を撫でる。
ア「ぐす・・・ううう・・・」
高「俺はもう行く。待っててくれるか？」
アリアは小さく頷く。
それを確認した高雅はセバスチャンの元へ向かった。
セバスチャンは足を斬り倒していた。
高「どうだ、状況は？」
セ「再生能力が厄介なだけで変わりありません。それより、コウガ様」

高「な・・・何だよ」
セ「アリア様を殴ったことは許し難いですね」
高「あー・・・悪い」
セ「特別に許して差し上げましょう」
高「サンキュー。・・・はぁ～、だりーな。何かキレてから、もっとだるくなった」
セ「？、コウガ様、その足に付いている水はアリア様の涙ですか？」
高「ああ、ちょっと掛かってな」
セ「それに静寂の力があります」
高「マジかよ。どうりでだるい訳だ」
セ「いい案があります。それを使って再生の力を静寂化させましょう」
高「あ、成程。そりゃ名案。だけど、こんだけで足りるか？」
高雅の足に付いてある涙は3，4滴だ。
セ「大丈夫です。かなり密度の高いようですから」
高「そうか。ならそうするか」
すると、タコが足を振り下ろして来た。
セバスチャンと高雅はそれを難なく避ける。
高雅はすかさずタコ足に乗り、タコの顔面へ向けて駆けだした。
高（結局、アリアのお陰で勝てそうだな）
高雅はそんなことを考えている内にでかい頭の目の前に来ていた。
高「くらえ！！」
高雅がドデカ頭に静寂を込めた蹴りを喰らわせる。
それを見計らってセバスチャンが上空から頭を一閃する。
タコは本日3度目の真っ二つになった。
それが再生することはなかった。
高「再生しないな。勝ったのか？」
セ「そのようでございますな」
セバスチャンは高雅の手を掴み、浜辺へ飛んだ。
高雅は浜辺へ着地して安全を確認した。

高「よーし。取りあえず、逃げた皆を呼ぶか」
セ「でしたら、わたくしが呼びますのでコウガ様は気絶している者をお願いします」
セバスチャンは速度の力で車の所へ向かい、高雅は気絶している皆を集めた。

それから時が過ぎ、夜。
あの後、ログナが目を覚まして戦闘組を回復させたが、服が無かったか結構腫れている部分が多かった。
再生の力が使えない怪我は姫花家の使用人に治療してもらった。
帰ろうとしたが高雅が『楽しまないのは勿体無いから気にせず遊べ』と強く言うのでビーチバレーとかで遊んでいた。
タコの所為かその後、海には入らなかった。
日が沈み始めるぐらいに着替えて、バーベキューを楽しんだ。
そして、現在は天体観測を楽しんでいた。
蓮「すごーい、星がいっぱいだ!!」
凛「ここは街灯も少なく、空気も綺麗ですので天体観測には打って付けの場所ですわ」
龍「・・・綺麗・・・」
夢「夢みたい・・・」
A「ぷっ、なに自分のことを言ってんだよ」
夢「そういう意味なわけ無いじゃん!!」

バゴッ！！

夢のパンチは綺麗にみぞを突いた。
A「はう！！・・・」
B「大丈夫か！？」
高「返事が無い、ただのｓ「殺すなーーーー」・・・っち」
ア「ふふふ・・・」
アリアはそんな光景を見て笑っていた。
セ「アリア様、少しよろしいですか？」
ア「？、別にいいけど」
セバスチャンはアリアを連れて皆と少し離れた所へ行った。
ア「それで、話って？」
セ「本日の戦いのことで、です」
ア「あ、もしかして怒ってる？」
セ「はい、わたくしもコウガ様と同じ気持ちでした」
ア「・・・ごめんね」
セ「わたくしの分はコウガ様がやりましたので、これ以上は何も言いません。それともう一つ」
ア「何？」
セ「単刀に聞きます。コウガ様の事をどう思っていますか？」
ア「え！？・・・それは・・・」
セ「はぐらかさずに答えてください」
セバスチャンの目は本気だった。
アリアはそれを悟って本心を打ち明ける。
ア「・・・・・コウガのこと・・・・好き・・・」
セ「やはりですか。まあ、薄々感じていましたが」
ア「だったら、何で聞いたのよ？」
セ「アリア様の口から直接確認がしたかったもので」
ア「もしかして、認めないつもり？」
セ「ほっほっほ、そのようなことではありません。ただ・・・」

ア「ただ？」
セ「コウガ様とアリア様はそれぞれ違うことを認識していてください」
ア「・・・・・それって、人間と天使ってこと？」
セ「そうです。それは幾千の壁を作ってしまうかもしれません」
ア「・・・・やっぱり・・・」
セ「ですが、コウガ様を思う気持ちを強く持ち続けておられれば、きっと叶います」
ア「セバスチャン・・・」
セ「わたくしは如何なる時でもアリア様の味方です」
ア「・・・ありがとう、セバスチャン」
セ「それでは、そろそろ戻りましょう」
ア「うん・・・私、頑張るよ」
二人は皆の所へ戻り、天体観測を楽しんだ。

形はどうであれ、夏休みの思い出が一つ生まれた。

☆おまけ☆

C「俺、喋らなかった・・・」
いや、購組として喋っただろ。
E「それは別だろ。個人として喋ってねえんだよ」
仕方ないだろ、脇役なんだから。
C・E「うるせー！！」
C「それよりよ、何で最近、Aが活躍してんだよ！！」

A「悪いか？」
E「出たな裏切り者。殺してやる！！」

ドガッ・・バギッ・・・・喧嘩中・・・・ドゴッ・・ボゴッ・・・・

C・E「ばたんきゅ～」
A「はっはっはっはっは・・・主人公の力を思い知ったか！！」
いつになったらこの自惚れが治るのだろうか・・・
高「バカに付ける薬はない」
だな。よーし、とことん自惚らさせて最悪な死に方を描いてやるか。
A「俺死ぬの！？」
高「俺としては嬉しいな」
A「んだと！！」
高「何だよ？」（↑超冷酷な声）
A「な・・・何でもありません（くそ、どうして主人公になっても勝てねえんだよ・・・）」
・・・えー、今後、この自惚れを救うつもりはありません。
高「ネタキャラ完成だな」
イエス。
それじゃ、次回も読んでください。

# 祭りだ祭りだ！！

高雅は寝っ転がってゲームをしていた。
高「あー、暇だなー・・・あっ、天鱗ゲット」
レ「コウガ殿、勉強でもしてはどうだ？」
高「夜はしてるぞ・・・よーし、これでツバキが作れる」
ア「昼もすると効率がいいよ」
高「昼の分も夜に回してるから大丈夫・・・訓練所でもいくかな」
ア「たっく・・・ん？」
アリアは落ちている広告に目がいった。
ア「緑淵お祭りか・・・今日の夜にあるみたいだし。ねえコウガ。これに行こうよ」
高「夜は勉強だ・・・おっ、威嚇ばっかしてる。今日は運がいいな」
ア「今からすれば行けるよ。私は行きたいよ」
高「一人で行け。場所は５００メートル以内だろ・・・おお～、レックスを１分４０秒か。中々だが、もっと上がいるだろうな」
ア「も～」
レ「コウガ殿、生活習慣を変えて堕落することはダメな人間の証拠だ」
ダメな人間。その言葉が高雅を動かした。
高「・・・わーったよ。勉強すればいいんだろ」
ア「じゃあ「だけど、祭りは行かねえ」どうしてよ？」
高「めんどくさい、人間うじゃうじゃ、つまらない。分かったか」
ア「何一つ分からないよ。特に最後の方。つまらないってどういうこと？」
高「簡単に言えば飽きた。だから行かねえ」
ア「・・・はぁー、こんなに可愛い子が誘ってるのに」
高「イタイイタイ病にかかったか？」

ア「それってどういう意味？」
レ「使い方も間違っておるぞ。勉強不足だ」
高「いや、わざとだし」
アリアは遂にキレた。
ア「分かったよ！！。レオ君と一緒に行けばいいのでしょ！！」
レ「何故我と！？。後、君付けをするでない！！」
アリアはレオを連れて部屋を出ていった。
高「・・・・しゃーね、勉強でもすっか」
高雅はゲームを止め、勉強を始めた。

アリアはリビングで落ち込んでいた。
ア「はぁー・・・」
レ「どうしたのだ、アリア殿？」
ア「コウガと祭り、行きたかったなー」
レ「仕方がないではないか。コウガ殿は夜に勉強をすると言っておられる」
ア「そうだけど、普通は祭りの為に昼に勉強を終わらしたりないの？」
レ「コウガ殿はある意味で生活習慣を乱してないのだ」
ア「でも、こういう特別な日ぐらいは・・・」
アリアはバカらしくなってきて喋るのを止めた。
ア「もういいや。ここで愚痴ってもしょうがないし・・・」
レ「祭りはどうするのだ？」

ア「興味はあるから一応行くよ。レオ君も来る？」
レ「君付けをやめい！！・・・まあ、我も行ってみたい」
ア「それじゃ、決まりだね。夜まで暇だし、散歩でもしよっか？」
レ「悪くないな」
アリアとレオは外に出て時間つぶしの散歩をした。

夜。
アリアとレオは高雅に断っていた。
ア「それじゃ、お祭りに行ってくるね」
高「金を持たずにか？」
ア「あっ・・・」
高「それと、この場所が分かるのか？」
高雅はチラシを押しつけながらアリアに問う。
ア「えっと・・・大体・・・」
アリアは自信無く答えた。
高「行く気あるのか？」
ア「コウガよりはあるつもりだよ」
高「ふ～ん・・・ほらよ」
ア「えっ！？・・・っと」
高雅は手提げ袋を投げ、それをアリアは受け取った。
アリアは中身を確認すると中には2千円入っていた。
ア「コウガ・・・これ」
アリアの質問を無視して高雅は説明を続ける。

高「学校への道は分かるな。そのあたりに看板で案内してると思うからそれを辿れ」
ア「えっ・・・ありがとう」
高「後、女の子は祭りのときは普通、浴衣になるもんだぞ」
ア「そうなの・・・だったら」
アリアは契約の力を発動し、浴衣を創造した。
高「・・・力の無駄遣い・・・」
ア「気にしない。それじゃ、行ってくるね」
レ「コウガ殿、勉強を怠ってはダメだぞ」
高「へいへい・・・あっ、そうそう。8時にはそこから離れろよ」
ア「どうして？」
高「隣町があの祭りに何か恨み持ってるらしい。だから、面倒事に巻き込まれる前に帰って来い」
ア「うん、分かった。心配してくれてるのね」
高「ば・・バカ!!、別にそんなことじゃねえよ!!／／／」
ア「ふふふ、見事なツンデレだね」
高「さっさと行きやがれ!!／／／」
ア「はいはい。行こ、レオ君」
レ「君付けやめい!!」
アリアとレオは祭りに向かった。
高雅はそれを見送りながらこう思った。
高（・・・祭りか・・・・兄ちゃんとよく行ったな・・・）

祭りの会場である緑淵神社。
周りは木々に囲まれてある、よく見かける神社の類に等しい。
そして、出店がズラーと並んである。
ア「へー、活気があるね」
人も結構な人数が集まってある。
ア「レオ君、はぐれないようにね」
そうレオに言うがレオから返事が聞こえなかった。
ア「・・・あれ、レオ君？」
あたりを見回すがレオの姿はない。
ア「・・・早速迷子・・・いや迷獣になっちゃったの・・・」
アリアは早すぎる展開に呆れていた。
ア「ま、その内見つかるよね。出店でも回ろっと」
楽観的に考えたアリアは祭りを楽しみ始めた。

ア「これで、一通り回ったかな？」
アリアは頭にお面を付け、綿あめ握って、金魚の入った袋をぶら下げて、水ヨーヨーで遊んでいた。
完全に祭りを満喫しきった姿だ。
ア「結局、レオ君には合わなかったな・・・はむ」
綿あめを食べながら、そんなことを思っている時だった。
他Ａ「大変だー！！。隣町の暴力団が来たぞー！！」
他Ｂ「何だって！？。まだ８時じゃないのによ！！」
他Ｃ「逃げろーーーー！！！」
賑やかなお祭り騒ぎは恐怖の騒ぎに発展した。
ア「何！？。何なの！？」
アリアは現状が理解できずに一人立ちすくっていた。
そこに顔つきの悪いに人がアリアに話しかける。
暴Ａ「よお、姉ちゃん。お祭りは楽しいかぁ？」

ア「な・・・何よ、あなた達!?」
暴力団がアリアを囲んだ。
その数、ざっと２０人ぐらい。
逃げている人達は『可哀そうに』という目で見ながら逃げていた。
暴Ａ「ここの祭りを楽しむ奴はなぁ、俺達と遊ばないといけないんだよなぁ」
暴Ｂ「ちょっと、相手してくれよ」
暴力団の一人がアリアの腕を掴む。
ア「きゃあ、離してよ!!」
水ヨーヨーは落ちて破裂し、金魚も苦しそうに跳ねていた。
それを気にせず、暴力団はアリアを無理やり押し倒す。
ア「きゃあ!?」
暴Ｃ「優しくしてあげるよー」
暴Ｄ「叫んでもいいぜ。けど、助けてくれる奴なんていねえよ」
暴力団が嫌らしい手付きでアリアの浴衣に手を掛けていく。
ア「嫌だ・・・誰か、助けて!!」
?「やめろ!!」
暴力団の視線が一つに集中する。
そこには・・・
蓮「金魚さんが苦しんでるじゃないか!!」
蓮田がいた。
ア「れ・・・レンタ君!?。それより、私って金魚以下!?」
暴Ａ「何だガキ。ガキは大人しく母親の乳でも飲んでろよ!!」
暴力団の一人が蓮田に殴りかかった。

パシッ

暴Ａ「何!?」
その拳は別人に片手で塞がれた。
ロ「蓮田に手を出すなら俺っちが相手だ」

ア「ログナも！？」
ロ「アリアっち、もててるね。羨ましいぞ」
ア「何処から見たらそう見えるのよ！！」
暴Ａ「舐めやがって。野郎共、このガキ共をぶっ殺すぞ！！」
暴力団全員でログナと蓮田に襲いかかった。
ロ「あるぇ～、タイマンじゃないの！？」
蓮「どうしよう、ログナ！？」
ロ「こうなったら、あのお方に来てもらうしかない！！」
ログナは高らかと手を上げて叫んだ。
ロ「来い！！。我が手下、コウガっちよ！！」

ドガッ！！

高「誰が手下だって？」
ロ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」
高雅は登場と同時にログナの頭をぶん殴った。
ア「こ・・・コウガ！？」
高「やっぱ巻き込まれてたか」
暴Ａ「何だ、あいつは！？」
暴Ｂ「構わずやっちまえ！！」
暴力団が一瞬驚いたがすぐに襲い掛かって来た。
高「話が早くて助かるな。だけどよ、祭りの時期が一緒だからって暴力団を使って邪魔するとか聞いたことが無い。そんな金使う余裕があるならな、もっと画期的な祭りを用意しやがれってんだよ」
高雅は念仏を唱えているログナの足を掴んで・・・
高「おらっ！！」
ロ「ごめんなさいいいいいいいいいいいいいいいい！？」
ぶん投げた。

ドガッ！！

ログナは半分もの暴力団を巻き込んだ。
暴Ａ「この野郎・・・ならば・・・」
ア「きゃあ！？」
暴力団の一人がアリアをナイフで突き付けながら人質に取った。
暴Ａ「これでどうだ？」
それでも高雅の顔色は一瞬たりとも変わらない。
高「それで勝ったつもりか？」
暴Ａ「何だと！？・・・うっ！？・・・」
突然、その人は力無く倒れた。
タ「得物を持たぬ者に得物を突きつける行為は武士の恥だ」
ア「タイト！？」
タイトが後ろから峰打ちで気絶させていた。
暴Ｃ「り・・・リーダーがやられただと！？」
高「どうする？。続けるか？」
高雅が優しく問いかけていたが、他の人から見れば恐怖のオーラが溢れていた。
暴Ｃ「ちくしょー。覚えてやがれーーーー」
気絶した仲間をすぐに背負い、暴力団は逃げていった。
高「また有り触れた言葉だったな」
高雅はアリアに歩み寄りながら言った。
高「大丈夫か？」
ア「コウガ、どうしてここに？」
高「お前らが行った後に、蓮田とログナがやって来てな。広告見たら行きたいとか言いだして案内してやったんだ」
蓮田とログナは弱り切った金魚をもとの水槽に入れてあげていた。
そして、再生の力で元の元気な金魚に戻ったようだ。
タイトの姿はもう消えていた。
ア「そうだったんだ」
高「それにしても、ちゃんと祭りを満喫してるな」

高雅はアリアの姿を見てそう判断した。
ア「うん。でも、レオ君と逸れちゃって・・・」
高「心配ねーよ。ほら」
高雅が指を指す所を見るとそこにはレオが屋台の上から見下していた。
レ「いつから気づいておった？」
高「ログナを投げた時ぐらいだな」
ア「レオ君、何処に行ってたの？」
レ「人込みでちょっと逸れてしまった。心配かけて申し訳ない」
ア「でも、無事ならよかった」
レオはピョンと飛び、高雅の頭に着地した。
高「そろそろ帰るか？。満喫しただろ？」
ア「うん」
短く返事をしたアリアは立ち上がった。
高「そーだ。おいログナ、人がいないからって屋台の物を盗むなよ」
ロ「ドキッ！！・・・ややややややややややだなあ。そそそそそそそそそそんなことししししししししないよ」
高「・・・動揺し過ぎ。バレバレだ」
ロ「悪い・・・」
ログナが俯きながら誤っていると・・・

ヒュ～～～・・・バンッ！！

高「おっ！！」
ア「綺麗・・・」
打ち上げ花火が上がり、夜空に花を咲かせた。
高「中々綺麗なもんだな」
ア「そうだね・・・ねえ、コウガ」
高「何だ？」
アリアは恥ずかしそうに言った。

ア「あのね・・・その・・・手・・・繋ご？」
高「別にいいけど」
そう言って高雅はアリアと手を繋いだ。
ア「あっ・・・／／／」
アリアは高雅に握られた手をじっと見つめ、赤くなっていた。
ア（こんな些細なことなのにとっても嬉しいな）
高「どうした？。行くぞ」
ア「へっ！？・・・あっ、うん」
高「何焦ってんだ？」
ア「別に焦ってなんかないよ。ほら、早く行こうよ」
高「変な奴」
高雅は前を向いて歩みだした。
ア（一緒に祭りに行けなくて残念だけど、これで十分かな）
アリアは星と共に輝く花を見ながら高雅に寄り添った。
高雅は『疲れたんだろう』と思い何も言わなかった。

☆おまけ☆

タ「主よ、言われたとおりに出店の物を買ってきた」
A「おお、サンキュー」
タ「それより、何故主は祭りに赴かないのだ？」
A「だってよ、面倒じゃん。屋台のもんでも買ってくればそれで十分だし」
タ「ほう、それだけの為に拙者を利用したのか・・・武士を何だと思っておる」
A「あっ、マジゴメン！！。だから真っ二つだけは・・・」
タ「ならばバラバラにしてやろう」

A「おい、バラバラ殺人事件はまずいって。俺、祟りに遭いたくないよ。だから落ち着kぎゃあああああああああああ」

PS．ショボイことで他人を利用するのは絶対にしないように。

## 命日と――――（前書き）

長いです。
シリアス有りです。
非日常じゃありません。
・・・なんか逸れてるような・・・

# 命日と――

今日は生憎の曇り空。
それでも、高雅にとっては大切な日である。
高雅は窓から空を眺めながら思いつめていた。
高「・・・・・・・・」
ア「どうしたの、コウガ？。元気ないよ」
高「別に・・・」
アリアの質問を適当に返す。
そして、小さく呟いた。
高「・・・・あれから7年か・・・」
ア「えっ！？、何か言った？」
高「何も言ってねえよ」
そう言って立ち上がり、部屋を出ようとする。
それにアリアも着いてくるが・・・
高「悪い。今日は家に居てくれ。５００メートル以内で済むから」
ア「どうして？」
高雅はアリアと目を合わさず、外へ繋がる扉を開けながら答えた。
高「今日は大事な日だからだ」

そして、扉が閉まり、残されたアリアは一人たたずんでいた。
ア「・・・大事な日って何だろう？」
アリアは部屋に戻り、そのことばかり考えていた。

店「ありがとうございました～」
ある店から出て来た高雅はレジ袋を持っていた。
高「ざっと、こんなもんだろ。後は・・・」
高雅はまだ何か買うつもりらしく、別の店に向かった。
そして、着いた場所は酒屋だった。
高「・・・毎回ここに入るのは気が引けるな」
それでも、高雅は酒屋に入った。
数分後、酒瓶を一本買った高雅が出て来た。
高「買う時に何も疑わないとか。俺ってそんなに老けてるのかよ・・・まあ、お陰で呆気なく買えてるからいいけど」
高雅は半ば落込みながらも、手軽に酒を入手したことを喜んだ。
高「これで全部だな。それじゃ、ご対面と行きますか」
そのまま、高雅はある所に向かった。

今、高雅は道路で舗装された山道を進んでいる。
高「変わったな。毎年来てるが毎年変わってる」
高雅は今、歩いている道を前と照らし合わせながら進んでいる。
すると、高雅はあることを思った。
高「・・・変わる、か・・・今年は俺もだな・・・」
そう思いながら進んでいる内にまた土の道へと変わった。

それから道なき道を進むと目の前にフェンスが現れ、通行を妨げた。
高「あれ、道間違えたか?。まあ、いっか」
高雅は袋を高く投げ上げ、その間にフェンスをよじ登って向こうへ渡り、いいタイミングで落ちてきた袋をキャッチする。
高「にしては、道を間違えるとかボケてきたな。年ってやつか?」
若造が偉そうに言うな!!。
高「作者(テメー)も若造だろ」
はい。そうですけど何か?
高「ムカつくな・・・」
はいはい、さっさと進む進む。
高「・・・覚えてろよ」

また歩きだした高雅は少し開けた場所に出た。
そこは花など一輪も咲いていない断崖絶壁で寂しい所だ。
しかし、緑淵町を一望できる秘密の場所だ。
高「・・・懐かしいな・・・」
高雅は目を閉じて過去に浸った。
所々笑ったりして、端から見れば危ない人である。
高「殺すぞ」
ありゃりゃ、聞こえてたか。
?「あれ・・・崎村君?・・」
高「!?、杉野!?」
突然、高雅の前に龍子が現れた。
・・・ホッ、殺されずに済んだ・・・
高「どうしてお前がここに!?」
龍「え・・・だって・・・ここ・・・私の・・・秘密の場所・・・」
高「どっからここに来たんだ?。フェンスで塞がれてるはずだぞ
龍「向こうの・・・フェンスに・・・穴が・・・ある・・・そこから・・・」

高「そうだったんだ。だけどよ、ここは俺の土地だぞ」
龍「えっ!?・・・そうだったの!?・・・」
龍子は突然の事実に驚く。
高「ここは崎村家の土地だ。知らなかったのかよ?」
龍「ごめんなさい・・・」
高「いや、謝らなくていい。気にいってくれたなら、また来ていいからな」
龍「いいの?・・・ありがとう・・・」
そう言って龍子は笑っていた。
高「それじゃ、俺はこの先に用があるから」
龍「一緒に・・・いい?・・・」
高雅は暫し考えた。
高「悪い。これから行く所は俺にとって神聖な場所なんだ」
龍「そう・・・分かった・・・」
高「じゃあな。雨降りそうだから早めに帰れよ」
高雅はまだ先の茂みの奥へ向かった。

高「やっと着いた」
着いた場所はさっきみたいに少し開けた場所だが、寂しい場所ではない。
むしろ逆だ。
一面には花が咲いてあり、池もあり、その水は透明で水が無いかのように感じてもおかしくないぐらい綺麗だった。
そこは、まるで天国を感じさせるような場所だった。

そして、その中央に屋根付きの墓石が建ってあった。
高「久しぶり、皆」
高雅は誰もいないのに一人喋り始めた。

今日は高雅にとって、家族・親戚全員の命日だった。

袋からタオルを取り出し、池で濡らして墓石を拭く。
高「全く、母さんか父さんか知らないけどさ、お陰でこっちは大変だぞ」
拭きながら高雅は語る。
誰もいないこの場所で。
高「アリアは何かトラブルメーカーだぞ。あいつのお陰で命が何度も亡くなりかけたことか」
拭き終わった高雅は次に花を挿し返る。
高「・・・だけど、そのお陰で俺の世界が変わった。ずっと拒絶していた人間をちょっとは受け入れるようになったし、人を思うようになってきたし、何より新鮮な楽しさを感じるようになった」
次に酒瓶を開け、コップに一杯注ぎ、墓石の目の前に酒瓶と一緒に置く。
高「これも皆のお陰だ。ありがとな」
最後に線香を立て、目を閉じて手を合わせる。
高「・・・・・・・・・やっぱ・・・」
高雅は目を開け、墓石を見る。
だけど、何も変わってない。
高「やっぱ・・・会って話てえよ・・・」
高雅が涙を流す。
それと同時に天も涙を流し始めた。
高「ぐす・・・ちくしょー・・・いっつも泣いてしまうな・・・」
袖で涙を拭(ぬぐ)うが懲りずに溢れだす。
高「どうしてさ・・・俺だけが生きてんだよ・・・何で俺も死な

なかったんだよ・・・」
これが高雅の一生の疑問。
解くことのできない疑問。
偶然もまた答え、必然もまた答え。
無限の中にあるたった一つの答えを高雅はずっと探し続けた。
高「なあ、教えてくれよ!!・・・どうして・・・俺だけが生きてんだよ!!」
高雅は墓石に縋(すが)りつき、答えを求める。
墓石が教えてくれる訳ない、そんなことは高雅も理解している。
だが、縋りつかずにはいられないのだ。

そんな様子を雨に打たれながら陰で一人覗いていた。
龍「・・・・・・・・」
すると、龍子は意を決して高雅に近づく。
一歩、また一歩、少しづつ近づく。
近づくにつれて高雅の涙声が大きくなる。
そして、距離が無くなった時・・・

ギュッ・・・

高「!?」
優しく抱きしめた。
高雅は突然感じた湿り気に驚いたが、退かそうとはしなかった。
そして、龍子が呟いた。
龍「答えは・・・分からなくても・・・いいと思う・・・」
高「え!?」
龍「無理して・・・知ろうとしないで・・・」
高「・・・・・・・」
高雅は黙り込んで龍子の話を聞いた。
龍「答えは・・・きっとない・・・と思う・・・ないものを・・・

探して・・・崎村君が・・・泣くと・・・皆困るから・・・友達も・・・家族も・・・」
高「っ！！」
高雅は気づいた。
自分は答えなんてどうでも良くて、ただ甘えて縋りついて、自分は答えを探してなんかいないってことを。
それは、ただ皆を困らせていただけだと。
高「悪い・・・皆・・・」
龍「・・・悪くない・・・崎村君は・・・甘えたかっただけ・・・」
高「・・・ありがとうな、杉野」
すると、高雅は立ち上がり、杉野と顔を合わせた。
高雅の顔は少し怒りに満ちていた。
高「ところでよ、何でお前がここにいるんだ？」
龍「え！？・・・それは・・・」
高「それは何だよ？」
龍「えっと・・・その・・・ごめんなさい！！」
龍子は正直に頭を下げた。
高「ったく、お前にそんな行動力があるとか思わなかったぜ。お陰で俺の羞恥が見られたじゃねえか」
龍「・・・・・・」
龍子は何も言わずに頭をずっと下げている。
反省をしているだろうと高雅は思い下がっている龍子の頭を撫でてやった。
龍「えっ！？・・・」
高「まあ、反省してるようだし、お前のお陰で何か気づいたし、許してやるよ」
龍「・・・うん・・・／／／」
龍子は頭を下げたまま赤くなっていた。
高「んじゃ、帰ろうか・・・って雨だった」
龍「・・・そうだね・・・」

ここから家までそこまで遠くないがびしょ濡れになってしまうだろう。
高「・・・あっ、そうだ!!」
高雅は何かを思い出したように墓石の骨を収納する扉を開けた。
そこには骨の変わりに色々な物があった。
高「確か・・・おっ、あったあった」
高雅が取り出したのは傘だった。
龍「どうして・・・そこに・・・」
高「骨が無い代わりに皆の好きだった物を入れてんだよ」
高雅が傘を開いてみたが・・・
高「うわっ、これは・・・ちょ・・・」
傘にはでっかいハートが描かれていた。
高「これは母さんのやつだ。青春の思い出だっけ?」
龍「すごい・・・派手だね・・・」
高「母さんの学生時代は永遠に不明だな」
そう言いながら高雅は傘を龍子に渡そうとする。
龍「え!?・・・」
高「俺がこんなの使ったら恥ずかしいだろ」
龍「私も・・・恥ずかしい・・・」
高「御尤(ごもっと)もな意見、ありがとう。だけど、濡れて帰る羽目になるぞ。お前の家は結構遠いだろ?」
龍「うん・・・じゃあ・・・」
龍子が傘を受け取り・・・
龍「崎村君も・・・一緒に・・・///」
顔を赤くしながら高雅に入るように促した。
高「なっ!?///」
高雅も異常に赤くなる。
そりゃ、普通の傘ならまだしも、ラブオーラ全開の傘ですから。
高「あのな・・・恋人みたいと間違われるぞ」
龍「それでも・・・いい・・・///」

高「お前が良くてもなぁー・・・って／／／」
龍子は高雅の手を握り、半ば無理やり傘の下に入れた。
龍「・・・ごめんなさい・・・」
高「そう思うなら行動するなよ。もういい、自棄(やけ)だ」
高雅はどこかふっ切れて、龍子と一緒に帰路を辿っていった。
そんな光景を天国で誰かが笑っていただろう。

帰路の道はさっきと違う。
フェンスの出入り口がある道を辿っている。
その扉は鍵が掛かっているが土地所有者が鍵を持ってない訳がない。
高雅は鍵を開けて、その土地から出た。
そして、鍵を閉め終わった時にその鍵を龍子に渡した。
龍「えっ!?・・・これ・・・」
高「今日のお礼を含めてだ。ここ、好きなんだろ?」
龍「でも・・・崎村君の・・・」
高「俺はちゃんとスペアキーがあるって。だから、もらってくれ。
この場所が好きな奴にもらってほしいから」
龍「うん・・・大切に・・・する・・・／／／」
龍子はその鍵を大事に仕舞い込んだ。
二人はどこかいい雰囲気を出しながら、再び帰路を帰路を辿った。

近いという理由でまずは高雅の家にやって来た。

玄関前にアリアが待ってくれていた。
高雅と龍子の様子を見たアリアはどこか負のオーラを出していた。
ア「どうしてコウガとリュウコが相合傘してるのかな？」
高「まあ、成り行きだな。多分・・・」
ア「どうしてかちゃんと説明してよ！！」
高「何でキレてんだよ！？」
ア「うるさい！！。いいから教えてよ！！」
高「何かゴタゴタになりそうだな。杉野は先に帰ってくれ」
龍「うん・・・分かった・・・」
龍子が帰ろうとしたが高雅がそれを止めた。
高「やっぱちょっと待て。思い出の物を持っていかれるのは嫌だな」
高雅は家に入り、５秒もしない内に別の傘を持って出て来た。
高「これ使え」
龍「うん・・・ありがとう・・・」
高雅は傘を交換した。
すると、龍子が聞いて来た。
龍「ねえ・・・崎村君・・・」
高「何だ？」
龍「・・・高雅君って・・・呼んでいい？・・・／／／」
龍子は顔を赤くしながらそう聞いた。
高「別にいいけど」
龍「ほんと！？・・・じゃあ・・・私を・・・下の名前で・・・呼んで・・・くれる？・・・」
高「ああ、いいぜ」
高雅は呆気なくＯＫを出した。
後ろで滅茶苦茶、負のオーラを出しているにも関わらず。
龍「それじゃあね・・・高雅君・・・」
そう言って龍子は笑顔で帰って行った。
ア「それで、今まで空気にしていた分をどう晴らしてくれるのかな？」

高「何でそんなにやべーオーラを出してんだよ!?」
ア「この、鈍感ツンデレコウガ!!」
そう言ってアリアは扉を思いっきり閉め、鍵を掛けた。
高「・・・何なんだ?」
高雅は意味が分からず、佇(たたず)んでいた。

ちなみに、鍵を閉められたが、高雅はちゃんと家の鍵を持っていたので呆気なく入れた。

## ――と誕生日（前書き）

遅れてすみません。最近忙しくなって、さらにパソコンを独占されて・・・
ペースダウンは絶対かもしれません。

## ――と誕生日

高雅は只今勉強中。
しかし、全然集中できてなかった。
高「はぁー、一体どうしたことやら」
もちろん悩んでいることはアリアのことである。
話しかけようとするがそんな空気ではないと高雅は判断し、そのままの状態でほたっていた。
二人の仲が何かギクシャクになっていた。
高「う～ん、何かやる気でねえな・・・しゃーね」
高雅は勉強を投げ出し、ベットに寝ながらゲームを始めた。
おいおい、勉強を怠ってはダメだとレオに言われただろ。
高「やる気のねえ時に勉強しても効率が悪いからな」
それは、勉強したくない奴の言い訳にすぎないだろ。
高「気にするな。事実だから。さーて、何を狩ろうかなー」
高雅は完全にゲームモードに突入した。

リビングではアリアがソファーにうつ伏せで倒れていた。
ア「何よ、コウガのバカ・・・」
あれからずっと、同じ言葉の繰り返し。
ア「今日は大切な日だから待ってたのに、何でリュウコと一緒なのよ」
アリアはそう言いながらテーブルにある物を見る。

それはリボンで包まれた箱だ。
ア「・・・大切な日は大切な人と過ごしたいよね・・・」
そんな思いが込み上げてくると、自然と涙が出て来た。
ア「私は・・・コウガにとって大切じゃないのかな・・・」
アリアは顔をうつ伏して泣き始めた。

ここで、何故アリアがこんな状態に陥ったのかは、高雅が出掛けた後の話。

高雅が出掛けた後、アリアは暇潰しにセバスチャンと談笑していた。
ア（――でね、それでコウガが――）
セ（ほっほっほ、そうでございますか。それにしても、アリア様は変わりましたね）
ア（えっ!?、何処が?）
セ（随分と自分を見せているではありませんか）
ア（う～ん、意識するとそうかも。コウガに会った時もちょっと猫被ってたけど今じゃ本性を現してるし）
セ（わたくしでも完全にアリア様の本性を許してもらえなかったものをコウガ様が許されるとは。さすが、アリア様が好意を寄せるだけはあります）
ア（そんなこと言われたら恥ずかしいよ／／／）
アリアのそんな声を聞いたセバスチャンは軽い愛想笑いをした。
ア（後はね――）
セ（すみません、アリア様。どうやら仕事が入ったようで）
ア（あ、そう。だったら仕事を優先していいよ）
セ（すみません。それでは、失礼します）
アリアはセバスチャンとの意思会話を断った。
ア「暇だな～」

ソファーに寝っ転がり、天井を見つめていた。
すると、不意に声を掛けられた。
レ「アリア殿。面白いものを見つけたぞ」
ア「面白いもの？」
アリアはそれが何かは全然見当がつかず、レオの方を見る。
レオは本のようなものを咥えていた。
アリアはそれを受け取り、中身を開いて確かめた。
ア「これ・・・コウガのアルバムだ」
アリアは興味本意で次々とページを捲っていく。
すると、あるページで手が止まった。
それは、高雅の生まれた間もない時の写真だ。
その下にメモが書かれていた。
ア「平成X年8月8日、午後2時47分。これはコウガの生まれた時かな？」
レ「アリア殿、8月8日は今日であるぞ」
ア「そう言えばそうだね。じゃあ、大切な日って自分の誕生日ってことかな？」
レ「まあ、大切な日と言うのであればそうであろう」
ア「でも、どうして出掛けて行ったのだろう？」
レ「分からないのか、アリア殿」
レオは、はぁーとため息を吐きながら呆れていた。
ア「な・・・何よ？」
その態度を見たアリアは少し膨れていた。
レ「アリア殿は誕生日などは大切な者と過ごしたいだろう」
ア「まあ、そうだけど・・・それじゃ、コウガは誰かに会いに行ったの？」
レ「その可能性もあるがもう一つの可能性もあるぞ」
ア「それは？」
レ「アリア殿がプレゼントを用意する時間を作るためでもある」
ア「そっかー。そう言えば、コウガの誕生日なんて知らなかったし」

レ「ならば、用意してはどうだ?。コウガ殿もきっと喜ばれるぞ」
ア「そうだね。それじゃ・・・」
アリアは再び意思会話を始めた。
相手はもちろんセバスチャンだ。
ア（セバスチャン、ちょっといい?）
セ（どうされましたか?）
ア（実はね――）
アリアは事情を説明し、あるものを頼んだ。
ア（――を送ってほしいの。机の3番目の引き出しにあるはずだから）
セ（わかりました。では、こちらでプレゼント用に包んでおきましょう。庭に陣を描いておられればすぐに届きます）
ア（わかった。ありがとう）
アリアは意思会話を断ち、庭へ向かった。
庭に着くとそこら辺に落ちてある木の枝で魔法陣のようなものを描き始めた。
それが書き終えると同時に陣が輝きだし、輝きが消えた時には小さな箱が置かれていた。
ア「コウガ、喜んでくれるといいな」
そう言って箱を持ち上げ、汚れがないかチャックする。
その時、頬に一粒の水滴が落ちてきた。
ア「あっ、雨だ」
一粒だった雨が倍々に増えていく。
ア「結構激しくなりそう・・・」
ここにいてはプレゼントが濡れてしまうと思い、アリアは一度家に入った。
そして、テーブルにプレゼントを置き、玄関ドア前の外に出た。
当然、高雅を出迎える為である。
ア「出掛ける時は傘を持ってなかったからすぐに帰ってくると思うけど・・・」

その数分後に高雅は帰って来た。
ア「あっ、コウ・・・」
アリアは最後まで言い切ることができなかった。
それは高雅が龍子と一緒だったから。
何より一番の理由は相合傘だった。
アリアは裏切られるような感覚に取り付かれた。
そして、怒りのような気持ちが溢れて来た。
ア「どうして・・・」

そして、あの場面になった。

ア「・・・ぐす・・・うぐ・・・」
アリアの涙は枯れることを知らず、次々と溢れだしていく。
高「・・・何で泣いてんだ？」
ア「！？」
気が付くと、傍（そば）には高雅がいた。
泣いていたためか、アリアは扉が開くのに気付かなかった。
そのため、高雅が傍にいることにも気付かなかった。
高「俺って・・・気づかずにお前を傷つけたか？」
ア「・・・そうだよ。責任とってよ」
アリアは高雅に冷たく当たる。
高雅は理由が分からず、頭を掻きながら困っていた。
高「えっと・・・悪い」
ア「・・・もういいよ。リュウコと楽しい時間を過ごしたのでしょ。

それで十分でしょ？」
そう言ってアリアはテーブルのプレゼントを捨てようとする。
その時、高雅が納得がいかず、アリアの腕を掴んだ。
高「待てよ。楽しい時間って何だよ？。別に楽しかった訳じゃねえぞ」
ア「嘘を言わないでよ！！。今日は誕生日だからリュウコと一緒に過ごしたのでしょ！！」
高「誕生日？・・・あっ！！」
ア「あっ？。どうして驚いてるのよ？」
高雅は茫然とし、アリアの掴んでいる手を放した。
高「俺の・・・誕生日・・・」
ア「コウガ？」
アリアは不思議に思い、高雅の顔を覗き込んだ。
そこには、涙を含んだ高雅の目があった。
ア「コウガ、泣いてるの！？」
高「・・・そうだ。俺の誕生日・・・」
ア「どうしたの、一体？」
高「・・・今日は俺の誕生日だったんだ」
ア「えっ！？、コウガは大切な日って言ってたよね？。それって誕生日ってことじゃないの？」
高「違う・・・そっか、忘れてたな、俺」
高雅はきっぱりと否定し、忘れていた記憶を思い出した。
ア「じゃあ、コウガの大切な日って？」
高「今日は俺の一人になった日付だ」
ア「えっ！？・・・」
アリアは聞くんじゃなかったと薄く後悔してしまった。
ア「・・・ごめん」
高「別にいい。もう慣れてるからな」
ア「じゃあ、リュウコと一緒に帰っていたのは？」
高「あいつが墓の近くでお気に入りにした場所があってな。墓にあ

った傘を使って送ってやった訳」
ア「そうなの!?。じゃあ、別にリュウコと一日過ごした訳じゃないの!?」
高「まあ、偶然会って、軽く話しただけでそこまで一緒にいた訳じゃない」
ア「なーんだ。そうだったんだ・・・よかった」
アリアはほっと胸を撫で下ろした。
高「ん?、最後何て言った?」
ア「へ!?・・・べ・・別に何でもないよ／／／」
アリアは手を振り、懸命に否定する。
その時、手に持っているプレゼントに気づいた。
ア「あっ、コウガ」
アリアは両手でちゃんと持ち、高雅に差し出した。
ア「誕生日おめでとう」
祝いの言葉とともにプレゼントを贈った。
高「あっ・・・ありがとな」
高雅は恥ずかしながらもプレゼントを受け取る。
高「早速、開けてもいいか?」
ア「うん、いいよ」
高雅は開封の了承を得り、リボンを丁寧に解(ほど)いていく。
リボンが解き終わり、箱の蓋(ふた)を開ける。
その中には、小さな蒼い三日月が付いたネックレスだった。
高「へー、綺麗だな」
ア「私の持ってる中で一番のお気に入りだから大切にしてね」
高「つまり、天国から取り寄せたってことか。それはさぞかし値打ちが付くだろうな」
ア「まさか、売る気なの!?」
高「言ってみただけだ。そんな気は断じてない」
そう言いながら、高雅はネックレスを首に巻いて付けてみた。
そして鏡を見て確かめる。

高「・・・気に入った。ありがとな」
ア「どういたしまして」
高「それにしても、プレゼントなんて7年ぶりだな。でも、7年前は潰されたから正確には8年前だな」
ア「だったら、これから毎年私がプレゼントしてあげるよ」
高「いや、さすがに悪いだろ。これだけで十分だ」
ア「そう？・・・あっ、それとそのネックレスには御呪(おまじな)いがあるよ」
高「まじない？」
ア「うん。それはね・・・」
アリアはわざと一拍置いて、もったいぶらせた。
高「何だよ、一体？」
高雅が待ち切れず、聞いてきた所でアリアもそれを教えた。

ア「身に付けてる人を幸せにする御呪いだよ」

高「また、何ともベタな・・・だが、悪くないな」
ア「ベタでもいいのよ」
高「今は同感だ。本当にありがとな」
ア「ふぇ！？」
高雅はまたお礼を言い、アリアの頭を撫でた。
その時に発したアリアの奇声に高雅は少し驚いた。
高「ふぇって、情けねえ声出すなよ」
ア「ごご・・・ごめん」
アリアは俯いて高雅に赤くなった顔が見えないようにしていた。
高「それじゃ、飯作って、今日はこの思い出のまま寝るか」
高雅は台所に向かったが、アリアはまだ俯いているままだ。
ア（・・・私にとってもいい思い出かな）
アリアはこの気持ちを大事に胸の中に仕舞い込んだ。
アリアがいつの間にか消えた嫉妬の怒りに気づくことはなかった。

# 旧校舎の秘密？　前編

雲が空を覆い、星一つ見えない、月明かりもない薄暗い夜。
そんな暗い中、そしてこの時期にやることは一つ。
A「肝試しだーーーーーーーーー！！！！！！！！！」
高「黙れ」

ドガッ！！

高雅の踵落(かかと)としが脳天に炸裂。
Aは頭から煙を上げ、倒れた。
高「取りあえず、どうしてこうなったか説明をしねえとな」
ア「誰に？」
高「俺らを支えてくれてる人達だ」
ア「それって誰？」
高「俺の嫌いな人間だ」
ア「そうじゃなくて・・・その・・・何て言うか・・・」
高「あー！！、もう鬱陶しい。さっさと説明を始めろ！！」

はいはーい。
今、高雅達は夜の緑淵高校にいます。
ひょんなことからAが肝試しをしようと言うことになり、もちろん高雅は断ったが、アリアが拒否権を破壊し、そして人数集めで誘った結果・・・

高雅・アリア・蓮田・ログナ・A・タイト・凛・香凛・龍子・夢がそろった。
高「にしては、お譲さまの姫花姉妹が来るとは思ってなかったな」

凛「生徒が学校で何かしでかすのを黙って見ておれませんわ」
香「ほんとは、高君に会いたいだけじゃないの？」
その言葉を聞いた凛は爆発寸前まで赤くなっていた。
凛「ば・・・バカな事を言うんじゃありません。私は香凛とは違いますわ／／／」
香「ほんとなの～？」
香凛が疑いの目で凛を凝視する。
凛は見ておれず、目を逸らしながら話を戻す。
凛「そ・・・それより、ここで何をしますの？」
それを待ってました、というようにＡが生き返り、すかさず説明に入った。
Ａ「さっきも言った通り、ここで肝試しをする。男女で二人一組になって、旧校舎の２－Ａに到着すればいい。ただし、道はあらかじめ決められてるからそれに従うのが条件だ」
高「何でここなんだ？」
Ａ「よくぞ聞いてくれた。実はな、最近、妙な噂があるんだよ」
Ａが声を低くしてそれらしい空気を作る。
Ａ「ここに出入りしている人がいたらしくてな。ある先生がそいつを突き止めようとしたんだ。しかし、その先生は戻ってくることはなかった・・・」
凛「・・・ごくり」
凛が恐怖のあまり息を呑む。
Ａの話はまだ続く。
Ａ「それで、別の先生が入ったんだ。その先生は入って１０分ぐらいで出たそうだ。その人は愕然としながら口をパクパク動かしていたそうだ。その様子だけでは分からないため、他の先生達も入ったそうだ。そして、全員が見た物は・・・」
高雅、タイト以外はＡの作る間の時間で息を呑みこんだ。
そのタイミングを見計らってＡが喋った。

A「最初に入った人の首が落ちてあったのさ・・・」

凛「きゃあああああああああああああああああああ」

凛が異常な奇声を発声する。

それは、クッ○先生も驚きの高音領域だった。

全員は瞬時に耳を塞ぎ、一時耳鳴りが鳴りやまなかった。

高「～～～っ！！。耳いてーーーー」

A「くーーーー、まさかここまで驚くとは・・・」

高「それよりさ、仕掛けはあるのかよ？」

A「ふっふっふ、それはとてーもこわーくおそろしーく複雑ーな奥深ーi「要するにあるんだな？」はい・・・」

高雅はこれ以上延ばしたらぶっ殺すという思いを込めながら冷酷な声で割り込んだ。

ロ「んでさ、どうやって組分けするつもりだ？」

それを聞いたAは両手をポッケに入れ、すぐにある物を握って取り出した。

それは片手に5本、計10本の割り箸だ。

A「さあ、男はこっち。女はこっち。それぞれ数字が書いてあるからそれと同じ人（使い）がペア。順番もその番号順だから」

皆は一斉に割り箸へ群がり、一本取って距離を置き、確認する。

その結果がこちら・・・

1　A・夢

2　蓮田・香凛

3　ログナ・龍子

4　高雅・凛

5　アリア・タイト

その後、Aは各組に懐中電灯を渡した。

A「それじゃ、最初のペアが入ってから5分後に次のペアが入るっ

てことで」
高「じゃあ、最初の奴はさっさと入れ」
A「おい！！、まずは何かペアになった感想とか述べさせろよ！！」
高「脇役2名が語っても面白くない。と言うことでさっさと行け」
夢「ちょいまち！！。あたし達の扱いが酷過ぎない！？」
高「黙ってさっさと行く！！」
高雅はしつこく迫る二人を旧校舎内へ蹴り飛ばした。
扉はバギッという音を立てて金具が外れ、壊れた。
ア「本当に扱いが酷過ぎないかな？」
高「俺はさっさと終わらせて寝たいんだ！！」
ア「それだけで・・・」
アリアは呆れて言葉が出なかった。

5分後。

高「そろそろ次行こうぜ」
蓮「次は僕の番だね」
蓮田がやる気に満ちた目で入口に立つが香凛が隣にいなかった。
それを見た高雅が香凛を促せる。
もちろん、自分の睡眠の為に。
高「おい、香凛。さっさと行けよ」
香「ぶ～、高君とがいいの」
香凛は頬を膨らませながら訴えかけている。
しかし、早く寝たい高雅にとって、それは全くの無意味だった。
高「さっさと行かねえと嫌いになるぞ」
香「う～・・・それも嫌なの」
高「じゃあさっさと行け」
香「・・・わかったの」
香凛はがっくりしながらも旧校舎に足を進めた。

蓮田も香凛の一歩前を常に歩いていった。
その姿に、ログナは共感していた。
ロ「さすが蓮田。男だね～」
高「よくもまあ、小さいのに勇気があるな」
ア「それって私達みたいな不思議なことに慣れてるってことじゃないの？」
それを聞いたログナと高雅は黙って考え、何か罪悪感に溺れ始めた。
ロ「そうだよな・・・俺みたいなオバケに等しい存在がいるもんな・・・」
高「何か・・・蓮田は普通から離れさせてしまったかもな・・・」
ア「・・・反省しよっか」
3人は蓮田のこれからを考えつつ、反省会を始めた。
龍「・・・何やってるのだろう？・・・」
凛「分かりませんわ」
龍子と凛はそれを横目に見ながら旧校舎を見ていた。

また5分後

高「次、さっさと行け」
ロ「問答無用な扱いだな。まあ、いいけど」
高「いいならさっさと行け」
ロ「わーったわーった。ほんじゃ、行こっか、スギっち」
龍「う・・・うん・・・（スギっちって・・・）」
高「馴れ馴れしいな」
ロ「俺っちは誰とでも友達になれるのさ！！キラーン☆」
ログナはどっかの熱血教師のように歯を光らせた。
高「暑苦しい・・・修〇には劣るが」
ロ「シューーーーーーーーーーーー・・・z「させるか！！。
さっさと行きやがれ！！」ふぎゃあああああああああああ

ああ」
高雅はログナを蹴り飛ばし、見事旧校舎の中へストライク。
それを追うように龍子が入って行った。

またまた5分後

高「やっと俺の番か」
凛「正確には私達の番ですわ」
凛が指摘をするが高雅は聞いていない。
高雅は扉のあった場所の目の前に立った。
高「アリア達もすぐに来いよ。もう3分で来い」
ア「ダメだよ。ちゃんと従わなくちゃ」
高「ちぇ、ちゃっかりしてるな」
高雅は用件を言い終わると早足で旧校舎に入って行った。
凛も高雅の早足について行くため駆け足でついて行った。

変わって旧校舎内部。
床や壁は埃で白く濁り、壁隅は蜘蛛の巣が張り巡らされている。
そんな中、高雅は顔色変えることなく、速度を変えることなく進んでいく。
凛はそれについて行くのにやっとである。
凛「はぁ・・・はぁ・・・ちょっと、待ってくださる・・・」
遂に限界がきたのか、凛は両手で膝に体重を乗せ休憩する。

さすがの高雅も置いて行くことはなく、立ち止って振り返る。
高「ばてたか?。だらしねえな」
凛「そのようなことを言われましても・・・はぁ・・・」
高「・・・ったく、1分間だけ休憩だ」
そう言って高雅は廊下窓から外を眺める。
その時だった。
高「・・・・ん?」
ふと物陰から動く物体が見えた。
だが、それは何なのかは分からなかった。
動物だったのか人だったのか・・・あるいは、天国か地獄の使いだったのか。
それとも見間違いか。
高「・・・誰だったんだ?」
高雅は見間違いを選択しなかった。
それは正しかっただろう。
しかし、正しくてもこれから起こることを防ぐことはできない。

・・・いや、できなかった。

高雅と凛はとにかく歩いて目的地に向かっている。
高雅の足について行けない凛の為に所々で休憩を挟みながら進んでいた。
しかし、高雅は不自然なことに気付いた。
高「・・・妙だな・・・」
凛「ぜぇ・・・はぁ・・・な・・何がですの？」
高「こんなに歩いて仕掛け一つに遭ってない」
そう、高雅達は未だにAが仕掛けたと思われる仕掛けに遭遇していない。
凛「まさか、道を間違えてしまいましたか？」
高「だが、ちゃんと案内板通りに従って進んでいるぞ。それで無いのは不自然だろ」
凛「・・・では、一体・・・」
高雅はあたりを照らし始める。
ここは窓がある廊下ではない。
あるのは闇へと続く道のみ。
高「・・・まあ、歩いていたら何か見つけるだろうよ」
凛「そうですわね・・・」
その時・・・

ガタン！！

高・凛「！？」
突然、すぐそこの教室から物音が聞こえた。
高「やっと仕掛けに遭ったか？」
そう言いながら高雅は扉に手を掛ける。
凛が震えながらそれを見守る。

高「・・・あれ、開かねえぞ」
高雅が力を入れるものの、扉はビクとも動かなかった。
高「う～ん・・・驚いて慌てさせるためで、中に入る必要がねえのかな？」
高雅は諦め、扉から手を放した。
その時・・・

ガララッ！！

高「な！？」
凛「ひっ！？」
突然、扉が勢いよく開いた。
凛は驚き、腰を抜かし座り込んだ。
高雅は開いた教室に顔だけを入れ、あたりを確認する。
しかし、怪しい物は何一つ見つからなかった。
高「・・・結構手が込んでるんだな。あいつにしてはやるな」
適当に評価を付けつつ、中に何もないことを確認して扉を閉めた。
高「ここは何もないみたいだ。さっさと次に行こうぜ」
そう言って腰が抜けた凛に手を差し伸べる。
凛「わ・・わかりましたわ・・・」
震えながら差し伸べられた手を取り、懸命に立ち上がる。
それを見た高雅が嘲笑いながらこう言った。
高「ビビりだな～、お前」
凛「な・・・何ですって！！」
その言葉に火が点いた凛は高雅の襟元を掴み、振り回す。
凛「私は別に怖がってなんかいません。ただそうした方が味が出ていいと思っているだけですわ！！」
ブンブンと音を立てながら振り回される高雅は喋りにくい状況にも関わらず冷静に言った。
高「じゃあ、味を出さなくていいからもう驚くなよ？」

凛「えっ・・・」
高雅は凛の手を除け、ダメ押しをするかのように問う。
高「怖くないんだろ？」
凛「わ・・・分かりましたわ。もう驚いたりしませんわ」
そう言って凛は一人進み始めた。
高雅は強がっている凛の姿を見て笑い耐えながらもついて行った。

変わって入口前。
ア「そろそろ5分経ったから行こっか？」
アリアがタイトに優しく問う。
しかし、タイトは目を瞑ったまま無反応だった。
ア「タイト？」
アリアは顔を覗きこむがタイトは目を瞑ったままだ。
ア「もしかして、立ったまま寝ちゃった？」
そう言って手を振って反応を確かめるがタイトは無反応だ。
だが、タイトは突然口を開いた。
タ「・・・来る！！」
ア「わっ！？」
目を開くと同時に言葉を短く発し、それに驚いたアリアは尻もちを着いた。
ア「いたたた・・・」
アリアはお尻を擦(さす)りながら立ち上がる。
タイトは腰に挿してある鞘から日本刀を取り出す。
ア「タイト？」

タ「気をつけろ。誰かが狙っておる」
ア「え!?」
タイトの言葉により、アリアは懐中電灯で周りを注意深く見渡す。
すると、暗闇からギラリと反射光が見えた。
ア「そこ!!」
アリアが指を指してタイトに教える。
その時、光った場所から鎖で繋がれた鎌が飛んで来た。
アリアとタイトはそれぞれ別の場所へ回避する。
?「ばれちゃったか。暗殺には自信あったんだけどな～」
敵が頭を掻きながら暗闇から出て来た。
髪色は茶色の男だ。
タ「お主・・・消失の力を使うか?」
それを見たタイトが敵の力を判断する。
イ「そうだぜ。俺の名はインジ。名乗ってやったんだからそっちも名乗れよ」
タ「拙者はタイト。力は活性を使う」
イ「髪色みればわかるっちゅうの。で、そっちの蒼髪は?」
ア「私はアリア。得意な力は静寂」
イ「ふ～ん。お前があのアリアか。地獄じゃ知らないものはいないと言う」
ア「あなた、地獄の使いね。目的は私を殺すこと?」
イ「ハッ、んなつまらねえことじゃねえよ。もっとでかい獲物を殺すんだよ」
ア「まるで、私が弱いみたいに言ってるわね」
イ「事実じゃねえか。取りあえず、お前らに用はない。そこを退け」
ア「何ですって!!」
アリアは怒りだし、ずいずいとインジに近づく。
しかし、途中でタイトがそれを止める。
タ「アリア、お主は我が主と自分の主を呼んでくるのだ」
ア「な・・・何でよ!?」

タ「はっきり言おう。我々だけでは奴には勝てぬ」
ア「え!?」
イ「ひゅー、分かってんじゃねえか」
ア「そんなの、やってみなくちゃ分からないよ。こんなふざけた奴に負けるなんて。大体、契約者もいないし」
タ「いいから我々の主を呼んでくるのだ」
タイトが強く言う。
それに少し押されてしまうアリア。
タイトの言葉が本当だと悟り、自分の行動を決意をする。
ア「・・・気を付けて」
そう言い残し、アリアは旧校舎に入る。
タ「拙者が相手になろう」
イ「お前ごときで相手になれると思ってるのか?。まあいい。狩りの肩慣らしと行こうじゃねえか」
インジは鎖を引っ張り、地面に刺さってある鎌を抜く。
イ「ヒャッホー。それじゃ、始めようぜ」
タイトとインジの戦いが始まった。

外で何が起きているかも知らずに、高雅と凛は旧校舎をさ迷っていた。
すると、凛が止まり高雅に聞いてきた。
凛「・・・待ってください」
高「どうした?。また疲れたか?」
凛「違いますわ・・・ここ、さっきも通りませんでしたか?」

高「はぁ!?。何言ってんだよ?」
凛「ですから、同じ所を行き来してませんか?。この教室、さっきも見ましたもの」
高「あほ。全然見てねえよ。さっさと行くぞ」
高雅は凛の物言いに呆れ、再び歩み始める。
凛「あっ、待ってください」
それに続くように凛が追いかけようとしたが・・・

ガシッ

凛「え!?」
突然、足が掴まれる感触に襲われる。
後ろには人がいなかったはずだったと思い、恐る恐るゆっくり振り返ると・・・

首のない体が凛の足を掴んでいた。

凛「きゃあああああああああああああああ」
本日二度目の絶叫。
高「~~~っ!!。どうしたんだよ!?」
鼓膜が破れそうになりつつも凛に駆け寄る。
高「どうし・・・うおっ!?」
高雅が聞こうとした瞬間に凛が思いっきり抱きついて来た。
高「ちょ・・・何事!?」
凛「いいいいい・・いい・・今・・・首のない人が・・・」
高「首のない人?」
高雅はあたりを見回してみる。
しかし、そのような人物は見つかることはなかった。
高「いねーぞ」
凛「た・・・確かにいましたわ!!。この目で見ましたもの」

高「取りあえず、落ち着け。そして離れろ」
凛「へ！？」
凛は恐る恐る自分の状態を確認する。
結果：高雅に抱かれている。
凛「・・・・・・・／／／」
凛は黙り込み、顔を真っ赤にしていく。
高「もしもーし、起きてますかー？」
凛「はっ！！」
腑抜けた高雅の声で我を取り戻す。
凛「ご・・・ごめんなさい！！」
すぐにバッと離れる・・・事が出来なかった。
恐怖のあまり、何かに触れていないと壊れてしまう状態に陥ってしまっていた。
凛「・・・・・・・・」
高「・・・ビビり」
凛「！！」
凛はその言葉に反応し、手を握り締め怒りを込み上げるが、声に出すことはなかった。
いや、むしろそれを認めようとしていた。
凛「・・・ごめんなさい。私は嘘を吐いてしまいましたわ」
高「気にしちゃいねえ。誰だって強がる時はある」
そう言って高雅は凛の頭を撫でる。
すると凛は安心したように高雅に体重を掛ける。
凛「・・・・もう少し、このままでいさせてくれませんか？」
高「・・・悪いけど、無理」
凛「・・・・・・」
それを聞いた凛はゆっくりと仕方なく離れていく。
高雅から完全に離れ切る寸前に・・・

パシッ

凛「え!?」
高雅が凛の手を掴んだ。
高「これじゃ、ダメか?」
そういう高雅に凛は安心しながら首を縦に振ろうとしたが己のプライドが込み上げて来た。
凛「し・・仕方ありませんわね。高雅さんがそうしたいのであれば別に構いませんわ」
高雅はそんな上からの態度よりも別の事に驚いた。
高「ん・・・今、高雅って言ったのか?」
凛「い・・・いけませんか?///」
凛が顔を赤くしながら目を逸らしつつ問う。
高「うーーーん・・・まっ、別にいいけど」
凛「でしたら、高雅さんも私のことを凛と呼びなさい」
高「何で命令系?」
凛「いいですから、凛と呼びなさい」
ズイッと近づいて指を指す。
高雅はそれに押され気味になりつつあった。
高「わ・・・わーったよ」
凛「ふふふ。では、行きますわよ、高雅さん」
高「さっきまで怯えていたのは何処に言ってたのやら」
凛「何か言いましたか?」
高「べっつに~」
適当に相槌を打って歩き始めた。
もちろん、手は繋がった状態で。
高雅はいつの間にか、凛のペースに合わせていた。

遂に２－Ａの教室の目の前に到着した高雅と凛。
あの後、仕掛けに遭うことはなかった。
高「これでやっと終わるな」
凛「・・・・少し、残念ですわ」
高「んあ、何か言ったか？」
凛「べ・・・別に何も言っていませんわ／／／」
高「そうか。んじゃ、開けるぞ」
高雅は扉に手を掛け、開ける。
しかし、その教室には皆はいなかった。
高「あれ、先に言った奴らは何処に行ったんだ？」
凛「妙ですわね。まさか、最後に何か企んでいますの？」
高「わっかんねえな。だが、可能性はあるな」
その時・・・

ガタン！！

高・凛「！？」
一つだけ机が大きく揺れた。
高雅と凛は恐る恐る近づく。
高「誰だ！？」
そして、懐中電灯をそこに照らした。

？「あみゅみゅ～、眩しいのです～」
高「・・・誰だ、こいつ？」
照らし出されたのは、香凛よりは背が高いが小さい分類に入るだろう少女が手で目を隠していた姿だった。
しかも、髪色がピンク色と派手である。
高「てめー、一体何者だ！？」
？「それはこっちのセリフです。君こそ一体何者です！？」
高「俺は崎村高雅だ。名乗ってやったからテメーも名乗れよ」
？「人間に教える名など無いのです」
そう言いながら顔を高雅からプイッと逸らす。
高「ガキが調子に乗るんじゃねえぞ！！」
高雅が怒鳴りつけると、その少女はすぐに涙目になりながら高雅に何か訴えかけて来た。
だが、高雅にそのような手は通用しない。
高「取りあえず、次の質問には絶対答えろ」
？「内容次第です」
少女はたった1秒前まで涙目だったが、涙は微塵も残っていなかった。
つまり、嘘泣きだった。
そんなこと高雅は気付いており、あえて何も動作を変えなかった。
そして、高雅が切り出した質問は・・・
高「テメーは天国と地獄どっちだ？。そして、狙いは俺の命か？」
いつもの質問だ。
もし、地獄ならば容赦なく倒すつもりだろうが、天国なら話は変わる。しかし、自分の命を狙うなら高雅は天国でも容赦はしない。
これは、自分の心の中で決めた決まり事だ。
だが、高雅は予想をしない答えが返ってきた。

？「ボクはどっちも違うです。ボクは楽園（エデン）の方です」
高「・・・はぁ！？」
高雅は聞いたことのない答えを聞いてしまった。
高「おい、エデンって何だよ！？」
？「楽園は楽園です。ただそれだけです」
高「俺が聞いてるのはそういうことじゃなくて――」
次の言葉を言おうとした瞬間に頭からある声が聞こえた。
ア（コウガ、今何処！？）
高（ん、どうした、急に？）
ア（今、入口前でタイトが地獄の使いと戦ってる。すぐに入口に来て）
アリアは用件を伝え、会話を切断しようとしたが高雅がそれをさせなかった。
高（おい、その前に聞きたいことがある）
ア（何？）
高（あのな、エデンって知ってるか？）
ア（！？、コウガ、それ何処で聞いた！？）
高（へ！？、いや、ここにそのエデンから来た奴が居るんだけど）
ア（・・・まさか）
アリアは何かに気付いたが、高雅は全く理解できていない。
高（何、何だよ！？）
ア（コウガ、絶対に楽園の使いから離れないで）
高（おい、最初に言ったこととどっちが優先だ！？）
ア（楽園の使いの護衛よ。多分、そこに敵が向かってる）
高（マジかよ・・・ん、何か重要なことを聞いてないような・・・）
高雅は最初に言った答えが返ってきてないということに気づき、それを問おうとした。
しかし、それは叶わなかった。
イ「見つけたぜ、楽園の使い」
高・凛・？「！？」

三人はすぐに声がする方に振り向いた。
そこにはインジが悠々と立っていた。
？「あぅ・・・どうして、ボクの夢幻の中でも見つけられるのですか！？」
イ「けっ、夢幻なんざ子供騙しなことは通用しねえよ。さっさとその夢幻をよこしな」
インジがエデンの使いへ近づいて来る。
高雅はすぐにその間に立ち塞がった。
イ「何だ、テメーは？」
高「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが先だろ」
イ「偉そうな口を利くとは。死にてえようだな」
その瞬間、インジは隠していた殺気を現した。
それは高雅が今までに感じたことのない殺気だ。
戦いの知らない凛ですら、殺気に怯え、腰を落とした。
高（こいつ・・・強い）
イ「あばよ」
高「！？」
高雅が気付いた時には既に目の前にインジがいた。
そして、インジは高雅の頭を片手で掴む。
凛と楽園の使いはその状態をただ唖然と見ていた。
イ「・・・？」
しかし、インジは怪訝そうな顔をしていた。
その隙を高雅は逃(のが)す訳がない。
高（今だ！！）

ドガッ！！

イ「ぐはっ！！」
インジのみぞに拳が放たれた。
その強さは半端なく、インジを血を吐きつつ、数メートル吹っ飛ば

した。
だが、インジは倒れることなく着地する。
イ（こいつ・・・何だ!?）
インジは見たこともないような目で高雅を見る。
イ「・・・!?」
すると、インジは別の何かに集中し始めた。
高「・・・?、どうしたんだ?」
間もなく、インジは高雅に物憂げに言う。
イ「集合命令が出されやがった。今日は引いてやるよ」
そう言ってインジは扉から出て行き、身を引いた。
高雅は身を引いた後も気を引き締めながら警戒していた。
数秒後、本当に身を引いたことを知った高雅は警戒を解いた。
高「・・・ふぅ、やばかった」
いくら高雅でも、アリアなしのまま続いていたならば、確実に死んでいただろう。
ただ自分の幸運に感謝を隠せないでいた。
すると、タイミング良く扉を強く開けてある使いが入って来た。
ア「コウガ、大丈夫!?」
高「遅い、罰金!!」
・・・気付いた人は気付かなかったふりをしてください。
ア「罰金って・・・私、お金持ってないよ」
高「知るか。気持ちの問題だ」
ア「そんな問題じゃないと思う・・・それより」
アリアは話を１８０度回転させた。
ア「楽園の使いはどうなったの!?。いきなり会話が途絶えちゃったし」
高「ああ、敵が来たんだ。だけど、何もせずに帰って行った」
ア「そう・・・よかった」
高「それより、エデンの使いは一体何なんだよ?」
ア「あ、そうだったね。じゃあ、説明するよ」

？「ボクがするのです」
突然、楽園の使いが口を開いた。
アリアは少し驚き、楽園の使いの方を見た。
高雅も楽園の使いの方へ振り返った。
？「楽園とは、天国と地獄の双方を監視するために作られた世界です」
高「・・・アダムとエバは関係ないんだな」
？「楽園には力の根源があり、それが具現化した者が楽園の使いです」
高「・・・力の根源って、静寂とかの事か？」
？「そうです。最近はその力を狙って楽園へ足を踏み入れる輩が増えたのです。その手の者から逃げる為にボクはここに隠れていたのです」
高「こんなボロッちい建物なんて隠れられないだろ」
？「ボクは夢幻の源です。強力な夢幻を見せ、簡単にはここ辿りつける訳ないのです」
高「俺と凛とアリアはここに辿り着いているけど」
？「そこの使いの時にはもう力は使ってないです。だけど、あなたは違うのです。何故かボクの夢幻に掛からなかったのです」
高「だったら、凛もじゃねえか」
？「彼女は最初は掛かっていたです。でも途中から掛からなくなったです」
高「その途中って何時からだよ？」
？「君と抱き合った時からです」
その言葉を聞いたアリアは負のオーラに包まれた。
ア「コウガ、抱き合ったってどういうことなの？」
高「何でそんなに怒ってんだ？。大体、抱き合ったって言っても凛が勝手に突っ込んで来ただけだ」
ア「じーっ」
高「何だよ？。その疑いの目は？」

ア「・・・ふんっだ」
アリアは愛想尽かしたのか、プイッと外方(そっぽ)を向いた。
高「何だよあいつ・・・それより、えーと・・・」
高雅は話を戻すため、楽園の使いの名前を呼ぼうとしたがまだ名乗られてないため言いだせなかった。
それに感ずいた楽園の使いが教える。
フ「ボクはフィーラです」
最初は教えなかったがすんなりと教えてくれた。
きっと、敵じゃないことが分かって安心したからだろうと高雅は思っていた。
高「そっか。じゃあフィーラ、旧校舎(ここ)に入って来た皆はどうした？」
フ「それだったら、ボクの夢幻で気絶してるです」
高「やっぱりか・・・」
高雅は手を額に当て、やれやれというジェスチャーをした。
高「わざわざ、皆を起こすのは面倒くせーな」
凛「それでしたら、私に任せてください」
そう言って、凛は携帯を取り出す。
高「何をする気だ？」
凛「学校の前には何名か使用人を待機させていますわ。その人達に気絶した人を家に運ばせますわ」
高「それぞれの家の場所は分かるのか？」
凛「姫花家の力を舐めないでくださる。使用人には、この町の人々・住所は全て把握させていますわ」
高「そりゃ・・・すげえな」
高雅は正直に驚いた。
凛が携帯に一言二言喋ると忍者のように使用人が整列した状態で登場した。
その速さを凛は当たり前のように見ていたが、高雅とアリアとフィーラは驚いた。
凛「この建物内で気絶している者をそれぞれの家に送りなさい」

使「畏まりました。しかし、入口で怪我をされている方がおられましたがいかがなさいますか？」
入口というキーワードでアリアが感ずき、話に割り込む。。
ア「あっ、きっとタイトだよ。インジにやられたんだ」
高「インジ？。茶髪野郎の名前か？」
ア「うん。確か、消失の力を使うらしいよ」
高「ふ～ん。取りあえず、凛、そいつはこっちで何とかするから他を頼む」
凛「分かりましたわ。では、その者以外を家に送りなさい」
すると、高雅が横から使用人に付け加えをした。
高「それと、凛も一緒によろしく頼む」
凛「えっ！？、何故ですの！？」
高「いいから、後はこっちの問題だから。お前に人の倫理を外れてほしくないんだ」
凛「・・・わかりましたわ」
高「んじゃ、俺らはタイトのとこへ行くか」
そう言って高雅とアリアが教室を出ようとした時・・・
凛「高雅さん」
凛が高雅が見えなくなる前に呼びとめた。
高「ん、どうした？」
凛「いや・・・あの・・・今日は色々ありましたが楽しかったですわ」
高「ビビって喚(わめ)いていたのに楽しかったとか、実はMだったのか？」
凛「そういう訳じゃありませんわ！！」
凛は大声で全力で否定した。
高「ははは、冗談だって。じゃあな」
高雅は軽く手を上げ、別れの挨拶をした。
凛「では、今度会う時は学校で。それまで御機嫌(ごきげん)よう」
凛もスカートを持つような素振りをして会釈をした。
別れた後、高雅は入口へダッシュで向かった。

何故か後ろからフィーラもついて来ていた。

高「・・・やっぱりな」
ア「ひどい・・・」
高「凛を先に帰らせて正解だったな」
入口前の光景はあまりにも残酷だった。
あたりには血が飛び散り、タイトの体の部位や内臓がそこらじゅうに転がっている。
ア「どうして分かったの？」
高「グラサンで分かりづらかったが、使用人(あいつら)の顔が青褪(あおざ)めていたんだ。だから、結構グロイかもって思った訳。こんな光景を凛には見せたくなかったからな」
ア「優しいね」
高「さっきも言った通り、あいつには人の倫理を外れてほしくないだけだ」
そう言いながら、タイトの体の部位や内臓を一か所に集める。
高「多分、宝石(いのち)を壊されないように必死に抵抗したんだな」
ア「早く再生させようよ」
アリアは契約の力を発動し、すぐに再生の力を使用する。
失ったタイトの命が徐々に再生していった。
数十秒でタイトは復活した。
タ「忝い(かたじけな)」
高「どういたしまして。もうお前の契約者は帰ってるからお前も帰りな」
タ「そうさせてもらう」

タイトは自分の足を活性化して大きく飛躍してこの地を離れた。
すると、高雅はひっそりとどこかへ行こうとするフィーラを見て呼び止める。
高「おい、もう一つ質問いいか？」
フ「何です？」
高「お前の力は夢幻だけか？」
フ「そうですけど・・・それが、何です？」
高「いや、何でもない。後、お前はこれからどうするのか？」
フ「質問は一つだけです。ボクはボクで何とかするです」
そう言ってフィーラは再び歩み始め、どこかへ消えた。
高「・・・俺達も帰るか」
ア「そうだね・・・それと、コウガ」
高「何だよ？」
ア「どうしてリンちゃんと名前で呼び合ってるのかな？」
高「それがどうかしたのか？」
ア「も～～、ほんと女心が分かってないんだから」
高「知らねーよ。さっさと、帰るぞ」
高雅はあまり深入りせず、話を切り上げる。
アリアはそれに対してさらに不機嫌になる。
しかし、高雅にそれは伝わらず、それよりもあることが矛盾していることを考えていた。
高（あいつの夢幻が効かなかったなら、あの時の物音は何だったんだ？。それに、勢いよく扉が開かれたのも夢幻じゃないとすると・・・こりゃ、本当に幽霊だったりして・・・）
高雅はそんな適当な解釈をして、悩むのを止めた。

そして、新学期が始まる頃、新しい異変が訪れようとしていた。

## 旧校舎の秘密？　後編（後書き）

番外編として、他のグループを描写しようと思います。
そして、それが終われば新章を書きます。

# 旧校舎の秘密？　番外編

## A・夢　ｖｉｅｗ

高雅にぶっ飛ばされて入った旧校舎はAにとって庭のようなものだった。
A「ふふふふふ・・・」
夢「あんた、崎村に蹴られておかしくなった？」
A「んなわけねーよ！！。偉そうな口を利けるのも今のうちだぜ！！」
そう言ってすぐ近くの扉を背にして取っ手に手を掛ける。
A「まずはお前の悲鳴を聞かせろよ」
そして思いっきり扉を開ける。
夢は扉の中を見た瞬間、目を丸くして絶句したがすぐに声が込み上げて来た。
夢「きゃあああああああああああああああ」
A「はっはっはっは、開けてビックリ人体模型の恐ろしさは凄いだろ！！」
もちろん、Aはこの旧校舎の仕掛けを全て把握している。
だが、次の夢の言葉でAは地獄に落ちる。
夢「こ・・これが人体模型って、あんたはどんな精神をしてるのよ！！」
A「・・・はぁ、別に普通の人体もけ・・・」
Aは夢の言葉を疑問に思い、振り向いて扉の中を確認すると、言葉を失った。
そこには、自分が仕掛けた物ではなく、全身が青くて、頭がでかくて、ちょっと目が可愛くて、ブルーベリー農園にいそうなほど青い・・・はい、あのフリーゲームです。

A「ぎゃあああああああああああああああああ」
Aは夢を無視して全力で逃げた。
夢もそれを追うように全力疾走。
ちなみに、青〇も追いかけて来た。
A「何でリアルでいるんだよおおおおおおおおおおおお」
と言いながら近くの教室へ逃げ込む。
そこにも、（フィーラの）仕掛けがあった。

ドン・・・・ドン・・・・・ドン・・・・・

さっきみたいの全身ブルーベリー色が5メートルバージョンになっていた。
そいつはスクワットのように膝を曲げたり伸ばしたりしながら足元の人間を人の10倍はある腕で潰していた。
A「リアル、ひんぬースクワットだあああああああああああああああ」
夢「一体、こいつらは何なのよおおおおおおおおおおおおお」
すると、後ろからさっきのブルーベリー色の鬼が教室に入って来て・・・

GAME　OVER

蓮田・香凛　view

蓮「かりんちゃん、怖くない？」
蓮田は香凛のことを心配して聞いてみる。
香「別に怖くないの。お化けなんて非科学的なの」
蓮「ひかがくてき？・・・」
蓮田は聞いたことのないワードを必死に理解しようと頭を回転させる。
しかし、そのようなことはログナから教わった覚えはなかった。

蓮「とにかく、大丈夫なんだね？」
香「カリンはお姉ちゃんと違って臆病じゃないの」
蓮「あっ、待ってよ」
そう言いながら足早に歩く香凛に必死でついて行く。
数分歩くと階段に辿り着いた。
香凛は立ち止まることなく、案内板通り、階段を上る。
蓮田はその後ろを必死について行く。
その時・・・
香「きゃっ！？」
突然、香凛が足を滑らせ、後ろに倒れていく。
結構上っていたため、そこから落ちれば軽い怪我では済まないだろう。
蓮「あ、危ない！！」
蓮田がすぐに香凛の落下地点に先回りする。
しかし、例え身長がそこまで変わらなくても蓮田のような細腕で支えられる保障はなかった。
だが、蓮田は支えることができた。
人間、必死にやろうとすれば何でもできることを証明してくれましたよ。
香「あ・・・」
蓮「ふう、大丈夫かい？」
優しく微笑みかける蓮田の顔の近さで香凛は赤くなる。
香「だ・・・大丈夫・・・なの／／／」
すぐにバッと跳び起き、蓮田と距離を置く。
香（この気持ちは何なの！？・・・胸が痛いの・・・）
両頬を両手で触れ、自分の顔の熱さを計りつつ、謎の苦しみの原因を突き止める。
しかし、それは香凛にとって理解不能の苦しみである。
蓮「本当に大丈夫？」
蓮田は本気で心配しながら聞く。

香「大丈夫・・・なの・・・」
蓮「そっか。じゃあ、行こっか」
蓮田は残り僅(わず)かな階段を上る。
香凛もそれをついて行くように階段を上る。
そして、案内板通り廊下を歩くと香凛が話を掛けて来た。
香「あの・・・」
蓮「ん、何？」
香「その・・・名前は何て言うの？」
蓮「僕の名前は斎藤蓮田。よろしくね、かりんちゃん」
そう言って、蓮田は手を伸ばす。
香「あれ、どうしてカリンの名前を知ってるの？」
蓮「こうが兄ちゃんが言ってたし、かりんちゃん本人も言ってるから」
香「あ・・・そうだったの。でも、改めて、姫花香凛なの。よろしくなの」
香凛は出された手を握り、握手をした。
その瞬間・・・

ガララッ・・・ドンッ！！

蓮・香「！？」
突然、近くの教室も扉が思いっきり開いた。
蓮田と香凛は驚いてすぐに音がした方へ振り向く。
すると、中から大量の黒い手が蓮田達に伸びてきていた。
蓮「かりんちゃん！！」
香「へっ・・・むぐ！？」
蓮田は逃げられないと判断し、香凛を守るために繋いでいた手を引っ張り、自分へ抱き寄せた。
そして二人は無数の腕に捕まった。
蓮「うわあああああああああああああ」

謎の浮遊感が蓮田を襲い、蓮田は気絶してしまった。
香凛は既に気絶していた。
理由は・・・言わずとも分かるだろう。

ログナ・龍子　ｖｉｅｗ

ログナと龍子は適当に雑談をしながら歩いていた。
ロ「いやー、学校なんて久しぶりだなー」
龍「天国にも・・・学校あったの・・・ですか？」
ロ「あったよ。って、敬語は止めてくれ。何かくすぐったい。」
龍「わかり・・・ました・・・」
ロ「いや、分かってないだろ」
端から見れば肝試しを忘れている二人だ。
そんな時、後ろから何か音が聞こえて来た。

タタッタタッタタタッタタッタタッ・・・

それは、四足歩行の動物が走るような音だった。
二人は後ろを振り返るとそこには、犬のようなゾンビがいた。
それを見たログナの感想は・・・
ロ「ｐｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ」

異常な奇声を出した。
もちろん、ログナが最近見たニ〇動のある弾幕である。
龍子は犬よりログナの声に驚いている。
ロ「ふう、あの声を出すのはやっぱり無理だな。取りあえず、逃げるぞ」
龍「え・・・うん・・・」
二人は犬を背にして全力で逃げた。
だが、思わぬハプニングが起こる。

ガシッ

龍「きゃあ!?」
突然、地面から腕が生え、龍子の足を掴む。
ロ「スギっち!!」
それに気づいたログナはすぐに振り返る。
もう犬がすぐそこまで迫っていた。
ロ「こうなったら自棄(やけ)だあああああああああああ」
ログナは動けない龍子の横を走り抜け、犬と真っ向勝負に出た。
犬はログナに飛び掛かろうとした。
ログナはそれを見切り、しゃがんで回避し、真上に来た所で曝(さら)け出している犬の腹へアッパーパンチ。
実に、自棄とは思えない正確な動きだ。
犬は吹き飛び、倒れこんだ。
ログナは龍子を掴んでいる手を蹴り、龍子を解放させた。
ロ「さっさと逃げるぞ」
龍「あ・・・うん・・・」
こうして、この場を何とかしのぎ切った。

少し走った二人は適当な教室へ入り、休憩していた。
ロ「スギっち、大丈夫か？」
龍「大丈夫・・・さっきは・・・助けてくれて・・・ありがとうございます・・・」
ロ「いやー、あれくらい普通だって。コウガっちが言ってたし」
龍「そう・・・でも、お礼は言わないと・・・」
ロ「そっか。さすが、コウガっちが認めた数少ない人だな」
龍「そういうログナさんも・・・結構交流してたし・・・」
ロ「当然。俺っちとコウガっちは仲間だし。あのくらいは当り前さ」
龍「ふふ・・・羨ましい・・・」
まるで心を許したかのように笑う龍子。
その姿を見てログナは口を開けて見ていた。
ロ（やっぱ、スギっちは可愛いな～。スギっち俺の嫁！！）
などと勝手に決めているログナだった。
まあ、それを決めるのは作者（おれ）だけどね。
さーて、このチームもそろそろお開きにしましょうかね。

キュピ・・・キュピ・・・キュピ・・・キュピ・・・

テンポよく聞こえる音にログナは冷や汗をかいていた。
ロ「この音・・・まさか・・・」
ログナは扉の方へ眼を向ける。
その瞬間・・・

ドーン！！

扉が思いっきりぶっ飛んだ。
そして、元扉があった場所には異常な筋肉向き向きの人・・・じゃない奴がやっていた。
ロ「ば・・・化け物だ・・・」

？「化け物？。違う。俺は悪魔だ」
自称悪魔は手に緑色の気を溜め、ログナの方へ放った。
ロ「嘘だろおおおおおおおおおおお」
デデーン！！
はい、これで番外編は終わりです。
ネタが異常にあった酷い話ですね（汗）。
高「全くだ。酷過ぎるぞ」
だって、本当は蓮田と香凛の関係だけだったけど、それだけじゃ寂しいと思って他のを書いたんだもん。
高「口調変えるな。気持ちわり」
まあまあ、これからあの二人がどうなるか楽しみではありませんか。
高「じゃあ、あいつらをメインにして俺を脇役にしろ」
いやいや、あなたを休ませんよ。こうやって僅かながら出番を作っているのですから。
高「けっ。で、次からは何を書くんだよ？」

次は二学期に入ります。
そして、速攻、異変&バトルです。
ただし、この先は多分、見る人は急激に減ると思います。
高「何で？」
・・・では、ネタバレしておきましょう。

次の相手は殆どが“虫”です。

高「・・・無視」
おい、そっちな訳ねえだろ。
高「取りあえず、次は苦手分野が多そうだな」
でも、誰も見なくたって作者は書きます。
それでは、次に進む人はこれからもよろしくお願いします。
虫だけは無理と言う人は、今まで支えてくださってありがとうございました。
高「また、虫が嫌な奴は虫編（仮）が終わった後に見るのもありだな」
そこまで気長に待つ人はいないと思うぞ。
・・・でも、もしそんな気長な人がいたら嬉しいな。

それでは、長くなりましたが次回をお楽しみに。
高「またな～」

# 緑の復讐編　その1、秋の生物

長かったようで短かったような夏休みも幕を閉じ、二学期が始まる今日。

ピピピピピ・・・ピピピピピ・・・・ピピガチャ

目ざましによって高雅は覚醒した。
だが、久しぶりの早起きによって、高雅は少し目が閉じ掛かっていた。
高「・・・Ｚｚｚ」
いや、閉じていた。
器用に布団に潜った状態で、目ざましに手を置きながら寝ていた。
ア「こらーーーーーーー、起きろーーーーーーーー」
先に起きていたアリアが母親のように布団を分捕る。
高「んあ・・・おはよう・・・」
ア「ほら、早く起きて顔を洗う」
高「はいはい・・・Ｚｚｚ」
ア「だから、寝るなーーーーーーーーーーーー」
高「寝てません、寝てません」
ア「鼻ちょうちんを膨らませながら言われても説得力が欠けるけど・・・」
高「すぴー・・・」
ア「・・・こうなったら」
アリアは部屋を出て、洗面台に向かい、洗面器で水を溜め、それを高雅の部屋に持って行き・・・
ア「そｒ〈バシャ〉きゃあ!?」
突然、自分の顔に水が飛んで来た。
高「だから、寝てないって言っただろ。お前、情けねえな」

高雅が洗面器を持っている手を蹴り上げたため、アリアの顔はびしょ濡れになった。
ア「・・・まさか、本当に起きてたの？」
高「ご明察」
高雅は甘いなと人差し指を横に振る。
その動作を見たアリアは拳を強く握り、プルプルと震えだし・・・
ア「コウガーーーーーーーーーーーーー！！！！」
怒り爆発した。
アリアの雄叫びは軽く地鳴りがしたらしい。

時が進んで出発前。
高「んじゃ、留守番頼むぜ、レオ」
レオに挨拶をして家を出ようとしたが・・・
レ「待つのだ、コウガ殿」
レオがそれを妨げた。
高「何だよ？」
レ「ちょっと待ってくれぬか？」
それだけを告げ、レオはこの場を離れる。
するとすぐに、レオは４０ページぐらいの厚さの本を咥えて戻って来た。
高「ん？、何だそれ？」
高雅はレオから本を受け取って聞く。
レ「我が登場していない間に天国でも散歩していた時に見つけた物

だ」
高「おい、なに小説の裏で散歩とかしてるんだよ」
レ「と・・・取りあえず、それを読んでくれ」
高「その前に何の本なんだ？」
高雅は表紙を確認する。
そこにはこう書かれていた。

『力大百科（ただし、契約者が最強で使いの髪が蒼くて色んな力が使えて真の契約の条件がキスで契約者が異常にカナヅチな人で家に天獣がいて“残虐な黒狼”を倒していて3つのフラグが立っている力をあまり良く知らない人専用）』

高「・・・こんな人がいるのかよ？」
ええ、すぐそこにいますよｗｗ。
高「取りあえず、俺が当てはまっているかは置いといて、学校で読んでみる」
そう言って高雅は本を鞄の中に入れる。
レ「そうか。ならば、帰った後に感想を聞かせてくれぬか？」
高「わーったよ」
そう言って高雅は玄関を開け、外へ出た。

登校省略。

学校に到着した高雅は早速、机に着く。
ちなみに、まだ誰も登校していない。
高「さーって、着いたことだし、寝るとするか」

ア「あれ、あの本を見るんじゃなかったの？」
高「あ、そうだった」
アリアの言葉で気づいた高雅は鞄から本を取り出した。
高「えーっと、なになに・・・」
高雅は最初のページを開ける。
そこには、こう書かれてあった。

力とは。
力とは楽園によって作られたモノであり、天に存ずる選ばれし者が力を分け与えられる。
さらに、力は子孫に受け継がれる。
家系によっては複数の力を所有する者も現れるだろう。
力を持つことによって体に害は生じないが、髪色が変色する。
これについては、今だに不明である。
力を複数持つの者はより強力な力が髪色を変える。

高「なんか・・・今さらって感じがするな」
ア「あっ、でも、次の文は知らないことだよ」

力を使うにあたって。
普通に単発で使うこともできるが、他にも『合成力』と『融合力』が存在する。
合成力は複数の力をまとめて扱うことで、力の範囲を拡大、力の攻撃の多重付加などが起こることを言う。
融合力は複数の力を合わせることで、全く別の力を生み出すことを言う。

以下のページは融合力の例を幾つか記す。

高「・・・ふーん」
ア「つまり、私達はよく合成力を使っていたってことね」
高「だな。大体、説明文はこんだけかよ。何が力大百科だ。別に大百科レベルじゃねえぞ」
ア「取りあえず、次からのページにある融合力を見ようよ」
高「へいへい」

パラパラパラパラ・・・

高雅は見開き2ページを約0．5秒の速さで捲(めく)る。
高「よし、見終わった」
ア「早いよ!!。絶対一つも覚えてないよね!?」
高「いや、全部覚えた」
ア「嘘!?」
高「そんじゃ、俺は寝る」
高雅は本を鞄に戻し、机に突っ伏し、眠り始めた。
ア「私なんか、最初にチラッと見えたのしか覚えてないのに・・・」

まあ、あれから始業式やら宿題回収やらあって現在は・・・
先「はーーーーーーーーーーい、今から実力テストをするよーーーーーーーー」

異様にテンションが高いはさて置き、クラスは不満に満ちたオーラに包まれていた。
高「それにしても、何で先生はあんなにテンションが高いんだ？」
ア（きっと、久しぶりの出番だからよ）
高「なーるほど」
先「それじゃーーーーーーーーーー、テスト開始ーーーーーーーーーー」
高「あれ、いつの間にかテスト用紙が机の上に」
ア（気にしたら負けってやつだよ）
取りあえず、高雅は目の前の問題を解き始めた。

数分後。

解き終わった高雅は残り時間を適当に頬杖しながら外でも眺めていた。
高（・・・蜻蛉（とんぼ）かー）
窓ガラスには数匹の蜻蛉が映っていた。
高（もう秋だな～）
蜻蛉を見ながら秋を感じている高雅だが、何か不審を感じる。
高「・・・・ん？」
それは、蜻蛉がウジャウジャウジャウジャウジャウジャウジャウジャウジャ・・・
高「おい！！、多すぎるだろ！！」
さすがの高雅も声に出して言う。
外野は何だあれ、とか、キモイ、とか言ってるようだ。
先「こら、気にしたら負けよ！！。何か起きたら私の出番が減るわ！！」
いや、もう手遅れです。

既に蜻蛉は窓ガラス全体を覆うように張り付き、太陽の光が入っていない。
教室内は夜を感じさせるほど電光灯が輝いていた。

ピキ・・・ピキキ・・・

塵も積もれば山となると言うのがピッタリだろう。
異常な蜻蛉の量の圧力の為、窓ガラスにヒビが入り始めた。
先「全員、退避ーーーーーーーーーーーー！！！！」
あー、先生のキャラが壊れちゃってるのは気にしないでｗｗ。
殆どの生徒は、うわあああああ、て言いながら教室を我先に雪崩出て行った。
だが、高雅とＡは出なかった。
高「おい、さっさと逃げなくていいのか？」
Ａ「ちっちっち。これを斬れ抜けば俺は一躍ヒーローだぜ」
高「おいおい・・・」
龍「高雅君、Ａ君・・・早く！！」
龍子は二人を心配して待っていてくれた。
高「んじゃ、俺は行くぞ」
Ａ「行っとけ行っとけ。次に会う時は拝むんだな」
高雅はそんな話などは聞かずにさっさと龍子と逃げていった。

バリバリーン！！

ちょうど窓ガラスの耐久が無くなり、無数の蜻蛉が教室へ潜入する。
Ａ「行くぜ、タイト！！。主人公の活躍を描こうじゃねえか！！」

果たして、Ａはどうなってしまうのか！？

高雅が逃げて5分後。

Aはなんと意外なことに、まだ生き残っていた。

A「何か俺の扱いが酷くないか？」

タ「主よ、右から30、左から60、上から35、後ろから39、前から54来てるぞ」

A「つまり全方位だろ！！。最初からそう言え！！」

タ「いや、全方位ではない。右前、右後ろ、左前、ひd「だーーー！！、斜めなんて気にするんじゃねえ！！」」

Aは空いている右前に飛び込み、前転して立ち上がる。

A「にしては、何匹いるんだよ！！。もう千匹は殺したってのによ」と言いながらも確実に蜻蛉を殺しているAだった。

だが、殺しても殺しても数は減るどころか増え続けている。

タ「主よ、親玉を探すのだ。この数を仕切る親を討つのだ」

A「んなもんがどこ・・・」

Aは適当に外を眺めて探すとそこには・・・

一回り大きい蜻蛉がいた。

A「待て待て、一回りで済む大きさじゃない！！。前言撤回しろ！！」

コシュー・・・コシュー・・・

ほら、蜻蛉は一回りだって言ってるよ。

A「だから待てって！！。コシューって何だよ！？。鳴き声聞いたことないからってその声はないだろ！！。大体、蜻蛉の言葉が分か

るのかよ!?」
そんなの知るわけねえだろうが!!
A「逆ギレ!?」
タ「主よ、あれが親に違いない!!」
A「多分、誰だって分かるぞ。取りあえず、おりゃあああああああ」
Aは一回り大きい蜻蛉に向かってジャンプし、斬り込む。
だが、デカ蜻蛉は瞬間的に後ろに引く。
でかくなっても元の予測不能な動きが無くなった訳ではないようだ。
A「ちょこまかとうぜえな!!」
蜻蛉はどんどん後ろへ下がってゆく。
まるで、Aを外へ出すためかのように・・・
タ「しまった!!。これは罠か!?。主よ、今すぐ教室へ戻るのだ!!」
だが、Aは攻撃が当たらないことにイラつき、声が届いていない。
タ「主よ!!、周りを見るのだ!!」
A「うっせいな、もう飛び出ているのにどうやって帰るつもりだよ!?」
タイトの力は活性のみ。
なので、どうやっても飛び出た所を戻ることは不可能。
Aは普通に落下する。
だが、落下に関しては、足を活性化すれば問題ない。
問題はその落下地点。
A「あっ・・・」

謎の巨大肉食植物が大きな口を開けて・・・

パクッ

校舎、４階。

高雅と龍子は先に逃げたクラスメイトを追いかけていたが・・・
高「・・・何処に行ったんだ!?」
全くもって見つからなかった。
校舎内を結構探しているが見つかっていない。
高「一体・・・どこに・・・」
高雅は考え始めた。
まず、外に逃げることはまず有り得ない。
あんな大量の蜻蛉が押し寄せて来た外に逃げるような自殺はしないだろう。
だが、校舎内は殆ど探しつくしている。
高「う～ん・・・わけ分かんねえ」
ア「取りあえずさ、リュウコを安全な場所へ避難させようよ」
高「しゃーねえ、そうするか」
龍「高雅君・・・あれ!!・・・」
高「ん?」
龍子が指を指している方を見ると、窓の外にさっきの蜻蛉の親玉がいた。
高「デカッ!?。何だありゃ!?」
高雅の声が聞こえたのか、蜻蛉はこちらを向いた。
すると、ガラスをぶち破り、普通サイズの蜻蛉が大量に押し寄せて来た。
高「龍子はここで待っててくれ」
龍「うん・・・分かった・・・」
高「行くぜ、アリア!!」

ア「分かってる」
高雅は双剣（アリア）を握り、速度の力で無数の蜻蛉を通り過ぎると同時に切り刻み、外へ飛び出た。
外へ出た瞬間、蜻蛉が入らないように窓ガラス全体に鉄壁を創造した。
そして空中に足場を創って、そこへ着地し、蜻蛉と向かい合わせる。
しかし、つい下に目がいってしまう。
高「・・・ここ、日本だよな？」
つい疑ってしまうだろう。
真下に肉食植物（しかも巨大）が咲き乱れていれば。
早く食わせろと言わんとばかりに口をガブガブ開け閉めしていた。
高「それにしても、一体何を食えば、こんなにでかくなるんだ？」
ア「絶対、食物は関係ないと思うよ」
高「じゃあ、何が原因でこうなったんだよ？」
ア「それは・・・わからない」
高「結局こうなるんだな」
ア「そ・・それより、あの蜻蛉をどうにかしないと」
高「そうでした。そんじゃ、秒殺コースで行くか」
高雅は少し膝を曲げると、その場から消えていた。
正確には、速度の力で蜻蛉の目の前に移動していた。
高「おらっ！！」
蜻蛉の顔面目掛けて剣を振りかぶる。
だが、蜻蛉はそれを分かっていたかのように上昇して避ける。
しかし、高雅もそれが分かっていたのか、一瞬で足場を創り、蜻蛉を追うように跳ぶ。
高「もらい！！」
高雅は片方の剣を投げた。
蜻蛉は、Ａのせいで人間を舐めていたのか、反応が遅れた。
剣は蜻蛉の胴にグルグル紐が巻きついた。
高「落ちろーーーーーーーーー！！」

巨体に関わらず、繋がっている紐を引っ張り、蜻蛉を肉食植物畑へ落とす。
もちろん、活性の力で腕力が上がってるだけだけどね。
蜻蛉は無残にも地獄畑へ落下する。

グシャ・・・グチュ・・・グチャ・・・

植物たちは待ってましたと言わんばかりに蜻蛉を喰いまくる。
蜻蛉は無残にも食い千切られていった。
高「ひゃー、校庭に大量の血が」
ア「別にどうも思ってないでしょ？」
高「もち」
ア「なら、何で言ったのよ？」
高「単なる、文字稼ぎ」
ア「別にする必要が無かったんじゃ・・・」
高「気にしたら負けだ」
高雅は肉食植物がたてるグロイ音が鳴りやむと鉄壁を全て消した。
またいつ襲われるか分からないため、高雅は双剣をベルトとズボンの間に挿しこんだ。
そして、龍子のとこへ戻る。
高「よ、待った？」
龍「別に・・・どうなったの？・・・」
高「えーっと・・・蜻蛉は倒した。でも、外は滅茶苦茶危険だということが分かった」
龍「私達・・・帰れるの？・・・」
高「無理」
ア「そんなきっぱり言っちゃダメだよ」
高「どう言おうがあの状態から帰るのは無理だろ」
その言葉を聞いた龍子が俯いてしまう。
何か悟った高雅がもう一言付け加える。

高「まあ、ここで安全な場所は知ってるからそこへ案内する」
龍「でも・・・安全な所・・・なんて・・・」
高「おいおい、校長室の地下室があるだろ。忘れたのか？」
龍「私・・・元々知らない・・・」
ア（コウガ、あの時の記憶を消したこと、忘れたの？）
高（あっ、そうだったな。ハハハ・・・）
高雅は後頭を掻き、自分のうっかりミスを苦笑いする。
それを見た龍子は首を傾げ、？マークを浮かべていた。
高「取りあえず、校長室へ行こうぜ」
龍「う・・・うん・・・」
高雅達は校長室へ足を運び始めた。

校長室前。

高「それじゃ、開けるぞー」
高雅は校長室の扉の取っ手に、手を掛ける。
横にスライドして校長室の扉を開けて中へ入る。
そこでは、何故か二人がフィーバーしていた。
高「・・・何してんだ、テメーら」

それは、校長と教頭が殴りあっていた。

校「なんだね君は。ここは校長室と知っての入しｔぼひゃ！！」

教「よそ見してるんじゃありませんよ、こうｔｙぶびゅ！！」
二人の顔は痣(あざ)だらけで、原形が殆ど無くなっていた。
高「何故殴りあってる？。分かっているが、一応聞いてやる」
校「こ奴が、わしが入った後に扉を隠せと言うのにそれを聞かぬのじゃ！！」
教「そんなことをする訳ないでしょうが！！」
校「何じゃと！？。貴様、校長に向かってそのような言葉は無礼にも程があるじゃろ！！」
教「貴様ごときに敬語を使うのはもう甚だしい！！」
高（こんな大人には絶対になりたくねえ）
高雅は哀れな大人の光景を見て、心に誓いを作った。
すると、また扉が開き、誰かが入室して来た。
高雅と龍子はそれを確認するために振り向く。
そこには、知っている人物がいた。
凛「失礼します・・・って、高雅さんに杉野さん。どうしてこちらに！？」
高「凛じゃねえか。まあ、地下室を利用しようとしたが、ダメ大人が邪魔でな。今から退かそうとしていたんだ」
凛「そうですの。それで、校長たちは何をなさっていますの？」
高「醜(みにく)い殴り合いだ」
高雅は親指を突き付けながら説明した。
凛は可哀そうな者を見る目をしながら、呆れていた。
すると、龍子があることに気付いた。
龍「高雅君・・・あれ・・・」
高「ん？」
高雅は龍子が指を指す所を見る。
そこは地下室の入口で、ガタガタ動いていた。
校長と教頭も気付き、一時休戦する。
段々、ガタガタが激しくなり、ガチャン！！と音をたて、外れる。
その中から現れたものは・・・

大量の巨大な蟻(あり)が湧いて出て来た。

高「な！？」

校・教「ひいいいいいいいいい」

蟻は近くにいた校長と教頭を捕えると、巣へ持ち帰ろうとした。

校「うわあああああああ、助けてくれえええええええええええ」

教「放せえええええええええええええ」

必死に抵抗するが、巨大蟻の前には無力だった。

高「おい、逃げるぞ！！」

凛「え・・・きゃあ！？」

龍「きゃっ！？」

高雅は返事を聞く前に凛と龍子を一人ずつ片手で抱え、校長室を離れた。

逃げている途中、断末魔と食い散らかすような音が聞こえたが、戸惑うことなく全力で逃げた。

あるビルの屋上。

そこからは緑淵高校が一望できる。

そこにいる二人は緑淵高校を見ながら会話していた。

？「彼は何故ここを選んだのでしょう？」

？「分からぬ。だが、人を裁くことに変わりわない」

？「左様です」
すると、一人がこちらに飛んで来ていた。
それは、インジだった。
イ「よう。種はばら撒いたし、おっさんの力もお望み通りに使ったぜ」
？「ご苦労だ、インジよ」
？「インジ、おっさんではなくウルザス様と呼べ」
イ「んな、様なんて堅苦しい。気楽に行こうぜ」
？「貴様は気楽過ぎるのだ。もっと立場を弁えろ」
ウ「別によい」
ウルザスと言う老年は二人の口喧嘩を聞き飽きているのか、すぐに割って入り止めた。
ウ「それよりも、しかと種を撒いたのじゃろうな？」
イ「当ったり前よ。もう生き生きしてるぜ。虫も植物もテンションMAXだぜ」
ウ「そうか、実験は成功か。ならば始めよう」
ウルザスは腕を大きく横に広げ、高らかに宣言した。
ウ「人間を裁く、緑の復讐計画を！！」

高雅達は校長室からある程度離れた階段に座っていた。
高「・・・大丈夫か、凛？」
凛は校長達の断末魔と生グロイ音を聞いてしまったためか、震えていた。
凛「だ・・・大丈夫ですわ・・・」
返事をするが、その声を聞く限り大丈夫ではないようだ。
高雅は凛の肩に手を置き、落ち着かせようとする。
高「安心しろ。俺がどうにかするから」
それでも、凛は落ち着く様子は全く見られない。
次に高雅は龍子の方を見る。
凛のように震えてはないが、恐怖で目が遠くを見ていた。
高「龍子も大丈夫か？」
龍「う・・・うん・・・」
凛と同じような返事をする。
高雅は二人の様子を見てを罪悪感を感じてしまう。
高「悪かったな、怖い思いをさせてしまった。だけど、その怖い思いを消すこともできる。お前らが望むなら消してやってもいい」
そう聞いてみるが、凛と龍子は首を縦には振らなかった。
高雅も強制をするつもりはなかったので、これ以上は追求しない。
ただ、一つ付け加える。
高「本当にきつくなったら何時でも言っていいからな。俺はお前らが壊れるのが嫌だから」
そう言って高雅は立ち上がる。
高「アリア、二人を頼む」
ア「え!?、どこか行くの？」
高「ちょっと・・・一人にさせてくれ」
ア「・・・うん」

アリアは人間の姿になり、震えている凛に触れながら高雅の後ろ姿を見る。
高雅は曲がり角を曲がり、三人からは見えなくなった。

高雅は別に離れる訳もなく、三人から見えない場所で佇(たたず)んでいた。
そこで、自分のやってしまったことを思い返す。
高「・・・何だよ・・・この気持ちは・・・」
感じたことのない気持ちに怒りと恐怖が込み上げてくる。

ドガッ!!

高雅は堪(たま)らず、すぐそこにあった壁を思いっきり殴る。
その行動は自分の手を傷つけるだけだった。
殴った手から血が壁を伝い、ツーと流れ落ちる。
高「あいつらを・・・傷つけてしまった・・・」
高雅は龍子達を巻き込んでしまったことに責任を感じていた。
もちろん、今までだって巻き込んでしまってはいる。
だが、あそこまで恐怖に満ちた目を見たことはない。
その姿を見て、高雅は改めて責任を感じている。
高「ちくしょう・・・ちくしょう・・・」
自分の未熟さに涙を零(こぼ)し始めた。
自分の考えが甘かったから、自分の判断が遅かったから、自分の意識が軽薄だったから、――――。
次々と思い浮かぶ自分の罪に押しつぶされそうになってしまう。
その罪は高雅の中に一生残される。
ア「・・・コウガ?」
高「!?」
突然聞こえたアリアの声にビクッとし、涙を拭いて振り向く。

高「おい、二人はどうした？」
ア「後ろにいるよ」
高雅は少し顔を横へ動かす。
すると、アリアの陰になりながらも、少し離れた場所に二人はいた。
だが、まだ目はあのままだ。
高「・・・くっ」
高雅は見ることができず、また後ろを向く。
ア「コウガ、どうしたの？」
アリアは一歩一歩高雅に近づく。
ア「・・・もしかして、責任を感じてるの？」
高「！？」
高雅は考えを当てられてしまい、またビクッと驚く。
アリアはその反応を察して気付いた。
ア「コウガが人間に対してそんなことを思うなんて、変わったね」
と笑いながら高雅を茶化す。
だが、高雅はそれに対して怒ることもなく、振り返ってアリアに聞く。
高「なあ、アリア。この気持ちは何なんだ？」
ア「？、この気持ちって？」
高「何か・・・二人を見ることができない。見てしまうと心がきつく締まるって言うか・・・」
ア「・・・それはね」
アリアは高雅のすぐ傍まで辿り着き、怪我をしている手を取って言う。
ア「二人の事を大切に思ってることだよ」
そう言って手の傷を再生させ、治す。
ア「高雅は二人がまるで別人のように変わってしまう事を恐れている。だからと言って二人が変わりそうなのに逃げだしてはいけない。自分でやったことは自分でどうにかする。責任を感じているのなら、どうにかしなくちゃいけないよ」

高「・・・・・・」
ア「だから、まずは謝らなくちゃね」
高「さっき、謝っただろ」
ア「二人は返事を返してないよ。返事がない謝りなんて無意味なんだから」
高「お・・・おい」
アリアは高雅の手を引っ張り、龍子と凛の所へ連れていく。
二人の所に着くと、高雅は目を逸らしていたが、アリアがそれを指摘する。
ア「ほら、相手の目を見て謝らないと失礼だよ」
高「わかってる」
高雅は意を決して二人の目を見る。
改めて見ると、先ほどよりは恐怖心が薄れているのが分かる。
高「その・・・すみませんでした」
高雅は深々と頭を下げる。
龍「・・・いいよ」
高「え!?」
高雅は幻聴出ないことを知るため、もう一度確認する。
龍「許すよ・・・高雅君・・・」
凛「大体、巨大な蛸をも見ているのですよ。今さら、音だけで人格が変わるはずありませんわ」
高雅は今のセリフからして、さっきの会話が聞こえていたんだと認識した。
高「だけど、今までとはレベルが違う。普通の人間なら精神的に傷が付くだろ」
凛「私達はそのような弱い精神で出来ていませんわ」
龍「それに・・・記憶を消して・・・楽になろうとも思わない・・・」
凛「記憶を消して楽になるなんて、私達がそれで満足すると思っていますの?。高雅さんは自己満足すぎますわ」

高「うぐ・・・返す言葉もねえ」
高雅はさっきとは別の意味で二人の顔を見ることができなかった。
しかし、アリアが肘で突っつき、目を見るように促される。
龍「それに・・・消したとしても・・・罪は消えない・・・」
高「・・・・・分かってる」
改めて言われると、再び罪の重さを感じる。
だが、それを振り払い、真剣な目で二人を見る。
高「だから、罪滅ぼしとしてお前らを守らせてくれ」
高雅の真剣な眼差しを見て、二人は赤くなる。
龍「・・・うん・・・お願いする・・・／／／」
凛「し・・・仕方ありませんわね。そこまで仰るのならさせてあげますわ／／／」
高「ありがとう、二人とも」
そう言ってほほ笑む高雅に、今度は二人が高雅の目を見ることができなかった。
ア「それで、気持ちの締め付けは緩くなった？」
高「ああ。ありがとな、アリア」
ア「どういたしまして」
高雅の気持ちが晴れたことを確認して、アリアは本題を切り出す。
ア「それじゃ、これからどうしようか？」
凛「やはり、まずは安全な場所を探す必要がありますわね」
龍「でも・・・学校内は・・・殆ど回ったし・・・」
高「う～ん・・・取りあえず、俺の家に行くか。ちょっとやりたいこともあるし」
龍「どうやって？・・・外は危険なんじゃ・・・」
高「分かってる。俺もバカじゃねえ。二人はちょっと後ろを向いてくれるか？」
龍「うん・・・」
凛「分かりましたわ」
二人は高雅とアリアを視界から外した。

ア「もしかして、真の契約で空間の力を使うってこと？」
高「それしかない。嫌か？」
ア「全然。むしろ・・・」
高「むしろ、何だよ？」
ア「う・・ううん。何でもないよ／／／」
高「あっそ。んじゃ、行くぞ」
高雅はアリアの肩を持ち、顔を近づける。
ア「・・・ん／／／」
やがて、二人の唇は重なった。
そして真の契約が発動し、アリアは双剣になる。
高「よし、もうこっちを向いていいぞ」
高雅の許しを聞き、二人は振り向く。
凛「それで、どうやって高雅さんの家に行くと言うのですか？」
高「簡単な話だ。ほらよ」
そう言って適当な場所に剣先を向ける。
すると、剣先から数メートル離れた場所で空間が歪み始めた。
その光景に二人は驚く。
凛「な・・・何ですの、一体！？」
高「空間を捻じ曲げて俺の部屋へ空間を繋げた。まあ、平たく言えばどこ◯もドアだな」
龍「これ・・・私達が・・・後ろを向くのと・・・どういう関係が？・・・」
高「なっ！？、それは・・・あれだ、これを使うには条件がいるんだよ。だけど、それは人に見られてはいけねえんだ／／／」
凛「どうして顔が赤くなりますの？」
高「えっと・・・条件を達した後の副作用みたいなもんだ」
慌てふためきながら、高雅は必死に理由を述べる。
二人は怪しいと思いながらも取りあえず納得した。
高「と・・・とにかく、こいつを潜（くぐ）れば俺の部屋に着くから、行くぞ」

そう言って、双剣を腰に挿し、二人の手を取って歪んだ空間を潜る。
その時、二人の顔がまた赤くなっていたことを高雅は知らない。

空間を潜り抜けた先は高雅の部屋だった。
凛「まさか、本当に高雅さんの家ですの？。間違ってよそ様の家ではありませんの？」
高「じゃあ、そこの棚にある教科書の名前を見ろ」
凛は言われるがままに棚から数ある教科書を一つ取り出した。
そして、裏面を見ると学年、番号、そして高雅の名前が書かれていた。
凛「確かに、ここは高雅さんの家ですわね」
龍「散らかってないし・・・綺麗・・・」
高「そりゃ、どうも。適当に寛(くつろ)いでてくれ。何か飲みもんでも持って来る」
そう言って扉を開け、部屋を出ようとした。
その時、足元にある動物が威嚇をしていた。
レ「誰だ!!・・・っと、これはコウガ殿ではないか」
高「ただいま、レオ。ちょっと異変が起きてな。空間の力で帰って来た」
レ「そうか、さっきの力はコウガ殿のものであったか。それで、異変というのは？」
高「飲みもんを取りに行きながら話す」
そう言って高雅はレオに足を軽く出し、レオはそれに乗る。
そして、高雅がレオを頭へ蹴り上げる。

レオは龍子達の方を見て高雅に聞く。
レ「ところでコウガ殿。あの者達は一体?」
高「俺の守るべき者達だ」
それだけを言い、高雅は部屋を出た。

高雅は台所の冷蔵庫からジュースを取り出し、コップに注ぎながら
レオに学校での出来事を話した。
レ「そうか。そのようなことが起きていたのか」
高「まあな。そこで、お前に協力してほしいのだが・・・」
レ「一体、何をするのだ?」
高「お前からもらった本に書いてあったことをしたいのだが・・・」
レ「あの本か。それで、具体的にどうするのだ?」
高「実はな、空間と活性を融合することで時を早める力ができるんだ。さらに、その周りに空間を作れば、その空間内だけ時間を早めることができる」
レ「成程。察しはついた。我をその空間にいれ、1億年後に我が出てき、共に敵を倒すということか?」
高「ご明察。だけどよ、時が早くなったって、その中では普通に1億年過ごさなくてはならない。ただ、外から見たものにとっては早いだけだ」
レ「つまり、我は1億年だが、コウガ殿にとっては僅かな時間、ということだな」
高「ああ。だから、嫌ならいい。1億年間も一人で居るのは辛いだろう。だから、強制はしない。お前が決めてくれ」
レオは少し考え始めた。
頼んだ本人は“はい”と帰ってくるとは思っていない。
1億年の孤独を味わうのは生き地獄だろう。
最近になって、高雅は仲間の大切さを知っている。

だから、高雅はレオに期待などしていない。
レ「・・・いいだろう」
だが、レオは高雅の予想を破った。
高「いいのか!?。1億年だぞ!!」
ア「無理しなくていいよ、レオ君」
レ「君付けをするな。それに、我は無理をしておらぬ」
高「じゃあ、どうして?」
高雅の質問にレオは愚問と思いながら答えてやった。
レ「家族が戦っている時に、我だけ家で留守番はもう懲り懲りだからだ」
高「・・・そっか。分かった。じゃあ、今からその空間を作る」
高雅はリビングへ行き、レオをソファーに下ろす。
高雅は片方だけ剣を腰から抜き、剣先を目の前に向ける。
一回深呼吸をして目を閉じ、力を込め始める。
高（空間と活性を融合・・・）
高雅は頭の中で力の融合を描く。
すると、剣先に赤と紫のグラデーションでできた光が生まれる。
そして、すぐにもう二つ力を合成する。
高「よし、さらに空間＋創造の力」
すると、目の前に直径2メートル程の球体ができ上がった。
高「よし、完成。にしては、融合力を作るのには時間が掛かるな。あんまり戦闘向けじゃなさそうだ」
レ「コウガ殿、我はこの中に入ればよいのだな?」
高「ああ。ちなみに、中にも空間の力を掛けたから外見より広いし、さらに、何か願えば好きな物が出るようにしたぞ」
ア「だから、創造の力も使ったんだ」
高「まあな。後、何時でも帰れるようにしてるから、辛くなったら出て来いよ。出て来たって責めはしない」
レ「ふっ。感謝するぞ、コウガ殿。では、また会おう」
そう言ってレオは球体の中へ飛び込んだ。

ア「ところでさ、どのくらいで1億経つの？」
高「出来る限り早くしたら、1秒で５０００年ぐらいになった。後は自分で計算しろ」
ア「えっと・・・1時間が３６００秒だから1時間で１８００００年で・・・約6時間だね」
高「簡単な数字にまとめるとそうだな。それじゃ、あいつらに飲みもんを持ってくか」
ア「ふと思うと、レオ君はもう５００００年過ごしてるんだよね」
高「ああ。出て来ないってことは、それだけ覚悟を決めてるか、願いを使ってで楽しんでんだろう」
高雅は台所に戻り、お盆に乗せたジュースを持って、部屋に向かった。

空間の中。

そこは景色が捻じ曲がっており、それ以外は何もなかった。
レ「願えば好きな物が出るか・・・」
レオはその言葉を頭の中で何度も再生し、あることが思いついた。
それをレオは目を瞑り、願う。
そして、再び目を開けるとそこは・・・
レ「ふっ、本当に願えば叶うのだな」
レオは自分の願ったものと一緒に空間内を過ごし始めた。

# 緑の復讐編　その4、幼女レーダー

高「待たせた・・・って、何やってんだ?」
部屋に着いた高雅は適当にお盆を置き、何かを探している二人に聞いた。
凛「いえ、別に何も」
高「嘘つけ、だったら何でベットの下やら探してんだよ?」
龍「そ・・・それは・・・」
すると、アリアが二人の行動に察して割り込む。
ア「もしかして、思春期の健全な男子が持っているあの本を探しているの?」
凛「ええ。やはり、男の部屋に入る時は必ずしろとお母様に言われましたので」
高「んなことするな!!。お譲さまだろ!?。自重しやがれ!!。後、龍子も大人しいキャラだろうが!!。いきなりアホな行動するな!!」
ア「ちなみに、私も探したことあるけど、見つからなかったよ」
高「テメー、いつの間に!?」
凛「それもそれで・・・何か・・・」
高「俺に正解は無いってことかよ」
龍「と・・・取りあえず・・・」
龍子はお盆からジュースを取り、凛にも渡しながら本題を切り出す。
龍「ここに来たけど・・・これからどうするの?・・・」
高「まあ、この辺りはまだ虫とかいないし、今の内に結界でも張っとくかな」
高雅は腰に挿したまま、剣の柄に手を置き、力を込める。
一時、高雅は目を閉じて無言になる。
その様子を龍子と凛は観察するように見ていた。
高「・・・よし、終わった」

高雅は再び目を開け、ジュースとグイッと飲み干す。
高「それじゃ、俺は出るぞ」
龍・凛「え！？」
二人は目を丸くして驚くが、高雅は空間を開く。
そこを凛が手を伸ばしながら止める。
凛「ちょっと待ってください。私達はどうすれば！？」
高「適当に俺の家で寛(くつろ)げ。ここにいれば安全だ・・・多分」
凛「何故最後に多分を付けますの？」
高「気にするな。取りあえず、この家からは出るなよ。あと、リビングに変な球体があるからそれに近づくなよ」
そう言って高雅は空間の中へ入った。
空間は高雅を呑みこむと同時に何事もなかったように消えた。
凛はジュースを飲んで、半分減ったコップをお盆に置く。
凛「杉野さん、捜索再開ですわ」
龍「え！？・・・でも・・・アリアはないって・・・」
凛「相手は高雅さんですのよ。きっと誰にも分からないようなカモフラージュをしているのですわ。それを探し当ててみせますわ」
凛は再びベットの下を捜索し始めた。
龍子はその姿をただ唖然と見ていた。

空間移動した場所は高雅のクラスに繋がっていた。
高「到着っと。えーと・・・ふむ」
高雅はクラスの中の様子を見てＡがどうなったかを予想した。

クラス内は蜻蛉の血や死骸で床が覆われていた。
高「・・・あいつは・・・死んだっと」
決して、存在が嫌だからという理由ではない。
そう結論した理由はちゃんとある。
それは、ちょっと前に高雅が倒したデカイ蜻蛉にある。
戦う前に襲って来た普通サイズの蜻蛉とここの死骸の蜻蛉が一緒ということが見て判明されてた。
つまり、Aは親玉を倒せなかった。
そして、喰われた。
これが、高雅の出した結論である。
高「じゃあ、あの肉食植物の胃袋の中か・・・」
そう言いながら窓の外から大量の肉食植物を見下ろす。
だが、そこに妙な動きをする肉食植物があった。
高「ん?」
高雅はその植物をガン見する。
それは、口を少し開きながら暴れていた。
そして、口の中に何かつっかえ棒みたいに人間が一人いた。
高「・・・あれ、デカ蜻蛉はあんな所で喰われたっけ?」
もう高雅もそれが誰か分かってしまった。
A「ぬおおおおおおおおおおお、喰われるかあああああああああ」
Aが必死に喰われまいと頑張っていた。
高「おーおー、精進してるねー」
高雅は速度の力で真上まで移動し、足場を創造して見下していた。
A「その声は崎村か!?。いいから、助けてくれえええええええええ」
高「やだ」
A「おい!!。見殺しにする気か!?」
高「だって、今、お前を助けたらそこで見ている香凛がお前に幻滅するぞ」

もちろん、真っ赤な嘘である。
Ａ「何！？、本当か！？」
高「ああ、そうだよ。ほら、耳を澄ませば聞こえるだろ？」
香？「Ａお兄ちゃーーーん、がんばれーーーーなの」
→は、高雅が夢幻の力で聞かせている幻聴。
Ａ「お・・・お兄ちゃんだと？・・・うぅぅぅぅぅう、幼女万歳いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」
高雅はこいつの何処にそんな力があるんだ？と呆れながら見ていた。
Ａはもう少ししか口が開いていなかった肉食植物が顎が外れるほど開き始めていた。
Ａ「どっせえええええええええええい」
最後の掛け声と同時にＡは肉食植物の口を１８０度開けて、脱出した。
Ａはすかさず刀（タイト）を握り、開いた口を二等分する。
Ａ「どうだ！！、俺の実力は！？」
高「じゃあ、ここら一体にある奴、全部刈れ」
Ａ「え！？」
Ａは高雅の声に反応し、あたりを見回す。
そこには、仲間を殺されて激昂しているのか口をバクバクしてＡを威嚇していた。
Ａ「・・・あの〜、崎村さん」
高「だが断る！！」
Ａ「お前、断るのはえーよ！！・・・はっ！？」
突然、Ａはある方向だけを見つめていた。
だが、そこは何も変わらない植物たちがブ千切れているだけだ。
高「？、どうした？」
Ａ「あっちに・・・幼女がいる！！」

ズテーン！！

っと高雅は豪快な音を立てながら足場から落ちた。
落ちた所は運が良かったか、肉食植物畑の中でもちょっと開いた所だ。
高「っつ～、んな下らねえことで真剣に言うな！！」
高雅は打った所を擦りながらＡに怒鳴る。
Ａ「しかも、助けを求めている！？。今行くぞ！！」
Ａは高雅を無視して、肉食植物を斬りながら何処かへ駆けだす。
ア「ねえ、Ａの言動が気になるし、ついて行こうよ」
高「まあ、気になるのは確かだし、行ってみるか」
高雅もＡが斬り開いた道を進んだ。

到着した場所はグラウンド。
Ａは固まってあるものを見つめていた。
Ａ「・・・・ポカーン」
高「おい、お前のいう幼女はこんな怪物だったのか？」
高雅達の目の前には巨大な蜘蛛がいた。
高「このマニアック野郎」
Ａ「俺はそんな奴じゃねえ！！」
？「う・・・あみゅ・・・」
Ａ「！？、おい！！、いま幼女の声が！！」
高「はぁ！？、俺は夢幻をしてねえぞ」
？「うう・・・うっぷ・・・」

ア「コウガ！！、本当に聞こえるよ！！」
高「今、俺も聞こえた。でも、どっからだ？」
目の前には体長１５メートル程の蜘蛛がいるだけである。
Ａ「分かったぞ！！。蜘蛛（こいつ）の後ろにいるんだ！！。俺の幼女レーダーがそこに反応している！！」
高「警察に突き出すぞ。んな危険な物を持っているやつは」
だが、Ａは既に高雅の声は届いていなかった。
Ａ「今行くよ、ＭＹ　ＬＩＴＴＬＥ　ＧＩＲＬ！！」
Ａは活性の力を使い、ダッシュで蜘蛛のまた下を潜（くぐ）り抜けた。
高「おい！！、待ｔ〈グシュウウウウウウウウ！！〉ったく、こいつは俺が倒すか」
蜘蛛が高雅の目の前で地団駄をして威嚇する。
おかげで、砂煙が砂嵐のように撒き上がる。
きっと、Ａにまた下を潜られたのを悔しがっていると高雅は思った。
高「取りあえず、矛先を俺に向けたことを後悔しろよ」
高雅は双剣を抜き、構えた。
高「ちょっと、お前の後ろも気になるんだ。大人しく退くって言うなら真っ二つで済ませてやる。退かねえのなら木っ端みじんに切り刻んでやる」
ア「どっちみち、倒すってことだよね」
高「その通り。行くぜ、アリア」
ア「いつでもいいよ」
高雅はその場からいなくなり、蜘蛛の目の前にいた。
高「喰らえ！！」
蜘蛛に向かって縦一閃の斬撃を浴びさせようとするが・・・
蜘「ゴシュウウウウウウウウウウ！！」
高「なっ！？」
高雅に向かって糸を吐き散らす。
高雅は斬るのをキャンセルして、アリアはすぐに盾を創造する。
その盾を蹴り飛ばして蜘蛛の顔面に当て、高雅は距離を置いた。

高「サンキュー、アリア」
ア「守りは私の役目だからね」
落ち着いた高雅はさっきのことでアリアに礼を言う。
高「あいつ、反射神経はいいな。蜘蛛に反射神経があるかは置いといて」
ア「無暗(むやみ)に近づくのは危ないよ」
高「ちっと油断しただけだ。だから・・・」
そう言って、高雅は双剣を逆手に持った。
高「数分の間は様子見だ」
蜘蛛がちょうど盾を退けた頃、高雅はまた蜘蛛に接近していた。

一方、Aの方は・・・
A「そ・・・その子を返せ・・・」
ズッタボロにされて倒れていた。
？「ふん、これは人間に扱える代物ではない」
これと言いながら指を指す所には、どこから湧いているのか不明だが円柱の水の中に閉じ込められた少女が溺れていた。
タ「お主は何者だ!?」
？「貴様ごときに言う名ではない」
タ「その者をどうするつもりだ!?」
？「こっちの勝手だ。それ以上答えるつもりはない」
A「ふざけるな!!・・・お前らの勝手でその子を苦しめるな!!」
Aが渾身の力で叫ぶが、敵は何も動じず、冷酷な目でAを見る。
？「力無きものは力の有るものに扱われる。当然のことだ」

すると、敵はそこに落ちていた石ころを拾う。
？「裁かれよ、人間」
その石ころをＡの上に落とす。

グショッ！！

Ａ「ぶばっ！？」
Ａの体は石ころによって穴が開けられた。
タ「主！？」
タイトは契約の力を解除し、人間の姿になってＡを抱える。
だが、Ａは既に息を引き取っていた。
タ「貴様あああああああああああああああああ」
タイトは怒りの頂点に達した。
剣を握り、力を爆発させる。
？「来るがよい。貴様のような人間に縋（すが）る自然の裏切り者も裁いてやろう」
敵は足元の雑草を一本抜き、構えた。

## 緑の復讐編　その5、闇を扱う者と委ねる者

只今、グラウンドは激戦区になっております。
と言っても、たった2つの争いだけだけど。
それでは、我らが主人公の方を覗いてみましょう。

高「よっほっとったっのっちょっわ・・・」
蜘蛛による6本の脚で高雅を串刺しにしようとズガズガ刺しにかかる。
それを高雅はリズミカルに避ける。
高「いい加減に・・・しやがれ!!」
高雅は避けたと同時にからぶった脚に斬撃を喰らわす。
脚は綺麗に裂け、ちょっと短くなる。
蜘「キシャアアアアアアアアア」
蜘蛛は苦痛の奇声をあげる。
いくらデカイとは言え、人間にとっては指を一本斬られるのと同じだ。
痛くない訳がない。
蜘蛛はあまりの痛さに脚を止めてしまう。
その隙に腹下に向かってジャンプする。
高「そらよ!!」

ザシュッ!!

蜘蛛の腹に一本の剣が刺さる。
高「よし、勝ったな」
高雅は剣を刺したまま着地する。
巨大な体にたった一本の剣を刺すだけで、高雅にとって勝利とも言える。

理由は簡単、剣には静寂の力が含まれているからだ。
さっき斬った時にも含まれていたが、それに比べ、刺さっているため次々と静寂の力が注入される。
これで大人しくならない訳がない。
蜘蛛の動きは完全に停止し、ドゥーンと鈍い音をして倒れた。
それを見計らって、高雅は柄に着いてある紐を引っ張り、刺さっていた剣を抜き、手元に戻す。
高「んじゃ、あっち側に行ってみますか」
高雅は双剣を腰に挿し、倒れている蜘蛛を横切って声が聞こえた方へ行こうとするが・・・
ア「コウガ!!、あれ見て!!」
高「あれじゃ分からねえよ。剣なんだから」
ア「少しは察してよ。蜘蛛のお腹の方だよ」
高「ん?」
そう言われた高雅は蜘蛛の腹を見てみる。
それは傷口から血がタラタラと流れているだけだ。
だが、その傷口が不自然だった。
高「傷が・・・開いてゆく?。それに・・・腹が動いてる」
先ほど刺した傷口が徐々に開いてゆき、腹は中から殴られるようにボコボコ飛び出ていた。
遂には傷口以外から穴があき、中からその元凶が出てくる。
高「あれは・・・子供!?」
腹から出て来たのは子供だった。
それも一匹ではない。
次々と穴を開けて出てきたり、大きくなった傷口からドバーと一気に出てきたりしている。
高「おい、蜘蛛って卵産むよな!?。何で腹ん中にいるんだ!?」
ア「き・・・気持ち悪い・・・」
高「食事中の方はすみませんでした」
ア「誰に謝ってるの?」

高「気にするな・・・って今度は何だ!?」
出て来た子供はその親を食らい始めた。
高「一体、この蜘蛛は何なんだ!?。大体、もう蜘蛛かまで疑ってしまうぞ」
ア「分からない。一体・・・ッ!?・・・何!?・・・」
突然、アリアの呼吸か荒くなっていく。
高雅はそれに気づき、様子を聞く。
高「アリア?、どうした?」
ア「わ・・・分からない・・・はぁ・・・はぁ・・・体が・・・熱い・・・」
すると、アリアは勝手に人間の姿に戻り、高雅の前に倒れた。
高「アリア!?。どうした!?」
ア「はぁ・・・はぁ・・・」
アリアは高雅の問いに答えることができず、ただ息をするだけで精一杯の状態だった。
高「おい・・・ッ!?、熱!?。これ５０度はあるぞ!!」
高雅はアリアの額を触ってみたが、異常な熱さによって反射的に手を飛び除けた。
ア「こ・・・が・・・にげ・・・て・・・」
高雅はアリアの途切れた言葉を察し、蜘蛛の方を見る。
すると、親は所々まだ残っているが食い飽きたのか、こっちに向かって来ていた。
高「やべーな・・・」
高雅はアリアを抱え逃げようとしたが、蜘蛛の速さは意外に早かった。
アリアを抱えて逃げるなら必ず追いつかれる。
高「くっそ」
ロ「万事休すだな」
高「・・・・・・はぁ!?」
こんな時でも現れる神出鬼没野郎。

高雅はどっから現れたか分からず、目を丸くして声がした方を見る。
そこには、ログナが何故かバットを持って立っていた。
高「テメー、いつの間に!?。それに、そのバットはどうした!?」
ロ「見て分かれねえのかよ!?。素振りだよ!!。甲子園だよ!!」
高「バットエンドフラグを立てるな。それに、今は甲子園の季節じゃない」
ロ「それより、逃げなくていいのか?」
ログナが指を指して、意識を蜘蛛へ注意させる。
高「俺は逃げねえ。おい、そのバットをよこして、アリアを抱えて逃げろ」
ロ「いいのか~。俺っちがアリアっちをどうしても知らねえぞ~」
高「今のアリアに手を出す奴は愚か者だ。とにかく、バットをよこせ」
ロ「わーったわーった。ほら」
ログナは高雅にバットを渡す。
高雅はもらった瞬間に蜘蛛に向き合う。
高「アリアを任せる」
ロ「ほいほいっと・・・って熱っ!?。何これ!?。ほんとにアリアっち!?」
高「本物だ。いいからできるだけ遠く離れろよ。まあ、限度は５００メートルだけど」
ログナは熱さを堪(こら)え、アリアを抱える。
それを確認した高雅は蜘蛛の群れに突っ込む。
高「虫ども、俺に着いて来い」
高雅は先頭にいた蜘蛛を叩き潰すと、軌道を変え、ログナ達と離れるように誘導させる。
蜘蛛も標的を高雅に決め、思惑通り全部ついて来る。
蜘蛛と高雅のスピードは蜘蛛の方が若干(じゃっかん)上だった。
それでも、追いつくには時間が掛かったため、ログナ達とは結構な距離が開いた。

だが、グラウンドからは出ていない。
もし、校舎内などで戦うとすれば、天井や壁やいろんな所から襲われるため、まず勝ち目が無くなる。
それに比べ、グラウンドは地面だけなので戦いやすい。
途中、高雅はAの方を見たが青い円柱と人が二人立っているのしか見えなかった。
高「さあ、もう鬼ごっこは終わりだ。鬼への下克上の時間だ」
高雅はバットを構え、無数の蜘蛛を迎え撃つ。
落ち着きを知らないように蜘蛛達は次々と高雅に飛びかかる。
高雅はそれを簡単になぎ払ってゆく。
高「はんっ、集団で掛かってもこの程度かよ。歯応えがねえな」
蜘蛛はがむしゃらに飛び掛かるだけでは無理と思ったのか、糸を吐き出してきた。
だが、高雅は横や前、後ろステップで簡単に避ける。
高「どしたどした?。威勢が無くなってるぜ。ヘボが」
蜘蛛は野生の本能で勝てないと感じたのか、勢いが無くなりつつあった。
だが、高雅は待つのを飽きたのか自ら殴りかかって行った。
高「もう終わりか?。だったらこっちから行ってやるぜ。ヒャッハー!!」
すでに高雅はもう高雅ではなくなっていた。
あの頃の・・・戦闘狂に。

もう一つの戦闘はと言うと・・・
タ「せやあああああああああ」
タイトが無我夢中に刀を振り回していた。
だが、確実に敵を押していた。
？「くっ、怒りで我を忘れても、剣の腕は忘れず、と言う訳か！？」
タ「死ねえええええええええええ」
タイトの力強い攻撃と怒りでも損なわない技術が敵を確実に追い詰めていた。
だが、敵も持っていた雑草で剣を流す。
雑草は斬れることなく、武器として使われていた。
？「今だ！！」
敵は僅かな隙を狙って、タイトの心臓目掛けて雑草を投げる。
雑草と言っても、ヒラヒラ飛ばず、まっすぐ針のように跳んでゆく。
タイトは避けようとするが、腕をかすってしまった。
敵はタイトが痛みで一瞬怯んだ隙に、今度は木の枝を取る。
木の枝と言っても、よくグラウンドの隅に落ちている１０センチ程度のものだ。
？「次の攻撃で隙を作り、早めに切り上げる」
敵も次の攻撃で終わらせようとしていた。
だが、そこに乱入者が現れる。
高「よーよー、楽しそうじゃねえか」
高雅が血で染まったバットで肩を軽く叩きながら迫って来ていた。
敵は目を丸くして驚く。
高雅の後ろには、蜘蛛が無残にも全滅していた。
？（あの蜘蛛を全て殺したと言うのか。こいつ、何者だ！？）
高「乱入者の俺、参加するぜ。異論は認めねえぜ！！」
高雅は敵と空いていた距離を瞬時に詰め、バットを横に振る。
敵は冷静に見極め、木の枝で抑える。
木の枝は折れることなくバットを受け止めている。
何ともシュールな光景だ。

？（情報が無知のまま戦うのは危険だな。楽園の者が惜しいが仕方がない）
敵は力を入れずに軽く高雅のバットを押し返す。
高雅はバランスを崩し、尻もちを着く。
次にタイトが斬りにかかったが、敵は木の枝を投げ、タイトの集中を紛らわす。
タイトは一瞬だけ木の枝に集中し、弾き落とす。
そして、再び敵に向き合うとそこには・・・
タ「・・・何!?」
宝石がいくつか転がっていた。
それは使いの命の宝石である。
誰のものかは分からないが、タイトはそれが敵のものではないことが判断できた。
タ「一体・・・何を!?」
タイトは突然の事に驚き、すこし落ち着きを取り戻していた。
一人を除いて。
高「あーあ、逃げちまったか」
高雅が残念そうにバットをブラブラ振る。
高「何かもの足りねえな。おい、タイト」
タ「何だ?」
高「殺し合いをしようぜ」
高雅はそんな言葉を平然と言ってのけた。
タ「な・・・何故だ!?。何故、拙者とお主に戦う理由がある!?」
高「理由なんて端からねえよ。ただ殺し合いをしてえだけだ」
タ「お主・・・まさか、身を闇に委ねたか!?」
高「キャハハハハハハ」
タイトの声は聞こえておらず、高雅はバットを構え、タイトに向かって走り寄って来た。
タイトは無防備は危険な為、取りあえず剣は構える。
高「お前は歯応えあるよなぁ!?。俺を満足させるよなぁ!?」

高雅は敵の強さを聞くことで、殺し合いと言う快楽の味見をする。
タイトは答えを言わない。
いや違う。
タイトは高雅の謎の威圧に怯え、答えることができなかった。
高「おらあああああああああああああ」
タ「はっ！？」
高雅がタイトに向かってジャンプして振りかぶる。
その姿は隙だらけだが、タイトに取っては隙を見つけることができなかった。
しかも、タイトはその攻撃に反応することすらできなかった。
タイトは受ける覚悟を決め、目を閉じてしまった。
だが、いつまで経っても高雅の攻撃はタイトに届かなかった。
タ「・・・！？」
突然、高雅がその場に崩れ落ちる。
すると、誰かが崩れ落ちる高雅を受け止めた。
ロ「ふぅ、やっぱコウガっちには不意打ちパンチが効くなぁー」
それはログナだった。
ログナはいつの間にかタイトと高雅の間に入り、高雅の腹にパンチを喰い込ませていたのだ。
ログナは高雅を肩に抱え、タイトに向き合う。
ロ「大丈夫か、タイトっち？」
タ「ああ、忝い」
ロ「いいってことよ。それより、自分の使いとそこに倒れている女の子を頼めるか？」
タ「問題ない。拙者が二人を連れて行こう」
ロ「じゃあ、そこの木陰に蓮田がいるから、そこに来てくれ」
タ「承知」
タイトはＡと少女の所へ行き、二人を抱え、先に行ったログナの後を追った。

## 緑の復讐編　その6、一時の休み（前書き）

ちょっとした御詫び。

最近、蜘蛛について疑問に思ったことがあったので辞書で調べてみました。
そしたら、蜘蛛の糸は口からは吐かないことが分かりました。
作者はつい、ハウスオブデッド４の２面のボスを想像してしまい、口から吐き出すように書いてしまいました。
この小説ではこれからも、そう書いていきますが、現実では吐かないのでご注意ください。

嘘を書いてしまい、申し訳ありませんでした。

# 緑の復讐編　その6、一時の休み

ある木の下。
この辺りには肉食植物や異常な虫はいなかった。
ロ「えーっと・・・えーっと・・・」
何故ログナがえーっと、と言っているのはこの場が物凄い沈黙に覆われているからです。
何人かは気絶しているし、アリアは今だに苦しんでいるし、誰も会話をしようとしてなかった。
ロ（い・・・今こそ、俺っちの空気ブレイカーを発動するべきだよな!?）
ログナは意を決してこの空気の破壊を試みた。
ロ「いえーい。おめーら、暗い顔なんてするんじゃねえぞ」
タ「お主は少し黙っておれぬか？」
ロ「はい・・・」
空気の破壊は失敗に終わった。
高「・・・ん・・・くう・・・」
高雅が遂に暗闇から解放された。
目を開けた瞬間に木の葉から漏れる日差しを感じ、手で目を隠した。
ロ「コウガっちーーーーーーーーーー」
高「へぶっ!?」
そこに、ログナがダイブした。
さらに、ログナは大泣きし始めた。
もちろん、高雅が起きたからではない。
ロ「コウガっち、俺っち、初めて空気を壊せなかったーーーーーー」
高「はぁ!?、んなこと知るか!!。さっさと退け!!。鼻水垂らすな!!」
高雅は訳の分からない事で一気に覚醒した。

だが、一つ不思議な感覚に襲われた。
高「なあ、何で俺ってここで寝てるんだ？」
高雅はとにかく、退いているログナに聞いてみる。
ロ「あー、俺っちが気絶させといた」
高「何で！？。大体、お前逃げなかったのかよ！？。せっかく距離をあけてやったのによ」
ロ「いや、逃げた。アリアっちを蓮田に任せて加勢しようとしたらコウガっちとタイトっちが何か戦っててさ。コウガっちがあからさまに、おかしかったからちょっと気絶させたって訳」
高「俺がタイトと戦っていた！？。そんな記憶なんて無いぞ」
タ「当然だ」
いきなり、タイトが割って入って来た。
その声は少し怒りが入り混じっていた。
高「どった？。何でそんなにキレてんだ？」
タ「お主は拙者に恥をかかせてもらった」
高「いや、主語を述べろよ。訳分かんねえって」
タ「拙者の目を閉じさせるとは・・・拙者はまだまだ修行がたらりぬ」
高「あれ、何か一人の世界に入ってないか？」
？「・・・あのー・・・」
高雅はふと聞こえた弱弱しい声の方を向いてみる。
そこには、顔見知りの子がいた。
高「お前・・・フィーラ！？。何でここに！？」
フ「あう～、やっと気付いてもらえたです」
多分、読者の皆は気付いていたと思うが一応説明をしておきます。
さっき敵に捕まっていたのはフィーラでした。
説明終了（Σ短ッ！！）
フ「ボクがここにいるのは、エガルから逃げていたら、ここに辿り着いたからです」
高「エガル？、誰だそれ？」

フ「エガルはエガルです」
高「だーかーらーなー・・・」
高雅は何と言えばいいか分からず、頭を掻きながら悩んでいた。
だが、その思考はすぐに変えられた。
フ「それよりも、自分の使いを心配したらどうです」
高「あっ、そうだった」
フ「自分の使いの状況を忘れるなんて、どうかしているのです」
高「く・・・反論できねえ」
高雅はフィーラの言ったことを認め、すぐにアリアの様子を窺う。
ア「はぁ・・・はぁ・・・」
高「おい、大丈夫か!?」
蓮「ずっとこの状態だよ。アリアお姉ちゃん、死んじゃうのかな?」
高「ふざけんな!!。ぜってーにそれは防いでやる!!」
フ「大丈夫です。天蜘蛛の毒はどの種類も死に至るものなんて無いです」
高「てんくも?。何だそれ?」
フ「さっき、君が倒した蜘蛛のことです。あれは元々、天界の生物です」
高「何で、天界の生物がここにいるんだよ?」
フ「誰かが現世に連れて来た、それが一番正しいです」
高「一体、誰が何のために・・・って、今はそれどころじゃねえ。なぁ、フィーラ」
フ「な・・何です?」
フィーラは何故か動揺した。
高雅はそれを理解することはできず、頭の疑問に残るが、今はそんなことよりも優先べきことがあった。
高「どうしたら、その毒を治せる?」
フ「それは・・・消失か破壊の力で消すしかないです」
高「だったら、ちょっとだけ契約の力を発動して破壊の力を使えば・・・」

フ「残念ながら無理です。あのタイプの毒は熱毒で力を封印し、静寂で動きを封じるものです」
高「マジかよ!?。くそっ、どうすればいいんだよ!?」
A「笑えばいいと思うよ」
突然起きたAがこの場に合わないセリフを言ってしまった。
全員がAの方を見て、空気が凍る。
そして、高雅の堪忍袋の緒が切れた。

ドガッ・・・バキッ・・・ゴキッ・・・シン○制裁中・・・ドゴッ・・・メキッ・・・バゴッ

高「なあ、ふと思ったんだけどよ」
高雅が制裁を終了し、手を叩(はた)きながらフィーラに問う。
フ「何です?」
高「アリアはどこも攻撃を受けてないのに、どうして毒になったんだ?」
フ「それは僕も思ったのですが・・・多分、血のはずだと思うのです」
高「だとしたら。どうして俺は毒にならない?。帰り血は結構浴びているぞ」
高雅自身にも直接攻撃したアリアに比べれば劣るが、蜘蛛の血が所々に着いていた。
フ「だから分からないのです。君は規格外だから特別なだけかもです」
高「いや、それは何だか・・・何と言うか・・・」
蓮「ろ・・・ログナ!?」
突然、蓮田が慌てた様子でログナへ近づく。
蓮「ログナ、どうしたの!?」
ロ「な・・・何か・・・体がアチくてさ・・・力も入んねえ・・・」
突然、アリアと同じようにログナも苦しみ始める。

ログナの様子を窺い、高雅はある結論を出す。
高「・・・フィーラ、きっと合ってるぞ」
フ「何がです？」
高「血に触れるだけで毒るってこと」
ログナにも蜘蛛の血が付いていた。
さっき、高雅に抱きついた時に着いたものだ。
そして、少し経ってからの発症。
アリアも血が着いてから少し経って発症した。
完全に筋が通る。
一人を除いて。
フ「じゃあ、どうして君は毒が発症しないのです？」
高「それが分かれば苦労しない。取りあえず、他に解毒の方法はないのかよ？」
フ「みゅ～・・・」
フィーラは頭の中を探し回るため目を閉じ、少しの間沈黙の時が生まれた。
だが、沈黙の時は長くは持たなかった。
フ「ボクの知識ではないのです・・・」
フィーラは責任を感じているのか申し訳なさそうに言う。
高「そうか・・・だとしたら、どうすればいいんだ・・・」
高雅は完全に途方にくれていた。
フィーラは高雅の姿を見て、何かいい考えがないか再び考え始める。
すると、あるアイデアが一つ生まれた。
フ「もしかすると・・・気分ではどうにかなると思うのです」
高「何かいい方法が思いついたのか！？」
フィーラは高雅の問いに頷き、アリアの近くへ行く。
フィーラは右手にピンク色の光を作りだすと、それをアリアへ落とした。
高「何をしたんだ？」
フ「夢幻の力を使ったのです。自分は平常である夢幻です」

フィーラの力の効果はすぐに変化が訪れた。
ア「はぁ・・・はぁ・・・あれ、体が・・・熱くない？」
高「おおー」
高雅は、つい歓喜の声が上がった。
周りも声までは出してないが驚いている。
そんな光景を見たフィーラが慌てて言う。
フ「で・・でも、本当は体が熱いし、力も使えないし、それからえっと・・えっと・・」
フィーラが一生懸命に謙譲する。
だが、フィーラの懸命は高雅によって呆気なく撃破される。
高「だけど、今の状況じゃいい助け船だ。ありがとな」
高雅がお詫びを兼ねてフィーラの頭を撫でる。
フィーラはブツブツと言いながら恥ずかしそうに俯いた。
高「あっ、そうだ。なあ、タイト。俺ってどんぐらい気絶してたんだ？」
タ「約1時間だ。それより・・・」
高「ん・・・おわ!?」
突然、タイトが刃先を高雅に向けてきた。
タ「拙者がお主を鍛えてやる」
高「鍛えるって・・・何を？」
タ「決まっておる。闇の扱い方だ!!」
高「や・・闇!?」
高雅が目を丸くして驚くが、タイトは無視して説明に入る。
タ「誰しも闇を持っておる。その量はまた別だが、お主は底なしの闇を持っておる。それに身を委ねれば、いずれ自分を失うだろう。だが、闇をも自分で扱えるようになれば今まで以上に戦闘が優勢になる。特に、お主のような異常な量の闇の持ち主ならば」
高「ふ～ん。で、修行方法は？」
高雅はやる気が出たのか、挑発的にタイトに聞いた。
タ「簡単だ。この校舎内におる、あの植物を倒せばよい」

高「だけどよ、アリアは力が使えないぞ」
タ「安心せよ。使うのは拙者の刀だ」
高「あっそう。じゃあ、早速言って来るかねぇ」
高雅はタイトの刀を受け取り、植物の所へ向かおうとする。
だが、アリアがそれを止めようとした。
ア「待って、コウガ！！」
高「普通に喋るようになったんだ。それで何だ、心配か？。心配しなくても、ちゃんと闇を俺のものにしてみせるよ」
ア「そ・・そうじゃなくて、もっと重要な・・・」
高雅はアリアの話を聞かずに、さっさと肉食植物の所へ行った。
タ「拙者も奴に着いて行く」
タイトもこの場を離れ、二人は伐採（しゅばつ）へ行った。

# 緑の復讐編　その7、反撃の予兆

伐採開始から３０分。
高雅は時々、闇に呑まれながらも闇を着実に自分のものにしていた。
途中、アリアが意思会話をして何かを伝えようとしたが、高雅は聞く耳を持たず、さらに気が散るため自ら会話を断ちきっている。
高「おらおら、どしたどした？」
タ「闇に呑まれておるぞ！！」
高「あっ！！」
高雅はタイトの言葉で気づき、一先ず植物から距離を置き、呼吸を整えて自分を落ち着かせる。
高「ふぅー、難しいな」
タ「常に敵と己を意識するのだ」
高「分かった。じゃあ、また行ってくる」
高雅は落ち着きを取り戻し、再び植物の所へ向かった。
その光景をみてタイトは内心驚いていた。
タ（本人は苦戦しているようだが、成長が早いな。あの闇の量だと１日で１０秒扱えるようになれば十分だが、既に2分以上は扱える状態だ。あ奴は天性の才能を持っておるな）
そうこう思っている内に高雅は既に半分も刈り終わっていた。
高「はあぁ！！」
高雅は隙が無く、かつ攻撃的に力強く植物を薙ぎッてゆく。
高「そらそら！！。俺はまだまだへばってねえぞ！！」
こんな言葉を発していても、まだ自分の意識を保持っている。
タイトはそれを見切ってまだ何も言わない。
タ「後ろから来ておるぞ！！」
高「おっと・・・あぶねえ」
タ「意識が己に集中し過ぎておる。もっと周りに注意を払え」
タイトはただ高雅の欠点を探し、それを注意するだけだった。

高雅はそれについて少し不満に思っているが、何も文句を言わず、ただ従っている。
第一、逆らう理由などないと高雅は理解している。
高「おら！！、裂空〇！！」
余裕ができたのか、適当にゲームの技を真似している。
ちなみに、今の技は空中で縦に回転しながら敵を斬る技です。
高「そのまま魔人〇！！」
次に、遠くの植物へ衝撃波を出す。
えっ！？、何で力もないのに衝撃波が出せるって？。
そりゃー、この小説が何でもありだからですよｗｗ。
高「よっしゃーーー、終わったーーーーー」
高雅は興奮しながらも気を少し落ち着けるため、取りあえず叫んだ。
闇を扱うと意識が刈り取られてしまうので、常に意識を保持っておかなければならない。
それに逆らったとしても、たまに暴言が出たり興奮したりするのは抑えきれないらしい。
タ「まあ、短い時間に関わらずここまで成長するのは良きことだ」
高「サンキュー。と言っても、お前はただ喋っただけだろ」
タ「拙者が常に意識を注意させなければ、お主は今頃、何をしていた？」
高「そうでした。わざわざ、ありがとうございました」
タ「よろしい」
高雅は礼をすると同時に刀を差し出し、タイトへ刀を返した。
タイトは刀を受け取り、腰の鞘（さや）に挿す。
高「さーって、そろそろアリアの話を聞いてやるか」
高雅は断ち切っていたアリアとの意思会話を接続した。
高（もしもーし、聞こえますかー？）
ア（コウガ！？、酷いよ。勝手に会話を断ちきるなんて）
高（お前の声が修行の邪魔になったんだから仕方ないだろ。それで、重要なことって何だ？）

ア（それよ、それ！！。コウガ、私の力が使えなくなっているってどういうことか分かる？）
高（何だよ、今さらそんな質問かよ。別に、毒のせいで使えなくなっているだけだろ）
ア（あっ、質問が悪かった。じゃあ、私の力が無くなったらどうなる？）
高（どうなるって・・・あっ！！）
そう聞かれた高雅に、あることが思い当った。
高雅はそれが本当か聞いてみる。
高（まさか・・・家の結界とレオの空間が！？）
ア（そう。きっと消えてる・・・）
高（あほか！！。何でそんな大切なことをさっさと言わねえんだよ！？）
ア（何でも言おうとしたよ！！。ただ、コウガが聞かなかっただけでしょ！？）
高雅はもっと反論して責任をアリアに押しつけようとしたが、今はそれどころじゃない事に気づき、話を流す。
高（とにかく、今からそっちに戻る。それからすぐに家に行くぞ）
高雅は意思会話を断ち、タイトを無視してすぐに戻った。
タイトは慌てた様子の高雅を謎に思いながらも、すぐに後を追った。

高雅達は皆がいる木陰へ戻った。

だが、戻った時、何故か一人だけ苦しんでいた。
それを疑問に持って、高雅はアリアに聞いてみた。
高「なあ、何でAは苦しんでいるんだ」
ア「あー、さっき起きて、フィーラちゃんを見たら襲いかかろうとして、それで返り討ちにあった訳」
高「なーるーほー。つまり、地獄の夢幻ツアーに言っている訳か」
ア「そういうこと」
A「やめろ!!、爪を剥がさないでくれ・・・ぎゃああああああああああ・・・うわああ、腕が千切れる・・・ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ」
一体どんな幻覚を見ているのかは想像していてください。
そんな状態のAを横目に見ながらも、すぐに本題を切り出す。
高「取りあえず、さっさと俺の家に戻ろう」
ア「でも、力は使えないよ。どうやって戻るの?」
高「子供の移動時の友、自転車が駐輪場にある。それが一番早く行く方法だ」
ア「自転車は一人乗りだよね?。一人で行くつもり?」
高「まさか。お前も連れてく。一応、俺の使いだからな」
ア「へっ!?・・・ちょ!?」
高雅はアリアが慌てるのをお構いなしに、抱え始めた。
もちろん、お姫様抱っこである。
アリアは恥ずかしがり、顔を真っ赤にして黙り込む。
だが、高雅は少し苦しそうな顔をする。
高「・・アッチ。こりゃ、火傷はするな」
それでも、高雅はアリアを落とさないようにしっかり抱え直す。
高「タイト、蓮田とログナとフィーラを頼む」
タ「承知」
フ「待つのです」
フィーラが今にも駆けて行きそうな高雅を呼び止めた。
高「何だよ?。早くしろ」

フ「ボクも行くのです」
高「おいおい、チャリで三人乗りはきついぞ」
フ「大丈夫です。ボクにはオプションで空を飛ぶ能力が付いているのです」
高「どんだけ便利なオプションだよ!?」
フ「気にしたら負けです」
高「最近、この小説でそれがモットーになってきたな」
ア「取りあえず、早く行こうよ」
高「ああ、そうだな。それよりフィーラ、あいつの夢幻を解いてやれ」
高雅は首を軽く振って、それがAの事だと分からせた。
フ「みゅー、仕様がないです」
フィーラは惜しみながらもAの夢幻を解いてやった。
高「後はいいな?。よし、少し遅れたが駐輪場へ行くぞ」
高雅はやり残すことはないと判断し、フィーラと共に駐輪場へ向かった。

駐輪場へ着くと、高雅はフィーラにアリアを支えさせて、慣れた手付きでロックを素早く解除する。
準備が終わった高雅はアリアを抱えてサドルに乗せる。
そして、自分もハンドルを握って自転車に跨る。
高「アリア、飛ばすからちゃんと掴まれよ」
ア「う・・・うん」
アリアは戸惑いながらも、高雅の背中の服を握る。
高「おい、飛ばすんだからそれじゃ落ちるぞ。ただでさえ体が言うことを聞かねえ状態なのによ」

ア「じゃ・・・じゃあ・・・」
アリアは躊躇しながらも高雅の体に手を回した。
アリアの上半身の殆どは高雅に密着していたが、高雅はもうアリアの熱に慣れたのか何とも思ってない。
今のアリアは別の意味で体が熱くなっていた。
高「そんじゃ、行くぞ。フィーラ、ちゃんとついて来れるか？」
フ「ボクの飛行速度は最大で６０キロです。自転車ぐらい余裕です」
高「まあ、普通の人間が漕ぐチャリならな」
フ「どういうことです？」
高「こういうことだ！！」
高雅はペダルに足を置き、足を回し始めた。

ギュルルルルル・・・・

ア「へっ！？・・・きゃあああああああああああああ」
足の回転、タイヤと地面との摩擦、ともに半端なく、時速１００キロは優に超えていた。
アリアは少し予想していたがその予想を遥かに上回り、危険を察して瞬時に高雅にしがみ付いた。
そして、その場所には風が通った後のようにフィーラの髪が軽く靡（なび）いていた。
フ「ま・・待ってくださいですーーー」
フィーラも慌てて後を追おうとしたが追いつく訳がなかった。

爽快にかっ飛ばそうと思っていた高雅だったが、それは空想に終わった。
校舎を思いっきり出たのは良かったが、少し進んだ先で町が虫に侵略されていた。
高「何なんだよ、ここ・・・」
高雅は自転車に跨っている状態で立ち、目の前の場景を見た。
それは、現実を受け入れることが難しく、もはや現実逃避をしても恥ずかしくない。
ビルには、まだ残暑で生き残ったのか無数のアブラ蝉がミンミン鳴いており、異常成長した植物がビルを圧し折ったりしていた。
他にも切り上げると日が暮れてしまう程、町は悲惨な場景だった。
そして、地面はもっと酷いありさまだった。
フ「あみゅみゅみゅ～、気分が悪くなるです・・・うう」
遅れて来たフィーラが手で口を隠しながら目線から外す。
地面には襲われたであろう人間が血を撒き散らしながら死んでいた。
中には腕や首、足がもげていた。
ア「ここまで・・・一体、誰が何のために!?」
高「また、俺ら関係だろうな」
高雅は自分の存在の所為だと思い、責任を感じ始める。
フィーラもその言葉に反応し、気分の悪さよりも責任が込み上げてくる。
フ「ボクの所為かもしれないです。ボクを捕まえる為に町を破壊しつくし、探し出そうとしているかもしれないです」
ア「ねえ、やめようよ。分からなくて責任を感じても意味が無いよ」
アリアは二人が思い込みの責任に呑まれるのを防ぐため、話を止めようとした。
高雅とフィーラも少し思いこみ過ぎたとバカらしくなったのか、すぐに開き直った。
高「そうだな。少し考え過ぎたかな?」

フ「ボクも不確かなことを考えていたのです」
ア「それじゃ、この虫を切り抜けて、早く家に向かおう」
高「だな。っしゃー、一気に行くぞ!!」
高雅は再びペダルを踏む力を入れ始めた。
だが、その力はある声によって消された。
？「虫ども!!、命令変更だ!!」
その瞬間、虫達の行動が止まり、一斉にある一点へ振り返る。
それに釣られて、高雅達も声がする方へ向いた。
向いた先のビルの屋上に髪色が灰色の使いがいた。
フ「あいつは・・・エガルです!!」
フィーラが指を指しながら高雅達に教える。
すると、エガルは新たな命令を下した。
エ「あの三人を殺せ。ただし、楽園の者の心臓は喰うな」
それを聞いた虫達は瞬時に高雅達を狙いに定め、一斉に襲って来た。
高「フィーラ、掴まれ!!」
フ「はいです・・・あう!?」
高雅はフィーラに手を伸ばし、フィーラもそれに答え、手を取る。
すると、高雅はフィーラを片手で引っ張り上げて抱え、自転車を漕ぎ始めた。
目の前の虫の軍隊の隙間を綺麗に抜けて行く。
高「よし、このままなら逃げきれる!!」
高雅がそう思い込んだのは最大の間違いだった。
高「!?・・・やっべ!!」
突然、目の前の道路が盛り上がり、高さ1メートルの段差が出来上がった。
高雅はすぐにブレーキレバーを引くが、片手だけの為、トップスピードの自転車は止まることができなかった。
ガシャンッ!!

高「うわあああああああああああ」
ア「きゃあああああああああああ」
フ「あうううううううううう」
自転車は隆起した地面にぶつかり、三人は自転車からそれぞれ別の場所に投げ出された。
数メートル飛ばされて、三人は地面に落ちた。
高「いってって・・・！？、何だあれは！？」
高雅は隆起した地面の方を見た。
そこには、巨大な植物がうねうねと動いており、茎から枝分かれしたツタが地面に沿って走っていた。
そして、ツタは障害物にぶつかると、その障害物に絡み付き、圧迫して真っ二つにしていた。
高雅の方にも一本のツタが向かっていた。
高「捕まってたまるかよ！！」
高雅は地面に落ちた時に怪我はなかった為、難無く避けれた。
避けた高雅はすぐに周りを確認する。
高「あいつらは大丈夫か！？」
高雅はアリアとフィーラの無事を確認しようとしていた。
すると、近くに倒れているアリアを見つけた。
高雅はツタを避けながらすぐに駆け寄る。
高「アリア！！、大丈夫か！？」
高雅はアリアの背中に手を回し、上半身だけ起こしてあげた。
もはや、熱さなど気にしていなかった。
ア「う・・・うん、軽く擦っただけ」
アリアも自分の状態を伝え、高雅を安心させる。
高「後はフィーラか・・・」
高雅は再び周りを見渡す。
だが、フィーラを見つけるよりも先にツタが迫って来ていた為、アリアを抱えて避ける。
すると、後ろにあった車がツタに絡まれ、スクラップ音を出しなが

ら車は真っ二つにされた。
その光景は高雅を急かした。
高雅はフィーラがツタに捕まっていないことを祈り、あたりを探す。
高「ん・・・あれってまさか・・・」
高雅は少し離れた先にこちらに向かってくる影を見つけた。
それは、長いパイプのようなものがニョロニョロと動いていた。
その先には何か咥えているようにも見えた。
高「あれは・・・蛇!?」
蛇と言っても、やっぱり普通ではない。
全長は軽く３０メートルは超えている恐ろしいものだ。
ア「コウガ!!、あの蛇、フィーラちゃんを!!」
高「うわっ、最悪だ」
蛇はフィーラを咥えていた。
フ「あ・・・う・・・」
フィーラは意識があるものの、ぐったりと衰弱し、血が指先や足の先からポタポタと落ちて、顔色が青褪めていた。
すると、アリアの体に異変が走る。
ア「う・・・また・・体が熱く・・・」
高「なっ!?」
高雅は驚いたがすぐに理解した。
あの蛇がフィーラを毒に侵し、力を封印しているのだと。
ア「はっ!?・・・コウガ・・・後ろ」
高「!?・・・おわっ!?」
ア「きゃあ!?」
高雅はアリアの声に反応して振り向いたが、手遅れだった。
高雅とアリアはツタに巻きつかれてしまった。
エ「どうやら、終わったようだな」
エガルが勝ち誇った顔をして近づいてきた。
高雅はそれを睨むことしかできなかった。
エ「さらばだ、虹の者よ」

別れの言葉を告げたエガルは指パッチンをすると、高雅とアリアに巻きついていたツタの圧迫が強くなってきた。
ア「ううううう・・・」
高「ぐぐぐぐぐ・・・うあああああああああ」
高雅は力を入れるがツタの圧迫を押し返すことができない。
徐々に圧迫感が強くなり、痛みが比例するように増加する。
高「ちくしょー、死んでたまるかあああああああああ」
高雅は最後の最後まで力を振り絞っていた。
エ「ふん、無駄なことを」
エガルは見苦しいのか高雅とアリアから目を放した。
その時だった。

ブチッ!!

高雅達の方から聞こえた音は人を千切るには、あまりにも情けないものだった。
エガルはそれを不審に思い、振り返ると・・・
エ「な・・・何!?」
ツタから解放された高雅・アリアと一匹の王獣がいた。

高「お前・・・まさか・・・」
高雅は目の前の獣に話しかけた。
動物に話しかけるとはバカなことだが高雅はあえて話しかけた。
それは、一つ思い当ることがあったからだ。
レ「1億年以来だ、コウガ殿。」
高「やっぱ、レオか!!」
それは高雅の予想通りレオだった。
レオは体長5メートル程で、人が余裕で乗れそうなぐらいまで大きくなっていた。
すると、レオは高雅に擦りよるように顔を近づけた。
高雅はその行動に驚きながらも頭を撫でてやった。
そして、撫でながら矛盾点を聞く。
高「だけど、1億年ぶりの訳がねえだろ。まだ、3千6百万年ぶりだろ?」
そう、レオがあの空間に入ってからまだ2時間しか経っていないのだ。
レ「いや、しかと1億年後だ。・・・そうか、コウガ殿は知らなかったな」
高「?」
レオは何か忘れていたのを思い出したように納得し、高雅は全く持って理解できなかった。
レ「そんなことより、アリア殿の様子が優れないようだが」
高「あっ!!」
レオに言われて、高雅はすぐにアリアの方へ向く。
アリアは地面に横たわり、苦しそうに呼吸をしていた。
高「アリア、しっかりしろ!?」
ア「う・・・うん・・・はぁ・・・」

レ「アリア殿に不純な力が混じっておる。それが原因か？」
高「不純な力？・・・あっ、毒の事か。うん、多分そう」
レ「コウガ殿、アリア殿を少し起こさせてはくれぬか？」
高「わーったけど、どうするんだ？」
高雅は理由を問いながらもアリアの上半身を起こしてあげた。
それを感じたアリアも高雅に掴まりながら任意に体を起こそうとした。
レ「アリア殿、痛みを感じるが辛抱してくれぬか？」
ア「・・・はぁ・・・う・・・うん・・・」
アリアはもはや返事をするのでさえ苦しそうにしていた。
レオはアリアの許可をもらったことを確認し、牙を向ける。
高「おい、まさか・・・」
そのまさかだった。

ガブッ！！

ア「う・・・」
レオがアリアの肩辺りに噛み付き、牙が一本食い込んだ。
アリアは高雅を掴んでいた手を強く握り、痛みに耐える。
血が重力に従い、地面へ滴(したた)り落ちる。
すると、みるみるレオの毛色が変色していった。
高「まさか・・・力を吸収してるのか？」
高雅は根拠などないが、そう結論するのが一番の得策だと思った。
レ「・・・よし、完了だ」
レオは牙を外し、傷周りを一舐めして血を拭きとった。
ア「・・・あれ、体が熱くない？」
変化はすぐに訪れた。
アリアはさっきまでの状態とは打って変わり、苦しみを見せる表情は消えていた。
高「おおー。レオ、何をしたんだ？」

レ「さっきコウガ殿が言った通り、アリア殿の中にあった不純な力を吸収したまでだ」
高「1億年経ったら、そんなことまでできるようになるんだ。すげーな」
レ「今なら、コウガ殿を超越しておるだろう」
高「へ、調子に乗るなよ」
エ「そろそろいいか？」
エガルが痺れを切らせたのか、空気にされて怒りが湧いて来たのか不明だが声に覇気がこもっていた。
高「おっと、悪いな。今からお前を倒してやるよ。アリア、準備はいいか？」
ア「うん、もう再生の力で傷は治したから大丈夫」
そう言って、アリアは双剣になり、高雅の両手に納まった。
高「レオ、お前はあの使いを引きよせといてくれ。俺はフィーラを救出する」
レ「あの蛇に捕まっている者の事か。了解だ」
レオは支持を聞いた途端にエガルに向かって走りだした。
エ「天獣が相手か。面白い」
エガルはその場で飛躍し、ビルの屋上へ行く。
レオもビルの壁を伝って駆け上り、すぐに間を詰める。
だが、エガルは戦おうとせず、ひたすら逃げていた。
レオはエガルを追い、次第に高雅達からは見えなくなっていった。
高「レオは大丈夫だろう。それより・・・」
高雅はレオを見送った後、大蛇を睨みつけた。
そして、一歩一歩大蛇に近づく。
周りの虫達がまるで大蛇に加勢するかのように、大蛇の周りに集まりだした。
フ「あ・・・あ・・う・・・」
フィーラが弱り切った体を使って高雅に手を伸ばす。
それは、助けを求めているのか、または自分に構わず逃げて、と伝

えているのか分からない程弱り切っていた。
だが、高雅に取ってその行動の意味は一つしか解釈できなかった。
高「わーったわーった。助けてやるから安心しろ」
その言葉を聞いた瞬間、虫達は人間の言葉が分かるのか、一斉に高雅に向かって襲い掛かり始めた。
その種類は蝿(はえ)、百足(むかで)、蜂(はち)、蝉(せみ)、飛蝗(ばった)など、季節を無視したものも中にはあった。
そして、それら全部がでかかった。
大きさは前に倒した巨大蜘蛛に比べればかなり劣るが、人間を喰えるだけの口の大きさはあった。
高「一匹残らず来いよ。まとめて斬ってやるから」
そう言った瞬間に高雅の姿が残像と化した。
虫の頭ではそれが残像とは見破れず、構わず突っ込む。
すると突然、残像が膨らみだして・・・

ドオーーーン!!

巨大な爆発を巻き起こした。
突っ込んだ虫の半分は巻き込まれ、灰と化した。
高「ほー、面白いな。活性と破壊の力を融合は色々応用が効きそうだな」
高雅はビルの屋上でさっきの融合力の今後の使い道を考えていた。
先ほどの力は活性と破壊を融合して生まれた、爆破の力だ。
効力は読んで字のごとく、爆破させる力だ。
ア「コウガ!!、後ろ!!」
高「ん・・・うお!?」
後ろを振り向けば巨大な蟷螂(かまきり)が持ち前の鎌を振り上げていた。
高雅はすぐに屋上から飛び降りた。
振りかぶった鎌はビルの角に刺さり、蟷螂は追うことができなかった。

だが着地地点には既に他の虫が待ち伏せしていた。
高「誰がそこに着地するなんて言ったかよ！！」
高雅は向かいのビルに片方の剣を投げた。
剣はビルに刺さり、その瞬間に紐の伸縮を止めた。
すると、高雅は弧を描くようにビルに向かい、ガラスを突き破って中に入った。
ビルに入るとは予測はできなかったのか、ビルの中には虫は一匹もいなかった。
高「よし、暇ができたな。アリア、真の契約をするぞ」
ア「分かった」
アリアは人間の姿に戻り、高雅との契約を交わす。
再び剣に戻ったと同時に、窓ガラス越しに蜻蛉（とんぼ）が待ち構えていた。
高「やっぱ、蜻蛉はこれだな」
高雅は双剣を片手で持ち、開いている手で蜻蛉に人差し指を向けた。
高「それじゃ、夢幻の力を使って・・・」
高雅は蜻蛉に自分の指しか見えない夢幻を見せ、人差し指を回し始めた。
すると、蜻蛉は目を回して落ちてゆき、下にいた虫達を巻き添えにした。
高雅は窓から外へ出て、創造の足場で空中に立つ。
高「限（きり）がねえな。早くあの蛇を倒してフィーラを助けなきゃならねえのに」
ア「コウガ、あれ見て！！」
高「何度言えば分かる。剣だとあれじゃ分からねえって」
ア「後ろ！！。あの蛇が逃げてる！！」
高「何！？」
高雅が振り向くと大蛇がフィーラを咥えたまま逃げていた。
そして、虫がそれを追うのを阻止するかのように高雅に群れてゆく。
高「一発、デカイので虫達（こいつら）を終わらせる」
高雅は空高く跳躍すると、飛行可能の虫は追い、飛行不可能の虫は

高雅の真下に集まる。
ある程度空に近づいた所で、高雅は自分の真下の点と大蛇との距離を確認する。
高「このぐらいでいいだろう」
そう呟いた瞬間に、高雅の足元に魔法陣が出来上がった。
そして、ある呪文を唱える。
高「天光満つる所我あり、黄泉の門開く所汝あり」
すると、高雅が創った魔法陣の下に雷雲が出来上がる。
そして、魔法陣の中心に強大な力が生まれる。
高「アディオス。お前達に付き合うのはこれまでだ」
強大な力は電撃を帯び始め、今にも地上に落ちそうだった。
その許可を高雅は与えた。
高「イン○ィグ○イション！！」
青い電気を帯びた雷は轟音を立てながら真下へ落下した。
飛行中の虫も巻き込まれ、地上にいた虫は言うまでもない。
地上は半径５００メートルのクレーターがあり、威力を物語っていた。
虫は一匹残らず全滅した。
ア「すごいね。ちゃんと蛇には届いてないし、よくこんな技が思い出すね。後、名前も」
高「まあ、技も名前もゲームだし。イメージが楽だからな。後は創ればいいだけだし」
高雅は地上に降りる。
しかし、先ほどいた空中の下ではない。
空間の力を使い、大蛇の前にだ。
大蛇は突然、高雅が現れたことに驚き、逃走を中止する。
高「さあ、これで仲間はいなくなったぜ。どうするよ、蛇さん？」
大蛇は高雅の挑発じみた口調に乗ったのか、自分の尾を使って叩き潰そうとしてきた。
高雅は避けようとはしなかった。

尾が自分の攻撃範囲に入った瞬間・・・

ザシュッ！！

長い尾を切断した。

蛇「キシャアアアアアアアアアア」

蛇は悲痛の叫びを上げ、フィーラを忘れて放り捨ててしまう。

高雅は双剣を腰に挿すと、フィーラが飛んだ方に空間を開け、自分の手元にフィーラを納めた。

高「ちょっと待ってろな」

フィーラにそう言うと、一旦地面にフィーラを置き、再び双剣を握る。

フィーラの表情はさっきまでに比べ、少し安心しきっていた。

そして、高雅は蛇に向き合う。

蛇はまだ我を忘れ、痛みにもがき苦しんでいた。

高「まあ、あれだけ苦しむのも当然だ。斬る時に活性の力で血の流れを早くしたからな。血が無くなる感覚に混乱してるんだろうな」

ア「ちょっと、可哀そうになってくるね」

高「小さな奴を苦しめた罰だ。後、ドタバタうるさいから、もう仕留める」

すると、高雅は目を瞑り、剣先を大蛇に向けてあるイメージをする。

段々と剣先に紫と青のグラデーションを帯びた光が出来上がる。

高「よし、発射！！」

その光を大蛇に向けて放つ。

光が直撃した瞬間に大蛇の動きが止まった。

ア「コウガ、あの融合力は何？」

高「あれは空間と静寂を融合して作った時抑（じよく）の力だ。まあ、止まってるように見えるけど、実際は超スローモーションで動いてるんだ」

ア「へー、凄いね」

高「凄いって、お前も本を見ただろうが」

ア「コウガの読むスピードが早すぎて1個しか覚えてないよ!!」
高「そういや、そんなこと言ってたな。それより、あののろま物を斬るぞ」
高雅は速度の力を発動し、僅か１０秒で大蛇を１００等分した。
大蛇の全てが鈍くなっているため、血が噴き出すのも遅く、帰り血を浴びることなく倒した。
高「いっちょ上がりだな」
ア「まだ早いよ。早くフィーラちゃんの怪我を治さないと」
高「そんぐらい、わーってる」
高雅はフィーラの下に駆け寄る。
フィーラの体は牙によって風穴が一つできていた。
高「それじゃ、傷と毒・・・いや、不純な力を消すか」
高雅は剣先をフィーラに向け、傷の再生と毒の破壊をする。
時間は掛からず、僅か４秒で完治する。
フ「ありがとうです」
高「どういたしまして。取りあえず、フィーラも大丈夫だし、レオの加勢に行くか」
ア「そうだね。レオ君が敵を引きつけてるから上手く戦えたしね」
高「頭の悪い奴を倒すのは楽だけど、あいつは何か頭がよさそうな雰囲気があったからな」
フ「みゅ～、エガルは天界で5本の指に入るほどの天才です」
高「そこまで天才だったとは。こりゃ、レオでも苦戦してたりして」
ア「大丈夫だよ。今のレオ君は強いんだし」
高「そうやって油断してたら、いずれ足を払われるぞ。とにかく、レオの所へ行くか」
ア「フィーラちゃんはどうするの？」
フ「ボクも行くです。後・・・ちょっとお願いがあるです」
フィーラが急に改まって高雅とアリアに聞く。
高「何だ？」
フ「実は・・・その・・・ボクのガーディアンになってほしいので

す」
高「アリア、説明よろしく」
ア「えーっと、楽園には力の源・・・つまり、フィーラちゃんみたいな人?がいる訳。それで、悪用されないように天国から超優秀な使いがそれぞれの力の守護者・・・もとい、ガーディアンが存在する訳」
高「へー、理解完了」
フ「それで・・・答えはどうです?」
高「そんなことをいきなり言われてもなー」
高雅は頭を掻きながら悩み始める。
だが、フィーラが急かすように言う。
フ「悩む必要なんてないです。ボクのガーディアンになればボクを好きなだけ使えるのです。夢幻で誰にも負けなくなるです」
高「・・・やだ」
フ「え!?・・・」
フィーラは裏切られたかのように目を丸くした。
高「守るべき者を利用するなんてふざけてやがる。そんなガーディアンなら絶対やだ」
フ「で・・・でも、力が手に入r「力、力って、力を何だと思ってんだ」あう・・・」
高「いいか、お前は夢幻の力の母親みたいなもんだぞ。なのに易々力を使わせてやるだ?。お前は自分を何だと思ってやがる!!。自分を道具としか見てねえのかよ!!」
フ「あ・・・あぅ・・・ぁぅ・・・」
フィーラは高雅の気圧に半泣きになった。
高「俺は自分を道具としか見てない奴は嫌いだ!!。自分の価値を何だと思ってんだ!!。・・・腹立たしい、もう行くぞ!!」
高雅はフィーラを置いてレオの下へ行こうとした。
フ「・・・めん・・・さい・・・」
高「あぁ!?、何だって!?」

フ「・・・ごめんなさいです！！」
フィーラは首が取れてしまいそうなほど勢いよく頭を下げた。
フ「ボクが悪いです！！。ガーディアンになってとか嘘を吐いて生意気な事を言っていたのです。だから、本音を言うです」
そして、下げていた頭を上げて、高雅の目を見て言った。
フ「ボクの・・・傍に居てください！！。いや、居させてください！！」
高「・・・・・アリア」
ア「私はいいよ」
高「じゃあ、最後のチェック。それはどういう意味でだ？」
フ「それは、ボクを一人の存在としてです」
高「・・・好きにしろ」
すると、緊張が解けたのか、フィーラ座り込んでしまった。
フ「あひゅー・・・」
高「何座り込んでんだ？。もう行くぞ」
フ「何だか・・・眠・・・い・・・で・・・」
フィーラは言い終わるか否や眠ってしまった。
高「何やってんだか・・・」
高雅はレオの下へ繋がる空間を開けて、剣を腰に挿してフィーラを負ぶる。
ふと見たフィーラの寝顔はとても安心しきった顔だったそうだ。

## 緑の復讐編　その8、融合力テスト（後書き）

やっぱ、アビスは神ゲーですよねｗｗ

## 緑の復讐編　その9、失敗が生み出すモノ

空間で移動した場所は、さっきの場所よりちょっと離れたビルの屋上。
高「うわ!?、何だこれ!?」
その光景はあたり一面に植物が生えており、それも巨大であたりのビルを圧し折ったりしている。
そんな中にレオとエガルは戦っていた。
高「こりゃ、地形は相手の方が有利だな」
ア「でも、レオも遅れを取ってなさそうだよ」
高「そうだな。あたりの植物の動きが止まってる。こりゃ、レオが植物を動かしている力を吸収しているってことだろう」
レオの毛色も先ほどとは変わって、灰色と銀色が混ざっていた。
高「取りあえず、加勢に行くか」
ア「でも、フィーラちゃんはどうするの?」
ふと、背中を見ると、フィーラが寝息を立てて眠っている。
この場に会わない、緊張のない寝顔だ。
高「置くと言っても危険だしな・・・しゃーない。援助だけにするか」
そう言って高雅はタイミングを見計らって速度の力でレオの所へ行く。
ちょうど、お互いに距離があり、どちらが手を出そうと考えている所だった。
高「よお、レオ。状況はどうだい?」
レ「コウガ殿!!。ああ、お互い譲らずだ」
レオから高雅が来たことによって少し喜びを感じられた。
高「加勢する・・・と言いたいが、こいつの所為で一緒に戦うことはできそうにない」
そう言いつつ、レオに背中のフィーラを見せる。

レ「いや、構うことはない。我一人でも十分だ」
高「おいおい、だからって何もしないってことはない。お前は力を吸収して蓄える事が出来るんだよな？」
レ「そうだ。よく分かったな」
高「そりゃ、毛の色が変われば誰でもそう思うって」
エ「・・・貴様ら、いつまで待たせるつもりだ」
エガルの怒りが再び舞い戻って来たようだ。
高「おいおい、空気にされたからって怒るなよ」
エ「ッ！！・・・ぶっ殺す！！！！」
高「あちゃー、キレちゃったよ」
レ「さすがだ、コウガ殿。敵の理性をなくさせるとは」
高「こっちもこっちでいい方に解釈してくれてるし」
その瞬間、痺れを切らせたエガルが巨大植物のツタを使って襲い掛かって来た。
高雅とレオはそれぞれ別の場所へ飛躍し、ツタを避ける。
しかし、ツタはすぐに高雅とレオを追尾した。
高「二兎を追う者は一兎をも得ずって諺を知ってるのかよ」
エ「何だと！？」
エガルはフィーラがいるためか、それともさっきので高雅への殺意が強いのか高雅の方ばかりを見ていた。
レオは完全にツタ任せだった。
それが仇（あだ）となっていた。
高「ほら、回れ右しろ」
高雅は速度の力を使いながらツタから逃げつつ、敵に指摘をする。
その言葉から随分と余裕があるようにとれる。
それが、敵の理性をさらに崩していくことになっている。
エ「貴様・・・余裕だそうだな。ならば・・・ッ！？」
エガルは後ろからの殺気に気付き、瞬時に振り返る。
そこには、速度の力を含み、毛色が水色になったレオが口を大きく開けていた。

エ「くそっ!!。いつの間に速度の力を!?」
エガルはその場から跳躍して避けようとした。
だが、跳躍することはできなかった。
エ「・・何!?、これは!?」
ビルの屋上が液状化していた。
お陰で上手く地面を蹴ることができず、跳躍ができなかった。
エ「くそっ!!、小癪な!!」
レ「もらった!!」

グシュ!!

エガルは辛うじて体を捻ったが、レオの牙がエガルの腕を食い千切った。
エ「ぐはっ・・・」
エガルは食い千切られた腕を抑えながら倒れた。
既に屋上は液状から固体に変わっていた。
高雅を追っていたツタも力を失い、消える。
レ「考えが浅墓だったな。貴様と戦っている最中に貴様の変換の力は既に吸収していたのだ。さらに、瞬時にコウガ殿から速度の力も授けられておる。もっと周りを見ることだな」
レオが腕を吐き捨て、エガルにダメ押しの言葉を送る。
高「ほー、灰色は変換だったのか」
高雅がレオの傍に行き、エガルを見ながら分かったことを話した。
高「だが、あの植物を生み出すなら、創造もあるな。お前は一体、力を何個持ってんだ?」
エ「ッ!!・・・くそが!!。俺には後が無いんだ!!。大人しく殺されろ!!」
エガルは高雅の言葉を聞いた瞬間にゾクッと体を一瞬震わせた。
高「なこと言われてもねー、こっちは死にたくないし。自分勝手にも程があるぜ」

エ「ほざけ!!。貴様の事など知らん!!。もう失敗は許されないんだ!!」
高「とは言ったものの、もうお前の負けは決まっているぞ」
エ「何だと・・・ッ!?」
エガルは体を動かそうと試みたが指先一つ動かすことができなかった。
それは、腕が千切れたことに寄っての多量出血も原因の一つかもしれないか、それだけではない。
エ「まさか・・・そんな・・・」
高「俺がレオにやった力は速度だけじゃないってこと。ここにも力が入っていたこと」
そう言いながら、高雅はレオの口元を指す。
高「俺が最も得意とする力だ。・・・最早、その状態から言うまでもないよな?」
エ「せ・・・静寂か!?」
高「そゆこと。まあ、援護するならこれくらいは当たり前だろ」
レ「ふっ、十分すぎるぐらいだ」
レオが高雅の言葉に軽く相槌を打つ。
エ「お・・おの・・・れ・・・」
高「喋るのも辛くなってきたようだな。取りあえず、質問には答えてもらおうか。貴様の目的は何だ?」
エ「く・・・貴様ら・・人間を・・・残らず殺すことだ・・・・全ては・・・ウルザS」

シュン・・・

高「なっ!?」
レ「何!?」
突然、エガルがその場から消えてしまった。
高「何でだ!?。静寂で力は使えないはずだ」

レ「コウガ殿、これを見るのだ」
レオがさっきまでエガルがいた所へ促す。
高雅は従うがままに消えた場所へ行く。
高「これって・・・アリア達みたいが持っている宝石だろ？」
見た目は普通の宝石でも、高雅には何故か普通の宝石とは思っていなかった。
高「あいつが落としていった・・・なんてある訳ねえよな」
高雅にとって、追い詰められて焦っていたとは言え、自分の命の宝石を敵の目の前に落としていくとは考え難いことだった。
高「なあ、レオ。あいつが消えた瞬間に何か力が見えなかったか？」
レ「見えたのだが、一瞬過ぎて分からなかった」
高「じゃあ、誰かがエガルを助けた訳か・・・でも、どうやって？。それに、この宝石との関係は？」
レ「アリア殿は全ての力が使えるのであろう？」
ア「まあ、真の契約をしていればそうだけど」
レ「ならば、今起こった力が何か見当はつかないのか？」
ア「えっと・・・その場から消えて・・・宝石がある・・・それは・・・」
高・レ「それは？」
ア「それは・・・えっと・・・」
アリアは悩む振りをしながら、焦らし続ける。
フ「交換の力です」
高「ってお前が答えるんかい！！。てか、起きてたのかよ！？」
フ「はいです。ちょっと前に起きてたです」
高「起きた場面なんて何処にもなかったぞ」
フ「裏で、です」
高「裏、言うな！！」
レ「それよりも、そこの者。交換の力だとはどういうことだ？」
レオが急かすようにフィーラに聞くが、フィーラが頬を膨らませて文句を言う。

それも、今までのとは声色で。
フ「おい、天獣。ボクは楽園の者だぞ!!。立場を弁えろ!!」
いつもの口調とは違う、上下関係を分からせるようにフィールが言う。
レ「え・・・楽園だと!?」
それを聞いたレオが慌てふためき、謝罪する。
レ「先ほどの無礼、深くお詫び申す!!」
レオがこれでもか!!ってぐらい頭を下げる。
小さな少女に頭を下げる大きなライオン（のような獣）。
そのシュールな光景を見て、高雅とアリアは軽く笑っていた。
高「ははは。それより、交換の力である結論はどっから来たんだ?」
フ「あっ、それは簡単です。交換の力は同じ価値があるものを場所問わずに入れ替えることができるのです。ですので・・・」
高「あいつとその誰かさんの命を交換した訳か」
フ「ボクのセリフを取るなです!!」
高雅の背中をポカポカ叩くフィーラ。
高雅に取って、それは肩叩きにも及ばなかった。
自分の攻撃が無駄だと分かったのか、フィーラが高雅の背中から降り、宝石を拾い上げる。
フ「それにしても、エガルは弱いのです。こんなちんけな三流使いの命の宝石で交換成立なんて・・・あいつに捕まったボクが情けないです」
高「宝石を見るだけで、その使いの凄さが分かるのか?」
フ「こんなこと、楽園の者には朝飯前です」
そう言いつつ胸を張るフィーラ。
すると、レオを口を割って来た。
レ「だが、奴の強さはかなりのものだ。三流の使いでは成り立たないのでは?」
フ「それは、ボクの目を疑っていることです?」
フィーラがギロッとレオを睨みつける。

レオはそれだけで再び頭を下げる。
ここに絶対の主従関係が出来上がったと高雅は内心思っていた。
高「だけど、変換の変わりに創造やらも使えたし結構（強さとして）上の方じゃないのか？」
フ「でも、ボクの目に間違いはないのです。これは三流の命です」
ア（三流三流って、何だか三流が可哀そう・・・）
アリアがふと思ったが誰も察していなかった。
高「だったら、価値が無くなったってことか・・・そう言えば、腕は千切れてたし、静寂で動きを止めていたからだろうか」
フ「きっと、そうです。それ以外考えられないです」
高「まぁ、相手が逃げた方法が分かったとしても、それで敵の居場所が分かるって事には繋がらないけど」
？「ふぉっふぉっふぉ、その心配はない」
高・ア・レ・フ「ッ！？」
何処からとなく聞こえた声に警戒しながらあたりを見回す。
高雅は剣を握り、レオは喉を鳴らして威嚇、フィーラは高雅に近づく。
高「誰だ！？。出てきやがれ！！」
？「人間は見知らぬ相手に敬語をも使わぬとは、情けないのぉ」
すると、さっきの宝石から光が発生し、人が映る。
高「これは・・・ホログラムみたいなものか」
そう言いつつ、敵の髪の色を窺おうとする。
だが、髪色が・・・無い。
つまり、ハゲ。
高「おい、ハゲツル。貴様がエガルを逃がしたのか？」
ウ「わしはウルザスだ！！」
高「うっさい、ハゲピカ。質問に答えろ」
ウ「若造が調子に乗り追って・・・だが、それもすぐに終わるだろう」
高「おい、日本語分かってのか？。Ａｎｓｗｅｒ　ｍｙ　ｑｕｅｓ

ｔｉｏｎ．　ＯＫ？」
ウ「老年をバカにしおって・・・とにかく、ここに来るのだ」
そう言ってウルザスは足元に落ちてあった石ころとある紙切れを交換した。
高雅はそれを拾い上げる。
高「・・・地図だな」
ウ「その地図中の印の場所へ来い。小僧は死んでもらわんと計画が台無しだかなのぉ」
高「へぇー、挑戦状ってか。上等だ。受けて立つ」
ア「待って、コウガ。今はそれよりも先に・・・」
高「ん？・・・あっ！！」
高雅は目的を完全に忘れていたが、ふと思い出した。
高「わりぃ、挑戦状はまた後でだ」
そう言ってこの場を去ろうとしたが・・・
ウ「目的はこのお二方だろぉ」
高「はあ！？・・・なっ！！」
高雅が振り返るとそこには凛と龍子が互いに背中を向けて柱に巻きつけられていた。
二人は高雅に向かって何か叫んでいるようだが、聞き取ることはできなかった。
あくまで映像だが、高雅はその光景に落ち着きを隠せないでいた。
高「テメー！！、二人をどうした！？」
ウ「ふぉっふぉっふぉ。心配なら来るがよい」
映像がウルザスに変わった事によって高雅の怒りが増す。
高「いいか！！、そこを動くな！！。テメーを速攻でぶっ殺してやるからな！！」

バリーン！！

怒りがままに、高雅は誰の命か分からない宝石を踏み潰した。

光があまり差し込まない、薄暗い場所に捕まった二人と今回の黒幕とそれに従う2人がいた。
ウ「ほお、宝石を壊したか。手間が省けたのぉ」
ウルザスはそう言ってある方向へ振り返る。
ウ「それはさて置き・・・」
エ「ヒッ!!」
イ「ぶっははははは、ヒッてダッセえええええええ」
エガルは、最早インジがバカにすることにさえ言い返せない程迫られていた。
エ「も・・・もう一度チャンスを!!」
ウ「それは聞き飽きたのぉ。お主にはまだ足りなかったか」
そう言って、ウルザスは様々な色に変わる不気味な液体が入った注射器をどこからともなく取り出す。
エ「ヒッ!!」
イ「おいおい、おっさん。そろそろ壊れるんじゃねえか?」
ウ「壊れようが関係ない。最早、エガルは過ぎた玩具だ」
エ「そ・・そんな!!。後一回のチャンスを!!。次こそは!!」
ウ「もう聞き飽きたと言ったろぉ。今回は残り全部だ」
イ「こりゃ、今までのと比べ物にならねえだろうな」
凛「い・・・一体、何をするつもりですの?」
凛が三人の会話に首を突っ込む。

イ「あー、簡単に言えばドーピングだ」
龍「ど・・・ドーピング？」
イ「そうそう、ドーピング。天界のドーピング」
さらに、インジが嫌らしい笑みを浮かべながら言う。
イ「苦しくて、内臓が張り裂けそうで、もはや死ぬ方がいい気分になるとーっても辛いドーピングだ」
それを聞いた二人は嫌と言うほど顔を青ざめる。
そして、それが行われる。
ウ「壊れなければ良いのぉ」
ウルザスは他人事のように言う。
最早、この三人の中にエガルという仲間はいないようだった。
エ「や・・止めてください！！。お願いです！！。最後のチャンス」
「諦めろって」は・・放せ！！、インジ！！」
インジがエガルを取り押さえる。
ウ「残念だったのぉ。結構役に立っていたのにのぉ」
そう言いながらも、何処にも惜しみなんてない表情のままエガルの腕に注射する。
すると、その効力はすぐに現れた。
エ「うげ・・・うえぇぇぇぇぇ」
まずは嘔吐（おうと）をする。
あたり一面に嫌な臭いが漂う。
エ「う・・ううう・・・うううううううう・・・うううううううううううううう」
次に虫が這いまわっているのか、体をとにかく掻きまくる。
エ「あああああああああああ・・・ああああ・・ああああああ・・ああ・・・あ・ああああ」
さらに飛び跳ねながら掻きまくる。
もう見ていられないと、龍子と凛が目を閉じる。
だが、塞げない耳から聞こえる音ですら地獄を感じた。
エ「く・・来るなあああああああああああああ。うわあああああああ

あああああ」
次は何もない方を見ながら驚怖（きょうふ）する。
エ「いやだあああああああああああああああ。もういやだあああああああ。殺せえええええええええ、いっそ殺せえええええええええええええええええええええええええええええ」
そして最後に、生きることの苦痛を浴びていた。
イ「ひゃはははは、傑作だなこりゃ」
この場にいた中でインジだけが腹を抱えて笑っていた。

# 緑の復讐編　その10、VSインジ

高雅達は地図が記された場所の目の前まで来ていた。
高「ここ・・・だよな？」
ア「うん、あってるよ・・・多分・・・」
レ「しかし、予想しておったのと違うな」
フ「ふえーーー・・・」
フィーラが天を仰ぐように顔を上げて眺める。
それは、周りのビルより一層大きいビル・・・てか、タワーの領域だろう。
高「さっき映っていたのからして薄暗い廃墟かと思っていたけど、みょーに立派だな」
ア「取りあえず、中に入らない？」
レ「確かに、動かなくては何も生まれはしないぞ」
フ「ライオン擬きも時にはいいこと言うです」
レ「きょ・・・恐縮です・・・」
フィーラの言葉に腹を立てながらも、逆らえずにいるレオ。
フィーラの前では、成長したレオは最早子犬に等しい存在だ。
高「そんじゃ、気を取り直して、いざ行かん」
そう言って目の前の自動ドアが反応する範囲まで歩くが・・・
高「・・・開かねえな」
ア「軽くバカにされてるかも」
高「だとしたら、絶対殺す。あのハゲじじいは普通に殺さねえ」
ア「こ・・・コウガ、少し怖いよ。落ち着いたら」
その最中だった。

ウィーン・・・

高「ん・・・うお！？」

何気ない機会音を上げながら自動ドアが開いた途端、急激な突風が吹き荒れる。
それも、ドアの中へ吸い込まれるように。
フ「あみゅみゅうううううううう！？」
フィーラが風に飛ばされ、タワーの中へ招待される。
高「フィーラ！！・・・・って、うわあああああああああ」
レ「うおっ！？」
ア「きゃあああああああああああ」
フィーラに続き、高雅達も耐えることができなくなり、タワーの中へ招待された。
そして、自動ドアは何事もなかったように口を閉めた。

高「いっててててて・・・」
高雅は軽く打った頭を擦りながらあたりを見回す。
タワーの中は見上げるほど開いた空間があり、軽く３０階分は見上げられた。
あの宝石から見えた薄暗い所などはなく、あたり一面が明るかった。
２階からは壁際に廊下が付いてあり、所々に一直線に向かい側を繋ぐ橋が掛かってあった。
レ「うぐぐぐ・・・コウガ殿、大丈夫か？」
高「ん、大丈夫だ」
高雅が見渡すのを止め、立ち上がるレオの方を見る。
高「・・・あっ」
ふと、レオの腹下を見て見るとピンク色の髪が見えてしまった。
高「・・・レオ、ご愁傷様」

レ「？、どういう・・・はっ！？」
高雅の目線が気になって自分の腹下を覗いてみると、フィーラがＸ字にベターンと倒れていた。
レ「なな・・これは・・その・・・」
レオが口ごもりながら飛び退くとフィーラが立ち上がった。
フ「き～～～～さ～～～～ま～～～～・・・・」
レ「申し訳ない申し訳ない申し訳ない・・・」
レオが床に頭をガンガンぶつけながら謝罪をする。
高雅は脳震盪を起こしそうだったから止める。
フィーラはその光景に満足していなかったが、高雅が・・・
高「レオはお前を守るために、自分の身を犠牲にしてたんだよ」
と、言うとフィーラはレオを睨みつけるて真実を見抜こうとする。
レオは本当ですと言わんばかりに首を上下に振る。
フ「・・・仕様がないです。今回は許してあげるです」
どこか納得してなかったが取りあえず、この場を抑えることができた。
そして、高雅はため息交じりで周りを見渡すと、ふと思った。
高「階段が・・・ない！？」
そう、見渡す限り何処にも上へと通じる階段が無かった。
さらに、別の部屋へ繋がる扉もありはしない。
イ「そりゃそうだろ」
高・ア・レ・フ「ッ！？」
突然、上から声が聞こえて来た。
見上げると、そこにはインジが向かい側を繋ぐ橋の真ん中で見下ろしていた。
周りには一回り大きい蜂もインジに従うかのように数匹飛んでいた。
イ「おっす、小僧。元気してたか？」
高「してたしてた。してたから死ね」
イ「おいおい、意味が分かんねえぜ。よっと・・・」
そう言ってインジは柵を乗り越え飛び降りる。

ちなみに、高さは１０階分はある。
インジは飛んでいるように見えず、普通に重力に従って落ちている。
高「なあ、使いの骨って丈夫か？」
ふと思った疑問をアリアに問う。
ア「う～ん・・・平均並だと思うよ」
高「じゃあ、死ぬぞ。あれ」
そう言っている内に、既に床まで残り５メートル。
インジは何もしようとせず、重力加速度でドンドン加速していっていた。
そして、遂に・・・

ズドーン！！

豪快な音を立てて両足でしっかりと着地した。
着地した瞬間に、高雅達は震度２ぐらいの揺れを感じた。
イ「よし、戦うか」
高「って、すご！？」
インジは何事も無いような清々（すがすが）しい顔で開戦しようとする。
さすがの高雅もこの光景には驚いた。
イ「おいおい、何が凄いんだ？。俺にとって当たり前だろ。髪の色見て、タネが分からねえか？」
高「あー、そう言えば・・・」
高雅は髪の色を見て、ふと思い出した。
高「消失か・・・」
イ「イエス。んじゃ、お待ちかねのバトルタイムだぜ。ヒャッホー！！」
そう言ってインジは壁を伝って上り始めた。
インジの開始宣言の声を聞いて、蜂達も勢いよく降りて来た。
何階か上ると廊下に入り、柵によって見えなくなった。

高「降りて来た意味は何だったんだ？」
ア「さぁ？。それより、どうして消失の力で着地した時に何事もないって分かったの？」
高「お前、バカだろ。力で衝撃を消したに決まってんだろ」
ア「あっ、成程」
高「ったく、少し考えれば分かるだろ。それより、どう戦うかなー」
高雅は蜂が来る間に戦略を立て始めた。
まず、地形は敵本拠地のため、相手の方が有利だろう。
そして、次に敵の実力。
合ったことはあるが実力は分からない。
力は髪色からして主要は消失、今の垂直の壁を登る時に使った速度しか分からない。
ア「コウガ！！、後ろ！！」
高「ん・・・のわっ！？」
高雅が身を翻(ひるがえ)して避けた瞬間、元いた所に鎖鎌の鎌を持った手が空を裂いた。
そして、歪んだ空間からインジの顔だけがひょっこりと出て来た。
イ「ちぇ、外したか」
高「テメ、空間の力も使えたのかよ！？」
イ「なっはっはっはっは。他にも使えるのはあるぞ。おっと」
レオが隙を見て頭を食い千切ろうとしたが、インジが気付くのが早く、歪んだ空間へ顔を引っ込めた。
レオの口は空を食べただけだった。
ア「コウガ！！、今度は上！！」
高「あっ、蜂を忘れてた！！」
既に、蜂達はすぐそこまで迫っていた。
だが、突然軌道を変え、それぞれ別の場所へ飛んで行った。
高「なっ！？、どうなってんだ！？」
フ「あいつらはボクの夢幻に陥(おとしい)れたのです」
高「そうか。なら、レオとフィーラで虫達を頼めるか」

レ「問題ない」
フ「任せろです」
そう言ってフィーラはレオの上に乗る。
高「じゃあ、任せる。力が欲しかったら隙を見て俺の所に来い」
レ「分かった」
高雅はそれだけを伝え、空間の力で上の階へ一気に移動した。
レオ達も惑わされている虫を殺虫しにいった。

高「さーて、あいつは何処だか」
高雅の現在地は19階の端から端を繋ぐ橋のど真ん中。
高「かくれんぼとか、懐かしいな」
ア「思い出に浸ってる暇あるの？」
高「・・・無いな。よし、探すか」
そう言って目を閉じる。
意識を集中して、出て来た所を捕まえるつもりだ。
だが・・・

ザシュ！！

高「がっ！？・・・」
ア「コウガ！？。嘘、いつの間に！？」
真後ろにインジが立ち、持ち前の鎖鎌で高雅の背中に大きな傷を負わせた。
斬られた勢いで高雅はバランスを崩し、倒れた。
イ「甘いな。意識を集中したって無駄無駄。俺にそんな器用なことは通用しない」

インジが人差し指を振り、挑発をする。
高雅は傷を再生してすぐに立ち上がる。
高「一体、どんなタネだよ？」
イ「まあ、お前みたいな人間に分かる訳ない。分かってもどうしようもない。と、言うことで、そこから飛び降りて死ね」
高「バーカ。最後まで諦めるかっての」
イ「かっけぇこと言うねー。まあ、俺から見れば、苦しみたいMにしか見えないけど」
そんな減らず口を叩きながら歪んだ空間へ消えていった。
高「また同じ戦法か。芸がないというかワンパターンというか」
ア「でも、破られてない戦法を使うのは当たり前だと思うよ」
高「あいつは俺を試してるんだ」
ア「どうしてそう思うの？」
高「いくら破られてない策と言っても多用するのは三流がやることだ。普通は色んな技を組み合わせてより破られなくするのが基本だ」
ア「あー、そっか」
高「取りあえず、この状況を打破しないとな。次は心臓ブスッて来そうだし」
ア「それじゃ、私が後ろと左を見るから、高雅は前と右」
高「上はどうすんだよ？」
ア「じゃあ、上は私ｇ「下は？、空間だからあり得るぞ」え・・えっと・・・」
高「これで、肉眼は無理と判明されたな」
ア「ううー・・・」
アリアは考えが無くなったのか無気力な声を上げる。
高「う～ん・・・こうなったら・・・」
高雅は突然、速度の力で走りまわった。
それも、超不規則に。
突然、策を越えて降りたり、上ったり、空間で別の場所へ移動したりしている。

ア「ど・・・どういう作戦？」
高「敵に自分の場所を特定されないようにするんだ」
イ「残念、無意味、また来週～」
高「なっ！？」
目の前にインジが鎖鎌を構えており、振り下ろす。

ガキィン！！

何とか防ぐことができたが、ただ防ぐことで頭が一杯なのか隙だらけだった。
イ「ほらほら、意識が一点集中し過ぎだぜ」

ボゴッ！！

高「ぐはっ！！」
インジは高雅の横腹に蹴りを喰らわせる。
高雅はその勢いで柵を越えて空中へ投げ出され、落下していった。
高「いって～～・・・何でダメだったんだ？」
高雅は落下しながらさっきの事を考えていた。
イ「あほかお前。あんな豪快に走り回れば、適当に自分の目の前に出す空間をそこらじゅうに展開すれば、呆気なく罠に掛かってくれるだろ」
高「あっ、そうか・・よっと」
高雅は落下に飽きたように足場を創造して着地する。
着地する際にさっき敵がやったように衝撃を消失の力で消した。
高「ほほー、こっちの方がいいな。今まで着地の際は活性してたからな」
ア「それより、どうするの？。もう万策が尽きたんじゃ・・・」
高「まあ、そうだな・・・こりゃ、やばいな」
高雅は敵のマジックを見破ることに挫折気味になっていた。

一方、下の戦いはと言うと。
フ「左４９度、上６７度から2匹来てるです」
レ「ん?、針に静寂の力が含まれておるな。我を止めるつもりだろうが、逆に利用させてもらおう」
レオはこっちに向かってくる蜂へ自ら接近する。
蜂は予想しない行動に少し怯んだ。
レ「もらった!!」
レオはその隙に2匹の蜂の針を噛み砕いた。
しかし、それだけでは蜂は死んではいないが、フィーラの夢幻によって殺虫剤を掛けれたかのように落ちてゆく。
レオは地面に落ちた蜂目掛けて牙を向け、落下する。
そして、着地すると同時に蜂の喉を食い千切った。
レ「ふぅ、まだ数があるようだ」
レオが飛んでいる蜂を見上げながら言う。
フ「とにかく、喰って喰って喰いまくるです!!」
レ「わ・・・分かりました・・・」
フ「それよりも、コウガ様は大丈夫です?」
レ「そのことについては問題ない・・・と、申し上げたいところですが、先ほど、コウガ殿が落下しているのを見てしまいまして・・・」
フ「じゃあ、さっさとこの虫けらを倒してコウガ様の援護にいくです!!」

レ「いたたたた・・・毛を引っ張らないでください」
フ「だったら早く虫を倒すです！！」
レ「分かりました。分かりましたから引っ張らないでください」
レオは逆らえず、フィーラに従うしかなかった。

## 緑の復讐編　その11、タネ明し

高雅は敵のトリックを見破れず、確実に追い詰められていた。
イ「はい、こっちだよーん」

ザシュ！！

高「うがあああああああああ」
斬られては再生、斬られては再生を繰り返し続けている。
イ「ほらほら、早く死なねえと苦しいだけだぜ」
高「ぐぅぅ・・・・」
高雅はまた傷を再生し、インジを睨みつける。
イ「もういい、飽きた。次は心臓を刺して、そのままお前の使いも殺してやる」
そう宣告するとインジは再び空間へ消えていく。
ア「どうしよう、コウガ。もう後がないよ」
高「・・・やっとか」
ア「へっ！？」
予想もしない高雅の言葉にアリアはキョトンとする。
高「アリア、空間と静寂の融合力を作れるか？」
ア「え・・・うん、やってみるけど、どんな力なの？」
高「やってからのお楽しみだ。とにかく、今からどんなことがあっても、その力を作って溜めておけ」
ア「待って、何やるか教えてよ」
高「簡単さ。あいつが攻撃を受け止め、そのまま敵の空間へ剣を投げる。まあ、それは一部にすぎないけど」
ア「でも、どうやって敵が攻撃する場所を捕えるの？。音もなく殺気もなく現れるのに」
高「もう、全てのタネは明かされている。てか、最初から分かって

たし」
ア「そうなの!?。じゃあ、何で今までやられて・・・まさか、本当にM?」
高「んな訳ねえだろ!!。殺すぞ!!」
イ「ほらほら、執行猶予はもういいか?」
二人のやりとりにインジが口を挟んだ。
声は真後ろから聞こえたが高雅は振り向くことはしなかった。
高「ああ、いつでも来いよ」
イ「それじゃ、死刑開始ーーー。1分以内にお前の心臓を刺すぞ。精々、念仏でも唱えとけ」
インジがそう告げると瞬時に黙(しじま)が訪れる。
聞こえるのは下で戦っているレオとフィーラの戦の音だけだ。
高雅は目を瞑り、意識を集中する。
高「・・・・・・・・・・」
高雅はただ黙り込み、目を閉じている。
その姿はもう、この世界に悔いがないような感じだった。
イ(これで、終わりだな。俺の力が通用しないと思ったら、それは肉体だけだったか・・・。直接、自分に及ぼす力を防ぐとは、後でおっさんに持ってくか)
そして、高雅の後ろに小さな空間を開ける。
その空間から鎌を持った手が現れ、高雅にゆっくり近づく。
それと同時に、剣の方にも一つ空間が開く。
こっちは何も持ってなく、剣についてある宝石に少しづつ近づく。
イ(死ね)
インジが音も立てずに鎌を振るおうとする。
その時・・・
パシッ
イ「!?」

高雅が目を閉じたままインジの鎌を持った腕を片手で掴む。
高「甘いぜ、バ～～カ」

ザシュ！！

次に空いている手で、自分の剣に忍び寄る腕を斬った。
イ「うがあああああああああ！？」
インジはどうして気付かれたのか分からず、パニックになった。
手首が血の糸に吊られながらボトリと床に落ちた。
イ「何故だ！？、何故分かった！？」
高「まだまだ！！」
高雅は鎌を持った手が現れた空間に向かって剣を投げた。
剣は自動的にインジの所へ案内される。
イ「くそ！！」
インジは高雅に掴まれた手を振りほどき、現れた剣に素早く反応して避ける。
インジはそのまま飛んで来た剣をみる。
剣の柄に付いてある紐が上へと曲がっていた。
イ「な・・・まさか！？」
インジが首を上へあげると高雅が残りの剣を両手で持ち、構えていた。
高「もらい！！」
イ「うお！？」
インジは辛うじて身を翻して避ける。
だが、完全には避けきれておらず、肩から斜めに軽い切り傷を付けられた。
高「ちっ、かすっただけか」
イ「こ・・・小僧！！、何故分かった！？」
高「んなもん、最初から分かってたに決まってんだろ。俺はバカじゃねえ。まあ、初っ端の奴は分からなかったが、一回見たらタネも

分かった」
イ「まさか、全て演技だったと言う訳か!?」
高「ピンポーン。見破れなかったと言うことは俺の演技も捨てたもんじゃなんだな」
ア「それより、どこから相手が攻撃してくるのを分かったの?」
アリアは全ての糸口、インジは高雅の対策方法が分かっていなかった。
高「わーったわーった。お前はバカなことは分かった」
ア「どうしてよ!?」
高「ここまで来ると、天然だな。てか、さっき答え言ってたし」
ア「だから、どうしてよ!?」
高雅はアリアの問いに答えることなく、ため息を吐いてに髪を弄(いじ)り始めた。
高「それじゃ、アリアの為に、タネ明かしをするか」
そう言って高雅は敵の攻撃について、自分の対策方法について話し始めた。
しかし、高雅は突然、指を鳴らした。
そして、アリアはその意味も分からずに説明を始めた。
高「まず、敵の攻撃だが。俺が意識を集中しても気付かなかったってことは、どういう意味か分かるか?」
ア「え・・・相手がそれほど暗殺に長(た)けている?」
高「まあ、ある意味正解だな。だが、今は間違いだ。あいつは消失の力を使えるってこと。つまり・・・」
ア「あ、分かった。鎖がこすれて発生する音を消失の力で消しているって訳?」
高「まあ、そうだ。ただし、音だけでなく、殺気、空間の歪みなど、全てに関して気付かれないようにしている。音も殺気も、あいつの周りじゃないんだ」
ア「じゃあ、そんな中、高雅はどうやって気付いたの?」
高「蝙蝠(こうもり)が暗い中、どうやって飛んでいるか知ってるか?」

ア「うん。確か、超音波を発して、その音の跳ね返り具合で壁との距離を判断する」
高「それと全く同じ。俺はとてつもなく薄い波動の力を周りに発していたんだ。もし、別の空間に行ったなら、壁との距離が変わって跳ね返り具合も変わるからな。そこが狙い目」
ア「そっか。じゃあ、どうして最初からそれを実行しなかったの？」
高「いくら分かったとは言え、何処から出るか狙いが定まらない。だから、あいつが『次は心臓を刺す』と言えば・・・」
ア「必ず、心臓を狙える所に空間を展開するってことだね」
高「そう言うこと。まあ、そんなところだ」
ア「待って、最初にやった指パッチンは何だったの？」
高「こっちに行けば分かる」
説明し終わると高雅はインジの近くに寄った。
インジは説明の間、何もしてなかった訳ではない。
むしろ、今している最中だった。
ア「コウガ、インジはどうしたの？」
高「お前が作った融合力とその周りの空間に閉じ込めてある。身を翻した時にちょうどその空間を仕掛けていた所に入るようにしていたんだ」
ア「それと指パッチンの関係がどうあるのよ？」
高「お前がさっき作った力は時抑（じよく）の力だ」
ア「時抑の力？」
高「簡単に言うと、『時間を遅くする力』だ」
ア「あっ・・・なんとなく分かった」
高「まあ、それでも一応説明するけど、あの指パッチンはその空間の発動を意味していた」
ア「それで、インジは変な体勢で止まっているように見えた訳ね」
インジは今にもこっちに走り出そうとしている。
その行動は非常に遅く、まだ地面を蹴りだして０．２秒ぐらいの姿だ。

レ「コウガ殿!!、無事か!?」
高「おお、レオにフィーラ。そっちは終わったんだな」
フ「はいです。こっちは全て片づけましたです」
高雅は一応確認するため、柵から身を乗り出して下を窺う。
そこには、虫の残骸が大量に転がっていた。
高「最初に見たより数が多くないか?」
レ「実は、戦っている最中に入口から数匹入って来て増えたのだ」
フ「それで、ちょっと遅れてしまったのです」
高「そうか。二人とも、怪我はないか?」
レ「無傷だ」
フ「同じくです」
高「よかった」
高雅は二人の無事を確認すると安堵の息を漏らした。
ア「仲間の様子を聞いて安堵するって、随分と変わったね」
高「ば・・バカ!!、こいつらは人間じゃねえからだ!!。人間だったらこんな事は聞かねえよ!!」
ア「はいはい♪」
高「テメー、信じてねえだろ・・・」
ア「きっと、リュウコやリンちゃんにも同じことを聞くだろうね~」
高「ここから落とすぞ?」
ア「私は飛べるから、落ちても意味ないも~ん」
高「じゃあ、殴るぞ?」
ア「それは勘弁して。コウガのパンチは威力高すぎるから」
レ「それよりも、この者はどうしたのだ?」
レオが二人のやり取りに歯止めを掛け、インジの状態について聞く。
フ「随分ブサイク顔で止まっているのです」
高「止まってはいないんだが、ゆっくり動いているんだ。それも、非常にゆっくりと」
レ「見たことない力だな。紫と青が入り混じっておる。さらに、その周りに紫が取り囲んでいるような」

高「全く持ってその通りだ。さーてと、そろそろ締めに入るか」
高雅は片方の剣先をインジに向ける。
その剣先は時抑の空間に触れている。
高「じゃあな。お前の試し、簡単過ぎだぜ」
そう呟いた瞬間に突然、インジを取り巻く空間が真っ黒に染まった。
その数秒後、真っ黒い空間はガラスが割れるような音を立てて崩れ落ちた。
中にいたインジは既に居なくなっていた。
高「これでよし」
レ「空間ごと奴を破壊したのか？」
高「ああ、どこに宝石があるか分からねえから全体に破壊の力を掛けた。まぁ案の定、身に付けていたみたいだな」
高雅は居なくなったインジの方を見て言った。
フ「よーし、早速、上に行くのです」
高「それもそうだな。だけどよ、上に行くって言っても何処にも上に通じる道は無いぞ」
外から見た限りでは、このタワーは３０階程度では済まない。
もっと上階があるとは高雅は分かっているが、そこへ通じる道がなかった。
フ「みゅ～・・・壊すしかないのです」
高「壊す、か・・・よし、壊そう」
高雅は柵を越え、空中へ飛び出す。
そして、すぐに足場を創るとそこから活性＋速度のちからで天高く跳躍する。
レオもそれについて行く。
天井まで３秒も掛からずに着くと・・・

シュン・・・

綺麗な円を描いた瞬間、その中心を勢いのまま蹴るとこれまた綺麗

な穴が出来上がった。
天井は厚くなく、呆気なく31階に辿り着いた。
高雅が着地すると、遅れてレオも着地した。
高「まだ明るいな。あいつがいる所まで、まだまだだな」
部屋の明るさは全く変わっていなかった。
ただ、あたりには障害物は無く、ただ広々とした空間だった。
そのお陰で、上の階へと繋がる階段がすぐに見つかった。
高「ここには階段があるみたいだな」
フ「そんなことより、早く壊して進んだ方が早いのです」
高「あのな・・・もし、大事な柱とか壊して、タワーが崩れたらあいつらがどうなると思ってんだ?」
フ「あう!!、そうでした・・・です・・・」
フィーラがそれに気付いて反省したのか、少し縮まり込んだ。
ア「でもさ、さっきはどうして壊したの?」
高「止(や)むを得なかったからに決まってんだろ」
そう言って、高雅は階段へ歩み寄る。
障害物もないため、一直線に歩いてゆく。
だが・・・

ズドドド・・・・

高「うお!?」
突然、壁が地面から生えてきた。
高「面倒くさい仕掛けだな。壊して進むか」
高雅が腕を活性して、壁を思いっきり殴った。
高「・・・あれ、壊れねえ」
壁は異常に堅く、壊れることがなかった。
高「純度が高いな。かなり強い創造だな」
そう評価していると・・・

ボトリ・・・

気色悪いモノが落ちる音が後ろから聞こえた。
その音に４人は振り返ると・・・
エ「アソボー・・・アソボー・・・」
体がグチャグチャになったエガルが立っていた。

# 緑の復讐編　その12、VSモノ

目の前にいるモノがエガルと認識するのに疑いが過(よぎ)る。
最早(もはや)、エガルは『エガル』ではなくなっていた。
体が様々な気色悪い色に変色し、片足は一体関節が何個あるのか、色んな方向に曲がっていた。
腕は前回に食い千切られたままで、代わりに伸びた無数の血管が垂れ下っていた。
さらに、首は骨が無いのか、９０度真横に倒れ、肩が無ければもっと下がっていると思わせられる。
高「ひでぇ・・・もう、見るも無残な姿だ」
ア「一体・・・何が！？」
エ「アソボー・・・ネエ・・・」
エガルが唯一の腕を使って、高雅に手を伸ばす。
それも言った通り、本当に手が伸びた。
高「うお！？」
高雅は謎の現象に驚き、尻もちをつきながら避ける。
高「こいつ、何処の麦わら帽子の奴だよ！？」
などとツッコミを入れている最中にエガルは伸びた手を元に戻す。
ア「何！？、何か力を使った！？」
レ「分からぬ。奴の周りから様々な力が溢れ、判断ができぬ。あの時とは別人だ」
高「まあ、見れば見るほど別人と思うよな」
レ「見た目の意味ではない。最初に見た時より、力が増えておる」
フ「それって、力が増えたって事です？」
レ「そう言っておったのだが、理解できなかったか？」
フ「う・・うるさいです！！。ボクに口答えするなです！！」
そう言いながら、フィーラがレオの毛を引っ張る。
レ「いたたた。申し訳なかった、申し訳なかった」

レオは何も悪くないのにただ謝っていた。
高「この主従関係、理不尽だな」
ア「コウガ、前！！」
高「ん・・・なっ！？」
その光景はエガルがみるみる巨大化している。
その大きさは５メートル程で止まった。
エ「オナカスイタ・・・オナカスイタ・・・」
そう言いながらエガルが高雅達の方に近づいてきた。
高「おいおい、俺らを食う気か？」
ア「それしか考えられないよ」
レ「どうするのだ、コウガ殿？」
フ「ボクに案があるです。ボクの夢幻で惑わせたところを倒すのです」
高「まあ、その案で行くか。んじゃ、よろしくな、フィーラ」
フ「任せろです」
フィーラはレオから飛び降りるとエガルを睨みつけた。
エ「・・・アレ・・・」
エガルの視界からは四方八方から無数の鎖が体中に巻き付き、身動きが取れなくなっていた。
エ「ウー・・・ウー・・・」
エガルは鎖を振りほどこうと、もがき始めた。
それは、夢幻に掛かった合図である。
フ「今です！！」
高「オーケー！！・・・今のセリフ、孔明だったな」
フ「あみゅ、最後に何か言いましたか？」
高「何でもねえよ」
高雅はそう言ってエガルへ剣を振りかざす。
ガッ・・・

高「なっ！？」
剣は曲がった首に目掛けて振り下ろしたが、肉質が異常に堅く、斬ることができなかった。
剣は軽く刺さったまま動かなかった。
高「くっ・・・抜けねえ！？」
エ「イタイヨ・・・イタイヨ・・・」
エガルは夢幻の所為で腕を動かせるとは分かっていない。
ただ、悲痛の声を上げることしかしない。
その間に、高雅はやっとのことで剣を引き抜き、距離を置く。
高「こいつ、肉質が堅過ぎるだろ」
レ「様々な力で肉体強化をしておるのだろう」
フ「・・・あう！？」
高「ん、どうした？」
突然、フィーラが驚倒した声を上げた。
それは、決してエガルを見た所為ではない。
フ「皆・・・どこ・・です？・・・」
高「おい、どうした！？」
高雅はフィーラを揺すり、どこかに飛んでいる意識を呼ぶ。
しかし、フィーラはただ前を見て怯えていた。
フ「た・・助けて・・・誰か・・・」
高「おい・・・まさか！？」
レ「コウガ殿、フィーラ殿に夢幻の力が」
高「やはり・・・とにかく、今はフィーラの夢幻を解くか」
そう言って高雅はフィーラに消失の力を掛ける。
だが、フィーラの様子は何も変わらなかった。
高「・・・消失が効かねえ？」
フ「あう・・・殺される・・・・殺されるです・・・」
フィーラは夢幻の佳境に入っているのか、さっきより震えが酷くなっている。
高「なら、こっちでどうだ？」

高雅はさらに強力な虚無の力を掛けた。
フ「あう・・・・」
すると、目の前の恐怖が消えて安堵したのか、フィーラは気絶してしまった。
高「レオ、フィーラの夢幻は消えたか？」
レ「ああ、夢幻の力は消えてある」
ア「コウガ！！、後ろ！！」
高「ッ！？」
瞬時に振り向くとエガルが巨大な手をまた伸ばしてきていた。
高「っと！？」
フィーラを抱え、ギリギリで避けると、伸びた手は壁を貫いて行った。
高「嘘だろ！？。なんて威力だよ！！」
あの頑丈な壁を壊してしまう破壊力に高雅は驚きを隠せない。
高「状況が悪いな。一旦、逃げるか」
レ「分かった」
高雅はフィーラを抱えたままレオに乗り、速度の力をレオに与える。
それを使ってレオが高速でその場を離れた。
エ「マッテ・・・アソボー・・・」
エガルもグチャグチャな足を立て、見た目から思いもよらぬスピードで追い始めた。

迷宮を彷徨い逃げること１０分。

何とかエガルを振り切った高雅達は壁に寄り掛かって座っていた。
高「ふう、やっと落ち着ける」
ア「それにしても、さっきフィーラちゃんが夢幻に掛かったのは何故？」

高「あくまで推測だが、奴から様々な力が溢れ出て、偶然にも『方向の力』が、これまた偶然にフィーラの方へ夢幻を返したって言う訳」
ア「そんな、偶然な・・・」
レ「確かに、奴には様々な力が溢れておる。それが正論の可能性もあるだろう」
ア「まあ、そうだけど・・・」
レオの弁論にアリアはどこか納得できないまま話は終わった。
ちなみに、方向の力とは、様々なベクトルを変更することができる力である。
シンボルカラーは後に紹介します。
ア「一体、エガルはどうしちゃったの?。もう原形も留めてない程、滅茶苦茶になったし」
高「まあ、あのハゲジジイが一体何者か分からねえからな。何とも言えねえな」
レ「だが、奴を倒すことに変わりはないと思うぞ」
高「結局はどんな理論もそこに辿り着くな。じゃあ、今度は真っ二つにしてやるか」
ア「でも、あの異常な肉質はそう簡単に斬れないよ」
高「あの肉質も活性の力で強化されているなら、虚無に勝てる訳ねえよ」
ア「そっか。じゃあ、私は虚無を溜めておくね」
高「ああ。後は俺が何とかする」
高雅は立ち上がり、目の前に別の空間を展開する。
その場所はエガルの頭上だった。
高「レオ、お前はフィーラとここに居てくれ」
レ「分かった。フィーラ殿は我に任せて存分に戦ってくるのだ」
高雅はレオの返事を背中を向けたまま、軽く手を上げて答えた。
そして、空間へ飛びこむと同時に剣を構えた。
高「これでどうだ!!」

ズブッ・・・

高「なっ！？」

剣は頭目掛けて振りかざされたが、斬れることなく、肉体に呑みこまれるように沈んだ。

高雅はエガルの頭を蹴る勢いで剣を抜き、同時に着地する。

エ「ミーツケター・・・・」

エガルは何事もなかったように振り返った。

それも、逸れた親を見つけたように微笑みながら。

その血に染まった微笑みは高雅を恐怖に陥れるような表情だった。

高「ッ！？」

エ「モウ・・・ハナレナイヨウニ・・・・」

エガルがゆっくりと手を伸ばしてくる。

だけど、高雅は立ち竦んで茫然と立っている。

ア「コウガ！！」

高「はっ！？」

アリアの呼びかけで気付いた時には既にエガルの手の中にいた。

高「ぐ・・・この・・放せ！！」

エ「オナカスイタ・・・・」

高「テメ・・・まさか！？」

高雅の予想通り、エガルは口を開けて高雅をその口へ運ぶ。

ただ、変わり果てた口は１８０度開き、高雅を丸呑みできる大きさだった。

エ「・・・アレ・・・」

突然、エガルが口に運ぶのを止め、次第に高雅を掴んだ手の握力が下がってゆく。

高「何だ！？」

ア「コウガ、今の内に！！」

高「・・・そうだな」

高雅は活性の力で腕を強化し、弱ったエガルの手から抜け出した。
地面に着地すると同時に高雅はエガルから距離を取った。
高「あいつ、急に力を抜いたけど、どうしたんだ？」
ア「私が虚無の力を奴に掛けたの。あの巨体も力で、できてるからどうにかなるかなって」
高「サンキュー。偶には気が効くな」
ア「偶には、は余計だよ」
エ「マッテヨー・・・」
虚無の力が切れたか、エガルが距離を詰めて来た。
高「アリア、また虚無を頼む。今度は斬るために使う」
ア「うん」
アリアが短く返事をすると、高雅は接近するエガルへ向かい打ちに行った。

## 緑の復讐編　その１３、主人公く獣

高雅はエガルが攻撃する瞬間に空間の力で後ろに回った。
がら空きになったエガルの背中目掛けて剣を振るう。

ズブッ・・・

だが、斬れることなく、背中の肉に剣が沈み込むだけだった。
高「チクショー！！。何で斬れねえんだよ！？」
そんなことを呑気に考える暇はなく、エガルがその場で軽くスピンする。
その勢いで、高雅は壁に叩きつけられた。
高「つっ・・・」
ア「コウガ、大丈夫！？」
高「ああ、直前に消失で衝撃を消した」
高雅が再び立ち上がると、エガルはさっきのスピンで目を回していた。
高「あいつ、自滅してやがる」
ア「まるで、何も知らない子供みたいね」
高「まるで、じゃなくて、そうなんだろうな」
しかし、そんな相手でも高雅は容赦しない。
高雅は剣に赤と黒のグラデーションを帯びた光を生み出した。
高「外がダメなら中だ。アリア、この力をあいつの体の中に打ちこんでくれ」
ア「うん、分かった」
高「ただし、あいつの体は色んな力がへばり付いてある。その中に静寂とかもあるだろう。それに触れないように虚無で導きながら、この力を体の中に力を侵入させろ」
ア「分かった。でも、虚無の剣で斬れないなら体の中に力を送り込

むのは無理じゃない？」
高「きっと、剣の斬る場所全てに力を込めるんじゃなくて、一点集中で虚無をぶつければ、体の奥まで届くかもしれねえから」
ア「そうか。成程ね」
高「それじゃ、刺した時に頼むぜ」
高雅は地面を蹴り、エガルに近づく。
幸い、エガルはまだ目を回していた。
高「こりゃ、すぐに作戦を実行できそうだ」
高雅はまだ視界が回復していないエガルの腹へ剣を突き刺した。

ズブッ・・・

その異常な肉質の前では鋭い剣でも1センチ程しか刺さっていない。
だが、作戦を実行するにはこれで十分だった。
ア「・・・よし、もういいよ」
高「オッケー」
アリアの完了の言葉を聞き、高雅はエガルを見失わないようにバックステップで距離を取る。
高「よし、爆破の力！！」
高雅はさっき注入した力の名前を叫んだ。
エ「ウ・・・ウウ？・・・・」
エガルも何か体の異変に気付いたように自分の腹を見る。
その腹はまるで水が沸騰したかのようにボコボコと沸騰していた。
エ「ウ・・・ウウウウウウウウウウウ・・・」
次第に腹の沸騰は激しくなり、エガルも苦しみ始めた。
高「効いたか！？」
ア「多分。でも、油断できないよ」
高雅とアリアもエガルが初めて身体の痛みで苦しんだ姿を見て、期待と不安の狭間（はざま）にいた。
エ「ウ・・・ウウ・・・」

しかし、腹が張り裂ける寸前で何故か腹の動きが鈍くなる。
次第に、腹の動きが止まってしまった。
高「おい、効いてねえのか!?」
エ「ウ・・・・・・ウップ・・・」
エガルが次に、喉に何か詰まらせたかのように苦しみ始めた。
エ「ウウウウ・・・オエェェェェ・・・」
そして、気色悪い液体を吐き出した。
それは赤と黒が混ざったこの世のものとは思えない液体だった。
高「おい・・・まさか、爆破の力を・・・」
ア「あの液体に・・・変えた!?」
そのような根拠は何処にもありはしない。
もしかしたら、黒みが掛かった血かもしれない。
だが、エガルの状況と吐き出すタイミングによって、その仮定は即座に切り捨てられた。
高「こいつ、不死身か!?」
ア「色んな力が通用しないなんて・・・」
エ「ウワ・・・ウワアアアアアアアアアア!!」
エガルが突然叫び、あたりは地鳴りが響いた。
高「今度は何だよ!?」
ジッとエガルを見ていたが、エガルは音を立てず一瞬にして姿を消した。
高「消え・・・じゃない!!」
そう判断した高雅は速度の力で後ろへ高速跳躍した。
その刹那、高雅のいた場所の床が破壊され、下の階まで繋がった。
ア「何!?。何なの!?」
高「よく分からねえが、ステルス状態って訳だ。多分、空間の力の応用だろ」
ア「そんな・・・どうしていきなり力を上手く使えるようになったの!?」
高「こっちが知りてえよ。もう、あいつに普通は蚊帳の外だ。何が

起きてもおかしくねえ」
高雅は説明している間も速度の力で逃げている。
高雅が一瞬着地してまた跳躍するたびに、着地した場所に穴が開けられてゆく。
ア「コウガ、行き止まり！！」
高「げっ！！、やべえ・・・」
逃げていると、運悪く行き止まりに追い詰められてしまった。
高「こうなりゃ・・」
高雅は壁に着地するとすぐに、反射するように来た道の隅に向かって蹴った。
頬に風邪を感じた瞬間に壁には巨大な穴が開けられた。
高「よし、Uターン完了」
少し勝ち誇ったように呟いた高雅は来た道を同じ速度の力で戻って行く。
だが、高雅は既に負けていた。
高「・・・うおっ！？」
突然、何かに引っ張られるようにして足が止められた。
足だけではない、手も体も頭も全て止められてしまった。
高「何だ！？、体が動かねえ！？」
エ「フフフフ・・・・」
エガルの不気味な笑い声が聞こえた瞬間に、高雅の視界にあるものがゆっくりと映って行く。
高「ッ！？、これは！？」
見えてきたのは高雅の体に巻き付いていたもの。
それはエガルの飛び出ていた血管だった。
高「おわ！？」
血管は高雅を掴んだまま引き戻され、高雅はエガルの目の前に倒れた。
エ「・・・フフ・・・」

ドスッ！！

高「ぶはっ！！」

エガルはその巨大な足で高雅の腹を踏みつぶした。

高雅は辺りに大量の血を吐き散らした。

エ「オマエノ　セイデ・・・・」

高「ッ！？」

エ「オマエノ　セイデ　オレハ　コンナ　ミニクイ　スガタニ」

ア「まともに喋ってる！？」

高「テメー・・・意識が戻ったのか！？」

エ「オマエノセイデ・・・ウラミヲハラサセテモラウ」

エガルは高雅の質問に答えず、ただ高雅に対する憎しみを晴らすべく、足に力を入れてゆく。

高「あがががが・・・・」

ア「コウガ！！。くそ、何で力が入らないの！？」

エ「ムダダ。ソノケッカン　ニハ　セイジャクノ　チカラガ　アル。テイコウノ　スベハ　ナイ。シネ！！」

足の力は高雅を伝い、床にミシミシと罅（ひび）を入れてゆく。

高「く・・・・・そ・・・・」

エ「シンデモ　サイセイ　デキルト　オモウナ。オマエノ　ツギハ　ソノ　ツカイノ　イノチヲ　ウバウ　カラナ」

もう、高雅になす術（すべ）は残っていなかった。

エ「モット　イタブリタイガ　マダ　コロスモノガ　イル。コレデ　ツカイ　トモドモ　オシマイダ」

エガルが巨大な腕に無数の刺を創り付け、振り上げる。

高「チクショー・・・さすがに・・・ダメか・・・」

高雅はもう諦め、死を覚悟した。

ア「ダメだよ高雅。諦めたらダメ！！」

高「アリア・・・」

エ「オジョウギワノ　ワルイ　オンナダ。コノ　ジョウキョウデ

ドウスルノダ？」
？「ならば、これでどうだ？」
高・ア「！？」

シュシュシュ・・・

突然、無数の一閃がエガルの体を細切れにした。
ボトリボトリと肉体が血を垂らしながら地面に落ちてゆく。
エ「ウギャアアアアアアアアア」
高「な・・・何だ！？」
高雅は無数の血管から抜け出し、何が起きたか辺りを見回す。
すると、少し離れた所に誰かが立っていた。
フ「大丈夫です？、コウガ様？」
高「フィーラ、起きたのか」
フ「はいです。自分の夢幻をはね変えさせれるとは、情けなかったです」
そう言ってフィーラはショボンと首を落とす。
高「おいおい、そんなことを気にするなよ。それより・・・」
高雅はフィーラから視界を上げてゆく。
そこには見ず知らずの人が立っていた。
高「なあ、その人は・・・」
と、指を指しながら誰かに問う。
それは、黒いスーツを着た長身の男だった。
？「指を指すとは失礼ではないか？」
高「あ、すみません」
フ「ぷぷぷぷ・・・」
高雅は素直に頭を下げたことに、フィーラが口元抑えて笑いを堪えていた。
ア「何だろう？、初めてなのに初めて会った気がしない」
？「アリア殿はいい感をしているな」

高「ん?、殿?。まさかまさかのまさか・・・」
レ「コウガ殿が思っている通りだ。我はレオだ」
高・ア「嘘ーーーーーーーー!?」
フ「あははははははは・・・」
フィーラは予想通りのリアクションだったのか、腹を抱えて笑いだした。
高「え・・・ちょ・・・形状変化ができたのかよ!?」
レ「我の能力はまだ一部しか見せておらぬ。この姿は戦いに特化した姿だ」
高「スーツが戦いに特化してるのか?。むしろ逆じゃね?」
エ「キサマラアアアアアアアアアア」
姿が変わっても、相変わらず空気にされ続けるエガルは体の再生をし終えていた。
高「何だよ、まだ質問は終わってねえのによ」
エ「ダマレ!!。イマスグニ　コロシテ　ヤル!!」
レ「コウガ殿、ここは我に任せてくれぬか?」
高「悪いけど無理。あいつに負けたまま引けるか」
レ「ならば、共に闘うか?」
高「ま、それなら秒殺できそうだな」
エ「ナメルナ!!」
エガルはまた姿を消した。
高「レオ、場所は?」
レ「ゆっくり、と近づいて来ている」
高「そうか」
レオはわざと“ゆっくり”を強調させて言った。
高雅は敵の居場所を聞くと、両剣に力を入れ始めた。
高「それにしてもレオ、どうやってあいつを斬ったんだ?。刃物も見えにねえし、何よりあの肉質を?」
レ「我が力を見ることができるのは知ってるな?。それと同時にその流れも見ることができるのだ。我はただ流れが緩い所目掛けて斬

ったただけだ」
高「成程な。じゃあ、斬ったものは？」
レ「そのようなものはない。この手で斬ったのだ。それに、先ほどの速さも全て自分の潜在能力だ」
高「すご。本当に俺を越えているな」
レ「だが、すぐに追い抜かれてしまう。コウガ殿は我を超える潜在能力を秘めている」
高「ふ～ん・・・っと、そろそろ、いい頃合いかな？」
そう言って、レオから誰もいない行き止まりの方へ体を向ける。
高「レオ、力の流れが一番強い所はどこか？」
レ「左胸辺りだ」
高「じゃあ、そこに宝石があるだろうな」
そう推測すると、高雅は地面に片方の剣を刺した。
そして、もう片方の剣を両手で持ち、誰もいない道へ剣先を向ける。
高「あいつの失敗はゆっくり来たことだったな」
レ「コウガ殿、敵が走り出したぞ」
高「もう遅い。純度１００％の虚無を喰らえ！！」
それは細いレーザーのように放たれ、透明なエガルの左胸がある所へ走った。
エガルは反応が遅れ、避けることができなかった。
透明になった姿も実態を現し始めた。
そして、虚無は正確に左胸を突いていた。
エ「ウガアアアアア・・・コノ　テイドデ・・・・」
だが、虚無のレーザーはエガルの肉体を貫いていない。
それでも、高雅は微動だに動揺しない。
むしろ、こうなると分かっていたようだった。
高「アリア、もう片方に溜めた虚無をこっちに送れ！！」
ア「分かった」
アリアは先ほど床に刺した剣に溜まってあった虚無をレーザーを放っている剣へ送った。

レーザーは見かけ上は変わっていないが、エガルは苦しい顔をし始めた。
エ「ウグ・・・バカナ・・・アリエナイ!!」
次第に左胸が窪(くぼ)んでゆき、遂に向こう側へと繋がった。
エガルはゆっくりと倒れ、地面に着く寸前で消えてなくなった。
それと同時に、地面から生えた壁も姿を消した。
高「ふう、終わった。レオのお陰だ、ありがとな」
高雅がレオの方を向くと、レオは既にいつもの姿に戻っていた。
レ「我は隣で敵の状態を報告していただけにすぎん」
高「だから、あんなに力を溜めることができただろ。お前がいなかったら、わざわざ波動を打ち続けて場所を確認しなくちゃならないから、奴を貫くほどの力が入らない。だから、お前のお陰だ」
レ「そうか。なら、素直に感謝を受け取ろう」
フ「それじゃ、後はあのツルツルだけです。最後の戦いにゴーです」
高「締めが取られたな」
フ「ボクを空気にした罰です」
ア「あはははは・・・」
高雅達は階段へ行き、ウルザスがいる場所へ向かった。

## 緑の復讐編　その１３、主人公＜獣（後書き）

カタカナの所は読みやすいと思って空欄を開けてみました。
読みやすかったら幸いです。
その逆でしたら、すみませんでした。

# 緑の復讐編　その１４、晩餐前

階段を駆け上がること5分。
窓が無いのか、上階へ行くにつれて視界が暗くなり始めていた。
そして、上へと続く階段は無くなり、そこには扉が一つあった。
高「そぉい！！」

ドガッ！！

高雅は走った勢いで扉を蹴り壊した。
その中は薄気味悪いほど暗く、ギリギリ部屋を見通せる程の明るさしかなかった。
凛・龍「高雅さん（君）！？」
高「ッ！？、龍子！！、凛！！」
高雅は二人を見つけると、瞬間で二人に近づいた。
そして、ロープを断ち切り、二人を解放した。
高「大丈夫か、二人とmうわっと！？」
二人は解放された瞬間に高雅に向かって抱きついてきた。
高雅は突然の事に驚きながらも、二人を受け止めた。
そのまま、二人は涙を流し始めた。
龍「・・・怖かった・・・」
凛「目の前で人が人でなくなるような事をされて、もう拷問でしたわ」
高「・・・ゴメン、二人共」
？「女を泣かせるとは、情けないのぉ」
高「・・・ブチ」
高雅は二人を優しく押しのけ、振り向くと同時に双剣を構え、声の本人に睨みつける。
高「誰の所為だ！！、誰の！！」

その目先はウルザスに向けられていた。
ウ「はて、誰の所為かのぉ？」
高「殺す！！」
高雅はその場から消え、既にウルザスの目の前で剣を構えていた。
だが、ウルザスは避けるようなことをせず、その体で剣を受け止めた。
しかし、ウルザスは傷一つ付いていなかった。
高「なっ！？」
ウ「その程度かのぉ。ほれ」
ウルザスは目の前に手をかざすと、波動を放ち、高雅を吹き飛ばした。
高「うおっ！？」
高雅はその波動で吹き飛ばされたが、上手く着地し、ダメージは無かった。
高「このっ！！」
高雅は、またすぐに速度の力で奇襲をしようとしたが、レオが高雅の腕を甘噛みし、止めさせた。
レ「落ち着くのだ、コウガ殿。まだ敵の力を把握しておらぬのに、無暗（むやみ）に攻撃するのは危険すぎるぞ」
高「じゃあ、どうするんだよ？」
レ「奴はまだ戦う気が無い。話をして奴の情報を少しでも多く取り込むのだ」
高「・・・わーった。やってみる」
高雅は自分の殺気を消して、ウルザスに聞いてみた。
高「おい、テメーが今回の黒幕だろ。目的は何なんだよ？」
ウ「・・・よかろう、話してやろう。わしの目的は3つある」
ウルザスは隠すことなく、全てを話し始めた。
ウ「一つは人間を裁くことだ」
高「ふ～ん、何で？」
高雅は興味なさ気（げ）に聞く。

ウ「人間は分かっておらぬ。自然こそが偉大なる神だと言うことが」
高「つまり、お前は自然を神と言う意味不明な信者って訳か」
ウ「なら、小僧は自然が全て無くなってしまえばどうなるか分かるのか？」
高「死ぬだろうな」
ウ「そうじゃ。それでも、人間は自然を破壊し、己が住みやすくするためがだけに自然を破壊する。だから、わしは人間を思い知らせるのじゃ」
高「あの虫や植物を使ってか？」
ウ「そうじゃ。人間に自然の怖さを思い知らせ、さらに自然を増やすと言う一石二鳥の策じゃ」
高「天界の植物や虫を現世に持ってくるなよ。食物連鎖とかが崩れるぞ」
ウ「関係無いのぉ。最早、それは人間によって崩されたものもある。新しくやり直すため、天界のものを持って来たのじゃ」
レ「その前に、どうやって天界のものをこちらに持って来たのだ？。普通、そのようなことが起きれば天界も気付かない訳がない」
ウ「もうできないが、わしら三人はそれぞれある力が長けていてのぉ。それを駆使すれば容易いことじゃ」
高「え～と、インジが消失で、エガルが変換、んでもって、ハゲが・・・何だっけ？」
ウ「わしは交換だ。もう、お前の挑発には乗らんぞ」
高「ちぇ、少しはキレろよ」
とか言いつつも、高雅はウルザスの得意な力を知ったことを、その脳に収納していた。
レ「それで、その三つの力でどうやって現世に送ったのだ？」
ウ「簡単なことよぉ。ここと同じ系統の生き物を天界と同じ価値に変換し、わしがそれを交換する。そして、交換する際に発声する力の動きが気付かれないように、その動きを消失する」
高「きれーに三人の力を使ってるな」

フ「待つのです。まだ二つしか聞いてないです。三つ目は何です？」
フィーラが急かすようにウルザスに聞くと、ウルザスはその場から消え、気付いた頃にはフィーラの目の前にいた。
ウ「それは、お主が関係してるんじゃ、楽園の者よ」
フ「！？」
フィーラが突然目の前に現れたウルザスに怯むと、ウルザスはフィーラの心臓目掛けて腕を伸ばしてきた。

パシッ

だが、高雅もウルザスのすぐ近くに移動し、ウルザスの伸ばす腕を掴んだ。
龍子と凛は一体、何が起きたのか分からず、目を丸くして見ていた。
ウ「邪魔をするな、小僧」
高「一般人の前で殺しを見せたくないからな」
ウ「先ほど、わしを殺そうとしたではないか」
高「あれはノーカンで」
ウ「やはり、人間は勝手な生物じゃ」
高「そう言うお前も勝手な生物だ」
互いに睨みあい、動きが無い。
しかし、レオがウルザスの後ろから飛びかかっていた。
ウ「ふん」
ウルザスが短く鼻で笑うと、高雅が腕を掴んでいるにも関わらず、その場から消えた。
しかし、高雅のさっきまで掴んでいた手の中には三つの宝石が握られていた。
高「宝石と場所を交換したか」
ウ「その通りじゃ」
何処からともなくウルザスの声が聞こえた。
高「おい、何処にいやがる！？。出てきやがれ！！」

ウ「焦るでない。すぐに三つ目の目的を見せてやろう」
高「何!?・・・うぐ!?」
突然、高雅の視界が歪みだした。
景色はぐちゃぐちゃになり、どっちが天でどっちが地が区別できなくなっていた。
高「くそ・・・何なんだこりゃ!?」
次第に高雅の脳が混乱を起こし、吐き気が襲って来た。
高雅は耐えきれず、目を閉じた。
そして、再び目を開けた時には、すでにさっきとは別の場所にいた。
高「なっ・・・何処だ、ここは!?」
その場所は、一直線の巨大な廊下みたいで、両サイドには人間が一人入るぐらいのカプセルが永遠と並んでいた。
電気は無く、明かりはカプセルの中にある緑色の液体が発している明かりだけだった。
ウ「ここはわしの倉庫じゃ」
ウルザスが闇へと続く廊下から姿を現し、ゆっくりと歩いて来た。
ア「一体、何の倉庫なの?」
ウ「それはのぉ・・・」
ウルザスは無数のカプセルの中の一つに手を置き、アリアの問いに答えた。
ウ「楽園の者の心臓じゃ」
高・ア・レ・フ「!?」
高雅達は驚き、再び辺りを見回す。
高「これ全部、楽園の奴の心臓かよ!?」
レ「こんなに多くの心臓を・・・」
ウ「これほど集めるのは苦労したわい。だが、その苦労は全て力へと変わったがのぉ」
そう言って、ウルザスはカプセルの近くにあったボタンを押した。
すると、蛇口のような所から不気味な液体が出てきた。
高「それ・・・力か」

ウ「そうじゃ。わしが研究して、心臓から力を取り出すことに成功したのじゃ」
ア「そんな・・・でも、楽園の者にはガーディアンが付いているはず。こんなに集めるなんて・・・」
ウ「わしはそのガーディアンじゃ」
ア「え!?」
アリアは声に出して驚いているが、他も（龍子と凛は除く）内心驚いている。
ウ「わしら三人は楽園の者を探しては殺していたのだ。ガーディアンも複数で襲えばか弱いものだ」
ア「そんな・・・ガーディアンのあなたがどうして自分の守るべき者を!?」
ウ「わしは交換の力のガーディアンじゃ。ある時、奴は甘い考えを持っておってのを知ってのぉ、その甘い考えのままだと叶わぬ夢となりそうだったのじゃ。だから、わしが変わりに奴の夢を叶えるべく、奴の心臓をわしが食べたのじゃ」
高「何だよ、その夢ってのは?」
ウ「人間と自然の調和じゃ」
ア「そんな素敵な夢を持ってるのに、何故殺したの?」
ウ「ならば問おう。小僧どもは聞き分けのないものをどうするか?」
ア「えっ・・・」
ウルザスの突然の問いに、アリアは戸惑い、他も答えることができなかった。
ウ「ふっ、所詮、その程度の考えだ。悩んだ所で何も生まれぬ。奴は悩みに悩み、答えを生み出さなかったのじゃ。だから、わしが変わりに行動にでたのじゃ」
高「ま、その一論はあるな。それで、本題の3つ目の目的は何だよ?。これと関係があるんだろ?」
高雅が無数あるカプセルの中で適当に一つ選び、指を指しながら聞く。

ウ「楽園に語り継がれている事がある。それは、セイクリッドだ」
高「せいくりっど？」
ウ「１億の魂と楽園の心臓を捧げることで開かれる幻の聖域じゃ。そこに眠る、神をも超越する力を手に入れ、わしが世界を完璧に作り直すのじゃ」
フ「セイクリッドなんて、おとぎ話の中の話です。実際にある訳がないです」
ウ「それが、これを見てからはそうもいかなくてのぉ」
ウルザスはいつの間にか持っていた本を見せびらかす。
フ「それは何なのです？」
ウ「楽園について書かれた古文書じゃ。解読に手間が掛かったが、この古文書に書いてあったんじゃ。セイクリッドについて」
高「ふ～ん」
高雅は興味なさ気に相槌を打つ。
ウ「さて、わしの趣向が分かったのかのぉ？」
高「まとめると、人間を殺して、自然を増やして、力が欲しい、老いぼれってことか」
ウ「お主のその思考方法、少し改善せねばならぬな」
すると、再び景色が回りだし、元いた薄暗い部屋に戻った。
高「うえ・・・気持ち悪い・・・」
高雅は先ほどの視界で脳が少し酔ってしまった。
ウ「そろそろ、お主らの魂と楽園の心臓をもらおうかのぉ」
ウルザスは指をパチンとならす。
その瞬間に、壁と天井が消えてゆき、部屋が空中へはだけ出されてしまった。
そこから見えた地上までの距離は２００メートルはあった。
高「ヒュー、気持ちのいい風だぜ」
高雅は少し前まで忘れていた外の空気を堪能していた。
ウ「さあ、覚悟はできたかのぉ」
ウルザスはゆっくりと浮遊していく。

高雅は双剣を構え、レオは喉を鳴らしながら睨みつける。
高「レオ、お前はフィーラと龍子達を安全な場所に避難させといてくれ」
レ「分かった」
フ「待つです。ボクも戦うです。逃げたくないです」
高「おいおい、お前は狙われてるのだぞ」
フ「でしたら、コウガ様も同じです」
高「まあ、そうだけど・・・はぁ、しゃーね」
高雅は反論するのを止め、ウルザスに向き合いながら言う。
高「あんまり控えとけよ。無暗に動いたら助けられるのも助けられねえからな」
フ「助けてくれるです?。嬉しいです」
高「別にお前の為じゃなくて、龍子や凛に血を見せたくねえだけだ」
ア「ほんと、ツンデレね」
高「るっせーーーーーー」
レ「ここに来て、この緊張感とは、コウガ殿も凄いな」
レオも鼻で笑いながら口を挟んだ。
高「あーっもう、さっさと言われた通りに動きやがれ!!」
この光景を見て、龍子達は少し笑っていた。
ウ「さて、宴を始めようかのぉ」
高「最後の晩餐(ばんさん)、しかと楽しめよ!!」

最後の戦いの幕は開かれた。

## 緑の復讐編　その15、VSハゲ

高雅はウルザスへ瞬間移動し、レオは龍子と凛を離れさせ、フィーラは待機していた。
高「おらぁ！！」
高雅は真後ろから剣を振るうが、既にウルザスは消えていた。
ウ「遅いのぉ。ほれ」
ウルザスは同じように波動を高雅にぶつける。
だが、高雅は何も言わず、ただ吹き飛ばされる。
ウ「？」
ウルザスは威力が低かったかと思ったが、その考えはすぐに取り消した。
高「もらった！！」
ウ「ほぉ」
ウルザスが吹き飛ばしたのは創造で創られた偽物。
本物は同じようにウルザスの後ろを取っていた。
ウ「二段構えとは、考えたのぉ」
ウルザスは焦る様子も見せず、ただ評価の言葉を述べる。
ウ「だが、後ろが得策だとは、決まってないぞぉ」
高「何！？」

ザシュッ！！

高「がっ！？」
高雅が剣を振り切る瞬間に、突然ウルザスの背中から無数の刺が生え、高雅を串刺しにした。
心臓に、頭に刺さり、血を大量に撒き散らし、高雅は完全に息絶えた。
高雅は力を無くし、刺されたまま双剣を静かに落とした。

ウ「呆気ないのぉ」
ウルザスは背中に生やした刺を消し、高雅を地上に落とした。
ウ「さて、次は楽園の方だのぉ」
ウルザスがフィーラの方を向こうとした瞬間・・・
ウ「!?」
突然、別の方から莫大な力を感じた。
ウルザスは反射的にそちらに振り返る。
そこには・・・
高「あっ、バレた」
いるはずもない、高雅がいた。
少し離れた空中に足場を創り、そこで剣に虚無の力を大量に込めていた。
ウ「貴様、何故!?――」
高「生きているのかって聞きたそうだな。まあ、お前が今狙おうとした方を見れば分かるんじゃねえか」
ウ「何じゃと!?」
ウルザスはさっき中途で止めた振り向きを続行し、フィーラの方を見た。
フィーラは口元を緩ませ、浅く笑っていた。
ウ「おのれぇー。老人を騙すとはー」
高「それにしても、フィーラ。夢幻がやられるの、早過ぎ」
フ「あみゅ～・・・ごめんなさいです♪」
フィーラは罪悪感を感じてないように、舌を出しながら謝罪する。
その表情は騙された者をものをあざ笑うかのようだった。
てか、そうである。
ウ「なら、これでどうじゃ?」
フィーラの挑発に乗らず、ウルザスは自分の指を植物のツタに変え、高雅とフィーラに向かって襲い掛かって来た。
高「なっ、変換か!?」
フ「あみゅ!?」

突然の事に驚きながらも、高雅は対処していく。
高「アリア、虚無のチャージを中断。目の前の奴に集中だ」
ア「うん、分かった」
溜めた虚無の力を片方の剣に溜め、もう片方で向かってくるツタを斬り刻む。
ウ「ほう、こっちはやるようだが、もう一方は情けないのぉ」
高「何!?・・・あっ!?」
高雅がフィーラの方に目をやると、フィーラはツタに捕まっていた。
フ「みゅみゅみゅ!!、放すです!!」
ウ「心臓を抜きとってからのぉ」
フ「みゅ!?」
フィーラの目の前には、今にも貫かんとする先が鋭利なツタがあった。
ウ「まずは、息を絶やすかのぉ」
その尖ったツタはフィーラの首を狙って迫って来た。

ザシュ!!

フ「!?」
レ「怪我は無いか、フィーラ殿?」
フィーラはいつの間にかツタから抜け出し、戻って来たレオの背中に座っていた。
フ「ありがとうです」
ウ「くそ、小癪(こしゃく)な」
高「・・・準備完了」
ウ「!?」
声がした方を向いたが、そこに高雅はいなかった。
ウ「どこじゃ!?、何処にいる!?」
高「右、いや、左だったり、はたまた上だったり、それとも、下?」
高雅は曖昧な答えでウルザスを混乱させる。

そこに高雅はいないのだが、言葉の一節一節が様々な方向から聞こえる。
ウ「く、声を様々な所に創りよぉて」
高「敵を翻弄するなら当然だろ」
ちなみに、今の声は真上から聞こえたもの。
ウ「小癪な真似をぉ」
高「連係プレイと言って欲しいものだ」
レ「ガオオオ！！」
レオが雄叫びをあげながらウルザスに飛び掛かる。
ウ「鬱陶しいのぉ！！」
ウルザスは迎撃の体勢に入るが、レオは突然、空中で方向転換し、ウルザスから離れた。
ウ「何！？」
レオの意外な行動にウルザスは目で追う。
その刹那だった。
高「散れ」

ドヒュウ！！

ウルザスの真下から極太なレーザーが発射された。
ウ「うがあああああああああああ」
ウルザスはもろに喰らい、跡形もなく消えた。
高「よっと。作戦成功だな」
下のフロアにいた高雅が虚無のレーザーで開けた穴から飛び出てくるとそう言った。
フ「ボク達のコンビネーションは無敵です」
レ「我も初めてにしては、動けた方だった」
ア「これで、平和な日常が戻ってくるね」
高「俺にとっちゃ、お前らの存在が日常じゃないんだけどな」
ア「それは別」

高「ひでーな」
フ・レ「あはははは」
高雅達は勝利を味わうことなく、ただ談笑し、笑い合っている。
それは、一時の休憩にすぎないが。
ウ「それで勝ったつもりかのぉ？」
高・ア・フ・レ「ッ！？」
消えたはずの声が聞こえ、高雅達は再び身構える。
高「ちぇ、前回みたいにラストは呆気なく飾ろうとしたのによ」
ウ「少し手を抜けばいい気になりようて、わしの本気を見せてやろうぞ」
その言葉が合図かのように、突然タワーが揺れ始めた。
高「おっとっと、何だ！？」
レ「コウガ殿、このタワーから力が見えるぞ」
高「何！？・・・ん、何だ！？」
さらに、タワーは揺れと同時に徐々に変化を遂げてゆく。
高「何か、ここは危険そうだな。一旦引くぞ」
レ・フ「分かった（です）」
フィーラはレオの背に乗り、高雅はレオに速度の力を吸収させると、一瞬にしてこの場を離れ、空中へ出た。
レ「コウガ殿、あのビルの屋上へ行くぞ。あそこにはリュウコ殿とリン殿がおる」
高「オッケー」
高雅達は振り返ることなく、指定されたビルの屋上へ向かった。

一方、こちらはと言うと・・・
凛「あれは・・・何ですの？」
龍「タワーが・・・揺れて・・・変わっていく・・・」
タワーの謎の光景をこっちからでも見ていた。
すると、タワーから2つの影が飛びだした。
龍「あれ・・・何か来る・・・」
凛「まさか・・・虫！？」
何か分からない影をジッと見る。
しかし、影は風に飛ばされた灰のように消えた。
それと同時に・・・
高「到着っと」
龍・凛「きゃっ！？」
龍子と凛の目の前に高雅達がいきなり現れた。
龍「高雅・・・君？・・・」
高「俺以外に誰だって言うんだ？」
凛「じゃあ、戦いは終わりましたの？」
高「まだ、何か危険そうだったから、一時撤退した訳」
そう言って、自分が出てきたタワーへ振り返る。
高「それにしても、あんな変化を遂げるとは・・・」
鉄の塊であったタワーは巨大なツタが絡まったタワーに変わっていた。
すると、タワーから無数の虫が飛び立ち、高雅達の方へ来た。
高「そろそろ、行ってくるか」
龍「もう・・・行くの？・・・」
高「ああ、ここにいたらお前らが危ないからな。なーに、ハゲじじいに負けるような俺じゃねえよ」
凛「それでも、気を付けてください。油断大敵と言うものがありますわ」
高「はいはい、わーってるって。・・・」

龍「？・・・どうしたの？・・・ボーっとして・・・」
高「ん・・・いや・・・二人が無事で良かったっ・・・てぇ！？」
高雅のふと零した本音を聞いて、二人は驚きつつ、赤くなっていた。
高雅自身も何故言ってしまったと驚いていた。
ア「コウガも遂にツンデレ卒業かな」
高「黙れ！！。別にほんの少ししか思ってなかっただけで、それほど大きな意味は無い！！」
ア「それは、無理な話だよ。あんなセリフ聞いたら、ね？」
レ「そうだな」
フ「コウガ様は優しいです」
高「くそ～・・・何で俺はあんなことを言ってしまったんだ／／／」
ア「まぁまぁ、過ぎたことはしょうがないってことで」
高「ざけるなあああああああああ」
フ「でも、コウガ様の自業自得です」
ア「だよね」
レ「それよりも、来るぞ！！」
レオが注意を促した時には、既に周りに巨大な蜂が囲んでいた。
高「だー！！、テメーらがあーだこーだ言うから敵が来たじゃねえか！！」
ア「私達の所為！？。高雅があんなこと言ったせいでしょ！？」
レ「そんなことより、敵は目の前だぞ！！」
高「あー！！、もう！！、色々と鬱陶しいな！！」
高雅は自分の撒いた種にイラつきながら蜂を斬り伏せた。
はっきり言えば、八つ当りである。
しかし、蜂は攻撃するより、避けに専念している感じだった。
レ「この虫ども、時間稼ぎをしておるのか？」
高「だったら、時間稼ぎをさせないように、切り抜けながらあっこに戻るまでだ」
レ「ふっ、そうだな。虫は我とフィーラ殿に任せておけ」
フ「コウガ様はあっちに行くです」

高「サンキュ。任せたぜ」
高雅は強行突破を図り、蜂を無視するように変化を遂げたタワーに向かった。
蜂は高雅を追おうとするが・・・
レ「貴様らの相手は我らだ」
レオとフィーラがすぐに立ち塞がった。
フ「ボクの夢幻を」
レ「我の牙を」
レ・フ「受けてみよ（です）」

高雅は絡みあった巨大なツタに近づいたものの・・・
高「これ、どうすればいいんだ？」
何をすればいいか迷っていた。
ア「・・・焼く？」
高「また、適当な」
ア「だって・・・じゃあ、どうするの？」
高「それを考えてんだろうが」
ウ「考える必要などない」
高・ア「！？」
何処からとも聞こえるウルザスの声。
それは、ツタの中から聞こえているのは確かだった。
高「じゃあ、焼こう」
ウ「焼けるものなら焼いてみるがよい」

高「火種投下！！」
高雅は溶岩の塊をツタの真上に創りあげ、後は重力落下に任せる。
溶岩はツタを伝いながら滴り落ちるが、ツタは微動だに変わらない。
高「あちゃー、もう植物でも何でもねえ。単なる化け物ツタだな」
ウ「自然は最強だからのぉ」
ア「・・・それって理由になってないと思う・・・」
高「激しく同意」
ウ「ならば、どうする？」
高「ん～・・・よし」
高雅は顎に手を置いて考える素振りをして、数秒で手のひらを叩いた。
高「本気だす」
高雅がそう言った瞬間、不可視の闇が高雅を包み込んだ。

# 緑の復讐編　その16、集合

高雅があの言葉を喋った瞬間、高雅の雰囲気はどことなく変わった。
ア「あれ、高雅の静寂が消えた!?」
アリアは戦いの時、常に高雅の闇に静寂を掛けていたが、それが突然消えてしまった。
ア「嘘!?・・・静寂が消される!?」
アリアは何度も何度も高雅に静寂を掛けるが全て消されてしまっている。
まるで、高雅がそれを拒絶しているかのように。
ア「コウガ!!、コウガ!!」
高「さっきからうるせえなぁ」
ア「だって・・・コウガが――」
高「安心しろって、2・3分は持つから」
ア「そうじゃなくて・・・いや、それもあるけど」
高「何だよ、一体?・・・っと、それよりも、仕掛けて来たようだ」
ア「えっ!?」
意識をウルザス（てか、ツタタワー）に戻すと、枝分かれするように無数の細いツタが高雅の方に襲って来ていた。
高「それじゃ、木っ端微塵に切り刻んでやるか」
薄気味悪い笑みを浮かべた瞬間に、神速の速さでツタを迎撃した。
ウ「!?、一段と速くなっておる!?」
高「たははは、どうしたじじい?。ビビったか?」
高雅が挑発染みた口調でウルザスに問う。
ウ「笑止、たかが速くなっただけでわしの本気に敵(かな)うとでも思っているのかのぉ?」
高「そうか、速さだけじゃ足りないか・・・」
ウ「そうじゃ。速さでこのツタを斬ることは不可能じゃ」
高「ふっふっふっふ・・・」

自信気に反論するウルザスだったが、高雅は笑っていた。
ウ「何処が可笑しいのじゃ？」
高「全部だよ、全部。お前の存在も頭も見かけも」
ウ「小僧、老人を何だと思っておる？」
高「さぁー？」
ウ「調子に乗りようて」
高「ひゃはははは！！」
ア（・・・コウガ・・・）
高雅はツタをすり抜けるように近づいてゆく。
全てのツタを紙一重で避け、さらに活性の力で腕の筋力を上げていく。
高「真っ二つだ！！」
ツタタワーとの距離が無くなった瞬間、渾身の力で叩き斬ろうとした。

ガッ・・・

高「あり？」
巨木なみのツタは斬ることができず、ただ傷を付けただけだった。
ウ「そんな、ぬるい攻撃で切断など出来る訳がなかろう」
高「・・・切断はな」
ウ「？」
高「今に分かる」

ピキ・・ピキキ・・・

高「へへ」
高雅が微笑を浮かべた瞬間、斬った所から亀裂（きれつ）が入っていった。
ウ「バカな！？」
高「バカはオメ―だ、ハゲ。脳が老化したか？」

亀裂は次第に大きくなり、斬った場所がポロポロと欠け始めていた。
ウ「速さだけでなく、力も上がったのか？」
高「ひゃははは、本気の俺は誰にも負けはしねえ！！」
ア「コウガ、本当に大丈夫？」
高「黙ってろ。まだ1分も経っちゃいねえ」
ウ「黙るのは小僧じゃ」
高「何！？・・・なっ！？」
突然、高雅が斬った所から無数の細いツタが出てきた。
高「くそが！！」
間近に関わらず、高雅は何とか反応し、数本は斬り伏せることができた。
しかし、たかが数本で無数を何とか出来る訳ない。
残った無数が高雅の体を拘束していく。
ウ「ほほ、甘く見たのぉ」
高「この、放せや！！」
ウ「あきらめろ。抗った所でそのツタから抜け出せぬ」
高「だったら、斬る！！」
ウ「どうするのじゃ？。身動き一つ取れぬのに」
高「俺はな」
ウ「何？」
高雅は周りに自分の分身を数人創りだした。
しかも、剣まで分身している。
分身が本物の高雅を捕えているツタを斬っていき、呆気なく脱出した。
高「お疲れ、俺」
ウ「バカな！？、静寂が通用しないじゃと！？」
高「はぁ？、このツタに静寂があったのか？。全く感じないけど」
ウ「小僧は何者だ！？」
高「その問い、聞き飽きた。さっさと死ね！！」
高雅は再び剣に力を込める。

そして、神速の速さでツタを切り刻んでゆく。
しかし、ツタは斬れることなく、ただ傷が付いてゆくだけであった。
ウ「無駄じゃ。小僧の力では自然に勝つことなど不可能じゃ」
高「ふ～ん」
高雅はウルザスの話をろくに聞かず、移動しながら色んな所にツタを傷付けていく。
ある程度傷付けた後、高雅は一旦ツタから距離を取った。
そして、自分が斬った所を見ていくと・・・
高「・・・再生か」
傷は再生していた。
ウ「言ったろう。小僧は自然に勝つことはできぬ」
高「・・・ふふ」
高雅は傷が再生していくのを見て、突然笑い出した。
ウルザスの痛恨のミスに高雅は気付いたからだ。
高「ははははは。おいハゲ、お前バカだろ」
ウ「小僧、いい加減にせんとただでは済まさんぞ!!」
高「最初から済まさんつもりだろ。ほんじゃ、止めとす・・・くぅ!?」
突然、高雅が頭を抱え、その場に蹲った。
ア「コウガ、どうしたの!?」
高「く・・あ・・・そろそろ、限界か・・・」
ア「え!?・・・コウガ、しっかりして!!」
アリアはすぐに、高雅に静寂の力を掛けた。
しかし、それは正しい判断ではなかった。
高「!?、バカ!!、違う!!」
ア「え!?、どうしｔ〈グシャ!!〉!?」
ウ「ちっ、ギリギリで心臓を避けたか」
高雅の胸には一本のツタが貫かれていた。
高「が・・・ごば!!・・・」
ア「コウガ!!、しっかりして、コウガ!!」

高雅は痛みで声を出すことができず、血を吐くことしかできなかった。
ウ「油断大敵じゃのぉ」
高「く・・・・・・そ・・・」
高雅は血が無くなりつつあり、目まいで視界がぼやけていた。
例え、血を再生したとしても、貫かれたままならば意味がない。
ツタを抜こうとしても、既に手遅れで、力が入らなかった。
ウ「では、これで終幕じゃ」
ウルザスは無数のツタを高雅に向けた。
もう、急所を運よく外したとしても、この数では死ぬことは確定だった。
ウ「お主の都合良く力を受け付けない体質を研究したかったのじゃが、わしの怒りはそれで納まらんのじゃ。だから、――」
ウルザスは最後の言葉を行動に示した。
無数のツタが高雅に向かって伸びて来た。
ア「させない!!」
アリアが高雅の周りにシールドを創る。
しかし、シールドはいとも容易(たやす)く貫いて来た。
ア「嘘!?」
ウ「さらばじゃ。永遠に眠るがよい」

グサササササ・・・

無数のツタが貫く音が辺りに鳴り響いた。
ウ「終わったのぉ」
ウルザスは貫いた高雅からツタを抜いて行く。
だが・・・
ウ「!?、どういうことじゃ!?」
貫いたものは高雅ではなく、丸太であった。
ウ「何故じゃ!?、小僧は動けなくなった筈じゃ!!」

？「すり替えておいたのさ！！」
ウ「！？」
謎の声がした方に意識を向けると、そこには・・・
ウ「小僧、何者だ？」
ス？「情け無用の男、スパイ〇ーマ！！」
ア「いや、言ってる意味分からないよ、A君」
侍姿のAが高雅に肩を貸しながら、空中に悠々と立っていた。
とは言っても、アリアの創造のお陰で空中に立っていられるけど。
ア「それにしても、どうしてここに！？。ログナは！？」
タ「心配無用」
ロ「おーい、エイっち。早くこっちにコウガっちを運べー」
A「もうちょい、俺にかっこつけさせろよ」
声が聞こえる方を見ると、龍子達の所にログナと蓮田がいた。
ア「どうして、皆が！？。ログナも毒が治ってるみたいだし」
タ「話は後だ。主よ、早く高雅を運ぶのだ」
A「へいへい、分かりましたよー」
ウ「させるか！！」
ウルザスが無数のツタをAに向けて伸ばして来た。
しかし、ツタは途中で斬れ、力無く消えていった。
ウ「何！？」
Aとウルザスの間には一人のスーツの男と小柄なピンク髪の少女が立っていた。
それは、紛れもないレオとフィーラだ。
レ「速く、コウガ殿を」
フ「ここは任せろです」
ア「レオ君、ありがとう」
レ「この姿でも君付けをするつもりか！！」
ア「もう、慣れちゃったから」
A「任せたぞ、イケメン。そして、俺の嫁！！！！！！」
フ「ボクは君の嫁なんかじゃないです！！」

ア（イケメン、それに嫁って・・・）
アリアがそう思いながらも、Aはログナがいる所へ移動した。
ロ「よーし、俺っちの再生の出番だぜ！！」
ログナは自慢の再生の力で高雅の胸の穴を塞いだ。
龍「高雅君・・・大丈夫？・・・」
凛「生きて・・・・・いますよね？」
ロ「俺っちの再生能力は天下一品だぜ。すぐに分かるって」
ログナの言った通り、高雅はすぐに起き上がり、無事を二人に分からせた。
高「くぅ～～・・・あれ、生きてる」
ロ「大丈夫か、コウガっち？」
高「ログナ！？、それに、蓮田やAも！？。どうしてここに！？」
ロ「それより、助けられたらまずすることは？」
高「ん？・・・ああ、サンキュ、ログナ」
ロ「はっはっはっは、礼には及ばんよ」
高「偉そうにしやがって」
A「俺には礼が無いのか？」
高「はいはい、サンキュ、タイト」
タ「前に拙者も助けられた。貸しはこれで無しだ」
A「おい！！、俺は！？」
高「さーてと、落ち着いた所で聞きたいが」
A「俺は！？」
高雅はAを無視して疑問をぶつける。
高「まずは、ログナ。お前、毒はどうした？」
ロ「ライオンに食べてもらったぜ」
余りにバカな回答だったが、高雅は十分理解できた。
高「あー、成程。後はレオについて行った訳か。じゃあ、次はレオに聞かねえとな」
そう言ってレオの方を見る。
レオはフィーラと共に無数のツタを相手にしていた。

高（よく思ったら、フィーラは夢幻しか使えないよな。無生物に夢幻が通用するのか？）
そんな疑問を残しながらも、見たところ戦況はレオ達の方が上であることが分かった。
高「んじゃ、あのハゲヅタを倒すぞ。多分だけど、あのツタの核が分かった」
ア「そうなの！？」
A「そーなのかー？」
Aは手を横にまっすぐ伸ばしながら尋ねていた。
高「お前、自重しろ！！」

ガスッ！！

A「ふげっ！？」
高雅の右フックがAの顔面を捉えた！！
高「気絶しねえ程度に手加減はした。それがお礼だ！！」
A「恩をあだで返すなよ・・・」
ロ「それより、さっさと行ってやったらどうだ？」
高「そうだな。よし、行くぞ、A」
A「待ってくれよ～、まだ頬がヒリヒリするよ～」
高「知るか！！」
高雅はレオ達の所へ移動し始めた。
Aも遅れて高雅の後を追った。

## 緑の復讐編　その17、終戦（前書き）

異常に長いです。
多分、2話分ぐらい。

分ければよかったと後悔しています。orz

こんな、長ったらしい駄文を全部読んでくださるとうれしいです。

# 緑の復讐編　その17、終戦

高「おーい、レオー、フィーラー」
フ「あ、コウガ様」
レ「おお、コウガ殿。もう傷は癒えたか？」
高「見りゃ分かるだろ」
レ「ふっ、そうだな」
いつもの緊張の無い口調にレオもフィーラも安心した。
高「それにしてもよ、援護が遅いと思えば蓮田達を呼んでたのかよ」
レ「ああ、仲間は多い方が戦略も立てられると思ったのだ」
高「よく、学校にいると分かったな。どうしてだ？」
レ「フィーラ殿に案内を頼んだのだ。それに、我、一人では仲間か分からないであろう」
高「まぁ、そうだな。納得」
A「おーい、まだかー！！」
Aは高雅達がゆっくり話せるように一人でツタを斬っていた。
高「後１０分」
A「なげーよ！！」
高「おいおい、主人公に見せ場をあげてるのに、もう要らねえみたいだな」
A「前言撤回。うおおおおおおおおおお」
Aは雄叫びと共に再びツタを斬り始めた。
タ（・・・乗せられておらぬか？）
そう思っているタイトだった。
そんな思いも知らず、ただ斬って斬って斬りまくるAである。
高「まあ、バカに時間を稼がせて、俺達は作戦会議だ」
レ「どうするのだ？」
高「まず、あのツタタワーには核があると思う。理由は、ウルザスの声が聞こえるから、どっかにウルザスの魂や宝石があるだろうと

推測したから」
レ「成程、あながち間違ってはなさそうだ」
フ「で、その核は何処にあるです？」
高「一回、辺りを斬り刻んでみたんだ。そしてら、再生の場所が速い所と遅い所があった」
レ「つまり、核に近いほど再生が速いと見た訳か？」
高「その通り。それが本当かは実証できねえけど。相手は老人だ。俺みたいな若造と経験が違い過ぎる。裏をかいているかもしれないし」
ア「でも、分からない事を考えてもしょうがないよ。違ったら違ったでまた考えればいいし」
高「そうだな。変に悩んでられねえ。そこで、作戦だが――」

ゴミョゴミョ・・・

レ「分かった。それで行こう」
高「そんじゃ、行きますか」
フ「オーケーです」
ア「その前に――」
いざ行こうとした所をアリアが突然止める。
高「何だよ、せっかく行こうとしたのによ」
タイミングの悪さに高雅も少しキレ気味である。
だが、アリアはそれに関わらず、高雅の目を見て言った。
ア「その・・・もう、本気にならないで」
高「・・・・・・」
アリアの真剣な言葉に高雅も少し固まってしまう。
少しの沈黙の後、高雅が口を開いた。
高「・・・はぁ、わーったわーった。大体、もう本気になる必要は無いし」
ア「ほんと！？」

高「嘘を言うとでも思ってるのか？」
ア「・・・少しだけ」
高「ひでー」
ア「ほんとに少しだけだから！！」
高「いや、少しでも、疑うとか酷いぞ」
レ「コウガ殿」
フ「イチャイチャは終わった後です」
高「誰がイチャイチャしてんだよ！！」
ア「そんなつもりじゃないってば！！」
息ピッタリな二人に、自然と笑うレオとフィーラ。
高雅は笑っている二人に怒りをぶつけるも、相手は反省しようとしてない。
A「ぎゃあああああああああ」
ふと、Aの悲鳴を聞き、現状を再び確認する。
Aはやられ、落下して行っていた。
高「時間稼ぎ終了か。んじゃ、作戦通りに行くぞ」
レ「ああ」ア「うん」フ「はいです」
それぞれが短く返事をし、それぞれの役目を果たしに行った。
高「さあ、こっちもやるぜ、アリア」
ア「うん」
高雅も剣を構え、ツタタワーへ近づく。
その前に、時間稼ぎをしていたAの近くに寄る。
高「おい、主人公。この程度でやられてしまうのか？」
Aの傷を再生しながら呟くと、Aが目の色を瞬時に変えた。
A「まだだ！！、俺の見せ場を見せてやるぜえええええええ」
Aは張り切ってツタへ向かっていく。
そんな光景を見ながら一言。
高「計画通り」
ニヤリと妖しい笑みを浮かべている高雅に気付いたものはアリアぐらいだった。

ア「コウガ、作戦作戦」
高「わーってる。今、実行するから」
そう言って高雅もツタに近づき始めた。

ちょっと視点が変わって、レオはどうしているかというと・・・
レ「・・・・・・・」
ただ無言で、自分の手だけでひたすらツタを斬っていた。
斬ると言っても、傷を付けると同じ意味だが。
ウ「天の犬が、小賢(こざか)しい」
無数の細かいツタも無言で斬り続けるレオ。
A「おりゃりゃりゃりゃりゃりゃ」
それとは対照に声をあげて我武者羅(がむしゃら)に斬り刻んでいる。
高「ほらよ!!」
高雅も二人に遅れを取らず、双剣を巧みに使って斬り刻む。
ウ「邪魔じゃ!!」
三人からの攻撃にウルザスも惑わされ、怒りを込めていた。
三人は斬ってはまた別の場所を斬る。
それの繰り返しだった。
ウ「束でかかろうとも、わしの力で生まれた自然に勝てる訳がなかろう」
ツタも斬られては再生しの繰り返しである。
だが、そんなことは高雅だって百も承知である。
高「やはりな」
高雅はただ確認したかっただけである。
何処が再生が早く、何処が再生が遅いのか、を――。
今の攻撃でより場所が正確になった。
高「そろそろだな。レオ、A、一旦離れろ」
レ「分かった」
A「えーー、何でだよーー」

レオは素直に離れたが、Aは文句があるらしく攻撃を続けていた。
高「・・・さっさと退け」
高雅は声だけで猛獣も殺せそうなほど冷酷な声を発した。
さすがのAも殺気に震え、冷や汗を掻き、命を危険を感じた。
A「わ・・・分かりました」
逆らえば殺される。
それを察したAはすぐにツタから離れた。
高「これでよしっと」
ア「コウガ!!、前!!」
高「!?」
高雅の目の前には無数のツタが向かって来ていた。

グササササ・・・

高「がっ!?・・・」
気付くのが遅れたため、避ることができなかった。
高雅の体中に無数のツタが貫かれ、高雅は宙吊り状態になった。
ウ「ほっほっほ、若造が老人をバカにするからじゃ」
ウルザスはただ一人笑っていた。
何も聞こえない中でただ一人。
ウ「・・・?、おかしいのぉ」
何も聞こえない。
それは、本当に何も聞こえないのだ。
この悲況の中、仲間の怒りの声も悲しみの声も聞こえないのだ。
ウ「・・・!、まさか!!」
高「そのまさかだ」
高雅が少し離れた所で虚無の力を溜めていた。
そして、その隣では・・・
フ「べ～です」
片方の目元を下に引っ張りながら舌を出しているフィーラがいた。

ウ「おのれーーーー！！」
高「俺が二度同じ技に引っ掛かるかよ」
そう言いながら、虚無の力を込めた剣の先をツタへ向ける。
高「終わりだ！！」

ドシュウ！！

そして放たれる虚無のレーザー。
フ「これで終わりです」
フィーラも敵の最後を見届けようとしている。
だが・・・
ウ「・・・ふふふ」
ウルザスは笑っていた。
そして、レーザーがツタに直撃する瞬間、突然、空間が開き、レーザーを別の空間へ飛ばした。
その飛ばした先は高雅の後ろだった。
高「何！？」
フ「あみゅ！？」
ウ「わしが再生に偏りがある事を知らぬと思ったのかのぉ？。敵は弱点を教えると、そこへ本気で攻撃するもんじゃ。それを利用させてもらったぞ」
高雅はレーザーを撃っているためか動かない。
フィーラも慌てふためいていた。
フ「あみゅみゅみゅ、後少しだったのですのに～」
フィーラはもう負けを認めていた。
高「・・・へっ」
しかし、高雅はこの場に合わない笑みを浮かべていた。
まるで、全て知っていたかのように。
ウ「何がおかしいのじゃ？」
高「バーカ、お前が空間を使えることぐらい、知っていたさ」

レーザー直撃まで後１２秒。
ウ「偽りを話した所で何も変わらぬ」
レーザー直撃まで後８秒。
高「嘘かどうかは、俺が死んだ後に判断するんだな。最も、死ぬはずがないけどな」
レーザー直撃まで後４秒。
ウ「どういう意味じゃ？」
レーザー直撃まで後１秒。
高「こう言う意味さ」

ドォォォォン。

レーザーは対象物を呑みこんだ。
そして、レーザーが晴れていくと・・・
ウ「な・・・何故じゃ！？」
巨大なツタの一部が綺麗に無くなり、光り輝く宝石が姿を現していた。
高「あれが核か」
高雅は分かっていたように言う。
ウ「小僧、何をした！？」
高「俺は何もしてない。ただ虚無を放っただけだ」
ウ「ならば何故！？」
レ「我だ」
レオが高雅の横に並ぶようにやって来た。
レ「我が貴様と同じようにコウガ殿の後ろに空間を開き、標的の目の前に展開させたのだ。
ウ「天獣、貴様はいつの間に力を吸収していたのじゃ！？。貴様は力を吸収するタイプのはずじゃ」
レ「その通りだ。だから吸収しておいたのだ」
ウ「いつ・・・はっ！？、まさか！？」

ウルザスは一つだけ思い当った事があった。
それは、レオが噛む動作をしたあの時だ。
高「そっ、俺を止める為に甘噛みしたように見せて、実は色んな力を送っていたんだよ」
ウ「ならば、何故わしが空間の力を使える事を知っているのじゃ！？」
高「まず、お前が楽園の心臓の倉庫に連れて行ったことだけど、あれは暗くて見えなかったが、足元にあった紋章見たいのチラッと見えて、それが原因だと分かり、空間の力ではない事は分かった」
ウ「ならば、何故じゃ！？」
高「もっと前から知ってたんだ。丁度、インジと初めて会った時かな」
インジと初めて会った時。
それは、皆で旧校舎で肝試しをしたことだ。
ウ「あれとどう関係があるんじゃ？」
高「意思会話を知っているよな。俺も最近分かったんだが、あれは空間と変換を応用して使える力だよな。それで、俺の目の前でインジがいきなり『集合命令が出されやがった』とか言ってたんだよ。それって、意思会話で命令したんだよな。つまり、お前かエガルのどっちかが使える、あるいは、二人で協力して使えることが分かってたんだ。エガルは空間は使わなかったし、後はお前だけだから、空間を使えると分かってたんだ」
ウ「そこまで見破っていたとは・・・」
高雅の推理にウルザスは驚きを隠せなかった。
高「さて、無駄話もここまｄ「おりゃあああああああああ」！？、おい！！」
突然、Ａが核目掛けて剣を振り上げていた。
高雅の呼びかけにも答えず、剣を振り下ろす。
そして・・・

パリーン

ウルザスの宝石は儚く散った。
それと同時に巨大なツタも姿を消した。
辺りにはおぞましい戦いの後と沈黙の空気。
それと・・・
A「はっはっはっはっは、主人公の力、思い知ったかーー！！」
もういなくなった敵に向けて大口叩いているA。
高雅は黙ってAに近づいて行く。
A「何だ？、止めをさしたかったか？」
気楽に問うAだが、高雅の目はそんな気楽に対して怒りを帯びていた。
高「お前、勝手なことをしやがって・・・」
A「いいじゃねえかよ。別に誰が倒したってよ」
高「俺はそう言う意味で言ってんじゃねえよ！！！！！」
A「ッ！？」
いつもと違う怒りの声。
Aも体が反射的に怯えている。
フ「コウガ様、もういいです」
高「お前が良くても、俺gいいです」」
フィーラが高雅の反論に聞く耳を持たず、口を挟む。
フ「過ぎてしまったことはしょうがないです。それに、元々、楽園同士で中が良かった訳でもないです。だから、怒らないでください」
高「・・・・・・・・くっ」
フィーラが悲しそうに呟き、高雅がそれを見ながら悔しがる。
そんな光景をいま一つ理解できていないAがいた。
A「え！？、え！？、どゆこと！？」
Aの責任の無い声に高雅の怒りも爆発寸前だったがレオが止めて、代わりに説明した。

レ「奴が大量の命を持っており、その場所を聞き出す前にA殿が奴を倒してしまったのだ」
レオがAでも分かるように言葉を変えて言う。
それでやっとAが理解した。
A「え!?、それって・・・」
高「その命が救えねえってことだよ!!」
高雅が怒り交じりの声で言う。
自分でも必死に怒りをこらえているのが目に見えるように分かる。
A「それは・・・」
さすがのAも反省の色を現し始めた。
そこへ・・・
ロ「やったぜコウガっち!!。遂に勝ったんだな!!」
空気ブレイカーこと、ログナが現れた。
ログナは高雅の肩を組みながら高雅に聞いていた。
高「邪魔だ!!」
そのまま背負い投げでログナを投げる。
ログナは器用に着地し、ノーダメージだった。
龍「・・・勝ったの?・・・」
凛「遂に終わりましたの!?」
蓮「こうが兄ちゃんの勝利?」
そして、遅れてやって来た龍子達も高雅に確認をする。
高「ああ、勝ったぜ。もう、気味が悪い虫も植物も終わりだ」
蓮「それにしても、どうして虫さんやツタさんを使ったのだろう?」
高「敵が自然を使って人間を殺したかったらしい」
大体当っている事を言う高雅に対して、蓮田は少し怒ったような顔をした。
蓮「ダメだよ!!。お花や虫さんは人を殺したりするんじゃなくて、人を生かしてくれる大切なものだよ!!」
高「ははは、そうだな。じゃあ、蓮田は悪い人から自然を守るためにはどうするのか?」

蓮「う～ん・・・」
蓮田は少し悩んだが、すぐに答えを導き出した。
蓮「大丈夫。どんな人でも自然の大切さを知ってるから分かってくれるよ」
高「ほんと、純粋って言うか何と言うか・・・」
高雅は蓮田のまっすぐな答えにどこか羨ましげがあった。
高「それで・・・」
高雅は龍子と凛に向き合う。
高「記憶、どうする？」
高雅の最小の質問に二人は理解し、一緒に答えた。
龍「・・・いい・・・」
凛「人間は楽ばかりではろくな人間性になれませんわ。この程度の事など、消す必要もありませんわ」
高「そっか」
二人の意思を確認し終わると、高雅は背伸びをしながら空を仰いだ。
高「さーて、そろそろ帰りますか。レオ、フィーラ、行くぞ」
レ「分かった」
フ「はいです」
高雅の呼びかけに答えるとすぐに近づいて来た。
高「じゃあな、後で俺が全部戻しておくから」
ロ「再生ぐらいは俺っちがやるぜ」
高「いや、いい。再生と同時に記憶を消すための破壊を使うし」
ロ「そうか。またな、コウガっち、アリアっち、レオっち、フィーラっち」
蓮「ばいばい」
龍「・・・また明日・・・」
凛「御機嫌よう」
タ「達者でな」
A「じゃ～な～」
それぞれの言葉を交わし、高雅達は帰路を歩いた。

緑の復讐編　終

☆おまけ☆

帰宅途中。

フ「・・・あのです・・・」
フィーラが少し申し訳なさそうに聞いて来る。
高「ん、どうした？」
高雅達は歩みを止め、フィーラの話を聞く。
フ「ボク・・・帰る場所が・・・」
高「・・・そんな事かよ」
高雅は呆れて首を振る。
フ「そ・・そんな事とは何です！？」
フィーラもその動作に少し怒りを現していた。
そして、高雅が手を伸ばしながら言う。
フ「あみゅ？」
高雅の謎の行動に理解ができてないが、高雅は構わず言った。
高「俺の家に来いよ」
そして、高雅に続いてアリアも手を伸ばす。
ア「おいで、フィーラちゃん」
レオは獣の状態に戻っている為、手を伸ばせないが、一歩前に出る。

レ「歓迎するぞ、フィーラ殿」
フ「あみゅ！？、あみゅ！？」
三人の行動に戸惑うフィーラ。
そして、落ち着きを取り戻すとゆっくりと手を伸ばし。
フ「・・・よろしくです」
高雅とアリアの手を握った。

# 人間　楽園

戦いが終わって1週間経った。
緑淵町は高雅によって完全に再生し、人もその日の記憶を消して再生している。
そして、今。
先「は～い。それでは、テストの結果表を返しまーす」
先生がクラス皆のテストの結果が書かれた紙をひらひらと見せていた。
クラスの9割が苦虫を噛んだか顔をしたのはご愛好。
もちろん、高雅は後の1割に分類されているが。
ア（・・・ん？。ねえ、コウガ）
高（どった？）
ア（いや、記憶消しているのに、テストの事を覚えているって変じゃないかなって）
高（あーね。それは、完全に消すより、別の記憶を創っているんだ。まぁ、あの戦いがなかったと思う記憶を）
ア（あれ、でも、まだ解き終わってない生徒もいたんじゃ）
高（そいつらは、日頃の点数とＩＱに比例した点数にしてある）
ア（そんな器用な事を・・・）
先「それじゃ、テストを返します」
次々とテストが返され、クラスの9割は暗い顔をしていた。
先「はい、崎村君」
高「ん」
短く返事をして受け取り、結果を見てみる。
ア（どうだった？）
高「平凡だな」
独り言のように呟きながら席に戻る。
満足のいく点数でもなければ不満がある点数でもなかったようだ。

ちなみに、高雅はあの時に既に解き終わっていた為、素の点数である。
高（しかし、全体で数点だけ落ちたな。最近、妙に忙しくて勉強してないけかな・・・）
A「さーきむらー。どうだったか？」
高「平凡」
A「お前の平凡がどのくらいか分からねえから見ろよ」
高「近寄るな。変態が移る」
A「誰が変態だ！！」
高「分からねえか。今、俺に話しかけている、うざい奴だけど」
A「俺は紳士だ！！。変態じゃない！！」
高「取りあえず、消えてくれ」
先「あなた達、速く席に着きなさい！！」
先生に注意されながら渋々席に着く二人。
周りがその光景に少しだけ笑っていた。
二人が席に着くのを見計らって、先生はとんでもない事を言いだした。
先「ちなみに、トップはA君です」
全「ぶっ！？」
クラス全員が吹き出した。
あの落ち着いている龍子ですら目を丸くして驚いている。
B「テメー！！、出番だけでなく、点数も上げるとはどういうことだ！？」
C「この、裏切り者がーーー！！」
D「いっぺん・・・死んでみる？」
E「もしもし、ＳＷＡＴの方ですか？。射殺してほしい者がいるのですが――」
A「待て！！。特に後半二人待て！！。嫉妬なんかするな」
『何、こいつ』との感じで視線がAに集まっている。
精神が弱い人ならきっと死んでいるだろう。

ア（コウガ、どういうことなの！？）
高（待て。今、あいつの性格と普段の行動から何をしたか演算している）
ア（一体、どんな式が組み上がってるのよ・・・）
高雅は懸命に考え、ある一つの答えを導き出した。
高（・・・多分、あのバカがやったことが分かった）
ア（一体、何？）
高（簡単だ。タイトを使って脳を活性化したんだ。それも、半端ないほど）
ア（成程。それで、ＩＱが跳ね上がって、点数に比例したって事？）
高（元々、点数は平均より上だしな。タイトを上手く誤魔化したんだろうな）
高雅は後で制裁を下すことを心に誓い、Ａを睨みつける。
すると、Ａがこちらに気付いてピースしてきた。
そのお陰で、高雅の制裁レベルが跳ね上がった。
先「はいはい、落ち着きなさい。別に誰が一位になろうと、どうでもいいこと。大事なのは、それから反省を生かして成績を伸ばすこと」
先生の言葉でこの場は納まった。
が、この後、Ａは体育館の裏に呼ばれることとなるだろう。
それも、悪い方で。
先「今回の総合はテストの返却がメインではありません。メインは体育大会の出場競技を決めます」
先生は黒板に次々と種目を書いていく。
短距離、長距離、リレー、パン喰い・・・ｅｔｃ。
一通り書き終えた先生が再び生徒の方を見る。
先「それでは、まず何に出ｔ〈ピンポンパンポン〉ん？」
授業中に関わらず、突然、放送が鳴りだす。
授業中の放送だけあって、教室は黙り込み、全員が放送に耳を傾けた。

その放送内容はとんでもないものだった。
放「大変です!!。猛獣が学校に入りました!!。教室を施錠し、絶対に外に出ないでください!!」
先「猛獣ですって!?」
先生が重要ワードをリピートする。
その瞬間、止まっていた静寂が動き出した。
B「何だとーーーーーーーーーー!!!??」
C「ははははは・・ははは・・ははははは・・早く、かか・・かかかか・・鍵ををををををを」
D「人を呪わば、穴二つかーーーーーーーーーーー!!!!!」
E「もしもし、SWATの方ですか。ターゲットを変更して欲しいのですが――」
クラスの9．9割が慌てふためく中、その0．1割の人間が立ち上がった。
A「よし、狩りに出よう」
全「バカか、お前!!!!!」
クラスのそんな声に関わらず、Aは廊下への扉に手を掛けた。
A「行ってきます」
そう言って廊下へ出て、姿を消した。
全員はただ唖然と見ていただけだった。
先「仕方ありません。Aの事はわすれましょう」
さらりと酷い事を言う教師。
教師の信頼度がガタ落ちしたのは言うまでもない。
ア（ねえ、コウガ）
高「ん～？」
高雅は机に突っ伏したまま微動だに動いていなかった。
クラスが慌てている為、高雅は意思会話する必要がないと思っている為、普通に声を出して答えた。
ア（Aに任せて大丈夫かな？）
高「いいんじゃね？、別に」

ア（まあ、もしもの時はコウガが動くよね）
高「そんなこと言ったら動かないのが決まりだろぉ～～～」
最後は欠伸をしながら答える。
こんな状況にも関わらず欠伸を出せる高雅が凄いと思っているアリアだった。
そんな、端から見れば独り言のように呟く高雅に近づいて来る人がいた。
龍「ねえ・・・高雅君・・・」
それは龍子だった。
高「ん～～～？」
高雅は机に突っ伏したまま顔を合わせず答える。
龍「その・・・大丈夫・・・だよね？・・・」
高「・・・・・・・」
明らかに怯えている声で聞いて来た。
適当に相槌を打とうとした高雅も、さすがに、すぐには答えることができなかった。
そして、少しの間が経った後、高雅は口を開いた。
高「・・・大丈夫だ。どうせ、Aが片づけるだろうし」
龍「・・・そう・・・だよね・・・」
実際、龍子はAの実力を見たことはある。
それを踏まえた回答だった。
先「皆、静かにしなさい！！。騒いだら猛獣が駆けつけてきますよ！！」
先生の声は届かず、生徒は今だに騒ぎまくっている状態だ。
すると、ふと廊下を見た龍子があるものに気付いた。
龍「あ・・・あれ・・・」
龍子が指を指しながら呟く。
先生の声より遥かに小さいのに、皆が聞こえているかのように、龍子が指を指した方を見る。
そこには、窓を通して肌色の毛が見えていた。

E「出たーーーーーーーーー！！。猛獣だーーーーーーーーー！！」
教室の騒ぎがさらに激しくなる。
C「餌はやだーーーーーーーー！！」
B「死にたくねーーーーーーーーーーー！！」
高「あーー、騒がしいなーー」
眠れない高雅は顔をあげ、一応のつもりで猛獣を確認する。
すると、肌色の毛の横からひょこっとピンク色の毛も見えた。
高・ア（・・・ピンク？・・・）
E「何だ！？、ピンク色の毛が見えるぞ」
D「希少種か！？」
先「いいから、落ち着きなさい・・・！？、崎村君！？」
高雅は席を立ち、扉の取っ手に手を掛けた。
先生やクラスの皆が高雅を見ている。
その中で、高雅は渾身の力で・・・
高「ふんっ！！」

バキン！！

鍵を折りつつ、扉をこじ開けた。
ちなみに、何故鍵をこじ開けたのかというと、鍵穴式で外から鍵を挿して開ける扉の為である。
そして、扉を開けた先にいたのは、当然・・・
フ「あ、コウガ様♪」
フィーラとレオだった。
レ「コウガ殿、ここにおられｔ〈ガツン！！〉ぐお！？」
フ「あみゅ、どうしましｔ〈ゴツン！！〉み〝ゅ！？」
高雅は取りあえず、二人を殴り、黙らせる。
先「あの・・・崎村君。一体、どういう関係で」
この聞き方は、まずい展開に良く使われる。
そしてまさに、その時である。

高「俺の妹とペットです。こいつらを家に送る為、俺は帰ります。競技は適当に短距離にしといてください」
レ「いたたた、コウガ殿、毛を引っ張らないでくれ！！」
フ「痛い痛い、コウガ様、痛いです！！」
高雅は二人の毛を引っ張り、その場から離れた。
先「ちょ・・・待ちなさい」
先生がすぐに駆け寄り、廊下に顔を出したが、その先に高雅の姿は無かった。

変わって学校屋上。
そこに、今回の迷惑の根源である二人が正座していた。
高「で、何でお前らがここにいるんだ？。怒らないから説明しろ」
高雅は見た目が笑っているが、腹の中は真っ黒に染まっている。
ア「何かあったの？」
アリアも人間の姿になって問う。
レ「あー、実はな――」
フ「ボクが言うです」
高「どっちでもいいから早く言え」
フ「実は・・・」
すると、フィーラが顔を赤くしながら視線を横に逸らす。
そして、拍子抜けなことを言った。
フ「お腹・・・すいたです／／／」
高「・・・はぁ！？」
余りに普通なことに高雅は罵(ののし)った。
アリアも唖然としている。

高「え!?、フィーラって飯いるの!?」
フ「当たり前です!!。ボクだって食べないと死んでしまうです」
高「じゃあ、旧校舎に住んでた時はどうしたんだよ?」
フ「その時は、この中を探索して、食べ物を見つけてたです」
そう言って下に指を指す。
高「ふーん。まあ、職員室になんかありそうだしな」
フ「でも、コウガ様の家に住んでから何も食べてなくて」
高「いや、だったら何か言えよ。それにしても、1週間も食べなくて生きられるとか、すげーな」
フ「コウガ様が食べ過ぎなだけです。普通は3日1食です」
高「逆だ!!。1日3食だ!!」
フ「違うです!!。3日1食です!!」
ア「二人共、落ち着いて」
高・ア「何も食べない奴が入ってくるな（です）!!」
ア「食べないじゃなくて、食べる必要がないだけよ」
レ「取りあえず、フィーラ殿に何か食べさせてやってはくれぬか?。朝からうるさいのだ」
高「ったく、そう言うことは言っといてくれよな」
フ「3日1食は人間では常識です。人間と楽園は同じです」
高「だーかーらー!!」
ア「もういいから、早く帰って食べさせよ」
高「・・・はぁ、わーったよ」
これ以上の抗議は無駄だと思った高雅は、アリアの言葉通り、家に帰った。
これを機に、高雅が学んだことは『人間　楽園』だった。

☆おまけ☆

放課後。

ある所に、Aという少年がいました。
その少年は帰ろうと下駄箱に手を掛けました。
すると、下駄箱の中から一通の手紙が入っていました。
その内容を見たAはルンルン気分で体育館の裏に行きました。
そこで会ったのは・・・
B「よぉ、A様」
C「裏切り者1名到着」
D「・・・目標・・・補足・・・」
E「もしもし、例の奴を目標の地点に誘いましたので――」
いつものメンバーである4人がいい笑顔でいました。
Aは手紙と4人を交互に見て、騙されたと気付きました。
意を決して、Aは戦うことを決めました。
タイトを使って呆気なく倒そうとしたが、腕にはいつものミサンガはありません。
どうしたのでしょう?。
Aは慌てふためき、言葉で解決しようとしました。
しかし、相手は聞く耳を持っていません。
今度は逃走を計ってみました。
しかし、呆気なく回り込まれました。
なす術を見失ったAは取りあえず、突っ込んでみました。
だけど、普通の人間は4対1では勝てません。
そして、Aはこっぴどくやられましたとさ。

高「めでたしめでたし」
ア「めでたくはないよね?」
高「気にするな」

ア「ま、いいけど。ところで、タイトルは何故いなかったの？」
高「俺がすった」
ア「いつ？」
高「Aと話していた時」
ア「ふ～ん。読んでただけじゃ、分からないね」
高「それは、何でもありだ」
ア「それ言ったらお終いでしょ」
高「この小説は端からお終いだ」
ア「あははは。それじゃ、そろそろ締めよっか」
高「だな。それじゃ、また次回に」
ア「ばいば～い」
フ「コウガ様～、おかわり～」
高「・・・あの野郎。家賃、払わすぞ」
ア「ははは♪」

# 体育大会　練習

現在、体育の時間。
今日は快晴の青空の下、体育大会の練習が行われようとしていた。
ちなみに、今日は個人種目とリレー。
高雅はあの後、言った通りに短距離に選ばれていた。
高雅の実力を知るため、５０メートルのタイムを計っているが・・・

ピッ・・・・・・・・ピッ。

その速さ、なんと6秒ジャスト。
高「どうだった？」
高雅は自分のタイムを知るため、計測者に尋ねる。
しかし、計測者はそのタイムを見て口を開けたまま現実から離れていた。
高雅は目の前で手を振ると、計測者はハッと気付いたようだ。
計「え・・・ああ・・・6秒００だ」
高「そうか。まぁまぁかな」
その言葉に計測者はまた驚愕する。
高雅はそんなのお構いなしに次の走者を見る。
次はＡであった。
Ａも同じ短距離の選手である。
Ａが手を挙げて準備ができたのを知らせると計測者がストップウォッチに手を掛ける。
計「よーい・・・はい！！」

ピッ・・・・・ピッ。

その速さ、なんと3秒７３。

計測者の顔がさらに現実から離れていた。
すると、高雅がAに近づいた。
A「ん、どうした?。悔しいか?」
高「いや。お前、フライングしたから制裁な」
A「・・・ゑ!?」

バゴッ!!

高雅は右フックがAの頬を捉えた。
Aは空中一回転し、地面に倒れた。
高「おい。こいつ、フライングしたからもう一回な」
計「あ・・・ああ・・分かった」
高「おら。何時までも寝てねえで、さっさとスタートラインに着きやがれ」
A「ひでーよ。別にフライングじゃなk「何か言ったか?」ノー、プログレム!!」
高雅の冷酷な声はAにとってトラウマ状態になっている。
それを知っている高雅はわざとこの声で言うと、Aは大人しく言うことを聞いてくれる。
まさに、奴隷状態だ。
Aはスタートラインに着いて、手を挙げる。
計「よーい・・・はい!!」

ピッ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ピッ。

計「・・・7秒65か。何だ、平凡じゃん」
Aのタイムを見ながら計測者は失望した。
Aはｏｒｚ状態で悲しんでいた。
A「何故だ・・・何故、上手く足が動かせなかったんだ・・・」
高「おい、アホ。お前が足を活性化しているのなんて見え見えなん

だよ」
もちろん、あの時殴った腕には蒼のリストバンドが巻いてあって・・・後は分かりますね。
A「何だよ!!。お前だって力を使ってるんじゃねえのか!?」
高「アホか。俺はお前ほど力に溺れてねえよ。あれは素の力に決まってんだろ」
A「何・・・・・・だと・・・・・・」
高雅は絶望するAを見て、哀れに思った。
高「まぁ、人それぞれって訳だ。精々、頑張って速くなることだな」
そう言って、他の競技の練習風景を見始めた。

2人3脚の練習。
この選手には龍子・夢ペアとB・Dペアが選ばれていた。
夢「いい、龍子。1から左足だからね」
龍「うん・・・左ね・・・せーの」
掛け声とともに足を踏み出すが、一歩も進めず、龍子の足が縺(もつ)れてしまった。
夢「ちょっと!!、左からって言ってるでしょ!!」
龍「うん・・・・ごめん・・・」(左から出したのに・・・)
夢「ったく・・・もう一度するよ・・・今度こそ、左からだからね」
龍「うん・・・」
夢「せーっの――」
龍子と夢の練習は続いたが、その後、一歩も進めることはできなかった。

それを見ていた高雅とアリアの感想。
高「二人とも、左足出してどうする。アホだろ」
ア「龍子ちゃん、困ってたね。どうしてだろう？」

同じ競技。
続いてはＢ・Ｄペアの練習風景。
ＢとＤは息もぴったりで申し分ない速さだった。
余裕が出来たのか、Ｂはこんなことを言いだした。
Ｂ「なぁ。普通の掛け声じゃつまんねえから、何か変わった掛け声を作らないか？」
Ｄ「例えば、何だ？」
Ｂ「例えば・・・やっ、とっ、やっ、とっ、とか」
Ｄ「却下。笑いのセンスが無過ぎる。何が野党だ。そんなんなら、与党でもいいだろうが」
Ｂ「じゃあ、お前は何かいいアイデアはあるのか？」
Ｄ「そうだな・・・じゃが、りこ、じゃが、りこ、はどうだ？」
Ｂ「人の事、言えたもんじゃないな」
Ｄ「お前の１０００倍ましだと思うぞ」
Ｂ「ならば・・・ふん、はっ、やぁ、いぃぃぃぃやぁ！！、でどうだ？」
Ｄ「どこの驚くべき連携だよ！！。しかも、上だし、リストラキャラだし。大体、リズム取れねえし」
Ｂ「じゃあ・・・ふん、せい、とぅ、ふふふふふん、で――――」
Ｄ「喧嘩売ってんのか、テメー」
Ｂ「・・・おっ、いいのが思いついたぞ！！」
Ｄ「次、ふざけたら殺すからな」
Ｂ「これは最高傑作だぜ。リズムも取れるし、変わった掛け声だぜ」

D「言ってみろ」
B「えー、○ん、えー、○ん、だ！！」
D「・・・お前、天才だ」
B「よし、これで行こう！！」
D「ああ、1位だけでなく、笑いも取ってやろうぜ」
B・D「はっはっはっはっはっはっはっは・・・」

感想。
高「・・・医者が必要」
ア「同じく」

数分後、先生から集合が掛かり、クラスの皆は一か所に集まった。
集合した理由は、ある競技の作戦だった。
先「じゃあ残りの時間、お前達は“何でもあリレー”の作戦でも考えておけ」
高「何？、そのふざけ過ぎた名前は。命名者殺していいか？」
ア（あれ、1年生の時にやってるから知ってるんじゃ・・・）
高（1年の時はめんどいから、1週間前から休んでた）
ア（じゃあ、何で今年は練習までしてるの？）
高（・・・何でだろう・・・）
ふと思えば、わざわざ人間が嫌いな高雅がこの学校行事に参加するのはおかしい。
つまり、それは高雅が人間を拒まなくなったと言うことだ。

高（・・・変わったな、俺・・・）
ぼんやりと青いリストバンドを眺めながら思った。
ア（ど・・どうしたの？。じっと見つめちゃって・・・）
見つめられ、照れながら問うアリアに意識を戻された。
高（ああ・・わり、ぼんやりしてた）
ア（そ・・そうなんだ・・・）
A「さぁ！！。考えるぞ、皆！！」
Aの覇気の入った声で高雅はアリアから皆に意識を向けた。
高「おい、ルールは何なんだ？」
A「知らねえのか、崎村？」
高「昨年はめんどくて、休んでたからな」
A「そうか、なら教えてやるぜ」
そう言って、Aは高雅に『何でもありリレー』について説明しだした。
皆も再確認のつもりでAの話しに耳を傾けた。
A「ルールは名前の通り、何でもありのリレーだ。一人グランド半周でクラス全員が参加する。ただし、人を殺したり重体にしてはいけない。それだけ」
高「ほんとに何でもありだな。でもよ、そんなんだったら、向かい側にいる奴にバトンを投げればいいんじゃねえか？。何でもありだし」
A「甘いな。あるクラスがその為だけにA〇フィールドを張ったんだ」
高「嘘だろ、おい」
A「現実だ。昨年は壮絶だった。重傷が１０人以上出たしな。軽傷も含めて怪我人は１００人超えたし」
高「何故、警察は動かねえんだ？」
A「さぁ。こんなボロ高校に興味がねえんじゃねえか」
高「それはねえだろ」
夢「はいはい、そこまで。さっさと作戦を立てる、立てる」
夢幻に抗議が湧いてきそうだったので、夢が打ち切りにして、話を

戻した。
高「そうでした。で、俺達はどうするつもりだ」
A「俺は前回のから学んだ事がある。後ろからゆっくり行けば、被害は最小で済み、そして、最後に追い抜く作戦だ」
高「漁夫の利だな。だけど、悪くねえんじゃねえか」
A「だろ！！。よし、決定！！」
皆の意見なしに決定を申し出るAだが、皆もあながち賛成みたいで異論はなかった。

こうして、壮絶な体育大会が幕を開けるのであった。

☆おまけ・・・と、言う名の謝罪☆

ロ「ログナと――――」
蓮「蓮田の――――」
ロ・蓮「ぶっちゃけまSHOW！！」
蓮「恥ずかしいよ・・・帰りたい・・・」
ロ「待て待て、俺っち一人じゃ寂しいから手伝ってくれよ。軽く相槌打つだけでいいからさぁ」
蓮「わかったよ、ログナ」
ロ「さすが、蓮田！！。やっさしい！！」
蓮「それより、速く進めなくていいの？」
ロ「おっと、そうだった。えーと〈カンペ〉このコーナーは、作者の思っていることをぶっちゃけてしまうと同時に謝罪するコーナー・・・って、作者、大丈夫か？」
蓮「作者さん、頑張れー」

ロ「それで、最初は、えーと〈原稿〉夢の性格について・・・って、夢って誰だ?」
蓮「さぁ。でも、何か知ってるような・・・」
ロ「あーー!!、思い出した。海に行った時にスギっちと一緒にいた奴だ」
蓮「あー、あの人の事だね。僕も思い出したよ」
ロ「それで・・・このたび、夢の性格を考えておらず、性格がころころ変わっているとお気づきですが、作者は何かいい性格や口癖が思いつかず、挙句の果てに適当になってしまいました。どうも、すみません。この場を持って、大いに謝罪します・・・って、俺っちが謝ってもなぁ」
蓮「それで、続きは?」
ロ「えーっと・・・その結果、夢の性格は話変わりと言うことになりました・・・・・・え!?、それって、何重の人格があるって事なのか!?」
蓮「怖いなぁ」
ロ「えーっと〈カンペ〉この小説は何でもありだ!!」
蓮「作者さん、壊れてる」
ロ「俺っちも変わったりするのかなぁ・・・」
蓮「嫌だよ!!。僕は今のログナがいいよ!!」
ロ「蓮田・・・よし、俺っちは変わらねえぞ!!」
蓮「ほんと?」
ロ「ああ、俺っちは何者にも変わらねえぞ!!」
蓮「ログナ、お手」
ロ「ワン〈ポン〉」
蓮「・・・・・・・・・」
ロ「待て、蓮田!!。俺っちは蓮田だから心を許しただけだ!!。コウガっちとかがしたって、何も変わらねえよ」
蓮「ログナの嘘つき。変わらないって言ったのに・・・」
ロ「だーーーーーー。待ってくれ!!。ちょ!!、先に帰らない

でくれ!!。読者の皆、済まない。急用ができたから、これにてこのコーナーを終わらせてもらう。待ってくれーー、蓮田ーーーーー」

代わりまして、作者です。
本当に、夢については申し訳ありませんでした。
もしかしたら、気付かない内に他のキャラもなってたりして・・・
こんな、辺り構わず突っ切る作者について来てくれると、とてもうれしい限りです。
ダメダメな作者ですが、見守ってくださると感謝しきれません。

# 体育大会　短距離走

遂に始まった体育大会。

学校全体の生徒はグランドで整列し、開会式に臨んでいた。

しかし、８割がだらけているが。

高「まだ、始まらねえのかよ・・・」

高雅もその８割の中に入っていた。

ちなみに、アリアは観客として、学校に人間状態でいる。

もちろん、レオ（当然、人間状態）やフィーラも一緒にどこかで応援するらしい。

今、校長がお話を仰っているのだが、それがあまりにも長い。

優に１０分を超えている。

校「――ですので、皆さん、頑張ってください」

高「やっと、終わるか」

校「さらに――」

高「まだかよ・・・」

それからさらに１０分後。

やっとのことで校長のお話が終わり、全員のやる気が萎えていた。

放「続きまして、選手宣誓。代表、姫花凛」

凛「はい！！」

はっきりとした返事をして、凛が校長の前までやって来た。

凛は手を挙げ、校長へ宣誓をした。

凛「私たち一同は、全力を出し切り、正々堂々戦うことを誓いますわ」

宣誓をし終え、凛は列へ戻って行く。

それから、準備体操や諸注意など開会式で行われることは終了した。

開会式が終わり、全員はそれぞれのテントで座って待機していた。
放「短距離走に出る選手は入場門に集まってください」
短距離走選手の召集がかかり、高雅は渋々立ち上がった。
高「初っ端からか・・・あの、校長の後は萎えるな～」
A「まあ、お前は萎えていようが一番だろう」
Aが高雅の肩を叩きながら言う。
高「さあ、どうだか」
曖昧に答えながら、高雅はAを置いて入場門へ行った。
A「おいおい、俺を置いてくなよーー」

入場門。
短距離走に出る選手が整列していた。
高雅は取りの為、後ろから皆が並ぶのを待っていた。
すると、そこに・・・
凛「あら、高雅さん」
凛がいた。
どうやら、凛も同じ短距離走らしい。
ちなみに、全競技男女共同である。
高「ん、凛か」
外野共（な・・・名前だと!?。しかも、呼び捨て!?）
高雅は普通に凛に返事をしたが、外野は一瞬で視線を高雅に集中させた。
凛「あなたも短距離走に出場するのですね」
高「まあ、一番楽な個人競技だからな」

凛「相変わらずですわね。それより、並ばなくてよろしいですの？」
高「俺は最後だ。だから、他の奴が並ぶのを待ってるんだ」
凛「奇遇ですわね。私も最終走ですわ」
高「ほー、俺に勝てるかな？」
高雅が挑発染みた口調で言う。
すると、凛が近づいて来て耳元で小声で聞いた。
外野がさらに反応したのは言うまでもない。
凛「まさか・・・あなた、アリアさんの力を使うつもりですの？」
高「俺はそんな卑怯な手は使わない。アリアはギャラリーとして、どっかで見てる」
凛「そうですの。それなら、あなたに勝てるかもしれませんわね」
高「アリアがいないと何もできない奴じゃねーよ、俺は」
凛「そうですわね。それでは、そろそろ並びましょうか」
高雅と凛は列の最後尾に並び、ちょっとすると入場のコールが掛かった。
選手は駆け足でスタートラインの前まで行き、その場に座り込んだ。
そして、第一走者がスタートラインに着いた。
用意が出来ると、審判がピストルを空に挙げ、片方で耳を塞ぐ。
審「よーい・・・〈パァン！！〉」
そして、競争は始まった。

次々と走り終え、次はAの番が回って来た。
A（ふっふっふ・・・このメンツなら勝てる！！）
Aの競争相手は殆どがデブであった。
A（皆は捨て競技だと思っているのか。これは俺らのクラスが独走するな）
内心で勝ちを確信しつつ、用意をする。
Aは多大なる間違いをした。
それは、これが負けフラグだと言うことを知らない事。

審「用意・・・〈パァン！！〉」
そして、Ａの負け試合が始まった。
Ａは会心のスタートダッシュだったのか、周りは誰もついて来れず、最初から独走状態だった。
Ａ（勝てる・・・勝てるぞ！！）
Ａは余裕をこいて、後ろを振り返る。
すると、そこにはおぞましいスピードで近づいて来るデブ達がいた。
Ａ「なっ！？・・・嘘だろ！！」
デブ達は己の体を生かして、転がって来ていた。
しかも、坂でもないのにスピードがドンドン加速して行く。
さらに、ちゃんとインコーナーをついている。
かなりの上級テクニックであった。
Ａ「ちょちょちょ・・・まっｔ〈プチッ〉・・・」
デブの一人は何事もなかったようにＡを踏みつぶして行った。
そして、後ろから次々とデブが転がって来ていた。
Ａ「ちょ・・・たんｍ〈プチっプチチ・・プチッ〉」
Ａは全員から潰され、再起不能になった。
高「あちゃー。ダメだな、あいつ」
凛「仕方ありませんわ。あの方達と一緒だったのが最大に不運ですわ」
傍らから、高雅はダメ押しし、凛は同情していた。
その後、Ａは担架で運ばれ、高雅のクラスの第一走の得点は０となった。

遂に、高雅と凛の番になった。
高雅はスタートラインに着きつつ、周りの対戦相手を確認する。
殆どは運動部のエースが最後を飾っているようだ。
凛以外にも女子もいるが、スタートの構えからして、陸上部だと言うことが判明した。

高雅もスタートの構えをし、集中する。
ア「コウガーーーー」
高「ん？・・・」
ふと聞こえたアリアの声の所為で、高雅は集中を切らした。
声が聞こえる方を見ると、そこにはアリアが手を振っていた。
すぐ横にはフィーラとレオが高雅を見守っていた。
ア「コウガーーーーー、頑張れーーーーー」
フ「コウガ様ーーーーー、ファイトですーーー」
高（フィーラ、こんな所で様を付けるな）
もう既に手遅れで視線は高雅とアリア達に集まっていた。
きっと、殆どが高雅にドン引きしているのだろう。
ア「フィーラちゃん、こんな所で様を付けるとコウガに怒られるよ」
それを察したのか、アリアがフィーラに指摘し始めた。
フ「あみゅ？。何故です？」
ア「現世じゃ、様なんて普通使わないんだから」
フ「でも、コウガ様はボクにとって様を付けないと失礼です」
ア「それでも、今だけは我慢してる方がいいよ。コウガもきっと望んでいるよ」
フ「みゅ～・・・コウガ様が望んでいるのなら・・・」
ア「ほら、また付けてる」
フ「みゅみゅみゅ～・・・」
レ「アリア殿、そのようなことは特に問題なかろう」
ア「レオ君も、殿は使わない」
レ「我もか・・・って、アリア殿も君付けをするでない！！」
ア「いいの。君付けは現世でも使われてるからいいの」
レ「理不尽ではないか！？」
ア「理不尽じゃない！！」
そんなやり取りが行われ、３人は完全に注目の的となっていた。
高「あのバカ共・・・ただでさえ目立つのに、さらに目立ってどうする・・・」

審「よーい・・・〈パァン！！〉」
高「あ・・・」
集中を切らせていた高雅は不意になった音に反応できず、出遅れた。
しかし、凛は結構いいスタートだった為、現在、2位をキープ中。
凛（よし、上々ですわ）
香「凛姉ちゃん、頑張れなのーーーー」
香凛の激励を受け、凛はスピードを上げていく。
しかし、横から誰かが追い抜こうとしていた。
凛（！？、まさか・・・）
そのまさかだった。
高雅がもう追いついて来ていた。
高「おっさきー」
こんな状況にも関わらず、声を出して余裕を見せる高雅。
そして、さらにスピードを上げていく。
凛は唖然とその光景を見ながら走っていた。
高「後一人か～」
などと呟きながら確実に距離を追い詰めていた。
残り２０メートル地点で高雅とその１位の人は横に並んだ。
１（この野郎。凛様といちゃつきやがって。ただで済むと思うなよ）
この非公式の凛ファンクラブにでも入っているバカは高雅に向けてショルダーアタックをしようとした。
高（典型的なバカだな、こいつ）
高雅はもちろん、自分が何かの標的になっていることは、あの時の視線で感じていた。
そして、こいつが何かを仕出かすのも大体予想していた。
高雅は一瞬にして屈んで敵の攻撃を避け、一気に踏み込んで加速した。
２（何！？・・・）
当たることを前提にして突っ込んでいた為、外すことなど考えてなかった。

もちろん、当たらなければ、バランスは崩れ、横に突っ込んでしまう形になる。
1位だった人は無残にも転んだ。
そして、高雅は悠々とゴールテープを切った。
凛も転んだ隙に追い抜き、2位を納めた。
凛「はぁ・・・はぁ・・・流石ですわ、高雅さん」
高「お前もすげーな。運動部相手に2位とは」
凛「べ・・・別に、褒められたって嬉しくありませんわ」
高「あっそ」
高雅は素直に受け止めない凛をほっといて、1位の旗の列に座った。

結果発表。

紅　　90点　　白　　80点

追伸
いい忘れていましたが、高雅達は紅組です。
凛も紅組です。
後、別でクラス得点もあります。
それは、面倒なので、最後の結果発表だけにします。（↑おいッΣ）

高「勝ってんじゃん」
凛「そうですわね」
点差は無いが勝っていることを二人は素直に喜んでいた。
そして、高雅達は駆け足で退場して行った。

# 体育大会　二人三脚

放「二人三脚に出場する選手は入場門に集まってください」
次の競技の召集がかかった。
B・Dと龍子・夢ペアは立ち上がり、入場門へ行く。
B「しゃー！！、いっちょやったるでーー！！」
D「キャラが変わったぞ」
B「気にするな。脇役なら何でもありだ」
D「脇役を認めるな」
こっち側は気合十分だった。
もう一方は冷静に確認をしあっていた。
夢「いい、龍子。左足からだからね！！」
龍「わ・・・分かってる・・・」
実はこの二人、あの練習の後、一度も上手く走れていない。
原因はもちろん、夢の所為だが、龍子はその原因を上手く切り出せていなかった。
高「よっ」
そこに先ほどの競技から帰ってくる高雅と会った。
夢「お疲れ。あんた、速すぎでしょ」
高「あいつらが遅いだけだ」
夢「いや、それは無い。取りあえず、次はあたし達だから、ちゃんと見てないさい」
高「はいはい。それより、龍子」
龍「ん・・・何？・・・」
高雅は何も言わず、龍子に手招きをした。
龍子は夢を先に行かせ、高雅に近づいた。

同時刻、アリア達は・・・
レ「先ほどのコウガ殿。中々速かったな」
ア「だーかーらー、殿は付けちゃだめ！！」
フ「もういいのです。殿も様も君もどうでもいいです」
ア「それでも・・・ん？」
ふと、高雅がいると思う方を見ると、その考えは的中し、高雅が龍子と何か話していた。
ただ、高雅は龍子の耳元で話していた為、結構距離は近かった。
それだけのことだったのに・・・
ア「何で・・・胸が・・・苦しい？」
胸に手を当て、高雅と龍子の方を見る。
それだけで、何か突き刺さるような感覚に襲われた。
見ていて面白くなくて、ムカつく様な――。
そんな、曖昧な気持ちに。
ア「・・・・・・・・」
フ「あみゅ？。アリア様、どうしたのです？。何、ぼっとしてるです？」
ア「え！？・・・あっ、何でもないよ！！」
両手を振りながら全力否定するアリアの様子から、何でもないはまず考えられなかった。
ア「わ・・私、ちょっとトイレに行ってくるね」
アリアはその場から逃げ出す様に走り去った。
フ「変なアリア様です」
レ「何かあったのだろうか」
その変わった後ろ姿をただ見ていたレオとフィーラだった。

戻って高雅の所。
高「――と、言うことだ」
龍「でも・・・それって・・・」
高「いいから、反論するな。あのバカに合わせると思って俺の言う通りしてろ」
龍子の反論を許さず、自分の考えを指導させる高雅だったが、龍子は納得してなかった。
龍「でも・・・やっぱり・・・やだ・・・」
高「何でだよ。お前も気付いてんだろ。お前が右足から出せば、事は上手く行くぞ」
さっき、告ぎ込んだことは、龍子が左足からではなく、右足から出すと言う当り前な考えだった。
夢は自分まで左を出している為、上手くいかないので、こっちが勝手に右足から出すと言う戦法であった。
そんな誰でも思いつくようなことだが、龍子はもちろん、分かっていた。
それでも、龍子は左足から出していた。
龍「そうだけど・・・何か・・・」
高「何だ?」
龍「それって・・・夢ちゃんを・・・裏切るって・・・事じゃ・・・」
高「何だ、そんな事かよ」
龍「そんなことって!!・・・」
龍子はつい声が大きくなる。
友達を侮辱されることは、龍子にとって許されがたい事なのである。
高「落ち着け。何もそんな大げさなことじゃない。むしろ、いい方

だ」
龍「・・・どうして？・・・」
高「だってよ、あいつは性格がコロコロ変わって訳分かんねえし、頭も悪いし、無駄に力強い奴だ。それは、お前も知ってて当然だ」
龍「それは・・・うん・・・」
龍子は渋々、肯定してた。
龍子は心の中で夢に申し訳ないと思っていた。
それでも、完全に否定はできなかった。
龍「でも・・・バカじゃない・・・私に・・・・・・優しくしてくれた・・・それに・・・・・私の・・・初めての・・・友達・・・だから・・・」
高「なら、尚更お前が右足から出さないとな。あいつの事を思っているのなら」
龍「でも・・・それは・・・」
高「それにな、あいつが言う通りにしなかったからってすぐに裏切るとか思わねえって。むしろ、自分の哀れさに気付くんじゃねえか」
龍「・・・・・・」
龍子は俯いたまま黙りこんでいた。
高雅はこれ以上、とやかく言うつもりはなかった。
高「まぁ、お前の好きにしろ。俺がどうこう言ったって、別に従えってわけじゃない。じゃあな」
高雅は龍子の肩を軽く叩いてから自分のクラスのテントへ戻った。
龍子も夢がいる入場門へ行った。

そして始まった二人三脚。
次々と白熱した競争を繰り広げて来た所に、BとDの出番が回って来た。
お互いの片足をロープで縛り、肩を組んでスタートの準備をする。
B「分かってるか？」
D「ああ、当たり前だ」
お互いの意思を確認し合ったその時、審判がピストルを空に向けた。
審「よーい・・・〈パンッ！！〉」
甲高い音と共に地面を蹴りだす選手達。
その中にあの二人はトップを走っていた。
もちろん、あの掛け声で。
B・D「えー、○ん、えー、○ん、えー、○ん・・・」
ご丁寧に腕まで振って余裕の素振りを見せる。
しかし、観客どころか、ここにいる全ての人が痛い目で見ていた。
2位と差をつけ、独走のゴールを飾った二人だが、視線は痛いまま。
そして、不意に零した一言。
B・D「・・・死のう」
そう言って、二人はその場に倒れた。
その後、二人は精神科に連れて行かれたのは言うまでもない。

あれから、重い空気は回復せず、遂に龍子・夢ペアの番になった。
夢「あいつら・・・この空気、どうしてくれるん」
龍「いない・・・人に・・・言っても・・・意味がない・・・」
夢「そりゃ、そうだけどさぁ・・・なんか、ムカつく」
龍「ははははは・・・」
龍子は苦笑いしつつ、やはり悩んでいた。
当然、高雅の言葉についてだ。
龍「・・・・・・」

夢「ん?、どうしたの?。まさか・・・ビビッて士気が落ちた?」
龍「そ・・・そんなこと・・・ないよ・・・」
夢「ほんと~?」
龍「ほ・・・ほんと・・・だって・・・」
夢「あんたの声はいっつも小さいから分からない。今ぐらい大きな声ではっきりと言いなさい」
龍「うう・・・それは・・・恥ずかしいよ・・・」
夢「ったく、あんたは可愛いんだから、少しは自信持ちなさい」
龍「ご・・・ゴメン・・・」
審「そこの二人、速くスタートラインに着きなさい」
ずっと会話している内に、他の者は既に用意万全の状態で待機していた。
それに気付いた二人は慌ただしくスタートラインに着いた。
それを確認した審判がピストルを空に向けた。
審「よーい・・・〈パァン!!〉」
そして、二人は走り出した。

結果、ビリ。
何回も足が縺(もつ)れ、かなりの差をつけられてのビリだった。
競技が終わって、テントに戻った途端、夢は龍子に怒っていた。
夢「あんた~、ほっとうに左足から出したの!?」
龍「う・・・うん・・・」
夢「じゃあ、何で何回も何回も躓(つまず)くの!?」
龍「それは・・・」
クラス皆も注目していた。
龍子はやり場のない視線をキョロキョロ彷徨(さまよ)わせていた。

すると、高雅が近づいて来るのが見えた。
高「簡単だ。アホッ子がアホなだけだ」
そう言いつつ、高雅が話しに参加していた。
そして、今の言葉にクラス皆が頷いた。
夢「あんたね～」
高雅に鋭い視線を送りながら夢がゆっくりと振り向いた。
高「何だ、やるのか？。女だからって容赦しねえぞ」
そう言って拳を作り、夢の目の前に出した。
夢「あんたの顔はいつか殴りたいと思っていた所よ」
夢も理性がキレてきたのか顔が怖くなり始めていた。
そんな二人の様子を交互に見る龍子だったが、このままではまずいと動き出した。
龍「だ・・・ダメ！！・・・喧嘩はダメ！！」
二人の間を開けるように自分の体を割り込ませた。
いつもの物静かな声に似合わず、はっきりとした大きな声で。
龍「喧嘩・・・しないで・・・」
そして、啜(すす)り泣きしながら、とどめの言葉。
さすがの二人もこんな様子を見て喧嘩しようとは思えなかった。
高「・・・ったく、分かった。じゃあ、実証してやる」
夢「何を実証するつもり？」
高「いいから、黙って龍子と肩を組め」
高雅もさっきとは違って冷酷な声になっていた。
夢はそれに驚き、恐怖を感じた。
夢「わ・・・わかった・・・ほら、龍子。もう、泣かないで」
さっきの啜り泣きではなく、涙を零し、しゃっくり混じりで泣いていた。
龍「ううう・・・ひっく・・・ぐす・・・」
それでも、高雅の言葉は届いていたのか、龍子はすぐに夢と肩を組んだ。
高「んじゃ、アホッ子。左足を出せ」

夢「アホッ子言うな！！」
夢は怒りを地面にぶつけるようにドシンと力強く一歩踏み出した。
そして、高雅が付け加える。
高「ここで、足が結ばれている為、龍子は右足を出す」
夢「・・・・・へっ？」
龍子は何も言わず、夢の出した足に並べるように右足を出した。
高「で、龍子は左足を出す」
そして、龍子は左足を出した。
夢は漠然とその光景を見ていた。
高「ここで、問題。龍子は気を付けの状態で夢が足を縦に開いているのは何故でしょう？」
夢「え・・・あ・・・まさか・・・」
高「やっと気付いたか、アホッ子」
夢「・・・・えっと・・・」
夢は静かに組んでいた肩を外し、距離を取って膝をついた。
夢「ごめんなさい！！」
そして、勢いよく頭を下げ、土下座した。
龍子は慌ただしく夢に近づいた。
あまりに驚いたことだったのか、もう涙は止まっていた。
龍「別に・・・いいよ・・・もう・・・分かってくれたなら・・・」
そう言って、夢の肩に手を置き、許しの言葉を贈った。
夢「でも・・・自分の所為なのに、私はあんたに酷い事を」
龍「許すよ・・・許すから・・・ね・・・ほら・・・立って・・・」
夢「ありがと・・・・あんたはあたしの最高の友達だよ」
龍「私も・・・夢ちゃんが・・・一番の・・・友達だよ・・・・」
夢「龍子・・・」
高「はい、ストップ。そろそろ百合が咲きそうなのでここまで」
龍「？・・・百合は・・・夏だよ・・・」
龍子が純粋にツッコミをする。
もちろん、高雅が言った百合はそんな綺麗な物ではない。

高「はいはい、取りあえず、終了。夢のアホも実証できたことだし、もう終わり」
夢「・・・ねえ、一つ聞いてもいい？」
夢が大人しい声で高雅に質問する。
高「？、何だ？」
そんな様子に疑問に思いながらも夢の方を見る。
すると、夢の体は震えていた。
夢「この事って・・・皆知ってた？」
高「当然だろ。もちろん、龍子もその中に入る」
夢「じゃあ、何で教えなかったのよーーーーーーーー！！！！！」
夢に新しい怒りが芽生え、高雅に突っ込む。
高雅は軽く避けるが、夢は止まらず、クラスの方へ走っていく。
夢「あんた達も同罪だーーーー！！！」
矛先はクラス皆のようだ。
皆は散り散りに逃げていった。
龍子はそんな光景をポツンと見ていた。
龍「・・・・・・・」
高「どした？」
龍「いや・・・・高雅君・・・」
高「ん？」
龍「・・・ありがとう・・・」
高「どういたしまして」
夢「龍子ーーーーー！！！！！！。あんたも同罪よーーーー！！！！！」
高「ほら、龍子。逃げるぞ」
龍「ふふ・・・分かった・・・」

その後、楽しい鬼ごっこは先生が注意するまで続いた。

## 体育大会　その他競技と昼食

この回は色んな競技をハイライトでお送りするよ。
高「まぁ、一個一個取り上げていたら、ものすげー長くなりそうだから、脇役キャラがでる競技を簡単に書いちゃおう、という事だ」
脇役には厳しく、扱いが酷い作者ですみません。
高「そう思うなら改善しやがれ」
善処はしてある。
ただ、あえてこんな風な事もありかなって思って・・・
高「おい・・・」
ま・・まぁ、取りあえず、今回の書き方は少し違うよ。
高「何が？」
全体はいつもと変わらないが、あえて結果を先に書いてから書こうと思いました。
高「また、そんな意味不明な事を・・・」
と・・取りあえず、本編をどうぞ（汗）

あっ、後、二人三脚の結果を書き忘れていたのでここに書いておきます。
重ね重ね、すみません。

紅　１５０点　白　１５０点

長距離走。

結果：普通に2位でゴールしたが・・・

この競技にはEが出場しています。

長距離走はグランド5周の小さな耐久レース。
殆どが陸上部で埋め尽くされる競技だが、そこにEが立っていた。
もちろん、部活などは入っていない。
体力も平凡並みである。
E（これでいい成績を収めれば、カッコイイ事間違いなし）
そんな不純な心で競技に挑もうとしていた。
ちなみに、本人曰く、足は速い方だと言う事。
審「よーい・・・〈パァン！！〉」
ピストルを空に撃ち、競技が始まった。
陸上部の人はグランド5周はアップ程度の事なのか、最初からかなり飛ばしている。
Eはそれについて行こうとしている。

残り1周のところで、陸上の人はラストスパートに出た。
E（負けるかあああああああ）
もう、スタミナはとっくに切れているのに、陸上部の人の前に出ようとした。
幸い、陸上部の人は長距離専門の為、速さ自体はそこまで無い。
Eでも勝てる速さだった。

そして、残り30メートル地点。
Eは3位ですぐそこに2位がいた。
ちなみに、1位はもうゴールしている。
E（こいつさえ・・こいつさえ抜けば・・・）
もう、スタミナの問題ではない。
Eは完全に足にきていた。
それでも、最後の最後まで諦めず、遂に2位と並んだ。
E（うおおおおおおおおおおおおおおおお）
そして、ゴールラインを過ぎた時、Eは2位になっていた。
E（やった・・・・・・・あれっ？）
足を止めて止まろうとしたが、足に感覚がないのか、止める事が出来ず走り続けている。
そのまま、観客の所に突っ込んでいる。
E「わああああああああああああ、退いて退いてええええええええええええええ」

ドガッ

そんな声も虚しく、Eは観客の所へ突っ込んでしまった。
不「おい、テメー!!。いい度胸してるじゃねえか!!」
さらに運悪く、ぶつかった相手は喧嘩上等の不良だった。
E「す・・すいません!!」
不「謝って済むなら警察いらねえよ!!。おらっ!!」

ボゴッ!!

E「げふっ!?」
不良の放ったパンチはEをぶっ飛ばし、倒れたEに追撃を浴びさせ続けた。
観客が少し固まって助けが遅れたため、Eは病院送りとなった。

紅　２２０点　　白　２００点

綱引き

結果：デブ＝ＮＧ。

この競技にはＣが出場しています。

綱引きは各クラスから数名が出場し、同じ色同士組み合って一本の縄を引っ張りあう。
紅白がお互いに向き合って、真ん中に綱が一本置かれていた。
審判が真ん中に立ち、一度お互いの方を見て確認する。
準備がいいと判断した審判はピストルを天へと向けた。
審「よーい・・・〈パァン！！〉」
開始と同時に、綱はピンと張り、どちらも譲らない状態が続いた。
Ｃ「まぁぁぁけぇえぇぇるぅぅぅぅぅぅうかぁあぁぁぁあぁぁぁぁああ」
随分、振動している声で気合いを高めるＣだが、それでも綱は動かなかった。
一向に進まない試合。

それは、意外にも観客を虜(とりこ)にさせていた。
観客だけでなく、出場していない生徒達も応援の声が後を絶たなかった。
その状態が1分続いた。
そして、遂に綱がゆっくりと白の方へ動き始めた。
C「やばい!!。負けてる!!」
懸命に引っ張るが、一人が頑張った所で、複数に勝てる訳がなかった。
C「何か手は無いのか!?」
無駄だと思いつつも辺りを見回すC。
すると、後ろの方に息切れで疲れているデブがいた。
呑気に休んでいるデブを見て、Cは怒りを燃やした。
C「おい、デブ!!。休むんじゃねえ!!」
その瞬間、周りからバカとかオワタと聞こえ始めた。
Cは何?って感じで周りを見る。
そして、視線をデブに戻すと、そこには目を燃やし、怒りに満ちたデブがいた。
デ「僕はデブじゃない!!。ポッチャリ系だゴラアアアアアアアアア」
そのデブは今までの疲労がなくなったのか、綱を片手で持った。
その瞬間、C以外の人は綱から手を放した。
C「へっ!?、何!?」
意味も分かるはずのないCは綱を放さない。
デ「うおらあああああああああああああ」
C「うっひゃあああああああああああああああ!!!!?!?」
デブの一引きで綱は青空へ飛んで行った。
そして、綱と一緒に果てしなく跳んで行くC。
体育大会で捜索願が出されたのはこの学校が初めてだろう。

紅　２７０点　　白　２００点

他にも、組み体操、普通のリレー、騎馬戦、棒倒しｅｔｃ
午前の競技は一通り終わった。

紅　４６０点　　白　５４０点

午前の競技が終わった高雅達はそれぞれの場所で昼食を食べている。
もちろん、高雅はアリア達と合流し、一緒に食べている。（食事はアリア、レオを除く）
しかし、アリア達は少し目立つため、人気の少ない所で食べている。
ア「はい、コウガ。お茶」
高「ん、どうも」
フ「ボクもお茶が欲しいです」
ア「はいはい」
レ「フィーラ殿。これはコウガ殿が食べるものであって、フィーラ殿は食べてはならないのでは？」
フ「いいのです。コウガ様が何も言わないのでいいのです」
レ「しかし・・・」
高「別にいい。あんまり食い過ぎるのも悪いし、元々フィーラの分

まで作っているんだ」
レ「そうか・・・コウガ殿がそう言うのであれば」
フ「では、早速・・・」
フィーラは一つのおかずを集中的に取りはじめた。
ちなみに、それは皆大好きミートボール。
高「おい!!。他のも食いやがれ!!」
フ「これが一番好きです。好きな物は先に取らないと無くなるです」
高「だからって全部取るな!!。俺の分ぐらい残せ!!」
フ「食べ過ぎは良くないです」
高「テメー・・・」
ア「はいはい、落ち着いて。食事ぐらい楽しくしよ」
高「・・・ったく・・・」
？「がっははは、賑やかだなぁ」
突然、デカイ声を上げながら近づいて来る人達がいた。
高「この声・・・龍子の親父か」
大「覚えとってくれてうれしいぞ、坊主」
振り向くと同時に確認すると、大輔ひきいる杉野家がわざわざ高雅達の所にやって来た。
龍「こんにちは・・・」
ア「こんにちは、リュウコ」
フ「こんにちはです」
レ「こんにちは」
高「それで、わざわざ何か用ですか？」
虎「ちょっとばかし運動していたらあんたらを見つけて、挨拶に来ただけさ」
高「ん？、ＰＴＡ競技でもあったか？」
高雅はプログラムを確認するが、昼の競技は『何でもあリレー』しかない。
ＰＴＡ競技などは存在していなかった。
虎「あたしが龍子とそれに出るのさ」

そう指を指しながら言った。
指したのはもちろん、『何でもあリレー』だ。
高「ありなのか？」
龍「一応・・・いい・・・みたいだから・・・」
高「ふ～ん・・・じゃあ、俺もアリアを連れてこようかな」
ア「え！？」
大「何だぁ～、ラブラブパワーってか？」
高「違いますよ。この人じゃなくて、青いリストバンドの事ですよ」
もちろん、それはここにいる青いロングヘアーの天使なのだが。
杉野家では龍子しか理解していなかった。
虎「そのリストバンドとやら、一体どんな仕掛けがあるんだい？」
高「とっておきの仕掛けですよ」
妖しい笑みを浮かべながら曖昧な答えを言う。
虎「あっははは、そりゃぁ、楽しみだね。そろそろ、こっちもウォーミングアップに戻ろうかね」
そう言って、虎子は一人走り出した。
大「それでは、またな、坊主」
龍「また・・・後で・・・」
二人も後を追うようにどこかに行った。
高「さーって、飯を食う・・・っておい！！！！」
フ「あみゅ？」
高雅が弁当に目を戻すと、既に殆どが食べられていた。
会話中にフィーラに食べられてしまったのである。
フィーラを睨みつけるも、すっとボケた顔をして首を傾げていた。
高「俺の分は？」
フ「コウガ様が食べないので、ボクが全部食べてあげたです」
高「ありがた迷惑だ！！！！！」
結局、高雅はろくに食事を摂る事ができなかった。

# 体育大会　何でもあリレー　前編

遂に、この体育大会の大目玉である『何でもあリレー』が始まろうとしていた。
そして、生徒達による策略が波乱を呼ぶ。
高「るっさい。能書きはいいから、さっさと始めろ」
はいはい、わかりましたよーだ。
まずは、1年、2年、3年という順番で行います。
走者以外が助けたりするのはNGです。
でも、バレなければOKです。
後はそんだけ。
何でもありです。
高「分かりやすくて助かる」
それでは、1年の第一走者はスタートラインに着いてください。

1年はまだ、どれほどまでが許されるか分からず、落とし穴やエアーガンなど規模の小さいもので済んだ。

そして、高雅達2年が始まろうとしていた。
高雅は軽くストレッチをし、戦いに臨んでいた。
ア（やる気満々だね）
高（これぐらいしてねえと後で筋肉痛になるっての。全く、あいつらがいれば・・・）
実は、高雅はアンカーを任されていた。
しかし、それはちょうど購買部組が占めていた部分で、高雅がその穴埋め役となってしまった。
なので、高雅は購買部組と自分の分、計3周走らなければならない。

ア（筋肉痛って・・・ちょっと前に命を掛けた激しい戦いを過ごしたのに、ケロッとしている人が言うセリフ？）
高（あれは全体の筋肉を程良く使うからそこまで負担は無いんだ。今回は足に負担が大きいからな）
ア（ふ～ん・・・ま、今回は命は掛けないし、気楽に行こうよ）
高（重傷はあるけどな）
そんなこんなのやり取りをしている最中に、もう第一走者がスタートラインに着いていた。
審「よーい・・・〈パァン！！〉」
地獄のリレーの幕が切って下ろされた。
しかし、一人しか走り出さず、他の皆は気絶していた。
高「なっ！？・・・いつの間に！？」
気絶した者に外傷はない。
すると、先に走った一人がタネを明かした。
他「ははははのは！！。俺様の眠り粉は即効性だからな！！」
呑気に後ろを見ながらスキップで進んでいると、突然、その場から消えた。
いや、消えた訳ではない。
落とし穴に掛かっただけだった。
さらに、落とし穴に掛かった瞬間、カモフラージュしていた布で綺麗に蓋がされた。
他「ぎゃあああああああああああああああああああああ」
その第一走者はスズメバチと共に穴の生活を楽しんだ。
ア（コウガ、このままだと、終わらないよ）
一人はスズメバチ、他は睡眠と、さっそく展開が全く進まない状況に陥った。
高（・・・はぁ～、しゃーねえな）
高雅は地面に力をを伝わせながら自分のクラスの走者の目を覚まさせた。

これは活性の力により、脳を活性化して起こさせたのだ。
もちろん、この場にいる皆はそんな異能の力だとは思わない。
ただ、何でもありという言葉にしょうがないと思ってしまう。
結局、何にも掛かることなく、高雅のクラスは第2走者目にバトンが渡った。
高「このまま、楽に終わればなぁ～」
そんな事をボヤキながら第2走者が走るのを見ていたが、第2走者はいきなりその場に倒れ込んだ。
よくみると、足から血を流していた。
ア（い・・・いつの間に！？）
高（・・・成程、ワイヤーだ）
高雅は目を活性化させ、原因を確認していた。
すると、第2走者の周りには無数のワイヤーが張り巡らされている事が分かった。
高（多分、足を切ったんだ）
すると、第3走者が心配したのか迎えに行った。
高（あいつ・・・ワイヤーって気付いてないな）
ア（どうするの？。このままじゃ、あの人も怪我しちゃうよ）
高（はぁ～、めんどくせえな）
高雅はまた地面に力を伝わせ、ワイヤーを全て破壊した。
その後の事も考え、このグランドにある全ての罠を破壊しておいた。
所々、爆発も起きたりした。
高「おいおい、重傷で済むか？」
そんなことを思っている内にバトンが渡り、高雅のクラスは完全に独走状態だった。
そして、さっきの爆発によって眠っていた他の走者も目を覚ました。
レースはまだ始まったばかりである。

もはや1時間が経過していた。
高雅のクラスは独走状態から3位まで落ちていた。
鉈を持って笑いながら振り回す生徒もいれば、それを鍬で立ち向かう生徒もいた。
いきなり氷点下まで気温が下がるかと思えば、炎天下並みに気温が上がったりもした。
破壊光線を撃つ者もいれば、か○は○波で対抗する者もいた。
箒に乗った生徒が謎の石からビームをだしたら、傘を持った生徒が傘の先端からからビームをだして撃ち合いしていた。
エクスなんとかパトローナムで守護神を召喚すれば、カードを掲げて神を召喚したりもあった。
とにかく、この日だけ、皆は異常な力を得られていた事を知らない。
そして、そのたびに高雅が裏で力を使っていた事を知らない。
高（あー・・・走ってもねえのに、何か辛い）
高雅の出番まであと一人。
その一人は龍子だった。
虎「おらおらおら!!、どきなどきな!!」
虎子が竹刀を振り回しながら豪快に生徒を突きとばして一気に1位に浮上した。
龍子は虎子が通った後ろを走っていた。
高「やっぱ、強いな。龍子の母親は」
すると、虎子が高雅の目の前で止まった。
そして、高雅に竹刀を向けた。
虎「あんた。今、ここで再戦を望むよ」
高「いや、待て。いくらなんでも今は無理だろ」
高雅が冷静に現状況を説明したが、虎子の目は高雅しか映っていなかった。
虎「問答無用!!。はあああああああああああ」
高「マジかよ!?」

虎子が高雅に向かって竹刀を振り回して来た。
高雅はそれを紙一重でかわしていった。
振り切ったとき、周りの生徒に被害が及んだのは言うまでもない。
龍「お母さん・・・やめて・・・」
遅れて来た龍子が歯止めを掛けるが、その小さな声は虎子の耳に入っていなかった。
ただ、高雅の一つ一つの動作を見切るのに集中していた。
虎「・・・もらったよ!!」
高「やべっ!?」
高雅が一瞬だけ足を滑らせた。
その隙を狙って虎子が鋭い突きを繰り出して来た。
高「あー!!、もう!!。やってらんねえ!!」
そこで、高雅は吹っ切れてしまった。

スパパパパ!!

虎「な・・・」
虎子の竹刀は高雅の双剣によって細切れにされた。
高雅は剣を逆手に取って、神速で踏み込むと同時に・・・

ドグッ!!

虎「ぐはぁ!!」
虎子の腹に柄を埋まらせた。
そのまま、虎子は力なく倒れた。
高「今度は正々堂々戦ってやる。ただ、今のはちょっと不公平だった」
そう言って、剣を束ねて片手で持ち、虎子をグランドのトラックから退ける。
そして、唖然と佇んでいる龍子の下へ行った。

高「ん」
高雅は手を出して、気付かせるように一文字だけ喋った。
龍「え・・・あ・・・はい・・・」
龍子もそれに気付き、高雅にバトンを渡した。
気が付くと、虎子にやられた生徒は既にバトンを渡していた。
高「んじゃ、行きますか」
ア（やっと、出番だね）
高（もう、散々働いたけどな）
高雅は速度の力を使って異常なスピードで走り始めた。
とは言っても、肉眼で確認できない程のスピードではない。
さすがに、マッハで3周したと言っても誰も信じられないため、あえて、見えるような速さである。
見えると言っても、軽く世界陸上の記録を破る速さだが。
高雅は１０秒も掛からずに半周し、2位との差を追い詰めた。
高（軽い軽い）
余裕をかまして2位を抜き去ろうとした。
他「Ｉ　ａｍ・・・・・・ｍｙ　ｓｏｗｒｄ・・・・・・・ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｏｄ・・・・・」
高「！？」
抜き去ろうとしたとき、その走者は意味不明な英語を喋っていた。
あまり集中していなかったため、片言しか聞きとる事は出来なかった。
しかし、その言葉は高雅の記憶のどこかにあった。
高（今のは・・・えっと・・・何だっけなぁ～）
けれども、高雅は思い出す事は出来なかった。
高雅は特に気にもせず、1位との距離を縮めていた。
そして、残り2周のところで1位と並んだ。
高雅は普通に1位を抜き去ろうとした。
しかし、とんでもない事になってしまった。
高「！？・・・何だ！？」

突然、空間が歪みだしたのだ。
そして、グランドは段々荒野と化していった。
しかし、ただの荒野ではない。
地平線まで異様な形をした剣が無数に突き刺さっている荒野だ。
高「思い出した！！・・・けど」
高雅はこの光景を見て先ほどの英語が何だったのか理解した。
高「ＵＢＷってありかよおおおおおおおおおおおお」
高雅は叫んだ。
叫ぶしかなかった。
この、本当に何でもありの展開に。

## 体育大会　何でもありリレー　前編（後書き）

※ＵＢＷが分からない人用。

簡単に言えば、固有結界。

固有結界が分からない人は、俺世界の結界に閉じ込めた、とでも思っていてください。

# 体育大会　何でもありリレー　後編

今、結界の中には走者しかいない。
固有結界を展開されたしまった以上、その術者が解かなければ結界が消えることはない。
しかし、高雅と結界を展開した本人以外、誰が結界を張ったか分からない。
だから、無知の者がとる行動は・・・

皆殺しというバトルロワイヤルだった。

高「おぉ～、殺ってる、殺ってる」
高雅はそのバトルロワイヤルを傍観しながら術者を探していた。
狭いグランドのトラックに展開しただけだが、荒野は地平線まで広がり、術者はどこかに消えていた。
物陰などなく、剣しかないこの場所でだ。
ア（コウガ、後ろから誰か狙ってるよ）
高「ん、俺に矛先を向けたか？」
高雅が振り向くと、そこにはロケットランチャーを構えている生徒がいた。
他「死ね！！」
高「あいつ、死ねって言ったぞ」

バシュウッ！！

ロケットは一直線に高雅に向かって放たれた。
高「これは・・・普通、当たったら死ぬよな」
ア（まぁ・・・普通はね）
高「ちゃんと、火薬とかは制限してるのか？」

そう言って避けもせず、当たってみた。
もちろん、そういう風に見せかけて目の前に不可視のシールドを創って張ってあるが。

チュドォォォォン

高雅を中心に半径約2メートルのクレーターが出来上がった。
高「十分、人が死ぬじゃねえか！！」
ア（ルールって意味あるのかな？）
撃った本人は高雅が怒鳴り散らしているのを見て驚き、もう一度構えようとしていた。
もちろん、高雅がそれを許すはずはないが。
マッハ以上のスピードで接近し、腹を殴って気絶させた。
高「ったく・・・死ねはねえだろ。死ねは・・・ん？」
ふと、生徒が持っていたロケットランチャーに目をやった。
高「あいつ・・・弾を装填する動作なんかしてなかったな・・・」
生徒は撃ってすぐに2発目を撃とうとしていた。
それでも、弾はちゃんと装填されていた。
高「これって・・・まさか、無限ロケットランチャー？」
ア「そんな、公式チート武器な訳ないよ・・・・・・多分」
バカな結論だが、今の状況からして信じられない話ではなかった。
そのため、アリアも完全には否定できなかった。
高「取りあえず、こいつ、何処で手に入れたんだ？」
ア「確かに不思議だよね。こんな現実味のないものを持ってるなんて」
高「今、俺が持っているのも現実味がないけど」
ア「それは別。私は別なの」
高「こらこら、別にするんじゃねえ」
真面目な話だったが、内容がずれていっているのに気付いてない二人である。

高「とにかく、術者をぶっ倒すぞ」
ア「そうだね・・・ん、誰か来てるよ」
高「ああ、とっくに気付いてる」
高雅の後ろに一つの殺気がある事に二人は気付いていた。
気付かれている事を知らないその哀れな人は突き刺さった剣を影にしながら様子を窺っていた。
最も、剣に隠れても、はみ出ているので丸見えだが。
高「あー、そこに隠れてるの、出て来い。最も、隠れられてないが」
他「ちっ、ばれたか。やるじゃねえか」
そう言って出てきて、早々に高雅に剣先を向けた。
高「喧嘩っ早いな」
他「そうじゃないさ・・・まぁ、見てなって」
剣を両手で握り、剣先を高雅に向けたまま集中し始めた。
地面がうなり、小さな軽石が浮きはじめていた。
他「・・・〇・・・解!!!!」
高「嘘だろ!?」
突然、その生徒の霊力が爆発し、霊力が静まった時、手には黒い黒刀を握っていた。
その刀の柄と刃の境目には『卍』な形をしていた。
高「あちゃー、こりゃ、マジで何でもありだな」
ア（どうする?）
高「どうするも何も、やるしかねえだろ」
そう言ってバトンをズボンに挟み、双剣を抜き構える。
他「ほう、この姿を見ても戦う気か?」
高「何だ。戦わないでくれるのか。俺的にはあんまし戦いたくねえんだけどな」
他「そうか。なら、一撃で倒れてくれ。そしたら戦わないでやろう」
高「好戦敵だな。ほんと・・・」
他「それが嫌なら、痛い目にあってもらうしかないな」
その瞬間、生徒の姿がぶれ、一瞬で高雅の後ろを取った。

他「死ね！！」
高「だから、死ねって言うな！！」
高雅は振り向きと同時に剣を振り、敵の剣を受け止めた。
生徒はすぐに移動し、また一瞬で高雅の後ろを取った。
高「ああもう！！、うっぜーな！！」
今度は振り向きもせず、片方の剣を後ろに回すだけで、見もせずに剣を受け止めた。
しかし、その受け止めは少し違った。
他「うお！？」
剣同士が当たったが衝撃がなく、生徒は流されるように前に倒れていった。
高「ふん！！」

ドガッ！！

他「ぐお！！」
そして、倒れた背中に目掛けて一発殴った。
高「これでよしっと」
他「何だ・・・体が・・・動かねえ・・・何をした！？」
高「ただ殴っただけだ。神経が弱るつぼを殴ったけどな」
もちろん、全くの嘘である。
静寂の力で神経を弱らせただけである。
他「く・・・・・そ・・・・・」
高「さーって、術者を探すか」
再起不能の生徒をそのままほっといて、高雅は術者を探し始めた。

一方、景色変わって、固有結界の外は唖然としていた。
夢「走者が・・・皆・・・消えたぁ！？」
龍「高雅君・・・」
夢「一体、今年もなんちゅーリレーだっつーの」
龍「夢ちゃん・・・落ち着こうよ・・・」
夢「これが落ち着いていられるわけないの！！。走者がいなくちゃリレーじゃないじゃん！！」
龍「それは・・・そうだけど・・・」
夢「もーっ、前年に比べてレベルが上がり過ぎっつーの！！」
計りしれない人間の知略に罵(ののし)っている夢だった。

場所を変えて、ギャラリーサイドでは・・・
フ「コウガ様が消えたです」
レ「この競技は何なのだ？。人が消えるなど、一体どのような仕掛けがあると言うのだ？」
フ「ボクに聞かれても分からないです」
レ「そうか・・・しかし、コウガ殿は無事だろうか？」
フ「大丈夫です。コウガ様とアリア様は最強のペアです。如何なる境地でも乗り越えて来るです」
レ「そうだな。あの二人は我々の想像を遥かに超えておるからな」
二人を心配しつつも、その不安は薄いものだった。

戻って結界内。
高「見つからねーなー」
ブラブラと歩き続けているが、殆どの走者は倒れ、人は見つからず、途方に暮れていた。
ア「あっ、人発見」
高「どこ？」
ア「４時の方向」
高雅は首だけを動かしてその方向を窺う。
そこには人が倒れていた。
高「誰かにやられたんだろうな」
生きてるかどうか確認するために近づいて見ると、綺麗に額を銃弾で撃ち抜かれていた。
しかも、死体に銃が握られていた。
高「自殺か？。そこまで、追い込められていたのか」
ア「ルールは破るためにあるって本当ね」
高「んな訳ねえだろ」
そう言って呆れつつも、死体を埋めるための穴を掘っていた。
掘ると言っても、破壊と活性の融合力の爆破の力で小爆発を起こし、人が埋まるだけの穴を開けただけだが。
？「・・・・・ねえ・・・」
高「!?、生きてる!?」
突然、死んでいた生徒が地面に顔を俯けたままゆっくりと起き上がり、呟いていた。
その呟きは次第に大きくなり、高雅の耳にも聞こえてきた。
生「・・・・きれねえ・・・」
高「ん?、何だって!?」
すると、首を勢い良く上げ、高雅に聞こえるように喋った。
生「死んでも死に切れねえ!!!!!」
高「・・・・あー・・・あれか・・・復活か」
生徒の額にはオレンジ色の炎が燃えており、目は淡いオレンジ色に

輝いていた。
高「でもあれって、後悔がないと死ぬんじゃなかったっけ？」
高雅は目の前にいる生徒が何の後悔があるか分からず、むしろ故意的に撃ったのなら、後悔などは無い。
そう推測していた。
しかし、事の成り立ちを考えている内に、生徒はその場から消え、高雅の後ろを取っていた。
生「どこを見ている？」
高「ッ！？」

バゴッ！！

生徒は手から炎を噴射し、その勢いで高雅をぶっ飛ばした。
高雅は地面を何回かバウンドした後、地面との摩擦によって停止した。
ア（コウガ！！、大丈夫！？）
高「いって～～・・・あの野郎、不意打ちしやがって。てか、グローブなしで炎をだせるのかよ」
すぐに立ち上がって、付着した砂を呑気に払っていた。
ア（迎え撃たなくていいの？）
高「もう終わった。俺に触れた地点であいつの負けだ」
高雅はもしもの為に体の外側に静寂の力を纏（まと）っていたのだ。
それに触れたとなれば、お分かりだろう。
高「ったく、術者はどこにいるんだか・・・・」
砂を払いながら辺りを見回すが、人影（さっきの生徒は除く）すら見つからない。
高「・・・あっ、まさか・・・」
高雅は一つだけ隠れられる場所を見つけた。
ア「何か分かったの？」
高「多分・・・まぁ、何でもありだからきっとそうだろうけど」

そう言って高雅はしゃがみ込み、地面に手を置いた。
そして、意識を集中させ、ある力を込め始めた。
すると、近くの地面が盛り始めた。
その隆起した地面は次第に大きくなり・・・
生「熱ちいいいいいいいいいいいいいいい」
人が出てきた。
高「ビンゴだったな」
ア（まさか、地面に隠れてるなんて）
ちなみに、高雅が使った力は活性の力である。
それによって、地面の中にある様々な分子の熱運動を激しくさせ、熱を上げていたのであった。
詳しくは理科で習ってね。
高「取りあえず、こいつを倒すか」
生「へん、簡単にやられると思うなよ」
すると、生徒は手のひらに渦巻いた球体を創りだした。
生「らせｎ「さっさと、くたばれ！！」」

バギッ！！

痺れを切らした高雅が瞬速のパンチを浴びさせ、声を出す前に気絶した。
すると、もの寂しいかった剣と荒野だけの景色が歪みだし、もとのグラウンドに帰って来た。
高「やっと終わった」
ア（お疲れ様）
歓「わあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
倒れている走者達と一人だけ立っている高雅を見て、観客は物凄い歓声を上げた。
高「何で、こんなに盛り上がるんだ？」
ア（誰もいなくなって、再び現れたら、皆倒れて一人だけ立ってい

るとなれば、勝手な想像で盛り上がるんじゃない？）

高「まぁ、その創造はあながち間違ってねえけどな」

観客の歓声を浴びながら、高雅は走ることなく歩いてゴールした。

## 体育大会　裏競技　終幕

三年生はさらに酷かった。
ガン○ム　ＶＳ　エ○ァという夢の共演もあった。
ウェ○カーのように異常な身体能力を手に入れている者もいた。
あろうことか、巨人兵を召喚した人もいた。
取りあえず、全員に言えた事は・・・

普通に死ねます（笑）

そんな大乱闘の末、得点は、

紅　６５０点　　白　６５０点

と、奇跡の同点だった。
競技は全て終わり、生徒全員はグラウンドに整列し、閉会式に臨んでいた。
そして、今は最後の地獄のこーちょーのお話である。
校「お互いに全身全霊を出し切り、共に一歩も引かない戦いで――」

３０分後。

校「――である。最後に一言。ご苦労様じゃ」
最後の一言は誰の耳にも入っていない。
高「うげー、やっと終わった・・・」
縮こまった体を伸ばし、青空を仰いでいた。

他の生徒も同じようにしているのが何名もいた。
放「続きまして、得点のはっｐ「ちょっとまったあああああああ」はい！？」
突然、一人の生徒が放送席からマイクを奪い、発言の主導権を奪った。
生「引き分けで引き下がれるかあああああ。だから、紅白の団長同士で戦い、勝った方の勝利とするって言うのはどうだあああ！？」
高「うわ、帰りが遅くなりそう・・・」
高雅の悪い予想は簡単に当たり、生徒だけでなく観客もその言葉に大いに賛成していた。
凛「待ちなさい！！。勝手なことは許しませんわ！！」
凛が止めに掛かるが生徒は聞く耳を持っていなかった。
生「はぁ！？、別にいいじゃねえかよ、会長さん。そうだ、いっそバトルロワイヤルにして会長争奪戦にしようぜ」
凛「なっ！？。何ふざけた事を言いますの！？」
生「いいじゃん。俺、お前のこと好きだし」
凛「意味が分かりませんわ！！」
生「うるせえな。ちょっと寝てろ」

ボゴッ！！

凛「うっ！？・・・」
生徒は凛の腹を殴り、気絶させた。
生「しゃあああああ、野郎共！！。勝利と女が欲しけりゃ勝て！！。いっそ、ギャラリーも参加したいならしてもいいぜ！！」
男共「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
観客も参加し、先生では抑えられない騒動まで飛躍した。
女性陣はすぐに避難したため巻き込まれてないが逃げ遅れた女子生徒もいた。
高「ったく・・・何だって、こう、喧嘩っ早いかな・・・」

ア「それで、どうするの？」
高「どうするも何も、さっさと帰って寝るが一番だろ」
ア「いや、この状況でそれは無いと思うけど・・・」
生「死ねえええええええええええええ」
一人の生徒が無謀にも高雅に挑戦しに行った。
高「だーかーらー、死ねを言うな！！！！」

ガンッ！！

生「ぬぎゅ！？」
走ってくる生徒の頭の上に巨大な盥（たらい）を落とした。
当たり所が良く、呆気なく気絶してくれた。
高「ったく、死語は自重しろよな」
ア「コウガ！！、リュウコが逃げ遅れてるよ！！」
高「何！？」
アリアに言われ、首だけを動かして居場所を確認する。
すると、少し離れた場所で龍子が男子４人に囲まれていた。
高「適当に襲い始めたか。強欲な人間はｓ「制裁だね」俺のセリフを取るな」
ア「たまにはね。それに、あいつらは私も許せない。無害な人を襲うなんて」
高「お前の場合、友達が危険な目に遭ってるからだろ」
ア「それは、高雅にあげる」
高「いらん。制裁が出来る、それだけで十分だ」
ア「それじゃ、早く制裁という名の救出をしよ」
高「はいはい」
高雅は同じように標的の頭の上に巨大な盥を落とさせた。
男４人の身長は大体同じなので、綺麗に４人ともスタンした。
龍子は何が起きたか分からず、その場に立ちすくんでいた。
でも、少し離れた所の高雅を見つけて納得した。

龍子は一度頭を下げてこの戦場から離れた。
高「さて、帰るか」
踵を翻して、帰ろうとした。
しかし、足は動かず、何かに掴まれていた。
レ「何をしている、コウガ殿」
フ「速く喧嘩を止めるです」
フィーラとレオがそれぞれ片足ずつ抑えていた。
フィーラに取って、この大騒動は喧嘩に見えるらしい。
高「やだ。めんどい。眠たい」
レ「何を言うのだ!!。この混乱に乗じて地獄の者が襲ってくるかもしれんぞ!!」
高「何で地獄の奴らが、たかが喧嘩で俺らを襲うんだよ?。大体、来たって１０秒でぶっ倒せる」
フ「でも、捕まったあの人はコウガ様の仲間です。助けるのが道理です」
高「仲間だから信用してるんだよ。一人で何とか出来るって」
ア「気絶してるのに?」
レ「武器を持っておらぬのにか?」
フ「あの人、女性ですよ?」
綺麗に三者三問で来たが高雅は口ごもることなく、全てに当てはまる答えを言った。
高「安心しろ。あいつは金持ちだぞ。あんなことすれば・・・」
そう言って、少し遠い空を見る。
レオ達も吊られて空を見ると、そこには何十というヘリがこちらに向かって来ていた。
高「ほんと、スケールがでけえな。金持ちは」
高雅はグラウンドを後にしながら呟いていた。
ア「でもさ、今、生徒達はチートな行動をしてる人が多いよね」
高「・・・・・・・・・」
その言葉に高雅は足を止め、振り返ってグラウンドを見た。

そこには、いつの間にかテポ○ンがあった。
高「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい」
高雅の目の前でミサイルは放たれ、ヘリの大群のど真ん中で爆発した。
火薬は制限されていたのか、爆炎は地面まで届かなかった。
だが、ヘリは全て落ちた。
ア「でっ、気絶してるし、応援はないよ」
レ「武器を持っておらぬし、特殊能力もないぞ」
フ「女性だし、一般人です」
高「うぐぐぐぐ・・・」
三人はさらに一言付け加えていってやった。
口ごもった高雅は完全な負けを感じていた。
ア「どうするの?。もはや、救いの王子様は高雅しかいないと思うけど」
レ「我も手伝いはするぞ」
フ「ボクだって手伝うです」
高「・・・・・・３０秒で終わらせる」
高雅は双剣を握り、速度の力でグランドへ戻った。
邪魔な人を峰打ちで押しのけ、気絶している凛の下へ一瞬で着いた。
そして、凛を抱えてその場から離れようとした。
生「おい、賞品を勝手に持ち帰るな!!」
高雅の行動に気付いた生徒がどっから生み出したか知らない禍禍しい斧を持っていた。
高「人を賞品にするな。これは没収だ」
生「ふざけんな!!。ジャノサイｄ〈ガッ〉うっ!?」
生徒は斧に邪悪な力を溜めたかと思うと、地面に崩れ落ちた。
レ「コウガ殿、先走るでないぞ」
レオが指と指の間を閉じ、鋭くした手を見せながら言う。
高「手伝ってくれるんだろ?」
レ「今、手伝ってやったではないか」

高「フィーラの方がよっぽど働いてるけど」
高雅は首だけでレオに後ろを見せるようにした。
それが伝わってレオは後ろを向くと、頭を抱えながら苦しんでいる生徒が無数にいた。
こちらの視線に気付いたフィーラは余裕のVサインを見せてくれた。
レ「やはり、楽園には勝てないか」
フィーラのお陰で生徒と参加した観客は争いを止め、自分の幻覚と向き合っていた。
高「取りあえず、凛を親族に送ってくる」
レオにそう言い残して、高雅は凛の親族の所へ行った。

姫花家は学校の外で待機しており、警察、ＦＢＩなどを呼んでいた。
香「お父様、凛姉ちゃんは大丈夫なの？」
父「待ておれ、香凛。今、救出に向かわせておる」
自分の事をろくに見ず、携帯電話と向き合っている父をつまらなく感じた。
香凛はそんな姿に嫌気がさして目を逸らした。
香「・・・・ん？」
その目先には、凛を抱えた高雅が映っていた。
香「あっ！！、高君と凛姉ちゃんだ！！」
父「何ッ！？、凛だと！？」
香凛の声に反応し、ガードマンや執事が驚きの声を上げていた。
高「ん？、何か嫌な予感が・・・」
高雅の嫌な予感の的中率は１００％であった。
ガードマン達が一斉に銃を高雅に向けていた。
高「おいおい、撃ったら凛に当たる可能性があるだろ」
父「心配するな。この者どもの射撃の腕は群を抜いてトップだ。この距離で外す訳がない」
高「あくまで可能性だろ。万が一、凛に当たったら責任取らんぞ」

父「ふふっ。なら、試してみるか？」
？「やめなさい！！」
突然、車の中から制止の声が上がった。
ガードマンはすぐに銃を下ろし、声がした方を窺った。
すると、車から一人の女性が下りてきた。
香「お母様？」
母「あなた、恩人の顔を忘れたの！？」
突然、香凛を無視して夫を叱りだす。
この場の所有権が一目瞭然だった。
父「恩人じゃと？。この者がか？」
母「あなた、本当に忘れたの？。呆れたわ」
父「何のことやら？」
高「こっちが聞きてえよ」
すると、母親はポケットから一枚の紙を取り出した。
そこには、高雅の顔が書かれていた。
高「あれ、俺の似顔絵だ」
ア（ほんとだ。すごく上手に描かれてるね）
絵の出来は非常に素晴らしく、１０００人に１０００人が高雅の顔と分かる程だ。
母「この者は香凛を救ってくださった方よ！！」
紙を突き付けながら自分の夫を気圧で倒そうとした。
父「な・・何と！！。この者が！？。確かに、顔は同じのようだ」
高「何だか、誤解は解けたのか？」
ア（そうみたいだね）
凛「う・・・ううん・・・」
すると、凛がゆっくりと瞼を開け始めた。
高「んあ、起きたか」
凛「高雅・・・さん？・・・」
寝起きで頭が回らず、目をこすってもう一度見る。
すると、ある事が分かった。

それは、高雅に抱かれている事だった。
凛「きゃあああああああああ」
高「げふっ！？」
見降ろす高雅の頭を殴り飛ばし、高雅の腕から離れた。
凛「なななな、何をしていますの！！？？／／／」
赤くなりながらも高雅に問う。
すると、凛の母親が手を肩に置き、落ち着けた。
母「彼があなたを助けたのよ」
凛「お母様？」
一度母の顔を窺ってから、もう一度高雅の方を見る。
高雅は顎を擦りながら痛みを和らげていた。
母「ほら、お礼を言いなさい」
凛「わ・・分かりましたわ」
高「別にいらね」
会話が聞こえていたのか、高雅が割り切って来た。
高「お礼なんていらねえよ。俺はさっさと帰って寝たいんだ」
すると、高雅は踵を翻して学校の方へ向かおうとした。
凛「あっ・・・待っ・・・」
凛が呼び止めようとしたとき、既に高雅はこの場から消えていた。
凛「あ・・・」
凛は高雅がいた所を惜しみそうに見つめていた。
母「ふふっ、彼なら凛の婿になってもいいわね」
凛「なっ！？・・・何を仰っていますの！？、お母様！？／／／」
母「あら、顔が真っ赤よ」
凛「べ・・別に赤くありません！！／／／」
しかし、自分でも気付いているほど顔が熱いのは感じていた。
母「じゃあ、香凛の方かしら？」
香「え・・・カリンは・・・その・・・」
香凛は俯きながら、口ごもっていた。
しかし、それは照れではなく、別の人を思っているようだった。

母「あら?、香凛には、もう思い人がいたのね」
香「あうう・・・／／／」
母に簡単に見破られてしまい、両手で顔を隠して照れ隠ししていた。
母「あなた達、思い立ったらすぐに行動しなさい。そうしないと、取られちゃうわよ」
凛・香「お・・・お母様・・・／／／」
母の言葉に照れながら非難するが、母はただ悪戯っぽく笑うだけだった。

その後、高雅は一度学校へ戻り、レオとフィーラを迎えに行って、家へ帰った。
今は、その帰宅中。
自転車を押しながら雑談していると、アリアが何かを思い出した。
ア「あっ、そう言えば・・・はい、これ」
アリアはポケットをあさくると何かを掴み、高雅に差し出した。
高「ん?・・・ああ、これか」
もらったのは前にアリアからもらった三日月が付いているネックレスである。
高雅は体育や風呂など特別な時以外は常に付けているのである。
今日はそれをアリアに預けていた訳である。
フ「みゅ?・・・!?、それは!?・・・」
ふと目に入ったネックレスを見て、フィーラは目の色を変えた。
高「ん、どうした?」
フ「コウガ様!!、それをどこで手に入れたです!?」

高「どこでって・・・アリアにもらったから分からねえけど」
ア「どうしたの?。突然?」
フ「それは楽園の賜物(たまもの)です!!」
高「これがか?」
フ「はいです。それは、『選別の飾り』と言って、自分が望む力しか受け付けない代物です」
高「ふ~ん・・・」
高雅はもう一度ネックレスを間近で見るが、特に変わったものではなかった。
フ「だから、コウガ様は天蜘蛛の毒も効かないです」
ア「そう言えば、高雅が本気を出した時、静寂の力が掛けられなかった時もあった」
高「肝試しの時も、フィーラの夢幻が効かなかったのもこのお陰か」
そう言ってネックレスを空高く上げる。
夕日に反射して幻想的な輝きを帯びていた。
高「何が幸せにする効果があるだよ。とんだ代物じゃねえか」
ア「私だって分からなかったの。それは子供の頃セバスチャンからもらったものだから」
レ「何にせよ、アリア殿からもらった大切なものに違いはないだろ」
高「べ・・別にアリアからもらったからって大切な物って訳じゃねえぞ」
レ「ふっ、素直になれぬな」
高「何が言いたい?」
レ「さっき言った通りだ」
レオはスーツのネクタイを調整しながら鼻で笑う。
高雅はそれを横目に見ながらネックレスを付けた。
フ「でも、楽園の賜物は他にもあるです」
高「この現世にか?」
フ「噂では3つあるらしいのですが・・・一つは現世にあるらしいです」

高「ふ～ん・・・まっ、別にいらねえか。これ一つだけでもすげーし」

フ「よくないです！！。地獄の手に渡ったら現世何か崩壊するです！！」

高「はぁ～・・・何でそんなもんを創ったのかね～」

フ「知らないです。きっとノリです」

高「ノリで創るな！！！！」

そうこう話している内に家に辿り着き、高雅はすぐに眠りに着いた。

# 風邪をこじらせて

いつも通りの朝を迎えた訳だが、今日は少し違った。
フ「あみゅ～・・・」
いつもの気の抜けた声でも、今日だけはどこか元気を感じられない声であった。
フィーラは今、体温計を口に咥えてベッドの中にいた。
高「ひょいっと・・・8度6分か・・・ったく。昨日、風呂上りにちゃんと髪を拭かねーから、こうなるんだよ」
体温計を引っこ抜くと、完全に異常な体温を表示し、高雅は呆れていた。
それもそのはず、昨日は見たいテレビがあるからと言って風呂を適当に済ませたのであった。
それが、今となって帰って来たのだ。
フ「みゅ～・・・ゴホッゲホッ・・・」
ア「大丈夫、フィーラちゃん？」
高「ほっとけ。自業自得だ」
レ「コウガ殿、それは言い過ぎだろ」
高「事実だ。ほら、アリア。さっさと学校へ行くぞ」
冷たく当たり、部屋を出て学校へ向かおうとした。
フ「ゲホッ・・・い・・行かないでです・・・」
フィーラが必死に手を伸ばし、高雅に制止の言葉を送った。
高「少しは反省しろ」
しかし高雅は振り向きもせず、ドアを強く閉めると静寂の空気が訪れた。
ア「じゃあ・・・行ってくるね」
アリアも高雅に続き、部屋を出ようとした。
しかし、フィーラが今にも泣きそうな顔で腕を掴み、行かせまいと力を込めていた。

フ「行かないでです・・・」
ア「う～ん・・・困ったなぁ・・・」
フ「お願いです・・・ゲホッ・・い・・行かないでです・・・」
高「まだか～」
いつの間にか戻って来た高雅がドアに寄りかかりながら腕を組んでいた。
ア「ねぇ、コウガ。今日ｈ「ダメだ」どうして?。いつも学校サボりたいくせに」
高「もうすぐテストだろ。疎かにする訳にはいかねえんだよ」
ア「それはそうだけど・・・」
アリアは横目でフィーラを伺いながら言葉を考えていた。
しかし、高雅は待つことはせず、ドアを閉めて出ようとしていた。
フ「ごめんなさいです・・・だから・・ゴホッ・・一人にしないでです・・・」
その時、高雅の動きが止まり、また腕を組んでいる状態に戻った。
高「レオがいるだろ」
フ「レオだけじゃないです・・・コウガ様・・・もちろん、アリア様も・・ゲホッ」
ア「フィーラちゃん・・・」
フ「皆・・・皆一緒がいいです・・ゴホッゲホッゲホッ・・・はぁ・・」
すると、力尽きたのかアリアを掴んでいた手を放し、ベッドからずり落ちようとしていた。
ア「!?、フィーラちゃ・・・」
だが、アリアが言い終わるより早く、高雅が瞬時にフィーラに駆け寄り、受け止めた。
高雅はフィーラを持ち上げ、ベッドに戻し、布団を掛けた。
高「ほんっとうに反省してるだろうな?」
フ「はい・・・です・・・」

高「・・・・・・・・ったく、我(わ)が儘(まま)な奴だな」
ぶっきらぼうに言い返すと、高雅は部屋をそそくさに出ていった。
アリアは一応、高雅の後について行った。

高雅が行った場所はリビングにある電話。
手慣れた速さで番号を打つと受話器を耳に当てる。
一時すると高雅は喋り出した。
高「もしもしおはようございます2年の崎村高雅です突然ですが妹が高熱で親がいない為休みます意義は認めませんそれでは」
息継ぎをせず、一方的に喋って受話器を置いた。
アリアはその光景をただ茫然と見ていた。
ア「コウガ・・・」
高「何してるんだ?。さっさと部屋に戻れ。俺は着替えてから行く」
ア「ふふ、わかった」
アリアは高雅の照れ隠しに笑いながら部屋へ戻って行った。
高雅も制服から私服に着替え、部屋へ戻った。

高雅が部屋に戻ったとき、フィーラは不思議そうな顔をしていた。
フ「みゅ?・・・コウガ様、学校は?・・・ゴホッ」
高「今日は不吉な予感がした。学校行けば面倒事に巻き込まれるとな。だから休んだ」
その言葉を聞いた瞬間、フィーラの顔がパァと明るくなった。
フ「ありがとうです・・・ゴホッ」
高「礼は要らねえ。さっさと治せ」
フ「はいです♪」
高雅はフィーラの顔をろくに見ず、机に向かって座り勉強を始めた。
アリアとレオはその光景を見てはにかんでいた。

それからというもの、高雅は時折フィーラを見ながら勉強し、アリ

アはフィーラの手を持って安心させ、レオは人間の状態になって本を読んでいた。
フィーラは安心したのかよく眠っていた。
高「・・・そろそろ、飯の時間か」
ふと時計を見ると既に二つの針が上を向いて重なろうとしていた。
高雅は立ち上がって台所へ向かおうとした。
フ「・・・どこに行くです？」
ア「あっ、起きた」
タイミング良く目を覚ましたフィーラが部屋を出ていこうとする高雅に目が入った。
高「ん、ちょっと飯を作りに行くだけだ」
フ「・・・みゅ～、行かないで欲しいです」
高「おいおい、たかが台所に行くだけだろ」
フ「それでも・・・です・・・」
同じ屋根の下を移動するだけであるのに、フィーラは高雅が視界からいなくなるのを本当に悲しんでいるようだった。
ア「ねえ、コウガ。さすがに今、離れるのはまずいんじゃないかな」
高「つまり、俺に死ねと言う事か」
ア「人間は1日何も食べないぐらいで死なないよ」
レ「コウガ殿、少しはフィーラ殿の甘えを聞いてやってもいいじゃないか」
高「甘やかしすぎるとダメになるから、やだ」
レ「しかし、今日だけは特別という事にはならんのか？」
高「ならんな。同じ屋根の下を移動するだけだろ。ささっと作って戻ってくるから」
レ「コウガ殿は鬼畜か？」
ロ「鬼畜だな」
高「・・・おい、テメーはどっからやって来た？」
いつの間にか、ログナが部屋に混じっており、話しに参加していた。
ロ「いやー、久しぶりに登場したいな～って思って来たぜ」

高「来たぜ、じゃねえよ!!。何しに来た!?」
ロ「飯を頂きに」
高「テメーは食わなくてもいいじゃねえか」
ロ「バッキャロオオオオ。俺っちじゃなくて蓮田の分だ!!」
高「そんなこと言ったって、やらんもんはやらん」
ロ「人でなし!!、鬼!!、鬼畜!!、悪魔!!、化け物!!」
高「不法侵入者が気取るなあああああああああああ」
高雅は沸点に達し、ログナに回し蹴りを喰らわそうとした。
しかし、ログナは腰を後ろに折って簡単に避けた。
ロ「はっはっはっは、無駄なエネルギーを消費すると腹減るぜ」
高「だったら今すぐ帰れ!!」
ログナは渋々壁をすり抜けて帰っていくと高雅はその場に座り込んだ。
高「はぁー・・・疲れた」
ア「ほんと、いきなり現れるね」
高「何か、動く気失せたな～・・・」
そう言って壁にもたれかかりながら天井を見上げた。
すると、高雅はゆっくりと目を閉じ始めた。
ア「?、コウガ、眠いの?」
高「んあ?・・・ああ・・・何か眠い・・・」
ア「そんな所で寝たら風邪引くよ」
高「そうだけど・・・ねみい・・・」
首がコックンコックン動き、最早、眠る寸前の状態である。
ア「布団、持ってくる?」
高「頼む・・・Ｚｚｚ・・・」
結局、耐えるも虚しく眠り始めた。
意識をなくしてバランスを崩したのか、壁を引きずって横に倒れた。
ア「じゃあ、ちょっと布団を取ってくるね」
フ「え!?・・・」
立ち上がるとフィーラが悲しそうにアリアを見つめるとアリアは頭

を撫でながら落ち着かせた。
ア「少しだけ、ほんの少しだけだから」
フ「でも・・・いやです」
ア「あっ・・・」
アリアの撫でている手を両手で掴むと、それを胸に押し付けて離れさせようとしなかった。
ア「困ったなぁ」
アリアは苦笑いしながら腕を解放させようとした。
しかし、思いっきり掴んでいる手を振りほどくのは少し可哀そうに思えてきた。
ア「・・・仕方ない？。レオ君、コウガをお願い」
レ「分かった。だが、君付けをどうにかしろ」
ア「いい加減慣れない？」
レ「慣れぬ」
レオは本を閉じ、座っていたイスに置いて立ち上がると、獣状態になり高雅を包むように丸まった。
ア「うん、ありがと」
レ「我もこのまま少し眠るとしよう」
レオも腕を枕にして眠り始めた。
ア「ほら、もうどこにも行かないよ」
フ「・・・本当です？」
ア「うん、また手を握っててあげる」
フィーラはアリアを信用し、少し惜しみながらも腕を放させてあげた。
アリアはまた横に座り、フィーラの手を握った。
ア「ふぁ～・・・何だか、私も眠たくなってきた」
周りが眠っている所為か、腕を枕代わりにして、アリアも眠り始めた。
フ「皆・・・一緒・・・」
フィーラも安心しきり、ゆっくりと瞼を閉じた。

高「・・・んあ・・・くぅぅ～～・・・」
高雅は目を覚ますと同時に背伸びをしつつ、掛け時計を見た。
時刻はいつの間にか夕方になっていた。
高「ふぁ～・・・寝過ぎたな～。タイムサービスが終わってる。食材が尽きてきてるってのによ」
まだ眠たい欲を堪え、立ち上がって周りを見る。
高「何だ、皆寝てんのか」
高雅は勉強机のイスに座りながら皆を見渡した。
高「・・・皆一緒か・・・」
ふと、フィーラが行っていた言葉を思い出すと、自分の過去がよみがえり始めた。
高「・・・叶わない、願いだったっけ」
それは家族を失う数ヶ月前の事だった。

その頃の高雅は兄の勇人と一緒に公園で遊んでいた。
ブランコに揺られながら、高雅は勇人に聞いてみた。
高「ねえ、勇人兄ちゃん。大きくなったらお母さんとお父さんに恩返ししようよ」
勇「そうだな・・・俺らが大きくなったら母さんと父さんを遊園地に連れてってやるか」
高「いいね、それ。だったら、おばあちゃんもおじいちゃんも連れ

そんな契を交わした無邪気な過去を高雅は今でも覚えていた。
勇「ああ、皆一緒にだ」
高「うん。皆一緒、だね」
勇「よし、いっそ親戚も連れて皆一緒に遊園地に行こうぜ」
て行こう」

何も感じず、ただ漠然と見るだけ。
そんな事をぼやきながら片手で頬杖をつきながら遠くを見ていた。
高「・・・あれ、フラグだったんだな」

フ「・・・コウガ様？」
高「！？、起きたか？」
突然、声を掛けられて驚きつつもすぐに平然とした顔になった。
フ「・・・コウガ様・・・」
高「ん、何だ？」
フ「どうして・・・泣いているのです？」
高「え！？・・・」
高雅はそーっと頬に手を触れてみた。
そこには、知らずうちに涙の跡があった。
高「なっ・・・目にゴミが入っただけだ」
そんなレベルの低い嘘を吐きながら涙を服で拭(ぬぐ)う。
自分でバカだと後で気付いた時には既に遅かった。
フ「コウガ様、悲しそうです」
高「悲しくなんかねえよ」
見え見えの嘘を吐きながら言葉を遮断しようとする。
しかし、否定すればするほど涙は止まらなかった。
体が否定できないのだ。
残酷な約束をしてしまった過去があるため。

フ「・・・コウガ様？」
すると、高雅はゆっくりとフィーラに近づいた。
そして・・・

ガバッ

フ「みゅ！？」
強く抱きしめた。
フ「コウガ様！？」
訳が分からず、じたばた暴れ出すが高雅はなお一層強く抱きしめた。
高「こんな思い、知らせねえ」
フ「？、コウガ様？」
高「お前にこんな思いを知らさせねえからな。だから、一緒だ。もう孤独になんかさせねえ」
フ「ふぇ・・・・」
フィーラは暴れるのを止め、落ち着きを取り戻した。
しかし、内心は滅茶苦茶焦っていた。
ア「コ～ウ～ガ～」
すぐ真横にいたためか、アリアが起きた。
非常にドスの効いた声を発しながら。
高「ん、どした？」
ア「こんの、ロリコン！！！！」

パシンッ！！！！

高「いって！？」
アリアの容赦無しのビンタをもろに喰らった高雅は少し吹き飛ばされ、床に倒れた。
そのまま、アリアはマウンドポジションに入り、高雅の首を締めあげた。

ア「何してるの!?。フィーラちゃんを抱き締めて!?。どういうつもりよ!!??」
高「うが・・・バカ!!、誤解だ!!。俺はそんな不純ｎ「問答無用よ!!!!!」って、待て!!!。剣はまずいって!!!」
アリアは腕を剣に変え、今にも振り下ろそうとしていた。
レ「待て、アリア殿。一体、何の騒ぎだ!?」
この騒ぎに起こされたレオはこの光景を見てアリアの行動をすぐに止めた。
ア「コウガがロリコンだったのよ!!」
高「だから、違う!!」
レ「訳が分からぬ。少しは落ち着いてくれ」
ア「コウガが、私達が眠っている間にフィーラちゃんに抱きついていたのよ」
高「だから、それは誤ｋ「それは、コウガ殿が悪い」待てって!!。話しを聞きやがれ!!」
ア「うるさい!!。人の気持ちも知らないで!!」
高「知るか!!。この、やられてたまるか!!」
高雅は体を横に転がしてアリアのマウンドポジションを脱出し、部屋から逃げた。
ア「こら、待て!!」
アリアも懲りずに高雅を追いかけはじめた。
レ「待つのだ、コウガ殿」
レオもアリア側につき、共に高雅を追い始めた。
一人残ったフィーラは顔を真っ赤にして茫然としていた。
フ「コウガ様に・・・告白されたです・・・／／／」
どうやら、ここにいる全員は誤解をしてしまったようであった。
それからというものの、フィーラの熱は別の意味で下がらなかった。

# 風邪をこじらせて（後書き）

ベッタベタな落（おち）ですね。

# 絶交

１０月の朝。
本格的に肌寒くなっていく季節の移り変わり。
しかし、高雅にとってそれはどーでも良い事であった。
高「はぁ」
深いため息を零しながら机に突っ伏す。
ここ数日、アリアとレオからは軽く軽蔑され、フィーラとは顔を合わせてなかった。
龍「・・・どうしたの？・・・」
高「何でもねえよ」
龍「でも・・・もう４回目・・・」
４回目とは高雅のため息の回数である。
高「４回ため息したぐらいで気にするな」
龍「普通・・・気にする・・・」
ア「いいよ、リュウコ。コウガが悪いから」
龍「？」
高「だーかーらー・・・」
ア「ふんっだ」
龍子だけが分からず、二人のギクシャクはより深まるだけであった。
ア「コウガはＡ君と語ってればいいのよ」
高「・・・・・・」
ア「Ａ君と一緒にいつまでも語っｔ「いい加減、黙りやがれ！！！」ッ！？」
遂に高雅がキレてしまった。
今まで抵抗しないで来たが、さすがにこれ以上は耐えられなかった。
高「さっきから偉そうに言いやがって、調子に乗るんじゃねえ！！」
腕にあるブレスレットを乱暴に外すと、それを思いっきり床に叩きつけた。

ア「いた!?。何するのよ!?」
アリアも怒りが爆発し、人間状態に戻った。
龍「二人とも・・・喧嘩は・・・」
高雅とアリアが取っ組み合いをし、龍子はそれを鎮めようとするが怖くて手が出せない。
力は高雅の方が上でアリアは完全に押されていた。
高雅は女だからって容赦なく、顔面や腹を殴ったりもした。
そして、首を掴み、壁に叩きつけた。
ア「がっ・・げほっ・・・」
高「俺が黙って聞くとでも思ってんのか!?」
高雅は完全に我を忘れていた。
また、昔の人を拒む目と共に。
高「調子づいていい気になりやがって。テメーなんざ、絶交だ!!」
ア「!?・・・分かった・・・もういい!!」
アリアは高雅を蹴っ飛ばし、距離を取った。
高雅はすぐに詰め寄ろうとしたが、自分の胸からあるものが出ている事に気付いた。
それは、契約した時の光る紐だ。
アリアはその紐を手に取るとそのまま引き千切った。
この奇怪は高雅でも理解できた。

契約を破棄したのだと。
もう、他人同士になったのだと。

ア「もう知らない!!」
アリアは窓から飛び出し、どこかへ飛び去って行った。
龍子は何が起こったのか分からず、ただ茫然と見ていた。
高「・・・ちっ、胸糞わりぃ。帰る!!」
落ち着きを取り戻した高雅は鞄を手にとって教室を出ようとした。
龍「はっ・・・待って・・・高雅君!!」

高「何だよ?」
高雅は龍子の制止の言葉に素直に立ち止まった。
龍「その・・・これで・・・いいの?」
高「何が!?」
高雅は何かは分かっていたが遠回しに聞かれた事に少し腹を立てていた。
龍「その・・・アリアの・・・こと」
高「いいんだよ。あいつから勝手にやったんだ。俺が知ったことじゃねえ」
龍「ほんとに・・・そう思ってる?」
高「何?」
龍「アリアが・・・いなくなっていい・・・って思ってる?」
高「当たり前だ。あんなトラブルメーカーが消えれば清々する」
龍「それ・・・嘘・・・」
高「嘘じゃねえよ」
龍「嘘だよ・・・だって・・・目が潤んでるよ」
高「!?」
高雅は焦って目を拭った。
しかし、服には水が付いた跡などなかった。
龍「拭ったって事は・・・アリアを思っている・・・だよね」
高「テメー・・・誘導尋問か?」
龍「・・・ゴメン・・・」
さすがにやりすぎたかと龍子は頭を下げた。
高「・・・・・じゃあな」
高雅はこれ以上いられないと思って教室を出た。
龍子が何か呼びとめていたのが聞こえたが構わず出た。
あのまま教室にいたら、龍子の言葉で自分の心がグシャグシャになりそうだったから。

緑淵町とは少し離れた森の中。
アリアは思い切ってどこか遠くへ行き、気付けば見知らぬ森だった。
適当に切株に腰を掛けて、一人空を眺めていた。
ア「・・・・・少し・・・やりすぎたかな？」
高雅との大喧嘩。
殴り合いもするほどの喧嘩は初めてだった。
最も、一方的に殴られたのだが。
ア「まだ、頬がヒリヒリする。あんなに思いっきり殴られたの初めてだよ」
頬を擦（さす）ると少し熱を帯びているのを感じられた。
赤く腫れ上がっているのだろうと判断できた。
ア「それにしても、思い切って契約解除しちゃったけど・・・いいのかな、これで？」
今思えば自分が間違っていたのかもしれない。
高雅は何かが言いたかった。
それを、自分の嫉妬でそれを塞いでしまっていた。
自分勝手な発言で高雅を怒らせた。
ア「・・・何だか、全部私が悪い見たい・・・」
そう思いつつ、顔を正面に戻すと、そこに一人の少女が立っていた。
ア「？、あなた、どうしたの？」
？「・・・虹のお姉ちゃんだよね？」
ア「！？」
突然、ピンポイントな質問をした少女をアリアは警戒し始めた。
ア「何者！？。地獄の使い！？」
マ「そうだよ。私はねー、マイゴって言うんだよ。お姉ちゃんの敵討ちに来たよ」

ア「お姉ちゃん?、敵討ち?」
アリアは理解できなかったが、敵だと言うことが分かっただけでも十分警戒する対象になる。
ア「よく分からないけど、戦うってこと?」
マ「へぇ?、戦わないよ。お姉ちゃんは新しい玩具になってもらうの」
ア「意味が分からないけど、お断りよ」
マ「人の玩具を壊して偉そうにするの。悪い子だね。人のモノを壊したら弁償だよ。それで、弁償が出来ないなら体で払うのが道理だよ」
ア「あなたの玩具なんて知らない。初見なのにあなたの器物を破損したなんて心当たりがない」
マ「じゃあ、こう言えば分かるかな?。私の玩具はラビリンスお姉ちゃん」
ア「なっ!?」
アリアはマイゴの言った通りすぐに理解した。
しかし、まだ納得出来ない部分がある。
ア「姉が玩具ってどういうこと?」
マ「そのまんまの意味だよ。お姉ちゃんの悲痛な声や絶望した顔、死にたいと絶叫する魂、あんな面白いモノを壊しちゃんなんてね」
ア「っ!?、こいつ・・・」
今のセリフで大体分かった。
この子は危険な奴だと。
ア「悪いけど、私は玩具なんてなりたくないの。だかr「無理だよ」え!?」
マ「無理だよ。だってお姉ちゃん、もう、まともに動けないんだもん。それに、喋ることも」
ア「!?」
「どういうこと!?」と聞こうとしたが、突然、腕が活性化した。
ア「!?」

「一体、何!?」と喋ろうとしたが、今度は爆破の力が数キロ先で起こった。
マ「あっはははは、面白い。面白いよ、お姉ちゃん」
ア（何!?、喋ろうとしたら力が勝手に!?）
アリアは何か力を掛けられてしまっていると思い、静寂の力で力を止めようとした。
ア（!?、あれ!?）
しかし、何故か前に歩きだした。
マ「あっはははは、お姉ちゃん、面白過ぎる。お腹痛い」
ア（一体、どうなっているの!?）
敵が何かした事は確かである。
しかし、それが何なのか見当もつかなかった。
マ「あっはははは・・はぁ～。さーて、もっと踊ってね」
ア（!?）
マイゴがナイフを持ってゆっくりと近づいてきた。
そして・・・・

高「ただいま～」
家に着いた高雅はそそくさに自分の部屋へ向かった。
レ「速いな、コウガ殿・・・?、アリア殿はどうした?」
高雅の腕にいつもの蒼いブレスレットが巻かれていない事に気付いたレオ。
高「しらね。どっかに散歩でもしてんじゃねえか」

レ「散歩って・・・おい、コウガ殿」
適当な相槌を打って部屋へ行くことを止めない。
レオの言葉も無視してさっさと部屋に入る。
高「・・・ったく、朝っぱらから気分がわりぃ」
ベッドにダイブして、気だるい体を布団に預けた。
そのまま、目を瞑って眠ろうとした。
レ「コウガ殿」
しかし、それを妨げるようにレオが入って来た。
レ「コウガ殿、学校はどうした?。それに、アリア殿も一体?」
高「うるせえな。知らねえよ、んなもん」
レ「そんなはずなかろう・・・!?、コウガ殿、契約の印はどうしたのだ!?」
高雅の左手の甲にあった羽のような紋章がきれいさっぱり消えていることに気付いた。
高「見ての通りだ」
レ「まさか、契約を破棄したと言うのか!?」
高「そうだよ。もういいだろ、さっさと寝かせてくれ」
レ「いいや、良くない。詳しく話すまで寝かせはせんぞ」
高「あー!!、もう!!。話せばいいんだろ!!、話せば!!」
高雅は学校で起こったことを話した。
レ「・・・・・そうか。それは、コウガ殿ｇ「だから、テメーらは適当に解釈してそれを過信するな!!」どういうことだ?」
高「勝手に俺がフィーラの事を好きみたいに言いやがって。あの時はそんな想いじゃなかったんだ!!」
レ「では、どういう・・・!?」
突然、レオが首を９０度回転させた。
そして、窓から見える遠い場所を真剣に見ていた。
高「ん、どうした?」
レ「向こうに力が見える。それも、妙な色だ」
高「どんな?」

レ「ピンク色とオレンジ色が混ざっておる」
高「じゃあ、お前がどうにかしてくれ」
レ「なぬ！？」
レオは驚いて顔を高雅に戻すが、高雅は既に眠っていた。
レ「・・・仕方がない。我が行くか」
レオは家を飛び出すと、人目が付かないように人間の状態で走っていった。
走ると言っても、普通の人間の５０倍の速度だが。
行きかう人は皆突風うだと思い込んでいた。
フ「・・・コウガ様？」
戻って、家ではフィーラが高雅の部屋に入って来た。
高「Ｚｚｚ・・・」
フ「・・・寝てるです」
高雅の顔を覗き込むと寝息と立てて眠っていた。
試しに頬を突っついてみるが起きる気配はなかった。
フ「みゅ～・・・あれ、印がないです」
フィーラも契約の印がない事に気付いた。
フ「コウガ様、起きるです」
気になったものは速く聞くのがベスト。
そう思ったフィーラは高雅を揺すり、意識を覚醒させた。
まだ寝たばっかなので、すんなりと起きてくれた。
高「んあ・・・ったく、何だよ？」
フ「その・・・契約の印はどうしたです？」
高「また、その事か。あいつとは契約を破棄した」
フ「な・・何故です！？」
高「あいつがうるさかったんだ。人の話も聞かないであーだこーだ言うからぶん殴ったら契約を破棄してどっか行ったよ」
フ「コウガ様！！、それは最低です！！」
突然、フィーラが身を乗り出して高雅に顔を近づけながら言った。
高雅は気圧され、少し身を引いた。

フ「女の子に手を挙げるのは最低な行為です！！」
高「じゃあ、黙ってあいつの腹癒せ(はらい)を聞いていろって言うのか！？」
フ「そうじゃないです。コウガ様は本当にアリア様に伝えようとしたのです！？」
高「したさ！！。だけどあいつが全部聞こうとしなかったんだ！！」
フ「それはコウガ様の気持ちが足りないからです！！。伝えたい事ははっきりと伝えるのです！！。相手にどんなに拒絶されてもです！！」
高「・・・・・・・」
フ「黙りこんでしまうのなら、コウガ様の気持ちはその程度って訳です」
フィーラの言う通りだった。
確かに、高雅は伝えようとしたがアリアは聞こうとしなかった。
しかし、それで終わっていた。
今思えば、誤解を本当に解きたい気持ちなんてほんの少ししかなかったのかもしれない。
だから、――――
高「・・・ちょっと、出掛ける」
高雅はベットから立ち上がり、部屋を出ていった。
フィーラは高雅の後ろ姿を微笑みながら見送った。

# 狂い姫（前書き）

久々グロ注意だよ

# 狂い姫

高雅が向かった先は草木が入り混じった森の中だった。
邪魔な雑草をかき分けて向かった先には透明な池と咲き乱れた花々と一つの墓石が立っていた。
そう、ここは崎村家の墓地である。
高「ふぅ・・・」
高雅は墓石に身を寄せて座り込んだ。
そして、一人呟きはじめた。
高「・・・母さんが贈って来たやつ、捨てちまったからな」
誰とも話すことなく、切なそうに空を見上げんがら呟き続けた。
高「だってよ、色々と事件を持ってくるし、人の話しは聞かねえし、自分勝手に話しを進めたりするし、テストじゃ不正行為するし、弱いし、気がきかねえし、もうダメダメだ。あいつがいると色々と大変だし、一人の方がめっちゃくちゃ楽だぞ」
ただただアリアの悪い所だけを伝えようとする。
遠くにある青い空の先を見つめながら。
高「だから、思い切って捨てた。今日、喧嘩したしな。ちょうどいい区切り目だった」
立ち上がって、脇に置いてあったバケツを手に取り、池で水を組んで戻ってくる。
そして、墓石の蔵に置いてあった雑巾を取り出し、濡らして墓石を拭きはじめた。
高「だけど、みょ〜にスッキリしねえんだ。なんか、差し支え棒があるみたいな、そんな感じがするんだよ」
丁寧に丁寧に拭きあげ、太陽の光が反射するほどの輝きを取り戻した。
高「アリアの事が頭から離れねえんだ」
バケツの水を土に返して再び墓石に寄りかかる。

高「だから、一体このもやもやは何だろう～な～って思ってここで考える為に来たって訳。まぁ、そのついでに綺麗にしてやったんだけど。ん?、ついでじゃ失礼だな。じゃあ、アリアを考えることをついでにしといて」
?「一人で何を仰られていますか?」
高「!?」
不意に聞こえた紳士のような声に反応し、すぐに体を起こした。
ここを知っているのは高雅と龍子しかいないはずだった。
だが、そこに人はいた。
人と言っても人の恰好をしているだけだが。
セ「お久しぶりです、コウガ様」
高「セバスチャン!?」
セバスチャンは礼儀正しくお辞儀をするが、高雅は唖然とその行為を見ていた。
高「ちょっと待て、何でここを知っている!?」
セ「天国からコウガ様とアリア様の行動を仕事の合間に見ていますから」
高「プライバシーもねえな」
セ「申し訳ありません。それより・・・」
もう一度お辞儀をしたと思いきや、首だけを上げて高雅を睨みつけた。
紳士としての意外な行動に高雅は思わず一歩引いた。
高「なっ、何だよ?」
セ「アリア様が見当たりませんがどうされましたか?」
高「見てたんなら分かるだr「どうされましたか?」うおっ!?」
一瞬で高雅との距離を詰め、顔をグイッと近づけてきた。
高雅は警戒心ゼロだった為に驚いて尻もちを突いた。
セ「聞いたところによりますと、捨てたと仰られていましたようですが」
高「いっててて・・・そうだよ。捨てたんだよ。あまりにも鬱陶し

いからな」
尻を擦りながらぶっきらぼうに答えた。
それでも、セバスチャンは表情一つ変えない。
セ「そうでございますか。それで、どうされます？」
高「？、どういうことだ？」
セバスチャンは高雅に背を向け、ゆっくりと前に歩きながら話しだした。
セ「今、アリア様は危機的状況に陥っています」
高「！？」
高雅が驚いている事にも関わらず、セバスチャンは止めることなく、反論を許すことなく話し続けた。
セ「このままではアリア様はやられてしまいます。とは言っても、一度捨てたものを拾いに行かれる必要はありませんが、もし気になっていますなら隣町の森林にいます。これは、しがない老人の独り言でございます」
高「・・・・・おい、ちょっと待ってろ」
セ「畏まりました」
高雅は墓石の蔵の扉を開け、中にある様々な遺品をあさりだした。
高「えーっと・・・おっ、あったあった」
蔵から出てきた高雅には引き金が付いてあるL字型の口があるものを持っていた。
そう、紛れもない小さな銃だ。
セ「それはどうされました？」
高「ひーじーちゃが持ってたんだ。何か、普通とは違う銃だって聞いたが」
※ひーじーちゃ→曾祖父（ひいじい）ちゃん　です。
セ「左様でございますか」
高「それじゃ、お前の空間で送ってくれねえか？」
セ「私が空間を扱うことをお分かりですか？」
高「当たり前だろ。意思会話は空間の応用だろ？。それなら、出来

て当たり前だ」
セ「その通りでございます。それでは、どちらに？」
セバスチャンは愚問と思いつつもあえて高雅に聞いてみた。
高雅もそれを読み取っていたのか、ニヤリと笑いながら答えた。
高「不法投棄物を拾いに隣町の森林へ」

高雅とは遠く離れた別の場所の森ではアリアが追い込められていた。
マ「さあ、避けれるかな？」
マイゴが一本のナイフをアリアに向けて投げた。
ナイフの速度は遅く、距離は十分あるため、避けることは普通可能だ。

ザクッ！！

しかし、アリアは避けることができない。
ナイフは左腕に刺さり、向かい側に貫通していた。
ア（！？）
悲痛の声を上げようとしたが、何故かマイゴの近くで爆発が起きた。
マ「わぁ、危ない危ない。もう少しで巻き込まれてたよ。残念だったね」
驚く様子もなく、平然としていた。
すると、マイゴはもう一本ナイフを取り出した。
マ「それより、さっきから何踊ってるの？。おっかしい～」

アリアは左腕に刺さったナイフを抜きたいのか、手を動かそうとするが何故か足を上げたり、首を曲げたりしていた。
マ「ほんと、お姉ちゃんは面白いなぁ～」
心から笑っているマイゴの顔は既に病んでいた。
その顔にアリアは恐怖し始めていた。
マ「次は目でも狙おうかな～。あっ、外れるなんて思わないでね。いっつもお姉ちゃんに投げてたからコントロールが良くなったの」
そう言ってアリアのすぐ近くにある木に向かってナイフを投げた。
そして、両手で次々とナイフを投げると刺さった柄に刺さっていき、しまいには一本のナイフの枝が出来上がった。
マ「どう?♪」
笑顔で自分の凄さを思い知らせた。
マ「そっか、聞いても喋れないよね。じゃあ、口だけは許してあげる」
マイゴはアリアに近づき、人差し指をアリアの口に当てた。
マ「はい、もう喋れるよ」
ア「あ・・・ああ・・・あ・・・」
アリアは怯え、震えて声も出せなかった。
マ「も～、何か喋ってよ。せっかく喋れるようにしてあげたのに～・・・えい☆」

ザシュ!!

ア「きゃあああああああああああああ」
アリアの太股にナイフを突き刺した。
アリアは悲痛の声を上げ、マイゴはそれを聞いて嬉しそうに微笑んだ。
マ「いい声だね。もっと聞かせてよ」
マイゴは刺したナイフをグジュグジュと動かし、そのたんびにアリアが目を見開いて死に物狂いに叫び続けた。

ア「いたいいタイイタイ痛いいたい痛い・・・」
マ「アッハハハハハハ、お姉ちゃん、いい声優になれるよ」
すると、アリアとマイゴに影が掛かった。
マ「ん？」
上を見上げると一匹の獣が飛び掛かっていた。
マ「わあっととと」
マイゴは身を投げ出すように避けた。
マ「天獣だね。それも王様」
少し不機嫌そうに天獣、もといレオを睨みつけた。
レオはマイゴを振り払うと、すぐさまアリアの様態を確認した。
血まみれなアリアの姿を見て思わず絶句してしまった。
レ「大丈夫か、アリア殿！？」
見れば大丈夫でないのは一目瞭然だったのに、つい聞いてしまった。
アリアは答えることなく、怯えた目でレオを見ていた。
レ（まずいな。精神が崩壊寸前だ。下手に噛み付いて力を抜くのも危険だな）
マ「こらー！！、無視するなー！！」
マイゴが怒りを込めてレオの頭目掛けてナイフを投げた。
レ「甘い！！」
レオはナイフの腹を叩き、避けることなく払い落した。
マ「ニヤッ」
しかし、マイゴは妖しい微笑を浮かべていた。
レオはその微笑に気付き、疑問が増えた。
レ「何が可笑しい？。貴様の力など、我にとっては無力だ」
マ「さすが天獣王だね。私の力を吸収して自分のものにする。その能力、便利だね」
レ「だからどうしたと言うのだ？。我と肉弾戦をするつもりか？。そのようなひ弱な体で」
マ「私だってバカじゃないよ。ちゃ～んと考えてるよ」
レ「ふっ、戯言（ざれごと）を。貴様に勝機はな1〈ザクッ！！〉ぐふっ！？」

背中につきささる鈍い音。
足下に血溜まりが出来上がり、レオは苦しみを堪えて振り向いた。
そこには、血塗られた体を動かして、ナイフを自分の背中に突き刺しているアリアがいた。
その目は既に光を失っていた。
レ「あ・・アリア・・殿・・・何故？」
マ「バーカ、バーカ。あれだけ精神を壊したら夢幻で操るなんて簡単だよ」
レ「くっ・・・その手があったか・・・」
マ「そーれ、どんどん刺しさっちゃえ☆」
マイゴはナイフを取っては投げ取っては投げ、アリアも腕を剣に変えて、さらに刺そうとした。
レ「すまぬ、アリア殿」
レオはアリアを後ろ脚で蹴り飛ばすと、すぐさま真横に避けた。
マ「それそれそれ♪。避けないと危ないよ」
容赦のないマイゴの攻撃にレオは完全におされていた。
レ（くそっ、ここは一旦引くか）
ナイフを避けながら、次第にマイゴとの距離をあけていく。
マ「逃げちゃうの？。つまらないな～」
マイゴはナイフを投げるのを止め、敵前逃亡を図るレオを見送っていた。
マ「でも、逃げられないけどね」
地面に転がっていた血の付いたナイフを取ると、それを舐めた。
マ「・・・美味しいなぁ」
狂った少女の純粋な感想だった。

逃げきったレオは草むらに隠れ、息を整えていた。
背中の傷は思ったより深く、貧血寸前まで血が無くなっていた。
レ「はぁ・・はぁ・・・くそっ、我では勝てないのか!?」
自分の弱さを嫌気をさして、近くの木に八つ当たりするように殴った。
木に止まっていた鳥達は慌てて大空へと逃げていった。
レ「このままでは勝ち目がない。何か策を練らなければb「み~つけた♪」ッ!?」
不意に聞こえた狂った声と共に大量のナイフが一斉に飛んでいた。

グサグサグサッ・・・!!

レ「がはっ!?」
何十もあるナイフがレオの体に突き刺さり、血を滴らせていた。
レオは痛みと血不足で意識を失った。
マ「な~んだ、悲鳴じゃないんだ。つまんないの」
レオに刺さったナイフを一本取ると、それを舌で味わって舐めた。
マ「・・・まずい。やっぱ悲鳴を上げる子の血じゃないとね」
赤く染まった唾(つば)を吐き捨てると、適当な距離を置いてナイフをレオの首に狙いを定めた。
マ「ぱ~じぇ~ろ♪、ぱ~じぇ~ろ♪、ぱ~じぇ~ろ♪」
何度か力量を計り、狙いを定めてナイフを投げた。
ナイフはレオの首に吸い込まれるような軌道を描いていた。
マ「大当たり~♪」
マイゴはもう当たることを確信していた。
だが、マイゴの思い通りにはいかなかった。

ズガンッ!!

マ「うぐっ！？」
気付いた時にはナイフは弾き飛ばされ、自分は飛ばされていた。
数メートル吹っ飛んだ先に落ち、後から腹の痛みを感じだした。
しかし、腹には傷などなかった。
マ「な・・・何！？」
注意を凝らして周りを見ると、草陰から小さな煙が上がっているのが見えた。
マ「誰だお前！？」
草陰が静かに揺れ、一人の男が出てきた。
高「人の名を聞くときは、まず自分から名乗るのが礼儀だぞ、ガキ」
紛れもない高雅だった。
高雅は煙が上がっている銃口に軽く息を吹きかけて、余裕の表情を浮かべていた。

# マインドクラッシュ

余裕を見せる高雅だが、相手も同じように余裕を見せていた。
マ「人間風情(にんげんふぜい)が私に勝てるとでも思ってるの？」
高「まぁ、これがあれば可能だな」
そう言って持っている銃を見せつけるようにくるくる回す。
マ「そんな玩具で私に勝てるの？。頭悪いね、お兄ちゃん」
高「じゃあ、やってみるか？」
マ「こんなに余裕なんて・・・調子に乗るな！！」
どんなにプレッシャーを与えようとしても、高雅は平常な顔をして上から目線を変えようとしなかった。
その為、マイゴは怒りを覚え、両手でナイフを投げた。
間を空けないように両手を交互に使ってナイフを投げ続ける。
高「丁度いい。銃に慣れたかったしな」
高雅は銃を構え、飛んでくるナイフを狙い定めた。

ズガン！！・・・ズガン！！・・・

一発で数個のナイフを弾き飛ばし、飛んでくるナイフは僅か2発で消した。
マイゴは目を丸くして驚き、つい投げる手を止めてしまった。
マ「・・・その銃、何なの？」
高「これか？。これはひーじーちゃ特製のエアーガン」
マ「え・・・エアーガン！？」
高「ほら、空気を使ってビービー弾を飛ばすやつだよ」
マ「そのぐらいは知っているの！！。問題はその威力！！」
高「だから、ひーじーちゃ特製なんだよ。一体、昔にどんな技術があったかは知らねえが、ひーじーちゃが誰かを守るために作ったらしい。結局、平和に過ごしてこの銃で誰かを守ることはなかったが」

高雅はこの銃の詳細は詳しくは知らないのは本当である。
高雅自体、まだ幼かった時に見せてもらったものだからだ。
ちなみに、高雅の曾お爺さんはあの事故ではなく、寿命で幸せに死んでいた。
高「こうも受け継ぐなんて思ってもいなかったなぁ」
マ「こら、質問に答えろ!!。その威力は一体、何なの?」
高「詳しくは知らねえが、ゼロ距離で打てば風穴開くだろうな。中で空気を圧縮してそれを放つ、本当にエアーガンだな」
マ「そう・・・でも、その銃が一体どんなものかは知らないけど、夢幻には通用しなさそうね」
高「夢幻?、んなもん、俺に効かねえよ」
マ「ぷっははは・・・バーカバーカ。お兄ちゃんの勝手で夢幻が避ける訳ないじゃん」
すると、マイゴはもう一度ナイフを投げた。
狙いは高雅の腹だ。
マ(夢幻で私の動きが見えてないはず。避ける訳ない)
マイゴは高雅に夢幻が掛かっている事を前提にして投げていた。
つまり、普通なら見えないと言う事だ。
マ(さあ、突然来る痛みに狂っちゃえ)
ナイフは正確に高雅の腹目掛けて飛んで行った。
高雅は銃を構えず、ただマイゴの方を見ていた。
高「・・・バーカ」
高雅は不敵に笑い・・・

パシッ

飛んで来るナイフを二本の指で挟み止めた。
マ「えっ!?」
高「残念でした。俺には力自体が通用しねーよ。諦めろ、ガキ」
マ「ど・・・どういうこと!?」

高「答える義務はない」
高雅はナイフを投げ返した。
ナイフはマイゴの心臓めがけて飛んで行ったが、マイゴは動くことなく、ナイフを地面に落下させた。
その不可解な現状を見て、高雅は敵の力を把握した。
高「ほー、方向の力を使うのか。だから、ガキでもあんなに的確に投げれるのか」
高雅は小馬鹿した態度を一度たりとも変えていない。
マイゴは恐怖を知らない高雅を見て、己のプライドが崩れていった。
マ「・・・ふざけないで。私の前で・・・」
その瞬間、マイゴにピンクとオレンジがグラデーションした気が包み込んだ。
マ「平然とするなあああああああああああ」
マイゴを包んでいた気は爆発するように膨張し、辺り一帯を呑みこんだ。
マ「さぁ!!。この莫大な力の前で平然と出来るの!?」
高「・・・・・・」
高雅は何も答えず、ただ黙って聞いていた。
マ「あっははははは。そっか、この力(なか)じゃ答えられないよね?」
マイゴは嬉しそうに、勝ち誇ったように笑った。
マ「さぁ、まずは腕をもぎ取ってからゆっくりと苦しみながら殺してあげる♪」
マイゴは両手にナイフを取り、二本同時に投げた。
的は高雅の両肩だった。
マ「避けれるものなら避けてみてよ!!」
高「分かった」
マ「!?」
高雅は平然とした表情を変えず、体を横にして飛んでくるナイフの間を通り抜けた。
マ「そんな・・・どうして!?」

高「ん～、今ので大体データが取れたな」
高雅はゆっくりとマイゴに近づき始めた。
高「まず、お前の力は夢幻、方向、それに創造だ。さっき夢幻って言ってたし、オレンジは方向のシンボルカラーだし、ナイフはバンバン創ってたし。あと、今のは夢幻と方向の融合力、迷力（めいりょく）の力だな。力を使うこと全てに対し、別の力を使ってしまうっていう奴だな。簡単に言えば、神経を滅茶苦茶にしてしまったってこと。ざっとそんなもんだろ？」
説明し終わると同時に、マイゴとの距離はもう数メートルしかなかった。
高「残念ながら、相手が悪かったな。俺に力は通用しない。つまり、迷力の力は意味無し」
高雅はマイゴの額に銃を突きつけた。
マイゴは自分の最大技が通用しない所為か戦意喪失していた。
マ「あ・・ああ・・・」
この時、マイゴは初めて恐怖を知った。
敵の強大さを知り、自分では勝つことが不可能と知った恐怖を初めて味わったのだ。
高「・・・そうだ」
マ「！？」
高「おい、蒼い髪の女性を見なかったか？。答えたら、頭を撃ち抜かないでやろう」
マ「え・・・」
高「ほら、速く答えろよ。頭に風穴開けるぞ」
マ「わ・・分かった。分かったから撃たないで！！」
高「俺は気が短いんだ。５秒以内に答えろ」
マ「分かった分かった！！。あっち、あっちの開けた場所にいるから！！」
マイゴは指を指しながら必死に答えた。
それほど、恐怖している事を示している。

高「よくできました」

ズガン!!

高雅は引き金を引いた。
狙った場所は頭ではなく、マイゴのポケットだった。
ポケットだけをかするように撃ったのだ。
そして、一つの宝石が粉々に飛び散った。
高「痛みなく死ねたんだ。幸せと思え」
高雅は銃を仕舞い、レオの下へ駆け寄った。
高「生きてるか?」
レ「い・・・生きて・・・おる・・」
高「タフだな」
レ「ふっ・・そうだな」
高「何もしなくても、まだ生きられるか?」
レ「ああ・・・・傷は深かろうと・・・・・・・・天獣はそう簡単に死なん」
高「そっか。けど、こんな時にあいつがひょっこり現れたらいいんだがな」
ロ「それって俺っちの事?」
高「そうだよ、この神出鬼没野郎!!」
高雅は振り向きと同時に銃を撃った。
ログナの腹に綺麗なトンネルが出来上がった。
ロ「ぐはぁあぁぁああぁあ・・何しやがる!?」
ログナは一瞬で風穴を再生させて埋めた。
それと同時に、高雅の不可解な動きを問い詰めた。
高「なんとなくだ。気にすんな」
ロ「俺っちの扱いが酷くないか?」
レ「そ・・それよりも・・・ログナ殿。我の傷を再生させてくれぬか?」

ロ「おっと、はいはい。そりゃ～～」
ログナが華麗に手を振るうとレオの傷が完全に再生した。
レ「恩に切る」
ロ「どいたまして」
高「そんじゃ、次行くぞ」
ロ「次ってどこだよ」
高「あっちだ」
高雅はマイゴが指した方向へ歩き始めた。
レオとログナもそれに続いた。

進むこと3分。
ロ「まだかよ、コウガっち？」
既にログナはダルそうに腰を曲げて手を宙ぶらりんにしていた。
高「まだ、3分しか経ってねえだろ」
ロ「ダリーんだよ。おーい、アリアっち～」
ログナは口周りを手で包んでから適当に名前を呼んでみた。
？「いやあああああああああああ」
高「！？」
応答したのは断末魔だった。
それと同時に石が飛んで来た。
ロ「あうっ！？」
石は綺麗にログナの額に当たり、ログナは打ち所が悪く、意識を失った。

高「おいおい、軟(やわ)いな～」
高雅はログナの頬を指で突っつき、しまいには軽く蹴ったりした。
それでも、ログナは起き上がらなかった。
レ「コウガ殿、今の声は」
高「分かってる」
高雅とレオはログナをほっとき、駆け足で声がした方へ行った。
生い茂る木々を抜けた先には、少し開いた空間があり、そこに彼女はいた。

全身血まみれで、目が光を失って虚ろうな状態、さらに体を震わせていた。

高「アリ・・・ア・・？」
高雅は一瞬だけ、ほんの一瞬だけ誰か判断が出来なかった。
目の前の現実が本当か疑うくらいだった。
ア「・・・誰・・？」
そして、アリアからの信じられない一言。
決して見えてない訳ではない。
アリアは本気で聞いているのだ。
高「誰って・・・俺だよ、俺」
ア「誰!?、『オレ』なんて知らないよ!!。知らないからどっか行ってよ!!」
アリアは近くに落ちている石をとにかく投げつけてきた。
高雅とレオはそれを簡単に避ける。
高「おい、アリア!!。止めろ!!」
ア「・・・嫌だよ・・・もう・・・痛いの・・・」
アリアは石を投げるのを止めると、今度は両手で顔を隠して泣き始めた。
ア「許して・・・痛いの嫌・・・何でもするから・・・ねぇ」
泣くほど恐ろしい目にあったのが一目瞭然だった。

高雅はそんなアリアの姿を見て、胸が痛みだした。
高「何だよ・・・この気持ち・・・」
自分に訴えかけるが答えなど帰って来なかった。
レ「コウガ殿、アリア殿の精神は崩壊寸前だ」
高「て、言うか、崩壊してねえか？」
レ「取りあえず、アリア殿を止めるしかないぞ」
高「おい、キレ―にスルーするな」
レオは聞く耳を持たず、アリアの後ろに回り込み始めた。
アリアは冷静さを失っているのか、レオから目を離さないように必死に目で追っていた。
今、アリアの視界から完全に高雅が消えていた。
高「はぁ～、レオが作った隙だ。大事に使うか」
高雅はアリアが完全に視界から消えたと見て、一気に踏み込んで距離を無くした。
アリアは殺気で振り返ったが、既に時は遅く、高雅が目の前にいた。
高「わりぃ・・・アリア・・・」

ボゴッ！！

丁度振り返った瞬間を狙って、高雅の拳はアリアの腹を正確に突いた。
アリアは呻き声を上げることなく、高雅の胸の中で眠った。
高雅は心に引っ掛かる謎の感覚に襲われ始めた。
高「何だよ・・・アリアを殴っただけで・・・こんな苦しい感覚になるとか・・・」
喧嘩した時には全くなかったこの感覚は高雅の知識では理解することは出来なかった。
レ「コウガ殿！！」
ふと聞こえたレオの方を見ると、背中にログナを乗せてやって来ていた。

高「気が利くな」
レ「仲間を思えば当然だ」
高雅はアリアを地面に優しく寝かせ、気絶中のログナに駆け寄った。
高「おい、起きろ。仕事だぞ」
ロ「ん・・・・くぁ・・・」
ログナは目だけを起こして、辺りをキョロキョロ見まわした。
そして、高雅に目が止まると不可解な質問をしてきた。
ロ「・・・・誰ですか？」
高「・・・はぁ！？」
ロ「成程、『はぁ』さんですか」
高「いや、全然違うし。その前に、お前どうした！？。変な悪戯なら速攻で止めねえとぶん殴るぞ」
ロ「殴るって、あなたは不良ですか！？」
レ「何か、ログナ殿の様子がおかしくないか？」
ログナの表情を見ると、とてもふざけて聞いているようには思えなかった。
そして、ある結論を導き出した。
高「・・・まさか、記憶喪失？」
レ「あの時の石でか！？」
ロ「あの～、何を言っているのでしょうか？」
異常に変わった性格と最初の質問からして、満更でもなくなってきていた。
高「なぁ、自分の名前は分かるか？」
ロ「私の名前ですか？・・・あれ・・・えっと、分かりません」
高「決定だな」
レ「まさか、石一つで記憶を飛ばすとは・・・」
高雅とレオは呆れて困り、当の本人は？マークが浮かんでいた。
ロ「何だかわかりませんが・・・逃げるが一番！！！」
高「なっ！？・・・おい・・・」
高雅が止めようとした時にはログナは既に飛んで逃げて行った。

レ「どうする、コウガ殿？」
高「仕方ねえ、アリアは家で治療して安静にさせておくか。落ち着けば勝手に再生を使うだろうし」
レ「そうか」
高雅はアリアを負ぶり、レオは人間の状態に戻って森を出始めた。
アリアは気絶しているにも関わらず、ずっと震えていた。

# 決心

アリアを高雅の部屋のベットに寝かせ、他の三人はリビングで会議していた。
レ「で、どうするのだ？」
フ「何の話です？」
高「アリアの精神状態だ。あいつ、敵にボコボコにされて精神が狂ってしまったんだ」
フ「そんなことがあったのです？」
レ「ああ。それも、かなり危険な状態だ」
高「それを回復させるために、こうやって考えてんだろ」
フ「ボクは呼ばれただけで知らなかったです」
レ「それで、何かいい案はないのか？」
レオが強引に話しを戻すとフィーラが少し睨まれた。
レオは一瞬だけ身震いを覚えた。
高「う～ん・・・精神の回復ね～・・・」
高雅は何故か家にあった、精神についての本を適当にペラペラと捲(めく)るとあるページで動きが止まった。
高「ドックセラピー・・・」
フ「ドックセラピーです・・・」
そう呟きながら、ある一点を見つめた。
レ「な・・・何故、我を見るのだ？」
高・フ「ドックセラピー（です）・・・」
レ「し・・しかし、我ｈ「ドックセラピー・・・」だｇ「ドックセラピーです・・・」しかｓ『ドックセラピー（です）・・・』・・・」
交互に言いあい、トドメは二人合わせての一言。
もはや、レオに発言権限はなかった。
レ「・・・で、どうすればいいのだ？」

高「おお～、やってくれるか？」

レ「半ば強引だっただろう・・・」

フ「何か言ったです？」

レ「何でもないぞ。で、どうすればよいのだ？」

高「う～ん・・・犬みたいにしろ」

レ「分からぬ！！」

あまりにも抽象的すぎる説明にレオは身を乗り出して来た。

レ「コウガ殿達が強引に任せるから聞いたものの、そんな考えなしで我に押し付けたのか！？」

高「だってさ、犬って何するか分かんねえし、取りあえず、犬っぽくやってみるしかないな」

フ「大丈夫です。王ならこれくらい簡単です」

レ「王と関係はない！！」

高「じゃ、行ってみよ～」

高雅はレオの首根っこを掴むと、自分の部屋へと向かった。

途中、レオがジタバタ暴れたり納得のいく理由を求め叫んだりと忙（せわ）しかった。

そんなことがありながらも結局高雅の部屋の前に連れて行かれた。

高「はい。んじゃ、ここで待ってるから行って来い」

レ「ちょ・・・コウガ殿！！」

高「さて、どうなるやら・・・」

高雅はレオが何を言おうとドアを開け、レオを投げ入れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高「・・・静かだな」

フ「静かです」

数分経っても物音ひとつ鳴らず、何が起きているのか全く分からなかった。

高「成功・・・なのか？」

フ「分からないです」
耳を澄ますも全く音は聞こえず、さらに数分が経った。
音のない部屋の中は時が進行していないとも思い始めていた。
フ「ふぁ・・・・ふぁあ・・・・」
すると、フィーラが口を開けたり閉めたりしだした。
フ「ふぁあああ・・・・っくしゅん！！」
そして、思いっきり息を吸い込むと勢いよく、くしゃみをした。
その瞬間・・・

ドガン・・ガシャン・・・ズガガガガガ・・・チュドーン・・・

止まっていた部屋の時が一気に進みだした。
高・フ「！？」
訳の分らぬ戦闘音。
何故、こうなったのか見当もつかなかった。
そして、ドアがゆっくりと開き、中からレオが倒れるように出てきた。
高「れ・・レオ！？」
レオの意識は完全に途絶えていた。
高雅は取りあえず、レオを持ってリビングに戻って行った。
レオをソファーに寝かせると、高雅はあることを決意した。
高「今度は俺が行く。レオの敵討(かたきうち)だ」
フ「敵討って・・・そんな大掛かりな事です？」
高「当たり前だろ。アリアの精神が不安定なのは危険だ。早く治してやらねえと」
フ「みゅ～・・・何だか、アリア様の事が好きみたいな言い方です」
高「なっ！？・・そ・・・そんな意味はねえよ！！／／／」
フ「顔が赤いです」
高「レオを運んで熱くなったんだ」

高雅は適当な嘘を吐きながらも、フィーラに取ってそれは見え見えだった。
高「とにかく、行ってくる」
高雅は逃げるようにリビングを出て行き、自分の部屋へ向かった。
フ「コウガ様、ボクの事は・・・思っているのです？／／／」
一人、呟きながらソファーに体を沈めた。
近くにあったクッションを抱きかかえると、それに火照った顔を沈めた。

高雅は勢いよく向かったのはいいが、ドアの前で立ち尽くしていた。
高（さすがに、さっきので空気が悪くなったよな？。あまり、刺激しないようにしねえとな）
一度、中での行動を確認しつつ、意を決してドアを叩いた。
ア「ひっ！？」
高「アリア、おれ・・・高雅だ。安心しろ。入っていいか？」
ア「こ・・・コウガ？・・・うん・・いいよ」
アリアはかなり声が震えていた。
多分、高雅がどんなに落ち着かせようとしても落ち着かないだろう。
高雅はなるべくゆっくりドアを開け、部屋の中に入った。
アリアはベッドの柵に体を寄せて座っていた。
高「よっ。大丈夫か？」
平凡な挨拶をかわそうとしても、アリアは震えながら首を縦に振るだけだった。
高「大丈夫じゃねえだろ」
高雅はゆっくり近づいて、ベッドに腰を下ろした。
それだけでも、アリアは身を引いていた。
高「大丈夫だって。俺を信じろ」
そう言うも、全然安心しきれてないアリアは高雅の差し出した手を

見ながら、さらに身を強張らせた。
高雅はそんな姿に呆れてため息が出た。
高「あのな、もし、俺が敵なら、お前はもうとっくにやられているっての」
ア「・・・そう・・だよね・・」
微かに唇を動かし、まるで独り言のように答えた。
しかし、高雅の耳にはしっかりと聞こえていた。
高「なっ?。だから、安心しろって」
ア「・・・うん」
高（やっと、壁が薄くなったな）
高雅は溜息と一緒に疲れをドッと出した。
ア「・・・ねえ、コウガ」
壁が薄くなった途端、アリアから話しを掛けてくれた。
もう、壁はなくなったのかもしれない。
そう思いながらも、アリアの言葉に耳を傾けた。
ア「どうして、私を助けたの?。もう、関係なんてないのに・・・」
高「あ～・・・セバスチャンがど～っしても助けてくれって言うからさ、助けた訳」
ア「そうなんだ・・・」
真っ赤な嘘だと言うのは言うまでもない。
高雅の心の中で本音を言うことを抑えているのだ。
『アリアが心配で助けに来た』と、言うことを。
ア「それじゃ、私は行くね」
高「・・・は!?」
いきなり意味が分からない事を言われて、素っ頓狂な声を上げてしまった。
ア「だって、もう関係ないんだから。ここにいる理由もない。だから、もう行くね」
アリアは布団を除け、立ち上がろうとした。
傷は落ち着いて自分で再生したのか完治していた。

しかし、今はそんなことを思っている場合じゃなかった。
高「おい、待て！！」
まだ近くにいるのについ大きな声で止めてしまった。
ア「何？。大きな声出して？」
高「いや・・・あれだ。まだ、誤解を解いてない」
ア「誤解？」
高「そうだ。あれは不純な気持ちで抱きついた訳じゃねえ。ただ・・・誓いたかったんだ」
ア「誓い？」
高「あいつは俺と同じ一人だったんだ。それで、俺達は手を差し伸べた。そうだろ？」
ア「それは、そうだけど・・・」
高「だけどな、一度手に入れたものをまた失うのは尋常じゃない程辛いんだ。あんな子供がそれを負うのは・・・もう、見たくないんだ」
ア「もう？。もう、てどういうこと？」
高雅は俯き、アリアの問いに答えようとしなかった。
一時の沈黙の後、高雅から口を開いた。
高「俺は・・・捨て子だった」
ア「え！？」
信じられない、衝撃の言葉が帰って来た。
アリアは驚愕したを戻すことができなかった。
高「物心がついて来たところで、本当の親は俺を捨てたんだ。多分、子育てに疲れたんだろ」
高雅は捨てられた事に対して憎悪を感じていなかった。
むしろ、自分の方に責任があると思っていた。
高「だから、決めたんだ。フィーラを一人にさせないと」
ア「そっか・・・フィーラちゃんは幸せ者だね」
高「何でだ？。俺達に合うまで一人だったのにか？」
ア「違うよ。そうやってコウガに思われている事だよ」

高「・・・フィーラだけじゃねえ」
高雅は俯いた顔を上げ、アリアと目を合わせた。
高雅の眼差しは決意をした迷いのない目になっていた。
高「レオだってそうだ。あいつも一人だったんだ。それに・・・お前もだ、アリア」
ア「へっ!?・・・うわぁ!?」
高雅はアリアを強く抱きしめた。
アリアは突然の事に顔を赤く染め、仰天していた。
高「お前を一人にさせたくない。もう、孤独を見るのは懲り懲りなんだ」
ア「コウガ・・・」
アリアは高雅の背中に手を回し、優しく抱きしめた。
ア「ゴメンね」
高「・・・謝る必要なんてねえよ」
ア「ううん。コウガがそんなに思ってくれていたなんて、ちっとも気付かなかった。だから、気付けなくてゴメンね」
高「別にいい、そんなことは。ただ・・・」
高雅はより一層強く抱きしめた。
高「お前が一人にならなかったらな」
思いを込め、さらに強く抱きしめる。
アリアは苦しみを感じながらも、その思いの強さをただ受け止めていた。
ア「・・・ねえ、コウガ」
アリアは首だけを上げて高雅の顔を見た。
高雅も首を下ろしてアリアを見る。
高「何だ?」
ア「そのね・・・私・・・／／／」
アリアも高雅の思いの強さに促され、自分の心で決心をしていた。
自分の思いを伝えようと。
ア「私・・・コウガの事が・・・」

心で決めていても、いざ口に出そうとすると上手く出せない。
目をしどろもどろに動いて、特に何か探している訳じゃないが探してしまう。
高「何だよ?。はっきり言え」
ア「じゃあ・・・言うよ。一回しか言わないからね／／／」
アリアは目を閉じ、一度だけ大きく深呼吸して目を開けた。
そして、自分の気持ちを告げた。

ア「コウガの事が好き!!／／／」

高「・・・なななっ!?」
アリアは恥ずかしくなったのか、それとも故意なのか、顔を高雅の胸に沈めた。
高雅は思考が追いつかず、停止状態に陥った。
フ「ちょっと待ったです!!」
そんな停止状態を回復させたのは思いっきり扉を開けた音だった。
高「フィーラ!?」
ア「ふぃ・・フィーラちゃん!?」
フィーラはそそくさに高雅とアリアの間に押し入り、二人の間を遮るように立った。
そして、すぐに高雅の方へ体を向けた。
フ「さっきまでの話しは全部聞いたです。コウガ様がボクに告白をした訳じゃない事もです」
高「・・・で・・で、何だよ?」
フ「ボクは・・・その・・・」
フィーラは服の裾を握ると、身を捩(よじ)りながら俯いていた。
そして、顔を上げ、高雅の目を見て言った。

フ「ボクは・・・コウガ様が大好きです!!／／／」

高「・・・なななななっ!?」

ア「えええええええ!?」

高雅は再び思考停止状態に陥ってしまった。

アリアに至っては驚いて大声を上げていた。

フ「ボクは本気です。アリア様よりも好きです!!。コウガ様の為なら何でもするです!!／／／」

ア「そ・・それだったら、私だってコウガの為なら何でもするよ!!／／／」

フアリアとフィーラはどちらが上なのか言い争いを始め、高雅に取っては全く思考が動いてなかった。

ア「――もう、これじゃ埒が明かない。ここはコウガに決めてもらおうよ」

フ「分かったです。恨みっこなしです」

ア「と、言う事でコウガ!!」

突然の指名に、高雅はハッと我に返った。

アリアとフィーラは横に並び、高雅に聞いた。

ア・フ「コウガ（様）はどっちが好きなの（です）？／／／」

高「え・・・あ・・え・・・と・・・」

高雅は我に返ったものの、思考が完全に遅れていた。

そして、やっとの事で思考が追いついて来た。

高「お・・お前ら大袈裟(おおげさ)だろ。ただ仲間として好きなことにそこまで競うか?」

ア・フ「・・・・・・・・・」

しかし、思考は間違えた道を歩んでいた。

高「・・・あれ、何でそんなに失望した目で見てるんだ?。俺、何か間違えたか?」

ア「大間違いよ！！。バカーーーーーー！！」
フ「コウガ様の優柔不断ーーーーーー！！」
高「ちょ・・・・！？」
全く持って理解できていない高雅は二人のダブルパンチを綺麗に避けた。
高「何！？。一体何！？」
ア「・・・こうなったら、コウガに振り向いてもらうしかない」
フ「そうです。ボクに魅入らせてあげるです」
ア「私は負けないよ」
フ「ボクだって譲らないです」
二人、火花を散らし合うも高雅は全く意味が分かったなかった。
レ「そこまでだ」
不思議なタイミングでレオが部屋に入って来た。
高「レオ？。いつの間に起きたんだ？」
レ「ちょっと前だ。それよりも、ここからは場所を変えて女同士で話しあったらどうだ？」
フ「みゅ～・・・分かったです」
ア「じゃあ、そうするね」
レオの提案に簡単に乗ってくれたアリアとフィーラは高雅の部屋を出てどこかへ行った。
レ「・・・ふぅ、落ち着いたな」
高「何か分からねえがサンキュな」
レ「何がサンキュだ。こうなったのも全てコウガ殿の所為だぞ」
高「お・・俺が悪いのかよ！？」
レ「全く・・・コウガ殿、我から一つ言いたい事がある」
高「何だよ？」
レ「決して、中途半端な気持ちで決めるな」
高「何がだよ！？」
レ「ふっ、鈍感だな」
鼻で笑うレオに高雅は理解できず、腹が立ち始めた。

高「何だよ。皆して意味分からねえ」
レ「なら、素直になるのだ。そうすれば分かるだろう」
高「素直ね～・・・ダメだ。分からねえ」
レ「焦る必要はない。時間はあるのだ。ゆっくり考えて決めればよい」
高「だーかーらー、何を決めるんだよ？」
レ「ここまで来ると重症だな」
高「んだと！！・・・ん？」
レオを殴ろうと左腕を振り上げる時、手の甲にあるものが目に入った。
高「これ・・・契約の印？。いつの間に？」
実は、アリアは高雅に抱きつかれた時、こっそりと契約を交わしていたのだ。
レ「再契約したのだな。それなら、アリア殿はもう心配ないな」
高「ふと思ったら、アリアの精神は元に戻ったのか？」
レ「元に戻るところか、さらに良くなっておるだろう」
高「何で？」
レ「それは、コウガ殿がよく知っておる。それでは、我はリビングに戻るぞ」
レオは言いたい事を言うだけ言って高雅の部屋を出て言った。
一人残った高雅は窓の外から遠くを眺めた。
高「全く分からねえが、一件落着か？」
丸く収まったかはさておき、当初の目的であるアリアの精神は回復したに違いない。
しかし、アリア達の言動に意味が分かっていない高雅だった。

# 鏡

やっと残暑もなくなりつつある１０月半ば。
いつもの様に学校に早く来ては寝る高雅だったが、今日は少し違った。
高「はぁ～・・・」
高雅がため息を吐きつつ、ダルそうに机に突っ伏していた。
決して眠ろうという感じはなかった。
龍「・・・どうしたの？・・」
高「何でもねえよ」
龍「でも・・・４回目・・・」
龍子が４回というのはため息の回数である。
高「何だよ。このデジャブは？」
ア「気にしない、気にしない♪」
高「誰のせいでため息を吐いていると思ってるんだ？」
ア「フィーラちゃん」
高「お前もだ！！」
龍「きゃっ！？」
突然の怒鳴り声に龍子は跳ねるように驚いた。
高「ああ、わりぃ」
龍「何か・・・あったの？・・・」
高「まぁ・・・朝に・・・ちょっとな」
ア「あれは、フィーラちゃんが抜け駆けするかｒ「うるさい。どっちにしろテメーらがわりぃんだ」
突然ですが、何の話か良く分からないと思いますので、ここで、朝に戻ってみましょう。

高「・・・んぁ・・・」
カーテンの隙間から入ってきた日差しによって、高雅は普段より早く起きた。
取りあえず、目覚まし時計のスイッチを切ろうと闇雲に手探りをし始めた。

パシッ

高「・・・んぁ？」
目覚ましにしては生温かい感触。
と、言うか、向こうから掴まれた感触があった。
意味が分からず、首を動かして見るとそこには高雅の手を握ったフィーラがいた。
フ「ん～～～・・・」
そのまま、フィーラがゆっくりと顔を近づけてきた。
高「って！？、ちょっと待てぇ！！！」
フ「みゅみゅ！？」
一気に覚醒した高雅はフィーラの頭を鷲掴(わしづか)みした。
高「何してるんだ、おい？」
フ「ただのおはようのキスです」
高「あのな～・・・」
ア「あーーーーーー！！」
さらにアリアが部屋に入り、参戦した。
入るとすぐさま高雅とフィーラの握っている手を引き離した。
ア「何してるの！？」
フ「鈍感なコウガ様への最大の手段です」
ア「だからって・・きき・・・キスは・・・まだ、早いよ／／／」
フ「そんなのずるいです。アリア様だってキスはしたです。ボクも

していいです」
ア「あ・・あれは戦いだからしょうがないの」
フ「へ～、アリア様はコウガ様の唇を仕方なく奪ったのです?。最低です」
ア「なっ!?・・・・そういう意味じゃないよ」
フ「今のセリフからしてどう言い訳するつもりです」
ア「それは・・・」
フィーラが勝ち誇った顔でアリアを見下していた。
最も、身長的に見上げているが、威勢では完全にフィーラが上だった。
高「・・・あのな・・・」
フ「あみゅ?。続きをしｔ「お前は寝てろ!!」〈ボゴッ〉うぐ・・・」
高雅の腹パンチによってフィーラは二度寝を始めた。
もちろん、気絶する程度の威力にしているが。
高「ったく、朝から疲れさせるなよ」
ア「あ・・・おはよう、コウガ」
高雅は背伸びをしながら起き上がり、軽い説教を始め出した。
高「まず、バカな争いは止めろ。巻き込まれる身にもなってみろ。こんな日が毎日続いていたら身が持たん」
ア「私は何もしてないよ」
高「じゃあ、何で俺の部屋に来たんだ?」
ア「え・・あ・・・えっと・・・」
高「はぁ～、完全に図星じゃねえか」
ア「ゴメン・・・」
高「頼むから、めんどくさい事だけは止めろよ」
ア「は～い・・・」
アリアは仕方なさそうに返事をし、反省の色を見せていなかった。
高「・・・何か信用なんねーな」
ア「・・・じゃあ、一日一回キスしたｒ〈ドガッ!!〉」

こんなやり取りがあった早朝だった。

高「全く、清々（すがすが）しい朝を無駄にしやがって。テメーら、昨日からキャラ崩壊が激しいんだよ」
ア（そんなつもりはないし、清々しくなかったような・・・）
高「っさい！！。てか、いつの間に意思会話にしてんだよ！？」
ア（だって、もうすぐＨＲが始まる時間だよ。人も集まってるし）
高「作者め、勝手に時間を飛ばしやがって・・・」
今、高雅は周りからかなり痛い目で見られていた。
作者（わたし）によってｗｗｗ
先「はーい、席に着いて。総務、号令」
先生が入って来た事によって視線は高雅から先生の方に変わり、いつも通りの朝のＨＲが始まった。
先「えー、今日はなんと、私達のクラスに新しい友達がやってきます」
Ｂ「新しい友達って。俺ら高校生だぜ、そんな言い方、なめ過ぎだろ」
先「あなた達なんて、まだまだ子供よ。そう言うことは、私みたいにもっと大人になってから言うものよ」
全「うぜえええええええええ」
先「先生に対する暴言は定額です」
全「漢字ちげえええええええええ」
先「あっ、先生、ついやっちゃった☆」
片そう言いながら目を瞑りながら舌を出し、優しく自分の頭を小突く素振りをした。
全「大人じゃねえええええええええ」

ア（先生も壊れてるね）
高（近頃はキャラ崩壊が流行ってんのか？。てか、“も”ってことは自分も認めてんだな）
ア（え・・あ・・・違っ・・・そうじゃなくて・・・）
高（もういい。いい訳は見苦しい）
ア（だから、違うのに～）
アリアの言葉に耳を傾けなくなった高雅は腕を枕にして眠り始めた。
先「それでは、入ってもらいましょう。どうぞ」
先生がそう促すとドアに人影が映りだした。
そして、ゆっくりとドアが開き、その人が明らかになった。
ア（なっ！？）
龍「え！？」
夢「あれ、見たことあるような・・・」
購買部達「あれは！？」
見た瞬間、一部の人だけが反応した。
その姿は蒼いロングヘアーで顔立ちも整っている絶世の美女。
そして・・・
安「初めまして、崎村（さきむら）　安理明（ありあ）です。よろしくお願いします」
アリアと瓜二つだった。
A「崎村あああああああああ。テメー、使いを学校に入学させるなどと、どんなラブコメな展開出してんだよ！？」
立ち上がると同時にAがすぐさま高雅に怒鳴り始めた。
先「は～い、A君。厨二病見たいなこと言わない。使いとか意味が分からないから」
先生が普通の人らしいツッコミを入れたが、Aには聞こえてなかった。
高「んぁ、俺の安眠を妨害するとはいい度胸じゃねえか。表でろ。秒殺してやる」
高雅は体を起こすとAを睨みつけ、一瞬で戦闘態勢に入っていた。
ちなみに、そのとき安理明は目に入っていなかった。

Ａ「上等だ。今まで登場していなかった分、修行をしていたのさ。テメーと殺り合えるようにな」
高「口だけ達者な野郎がいくら強くなろうが俺に勝てる訳ねえよ。片手で十分だ」
Ａ「てんめえええええええ」
虚仮（こけ）にされて簡単に挑発に乗ってしまったＡは高雅に殴りかかった。
高雅は宣言通り片手でＡのパンチを流すと、Ａはバランスを崩し、呆気なく倒れた。
そして、背中に一発重いパンチを与えると、Ａは呆気なく気絶し終了。
三行で終わってしまう程の呆気ない試合は幕を閉じた。
先「こら、崎村君。転校生の前で喧嘩をしない」
高「あいつから吹っ掛けてきたんだ。正当防衛・・・」
先生の方を見ると、自然に隣にいる人も目に入ってしまった。
そのお陰で、高雅の言葉が途中で途絶えた。
高「なっ！？、アリア！？」
安「えっ！？、どちら様！？」
高「どちら様っｔ（コウガ、私はちゃんといるよ）あれ！？」
腕にちゃんとブレスレットが巻かれているのを確認すると、再び安理明の方を見た。
その行動をいくらか繰り返し、やっと結論に至った。
高「え・・あ・・・そっくりさん！？」
安「？、？？、？？？」
高「うわ、ここまで同じとは」
先「あなた達、知り合いですか？。苗字も同じだし、親戚か何か？」
高「はぁ！？、苗字って。お前、崎村なのか！？」
安「あ・・うん。私は崎村安理明って言います。よろしくね」
高「アリアって・・・マジかよ」
目の前にアリアがいる。
しかし、それは安理明であってアリアではない。

高「ややこしいな～」
安「あの～、どこかでお会いしましたっけ？」
高「あっ、いや。こっちの話だ。わりぃ」
安「そうですか。ところで、あなたのお名前は？」
高「崎村高雅だ。ま、適当によろしく」
安「はい。よろしくお願いします」
一通り挨拶を済ませた安理明は空いてあった席に着き、ＨＲは終了した。

授業中（数学）
先「はい、この問題を証明できる人は・・・」
高「Ｚｚｚ・・・」
先生の視線は高雅一直線であった。

コツッ

高「んあ？」
頭に感じた軽い衝撃によって、高雅は目を覚ました。
それは先生による拳骨（げんこつ）でもチョーク投げでもなかった。
先「あら、起きていたのね。だったらこの問題を証明しなさい」
高雅は頭をボリボリ掻きながら黒板へ歩き、チョークを取ると説明しながら物凄い速さで問題を解いた。
高「これは数学的帰納法を使って、まずｎ＝１の時に当てはまるかを証明して、次にｎ＝ｋが当てはまると仮定して――（略）――で、証明終わり」
先「せ・・・正解です」

掛かった時間、僅か３０秒。
高雅は同じようにボリボリ頭を掻きながら戻ると、すぐに机に突っ伏した。
先「じゃあ、次はこの式を微分しなさい。では・・・崎村さん」
安「はい」
はっきりとした返事をして出てきた安理明はチョークを握った瞬間、止まることなく描き続け、僅か5秒で問題を蹴散らした。
安「以上です」
先「正解です」
生徒達「おお～～～～～」
高（おお～～って、微分とか簡単だろ）
ア（転校生の実力を確かめてるからじゃない？）
高（それでも、微分如きで声を上げるか、普通？）
ア（まぁ、人の見方に寄るって事だよ）

キーンコーンカーンコーン・・・

授業の終わりを告げる鐘が鳴り、いつも通り号令を掛けた瞬間、彼らが動き出した。
A「さあ、始まるざますよ！！」
B「行くでガンス」
C「フガ～」
D「まともに始めなさいよ！！！！」
E（・・・あれ、俺って何言えばいいんだ？）
A～Dまではノリ乗りの勢いで購買部へ走ったが、Eだけが困ったような顔をしながら走っていった。
高「さて、俺もいつもの場所に行くか」
高雅も弁当片手に教室を出た。

もちろん、着いた場所は人気のない木陰。
理由は昔のように人が嫌いなわけではない。
ただのお気に入りの場所なだけである。
いつものようにアリアは実体化していた。
高「・・・うん、今日は中々の出来だな」
ア「なに自画自賛してるんだか」
高「っせい。久々平和が続いて嬉しいんだ」
ア「・・・そう言えばそうだね。最近、地獄の使いもかなり減ったし」
高「・・・なぁ、ふと思ったんだが」
ア「何？」
高「俺の人生見直しはほぼ完了したんじゃねえか？」
ア「まぁ、最近の高雅はかなり優しくなってるし。人生見直しは完了だね」
高「じゃあさ、俺と一緒にいる理由は・・・実際、ないのか？」
ア「まぁ・・・そう言うことになるね。でも・・・」
アリアは恥ずかしそうに俯き、高雅はその意味が分からなかった。
ア「だって・・・その・・・」
高「何だよ。はっきり言えよ」
ア「一度しか言わないって言ったでしょ。だから・・・もう言わない」
高「何だ。俺の事が好きだからか」
ア「！！～～～～～っっっ！！？？／／／」
アリアは目を見開いて真っ赤になり、あたふたと慌てだした。
その思いがけない行動に高雅も慌てた。
高「お・・おい！！、仲間として好きなことがそんなに恥ずかしいのか！？」
ア「・・・・・・」

アリアは一瞬で顔が冷め、ガッカリした顔になった。
ア「はぁ～、期待した私がバカだったよ・・・」
高「？」
アリアは呆れてため息を吐き、高雅は意味が分からず？マークを飛ばしていた。
その姿を見て、アリアはさらにため息を吐いた。
そんな時だった。
？「あら、高雅君？」
高・ア「！？」
いきなり声を掛けられ、軽く殺気を飛ばしながら振り向いた。
そこには、今日来たばかりの転校生こと、安理明だった。
安「どうも。適当に学校探検していたら高雅君を見つけたから挨拶に来たけど・・・お取り込み中だった？」
そう言って横目でアリアの方を見た。
高「いや、別にそんなことはないが・・・お前ら、ほんと似てるな」
高雅は二人を見比べるが、身長、髪の長さ、顔立ちも全て瓜二つだった。
安「そうだね。随分似てるね。朝のＨＲに戸惑っていたのってその所為？。でも、これ見たら納得かな？」
ア「えっと・・・私を見て、何も思わないの？」
安「え！？、どうして？。郊外の彼女を連れて来てもばれなかったらＯＫじゃない？」
ア「そうとは限らないけど・・・」
高「あんまり二人でやり取り行わないでくれ。頭痛くなる」
安「あははは、ゴメンね。それじゃ、私は学校探検の続きするから、またね」
安理明はかわいらしく手を振ってこの場を離れた。
ア「ほんと、私に似てるね」
高「だな。見た目も声色も・・・人間じゃねえ所も」

ア「え!?」
さらっと、とんでもない事を言った高雅は平然とし、弁当を持って立ち上がった。
ア「今・・・何って?」
高「気付かねえのか?。あいつは突然現れたんだ」
ア「そ・・そうだけど。それは私達が気付いてなかったからじゃ・・・」
高「いんや、突然だ。本当に突然に現れたんだ」
ア「それって・・・・」
高雅は何も言わず、歩きはじめた。
高雅に取って、それは愚問で答える必要がないと思っているから。
それだけでアリアは察して、ブレスレットに変化し、高雅の腕に巻き付いた。
高「さ~て、何にもなければいいのだが・・・」
高雅は、ただ短い平和が続くように思いつつ、教室へ戻った。

# 教師の暴走

教室に戻った高雅は席に着くと、瞬く間に眠りに落ちた。
ア（はやっ！？。いや、いつもの事か・・・）
高雅が眠りに着いたと同時に、安理明も戻って来た。
他「あら、崎村さん。どこに言ってたの？」
女子生徒が優しく話しかけてきた。
安理明はピタリと止まると首だけを動かし、笑顔で言った。
安「何も。ただ、散歩してただけ」
他「！？、そ・・・そう」
口だけが笑っていた。
まるで、悪魔が笑うかのように。
女子生徒は一瞬、悪魔を垣間見た気がした。
先「おらあああああああ、席に付けえええええええええ」
午後、最初の授業は古典である。
そして、新キャラで名前は無い先生がやって来た。
竹刀を持った、今時お目に掛からない熱血先生である。
先「うっし、始めるぞ。今日は源氏物語じゃあああああああ」
竹刀を教卓に打ちながら教科書を片手で開いて行く。
生徒達も慌てて開いて行く。
先「よし、それじゃ・・・そこの蒼髪の奴。読みやがれ」
安「はい」
安理明は怯えることなく、教科書を持って席を立った。
そして本文をスムーズに間違いなく読み終えると席に着いた。
先「おい、誰が席に着いていいと言った？」
A「うわ、先生のスイッチが入ったよ」
先生はツカツカと安理明に歩み寄った。
先「中々出来るじゃねえか。なら、この問題を解いてみろ」
そう言って渡されたのは、超難題の古典の問題だった。

安「これは・・・えっと・・・」
先「分からないだろ。だったら、調子に乗るんじゃねえ!!」
安「えっ!?」
先「先生の評価を聞く限りじゃ、かなり出来るようだな。だがな、そうやって調子に乗るんじゃねぇぞ。分かったか、あぁ?」
竹刀を安理明の首に突き付け、不敵に笑う。
安「や・・・止めてください」
先「だったら、調子に乗ってごめんなさいって土下座しろ」
安「そんな・・・調子になんか乗ってないのに・・・」
B「おい、古典の先生。調子に乗っているのはおm＞バシッ!!＜いって!?」
先生はBの頭に一発叩いて黙らせた。
Bは頭を擦(さす)りながら涙目になっていた。
先「うるせー。俺は頭もいいし、剣道も強い。俺はちゃんと出来た奴だ」
高「なぁ、これが午後の授業か?。つまんねぇから帰っていいか?」
高雅は勝手に鞄に教科書を入れ始め、肩に担いで帰ろうとした。
先「待ちやがれぇ!!。俺の授業で帰れると思うなよ」
首だけを高雅の方へ向け、ドスの効いた声で高雅を止めようとした。
すると、高雅は意外にすんなりと止まり、扉を開けようとした瞬間で制止した。
高「何だよ?。大体、お前みたいな先生は知らねえぞ。1年半も学校にきているが、お前みたいな自惚れは見たことがない。大体、自惚れはAだけで十分だ」
A「んだと!?」
先「う・・自惚れだと!?。貴様～・・・先生への暴言は退学だぁ!!」
高「あっそ、退学か～。じゃ、もう家でごろごろし放題だな」
C「んな、バカなこと言ってる場合か!?」
高「場合だ。んじゃ、俺、帰る」

制止していた高雅の動きは再び動き始め、扉を開け始めた。
安「ま・・・待ってよ!!」
安理明も制止の言葉を掛けた。
扉が半開きになった所で高雅は再び止まった。
安「お願い。私を助けて!!。帰らないで!!」
そして、助けを求める声。
ア（で、どうするの？）
高「はぁ～、平和はどこへやら」
A「受け取れ、高雅!!」
Aはいつの間にか掃除用具入れから長箒を一本取り出し、高雅に向かって投げた。
高雅は見ることもなく、それを受け取り、扉を閉めた。
高「じゃあ、準備運動に・・・」
そう言って歩いた先はAの所だった。
A「あっ、やっぱり許されない？」
高「もち」

パシッ!!

高雅は瞬速の一太刀をAに振り下ろしたが、Aは両手で綺麗に挟み止めた。
A「ふっふっふ、だから言ったろ?。修行したっｔ＞ゴスッ!!＜ふご!?」
高「油断し過ぎだ。アホ」
高雅は両手が塞がっているAの横腹に蹴りを喰らわせた。
Aは壁に叩きつけられ、気絶した。
高「じゃ、次はお前だ理不尽先生」
先「貴様、調子にのるんじゃねえぞ。貴様はこの問題がｔ「解けるに決まってんだろ」何!?」
安理明の机から問題とシャーペンをひったくると、すらすらと書き

始めた。
高「うい」
先生が目で追って解答を確認するが、完全に分かっていない顔だった。
先「な・・・あ・頭がよければいいという問題ではないぞぉ!!」
高「じゃあ、その竹刀で俺を負(ま)かせてみろよ」
先「貴様～・・・俺は剣道8段の腕を持つ男だ。そして、どんな問題も解ける天才だ」
高「うわ～、何か痛いな。てか、さっき分からん顔してただろ?」
先「死ねえええええええええええええ」
高「教師が死ねって言うなあああああああああああ」

バシッ!!、ドガッ!!、バゴッ!!

高雅と名の無い先生の戦いが始まった。
ちなみに、試合はやっぱり高雅の一方試合(ワンサイドゲーム)。
先生の竹刀は綺麗な弧を描いて吹き飛んだ。
先「な・・何だこいつ!?。人間か!?」
高「失礼だな。これでも列記(れっき)とした人間だ。ちょっと小細工してるが」
高雅は戦いにおいて、活性の力での身体強化は当たり前になっていた。
先「くっ・・・ふざけるな。この俺が・・・・ガキごときに」
高「あのな・・・調子に乗ってるのはお前の方だ。このイカレポンチ!!」
長箒を首に突き付け、降参を求めた。
しかし、先生は苦虫を噛んだような顔をして首に突き付けた箒を払った。
先「ふざけるな!!。ガキに負ける訳にはいかねえ!!。こうなったら・・・」

名の無い先生は一瞬の隙をついて立ち上がり、廊下へ逃げだした。
高「・・・逃げた?」
あれだけ負けを拒んでいた先生が尻尾を巻いて逃げて行った。
ア(・・・逃れば勝ち方式?)
高「まっさか~」
取りあえず、箒を掃除用具入れに戻し、帰ろうと教室を出ようとした。
安「あ・・待って!!」
高「今度は何だよ?。助けたから帰っていいだろ?」
A「いや、別に帰っていい訳ではないz「お前は寝てろ」・・・はい」
気絶から復活したAは、またすぐに目を瞑って寝た。
安「それより、助けてくれてありがとう。何かお礼をしなくちゃ」
すると、安理明は席を立って高雅の下へ走り、その勢いのまま・・・

チュ・・・

高「!?」
ア「なっ!?」
他「なにいいいいいいいいいいい!!??」
高雅の唇を奪った。
アリアはつい声に出して驚いた。
外野の人々も授業中に関わらず声に出して驚いた。
奪った本人は嬉しそうに、はにかんでいた。
安「ありがとね///」
高「ん・・・あ・・・ああ」
高雅自身もいきなりだった為、対応がぎこちなかった。
他「リア充がああああああああああ」
何か外野が騒がしいが、高雅は完全無視した。
高「・・・じゃ、俺は帰る」

安「ダメ。帰っちゃダメ」
安理明が高雅の腕を掴んで離さず、変えさまいと必死に引っ張る。
高「は～な～せ～！！」
安「い～や～だ～！！」
安理明を引きずってでも帰ろうとするが、全く動かず、互いの力が釣り合って動かない。
安「あとちょっと。1時間でいいから」
高「長い。長すぎるだろ！！」
安「お願い。何でもするから！！」
他「な・・何でもだと！？」
高「何で外野が反応するんだ？」
先「崎村あああああああああああああああ！！！！！」
高「あ、あいつが帰って来た・・・・って、うえぇ！？」
高雅は先生の持っていたものを見て素っ頓狂な声を上げてしまった。
戻ってきた先生は何とチェーンソーを持ってきていた。
先生は何の躊躇(ためら)いもなく、恐ろしい回転音を上げながら振りかざしていた。
先「さぁ、最後のチャンスだ。俺に服従しろ」
高「先生として大丈夫か、こいつ？」
ア（少なくとも、大丈夫じゃないね）
アリアが高雅の呟きに答え、その解答を聞いて高雅はニヤリと笑った。
高（制裁、ＯＫ？）
ア（ＯＫ♪）
先「返答無しか。ならば、消え失せろおおおおおおおおお」
当たれば一撃必殺のチェーンソーを振り下ろすが、高雅は瞬時に懐に潜り込んで、チェーンソーの刃の部分ではない所を持って受け止めた。
先「何ッ！？」
高「覚悟しろよ。このゴミ虫野郎！！」

狂戦士魂のような殺気をぶつけられ、先生は死の予兆を感じ取った。
久しぶりの制裁なのか、高雅の目は殺る気に満ち溢れていた。
もちろん、高雅は一般には殺すまではしない。
ただ、殺る気全開の高雅にやられた9割の人間は死と同じ恐怖を味わう。
今、まさにその時なのだ。

ゴシャッ!!

先「ぶっ!?」
先生の顔面を容赦なく殴り、廊下まで突き飛ばす。
その衝撃でチェーンソーを落とし、先生を守るものは己の体だけになった。

グイッ

ネクタイを掴み上げ、先生を宙に浮かした。
高「先生、子供のお手本の先生が生徒に負けたからってチェーンソーを持って殺しに来るのはどうかと思いますけど?」
先「す・・スマン!!。許してくれえええええ」
高「こっちは死にかけたんですから、簡単に許すはずがないでしょ?。言った言葉には責任を取らないといけませんよ?」
先「わ・・悪かった。もうしない!!。この通りだ」
高「もうしないは当然です。だけど、俺は許さないと言ったのです。意味、わかりますよね?」
高雅は優しい声で喋っているが、それが逆に恐怖を増幅させていた。
高雅は先生が落としたチェーンソーを拾うと電源を入れて刃が回転し始めた。
高「俺にしようとした事を、そのまま先生にしましょうか?」
ギュオオオンと回転数を上げ、さらに恐怖を思い知らせる。

高雅の天使のような笑顔は１００人中１００人全員が悪魔の微笑みと言うであろう。
先「ややや・・・止めろ!!。犯罪に手を染めてはいかんぞ!!」
高「染めようとした人が偉そうに仰らないでください。それじゃ・・・」
高雅は最大出力にしたチェーンソーを振り上げると、最後に笑って言った。
高「お・や・す・み♪」
先「ひえええええええええええええ」
先生はもう死ぬことを覚悟して両手で頭を抱える。
そして、言えるだけ御経を唱え始めた。
だが、いつまでたっても痛みが来ない。
先生は疑問に思い、顔をゆっくり上げた。
高「くっくっくっくっく・・・」
見えたのは、高雅が笑いを堪えていた姿だった。
しかし、我慢ができず、少し笑いが漏れていた。
高「たっはははははは・・・ひー、腹痛え・・・ぷっ」
限界に達した高雅は腹を抱えて大爆笑しだした。
先「・・・はは・・ははは」
先生も釣られて笑い出した。
しかし、先生は笑いながら思った。
チェーンソーが消えていると。

ポタ・・・ポタ・・

先「・・・・え?」
足下を見ると血溜まりが出来上がっていた。
目線を上げるとそこには・・・

頭に刺さったチェーンソーがあった・・・

先「ぎゃあああああああああああああああああああ・・・」
高「だっはははははははははははは」
先生の絶叫と高雅の高笑いが教室全体に響き渡っていた。

高「お～い？」
高雅は振り上げたチェーンソーを脇に置き、虚ろうな目をした先生の目の前で手を振っていた。
高「何だよ？。脅しで振り上げただけだろ？。何、失神してるんだ？」
ア・安「（それほど、怯えてたんだよ）」
高「二人一緒に喋るな。ややこしい」
安「二人？」
安理明は高雅の矛盾点を呟きながら首を傾げた。
高「あっ、いや、何でもない。取りあえず、先生をどうすか？」
完全に物扱いの先生を指で指しながら誰かの答えを求めた。
B「取りあえず、事情を説明して職員室に運べば？」
高「じゃ、提案者が責任を持って、そうしろ」
B「何！？。そのために周りに聞いたのか！？」
高「そゆこと。じゃあな」
高雅は再び鞄を持ち、軽く手を上げて教室を出ようとした。
安「ま・・・待って！！」
高雅が角を曲がって見えなくなりそうな時に安理明は高雅を呼び止めた。

しかし、聞こえていなかったのか、高雅はそのまま歩みを止めず、
安理明の視界から消えてしまった。
安「待ってよ!!」
安理明は慌てて追いかけ、高雅が曲がった角に差し掛かった瞬間・・
・
安「きゃあ!?」
腕を掴まれ、その腕を背中に回すと、そのまま壁に突き付けられた。
掴んだのは紛れもない高雅だ。
安「こ・・高雅君!?。何を!?」
高「いい加減、惚(とぼ)けるのも止めにしたらどうだ?」
安「え!?」
安理明は身動きも取れず、必死にもがくが高雅の力には及ばなかっ
た。
安「どういうこt「だから、いい加減に惚けるのは止めにしろ。俺
が気付かないとでも思ってるのか?」・・・」
高「テメーが先生に夢幻を見せ、操っているのはお見通しだ」
安「・・・いつから?」
安理明は冷静に聞き、高雅は冷静に答えた。
高「最初から。まぁ、確信が持てたのは昼休みだな」
安「そ。最初から疑ってたんだ。酷いね」
高「学校で妙な事をしようとする奴の方が酷い」
安「ふふふふ。流石、虹の契約者だね。ちょっと見直した」
高「だったら、このまま消されr「やだね」なっ!?」
突然、安理明の力が強くなり、高雅でも抑えられなくなってしまっ
た。
安理明は呆気なく脱出すると、目の前に空間を裂いて高雅に言い残
した。
安「勝負しよ。屋上で待ってるから」
安理明は空間の中に入り、裂いた空間は口を閉じた。
ア「コウガ、どうするの?」

高「決まってんだろ」
高雅は走り出し、階段を駆け上りだした。

速度の力でさっさと屋上への扉の前まで着いた。
ドアノブを握って扉を開けようとしたが、何か殺気を感じ、思わず動きを止めた。
ア「?、どうしたの、コウガ?」
高「いや・・・何かヤベー感じがしてな」
ア「コウガが怯えるって事はそれほどやばいんじゃ・・・」
高「まぁ、やってみなきゃ分からねえって。取りあえず、行くぜ」
ア「うん」
止めていた動きを再生し、扉を開けた。
その先には最初から来ていた安理明が柵に座って空を眺めていた。
安「あっ、来たね。よっと」
こちらに気付き、足を振って、軽く勢いを付けて柵から降りた。
高「で、さっさと始めるのか?」
安「ん~・・・ちょっとだけ、お話しようか?」
高「何を話すんだ?。と、言うか、何故時間稼ぎをする?」
安「あははは。そこまで、ばれてるの?」
頬を掻きながら苦笑いする。
高「昼休みに何をしたかは知らねえが、それが大いに関係してそうだな」
安「うん、そうだよ。そこまで気づくとは、中々やるね」
高「まっ、色々と巻き込まれてるからな。それに、人間じゃなければある程度、疑いが掛けれるし」
安「それでも、そこまで気づくのは高雅君ぐらいだよ。ほんと、敵じゃなかったら恋人になるのにぃ」
高・ア「なっ!?」
サラッと爆弾発言した安理明に驚き、高雅は顔を赤く染めていた。
安「あっ、照れてる。可愛いな~」

高「て・・・照れてねえ!!／／／」
安「顔を赤くしながら否定したって、説得力が全然ないよ」
高「っせい!!。黙りやがれ!!」
安「あれ、否定しないってことは、意識があったの?」
高「～～～っっ!!!／／／」
高雅はさらに顔が赤くなり、黙り込んでしまった。
安「ほんと、敵じゃなかったら両思いなのにね」
高「お・・俺はお前のことなど思ってねえ!!」
高雅は腕を組んでそっぽを向き、全力で否定した。
安「はぁ～・・・それじゃ、そろそろ始めようか」
高「ん?、殺り始めるのか?」
安「そうだね。後、好きだった人への最後の情けだよ」
そう言って背中を向けて、少しずつ柵へ歩いて行った。
安「今から20分以内に私を倒せなかったら、緑淵高校(ここ)にいる皆が死んじゃうから。いや、ここだけじゃない。ここら一体が死んじゃうよ」
高「はぁ!?。何でそんなことをするんだよ!?」
安「私だって上の者がいるもん。その人の命令は聞かないといけないから」
今度は柵に乗らず、跨(またが)って乗り越えて行った。
その先はもう妨げる物はない。
安「それじゃ、始めるね。戦いが始まったら、私は・・・もう・・・」
安理明は言い終わる前に足を空間に投げ出し、飛ぶこともなく、落ちて行った。
高「・・・アリア、剣になれ」
ア「うん、分かった」
両手に剣を納め、次第に大きくなっていく殺気を感じながら戦闘態勢を取った。
高「さーて、何が出るやら」

ア「何だか・・・怖い」
高「恐怖付きの殺気か。洒落(しゃれ)た殺気だな」
そう言って評価するも、安理明がいつまでたっても現れず、時間だけが過ぎて行った。
高「おっせーなー・・・ん？」
突然、パラパラと不思議な破片が降って来た。
それは、ガラスを割ったような青い破片だった。
高雅は適当に一枚、拾い上げて確認すると見たこともない破片だった。
高「何だ、これ？」
ア「上から降ってき・・・コウガ！！、上！！」
高「ん？」
アリアは言葉を失い、急いで高雅に上を見るように促した。
空を見上げると、空間が欠けていた。
まるで、卵から雛が孵(かえ)るかのように。
高「何だ、あれ！？」
目を丸くして、驚きながら眺めていた。
空間が割れるのは収まることなく、次第に大きくなっていった。
それと同時に殺気も大きくなっていった。
レ「コウガ殿！！」
フ「コウガ様～！！」
高「！？、レオとフィーラ。何でここに！？」
どこからか、レオがフィーラを乗せてこの場所まで来た。
レ「ただものならぬ殺気を感じてな。それに・・・この感覚。忘れもしない、あの感覚に似ているのだ」
高「何か、訳ありって感じだな。で、フィーラは？」
フ「コウガ様の危機に駆けつけて来たです」
高「そうか。でも、あんまり無理するなよ。今日は一番ヤベー敵かもしれねえし」
フ「その時はコウガ様が守ってくれるです」

高「あんまり、俺に頼るｎ『キシャアアアアアアアアアアアア』ッ！？」
異常な奇声によって、体が反射的に恐怖を感じ取った。
そのまま反射的に空を見上げると、割れた空間から恐ろしい顔が覗き込んでいた。
その顔は巨人を思わせる大きさで、顔中に包帯が巻かれ、辛うじて左目だけが巻かれていなかった。
？『キシャアアアアアアアアア』
比喩に例えるなら、一度叫ぶだけで体が震え、この世の希望が全て無くなるだろう。
そんな化け物を目の前にしている高雅達は自然と体が震えていた。
高「恐(こえ)ぇ・・・純粋に恐ぇな」
まだ異次元から覗きこんでいるだけなのだが、高雅の体は震えが止まらなかった。
そして、化け物は一度首を引っ込めると・・・
？『キシャアアアアアアアアアアアア』

ガシャーン！！

奇声を上げながら、巨大なガラスを割るように、化け物の周りの空間を粉々に破壊して出てきた。
出てきたと言っても、逆さまのまま上半身だけが異次元から出てきているだけだ。
体中が巨大な鎖で巻かれ、手には巨大な手錠が掛けられていた。
レ「・・・こいつはまずいぞ」
レオが小さく零した言葉を高雅は聞き逃さなかった。
高「何がまずい！？」
レ「奴は『アルテマ』と言って、生贄によって数分のみ存在できる天魔獣だ」
高「てんまじゅう？。どういうことだ？」

レ「天魔獣は生贄によって存在が許されるものだ。生贄の器にもよるが、天魔獣はその生贄を喰らっている時しか存在する事が出来ないのだ」
高「じゃあ、勝手に時間が経つのを待てばいいじゃねえか」
レ「だが、アルテマはそうはいかん。生贄を喰い終えると周囲１０キロの空間を破壊してから消えるのだ。それは、ここら一体が死ぬと言う意味だ」
高「マジかよ!?」
ア「随分知ってるね」
レ「奴が、我が故郷を破壊しつくした奴だからだ」
高「なっ!?」
レオはアルテマを睨みつけると、自然に足に力が入り、怒りを込み上げていた。
レ「故郷の皆の敵を討つ!!!!」
高「バカチン」
高雅はレオに剣の腹で殴って意識をこっちに向かせた。
レ「何をする!?」
高「復讐は結構だが、それで我を忘れて突っ込んだら秒殺されるぞ。もっと落ち着け」
レ「あ・・・ああ、分かった。すまない」
高「分かればいいさ」
フ「あっ!!、あいつの胸に誰かいるです!!」
高「何!?」
高雅はアルテマの胸あたりに目をやった。
高「あれは・・・安理明!?」
そこには、安理明が体中に鎖を巻かれて束縛され、徐々にアルテマの体に取り込まれていた。
レ「あれは・・・アリア殿!?。どういう事だ!?」
高「あれはアリアと瓜二つの奴だ。いつものアリアはこっちにいる」
そう言って軽く剣を振って気付かせると、レオは納得した。

レ「そうか。しかし、あまりにも似ているな」
高「まぁ、声色も一緒だし、二人並べたら区別がつかねえし」
フ「・・・それって、『ホープミラー』じゃないです？」
フィーラからの見知らぬ言葉が出てきて、一同は首を傾げた。
高「何だ、それ？」
フ「あっ、ホープミラーと言うのは楽園の賜物の一つで、対象者の将来なりたい姿になるです。それで、誰かがアリア様を映した、というのがボクの推測です」
レ「成程。あながち間違ってはおらぬかもしれんぞ。アルテマの生贄素材は『力』だ。力の数が多ければ、それだけ長くこの場に存在できる」
ア「じゃぁ、誰かが知らない内に私を映したってこと？」
高「そう考えるのが妥当じゃねえか？」
フ「一体、誰がホープミラーを・・・」
？「うわー！！！？？？、何だあれ！！？？」
恐怖の奇声を聞いて気になったのか、学校にいた先生や生徒達が外に出て来ていた。
高「グダグダ考えてる時間はない。多分、安理明を喰い終えるのは２０分程度だ。その内にケリをつけるぞ」
レ「分かった」
フ「オーケーです」
高雅はアルテマの周りに点々と足場を創り、次から次へと跳んでアルテマの周りに移動し始めた。
レオも人間状態になり、フィーラも飛んで高雅の後を追った。
ア「コウガ、一般人に見られちゃうよ」
高「終わったら、あいつらの記憶を消す。どっちみち、こんな化け物を見てるんだ。消すのは確定だ」
ア「そっか」
高雅はある程度近づいた所で止まり、敵の様子を窺った。
アルテマは何もせず、ただボーっと高雅を見ていた。

高「さて、どこを攻撃したらよいか」
取りあえず、弱点らしき弱点を探すも、見当たらず途方に暮れていた。
そんな時。
A「とぉう！！」
高「あの野郎・・・」
Aが綺麗に三回転ジャンプをしながら高雅の隣の足場に着地した。
A「主人公登場。ヒーローは遅れて来るもんだぜ」
高「誰も聞いてねえよ」
A「ならば、見せてやろう。主人公(おれ)の実力を」
高「ダメだこいつ。聞いちゃいねえ」
哀れなAにため息をしながら首を振り、その間にAは再び大きく跳躍し、アルテマの顔面前に剣を振りかざした。
A「ホァアアタアアアアアアアアアア」
威勢よく振りかざしたのはいいが、アルテマの顔面は堅く、呆気なく弾かれた。
ア『グオオオオ・・・』
高「？」
すると、アルテマの左目に不気味な黒い気が集まりだし、巨大な顔を覆うような黒い塊が出来上がった。
ア『ガァッ！！』
A「うお！？、何だ！？」
それをAに向けて撃つと、Aは黒い塊に呑みこまれ・・・

ガシャーン！！

塊ごと粉々に散った。
あまつさえ、破裂した場所は空間さえ割れていた。
高「うわ、空間ごと破壊したよ」
A「かなり強い破壊の力だね」

敵の攻撃にそれなりの評価を付けていると、まだ割れている音がしているのに気付いた。
高「ん？・・・〈バリーン〉うおっ！？」
突然、足場が砕け散り、高雅は落下していった。
他の足場も同様に砕け散っていた。
高「波動でもあったか？」
高雅は冷静に足場をまた創って、そこに着地した。
ついでに、Aがいた空間を再生してやると、Aは何事もなく復活した。
ア「分からない。レオ君に聞いてみたら」
高「だな。だが、そろそろこっちも攻撃するか」
高雅は速度＋活性の力で思いっきり跳躍して、マッハの速さでアルテマの顔面前に着いた。
高「おらよ！！」
曝(さら)け出された目に向けて剣を思いっきり突いた。
しかし、目玉も異常に堅く、簡単に弾かれてしまった。
高「くっ、並みの攻撃じゃビクともしねえか」
ア「コウガ、下！！」
高「ん・・うおっと！？」
鎖が意識があるかのように高雅に襲い掛かって来た。
アリアが気付いていなければ、巨大な鎖で思いっきり打たれていただろう。
高雅は辛うじて避け、巨大な鎖を斬った。
高「鎖は脆(もろ)いな」
鎖は意外とすんなり斬れ（それでも、十分に活性強化はしている）、高雅はその場から一時撤退した。
レ「次は我だ」
高雅が撤退したのを見計らって、レオが隙なくアルテマに突っ込んだ。
レオは己の手刀でアルテマの左目を突き刺した。

一回だけではなく、何度も何度も目に突きを入れた。
しかし、堅過ぎる目はレオの手をあり得ない方向へと曲がらせていた。
それでも、レオは攻撃をし続けた。
痛みを感じていないかのように。
ア『グウウウウ・・・・グアアア！！』
流石に同じ所の連続攻撃には耐えられないのか、目を瞑って首を振ってレオを吹き飛ばそうとした。
しかし、レオは既にそこにはおらず、少し離れた場所で高雅に曲がった手を再生してもらっていた。
高「やるな。さすがだぜ」
レ「いや、フィーラ殿のお陰だ。さすがの我も痛みには敵わぬ」
レオが手をボキバキに折ってでも連続攻撃できたのは、フィーラが夢幻で痛みを消していたからである。
高「まぁ、やっぱ弱点はあの目だな。あっこに集中攻撃すれば、いずれ倒せるだろう」
レ「しかし、急がねばここら一体が消え去ることになる」
高「把握してる。だから、ここからは俺も本気で行く。アリア、真の契約だ」
ア「うん・・・分かった・・・」
アリアは剣から人間状態に戻り、恥ずかしそうに高雅の前に現れた。
高「どした？。やっぱ、恥ずかしいのか？」
ア「あのね・・コウガ・・・これは、契約としてのキスでもあるけど、異性としてのキスでもあるからね」
高「？、どゆこと？」
ア「も～っ！！／／／」
レ「コウガ殿、とにかく契約を早くするのだ」
高「あ・・ああ、分かった」
アリアの肩に手を置き、そして二人の唇を重ねあった。
ちなみに、Aと一般人（ギャラリー）からは見えないようにレオを盾にしている。

しかし、フィーラは見えているので、フィーラは不服そうに頬を膨らませていた。
契約（キス）を終え、アリアは剣になり、高雅はアルテマを殺気全開で睨みつけた。
高「さぁ、あいつを瞬殺するぞ」
ア「うん！！」
レ「出来るならな」
フ「やってやるです」
A「お前ら、サポートをたのｍ〈ドガッ！！〉ギャフン！？」
偉そうに言うAに一発蹴りを入れて黙らせ、再びアルテマの周りへ跳んだ。

# 恐怖

タイムリミットまで、後１５分を切ったところ。
高雅達は左目を集中的に攻撃するが、アルテマもそれに感ずき、易々と目を攻撃させないようにしていた。
高「さすがに気付き始めたか。バカじゃねえな」
レ「天魔獣は凶悪と語られている。あいつは我武者羅に強大な力を使わず、考えて戦っているのだ」
一旦距離を置いて休憩してるとレオが寄って来て、高雅の隣に立った。
高「ふ～ん、そっか」
高雅はレオのズタボロの手を治しながら相槌をうった。
手を治すと、レオは再びアルテマの所へ跳んだ。
高雅も少し間を空けてから跳んだ。
高「ちょっと、攻撃方法を変えてみるか。アリア、方向の力を頼む」
ア「うん、分かった」
高雅は顔の方へは行かず、体の鎖に向かって進み始めた。
高「そらっ！！」

ガシャ！！

体に巻かれた鎖を剣の腹で打った。
すると、鎖が連動して締め付けが強まりだした。
ア『ガアアア・・・』
効いているのかいないのか、アルテマは低く呻き声を上げていた。
しかし、一瞬だけ集中が途切れたことは間違いない。
高「もらったぁ！！」
高雅の狙いは、はなから隙を作ることだった。
狙い通りか、アルテマは鎖で守ろうとせず、完全にフリーだった。

高雅はここぞとばかりに最大の活性で左目を突いた。

グチュ・・・

そして、遂に左目に傷を負わせた。
剣先がちょっとだけ刺さったのだ。
ア『グアアアアアアアアアアア・・・・・グオオオオアアアアアアアア』
瞼がないのか、アルテマは刺されたにもかかわらず、目を閉じなかった。
意表を突かれたアルテマは苦しみ、顔を振って高雅を落とそうとする。
しかし、高雅は突き刺したまま離れようとしなかった。
高「アリア、このチャンスを大事にして、限界まで溜めろよ!!」
ア「うん!!・・・あっ、コウガ!!、後ろ!!」
高雅の後ろから鎖が迫って来ていた。
しかし、高雅は後ろを向かず、アリアに集中しろと促せる。
レ「そうはさせんぞ!!」
レオが手刀で鎖を斬り、高雅を狙って来た鎖は砂煙を上げながら地面に重く圧し掛かった。
しかし、鎖は一本だけではなく、何本も何本も高雅に向かって襲い掛かる。
レ「くっ、しまった!!」
流石のレオも大量の鎖を全て斬り落とす事は出来ず、数本斬りそびれてしまった。
ア「あっ!!」
高「だから、集中しろ!!」
アリアが不意にこぼれた声でも高雅は厳しく指摘する。
ア「・・・うん」
アリアは高雅を信じ、意識し始めた。

鎖はもう高雅に直撃寸前だった。
A「そこで、俺登場！！」
タ「ここは任せろ！！」
呼んでもないが、Aが駆けつけ、寸前の所で鎖を斬った。
A「ふっふっふ、感謝しろよ。この主人公様に助けられｔ「アリア、まだか？」無視すか？」
ア「あとちょっと。もう少し耐えて」
高雅は落とされないように踏ん張り続ける。
アルテマも負けずと顔を振り、剣を抜こうとする。
それでも、蟻みたいに小さな剣を抜くことは出来なかった。
ア「よし、完了だよ」
高「ご苦労！！」
アリアの終了の言葉を聞いて、高雅はすぐさまアルテマから離れた。
レオとフィーラも高雅の行動に察し、アルテマから距離を取った。
ただ、一人除いて。
高「よし、やれ！！」
ア「はぁ！！」
アリアの気合いの入った声と共に・・・

チュドオオン！！！

アルテマの左目が大爆発を起こした。
これから分かるように、アリアは爆破の力をアルテマの目の奥に溜めていたのだ。
そして、その威力は半端なく、鉄壁の目も粉々に吹き飛び、血を流していた。
ア『キシャアアアアアアアアアア』
怒りと絶望と混乱が入り混じった声を上げ、多大なるダメージを浴びさせた。
高「しゃっ」

高雅は腕をグッと引いてガッツポーズをし、喜びを噛み締めた。
ア「やった。これなら・・・」
レ「いや、まだだ」
高「どうやら、天魔獣さんは目ん玉一個だけじゃ死なないらしい」
目は完全に消え、血だらけの空白が残っているだけだった。
高「しかし、これで目が見えなくなっただろう。戦況は有利になったな」
フ「だと・・・いいです」
ただ、フィーラだけがこの状況を喜んでいなかった。
まるで、意味がなかったと思えるほどに。
ア『ガアアアアア・・・・・』
すると、アルテマは腕に力を入れ始め、手錠を引き千切ろうとしだした。
レ「!?、いかん!!。手錠が解かれるとまずい!!」
高「何が・・・っておい!?」
レオはすぐさまアルテマに攻撃を仕掛けに行った。
高「分かんねえが、俺らも行くぞ」
ア「うん」
フ「了解です」
何が起こるかは全く知らない高雅は取りあえず、レオの援護でもすればいいと思っていた。
A「待てえええい。謝りもしないのか、貴様!!」
途中、真っ黒焦げのAが割り込んできて高雅とフィーラの前に立った。
高「ん、お前が避難しないのが悪いんだろ」
A「お前の考えなど分かるか!!」
高「でもよ、お前以外はしっかりと理解したぜ」
フ「コウガ様が離れたら、離れた方がいいと簡単に予測できるです」
A「いやいやいや。普通、予想出来ねえだろ!?」
高「ったく、情けねえ頭だな。もっと考えてから行動しｒ〈ビュン

＼ッ！？」
突然、感じた風。
それは、頬を通り抜ける一瞬の風だった。
風が過ぎ去っていった方を見ると、気絶したレオが校舎にめり込んでいた。
高「レオ！？」
A「な・・何だ！？」
Aは何が起きたか分からず、あちらこちらに首を回し、オドオドしていた。
フ「コウガ様！！、アルテマの手錠が壊されてるです！！」
高雅は振り向くと同時にアルテマの腕を見た。
腕は解放され、手錠は地面に転がっていた。

ゾクリ！！

高・ア・フ・A「ッ！？」
ただそれだけなのに、とてつもない恐怖を感じた。
動くことすら許されない程の恐怖。
心が弱いものなら、今にも泣いてしまうだろう。
アルテマは自由になった手で顔の包帯を外し始めた。
包帯は簡単に引き千切られ、アルテマの顔が露(あら)わになった。
全体が火傷のように皮膚が軽く垂れ、右目は充血し、肌色は黒く焦げているようだった。
ただそれだけなのだが。

パキキ・・・

アルテマの周りの空間に罅(ひび)が入り始めた。
高「・・・なんなんだよ・・・こいつ」
さっきまで完全に勝っていた高雅達だが、手錠が外れるだけで戦況

がひっくり返された。
ア「これ・・・現実なの・・・？」
フ「怖いです・・・怖すぎです・・・」
タ「震えが止まぬ・・・」
A「あっははははははははは、こここここここ怖くなんてななななないいいんんだだだだだだ」
高雅達は体が震え、Aは声も震えていた。
高「とにかく、やらなきゃやられるんだ。嫌でも体を動かせ。恐怖に呑まれるな！！」
そう言うものの、この中で体を動かせるのは高雅しかいなかった。
高雅は震える体を無理やり動かし、一人でアルテマのもとへ向かった。
高「ったく、こっちが攻撃したのに、何で戦況がひっくり返るかなぁ」
平常心を保つように平然としているが、内心は逃げだしたいくらい恐がっていた。
それでも、やらなきゃやられる。
ただ、それだけを頼りに高雅は動いていた。
高「行くぜ、顔面黒こげ野郎！！」
恐怖を殺し、今一度、アルテマに攻撃を仕掛けはじめた。

変わって一般人達。
謎の怪物をみて混乱し、ただ只管逃げていた。
アルテマを見て最初は感動しているバカな生徒もいたが、今では見

ることすら怯え、必死に逃げていた。
その中には龍子やA以外の購買部組、凛もいた。
龍「はぁ・・・・はぁ・・・・」
凛「はぁ・・・はぁ・・・あれは一体、何ですの!?」
B「ぜぇ・・・こっちが聞きてえよ」
C「最初はFFXの○ニマみたいだと思ったけど」
D「今じゃ、恐くて直視すら出来ねえよ」
E「ガクガクブルブル」
夢「一体・・・高雅は何をしてんの!?」
振り返って確認がしたいが、振り返ればアルテマが目に入る。
それは、死ぬほど嫌なことだった。
龍「はぁ・・・高雅君なら・・・大丈夫」
凛「そうですわ。彼ならこの状況を打破してくれますわ」
夢「だと、いいけど・・・ん?」
突然、逃げている皆の足が止まりだした。
凛「どうしましたの?」
意味が分からず、取りあえず、前の方を見てみると・・・
B「あれって・・・鷲(わし)!?」
C「待て待て待て。鷲はあんなに大きくないぞ!?」
鷲が一匹翼を広げて威嚇していた。
そして、その傍らに蒼い髪の色をした女性が立っていた。
?「逃げちゃダメよ。あなた達はみ~んな死んじゃうのよ」
不気味な含み笑いをしながら、えんぎでもない事を言った。
他「ふぜけるな!!。こんな所に居たくはねえんだよ!!」
勇敢にも、巨大な鷲の脇を通ろうと走り出した一人の青年は・・・
?「あら、悪い子はお仕置きよ。やりなさい、バオ」
バ「キエエエエエエエエ」
バオという鷲は羽ばたき、空高く舞い上がった。
そして・・・

バグッ!!

龍「!?」

一瞬にして、その青年を喰った。

跳び上がったかと思えば、いつの間にか青年を丸呑みにしていた。

それは、皆の恐怖をより一層強くさせた。

龍「私達・・・どうなるの・・?」

凛「い・・・生きて帰ることができますの?」

購買部組「ガクガクブルブル」

無力な一般人達は迫りくる死に怯えだしていた。

高「おらっ!!」

高雅は力強くアルテマの頭を斬ろうとするが、異常に硬く、傷すらついていなかった。

目を狙ってみたのだが、左目より硬く、同じ作戦は通用しなかった。

高「くそっ!!。斬れねえ」

ア「硬過ぎる」

何度も何度も斬ったが、アルテマは表情すら変えず、何もしてこなかった。

その姿は高雅を見下していた。

高「何もしてこねえとか、舐めやがって」

ア「何だろう?。何もしてないのが凄く恐い」

高「何もせずに恐怖を与えさせるとか、こいつ、マジで強いな」

すると、ジッとしているのに飽きたのか、アルテマが動き出し、背伸びするように腕を伸ばし始めた。
そして、手のひらを高雅に向けると・・・

ピシュン！！

高「うおっ！？」
レーザーを出して来た。
レーザーは太く、後ろにあった山が綺麗に貫かれていた。
高「あっぶねえ・・・」
ア「コウガ！！、後ろ！！」
高雅はレーザーを避けて一安心した一瞬の隙を見せてしまった。
その隙をアルテマは見逃すほど優しくなかった。

ゴキャッ！！

高「がっ！？」
アルテマのマッハパンチが高雅を吹き飛ばし、地面に叩き落とした。
フ「コウガ様！？」
恐怖で身動きが取れないフィーラは必死に叫ぶしかできなかった。
高「が・・・げほっげほっ・・・」
体に受けた衝撃は消失の力である程度減らしたが、完全には減らすことができなかった。
高「つぅ・・・骨が何本かいったな」
ア「コウガ、大丈夫？」
高「まだ動ける。大事にはいったってない」
呑気に自分の状態を説明している時だった。
ア「あっ！！、周りの空間が！！」
高「なっ！？」
既に高雅の周りの空間に大量の罅が入っていた。

高「やべぇ！！。空間ごと消される！！」
今すぐに速度の力でこの場から離れようとするが、こんな時に限って足にダメージがあり、上手く動かせなかった。
高「くそっ！！」
もはや打つ手なしと諦め、目を強く閉じた。
完全に死を覚悟した証拠だ。

バリーン・・・

そして、高雅を取り囲む周りの空間が割れた。

# 消えた主人公、現れた主人公

フ「そ・・・そんな・・・」
高雅が消えた場所を見て、フィーラは愕然としていた。
A「嘘だろ。あいつが！？」
Aも信じられないでいた。
しかし、仲間の死に思い浸っている暇はない。
ア『キアアアアア』
目標を倒せば次の目標を狙う。
アルテマが次に狙うのはフィーラかAか、それとも両方一偏にか。
どちらにせよ、ジッとしている暇などない。
フ「くっ・・・コウガ様とアリア様の敵（かたき）です！！」
A「お・・おい！！」
フィーラが自棄（やけ）を起こしてアルテマに突っ込む。
高雅とアリアが死んでしまった事がフィーラの暴走原因だ。
夢幻なのに接近にもつれ込むところで感情を抑えきれてない証拠である。
ア『ガアアアアアアアア』
フ「はっ！？」
フィーラが落ち着いた時にはアルテマが拳を振り上げていた。
フ「やばいです！！。夢幻が間に合わないです！！」
フィーラは目を閉じ、顔を庇（かば）って衝撃に備えた。
A「あぶねぇ！！」
Aが直撃寸前でフィーラを抱えて避けた。
しかし、すぐに二発目のパンチが飛んで来た。
フィーラ救出の事だけを考えていた為、その先は全く検討していなかった。
A「やべぇ・・・」
Aはフィーラを庇うように背中を向け、限界まで活性化して防御し

ようとした。

ボゴッ！！

そして、思いっきり殴られた音が鳴り響いた。

A「・・・え！？」

しかし、Aが殴られた訳ではなく、アルテマが自分の顔を殴っていたのだ。

Aに向かったパンチは途中で途切れ、アルテマの顔の近くに続きがあった。

A「な・・何だ！？」

？「空間の力でございますよ、A様」

A「え！？」

学校の屋上から声が聞こえ、その方を見るとレオを介抱している執事が立っていた。

A「あ・・あなたは」

セ「お久しゅうでございます。セバスチャンと申します」

A「あー、海に行った時にいた人か」

セ「思い出してくれましたか？」

A「はい、なんとか」

Aは一旦セバスチャンのもとへ移動し、フィーラを下ろしてあげた。

セ「さて、早速参りますぞ」

A「え！？。早速すぎねえか！？」

セ「時間がありませんのでしょう？。後、8分ぐらいで崩壊しますよ」

フ「そ・・そうです。早くしないとです。でも・・・コウガ様とアリア様が・・・」

フィーラはまた高雅とアリアの事を思うと俯き始めた。

セ「ほっほっほ。そのようなことですか」

フ「むっ！！、そのようなことってどういう意味です！！」

セバスチャンの言動にフィーラが怒りを覚え、怒鳴った。
セ「失敬。言い方を誤ってしまいました。コウガ様とアリア様は生きています」
フ「・・・え!?」
セ「ですので、ありもしない事を落ち込むことは無駄な事だと」
フ「そ・・そう言う意味です?」
セ「はい」
セバスチャンはにこやかに笑い、フィーラは怒り損だと分かると疲れがドッと沸き出てきた。
セ「さて、事情は後で説明するとして、5分間持ってください」
A「何故5分?」
セ「経ってからのお楽しみでございます。それより、敵様は待ってはくれませぬぞ」
セバスチャンがそう言うと、痛みから回復したアルテマが右目に黒い塊を創っていた。
A「げっ、あれはもう勘弁だぜ」
セ「では、動きましょう。動かなければ格好の的でございます」
フ「何か納得がいかないですが、仕方ないです」
A「とにかく、フィーラちゃんは俺が守ってやる。紳士の名に懸けて!!」
フ「逆に危ないので一人で大丈夫です」
A「そんな堅い事を言わz「来ましたよ!!」えっ!?、のわっ!!」
セバスチャンはレオを抱え、その場から離れた。
フィーラもAの言葉に耳を傾けず、さっさと避難していた。
お陰で、Aは避難し遅れて、黒い球に吹き飛ばされるようにして逃げた。
セ「では、こちらも参ります」
レオを安全な場所に避難させ、速度の力で一気に接近した。
セ「さて、これ以上壊させる訳にはいきません。コウガ様から復興

作業は極力減らさせるように言われましたから」
セバスチャンはどこからか槍を取り出し、アルテマの首を突いた。
高速の槍は絶大な威力を誇るものの、アルテマの首は貫くことはできなかった。
セ「くっ・・硬いですね。さすが、天魔獣でございます」
これでも、活性の力も加わっている。
かなりの威力だったが、アルテマにとって蚊に刺されたみたいだった。
アルテマは微動だにせず、首にいる蚊を潰すようにセバスチャンを潰しにかかる。
しかし、叩いた場所はセバスチャンのいる所ではなかった。
セバスチャンは最初は意味が分からなかったが、すぐに理解した。
セ「ありがとうございます。フィーラ様」
フ「どういたしましてです。・・・?、どうしてボクの名を知ってるです?」
セ「ほっほ、これでも無知な老人ではありませんぞ」
フ「・・・まぁ、その言い草だと、ボクが楽園の者だと分かっているのです?」
セ「ええ、分かっています」
フ「お前、何者です?」
セ「しがない執事でございます」
セバスチャンが意地悪そうに笑顔で答えた。
フ「・・・何か、納得がいかないです」
セ「それより、後4分間頑張りましょう」
セバスチャンはそれだけを言って、また戦いに戻った。
セバスチャンの行動、言動が全く持って理解できないフィーラだった。

変わって、別の恐怖を味わっている場所。
？「さ～て、次は誰を食べさせようかしら？」
バ「キシャアアアアアア」
バオは速く食べさせて欲しいのか、翼を広げて地団駄を踏んでいた。
？「慌てない。待てが出来ない子は餌を抜きにするわよ」
バ「シャアア・・・・」
？「よしよし、いい子ね」
巨大な生物を鎮める謎の女性。
とてもシュールな光景だが、そんなことを考える余裕などなかった。
一般人達は逃げることすらできず、餌にされるのを待つしかないからだ。
？「う～ん、そ～ね～・・・あの子を食べていいわよ」
龍「えっ！？・・・・」
女性は指を指して食事の許可を与えた。
その対象は龍子だった。
その瞬間、周りの人たちが龍子から一斉に離れた。
バ「イシャアアアアアアア」
バオは待ちきれんとばかりに空へ飛んだ。
龍「・・・やだ・・・死にたくない・・・」
必死に懇願する龍子の表情を見て、謎の女性は笑っていた。
？「そうそう、その顔よ。死を恐れる恐怖の表情。たまんないわ～」
そして、空へ飛んだバオは一気に降下した。
人間の目では見ることすらできない速さだ。
龍子は目を瞑り、懇願し続けた。

バゴッ!!

バ「キエエエ!?」
龍「えっ!?・・・」
瞳を開けると、目の前に黒いフードをかぶった人がバオを殴りとばしていた。
バオは近くの建物の中に埋もれた。
?「なっ!?。あの速さを見切ったと言うの!?」
?「そうだよ。名無しのばーちゃん」
?「誰が婆(ばばあ)よ!!」
?「取りあえず、ザコキャラなんだし、さっさと消えてくれ。お前じゃ俺に勝てねえよ」
?「舐めた口を。バオ、やっておしまい!!」
バ「キエエエエエエエエエエエ」
雄叫びと共に、瓦礫を吹き飛ばしながらフードの青年を睨みつける。
?「殺気が出来てねえな。殺気は・・・こうだ!!」
バ「ッ!?・・・・・・」
フード越しで睨みつけられたバオは固まって動かなくなった。
そして、重い音をたてつつ、固まったまま倒れた。
?「ヘボい肝っ玉だな」
そう言うと背伸びをして、軽く骨を鳴らした。
女性は意味が分からず、取りあえずバオに近づいた。
すると、驚くことに気が付いてしまった。
?「・・・死んでる。殺気だけで!?」
?「悪いな。俺は容赦できねえんだ。諦めて死ぬかどっか消えろ」
?「ふ・・・ふざけんじゃないわよ!!」
敵の挑発に乗った女性は無謀に突っ込んだ。
?「哀れな奴だな。実力が無過(なす)ぎる」
青年はため息を一つこぼし、どこからか蒼い双剣を取りだした。
そして、瞬速の速さで斬り刻み、女性を倒した。

もちろん、宝石も一緒に斬り崩した。
？「呆気ないな。さて・・・」
戦闘が終了すると、青年は龍子に近づいた。
龍「えと・・・あの・・・ありがとう・・・ございました」
？「どういたしまして」
龍（・・・あれ・・・この声・・・聞いたことあるような）
？「そうだ。一つ願いがある。聞いてくれるか？」
龍「えっ・・はい」
？「あれはもうすぐ倒されるから、皆にもう大丈夫だと伝えてほしい。できるか？」
そう言って青年はアルテマの方を指さしながら説明した。
龍子は指を指す方を向こうとすると、青年が頭を掴んで止めさせた。
？「アホ。お前が見たら恐怖で気絶するぞ」
龍「あ・・」
？「とにかく、俺はもう行かなきゃならねえから、後は任せるぜ。もう、怯える必要はねえよ」
それだけを伝えると、青年は空間を歪めてどこかへ行こうとした。
龍「ま・・待って！！」
龍子が必死に大きな声を出して止めると、青年は止まって振り向いてくれた。
龍「その・・・あなたは誰！？」
青年は困ったように頭を掻きながら空を仰ぎ、何かを閃いたように答えた。
？「俺は主人公だ」
それだけを言って、青年は空間の中へ消えていった。
そして、今ので龍子は確信を掴んだ。
龍「・・・やっぱり・・・高雅君だったんだ」
夢「大丈夫！？、龍子！？」
安全だと感じた夢はすぐさま龍子に近づいた。
龍「うん・・・大丈夫だよ・・・」

夢「・・・ゴメン。友達がピンチなのに、逃げちゃった私は最低だよね。ほんと、ゴメン」
夢は申し訳なさそうに俯き、謝罪の言葉を述べた。
龍「しょうがないよ・・・私だって・・・夢ちゃんの立場なら・・・逃げてたもん・・・だから・・・・・落ち込まないで」
夢「・・・全く、あんたは優しいね」
龍「龍子ちゃんもだよ・・・そうだ、皆に・・・もう大丈夫だって・・伝えるの手伝って」
夢「大丈夫って？」
龍「もう・・・怖がる必要が・・・・ないってこと」
夢「ほんと！？」
夢は目を丸くして、龍子の肩を思いっきり揺さぶった。
龍「ほ・・ほんと・・・だから・・・揺らさないで・・・」
夢「あっ、ゴメン。よ～し。じゃ、伝えて来る！！」
夢は一人駆けだして、皆に大丈夫だと伝え始めた。
龍子も遅れて伝えに行った。

納得できな人もいたが、このお陰で9割の人間は恐怖から解放された。

タイムリミットまで、後5分。
セバスチャンが加わり、戦況は少し傾いたが、それでもアルテマの方が上だった。

セ「くっ、ここまでとは。やはり、契約者のいない私では役不足でしょうか」
三人とも肩で息をしていて、既にボロボロの状態だった。
フ「みゅ～、夢幻があまり通用しないです」
A「き・・斬れねぇ・・・」
タ「拙者の力では太刀打ちできぬか」
半ば絶望状態に陥っている彼らは諦めムードになっていた。
ア『キアアアアアアアアアアア』
アルテマが叫ぶだけで大気が揺れ、恐怖が倍増されてゆく。
そして、アルテマはまた黒い物体を創り始める。
セ「全く疲れを見せませんね。こちらは既に疲れ果てていますのに」
放たれる黒い球を見て、三人は再び動き始め、回避した。
しかし、今回の黒い球は違った。
セ「ッ!?、パターンが違う!?」
黒い球は突然破裂し、中から先の尖った触手のようなものが出てきた。
A「うわっ!?」
フ「きゃっ!?」
Aとセバスチャンはなんとか反応できたが、フィーラは反応が遅れ、横腹を斬られてしまった。
セ「フィーラ様!!」
A「フィーラちゃん!!」
すぐに援護に向かおうとするが、他の触手がそれを許さない。
セ「くっ」
A「邪魔だ!!」
何度も何度も斬り伏せるが、触手の数は減らない。
余った触手がフィーラを捕え、主人の前に献上していた。
セ「しまった!!」
A「おいおいおい、やべぇぞ!!」
アルテマはフィーラを手で包み込む。

一時して手を放すと、黒い塊が出来上がっていた。
そして、大きく口を開けると、それを一気に呑みこんだ。
セ「なんと!?」
A「フィーラちゃんが喰われた!?」
その光景に完全に見入っていた二人は触手の事を忘れてしまっていた。
その隙をついて、触手はセバスチャンとAを拘束した。
セ「くっ」
A「このっ、放せ!!」
タイミングを見計らっていたのか、アルテマはまた黒い塊を創りだしていた。
A「くそっ、力が入らねえ!!」
セ「この触手、静寂の力が込められています」
A「マジかよ、ちくしょおおおおおおおお」
無理だと分かっても、もがき続ける。
しかし、どんなにもがき続けようが体力が減っていくだけだった。
セ「どうやら、ここまでの様です」
A「おい、あんたが言っていた5分後のやつは!?」
セ「残念ながら、4分しか経っていません。5分ちょうどに来るため、諦めましょう」
A「くそおおおおおおおお、死にたくねえええええええええ」
そんなAの為に待ってくれず、アルテマは黒い球を放った。
その球は標的に最短の距離で近づいて来る。
セ「万事休すですね」
セバスチャンは危機的状況にも関わらず、笑っていた。
?「死ぬ寸前に笑うなんて。どうかしてるぜ、セバスチャン」
セ「!?、その声は!?」
一瞬だけ耳を疑ったセバスチャンは目の前の人物を見て、さらに驚いた。
A「こ・・・高雅!?」

高雅が堂々と立っていた。
そして、黒い球を振り向きもせずに真っ二つに斬った。
さらに、いつの間にか全ての触手が木っ端微塵に斬り刻まれていた。
ついでに、Ａも数か所斬られていた。
Ａ「いってえええええええ！？」
高「お前、いい加減学習しろ」
高雅はＡに剣先を向け、にじり寄っていた。
Ａは新しい恐怖に震えながら後ずさっていた。
そんな光景を見ながらセバスチャンは深刻な顔をしていた。
セ（今の斬撃、見えなかったですね。まさか、ここまで成長するとは。それに、５分経たずに戻って来たってことは・・・）
高「お前の作った修行場を破壊したってわけだ」
セ「なんと！？」
自分の思考が読まれ、セバスチャンは目を丸くして驚いた。
そんな光景を見て、高雅は面白く思い、軽く笑っていた。

# もはや最凶

時を戻して7分ぐらい前。
高「・・・って、あれ？。学校？」
目を開けると、そこは学校の敷地内だった。
しかし、アルテマからかなり離れていた。
高「アリア、大丈夫か？」
ア「うん、平気。どこも異変は無いよ」
高「そっか。それにしても、何で生きてんだ？」
？「私が助けましたからです」
声を掛けられ、その方へ振り向くとセバスチャンが立っていた。
高「そっか。サンキュー」
セ「ですが、あの状況下では空間の力を使いになるとコウガ様でも簡単に避けられましたぞ」
高「あっ、そう言えばそうだな。つい、いつもの様に速度で避けようとしてた。・・・ん？」
高雅はふと、足のけがを思い出して見ると、傷などどこにもなかった。
高「セバスチャン、お前が治したのか？」
セ「左様でございます」
高「前から気になったんだけどな、セバスチャンは力を何個持ってんだ？」
セ「それよりも」
セバスチャンは急に話を逸らす様に厳しい言葉を言い始めた。
セ「今のコウガ様ではあの天魔獣に勝てません」
高「んなっ！？、何で！？」
セ「簡単でございます。決定的なものが足りません」
ア「足りないもの？」
高「それは何だ！？」

答えを求める高雅にセバスチャンは遠くを見ながら答えた。
セ「・・・経験ですよ」
高「経験？」
セ「そうです。コウガ様は戦闘技術、勇敢さ、その他のどれをとっても引けを取らぬ才能をお持ちです。しかし、それを最大に引き出すには経験が必要でございます」
高「まぁ、半年前は喧嘩はしていたが、殺しはしてなかったからな」
セ「ですので、今から経験を積んできてもらいます」
高「は！？」
高雅は意味が分からず、素っ頓狂な声を上げたがセバスチャンは着(ちゃく)着と準備を進めていた。
セバスチャンは紫と蒼のグラデーションが掛かった球体を創りあげた。
それは人一人が入れる大きさだ。
セ「一年すれば勝手に出られますので、それまで経験を積んできてください」
高「えっ・・あ・・・ちょ・・待てって」
セ「何でしょうか？」
高「・・・なるべく早く帰ってくる。それまで、あいつの破壊活動をなるべく抑えてくれねえか？」
セ「畏まりました。ですが、私の空間から出ることはできませんぞ」
高「じゃあさ、もし出られたら、お前の力を教えてくれよ」
セ「ほっほっほ、分かりました。その時はお教えしましょう」
高「っしゃー、行くぞ、アリア！！。さっさと経験値を溜めて戻ってくるぞ！！」
ア「うん！！」
高雅は空間の中に飛び込み、セバスチャンはアルテマのもとへ向かった。

そして、時は現在。
高「さぁ、セバスチャン。約束通りに教えてもらおうか」
ア「楽しみだなぁ。セバスチャンの力がどれだけあるのか」
セ「ほっほっほ、私の完敗です、コウガ様」
高「はっはっは、若者だってやれば出来るものさ」
二人は笑いながら話をしていた。
A「何で楽しく会話が出来んだよ!?、状況を把握してんのか!?」
Aはアルテマの方に指を指しながら二人の会話に割って入る。
高「はいはい、分かってますって。あれを倒せばいいんだろ?」
A「だ・・・だが、あいつの腹の中にはフィーラちゃんがいるんだ」
高「それを速く言え!!」
高雅はAを怒鳴った瞬間、残像を残してアルテマのもとへ向かった。
A「はやっ!?。いつの間に!?」
セ「ここまで綺麗な残像を残すとは、並みの速度では無理ですね。コウガ様の力はどれ程・・・」
セバスチャンは高雅を観察するような目で見続けた。
高雅は双剣を構え、片方だけアルテマの口に剣先を向けていた。
高「ひらけ~、ごま!!」
ア「それで開いたら苦労しないって・・・」
アルテマは高雅のバカな行動に付き合わず、巨大な拳で殴りかかろうとしていた。
バカにされたのが分かっているのか、今までのスピードを遥かに超えた速さのパンチだ。
高「あれ、前より速いな。フィーラを吸収したからか?」
高雅は特に避けようともせず、双剣を片手で持って片方の素手で受

け止めようとした。

ガッ！！

そして、高雅は片手でアルテマの拳を受け止めた。
吹き飛ばされることなく、高雅は一ミリも動かなかった。

バギボギバギ・・・

ア『ガアアアアアアアアアアアアアアアア』
さらに、アルテマの腕の骨が木っ端微塵に砕けて言った。
アルテマは何が起こったのか理解できていなかった。
小さなものに片手で止められ、自分の腕が崩れゆく。
アルテマは激痛の絶叫と共に混乱をも交えていた。
高「作用反作用の法則だ」
そう呟いた高雅はアルテマが開けた大きな口に潜り込んだ。
Aとセバスチャンは傍らで見ていたが、Aは理解できていなかった。
A「なななななな、何が起きたんだ！？」
セ「コウガ様が直撃の瞬間に波動の力で衝撃を吸収したのでしょう。
さらに、その衝撃に破壊の力を含ませ、アルテマの腕を壊したのたでしょう」
A「すげー・・・高雅すげーよ」
そんな事を話している内に、徐々にアルテマの腹が膨れ上げっていた。
A「ま・・・さか・・・」
セ「そのまさかでしょう」

ブシャア！！

二人の思った通りのシナリオになった。

アルテマの腹が裂け、中からフィーラを抱えた高雅が出てきた。
ア『グアアアアアアアアアアアアアア』
アルテマの悲痛な絶叫は続いた。
あろうことか、腹から多量の血が出ているにも関わらず、高雅とフィーラには血が一滴も付着していなかった。
高「よっと」
高雅がセバスチャン達のもとへ戻り、フィーラを下ろしてやった。
A「お前、どした？」
高「ちょっと経験値が上がっただけさ」
セ「分かりやすくレベルで例えるなら、５０が２００まで上がったものですね」
高「逆に分かりにくいと思うぞ。もし、最大が１万だと、対して上がってないと取れる」
セ「失敬。A様を少し見誤っていました」
高「お前、さり気なくAをバカにしてるんだな」
高雅はセバスチャンの薄黒い態度を横目に見ていた。
セバスチャンは誤魔化す様に笑っていた。
高「・・・取りあえず、フィーラを頼む」
A「お・・おい、あのまま放って置いても死ぬだろ！？」
それもそのはず、アルテマは腹に穴をあけられ、ダム決壊の様に血を噴き出していた。
高「まぁ、安理明を助けるついでとして、情け掛けて苦しみから解放してやるのさ」
セ「生贄にされたモノを助け出すなど、前代未聞な事をやろうとしております。可能性は低いと」
高「だったらそのわずかな可能性を１００％に上げてやる」
A「そんなこと、どーっやって・・・」
Aの話など聞かず、高雅はさっさとアルテマのもとへ飛んだ。
A「聞けよっ！！」
セ「それよりも、私達はレオ様とフィーラ様の介抱を急ぎましょう」

A「よし、俺はｆ「レオ様をお願いします」ちょ・・・聞けよっ！！」
セバスチャンもAの話など聞かず、フィーラを抱えてAから離れて行った。
A「ったく、男を介抱なんて、これだけにしてくれよ」
Aは誰かに言うまでもなく、一人呟いてレオの介抱に移った。

ところ変わって、高雅方面。
高「楽にしてやるよ。安理明を斬り抜いた後にな」
宣言をし終わった高雅は一瞬のうちにして、安理明の周りの鎖を斬り落とした。
そして、安理明の周りに剣を深く刺し込み、綺麗な円を描いて斬り抜こうとした。
ア『ギュアアアアアアアアアア』
アルテマも簡単にはやらせてくれず、暴れ回って高雅の動きを止める。
流石の高雅も、暴れられると誤って安理明を斬ってしまう。
高雅は剣を刺したまま、自分だけ離れてた。
落ちる寸前に双剣を繋ぐ紐を握っていた為、伸縮性を操って無事に着地した。
高「アリア、後は任せるぜ」
そう言って紐を放し、紐は自然と縮んでいった。
殺気の媒体がいなくなって安心したのか、アルテマは暴れるのを止めた。
ア「隙あり！！」
止まっていれば、簡単に斬りとれる。
まさにその時だった。
アリアは腕だけを剣のままにして、活性の力で安理明を斬り抜こうとした。
アリアも十二分（じゅうにぶん）に強くなっているため、アリア一人でもアルテマの

体を斬る事が出来た。
しかし、高雅に比べれば遥かに劣る速さだが。
ア『ギュオオオオオオオオオオオオオオオ』
アルテマは体が斬り抜かれる痛みに再び暴れ出した。
人間に例えるなら、蚊に肉を斬り抜かれるみたいなものだ。
自分より遥かに小さい生物がいつの間にか最強な力を手に入れたのだ。
アルテマの頭は混乱に埋め尽くされていた。
アルテマが暴れ出す頃には、既に８０％は斬り抜かれていた。
ア「あと・・少し・・・」
力をフルに使って斬り抜きを進める。
ここまでくれば、もう終わったも同然である。
ア「・・・よし、斬りとれた！！」
そして、アルテマの胸に小さな穴が出来上がり、アリアは安理明を救い出した。
高「ややこしいんだよ」
ア「誰と話してるの？」
役目を終えたアリアが地上に戻ってきていた。
空間の力で瞬間的に高雅のもとへ行ったのだ。
高「別に。それより、そっちの安理明は大丈夫か？」
ア「うん。息はしてるよ」
高「そっか。じゃあ、トドメと行こうぜ」
安理明を寝かせて再び双剣に戻り、高雅は再び飛んだ。
アルテマの顔の前に止まり睨みつけた。
アルテマは暴れ回って高雅が目の前にいることにまだ気づいていない。
高「・・・おいっ！！」
ア『ビクッ！？』
痛みで暴れ回ったアルテマが一瞬で止まった。
そして、目の前にいる高雅の目を見続けた。

高「どーだ?。お前が今感じているのは、お前が周りの奴らに与えたものだ」
アルテマは震えながら高雅の目を見ていた。
目を放したくても、放せない。
それほど、高雅の殺気は恐ろしいものなのだ。
高「アデュ～♪」
高雅は笑顔で手を振った。
その瞬間・・・

バリーン!!

アルテマを包む空間が破壊した。
もちろん、自害した訳ではない。
高雅が相手の技をパクったのだ。
高「普通に殺しても道連れされたら困るし、完全消滅にして見たぜ」
ア「誰に話してるの?」
高「さぁ」
ア「さぁって・・・」
高「取りあえず、皆のとこに行くとするか」
ア「あっ、無視するなぁ!!」
高雅は完全に無視して、地上に降りた。

校舎裏側。
ここに、妖しく笑うものがいた。
セ「さて、少し手こずったが手に入れられるとは」

セバスチャンはフィーラを抱え、物陰に隠れていた。
セ「あいつが戻ってくる前に済ませたかったが、まぁいい。結果オーライだな」
フィーラを乱暴に投げ捨て、腕を剣に変えてフィーラの心臓に狙いを定めた。
セ「遂に、女王（クィーン）の心臓が我がものに！！」
高「上手くいく訳ないだろ」
セ「ッ！？」
顔を上げると、フィーラを抱えている高雅の姿があった。
もちろん、地面にはフィーラは転がっている。
つまり、フィーラが二人いるのだ。
セ「まさか、これは偽物！？」
高「ご明察。お前の本性を導き出すために、わざわざ精密なフィーラを創ったんだ。見た目、力、雰囲気、内臓も全てな」
セ「わ・・・私が見破れぬとは」
高「で、クイーンってなんだ？」
セ「貴様に話す筋合いはない！！」
セバスチャンは地面に転がっているフィーラを高雅に蹴り飛ばした。
高雅は何の動作もなく、偽物のフィーラを消した。
高「ん？」
しかし、飛んできたフィーラとセバスチャンがかぶったときに、セバスチャンは姿を消していた。
周りを見渡すが姿は見えず、殺気を感じ取ろうとするが感じない。
高「どこに行きやがった？」
精神を研ぎ澄まして注意を払う。
だが・・・

グシャッ！！

高「ッ！？」

突然、自分の両足が吹き飛んだ。
もちろん、立っていられる訳なく、高雅は倒れ、フィーラを放してしまった。
高「がはっ！？」
辛うじて生きていた高雅は血を吐き捨てた。
セ「甘いですね。力をリサイクルしようと取りこむからこうなるのですよ」
どこからともなく現れたセバスチャンがフィーラを拾いながら見下していた。
高「・・・爆破の力か？」
セ「その通りでございます。一度救った命を無駄にするとは、情けない事です。たかが1年で強くなったからと言って、私に勝てる訳がありませんぞ」
何が起こったか解説すると、セバスチャンは偽フィーラを蹴ると同時に爆破の力を潜めていたのだ。
高雅は一度作った創造を再び自分の力に入れる事で力の消費が±0になる。
つまり、高雅の創造の力が自分に戻るとともにセバスチャンの爆破の力も中に入れたのだ。
高「く・・・そ・・」
セ「まだ、私の力は残っておりますぞ」
セバスチャンが指を鳴らすと・・・

グシャッ！！

二度目の爆発により、高雅の頭は粉々に吹き飛んだ。
セ「では、アリア様。大切なお方の死を嘆んでいてください」
それだけを言い残し、セバスチャンはフィーラを連れてどこかへ消えた。

# 笑顔で帰ろう

高「・・・・分身が消えた」
ア「・・・・・・」
A「えっ!?、何の話!?」
高雅は校舎の裏側の方を見つめながらそう呟いた。
今、高雅はAと合流し、セバスチャン以外のメンバーが全員揃っていた。
高「こっちの話だ。お前は関係ない」
A「ちょ・・・仲間はずれは良くないぜ。ほら、話したら気が楽になるかもしれねえぞ」
高「俺じゃない。アリアの方が問題だ」
A「いいから話して見ようぜ。話せば楽になる。あれなら・・・俺の胸を貸すからさ」
高「はっきり言ってキモイぞ」
A「んだとぉ!!。主人公だから、かっちょえーよ!!」
高「何がかっちょえーだ。喋り方がダサすぎる。主人公だとしても、今のはダサい」
A「るっせーーー!!。脇役が出しゃばるな!!」
高「一偏、嬲(なぶ)り殺してやる!!」
高雅とAは些細な事で喧嘩を始め出した。
この二人、完全に子供である。
ア「・・・ごめん。席外していいかな?」
そんな様子を横目で見ながら、アリアは口を開けた。
高雅は動きを止め、アリアの方に振り向いた。
しかし、すでにAの顔面はボコボコに腫れ上がって、首根っこを掴み、止めをさす寸前だった。
あと少し遅ければ、Aはどうなっていたのやら。
高「・・・ああ。落ち着いたら戻ってこいよ」

ア「ありがとう・・・」
アリアは一人立ち上がり、高雅達の視野から消えて行った。
高雅はAを投げ捨てて、腰を下ろした。
タ「一体、どうしたのだ？」
気になったタイトが答えを求めて高雅に聞いて来た。
高雅はタイトと目を合わさず、遠くを見ながら答えた。
高「信頼していた奴に裏切られたのさ」
タ「あの老人のことだな」
高「そ。俺達が戻ってきたときに、あいつの邪のオーラが見えてな。とは言っても、ほんのちょっとしか出てなかったんだ。それで、奴の思考を読み取っているとフィーラを狙っているってことが分かったんだ」
タ「しかし、それは何かの間違いとは言い切れぬのか？」
高「最初はそう思っていたさ。だが、俺の分身を殺したんだ。そして、偽物だがフィーラを攫った。もう言い逃れは出来ない」
タ「・・・そうか」
タイトは深く追求せず、倒れているAを拾いに行った。
安「う・・・う～ん・・・」
高「ん？、起きたか」
目が覚めた安理明は少しだけ開いた瞳で周りを見回した。
安「あれ・・・私・・・？」
高「助けてやったんだけど。あの天魔獣とか言う奴から」
安「嘘っ！？。私、敵なのにどうして！？」
高「例え偽物であっても、やっぱり近くにいる奴を失うのは何か嫌だからな」
安「・・・そう・・・せっかくだけど、私、もう消えるね」
高「なっ！？。助けてやったのに、どうしてだよ！？」
安「もう、殆ど力が残ってないんだ。多分、天魔獣に吸い尽されたかも。だから、もうここにいることは出来ない」
安理明は悲しそうに俯き、自分を見つめだした。

その手は既に薄く透き通っていた。
高「お・・おい!!」
安「ゴメンね。でも・・・楽しかったよ。一時の夢だったけど」
高「何だよ!?。だったら、俺は何の為にお前を救ったんだよ!?」
安「ほんとゴメンね。でも、その優しさは本物の私に上げて」
それだけを言い残すと、安理明は笑いながら儚く消えていった。
高雅はそれを受け入れるのに少し時間が掛かった。
安理明が消えても、ずっとその場所を見つめ、漠然としていた。
フ「ん・・・・んん・・・」
高雅を現実に戻したのはフィーラの声だった。
高「!!、フィーラ!!」
フ「んん・・・・コウガ様?」
高「大丈夫か!?。お前は消えないよな!?」
高雅はフィーラまで消えてしまうのではないかと心配し、フィーラの肩を強く掴んで揺すっていた。
寝起きのフィーラにとって、それは辛い仕打ちだった。
フ「こ・・・コウガ様・・・苦しい・・です・・」
高「あっ、わりぃ」
落ち着きを取り戻した高雅はフィーラの肩を放し、ゆっくりと寝かせてあげた。
フ「ふぅ・・・・って、え!!??」
ホッと息を突いた瞬間、フィーラは勢いよく起き上がり、目を丸くして高雅を見た。
一度見ては目を擦(こす)り、そしてもう一度確認するかのように高雅を見た。
フ「・・・コウガ・・・・様・・?」
高「ああ。そうだけど?」
フ「・・・生きてたです・・・コウガ様、ほんとに生きてたです・・・・」
高「死ぬわけねえだろ。セバスチャンの話を聞いてなかったのkお

わっ！？」
フィーラは高雅の話を聞かず、真っ先に抱きついて来た。
高「お・・おい。どうした？」
フ「・・・ぐす・・あえて良かったです・・・ひっく・・・」
高「あ・・・」
高雅はフィーラに置かれた境地を忘れていた。
ずっと一人だったフィーラが仲間を手に入れ、それを失うことは精神的に辛いことを。
さらに、フィーラはまだ幼すぎる。
例え少しの間だとしても、フィーラに取ってかなり辛いものだ。
高「悪かったな。ほんと」
高雅は優しく髪を撫で、フィーラを落ち着かせてあげようとした。
案の定、フィーラは泣きやみだした。
フ「うう・・・ぐす・・ほんと・・心配したです・・・」
高「悪かったな。心配させて」
フ「ぐす・・・・？、アリア様はどこです？」
高「ああ、ちょっと一人になりたい状態になってな」
フ「・・・・そんなことないです」
高「え！？」
何も分からないはずのフィーラが分かっているような口ぶりをきいて来た。
フィーラは高雅の胸から顔だけを上げて少し怒ったような顔だった。
フ「コウガ様は鈍感です。だから、アリア様の所に行って、後ろから抱きつくです」
高「はぁ！？。何で！？」
フ「コウガ様が鈍感だからです。だから、傍に居てあげるです。アリア様は寂しがり屋です」
高「あいつがぁ！？。とても、そうには見えんぞ」
フ「いいから、行ってあげるです。ボクは大丈夫です」
高「おいおいおい、せめて誰か見張りぐらいは・・・」

レ「それは、我が引き受けよう」
高「レオ!?。お前、大丈夫か!?」
レ「心配いらん。しかし、心配はアリア殿ではないか?」
高「だから、何でお前も知ってんだよ?」
レ「少し前から話を聞いていた。それで大体は把握できた」
高「把握できる場所とかあったか?」
フ「口答えはいいです。早く、行ってあげるです!!」
フィーラは急かす様に高雅を押し、高雅は意味も分からず立ち上がり、取りあえずアリアが立ち去った場所へ行こうとした。
途中、振り返って何かを訴えかける目をやるが、フィーラとレオは笑って手を振るだけだった。
高(一体、何だ?)
訳も分からず、取りあえずアリアを探して見ることにした。

高雅が見えなくなるまで見送っていたフィーラは少し悲しそうな顔になった。
レ「どうしてだ?」
レオは『どうした?』ではなく『どうしてだ?』と聞いた。
それは間違った聞き方だが、フィーラに取っては間違いではなかった。
フ「それは・・・」
レ「コウガ殿の事が好きなのだろう?」
フ「う・・・それはそうです・・・だけど・・・」
フィーラは俯きながら涙を零し始めた。
さっきとは違う、また別の涙だ。
フ「コウガ様はアリア様の事を思っているです」
レ「何故、そう言える?」
フ「だって・・・コウガ様はアリア様の所に向かったです」

レ「だが、コウガ殿は鈍感ではないか?。別に、そう言う意味でアリア殿の所に向かったのではないだろう」
フ「コウガ様は・・・鈍感じゃないです」
レ「何っ!?」
意外な言葉に、レオは驚きを隠しせなかった。
フ「コウガ様は優し過ぎるです。もし、自分の本当の気持ちを伝えてしまったら、関係が壊れると恐れているです」
レ「だから、鈍感の振りを?」
フィーラはレオの問いにゆっくりとコクリと頷いた。
レ「・・・それで」
フ「えっ!?」
レ「諦めるのか?。フィーラ殿はこれで満足か?」
フ「・・・そんな訳・・・無いです」
レ「では、今からどうするか?」
フ「・・・ボクは・・・」
涙を拭い、その目は決意の目に変わっていた。
フ「もう一度、思いを伝えたいです」
レ「では、行こうではないか」
レオは立ち上がり、フィーラの手を引っ張って立ち上がらせた。
フ「え・・・ま・・・待ってです・・」
レ「時は一刻を争うぞ。さぁ、急ぐぞ」
レオは待ってもくれず、フィーラを連れて高雅の後を追い始めた。

ブラブラ探し続けること3分。
高「あっ、いた」

アリアはいつも昼食を食べる時の木陰の下に座っていた。
意外と呆気なく見つかった為、高雅は少し拍子抜けだと思った。
ア「!?、コウガ?」
まだ距離はあったが、アリアは高雅に気付いた。
高雅は軽く手を上げて、アリアに近づいた。
アリアは不思議そうな顔で高雅を見ていた。
高「ん?、俺の顔に何か付いてんのか?」
ア「い・・いや。どうして来たんだろうって」
高「ああ、フィーラが行ってやれって言ってたから」
ア「そ」
それだけを聞いて、アリアは高雅から目を逸らした。
高雅も木に凭(もた)れかかりながら座った。
高「それで、落ち着いたか?」
ア「・・・うん。大分(だいぶ)」
高「そっか・・・辛いだろうけど、この現実を受け止めないといけねえからな。決して、現実逃避はするなよ」
ア「善処するよ。皆の様態はどう?」
高「フィーラは目を覚ました。安理明も覚ましたが、アルテマに力を吸われ過ぎて消えてしまった」
ア「そっか・・・」
アリアはまた遠くを見だした。
高雅はそんな姿を横目で見ながら口を開けた。
高「俺は失う気持ちは分かるが、裏切られる気持ちは分からない。頼りにならなくて悪いな」
ア「・・・そんなことないよ」
高「えっ!?」
アリアは立ち上がり、高雅の目の前まで歩き始めた。
ア「だって、わざわざ心配で来てくれたんでしょ?」
高「まぁ・・・そうだな」
少し肯定するのに恥ずかしかったが、目を逸らしながら肯定した。

アリアはそんな姿を見て微笑んだ。
ア「ありがとう、コウガ。私は大丈夫だよ。もう、元気だから」
高「・・・どっからどう見ても、そうは見えない」
ア「？、どうして？」
高「手が震えてるし、涙目じゃねえか。やっぱり、辛いんだろ？」
ア「だ・・大丈夫だって。これはその・・・手は少し寒くて震えてて、目にはゴミが入ったんだよ」
あからさまにベタない訳は高雅に通用するはずがなかった。
高雅は黙って立ち上がり、アリアの近づいた。
ア「な・・・何？・・・え？」
高雅は何も言わずにアリアの頭を撫でだした。
ア「あ・・・」
高「強がるな。そして、泣け。その涙は後に支障を及ぼす。今、はっきりと決別しろ」
ア「コウガ・・・」
高「お前がどんな答えを出そうが、別にどうこう言わねえ。人の答えに偉そうに告げ口する事もしねえ。だから、まずは泣け。泣いてスッキリした後、ちゃんとした答えを出せ」
ア「コウガ・・・・コウガぁ！！」
アリアは高雅の胸に飛び込み、泣き始めた。
高雅はアリアの頭を優しく撫でながらあやした。
高「よしよし、今は周りに人がいな・・・いと思ったら何かいる」
ア「えっ！？」
高雅は周りを見渡しながら確認するが、誰もいない。
しかし、高雅に取って分からない訳ではない。
高「１０や２０じゃねえな・・・１００以上はいる」
ア「まさか・・・敵！？」
さっきまで泣いていたのが嘘の様にアリアは緊張した顔つきになる。
高「だが、それら全て殺気が無い。だとすると・・・あいつらか」
すると、遠くに人影が見えてきた。

その影は大量で、次第にこっちに向かって来ていた。
すると、一足先に気付いたアリアは高雅から離れ、そっちの方へ向かった。
最も、実際は高雅は最初から何かは気付いていたが。
ア「リュウコ達だ！！」
アリアは嬉しそうに手を振って走り近づいて行った。
高雅は走りはしないがアリアの後を歩いた。
龍「あ・・・アリア・・・でも・・どっち？」
ア「あははは、私はいつもコウガと一緒にいる方だよ」
龍「じゃあ・・・高雅君は？」
高「俺はここだけど」
後から高雅が追いついて来た。
龍「あの・・・さっきはありがとう・・・」
高「さっき？。さっきって、いつだ？」
龍「私を・・・怪物から・・助けてくれた・・・」
高「？、そんなこと、した覚えはないぞ」
龍「でも・・・フードをかぶって・・・蒼い剣を持って・・・声だって・・」
ア「でも、私達はずっとここにいたよ」
高「ああ。ずっとここにいた。それ、ほんとに俺か？」
龍「間違いないよ・・・絶対・・・」
ア「う～ん・・・私達の熱烈なファンが真似をして・・・」
高「まず、あり得ない。声も一緒の時点であり得ない」
ア「だったら、誰かがホープミラーを」
フ「それも無いです」
第三者の声が聞こえ、振り返ればレオに乗ったフィーラの姿があった。
つまり、一般人から見れば・・・
他「ぎゃあああああああ、ライオンがいるうううううううう！！？？」

他「く・・喰われるうううううううう」
ワーキャーワーキャー騒ぎまくる訳で。
高雅はウザく感じてきてしまい、消し去ろうと決行した。
高「じゃあな、龍子。記憶は残しておくから明日話してくれ」
龍「え・・・？」
高雅はアリアの空間、破壊、波動、再生の力で皆をそれぞれの家に送り、尚且つ知り合い以外の記憶を消し、破壊した校舎などを再生し、元通りに戻した。
高「これでよしっと。で、なんでホープミラーは違うって言いきれるんだ？」
フ「ホープミラーは誰かを写している間は他のを写せないです。最も、一偏に移せばいいですが、同じ人が二人も出てくることは無いです」
高「つまり、既に安理明が出来ていたのに、また別のアリアは存在しないと」
フ「百点です」
ア「そっか・・・じゃあ、一体何だろう？」
高「だが、俺と全く同じだろ？。どんな仕掛けだか」
レ「分からない事を気にしても仕様がない。一先ず、家に帰って体を休めぬか？」
高「まぁ、それが妥当な答えだな。よし、帰るか」
高雅達は帰路に立ち、帰り始めた。
辺りはすっかり夕暮れに染まり、帰る時間にはベストだった。

帰路の途中。
ア「・・・ねぇ、コウガ」
突然、アリアが立ち止り、高雅の名を呼んだ。
それにつられて、高雅達も立ち止った。
高「ん、どうした？」
アリアは高雅と目を合わした。
アリアの目は迷いが無く、決断を下した目だった。
ア「私・・・セバスチャンが襲って来たら・・・・戦う」
高「・・・覚悟はあるだろうな？」
高雅の問いに、アリアは力強く頷いた。
高「そっか。お前がそう決めたなら、俺はサポートしてやるよ」
フ「ボクも手伝うです」
レ「我も、家族として助けようぞ」
ア「ありがとう、皆」
高「よーーーし、家まで競争だ！！」
ア「へっ！？」
高雅の急な展開にアリアは意味が分からず、ついて行けなかった。
フ「だったら、ビリは罰ゲームです」
レ「そうか。なら、全力で行くぞ」
高「レッツ、Ｂダッシュ！！」
しかし、三人はアリアの事も気にせず、走り出した。
ア「ちょ・・・待ってよ！！・・・ふふふ」
フ「はははは」
レ「ふっ」
高「たはははは」
四人は笑いながら走っていった。
様々な出来事があったが、最後は皆笑顔で終えた。
高「あっ！！。アリア、速度の力とか使うな！！」
ア「別に使っちゃいけないなんて言ってないよ」
終わりよければ全てよし。

そんな言葉も満更(まんざら)ではないと四人は思っていた。

☆おまけ☆

フ「思い、伝えそびれちゃったです」
フィーラは一人、リビングでソファーに座っていた。
フ「コウガ様、告白したのです？・・・」
高「何の話だ？」
フ「ひゃわっ！？。びっくりしたです」
突然、後ろから声を掛けられ、フィーラは身が跳ねるように驚いた。
思いのほか驚いたので、高雅も少し罪悪感を感じた。
高「わ・・悪かったよ」
フ「べ・・・別にいいです・・・」
ふと思えば二人っきりの状態。
こんな絶好のチャンスを逃(のが)す訳にはいかない。
フ「・・・・コウガ様！！」
高「な・・何んだ！？」
突然の大きな声に高雅は驚き、少しびっくりしていた。
フ「ボクは・・・その・・・」
後少し。
後一言。
フ「・・・好きです！！。愛してます！！／／／」
顔を真っ赤にしながら思いっきり叫ぶように告白した。
高「・・・ああ。俺もだよ」
フ「・・ふぇえええ！？」

高「実は、アリアよりフィーラの方が好きなんだ。だから・・・」
高雅はフィーラの肩を持ち、ゆっくりと押し倒し始めた。
フ「え・・コウガ様？・・・あ・・そんな・・・」
そして、二人は甘い世界に・・・

ア「フィーラちゃん？。風邪引くよ？」
アリアはソファー幸せそうに寝ているフィーラの顔を指で突っついていた。
高「やめてやれ。疲れてんだろ。そのまま寝かせてやれ」
ア「・・・それもそうだね」
高「じゃ、俺も寝る。お休み」
ア「お休み」
レ「よい夢を」
高雅はフィーラに毛布を被せ、自分の部屋へ向かった。

はい、当然？の夢落ちでしたｗｗｗｗ。

# 勉強会　前編（前書き）

七夕ですね。
もう子供じゃないのに、短冊に願い事を書いています。
ちなみに、内容は推薦合格。
そんなこと書く暇あるなら勉強しろって話ですねｗｗｗ。

取りあえず、今回も楽しんでもらったら嬉しいです。

# 勉強会　前編

突然ですが、体育祭が終わった後の学校行事と言えば何でしょう？
A「ズバリ、文化祭っしょ！！」
先「ブッブー。正解は・・・」
先生が黒板にデカイ字で二文字の漢字と三文字のカタカナを書いた。
それは、９．９割の生徒が嫌う、あれである。
先「中間テストでしたーーー！！！」
全「えええええええええええ」
クラスの９．９割がブーイングをした。
先「グタグタ言わない。子供は勉強よ。では、帰って勉強するように」
それを伝えると帰りのホームルームが終わり、生徒は礼をして放課後の時間となった。
高「そっか。もうすぐテストだな」
ア（今回も、何か勝負する？）
高（別にいいが、お前の負けだぜ）
ア（ほんと、大した自信だね。その減らず口を私が破ってあげようか？）
高（けっ、お互い様じゃねえか）
アリアと会話をしつつも、着実に下校の準備は整っていた。
教科書を入れ終え、鞄を閉めて教室を出ようとした。
扉を開け、いざ廊下に出ようとしたら、ある女性が待ち構えていた。
凛「ようやく来ましたわね」
それは凛だった。
正直、生徒会長がとある生徒のクラスの前で立っているのは、結構注目の的になっていたりしている。
高「何か用かよ？」
凛「いつもいつもあなたに負けている為、私は考えてきましたわ」

高「ふ～ん・・・じゃ」
高雅は凛の横を抜け、完全スルーで帰ろうとした。
しかし、凛に腕を掴まれて進めなくなった。
凛「待ちなさい。あなたの勉強法を見れば、私が負けた理由も分かりますわ。ですから、私と勉強会を開きますわ」
高「勘弁。俺は一人で勉強してえんだ」
凛「勝ち逃げは許しませんわ。それとも、誰かに見られてはまずい姑息な真似をしていますの？」
高「ほぉ・・・負け犬が偉そうに吠えるじゃねえか。いいだろう。乗ってやるよ。そして、お前の完全敗北を築いてやる」
ア（コウガ、まんまと乗せられてるよ・・・）
凛「では、明日は休日ですので、明日たの午後1時からでよろしいですわね？」
高「へいへい」
凛は高雅の手を放し、高雅はさっさと帰ろうとした。
龍「あ・・・あの・・！！」
しかし、龍子が二人に対して呼びかけた。
高雅は止まって首だけを振り返させた。
高「何だよ？」
龍「私も・・・勉強会・・・参加して・・・いいかな？・・・・・教えて欲しい・・・とこある・・から・・・」
高「どうなんだ、凛は？」
凛「構いませんわ」
高「じゃあ、提案者がいいって言ってんならいいだろうよ」
龍「あ・・・ありがとう・・・」
凛「では、明日の午後1時に。ごきげんよう」
凛は下駄箱ではない別の場所に向かって歩き出した。
生徒会長の仕事があるのだろう。
高雅も止めていた足を動かし、帰路に着いた。

そして、翌日。

高雅は三教科ほどの教材を鞄に入れ、出掛ける準備をしていた。
高雅は準備をしているとある事に気付き、ぶつぶつと文句を言っていた。
高「くそっ、嵌(は)められた・・・」
ア「気付くの遅いよ・・・いつもの高雅なら気付くはずだよ」
高「俺とした事が・・・・何たる失態」
高雅は己の不甲斐なさに落ち込み、暗いムード全開だった。
ア「ほらほら、落ち込んでる暇はないよ」
アリアが背中を軽く叩きながら励ます。
高「・・・そうだな。よし、行くか」
準備を終えた高雅が部屋から出て、玄関へ向かった。
すると、玄関にはフィーラが靴を履いて準備万端の姿でいた。
高「・・・どこ行くんだ?」
フ「コウガ様が行くところです」
高「留守番しろって言っただろ」
レ「待つのだ、コウガ殿。フィーラ殿を行かせるのは我の案だ」
高「レオ?」
後ろからレオがやって来た。
彼も出掛ける準備は整っていた。
レ「一昨日(いっさくじつ)の話では、フィーラ殿はセバスチャン殿に狙われていると話したな」
高「まぁな」

レ「では、常にコウガ殿と共に行動しておいた方が何かあったときに対応できるだろう」
高「う～ん・・・一理あるな。確かに、セバスチャンは結構強いからな」
ア「セバスチャン、色んな力が使えるからね」
レ「で、どうだろう？」
高雅は腕を組んで考え始めた。
レオの考えに間違いはない。
だが、凛の家にいきなり二人追加して連れてきていいか迷っていた。
高「・・・分かった。ついて来ていい」
しかし、高雅は家族を取った。
フ「本当です！？」
高「まっ、家族のピンチだ。手伝ってやるのが道理だろ？」
レ「では、行くとするか」
レオが玄関の扉に手を掛け、押し開けようとした。
外から眩しい日差しが入り込み、一瞬だけ眩しさを感じさせた。
高「・・・ん？」
ふと、外に目を向けると、誰かがインターホンを押そうとしていた。
蓮「あっ、こうが兄ちゃん」
それは蓮田だった。
蓮田は駆け足で高雅に近づき、突然、深々と頭を下げた。
蓮「お願い、こうが兄ちゃん。ログナを助けて！！」
高「えっ！？。何だ！？」
蓮「ログナが可笑しくなったんだよ。もう、いつものログナの面影もないよ・・・」
蓮田は涙を零しながら、必死に懇願した。
高雅は慌てながら蓮田の背中を擦り、慰めさせた。
高「取りあえず、ログナはどこだ？」
蓮「ログナならあそこに・・・」
蓮田が指を指した方に沿って見ると、ログナが正座していた。

高「・・・何やってんだ、あいつ？」
蓮「家主に断らず、勝手に足を踏み入れてはダメだって言って、正座しながらこうが兄ちゃんを待ってたんだ」
ア「礼儀正しいけど、やり過ぎだね。どうしちゃったんだろ？」
ログナはピクリとも動かず、ずっとこっちが来るのを待っていた。
高「あれって・・・」
レ「あの時のままか？」
高雅はそれを確かめる為、ログナに近づいた。
蓮田が必死に懇願していたので、嘘ではないと思うが、一応確認した。
高「おっす、ログナ。元気してたか？」
ロ「あっ、内のログナがお世話になっています。大変、ありがとうございます」
高「確定」
ログナにしては、あり得ない口調。
そして、この丁寧さ。
完全にアリアに石をぶつけられた時に記憶を失った状態である。
高「まさか、続いていたとは・・・」
レ「ともかく、再生の力で治せばよかろう」
高「だな。アリア、契約の力だ」
アリアを呼ぶと、契約の力を発動し、ログナの記憶を再生させた。
はずだったが・・・
ロ「おお～、心地よい光。まるで浄化されるかのよう・・・」
高「・・・記憶、治ったか？」
ふざけているのか本気で言っているのか全く判断がつかなかった。
しかし、雰囲気が変わっていなかった。
高「・・・再生が効いてねえ・・」
レ「何だと！？」
高雅はログナのオーラと言うものが大体分かる。
経験を積んで得た能力である。

それが全く変わっていないと言うのは、記憶が戻っていないと言うこと。
つまり、今のログナに再生が通用していない。
高「う～ん・・・不治の病だな」
蓮「ええーーーーーーーー!!!、ログナ、死んじゃうの!?」
高「いや、大事には至らない。ただ・・・治せない」
蓮「そんな・・・嫌だよ。いつものログナじゃなきゃ嫌だよ!!!」
蓮田が懸命に高雅を叩きながら訴えかける。
高雅は落ち着かせるように頭を撫でながら言った。
高「待てって。今の俺では無理なだけで、何か方法があるはずだから」
蓮「ほんとう・・・?」
高「だから落ち着けって。なっ?」
蓮「・・・うん」
蓮田は高雅を叩くのを止め、ログナの頭を撫でてやった。
蓮「大丈夫だよ、ログナ。僕がどうにか元に戻すから」
ロ「?、何の事でしょう、マスター?」
高「こいつ、本当に重症だな」
ア「それよりも、リンちゃんの家に行かなくていいの?」
高「へっ?」
高雅は腕時計を確認すると、既に正午を過ぎていた。
ちなみに、姫花家までは隣町の為、かるく1時間は掛かる。
高「やっべ!?。完全に遅れてるぞ!!」
高雅は焦りだし、家を駆け出た。
他の皆（何故か蓮田とログナも）は慌てて高雅の後ろを追いだした。

ついた時には既に1時は過ぎていた。
取りあえず、巨大な門の片隅にあるインターホンを押して中の人を呼んだ。
程なくして、家の人が応え、巨大な門が無人に開いた。
さらに、そこから3分歩くと玄関に辿り着いた。
玄関には凛と龍子が迎えてくれていた。
凛「遅いですわ！！」
高「悪い。色々とあった」
龍「何だか・・・沢山・・・いるね」
高「まぁ、全員ほったらかす訳にはいかねえから連れてきてしまったが、迷惑じゃねえか？」
凛「まぁ、このぐらいなら大丈夫でしょう。取りあえず、案内しますわ」
高「んじゃ、お邪魔しま～す」
使用人が玄関の扉を開け、高雅達を招待した。
それから凛について行き、広い屋敷をあっちこっちに曲がりながらある部屋についた。
部屋はかなり広く、５０畳もの広さだった。
凛「ここは応接室ですわ。ここに荷物を置いて、必要な勉強道具を持ってきてもらいますわ」
高「の前に、非勉強組はどうするんだ？」
高雅は親指をアリア達に向けながら凛に尋ねる。
高雅の話を聞いてアリアが慌てて入ってきた。
ア「あっ、私も勉強するよ。高雅にギャフンと言わせたいから」
高「あっそ。で、他の奴らはどうするんだ？」
凛「取りあえず、応接室（ここ）に居てもらい、何かあれば使用人に頼んでください。すぐそこに待機させておきますわ」
レ「すまぬ。では、我らはここで待機しておく」

フ「コウガ様、勉強頑張れです」
高「へいへい。それじゃ、行きますか」
凛「そうですわね」
いざ、部屋を出ようと扉に手を掛ける瞬間、扉は勝手に開かれ、一人の少女が入って来た。
香「やっほー、高君達久しぶりなの。元気してた・・な・・・の？」
香凛の元気のいい声は次第に薄れていった。
ある人を目にした瞬間に。
高「おーおー、してたしてた。そんじゃ、俺らは勉強するから邪魔するなよ」
凛「香凛、お客様に迷惑を掛けてはいけませんわよ」
高雅が流す様に答え、凛が注意をする。
しかし、香凛の耳には二人の声など入っていなかった。
凛「？」
高「で、どこで勉強するんだ？。遅れている分、早くしようぜ」
凛「え・・ええ、分かりましたわ」
ボーっとしている香凛を横目に見ながら、高雅達を勉強部屋へと案内しだした。
残された香凛は漠然と突っ立っていた。
蓮「・・・ん、かりんちゃん、こんにちは」
香「こ・・こんにちは・・・・なの／／／」
香凛は顔を逸らしながら挨拶を交わした。
失礼な行為ではあるが、今の香凛にはとても直視してあいさつできなかった。
フ「・・・成程です」
レ「成程だな」
そんな行為を見て、フィーラとレオは軽く笑っていた。
香「な・・・何なの!？／／／」
フィーラ達の声が聞こえたのか、香凛は顔を真っ赤にしながら聞いて来た。

フ「何でもないです」
レ「何でもない」
そう言ってフィーラは窓の外を眺め、レオはイスに座って本を読み始めた。
香凛は二人の行動をジッと睨み、少し怒りを覚えていた。
蓮「かりんちゃん、そこに立ってないで座ろう」
そんなことを知らず、蓮田は香凛に不意に話しかけてきた。
香凛は驚き、さらに顔を真っ赤にする。
香「わわっ!!??、えっと・・その・・・わ・・分かったなの／／／」
蓮「それじゃ、行こ」
蓮田は香凛の手を取ってイスへエスコートした。
その行動により、香凛は完全にオーバーヒート状態に陥っていた。

# 勉強会　中編（前書き）

今日、英検の二次試験がありました。
結果はボロボロだった・・・

そして、この文才の無さ・・・

日本語も英語も大っ嫌いだーーーーーーーーー！！！！

そんな、精神崩壊状態で書いた小説がこれだよ←

# 勉強会　中編

勉強部屋についた四人は、大きな円型のテーブルにそれぞれ向かい合わせるように座った。
高「それにしても、全くもって音がないな」
凛「外の音は完全に消し、常に快適な温度に設定されているこの部屋は集中力を引き上げてくれますわ」
ア「ここなら、何時間でも勉強できるね」
高「んじゃ、サクッと勉強を始めますか」
凛「高雅さんの勉強法、拝見させていただきますわ」
四人はそれぞれの教材を出し、自分なりの勉強を始め出した。

～３０分後～

高「・・・よし、一教科終わり」
高雅は教材をひとまとめにして自分の横に置き、別の教科の教材を取りだした。
その速さに龍子と凛は驚きを隠せなかった。
凛「っ！？、早いですわね。ちゃんと頭に入りましたの？」
高「まぁ、大体は入った」
龍「すごいね・・・高雅君・・・・・・私・・・まだ・・・全然・・・なのに・・」
高「個人差があるって」
凛「それでも、早すぎですわ。まだ、３０分しか立っていませんわよ！！」
ちなみに、高雅がやった事は、教科書読んで基礎確認（５分）、基礎問題を解いてみる（７分）、応用を解く（１８分）である。
さらに、普通の人にはやりきれない量をやってある。
高「気にするな。それより、俺に負ける理由が分かったのか？」

凛「うぐ・・・まだですけど・・・・・しかし!!、絶対見つけてみせますわ!!」
高「そのやる気を勉強の方に使えって」
ア「ははははは。あっ、コウガ。ここ、教えて」
高「ん?、物理か。ここは――」

かれこれ、お互いに教え合いながら、勉強は着実に進んでいった。
そして、既に二時間が経過しようとしたところ。

高「・・・・ん?、もう二時間も経ってるのか」
ふと時計を見ると、1時30分から3時30分と綺麗に二時間経っていた。
龍「あっ・・・ほんとだ・・・」
凛「ここら辺で休憩を挟みましょう」
ア「ふぅ~、疲れた~。もう、クタクタだよ~」
高「お前、何時間でも出来るって言ってなかったか?」
龍「でも・・・結構疲れたね・・・」
凛「集中力が上がった分、消費量も上がったと言う訳ですわ」
高「それってさ、普通の部屋でやるのと変わらないって事じゃねえか?」
凛「それは・・・」
意表を衝かれて、凛は俯いて考えだした。
高雅はため息混じりでその光景を見ていた。
?「そんなこと、ないわよ」
第三者の声が聞こえ、その方を見ると、いつの間にか部屋に入って来ていた凛の母親がいた。
母親はお盆にジュースと軽いお菓子も持ってきてくれていた。
凛「お母様。そのようなことは使用人に任せれば・・」
母「いいのよ。高雅さんと一度会って話がしたかったのよ」
高「俺に話し?」

高雅が首をかしげている内に、母親は高雅達にジュースを配っていた。
集中して喉が渇いている事に気付いてなかったか、高雅はジュースを一気に飲み干そうとした。
母「そう。実は、凛の婿になって欲しいっと思って」
高「ぶほっ!!??、げほっ、ごほっ・・・な・・何だって!?」
凛「お・・・お母様!!／／／」
龍「・・・／／／」
ア「えええええええええええええ」
高雅は含んでいたジュースを思いっきり噴き出し、机がびしょびしょになった。
教材はお菓子を置くときに退けておいたので無事である。
その代わり、お菓子はびしょびしょになったが。
凛は立ち上がってまで、母に何かを訴えかけていた。
龍子はコップを持ったまま固まってしまい、アリアは純粋に驚いて叫んだ。
母「この子が異性に心を開くなんて珍しいからね。ぜひとも、お婿さんになってくれないかしら?」
凛「お母様!!。高雅さんは普通の人ですわよ!!。貴族でも何でもなければ、姫花家と合いません!!」
母「あら、あなたのお父さんも元は普通の人ですわよ」
凛「えっ!?、そ・・・それは本当ですの!?」
凛は初めて知ったのか、本気で驚いていた。
母「そうよ。彼は大企業の娘だった私に必死に求婚を求めたのよ。最初は見向きもしてなかったけど、その熱意に次第に惹かれちゃったのよ」
ア「へ〜。凄いね、リンちゃんのお父さんって」
凛「で・・・ですが、お婆様方が許すなど、私は思いませんわ」
母「そう、許さなかった。だから、彼に課題を与えたのよ。それが出来たら結婚を認めるって話になったの」

高「ほ～、課題ね～。一体、どんなのだ？」
母「単純、且つ無謀な課題よ」
龍「無謀？・・・」
母「あるプロジェクトの総責任者になって、成功させること」
高「そりゃ～、魂消た課題だな」
凛「そんなの、無理に決まってますわ！！」
母「でもね、彼はそれに乗ったのよ。そして、成功させた。だから、今のあなたがいるのよ」
そう言って凛の頭を撫で始めた。
凛は驚きの真実を聞かされて、少し放心状態になっていた。
ア「愛の力ってすごいね」
高「まさか、実在するなんてな」
リアクションが薄いが、高雅も内心かなり驚いていた。
凛「し・・・しかし、私は高雅さんの事など、何にも思っていませんわ！！」
高「じゃあ、ここに呼ぶなよ。俺は一人で勉強してえのに」
母「あらあら、素直じゃないね。昨日の夜、高雅さんが来るからって眠れなかったのでしょ？」
凛「っ！！？？／／／／・・・そ・・そんな訳ありませんわ！！／／／」
母「顔が真っ赤よ。ふふっ、可愛いわね」
凛「もう・・・お母様なんて大っ嫌いですわ！！」
凛は母親に怒りを覚え、部屋を出ていってしまった。
高雅達は唖然とその光景を見ていた。
ただ一人、凛を出ていかせた元凶は何も思ってないように笑っていた。
母「ふふふっ、あの子には刺激が強すぎたかしら？」
龍「・・・えっと・・・つまり・・・今の・・・から・・・すると・・・」
ア「リンちゃんはコウガの事が好きってことになるね」

高「はぁ!?、俺の事など、何にも思ってないって言ってたじゃねえか」
ア「あんな姿を見てまで、そんなことが言えるなんて、それ完全な病気だよ」
高「っだと!!、ゴラァ!!!」
高雅はドスの効いた声を上げながらアリアを睨みつけるが、アリアは怯みもしなかった。
1年経験を積んだ殺気だが、それはアリアも同じで、いつも近くに感じていたから慣れているのだ。
代わりに、龍子が震えていた。
母「それじゃ、勉強頑張ってね。後、いい青春を過ごす様に♪」
母親は結局、自分には何の罪もないかのように笑いながら部屋を出ていった。
高「勉強頑張れって、こんな状況で集中できねえよ」
龍「取りあえず・・・凛さんを・・・・」
ア「コウガが迎えに行ったら?」
高「あのな、こんな広い屋敷で人を探すなんて無謀すぎるだろ」
ア「大丈夫。今の高雅なら、殺気で探しきるでしょ?」
高「あー・・・まぁ、そうだな」
ア「それじゃ、探しに行ってらっしゃい」
高「へいへい、適当にぶらついて来る」
そう言って高雅も部屋を出ていった。
高「さ~て、どこにいるやら」
高雅は廊下を適当に歩き始めた。

ア「さて、私達は勉強しよっか」
龍「その前に・・・机を・・・・拭かないと・・・・」
ア「あっ・・・」
その後、使用人にタオルを持ってきてもらい、拭いてもらった。

所変わって、応接室。
蓮「へー、かりんちゃんって絵が上手なんだね」
香「そ・・・そうなの／／／」
蓮「僕もたまに描いたりするけど、下手なんだよぉ」
香「だ・・・だったら、カリンが教えてあげるの／／／」
蓮「ほんと!?。だったら、ぜひお願いするよ」
そう言って蓮田は香凛の手を取って喜びの表情を見せた。
香「あ・・・／／／」
その行動は、香凛にとって自分の体温を上げることだった。
フ「何だか、熱いです」
レ「熱いな。では、我々は散歩でもしにいくか?」
香「えっ!?・・・」
フ「ナイスアイデアです。では、そこの使いも連れて散歩に行くです」
蓮「だったら、僕達も・・・」
ロ「マスターはそこで待っていてください。それと香凛嬢も待機されてください」
香「えっ・・・それって・・・」
フ「お前、中々いいこと言うです」
ロ「恐縮です。楽園の夢幻様」
レ（ログナ殿はこのままの方がいいのではないか?）
フィーラは意地悪く微笑み、レオをログナを急かす様に出ていった。
残されたのは、蓮田と香凛の二人だけである。
蓮「どうして、僕らは留守番だろうね?」

香「わ・・・分からない・・・なの・・・／／／」
蓮「そっか」
香凛は完全に理解はしていたが、それを口に出すのはとてつもなく恥ずかしかった。
香（うう・・・胸が痛いの・・・心臓が破裂しそうなの・・・／／／）
香凛は苦しそうに胸を抑えるせいか、蓮田が心配そうに見つめていた。
蓮「大丈夫、かりんちゃん?。どこか痛いの?」
香「そ・・そんなこと・・・ないの・・・／／／」
蓮「かりんちゃんって、顔を見て話してくれないね。どうして?」
香「そ・・・それは・・・」
あなたの顔が眩し過ぎて見ることが出来ないの。
んな、言葉が言える訳なかった。
母「こんにちは～。あら、香凛、来ていたの」
タイミング良く、母親が入って来た。
さっきと同様に、お盆にジュースを乗せてやって来ていた。
香「お・・・お母様～／／／」
香凛は救いの手である母親に泣きながら抱きついて来た。
一瞬、お盆を落としそうになったが、何とか受け止める事が出来た。
母「あらあら、どうしたの?」
香「分からないの。・・・ほんとに分からないの。ただ・・・胸が苦しいの」
母「ふ～ん」
母親は香凛の頭を撫でながら蓮田の方を見た。
目があった瞬間、蓮田は頭を下げて無言の挨拶をした。
母親はにっこりと笑いながら会釈した。
母（こっちが、香凛の思い人のようね）
蓮「あの～、かりんちゃんは大丈夫ですか?。何だか、苦しそうな顔をしていました」

母「大丈夫よ。この子にとって、あなたはちょっと刺激が強過ぎるみたい」
蓮「？」
蓮田は首を傾げ、理解が出来ていなかった。
母親は目線を合わせるように屈み、香凛の耳元で呟いた。
母（香凛、自分の思いをちゃんと伝えなさい）
香（そ・・・それは・・・恐いの）
母（大丈夫よ。誰だって告白は恐いものよ。勇気を出して、ね？）
香（うう・・・分かった・・の・・）
香凛は意を決して、蓮田と向き合うように立った。
母親はお盆をテーブルに置くと、部屋から出ていった。
香「あ・・・あの！！」
蓮「ん、どうしたの？」
香「その・・・か・・・・カリンは・・・」
もう喉元まで来ている。
あとは口から出すだけだ。
香凛は一度深呼吸をして、大きく息を吸い込んで・・・

香「カリンは蓮田君が大好きなの！！。だから、カリンの恋人になって欲しいの！！／／／」

叫びながら告白した。
半ばやけくそだったが、自分の気持ちは伝えることが出来た。
後は答えを待つのみだ。
蓮田は目を丸くして驚いていたが、すぐに暗い顔になって・・・
蓮「・・・・・ごめん」
残酷な答えを返した。

# 勉強会　後編

香「え・・・・・」
香凛は目の前にいる蓮田を一瞬で遠く感じてしまった。
蓮田は俯きながら申し訳なさそうにしていた。
蓮「僕とだと、かりんちゃんに悪いよ」
香「ど・・・どうしてなの!?。納得のいく理由が欲しいの!!」
蓮「だって・・・僕はそんな資格が無いよ。僕なんて、家も両親も無いんだよ。だけど、かりんちゃんはこんな立派な家に住む人だよ。僕なんかより、ずっといい人が見つかるよ」
香「あ・・・」
初めて知った蓮田の事情。
自分とは全く違う境遇であり、完全に逆の立場だった。
母「あら。だったら、香凛の事を少しは考えているのね」
香「お・・・お母様・・・」
不意に入って来た母親に驚きつつも、ショックを隠し切れてなかった。
母親に問われた蓮田は恥ずかしそうに俯きながら答えた。
蓮「そ・・・それは・・・うん。そうです」
香「へ!?・・・・」
蓮田は正直に肯定し、香凛に至っては放心状態で固まっていた。
母「なら、どうして諦めるの?」
蓮「ですから、僕なんかでは、かりんちゃんとつりあいません。僕よりもちゃんとした人と付き合って欲しいのです」
母「あら、子供の癖にちゃんと考えてるのね。香凛は幸せ者ね。こんな素晴らしい人に心配してもらっているなんて」
香「うう〜・・・／／／」
香凛は恥ずかしさのあまり、母親に抱きつくように顔を隠した。
母親は優しく香凛の頭を撫でた。

母「ねえ、香凛。あなたはどんな人の恋人になりたいの？」
香「カリンはカリンの事をちゃんと思っている人がいいの。お父さんみたいな人は嫌なの」
母「あらあら、あの人もかわいそうね」
笑いながら話していた母親だったが、急に真剣な目になって香凛の目を見た。
香凛は母親の変わりように少し驚いていた。
母「じゃあ、その人は私達とは遠縁の人で、尚且(なおか)つ、この先は幸せかは分からない。それでも、香凛は恋人になりたい？」
蓮「あの・・・それって」
母「あら、今は娘と話しているのよ。割り込みは禁止よ」
蓮「え・・・あ・・すみません」
蓮田は母に気圧され、二人の話に耳を傾けるだけにした。
母「それで、どう？」
香「カリンは・・・」
母「その人は、一生に一度しか会えないかもしれない。その事も踏まえてね」
香「・・・・・たいの・・」
母「もっと、大きな声で」
母に促され、香凛は一度深呼吸すると、蓮田と向き合った。
そして、自分の決意の言葉を蓮田にぶつけた。

香「それでも、カリンは蓮田君の恋人になりたいの！！」

部屋に響く香凛の言葉。
それは何度も蓮田の耳に入り、蓮田は茫然としていた。
母「さあ、こっちはオーケーだけど、あなたはどうなの？。この際、立場なんて関係ない。ただ一人の男の子として、香凛をどう受け止めるの？」
蓮「ぼ・・・僕は・・・」

蓮田は、また自分の不運な境遇を話そうとした。
でも、それは香凛に対して失礼ではないのか。
そんな考えが頭を過り、蓮田は首を振って割り切った。
そして、香凛に近づき、香凛の手を取って答えた。

蓮「こんな僕で良ければ喜んでかりんちゃんを恋人にするよ」

香凛に笑顔で答えた。
香「・・・・あ・・・」
蓮「っ!?、かりんちゃん!?」
香凛はいきなり倒れかけたが、蓮田がなんとか受け止めた。
どうやら、香凛は気絶してしまった。
蓮「かりんちゃん!?。やっぱり、どこか悪かったんじゃ・・・」
母「ふふふ、子供にしては上出来よ、あなた達。それと、蓮田君だっけ?」
蓮「あっ、はい」
母「恋人になる以上、香凛の事、責任を持ってお願いね」
蓮「分かってます」
母「あなた達はきっと色々な人から非難の言葉か来る。それを覚悟しているね?」
蓮「当然です。いくら僕でも、それは覚悟の上です」
母「ほんと、良くできた子ね。何だか、香凛の方がもったいなくなってきたわ」
そう言って母親はポケットからベルを取り出して鳴らすと、使用人が部屋に入って来た。
母「この子をお願い。部屋のベットに寝かせるだけでいいから」
使「分かりました」
母「それじゃあ、蓮田君。ゆっくりしていってね」
そう言って母親と香凛を抱えた使用人は部屋を出ていき、蓮田はイスに座って三人の帰りを待つことにした。

その後、蓮田は帰って来たフィーラから色々聞かれたのは言うまでもない。

変わって高雅はどうしているかと言うと・・・

高「ふぁ～・・・ねみぃ～・・・」

欠伸をしながら凛を探していた。

いや、正確には向かっているだ。

高「それにしても、広いな～。辿り着くのでさえ一苦労だな」

そんな愚痴を零しながらも、ある扉の前で立ち止まった。

高雅は徐(おもむろ)にノックをして中にいる人を呼んだ。

高「おい、凛。そこに居るんだろ?。勉強しねえで大丈夫かよ?」

返事を待つが、帰ってくることはなかった。

高「お～い。居留守(いるす)するな～。俺が分からないとでも思ってんのか～?」

高雅が喋り終えるとすぐに静寂が訪れ、高雅はため息を零した。

そんな時、遂に中から返事が返ってきた。

凛「・・・帰ってください・・・」

高「?」

それは、高雅の質問に対する答えではなかった。

凛「今、高雅さんに顔を見られたくありませんわ。ですから、帰ってください」

高「おいおい、そっちが呼んでおいて、いきなり帰れなんて勝手過ぎねえか?」

凛「いいから、帰ってください！！！！」
今まで聞いたこともない凛の怒鳴り声。
高雅は流石にそれ以上追及するのはまずいと思い、最後に一言だけ喋った。
高「んじゃ、帰る。じゃあな、凛」
それだけを言って、高雅は元の部屋へ戻っていった。

一方、残っていた二人は勉強をせず、雑談をしていた。
ア「へ～、じゃあ、リュウコは毎日４時間以上勉強してるんだね」
龍「う・・・うん・・・」
ア「凄いな～。高雅も４時間以上勉強する時あるけど、毎日じゃないしね」
龍「でも・・・私は・・・物覚えが・・・遅いだけで・・・」
ア「そんなことないよ。リュウコは凄いよ」
アリアは龍子を称賛し、龍子は恥ずかしそうに指を弄(いじ)っていた。
ア「そうそう、リュウコに聞きたい事があるの」
龍「？・・・何？・・・」
ア「正直に話してね。コウガの事、どう思ってる？」
龍「どうって・・・」
龍子はアリアの抽象的な質問に少し戸惑っていた。
アリアはそれを察して別の質問に言い変えた。
ア「じゃあ、コウガの事、好き？」
龍「！！？？・・・／／／」
龍子は顔を真っ赤にして驚き、動揺を隠し切れてなかった。

龍「え・・あ・・・・そそそ・・・それって・・・／／／」
ア「異性として、好きかどうかだよ」
龍「そそ・・・そうだよね・・・・って、えええええ！！！？？？／／／」
龍子は自分で分かっていながらも驚いた。
完全に頭が混乱しているようだ。
ア「ちなみに、私は好きだよ」
龍「え！？・・・」
ア「コウガの事、一人の女性として好きだよ」
アリアの意外な言葉に、龍子は別の驚きを感じていた。
ア「だって、カッコイイし、強いし、頭も切れるし、素直じゃない所もあるけど基本的に優しいし。それに・・・人の事を良く考えてくれてる」
龍「・・・・・・・」
この時、龍子はアリアの事を羨ましく感じていた。
自分に正直な気持ちを口に出来るアリアが。
ア「それで、リュウコはどうなの？」
龍「わ・・・私は・・・・・・・」
龍子はしどろもどろ目を泳がせながらも、いつしかアリアの目を見ていた。
そして、心を落ち着け、自分の気持ちを吐いた。

龍「その・・・好き・・・／／／」

ア「やっぱりね」
アリアは驚きもせず、当然の様に受け止めていた。
ア「じゃあ、私達はライバルだね。あっ、リンちゃんもだね」
龍「で・・・でも・・・アリアは・・・いつも・・・一緒だから・・・有利じゃ・・・」
ア「それが、意外と違うのよ。いつも一緒ってことは、飽きられた

ら一巻の終わりだよ」
龍「それは・・・そうだね・・・」
ア「それに、私のイメージじゃ、恋人は時々会ったりするから、いいものじゃないのかなって思うの」
龍「うん・・・確かに・・・」
ア「だから、リュウコもチャンスはあるよ。でも、私だってそれを渡したくないから」
龍「わ・・・私も・・・」
龍子の滅多に見せない強気の表情。
それは、本当に高雅の事を思っている証拠である。
高「お～い、帰るぞ～」
ア「こ・・・コウガっ！？」
龍「こ・・・高雅君っ！？」
そんな中、高雅は突然戻ってきた。
あまりに不意だったのか、二人は体が跳ねるように驚いた。
高「何だよ、二人して同じリアクションで。コンビでも結成したか？」
ア「別にそんな訳じゃないけど・・・それより、リンちゃんは？」
高「何か、精神不安定っぽい。そんでもって、帰れと言われたから帰る」
龍「そ・・・そうなんだ・・・」
ア「リンちゃんは素直になるのが怖いんだよ、きっと」
高「どちらにせよ、俺達は帰って方がいいだろう。皆を呼んで帰るぞ」
龍「うん・・・」
ア「分かった」
三人は勉強道具を片づけ、応接室にいる皆の所へ行った。
荷物を取り、全員を呼んで、応接室を出た。
取りあえず、入口の前にいた使用人に帰ることを伝え、玄関へ向かった。

玄関へ向かうこと数分。
そこには、使用人と共に母親が待っていた。
母「あら、来たわね」
高「あっ、凛の母さん」
母「ごめんね。凛の所為で帰る羽目になって」
高（いや、お前の所為だろ。お前の）
そんなことを口に出したがったが、後に面倒事になりそうなので言わなかった。
母「取りあえず、お詫びとして家まで送ってあげる。それと、これをプレゼント♪」
そう言って、使用人が持っていた紙を取り、高雅達に配った。
その内容を見ると、何かの招待状だった。
母「それ、凛と香凛の誕生日パーティーの招待状よ。テスト明けの日曜日にあるから、来てね」
高「凛と香凛って、あいつら、誕生日は一緒なのか？」
母「そうよ。一緒の方が珍しいから一緒にしちゃったのよ」
ア「珍しいからって・・・そんな理由で・・・」
アリアは呆れながら目を逸らしていた。
母「それじゃ、帰っても勉強を怠ってはダメよ」
高「そんなつもりは滅法ないですから」
母「あら、偉いわね」
母親は冗談のつもりだったのか、高雅の言動に対して笑っていた。
そんな母親を見て、高雅は少し不服に思っていた。

高「・・・それじゃ、もう帰ります。お邪魔しました」
母「また遊びにいらっしゃい。いつでも歓迎するわよ」
高雅達は玄関を出てすぐに車が用意されてあり、それに乗り込んだ。
途中、高雅は車窓から外を眺めながら思った。
高（なんか、全然勉強できんかったなぁ）

結局、高雅は帰った後も勉強をし、一日の無駄な時間の多さに呆れかえっていた。

# 無双と夢想編　その1、動き出す敵

今、教室は張り詰めた空気になっていた。
殆どが自分の机と面向かって、必死に答案用紙を埋めていた。
約一名除いて。
高「・・・ふぁ～・・・」
その一名は頬杖つきながら、窓から空を眺めていた。
既に見直しも3回繰り返し、残り時間は２０分も残っていた。
高「・・・・・・・コクッ・・・」
気持ちのよい陽気の所為(せい)か、既にうたた寝モードに入っていた。
さらに、トドメのそよ風で高雅は眠りに落ちていった。
頬杖ついていた為、少し鈍い音を立てて眠った。
軽い痛みなど関係なく、高雅はぐっすりと眠り始めた。
皆は一瞬だけ高雅の方を見たが、すぐに答案に向き合った。
そんな中だった。
先「・・・・ん?、何の音だ?」
突然、外の方から何かが落下していく音が聞こえてきた。
皆はまた、視線が答案から目を話した。
それはだんだん近づいて行き、もうすぐそこまで迫っていた。
先「何で・・・学校に何かが降り注ぐかなぁ・・・」
空からの落下物はグランドに目掛けて落下した。
しかし、高空から落ちたが音などせず、砂塵も全く巻き上げてなかった。
さらに、落下物は完全に地面に落ちておらず、微(かす)かに浮いていた。
先「あれ・・・・人?・・・・」
良く見ると、それは物ではなく人の形をしていた。
そして、空気が新たに張り詰めた。
高「・・・・・!?」
爆睡していた高雅は一瞬で起き上がり、テスト中でも構わず席を立

って窓の外を見た。
先生が横から何か言っていたが、全く気にしていなかった。
目の前の殺気の元凶を睨みつけ、殺気で返事をしていた。
高「・・・あの野郎・・・もう気付いたか」
ア「・・・・・・・・」
高雅は窓を開け、そこから飛び降りた。
生徒全員は目を丸くして驚いたが、そんなことを気にしている暇などなかった。
落下しながらアリアを剣に変え、そのまま振り下ろした。
しかし、指二本で塞がれて呆気なく止められた。
その人物は・・・
高「セバス!!」
セ「お久しぶりですね、嘘吐きさん」
微笑みながら余裕をかましていたが、目は殺気に満ちて全く笑っていなかった。
セ「いい加減、女王(クィーン)を出しなさい」
高「クイーンって何だよ?。はっきり教えてもらおうか」
セ「あなた程度に教える事ではない。黙って女王を出しなさい!!」
高「うおっ!?」
セバスチャンは高雅を投げ飛ばし、高雅は何とか着地した。
高雅はいつでも対応できるように剣を構えた。
セ「では、出さないと言うのであれば、死んでもらいます」
高「ひゅー、すげー殺気だな。だけど、お前は色々吐いてもらわねえとな!!」
殺気と殺気のぶつかり合い。
気の弱い者がいたら殺気だけで秒殺されるだろう。
先「こらーーーー!!、何をやっ・・・・・・〈バタッ〉」
その殺気の犠牲者が一人。
高「何しに来たんだか」
セ「よそ見厳禁です」

グシャッ！！

セバスチャンは高雅の顔面に手を貫いた。
大量の血がセバスチャンを汚した。
セ「・・・・創造ですね」
高「バレタか」
高雅は双剣を片手で持ち、銃を突き付けていた。
あの時の最強エアーガンである。
セ「玩具を私に突き付けて楽しいのですか？」
高「さあな。玩具も使えるものだぜ」
セ「どう使うのでしょうか？」
ア「こう使うのよ！！」
アリアが片手だけを剣の状態のままにして人間姿に戻り、セバスチャンの腹を目掛けて突き刺そうとした。

ガキッ・・・

ア「なっ！？」
セ「成程。囮ですか。いい使い方ですが、弱過ぎですね」
実は、高雅の持っている双剣は創造の偽物で、本物は貫かれた高雅の手にあったままだった。
それに気付いていなかったセバスチャンは完全に不意を突かれた。
実際、セバスチャンは気付いている訳ではなかった。
だが、剣は貫くことを出来ず、弾かれてしまった。
高「ちっ。アリア、離れろ！！」
高雅はセバスチャンに銃を連射する。
セバスチャンは微動だにせず、創造で壁を創りあげて防ぐ。
その間にアリアはセバスチャンから距離を取り、高雅の所に駆け寄る。

ア「・・・うっ・・ぶはっ！！？？」
高「ッ！？、アリア！？」
突然、アリアが血を大量に噴き出し、そのまま崩れ落ちた。
高雅は一瞬だけ手を緩めてしまった。
セ「その一瞬が命取りですよ」
高「しまっ・・・」

グシュッ！！

高雅が言うよりも早く、セバスチャンの手が高雅を貫いた。
高「がっ・・・つぅ」
セ「ほぉ、寸前で避けましたか。しかし、完全に避けきれませんでしたね」
高雅は喰らう寸前で何とか攻撃をかわそうとしたが、反応が遅く、横腹を貫かれてしまった。
高雅は痛みに耐えきれず、その場に崩れ落ちた。
セ「おや、これは本物の様ですね」
高「く・・・そ・・・」
高雅は倒れているアリアに手を伸ばそうとする。
しかし、アリアは倒れたままピクリとも動かず、反応を示さない。
セ「無駄ですよ、コウガ様。アリア様は内臓が破壊されています。もう、起き上がることは無いでしょう」
高「この野郎・・・」
セ「あなたも、同じ運命を辿りなさい」
そう言って、セバスチャンは高雅の背中を軽く叩いた。
それだけで、高雅が胸を抑えて苦しみ、もがき始めた。
そして、次第に動きが遅くなり、必死の力でセバスチャンを睨みつけた。
高「・・・ぜってぇ・・・殺す・・・」
セ「主人公らしい言葉ではありません」

高「へへ・・・俺は主人公じゃねえ・・・ごはっ!?」
それだけを言い残すと、高雅は大量の血を吐いて、息を絶った。
セ「さて、用は済みましたし・・・」
高雅が完全に死んだ事を確認すると、意識を別に集中し始めた。
セ（聞こえますか、マック？）
マ（うぇーい、聞こえまーす）
セ（例の人は殺しました。今すぐ潜入して女王を確保しなさい）
マ（うーい。けどさ～、何か、別の殺気もしますけど、どーしましょー？）
セ（殺しなさい。生かしてはなりません）
マ（あいさー。1分も掛かりませんから、カプチーノでも淹れて待っといてくでせー）
セ（分かりました。では、落ち合う場所で）
そう言って、意思会話を終了した。
セ「これで、女王が手に入るのも、時間の問題ですね」
セバスチャンは妖しげに笑いながら、空間を歪め、その中へと消えていった。

セバスチャンの連絡を受け、マックと言う者は高雅の家に入ろうとしていた。
マ「お邪魔しｍ〈バチッ〉いってぇーー!!」
ドアノブに触れた瞬間、マックに高電圧の電量が流れ、涙を流しながら触れた手に息を吹きかけてた。

マ「何で結界があるんだぁ？。これを無くすためにセバッチャンが殺しに行ったんじゃねえのかぁ？」
高「ふ～ん。わざわざご苦労だな。偽物を倒すとか」
マ「ほえっ？」
マックが振り返った先には、先ほどセバスチャンに殺された高雅の姿があった。
マ「あり～？。まさ～か～、ホンモン？」
高「ああ、そうだけど」
マ「セバッチャンが間違うとか、ありえねー」
高「あれは９９．９％は本物に近いものだ。誰だって間違う。それより、お前、人の家に何の用だ？」
マ「自分はお前じゃねえんだぞ～。マックて言う名前があるぜぇ～」
高「じゃあ、帰ってマクド◯ルドでバイトでもしろ」
マ「んだとぉー・・・っと、それより、ちょっと待ってくろぉ」
マックは一言断って、セバスチャンと意思会話をしだした。
高雅は何もせず、ただ見ているだけだった。
マ（さーせん。無理でしょう）
セ（端折り過ぎです。ですが、大体分かりました）
マ（さっすがぁ。んじゃ、別の誰かを送ってくろぉ。なるべく、結界を壊せる奴を）
セ（分かりました。では、頼みますぞ）
マ（あいさー）
マックはセバスチャンと連絡を終えると、高雅の方を見た。
高雅は妖しく笑っていた。
マ「何が可笑しいんだ？」
高「お前が潔く無理だと言うのがな」
マ「おおーーー、人の会話を聞いちゃいますか～」
高「俺が何もしないとでも思ってんのか？。人の意思会話を聞くのなんて容易いことだ」
マ「んまぁ、セバッチャンを騙す奴だし、何があってもおかしくね

えよな～」
高「とにかく、援軍が来る前に、お前を倒しておかねえとな」
高雅は双剣を構え、地面を蹴りだした。
マ「援軍？。ば～か～だ～な～」
マックはその場から動かず、薄い笑みを浮かべながら接近する高雅を見ていた。
高雅はその態度に腹が立ったのか、思いっきり剣を振った。
しかし、振った先にマックはおらず、一瞬で高雅の後ろに回り込んでいた。
高「なっ！？・・・うぐ！？」
マックは高雅の首を絞めると、耳元で呟いた。
マ「俺達は俺達で戦う。別の次元でなぁ」
高「な・・・・に・・・・！？」
マ「レッツ、タ～～～イム、ジャ～～～～～～～～～ンプ！！」
ハイテンションで叫んだ瞬間、高雅とマックが巨大な光に包まれ、その場から姿を消した。

高「・・・ん・・・・んあ・・・？」
ア「気が・・ついた？」
目を開けると、アリアに膝枕をしてもらっていた。

だからと言って、高雅はなにも動じず、現状を確認する。
高「俺、気絶したんだな。ところで、ここどこだ？」
ア「さぁ、分からないけど。空気が変わったって感じはしないよ」
高「そうだな・・・つまり、緑淵町からは出てないって事か。・・・よっと」
高雅は勢いをつけて起き上がり、周りを見渡す。
３６０度気に囲まれていて、どこかの森の中だと悟った。
しかし、どこか見たことがあるような感じがしていた。
高「・・・ここ・・・確か・・・・・・」
ア「？」
俯いて考える高雅に、アリアは顔を覗き込んで不思議そうに見つめる。
高「・・・・・あっ」
高雅は何かが閃いたように顔を上げ、一直線に草木をかき分けて走り出した。
アリアもその後ろをついて行った。
数秒走ると、そこは知っている土地に辿り着いた。
高「ここ、皆の墓の場所じゃん！！」
目の前には透明な泉と咲き乱れる花々、そして、一つの墓石があった。
高雅に取って、大切な場所だった。
マ（ぅお～い、聞こえるか～？）
高「んなっ！？、どこだ！？」
突然聞こえたマックの声。
しかし、それは直接耳に聞こえたものではなく、頭に響いているように聞こえた。
マ（まぁ、そっちの声はこっちに送れないから確かめても分かんねえだけど。取りあえず、起きてるなら聞くんだぞ）
高「一方的な意思会話か」
マ（まず、お前は自分の能力で過去にいる。なるべく昔にしておい

たから喜べ）
高「喜べるかーーー！！」
叫んでみるも、虚しく響くだけで相手に届いてなどいなかった。
マ（次に、元の時代に戻りたいなら、自分の創った歪みを壊す事だな。そしたら、戻れっぞ）
高「？、何で戻り方を教えるんだ？」
マ（後、過去のお前に会ったら、お前は消えっから気をつけるよに。以上、質問は受け付けませ～ん。では、さいなら～）
それから、マックの声は聞こえず、意思会話を切られてしまった。
高「・・・取りあえず、歪みとやらを探して見るか」
ア「でも、この時代の自分に見つかったら消えちゃうよ。気をつけないと」
高「それなら、心配ねえ。真の契約をして、色んな力を使えば大丈夫だ」
ア「そっか。それなら安心だね」
高「んじゃ、行きますか」
高雅は一度だけ墓石に手を合わせてから、この場を離れた。

# 無双と夢想編　その2、7の世界

天国の巨大な宮殿の中。
そして、玉座の間に彼はいた。
巨大な階段を上った先にある玉座でセバスチャンはコーヒーを呑んでいた。
マ「うい～っす！！。お役に立てんで、さーせんでしたー」
そこに、巨大な扉を軽々と開けて、何ら反省の態度を見せていないマックがやって来た。
セ「いえいえ。お役に立てなかったのはこちらですから」
相変わらずの端折(はしょ)っただが、セバスチャンはちゃんと理解していた。
マ「そっか。じゃあ、今の無しで」
？「何が無しよ！！。少しは反省しなさい！！」
セバスチャンの隣に座っていた女性がマックを許していなかった。
そんな女性の行動に、セバスチャンはやれやれと首を振っていた。
マ「きっびしーーー」
？「何が厳しいよ！？。結界の一つや二つぐらい壊しなさいよ！！」
セ「少し落ち着いてください、オリア。悪いのは私の方ですから」
オ「せ・・・セバス様が言うのであれば・・・／／／」
オリアと言われた女性は顔を真っ赤にしながら両頬に手を当て、うっとり気分になっていた。
マ「わー、差別だー」
オ「何よ！！。あんたとセバス様は天と地ほどの差があるのよ！！。弁(わきま)えなさい！！」
マ「お前～、偉そうにしてながら、何もしてねえじゃねえかよ～」
オ「うるさい！！。わたくしはセバス様のティータイムを共に過ごしているのよ」
マ「働け、二ート」
オ「何ですってーーー！！！！」

ピキ・・ピキキ・・・

オリアの怒気で周りの空間に罅(ひび)が入り始めた。
凄まじい殺気を放ちながら、割れた空間から謎の無数の手を出していた。
セ「オリア、それ以上すると怒りますよ」
オ「セ・・セバス様、申し訳ありません！！」
セバスチャンに注意されたオリアは顔を青くして一瞬で空間の罅を無くし、割れた空間も再生した。
マ「助かったＺＥ☆」
オ（こいつ、セバス様のいない所で、いつか殺してやる！！）
そんな殺人計画の対象にされているマックはダルそうに階段をゆっくり上り始めた。
マ「自分のカプチーノはあるっすか～？」
オ「ふん、これがあんたの飲み物よ。ほら！！」
そう言って、オリアはカプチーノが入ったカップを放り投げた。
カップは辺りに液体を零しながら、まっすぐマックに向かって飛んでいった。
マ「ん、どぅも」
しかし、マックの手に渡った瞬間、カップには一滴も零れていないカプチーノが入っていた。
床には液体が染みている後など、どこにもない。
マックはカプチーノを一杯口にしてからセバスチャンにある事を聞き始めた。
マ「とこっで、王と王女の公開処刑はいつするのぉ？」
セ「そうですね・・・出来る事なら、アリア様の目の前で行いたいのですが、絶縁しているとなると、また話が別になりますね」
分かっていたと思うが、ここには本来、王と王女だけが座ることのできる場所である。

なのに、執事と部外者が座っていられるのは、この者達によって王と王女が囚われているからである。
今、この宮殿はセバスチャンの手中にあるのだ。
オ「一応、死なない程度に毎日斬り刻んでますけど、もうちょっとで精神が壊れますよ」
セ「それでよろしいです。続けてください」
オ「わ・・・分かりました・・・／／／」
マ「んでさ～、あいつはどこだ？。まぁ、ここにいないってことは現世（あっち）に派遣したって事だろうけどぉ」
セ「ええ。彼は私達の中では一番、力が強いですからね。結界破りには彼を派遣しましたよ」
オ「分かってんなら聞くんじゃないわよ！！」
マ「あぁ～、カプチーノうめぇ～」
オ「殺す！！！」
マックの完全無視の態度にオリアは再びキレ始め、第2ラウンドが開催された。
セ「やれやれ・・・」
セバスチャンは、その戦いを呆れながら見て、タイミングのいい所で割って入って止めた。
この後、この二人はセバスチャンにたっぷりと叱られたのであった。

一方、敵達御一行が行動をしている時に、高雅はここの緑淵町を探索していた。

一応、この時代の自分に見つからないよう、創ったフードをかぶって行動している。
アリアも剣のままだと人目に付く為、ブレスレットに変身している。
ア（ねえねえ、コウガ）
高（どった？）
ア（いやぁさ、どうして透明にならないんだろうって思って。透明だったら、『ここの高雅』に絶対に見つからないよね？）
高（アホか。透明だったら車は突っ込んで来るわ人間が容赦なくぶつかってくるわでデメリットが多過ぎる）
ア（そっか。成程ね）
高（そんぐらい、考えろよな）
高雅は呆れてため息を零した。
ア（むぅー・・・あっ、それとさ、もう一つ疑問に思った事だけど）
高（また、下らねえ質問じゃねえだろうな？）
ア（今度は大真面目だよ！！。マックとかいう奴の力についてだよ！！）
高（それがどった？）
ア（だって変だよ。高雅は『選別の飾り』を着けているのに、マックの力を受けたんだよ。普通、何も起きないんじゃ・・・）
アリアの言っている事は正しかった。
しかし、高雅は敵の力をわざと受けた訳ではない。
高（そんなことか・・・それは、あいつの言葉にヒントがある）
ア（えっ？）
高（お前、人の話をちゃんと聞いとけ。あいつは『力』とは言っていない。『能力』と言ったのだ。多分、そこが違い目だろう）
ア（成程・・・確かに、フィーラちゃんは力って言っていて能力の事は何も言ってなかった）
高（まぁ、あくまで推測だ。確証は出来ない。もしかしたら、これが何らかで働かなかっただけかもしれねえ）
そう言って、自分の胸からそれを取り出し、ジッと見つめる。

それはただ美しく輝いていて何ら変わりもなかった。
ア（どちらにせよ、マックには十分気を付けないと。ところでさ、コウガ）
高（まだあるのかよ。いい加減黙れよ）
ア（これで最後だよ。今、どこに向かってるの？）
高（我が家）
高雅は何の躊躇することなく言った。
しかし、アリアは十分に驚いていた。
ア（えっ！？。自分の家に行ったら、『ここの高雅』と鉢会うんじゃ！？）
高（目の前を通るだけだ。それに、昼だから普通は学校に行っている。だから大丈夫、バレやしないって）
高雅は気楽に考えているが、アリアは深刻に考えていた。
しかし、高雅の言葉を聞くと、自然と信用できるようになっていた。
ア（・・・そ。分かった）
アリアは納得すると、高雅の言う通り、一時（いっとき）は喋るのを止めた。

数分後。
高雅は自分の家に辿り着いた。
しかし、目の前を通るだけと思っていたが、ついつい足を止めてしまった。
それは、有力なヒントを得られそうだからだ。
高「・・・完全閉鎖になってる」
この時代の高雅の家の窓全てがシャッターに遮られていた。
高「・・・次、学校に行くか」
ア（うん）
高雅はある事を思いつき、学校に足を進めた。

アリアも同じように考えがついていた。

また数分後。

学校についたのはいいが、門より中に入ることが許されてなかった。

近くに通りかかった人に聞いた見たところ、全壊していると聞かされた。

高雅は近くの立ち入り禁止の柵を乗り越えて学校に潜入した。

壊れて間もないのか、修理工の人などはまだ見えていなかった。

そして、自分の目で学校が全壊しているのを見て確証が持てた。

高雅はいつもの木陰の下に行き、そこに座って情報をまとめ出した。

人は完全にいない為、アリアも人間状態になって座った。

高「やっと分かったな、ここの時間が」

ア「そうだね。そこまで昔じゃなかったみたいだったね」

家が完全閉鎖状態、そして学校が全壊している。

この状態の時間が噛みあうのは、高雅が合宿に行っている時である。

高「昔かぁ・・・昔の俺からすると、今の俺は大きく変わったよなぁ」

ア「ふふ、そうだね。昔はちょっと嫌なことがあったら人間を制裁してたし」

高「これも、アリアと出会ったお陰だな」

ア「えっへん。どういたしまして」

アリアは腰に手を当てて胸を出し、鼻が伸びていた。

高「ただ、こんな状況下に置かれているのも、アリアと出会った所為だな」

ア「ううー・・・それは・・・ごめんなさい」

その伸びた鼻を、高雅は意図も容易く圧し折った。

高「さてと、そろそろ歪みとやらを探しに行きますか」

ア「そうだね・・・・ん、あれは何？」

アリアが空に指を指し、高雅がその先を目を凝らして見る。
その先には小さな光がこちらに向かって飛んで来ていた。
高「ん?、何だありゃ?」
殺気を確認するも、敵意している殺気は感じられない。
つまり、誰かが放った力ではないと言うことだ。
その光は不思議な軌跡を描きながら、高雅の目の前で止まった。
?「えっと・・・コウガ君・・・だね?。顔がよく見えないが」
その光から青年の様な声が聞こえ、高雅は少し驚いた。
高「ん・・・ああ、そうだ。お前は誰だ?」
エ「ごめんごめん、申し遅れたよ。僕はエクス。何ものかは言えないけど、君の味方だよ」
高「ふ~ん・・・まぁ、敵意の殺気は感じ取れねえし、少しは信用してやる」
エ「ありがとう。早速だけど、ここから抜け出す方法を教えてあげる」
高「歪みを消せばいいとは知ってるぞ」
エ「そっか。なら話は早い。ここの歪みはあの学校だよ」
高「何!?」
高雅はエクスに言われた途端、首を学校の方へ向けた。
エ「歪みは様々な形になっている。ここは、あれを直せば、君はここを出られるよ」
高「アリア、さっさと直すぞ」
ア「オッケー」
高雅は真の契約を発動し、右手に波動、左手に再生の力を込め始めた。
そして、十分に溜まった両手を一回手を合わせて混じり会わせる。
その後、両手を離して、思いっきり両サイドに広げ、再生が混じった波動を撃ち放った。
巨大な波動が瓦礫に当たると、一瞬で学校は元通りに戻った。
エ「すごい。これ程大きな建物を大きな波動を撃たせて一瞬で再生

させるとは・・・」
エクスも高雅の力に驚愕していた。
高「褒め言葉はどうでもいい。これで、ここから出られるのか？」
高雅が双剣を腰に差しながらエクスに問う。
エ「そうだよ。ほら、後ろをご覧」
エクスに促され、後ろを振り返ると空間が歪んでいた。
エ「そこに入ると、ここから出られるよ」
高「よっしゃ。さっさと出て、マックの店員をぶっ倒すか」
ア「店員は余計だよ」
アリアのツッコミなど気にせず、高雅は歪んだ空間に飛び込んだ。
エクスも高雅の後を追って空間に入った。

数秒の浮遊感の後。
高雅は突然見えた地面に何とか着地し、大きく背伸びした。
周りを見ると、太陽も沈んでなく、シャッターなどはない自分の家の前だった。
高「よっしゃーーー。帰って来たぞーーー」
エ「何を言っているのだい？。まだ、君のいた時間ではないぞ」
高「・・・・・はぁ！？」
突然、エクスが衝撃の事実を言い、高雅は少し混乱していた。
高「いや・・・だって、出られるって・・・」
エ「それは、あの時代だけをさしていて、ここは少し進んだだけの時代だ」
ア「つまり、まだ帰ってないってこと？」
エ「そう言う事」

高「ちくしょおおおおおおおおおおおおお」
高雅は周りの人など気にせず、叫び声を上げた。
かなり、注目の的になっていたのは言うまでもない。
高雅の過去脱出はまだまだ続く。

☆おまけ☆

高「はぁ・・・帰りたい」
ア「そんなに落ち込まない。ほら、周りの人も見てるよ」
高「・・・・ん?、そしたら、変な光が浮かんで喋ってるのが見えるんじゃ」
エ「心配ない。私は自分が認めたものにしか見えも聞こえもしない。だから、心配ないよ」
高「そっか・・・じゃあ、アリアの声は?」
ア「え・・・あ・・・・私は・・・その・・・」
高雅を見る周りの人たちは、次第に痛い人を見る目に代わり始めていた。
高(・・・アリア、後でぶん殴る)
ア(ひえぇ〜、ごめんなさーーい)
高雅はそそくさにこの場を離れ、後にアリアを制裁した。
その後、この辺りに不審者が現れると少しの間、話題になっていた。

# 無双と夢想編　その3、戦争の世界

高雅は今の時代を確認する為、取りあえず学校へ向かうことにした。
学校についた途端、真っ先に職員室に行き、カレンダーを確認しに行った。
ちなみに、当然のことながら、学校には人が沢山いる。
だから、この時だけ、高雅は夢幻の力で周りから自分が見えないようにしてある。
もちろん、声も気配も何もかもが見えないように。
高「え～っと・・・6月の下旬か・・・このあたりは・・・」
ア「まさか・・・天獄戦争の時！？」
高「あ～・・・そんなのあったな。確か、この日あたりだったし」
そう言って高雅は時計に目をした。
高「15時か・・・もし、戦争だったら、この時は既に商店街で暴れてた時間帯だ。天獄戦争ではないだろう」
ア「そっか・・・よかった」
高「じゃ、気を取り直して、歪み探しでもしますか。エクス、分かるか？」
エ「ここから、北に1キロ離れた所に感じる」
高「じゃ、さっさと行って済ませるか」
高雅は開いていた窓から外に飛び出し、目的の場所へ向かった。
歩くこと20分。

エクスの行っていた通り、北に1キロ離れた場所に辿り着いた。
そこは、川が流れており、その河原で高雅は辺りを見回していた。
ちなみに、高雅は既に実体化はしており、フードを被っている。
高「で、どこにあるんだ？」
エ「この辺りで間違いはない。だけど、詳しい場所は分からない。きっと、小さな歪みだと思う」
ア（虱潰しにこの辺りを探すしかないんじゃない？）
高（だりーけど、そうするか）
高雅は川の淵を歩き、辺りを見回しながら捜索を開始した。
途中、石を川に投げて遊んだりもしていた。
しかし、思いのほか、歪みは見つからずに苦戦していた。
高「見つからね～な～」
エ「しかし、この辺りか歪みは感じる。諦めずにさがそう」
高「はぁ～」
高雅がダルそうにため息を吐いていると・・・
ア（あーーー！！！！）
高（！？、どうした、アリア！？）
突然、アリアが叫び、高雅のため息を殺した。
高雅は一瞬で緊張した顔つきになり、辺りに警戒を深める。
ア（ウサギが川に流されてるよ！！！）
高「ガクッ」
敵襲かと思い、緊張していた体が一瞬でずっこけた。
高（っんなことかよ！！。だったら叫ぶな！！）
ア（でも、早く助けないと死んじゃうよ！！）
高（・・・ったく、わーったわーった）
川はそこまで深くはない為、高雅は普通に川の中に入り、ウサギの方へ歩き続けた。
数秒でウサギに追いつくと、高雅は優しく抱き上げ、再び陸地目指して歩き始めた。
そんな時だった。

ア（こ・・・コウガ・・・大変だよ・・・）
高（ん?、何だ?）
ア（う・・・ウサギがいっぱい・・・流されてる）
高（なっ!?）
アリアに言われて上流の方を見ると、ウサギが大量に流されてきていた。
その数、軽く３０羽以上。
はっきり言って、普通ではありえない事だった。
エ「あれだ、コウガ君。あれを全て救うことが歪みを消す事だ」
高「おい、歪み、ふざけ過ぎだろ」
ア（は・・早く助けないと死んじゃうよ!!）
高（わーってるよ!!。やりゃいんだろ!!）
高雅は一度周りを確認すると、人が誰もいない事に気付き、力を使い始めた。
高雅は流されているウサギ全てに力を与えると、ウサギは突然、空中に浮き上がり、ゆっくりと陸地に運ばれた。
そして、陸地に着地すると、ウサギ達は草むらに消えて行った。
高「これでよし。ほら、お前も帰れ」
陸地についた高雅は抱えていたウサギを放し、自由になったウサギは皆と同じように草むらに消えていった。
その瞬間、目の前の空間が歪み始めた。
高「これで帰れるのか?」
エ「いや、マックの力を考えると、まだまだ続くだろう」
高「帰りた〜くな〜ったよ〜♪」
ア「歌わなくていいから、早く行こうよ」
高雅は次の時代へと空間へ飛び込んだ。

高「よっと・・・って、いきなり職員室かよ!?」
歪んだ空間から投げ出され、綺麗に着地したその場所は職員室だった。
しかも、フードは着地の際に脱げてしまっている。
先「き・・・君!!、一体、どこから来たんだね!?」
愕然としていた先生の一人が高雅に聞いて来た。
しかし、高雅は無視してカレンダーと時計を確認する。
高「・・・あれ、まだ六月か。しかも、朝7時20分か・・・」
ア「何だろう・・・やな予感がする」
高「奇遇だな。俺もだ」
先「君、聞いているのか!!」
先生が高雅の肩を掴み、こちらに向かせようとするが高雅は一ミリも動かなかった。
先生が不思議な顔をするが、高雅は完全無視して力を溜めていた。
高「悪い、一時的に消えてくれ。このことの記憶とかは抹消しておくから」
そう言った瞬間、職員室にいた先生達全員が消えた。
職員室は一瞬にして静寂に包まれていった。
高「これでよし、後h「グゴオオオオオオオオオオ」来ちゃったか」
振り向けば、黒い巨人がそれに似合う大剣を持って高雅を睨みつけていた。
高「しょうがねえな・・・」
高雅は目を閉じて、数回深呼吸をして心を落ちつけた。
その間に、巨人は机を吹き飛ばしながら、高雅に一直線に接近して

いた。
距離が無くなった瞬間、巨人は天井を突き破りながら巨大な剣を振り上げた。

ゾクリ！！・・・

巨「ビクッ！？・・・」
高雅はまるで見えていたかのように絶好のタイミングで殺気を開放しつつ、目を開けて巨人を睨みつけた。
巨人は振り上げたまま全く動かず、高雅の目を放せなかった。
数秒後、巨人は倒れ、息を絶った。
高「ふぅ、殺気だけど倒すのも疲れるな」
ア「でも、力を使わないから色々と便利だし、この時代の高雅なら殺気にはまだ鈍い方だから気付かれにくいし」
高「まぁ、だから殺気で倒したんだけどな。それより、この学校以外の周辺の人達を消すぞ」
エ「何故だい？」
高「単純に被害を少なくする為だ。終わったら、この時代の俺が再生の力で全てを戻すからな」
ア「学校の人達は？」
高「う～ん・・・俺のクラスにいる奴以外を消すか」
そう言って、高雅は空間の力を使って屋上に行った。
そして、町全体に届くように巨大な波動を放ち、それに消失の力を込めて存在を消していった。
波動は町全体に行き渡り、高雅は満足そうに喜んだ。
高「よし、成功♪」
ア「お疲れ様」
高「だが、疲れてられねえんだよな」
エ「そうだぞ。歪みはこの学校のどこかにある。のんびりしておるとこの時代のコウガ君と鉢合わせになってしまうぞ」

高「へいへい。じゃ、探しますか」
高雅はフードを被って学校の中へ入り、歪み捜索を開始した。

探すこと３０分。
見当もつかずに適当に彷徨(さまよ)い、途中で自販機を破壊してジュースを奪って飲んでいた。
ア「コウガ、あんなこと、しちゃいけないよ」
高「いいんだよ。どうせ、この時代の俺が最後に直すから」
呑気な事を言って、角に差しかかって曲がろうとした。
その瞬間・・・
昔高「誰だ!?」
高「ッ!?、やべっ!!」
突然、この時代の高雅の声が聞こえ、高雅はすぐさま来た道を戻り始めた。
全力で走って逃げると、遠くから走ってくる音が聞こえてｋ知あ。
この時代の高雅が追って来ているのだ。
高「しゃーねぇ、空間で逃げるか」
目の前に空間を展開して、この場から消えようとしたその時だった。

ガラガラガラ・・・!!!

高「あっ」
昔高「なっ!?」
この時代の高雅は天井が崩れた所へ向かい、高雅の事を諦めた。
高「何にせよ、良かったのか?」

ア「多分・・・てか、あの時の影って・・・」
高「・・・・俺？」
ア「多分・・・」
昔、こんな展開があって、その犯人が自分だと知った高雅は不思議な感覚に襲われた。
高「つまり、俺が（昔の）俺を追いかけさせて、その結果、凛が捕まってしまったと」
ア「だろうね」
その瞬間、高雅自身に一気に後悔と罪悪感に襲われ始めた。
エ「ん？。コウガ君、歪みが近いよ。きっと、この上の階だ」
高「あ・・・うん、分かった」
急激にテンションが落ちた高雅は、取りあえず目的の為に上の階へ向かった。
上階についた途端、目の前に巨人が待ち構えていた。
しかし、今までの巨人とは少し雰囲気が違い、マントを身に着けていた。
そして、巨大な剣を二本持っており、それぞれの手に構えていた。
エ「あれが歪みの元凶だ」
高「ふ～ん。あれがね～・・・俺のパクリ？。しかも、マントとか、今時ダサいぞ」
巨「グオオオオオオオオオオオオオオオ」
高雅の挑発的な言葉を理解したのか、巨人は高雅に向かって接近し、双剣を振り上げる。
高雅は少しだけ横に移動して、紙一重で回避する。
高「おいおい、廊下を走るなよ。校則違反だぜ」
そう言って、一瞬で相手の懐（ふところ）に潜り込み、強烈なパンチを腹に喰い込ませた。
巨「グブッ！？」
巨人は血を吐き、双剣を放して吹き飛んだ。
壁にぶつかり、一気に、辛うじて立っていられる状態に落ちた。

高「久しぶりに、パクリ技でもするか」
そう言って、高雅は右手に活性と破壊の融合力、爆破の力を溜め始める。
巨人はもう立っているのが限界で、何もせずにいた。
そして、高雅はその場から消え、また一瞬で巨人の懐に潜り込んでいた。
もちろん、ボロボロの巨人は見切る事も出来ず、高雅に攻撃を許してしまった。
高「タ○ラン――」
高雅は左手でさっきと同様に腹を殴った。
少し違うのは、あれから吹き飛ばず、少しだけ浮いている状態になっている事だ。
そして、無防備の状態の巨人に右ストレートを放った。
高「――レイブ!!!!!」

ボゴォォォォン!!

殴ると同時に巨大な爆発が起き、巨人は壁をぶち破って遥か彼方の星となった。
高雅は手を二、三度叩き、飛んで行った巨人の方を見る。
高「ま、今頃太平洋のど真ん中まで飛んで行ってるだろうな」
ア「そこまで飛ばしちゃったの!?」
高「感触ではな」
エ「しかし、大丈夫なのかい?。こんな壮大な音を立ててしまったら・・・」
高「ちゃんと考えてるよ。戦う前に、周りに音だけが漏れない結界を創ってあるから」
エ「用意周到だな。では、次の時代へ行こう」
高「まだ、終わらねえのか~?」
ア「愚痴を言ってる暇があるなら、早く行く事だね」

高「はぁ～」
高雅はしょうがなく諦め、歪んだ空間の中へ飛び込んだ。

ちなみに、高雅が倒した巨人は、巨人達のリーダーだった為、残りの巨人達は戦意を失っていた。
その後、巨人達が戦争で戦うことはもう無かった。

新たな時代へと投げ出された高雅は周りを確認していた。
これと言って知っている場所ではなく、目印になるような建物もない。
少し田舎染みた場所に来ていたのだ。
高「何もないな～」
ア「人も全然いないね」
エ「歪みの反応を感じられない」
三者三様の言葉を並べ、途方に暮れていた。
ただ、最後の言葉に高雅が口を挟んだ。
高「おい、歪みの反応が無いって、どういう事だ？」
エ「多分、極度に小さな歪みなのだろう。それ故、反応を完治することが出来ないのだ」
高「手掛かりゼロか・・・ん？」
高雅は耳を澄ますと、聞き慣れた大嫌いな音が聞こえてきた。
それと同時に、鼻をくすぐる潮の匂いもして来た。
高「波の音・・・海・・・あっ！！」
ア「どうしたの？」
アリアは気付いておらず、高雅のリアクションが不審に思えた。
高「海だよ。ここは、前に皆で行った海辺の周辺だ」
ア「そう言えば、どことなく・・・そんな気が・・・」
エ「身に覚えがあるなら、そこに行ってみるのがいいだろう」
高「それもそうだな。よし、音と匂いを頼りに海に行くか」
ア「カナヅチの高雅がそんなことを言う日が来るなんてね」
高「・・・アリア、後で殴らせろ」
ア「あはは、ごめんごめん」
アリアが苦笑いしながら謝るも、高雅は全然許す気はなかった。
それを感じ取ったアリアは心から謝り、何とか許してもらったので

あった。

さほど時間はかからず、海に到着した。
そこは人が一人もおらず、波音だけが響いていた。
高「気候的に夏だな。なら、もしかすると・・・」
ア「リンちゃんの家の私有地かもね」
高「あの時か・・・」
そう言って思い出に浸り始める。
しかし、巨大蛸との戦いで頭がいっぱいで他の記憶は殆ど消えていた。
高「・・・つまらなかった」
ア「そうかなぁ、ビーチバレーとか天体観測とか面白かったよ」
アリアの記憶はきちんと残っており、高雅の感想に疑問を抱いていた。
エ「おや、車がこっちに来てる」
高「ん？」
ふと首を横に向けると、大きなリムジンカーのような車がこちらに向かっていた。
高「マジでこの日かよ」
ア「と・・・とにかく隠れなきゃ。ここは私有地だし、居るだけで怪しいよ」
エ「しかし、ここら一体は何もないぞ」
見渡す限り、砂浜で建物や漂流物などは一切ない。
つまり、隠れる場所は陸地にはなかった。
だったら、隠れる場所は一つ。
高「アリア、活性の力で肺を強化してくれ」

ア「まさか・・・溺れる気!?」
高「そんな類だな」
高雅は一目散に海へダイブした。
浜辺からだから、深い所までは少々時間が掛かったが、その間に活性の力で準備をした。
そして、高雅はそのまま沈んでいき、水深１０メートルの所まで沈んだ。
もちろん、普通に水中を普通に二足歩行をしている。
高（ふぅ、何とかなったぜ）
ア（息はどれくらい持つの?）
高（まぁ、５分は持つだろう。その間にどっか遠くに行っておかねえとな）
取りあえず、なるべく遠くに離れるように水中を歩き始めた。
その束(つか)の間だった。

ピタッ

高「ゴボボッ!?」
ア（コウガ!?）
突然、蛸が高雅の顔にくっ付いて来た。
高雅は驚いて空気をかなり吐き出してしまった。
高（この・・・邪魔だ!!）
蛸を引っ張り、何とか顔から引き離すと、そのまま蛸はどこかに行ってしまった。
ア（コウガ、だいじょ・・・・ぷっ）
アリアは突然、吹き出しそうになり、喋るのを止めて耐えようとしたが、少し吹き出してしまった。
次第にそれは、空気の入った風船に穴を開けるようにすぐに爆発した。
ア（あはははははははははは）

高（何だよ?）
ア（だ・・・だって・・・顔が・・・あはははははは）
高（だから、何だよ!?）
エ「コウガ君、顔に吸盤の跡が付いてるよ」
高（!?／／／）
高雅は慌てて顔を確認しようとするが、水中で自分の顔を見ることは出来ない。
アリアは焦った高雅の姿を見て、さらに笑い声を上げる。
人間状態なら、腹を抱えてひっくり返っているだろう。
高雅は自分の顔を確認するため、急いで遠くに行き、海中から上がった。

この時、高雅はあの蛸に重大なミスをしてしまっていた。
高雅の吐いた空気には、活性の力が混じっていたのだ。
それによって、あの蛸の細胞は急速に成長したのであった。
この事は高雅達に知られることはなかった。

高「ふぅ～、えらい目にあったぜ」
高雅はあれから、かなり離れた浜辺にいた。
吸盤の跡が引くまでずっと待機していたのだ。
その間に、アリアを制裁していたりしていた。
エ「コウガ君、この辺りに歪みの反応を感じる」
高「そうか。よし、行くぞアリア」
ア「うう～・・・痛いよ～・・」
アリアは頭に出来た五重のタンコブ塔を擦りながら泣いていた。
高「笑い過ぎたお前が悪い。さっさと行くぞ」
ア「は～い・・・」
アリアは反省をし、高雅の恐ろしさを改めて知ったのであった。

エクスの後ろをついて行くこと数分。
エ「これだ。これが歪みの原因だ」
高「・・・なぁ、一つ いいか？」
高雅は付いた場所と歪みの対象に納得がいってなかった。
場所は、先ほどの場所から変わらず浜辺である。
そして、歪みの原因は小さな生物であった。
高「本気でこれが歪みと思うのか？」
エ「間違いない。こいつから感じるのだ」
高「ただのヤドカリじゃん！！！！」
高雅の大きな声にビックリしたのか、ヤドカリは殻に籠(こも)ってしまった。
ア「さすがに、ちょっと疑うよね」
高「ちょっとどころじゃねえよ！！」
エ「しかし、本当に歪みを感じるのだ。僕を信じてくれ」
ア「コウガ、一応、騙されたと思って・・・」
高「・・わーったよ」
高雅は足を振り上げると、ヤドカリの殻を粉砕しつつ、中のヤドカリを潰した。
無関係なヤドカリを殺すことに少し罪悪感を感じていた。
すると、信じ難い事に、目の前の空間が歪み始めたのであった。
高「・・・マジかよ」
エ「ほら、僕の言った通りだろ？」
ア「あははは、まさか本当だとは・・・」
流石のアリアのこれには苦笑いで答えた。
高雅は歪みの事を改めて新しく認識したのは言うまでもなかった。
高雅は歪んだ空間へ飛び込み、新たな時代へ飛んだ。

次についた場所は薄暗い夜の校舎だった。
高「夜か・・・あれ?、エクスは?」
いつも近くに漂っていた謎の光、エクスの姿がなかった。
何度も周りを見渡すけど、どこにもエクスの姿は見えなかった。
ア「ほんとだ。一体、どこにいるのだろう?」
高「ま、腹減って飯でも食いに行ったんだろう」
ア「いやいや、この状況であり得ないでしょ」
高「冗談に決まってんだろ。しかし、いないとなると、歪み探しに手間が掛かる」
今まで、全ての歪みはエクスのお陰で見つかっていた。
しかし、いないとなると探すのにどれ程時間が掛かるか分からない。
ア「エクスの事が気になるけど、ジッとしてても始まらないよ」
高「・・・仕方ねえな。移動するか」
ア「展開的に、旧校舎に行ったらいいんじゃないかな?」
高「展開的・・・」
取りあえず、突っ込むのも時間の無駄だと思い、高雅は旧校舎に向かった。
フードを被り、なるべく誰かに見つからないように遠回りをしながら。
その所為でいつもより時間が掛かった。
高「何とか、ばれずに入口まで来たが・・・」
ア「この時代の私がいるね」

入口付近には昔のタイトとアリアが待機していた。
ア「まさか、肝試しの時とはね」
高「どうして、俺が行くところに（昔の）俺がいるんだよ・・・」
そんな呆れながらも、気配や姿、足音を消しつつ、真横を通り過ぎていった。
そのまま中へ入ると、行くあてなどもないので、適当に教室めぐりを開始した。
あるもの全てを一つ一つ調べていくが、歪みの感覚など詳しくは分からない。
それでも、高雅は探し続けた。
高「はぁ～・・・エクスがいれば、目安は付くのにな」
ア「とにかく、エクスと歪みを探そうよ」
高「今、探してるっつの」
そう言って、次の教室へと入って行く。
ボロ机やそのままの黒板など、丁寧に調べていった。
しかし、そんな同じ行動に高雅は飽き飽きしてきていた。
高「かったり～。アリア、お前も手伝え」
ア「え～・・・やだよ～」
高「愚痴を言うな。手伝えよ、ほら」
そう言ってブレスレットを適当な方向に投げる。
ア「え!?、わわわ!?」
アリアは突然の事に慌ててしまい、反応が遅れてしまった。
そして、目の前には机が待ち構えていた。

ガタン！！

人間状態になって着地しようとしたが、豪快に机に頭をぶつけてしまった。
ア「いった～。酷いよ」
高「いいから探ｓ「やっと仕掛けに遭ったか?」！?」

突然、廊下から聞こえてくる声。
それは幽霊などではなく、聞き覚えのあるセリフだった。
ア「この時代のコウガだ」
高「安心しろ。俺達の声や姿は分からない。ジッとしてれば見つかりはしない」
そう言って廊下の方をジッと見つめる。
すると、入口の小窓から人影が映った。
高「・・・そっか。わざわざ入れさせる必要が無いな。アリア、扉を固定しろ」
ア「わざわざそれもする必要が無いんじゃ」
高「変に長居されては嫌だからな。入れなければすぐに諦めるだろ」
ア「そっか。じゃあ、固定するね」
アリアは方向の力を使い、扉が開かないようにした。
案の定、影を見る限り懸命に開けようとしているが、扉が開くことはなかった。
そして、影が離れ、安心しきったその時だった。
ア「・・・ん?、鼻がムズムズする・・・」
さっき、机にぶつかったとき、大量の埃(ほこり)がアリアの周りに舞い上がっていたのだ。
そして、それはアリアの鼻をくすぐっていた。
ア「ふぁ・・・ふああ・・・・っくしゅん!!!」

ガララッ!!

高・昔高「な!?」
扉が勢いよく開いてしまった。
アリアがくしゃみをしてしまい、その時に力が誤作動を起こしてしまったのだ。
高「バカ野郎!!」
ア「ご・・ゴメン!!」

アリアは手を合わせ、謝るジェスチャーをする。
それで高雅の怒りが収まるはずもなく、頭に鉄拳を浴びせられた。
この時代の高雅は首だけを回して辺りを見渡すと、何もない事を確認し、扉を閉めた。
高「ほ、さっさとどっか行ってくれたか」
ア「あう～、痛いよ～」
高「ったく、逆に滅茶苦茶怪しかったじゃねえかよ。何とか長居されずに済んだけどよ」
ア「だって～・・・」
しょうがないよ、と涙目で高雅に訴えるが、高雅は全くもって許していなかった。
高「とにかく、こんなドジはこれだけにしてくれよ」
ア「はい、気を付けます」
アリアが心から謝ると、高雅もやっと落ち着いて来た。
高「じゃ、歪みとエクスを探すか」
エ「その必要なねえ」
ア「えっ！？」
いつの間にか、いつものように高雅の周りに光が漂っていた。
しかし、その光は黒みを帯びていて少し変わっていた。
高「あれ、染めた？」
エ「ああ？、偉そうな口きいてんじゃねえよ」
ア「え・・あ・・・ほんとにエクス？」
変わり果てた口調にアリアは戸惑っていた。
それでも、高雅は何ら変わりもなく接していた。
エ「はん、その様子じゃ、もう一人の俺から聞いてねえようだな」
ア「な・・何を？」
エ「はぁ、全く。あいつは隠してんじゃねえよ」
そう言ってエクスはため息を吐いた。
光の塊がため息する所を想像すると、全く見当がつかないだろうが、そこは勘弁（笑）。

エ「俺は夜に現れるもう一人のエクスだ」
ア「それってつまり・・・」
高「二重人格者ってことだろ」
エ「ほほぉー、お前は冷静なんだな。こんな性格の俺を何とも思わねえのか？」
高「別に。関係ないな。それより、歪みの場所を教えてくれ」
エ「へへ、気にいったぜ。お前みたいなやつは初めてだ」
高「いいから、教えてくれ」
エ「あー、隣の部屋の机の中にあるティッシュだ」
高「かなり具体的に答えたな」
エ「へん、俺は昼間の俺より遥かに強力なんだぜ。こんな事、軽い軽い」
ア「ティッシュについて、ツッコマないんだ・・・」
アリアの呟きは聞こえることなく、高雅はさっさと隣の教室へ移動した。
そして、数ある机の中からティッシュの入った机を探し当てた。
高「めっけ」
エ「んじゃ、さっさと壊しちまいな」
高「壊すと言うより、破くだな。いや、この際焼くか？」
ア「何でもいいから早くしようよ」
取りあえず、破くことにした高雅はビリビリに破き捨てた。
すると、いつもの様に目の前の空間が歪み、次の時代へと繋がった。
高「後、何回歪みを壊せばいいんだろうか・・・」
エ「半分は進んでるぜ。あと一息だ」
高「ふん、口調に似合わずいいこと言うじゃねえか」
エ「るっせーよ」
そんな減らず口を叩きながらも、高雅は笑っていた。
そして、歪みへ飛び込み、次の時代へと飛んで行った。

# 無双と夢想編　その5、緑と恐怖の世界（前書き）

遅れて申し訳ありません。

夏期授業が終わった瞬間、いきなりドバッと宿題を課されました。

俺、受験生なのに多量の宿題って・・・

てか、こんな小説書いてる人が受験で成功する訳ありませんねｗｗｗ。

さらに、夏風邪とか引いてしまって寝込んだりと、不運の連続です。

取りあえず、待っていた読者様には本当に申し訳ありませんでした。

# 無双と夢想編　その5、縁と恐怖の世界

これで何度目になるだろうか。
歪みから飛び出した高雅は何の芸もなく普通に着地した。
高「何をしろって言うんだよ・・・」
ア「どうしたの？」
高「何でもねえよ。それにしても、また学校かよ」
歪みから出た場所は学校の玄関だった。
外を見て、太陽を確認して、アバウトな時間を確認しようとしたが・・・
高「こりゃ・・・あの時だな」
外には、現実ではありえない程大きな肉食植物が咲き乱れていた。
こんなことがあった日が唯一、一日だけあった。
高「・・・あのハゲ野郎の時か・・・」
ア「これは、捜索には骨が折れそうだね」
高「とにかく、ここを出て歪みをさｇ「誰ですか！？」あ・・・」
これからの行動を考えている最中に、先生が生徒達を連れてここに来ていた。
もちろん、高雅はフードを被っている為、向こうは高雅だとは理解していない。
ア（生徒を連れているってことは、逃げているってことだよね？）
高（つまり、蜻蛉が入ってきて間もないってことか）
お陰で正確な時間帯が分かり、この時代の自分が何をしているかが分かった。
そんな事を考えていると、竹刀を持った先生が高雅に襲い掛かって来た。
それは、自称天才の名も無い先生である。
先「死ねえええええええええええ」
高「見知らぬ相手に死ねって言うな！！！！」

向かって来る先生に対し、高雅はクロスカウンターを叩きこんだ。
先生は華麗にぶっ飛ばされ、一撃ノックダウンした。
他の先生や生徒達はそれを見て唖然としていた。
高「取りあえず、お前らの今日は消す。明日から元気に登校しろ」
そう言って、高雅はここにいる皆を別の空間に閉じ込め、存在を消した。
高「これでよしっと。それで、歪みはどこにあるんだ？」
エ「あ・・・ああ・・この学校の地下にあるようだ」
エクスはどこか不安げに答えた。
そんな様子を高雅とアリアは疑問に思う。
高「どった？。腹が減ったか？」
ア「何か、最近そのネタ多用するね。でも、元気ないね」
エ「ああ・・・君達は何とも思わないのかい？」
高・ア「何が？」
二人、口をそろえて言う。
それは、本当に分かってないようだ。
エ「何がって、僕は二重人格者。そして、もう一つの人格はかなり性質（たち）が悪いんだ」
高「たかが二重人格者ってだけで、人を嫌うなんてバカな奴だけだ」
ア「そうだよ。それに、もう一つの人格も結構優しい所があるよ」
エ「優しいだって！？。僕は知らない内に友達を傷付けていたりしてたんだ。それなのに、優しい訳が無い」
高「う～ん・・・いつものお前からアレに変わったら、結構酷いと思われるが、あいつは素直になれないだけで本当はいい奴だぜ」
ア「うん、コウガみたいで心は優しいよ」
高「俺が優しい訳ねえだろ」
ア「ほらね」
エ「・・・君達は僕を軽蔑（けいべつ）しないのかい？」
エクスの問いに二人は少し呆れながら答えてあげた。
高「あのな、そんぐらいで軽蔑なんてしねーよ」

ア「二人ともいい人なのに、何で軽蔑するの？」
高雅は当然の様に答え、アリアは逆に質問していた。
エクスはそんな二人の優しい言葉に心を打たれていた。
エ「・・・ありがとう、二人とも」
高「お礼もいらねえよ。さて、サクッと歪みを壊しに行きますか」
エ「ふふ、本当にアリア君の言うとおりだ」
ア「でしょ？」
高「何の話をしてんだ？」
高雅が二人に問うが、ただ笑って返すだけであった。
高雅は意味も分からず、考えるのを止めにして地下室のある校長室へ向かった。

無事に校長室に到着することができた。
無事と言っても、巨大な虫との戦闘が数回あったが。
それと、昔の自分と鉢合わせになるのを避ける為、わざと時間を掛けていた。
高「・・・ん？」
ドアノブに手を掛けた瞬間、中から何かが歩いている音が聞こえた。
その音はかなり早い連続で足の数が多い事が分かった。
高「・・・あっ、蟻の巣があったな」
ア「そっか・・・適当に入るのは危険だね。どうするの？」
高「正々堂々、正面から入るだけだ」
高雅はドアノブから手を放し、代わりに蹴りでドアを開けた。
ドアは壊れ、入口付近にいた巨大蟻にぶつかって吹き飛ぶ。
それは、一直線上にゆとりを作っていた。

高雅はすぐに中には入り、地下への入口を鉄壁を創って塞いだ。
高「まずは、周りの蟻からだ」
高雅を確認した蟻達は一斉に襲い掛かる。
高「面倒だ。速攻で終われ」
すると、高雅に近づいてきた蟻達は突然動きを止めた。
そして、すぐに壁に吸付くように吹き飛ばされた。
高雅が自分中心に反発するように方向の力を掛けたのだ。
高「そのまま潰れろ」
方向の力をさらに強め、次第に蟻達の体が潰れ始めた。
そして、巨大な破裂音を出して血を噴き出し、絶命した。
高「地下も簡単に済ますか」
高雅は右手に活性と破壊の力を融合させた爆破の力を溜め始める。
そして、程良く溜めた爆破の力を床を通して地下に送った。
高「はい、点火♪」
そう言って、指を鳴らした瞬間、真下から鈍い音と一瞬の大きな揺れが同時に起こり、鉄壁の隙間を通って黒い煙が漂って来た。
高「これでいいだろう」
しかし、歪みを壊して少し経つが、目の前の空間がいつもの様に歪んだりはしなかった。
高「あれ、壊れてねえのか？」
エ「いや、歪みもちゃんと消えた・・・ん？、別の歪みを感じる」
高「おいおい、2個あるパターンかよ」
エ「どうやらそのようだ。敵側も焦っているのではないか？」
高「そうだといいが、場所はどの辺だ？」
エ「ここから北に5キロ離れたところだ」
ア「じゃ、サクッと行って、サクッと終わらせよ」
高「言われなくても」
高雅は窓から飛び出し、空へ飛び上がった。

ちなみに、何故空を飛べるかというと、方向の力を重力を超える力

で上に掛けているからである。

速度の力も使って一瞬で移動し、着いた場所はよく知っている場所だった。

高「ここ・・・俺の家じゃん」

北に5キロ進んだ場所は高雅の家の周辺だった。

高「しかし、家に結界が張っていないとなると、アリアが力を失った後か」

一応、家の中に誰かいないか殺気を確認する。

しかし、感じ取れる殺気は一つだけしか感じ取れなかった。

高「さらに、二人が攫われた後かよ」

エ「とにかく、コウガ君の家の中から歪みを感じる」

高「ま、取りあえず入るか」

高雅は持っていた家の鍵を使い、家の中へ入る。

中は静寂に包まれ、誰もいない事が改めて知らされる。

高「取りあえず、お邪魔しま～す」

ア「自分の家だから、言わなくていいんじゃ・・・」

そんなことを気にせず、高雅は中に入るとリビングへ行き、そしてあるものに目がいった。

レ「こ・・コウガ殿」

昔のレオだ。

レオは小さくも無く、かと言ってそれほど大きくはない中途半端なサイズだった。
高「おっすレオ。色々と長くなるから話すのは止めるけど、取りあえず、中途半端な姿だな」
レ「い・・・一体何があったのだ!?。我は普通に空間内でコウガ殿達と過ごして・・・」
高「俺ら?・・・ああ、空間内で創造したのか」
どんな願いも叶うように創造の力を使っていた事を思い出した。
きっと、それを使って空間の中でも偽の自分達と過ごしていたのだろう、と考え付いた。
高「取りあえず、中途半端な姿だし、ちゃんと一億年後の姿にしてやる」
レ「ほ・・本当か!?」
高「任せろ。5秒してやる」
そう言って、前と同じように活性と空間を融合させた力、『時促の力』を創りあげた。
高「ここに入れ。前回同様、中も広くて好きな物が出る」
レ「すまない、コウガ殿」
そう言って、レオは空間の中に飛び込んだ。
すると、僅か3秒でレオが出てきた。
その姿は、高雅の良く知っている天王獣と呼ぶに相応しい姿だった。
レ「久しぶりだな、コウガ殿」
高「俺にとって、3秒ぶりだけどな」
レ「そうか。それでは、これからどうするのだ?」
高「まず、一つ言っておく。俺はこの時代の俺じゃない。この時代の俺はピンチを迎えている頃だろう」
レ「どういう事だ!?」
高「俺の時代の諸事情で、ちょっと過去に来てる訳。とは言っても、今から1カ月後の俺だが」
レ「なんと、1カ月でそこまで強くなるのか!?。さすが、コウガ

殿だな」
高「まあ、色々あったし。それから、聞いて欲しい事がある」
高雅は突然、目の色が変わり真剣になる。
レオもそれを察して目付きが変わった。
高「１０月の期末テストの初日、お前は家から離れて別の所に避難してくれ」
レ「どうしてだ！？」
突然、意味の分からない未来を言われ、戸惑うレオ。
高「未来を話し過ぎると、この先の事がつまらなくなるぜ」
そう言って、真剣な目付きからいつもの気楽な目に変わった。
高「ただ、今の事だけは覚えていてくれよな。超重要事項だから」
レ「・・・分かった。コウガ殿の頼みとなると、断る訳にもいかん」
高「サンキュ。んじゃ、この時代の俺でも助けに行って来い」
レ「分かった。約束は必ず果たす」
高雅は窓を開けると、レオは一気に窓から飛び出した。
レオのスピードは中々速く、すぐに視界から消えていった。
そして、高雅はふと思った。
高「あっ、あいつ、俺の事言わねえだろうな」
ア「大丈夫だよ。今まで言わなかったでしょ？」
高「それもそうだな。そんじゃ、歪みさｇ「もう見つけておるぞ」
おお、わざわざご苦労だな」
話している間、暇だったのか、エクスが見つけ出していてくれた。
エ「そんなことはない。台所にある緑色の皿だ」
高雅はそれを聞くと、すぐに思い当ったのか一瞬で見つけ、何の躊躇も無く割った。
すると、目の前の空間が歪み、この時代との別れが近づいてきた。
高「んじゃ、次へ行くか」
高雅は芸も無く、歪みへ飛び込んだ。

高「よっと」
今回の高雅は一回転して着地した。
遂に、芸を覚えたのだ。
今まで平凡に着地していた、あの高雅が！！。
高「殺すぞ」
ア「誰に言ってるの？」
高「誰でもねえよ。それにしても、ここはどこだ？」
高雅達が出てきた場所は、町のビルの屋上だった。
軽く遠くを見渡すと、強大な殺気を感じ取った。
高「あれは・・・アルテマか」
ア「そうみたい。てことは、もうすぐゴールだね」
エ「そうだな。ここを抜ければ元の時代に帰れるだろう」
高「そっか。なら、さっさと終わらせねえとな」
そう言って屋上から地上を眺めると、そこには、巨大な鷲と多くの一般人達がいた。
高「あれ、あいつら・・・」
ア「大変、学校の皆だよ！！。早く助けなきゃ」
高「へいへい、敵は大したことなさそうだし、さっさと終わらせてやるか」
エ「それは丁度いいみたいだ。あの敵から歪みを感じる。きっと、あれを倒せば」
高「それは好都合だ。秒殺するぜ」
高雅は速度の力で飛び降り、龍子の前に立った。
そして、音速の急降下で龍子を食おうとする鷲のこと、バオに光速のパンチで吹っ飛ばした。

バ「キエエエ！？」
龍「えっ！？」
バオは驚きの声を上げながらビルに突っ込み、龍子は目を丸くして高雅を見ていた。
もちろん、ちゃんとフードは被ってある。
？「なっ！？、あの速さを見切ったと言うの！？」
高（・・・そう言えば、こいつの名前、知らねえな）
そんなことを思いつつも、相手の問いに答えてあげた。
高「そうだよ。名無しのばーちゃん」
？「誰が婆よ！！」
高「取りあえず、ザコキャラなんだし、さっさと消えてくれ。お前じゃ俺に勝てねえよ」
そう言って人差し指を横に振り、余裕の素振りを見せつける。
？「舐めた口を。バオ、やっておしまい！！」
バ「キエエエエエエエエエエエ」
主人に命令されたバオは瓦礫を吹き飛ばして高雅に睨みつける。
高「殺気が出てねえな。殺気は・・・こうだ！！」
高雅が最大限の殺気をバオにぶつけた。
すると、バオは固まり、ゆっくりと倒れた。
高「ヘボい肝っ玉だな」
高雅はさらに余裕を見せる為、背伸びをしていた。
敵は完全に意味不明な顔をしていた。
バオに近づき、どうなったか調べると、さらに驚いた。
？「・・・死んでる。殺気だけで！？」
高「悪いな。俺は容赦できねえんだ。諦めて死ぬかどっか消えろ」
？「ふ・・・ふざけんじゃないわよ！！」
高雅の挑発にまんまと乗った敵は無謀に突っ込んで来た。
高雅はその姿を見てため息を零しながら呆れていた。
高「哀れな奴だな。実力が無過ぎる」
そう言って双剣を構え、最大限の速度の力で敵を倒した。

ア（お疲れ、コウガ）
高「呆気ないな。さて・・・」
振り返ると、唖然とした姿で龍子が立っている。
高雅が龍子に近づくだけで、龍子は再起動した。
龍「えと・・・あの・・・ありがとう・・・ございました」
高（普通に喋っていいのか？。まぁ、アリアが声を変換させてくれるだろう）
そんなことを思いつつ、自然な対応をした。
高「どういたしまして。そうだ。一つ願いがる。聞いてくれるか？」
龍「えっ・・はい」
高雅は龍子の後ろ頭先にあるアルテマに指を指しながら言った。
高「あれはもうすぐ倒されるから、皆にもう大丈夫だと伝えてほしい。できるか？」
すると、龍子は頭を後ろに回そうとするが、高雅はすぐにそれを止めた。
高「アホ。お前が見たら恐怖で気絶するぞ」
龍「あ・・」
エ「コウガ君。あまり話していると気付かれるぞ」
高雅は耳だけエクスに傾け、頭の中でそれを肯定した。
高「とにかく、俺はもう行かなきゃならねえから、後は任せるぜ。もう、怯える必要はねえよ」
一方的に喋った感があったが、高雅は龍子に背を向けて、歪んだ空間へ飛び込もうとした。
少しでも早く、自分の時代に戻りたかったからだ。
龍「ま・・待って！！」
すると、後ろから龍子が叫んで来た。
高雅は無視するのもなんだから、と一応止まって振り返った。
龍「その・・・あなたは誰！？」
高（あちゃー、嫌な事を聞かれたな）
高雅は頬を掻き、適当に空を眺めながら何かいい案を考えた。

すると、一つだけバカな事が思いついた。
高（そうだ。Aと思わせてやるか）
そう言って龍子に向き合い、答えてあげた。
高「俺は主人公だ」
そう言って、高雅は歪んだ空間へ飛び込んだ。

時代移動中。
ア「コウガ、よく地声で龍子と喋ったね」
高「・・・・ゑ？」
ア「・・・あれ～、そんな声を出すってことは・・・」
完全にアリアの思った通りであった。
高「おいこら、普通、声を変えるぐらいするだろ」
ア「そんなこと言われても、気が回らなかったし。大体、それはコウガが勝手に思い込んでただけでしょ？」
高「そうだけど・・・普通、気付くんじゃね」
エ「過ぎてしまった事は、もう戻らない。きっぱりと忘れる事だ」
高「はぁ～、そうだな。取りあえず、やっと帰れるのか？」
エ「ああ、もう戻って来れるだろう」
高「よし、じゃあ、帰ったらセバスに喧嘩を売るか」
ア「倒さなきゃね。例え親しみを持った者でも」
高「いい覚悟だな。いきなり、弱音を吐くなよ」
ア「分かってるよ」
エ「僕も君達に着いて行くよ。一応、セバスとは面識があるから」
高「そっか。よし、帰ったら速攻、攻めるか」
遂に、歪みの終着点が見えてき、高雅は着地の準備をした。

そして、歪みから投げ出され、着地して前を見るとそこは・・・
セ「お帰りなさいませ、コウガ様」
セバスチャンの目の前だった。

# 無双と夢想編　その6、全ては仕組まれていた

高「んな!?」
突然、目の前にセバスチャンが現れ、高雅は驚いた。
最も、現れたのは高雅の方だが。
高「な・・・何でセバスが!?」
セ「驚くのも無理はありません。念には念を重ねて、コウガ様が戻って来るときに、ここに来るように仕込んでありましたので」
ア「どう言うこと!?」
アリアが意味を問うが、セバスチャンは笑うだけで答えはしなかった。
マ「あんな～、自分の過去送りの能力から脱出しても邪魔されないよーに、ここに出るようにしたんだ～」
高「何!?」
オ「つまり、あんたは格好の的なのよ」
ア「そんな・・・」
高「意味が分からねえ。帰るぞ」
高雅は空間の力を使おうとした。
高「・・・あれ?」
セ「無駄ですよ。足下をご覧ください」
言われた通り足下を見ると謎の魔法陣みたいのが描かれていた。
そして、丁度その中央に立っていた。
高「何だこれ!?」
マ「絶の陣で～す。すげーだろぉ」
ア「ぜ・・・絶の陣!?。そんなの使える訳ないよ!!」
高「今すぐ説明しろ」
ア「えっと、力を封じ込めてその中に閉じ込める拷問に使われる陣で、もうずっと昔に使える人がいなくなったはずなのに・・・」
オ「そんなんも分からないの?。ダッサ～い」

オリアが嘲笑う。
それを見た高雅は特に突っかかる訳もなく適当に流した。
高「うざいブスだな」
オ「な・・何ですってーー!!!!」
マ「うっひゃー、キレちゃったぞー」
高雅の挑発に乗ったオリアは殺気を放ちながら周りの空間に罅を入れ始めた。
そのまま首だけをセバスチャンの方へ向け、血走った眼でセバスチャンに聞いた。
オ「セバス様!!、こいつを殺させて!!」
セ「落ち着きなさい。殺すのは容易いですことですが、普通に殺してはつまらないでしょう」
高「何が簡単だ?。返り討ちにしてやる」
マ「うわ~、身の程知らずのバカはっけ~ん」
高「んだと!?」
マ「だってそーじゃん。今、お前は何もできない木偶(でく)の棒じゃん。なのに出しゃばるなんて死にたがり君じゃん」
高「はんっ。こんな意味不明な陣など、すぐに出てやる」
そう言って、高雅は普通に陣から出ようとした。
しかし、見えない壁に当たり、出られなかった。
殴ったり蹴ったりしたが、全く持って破壊できなかった。
高「ちっ」
マ「うへ~、あれほど言っておいて、この様とはダサいな~」
セ「取りあえず、もう一人のゲストが来るまで待ちましょう」
ア「もう一人のゲスト?」
高「・・・ッ!?」
突然、後ろから強大な殺気を感じ、反射的に振り向いた。
そこには扉が見えるだけで何もなかったが、目を放すことが出来なかった。
高「・・この殺気は・・・」

エ「・・・・」
すると、間もなくゆっくりと扉が開き、誰かが入って来た。
その者は黒いオーラが溢れ、歩くたびに床に罅を入れていた。
黒い髪の青年の様な姿だ。
そして、その者が掴んでいたのを、高雅達は驚愕して見た。
高・ア「フィーラ（ちゃん）！？」
フィーラが連れられていたのだ。
意識を持っておらず、髪を引っ張られて地面を引きずられていた。
高「テメー！！！、フィーラに何をしやがった！！？？」
感情を抑えられず、睨めつけながら青年に問う。
しかし、青年は見向きをせずにセバスチャンの方へ歩くだけだった。
セ「お疲れ様です、エクス」
高・ア「え・・エクス！？」
高雅の今までの怒りは急に驚きに変わった。
そして、一度だけ光（こっち）のエクスに顔を合わせた。
エ「そう、あれは僕だ。破壊の力の具現化の姿」
高「それって、楽園の使いって訳かよ！？。どうしてだ！？」
突然の高雅の驚きの叫びに、敵達は不思議そうな顔をしていた。
セ「おや、良く分かりましたね。彼は破壊の力の具現化した姿。そして、王（キング）であります」
高「今度はキングかよ・・・」
セ「しかし、既に心臓は取っており、抜け殻同然ですが、私の力で動けるようにはしています。では、そろそろ教えて差し上げても良い頃合いでしょう」
セバスチャンは目の前に空間を歪め、手を入れるとフィーラの目の前に現れ、フィーラを掴むとそのまま引っ張り、自分の手中に収めた。
セ「コウガ様もこの言葉は知っていますでしょう。セイクリッドと言うのを」
高「それって・・あのハゲが喋ってた奴か。それが何だよ」

セ「私とウルザスは旧友でして、彼と私で色々と天界（ここ）について調べ回ったものです」
ア「セバスチャンとウルザスが知り合いだったなんて」
セ「そして、共に調べましたよ。セイクリッドへの行き方を」
そう言って、どこからともなく古びた謎の本を見せびらかした。
セ「しかし、彼には勿体無いものでしたから、利用させてもらいましたが。もちろん、コウガ様も利用の一つでございます」
高「全く持って話の筋が掴めないんだが」
セ「では、分かりやすく説明して差し上げましょう」
すると、セバスチャンはもう一つ古びた謎の本を取りだした。
ア「同じのが二冊？」
セ「これは全くの嘘の古文書です。私の考えた適当な事を書いたものです。これをウルザスに渡し、楽園の心臓集めをさせたのです」
高「旧友を騙すとは、最低な奴だな」
セ「セイクリッドに行く為なら仕様がありません。しかし、彼は私に分からない所に楽園の心臓を隠したのです」
高「ふ～ん」
セ「彼に何度も言おうが場所は教えてもらえず、楽園の心臓を一人占めしたのです」
ア「裏目に出たってわけね」
セ「ですから、コウガ様、あなたを鍛え上げてウルザスから楽園の心臓を取って来て欲しかったのです」
高「俺を鍛える？。それはハゲを倒した後にやったじゃねえか」
セ「あれは別です。私は間接的にあなたを鍛えたのです」
ア「間接的って？」
マ「まだ気付かねーの？」
マックが床に寝ころびながらテレビのスイッチを押しながら口挟んだ。
高「テレビとかあったのかよ・・・」
マ「つーまりー、お前らはずっとセバッチャンの手の中で踊ってい

た訳」
ア「それって・・・」
高「今までの全部、こいつが仕組んだ訳か」
そう言ってセバスチャンに指を指す。
セ「左様でございます」
高「今まで戦って来た奴らも、戦争も、ハゲも全部こいつが絡んでるのか」
セ「そうでｓ「ふざけるなぁ！！！！」」
突然、高雅が怒鳴り、自分の感情を抑えられなくなっていた。
高「お前の勝手で色んな人が迷惑掛かってんだぞ！！！！」
セ「そんな事は私に関係ありません」
高「貴様ーーー！！！」
次第に高雅の感情が黒い闇に纏われ、自分を失い始めていた。
それにいち早く気付いたアリアはすぐに実体化して高雅を抑える。
ア「待って！！。落ち着いて、コウガ！！」
しかし、アリアの声など聞こえている訳もなく、高雅は纏わりつくアリアを吹き飛ばした。
ア「きゃあっ」
アリアは見えない壁に叩きつけられた。
エ「どうしたのだ、コウガ君！？」
高「うがあああああああああああ」
セ「！？」
突然、高雅が暴走を始めた。
高雅は足下に鉄拳を下すと、力を使わずに陣を破壊した。
高「貴様あああああああああああ」
陣から出た高雅は真っ先にセバスチャンの方へ走った。
高「がっ！？」
しかし、真横から来た謎の気弾によって、壁に叩きつけられた。
撃ったのは敵のエクスだった。
高「くそがぁ！！」

吹き飛ばされてなお、高雅はすぐに立ち上がり、またセバスチャンへ駆けだした。
しかし、再びエクスに吹き飛ばされてしまう。
高「邪魔なんだよ!!」
懲りずに何度も立ち向かうが、何度も吹き飛ばされる。
敵わないと分かっても分かりたくないのだ。
オ「ずるい!!、わたくしもやる!!」
マ「何かドラマ見てるよりこっちの方が面白そうだな。セバッチャン、おk?」
セ「いいですよ」
さらに、オリアとマックも加わったが、高雅はとにかくセバスチャンを殴る為に無我夢中で走っていた。
いや、最早セバスチャンなどどうでも良く、ただ自分の腹癒せをしたかっただけかもしれない。
ア「コウガ!!、落ち着いt「アリア様は何もしないでください」あぐっ!?」
いつの間にか移動していたセバスチャンが後ろからアリアの首を締め、動きを封じた。
もちろん、力を使えないように静寂を使っている。
ア「放して!!」
セ「まぁまぁ、愛する人の死を見るのがどれだけのものか」
ア「まさか・・・やめて!!」
しかし、アリアが叫んだのは既に高雅がやられている状態だった。
高「げほっ・・・がはっ・・・」
高雅は倒れ、血を吐きながら苦しんでいた。
オ「ふんっ、セバス様を殴るなんて言語道断よ!!」
そう言って、オリアが高雅の顔を踏みつぶす。
それを見たアリアが無性に腹が立って来た。
ア「コウガの顔を踏まないで!!」
オ「何よ、ブスがあたしに命令?」

マ「ブスＶＳブスだな」
オ「殺す！！」
セ「いいですから、早くコウガ様を殺しなさい」
マ「お～、いえ～す」
ア「えっ！？」
セ「当然です。肝心の楽園の心臓の場所が分からなかった今、あなた達道具は不必要ですから」
すると、マックの片腕が巨大な鋏（はさみ）に変わった。
それを高雅の首に挟んだ。
マ「あばよ、道具。短い間だったが楽しくなかったＺＥ」
ア「やめてえええええええええええええ」
アリアは必死に叫び、奇跡を信じ続けた。

サクッ！！

ア「あぁ・・・」
しかし、奇跡が起こる訳もなく、高雅の首は綺麗に斬れた。

# 無双と夢想編　その7、しぶとい主人公

ア「え・・・あぁ・・・」
セ「終わりましたね」
セバスチャンはアリアを解放し、玉座に着いた。
アリアは脱力してしまい、その場に座り込んだ。
マ「あ～あ、虚しい終わり方だなぁ～」
マックが高雅の頭を蹴り飛ばして、テレビの前に座った。
その頭はアリアの前で止まり、アリアは自然と目が行ってしまった。
ア「嘘・・・ねぇ、嘘だよね、コウガ？。また創造の分身だよね？」
そして、その頭に問いかけてみる。
震えながら、それでも平然にと意識を掛けながら。
オ「どこにそんな余裕があったって言うのよ？。現実を見なさい」
セ「残念ですが、本物のコウガ様の頭でございます」
ア「嘘よ。いつものようにひょっこり現れるはずよ」
セ「諦めが悪いですね」
オ「精一杯の現実逃避でしょう」
アリアは高雅の頭を抱え、ショックで涙も出なかった。
と言うより、現実を受け入れきれてなかった。
セ「取りあえず、このまま三日間放置しましょう。最も、勝手に死ぬと思いますが」
セバスチャンはアリアの足下の空間を歪め、アリアをどこかに落とした。
その時、光のエクスも追いかけるように空間へ入った。
セ「さて、後は勝手に追いかけるように自殺でもするでしょう。後は女王の心臓を取り、セイクリッドへ行きましょうか」
そう言って古文書を取り出し、ページを捲っていく。
セ「・・・おや？」
オ「？、どうしました？」

セ「いえ、私の古文書ではないのです」
オ「なら、もう一つの方では？」
セ「それが見当たりませんのです」
オ「・・・・まさか、あの女！！。捕まってる時に！！」
セ「・・・これはまずいですね」
余裕を見せているセバスチャンが焦り始めた。
最も、焦っても顔色一つ変えてないが。
マ「自殺と一緒に燃やされる。そう言うオチですね」
そこに、縁起でもない事を言うマック。
オ「分かってるなら早く行くわよ！！。セバス様、空間を開いてください」
セ「すみません。どうやら、追いかけられないように破壊や静寂など、様々な力で妨害がされてます」
オ「も～、あの女、次に会ったら殺してやる！！」
マ「会えるか分からないがな」
セ「取りあえず、現世に行き、コウガ様の家に向かうのです」
オリアとマックは返事もせずに、すぐに宮殿を出た。
しかし、エクスだけは動かなかった。
セ「あなたも行くのですよ、エクス」
エ「・・・・・・」
エクスも同様に返事をせず、人形のように無表情で宮殿を出た。
セ「さて、こちらもこちらで心臓を抜きますか」
そして、セバスチャンはフィーラの心臓を抜きに掛かった。

アリアは茫然とソファーに座っていた。
誰もいない静寂に包まれたリビングで一人寂しく。
もう、目には光が灯って無い。
虚空を見て、まるで死んでいるかのような状態だった。
ア「・・・いいや・・もう・・・・」
すると、アリアは立ち上がり、キッチンへ向かう。
そこにあった包丁を手にして反射して映った自分を見る。
見れば見るほど空(むな)しい瞳が自分を睨みつけているだけだ。
ア「私・・・生きる事・・・やめよう・・・」
そう言って自分の首に包丁の先を突き付ける。
少しだけ首に刺さり、血が包丁を辿って滴り落ちていった。
ア「フィーラちゃんはもう殺されるし、レオ君もいない。大好きだったセバスチャンはもういないし・・・」
そして、最後の言葉を言おうとした瞬間、頬に温度差を感じた。
紛れもない、涙だ。
だが、今のアリアはそんなことは分からない。
ただ・・・

ア「なにより・・・コウガがいないよ・・・ぐす・・」

ただ、好きだった人の心残りだけがアリアを支配していた。
ア「コウガ・・・私も・・・逝くね・・」
そして、包丁に力を込め、首に刺していく。
エ「やめろ、アリア君!!」
ア「・・・エクス・・・」
エクスに言われ、アリアは目だけをエクスに向けた。
ア「ごめんね・・・私、もう無理・・・辛いよ・・・」
泣きながら言い、エクスは何も言う事が出来なくなってしまった。
ア「エクス・・・じゃあね・・・」

エ「あ・・・あr「アリア！！！！」」
ア「ッ！？」
突然聞こえた怒鳴り声。
アリアは驚き、ついつい手を止めた。
しかし、アリアが驚いたのは怒鳴り声ではなく、その声色だった。
ア「・・・・こ・・・・が・・・？」
アリアが見た先には、エクスの他にもう一つ光が漂っていた。
そして、その光には覚えのある感覚があった。
高「おいおい、なに勝手に人の調理道具で死のうとしてんだゴラ！！」
ア「え・・・あ・・これは・・・」
高「包丁は料理に使うもので自殺に使うものじゃねえ！！。そんなんも分からねえのか！？」
ア「えと・・・その・・・・」
高「謝罪しろ」
ア「・・・・ごめんなさい・・・」
アリアは圧倒され、頭を下げた。
しかし、すぐに頭を上げ、目を丸くして驚いた。
ア「・・・って、コウガ！？」
高「俺以外に誰の声だ？」
ア「コウガ・・・ほんとにコウガだ・・・」
高「んまぁ、体は無いけど、エクスに魂だけ抜かせてもらったんだ。体は再生すれば何とかなるみたいだから。それにしても、魂を実体化するのって難しいなぁ」
そう笑いながらサラッと言う。
その態度にアリアは自然と怒りに芽生え始めていた。
ア「・・バカ・・・」
高「ゑ？」
ア「バカ！！。どれだけ私が苦しかったと思ってるの！？」
高「ちょ！？、悪かったって。あの状況で暴走してしまったのは謝

るから」
ア「いいや、それだけじゃ許さない！！。そんなもので許される訳がないよ！！」
高「マジで悪かったって。本当に反省してるからさ、許してくれよ？」
ア「ダーメ！！」
高「え～・・・」
いつの間にか立場逆転しており、その光景を呆れながらエクスは眺めていた。
しかし、呆れながらも、どこか驚いていたりしていた。
エ（コウガ君は凄いな。あの死人の様なアリア君をすぐに戻すとは）
高「悪かったって。今度、一つだけ言うこと聞いてやるから」
ア「それって本当？」
高「俺の出来る範囲なら何でも」
ア「・・・じゃあ、許す」
高「ふぅ」
エ「終わったようだな」
やっと落ち着いた二人のやり取りの間に入り、本題に切り替えるエクス。
エ「まずは、アリア君。もう一人紹介しよう」
ア「もう一人？」
すると、壁をすり抜けてまた光が現れた。
今度は少しピンク色に光を放っていた。
フ「アリア様、ボクです」
ア「その声・・・フィーラちゃん？」
フ「はいです。さっきのやり取りは聞いてましたです」
ア「え・・・あ・あ・・」
高「・・・・・」
アリアはしどろもどろに動き、高雅は黙り込んでいた。
エ「ゴホン。それで、これからどうするのだい？」

高「まぁ、俺の体を取りに行って、あいつの古文書でも奪うか」
ア「あ〝っ！！」
突然、アリアが何かを思い出したかの様に庭に飛び出した。
高雅達もその後を追うと、黒焦げに焦げた跡があった。
ア「あちゃ～、もう燃えちゃった」
高「何、焼いたんだ？」
ア「私ね、セバスチャンに捕まっている時に古文書を掏ったの。それを焼いちゃって・・・」
高「中は見たのか？」
ア「・・・・全然」
高「おい」
高雅が呆れてため息を零す。
再生しようにも、既に灰は風で飛んで行き、再生不可能となっていた。
エ「しかし、意外と良いかもしれない。古文書が無ければセイクリッドの行き方が分からないはずだ」
エクスがアリアをフォローするが、高雅が一瞬で崩した。
高「内容が頭の中に入っていたら無意味だろ」
エ「それもそうだ」
ア「ごめんなさい」
アリアはもう謝るしかないと思い、頭を下げた。
高「過ぎた事はしょうがねえよ。これからを考えようぜ」
しかし、高雅はさっきとは全く別で怒らなかった。
高「取りあえず、俺の体を取りに行かねえとな。真の契約が出来なきゃ、きっとセバスチャンには勝てない」
エ「確かに、難しいだろう。しかし、体を取りに行くには、また向こうに行かなくては」
ア「けど・・・私、ここに来るときに静寂や破壊やらで来れないようにしてるから」
高「ふ～ん」

アリアが申し訳なさそうに言ったが、特に問題があるような言い方ではなかった。
そんな態度にアリアは不思議そうな顔をしていた。
高「で？」
ア「・・・え」
高「他には無いのか？」
ア「え・・あ・・・うん」
高「じゃあ、問題無いな」
エ「何か秘策でもあるのか？」
高「秘策までいかないが方法はある。その為に、まずはあいつを探そう」
ア「あいつって？」
高「お前も良く知ってる奴だ。とにかく、探せば何とかな・・・・」
高雅の言葉が中途半端に終わり、無言になる。
アリアがどうしたか聞こうとした瞬間、高雅の口が開いた。
高「避けろ！！」
ア「え！？」
それは、さっきの話とは全く別の言葉だった。
お陰で反応が遅れ、アリアは空からの奇襲を受けてしまった。
ア「あぐっ」
高「アリア！？」
高雅が心配そうに近づき、アリアの傷を見る。
ギリギリで反応出来たのか、傷は浅かった。
オ「ちょっと、死んでないじゃない！！」
マ「いやぁ～、それ程でも～」
オ「褒めてる訳ないでしょ！！！！」
空で漫才をしているのは、セバスチャンに従うあの二人だった。
そのわきにはエクスの姿もあった。
オ「ところであんた達、セバス様の古文書はどこにあるの？」
高「んなもん、焼いてアリアが喰った」

ア「ちょ・・喰ってはないよ！！」
オ「ふ～ん・・・・ってええ！？」
マ「反応おせぇ～」
オ「うるさい！！。あんたは黙って！！」
オリアはマックの頭を一発殴り、黙らせた。
すると、マックはエクスに縋(すが)り寄って来た。
マ「お～いおいおい、エクスぅ～、オリアが虐めるよ～」
エ「・・・・・・・」
嘘泣きをしながらエクスに抱きつくが、全くの無反応だった。
むしろ、反応したのはオリアの方だった。
オ「あんた・・・うざい！！」
何故か自然と矛先がマックの方に向いていた。
そして、敵同士のドンパチが始まった。
その光景を哀れな人を見る目で高雅は見ていた。
最も、目なんて付いてないが。
高「あいつら、漫才しに来ただけか？」
フ「それより、どうして現世(ここ)にいるです？。アリア様が来れないようにしたって・・・」
高「どうせ、アリアの力がいき通って無い所から来たんだろ。わざわざご苦労な事だ」
エ「それよりも、これはチャンスだ。今の内に逃げよう」
高「だな。アリア、行けるか？」
ア「うん。擦(かす)っただけだから」
アリアは速度の力を溜め、この場から離れる準備をした。
フ「でも、ボクらはどうするです？。アリア様について行けるですか？」
高「それがな、意外とついて行けるんだよ、これが」
エ「コウガ君は知らないと思うが、意外ときついんだ。まぁ、やってみれば分かる」
ア「それより、どこに逃げよっか？」

高「そんなもん、後でいい。とにかく逃げろ」
ア「分かった。ちゃんと、ついて来てよ」
そう言って、アリアは地面を蹴り、この場から一瞬でいなくなった。
そんなことに気付かず、オリアとマックは殺し合いをしていた。
気付いたのは、数十分後であった。

# 無双と夢想編　その8、信頼

全速力で逃げて数分、アリア達は何故か学校に居た。
既に下校時間は過ぎ、先生も少ない時間帯の為、簡単に侵入できた。
適当にアリアが逃げた所、学校についたらしい。
取りあえず、適当に中に入り、廊下でアリアは一息ついた。
ア「取りあえず、安心かな？」
エ「彼らはかなり夢中になっていたみたいだし、後をついて来れないだろう」
ア「そうだね・・・？、コウガ？」
ふと、高雅に目を向けると、ふらふらとその場に滞空できていなかった。
さらに、同じような状態にフィーラもなっていた。
ア「どうしたの？」
高「いや・・・ぜぇ・・・早く動くのがこんなに・・疲れるとは・・・」
フ「はぁ・・はぁ・・・ボク・・・もう動けないです・・・ひぃ・・」
フィーラはポトリと重力に従って落下した。
エ「分かったかい。速く動くことは辛いことが」
高「てめぇ・・・何で・・・ぜぇ・・疲れて・・・ねえんだ・・・よ・・・？」
エ「僕は慣れてるからね。一日中あの速さで動いても息切れしないさ」
高「マジかよ・・・」
高雅は力尽きて行き、次第に高度が下がっていた。
アリアは心配そうに両手で支えてあげた。
ア「大丈夫？」
高「もう無理、限界だ。意識が飛びそうだ」

高雅の光が段々弱くなりつつあった。
それを見たエクスが突然、焦りだした。
エ「まずい。負担が大き過ぎる。このままでは、消えてしまうぞ」
ア「そんなっ!?。やだよ!!。もう、コウガが消えるなんてやだよ!!」
エ「落ち着くのだ、アリア君。こうなったらアリア君と一体化するしかない」
ア「そ・・それでコウガが助かるの!?」
エ「ああ。コウガ君の魂を君の体の中で休ませてやるのだ。ゆっくりと体の押し込むだけでいい」
ア「分かった。やってみる」
アリアは今にも消えそうな高雅の魂を自分の胸にゆっくりと押し込んだ。
すると、魂は体をすり抜け、次第にアリアの体の中へ入っていった。
間もなく高雅の魂はアリアの体の中へ収まった。
ア「ふぅ・・・これで、いいの?」
エ「ああ。きっと、大丈夫のはずだ。話しかけてみれば分かるよ。頭の中で喋ればコウガ君に聞こえるから」
ア「うん」
アリアは高雅の無事を確認する為、頭の中で高雅を呼び掛けた。
ア(コウガ・・・コウガ!!・・・)
高「ん、生きてますよ。お陰さまで」
少し元気がないが、いつもの声を聞き、一気に安堵に包まれる。
その所為で少し涙を零しかけたが、それは堪えた。
ア(よかった・・・)
高「心配かけて悪い。それより、何でフィーラは平気なんだ?」
フィーラも高雅と同じようにかなり疲労しているにも関わらず、床に転がっているだけで光が消えそうなわけではなかった。
それを聞いたら、アリアも不思議に感じ、疑問に思った。
エ「彼女はボクと同じ楽園の者だ。そう簡単に消えはしない」

高「ふ～ん。てか、俺の声が聞こえてるのか？」
エ「魂同士の会話ぐらい、僕にとっては簡単だ」
高「そうかい」
ア「それより、これからの事を考えないと」
そう言いながらフィーラの魂を両手に抱え込み、エクスに顔を向ける。
ア「・・・あっ」
高「おっ」
エ「・・・？」
すると、エクスの後ろに一匹の獣が目に映った。
それは、良く知っている天獣の姿だ。
レ「やはり、あの力はアリア殿の力だったか」
高・ア「レオ（君）」
紛れもないレオだった。
レオはアリアを確認すると近づき、いつもの一言を放った。
レ「君付けをするな！！。それより、コウガ殿が見当たらないが」
ア「コウガはちょっといないの。でも、魂は私の体の中にあるから」
レ「？、意味が分からないが。それに、その抱えている光は何だ？」
ア「えっと・・・これはフィーラちゃんだけど」
レ「何だと！？。どういうことだ！？」
ア「取りあえず、一から話すから聞いて。まず、そこに浮いている光がエクスで――」
そう言って説明しようとした瞬間、レオの顔色が一気に変わった。
レ「・・・アリア殿・・・今、何と言ったか？」
ア「え？・・・ここに浮いているのがエクｓ「その名を口にするな！！」！？」
レ「アリア殿、冗談にも程があるぞ！！。その名は我ら天獣を破滅に導いた者の名前だぞ！！！」
ア「嘘ッ！？」
エ「・・・・・」

アリアは予想もしない言葉に驚き、口を開けたまま動けなかった。
エクスもレオが現れてからずっと黙り込んでいた。
高「おい、エクス。今のは本当か？」
エ「僕じゃない！！。本当だ！！。信じてくれ！！」
高「信用は出来ねえが、疑いも出来ねえよ」
エ「くっ・・・」
高雅達の話はレオに聞こえる訳が無く、アリアは自然と高雅達に耳を傾けていた。
その所為であってか、レオに不審な目で見られた。
レ「どうした、アリア殿？」
ア「え・・あっ、レオ君には聞こえないのか」
レ「どういう事だ？。それと、君付ｋ「こう言う事だ、天獣王」ッ！？」
突然聞こえた別の声にレオは瞬時に反応し、身構えた。
その様子を見たアリアがレオを鎮める。
ア「大丈夫。味方だから」
レ「味方だと？。冗談も程々にしてくれぬか、アリア殿」
しかし、レオは全く警戒を解いていなかった。
突然現れた光を一点集中で睨みつけていた。
レ「その声、忘れもしない。虚無の力の具現、楽園の王、エクス。そして、我の仲間を奪った男」
エ「話を聞いてくれないか？。僕は本当にやっていないんだ」
レ「我はこの目で、しかと見たのだ。言い逃れは出来んぞ」
ア「待って、レオ君。故郷を奪ったのはアルテマのはずじゃ！？」
レ「確かにそうだ。しかし、奴もまた、ともに破壊に加担したものだ」
ア「どういうこと？」
レ「奴は仲間を生贄にしてアルテマを召還したのだ。そして、我が故郷を崩壊させた。許すことはできぬ」
ア「エクスは二重人格者だから、そっちの方も聞いてみないと」

レ「二重人格者だと？」
ア「そうだよ。夜になると現れるもう一人のエクスだよ。もうすぐ日が暮れるから、聞いてみようよ」
レ「・・・アリア殿がそこまで言うのならば」
レオは肩の力を抜き、警戒を解いた。
そして、窓の外を見て空を見る。
もう空にはいくつか星が輝いており、太陽は既に9割が山に隠れており、日が沈むのも時間の問題だった。
それでも、その僅かな時間がレオにはとても長く感じた。
一分も経たない内に太陽は完全に沈み、夜が訪れた。
レオが窓の外からエクスに目を向けると、すぐさまさっきの続きを再開した。
レ「もう一度聞こう。貴様は本当に天獣を滅ぼしていないのか？」
エ「ああ、天獣？。そういや、ずっと前に滅んだな」
レ「我の質問に答えろ！！」
急変した態度に関わらず、レオは驚きもしなかった。
むしろ、その態度に対して怒りを宿していた。
エ「知らねーよ。大体、いちいち天獣滅ぼしたって、何のメリットもねえのにやってられるかよ」
レ「貴様ッ！！」
レオは耐えきれずエクスに飛び掛かる。
だが、エクスは簡単に避け、アリアの後ろに隠れた。
レ「今すぐ、貴様を噛み殺す！！」
ア「待って、レオ君。このエクスはこんな性格だけど、本当はいい人だから嘘なんて吐かないはずだよ」
レ「いい人だと？。我が故郷を滅ぼしておいて、いい人の訳がない！！」
ア「だから待ってよ！！。もっと話し合ってよ！！。エクスもちゃんとレオ君と話して」
エ「へいへい、分かった分かった」

レ「くっ・・・アリア殿のお陰で命拾いしたな」
そんな言葉を吐き捨て、レオとエクスが再び向かい合った。
ア「ほらほら、そんなに怖い顔しないで」
アリアがレオの頭を撫でるも、レオは全く表情を変えなかった。
エ「・・・知らねえよ」
レ「何？」
先に口を開けたのはエクスの方だった。
エ「だから、知らねえよ。天獣が滅んだのは俺じゃねえよ」
レ「惚(とぼ)けるな！！。我は見たんだぞ！！。貴様が我が故郷を虚無の力で滅ぼしたのを！！」
エ「あのな、俺はそんなメリットの無い事をしないっての」
レ「言い逃れはさせんぞ。我の目は力を見ることができる。あの時、貴様の手には莫大(ばくだい)の虚無の力が込められていた。それが何よりの証拠だ！！」
エ「でもな～、そんな一族を滅ぼしたことなんて一度も無いって」
レ「口からは何でも言える。だが、我はしかと見たのだ」
お互いに譲らない話し合い。
これでは永遠に続いてしいそうだった。
ア「ねえ、レオ君」
そんな時、アリアが割り込んだ。
レ「何だ、アリア殿。それと、さっきから君ｄ「それはいいから聞いて」よくないっ！！」
ア「いいから聞いて！！。私は・・・いや、私とコウガはエクスが嘘を吐いてるなんて思ってないよ」
レ「？、何故コウガ殿が出てきたのだ？」
ア「最初に言ったでしょ。コウガの魂は私の中にいるって。だから、二人で色々話していたの」
レ「・・・その結果、我を裏切るのか」
ア「ううん、そうじゃないよ。二人とも信じてるんだよ」
レ「どういう事だ？」

ア「レオ君が私達の仲間であるのと同様にエクスだってもう仲間なんだよ。だから、二人を疑うなんて出来ないよ」
レ「だが、奴は全く信憑性のない話しかしてないではないか」
ア「信憑性がどうとかって問題じゃないよ。問題は、仲間を信じるか信じないか。私とコウガは二人を信じてる。だから、どっちかが嘘を吐いてるなんて思ってない」
レ「しかｓ「じゃあ、レオ君は私とコウガを信じないの？」それは・・・」
ア「それに、この言葉は殆どコウガに言われた事だよ。コウガの言葉はどんなに信憑性が無くったって信じてたでしょ？」
レ「・・・確かに」
レオはふと思い返してみる。
1ヶ月前に未来の高雅から言われたことも全く信憑性が無かった。
それなのに、その言葉を信じ、レオはどこかに行っていた。
そのお陰で、セバスチャンの手下と戦わずに済み、無事にアリア達と合流できたのだ。
ア「だから、ね？」
レ「・・・分かった。信じよう」
ア「ありがとう」
レ「だが、我は完全に諦めた訳ではないぞ。決定的な証拠が見つかれば、すぐに殺す」
ア「うん、その時は止めないよ。最も、そんなことが起きるなんて思わないけど」
アリアはにっこりと笑い、レオの頭を撫でてやった。
エ「・・・全く、お人よしにも限度があるぜ」
レ「貴様ッ！！」
ア「ストップ。戦う暇があるなら今後の事を考えようよ」
エ「それは聞いてたぜ。あいつの体を取りに行くんだろ」
レ「あいつ？」
レオは話を知らないので全く理解できてないが、アリアは十分理解

していた。
ア「うん、コウガの体を取りに行かないと」
レ「コウガ殿の体?。なあ、アリア殿。意味が分からないのだが」
ア「う～ん、後で話すね」
レ「分かった」
レオは頷き、二人の会話に耳を傾けた。
最も、理解できるとは自分でも思っていなかったが。
エ「あいつの体は宮殿の中庭の茂みの中にある。多分、セバスが窓から捨てたんだろうな」
ア「え!?、分かるの?」
エ「そういうのは探知可能だからな、俺。最も、昼間の俺では無理だがな」
ア「そっか。今のエクスは力が凄いんだったね」
エ「まあな。んで、どうするんだ?」
ア「空間の力で行きたいけど、真の契約が出来ないと使えないし。何より、私の力でこの辺りからは行けないし」
エ「なぁ、あの漫才コンビ共が来た道からいけばいいんじゃねえか?」
ア「漫才?・・・ああ、マックとあの女の事ね。成程ね、確かにその方法があるね。でも、場所が・・・」
エ「そんぐらい、分かる分かる。ほら、ここから西に一万歩、速度の力で4秒弱の所だ」
ア「ほんと凄いね、その探知能力」
エ「まあな」
二人の会話が終わったところで、アリアはレオに向き合った。
レオは全く持って分からない顔をしていた。
レ「アリア殿、先ほどの話を詳しく教えてくれぬか?」
ア「はいはい。でも、それは移動しながらね」
レ「そうか。速度の力で行くのか?」
ア「いや、そんなに遠くないから、レオ君に乗っていくよ。その時

に話すから」
レ「分かった。というかいい加減にくｎ「もう、しつこいよ！！」」
アリアはレオの言葉を無理やり終わらせ、レオの背中に乗った。
そして、一行は天竺というなの天国へ繋がる場所を目指して西へ進んだ。
高「どこぞの西遊記だ、おい」

エクスに導かれ、空間が歪んでいる所に辿り着いた。
アリアは移動の最中にレオに今までの事情を教えたが、納得しきれてなかった。
どう納得させるか高雅に相談したところ、
高「別に言ったのは言ったんだし、いいんじゃね」
と、面倒くさそうに答えた。
結局、レオには説明はしたが納得はさせていない状況のまま、目的地に着いたのであった。
エ「ここだな。けっ、開けっぱなしで来るとは不用心な奴らだな」
高「いや。誘い込む為の罠って可能性もありうるじゃねえか？」
ア「罠かぁ。でも、私やレオ君が来たとしても、セバスチャンなら簡単に倒せそうだけど」
レ「いや、念には念を掛けているかもしれぬぞ。油断はできない」
エ「だがよ、行かなきゃ始まらねえだろぉが」
ア「そうだね。罠かもしれないけど行かなきゃね」
ジッとしても何も始まらない為、最後に周りを確認して飛び出した。
その矢先だった。
ア「ッ！？」
突然、殺気を感じ取り、避難した。
感は当たっており、元いた場所に巨大なレーザーが通り過ぎた。
マ「あっ、外れた」
オ「何してるのよ、下手くそ！！」
マ「っせいな。じゃあ、お前がやれよ」
オ「私はあんなガサツな技など持っていませんわ」
マ「んだぁとぉ？」
レーザーが飛んできた方向を辿ると、マックとオリアがまた漫才をしていた。

ア「飽きないね」
レ「奴らは一体？」
ア「そっか。レオ君、初めてだもんね」
レ「君付けをするな！！」
ア「も～いいじゃない」
こちらも負けずと漫才をしていた。
エ「落ち着け、アホ共」
ア・レ「アホって何よ（何だ）！？」
エクスの一言によってさらにオーバーヒートしてしまい、騒動は激しさを増した。
完全に隙だらけだが、相手も同じようにヒートアップしていき、双方は完全に敵の事を無視していた。
高「おい、いい加減に落ち着け。こんなことしている場合か？」
ア「あっ、そうだった」
やっと落ち着いたアリアはレオに制止の言葉を掛け、騒動を終わらせた。
レオも高雅の言葉と聞き、一瞬で言う事を聞いた。
レ「では、我があいつらを相手しよう。アリア殿達は先に行き、コウガ殿の体を見つけて来るのだ」
ア「でも、あいつらは結構強いよ。大丈夫？」
レ「心配いらん」
ア「でも・・・」
エ「ならば、俺が残ってやるよ。こいつ一匹じゃ不安だ」
レ「何だと！？」
ア「はいはい、ストップストップ。じゃあ、任せるから。すぐに見つけて来るよ」
レ「ああ」
エ「感じた所、どっかの草むらに首と一緒に落ちてるぜ。きっと、窓から捨てたんだろうな」
ア「そっか、ありがとう。じゃあね」

アリアは軽く手を上げて空間へ向かった。
それに気付いた漫才師の二人はすぐさま次の攻撃に移った。
しかし、レオがすぐさま立ちふさがる。
オ「何よ、ライオン一匹で私達に盾突くつもりの？」
マ「ずっと逃げてりゃ良かったのにな」
レ「ふん、随分と余裕のようだな」
エ「いいんじゃねえか。余裕ぶっかましている内に倒せば楽じゃねえか」
レ「そうだな」
そう言って、レオは人間の姿になり、マック達に先制攻撃を仕掛けた。
マックとオリアはそれぞれ別の方へ避け、反撃に移った。
さっきまでのバカとは全く違い完全に目の色を変え、戦闘態勢に入っていた。
マ「自分らを倒そうとは、死にたいようだな」
オ「まぁ、命が惜しくないって意味よね」
レ「・・・何だ、さっきまでとは感じが違う！？」
マ「当たり前だろ。自分らは今までのカス使いとはレベルが違うにきまってるだろぉ」
オ「まぁ、ずっと弱い敵しか倒していないから調子づいてもおかしくないわよ」
マ「だなだなだな。じゃあ、とっとと殺してやるか」
すると、レオの両サイドから今まで感じた事のない殺気に襲われ、体が震えだした。
レ（くっ、アリア殿が言っていた通り、ただものではないな）
マ「あっ、震えてますか？震えてるんですか？震えてるんですよねぇ？ですよねぇ？」
いやらしく同じ質問を繰り返し、完全に虚仮（こけ）にしていた。
しかし、それでも殺気は強大で、さらに大きくなりつつあった。
そんな二つの殺気に挟まれ、レオの体は次第に硬着して来ていた。

エ「おい、ビビり君」
レ「!?」
エ「偉そうに言っておきながらビビッて負けました、なんてかっこ悪過ぎて顔向けできねえぞ」
レ「わ・・・分かっておる!!」
無理やりに自分の体を言うこと聞かせ、なんとか震えを止まらせた。
だが、まだ怯えているのは変わりはない。
エ「まぁ、片方は俺が見ていてやるから、もう片方は自分でどうにかしろ」
レ「分かった」
レオはマックと向き合い、エクスはオリアの周りを漂い始めた。
マ「へぇ〜、殺気にもう慣れたか。なら、今度は恐怖にしてやるよ」
マックは自分の両手を巨大な鋏に変形させ、構える。
その様子をレオは冷静に見切った。
レ「変換の力か」
マ「ご明察。最も、お前の目なら見りゃ分かるか」
レ「力を瞬時に判断すれば、回避もまた簡単になるものだ」
マ「あっそ。じゃあ、力以外で倒せばいいだけじゃねえかぁ」
マックは意味ありの笑みを浮かべると、姿が薄らいだ。
レ「ッ!?」
マ「もらい!!」
気付いた時には真後ろに立っており、レオは振り返りつつ回避した。
レ(バカな!?。速度の力などは見えなかったぞ。どういうことだ!?)
マ「悩んでるねぇ。それも当然。なぜなら、自分は貴様より遥かに強いからだぁあああ!!」
マックは余裕をかまして、天高く鋏を上げてポーズをとる。
それでも、レオは攻撃に出ず、ずっと様子見していた。
レ(まずは、奴の謎でも明かすのが先決だな)
レオは攻撃に出るのをやめて様子見に専念しだした。

それほど、敵は謎が多過ぎるからだ。
一方、エクスの方はと言うと・・・
エ「へいへい、ばぁちゃん。俺に攻撃を当ててみろよ」
オ「な・・何ですってぇえええええええええええ!!!」
オリアを挑発し、レオ達の事を完全に視界から消していた。
エ「何度でもいってやるぜ、婆。おば、ばぁちゃん、老婆、老け顔、ゾンビ」
オ「むっきーーーーー!!!。さっきの奴と言い、私はピチピチの二十歳よ!!!!!」
エ「完璧に老いぼれじゃねえか。もう、死んだ方がいいんじゃねえか」
オ「殺す!!!!!!!!!」
オリアは完璧にエクスの術中にはまっていった。

場所が変わって、学校のグラウンド。
そこには、ある二人が争っていた。
A「でりゃあああああああああああ」
エ「・・・・・」
何故かAが契約の力を発動して長い日本刀を振り回し、それをエクスが無言で弾いていた。
A「くそっ、何だこいつは!?」
タ「落ち着くのだ、主よ。隙は必ず訪れるはず」

A「ああ。主人公が敵を秒殺したら面白くないもんな。だが、最後に勝つのはこの俺だぁあああああ」
そう言って、何度もエクスに立ち向かう。
ちなみに、どうしてこんなことになったかと言うと数分前に戻る。

Aは親に頼まれ、近くのコンビニに買い物に出かけていた。
A「ったく、なんたって俺が行かなきゃならねえんだよ」
タ「主よ、親族は大切にするべきだ」
誰もいない夜道でタイトと話しながらコンビニに行く途中、ふと空を見上げ、星を眺めていた。
A「はぁ～、高雅を倒す日はいつ来るのだろうか」
タ「ならば、もっともっと修行をせねばならぬ」
A「これでも、毎日毎日お前の苦しい修行には欠かさず付きあっているぜ。なのに勝てないとは・・・」
タ「ならば、さらに上の修行をするのだ」
A「ったく・・・あいつは人間じゃねえ。普通にあり得ねえ才能・・・いや、異能をもってやがる。だがな、高雅!!!」
Aは適当に星に指を差し、大声で宣言をした。
A「俺が必ず、お前を倒してやるからなあああああああああああああああ」
他「うっせぇぞ!!。何時だと思ってやがる!!!」
近くの家からごろつきの悪い人が出て来て、Aに物を投げ始めた。
A「うおっ!!、すいませーーーーーーーん」
Aはとにかく走り、どこかに逃げて行った。

がむしゃらに走り続け、気が付けば学校の門前にいた。
A「はぁ・・・はぁ・・・あぁぁぁ、何でこんなとこに来たんだ、俺？」
タ「適当に走るからであろう」
A「ですよねー」
Aは頭に手を当てて苦笑していた。
タ「・・・ん？。主よ、学校に不審な奴がいるぞ」
A「だぁにぃ！？」
タ「・・・・・・・」
タイトは何も突っ込まない為、Aは少し虚しさを感じた。
A「・・・あー、うん、不審者ね。それはいけないね。たしかめなきゃね、うん」
タ「主よ、しっかりしてくれ」
A「はい」
Aは校舎内に入り、不審な人影を追い始めた。
影だけ見ると、それは三人の影である事が分かった。
不審者達は廊下で立ち止まり、話し始めた。
Aもそれを盗み聞きした。
？「あれぇ、この辺りにいたはずなのになぁ」
？「いないじゃないの、この役立たず！！」
？「しゃーねーだろ。お前と漫才していたんだから」
？「漫才じゃないわよ！！。あんたと漫才なんてまっぴらゴメンよ！！」
？「まぁまぁ、そう堅いこと言うなってぇ」
A「あいつら、誰なんだ？」
ふと夢中で聞いていた為、自分の殺気を消し忘れていた。
マ「ん～、そこにいる奴、誰だ？」
A「やべ、ばれた！？」
Aはすぐに逃げようとしたが、目の前に別の人が立っていた。
？「逃がさないわよ」

A「うわぁ、婆だ。気持ち悪ぃ」
？「何ですってぇえええええええええ！！！！」
※もう、この人物達が誰だか分かっていると思いますので、？は止めます。
オ「あなた、死にたいようね」
A「うるせぇ！！。俺はもっと、ちっちゃい子がいいんだ。貴様は既におばはんだ！！」
オ「絶対殺す！！！！」
Aは恐いもの知らずか、オリアは殺気をフルに出しているのに、Aは微動だに動揺しない。
むしろ、挑発して完全に自分のペースに持ち込んでいるが、本人はそんなことを考えていない為、宝の持ち腐れとなってしまった。
マ「・・・お、分かった。あいつら、自分らが来た道を通って天国（あっち）に行く気だな」
オリアがやり取りしている最中、マックは何故かアリア達の考えを見抜いた。
それをオリアに伝えようとするが、オリアは暴走してAを殺そうとしていた。
A「ひえええええええええええ」
オ「大人しく死になさい！！！」
マ「なぁにやってんだ、あいつ？」
マックはオリアとAの追いかけっこを見て、哀れさを感じた。
そして、一瞬で自分の方へ気を向ける為、地雷発言をした。
マ「お～い、そんなに怒ると老けｒ「やっぱ、あんたを殺す！！」
うおおおっ、一瞬で矛先が自分に！？」
オリアは急旋回をし、マックの方へ全速力で近づき始めた。
マ「んじゃ、このまま自分とオリアはあいつらを追う。お前はあいつを殺してくれ。あまり騒ぐなよ」
エ「・・・・・・・」
マックは隣にいるエクスに声をかけ、すぐにアリア達がいる方へ移

動し始めた。
オ「逃がさないわよ！！！」
オリアも用途は違うが、アリア達がいる方へ向かった。
いきなりどこかに行った二人を見て、Aは唖然としていた。
A「何なんだ？」
唖然とするAに対し、エクスが動き始めた。
どこからともなく剣が現れ、エクスの手に納まった。
A「おっ、やる気みたいだな。なら、主人公の錆(さび)となるがよい」
Aは分かっているのかいないのか、契約の力を発動し、戦闘態勢に入った。

そして、現在に戻る。

A「ぬぅううううりぃぃいやぁぁあああああ」
バカみたいに叫んでいるが、剣筋は断然に成長していた。
力任せに振っているように見えるが、実は加減をしていて攻撃後の隙は全くと言っていいほど無くなっていた。
エ「・・・・・・」
だが、エクスは表情を変えず、簡単に弾き返す。
その行動に、Aは少し気味悪さを感じていた。
Aは最後に強いのを打ってから距離を開けた。
A「こいつ・・・強い！」
タ「動きに全く無駄が無い。これでは、こちらが先に消耗してしまう」
A「だったら、本気で行くぜ」

タ「承知！！」
Ａは目を瞑り、深呼吸を数回した。
そして、剣を高らかに上げ、叫んだ。
Ａ「真の契約、発動！！！」
その瞬間、Ａの周りに突風が起こり、砂煙がＡを包み込んだ。
エクスはそれをただジッと見ていた。

# 無双と夢想編　その１０、それぞれの行方

砂煙が止んだ時、Ａの手には刀身が赤色に輝く日本刀があった。
そして、Ａの姿は物凄く変わっていた。
まず、髪はどっかのサ○ヤ人のように刺々しくなっており、服装は袴から普段着に変わっていた。
Ａ「ふっふっふ、これが俺の力だ。この大いなる力の前にどう立ち向かうのか、坊や？」
エ「・・・・・・・」
余裕を見せるＡの姿にノーリアクションのエクス。
しかし、Ａにとって、それは自惚れにさせる一つにすぎなかった。
Ａ「そうか。力の差を感じて声も出ないか。当然だ。俺は主人公だからな」
タ「喋るのもそこまでにしておくのだ、主殿。この姿は長くは保たんぞ」
Ａ「だが、３０分は持つ。そのぐらいあれば、あいつを倒すぐらい出来る」
タ「油断大敵だ、主殿。敵はまだ力を見せては無い。最初から全力で一気にケリを着けるのだ」
Ａ「おおとも！！」
そう言うと、Ａは前屈みになり、音速なみの速さで一瞬にしてエクスの前に現れ、剣を振るう。
エクスは同じように弾き返そうと剣を振るう。
しかし、剣は弾けず、触れた瞬間エクスの剣がドロドロに溶けだした。
エ「・・・・？」
Ａ「そのまま貫通だぁあああああ」
エクスの剣は真っ二つに溶け、Ａはそのまま剣を振ったが、エクスは紙一重で後ろに避けた。

しかし、エクスは完全に避けきれず、頬に火傷を負っていた。
エクスは無言で頬に手を当て、火傷を確認した。
A「ふっ、炎属性こそ主人公の証し。どうだ、参ったか？」
エクスの剣を溶かし、完全に勝ったと思い込むA。
しかし、エクスは全く表情を変えていない。
タ「気をつけるのだ、主よ。まだ、敵は奥の手がありそうだ」
A「その前に倒すんだろ。さぁ、いっくぜぇえええええ」
Aが雄叫びを上げながら再び踏み込み始めた。
真っ赤に染まった日本刀を自分の体の一部のように振り回す姿は一流の剣豪と同じかそれ以上だった。
それ程、Aは知らぬ間に強くなっているのだ。
A「どしたどした！？。攻撃が出来ねえのか！？」
攻撃の手を止めずに喋るAは余裕を見受けられた。
それに比べてエクスは回避に専念しがちだった。
ただ、掠(かす)めても温度で火傷を負う為、かなり大きく回避していた。
それが仇(あだ)となって隙を作ってしまった。
A「そこだぁ！！」
エ「・・・！！」
エクスの隙を完全に捕えたAは心臓目掛けて剣を突く。
エクスは止むを得ず、剣の腹を叩(はた)いて軌道を逸らし、Aから離れた。
だが、少ししか触っていないと言うのにエクスの手はドロドロに溶けていた。
A「どぉだ、俺様の力は！！」
Aは手を腰に当て、胸を張って鼻を高くする。
タ「ぬ・・主殿！！。剣が服に当てっておるぞ！！」
A「何ッ！？。うわっちちち、服に引火した！？」
Aは急いで服を叩(はた)き、火を消そうとする。
火種がまだ小さかった為、簡単に消すことが出来た。
しかし、服が情けなく焦げ、幸い火傷を負ってはいなかった。
A「ふぅ～・・・ん？」

汗を拭い、エクスに再び向き合うと、いつの間にか手は完治しており、巨大な大剣を握っていた。
長さはAよりも長く、さらに剣の腹でさえ1メートルは軽くある巨大な剣だ。
A「でっか!?」
すると、鋼の刀身が次第に赤みを帯び始め、エクスと同じように真っ赤に染まった。
A「げぇ!?、パクられた!?」
タ「ッ!?、何か仕掛けるぞ!!」
エクスは大剣を思いっきり振り上げ、そのまま地面に刺した。
それだけで大地震が起こり、Aはバランスを崩して倒れてしまった。
A「うあっ、やべっ!?」
大きな隙を作ってしまい、何か攻撃されると思ったが何もしてこない。
不審に思ったが、何故か地震は強くなっていき、絶てない程にまで強くなっていった。
A「うぉぉおお、立てねえええええ。これ、震度100はあるぞ!!」
全くアホな事をいっているA。
だが、不審な点はいくつでもあった。
タ(おかしい、このような揺れにも関わらず、建物一つ崩壊しないぞ?)
間近くに学校があると言うのに全く崩壊の気配が無い。
もちろん、どんな地震にでも耐えられるように作られたものではない。
A「ぎゃあああああ、液状化しだしたぁあああああ。もう、完全に動けねえええええ」
次第にグラウンドが液状化しだし、Aは沈み始めた。
だが、液状化かAの周りだけでエクスは普通に立っていられた。
タ「まさか、活性で拙者らの周りだけの微動な揺れを活性させたの

か？」
Ａ「器用すぎるだろ！！」
Ａでもそこまで器用な事は出来ない。
Ａはまだ出力をフルに出すかちょびっと出すかぐらいしかできていない。
Ａ「・・・あれ、熱いぞ？」
液状化した地面が次第に温度を上げ始めていた。
もちろん、Ａは身の危険を察しして剣の活性は解いてある。
余熱などは全くない。
なのに、液状化した地面は既に高熱まで来ていた。
Ａ「あちぃ！？、あちぃ！！！！？？？？」
既に地面の温度は人間には耐えられない程まで上がっている。
だが、Ａは活性の力で何とか生きている状態だ。
すると、エクスが剣を抜いて歩きだし、Ａに近づいた。
エクスはＡを見下し、Ａは悔しそうに睨み返していた。
だが、Ａにはもう耐えられない程、急速に地面の温度は上がり続けていた。
Ａ「う・・がああああ・・・・あああ・・・・」
エクスは何もせず、何も言わずにずっと見下すだけだ。
そんな時間が１０分続いていた。
Ａ「あぎ・・ああ・・・ぐぅ・・」
Ａの体は活性の力を持ってしても体がもう溶け始めていた。
タ「主よ、耐えるのだ！！」
Ａ「んぎぎぎ・・・・くがああ・・」
エ「・・・・・？」
エクスは突然空を見上げ始める。
だが、すぐにＡに向き合う。
Ａ「な・・・・何だよ・・・・？」
Ａは溶けているにも関わらず、まだ意識はあるようだ。
エクスはまた地面に剣を刺し、ジッと見るだけだ。

すると、地面の下から妙な音が聞こえ始め、Aの意識は下に傾いた。
その瞬間、また地面が急速に温度を上げ始めた。
そして、苦しむ間もなく・・・

ゴオオオオ!!!!

Aの真下からマグマが噴火した。
Aとタイトは避ける訳もなく、高熱のマグマに呑みこまれてしまった。
噴火したマグマは飛び散らず、出てきた穴に戻っていった。
エクスは目の前に空いた巨大な穴を見て、Aの姿が無くなった事を確認した。
そして、何事もなかったかのように学校を後にした。

天国へと続く空間の前。
ここでも、戦闘が行われていた。
レ「ふんっ!!」
マ「ひょーい」
レオの手刀を軽々避け、攻撃に出ようとしないマック。
レ「貴様、何故攻撃に出ない!?」
マ「ん〜、俺の攻撃って、あのレーザーだけだもぉん」
レ「何?」

突然、訳の分からない宣告を喰らい、少しだけ混乱する。
これが嘘なのか真実なのかは全く分からないからだ。
一方、エクスの方はと言うと・・・
エ「ほらほらほらほら、ばばあの攻撃なんて掠りもしないぜ」
オ「むっきー、私は二十歳代のピチピチよ!!!」
エ「あっははは、二十歳でピチピチ？。こりゃ、重症だ」
オ「千回死ね!!!」
オリアは空間を引き裂きながら攻撃を繰り出すが、エクスは軽々避ける。
さらにオリアの攻撃した後の裂けた空間から無数の手が出てくるが、それすら裂けるエクス。
エ「伊達に楽園の王じゃねえぞ」
縦横無尽に動くエクスを捕える事の出来ないオリアは次第に冷静でいられなくなっていた。
オ「こうなったら本気ｄ「やめろ、オリア」なっ!?」
オリアの言葉を聞いたマックが一瞬でオリアを止めた。
レ「なっ、いつの間に」
レオは捕えることが出来ず、マックはオリアの所に瞬間移動していた。
マ「おい、オリア。マンガとかではな、先に本気を出した奴はまず最初に死ぬんだぜ」
オ「なっ・・・関係ないわよ!!!!」
マ「るっさい!!。本気を出すな、セバスチャンに嫌われるぞ」
オ「それは嫌あああああああああああああああああ」
マックの言葉で逆にオリアのスイッチが入ってしまった。
マ「あっ、セリフ間違えた」
そんな無責任な事を言いながらマックはオリアから離れた。
オリアの周りの空間がバラバラに割れ始め、とてつもない殺気が溢れだした。
レ「くっ、何だ!?。このおぞましい殺気は!?」

エ「うぐ、パネェな、こりゃ」
マ「ガクガクブルブル」
レ「何故、味方の貴様が震えておるのだ？」
すると、マックは親指と小指を立て、それを耳に当てて電話をするジェスチャーみたいな事をしだした。
その話相手はセバスチャンだった。
マ「サーセン。オリア死亡フラグが立ちました」
セ「・・・すみません。もう少し具体的にお願いします」
マ「え～と・・・解禁をしますた」
セ「・・・そうですか。仕方ありません。オリアは諦めましょう。取りあえず、天国（こちら）に来ていただけますか？」
マ「んにゅ？。何でだ？」
セ「どうやら、天国の残兵共があなた達の留守を狙って攻めて来ています。まぁ、私一人でどうにかなりますが、今はアリア様もいます。何かしでかされても困りますから」
マ「おｋ、把握。んじゃ、すぐ行きまーすぅ。ポチッと」
マックは手にボタンを押す動作をしてレオに向き合う。
レオはすぐさま気を引き締めて睨みかえす。
マ「悪い、用事で来たからけえるわ」
レ「何！？、待て！！」
マックが空間の方へ向かおうとするのを止めに掛かるが、マックとの間に巨大な空間の亀裂が入り、追えなくなってしまった。
レ「くっ」
エ「悔しがるのは後だぜ。あれを見な」
レオはすぐにオリアの方を向くと、オリアの後ろから巨大な目が覗き込んでいた。
ゾクリ！！
その目から似た殺気をレオは感じ取った。

レ「この感じは・・・・アルテマか!?」
一度感じた事があるのか、怯えて戦意喪失に陥ることはなかった。
エ「それって天魔獣か。殺り合ったことあるのか?」
レ「まぁな。だが、我はすぐにやられてしまった」
エ「ぷぷっ、ダッセー」
レ「くっ・・・」
レオは唇を噛んで冷静さを保った。
事実だから仕方が無いのだ。
エ「けどよ、アルテマはあんなにデカかったか?」
レ「いや、まだ記憶は新しい方だがあれ程の目の大きさは見たことが無い。何だあれは!?」
エ「ほんと、相当デカイな」
オ「・・・・いゃ・・・」
レ「?」
オ「嫌われるのはいやあああああああああああああああああああ」
オリアが叫び、亀裂のスピードが速まった。
エ「なぁ、あいつを止めて、後ろの奴を出さねえようにした方がいいんじゃねえか?」
レ「それは我も考えていたところだ」
レオは一気に踏み込んで攻撃を仕掛けた。
だが、攻撃は巨大な手で防がれてしまう。
レ「何だ、この手は!?。アルテマの比にならん大きさだぞ!?」
エ「天魔獣も進化したもんだなぁ」
レ「そんな呑気な事を言っている場合ではないぞ!!」
それもそのはず、既に空間は巨大な亀裂が走っており、もう少しで体が現れそうだった。
レ「くそっ、どうすればいいのだ!?」
途方に暮れるレオ。
そして、次第に強大になっていく殺気に体の震えが止まらない。

それを見たエクスがレオを茶化し始めた。
エ「おっ、ちびるか？」
レ「ふ・・ふざけるな！！！」
エ「ははは、冗談だよ冗談。ほら、少しは楽になっただろうが」
レ「ん・・・確かに」
レオの震えは知らず知らずに止まっており、体も硬着していなかった。
エ「そんじゃ、チビってもしょうがねーし、あのデカ物をぶっ倒してみろよ」
レ「ふん、言われるまでも無い」
レオは再び踏み出し、勇敢に突っ込んだ。
その顔つきはおぞましい殺気の中でも全く絶望していない目だった。

所変わって、アリアの行方はと言うと・・・
ア「・・・えっと・・・これは・・・」
３６０度、完全に兵に囲まれていた。
どこを見渡しても兵、兵、兵だけである。
兵「反逆者ラギュラバル、アリア。貴様は王より見つけ次第、処刑を下されている。大人しく処刑されよ」
ア「えっと・・・嫌だけど」
兵「元姫様だろ。往生際が悪いぞ」
ア「姫でも元でしょ？。私はもう普通の天使の恋する女の子よ」
高「お前、自分で言って恥ずかしくないのか？」

ア「恥ずかしいに決まってるよ！！！／／／」
高「じゃあ、何で言うんだか・・・」
ア「作者に言ってよ・・・／／／」
兵「敵は一人だ。全員、かかれ！！」
一人の合図いによって、兵が一斉に動き出した。
だが、一歩動いた瞬間、兵は全く動かなくなった。
兵「な・・・・・に・・？」
ア「これだけ話す時間があるんだから、静寂の力ぐらい全員に掛けれるって」
兵「お・・おのれぇ～・・」
ア「ゴメンね。私は他にしないといけない事があるから。じゃあね☆」
アリアはウインクして兵士を押しのけて去っていった。
兵達は首を動かす事が出来ず、その後どこに行ったのか誰も知らなかった。

## 無双と夢想編　その１１、再生の上級者来る！！（前書き）

やっと４日で投稿できた。
だからと言って、落ち着いてきた訳ではないので、また時間がかかるかも・・・

気付いたら１００話目到達してましたね。
まさか、こんなに続くとは自分でもびっくりしてます。

これからも、こんな小説を見守ってください。
無理なら見守らなくてもいいですが・・・

# 無双と夢想編　その11、再生の上級者来る！！

兵が宮殿へ押し込んでいる間、アリアはバレない様に横を通り抜け、庭に辿り着いた。
ア「えっと・・・この辺のどこかにあるってエクスが言ってたよね？」
高「ああ。隈無く探せよ」
ア「分かってるよ」
アリアは草を掻き分け、見落としなく探す。
すると、足に何か当たる感触がした。
ア「ん？・・・きゃっ！？」
それを見た瞬間、驚いて短く悲鳴を上げ、後ろに引いた。
それは首がとれた高雅の体だった。
知っているからと言って、流石にまた見ると恐怖を感じたのだ。
高「おっ、俺の体じゃん。だけどよ、知らずに蹴るとはひでぇな」
ア「だ・・だって、気付かなかったんだもん」
高「・・まぁ、胴体が見つかった事だし、後は頭だな」
ア「うん・・・ん？、何か忘れてるような・・・」
高「おい、さっさと探せよ。ちんたらしてたらレオ達が死ぬぞ」
ア「ちょ！？・・縁起でもない事言わないでよ！！」
アリアは思いだそうとしたところ、高雅の言葉が満更でもない為、少し焦って高雅の頭を探し始めた。
案の定、頭はすぐそこにあった。
ア「あった！！・・・って、あれ？」
だったが、それは頭と同じぐらいの木の実だった。
高「おいおい、でっけぇ木の実っぽい奴じゃねえか。俺の頭じゃねえぞ」
ア「あはは、ちょっと間違えちゃった」
高「てか、そんなでけぇ木の実が天国にはあるのか？」

ア「まぁ・・・探せばあるんじゃない？」
高「そこ、疑問形かよ。前は天国に住んでいただろうが」
ア「だって、見たことないｋ〈カパッ〉へっ？」
突然、木の実が上下に開き、中から赤と黒のグラデーションカラーの球体が出てきた。
高雅はそれをアリアよりも速く理解した。
高「投げて伏せろっ！！」
アリアは言うよりも速く空高く投げ、頭を抱えて伏せた。
すると、すぐさま木の実が大爆発し、アリアは爆風で吹き飛んだ。
しかし、距離があった為受けた爆風は弱く、着地することに成功した。
ア「な・・何！？」
アリアは周りを確認し、誰かいないか確認する。
すると、茂みの中から知っている人が現れた。
セ「どうも、アリア様。また戻ってきましたか」
ア「セバスチャン！！」
アリアはセバスチャンの姿を見てすぐに戦闘態勢に入る。
しかし、少し疑問に思った。
ア「今、兵が沢山押し込んでいるけど、どうしてここにいるの？」
セ「ふふふ、兵共は何とでもなります、ただあなた方に動かれると色々厄介事がありますから」
ア「そう。それより、コウガの頭はどこにあるの！？」
セ「コウガ様の頭？。それなら、アリア様が落ちる最中に持っていたではありませんか？」
ア「・・・・あ〝っ！！」
高「この声、最悪なパターンを思い出した瞬間の声だな・・・」
アリアはその最悪な記憶を思い出し、オロオロと慌てだした。
高「聞きたくないが、俺の頭をどうした？」
ア「あう・・えと・・・その・・・」
高「正直に言え、怒るから」

ア「えっ！？、そこ怒るの！？」
高「取りあえず、さっさ言え」
ア「はい・・・セバスチャンに落とされてる最中に、私はちょっとの間暴走して色んな力を使って、この辺りの空間を滅茶苦茶にしたの。その時、コウガの頭をどっかに投げちゃって・・・」
高「おい・・・」
ア「ごめんなさい」
アリアは申し訳なさそうに俯き、本気で謝った。
その光景を見ていたセバスチャンはクスクスと笑っていた。
セ「全く、あなた方は面白いですね」
高「おい、バカにされてんぞ、バカ」
ア「う・・うるさーーーい」
セ「ほっほっほ、コウガ様と相変わらずの中でございますな」
高「・・・・ん？、ちょっと待て」
ア「？、どうしたのコウガ？」
セ「どうされましたか、コウガ様？」
アリアとセバスチャンが首を傾げながら高雅に聞くが、高雅にとって、それは不思議な事でしかなかった。
高「おい、セバス」
セ「はい、何でしょうか？」
高「どうして、俺の声が聞こえる？」
ア「あっ！！」
アリアは今気づいて驚き、高雅はセバスチャンに普通に話しかけていた。
セ「はて？、何故と言われましても・・・」
高「俺の声はアリアとその他魂達しか聞こえないはずだが？」
ア「うわっ、略しちゃったよ」
セ「私に魂の声が聞こえないとも？。これでも、私は全ての力が使えますので」
セバスチャンはにこやかに答え、とんでもないことを発言した。

高「全ての力が使えるって、マジかよ？」
高雅は素直に驚いていた。
アリアも声を出してないが相当驚いている。
セ「ええ、本当でございます。現に目の前にいる私は創造でございますから」
ア「そんなの、私だって気付いてたよ」
高「・・・本当は？」
ア「全く気付いていませんでした、ごめんなさい」
アリアは再び頭を下げた。
高「まぁ、俺も気付いていなかった。それ程、完成度がたけぇんだよ」
セ「お褒め頂きありがとうございます」
セバスチャンは礼儀正しく礼をする。
敵だというのに、全くもって礼儀を変えない。
それほど余裕があるのだろう。
セ「さて、私はそろそろ本題に入りたいのですがよろしいでしょうか？」
高「・・・殺る気か？」
ア「ッ！？」
高雅の声を聞き、アリアは一瞬で体勢を取った。
セ「そう警戒なさらずに、次の質問次第で殺しか半殺しに分かれますから」
高「どっちも殺しかよ。随分、物騒だな」
セ「私はセイクリッドに本気で行くつもりですから。それで、古文書はどうされましたか？」
高「アリアが焼いて喰った」
ア「食べてない！！！！」
セ「・・・そこだけを否定すると言うことは、焼いた事は本当でしょうか？」
ア「うん、そうだよ」

アリアはサラっと真実をいい、何ら躊躇をしていなかった。
セバスチャンはその言動にクスッと笑った。
セ「それは大罪ですね。死に値します」
ア「だったら、やることは一つだね」
そう言って、アリアは腕を剣に変える。
セバスチャンは腕を槍に変え、殺気を解き放つ。
セ「死になさい、若き姫よ」
ア「もう、姫じゃないよ」
そして、同時に一歩踏み出した。

同時刻、天国へ続く空間前。
そこは既に荒れ地と化していた。
そして、その中央には異常なまでの巨人がいた。
その大きさは軽く５０メートルはある。
それはアルテマと瓜二つの姿であり、違った所と言えば火傷みたいな跡は無く、目付きが鋭かった。
その足下に傷だらけのレオの姿と目を開けたまま死んでいるオリアの姿があった。
レ「な・・・何者だ・・・こいつは・・・がはっ！！」
エ「Ｈｅｙ、血を吐いてる暇なんてねえぞ。早く逃げねえとペシャンコにされるぞ」
レ「分かっておるが・・・体が・・・動かぬ」

レオは散々痛めつけられ、もう動ける状態ではなかった。
だが、巨人はレオの方を見ず、ずっと空間を眺めていた。
そして、ゆっくりと足を上げ、歩きだそうとした。
足の影はレオと重なり、レオは身の危険を感じて逃げようとした。
しかし、体はもう動かず、迫りくる足を見ることしかできない。
レ「くそ、万事休すか・・・」
目を閉じて覚悟を決める。

グサッ!!

レ「・・・?」
何か合ってない音を聞き、目を開ける。
とても踏みつぶされた音とは思えず、良く見るとレオの胸に黄色い矢が刺さっていた。
だが、痛みも無く、血も出ない。
あろうことか、刺さった場所から傷が癒されていった。
レ「何か分からないが、これで避けれる」
レオは立ち上がり、すぐにその場から離れる。
その直後に元いた場所に巨大な足が下ろされた。
レ「間一髪だったな」
レオはもし踏みつぶされていた事を考えると冷や汗が溢れだした。
レ「しかし、今のは?」
胸を見ると、既に矢は消えており、刺された跡は全くなかった。
というか全ての傷は完治していた。
?「不思議そうな顔をしておるな、お主」
レ「ん?、その声はログナ殿か」
ロ「ちょ!?、速攻で当てるなよ!!。普通、『誰だ!?』とか『救世主(メシア)か!?』とか言ってくれよ!!」
蓮「ログナ、めしあって何?」
少し離れた場所に蓮田と弓の姿をしたログナがいた。

しかし、蓮田は矢筒などは持っておらず、矢はどこにも持っていない。
レ「今のはログナ殿達がやったのか？」
ロ「ああ、そうさ。この俺っちが真の契約を交わした以上、倒せない敵などいないぜ」
ログナは弓から人間の姿に戻り、ピースを披露した。
わざわざ、何の価値もなく、それだけの為に人間の姿に戻ったログナの姿を見て、レオは呆れていた。
しかし、すぐに気を引き締め、本題に戻す。
レ「真の契約だと？。それでは、蓮田殿は何を捧げたのだ！？」
ロ「上半身の神経全部」
レ「ちょっと待つのだ！！」
ロ「ん？、まさか、『何故動けるのだ！？』とか言っちゃうパターン？」
レ「分かっているなら話は早い。その通りだ」
ロ「俺は再生の上級者だぜ。神経の再生とか朝飯前だｓ〈ドスン！！〉」
レ「なっ！？」
話の途中、巨人が容赦なく蓮田とログナを踏みつぶした。
レオは範囲外にいたが、風圧で吹き飛ばされた。
レ「とっ・・・二人は大丈夫なのか！？」
上手く着地をして二人の心配をする。
再び足が離れた時、グッシャリと潰れた二人の姿があった。
内臓が潰れ、とてもグロッキーな姿へと変わり果てていた。
レ「くっ、油断しておった」
レオは二人に一度手を合わせ、再び巨人に向き合う。
だが、巨人は全くレオ達の方を向いてなく、ただ歩いているだけだった。
レ「二人の仇、取らせｔ「おい、勝手に殺すな、レオっち」なっ！？」

振り返ると、グロッキーだった二人が悠々と立っていた。
さっきまで撒き散らしていた血は一滴たりとも無くなっていた。
ロ「はっはっは、これが必殺『再生予約』だ！！」
レ（す・・・すごいネーミングセンスだ！！）
蓮「何が起きたの？。何だかへこんでいる所に立ってるけどさっきまでへこんでなかったよね？」
ロ「レオっちドッキリ大成功だぜ、蓮田」
蓮「あ、そう」
ロ「うおっ！！、露骨に無視された。もう生きて行けねえ・・・」
ログナは重い空気を張り詰めて四つん這いになった。
レ「・・・それよりも、蓮田殿は戦えるのか？」
蓮「うん。再生を無くせば普通の矢が放てるから」
ロ「ちっちっち、ただの矢ではないぜ。これまた秘密が隠されてるんだ」
レ「ほぉ、それは一体？」
ロ「次回のお楽しみ☆」
レ「ふん。まぁ、大方予想はできるが」
蓮「楽しみだな～♪」
レ（何故、蓮田殿は知らないのだ？）
ロ「こまけぇこたぁどぅでもいぃんだよ。それより、あのデカ物が町の方に行ってるぞ」
ほったらかしにしていた巨人は町の方へ歩き出していた。
長い事話していた為、結構な距離が開いていた。
レ「急ぐぞ、二人共。これ以上の崩壊を防がなければ」
ロ「へっへっへ、次回は活躍しちゃうぞ～」
蓮「よぉーし、行っくぞー！！」
三人は急いで巨人の後を負い始めた。

エ「・・・あれ、俺後半空気じゃん」

## 無双と夢想編　その１１、再生の上級者来る！！（後書き）

何だろう、場面が何回も変わり過ぎてる気がする・・・

# 無双と夢想編　その１２、復活

今、天国のあちらこちらで爆発や悲鳴などが聞こえ、もはや地獄と化していた。
ア「・・・ひどい・・・」
そんな音を耳にしながら、アリアはセバスチャンと戦っていた。
セ「甘いですよ、アリア様」
セバスチャンはアリアの一瞬の隙を逃さず、槍を突く。
アリアは頬を掠めながらも直撃を避けた。
ア「くっ・・・やっぱり強い」
セ「当然であります。私とアリア様では経験が違います。さらに、力の差でも私が上です」
高「アリア、真の契約をしてない以上、こっちの勝ち目はなさそうだ。だから、逃げろ。体が手に入っただけでも十分だ」
ア「分かった」
セ「逃がしませんよ。これ以上、邪魔されては困ります。ここで死んでもらいます」
セバスチャンは瞬間でアリアの腕を掴み、拘束した。
ア「きゃっ！？」
セ「死になさい」
腕を掴まれ、回避する事が出来ない。
それを悟ったアリアはあえて攻撃に出た。
ア「たあっ！！」
セ「くっ！？」
セバスチャンは予想していなかったのか、咄嗟の判断で腕を斬られてしまった。
セ「調子に乗るのではありません！！」
セバスチャンも抵抗し、捕えていた腕を握り潰した。
ア「うあぁ！！」

高「アリア！！」
セバスチャンはアリアを投げ飛ばし、腕の再生を行った。
アリアは歯を食いしばって痛みをこらえ、再生を行った。
セ「やりますね、アリア様。正直、少し見直しましたよ」
ア「つぅ・・・あっそ。別に嬉しくも何ともないよ」
セ「ふふふ、そのような口が聞けるようになるとは、私も嫌われましたね」
ア「嫌われて当然だよ！！。色々な人をも巻き込んで行きたいセイクリッドって何！？」
セ「それは秘密でございます。聞いてしまわれると、きっとアリア様も行きたくなるでしょう。手段を選ばずに」
ア「そんな訳ない！！。周りを巻き込んで行こうとは思わない！！」
セ「そうですか。しかし、欲というものには誰も勝てません。欲に囚われたものは殺しをしようが、仲間を裏切ろうが欲を実現させる。セイクリッドはそんな欲の塊のようなものです」
？「嘘ですッ！！」
突然聞こえた声はアリアのポケットからだった。
そこから現れたのはさっきまで気絶していたフィーラの魂だった。
フ「セイクリッドはそんなバカげたものじゃないです」
セ「私の言葉は間違ってないはずです。あなたも少しは聞いたことがあるでしょう」
フ「・・・知らないです。あんなおとぎ話の世界なんて興味が無いです」
セ「ご冗談を。女王（クイーン）であるあなたがどうして知らないのですか？」
フ「うるさいです！！。知らないものは知らないです！！」
セ「そうですか。まあ、あなたが知っていましても、セイクリッドに行くのと関係ありませんが」
フ「このぉ！！」
フィーラは魂である事を忘れ、セバスチャンに突っ込んだ。
ア「待って、フィーラちゃん。挑発に乗せられちゃダメ！！」

アリアはギリギリでフィーラの魂を掴み、フィーラを止めた。
しかし、セバスチャンはその隙を狙っていた。
セ「頂きます」
ア「しまっ・・・」
セバスチャンはアリアの心臓目掛けて狙いを定めていた。
その距離は数メートルで外すことはない。
セ「今度こそ、お別れです。死んだ後に宝石もちゃんと壊して差し上げますよ」
セバスチャンは槍を突こうとした。
その瞬間だった。
？「あっ！！、ＵＦＯ！！」
セ「！？」
突然聞こえた場違いな声。
セバスチャンはその声に反応し、首を向けてしまった。
決して、ＵＦＯを見たい訳ではない。
ア「隙あり！！」
チャンスと思ったアリアはすかさず剣を振るった。
セバスチャンは不意を突かれた為、大きく回避した為まだ隙があった。
しかし、アリアは攻撃に出ず、高雅の体を拾って逃げ始めた。
その際、声がした方を確認すると・・・
ア「なっ！？、あの人・・・」
高「あいつ・・・」
その人はアリアも高雅も知っている人だった。
そして、背を向けて親指を立て、かっこつけていた。
ア「まさか・・・」
高「だろうな」
アリアと高雅は悟り、それ以上考えずに逃走を始めた。
セバスチャンが体勢を立て直した時、既にアリア達は視界から消えていた。

その代わりに、別の人が目の前に立っていた。
セ「まさか、あなたがいるとは。Aさん」
A「ちょっと殺されてな。ところで、ここはどこ？」
セ「天国でございます」
A「うっそ～。こんな火の海が？」
セ「ええ、そうでございます」
A「俺の想像と全然違うじゃん」
セ「想像が絶対とは限りませんよ。それよりも・・・」
セバスチャンはさっきまでの優しい口調とは異なり、殺気を放ちながら恐ろしい声を出した。
セ「よくも邪魔しましたね？」
A「ひっ！？」
自分の知っているセバスチャンとは違い、どんな化け物よりも恐怖を感じさせるものとなっていた。
セ「可哀そうに。二度も死を味わうとは」
A「あの～、俺、天国で死んだらどうなっちゃいます？」
セ「消えます。Aという物が完全に消滅するでしょう」
A「あ～、そんなのメンゴ」
Aは回れ右をして逃走を始めた。
セ「いいでしょう。追いかけまわされる恐怖を味わいなさい」
A「ぎゃあああああああああああ」
セバスチャンは簡単に追いつけるのに、あえてゆっくり追い続けた。
その間、Aはずっと恐怖していた。

Aのお陰で逃げ切ったアリアは開きっぱなしになっている現世への空間へ飛び込んでいた。
ア「A君・・・」
高「あいつの死を無駄にするなよ」
ア「分かってるよ」
アリアはAの事を惜しみながらも、そこを堪えて空間へ飛び込んだ。
間もなく、アリアは現世に突き、その光景に絶句した。
ア「な・・・何・・ここ・・・？」
高「何がどうすればこうなるんだ？」
荒れ果てた周りを見て、最初に目が入ったのは歩いている巨人だった。
高「・・・あれが原因か」
ア「だろうね」
高「周りにレオ達がいないって事は、まだ死んでないってこと・・・って、あれは？」
ア「？、どうしたの？」
ふと、目に入ったボールの様なものは高雅が一番知っているものだった。
高「あれ、俺の頭じゃん！！」
ア「え！！？？、どこどこ！？」
アリアは首を回し、高雅のが言った頭を探しだす。
すると、すぐそこに素っ気なく転がっている頭を見つけた。
ア「あった！！。これでコウガが生き返る！！」
アリアはすぐに体と頭を合わせ、再生の力を使った。
そして、高雅の魂を取り出し、ゆっくりと高雅の体に魂を押し込んだ。
すると高雅はゆっくりと目を開け始めた。
ア「コウガ！？、大丈夫！？」
高「あ・・・ああ、どうやら成功したみたいだな」

ア「よかった・・・コウガ・・コウガぁ！！！」
高「うおっ！？、ちょ！？」
アリアは涙を流しながら高雅に抱きつき、高雅は戸惑いながらも受け止めた。
ア「ほんとに・・・ほんとに良かったよ・・・」
高「分かった。分かったから放せって」
高雅はアリアの背中を叩きながら放す様に求めるがアリアは一向に放そうとしない。
むしろ、もっと強く抱きしめ始めたのだ。
ア「よかった・・・ほんとに・・・」
高「分かったって。だから放せ！！」
高雅もしまいには髪の毛を引っ張り、キレ始めていた。
ア「いたたた！？」
アリアも痛みでやっと気付き、高雅から離れた。
高「ったく。こんなことしている暇じゃねえだろ」
ア「ゴメン。でも、ほんとに嬉しくって・・」
高「・・・そっか。心配かけて悪かったな」
ア「あっ・・・」
高雅はアリアの頭を撫で、落ち着かせてあげようとした。
高雅の思惑通り、アリアは落ち着いたと思ったが、今度は顔を赤くして俯きだした。
ア「・・・久しぶりに撫でられたなぁ」
高「そうだな。てか、大丈夫か？。顔赤いぞ」
ア（・・・コウガの所為だよ／／／）
アリアはボソッと呟きながら顔を逸らした。
高「取りあえず、こいつはどうなってんだ？」
そう言って指を刺したのは目を開けたまま死んでいるオリアだった。
ア「確かに・・・レオ君が倒したなんて感じじゃないし」
高「それもこれも、あのデカ物のとこに行けば分かるだろうよ」
ア「そうだね。一刻も早くレオ君達の無事を知りたいし」

高「それじゃ、あのデカ物を追うか」
ア「うん」
アリアは双剣になり、高雅は速度の力を使って謎の巨人の元へ急いだ。

その巨人の周りにはレオ達が懸命に足止めしようとしていた。
しかし、全く効いておらず、巨人の全身は止まらない。
レ「くっ、これ程までに動じないとは」
ロ「見た感じ、蹴っても殴っても斬ってもすぐに再生してるようだし。どうやら、俺っちの力が必要なようだな」
レ「出し惜しみせんで早くしてくれ」
ロ「ちぇ、せっかちだな。っと、あぶねえぞ、蓮田」
蓮「うわっと」
蓮田と巨人の足の影が重なり、蓮田は後ろに軽く跳んで避けた。
しかし、踏んだ時の風圧が大きく、蓮田はバランスを崩された。
蓮「いてっ」
レ「大丈夫か、蓮田殿？」
蓮「うん。お尻打っただけだから」
ロ「よくも蓮田の大切なお尻をぉぉぉ！！。こうなったら、再生のエキスパートが本気（マジ）になってやるぜ！！」
蓮「そんな大した事じゃないよ」
ログナの過保護すぎる言葉に蓮田は困り果てていた。
レオはその光景に呆れてものが言えなかった。
ロ「さぁ、蓮田よ。今こそ究極の矢を解き放つのだぁ！！」

蓮「特に何にも変わってないけど・・・ま、いっか」
蓮田は普通に矢を放ち、矢は巨人に突き刺さった。
そると突然巨人の動きが止まった。
レ「？、何をしたのだ？」
ロ「あいつの再生を止めたのさ。再生さえ操ればダメージは通るはずだぜ」
レ「では、何故最初からしないのだ？」
ロ「それは・・・ほら、そうしたらつまらないだろ」
レ「戦いにつまらないもあるか！！」
ロ「いや～。やっぱ、とっておきはすぐには出さないだろうし～」
レ「・・・まあ、よい。これで、事が動きそうだ」
ロ「よぉ～し、そうとかかれば、すぐに攻撃再開だぜ！！」
蓮「おー」
レオと蓮田は再び攻撃に出た。
再生を失った巨人にダメージが通るので、足を集中的に攻撃し、動きを止めに掛かった。
だが、巨人もそれを悟って攻撃に出てきたのだ。
巨「ドゥォォォォオオオオオオオオ！！！」
レ「ッ！？、何かを仕掛けるつもりだ！！。気をつけろ！！」
蓮「うん！！」
ロ「了解！！」
巨人はレオ達を見下し、巨大な口を開いた。
すると、口の周りに力が集中し、徐々に巨大な黒い塊となっていた。
レ「まずい。離れるぞ！！」
蓮「うん」
ロ「アイアイサー」
危険を察したレオ達は一旦巨人から距離を取った。
その瞬間、巨人の口にあった黒い塊が放たれた。
塊は巨人の足下へ落下したと思えば、地面ギリギリで急に停止し、
レオ達の方へ曲がった。

レ「し・・しまった!?」
蓮「こっち来たよ!!」
ロ「やべぇ、避けられそうにないぜ」
巨大過ぎる塊は一瞬にして距離を詰めてきた。
もう、レオ達は避ける事は出来ない。
ロ「こうなったら、再生予約をしt「退いてろ!!」おっ?」
レ「この声は!!」
声がしたと同時にレオと蓮田の横を瞬速ですり抜ける人影があった。
その人物を見た瞬間、絶望が一気に希望に満ち溢れた。
蓮「こうが兄ちゃん!!」
蓮田は期待に満ち溢れた目でその名を呼んだ。
高雅は黒い塊に剣を突きさし、そのまま真上に投げ飛ばした。
塊は空へ飛んで行き、見えなくなった所で高雅が静寂の力を使って無力化した。
無力化した塊は巨人の頭上に落ち、木っ端みじんに砕けた。
高「これでよしっと。大丈夫か、レオ?」
レ「ああ、問題ない」
ロ「お~い、俺っち達は無視か~?」
高「悪い。お前らは後だ。あの巨人と戦っているんだろ?。先に戦っててくれ。後ですぐ行くから」
ロ「ちぇっ。早くしてくれよ。行くぜ、蓮田」
蓮「うん。じゃあ、また後でね」
蓮田は手を上げ、巨人の元へ行った。
高雅はそれを確認すると、第三者の名を呼んだ。
高「おい、エクス。状況はどうだ?」
エ「ずっと俺が空気だった。こいつはあのガキ達と喋りながら戦ってたからな。話す暇がなかった」
高「そうかい・・・レオ、ログナに不審な点はなかったか?」
レ「?、特になかったがどうしたのだ?」
高「いや・・・どー見ても矛盾してるよな・・・」

レ「コウガ殿？」
高雅の言葉にレオは疑問を抱いているが、全く理解できない。
いつも通りのログナだったのに、高雅はそれを怪しがっていた。
レオは聞き出そうとしたが、その前に高雅が喋り出した。
高「ま、まずはあの巨人を倒すのが先決か。アリア、真の契約するぞ」
ア「うん」
レ「おい、コウガ殿・・・」
高雅はレオを無視して真の契約を交わす。
それをし終えた後にようやく高雅が答えてくれた。
高「自分で考えろ。物忘れが酷くない限り、すぐ分かる。そんなことよりも、まずはあのデカ物を倒すぞ」
レ「あ・・ああ、分かった」
レオは納得がいってないが、それ以上追及するのを止め、高雅と共に巨人の元へ行った。

# 無双と夢想編　その１３、潜む闇

辺り構わず踏みつぶし、ただ歩き続ける巨人の目の前に高雅が立ち塞がった。
高雅は巨人の額に手を置いた。
それだけで、巨人が歩むのを止めた。
高「寝てろ、デカ物」
そのまま思いっきり押すと、巨体は後ろに傾き、多量の砂塵を浮かせて倒れた。
タネを言うと、静寂で止めて活性の力で思いっきり押したのだ。
レ「さすが、コウガ殿だ」
ロ「すげぇ。ありゃ、驚くぜ」
蓮「こうが兄ちゃん、力持ちだね」
高雅がやるから簡単に見えるが、巨人を倒すにはそれ相当の活性の力がいる。
多分、Ａの全力でようやく倒せるのだが、高雅は顔色一つ変えずに片手で押し倒したのだ。
高「それにしても、ほんとアルテマに似てるな」
ア「そうだね。殺気とか一緒だよね」
高「兄弟か？」
ア「まっさか～」
グダグダと喋っていると、砂塵の中から黒い塊が高雅に向けて飛んで来た。
高雅は横に光速で移動して避けて塊を過ごしたが、塊は急停止して再び高雅に向かって飛んで来た。
高「ホーミング式か。うざいな」
ア「でも、なんら問題ないよね」
アリアの言う通り、高雅は塊に剣を刺し、粉々に粉砕した。
消失で無力化した後に破壊したのだ。

エ「お前は強いな。正直、ガーディアンにでもなって欲しいな」
高「生憎、俺はそんな面倒くさそうなのはゴメンだ」
エ「自由が生み出す最強の力ってか、おもしれえ」
高「それより、あいつの情報は何かねえのか？」
エ「さあな。天魔獣で長けた破壊の力の所持者しか分からねえな」
高「そうかい。まあ、どうにかなるだろう」
ア「コウガ、敵が動き出したよ」
地面では既に砂塵が殆ど止み、巨人の姿が露わになりつつあった。
巨人は高雅を睨みつけ、殺気を放出していた。
高雅も負けずと殺気で迎え撃っている。
その光景は見るだけで迫力があった。
レ「両者に隙が無い。これは、下手に向かうと、かえって邪魔になるかもしれん」
ロ「サポート　オンリーでいいんじゃね？」
レ「そうだな」
レオ達は戦いに出ず、高雅の援護に回った。
レオ達が後ろに回った瞬間、高雅はそれを見ていたかのように動きだし、巨人に斬りかかった。
巨人は散々レオ達が何をしても興味が無かったのに、高雅にだけは警戒していた。
高「そらぁ！！」
活性をフルに使った強斬り。
巨人は静寂状態にも関わらずに腕を動かし、それを受け止めた。
刃は数センチしか刻めず、ダメージは微小なものになった。
だが、高雅は離れずに刺した剣を蹴って奥に喰い込ませる。
巨人は高雅の謎の行動に察したのか腕を振って高雅を吹き飛ばそうとした。
しかし、その時には剣はかなり奥まで喰い込み、高雅はもう片方の剣を使って、繋がっている紐を伸縮させて着地した。
高雅は剣を通して刺さっている剣に力を送り込み始めた。

巨人に悟られないように慎重に。
高「て・ん・かっと」
そう呟いた途端、巨人の腕が大爆発を起こした。
アルテマ戦と同じ戦術である。
内部に爆破の力を溜め、中から破壊する方法である。
アルテマ戦の時よりも、高雅の中では一年間戦闘経験を積んでいる為、力の蓄積が早かった。
高「これで結構なダメージを与えただろう」
爆破の力で吹き飛んだ片方の剣を紐を縮小して手元に戻しつつ、巨人の様子を窺った。
巨人の片腕は取れ、地面に転がっていた。
ロ「コウガっち、一つお得情報。俺っちがあいつの再生能力をストップさせたから、どんな小さなダメージでも永遠に残るぞ」
高「そいつは、ありがてぇな」
レ「コウガ殿、チャンスだ。一気に止めを!!」
高「早まるな。まだまだ相手はピンピンしてるさ」
レ「そ・・そうなのか!?」
エ「よく見ろよ。あいつ、笑ってんだぜ」
レ「何ッ!?」
エクスに言われ、レオは巨人の顔を窺った。
確かに、声を上げては無いが口がつり上がり、笑顔になっているのは確かだった。
高「不気味な奴だな」
ア「ただのドMだったり?」
高・エ「それはない」
ア「ですよね。ははは・・・」
すると、巨人は何事もなかったかのように起き上がり、高雅を睨みつけた。
高「あれ、静寂が切れたか?」
ア「そんな!?。かなり強かったはずだよ。普通は1週間は動けな

くなる程なのに」
高「巨人だから効き目が弱かったんだろう。取りあえず、次で決めるぞ」
高雅は巨人の顔面前に光速移動し、剣を構えた。
だが、巨人は今までにない速度で後ろに少し跳んだ。
高「なっ!?。速くなった!?」
巨人はすぐにカウンターのパンチを繰り出してきた。
これも、目には見えない速さである。
だが、高雅は活性と消失の力で真っ向から受け止めた。
受ける衝撃をで消して無ければ、衝撃だけで骨が粒子に変わるぐらい砕けていただろう。
高「こいつ、変わった!?」
巨「変わった?。戻ったの間違いだ」
今まで口を開けなかった巨人が口を開け、普通に話しだした。
ア「しゃ・・喋った!?」
巨「普段は言葉を隠していたが、貴様の力に賞して本気で向かおうと思ったのだ」
高「あっそ。本気も何も、俺との力の差を見て勝てる見込みがあるのか?」
巨「ある。強力な魂を喰らったわしは本気を出せば先程の１０倍はあるぞ」
高「強力な魂?・・・オリアの事か?」
巨「そうだ。あの小娘の魂を喰らうことによってわしは存在できる。それも、長時間な」
ア「アルテマと似ている。やっぱり、アルテマと関係が・・・」
巨「さっきから言っているアルテマとやらはわしの創りだした一部だ」
高「マジかよ、どおりで似ている訳だ。でも、似ていようが俺が勝つことに関係ないな」
巨「ならば、感じるがいい。わしの本当の殺気を」

巨人がそう告げた瞬間、辺り一帯がグラッと揺れた。
それも、殺気だけでだ。
高「ッ！？」
ア「ひっ！？」
レ「あぐっ！？」
ロ「うっ！？」
蓮「・・・？」
さすがの高雅も目を丸くして驚き、体が震えだしていた。
レオ達は感じ取っただけで気絶してしまった。
気絶していないのは高雅と蓮田とエクスだけだった。
高「おい・・おい、アリア！！」
蓮「えっ！？、どうしちゃったの、皆！？」
高雅が呼びかけるもアリアは返事をせず、蓮田は周りの人が倒れ、混乱していた。
エ「まずい。戦況が引っくり返ったな」
巨「どうした？。さっきまでの威勢はどこに行ったのだ？」
高「こいつ・・・やべぇ・・・」
巨「それなりに経験を積んでいたようだが、未熟すぎだな。それでも、戦うか？」
高「当たり前だ！！。やらなきゃ、どうせ死ぬんだしよ」
巨「そうか。なら、わしも容赦はしない」
巨人はすぐに腕を再生し、再び殺気を纏わせた。
ログナが気絶した為、再生を操れなくなったのである。
高（とは言ったものの、アリアが起きなきゃ力が使えないし、まずいな・・・）
エ「アリアが起きるまで逃げるんだな。それしかない」
高「情けねえがそうだな」
巨「誰と話しておる？。恐怖で幻覚でも見えているのか？」
高「まっさか～。ちんちくりんな殺気を受けて余裕を出してるだけだ」

巨「ほお、体が震えておるのに粋がるか。なら、二度とそんな減らず口を叩けなくしてやるわ」
巨人は拳を作り、高雅に向けた放った。
高雅は横に飛んで避けたが、巨人はすぐさま次の拳を振るった。
力が使えない高雅はそれをもろに喰らってしまった。
高「いぎっ！？」
余りの痛さに奇声を発してしまう。
高雅は数十メートル吹き飛ばされ、地面に転がり、ピクリとも動かなくなった。
巨「所詮、この程度か・・・わしの力と打倒に渡り合える奴はおらんのか？」
蓮「こうが・・・兄ちゃん・・・」
巨「？・・そこの小僧」
蓮「ぼ・・僕？」
巨「そうだ。貴様はわしの殺気を受けて気絶しないとは、できる奴ではないのか？」
蓮「で・・出来るって何が？」
巨「惚けておるのか？。あんまり、わしを怒らせるｔ〈グラッ〉！？」
突然感じた新たな殺気。
それも、自分と同じぐらい強大なものだ。
巨「な・・何だ！？」
すぐにその殺気の方を見ると、殺気倒したはずの高雅が起き上がっていた。
周りには黒いオーラを放ちながら、さっきの自分と同じように笑っていた。
高「ヒヒヒヒ・・・ハハハハ・・・」
巨「貴様、致死量のダメージを与えたはずだぞ」
高「チシリョウ？。ナニソレ？。カンケイ　ネーシ」
巨「何だと！？」

高「サテ、サッサト　オキロ、アリア」
高雅が剣を強く握ると、突然、黒い電気が出てきた。
ア「きゃあああああああ!?」
高「オキタカ。サッサト　チカラ　ヲ　カセ」
ア「え!?、コウガ?」
アリアはすぐに高雅の異様な雰囲気を感じ取った。
それに気付いた高雅はアリアを睨みつけ、また黒い電撃を出した。
ア「きゃあああああああ!?」
高「ダマッテ　イウコト　キケ」
ア「だ・・誰!?。あなたは・・・コウガじゃ・・ない!!」
高「オレ　ハ　コウガダ。ソレ　イガイ　ニ　ダレダッテ　イウンダ?」
ア「コウガな訳が無い。今すぐ鎮めてやる!!」
アリアは静寂の力を使って高雅を鎮めようとするが、全くいつもの高雅に戻らない。
それどころか、高雅はニヤリと笑い、余裕を見せていた。
ア「なっ、どうして!?」
高「ハナスダケ　ムダダ。モウ、コノカラダ　ハ　オレ　ノ　モノダ」
巨「どういう訳が分からないが、まだ、わしと戦うつもりか?」
高「ア?」
高雅が首だけを動かして巨人を睨む。
巨「ッ!?」
巨人は一瞬だけ怯えて後ずさりをした。
その瞬間だった。

・・・スタン

巨「!?」
いつの間にか高雅が巨人の後ろにいた。

そして、その剣には血が付いていた。
巨「・・あれ？」
突然、視界が傾き始めた。
何が起こったのかは全く分からない。
ただ、理解できず崩れ落ちていく。
すると、右目と左目の視界が滅茶苦茶になっていた。
それでやっと理解した。

自分が細切れになっている事を。

高「ハイ、オシマイ」
高雅が指を鳴らした瞬間、巨人が崩れ落ちてた。
巨人は叫ぶ事が出来ず、そのままバラバラなり、絶命した。
高「ハン、ヨワイナ」
蓮「すごーい。全然見えなかったよ」
高「ナンダ、キサマ？。オレ　ガ　コワク　ナイ　ノカ？」
ア「待って、レンタ君に手を出さないで！！」
高「ハ？。ソンナノ　オレ　ノ　カッテダシ」
ア「いいから止めて！！」
高「シラネエヨ」
高雅は蓮田に向けて黒い電撃を飛ばした。
とても蓮田には見切れない速さだ。
しかし、その電撃は蓮田に当たらず、後ろに倒れているログナに当たった。
ロ「うぎゃあああああああああああ！？」
ア・蓮「ログナッ！？」
ログナは一瞬で黒焦げになり、また気絶した。
ア「よくもログナを！！」
高「ハン、カンケイ　ナイナ。オレ　ガ　カンケイ　スル　ノハ『コロシ』　ダケダ」

ア「もう、許さない！！」
アリアは剣から人間の姿になり、腕を剣に変えて高雅に向けた。
ア「気絶させて元のコウガに戻す！！」
高「ムリダナ。モト　ノ　オレ　ハ　ゼツダイ　ナ　ダメージ　ヲ　ニナッテイル。ソレニ、オレヘ　ノ　コウゲキ　ハ　スベテ　モト　ノ　オレ　ガ　ウケル」
ア「そんな・・・嘘だよ」
高「ゲン　ニ　ホネ　ガ　クダケ　チッテイル　ノニ　タッテ　イル　ジャネエカ」
ア「え・・・嘘」
高「ホントウダ。オレハ　『コロシ』　シカ　カンケイナイ　カラナ」
ア「じゃあ、今、元に戻ったら・・・」
高「コイツ　ハ　シヌ」
アリアは絶句し、剣を下ろした。
そして、すぐに高雅の骨を再生しようとした。
しかし、高雅の骨が再生した感じがしなかった。
ア「どうして！？。どうして再生しないの！？」
高「ザンネン。コレ　ノ　オカゲデ　チカラ　ハ　キキマセン　ヨ」
そう言って首にぶら下げているネックレスを見せびらかす。
楽園の賜物である選別の飾りである。
ア「そんな」
高「モット　アソンデ　カラ　モドシテ　ヤルヨ。ソレマｄ・・ウグッ！？」
突然、高雅が頭を抱えて蹲(うずくま)った。
ア「コウガ！？」
高「クッソ・・・コイツ、モウ・・・ダガッ！！」
高雅はまた黒いオーラを放ち始めた。
完全に隙だらけの高雅を見て、アリアは動き出した。

ア「もらい」
高「!?、シマッタ!!」
アリアは高雅が持っていた選別の飾りを奪い取った。
そして、すぐに静寂と再生の力を掛けた。
高「クソッ!!」
ア「コウガ!!、戻ってきてコウガ!!」
アリアは高雅の肩を掴んで必死に呼びかける。
高雅はアリアを振り払えず、必死にもがいていた。
ア「コウガ、コウガ!!」
アリアは必死で高雅を呼び続ける。
次第に高雅の動きが鈍くなり、遂に動きが止まった
そのまま高雅は倒れていき、アリアの胸の中に落ちた。
ア「ひゃっ!?、コウガ!?／／／」
死んだように倒れていったが、高雅はすやすやと寝息を立てて眠っていた。
蓮「こうが兄ちゃん、大丈夫?」
ア「うん。寝てるみたいだから、そっとしておこうね」
蓮「わかった」
そう言うと、アリアは持っていた選別の飾りを高雅につけ直した。
レ「ん・・・んぐ・・何が起きたのだ?」
ア「あっ、レオ君起きたみたいだね」
レ「アリア殿・・・?、コウガ殿はどうしたのだ?」
ア「ちょっと色々とね」
高「・・・んん・・・?、柔らかい?・・って!?／／／」
目を覚ました高雅は一瞬で状況を理解し、アリアから飛び退いた。
ア「あっ、起きたみたい」
高「テメッ、何やってたんだよ!?／／／」
ア「?・・あっ、まさか私の胸を枕に寝てた事?」
高「ッ!?・・・この野郎。こっちは必死で意識を取り戻そうとしてたのに、疚(やま)しい事をしてたのか?」

ア「ち・・違うよ!!。ただ支えてただけだよ!!」
高「言い訳するな!!。一発殴らせろ!!」
ア「嫌だよ!!」
アリアは速度の力を使って高雅から離れた。
高「この野郎!!、逃げるんじゃねえ!!」
高雅は勝ち目が無いと分かっていてもアリアを追い続けた。
この騒動が落ち着くまで時間が掛かったのは言うまでもなかった。

# 無双と夢想編　その１４、いざ敵陣へ

やっと落ち着いた所で高雅は話を切り出した。
高「え～、見苦しい所を見せてしまって、すんません。それじゃ、今後の予定を発表しますか」
レ「どうするのだ？」
高「単刀直入に言うと、敵本陣に突っ込んで決着をつける」
蓮「何だか、かっこいいね」
高「カッコよく決まればな」
ア「でも、何か作戦があるの？」
高「んなもん、ねーよ。ただ、天国の残兵共が色々とやってくれてるから、どさくさに紛れて敵を撃破。これしかない」
エ「悪くねえ作戦だな」
レ「だが、相手はセバス殿だ。このような作戦はすぐに見破られるのではないか？」
高「ぶっちゃけ、どんな作戦もあいつに見破られるよ。だから、一番効率のいい作戦で行くしかないって訳だ」
レ「成程な」
レオは納得しながら頷いた。
高雅の考えに全員が納得し、高雅も頷いた。
高「じゃ、早速行くか」
ア「その前に、誰か一人忘れてない？」
高「ん？、これか？」
そう言って指を指のは真っ黒焦げになったログナの姿だ。
ア「そう、それ。どうするの？」
高「ん～、大体、これログナじゃないし」
ア「・・・へ！？」
高雅はそう言って黒焦げの塊に一発拳骨を入れる。
すると、丁度焦げた部分が綺麗に取れ、中からログナが出てきた。

と、思ったら、全く別の人だった。
蓮「ろ・・ログナ!?。変わったね!?」
高「違う。元々、こいつがログナの変わりだったんだ」
そう言って、高雅は虚無の力をその見知らぬ人に掛け、蓮田との契約を破棄させた。
高「これでよし」
レ「だが、雰囲気から力、蓮田殿との契約の力も全て同じだったぞ。それに、我の目には力を使っているように見えなかったが」
高「おいおい、忘れてねえか?。今のログナは記憶喪失中だろ?」
レ「そ・・そうだったな。だが、どうやって力なくログナ殿を真似たのだ?」
高「力じゃなかったら思いつくのは一つだけ」
ア「・・・能力だね」
高「そう言うこと。つまり、ログナはセバスがどっかにやったんだろうな」
蓮「え!?、だって寝て、起きた時に元に戻ってたんだよ」
高「その隙に入れ替えられたんだろう」
フ「で・・でも、おかしいです。真の契約まで真似るなんてできっこないです」
高「じゃあ聞くけど、ログナの真の契約を見たことがあるか?」
フ「それは・・・・」
フィーラは答える事が出来ず、口ごもってしまった。
高「つまり、適当な事でも誰も知らなきゃ気付かれないってことだろうな」
ア「不意打ちでも狙ってたのかな?」
高「さぁ?。取りあえず、本物のログナはセバスが知ってるだろうから、どっちみちやることは一緒だな」
エ「紳士の鼻を圧し折るか」
高雅は蓮田を抱え、レオに速度の力を分け、皆一斉にその場から消えた。

まだあるはずの天国への空間を目指して。

到着まで１０秒も掛からず、一行は止まらずに空間へ入った。
そして、着地した場所は火の海と化している天国だった。
高「ひえー、戦況が悪化してるなぁ」
ア「それでも、宮殿だけが燃えてないね」
レ「セバス殿が様々な力で守っておるのだろう」
蓮「今からあそこにいくの？。そこにログナがいるの？」
エ「感じたところ、門の前にいる一人が半数の天国兵を相手にしてるようだぜ」
フ「きっとあいつです。漫才コンビの一人の奴です」
レ「そのようだ。レーザーが乱れ舞っておる」
宮殿の入口付近から飛び出る幾多のレーザーがこちらからでも確認できていた。
レーザーは変幻自在に曲がり、辺りに落下しては火を噴き出していた。
このレーザーが火の海の原因だろう。
高「ひゅー、一秒に２０発のペースで出てるぞ、ありゃ」
ア「のんびり観察はいいから、早く行こうよ」
高「んじゃ、二手に分かれるか。えーっと、初っ端戦闘に行きたい人は挙手」
高雅の言葉に誰も反応せず、誰一人も手を上げなかった。

少しだけ寂しさを感じたのはきっと気のせいだろう。
エ「おい、魂は手を上げられねえぞ」
高「そうだった。じゃあ、エクスとフィーラは戦闘(こっち)に来るか？」
エ「おう」
フ「はいです」
高「決まりだな。俺ら（高雅・アリア・エクス・フィーラ）は正面のとこで暴れて来る。その間に、お前ら（レオ・蓮田）が裏から侵入しておいてくれ」
レ「バランスが悪いと思うが、戦闘を考えると問題ないか。では、我は蓮田殿と裏に回る」
蓮「行ってきまーす」
レオは別れ際に高雅から様々な力をもらってから蓮田を連れて裏に回りに行った。
高「じゃ、こっちはこっちで行くぞ」
高雅もレーザーが飛び交う所目掛けて飛び出した。

約十秒で到着し、レーザーを出している本人の目の前に着地した。
高「おい、いい加減にしろ」
突然、現れた高雅に兵共は混乱していた。
そんな中でも高雅は構わず、目の前の敵に集中していた。
マ「おぉ、こっちに来たか。てことは、そろそろ決着のときかぁ？」
高「そのつもりで来たんだが」
マ「うっし、上等ぉ！！。掛かってこいやぁあああああああああ」
そう言いつつ、高雅に向けて一寸の狂いもないレーザーを放った。
高雅は横に避け、そのままマックに接近した。
ちなみに、後ろにいた兵達は言うまでもなく抹消されました。
高「カス一つ残さないとは、とんだ代物だな」
マ「へへん、お前らの力とは別だからなぁ。能力は便利だぜ」
高「能力とはどうしようもないな。純粋に倒すしかな」

マ「無理だね。無理無理無ーー理」
そう言ってレーザーを連射しまくる。
後ろにいる兵共はもちろん巻き添え。
二人が争って弱った後に割り込んで二人を倒そうと狙っていたが、
近くに居れば確実に死ぬことが分かり、急きょ逃げだした。
高雅は光速で移動し、レーザーを避け続ける。
高「くそっ、なんて数だ」
ア「・・・おかしい」
高「ん?」
ア「だって、沢山レーザーがあるけど、マックはそんなにレーザーを撃つ動作なんかしてないよ」
高雅が避けてる最中にアリアは敵を観察し、それを見抜いていた。
改めて言われ、高雅はマックの動作に注意しながらレーザーを避けてみた。
アリアの言うとおり、マックは大量のレーザーに関わらず、それ程撃っているように見えなかった。
高「能力か?」
ア「だろうね」
マ「・・・んんん~?、そろそろ気付いたか?」
突然、マックは攻撃を止めた。
高「ん?、どうした?」
マ「いや~、あんまり連発してるとタネがバレるんじゃねえかなっと思ってさ~」
高「あっそ。なら、気付く前に倒すだけだ」
高雅はその場から残像を残して消えた。
そして、マックの後ろについていた。
高「もらい!!」
高雅は剣をふるっていた。
完全に捉え、避ける事は出来ない。
高「・・・・なっ!?」

しかし、気付いた時には目の前にマックが立っており、元の位置に戻っていた。
高「な・・何だ!?」
マ「自分に攻撃を当てることは不可能。そして、この攻撃を避ける事も不可能」
マックは手をかざし、レーザーを撃ち放った。
さっきまで連射していたのとは違う、かなり濃密で極太のレーザーである。
高「こんなもん、普通に避ける」
高雅は真横に速度の力で移動し、射程範囲から離れた。
そのはずだった。
高「・・!?、うお!?」
完全に離れていた。
なのに、また同じ場所に立っていた。
何度も射程範囲から遠のこうとするが、何度も戻されてしまう。
高「畜生!!」
高雅は避けるのを諦め、創造の盾で真っ向から受け止めた。
アリアと二人合わせた強力な盾だ。
だが、かなり威力の高いレーザーの為、盾が持ちそうになかった。
高「ぐっ・・・くそっ!!」
ア「お・・重い・・」
少しずつ後ろに引きずられ、バランスが取りにくくなる。
一瞬でもバランスを崩したらそれで最後だ。
マ「レーザーを打っている間、自分が動けないと思ったぁ?」
高「なっ!?、やべっ!!」
横からマックがやって来ていた。
レーザーと向き合うのが精一杯の高雅は、他の攻撃を防ぐ方法がない。
マックが腕を鋏に変えて接近しているのを見て焦る。
マ「また、首をちょん切ってやるぜぇ・・・うっ!?」

鋏を大きく開け、高雅の首を捕えようとした瞬間、マックは頭を抱えて蹲(うずくま)りだした。
高雅は一瞬何が起きたか分からなかったが、飽くまで一瞬だけだった。
高「フィーラか？」
フ「ピンポンです。ボクの夢幻の力です」
エ「だが、魂の状態では力は激減してる。持って後十秒だけだぜ」
高「そうかい」
十秒。
それは高雅に取って十分過ぎる時間だった。
高「アリア、一秒だけ一人で耐えれるか？」
ア「やらなきゃやられるでしょ。だったら、耐えてみせるよ」
高「頼むぜ」
高雅は盾から後ろに一歩下がり、少しだけ黒いオーラを出した。
理性が保てるぐらいの少量である。
一秒たって瞬間、盾が砕け散ってしまった。
高「おらぁ！！！」
そして、思いっきり剣を振るった。
その瞬間、高雅の目の前にあるレーザーが真っ二つに切れ、高雅の両サイドを通り過ぎていった。
とんだ力技である。
フ「やったです！！」
エ「へー、自分の闇を一応は操れたのかよ」
高「少しだけだけどな」
マ「ぐぐぐ・・・なっ！？、レーザーが消えちまってるぅぅぅぅ！？」
夢幻から解放されたマックは目の前に悠々と立っている高雅の姿を見て驚きの声を上げていた。
高「甘かったな」
マ「おいおいおいおい、１０倍レーザーだったのによぉ・・・まぁ、

まだ増やせばいいか」
高「今のを超えるレーザーを撃てるのかよ。とんだ化け物だ」
マ「人間のくせに天界の事に首を突っ込む方が化け物だと思う自分」
高「好きで首を突っ込んでいる訳じゃねえよ。お前らが喧嘩を売ってきたんだろ?。それを買っただけだ」
マ「この商品に保証はないぞぉ」
高「上等ッ!!」
高雅は再びマックに接近し、マックはレーザーで応戦し始めた。

# 無双と夢想編　その１５、正義は勝つ

裏に回っているレオと蓮田はなるべく兵に見つからないように気配を消して移動していた。
しかし、蓮田はそんな方法を知らない為、普通に歩いていた。
レ「蓮田殿、もっと姿勢を低く」
蓮「えっと・・こう？」
レ「そうだ。敵に見つかってはログナ殿に会うのが遅れてしまうぞ」
蓮「そっか。そうだった」
レオの言う事を素直に聞いていた。
そのお陰で、レオは蓮田に厳しく怒る事ができなかった。
レ「では、行くとするか」
蓮「早くログナに会いたいなー」
そう言って呑気にレオの後ろをついて行く。
レ（こんな戦の中でも緊張感が全くないな。まぁ、変に緊張するよりかはマシだな）
蓮「？、どうしたの？」
レオが蓮田の事を思っていたのが顔に出ていたのか、そう聞かれてしまった。
レ「何でもない。いつ流れ弾が来るか分からないから気を引き締めろ」
蓮「うん」
敵に気配を悟られないように慎重に進む。
そのお陰か、裏口の近くまで何事もなく辿り着いた。
しかし、そこで問題が起きた。
レ「・・・兵が集まっておる。これではどうにも中に入れないぞ」
裏口付近には天国の残兵共がギッシリと集まっており、中に入れる状態ではなかった。
蓮「どうしよう・・・」

レ「落ち着くまで待とう。無暗に出るのはまずい」
そう言って待機し始めた。
もちろん、レオは周りの警戒を怠ってない。
そんな時だった。
蓮「・・?、ねえ、何かこっちに向かってくるよ」
レ「?」
蓮田が指を指している方を見ると、確かに、ドデカイ砂煙を上げてこちらに向かってくるのが見えた。
レ「何だあれは・・・?」
砂煙は徐々に巨大化し、遂に砂煙を上げている原因が見えた。
影からすると、人型である。
しかも、大声を上げて兵達に注目を浴びせられていた。
その声から判明すると、レオも知っている人であった。
A「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああああ、二度も死にたくねえええええええええええええええ」
必死こいて走るAの姿は天国兵の的となりつつあった。
兵A「おい、あいつ誰だ?」
兵B「天使ではないな。見たことも無い」
兵C「きっとセバス野郎の味方だ!!」
兵D「そうと決まれば応戦だ!!」
裏口付近にいた大量の兵共が一人残らずAに駆けだした。
それに気付いたAは地面を抉りながら急停止した。
A「うお!?、何か来た!!。しかもやばい雰囲気だ!!」
後ろにはセバスチャン(創造)、前には大量の兵。
どう考えても穏やかではない。
A「畜生おおおおおおおお。俺の天国ライフは地獄じゃねえかああああああああああ」
レ(A殿、悲惨だな)
そんな同情をしているが助けようとは全くしてない。
むしろ、利用して兵を消してもらおうとしていた。

レオの思惑通り、Aは方向転換して別の場所へ逃げていった。
レ「よし、これで中に入れる。行くぞ、蓮田殿」
蓮田に呼びかけるも、なかなか返事が返ってこない。
気になって蓮田のいる方を向いてみると、そこにいるはずの蓮田がいなかった。
レ「蓮田殿!?、どこに行ったのだ!?」
周りを見渡すと、蓮田がいち早く宮殿に向かっているのが見えた。
さっきは呑気に会いたいと言っていたが、実際は焦っているのだろう。
レ「くっ、世話が焼ける!!」
自分も急いで中に入ろうとした。
だが、すぐ目の前に突如砂煙が舞い上がった。
レ「ぐおっ、何だ!?」
目に砂塵が入らないように両手で顔を隠す。
砂煙が徐々に静まり、両手を放すと人影が見えた。
だが、さっきみたいにバカげた光景ではない。
最も、Aにとって馬鹿げた事ではないが。
レ「貴様、何ものだ!?」
立っているのは只者ではない雰囲気を纏っている。
それは一言も喋らないエクスの姿だ。
それを感じ取ったレオは一瞬で戦闘態勢に入った。
レ「?、見たことがあるような・・・」
エ「・・・・・・・・・・」
無言のエクスはただ剣を構え、戦う気を見せているだけだった。
レ「詮索は後だ。応戦する!!」
レオは高雅からもらった力を使ってエクスへ立ち向かった。

変わって高雅の方面。
高「ちくしょぉ！！。攻撃が当たらねえ！！」
マ「ちくしょぉ！！。攻撃が避ける！！」
高「舐めとんのかテメェ！！！」
ア「コウガ、落ち着いて」
一方的に攻めてはいるのだが、攻撃が全くと言っていいほど当たらなかった。
完全に狙いを定めているのだが、一瞬にして攻撃を消されていた。
高「全く、どうなってやがる！？」
マ「全く、どうなってんだろうな！？」
高「テメェ、本気で殺されたいようだな」
ア「コウガ、挑発に乗り過ぎ・・・」
アリアは呆れてため息を零しながら静寂の力を強めた。
それに気付いた高雅はやっと我に返り、自分を情けなさを知った。
一度、深呼吸をしてから相手を見る。
高「あいつ、どうやって攻撃を消してるんだ？」
ア「消失や破壊を使っているようには見えないし」
じっくり観察していると、マックはレーザーを放つ。
高雅は避けずにレーザーを真っ二つにしてやり過ごす。
マ「う～ん、レーザーが当たらないと勝てないなぁ」
わざわざ顎（あご）に手を当ててから考える素振りをする。
マ「ま、このまま過ごせば、いずれ勝てるか」
高「？」
不可解な言葉を言って一人勝手に納得するマック。

だが、高雅はそんな言葉も聞き逃したりしない。
高（持久戦に強いのか？。だとすると、早く決めた方がいいな）
高雅はさっきよりも数倍力を込め、マックを斬りに掛かった。
しかし、マックに接近したはずなのに、元の位置に立っている姿になっていた。
マ「無駄無駄ぁ。自分に触れることは断じて不可能さ」
だが、高雅は攻撃を止めない。
何度も何度も接近し、そしてその分、元の位置に戻された。
斬撃を創って飛ばすなど、飛距離のある攻撃を繰り出すも、全て消される。
敵のレーザーを避けようとしても、必ず当たる（だが、斬ってやり過ごしている）。
高雅はそれを繰り返し、今までのマックの事を思い返しながら謎を解いていた。
高「・・・同じ位置・・・消える・・・あいつの能力・・・」
マ（まずいな。少し把握されつつあるぞぉ。そろそろトドメと行くか）
マックはレーザーを放ち、高雅を追い詰めていく。
そして、トドメを刺すポイントまで追い詰めることに成功した。
マ（よし、ここなら最高のレーザーが撃てるＺＥ！！）
心でガッツポーズをして、移動しようとする高雅をそこに戻す。
高「？」
マ「さよならだ。今度は斬る事はできないだろうな」
マックは高雅に狙いを定め、レーザーを撃つ準備をし始めた。
動けない高雅は同じように剣を構え、迎撃の準備をしていた。
マ「喰らうがいい。百発分のレーザーだ！！」
そう言って放たれたレーザーは異常なほど濃い色だった。
そして、太さも上から見た東京ドーム並みにある。
地面を抉りながら着実と高雅に接近していた。
高「おいおい、何だよこれ！？」

ア「強大過ぎるよ！！」
流石の高雅もどうする事も出来ない。
悪あがきに破壊や静寂を入り混ぜた盾を創造する。
だが、盾は触れただけで粉砕し、高雅を守るものはなくなった。
高「うあちゃ～、どーしょ？」
ア「きゃあああああああああああああああ」
高雅は気の抜けた声を出し、アリアはもう叫ぶしかなかった。
だが、確実に詰んだと思われているのに、高雅の顔色は余裕を見せていた。
高「もちろん、対策はあるけどな」
ア「きゃあああああ・・・ってええ！？」
叫んでいたアリアは目を丸くして驚いた。
そして、数秒後にレーザーは巨大な傷跡を残して消えた。
マックの目の前にはまるで水の抜けた巨大な川が出来上がっていた。
マ「ふぅ～、正義は勝つ！！」
そう言って宮殿にVサインを送った。
高「正義は勝つ？。当たり前だろ。人それぞれ正義はあるからな」
マ「・・・ゑ！？」
後ろからあり得ない声が聞こえ、振り返ると首に剣を突きつけている高雅の姿があった。
マ「な・・何でぇ！？」
高「タネが分かれば対策は簡単だ。アリアの力は何だって出来るからな」
マ「どしてぇ・・・何で分かったんだぁぁ！！！！！？？？？？」
異常なまでに大きな声を上げて悔しがる。
高「ちょっとばかし観察してたんだ。まぁ、それはお前も気付いていたと思うが」
マ「何故だぁ！！？？。見破ったとしてもどうやって回避したんだぁ！！！！？？？？」

高「じゃあ、解説してあげますか」
高雅は剣を突き付けたまま一言だけ告げた。
高「俺の過去を消した」
マ「げぇえええええええええ!!??」
高「お前は過去を利用できるようだな。俺を過去に飛ばした時もそうだし、さっきの攻撃もそうだったな。だって、あそこが一番レーザーを撃った事がある場所だったからな。過去のレーザーを出せば自然と重なって強くなる戦法だろ?」
マ「ももももっももっもしかして、気付いていた?」
高「当然。攻撃も消すのも、過去にそれが無かった時に戻せば消えるからな。俺が移動できないのも、過去に戻しているからだろ?」
マ「参りましたぁ!!」
マックは首に剣を突きつけられているのに、一瞬で土下寝の体勢になった。
高「うん、許す訳ねえだろ!!」
セバスの仲間として許す高雅ではない。
マ「待って、待てって!!。自分はセバス様に脅されてただけなんだって!!。手伝わなければ家族を殺すって脅迫されて仕方なく手伝ったんだ!!」
高「一つ言っておく。まともな嘘を吐きやがれ!!!!」
高雅はマックの心臓を貫き、マックを討った。
その後、マックの宝石を探して破壊し、マックは完全に消滅した。
高「ふぅ」
フ「お疲れです」
エ「僅かな時間で敵の戦術を見切るとは、お前はほんとすげぇな」
高「どういたしまして。だけど、のんびり賞賛を浴びてる場合じゃない。さっさと親玉を討ちとりますか」
ア「でも、天国兵は中にはいないよ、きっと」
高「この際、当初の方法はどうでもいい。敵の残す駒は、あとエクスだけだろ」

それを聞いたフィーラは声を裏返して高雅に訴えかけた。
フ「エクスを殺すです!?。助けないです!?」
高「いや、そう言うつもりじゃねえけど・・・エクス、お前はどうして欲しいか?」
エ「本望は体が欲しいが、この際、我(わ)が儘(まま)は言わねえ。もし遭遇しても、思う存分戦え」
高「そう言われるとありがたい。だけど、少しはいい解決法を探すさ」
フ「では、宮殿へ行くです!!」
ア「気を付けて。セバスチャンの創造がどこに潜んでいるか分からないから」
アリアの忠告を聞き、皆はさらに気を引き締める。
そして、宮殿の扉を蹴り開け、中へと駆け込んだ。

## 無双と夢想編　その１５、正義は勝つ（後書き）

ちょっとした余談。

高「正義は勝つ？。当たり前だろ。人それぞれ正義はあるからな」

→気付いた人もいると思いますが、あの海賊漫画のセリフの一部のパクリです。

本来はそのまんま使おうと思っていましたが、さすがにそれはまずいと思い、ほんの少し変えました。

# 無双と夢想編　その１６、宮殿内行動（前書き）

最近、５日更新になっている自分が情けなく思う。
散々、４日更新していたのが、いきなり５日更新にするなんて・・・
必死に４日に戻そうとしていますが、可能性は絶望的だと思います。
勝手な作者ですいませんｍ（＿＿）ｍ

# 無双と夢想編　その16、宮殿内行動

高雅は迷うことなくある場所へ向かう。
高「次、どっち？」
ア「今度は左」
分かれ道に辿りつく度にアリアに尋ね、速度を落とさずに曲がる。
そして、見覚えのある巨大な扉に辿り着いた。
高「見つけた！！。玉座だ！！」
高雅は止まる事を知らず、巨大な扉を蹴り飛ばす。
中に入ると歓迎するのは巨大な階段とその天辺にある玉座だけだった。
高「あれ？」
高雅はてっきりセバスチャンがいるのだと思っていたので、少し拍子抜けした。
辺りを見渡すも、天使の影一つない。
フ「誰もいないです」
エ「他に当てはねえのか？」
高雅のポケットから二つの光が現れ、それぞれが口を開いた。
高雅の速度について来るのが大変と言う事でポケットに入れた置いたのだ。
ア「う～ん、他に当てとなると・・・特に思いつかないけど」
高「エクス、お前の力でセバスチャンの場所は分からねえのか？」
エ「出来たらとっくにやってる。この中では何故か力が使えないんだ」
ア「セバスチャンも易々と見つからないようにしてるって訳ね」
高「だっるっ。さっさと見つかれって言うんだよ・・・ったく」
ため息を零しながら頭を掻き、愚痴を零す高雅。
取りあえず、ここに用は無いので、回れ右をして戻ろうとした。
高「・・・ん？」

だが、目の前には壊れた扉ではなく、鉄壁の扉と変わっていた。
高「・・・や～な予感・・・」
高雅の嫌な感は良く当たる。
突然、天井から大量の水が滝のように落ちてきた。
高「おいおい、宮殿が壊れるぞ。自分の拠点を壊す気か？」
しかし、周りの壁はセバスチャンによって強化されている為、壊れることも漏れることも無い。
異常な水が一瞬で広い玉座を水浸しにし、高雅は何とか浮いているも、既に天井に頭がついていた。
高「ぷはっ、そろそろ空気でも創ってくれ」
ア「それが・・・できない」
高「なっ！？」
ア「この水、静寂の力が掛かってて、創造が使えないよ」
高「ここで溺死しろと。ふざけｒぶくくく・・・」
ア「あぷ・・・・」
高雅の声は完全に沈みきった玉座の水にかき消された。
魂の二人は水中の中でも平気だが、目の前の二人を見殺しにしたくない。
ふ「このままでは二人が死ぬです！！。どうするです！？」
エ「慌てんじゃねえ。今、出口を探してる！！」
すると、エクスは一目散にある壁の場所へ飛んで行った。
エ「おい、聞こえるか！？。ここの壁が一番、脆(もろ)い場所だ！！」
それを聞いた高雅はすぐさまエクスの場所へ泳いで行き、剣を構えた。
力を使えないが全力で壁に剣を振ったが、易々と壊れてはくれない。
ア（コウガ・・私・・・もう・・）
高（後少し耐えろ！！。意識を持て！！）
フ「頑張るです！！」
エ「もう少しだ！！。その先は空洞だから水が抜けるはずだ！！」
高雅も既に限界に近かった。

必死に斬り続けると、遂に罅がはいった。
小さな罅は水圧によって大きくなっていく。
そして、罅は穴へと変化を遂げた。
高（うっしゃ！！・・・って！？）
心でガッツポーズをするも、そんな余裕は殆どなかった。
今度は穴に吸い込まれないように泳がなければならない。
だが、高雅は力を使ってない為、そんな体力や酸素はもう残っていない。
高（くそ・・・耐えられねえ・・・）
フ「コウガ様！！、あそこが陸になってるです！！」
フィーラは高雅が見えるように辺りを飛び回る。
そのお陰で、高雅は階段の天辺が陸になっているのに気付いた。
高（最後のひと踏ん張りだ！！）
高雅は限界の体を無理やり動かして、流れに逆らって泳ぐ。
フィーラとエクスの応援を受けながら懸命に泳ぐ。
意識はもう半分は飛んでいる。
それでも、高雅は腕を回し続ける。
そして、遂に陸に手が届いた。
高雅は陸に上がり、そして極限の疲労が遅い、倒れ込んだ。
高「げほ・・・ごほ・・あ〝ー、一生分の気力を使った気がする」
フ「よかったです・・・ほんとに・・」
高雅とアリアを余程心配していたのか、フィーラの声は少し震えていた。
高「フィーラのお陰で生きてんだ。ありがとな」
フ「うう・・・どういたしましてです・・」
エ「なぁ、さっきからアリアの声が聞こえねえぞ」
高「何！？」
高雅はすぐに剣を取り出し、アリアを呼び掛けた。
しかし、返事は全く帰った来なかった。
フ「窒息してるです！！。早く助けるです！！」

高「どうやって剣に救急蘇生法をすればいいんだよ!?」
エ「落ち着け。大体、契約者ならお前がアリアを変えればいいだろ？」
高「そ・・そうか」
高雅は言われた通りにアリアを人間の姿にした。
エ「ほら、さっさと救急蘇生法だろ」
高「あ・・ああ・・・」
自分から言っておきながら、いざって時に戸惑い始めた。
しかし、目の前の死の淵にいるアリアをほおっておく訳にはいかない。
高「・・・んじゃ、やるか」
高雅は意を決して蘇生法に移った。
最初は意識があるか、呼吸をしているかを調べるのだが、一目瞭然で省いた。
そして、顎を上げて気道を確保し、人工呼吸をする。
高「しっかりしろ!!」
次に呼びかけながら必死に胸骨圧迫をする。
そして、再び顎を軽く上げ、人工呼吸をする。
それを数回繰り返した。
ア「・・・ぐ・げほっ、ごほ!!」
遂にアリアは息を吹き返し、水を吐きだした。
高「おおっ!!。息を吹き返した!!」
ア「げほっ・・・ふぇ？・・コウ・・・ガ？」
意識が朦朧(もうろう)としているなか、ある事に気が付いた。
自分の胸に高雅の手がある事。
ア「ッ!？／／／。キャアアアアアアアアアアアア!!!／／／」
アリアは起きたばっかりだと言うのに高速で高雅との距離を取り、胸を隠した。
高「おお、思ったより元気だな」

ア「ななななななななっ何をしたの!?／／／」
高「普通の蘇生法だけど?」
ア「そそっ蘇生法って、あの!?」
フ「ふふふっ、中々熱いキスだったです」
フィーラが困惑しているアリアにある意味事実的な事を伝える。
さらに、アリアの混乱はさらにヒートアップ。
ア「ききッキス!?。寝込みを襲うなんて酷いよ!!」
高「ちょ!?、何勘違いしてんだよ!!。大体、こんな状況で呑気に女を襲うか!!」
エ「でも、（救急蘇生法の）事後だし」
ア「～～～～ッッッ!?／／／」
高「おい!?、話をこれ以上ややこしくするなぁ!!!」
エ「いや～、だってさ、リアクションが面白過ぎるぜ」
エクスは何の悪気が無いように笑っていた。
高雅はエクスを殴ろうとするも、簡単に避けられた。
ア「事後・・・じご・・・・ジゴ・・・・／／／」
高「おい、アリア!!。いい加減こっちに帰って来い!!!。こんな呑気な事をしている場合じゃねえだろ!!」
ア「う・・うるさい!!。コウガのエッチ!!／／／。私の初めてをどうしてくれるのよ!?／／／」
高「だから違うっての!!。嘘だ!!。誤解だ!!。架空だ!!」
フ「アリア様とコウガ様が思った通りの反応で面白いです」
エ「右に同じ」
高「この楽園組がぁぁぁああ・・・ああ・・・」
高雅は大声を上げた途端、バタリと倒れ込んだ。
エ「疲労がピークを越えたな。まぁ、そりゃそうだわな」
ア「えっ!?」
フ「自分の体は限界なのにアリア様の事を必死に助けたのです。気絶しても当然です」
ア「えっ!?・・・え!?」

アリアは訳が分からず二つの魂を交互に見る。
エ「だからな、こいつは自分よりお前を大切にしたんだよ」
ア「え・・あ・・ほんと？」
エ「何でこれだけは真実を問うんだよ？」
フ「倒れてるのが証拠です」
ア「そっか・・・」
アリアは高雅にゆっくりと近づき、顔を覗き込んだ。
高雅は安心しきった顔でぐっすりと眠っていた。
ア「・・・ふふ、そっかぁ・・」
エ「静寂が弱まったら、すぐに気力を再生させてやれよ」
ア「うん」
アリアは高雅の頭を軽く持ち上げ、膝枕をしてあげた。
ア「別に・・・言ってくれたら・・・「ゴホンッ！」はっ！？」
エ・フ「ジッーーーー」
ア「な・・何かな～？」
フ「アリア様のエッチ」
エ「右に同じ」
ア「ーーーーーッ！？／／／」
アリアは顔を真っ赤にし、俯いた。
そんな様子にエクスとフィーラは内心笑っていた。

蓮「ログナーー!!、どこーー!?」
蓮田は見つけた部屋全てを調べ、ログナを探し回っていた。
ちなみに、レオと逸(はぐ)れていることは気付いていない。
蓮「ログナー?」
扉を開けながら名前を呼び続ける。
しかし、数百もある扉からログナを探すのは途轍(とてつ)もない苦労を用いた。
蓮「はぁー、どこにもいないよ・・・」
蓮田は疲れ、壁を背にして座り込んだ。
蓮「ふぁ〜・・・ん〜・・・」
大きな欠伸をして目を擦(こす)る。
現世では、今は夜も遅い時間帯。
蓮田にとって既に睡眠の時間に入っている時である。
蓮「・・・すぴー・・・」
遂に限界が訪れ、蓮田はその場で眠ってしまった。
外で暮らしている蓮田にとって、この世はどこでもベッドになるのだ。
ましてや室内だと違った寝心地があるのだろう、蓮田はすやすやと気持ちよさそうだった。
そんな中、廊下から誰かが近づいて来ているのを蓮田は知らなかった。

裏口の入口では激戦が繰り広げられていた。
レ「うおおおおおおおお」
エ「・・・・・・・」
互いに見えない速さでぶつかり合い、その度に激しい爆音が鳴り響いていた。
まさに、龍玉の様な激戦である。
レ「くっ、出来るな」
エ「・・・・・・・」
レオは全力を尽くしているが、エクスは表情を全く変えずにいる。
レ「貴様、さっきから一言も話さないな。まさか、声が出せないのか？」
エ「・・・・・・・」
エクスは何も答えないし、攻撃にも出ようとしない。
レ（どうやら、時間稼ぎが目的みたいだな。ならば、強行突破あるのみだ）
レオはエクスの横を大胆にも通り過ぎようとした。
しかし、エクスは動かず、大剣を振り上げた。
振り下ろした瞬間、辺りに巨大な地震が発生し、レオはバランスがとれずに転んだ。
レ「ぐおっ！？。なんて揺れだ！？」
レオは立ち上がれず、周りを確認する。
不思議な事に近くに立ててある絵画などは全く揺れていない。
それでレオはすぐに判明した。
レ「この揺れ、我だけが受けているのか！？」
エクスは平然と歩き、レオに近づいてゆく。
激しい揺れはレオを這いずることすらさせない。
エクスはレオの真ん前で立ち止まり、大剣を振り上げた。
レ「くっ、させぬぞ！！」

レオは首だけを動かし、エクスの足を噛んだ。
そして、エクスからある力を奪った。
エ「ッ！？・・・」
エクスはそれに気付いたのか、すぐに大剣を振り下ろした。
しかし、レオは既に距離を取っており、そのまま宮殿の中へ消えていった。
エクスは大剣を消し、すぐにレオを追い始めた。

# 無双と夢想編　その17、絶影

数分後、アリアは力を取り戻し、高雅に再生の力を掛けて起こした。
高雅はすぐに天井を突き破って玉座から出た。
そこから、虱潰(しらみつぶ)しに部屋を見つけては確かめての繰り返しだった。
高「あー！！、もう！！、面倒くせえな！！」
ア「怒らない怒らない。そんな感情的な状態でセバスチャンを見つけてもすぐにやられるだけだよ」
高「その時は静寂で落ち着かせればいいだろ」
ア「しょーもない事で力を使わない」
高「へいへい」
高雅はどうでもいい返事をして部屋の扉を開けた途端、奥から矢が飛んで来た。
高雅は驚く様子もなく、簡単に矢を止めた。
高「初歩的な罠だな」
フ「あれ、紙が結ばれてるです」
高「矢文か」
エ「矢先に毒を塗った矢文とは、嫌な渡し方だな」
高「同感」
高雅は結ばれている紙を解(ほど)き、内容を確認した。
『この手紙を読んでいる時、私はあなたの後ろにいます。ｂｙセバスチャン』
高「怖ッ！？」
フ「こ・・コウガ様！！、後ろ！！」
高「マジッ！？」
高雅が一瞬で振り返ると、そこには想像していたものが立っていた。
セ「どうも」
高「うおぉぉぉおおおお！？」
高雅は驚いて後ずさり、部屋の中へ入った。

その時に高雅は気付いた。
これは部屋に入れる為の罠だってことに。
セ「フフフフ」
高「あっ！！、テメッ！！」
セバスチャンはゆっくりと扉を閉めた。
その時、セバスチャンの顔は妖しく笑っていた。
高雅はすぐに扉を開けようとしたが、ビクともしなかった。
破壊や消失の力も使ったのだが、全く効いていなかった。
高「くそっ！！、どうなってやがる！？」
ア「閉じ込められちゃった！？」
高「そのようだな」
フ「コウガ様！！、部屋の奥に何かいるです」
高「ッ！？」
高雅は部屋の奥に目をやると、そこには妖しく光る赤と青の二つの光が見えた。
低く喉を鳴らし、徐々にこちらに近づいていた。
高「ったく、これが目的かよ！！」
高雅はすぐに剣を構え、殺気を解き放つ。
ア「・・・・・？」
フ「気をつけるです。ここは暗くて視界が悪いです」
高「分かってる」
すると、光が揺らめき、突然とんだ。
高雅は目でそれを追うと、壁を蹴っていきなり接近して来た。
高雅は飛び上がり、方向の力を使って天井に着地する。
やっと目が慣れてきて、敵の姿を確認することができた。
高「なっ！？、ナルガｋ「おおっと、自重自重」すんません」
ＮＧワードを言いかけた高雅をエクスが遮ったが、多分、４割は理解したでしょう（笑）。
四足で立つ黒い龍、鋭い眼光で突き刺す視線。
違う点と言えば目の色だけ。

そう、作者の完全なパクリである（笑）。
高「取りあえず、あの迅〇もどきをどうにかしないとな」
龍は辺りを見回し、高雅を探していた。
特に見失うような行動はしていないのだが、何故か龍は高雅を見失っていた。
フ「コウガ様、あいつに夢幻を掛けたのです」
高「サンキュ。じゃ、さっさと終わらせるか」
高雅は方向の力を解き、そのまま龍の上を落下していく。
落下速度をプラスした突きをするつもりである。
高「終わりだ！！」
狙いは完璧。
誤差が少しあっても首の切断は確実だった。
だが・・・
ア「ダメーーーー！！！」
高「えええっ！？」
突然、アリアは人間の姿になり、高雅にしがみ付いた。
高雅は訳が分からず、そのまま龍の上に落下してしまった。
高「おい、何しやがる！！」
ア「ダメ！！、殺しちゃダメ！！」
高「意味が分からｎ「ギャオオオオォォォォ」ぬわっ！？」
龍が背中に乗っている高雅を吹き飛ばす為に、後ろ脚で軽くはねた。
高雅は着地したが、アリアは失敗し、地面に倒れた。
高「何やってんだよ！！」
ア「いたた・・・だってあの龍から殺気が感じないよ」
高「そりゃ、そうだけどよ、めっちゃ攻撃してたじゃん」
ア「分かってる。でも、何だかやらされてる感じがするのよ」
高「？」
ア「上手く言えないけど、とにかくお願い、殺さないで」
アリアは必死に高雅に懇願する。
高雅は横目でまだ夢幻に掛かっている龍を見ながら頭を掻きだした。

高「・・・分かったよ。殺しはしない」
それを聞いた途端、アリアの顔が明るくなった。
高「取りあえず、気絶させるか」
ア「うん」
アリアは剣になり、高雅は静寂の力を剣に込め、龍に接近した。
その時、フィーラの夢幻が切れたのか、龍が高雅の方を見だした。
高「遅せぇよ!!」
高雅は龍の顔面を剣の柄で殴った。
龍は後ろに大きくのけぞった後、力を失って倒れ込んだ。
気絶はしてないが、当分起き上がることは不可能である。
高「これでよし」
ア「ありがとう、コウガ」
エ「これが吉と出るか、凶と出るか」
高雅は剣を腰に刺し、もう一度、龍を窺った。
高「・・・?」
すると、龍の目はこの世に絶望していた。
その目を見た高雅は無性に心が痛んだ。
高「・・・・・・」
フ「?、どうしました、コウガ様?」
すると、高雅は龍の顔の近くに腰を落とし、話し掛けた。
高「・・・何かあったのか?」
優しく、頭を撫でながら問う。
龍「・・・」
高「まあ、答えるなんて思ってないけどな」
龍「・・・殺すがよい」
高「あちゃー、今のセリフ、フラグだった」
龍「殺ろせ、もう、短い命じゃ」
高「ゴメン、意味が分からんから殺せん」
龍の言動に困惑しながら、高雅は龍が喋っているシュールさに驚いていた。

ア「ねえ、どうしてそんなこと言うの？」
龍「さっき言った通り、もう死ぬのじゃ。お主を殺すように言われたが、無理だったら体内にある自爆装置が作動するのじゃ」
高「ナ・・・ナンダッテー・・」
ア「全然緊張してないね」
高「そりゃあ、もう、だってねぇ」
龍「？」
龍は意味が分からず、首を傾げる。
その行動に高雅とアリアは笑っていた。
龍「何が可笑しいのじゃ？」
高「あー、虚無も打ち込んだから」
龍「なっ！？、虚無じゃと！？」
高「いやー、セバスチャンだと静寂だけじゃ無理だと思って虚無も使ったんだ」
ア「念には念をってね」
龍「じゃあ・・・まさか！？」
高「うん、お前の怪しいものは全部虚無で消した。その自爆装置もな」
龍「な・・何故じゃ！？」
高「う～ん・・・気紛れ？」
ア「――って言うのは嘘で、優しいコウガが悲しい顔をしたあなたの命を救いたかったのよ」
高「ちょ・・テメッ！？」
龍「・・・・・・・そうか」
高「こら、納得するな！！。気紛れだから気にするな！！」
ア「やーい、ツンデレコウガ」
高「さーて、今回は拷問でもしてやるか」
ア「あっ、やばっ」
アリアはすぐに速度の力を使って逃げようとしたが、既に高雅に捕まっていた。

懸命に振り払おうとするが、全く離れない。
高「さーて、まずは軽く火炙(ひあぶ)りから」
ア「ちょ！？、シャレにならないって！？」
高雅のどす黒い笑みにアリアは自然と冷や汗をかき始めていた。
ア「ちょっと、そこの龍、助けてよ！！」
龍「え・・えええええ！？」
アリアは動けるはずもない龍に助けを求めていた。
突然声を掛けられた龍はかなり動揺していた。
エ「おら、ストップしろ！！。そんな呑気な事をしてる場合か？」
そこに（アリアにとっての）救世主のエクスが止めに掛かった。
アリアは一瞬だけ、エクスが希望の光に見えたとか。
エ「やるなら拷問ではなく、ギロチンでサクッとやれ」
高「ナイスアイデア」
ア「もっと大変な事になったぁあああああ！？」
アリアは希望の光を一瞬で絶望の光と見たとか。
フ「全く、楽し過ぎるです、皆は」
龍「これを楽しいって言えるのかのぉ？」
ギャラリーがそんな話をしている間に、アリアはギロチンにセットされており、生命の危機が迫っていた。
最も、宝石さえ壊さなければまた復活は出来るのだが。
高「それでは、アリアの公開処刑を」
ア「きゃあああああああ、怖い恐いこわいコワイ！！」
高「この手を放せばどうなるかなぁ？」
ア「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」
ちなみに、高雅はアリアに何の力を掛けてない為、実際は簡単に逃げられるのだ。
しかし、恐怖と言うものは時に人(てんし)を忘れさせるものである。
高「あー、そろそろ握力が」
ア「待って！！、許してお願いいいいいいいいいいい！！」
龍「・・・あの男、かなりのSじゃの」

フ「コウガ様は身体的にも精神的にもいたみ付けるタイプかもです」
エ「だけど、あのギロチンは偽物だぞ。あと手を放す気はないし、それに手を放しても刃物が落ちない」
フ「・・・やっぱり、コウガ様は何だかんだ言って優しいです」
龍「・・お主らは冷静じゃのぉ」
龍は高雅達の関係がいかにお互いを知りつくしているのかを知った。
すると、フィーラが見飽きたのか、高雅の方に近寄っていった。
フ「コウガ様、もう許してあげるです。もう十分です」
高「・・・・わーったよ」
高雅はそう言われるのを待っていたかのようにすぐに了承した。
ギロチンを消し、アリアを解放する。
アリアは本気で涙を流していた。
高「フィーラのお陰で助かったな。ちゃんとお礼言えよ」
ア「ありがとう・・・フィーラちゃん・・ひく」
フ「はいはいです。ほら、泣かないです。これに懲りたらあまりコウガ様をからかってはいけないです」
フィーラはアリアの頭を撫でながら優しく慰(なぐさ)める。
アリアが落ち着いた所で、エクスが本題を切り出した。
エ「で、セバスを探すんだろ?。さっさと行こうぜ」
高「分かってる。ったく、アリアの所為で無駄な時間を喰った」
エ「テメーも調子に乗り過ぎだ。女を泣かすなんて最低だ」
高「うぐ・・」
エクスがそう指摘すると、高雅は何も言えなかった。
あんな態度を取っていたのだが、反省はしていたのだ。
エ「あんま調子に乗ると嫌われるぞ」
高「一人は慣れてる」
エ「けっ、可愛くねえな」
高「本当の事だ」
エクスは高雅の言動に呆れてため息を零した。
高雅はそんな態度に腹が立ったが、もうのんびりしている暇はない。

高「さて、ここからの脱出方法を考えるぞ」
フ「扉に虚無です」
高「把握」
高雅は扉に虚無の力を掛ける。
すると、さっきまでの苦労は何だったのか、呆気なく扉が開いた。
高（何で最初から思いつかなかったんだろう・・・）
人は焦れば考えが浅くなるものです。
高「取りあえず、さっさと出るぞ。いい加減、あの野郎を見つけないとな」
フ「はいです」
エ「おう」
ア「うん・・・」
アリアは剣になって高雅の腰に付く。
高雅は最後に龍の方に向いて、別れの言葉を言った。
高「じゃあな。静寂はもう切れてるから動けるぜ」
龍「待つのじゃお主ら。セバス殿を探しておるのだろう？。心当たりがあるのじゃ」
高「そいつは助かるな。教えてくれ」
龍「うむ、少し待っておれ。今、動きやすい姿になる」
そう言うと、龍は光に包まれていく。
高雅は腕で目を隠して光を遮り、落ち着いてきた所で腕を下ろした。
すると、そこには高雅よりも少し年上な雰囲気を出す女性が立っていた。
高「なっ！？、女！？」
龍「そうじゃが、それがどうしたのじゃ？」
高「いや、そんな年寄りな喋り方してたから爺だと思ってた」
龍「ふん、私はこの喋り方が気に入っておるのじゃ。別に良かろう」
高「そりゃ、問題ねえけど」
龍「では、行くぞ」
龍は高雅達の前に出て、先頭に立った。

さっさと行こうとする龍を高雅は呼び止める。
高「待てよ。お前、名前は何だ?。いつまでも龍じゃなんだしな」
サ「私の名前はサミダレじゃ。そう呼んでくれ」
高「あ・・ああ（サミダレって、命名者は日本人か?）」
そう思っている内に、サミダレは一人勝手に歩きだした。
それを見て焦った高雅はすぐに後を追った。

## 無双と夢想編　その17、絶影（後書き）

今回のパクリは

ナ○ガク○ガが8割、ベリ○ロスが1割、オリジナルが1割の龍でした。

ちなみに、ベリオ○スのパクリ部分は姿ではなく、壁を蹴ってくるところです。

# 無双と夢想編　その18、第三者

サミダレの後ろをついて行く高雅達。
そのペースはかなり遅く、ただ歩いているだけだ。
早くセバスチャンを見つけたい高雅にとってはつまらなかった。
高「おい、早く行こうぜ。こんなゆっくりしてたら夜が明ける」
サ「なに、もうすぐじゃ」
実はさっきから同じ質問をしているのだが、サミダレはこう答えるだけである。
流石に高雅も納得がいかず、肩を掴んで目を見ていった。
高「いい加減にしろ!!。さっきからそれしか言ってねえぞ!!」
サ「焦るでないぞ。ほれ、もう着いておる」
高「はぁ!?」
高雅は辺りを見るも、壁しか見えない。
高「なぁ、本気で怒るぞ」
サ「待っておれ。今、道を開けてやろう」
サミダレは壁に手を置き、瞑想をし始めた。
すると、壁に魔法陣の様なものが浮き出てきた。
高「ん?」
浮き出たと思いきや、すぐに消え、代わりに壁に亀裂が入った。
サミダレは目を開け、壁を軽く押すと、扉のように開いた。
その先は奥の見えない階段が下に下がっていた。
サ「ほれ、この先が奴がいる場所じゃ」
高「そりゃ、見つからねえわ」
高雅はどこのからくり屋敷だよと、呆れてため息を零した。
フ「・・・?、コウガ様、向こうから何か来るです」
高「ん?」
高雅は向こうがどっちか分からなかったが、不審な音が聞こえていた為、見当はついた。

その方に顔を向けると、全速力でレオがこちらに向かっていた。
高「レオじゃねえか」
レ「こ・・コウガ殿!!」
高「どうした、そんなに焦って?。それに蓮田は?」
レ「蓮田殿は目を離したすきに逸れてしまった。それと、後ろから敵gへガキンッ!!〉ッ!?」
金属が打ち合う音が聞こえ、レオは反射的に首を後ろに回すと、エクスの斬撃を高雅が受け止めていた。
高「背後からいきなりとはな。まぁ、敵に背を向けて敗走した奴には当然の攻撃か」
エ「・・・・・・」
高雅は力(りき)んでエクスを軽く飛ばして距離を作る。
高「レオ、お前は休んでろ。もうバテバテだろ?」
レ「す・・すまない」
レオは後ろに下がり、高雅はエクス(敵)を睨みつける。
高「既に本人から了承は来ている。殺しても文句は言わないってな」
エ「・・・・・・・」
軽く脅して動揺させるつもりだったが、眉ひとつ動かさない。
高「ほんと、とんだポーカーフェイスだな」
エクスは高雅の話に飽きたのか、剣をその場で振り上げた。
高雅はその行動がどういう意味か分からなかったが、レオは一瞬で理解した。
レ「まずい!!。コウガ殿、地震が来るぞ!!」
高「地震?」
高雅が理解するよりも早く、エクスは剣を振り下ろした。
その瞬間、高雅は倒れ、立つことができなくなった。
高「うわああ!?、何だこの揺れは!?」
ア「と・・止められない!?」
アリアは静寂を使って止めようとするも、揺れは一向に治まらない。
その隙にエクスは一瞬で距離を詰める。

高「なっ！？、こんな揺れの中で立てるのかよ！？」
ア「危ない、攻撃が来るよ！！」
エクスは容赦なく剣を突いて来た。
高雅は揺れの中、何とか横に転がり、回避した。
しかし、エクスは突き刺さった剣をそのまま横に切り上げた。
高「いっ！？」
腹を斬られ、声を殺して耐える。
アリアがすぐさま再生するも、やはり何らかの力が込められていたのか、完治はしなかった。
ア「コウガ、大丈夫！？」
高「あ・・ああ」
平気そうに答えるも、顔色はかなり青かった。
少し前にも巨人に殴られたのだが、何故かそれよりも痛みが強かった。
高雅は斬られた腹を擦りながら、そう思う。
しかし、そんなことを思っている場合ではないと気付き、考えるのを止める。
高（っと、それより、この揺れをどうにかしねえとな）
エクスは既に次の攻撃に移っていた。
高雅は方向の力を使い、空中に浮き上がった。
だが、それだけでこの揺れが回避できる訳ではなかった。
高「げっ！？、視界が揺れてる！？」
自分が揺れるのは回避できたが、まだ周りが激しく揺れている為、視界が激しく揺れる。
見てるだけで吐き気に襲われるが、そんな中でもエクスは高雅に攻撃をしていた。
高雅は何とかエクスの攻撃を防ぐも、揺れる視界で目が回り始めていた。
高「あ〜、そろそろ限界が」
ア「コウガ！！、しっかりして！！」

倒れかけた高雅にすかさず攻撃を繰り出すエクス。
高雅は殆ど感覚だけで攻撃を防いでいた。
ア「意識が半分飛んでいるのに攻撃を防ぐなんて・・・」
高「あ〜〜〜〜〜〜・・・」
高雅の目はグルグル回る視界しか見えてない。
体を動かしているのは無意識の世界である。
フ「・・・いい加減に気付いてほしいです」
フィーラがそう言うと、高雅に夢幻を掛け、揺れていない幻覚を見せた。
高「お?、揺れがとま・・・う・・o《★自主規制★》」
ア「きゃあああああああああ、汚いよ!!」
高「すんません・・・」
フ「と言うか、自分でも夢幻ができるのですから、自分でやって欲しいです」
高「そうですね、何で気付かなかったんだろうなぁ〜・・・うう、また吐き気が」
あはは、と笑いながらも必死に嘔吐を耐える高雅。
ちなみに、その間にエクスは何もしていなかった訳ではない。
距離を取って大剣にエネルギーを溜めていたのだ。
だが、そんなのお構いなしに高雅は深呼吸をして落ち着いていた。
高「スーハー・・・スーハー・・・」
ア「大丈夫?」
高「うい・・・落ち着きました」
ア「じゃあ、次はあれをどうにかしよ」
高「そうですね、今にも飛んできs〈ドォォオオオオオオ〉キタアアアアア!?」
エクスは廊下いっぱいのレーザーを放った。
高「・・・とっ、焦ってる暇などないか」
エ「気をつけな。あれ、虚無も含まれてるぞ」
高「マジ?」

ひょっこりと現れたエクス（味方）の助言を聞き、少し動揺する。
エ「こうなったら、完全に力比べだ。お前の虚無か、俺の虚無のどっちかが勝つだけだ」
高「なら、こっちは盾で対抗してやる」
高雅は即席で盾を作って真っ向から受け止める。
静寂や消失、破壊、もちろん虚無も含んだ自称最強の盾である。
これも廊下いっぱいの大きさでエクス（敵）の姿さえ見えなくなった。
そして、互いの全力がぶつかり合った。
高「んがっ、重てぇ」
ア「さすがに・・・溜めてただけはあるね」
踏ん張って懸命に持ちこたえる高雅とアリア。
様々な力を込めているが、全く消せる雰囲気が無かった。
エ「お前が止めなきゃ誰がやるんだぁ！！！」
高「ネタ、パクるな！！」
そんな指摘をしながらもちゃんとレーザーを抑えていた。
しかし、さっきの事もあってか、もう体力が限界に近付いていた。
高「くそっ・・・こうなったら」
このままでは負けてしまうのを悟った高雅は目を瞑り、呼吸を整え出した。
そして、次に目を開けた時は闇を纏っていた。
高「うぉぉらあああああああああ！！」
闇の力も加わった盾は黒く染まり始めていた。
ア「コウガ、それ以上は！！」
高「分かってる。だがな、突破されると後ろの奴らも巻き込んでしまうんだよ！！」
高雅は限界まで闇に染まる。
そして、遂にエクスのレーザーを消した。
ア「やったぁ！！」
高「ふぅ・・・あぐっ！？」

突然、高雅が頭を抱えて蹲(うずくま)りだした。
アリアはすぐに静寂を掛けて落ち着かせるが、そんな大胆な隙をエクス（敵）が逃す訳ない。
フ「コウガ様！！、来てるです来てるです！！」
高「くそっ・・・」
高雅はまだ落ち着いてない。
エクスは一寸の狂いもなく高雅の首に剣を振り下ろす。
高雅は覚悟を決めて目を瞑るがいつまでたっても首が切れえる感じが無かった。
一応、首を斬られる経験ならしている為、感覚は知っていた。
高「あれ？」
恐る恐る目を開けると、レオが白刃取りして受け止めていた。
レ「コウガ殿、大丈夫か？」
高「ああ。時間稼ぎ、ありがとな！！」
高雅はレオの脇を通り抜けてエクスの首を掴んだ。
エ「・・・・！？」
高「そのまま寝てろ！！」
高雅はエクスをそのまま地面に叩きつけた。
さらに動けないように静寂を込める。
しかし、その中でもエクスは普通にあがいていた。
高「この、大人しくしやがれ！！」
最早、活性を使って力ずくで止めていた。
エ「おい、俺を本体に入れろ！！」
高「はぁ！？。それで、お前はどうなんだよ！？」
エ「さぁな。だが、意識が戻れば止める事が出来るんじゃねえか？」
高「ちょっと待て。こいつは心臓を抜かれた、言わば人形みたいなもんだぞ。どうやって意識を持つ気か！？」
エ「知らねえよ。まぁ、自分の体は自分でどうにかするって。それに、後でお前が心臓を持ってきてくれればいだろ？」
高「・・・・ったく、死んだりするなよ」

エ「やばくなったら、また魂になっとく」
高「んじゃ、行って来い！！」
高雅はエクス（味方）を掴むと、そのまま本体に押し込んだ。
すると、今まで暴れていたのが嘘のように収まり、そのまま意識が無くなった。
高「どうなるか分からねえが、信じてやるよ」
ア「エクスはどうするの？」
高「このままにしておこう。もう、相手に手駒は無いんだ。心配はないだろう」
ア「そうだね」
高雅は回れ右をして皆と向き合うと、レオが不思議そうな顔をしていた。
高「？、どした、レオ？」
レ「いや・・今、エクスと言わなかったか？」
高「ああ、言ったけど・・・あっ、お前、エクスの顔知らなかったのか？」
レ「何か見覚えがあったと思っておったが、まさかエクスだったとは・・・」
高「今さら復讐心が湧いたか？」
レ「・・・今さら湧きはしない。それに、湧いたとしても、コウガ殿達が止めるであろう」
高「そりゃな」
高雅は軽く笑って言った。
それを見たレオは鼻で笑い、最早、何も語るまいと話を止めた。
高「それじゃ、そろそろ大ボスの部屋に行きますか」
それを聞いた途端、皆の目付きが変わった。
皆の緊張した顔を見た高雅は自分もシャキッとしなければと頬を軽く叩いて目を覚まさせた。
そして、階段を下りて行った。

変わって、宮殿内のどこか。
そこには、ある二人組が話し合いをしていた。
？「・・・スハァー、全く、どこに居るんだ？」
煙草を吹かしながらもう一つの影に問う。
？「こんなことになってるなんて、天国はどうなってるの？」
？「さあな。ずっとセイクリッドに居たんだ。天国を見る暇なんて無かっただろう」
？「まぁ、そうだったけど・・・」
すると、その二人に近寄るもう一つの影が現れた。
その背中には、蓮田を背負っていた。
？「おっ、戻ったか。で、そいつはどうした？」
？「廊下の片隅で寝てたんだ。ほっとくのも何だと思ったから連れてきた」
？「そうかい。それで、収集は？」
？「これだけ」
？「・・・ハァー、使えない息子だ」
？「っんだと！？」
？「お？、やんのか？」
？「上等だ！！。親父をぶっ殺してやる」
？「あらあら、私の目の前で喧嘩をするなんて・・・」
すると、一つの影から物凄い殺気を纏ったオーラが放たれた。

それを見た二つの影は一瞬で冷や汗をかき始めた。
？「ま・・待て。ジョークだよジョーク。なっ？」
？「そ・・そうだよ母さん。ちょっとしたコミュニケーションだって」
？「そう。なら、次やったら・・・分かるわよね？」
？・？「ｓｉｒ，ｙｅｓ，ｓｉｒ！！！」
？「よろしい。じゃ、早く探すわよ」
？・？「ｓｉｒ，ｙｅｓ，ｓｉｒ！！！」
三つの影はどこかへと歩き出した。

## 無双と夢想編　その１８、第三者（後書き）

今回、使用させてもらったネタは龍玉でございます。
後は自分で元ネタを探してくださいませ。

# 無双と夢想編　その19、最強の駒

扉の先に進む事数分。
豪華な宮殿とは裏腹に石で造られた、まるで遺跡の様な階段を高雅達は降りていた。
高「まだ、着かねえのかよ？」
サ「徐々に殺気が強くなっておるのを、お主も感じておるじゃろ？」
高「そりゃ、そうだけどよ」
ア「それじゃあさ、速度の力でサクッと行く？」
サ「罠があったら反応できるのか？」
ア「・・・難しいかも」
サ「なら、大人しく歩くのじゃ。この先に奴がおるのは確実じゃから、焦るでない」
結局、文句を言うも、サミダレによって丸く抑えられた。
大人しく階段を下りると、次第に殺気は強くなっていく。
それも、異常なまでに強大に。
高（あれ、セバスってこんなに殺気があったっけ？）
そんなことを思っている内に、遂に念願の終点が見えた。
周りを見渡すと、皆怯えた顔が窺えた。
サ「では・・・行くｚ「待った」？」
高「全員整列」
サ「？、何がしたいんじゃ」
高「黙って整列しろ」
サミダレは高雅の言う事が分からず、取りあえず言うとおりに整列した。
高「はい、吸って～」
サ「・・・一体何なのじゃ？」
高「いや、お前ら全員、震えてるからな。少しぐらい心を落ち着けたらどうだ？」

サ「・・・・気付いておったのか？」
高「震度３ぐらいはあったぞ」
ア「さすがにそこまでは無かったよ・・・」
高「いいから吸え」
アリアは苦笑いで指摘した。
ちなみに、アリアも皆が震えている事に気付き、高雅とどうするか意思会話で相談していた。
さらに、アリア自身は震えてはいない。
高「吐いて～・・・はい、後３００回」
レ「多過ぎるぞ！！」
フ「そんなにしてる暇などないです！！」
高「へー、意外に怖くないんだなぁ」
高雅は頭を掻きながら笑っていた。
それを見たレオたちは無性に怒りがこみ上げた。
レ「コウガ殿、流石に我も今の言葉は許せぬ」
フ「そんな言葉、よく抜け抜けと言えますね」
次第に強大な殺気を忘れ、レオ達の殺気の方が強くなってゆく
それを感じ取った高雅はニヤリと笑い、扉に手を掛けた。
高「では、レッツゥラゴー」
サ「なっ！？」
皆の震えが完全に消えたのを見計らって高雅は扉を勢いよく開けた。
中は体育館並みにかなり広く、そして薄暗かった。
その先には何をすることもなくセバスチャンが立っていた。
セ「・・・遂にここまで来ましたか」
高「ほんと、やっとだぜ」
高雅は適当な返事をして周りを見渡す。
特にこれと言って何かある訳でもなく、あって、ある物が入ったカプセルが二つ。
高「あれが、フィーラとエクスの心臓か」
セ「そうですよ。あなたが古文書を無くしてから、方法を失ったの

ですから、これも用済みですね」
高「とか何とか言いながら取っているってことは、実は方法を知っているんじゃねえか？」
セ「どうでしょうね」
セバスチャンは何の動揺もなく、平然と答える。
しかし、高雅は指を突き付けながらこう答えた。
高「お前の事ならあんな古文書を暗記するぐらいや、メモするぐらいはするはず。それが何よりの証拠！！」
ア「どこの探偵になったつもりよ・・・」
セ「・・・クスッ、それを考えていたのならば、どうして早く言わなかったのですか？」
高「早く言おうが遅く言おうが、お前は何か変わった事をする気だったか？」
セ「どうでしょうね」
全く変わらない様子で答え続けるセバスチャン。
これ以上、動揺を誘うのは無理だと思った高雅は剣を取り、単刀直入に言った。
高「んじゃ、その心臓を返せ。そして、お前は消えろ」
セ「随分、酷い事を仰いますね」
高「そうか？。色々巻き込んだ奴には妥当な言葉だと思うけど、な！！」
高雅は問答無用で速度の力を使い、セバスチャンに接近した。
最早、このまま話しあっても無駄だと思ったのだろう。
セバスチャンも腕を槍に変え、高雅を受けて立った。
セ「そう焦るのではありません。あなたの相手は決まっております」
高「？、まだ駒がいたか？」
セ「ええ、私よりも強い、最強の駒が」
セバスチャンがそう告げた途端、天井から殺気を感じ取った。
上を見上げると、こちらにまっすぐ落下している物体が見えた。
高「おっと」

高雅は一旦距離を取って避け、その物体を確認する。
それは地面擦れ擦れで速度を落とし、静かに着地した。
高「・・・?、セバスチャン?」
その姿はセバスチャンと全く同じ姿であった。
高「これが最強の駒?。創造の創り物が?」
フ「違うです!!。本物が持っている物を見るです!!」
高雅は体を横に曲げ、後ろにいる本物のセバスチャンを見た。
すると、その手には円い鏡の様なものを持っているのに気づいた。
フ「あれが『ホープミラー』です!!」
高「ってことは、偽アリアを作ったのは・・・」
セ「私ですよ。では、始めましょうか」
セバスチャンは心臓の入った二つのカプセルと取り、もう一人の自分に渡そうとした。
セ「さあ、これを喰らってさらに力を増幅し、彼らを殺しなさい」
すると、偽セバスチャンは振り返り、心臓を受け取ることもなく、ただ立ちつくした。
セ「・・?、どうしました?」
偽セ「・・・・ロ・・」
セ「はい?」
偽セ「クワセロ!!」

グシャッ!!

セ「グフッ!?」
高「なっ!?」
突然、偽物が本物の腹を素手で貫いた。
その光景に高雅達は唖然としていた。
しかし、手から滑り落ちたカプセルを方向の力でこっちに引き寄せるとちゃっかりしている所もあった。
セ「な・・何故・・・?。言う事を・・・」

偽セ「シャアアアアアア！！」
偽セバスチャンアは本物の首に噛み付き、そのまま押し倒した。
そして、残酷な食事が始まった。
高「うわぁ、グロ」
フ「うぁ・・・」
ア「どういう・・こと？」
血は噴き出し、地面には大量の血溜まりができあがる。
その光景に目を放せず、唖然としている高雅達。
耐性はあったのか、吐くまではいかなかった。
喰い終わった偽物はすぐに次の獲物を睨みつけた。
高「食い足りねえってか？」
ア「そうみたい」
偽セバスチャンは速度の力を使わずに自分の足でこちらに走ってくる。
またそれが妙に恐ろしかった。
高「レオ、サミダレ、お前らは横から頼む」
レ「分かった」
サ「了解じゃ」
レオとサミダレは言われたとおり二手に分かれ、高雅は真っ向から受けて立った。
偽セバスチャンは腕を槍に変え、高雅に突き刺してきた。
高雅は軽く避けると、すかさず首に目掛けて剣を突き刺した。
高「っ！？、硬っ！？」
もちろん、活性を使った本気の突きである。
しかし、相手は全く力を使っていない雰囲気だった。
高「まさか、元々硬いのか？」
ア「そんな、セバスチャンは老いぼれだよ！！」
高「さらりと酷い事を言うな」
ア「そんなことよりも、次が来るよ！！」
偽セバスチャンは伸ばしてきた高雅の腕を掴み、引き寄せてから噛

み付いて来た。
しかし、高雅は顔色一つ変えず、むしろ余裕の笑みを浮かべていた。
高「ったく、暴食野郎だこと」
高雅は噛まれている腕を自分で引き千切り、服の中に隠していた本物の腕を出した。
偽セバスチャンが喰らったのは創り物の腕だ。
高「それ、喰わない方がいいぜ」
そう言った途端、高雅は指を鳴らした。
すると、偽セバスチャンの口から黒い煙が立ち込めた。
その光景を見た高雅はまた驚いた。
高「おいおい、頑丈すぎだろ。かなり強い爆破の力なのに頭が吹っ飛ばないなんて」
ア「これがセイクリッドの力なの？」
高「あいつがそう思って作りだしたのならそうだろ。ただ、異常なまでに強過ぎて、理性が吹き飛んだんだろう」
ア「体が持たなかったんだ・・・」
高「酒と同じだ。飲んでも呑まれるな、だな」
ア「安い例えね」
高「るっせぇ」
高雅は再び接近してくる偽セバスチャンとの距離を取る為、バックステップをする。
高「そろそろ頃合いだろ」
そう思った意思が伝わったのか、後ろからレオとサミダレが接近していた。
偽セバスチャンは完全に高雅に目がいっている。
背中はがら空き状態である。
レ・サ「もらった（のじゃ）」
二人同時に背中を手刀で斬った。
互いにすれ違い、クロスするように。
しかし、背中に傷はついていなかった。

変わりに、二人の手から血が出ていた。
レ「くっ、なんて硬さだ」
サ「これは、凄まじいのぉ」
二人は膝を着き、手の痛さに耐えていた。
高雅は二人の心配をしたかったが、目の前の物体の所為で考えを遮断された。
高「フィーラ、二人の様子を頼む」
フ「了解です」
フィーラは偽セバスチャンの脇を通って後ろに向かおうとした。
だが、予期せぬ事が起こってしまった。

グジュジュ・・ブシャァ!!

フ「きゃうっ!?」
高「はぁ!?」
偽セバスチャンの背中を突き破って第三の腕が現れた。
その手はフィーラを捕まえると、すぐ体の中に戻っていった。
自分の腕で開けた穴は一瞬にして再生した。
それを見ていた高雅が唖然としていて、やっと口を開いた。
高「・・・・何これ、新手の食事方法?」
ア「そんな呑気な事を言ってる場合じゃないって!!」
偽セ「ウメエエエエエエエエエエエエ」
高「んな大声で感想を述べなくても」
大声を上げていた偽セバスチャンは再び高雅を睨みつけた。
まだ喰い足りてないようだ。
高「取りあえず、フィーラは魂だ。多分、問題は無いはずだ」
ア「でも、早く助けることに変わりないよ」
高雅は剣を強く握り、目を閉じて深呼吸を始めた。
そして、偽セバスチャンを睨みかえした。
闇を纏いながら。

高「最近、これに頼りっぱなしだな」
ア「飲んでも呑まれないでよ」
高「分かってるよ」
高雅は地面をけり、偽セバスチャンの横を通り過ぎていった。
もちろん、その際に何重にも斬りつけていたのだが・・・
高「・・・痛っ」
剣を持っている手が震えていた。
さらに、剣の刃が欠け、そこから血が流れていた。
高「ッ!?、アリア!?」
ア「大丈夫、ちょっと痺れるだけ」
少しばかりアリアの声も普通ではなかった。
結果的に斬るではなく、殴ったのだ。
純粋に斬れるだろうと思っていた二人は衝撃をどうこう考えていなかった為、もろに振動が伝わってきたのだ。
高雅の握力は今のでかなり弱くなってしまった。
偽セバスチャンは何事もなかったかのように振り返る。
高「ちっ、想像以上だな」
偽セバスチャンは隙を探せば無限に湧きでる。
だが、攻撃すればするほど逆にこちらがダメージを受けている。
高「次からは衝撃とかも考えてやるか」
そう思って偽セバスチャンの隙を窺う。
すると、再びあの音が・・・

グジュジュ・・・

何が来るかは想像できる。
そして、その想像通りになる。

ブシャァ!!

血を噴き出しながら有るはずもない腕を出し、それを伸ばす。
しかも、今回は一本ではなく二本も出て来た。
狙いは高雅ではなかった。
高「ッ！？、レオとサミダレか！？」
自分を中心に二手に分かれる所ですぐに判断で来た。
レオとサミダレも自分らに来る事を予想していたのか、すぐに回避に移った。
だが・・・

レ「ッ！？、コウガ殿！！」
レオが血相を変えて叫んだ。
高雅はレオ達を心配していて完全に隙だらけだった。
高「なっ！？」
いつの間にか真後ろについていた偽セバスチャンを見て高雅は絶句する。
いつの間にか、腹からは鋭く尖った骨が飛び出していたのだ。
そして、逃がさないように高雅の肩を掴み・・・

グシャッ！！

そのまま引き寄せた。

# 無双と夢想編　その１９、最強の駒（後書き）

完全に、かゆ・・・うま・・・ですね

# 無双と夢想編　その２０、感動の再会？（前書き）

久しぶりの４日投稿。

所変わって、あの三人はと言うと・・・
？「えーっと・・・ここだな」
？「そうね。ここで間違いないわ」
？「さっさと終わらせようぜ」
？「おい、バカ！！」
一人が言う事を聞かずに、扉に手を掛ける。
その瞬間、天井から緑色の液体が降って来た。
？「毒か。親父、よろ」
？「お前には後で鉄槌を下してやる」
そう言いながら、降ってくる毒液に手をかざすと、嘘のように抹消した。
？「ご苦労。んじゃ、さっさと行こうぜ」
用が済んだ途端、その影はそそくさに部屋に入った。
後ろから二人もついて行った。
？「おおー、いたぞおやｚ〈ドゴッ！！〉がっ！？」
？「お前は下がってろ」
そう言って殴った後、後ろの影に渡し、自分は目の前にいる二人を見た。
鎖で繋がれており、目には光などはない。
？「王様、王女様、セイクリッドから助けに参りました」
そう言うも全く返事はしない。
取りあえず、鎖をはずし、自由にさせてやる。
？「・・・？、お前は誰だ」
ロ「それはこっちのセリフであります。何故、マスターを背負っていますか？」
もう一人、隣に鎖で繋がれていた人を見えた。
それは記憶を失っているログナだった。

？「マスター？。まさか、あの少年の使いか？」
ロ「そうです。返答次第ではただでは済ましません」
？「焦るな。ちゃんと返してやるし、助けてもやる。それに、お前、虚無があるぞ」
ロ「私に虚無ですか？」
？「ああ、相当小さいな。記憶を抹消するぐらいの虚無だがな」
ロ「そうですか・・・では、消してください」
？「いいのか？。『お前』が無くなるぞ」
ロ「構いません。主は記憶がある私の方が好きですし、私だと心から喜んではくれませんから」
？「・・・主思いのいい使いだな」
影はログナの頭に手を置くと、ログナの微量な虚無をうち消した。
そのショックか、ログナは意識を失った。
その間に鎖を外し、勇人が蓮田を隣に寝かせてやった。
？「おい親父、こいつらは連れて行かないのか？」
？「次に行くところは危険だろ。そんぐらい考えろ低脳息子」
？「っだと糞親父！！」
？「あらあら、二人とも殺気が素晴らしい事」
？・？「ゾクッ！？」
二人より遥かに超える殺気を放つ一人が。
？「だだだだ、だからコミュニケーションだって。な！？」
？「そそそそ、そうだぜ母さん。ちょっとジョークを交えているだけだって」
ちょっとセリフが逆になっているような気がするが、今の二人は目の前の殺気の処理で手一杯である。
だが、それを救うように後ろから新たな殺気を感じた。
？「ッ！？、親父、これって」
？「ああ、間違いないだろうな」
？「あらあら、誤魔化すつもり？。でも、うかうかしていられそうもない状態ね」

？「そうだ。行くぞ」
？「ええ」
一つの影が人間状態から変化する。
鈍い音を立てながら地面に落ちるそれは巨大な鉄槌だった。
それを、一人が片手で軽く持ち上げる。
？「この先だろう。壁をぶち破ってさっさと行こうぜ」
？「そのつもりだ。お前は王と王女の精神を回復させてろ」
？「へいへい」
そして、壁を突き破りながらの進行がはじまった。

レ「コウガ殿！！」
レオが悲痛の叫び声を上げる。
助けに行こうとしても、一本の腕に邪魔される。
サミダレも同じ様子である。
高雅は気絶したのか、手の力を無くし、剣を落としてしまう。
ア「コウガ！！」
アリアはすぐに人間状態になり、高雅を助けようとする。
しかし、先ほど受けた傷は相当なものだった。
高雅を骨から抜こうとしても、全く力が入らない。
ア「くぅーー・・・あぐっ！？」
完全に隙だらけのアリアを見て、偽セバスチャンはアリアの首を掴みあげた。
偽セ「イタダキマス・・・」
ア「この・・放して！！」

偽セバスチャンは豪快に口を開け、アリアを食べようととする。
アリアは顔を蹴ってみるが、偽セバスチャンは全く動じず、ゆっくりとアリアの頭を近づけていた。
高「・・・ろ・・」
偽セ「？」
高「止めろっつってんだよ！！」
高雅は偽セバスチャンの顔面目掛けて思いっきり殴った。
何の力も入ってない、高雅自身の力でだ。

ドゴッ！！

ア「え！？」
偽セバスチャンの顔が凹んだ。
そして、アリアを放し、思いっきり吹き飛んだ。
高「いてぇぇぇぇ！！」
後ろに吹き飛ぶ際に、高雅は骨から抜け出したが、思いっきり引き抜かれた為かなりの痛みが襲った。
ア「大丈夫！？」
アリアは近寄りながらすぐに再生の力で回復させる。
高「あ・・ああ。なんか、出血は少なかったみたいだ。ちょっと体が痺れるぐらいだったから殴ってみた」
ア「そう・・・でも、さっきの力は？」
高「さぁ？。闇を使った訳でもないし、てか、逆に光を感じたような・・・」
ア「光？」
高雅の言葉に？マークを飛ばすアリア。
だが、のんびり話すのはここまでの様である。
高「あいつ、そろそろこっち来そうだ」
既に完全な体勢で偽セバスチャンがこちらを見ていた。
さっきの光景に唖然としていたレオ達もふと我に帰って高雅に寄っ

た。
レ「コ・・コウガ殿、無事か？」
高「心配するならさっさと来いよ」
アリアは手を再生してあげる。
レ「す・・すまぬ。少し驚いていた」
高「殴った事？」
サ「それ以外に何があるというのじゃ。あれ程硬かった奴に拳が通じるなど・・・」
高「まぁ、そうだな・・・って、これ以上の会話は後だ」
そう言って偽セバスチャンに指を指す。
ジュルリと涎を飲んで、こちらを睨んでいた。
完全に食べ物としか見ていない目である。
高「二人はさっきみたいに隙があったら軽く攻撃しろ。意識を逸らすぐらいでいい」
レ「いいのか、それで？」
高「それしかできないだろ？」
サ「・・・悔しいがその通りじゃな」
高「じゃ、よろしくな」
最後にそう言うと、レオとサミダレは再び二手に分かれて偽セバスチャンの後ろにつく。
偽セバスチャンは殴られた事が気にしているのか、レオ達には目をくれず、高雅だけを見ていた。
高「アリア、行くぞ」
ア「うん！！」
アリアは元気よく返事し、剣になる。
偽セバスチャンは速度の力を使って一気に接近して来た。
今ので完全に吹っ切れたのだろう。
高雅も待つのではなく、同じ速度の力で迎え撃った。
偽セ「アアアアアアアアア！！」
バカみたいに大振りをする偽セバスチャンの攻撃を交わす事など容

易な事であった。
攻撃の隙などいくらでもある。
だが、高雅はあえて攻撃をしなかった。
もう一度、あの感覚を思い出しながら力を込めていたのだ。
高（くそっ、上手くできねぇ。あの時は夢中で殆ど覚えてねぇからか）
僅かに覚えている感覚を頼りに力を込めていく。
偽セバスチャンの攻撃など、初めて槍を握ったような攻撃の為、意識しなくとも分かる。
だから、ずっと力の込め方に集中していた。
高（えーっと・・・少しイラッとして、それからえーっと・・・）
ア「コウガ？」
高「ん？、何だ？」
ア「攻撃しなきゃ始まらないよ」
高「そうだけど、適当にやったらお前が傷つくだろうが」
ア「へ・・そんなこと考えてたの？」
高「え・・・ああ、いや、違う」
ア「わざわざ考えてくれてたんだ・・・ありがとう」
高「う・・うるさい！！」
ちなみに、この会話の最中にも偽セバスチャンの攻撃はある。
しかし、三流以下の攻撃など、高雅に取って目を瞑っても避けられる。
アリアも脅威を感じないのか、普通に話していた。
高「だー！！、もう、テメーの所為でどこまで考えていたか忘れたじゃねえか！！」
ア「えー！？、私の所為！？」
高「他に誰がいるんだよ、誰が！！」
いつの間にか始まった第二の戦い。
それを遠くで見ていたレオ達は呆れてため息を零していた。
偽セ「クワセロ！！　クワセロ！！　クワセロ！！」

高・ア「テメー（あなた）は黙ってろ（て）！！」
高雅は普通に蹴りを繰り出し、アリアはそれに活性の力を込めてやった。
軽く転ばせるつもりだったのだが、軽く吹き飛んでいった。
高「あれ・・・今の」
ア「？、何か感じたような・・・」
偽セ「ウアアアアアアア」
すぐに起き上がり、再び接近してくる。
それを一瞬だけ見た高雅は再び自分の世界に没頭する。
高「えーっと・・・今も同じのを感じたぞ」
ア「うん。私も温かい何かを感じた」
ちらりともう一度偽セバスチャンを見る。
そして剣を構える。
まだ距離はあるのだが、居合切りのように腰を低くする。
そして、まだ距離があるのに剣を振った。
偽セ「！？」
斬撃を飛ばしたのだ。
真っ白に輝く神々しい三日月のような斬撃を。
偽セバスチャンはしゃがんでそれをやり過ごす。
高「キタッ！！。分かった！！」
ア「えっ？何が！？」
高「新たな力の使い方」
ア「新たな力って何？」
高「さっき言ってた光ってやつ。もう一回試してやるよ」
丁度、偽セバスチャンが近寄っていた。
高雅は再び居合い切りの構えをとる。
偽セ「クウウウウウウウワアアアアセエエエエエエロオオオオオオ」
高「だが、断る！！」
高雅はセバスチャンが攻撃するよりも早く剣を振る。

振った瞬間、偽セバスチャンの動きが止まった。
そして、ゆっくりと上半身と下半身がずれてゆく。
高「・・・また、つまらぬ物を斬った」
ア「そんな王道なセリフを・・・」
そう言って緊張を解き、レオ達に顔を合わせる。
ジェスチャーで終わった事を伝え、こっちに呼び寄せる。
高「悪いな。出番なくて」
レ「構わない。しかし、よくもまぁ、あれ程硬い体を斬る事が出来たな」
高「まぁ、力でダメなら技術でどうだって感じかな？」
サ「意味が分からぬ」
御尤(ごもっと)もな言葉を言われ、苦笑いする高雅。
笑っていた高雅だったが、突然、目付きが変わる。
高「ッ！？」
レ「？、どうしたのだ？」
高「極僅(ごくわず)かだが、殺気を感じた」
高雅は後ろの壁を睨みつけながらそう言う。
高「それも、徐々にこっちに来てるみたいだ」
レ「新手か！？」
高「まだ分からねえ」
そう言って壁を睨み続ける。
さっきまで緊張を解いたのが、バカみたいに感じていた。
高雅は剣を強く握り、いつ来てもいいように構えていた。
極僅かな殺気の為、距離がよく分からないのだ。
そして、壁の一部がが一瞬で粉塵と化した。
レ・サ「くっ」
レオとサミダレは突然の粉塵に目を隠すが、高雅は分かっていたのか一瞬たりとも目を放さない。
そして、粉塵が止むと巨大な鉄槌を持つ一人の影が見えた。
？「フゥー、終わってたか」

高「えっ！？」
煙草を吹かしながら現れた男を見て、高雅は目を丸くした。
男は高雅に近づき、高雅の頭に手を置いた。
レオとサミダレは何もしない高雅を見て驚いていた。
？「でかくなったな、高雅」
その言葉を聞いた瞬間、固まっていた高雅が動いた。
高「煙草くさっ！！」
？「おまっ！？、父親に向かってその言葉は無いだろ！！」
高「いや・・・って、義父（とう）さん！？」
？「おせーよ！！」
そう、殺気を放っていたのは高雅の義父、文夫である。
高「・・・ああ！！。天国だから、そりゃいるわ」
文「ほぉ、死んだらハンマー担いで解体業にでも入るのか？」
勝手に納得する高雅に指摘する文夫。
高「じゃあ、何してんだよ？」
文「はぁー、お前は死んだ親に再会しても涙一つ流さないなんて、なんて薄情な息子だ」
高「息するな。煙草くせぇ」
？「ふふふ、高雅は昔からタバコがダメね」
そう言って、鉄槌から姿を変える
その姿を見て、高雅は再び目を丸くした。
現れたのは高雅の義母、紗奈恵であった。
高「か・・・義母（かあ）さん！？。義母さんなのか！？」
文「この反応の差は何だ！！」
紗「煙草よ、あなた」
そう言われた瞬間、文夫は思いっきり落ち込んだ。
紗「これを機に、禁煙しなさい」
文「それはできぬぅぅぅ！！」
紗奈恵はため息を零し、呆れていた。
高「で、本気で何なの？」

文「・・・その話は、後ろの奴を倒してからだ」
高「はぁ!?」
高雅は後ろを向くと、斬れたはずの偽セバスチャンの胴体が再生していた。
レオ達も話しに入らなかったのは、この異様な光景に目がいっていたからだ。
高「再生か・・・」
偽セ「アァァ・・・クワセロォォ・・・」
高「喰い意地がすげーなぁ」
偽セ「ウガアアアアアアアアアアアアアアア」
突然、今までよりも一番でかい声で叫ぶ。
すると、見る見るうちに体が巨大になっていく。
天井に当たっても、なお止まらずに天井を破壊してまで巨大化してゆく。
高「おいおいおいおい、天井が崩れるって!!」
文「慌てんじゃねえよ。こんくらい」
高「何だよ。少しは普通の人間見たい反応しねえといけねえだろ。空気読めねえな」
文「天国にいるところで、そんな空気読むとこか?」
ア「ッ!?、コウガ、上!!」
アリアに促され、顔を上げてみる。
瓦礫が落下してきていた。
高雅は軽く後ろに飛んでやり過ごす。
フ「コウガ様!!」
高「フィーラ!?、いつの間に!?」
フィーラが高雅のもとに跳んで来た。
フ「さっき斬ったときに抜けだしたです」
高「そうか。それより、レオ、サミダレ、集合!!」
文「俺らは?」
高「義母さんのハンマーでガンバッ!!」

集合し終わった高雅は周りに結界を創る。
そして、方向の力で結界ごと地上へと向かって行った。
文「ほんとっ、勇人に似て薄情な奴だな！！」
紗「クスクス。ほら、あなた。早くしないと生き埋めになるわよ」
文「へいへい・・・あっ、勇人・・・まっ、どうにかするだろう」
そう言って、紗奈恵の力も借りず、自分の力で紗奈恵と共に脱出した。
普通に虚無と方向を使って地上を目指した。
地上に出ると、高雅が不思議そうな顔をして睨んでいた。
高「なあ、義父さんって何者？。さっきから力使ってるけど、まさか使い？」
文「まぁまぁ、まずはあのデカ物を倒さねえといけねえのじゃねえか？」
そう言って巨大化した偽セバスチャンに指を指す。
宮殿を崩壊してまでの巨大化は半端ではなかった。
高「どこぞのヒーロー戦隊もんだよ・・・」
文「それより、あんな奴、どう倒すのか？」
高「どうって・・・普通に滅多切り」
文「ほんの少しセイクリッドの力が使えるからって調子に乗るな」
高「セイクリッドって・・・・なぁ、本気で何者？」
文「あれを倒したら教えてやるよ。何もかもな」
文夫は煙草を捨て、紗奈恵は鉄槌に変身する。
そして、今まで僅かしかなかった殺気が一瞬で巨大化した。
高「ッ！？」
文「さて、悪いが俺で本気でいく。秒殺するから、高雅は指を咥えて見てろ」
高「・・・やだね。義父さんが動きまわると煙草の煙が辺りに充満する。義父さんが指を咥えて見てろ」
文「なにをー？。息子のくせに偉そうだな」
高「あんたらが死んで、俺は一人だったからな。こんなに捻(ひね)くれて

もしょうがないだろ」
文「ああ、俺ら死んでない」
高「・・・・n「まずはあれを倒してからだ」へいへい。もう何も言いませんよ」
そう言って高雅も殺気を放つ。
剣を構え、巨大化した偽セバスチャンに向き合う。
高「レオ、サミダレ、フィーラ、お前らは離れてろ」
レオ達は無言で後ろに下がる。
後ろに歩くだけでも、二人の殺気で息を止めていた。
文「紗奈恵の夢想の力を見せてやろう」
高「お前も無双かよ。まぁ、俺のアリアの方が優れてるけどな」
文「ほぉ・・・そうだ。高雅、どっちが止めを刺すか勝負しないか？」
高「いいのか？。俺が勝つぞ」
文「ガキがほざくな。俺が勝つに決まってるっだろ」
高「大人ぶってんじゃねえぞ」
文「大人だ！！」
殺気を放ちながら、他愛もない会話をする。
もちろん、偽セバスチャンの殺気も途轍(とてつ)もないが、今の二人にとっては蚊帳の外だった。
高「ラスボスのところ悪いが、俺が秒殺してやる」
文「いや、この俺がだ」
二人は同時に跳んだ。
親子そろっての共同作業が始まった。

## 無双と夢想編　その２０、感動の再会？（後書き）

長かった無双編も次でおしまいです。

もしかしたら、長くなるかも・・・

## 無双と夢想編　その２１、高雅の秘密

二人の攻撃は壮大だった。
高雅はセイクリッドの力を使って巨大になった偽セバスチャンを斬り刻む。
文夫は巨大な鉄槌で内臓に振動を与える。
偽セバスチャンは巨大化して少しは強くなっているが、相手が悪すぎた結果である。
高「おい！！、殴ってずらすんじゃねえ！！。斬りにくいんだよ」
文「んなこと言ったってなぁ、無理なもんは無理だ」
平気に会話している二人の顔には余裕しかない。
しかし、高雅の顔に微妙に疲れがあった。
高「・・・くそ、全然倒れねえ」
文「どうした？。もうバテたか？。勝負は俺の勝ちだな」
高「んだとっ！？」
しかし、図星ではある。
慣れないセイクリッドを使ってスタミナの減少が激し過ぎた。
文「やめておれ。さすがになれない力、しかもセイクリッドの力だ。無理をすれば・・・死ぬぞ」
文夫の本気の目に、流石の高雅も息を呑んだ。
文「なぁに、今はダメだが、１か月も使っていれば慣れる。だから、今無理をするな」
高「・・・分かったよ。さすがに、嘘じゃなさそうだし」
高雅は戦線から離脱した。
文夫は偽セバスチャンの頭上まで一気に飛んだ。
文「セバスチャン、天界監理官の官長、崎村文夫がセイクリッドの変わりに鉄槌を下す！！」
決まり文句か、当然ながらの言葉を並べる。
その瞬間、文夫の持っている鉄槌が巨大化した偽セバスチャンを越

える程の大きさになる。
高「ほえぇー、すげーな」
高雅が地上から見るも、大きさは東京ドームを軽く潰せるほどのデカさだ。
文「うおりゃあああああああああ！！」
そして、その巨大過ぎる鉄槌を振り下ろした。
偽セバスチャンは受け止めようとした。
しかし、触れた瞬間、触れた部分から体が浄化していった。
偽セ「ギャアアアアアアアアアア」
そして、巨大化した偽セバスチャンは跡形もなく消えてなくなった。
文「任務完了っと」
紗「お疲れ様」
文夫はまた煙草を出し、吹かし始める。
紗奈恵も緊張が切れ、微笑んでいた。
高「終わったな・・・ぶっちゃけ、呆気ねぇ」
ア「あはは、それを言ったらお終いだよ」
レ「そ・・それよりも、今、天界監理官と言っていたか？」
フ「しかも、官長って・・・まさか・・・あの人が・・・」
文「そうだ。俺が天界監視官、官長だ」
自慢げに言う文夫の姿に馬鹿げていると呆れている紗奈恵。
紗「あなた、天界監視官の条約その一、監視官に関する情報漏れは厳禁」
文「あっ」
高「今さらだろ。てか、倒す時にもろ告白してたじゃん」
紗「あれは仕方ないの。倒す時のあれも条約に入ってるから」
高「ふ～ん・・・それより、約束だろ。色々と教えｔ「くぉぉらあああああああああ」ッ！？」
突然、怒鳴り声が聞こえ、高雅は新手だと思った。
しかし、文夫を紗奈恵はハッと忘れていたのを思い出した顔になっていた。

文「勇人、悪い。忘れてた♪」
勇「殺すぞ！！」
高「勇人って・・・勇兄（ゆうにい）！？」
勇「おっす、高雅。元気そうだな」
軽く手を上げて挨拶をする。
高「勇兄も、元気そうだな」
高雅も軽く手を上げて挨拶をする。
そして、お互いにタッチをする。
高「なぁ、後ろにいるのって・・・」
勇「宮殿内に残っていた奴らだ。全く、俺がいなければこいつら生き埋めだったぞ」
文「ご苦労さん」
勇人の後ろには様々な方が浮いた球体に入っており、運ばれていた。
勇人は適当に下ろし、球体を消して皆を地面に寝かせた。
勇「で？」
高「？」
勇「話をするんだろ。高雅に」
文「そうだな。まずは・・・」
そう言って顎を擦り、考える素振りをする。
高「取りあえず、義父さん達は何者かを教えてくれ」
文「そうだな。俺達は天界監視官にいる。ちなみに、監視官は普段はセイクリッドにいるのだが、この通り天界が燃えているからな。様子を見て来いって言われてんだ」
高「その、天界監視官って何？」
紗「読んで字のごとく、天界を監視する天使達の事よ。ちなみに、私達三人しかいないけど」
高「へ～・・・」
ア「興味なさそうだね」
高「ぶっちゃけ、天界監視官とかはどうでもいい。ただ、どうして生きてるのに、俺の前に出て来なかったんだ？」

文「上から親離れの時期だと言われてな、事故で死んだと見せかけて離れたんだ」
高「上っｔ「おっと、それ以上は禁則事項だ」そっか」
文夫がそう言うと、高雅は特に追求しようとせず、すんなりと諦めてくれた。
紗「それじゃ、次は高雅の事ね」
高「俺の事？」
紗「そ。あなたの正体よ」
紗奈恵は高雅の肩を掴み、真剣な表情になる。
高雅は気圧され、自然と息を呑んだ。
紗「驚かないで聞いて。あなたは、セイクリッドの創始者、マリア様と歴代最強の惰天使、ルシフェルとの間に生まれた子よ」
高「・・・・・・・・・」
紗「あら、驚いて声が出ない？」
高「いや、全然意味が分からなくて納得ができない」
紗「そ。まあ、無理もないわ。でも、実はその二人の力をよく使っているのよ。特にルシフェルの方は」
高「まさか・・・俺が闇って言ってた奴ってそれ？」
紗「正解。それと、さっき使っていたのはマリア様の力。納得できたかしら？」
フ「異議ありです！！」
突然、フィーラが横から口を割いて来た。
紗「はい、楽園の女王様」
フ「マリア様とルシフェル様は１０００年以上も前の存在です！！。なのに、どうしてコウガ様は高校生なんかやっているのです！？」
高「それってマジ！？」
紗「そうよ。高雅は１０００年以上も前に生まれた子よ。でも、その頃は天界で戦争が起きてたのよ」
レ「１０００年もの前の戦争・・・最も凶悪な戦争だった『セイクリッド争奪戦』か？」

紗「よくできました、天獣王。その戦争に高雅も戦っていたのよ」
高「へ～。でも、そんな記憶は一切ないけど・・・」
紗「当たり前よ。あなたは生まれて3ヶ月だったのよ」
ア「さ・・3ヶ月!?。まだ歩きも出来ない時期に戦争に!?」
紗「そ。そして、高雅は偉業を遂げたわ。敵を一人で全滅させるっていう最大の偉業を」
高「はぁ!?」
流石に高雅も声に出して驚く。
たかが3ヶ月の自分は一体、何をしているのだと。
紗「それを知ったマリア様は酷く悲しんだこと。高雅には普通でいて欲しいと願っていたらしいから」
高「あ・・・記憶にないけど、悪いことしたな」
紗「でもね、ルシフェル様はそれを許さなかったの。だから、二人は喧嘩して・・・」
サ「それは聞いたことがある。天界を統べる夫婦が愛する子の為に互いを殺し合ったと」
紗「正解、サミちゃん」
サ「そ・・その名で呼ぶでない!!／／／」
サミダレは顔を赤くして紗奈恵をキッと睨む。
紗奈恵はただ笑っているだけだった。
高「何?。知りあい?」
紗「知りあいも何も、私達がサミちゃんを育てたのよ」
ア「え、そうなんだ」
サ「だ・・黙っていてすまぬ」
高「別に。聞いてなかったんだし」
紗「それで、今からあなたが飼い主だから」
高「はいぃ!?」
高雅は素っ頓狂な声を上げて驚く。
そのリアクションを予想していたのか、紗奈恵はクスリと笑った。
紗「サミちゃんに予め(あらかじ)言ってあるの。あなたを助けてくれる方につ

いて行きなさいって」
サ「ま・・まさか、私が奴には勝てぬ事を知ってて・・・」
紗「ゴメンね、サミちゃん♪」
紗奈恵は手を合わせてウインクする。
紗奈恵の行動にサミダレは諦めたように溜息を零した。
サ「やはり、紗奈恵殿には敵わぬ」
紗「あら、どうも。それより、高雅、迷惑じゃない？」
高「別に。家は広いし、大体、こういうのには決定権が無いんだろ？」
紗「当然よ」
きっぱりと言いきる紗奈恵に高雅は呆れていた。
いくら義母でも、紗奈恵の事は大体分かっていた。
紗「それで・・・どこまで話していたかしら？」
高「夫婦喧嘩」
紗「そうだったわね。その喧嘩で、マリア様はルシフェル様を殺したのよ」
高「・・・・・・・「そう、責任を感じるなって!!」ああ・・・」
勇人が察して高雅の方を思いっきり叩きながら言う。
高雅は軽く背中に痛みが走ったのは黙っていた。
紗「マリア様はあなたの中にある自分とルシフェル様の力を封印したのよ。さらに、高雅自身を平和な時代になるまで封印したのよ。それが、この時代なんだけど・・・」
勇「どっかの地獄の奴らが嗅ぎつけて、お前を危険物だと殺そうとしてんだ」
紗「だから、平和が乱れちゃったのよ。でも、また封印するのは可哀そうだから私達が守ろうとしたのよ」
高「・・・・・・・」
高雅は俯いて黙り込んでしまった。
それを見た勇人は高雅の背中を軽く叩きだした。

勇「何、責任感じてんだよ。お前が抱え込む必要はねえんだ」
高「でm「でもも、くそも、あるか！！。王よりも楽園よりも偉い天界監視官が言ってんだ！！。だからいいんだよ！！」あ・・ああ」
ほぼ気圧されて無理やり納得した高雅。
取りあえず納得した証拠を押さえれば勇人達はそれで良かった。
紗「最初は私たちじゃなくて、他の優秀な使いにさせたのだけど、途中で嫌になって高雅を捨てたのよ」
高「あの時か・・・」
高雅はふと自分が捨てられた事を思い出した。
それを思い出すだけで、心が痛みだした。
紗「全く、最初はちゃんと守るって言ったのに、いきなり投げだしちゃうんだから。ほんと、困ったものよ」
紗奈恵も思い出したのか、やれやれと首を振っていた。
しかし、その行動も一瞬で止め、高雅に笑顔で向き合った。
紗「でもね、高雅のお陰で私達も充実した毎日を送っていたのよ」
勇「ああ。常に地獄の奴らと血で血を洗う戦闘をしてたからな」
高「それで、最近は地獄の奴らがあんまり来なかったのか。でもよ、それでほんとに充実してんのか？」
勇「ああ。お陰で親父を超える事も出来たしよ」
文「誰が誰を超えたって言ってんだ？」
勇「俺が、糞親父を」
文「ちょっとあっちに行こうか」
勇「ああ、行こうか」
文夫と勇人は少し遠くに離れていった。
紗「あの二人、後で絞めておくわ」
高雅は紗奈恵が出す殺気に苦笑いしていたが、実は怯えていた。
紗「それじゃ、次はアリアちゃんの話をしよっか」
ア「へっ？、私の話？」
突然指名され、驚くアリア。
紗「そうよ。あなたも色々と知っておかないとね」

ア「で、私の話って？」
紗「まず、あなｔ「うおりゃあああああ」あなたはきょｍ「死ねや糞親父があああああ」虚無やいｒ『どりゃあああああああ』・・・」
背景で騒いでいる二人に、紗奈恵の怒りは限界点に達した。
高「義母さん、行ってらっしゃい」
紗「３秒で帰って来るわ」
その言葉を残した瞬間、紗奈恵は消え、勇人と文夫の間に移動していた。
そして、悲鳴と内臓が潰れる音を聞きながら、高雅は溜息を零していた。
紗「お待たせ。じゃ、続きを言うね？」
ア「あ・・はい・・」
何事もなかったかのようにさっき話していたのと同じ体勢になる。
高雅とアリアは後ろから生臭い匂いがするやら、紗奈恵は帰り血を浴びてるやらで冷や汗をかいていた。
紗「あなたは虚無や色々な力をもっているわよね」
ア「う・・うん、そうですけど」
紗「それね、マリア様の加護がついているからよ」
ア「ま・・マリア様の！？」
高「なぁ、マリア様の加護って何？」
紗「願いが何でも叶うものって言えば、９割はあってるから」
ア「で・・・でも、マリア様の加護はそれに相応しい者ではないと体が持たず、壊れてしまうって聞いたことが・・・」
高「丁度、実例がいたな」
そう言って崩壊した宮殿を見る。
今はもう、瓦礫の山しか残っていない。
紗「その加護はね、全ての力を使えるようにするのよ」
高「確かに、アリアは真の契約をすれば、大量の力が使えるな」
紗「実際、真の契約を使わなくても全ての力は使用できるのよ。た

だ、あまりにも弱過ぎる為、真の契約の力を貸りてるのよ」
ア「そうだったんだ・・・」
紗「後ね、その加護は特別で、封印されていた高雅が持っていたのよ」
ア「そ・・そうなんですか？」
紗「ええ。高雅が大事そうに持っていたのよ。しかも、その加護にはマリア様の意思までもがついてたのよ」
高「意思？」

紗「『この加護に合う女の子を高雅の許嫁（いいなずけ）としてください。そうすれば、この子も充実した日々を送られますから』って」

高・ア「・・・・・・・・」
紗奈恵の言葉を聞いて固まりだす二人。
そして高雅がゆっくりと口を開けた。
高「えーっと・・・変な言葉が混じってなかった？」
紗「一字一句間違ってないわよ」
ア「じゃ・・じゃあ・・・許嫁って・・・」
紗「高雅、アリアちゃんを大切にするのよ」
高「待てえええええええええええええええい！！」
ドンドン話が進みそうなので、高雅が大声を上げて歯止めを掛ける。
紗「何？」
紗奈恵は惚けたような顔をして聞き返した。
高「何？、じゃねえよ！！。許嫁ってどういう事だよ！？」
紗「あら、許嫁の意味を知らないの？」
高「そうじゃなくて・・・あーー！！、もう！！」
高雅は口に出すのが恥ずかしいのか、頭を滅茶苦茶に掻きむしっていた。
紗「クスッ。でも、お似合いよ、あなた達」
ア「そうかな・・・／／／」

紗「ええ、両思いだし」
高「だーれーが！！、アリアを恋愛対象と思っているって言ったんだ！？」
紗「あら、誰も恋愛だなんて言ってないわよ」
高「このっ！！、謀ったなぁ！！」
紗「勝手に考えてる高雅が悪いんでしょ」
そう言って意地悪く笑う紗奈恵に高雅はむきになる。
アリアは顔を真っ赤にして俯いていた。
すると、紗奈恵は真面目な顔つきになり、高雅の肩を掴んで言った。
紗「いい？。男の子なら、こんなに可愛い子をみすみす捨てるような事をしてはダメよ。是が非でも自分の物にしないとダメ！！」
高「だけどよ、許嫁って言うのはおかしいだろ。いくら本物の母さんが言うからってそんな昔みたいに決め付けられたくない」
紗「だったら、考えればいいじゃない。あなたがちゃんとした答えなら、アリアちゃんも私も文句を言わないから」
高「さっきと話が違うような・・・」
紗「とにかく！！、アリアちゃんを悲しませるような事をしたら・・・・ワカッテルワネ？」
高「わ・・分かった分かった分かった！！」
紗奈恵の黒いオーラに、高雅は首を縦に振りまくる。
紗「そ。それならいいわ。それより、そろそろ時間ね」
そう言って紗奈恵は遠くを見だすと、その方向から天国の残兵がこちらに向かっていた。
しかも、その先頭には見覚えのある顔があった。
A「フォオオォォォォオオオオオオオ！！！」
高「あれ？、Aじゃん」
Aが奇声を上げて、こちらに全力疾走で向かって来ていた。
紗「彼と彼の使いは生き返らせてあげるわ。それでお別れよ」
高「あいつ、死んだの？。しかもタイトも？」
紗「そ。マグマで溶かされてるのよ。でも、宝石の成分はそのマグ

マにあるから、そこから取りだせば生き返らせることは可能よ」
高「ふ～ん、そうだったんだ」
紗「じゃあね、高雅。セイクリッドの力は程々にね。少しずつ使えば、すぐに慣れるから」
高「ああ、色々ありがとう、義母さん」
紗「それと、許嫁だからって、アリアちゃんを夜、襲ったりしたらダメよ」
高「誰が襲うか！！！」
ア「・・・・・・／／／」
紗奈恵は高雅達を現世のそれぞれ居るべき場所に帰した。
それと同時に、後ろでひき肉となっていた文夫と勇人を再生させた。
再生した二人は正座して、震えていた。
紗「さあ、二人とも。天国を復興させるわよ」
文・勇「ｓｉｒ，ｙｅｓ，ｓｉｒ！！！」
紗「返事だけじゃないわよね？」
文・勇「ｓｉｒ，ｙｅｓ，ｓｉｒ！！！」
文夫と勇人は速攻で行動し始めた。
文夫は目の前からＡが消えた天国の残兵に呼びかけ、復興を手伝わせ、勇人は眠っている王と王女の精神治療をし始めた。
紗「クスッ。ほんと、高雅のお陰で退屈しないわ」
そう言って、自分は壊れた宮殿の再構築をし始めた。
この三人によって、天国は僅か１日で完全復活したのであった。

空間で移動された高雅達は自分の家にいた。
ついた途端、高雅はフィーラの心臓に再生を使って体を再生させた。
エクスの心臓は空間で体の中に入れた後、内臓を再生させた。
フ「ふう、何だか、久しぶりの体です」
高「離れて1日も経ってないだろ」
レ「ところでコウガ殿。エクスの様子はどうなのだ？」
高「・・・これぱっかりは、目が覚めねえと分からねえ」
そう言って、エクスを見守る高雅。
すると、微かにエクスの瞼が動いたのを見た。
エ「く・・ああ・・・」
高「エクス！？」
エ「何だよ・・っるせーな・・・」
高「ふぅ、本物だ。どうやら、成功してるようだな」
エ「どういう・・・ってうおおっ！？、体がある！？」
サ「皆、無事の様じゃな」
高「そうだな・・・」
高雅はソファーに座り、ドッと溜息を出した。
やっと、この騒動が終わったのだ。
そう思った途端、大量に溜息を零したくなったのだ。
ア「ところで、コウガ」
高「何だよ？」
ア「明日・・・正確には、もう深夜だから今日、テストだよね？」
高「・・・・・・・・・・・・・・・あっ」
その言葉を聞いた高雅はバッと立ち上がった。
高「そういや、テスト二日目だったな・・・」
ア「・・・どうするの？」
高「全っ然、勉強してねえ」
フ「でも、コウガ様は日頃勉強してるから、いい点数は取れるんじゃないです？」

高「そりゃ、そうだけど、いくらなんでも少しぐらいは教科書読まねえと」
高雅はリビングを飛び出し、一目散に部屋に向かった。
サ「何じゃ？、忙しい奴じゃのぉ」
ア「水、刺しちゃったかなぁ？」
アリアは今になって後悔し、少し反省していた。
レ「だが、アリア殿もコウガ殿と勝負をするのではないか？」
ア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ」
アリアは立ちつくしたまま、口を開けていた。
ア「いっけない！！。私も少しは勉強しないと！！」
アリアもリビングを飛び出し、高雅の部屋へと一目散に駆けて行った。
エ「・・何だあいつら？」
サ「仲の良い、お似合いカップルじゃのぉ」
レ「我々は眠るか」
フ「そうするです」
レオ達はやることが無い為、適当に布団を敷いて、眠り始めた。
こうして、長いようで短かった戦いは終止符を打たれたのだ。

無双と夢想編　了

★おまけ★

先「えー、今からテストを始めたいと思いますが・・・崎村君、大

丈夫ですか？」
高「これはやる気のある顔です・・・」
結局、高雅はあれから徹夜で勉強し、テストに臨もうとしていた。
戦いの疲労も残っており、かなりの睡魔が襲って来ているのだが、
目に隈を作って精一杯耐えていた。
先「そう。では、始めたいと思います」

結果、高雅は途中で倒れて保健室へ連行され、テストの結果は今日
受けた四教科と初日の分だけとなってしまった。
しかし、それらは１００点を収めていたのだとか・・・
アリアも高雅が受けた分を終えた瞬間、疲労がピークに達して倒れ
てしまった。
取りあえず、採点すると全部１００点で高雅との勝負は引き分けに
終わった。

もちろん、Ａや凛、当然ながら龍子にはボロ負けであった。

# 無双と夢想編　その２１、高雅の秘密（後書き）

二ヶ月掛かって遂に終わりました。
いやー、長かったですな～。

ちなみに、今後の予定は文化祭や修学旅行などのお話などを考えております。
それらが終わった後は最終章を書いて、この小説の幕を閉じるつもりです。

まぁ、まだまだ先の話ですから、変更しまくる可能性もアリアリですけど・・・

取りあえず、夢想は終わりです。
これからは学校に戻るぞーーーー

しかし、学校はもうちょっと先みたいだ・・・ｏｒｚ

# 星空

現在学校の昼休み。
高雅はあれから数日休み、普段通り学校に通っていた。
そして、いつも通りの木陰で昼食を取っていた。
ア「そういやさ、明後日だよね？」
アリアが唐突に話して来て、高雅は食べるのをストップして話を聞いた。
高「何がだ？」
ア「凛ちゃんの誕生日パーティー」
高「そういや、そうだったな」
ふと思えばそこまで迫って来ていた誕生日パーティー。
取りあえず、高雅はどうでもよさそうに返事をし、再び弁当を食べ始めた。
ア「プレゼントとか用意してるの？」
高「全然」
ア「それでいいの？」
高「大体、金持の誕生日パーティーなんだから、俺ら一般市民（自称）が敵うはずが無い」
ア「それもそうだよね。でも、コウガの家にはお金が沢山あるんじゃ」
高「たった一人の為に何千万も出したくない」
ア「一生遊んで暮らせるお金があるのに・・・」
高「それでもだ」
高雅は弁当を食べ終わり、教室に戻ろうと立ち上がった。
それを見計らって、アリアはブレスレットになり、高雅の腕に巻き付いた。
高「・・・ん？、あいつは・・・」
視界に入ったのは、こちらを睨みつけているＡの姿だった。

高「何か用？」
高雅は面倒くさそうに聞いてみる。
A「今日、俺が来たのは言うまでもない。どちらが真の主人公かはっきりしようじゃねえか」
高「お前が主人公でいいから、目の前から失せろ」
A「ふっはっはっは、それではダメだ！！。神が許しても俺が許さん！！」
高「じゃあ、じゃんけんでサクッと決めようぜ」
A「よっしゃ、運の勝負ってか？。真の主人公なら主人公補正で負けないからな」
高「どーでもいーから、じゃーんけーん・・・」
高雅はマイペースでじゃんけんを進める。
Aは慌てて手を出した。
出したのは、Aがグー、高雅がチョキであった。
A「来たきたキターーーーーーーーー。補正も知識も俺が上だあああああああ」
高「はいはい」
知識の部分は少しカチンと来たが、そこは堪えて相槌をうった。
高雅は解放されたと思い、Aの横を通り抜けて行く。
しかし、Aは高雅の肩を掴み、引きとめた。
A「知識、補正、最後に実力で勝負だ」
高「あのな、後五分で予鈴が鳴るぞ。いくらなんでもそれはダメだ」
A「安心しろ。三分で済む」
高「・・・一度死んだ奴が調子に乗るなよ」
高雅はAの目を見ずにドスの効いた声を放つ。
オマケで殺気も。
しかし、Aは顔色一つ変えることは無い。
A「俺はマジだぜ」
高「・・・そうかい」
高雅は内心驚きつつも、Aの手を払いのけた。

高「さすがに、校内で暴れる訳にはいかねえ。例え、ここは人通りが少ないからと言ってもな」
A「ちぇぇぇ、ノリが悪いな～」
高「いつか、勝負してやるよ。ただ、死んでも責任取らねえから、覚悟して来いよ」
それだけを言い残し、高雅は去っていった。
遠くでAが「そのセリフ、そっくりそのまま帰してやるぜーーー！！」と叫んでいた。
教室に戻る途中、アリアが口を開いた。
ア「A君、いつの間にか強くなったね」
高「殺気だけで決めるなよ。蓮田みたいに殺気が疎(うと)いだけかもしれない」
ア「そっか。それもそうだね」
高「それはそうと、何で意思会話で話さないんだ？」
すでに、校舎内にいるが、周りに人はいない。
それはアリアもちゃんと分かっていての行動だろう。
ア「だって、何度話しかけても無視するんだもん」
高「はぁ？。声なんて全然聞こえなかった・・・って、そうか」
ア「え？、何なに？」
高「元々、意思会話はセバスのお陰で出来ていたんだ。あいつが死んだら、そりゃできないな」
ア「そう言えばそうだったね」
高「こうなると不便だな。何とかならねえか？」
ア「う～ん・・・私とコウガだけなら何とかなりそう」
高「今までだって、ほぼそうだったじゃねえか。第一、レオ達にも意思会話ができるようにする気か？」
ア「そしたらもっと便利かなって思って」
高「学校内に居る時ぐらいは静かに過ごしたい。だから、止めてくれ」
ア「う～ん・・・高雅がそう言うなら仕方ないね」

そう言って、アリアは一時黙り込んだ。
意思会話をする為に、空間と変換の力を込めているのだろう。
その後の授業も平然と終わり、放課後の時間になった。

家に到着し、玄関の鍵を挿して扉を開ける。
高「ただいｍ「うわあああああああああああ」あん？」
開けた途端、エクスがフィーラに追いかけまわされていた。
フ「レオ！！。さっさと包囲するです！！」
レ「わ・・我は関係ないだろう」
フ「ボクの命令を背くつもりです？」
フィーラがレオを睨みつけると、レオは冷や汗を多量に掻き始めた。
久しぶりに見た主従関係である。
レ「済まない、エクスよ」
エ「ちょ！？、天獣王！？。僕の進路を憚らないでくれないか！？」
レ「これだけは譲れん」
エ「えええ！？。あっ、コウガ君！！」
高「やっと気付いたか」
高雅は呆れて見ていた光景に愛想が尽き、靴を脱いで家に上がった。
エ「おかえり。そして、助けてくれないか？」
フ「コウガ様！！、お帰りなさいです！！。そして、手伝って欲しいです」

高「取りあえず、人の家の中をドタバタ走り回る様な奴らは・・・」
高雅は軽く殺気を放つ。
昼にAに通用しなかった為、今度は結構強めである。
エ「うぐっ！！」
フ「ひゃうっ！！」
しかし、予想以上に怯えてしまい逆に高雅が焦ってしまった。
高「あっ、悪い」
エ「い・・・いや、僕らが悪かった」
フ「あ・・暴れてごめんなさいです」
エクスとフィーラは反省したのか、とぼとぼソファーに座りこんだ。
少し空気を悪くしたが、
レ「おかえり、コウガ殿」
高「ああ。てか、何であの二人は暴れてたんだ？」
サ「私が一部始終を見ていたが、何でも、フィーラ殿のぷりんと言うものをエクス殿が食べたらしいのじゃ」
高「ふ～ん」
サミダレの言葉を聞いたフィーラとエクスが思い出したのか、一瞬だけピクリと反応した。
そして、再び口論が始まった。
フ「大体、人様の家の冷蔵庫を勝手にあさるのが悪いです」
エ「僕はお腹が空いたから何か食べ物をとそれを食べただけだ」
フ「何でプリンなのです！！。それは僕が狙っていた物です！！」
エ「名前なんて無かったぞ！！」
フ「子供みたいな事を言うなです！！」
エ「どっちが子供だ！！」
高「お前らだ！！」
高雅は二人の頭を鷲掴みして鎮める。
高「分かった。俺がコンビニに行ってプリンを買って来てやるから。それで喧嘩を止めろ」
フ「ぶぅ・・・分かったです」

エ「すまない、コウガ君」
高「別に。適当に菓子でも買い行くついでだし」
高雅は自分の部屋に向かい、着替えに行った。
1分ぐらいで戻り、そして出掛ける準備をしだした。
高「レオ達は何かご要望はあるか？」
レ「我は無い」
サ「我もぷりんとやらを食べてみたいのぉ」
高「はいよ」
高雅は意見を聞き終えると、そそくさに靴を履き、また外へ出た。
アリアも人間状態になり、高雅の後ろをついて行った。

程なく歩いて近くのコンビニに辿り着いた高雅。
時間は既に夜になっていた。
さっさと買い物を済まし、帰路に立つと顔見知りの人物がいた。
ア「あっ！！、リュウコだ！！」
龍「あっ・・・」
アリアが手を振りながら呼びかけると、龍子は高雅達の存在に気付いた。
龍「こんばんは・・・高雅君」
高「よっ。お前もコンビニか？」
龍「うん・・・御摘み買って来てって・・・お母さんに・・・」
高「そうか」

龍子と話している時、高雅はふと思った。
高「・・・なぁ、凛の誕生日パーティに行くよな?」
龍「う・・うん」
高「プレゼントとか用意してるか?」
龍「い・・一応・・・」
龍子は自信なさげに答える。
やはり、庶民的な物は金持ち相手には申し訳ないと自覚はしているのだろう。
高「そっか。んじゃ、俺もなんか考えておかねえとな~」
そう言って、ふと空を見上げた。
高「・・・そういや、こんなに呑気に星を眺めたこと、なかったなぁ・・・」
秋空の星達はまた新鮮だった。
アリアと龍子もつられて空を見る。
星なんて飽きるほど見たのだが、ふと物想いに眺めたら、また違った感覚があった。
龍「・・・綺麗・・・」
高「そうだな・・・」
このままずっと眺めていたい。
そんなことも頭に過ったが、アリアの言葉でふと現実に戻される。
ア「で、いつまで眺めてるつもり?」
高「あ・・ああ、そうだったな。悪い」
龍「あっ・・ゴメン」
龍子は何故か高雅に謝った。
もちろん、悪い点は一切ない。
高「何で謝った?」
龍「えっ・・・何となく・・悪い気がしたから・・・」
高「謝るなら、呼びとめたアリアの方だろ」
ア「えー、別に私は悪くないよ」
アリアは高雅の理不尽な言い分に文句を言う。

高雅はどうでもよさそうにそっぽを向いていた。
少しして、再び龍子に向き合う。
高「取りあえず、呼びとめて悪いな。んじゃぁな」
龍「うん・・・またね・・・」
ア「バイバイ、リュウコ」
高雅は軽い挨拶を済ませ、家に帰った。

来た道と同じ道を通り、何もなく家につく。
高「ただいまー」
フ「お帰りです!!」
フィーラは待っていましたと言わんばかりの顔で高雅を出迎えた。
完全にこの次の言葉が読める行動だ。
フ「早く!!。早くプリンをくださいです!!」
高「へいへい、焦るな焦るな」
高雅は袋からプリンとスプーンを取り出し、フィーラに渡した。
もらった瞬間、フィーラは高速でリビングへと消えて行った。
高「あいつ、いつの間にプリンが好きになったんだ?」
ア(ずっと前に、プッ○ンプリンの三個セットが全部なくなってた日があったよ)
高「いつの間に・・・ってか、何で意思会話で話してんだ?」
ア(えっ!?、聞こえる!?)
高「はっきりと」
ア「やったぁっ!!。成功したよ!!」

アリアはピョンと軽く跳ねて喜びを表現する。
その行動に高雅は呆れていた。
高「ガキか、お前は」
ア「あはは・・・ちょっとオーバーだったかな？」
アリアは顔を少し赤らめながら頭を掻いた。
今になって恥ずかしさが込み上げてきたのだろう。
高「取りあえず、玄関で立ち往生しないで、さっさと飯でも作るか」
高雅はそんなアリアの姿を見ても無視して、さっさと台所へ向かった。
アリアもリビングへ行き、ソファーに座って体を休めた。
高雅は数分で夕食を作り上げ、食べ始めた。
そして、また数分で食べ終わり、食器を洗う。
完全な流れ作業である。
レ「なぁ、コウガ殿」
洗い物の途中、レオが視界の横から現れた。
高「どした？」
レ「いや、リン殿とカリン殿の誕生日は明後日であろう？。何か贈り物を用意しなくてはいいのか？」
高「そーだなー・・・」
レ「我も何か用意した方が良いだろうか？」
高「んーーー・・・いや、俺ら団体のプレゼントって事にしよう。そうしたら、楽だろ？」
レ「楽だと！？。コウガ殿、そんな高慢な考えを持っておったのか！？」
レオが突然、怒鳴りだす。
今の言い方では誕生日を汚(けが)してしまった勘違いしたのだろう。
高雅はすぐに修正する。
高「待てこら。そう言う意味ではない。あいつの周りは金持ちだらけだぞ。だから、物で勝とうなんて到底無理だ」
レ「むっ・・・確かにそうだな」

高「だから、ここは簡単、かつ金持の誰も思いつかないことをやればいい。俺達で協力しあってな」
レ「成程な。疑ってすまん」
高「別に。俺の表現力が足りなかっただけだ」
あえて楽である事を否定せず、何とか誤魔化せた。
洗い物を済ませた高雅は手を拭き、冷蔵庫を開ける。
高「ま、悔いが無いように考えるさ」
それを言い残した高雅は適当に買ったお菓子を取り、自分の部屋へと向かった。
部屋についた高雅は菓子をかじりながら教科書を捲り始めた。
しかし、教科書の内容など全く見ておらず、ある事を考えていた。
高「・・・プレゼント、どうすっかなぁー」
菓子をかじりつつ、碌(ろく)に頭に入ってない教科書を捲りつつ、ただそれだけを考えていた。

そして、当日はやってきた。
高「飛んだな、おい！！」

# 金持ちパーティ　前編

秋とは思わせない程冷える夜。
高雅達は慣れない手付きでスーツを着ていた。
流石に、金持相手に普段着はまずいと思い、高雅は蓮田達にもスーツを着せていた。
ちなみに、ついさっき創った代物である。
高「・・・よし、オーケっと」
最後にネクタイを締め、高雅は着替えを終える。
蓮「こうがにいちゃん、これでいいの？」
高「ん？、ああ。いいぜ」
蓮「そっか」
ロ「なあ、蓮田。蝶ネクタイを引っ張って口元にやってみてぇ」
蓮「えっ？、こう？」
蓮田は意味が分からず、ゴムで伸びるタイプの蝶ネクタイを口元にやる。
ロ「そしてこう言うんだ。犯人はおｍ〈ゴスッ！！〉ぐごっ！？」
高「下らねぇ事させんで、さっさと準備しろや！！」
スーツ姿にも関わらず、機敏に動いてログナを蹴り飛ばす。
高「ったく、あいつはいつの間に記憶が戻ってんだよ」
蓮「起きたらいつものログナだったよ」
高「また、偽物じゃねえだろうな？」
蓮「それは絶対ないよ。いつものログナだよ。雰囲気だけじゃなくて心もログナだよ」
高（心って・・・まぁ、勇兄が連れて来てたし、どうにか記憶を治したのかもな）
天界監視官、言わば高雅の元家族がログナを連れてきたの見ている。
そんな人が敵の偽物だったら、即判断できる。
だから、高雅はこれ以上追及せず、本物だと信じていた。

ロ「おまったせ～」
レ「我も準備はいいぞ」
ついさっき蹴り飛ばしたログナが手を振っていた。
即行で着替えてきたのだろう。
高「後はアリアとフィーラだけか」
当然、二人は別の部屋で着替えている。
念のために二人の部屋の前にサミダレが待ち構えていた。
ちなみに、ログナは一度サミダレに殺されていた。
理由は言うまでもない。
高「サミダレ、二人は着替え終わったか？」
サ「うむ・・・後、少しの様じゃ」
高「そうか」
それだけを聞いて、高雅達はサミダレの前を通り過ぎてリビングへ向かう。
ログナは頭を下げながら早足で抜けて行った。

ピーンポーン・・・

そんな時、不意にインターホンが鳴り響いた。
高「あっ、来たか」
高雅は目的地をリビングから玄関へ変更し、そこへ向かう。
玄関の扉を開け、そこには制服姿の龍子の姿があった。
龍「こんばんは・・・」
高「ああ。てか、何故に制服？」
龍「えっと・・・相応しい服・・・ないから・・・」
高「そうか・・・」
ア「あっ、リュウコちゃん」
後ろからアリアの声がし、自然と振り返る。
高「何だ、着替え終わ・・・・」
そこには、蒼を基調としたドレスに身を包んだアリアの姿があった。

高雅は見とれてしまい、言葉が出なかった。
龍「アリア・・・綺麗・・・」
ア「えへっ、ありがとう♪・・・？、コウガ？」
高「あ・・ああ・・・」
アリアを見ながらボーっとしていた自分に気付いたのか、すぐに顔を逸らす。
高「馬子にも衣装だな」
ア「あっ！！、酷い！！」
アリアは怒って高雅に駆け寄ろうとした。
しかし、慣れないドレスで裾を踏んでしまい、バランスを崩した。
ア「きゃっ！？」
高「おっと」
高雅が転びそうになったアリアを軽く支えてやる。
高「ったく、慣れないのに走ろうとするな」
ア「ご・・・ごめん・・・」
アリアは怒りを忘れ、恥ずかしがって目を逸らしながら謝った。
高「それより、龍子のドレスでも創ってやってくれ」
龍「えっ！？・・・」
高雅はアリアの体を起こしながら頼む。
ア「うん、当然だよ」
アリアも同じことを考えていたのか、快く了承してくれた。
龍「でも・・・そんな・・・悪いよ・・・」
ア「いいよ。今日限りの素敵なドレスなんてタダで創って上げるよ」
高「そういうことだ。さっさと着替えてこい」
ア「早く早く！！」
アリアは龍子の手を引っ張って家に上がらせる。
そして、着替えの部屋に連れて行った。
高雅もリビングで待とうと部屋に向かう。
ア「お待たせ」
アリアが扉を少し開けて顔を出す。

ちなみに、入って掛かった時間が3秒。
高「速度の力使ったな。てか、お前らの時も使えよ」
ア「それはそうと、ごたいめーん」
アリアが扉を全開し、部屋の中もよく見えた。
その先には、黄色いドレスに身を包んだ姿があった。
龍子は恥ずかしがって、俯いて裾を掴んでいた。
龍「えと・・・あの・・」
高「似合ってんじゃねえか？」
龍「へっ！？・・・」
龍子が目を見開いて驚く。
アリアは高雅の言葉が納得がいかず、問い詰める。
ア「ええー！！。じゃあ、何で私は馬子なのよ！！」
高「俺は自分の感想を素直に言ってるだけだ」
ア「コウガが素直な訳がない！！」
高「失礼だな、おい！！」
ロ「それよりさー、はよ行こうぜ」
ログナの声が聞こえ、振り返ると皆が暇そうに見物していた。
エ「イチャイチャはベットで、だろ」
龍「え・・・えええええええ！！？？／／／／」
高「誤解を招くような事を言うな！！」
エ「はっはっは、自分を制御しろよ。勝手に暴走するなよ」
高「お前は・・・・殺す！！」
高雅は手にセイクリッドの力を纏い、殺気を全開する。
エ「楽園の王の力を思い知らせてやろうか？」
高「掛かってこいよ。アリア無しでぶっ倒してやる」
やる気満々の二人。
蓮「ところでさ、時間は大丈夫かな？」
ロ「さっすが蓮田。実はな、遅刻してるのだよ。さすが、蓮田。されど、蓮田」
高「・・・・・・・何だとーーーーー！！？？」

高雅は掛け時計に目をやると、予定の時間よりも１０分近く遅れていた。
高「また、遅刻する！！」
龍「ご・・ごめん・・・なさい・・」
高「龍子の所為じゃない！！。と、取りあえず、サッサと行くぞ」
フ「あっ、待ってくださいです！！。ボクにもコメントくださいです！！」
高「んな、場合じゃねえ！！。エクス、サミダレ、留守番よろ！！」
高雅は忙(せわ)しく出てゆき、皆も後に続いて家を出た。

結局、高雅達はオシャレして街中を歩くもの何だったので、こっそりと真の契約をし、空間の力で余裕で間にあった。
時間的には予定よりも結構早かった。
その為、姫花家の門の前で立ち往生していた。
高「まぁ、こんな姿でうろつくのもあれだし、凛の家に入るか」
ア「そうだね」
とりあえず門をくぐり、数分歩く事で玄関に辿り着いた。
玄関の前には門番が待ち構えていた。
門「招待状を見せてください」
高「ん」
高雅は人数分の招待状を手渡す。
門番は何度も裏返したりして厳重に調べる。

わざわざ招待状を見せるだけで1分は掛かった。
門「・・・では、お入りください」
門番は玄関の扉を開け、高雅達を招き入れた。
その先には凛の母が笑顔で出迎えてくれた。
母「あらー、早いわね」
高「ちょっとな。都合が悪かったか？」
母「そんなことはないわよ。でも、まだ開催まで時間があるから、部屋で待機してもらえる？」
高「そっか。分かった」
凛の母は呼び鈴を鳴らして使用人を呼んだ。
使「ご用件は？」
母「この者達を応接室へ連れて行きなさい」
使「承知しました。では、こちらでございます」
高雅達は使用人の後ろについて行く。
一度来た事があったが、全く持って道を覚えられていない。
そんなことを思っている内に、応接室に辿り着いた。
使「近くで待機してますので、何かあったらお呼びください」
高「どうも」
用を終えた使用人はどこかへと行った。
高雅達は応接室へ入り、イスに腰を下ろした。
ロ「いやー、空間は便利だねー」
高「ったく、お前は気楽だな」
ロ「俺っちも空間が使いてーーーー。そしたら、コウガっちの冷蔵庫から色々盗むのになぁーー」
高「おい」
ロ「なはー」
高雅が睨みつけると、それを誤魔化す様にログナが笑う。
高雅は創造したナイフをログナの額に目掛けて投げた。
ロ「うおっ！？。あぶねっ！？」
高「ちっ、避けたか」

高雅は心からそう思っていた。
ちなみに、外したナイフはどこかに刺さる前に消した。
ア「コウガ、リュウコがいるからあんまりグロイ事はダメだよ」
高「へいへい」
蓮「？、ぐろい？。黒い事？」
高「蓮田は知らなくていい」
蓮「はーい」
そんな他愛もない話をしてると、扉が勢いよく開かれた。
現れたのは、ドレスアップしている香凛の姿だった。
香「蓮田君！！」
蓮「あっ、かりんちゃん！！」
蓮田はイスから飛び降り、香凛に駆け寄った。
香凛も蓮田に駆け寄り、お互いに手を繋ぎ合った。
蓮「かりんちゃん、お誕生日おめでとう」
香「えへへ、ありがとうなの。今日は来てくれてうれしいの」
繋いだ手を握ったまま飛び跳ねて喜びを表現する二人。
その光景を見ていたログナが口を開けて震えた手で指を指していた。
そして、おぼつかない様子で高雅に聞いてきた。
ロ「えええええええっとととととととと、ふふふたりりりりはははは」
高「さぁ、随分と仲がいいけど」
フ「二人はきっと結ばれたです」
高「？」ロ「！！！？？？、むすすすすばばれたたた！？」
フ「はいです♪」
フィーラはにっこりと意味深に笑う。
フ「まぁ、あくまで仮定です。真実は本人に聞くです」
ほんとは知っているのだが、あえて、そうさせたのだ。
そっちの方が面白いという理由だけで。
ロ「蓮田あああああああああああああああああああああ」
ログナはいてもたってもいられず、すぐに立ち上がる。

そして、転びながら蓮田に駆け寄った。
蓮「な、何？」
蓮田はログナの行動に驚きながら尋ねる。
ロ「二人はどういう関係なんだ！！？？」
香「カリンと蓮田は恋仲なの」
ロ「・・・・・・・・・・・・・・」
蓮「ろ・・ログナ？」
固まって完全に停止した蓮田
高「・・・・・・ていっ」
高雅がボールを創造してログナの後頭部目掛けて投げた。
一度真の契約をしてから、まだ解除してないのだ。
ボールは綺麗に直撃して、地面を数回バウンドして転がる。
そして、ログナが粒子にまで砕け散った。
高「わざわざ粒子になるか？」
ア「さあ？」
レ「ログナ殿はそこまで感激したのだろう」
高「いや、逆だろ」
レ「そうか」
高雅達は人ごとのように適当に納得する。
蓮「・・・そうだ。はい、これ」
蓮田はポケットから小さな筒を取りだした。
香「？、これはなんなの？」
蓮「この穴から覗いてみてよ」
香凛は筒の底面に開いてある穴を覗いてみる。
香「わぁ！？」
その中は幻想的な世界を映し出していた。
蓮「どう？、まんげきょうは？」
香「うれしいの！！。ありがとうなの！！」
香凛は蓮田に飛びついた。
そして・・・

チュッ

蓮「わっ！？」

蓮田の頬にキスをした。

香「えへへ／／／。それじゃ、なの」

香凛は恥ずかしがるように部屋から出て行った。

蓮「・・・・」

高「・・・・・・・・・・ていっ」

高雅、再びボールを投げる。

ボールは蓮田の後頭部に当たった。

そして、蓮田は我に返った。

蓮「はっ！？」

高「よかったな。喜んでもらって」

蓮「う・・うん！！」

蓮田は嬉しい限りに首を思いっきり縦に振った。

すると、今度は使用人が部屋に入ってきた。

使「時間になりましたので、大ホールへ案内します」

高「分かりました。お願いします」

高雅達は立ち上がり、粒子に化したログナを再生してから使用人の後ろをついて行く。

程なくして、他に比べて大きな扉の前にやってきた。

使「ここが大ホールです。どうぞ、ごゆっくりと」

使用人は扉を開けて高雅達を招き入れた。

高「さて、金持のパーティを拝見させてもらうか」

そう言って、高雅は足を踏み入れた。

★オマケ★

移動中、高雅とログナはこんな事を話していた。

高「なぁ、蓮田が万華鏡を持っていたのだが、何か心当たりないか？」

ロ「あ～、森に捨ててあった本から簡単な万華鏡の作り方があってな。俺っちの協力のもと作りあげたんだ。どっしてしってんの？」

高「ん？、蓮田が香凛にそれを渡してたから」

ロ「・・・・・・・・・・」

高「・・・・・・・・・・・・ていっ」

高雅の1N（ニュートン）もないパンチ。

すると、ログナは液体と化した。

高「再生はいらないな」

その後、ログナが蘇ったのは数秒後であった。

# 金持ちパーティ　前編（後書き）

やべぇ、龍子が空気だ。

今更ながら、物静かなキャラを入れ込むのは難しいなｗｗｗｗｗ

# 金持ちパーティ　中編

大ホールにはギッシリと人が群れていた。
所々にテーブルがあり、豪華な食事が用意されていた。
ロ「うひょー、うまそー」
ログナは真っ先に料理に目が言った。
テーブルごとに違う料理を全て見渡していく。
高「まだ食うなよ。始まっていないからな」
周りの人たちは豪華な料理が当たり前なのか、目もくれずにただ会話していた。
すると、横から使用人が飲み物を持ってやってきた。
使「どうぞ」
高雅達はグラスに注がれている濃い紫色の飲み物を受け取る。
使「お酒ではありませんのでご安心を」
そう伝えて使用人は礼をして去っていった。
高「一応、俺らの情報はあるらしいな」
ア「まぁ、リンちゃんのお母さん直々（じきじき）から招待状をもらったからね」
高「それもそうか」
ロ「・・・っぷはー、うめー」
高「早速、飲むバカがどこにいるか！！」
ロ「はぁ!?。もらったら飲むだろ？」
高「おい、これはパーティだぞ。普通は乾杯をしてから飲むんだ」
ロ「へ～・・・んじゃ、おかわりもらってくる～」
ログナは高雅達に手を振ってから、使用人が去っていった方へ走り出た。
高「あいつ、気楽だな」
高雅は情けなく思い、溜息を零す。
すると突然、照明が消え、暗闇に包まれる。

フ「あみゅ？、停電です？」
レ「どうやら違うようだ。演壇に人が現れたぞ」
暗闇の中、ステージに司会者らしき人物が場所に着く。
そして、その場所にだけ照明が照らされた。
司「皆さん、今宵は凛様と香凛様の誕生日パーティに足を運び、真にありがとうございます。それでは、凛様と香凛様のご登場です」
照明が再び消えると、今度はステージの真ん中に照明が照らされる。
そこには凛と香凛が立っていた。
ア「あっ、リンちゃんだよ」
高「みりゃ分かるって」
司「それでは皆様、グラスを上げてください」
全員はグラスを上げる。
司「凛様と香凛様の祝意を込めて、乾杯！！」
全「かんぱ～い！！！！」
全員で合唱し、一斉に飲む。
高雅達のは案の定、ぶどうジュースだった。
司「それでは、一流のシェフが作った料理を堪能しつつ、どうぞごゆるりとお過ごしください」
司会者はそう言って礼をし、ステージから離れた。
凛と香凛もステージから降りる。
高「・・・さて、まずは腹ごしらえでもするか。お前達も適当に過ごしてろ」
蓮「はーい」
ア「じゃ、私はリンちゃんに会ってくるよ」
龍「じゃ・・・私も・・・」
レ「我はテラスにでもいるか・・・」
フ「ボクもご飯を食べるです」
高雅達は一旦、解散してそれぞれ別の場所へと向かって行った。

乾杯が終わった凛と香凛はステージから降り、香凛は早速どこかへ行こうとした。
香「それじゃ、カリンは蓮田君のところに行ってくるの」
凛「そう。分かったわ」
ステージから降りた途端、香凛はそう告げてどこかへ行く。
凛は適当に答えて済ませていた。
一人だけになった凛はふと思う。
凛（・・・香凛は幸せそうね・・・）
嬉しそうに走っていく妹の姿を見て少しだけ羨ましくなる。
？「やぁ、凛」
凛「・・・・・・」
突然、同じ年くらいのイケメンが凛に話しかけてきた。
凛は挨拶されたが、無視してどこかへ行こうとする。
しかし、そのイケメンは肩を掴んで止める。
？「待ってくれよ、マイハニー」
凛「うるさいですわね。触らないでくださる」
？「いいではないか。君と僕のなかだろう？」
凛「いいですから、放しなさい・・・きゃあ！？」
いきなり、男は無理やり凛を抱き寄せる。
凛は必死にもがいて離れようとしていた。
？「どうしたんだい？。悩みがあるなら、この僕に話してごらん」
凛「いやですわ！！。放しなさい！！」
？「照れなくていい。僕に放せば気は楽になるよ」
凛「なりませんわ！！」
どんなに否定しても、イケメンは全く放す気配がない。

もはや、完全に変質者とも言える立場になっていた。
ア「こらーー!!。そこの犯罪者!!。リンちゃんから離れなさーーい!!」
そこにアリアが痴漢を見つけたかのように大声を発する。
周りの人は自然とアリアに視線がいき、次に凛達に視線が向かう。
凛「あ・・アリアさん!?。それに、杉野さんも!?。どうしてここに!?」
ア「それよりも、そこの変態!!。リンちゃんに抱きついちゃだめ!!」
？「何だ、このブスは。どこの馬の糞だ？」
ア「ぶ・・ブスだってえええええええええええ!!??」
？「僕は君みたいな三流、いや四流貴族の娘は知らないな。話しかけないでくれるか」
ア「むかあああああああああ!!!!」
アリア、完全にキレました。
？「僕に興味があるからと言って、マイハニーを引き離そうとしても、僕らはもう結ばれるのは決まっているのさ」
龍「それって・・・許嫁・・・？」
ア「えっ!?・・・」
アリアはその言葉に驚き、戸惑う。
？「そうさ。だから、君達みたいな落ちこぼれ貴族は庶民とでも付き合えばいいのさ」
ア「こんのおおお!!。言いたい放題言ってえええええ!!」
高「うるせぇ!!!!!!」

ドガッ!!

高雅の重い一撃がアリアの脳天に炸裂した。
ア「ッッッ〜〜〜〜!!!??」
脳が揺れ、一瞬何が起こったか分からなくなっていた。

しかし、現状を理解するしてゆっくりと振り返ると、そこには鬼が立っていた。
ア「コ・・ガ・・」
高「さっきからうるさくて飯が呑気に食えねえじゃねえか!!。少しは黙ってろ」
ア「だって・・・・」
高「口答えするな。他の人に注目浴びっぱなしで嬉しいか?」
ア「それは・・・」
アリアは改めて周りを見る。
最初はここにいる全員を味方に付けてイケメンをどうにかしようと思っていたが、今では逆の立場となりつつあった。
高「分かったら、これでも食ってろ」
そう言って、適当にテーブルに合った料理をアリアに渡す。
高「龍子も、皆に見られて恥ずかしいだろ?」
龍「うん・・・・」
高「取りあえず、落ち着くまでテラスにでも言ってろ。レオがいい話相手になってくれる」
龍「・・・ありがとう・・・」
龍子はそう言うと、テラスの方へ向かいだした。
高「で?、そこの二人は何をしているんだ?」
首だけを凛達の方へ向けて問う。
?「僕が何をしてようが勝手さ」
高「そうだな。全く持ってその通りだ。んじゃ、行くぞ、アリア」
ア「えっ!?、コウガ!?」
高雅はアリアの手を掴み、この場を立ち去ろうとした。
その時だった。
凛「こ・・高雅さん!!」
凛の呼ぶ声に立ち止まるが、振り返りはしない。
それでも、凛は口を開いた。
凛「この人が放してと言っても放しません。ですから・・・手伝っ

てください！！」
その言葉を聞いた瞬間、高雅はニヤリと笑った。
高「――っと、友達が言っているんだ。放れろ、カス貴族」
？「・・・君は誰を相手してると思ってるのかい？」
高「人の嫌がる事を平気でするカス貴族」
？「君は非常識みたいだから言っておくけど、僕の父上はＳＰの中でも地位が高いんだ。これがどういう意味だか分かるかい？」
高「僕のパパはかっこいいんだぞーってほざいてること」
？「・・・君は僕を否定するんだね」
その言葉を聞いた途端、周りの人々はざわつき始める。
高「ああ、全否定だ」
？「死ね、哀れな貴族が」
そう言った途端、天井から黒い服とサングラスを見に付けた人が数人降りてきた。
着地した途端、腰に隠してあった銃を一斉に高雅に向ける。
凛は目を丸くして驚くが、何も言わない。
他の人々は一斉に逃げ始めた。
高「・・・で？」
？「君は本当にバカだね。この状況でそんな余裕を見せられるなんてね」
高「まあ、普通の人間は、な・・・」
そんな言葉を言った瞬間、高雅はいきなり暗い顔になった。
アリアはそんな姿を見て、少し同情していた。
ア「コウガ・・・」
高「・・・取りあえず、そんなこんなで、俺を普通の人間なんて思わない方がいい」
？「普通の人間でなかろうが心臓に穴が開けば死ぬだろう」
ＳＰの人達が一斉に高雅の心臓に狙いを定める。
アリアは高雅の手を繋ぎ、いつ来てもいいように戦闘態勢に入った。
母「待ちなさい」

凛「!?、お母様!?」
張り詰めた空気の中、凛の母が現れた。
後ろには姫花家のSP達がぞろぞろとついて来ていた。
母「ここで暴れるなら、例え伊刈家でも容赦しませんわよ。最も、娘達の誕生日パーティを壊した罪は償ってもらいますわよ」
伊「おやおや、お母様。伊刈に逆らうことは地球を相手にするのと同じ事ですよ。分かって言っていますか?」
母「あら、あなたのお父さんは有能でも、息子はキザで無能でしょう?」
伊「な・・何ですとおおおおお!!??」
伊刈は内ポケットに隠してあった護身用の銃を取り出し、凛の母に向ける。
伊「どうやら、この家はクズな人の集まりでしたか。では、僕が新しい土地としてもらっておきますか。ここにいる、反逆者を殺してな!!!」
血相を変えて、引き金をゆっくりと引いた。
凛「や・・やめなさい!!」
凛が伊刈の腕を掴んで銃口を逸らした。
伊「なっ!?、放せ!!。はっ!?」
その瞬間、高雅が動き出した。
だが、アリアの手を放している。
動いたら殺すみたいなオーラを出していた伊刈のSPは固まって動いていなかった。
伊「くっ、どうしたお前達!?」
高「さあな。夢でも見てんだろ」
ア「・・・成程ね」
それだけで理解したアリアは軽く周りを見渡すと、フィーラと目があった。
フィーラはにっこりと笑い、手を振った。
ボーっと突っ立っているSPを潜り抜け、すぐに凛の許に到着した。

高「放れろ、勘違いカス貴族」

ドゴッ

高雅は伊刈の腹に重い一撃を打った。
伊刈は意識が朦朧(もうろう)とし、倒れて行った。
高「はぁ、偉そうに言ってたくせに呆気ねえ。凛、大丈夫か？」
凛「あ・・これくらい平気で・・・・・」
高「？」
いつもは強がっている凛だが、いつもと様子が違った。
すぐに気の強い言葉を放すはずだが、突然、言葉を取り消した。
凛「・・・ありがとう・・・／／／」
高「あり？、普通にお礼を言いやがったぞ？」
凛「わ・・悪いですの！？」
高「いんや、別に～」
高雅は口笛を吹きながら、明後日の方向を向いていた。
凛「何ですか、その態度は！？」
高「特に何も～」
完全にバカにしている態度だが、高雅はわざと白(しら)を切り続けた。
母「ふふふ、やっと凛が元気を出したわ」
凛の母が笑いながらやってきた。
母「ほんと、高雅君は凛の王子さまね」
凛「お・・お母様！！／／／」
高「俺が王子な訳がないだろ。俺は化け物だよ」
母「ふふ、化け物じゃなくて超人ね」
高「五十歩百歩だ」
母「あらそう」
凛「そ・・そうですわ。どうして高雅さんが私達の誕生日パーティに来ていますの！？」
高「そりゃぁ、招待状をもらったからだろ」

凛「き・・聞いていませんわ！！」
高「あれ、普通にお前の母親からもらったけど？」
高雅と凛は首を動かして凛の母親の方を見る。
凛「お母様、聞いていませんわ！！」
母「ええ、言ってないもの。それに、サプライズは必要でしょ？。その様子だと大成功ね」
凛「わ・・私は驚いていませんわ！！」
母「こーら」
凛の母親が凛の頭を軽く小突いた。
軽くと言っても、じんわりと痛みが残る程度である。
母「素直になりなさいっていったでしょ？」
凛「私は素直ですわ！！」
母「だったら、高雅君に言う事があるでしょ？」
凛「そそ・・そんなこと・・・ありませんわ！！」
凛がしどろもどろになりながらも答える。
端から見れば完全に凛の母の方が優勢である。
ア「リンちゃん、可愛いね」
高「そうか？」
フ「それよりも、こいつらはどうするです？」
フィーラは今だ夢の中にいる伊刈のＳＰ達に指を指す。
今は姫花家のＳＰに取り押さえられ、全員縛られていた。
高「後で今晩の記憶を消しておく。それまで夢でも見せてやってろ」
フ「分かったです」
母「あら、何を話しているの？」
高「こっちの事情です。というか、厄介な人を敵に回しのではありませんか？」
母「そうね～、伊刈家とは縁を切りたくなかったけど、この際しょうがないわね」
高「また何でそんな事を？」
母「そりゃあ、娘の将来の方が大事でしょ？」

凛「なっ・・どういう意味ですの!?」
母「あら、許嫁から解放されて、好きな人を好きになれるようになったのよ」
ア「あっ、それは良かったね」
凛「べ・・別に私は好きな人なんて・・・」
凛が否定しようとした瞬間、凛の母が睨みつける。
それを見た凛は喉まで出ている言葉をしまい込んだ。
母「それで、高雅君はプレゼントを用意した?」
高「ん?。ああ、ちょっと離れた所にあるから、パーティが終わってから渡そうとしてるけど」
母「そうなの。それで、プレゼントって?」
高「庶民的なショボイ奴ですよ。今からやってもいいですか?」
母「いいわよ。どうせパーティは中止みたいだし、凛を好きにしても」
高「それじゃ、香凛も一緒に・・・ってあれ?」
軽く見渡してみるも、香凛の姿は見えなかった。
高「避難したのか?」
母「香凛は彼氏さんと一緒にいるわ。だから、凛だけでも連れて行って上げて」
高「・・・しょうがないな。んじゃ、行くぞ」
ア「オッケー」
フ「了解です」
高雅達は外のテラスへと繋がる窓へ向かい始めた。
その間に、こっそりと伊刈達の記憶を消しておいた。
凛も分からないまま、高雅の後ろをついて行った。

テラスに着くと、レオと龍子が空を眺めていた。
足音に気付き、レオ達は高雅達の方に視線をやった。
レ「来たか」
高「ああ。んじゃ、行きますか」
レオが人間の姿から獣の姿になる。
凛「ちょ・・ちょっと待ってください！！」
高「ん？、何？」
凛「何じゃありません。一体、どこへ行くつもりですの！？」
高「着いてからのお楽しみだ」
それだけを伝え、凛にレオの背中に乗るように促す。
しかし、納得してない凛は中々レオの背中に乗ろうとしない。
龍「あの・・・姫花さん・・・」
凛「？、何ですか？」
龍「その・・・これ・・・」
龍子が取り出したのはリボンで閉じてある小さな袋である。
龍「お誕生日・・・おめでとう・・・」
凛「あ・・ありがとうございます。開けてもよろしいかしら？」
龍「うん・・・どうぞ・・」
凛はリボンを解き、袋の中にある物を取り出した。
それは、金持から見ればとても価値の低い、熊のキーホルダーだった。
しかし、凛にとって、何故か今までのプレゼントよりも心から感謝していた。
龍「姫花さんにとって・・・いらないと思うけど・・・」
凛「そんなことありませんわ。こうやって直接頂けて、とてもうれしいですわ」
龍「そう・・・良かった・・・」

龍子はホッと胸を撫で下ろした。
高「で、龍子はこれからどうするか?。パーティはちょっと野暮用で中止になったし」
龍「そうなんだ・・・それじゃ・・私はこれで・・・」
凛「そうですか。わざわざ足を運んで頂き、ありがとうございますわ」
龍「どういたし・・まして・・・」
凛が丁寧に礼をすると、龍子は慌てながらも頭を下げた。
龍「それじゃ・・・また明日」
高「おう。じゃあな」
ア「バイバイ、リュウコ」
凛「ごきげんよう、杉野さん」
龍子はもう一度、頭を下げた後に使用人に玄関まで案内されていった。
そして、見えなくなる直前に再び頭を下げてから、龍子は視界から消えた。
高「さて、俺達も行きたいのだが?」
凛「・・・分かりましたわ。ですが、仕様がなくですからね!!」
高「はいはい」
凛はレオの背中に跨った。
アリアはブレスレットになり、高雅も凛の後ろに跨った。
凛「なっ!?／／／」
そして、高雅が後ろから手を伸ばしてレオの鬣(たてがみ)を掴む。
高雅なりに落ちないように思いやりをしているのだが、体が密着している為、凛にとっては爆発寸前だった。
高「落ちるなよ。んじゃレオ、よろしく」
レ「任せておけ」
そう言って、レオは空中に創られた足場を駆け始めた。
空中からの夜景は絶景であったが、凛にとって、そんなものを見る余裕などなかった。

## 金持ちパーティ　後編（前書き）

なんだか結果的に、あんまりパーティに触れなかったなぁ

# 金持ちパーティ　後編

空を駆け抜ける事数十分。
凛はずっと下を向いていたが、それは夜景を見る為ではなかった。
そして、着いた場所は殺風景な山の中だった。
高「ほい、到着。夜景はどうだったか？」
凛「・・・・・・・」
高「・・・おーい？」
高雅は凛の目の前で手を振る。
しかし、凛の目は上の空で全く反応を示さなかった。
高雅はチャンスだと思い、皆に指示を出す。
高「・・・・・・・おい、アレ」
フ「はいです」
レ「用意はいいぞ」
ア「はい、コウガの分」
アリアから渡されたのはキラキラ輝く円錐で頂点に紐が繋がれていた。
レオも人間状態になり、フィーラ達と一緒に構えている。
高雅達はそれを凛に向けていた。
高「はい、よ～っく狙えよ」
レ「だ・・大丈夫なのか？」
フ「ターゲット、ロックオンです」
ア「それじゃ、せ～の・・・」
完全に現実から離れている凛に向かって一斉に・・・

パパパーン！！！パーン！！！

凛「ひやっ！？」
クラッカーを鳴らした。

凛がびくりと肩を震わせる。
高達「誕生日、おめでとーーー（です）！！！！」
一斉に祝意の言葉を述べた。
お陰で現実から離れていた凛は一瞬で覚醒した。
凛「な・・何ですか！？」
高「やっと目覚めたか？」
凛「えっと・・・一体、ここはどこですか？」
凛が周りを見渡すも、町の明かりが薄く見えるだけで真っ暗だった。
高「次第に目が慣れるから、それまで待ってろ」
凛「は・・はぁ・・・」
ア「おーい、用意できたよ」
アリアが手を振って知らせる。
用意していたのは、ただその場で創ったシートだけである。
お譲さまと言うのを考慮しているのか、一応、上質な素材を使っている。
あと、暖房機能も働いている。
高「どうも。よっと・・・」
高雅はすぐに仰向(あおむ)けで横になる。
ア「コウガ、寝ちゃわないでよ」
高「分かってる・・・ｚ・・・」
フ「コウガ様、一瞬寝たです」
ア「全く、コウガは・・・」
アリアはやれやれと首を振る。
そして、高雅と同様に横になる。
フィーラとレオもシートの上に寝っ転がった。
ア「ほら、リンちゃんも」
凛「い・・・一体何を？」
高「寝りゃ分かるって」
ア「でも、本当の意味で寝ちゃダメだよ」
アリアが念のために釘を刺しておく。

そして、凛も空いている場所に寝っ転がった。
凛「わぁ・・・」
その瞬間、目が入ったのは満天の星空だった。
先程まで明りで隠れていた星達が顔を出していたのだ。
凛「綺麗・・・ですわ」
高「だろ?。やっぱ、天体観測でよかったな」
ア「時期外れな気がするけど、悪くないね」
レ「秋の星もまた違った輝きを持っておるな」
フ「一つ一つが一生懸命輝いてるです」
皆、それぞれの感想を自然と喋っていた。
凛「まさか、これがプレゼントですの?」
高「ああ、そうだ。タダで金持ちには誰も思いつかねえのを選んだけど、どうだ?」
凛「・・・まぁ、杉野さんの次に素晴らしいですわ」
高「ちぇ、やっぱり物かよ」
凛「クスッ・・・」
ふてくされる高雅に凛は笑みを零した。
すると、凛が急に物想いに耽話しだした。
凛「・・・私は緑淵高校に通って良かったですわ」
高「凛?」
凛「実は、私は高校入試に失敗しました。その時はお父様にこっ酷く叱られましたわ」
ア「そうだったんだ」
凛「それで、私は滑り止めで受かった緑淵高校で一番になると心に決め、入学しました。しかし、入学早々のテストで2位という屈辱的な数字を出してしまいましたわ」
レ「それは気の毒だな」
凛「一体、どこの馬の骨が1位を奪ったと私はその人に会いに行こうとしました。けれども、その人は私が会おうと時にはいつも休んでいるか早退でしたわ」

ア「あっ！！、それって・・・」
アリアは手のひらを打って理解した。
フ「アリア様、し～、です」
ア「ふふ、分かってるよ」
フィーラは小声で鼻の前に人差し指を置いて、アリアに注意する。
アリアは微笑みながら親指と人差し指でＯＫサインを出していた。
凛「１年も会えないまま、さらに順位が３位に落ち、私はもう絶望しましたわ」
レ「何という、すれ違いだ」
凛「それで、生徒会の権限を使えば授業中に乱入できると思った私は――」
高「ここで金持ちの非常識が出てきたぞ」
高雅が呆れて溜息を零す。
すると、凛が体を起こし、高雅の方を見つめながら続きの言葉を喋った。
凛「生徒会会長になり、やっと・・・あなたに会えましたわ」
高「お陰で、そん時は授業をサボる事が出来たけどな」
凛「そうですわね。でも、あの時あなたが私の近くにいなかったなら、私はあの強盗に何をされたか分かりませんわ」
ア「あの時かぁ・・・懐かしいね」
高「タライの素晴らしさを世に知らしめた時か」
ア「全然違うよ」
アリアが苦笑いしながら否定する。
凛「あの時から、私はおかしくなったと思いますわ。テスト毎（ごと）にあなたに勝負を挑んだり、勉強を本気で頑張ったりと」
高「１年の時は本気じゃなかったのか？」
凛「本気でしたわ。ですが、あなたとの差が分かったときに、さらに念を入れ始めましたわ」
高「それでも勝てないって、情けねえな」
凛「うるさいですわね！！。いつかは勝ってみせますわ！！」

高「そうかい。ふああ～あ・・・」
高雅は適当に返事をして、大あくびをした。
凛はまた星空を見上げながら話を続けた。
凛「・・・でも、いつからかしら？。あなたの事が頭から離れなくなったのは・・・」
フ「みゅみゅみゅ！！、それはそれは！！？？」
凛「ちょ・・フィーラさん、顔が近いですわ！！」
フィーラがさっきのセリフを聞いた途端に起き上がり、凛に顔を近づけて問う。
凛は焦りながらもフィーラの肩を掴んで離れさせる。
アリアも協力してフィーラを引き剥がした。
フ「それで、何です？」
凛「で・・ですから！！・・・・その・・・」
凛は恥ずかしがりながらドレスのすそを握って俯く。
あちこち目だけを移動させて心を落ち着けていた。
そして、目を瞑りながら高雅に自分の気持ちを伝えた。

凛「私は高雅さんの事が好きですわ！！！！／／／」

夜空に響く凛の声。
絶対に聞き逃す事の出来ない大きな声。
ア「・・・・・・」
アリアは少しだけ不安な気持ちに陥(おちい)っていた。
そして、聞こえてくるのは規則正しい寝息。
凛「・・・高雅さん？」
凛が目を開けて高雅の方を見ると・・・
高「・・・Ｚｚｚ・・」
高雅が爆睡していた。
それを見たアリアはズッコケていた。
凛「・・・あなたって人は・・・・」

凛は握りこぶしを振るわせ、高雅に近づく。

バシンッ！！

高「いぃ！？」

夜空に響く凛のビンタ。

高雅は一瞬で目を覚ました。

凛「もうっ！！、私は高雅さん何か大っ嫌いですわ！！」

高「はぁ？。一体、何事？」

ア「あははは・・・」

状況がまったく掴めていない高雅にアリアは苦笑いしていた。

凛「うるさいですわ！！。さっさと私を家に帰しなさい！！」

高「え・あ・・ああ、分かった」

高雅は状況が分からず、取りあえず言われた通りに空間を開き、凛の家へ繋げた。

凛はそそくさに空間に入ろうとしたが寸前で立ち止まった。

そして、顔を向けずに喋りだした。

凛「・・・まぁ、わざわざこんなプレゼントを用意してくださいましたし、さっきの言葉は撤回して上げますわ」

高「えー・・あー・・そりゃ、どうも」

高雅は取りあえずお礼を言っておいた。

凛は空間に入って消える間近に頬笑みをこぼしていたのを高雅は知らない。

家に帰りついた凛はドレスのままベッドに突っ伏した。
首を回すと、そこには山積みになったプレゼントがあった。
しかし、凛はそんなものはどうでもよく思い、今日を思い返し始めた。
凛「・・・直接プレゼントだなんて、初めてでしたわ・・・」
いつもは、パーティが終われば部屋に詰まれているプレゼントであったが、今日は違う。
そんな、ありきたりなプレゼント何かよりも、龍子と高雅にもらったプレゼントの方が無性にうれしかった。
母「あら、帰ってたのね」
凛「お母様」
凛の母がノックもせずに凛の部屋に入り、ベッドに腰を掛けた。
母「どうだった?。高雅君のプレゼントは」
凛「つまらないものでしたわ」
母「あらそう。その割には口がニヤけているわよ」
凛「なっ!?・・・／／／」
凛は慌ててベッドの近くにある手鏡を取り出し、自分の顔を見た。
母「やっぱり、嬉しかったのね」
凛「お・・お母様!!。嘘吐きましたわね!?」
母「さぁー?。お母さんは知りませーん」
凛「もうっ!!」
凛は怒ったのか、布団を被って隠れた。
母「それで、どうだった?。今年のパーティは?」
凛「・・・一番・・・楽しかったですわ」
母「そう。それは良かったわ」
凛「あの、お母様」
母「何?」
凛「気持ちを込めてもらったものは例え価値が低くても凄くうれしいですのね」

母「当然よ。１００円の物も気持ち一つで1億円の価値ぐらいになるものよ」
凛「そうですわね。今日でその言葉が良く分かりましたわ」
母「そう。それじゃ、もう寝なさい。明日も学校でしょ？」
凛「分かりましたわ。お休みなさい、お母様」
母「お休み」
凛の母は電気を消してから、凛の部屋を出た。

★おまけ★

ロ「お～い、蓮田～。どこだ～？」
パーティが終わったと聞き、ログナは目の前の料理を惜しみながらも大ホールを出たのだ。
しかし、あるはずの蓮田の姿が無く、ログナは屋敷をうろついていた。
ロ「はぁー、どこいったんだよ～・・・・ん？」
蓮「・・・あ・・・・・・・わわ・・・」
ロ「これって・・・蓮田の声で間違いないよな。よし、入ろう！！」

ログナが自分を探している事を知らずに、蓮田は香凛の部屋でお話しをしていた。
香「でね、凛姉ちゃんったら――――」
蓮「ははは、そうなんだ」

絶える事のない二人の笑み。
二人はベッドに座って仲良く会話していた。
しかし、蓮田がふと掛け時計を見ると、少しだけログナの事を心配した。
蓮「そう言えば、何だが静かだね。パーティは終わったのかな？」
香「そう言えばそうなの。ちょっと見て来るの」
香凛はそう言って、立ち上がろうとした時、足下に山積みのプレゼントからこぼれた箱がある事に気付かずに踏んでしまった。
香「きゃっ！？」
その時、香凛はバランスを崩し、倒れかけた。
蓮「あっ！！、危ない！！」
蓮田は咄嗟に腕を掴んで引き寄せようとした。
蓮「わわわっ！？」
しかし、思いのほか自分が引っ張られてしまい、香凛と向き合ったままベッドに倒れた。
香「あ・・・」
蓮「ご・・・ゴメン／／／／」
香「い・・いいの／／／／」
二人の顔の距離はわずか２０センチ。
互いに見つめあったまま動けないでいた。
ロ「おーい！！、蓮田ーーーー・・・・・・」
そこに空気ブレイカーこと、ログナが侵入した。
ログナは二人の光景を見て冷静に判断する。

ベッドで抱き合って見つめあってる。

ロ「・・・おおお・・俺っちより先に一線を踏み越えるなんて・・・うわあああああああああん」
蓮「え！？、ログナ！？」
ログナは情けなく大泣きして部屋を出て行った。

蓮「ご・・ゴメンね、かりんちゃん。よく分かんないけど、何だかログナが泣いてるから、もう帰るね」
香「は・・はいなの・・・」
蓮田は香凛に別れの挨拶をした後、すぐにログナの後を追いかけた。
結局、蓮田にとって訳の分からない事をログナは嘆き続けた。

# 猫と高雅の大決戦（前書き）

タイトルのわりに、そんなに激しくありません。

# 猫と高雅の大決戦

高雅はいつものように学校で授業を受けていた。
とは言っても、９割は寝ているが。
先「えー、次の問題は・・・」
高「Ｚｚｚ・・・」
先生は爆睡している高雅に狙いを定める。
指の隙間にはそれぞれ四本のチョークが挟まれていた。
先「シュッ！！」

ズガガガ・・・

高「んが！？」
高雅の額に全発ヒット。
周りの生徒達は歓声を上げていた。
先「はい、この問題ｗ「解なし」・・・正・・解・・」
高「はん、解が無くったって解はある」
先「く、難しい言葉を」
高「それじゃ、お休み・・・」
先「そうはさせません！！」
今度は両手で計８本のチョークを高雅に投げる。
しかし、今度は高雅に当たらずに、どこかに逸れて行った。
先「何・・だと・・・！？」
先生は再びチョークを投げ続ける。
ただ、何度投げても全く当たらない。
高雅が目には見えない微量にセイクリッドの力で弾いているのだ。
本人はセイクリッドの力に慣れるついでている。
先「はぁ・・はぁ・・あれっ？」
黒板の溝に手を伸ばすも、空を掴むだけ。

チョーク入れの中を見ても空っぽ。
先「どこか・・・どこか弾は？」
B「弾はねーよ、先生」
教壇の下や黒板の上など、変な所を探し続ける。
全員は呆れて先生を見ていた。

ガラ・・・

高「？」
すると、入口がほんの少しだけ開いた。
高雅のクラスは全員出席している為、遅刻している者ではない。
第一、人が通れるほど開いてない。
だから、自然と目が入口に行くも、扉を開けた本人は見えない。
不思議に思うも、目を下げるとそこには・・・

猫「ニャー・・・」

高雅の足下に黒猫が擦り寄っていた。
高「何だ、こいつ？」
猫「ニャ～・・・ニャー」
高「ったく、この学校は不法侵入し放題だな」
そう言いながら、猫の頭に手を伸ばす。
しつこく擦り寄って来るので軽く頭を撫でたいという衝動を受けたのだ。
猫「・・・ニヤリ」
猫はそれを待っていたと怪しく微笑を零した。
猫「ニャーーーー！！」
高「うわっ！？」
突然、猫が高雅に飛び掛かって来た。
高雅は驚いてのけぞるも、イスから転げ落ちることはなかった。

高「何だよ・・・いきなり襲うかよ・・・」
猫はテトテト帰っていく。
いきなり嫌われた理由が全く分からないまま。
ア（コウガーーーー！！）
高（何だよ?。叫ぶなよ）
ア（ジッと見てないで助けてよーーーー）
高（・・・はぁ!?）
高雅は意味が分からず、自分の腕を見る。
しかし、そこにあるはずのブレスレットが姿を消していた。
まさかと思い、猫を見ると、ブレスレットを咥えてこっちを見下していた。
そして、挑発するように尻尾を振り、どこかへ走って行った。
高「あのぬこ!!。俺のあり・・・ブレスレット返せやあああああ」
高雅は唖然としている皆をほっとき、瞬く間にクラスから居なくなった。

一方、変わって別のクラスで・・・
先「えー、ドップラー効果は観測者や音源が運動していると、音源が出す振動数と観測者が観測する振動数が異なって――――」
ここでは物理の授業が行われていた。
そんなクラスにあの猫が・・・

ガラ・・・

やってきた。

先「？」
先生と生徒の視線が自然と扉に向かう。
しかし、既に猫はクラスの中心まで侵入していた。
誰一人として猫には気付いていない。

ガララ・・バンッ！！

高「ぬこは何処だーーーー！！！」
そこに高雅が扉を容赦なく開けてやってきた。
先「だ・・誰かね、君は！？」
凛「こ・・・高雅さん！？」
高「凛？。それよりも、ぬこは何処だ！？」
凛「ぬ・・・・ぬこ？」
ア（コウガーーー、リンちゃんの机の下だよーーー）
高「おk」
先「き・・君！！」
高雅は先生が呼ぼうと完全無視して凛のところへ駆ける。
最も、目的は凛の机の下にいる猫の為であるが。
凛「へ！？」
高「凛、下のぬこを捕まえろーーーー」
凛「ぬ・・ぬこって何ですか！？」
高「下にいる生物だ！！」
凛「へ・・ん？」
凛が高雅に気を取られているうちに、猫が凛の膝の上に飛び乗った。
あろうことか、追われている身なのに眠り始めた。
高「もらったあああああ」
高雅が猫に向かってダイブする。
ただ、端から見れば凛に飛びつく変態である。
猫「ニャニャ・・・」
高「何！？」

猫が「ばーか」とでも言いたそうな顔をして凛の膝から飛び退いた。
ダイブしている高雅は止まる事は出来ない。
高「ちょ！？、凛！！、退け！！」
凛「えええええ！？」
もちろん、凛がそんなに反射神経がいい訳でもない為・・・

ドンガラガシャン！！

豪快に凛に飛びつき、机やイスを押し倒した。
高「いっつつつ・・・わりぃ、凛」
凛「・・・え・・あ・・・」
ア（コウガ！！。早く助けてよーーー）
高「あっと、のんびりしてる暇はない。そんじゃ、お邪魔しました」
高雅はただ凛に飛びついて帰っただけである。
その為、凛のクラスからの視線は痛い目になっていた。
生「えっと・・・凛、大丈夫？」
凛の友達が気を使って手を差し伸べる。
凛「ああ・・・ありがとう」
生「それにしても、さっきの誰？」
凛「さ・・さぁ、知りませんわ。授業に乱入する非常な人は知りませんわ」
生「でも、凛の事知ってるみたいだし、第一、あんたも名前を呼んでなかった？」
凛「よ・・呼んでいませんわ！！」
生「そ・・・そう」
凛があまりにも強く言うので、生徒はつい肯定してしまった。
先「えー・・・続けてもいいかね？」
凛「あっ・・はい、すみません」
凛は冷静になって席に着く。

凛（・・・一体、高雅さんは何をしに・・・）
先「姫花さん、聞いてますかね？」
凛「え・・あ・・・はい！！」
結局、この時間は凛は集中することはできなかった。

猫を追いかけ、はや三十年。
高「それは無い！！」
っと、冗談で、校舎の中庭まで猫は逃げて、それを追っていた。
猫一匹捕まえるのにかなり苦労しているセイクリッドの子です。
高「っるっさい。人間もセイクリッドも関係あるか！？」
猫「ニャ～・・・」
いつの間にか、猫がフェンスの上に移動していた。
そして、未(ま)だかと猫が鳴いている。
高雅がキッと睨みつけると猫は逃げるようにフェンスの向こう側に飛び降りた。
高「ここまで来て逃がすかよ」
高雅は思いっきり跳躍して、２メートル強あるフェンスを飛び越える。
着地して辺りを見渡すと、猫の下半身が交差点を曲がッているのが見えた。
高「今度こそ捕まえてやる」
高雅は猫の後を追う。

そして、高雅が交差点を曲がったその時、とんでもない光景を目にした。
高「いっ！？」
猫が車が行き交う道路に飛び出していた。
丁度、大型トラックが接近している時にだ。
トラックが急ブレーキを掛けた音に猫は驚いて膠着（こうちゃく）してしまう。
猫は覚悟を決めて、目を強く閉じた。
しかし、猫が感じたのは強い衝撃ではなく、優しい温（ぬく）もりだった。
猫が目を開けると、そこには寸前で止まったトラックと自分を抱いている高雅の姿が見えた。
高「ふぅ～、間一髪だったな」
そう言って、高雅は緊張の糸を切る。
猫の口にはブレスレットは無く、既に高雅の腕に巻かれていた。
ア「ねえ、コウガ」
高「ん？」
ア「車を止めるときに、活性の力を使ったよね。何を活性したの？」
高雅は静寂の力や破壊の力を使わずに、トラックを止めたのだ。
それを不思議に思ったアリアは高雅に質問してみた。
高「ああ、タイヤとの摩擦力だよ。さっき、乱入したクラスで物理してたから、物理っぽい方法で止めただけ」
ア「ふーん、納得」
運「ゴラッ！！。何飛び出してきてんだ？、ああ！？」
トラックの中からかなり厳（いか）ついオヤジが降りて来る。
高「は？」
高雅が同じように睨みかえすと、運転手のオヤジは一瞬怯える。
そこに、すかさず高雅は言いよる。
高「ここの規定速度は４０キロのはずですが、あなたは軽く６０キロオーバーはしてましたよね。なのに、そんな態度は間違っていませんか？」
あくまで優しく、そして殺気は死なない程度に出し続ける。

遂にオヤジは腰を落として、完全に負けていた。
高「今すぐ、警察に通報されたくなければ、時速４０キロ以内で失せてください」
運「ひやあああああ」
オヤジは疾風の如く車に乗り、トラックを１８０度回転させて帰って行った。
高「・・・はぁ。今時、規定速度を超えたって警察が動くなんて思わないけど・・・」
ア「まぁ、あの人の場合は十中八九コウガの所為だと思うよ」
高「だろうな。それにしても、アリア」
ア「何？」
高「人気が無い所はいくらでもあったぞ。なのに何で人間状態などに戻って逃げなかった？」
ア「ああ。それは、攫われるヒロインを演じてみたかったのよ」
高「ふざけんな！！。そんな、下らない事を考えやがって！！。人がどれだけ心配したと思ってんだ！！」
ア「え！？・・・コウガ、心配してくれたと？」
高「心配なんてしてねえ！！」
ア「ちょ！？。言ってる事が滅茶苦茶だよ！！」
高「知るか！！。もう、帰るぞ！！」
ア「学校は？」
高「知らん！！」
結局、高雅は不機嫌のまま、荷物を取りに行かずに家に帰って行った。
道中、車の少ない所で猫は逃がしてあげました。

## 泥棒退治（前書き）

本日、とある大学の推薦試験でした。

結果?。まぁ、いずれわかるよ。

手応えは薄いけど・・・

# 泥棒退治

いきなりですが、緑淵高校で騒動が起きました。
内容はどこの学校でもある盗難である。
その所為で、緑淵高校にいる全員は体育館に集められていた。
先「えー、集まってもらったのは他でもない。この学校で盗難が起きました。なので、犯人は名乗り出てください。今なら、罪は軽くしますから」
高「アホか。全員が集まってるのに、わざわざ注目を浴びようと何かしないだろ、普通」
高雅の言うとおり、生徒達は軽くざわつくも、誰も自首しない。
先「そうですか・・・では、来週の文化祭は中止ですね」
先生が最終手段を速攻で使い始めた。
生徒達は一気にブーイングの嵐を巻き起こした。
先「静かにしろ!!。そんな悪い奴がいる文化祭など、成立する訳ないだろ!!。犯人が現れなければ、文化祭は中止だ!!。いいですよね、校長!?」
校「・・・残念ですが、仕方ありません」
校長のセリフに生徒達はさらにブーイングを強くする。
あろうことか、校長に対して物を投げ始める奴もいた。
先「黙れ黙れ!!。文化祭をしたくは犯人を見つけろ!!。以上で全校集会を終わる!!」
結局、先生が一方的に進めて一方的に終わらせた。
教室に帰る途中、Aが後ろからやって来るのに気付いた。
A「ったく、何で連帯責任何だよ。なぁ、高雅?」
Aが高雅に肩を組もうとする。
しかし、高雅はしゃがんでやり過ごし、そのまま肘(ひじ)打ちをかました。
A「いって!?」
Aは腹を抱えて少しだけ蹲(うずくま)る。

高「馴れ馴れしく触ろうとするな。第一、下の名で呼ぶんじゃねえ」
A「いいじゃねえかよ。同じ天国の使いを持つ仲間だろ？」
高「お前は仲間じゃない。利用できる物だ」
A「ひっでぇ！！。まぁ、主人公の仲間にはそう言うキャラも必要だよな」
高「勝手に言ってろ」
しかしAは高雅の肘打ちを喰らっても僅か数秒でケロッとしている。というか、蹲ったのが演技のように全然ダメージがなさそうに振る舞っている。
決して、我慢している訳ではない。
B「あいつ・・・崎村の肘打ち喰らって生きてるぞ」
C「な・・なんて奴だぁ・・・」
D「普通なら、1週間は気絶するはずなのに・・・」
E「あいつら人間じゃねえ！！」
昔は仲が良かったAも、既に購買部組から卒業し、手の届かぬ場所にいる。
そんなことを思いながら、購買部組は高雅とAのやり取りを見て、必死に喋って存在を知らしめていた。
B「うぉおい！？、そこまで俺らの存在って薄いか！？」
C「消える前に何か、何か、何か迷言の一つでも！！」
D「ボウヤだからさ」
E「いや、それはダメだろ。既出だし。てか、迷言か？」
B「お前らの明日は無い。今を精一杯生きるんだな」
C「ごめん、そのセリフどこで出すのか分からん。もっと使いやすいのを」
D「俺達が居なくなっても、俺達は読者（きみら）の心にいつまでも生き続けるさ」
E「それでいいだろ、もう」
Eは、まるでもう居なくなるみたいに思い考えるのが嫌になっていた。

呆れたEはチームから離れ、先に教室に帰った。
ちなみに、高雅達はというと、Aが地面にめり込んで倒れていた。

教室に着き、高雅は早速眠り始める。
他の生徒達は今後の文化祭の事をどうするか話しあっていた。
ア（ねえねえ、皆困ってるよ）
アリアは高雅が眠りに着く前に話しかけた。
高（知らねえよ。文化祭の一つや二つ、中止になったって世界は滅びねえよ）
ア（それはそうだよ。でも、リュウコもユメちゃんも落ち込んでるよ）
高（それと俺とどういった関係がある。俺は寝る。邪魔するな）
ア（も～）
そんなこんなのやり取りしていると、先生が入って来る。
先生は教壇に立つと、生徒達はちゃんと席に着く。
先「えー、こんなことは言いたくないけど、犯人は私のクラスじゃないわよね？」
A「当たり前だろ！！。先生は俺達をそんな風に思ってたのかよ！？」
そーだそーだとAに続いて言いよる生徒達。
先「そうよね、先生が間違っていたわ。あなた達は私の生徒。だから、そんなことするはずが無いわよね」
A「はい、先生！！」
先「さあ、あの夕陽に向かって走るわよ！！」

A「はい！！」
そのまま、Aと先生とノリに乗った数人の生徒達は夕日に向かって走り始めた。
ア（今は三時過ぎだから夕日は無いんじゃ・・・）
心の中で一応ツッコミはしておくアリア。
そして、教室が静まりかえり、虚しく風が過ぎ去ってゆく。
一瞬だけしらけたが、生徒の一人が勝手に帰り始めると、それにつられて皆が動き始めた。
次々と席を立ち、鞄を持って帰宅して行く。
しかし、高雅はそんな中でも爆睡していた。
アリアは起こそうと思ったが、邪魔するなと言われたので、あえて起きるのを待った。

1時間後・・・

高「・・・んあ・・くぅ～・・」
高雅起床、そして背伸びをする。
ア「やっと、起きた」
高「ん～・・・よく寝た・・・んじゃ・・」
ア「こらこらこらこらこら」
アリアは高雅が再び寝ようとしたから、人間状態になって体を揺すった。
高雅は不機嫌になりながらも、体を起こし鞄を取った。
一応、最後の一人の為、窓の鍵閉めをチェックする。
チェックが終わり、アリアはブレスレットに戻り、教室の鍵を取っていざ出ようとした。
そんな時だった・・・
先「おや、まだいたのですか？」

分かりにくいと思いますが、これは高雅の担任で数学担当の先生ではありません。
本日、全校集会で前に立って話していた先生であります。
高「何の用ですか～」
先「見回りですから。部活動が無いなら早く帰りなさい」
高「うい～」
先「それでは、気を着けて帰るように」
高「さよーなら」
高雅は教室の鍵を閉め、鍵を先生に預けて去っていった。
先生は手を振り、高雅を見送っていたが、高雅が見えなくなった瞬間、すぐさま行動を開始した。
先「・・・さーて、やるか」
そう言った瞬間、先生の顔つきが変わった。
先生は周りに誰もいない事を確認してから、高雅から受け取った鍵を使い、教室に潜入した。
先「さてと、適当に盗んで行くとするか」
先生は引き出しや後ろのロッカーなどにある物を適当に漁(あさ)ってゆく。
そして、服に隠してあった革製の袋に詰め込んでいった。
先「こんなもんだろ・・・〈ガララッ〉ッ！？」
扉が開く音が聞こえ振り返ると、そこには龍子が居た。
先生は一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐにいつもの顔になった。
龍「・・先・・・生・・？」
先「どうしたんだ？。忘れ物かい？」
龍「はい・・・でも・・・今・・先生が・・・持ってる・・」
先「・・ちっ、気付かれるとはな」
龍「まさか・・・先生が・・・」
先「気付かれたらしょうがない。証拠はちゃんと隠滅しないとな」
龍「ひっ！？」
先生がゆっくりとこちらに近づいて来る。
龍子は身の危険を感じ、逃げようとした。

しかし、後ろには既に別の先生が道を塞いでいた。
先「残念だな。文化祭を潰したいのは俺一人って訳じゃない」
龍「そんな・・・・」
先「取りあえず、口封じはしておかないとな・・・」
少しづつ龍子との距離が縮まって行く。
そして、懐から刃物を取り出した。
それを見た龍子がさらに震えが増す。
先「叫ぶなよ。叫んだら山奥に埋めてやるから」
？「ふ～ん、そーなのかー」
先・龍「！？」
第三者の声が聞こえ、振り返ると、顔面が崩壊した先生を引きずっている高雅の姿があった。
龍「高雅君！！」
龍子はすぐに高雅のところに駆け寄る。
高雅は適当に持っていた先生を投げ捨てる。
高「先生、何をしているのでしょうか？」
先「こ・・これは劇の練習だ。私がそこの生徒に付き合っているのだ」
龍「ち・・違うよ！！」
先「なら、証拠はどこにある？。お前の口以外の証拠は？」
龍「そ・・・それは・・・」
龍子は俯いて黙りこむ。
だが、高雅は関係なしに自分の席へ向かった。
高「え～っと・・・ん～っと・・・おっ、発見」
そう言って、高雅が引き出しから取り出したのは普通は誰も持ってない盗聴機だった。
先「そ・・それは・・・」
高「ああ、つい数分前の事はカセットにしっかり録音してたから」
先「お・・お前えええええええ！！」
高「いやー、俺の感って良く当たるね～」

ア（良く言うよ・・・）
先「ふざけるなぁあああああああああ」
先生がナイフを構えて高雅に接近してくる。
高雅にとって、ナイフを持った人が襲いかかる事など、ミツバチレベルだろう。
高「ひっさしぶりに制裁を下すか」
高雅は振りかざすナイフの手を払い、側頭部に回し蹴りを喰らわせた。
先生は堪(たま)らず吹き飛び、机やイスを巻き込んで行く。
高「おーい、龍子ーー」
龍「え・・何・・・」
高「今からサディスティックな事をするから、早く帰ったら?」
龍「え・・でも・・・私・・・」
そう言って、先生が持っていた革製の袋に目をやる。
高「・・成程。じゃあ、早く取って逃げてろ」
龍「うん・・・でも・・・」
高「でも?」
龍「・・・あんまり・・・怪我・・させたら・・ダメだよ・・」
高「へいへい。犯罪者にまでお優しいこと」
高雅がやれやれと首を振る。
龍子はそれを見て笑っていたが、目的を思い出し、袋を取って教室を出て行った。
高雅は首を回し、側頭部を抑えて倒れている先生に目をやる。
高「さて、休み時間は終わりましたよ」
高雅は不適に笑いながら一歩、また一歩近づいて来る。
そして、一歩進む度に殺気を増幅させていた。
お陰で先生は動けずに怯える始末である。
高「俺の脳内裁判で死刑と判決を下しました。これはもう、決定事項です」
もちろん、真っ赤な嘘であるが、高雅の殺気が嘘だとは思わせなか

った。
先「ひぇぇぇぇ、やだぁぁ！！。死にたくないぃぃ！！」
高「見苦しいですよ、早々に死んでください」
高雅は爪先（つまさき）で先生の腹を蹴り込んだ。
先生は短い悲鳴を上げた後、意識を失った。
高「一件落着っと」
ア「お疲れ様」
高「これで、何度も全校集会を開くことはなくなるだろう」
ア「とか何とか言って、実際は文化祭がしたかったんでしょ？」
高「ふざけんな。面倒だし、休みは潰れるし、いいことなんてありゃしない」
ア「はいはい」
アリアは高雅の否定の言葉を適当に流し、話を終わらせる。
高「ったく・・・んじゃ、帰るか」
ア「うん」
高雅は先生をほったらかし、代わりに近くにテープを置いて教室を出て行った。
この後すぐに、この先生は見つかり、テープの内容を聞かれ、クビになったとさ。

後日。
文化祭が開催されると聞いた高雅のクラスはハイテンションになっていた。

A「いいいいいいいいいいやあああああぁああほおおおおぉおおぉおおおぉぉ」
B「文化祭、バンザーイ！！」
C「今年は去年よりはしゃぐぞーーーー！！」
D「模擬店を全て回ってやるぜ！！」
E「野球部の焼き鳥を買い占めてやるぜ！！」
特に、一番はしゃいでいるのは購買部組である。
周りの生徒達もはしゃいでいたが、このチームのはしゃぎようを見て、呆れていた。
ちなみに、高雅は耳栓をしながら寝ていたそうだ。

## 文化祭　準備（前書き）

最初の方にあるネタが入っています。

一応、ヒントはＤＢのぶろりー編の○ラン○スです。

他にもありますので、解らない人はすみません。ｍ（＿＿）ｍ

# 文化祭　準備

１１月初旬。
寒さも本番になり、最早ジャンバーも手放せなくなるこの時期。
学校はかなり慌ただしくなっていた。
それは高雅のクラスも、もちろんのことである。
Ａ「えっと・・・Ｂ、それはそこじゃなくて向こうだ」
Ｂ「うるせぇ！！。裏切り者！！」
Ｃ「そうだ！！。テメーなんざに命令されてたまるか！！」
Ａ「ああ！？。俺は実行係だぞ！！。俺の命令は絶対だ！！。・・・
あっ、おい、高雅！！。休むんじゃねえ！！」
高「あ？」
高雅は睨みつけて、不機嫌そうな顔をする。
しかし、Ａは怯みもせずに話を続ける。
Ａ「んな顔をしてもダメだ。働け」
高「それよりもお前、俺を名前で呼ぶな。次、呼んだらころｒ「高雅
高雅高雅高雅高雅ｋ」上等だぁ！！」
Ａ「かかってこいや！！」
えー、プロローグでないプロローグはここまでで。
只今、緑淵高校は文化祭シーズンであります。
高雅達のクラスは購買部組の強制決定でメイド喫茶になりかけたが、
夢が負けずと討論し、執事喫茶と合同になってしまった。
そして、その飾り付けを今行っているところ、高雅とＡが暴走しだ
した。
いつもは５秒と掛からない喧嘩だが、既に３０秒は経過していた。
夢「くぉらぁ！！、実行係がサボってどうすんねん！！！」
龍「高雅君・・・落ち着いて・・・」
二人の壮絶な喧嘩に勇敢にも二人が割って入った。
高「ちょっと待て。後１０秒でけりがつく」

A「こっちのセリフじゃあああああああああああ」
結局、治まらない二人。
その光景を見ていた購買部組は唖然としていた。
B「おい、あのAが崎村と対等に殺りあってるぞ」
C「あり得ない・・・俺達だったら喧嘩すらできないってのに・・・」
D「あいつは・・・人間じゃない・・・」
E「にゅーたいぷか!?」
夢「もう、いい加減にせえええええええええい!!」
龍「ゆ・・夢ちゃんも・・・落ち着いて・・・ね?」
A「喰らえや!!!。シャ○ニン○フィ○ガー!!!!」
高「くたばれ!!、主人公マニアがぁ!!」
結局、暴走は治まる事を知らず、ただ時間だけが過ぎてゆく。
時が経つにつれて、二人の喧嘩は激しさを増してゆく。
ア(いい加減にやめなさいよおおおおおお!!)
高・A「ッ!?」
突然、高雅とAの動きがピタリと止まる。
A「・・・あー、何か萎えた」
高「ふん」
そして、さっきまでの喧嘩が嘘のように幕を閉じた。
ギャラリーはキョトンと目を丸くしていた。
龍「えっ?」
夢「な・・何で?」
全く理解できない二人だが、龍子は高雅のブレスレットが一瞬輝いたのを見て、理解した。
高雅は自分から飾り付けをし始めた。
高(ったく、邪魔しやがって)
ア(静寂で止めなかったら、ずっと争ってたでしょ?。争うのはいつでもできるけど、この文化祭はもう出来ないよ)
高(来年もあるだろう)

ア（そう言う意味じゃなくて、２年生の文化祭は一回だけって意味だよ）
高（変わらねえよ）
そう会話しつつも、着実に飾り付けを済ませてゆく。
龍「高雅君・・・・手伝うよ・・・」
高「ああ、どもども」
龍子も飾り付けに復帰し、高雅と共に働きだした。
それを見ていた夢がニヤニヤしていたのは言うまでもない。
？「おやおや、励んでいる事だな」
高「？」
そこにやって来た別のクラスの人。
さながら、偵察だろうと高雅は思っていた。
Ａ「出たな、Ｘ（エックス）」
Ｘ「ほう、Ａか。お前、このクラスだったんだな」
高「Ｘ・・・めっちゃかっけぇ名前だな、おい」
Ｘ「それよりも、君等は何をするきだい？。見たところ、喫茶店か何かか？」
Ａ「はん、テメーに教えるかよ」
Ｘ「ふぅん、まあいいさ。そっちも喫茶店なら、これでビリはなくなったみたいだし」
Ａ「んだぁと！！。俺達が優勝するんだ！！」
Ｘ「優勝？。ぷっはははは。ほんと、Ａは現実を見ない男だね」
Ａ「るっせぇ！！。お前なんかに絶対負けねえからな！！」
Ｘ「何とでも吠えるといいさ。優勝は俺様のモノだから。期待せずに待ってるよ」
そう言い残し、Ｘは軽く手を振って去って行った。
Ａ「むっきーー！！。ムカつくなぁ！！！！」
夢「なん？、今の？。Ａ、あんたの知り合い」
Ａ「腐れ縁だ！！」
高「随分と挑発的な態度だったな」

A「あいつはいっつもそうだ！！」
龍「なんだか・・・悔しい・・・」
A「あいつにだけは負けたくない！！」
B「俺も見ててムカついた！！」
C「あいつにぎゃふんと言わせようぜ！！」
D「そうと決まれば偵察だ！！」
E「この中で偵察に向いているのは・・・」
クラス全員が周りを見渡し、適任者を探す。
すると、ある一人の男で目が止まる。
高「・・・・・何だよ？」
A「頼む！！。お前しかいない！！」
高「やだ。だるい」
夢「頼むよ、崎村。あんたなら何があっても対応できるでしょう？」
高「別に、優勝とかどうでもいいし。むしろ、文化祭がどうでもいいし」
B「と、言う奴に限ってほんとｈ「死ね」うぎゃあああ、嘘！！、嘘！！、嘘です！！」
高「くたばれ、パンツが！！」

ドグォ！！

高雅のエグイ、パンチがBの顔面にめり込んだ。
高「ったく。大体、偵察したってそれからどうするんだよ？」
A「それは・・・ほら、それに因(ちな)んだ営業妨害しに行くとかさ」
高「・・・最低だ。とても、主人公の考える事じゃないな」
A「ちょっ！？、嘘です！！。全て嘘です！！」
Aがどんなに吠えても高雅は全く無視し続けた。
そして、鞄を取り、教室を出て行った。
高雅のお決まり、早退である。
A「アハッ」

夢「あんたの所為で崎村が帰ったぞ、おらあああああああ」
A「ドアラッ！！」
夢の飛び蹴りがAを的確に命中し、壁まで吹き飛ばした。
この後、偵察に行った者は誰もいなかった。

家に帰った高雅は取りあえず寝た。
その間に、アリアは皆をリビングに集めて話し合いをしていた。
ちなみに、サミダレ、フィーラ、レオ、エクスはTVゲームをしている。
ア「皆、いる？」
フ「アリア様、一体何事です？」
ア「コウガが寝ている内に、皆に話しておこうと思って」
エ「なぜ、コウガ君を抜いて話し合うんだい？」
ア「まぁ、軽い訳あって」
レ「それで、一体・・・おっと、次のレースが始まるぞ」
フ「わぁ！！、スタートダッシュができなかったです」
エ「甘いよフィーラ君。勝負は如何なる時でも・・・ああ、落ちた！！」
フ「あははは、ダサいです。それ、復讐です！！」
エ「ちょ・・後ろに留まって赤の甲羅三つは酷いぞ、フィーラ君！！」
あっ、今ので大多数の方は分かったと思いますが、ゲームは赤い髭男のレースです。
ちなみに、機種はロクヨンの奴です。
サ「そんな所で遊んでて、後で追いつけるのかのぉ？」

フ「え・・わわわ、凄い差が！？」
サ「ほほほほ、お先に・・・んわっ！？、レオ殿。それは！？」
レ「これは蒼い甲羅といって、一番の者を的確に仕留めるアイテムだ」
サ「分かっておるわい。う・・撃つでないぞ」
レ「分かっておる。ただ、最後に使うまでだ」
サ「くっ、外道じゃのぉ」
ア「こらあああああああああああああ、人の話を聞きなさいいいいいい」
完全に空気にされ、怒ったアリアはゲームのコンセントを引き抜いた。
フ「あああ！！」
ア「あああ、じゃない！！。人が話そうとしてるのに、ゲームに夢中にならないでよ！！」
サ「だからって、消すのは酷いんじゃないかのぉ」
ア「だって・・・聞いてくれないんだもん・・・」
レ「まぁ、我らも少し夢中になり過ぎていたのかもしれぬな」
エ「確かに、否定はできないな」
ア「もう・・・じゃあ、話すよ」
アリアは皆に説明しだした。
レオはゲームを片づけ、皆はアリアの言葉に耳を傾け出した。
ア「今週の土日ね、コウガの高校で文化祭をやるの」
フ「ブンカサイ？。それって何です？」
ア「要するに、学校のお祭りってこと」
レ「ふむ。それで、どうすると言うのだ？」
ア「きっと、コウガの事だから、絶対に来るなって言うかもしれないけど、皆に来て欲しいな」
サ「何故じゃ？。わざわざ主人の命令を背いて行く価値があるというのか？」
ア「まぁ、単なる冷やかしなんだけどね。コウガのクラスの出し物

が喫茶店だから、そこに乗り込もうと言う作戦だけど」
フ「アリア様、子供です？」
ア「う・・うるさいなぁ。コウガがどんな反応するか、見てみたいと思わないの？」
エ「・・・成程。つまり、アリア君はコウガ君から御持て成しを受けたいと言う訳か」
ア「ふぇ！？／／／」
エ「それが一人では恥ずかしいから僕らを誘っている。さぞかし、そのあたりだろう」
フ「成程です。恋する乙女は小さなことでも独占したいって訳です」
ア「ちちち・・ちぎゃうひょ！！／／／」
サ「噛むところが、また怪しいのぉ」
ア「も・・もう！！、そんなんじゃないって！！／／／」
レ「人は強く否定するほど怪しいと、昔聞かされたな」
ア「う・・ううう・・・・」
アリアはあろうことか涙を流し始めた。
それを見た皆が一斉に焦りだした。
フ「あ・・アリア様！？」
レ「や・・・やり過ぎたか？」
高「ふぁ～、良く寝た～」
そこにやって来る高雅。
一同はまた一斉に焦る。
高「ん？、どした・・・って、アリア！？」
真っ先に目に入ったアリアの涙に、高雅は驚く。
そして、次に目に入るのは焦っているフィーラ達である。
高「で、一体どういう訳か説明してもらおうか？」
殺気を全開にしながら振り返る。
それを受けたフィーラ達は体が震え始めていた。
フ「ここ・・・コウガ様、殺気が怖いです・・・」
レ「こ・・これでは、言えるものも言えぬ」

高「そんぐらい、根性でどうにかしろや。さっさと訳を話せよ」
フ（す・・凄い怒ってるです～～～）
怯える四人は口を開くことすらできなかった。
ア「待って・・・コウガ」
アリアは涙を拭いながら、高雅を呼びとめた。
高雅は振り向き、殺気の放出を止めた。
フィーラ達はホッと一息を吐いていた。
ア「えっと・・・皆に文化祭に来るように言ってたら、ちょっといじめられただけだから、気にしないで」
高「ふ～ん・・・・そうか。でも、いじめは悪い事だよな？」
高雅が振り向きながら再び殺気を込める。
油断していたフィーラ達は体がビクリと跳ね上がった。
フ「は・・はい・・・です・・」
サ「こ・・コウガ殿。私らは悪気があってした訳ではなくてのぉ」
高「いじめをする奴は口を揃えて、そう言うんだよ」
エ「いや、しかしコウガ君。僕らはちょっと面白がってやったわけで・・」
高「面白がって女の子を泣かすなんて、性根が腐ってやがるな。こりゃ、一発どころか、千発の制裁が必要だな」
高雅が０円スマイル全開で指の骨を鳴らしていた。
その瞬間、四人の背筋に悪寒が走った。
フ「うわあああああ、ごめんなさいですーーー！！」
高「俺に謝ったって意味が無い」
フ「アリア様、ボクを許して欲しいです！！。ごめんなさいです！！」
フィーラは頭を床にぶつけながらも、アリアに土下座する。
ア「い・・いいよ、別に。許してあげるよ」
フ「ほ・・・ほんとです？」
フィーラが顔を上げ、途端に明るくなる。
高「後三人・・・・」

高雅がそう呟くと残りも一斉に土下座してアリアに謝罪した。
アリアは困りながらも、全員を許していった。
その後、フィーラ達は高雅の頭が冷えるまでリビングを出て行った。
高「全く、目覚めが悪いぜ」
ア「コウガが大袈裟に取ったからでしょ？」
高「別に。いじめは徹底しとかないけねえからな。ところでよ・・・」
ア「な・・何？」
高「文化祭に誘うなんて、お前は分かってんだろうな」
ア「え？、何で？。皆も来た方が楽しくなりそうだと思ったけど・・・」
高「あのな、人間って言うのは珍しいものには目が無いんだ。この辺りで髪の毛をピンク色やら蒼色に染めてる奴を見たか？」
ア「えっと・・・えへへ」
アリアは頭を掻きながら、苦笑いして誤魔化す。
高雅は呆れて溜息を零していた。
高「変に注目を浴びて、それが俺関係だ、て気付かれたら後後面倒なんだよ」
ア「そ・・それぐらい、記憶を消しちゃえば何とかなるよ」
高「んな、下らねえ事に記憶を一々消してられるか！！」
ア「じゃあさ、コウガとは関係が無いように頑張るから。ねっ？」
高「何を頑張るかは知らんが、本当に信用していいんだろうな」
ア「当然だよ。私はコウガの使いだよ」
高「・・・・わーったわーった。好きにしろ」
ア「やったぁあ！！」
高「ただし、俺は何が起きても他人のふりをするからな。後、あんまり俺に付き纏うなよ」
ア「了解♪」
こうして、高雅から了解を得たアリアは、皆を連れて文化祭に行く事になったのだ。

自ら承諾した高雅は少しだけ不安と後悔を抱えていたのであった。

ア「絶対、皆でコウガの所に行くからね」

高「来るな！！」

訂正、後悔しか残っていませんでした。

## 文化祭　一日目　前編（前書き）

ふと気がつくと、この小説が連載し出して1周年となりました。

だからと言って、何かする気もありません。

ただ、1周年ですねってだけです。

高「悲しーなー」

# 文化祭　一日目　前編

サクッと飛んで文化祭当日。
アリアは高雅と別行動し、校門の前でレオ達が来るのを待っていた。
ア「おっそいな～。もう、始まってるのにぃ」
本人は平然としているが、一般の人の目を引いている。
それも、男子ばかりの。
フ「お～い、アリアさ・・・じゃなかった、アリア姉様～～～～」
そこにフィーラが手を振りながらアリアに駆け寄る。
その後ろからレオやエクス達もやって来る。
ちなみに、様らか姉様に訂正させたのは高雅によるものだった。

高「今時、様とか殿とか言う奴はいないから、別の敬意で現してくれ。あと、女に対して君付けも少しおかしいから、なるべく変えてくれ」

と、言う事で、様から姉様になったのである。
高雅は微妙に引っ掛かったが、まぁ良しと言うことにしておいた。
他の皆も呼び捨てにしたりと変更していた。
レ「待たせたな、アリアど・・ではない、アリアよ」
ア「全く、遅いよ」
エ「悪かった。ちょっとフィーラちゃんが支度に戸惑ってね」
サ「まぁ、結果的に間にあったようじゃし、良しとしておこうではないか」
ア「全然間にあってないよ!!。もう始まってるよ!!」
五人で色々会話しているだけだが、自然と人の目を引く。
その様子を見かねたフィーラがふと本音を零す。
フ「ほんと、コウガ兄様が言ってた通りです」
レ「仕方ない。人間という者の性(さが)だろう」

ア「まぁ、最初から気にしてたら今日は楽しめないよ」
エ「そうだな。今日は楽しむために来たんだ。楽しまなければ意味が無い」
サ「しかし、今、天獣の姿になったら、どんな反応を示すか興味があるのぉ」
ア「そんなことしたら、コウガに殺されるよ。きっと」
そんなこんな話しながらアリア達は学校へと入った。

変わって、高雅のクラス。
A「うし、午前は俺達、羊のターンだ」
高「羊じゃなくて執事だ。王道なボケは止めれ」
A「さぁ、俺のイケメンフェイスを輝かせる瞬間だぜ」
高「聞いてねえし・・・」
高雅はもうどうでもいいと溜息を零した。
ちなみに、高雅のクラスは午前が執事で午後がメイドという仕組みである。
料理は執事の時は女子が、メイドの時は男子が数人ずつ交代でやる仕組みである。
夢「さぁ、開店ですWA。張り切っていきま～～～～『しょい！！』」
最後の部分だけ、皆（高雅は除く）で声を揃えてる。
高「元気だな。執事喫茶なんて、今時来ねえと思うけど・・・・」
そんな愚痴を零しながら、高雅達の執事喫茶は開店した。

1時間後・・・

A「・・・どうしてこうなった？」
高雅とAが裏で会話していた。
高雅はさぞかし、どうでも良さそうに答えた。
高「当然の結果だ」
結局、来た客は１０人程度。
A「な・・何が足りなかったんだ？」
高「今時、執事喫茶なんてアホすぎるし、何より需要が全然ないだろ」
B「お～い、サボらないで客に料理を運んでくれよ」
A「あ・・ああ」
Aは料理を運ぶため、裏から出て行った。
高雅は適当にイスに座り、だらしなく背もたれに寄りかかった。
高「後1時間半で執事喫茶が終わるな。結局、あいつらは来なかったな」
などと、期待していた事を適当に零す。
高「き・・期待とかしてねえし！！」
龍「・・・高雅君？」
高「りゅ・・龍子！？。居たのかよ？」
龍「うん・・・それより・・・入口に・・・誰もいない・・・」
高「おいおい、誰か待機してろよ。ったく、しゃーねぇな」
高雅は重い体を立ち上がらせ、入口の前へ向かい、待機する。
すると、間もなく入口の窓に人影が映った。
高（だりぃ。しかし、一応客だし真面目にやるか）
高雅はスーツを軽く直し姿勢を正す。

ガララッ

扉が開き、誰か確認する。
高「・・・お帰りなさいませ、お譲様、旦那様」
一瞬だけ戸惑った。
だが、平然と成して見せた。
ア「あれ、意外と普通・・・〈ゾクリッ!!〉ひっ!?」
高「では、ご案内します。どうぞこちらへ」
高雅は営業スマイル全開でもてなす。
それと同時に放つ絶大な殺気。
アリア達は冷や汗を吹き出し、固まっていた。
高「どうされました?。どうぞこちらへ」
高雅はあくまで平然にふるまう。
フ「あ・・アリア様、ボク達に明日はあるです?」
ア「ごめん。それ、答えられない・・・」
エ「と・・とにかく、立ち尽くす訳にもいかない。他の客の迷惑になるぞ」
ア「そ・・・そうだね」
アリア達は凍りついた体を無理やり動かし、高雅について行った。
高「こちらでございます。メニューが決まり次第、お呼びください」
高雅は一礼してから裏へと向かう。
アリア達は恐る恐る座り、震えている体を落ち着かせる。
ア「はぁー、怖かった〜」
フ「何だか寿命が数十年減ったです」
エ「まさか、あれ程怒るとは。コウガ君は本気で僕らを殺しかねない」
サ「え・・・縁起でもないのぉ」
高「まぁ、死を覚悟して来たんだろ?」
ア「うわぁ!?」
高雅がお盆に水を乗せ、いつも間にか側に立っていた。
全然気付かなかったアリアは思いっきり驚いていた。
高「予想していた通りのリアクションだな」

ア「あは・・あはははは・・」
フ「すみません、ボク、プリン！！」
サ「私もそれを頂くかのぉ」
高「はい、プリン二つ」
レ「コーヒーという物を頼む」
エ「僕もそれで」
高「コーヒー二つ」
ア「え・・あれ！？」
アリアを置いて行き、注文をするフィーラ達。
さっきの怯えは何だったとアリアは思い、また焦る。
高「ご注文は以上ですか？」
ア「あ・・えっと・・・私もプリン」
高「はい、かしこまりました」
高雅は一礼して、再び裏へと去っていく。
が、話す間もなく、僅か１０秒で戻って来た。
高「お待たせしました」
ア「待つほどの時間じゃなかったけど」
高「取りあえず、さっさと帰れよ。バカみたいに注目浴びてるから」
客達はジッと見ている者もいれば、チラ見している者もいた。
ア「もう慣れたよ、それぐらい。ハムッ・・・」
アリアは周りの視線を無視するようにプリンを一口。
その瞬間、高雅がニヤリと怪しく笑った。
ア「・・ッ！？・・・ぶほぅ！！？？」
フ「うわっ！？」
突然、アリアは思いっきり吹き出し、水を一気に飲み干した。
ア「ゲホッ！！、ゴホッ！！、～～～～っっっっ！！！！？？？」
フ「あ・・・アリアお姉様？」
アリアは目尻に涙を含みながら鼻を思いっきり摘まんでいた。
その不可解な行動にフィーラは頭に？を浮かべていた。

ア「うう・・げほっ・・・」
高「ざまぁ」
そう言いながら、最初から用意していた布巾でアリアが吹き出した物を拭きとる。
エ「やり過ぎではないかい？」
高「もう半年も一緒なんだ。こいつだって、こんなことはなるだろうと覚悟していたはずだ」
ア「げほっ・・ごほっ・・・ぅげほっ！！」
サ「こ・・・コウｇ「ゴホンッ」て・・店員よ。アリアの咳が止まらぬぞ」
高「そりゃ、無味のゼリー５％、着色料２％、ワサビ９３％で作ったプリンだからな」
ちなみに、感触、見た目は完璧にプリンです。
口に入れて始めて分かる再現率である。
ア「げほっ・・ごほっごほっ・・・げほっ・・」
レ「アリア、大丈夫か？」
高「ん？、ワサビが少し多過ぎたか？」
フ「少しじゃないです！！。多すぎです！！。ワサビと知らずにスプーン一口はやばいです！！」
ア「げほっ・・ひ・・ひょぉか～・・」
アリアは高雅とは他人の関係にすると言う事を忘れ、助けを求めるように名前を呼ぶ。
とは言っても、呂律が全然回ってないが。
高「こっちみんな」
ア「あひゅけえ～（たすけて～）・・ごほっ」
高「ダメだ」
ア「おねあ、ごほっげほっ・・おねあい～」
レ「いい加減にしたらどうだ？」
高「・・・はぁ、わーったよ」
高雅は一旦裏へと向かい、またすぐに戻って来る。

手にはぬるめのお茶とマヨネーズを握っていた。
高「はい。マヨネーズを食えば鼻ツンは抑えられるぞ。それが嫌ならお茶を使え」
アリアは迷うことなくお茶に手を出した。
ちなみに、今の知識は伊藤さんの家の裏ワザであったものである。
伊藤さん、涙目ですねｗｗｗ。
ア「・・・・・・・ぷはぁ、くぅ～～～・・・まだ鼻が痛いよ」
高「分かったから、さっさと帰れ」
高雅は何の悪気もなく、さっきとあまり変わらない言葉を言う。
その態度に、アリアも遂に怒りだす。
ア「コウガ！！。いくらなんでもこれは酷いよ！！」
高「名前で呼ぶな」
ア「今さらだよ！！。もうっ！！」
アリアはそっぽを向き、お茶を啜(すす)る。
フ「コウガ兄様、これは本物ですか？」
高「アリア以外のは全部本物だ。安心しろ」
ア「何で・・・私だけ・・」
高「テメーが連れてきたんだろ。なら、全責任はお前にある」
ア「う～」
高「火の粉が降り掛かることぐらい、分かっただろ。それでも、来たってことは、覚悟を決めてたって訳だろ」
ア「本当にしてくるなんて思ってなかったよ。最近のコウガは優しかったし・・・」
高「俺が優しかったら、人間界も天界も楽園も木っ端みじんになくなる」
エ「なら、僕達はどこに住んでいるのだろうか」
高「どういう意味だ？」
高雅がエクスに睨みつけるも、エクスは意味深に笑うだけだった。
高「・・・まぁ、いい。食ったら帰れよ」
高雅はこれ以上長居する訳にはいかないので、伝票を置いて裏へと

帰った。
ア「はぁ、偉い目にあったよ」
フ「アリアお姉様、あれはコウガお兄様の照れ隠しです」
レ「あの殺意に満ちた目はそうは感じ取れｎ〈ガンッ〉いだ！？」
レオが余計な事を言おうとしたところを、フィーラが黙って脛を蹴った。
レオは痛みで一瞬跳ね上がり、目尻に涙を溜めながら蹲りだした。
フ「だから、アリア姉様はコウガ兄様にとって特別に扱ってるです」
ア「その特別がもっと理想的なものが良かったなぁ」
サ「では、ベタベタなコウガはどうじゃ？」
ア「・・・何かやだ」
エ「クールなコウガ君は？」
ア「それも、や」
フ「熱血なコウガお兄様は？」
ア「やだ」
フ「結局です・・・」
ア「うぐっ・・・」
アリアは何も言い返せず、口ごもってしまう。
その間に、フィーラ達は出されたモノを頂いてゆく。
だが、フィーラ達が食べ（飲み）終えるまでアリアは何も喋る事はなかった。
フ「結局、アリア姉様は今のコウガ兄様が好きってことです」
フィーラが結論を言い渡し、この話題は幕を閉じた。
それと同時に席を立ち、伝票をレジに持っていって勘定を済ませる。
ちなみに、お金は事前に高雅から5千円もらっていた。
アリアが次に向かう所を相談しようとした瞬間、ある生徒が割って入って来た。
Ｘ「そこの方々、ぜひ俺様の喫茶店へ」
Ｘがアリア達に話しかけていた。
ア「？、さっきそこの喫茶店に行ってたのに？」

アリアは高雅のクラスの喫茶店を指差しながら言う。
しかし、Xは甘いなと人差し指を振る。
X「この喫茶店と俺様の喫茶店を比べてみてください。味も見た目も一目瞭然ですから。通りかかったら出いいですから」
そう言って、チラシを渡して別の人へ同じように勧誘する。
ア「んー、どうする？」
フ「行くあてなんて無いですから、軽く覗きにいくです」
ア「そうだね。皆もそれでいい？」
レ「大丈夫だ、問題ない」
エ「僕もいいぞ」
サ「俺様という態度が気に障るが、別に構わぬ」
全員から了承を得り、４人はチラシの場所へと向かい始めた。
チラシに書いてある『執事喫茶』という店へ。

# 文化祭　一日目　中編

アリア達がチラシの場所へ向かう道中、飾り付けがかなり合成になっている事に気が付く。
ア「何だか、この辺りは豪華だね」
レ「そうだな」
エ「おや、あの列は何だい？」
目の前には曲がり角で先頭が見えない列があった。
取りあえず、最後尾と書かれた看板を持っている執事姿の生徒に聞いてみた。
ア「あの、この列は何の列ですか」
生「この列は執事喫茶の列でございます。早く並ばなければ、終わってしまいますぞ、可愛いお譲様」
ア「ふ～ん、ここかぁ」
生徒の可愛いという言葉に反応せず、振り向いて皆を呼ぶ。
何の反応を見せないアリアの姿を見て、執事生徒は軽く落ち込んでいた。
ア「ここが、らしいよ」
フ「どこまで続いてるです？」
生「３０分待ちでございます、妹様」
フ「ボクは妹じゃないです。顔洗って出直すです。気持ち悪いです。臭いです」
生「うわあああああああああああああああん！！」
ズッタボロにプライドが傷つけられ、生徒はどこかへ走って行った。
レ「フィーラよ。臭いは言い過ぎではないか？」
フ「あんな心も込めてない、決められたセリフを言われても耳障りなだけです」
エ「まぁ、適当な判断で妹と決めつけられていたようだし」
サ「その点ではコウガが上じゃのぉ」

ア「その点だけね」
そう言って、少しだけふてくされる。
まだ、あの事を根に持っていたのだ。
フ「それにしても、長いし永いです。ボク、別の所に行って来るです」
ア「あ、うん、いいよ。皆も退屈なら色んな所に行ってもいいよ。私だけでも並んでおくから」
レ「わｒ〈ゴスッ！！〉ッ！！・・ぼ・・僕はフィーラについて行きます」
フ「じゃ、さっさと行くです」
フィーラはアリア達と別行動し、レオはおぼつかない足取りでフィーラの後ろを追った。
ア「痛そ～」
エ「脛（すね）に鋭い蹴りを下したからな」
サ「目尻が潤んでたのぉ。可哀そうに」
レオの哀れな姿に同情する三人。
ア「二人はどこか行かないの？」
エ「得に欲しい物はないからな。それに、アリアを一人で待たせるのは心許（こころもと）ない」
サ「そう言う事じゃ」
ア「そっか、ありがとう」
エ「まぁ、軽く会話でもしながら待とうじゃないか」
そう言って、三人はフィーラ達が戻って来るまで、待ち続けた。

フ「今度はこっちです！！。早くするです！！」
フィーラは限りある時間を有効に使うために急いで回っていた。
レ「少しは待ってくれ」
フィーラが一人で突っ走り、それを追い続けるレオの姿は全く変わってなかった。
フ「鈍(のろ)いです。早く来いｄ〈ドンッ〉あみゅ！？」
レ「？」
フィーラが曲がり角に差し掛かって見えなくなった途端、尻もちを突いて再び視界に入った。
次に見えたのは顔つきの悪い人だ。
私服を着ている為、生徒ではないが、見る限り喧嘩腰である不良だ。
不「何だガキ？。この俺にぶつかっておいて謝りもしないのか、あぁ！？」
フ「みゅ？。キモイ奴です」
不「んだと！？」
フィーラは完全に謝る態度なんて無く、逆に侮辱していた。
不良の怒りは完全に沸点に達した。
レ「待て！！」
不「ああん！？。誰だ貴様ぁ！？」
レ「その子の付き添いの者だ」
不「保護者って訳か。だったら、テメェが殴られろや！！」
不良が容赦なくレオに殴りかかる。
しかし、レオは片手で受け止める。
レ「待つのだ。ここで戦うのはまずい」
不「関係ねぇよ！！」
レ「しかし、貴様の命が危ない。このまま引いてはくれ。謝罪はする」
不「知るか！！。謝って許される事じゃねえ！！」
不良は空いている片手を振り上げる。
しかし、誰かに振り上げた腕を掴まれ、下ろす事が出来なかった。

不「ぁあ!?」
気になって後ろを振り返る。
高「・・・・・・・」
そこには、高雅が無言で腕を掴んでいた。
不「邪魔すんじゃねえ!!。ｃｒ「少し黙れ」はぁ?」
高「聞こえないのか?。少し黙れって言ってんだよ。その耳は飾りか?」
不「糞ガキが!!。そんな、ひょろっちぃ腕で俺を抑えることなど・・・ふぬぬぬぬぬ・・・」
不良は腕に力を入れて振り払おうとした。
しかし、高雅の手はもちろん、レオの手すら振り払う事が出来なかった。
不「何っ!?」
高「オーケーオーケー。日本語が分からない猿と判明しました。猿は学校に来る資格などありません」
不「ッ!?」
突然、不良に浮遊感が襲った。
高「ろっしょい♪」
そう言って、片手で背負い投げをする。
高「あ♪」
わざとらしく言いながら手がすっぽ抜けた。
この事は計画済みなので、投げた所に人は一人もいない。
不良は壁にぶつかるまでまっすぐ飛んで行った。
不「げふっ!!」
不良はずるずると壁を伝ってゆっくりと落ちてゆく。
だが、落ちてゆく途中で高雅に首を掴まれ、落下が止まる。
高「おい猿。子供の戯言にムキになるんじゃねえよ。分かったか・・・って、分からねえよな。猿だから」
不「あ・・がぁ・・・ぐ・・」
高「猿、今すぐに逃げろよ」

高雅が手を放すと、不良は尻もちを突き、這いつくばって逃げだした。
高雅は周りに目をやると、ギャラリー達はそそくさにどこかに行き始めた。
高「全く、人間は見るしかできない連中が多い事だな」
レ「そう言うでない。力が無い者が出たとしても、足手まといになるだけだ。それを弁えているのだろう」
フ「そうです。それに、コウガ兄様はあの不良より怖いです」
高「それ、軽く傷つくぞ。ところで、アリア達は？」
レ「アリア達は人気の喫茶店の列に並んでおる。時間が掛かるそうだから、僕達は時間まで別行動しているのだ」
高「成程な。てか、僕って・・・ぶっｗｗｗ」
いつもと違う呼び方に、高雅はつい吹いてしまった。
レ「わ・・笑うな！！／／／」
高「だっははははは、いつも我我言ってる奴が僕って・・・あははははは」
レ「笑い過ぎだ！！」
レオが注意するも、高雅は腹を抱えて笑っていた。
フ「それより、コウガ兄様はどうしてここにいるです？」
高「俺の少ない自由時間だ。まぁ、やることなんて飯食うだけしかないが」
フ「だったら、今からアリア姉様がいる場所に行くです」
レ「そうだな。ふと見ると、そろそろ時間だ。コウガも一緒にどうか？」
高「ん～・・・そうだな、話に乗るとしよう」
フ「それじゃ、さっさと行くです。こっちです」
そう言って、フィーラは再び一人で突っ走り始めた。
高「あいつ、学習能力が無いのか？」
レ「そう、伝えてくれ」
高「だるい」

レオは溜息を零し、高雅は頑張れと声を掛けてフィーラの後ろをついて行った。
レオも落ち込みながらも足を運んで行った。

その頃、アリア達は既に順番が回って来ていた。
生「次のお客様、どうぞこちらへ」
結局、レオ達が戻ってくる前に自分達の番となった。
ア（も～、レオ君達戻って来ないで順番が来ちゃったよ・・・）
生「お譲様？、どうかなさいましたか？」
ア「へっ？、あっ、いえ・・・あれ、あなたはチラシを配ってた人・・」
X「おお、覚えてもらって光栄です、美しいお譲様。では、席へ案内します」
ア「あっ・・・」
Xはアリアの手を取って席へ案内する。
エ「僕らは無視かい？」
サ「差別じゃのぉ」
文句を言いつつも、取りあえずアリアの後ろをついて行く二人。
X「こちらの席となります。では、ごゆるりと」
Xは最後にアリアの手の甲にキスをしようとした。
ア「ッ、止めて」
それを悟ったアリアは、すかさず手を引っ込めた。
X「・・これは、すみませんお譲様」
Xは少しも悪気が無いような素振りをして、裏へと向かって行った。
ア「いきなりキスするなんて、失礼過ぎるね」

エ「まぁ、他の客はそれに満更でもない反応を示しているようだよ」
周りの客を見てみると殆どが女子たちで皆Xの方を見つめていた。
サ「あ奴は好かれているようじゃ。他の奴らもかなりの顔だな」
見渡す限り、この執事喫茶はイケメンしか揃っていない。
偵察に来たであろう少ない男子生徒は嫉妬の炎を燃やしていた。
レ「アリア、すまぬ。遅れてしまった」
そこに遅れたレオ達がアリア達と合流した。
ア「あ、レオ君、遅い・・・って、コウガ!?」
高「何だよ、俺がいたら悪いか?」
ア「そんなことはないよ。ただ、自分から付き合うなって言ってたのに・・・」
高「既に情報が漏れてるんだよ。今さら隠したって遅いって訳だ」
ア「そっか」
高雅は席につき、メニューを見始める。
しかし、たった3秒見ただけで近くにあったベルを鳴らす。
それを聞いた執事の生徒がすぐさま駆けつけた。
生「お呼びでしょうか?」
高「オムライス一つ。お前らは?」
フ「プリン一つです!!」
サ「私もそれを頂くかのぉ」
レ「僕はコーヒーだ。あの苦みとコクが気に入った」
エ「僕もコーヒーで」
ア「私は・・・私もプリンで」
生「かしこまりました。今しばらくお待ちを」
生徒は一礼をして席をはずす。
高「よくトラウマにならなかったな」
ア「ちゃ・・茶化さないでよ。思い出しただけで・・・うーー」
アリアは味を思い出したのか、お冷を少しだけ飲んだ。
?「あっ!!、崎村じゃねえか!!」
高「うわぁ、会いたくねえ奴が来たよ」

その人物はまっすぐに高雅のもとへ駆けつけ、勝手に席に座る。
高「何しに来た、A」
A「偵察に決まってんだろ。お前もそうか・・・って、んな訳ねえよな」
高「ったりめえだ。純粋に飯を食いに来ただけだ」
A「ふ～ん。んで、何か新しいキャラが見えるんだけど」
ア「そっか。A君はエクスとサミダレを知らないんだ」
エ「これは失礼。僕はエクス。よろしく」
サ「私はサミダレじゃ。よろしくのぉ」
A「俺はAっていいます。今後ともよろしくお願いします」
そう言って、握手をする。
エ「A君は天の使いを持ってるみたいだな」
A「えっ!?、どうして分かった!?」
エ「これでも、僕はえd「こんな所でそんな話をするな」おっと、すまない」
A「何だよ、いいじゃねえかよ、こうg>ガンッ<はうっ!?」
高「黙ってろ」
高雅はAの脛を思いっきり蹴った。
しかし、Aは思いのほか一瞬驚いただけで特に変化はなかった。
生「お待たせしました、どうぞごゆっくり」
そこに生徒が注文したメニューを持って来た。
品物を一人一人丁寧に置いて行き、一礼して去っていった。
それをAは怪しい目で見ていた。
A「・・・なぁ、崎村。今のどう思う?」
高「素晴らしいんじゃねえか。俺らより遥かに」
A「だよなぁ。素晴らしいよな」
高「味も美味(うま)いぞ」
A「・・・そりゃ、勝てない訳だな」
ただ、相手を称賛しているにしか見えない会話だが、高雅とAの言葉にどこか意味有りな感じだった。

それを悟ったアリアは高雅に聞いてみた。
ア「どうしたの？」
高「相手がヤバいって訳だ」
ア「つまり？」
A「ここで一つ情報を教えておくと、Xは金持ち」
ア「・・・それで？」
高「あの執事共は本物（プロ）の執事だ」
ア「ええっ！？」
アリアは驚いて声を上げてしまう。
周りの人達はすぐにアリアの方に注目してしまう。
ア「あ・すみません」
アリアはペコリと頭を下げて謝る。
ア「それって本当？。見る限り普通の青年にしか見えないけど」
A「Xのメイク技術を持ってすれば、可能だろう。きっと、料理も超一流の人が作ってんだろう」
レ「それは卑怯ではないか？」
高「どんな悪い事も、ばれなかったら悪くないんだよ」
A「どうするよ、崎村。きっとメイドの方も何かしてるぜ、Xなら（あいつ）」
高「知るか。んな、どうでもいい勝負なんて関係ない」
エ「コウガ君、一つ言っておくが、どうでもいい勝負なんて無いんだよ」
高「変な名言出すな」
高雅はオムライスを食べ終え、席を立った。
高「そろそろ交代の時間だから、俺は先に行くぞ」
ア「うん」
A「ほ～い」
高「テメーも時間だろうが！！。さっさと来い！！」
A「ちょ！？、俺まだ何も食ってないって！！」
高「飢え死にしたらグラウンドに埋めてやる。だからさっさと来い」
高雅はAの襟を掴み、引きずって行った。

A「ひでぇ！！・・・っと、それじゃ、ばいば～い」
Aは最後にアリア達に手を振って見えなくなった。
そんな滑稽な光景を周りの人たちはクスクスと笑っていた。
フ「・・・何だか、あのAって人、前より遥かに強くなってる気がするです」
レ「そうだな。以前よりも殺気を感じた」
エ「なかなか興味がある人だね」
サ「それに、面白い奴じゃのぉ」
Aが見違えている事にフィーラが気付き、レオも内心驚いていた。
エクスとサミダレもそれなりに興味を示していた。
ア「さて、早く食べて色んな所を回ろうよ」
アリアがそう言うと、皆は飲食を再開しだした。
数分で飲食を終えた五人は再び、出し物巡りへと旅立った。

## 文化祭　一日目　後編（前書き）

三編にまとめたら結構ぐちゃぐちゃになってしまった・・・

どうでもいい報告。

作者は推薦合格しました。
ただ、それだけの話。

高「良いことなのに、悲しーなー」

# 文化祭　一日目　後編

高雅とAは自分のクラスにつき、すぐに料理場に向かう。
高「交代だ」
B「おお、サンクス。それじゃ」
C「自由だあああああああああああああ」
D「いやっほおおおおおおおおおおおお」
E「後は任せるぜ」
担当だった購買部組はさっさと出て行く。
残った料理場の光景を見て、高雅は溜息を零した。
高「・・・こりゃ、酷いな」
無残にも散らかった料理場。
洗ってない皿の山、焦げ付いたフライパン、冷蔵庫になおしてな素材。
高「あいつら、料理の才能が無さ過ぎるだろ」
A「これは酷い」
高「それにしても他の奴は？」
A「さぁ。サボってんじゃねえか？」
高「はぁ。取りあえず、片づけから始めるか」
A「よぅし、どっちが多く片づけるか勝負だ」
高「勝手にしてろ」
高雅とAは取りあえず片づけから始まった。
Aは張り切って片づけているが、高雅は裏腹にのんびり片づけていた。
二人の片づけの速度は異常で、悲惨な料理場は元の綺麗な姿に戻った。
A「６：４で俺の勝ちだな」
高「おめ。取りあえず、注文が入るまで寝るか」
高雅は待機用のイスを並べて、横になった。

そして、一秒も掛からずに夢の世界へと入った。
A「・・・暇ｄ「注文・・・・入ったよ」ああ、ご苦労さん、杉野」
龍「えっと・・・オムライスが一つ・・・オレンジジュースが二つ・・・」
A「うい。おーい、高雅ーー」
高「・・・・Ｚｚｚ」
A「ダメだ。完全に寝てやがる。起こすか？。いや、死闘が始まるだけか」
Aはしょうがなく思い、一人で準備し始めた。
Aの腕は結構なもので、器用に半熟のオムライスを作り上げた。
それと同時にオレンジジュースも用意をし終えていた。
A「おーい、出来たぞー。運んでくれ」
夢「はいは～い」
夢が元気良く返事をして料理を運んでゆく。
見たところ、客はすっからかんで空しい状態だった。
A「くっそ～、これじゃ優勝なんて無理だなぁ・・・」
高「だったら、諦めて寝てろ」
A「うぉお!?、いつの間に起きてんだよ!?」
高「んなことは、どうでもいい。で、このまま優勝できると思ってるのか？」
A「大丈夫だ、問題ない」
高「それ、なんてフラグ？」
A「じゃあ、どうすんだよ？」
高「さあね」
高雅は何を伝えに来たのか、また裏に戻って行った。
A「何だよ、あいつ」
龍「あの・・・ハンバーグ・・・一つ・・」
A「はいよ」
Aも裏に戻って行く。
戻ると高雅が何故か冷蔵庫を焦っていた。

それを見て、Aは高雅に何かやらせようと思い、声を掛けた。
A「なぁ、ハンバーグを作ってくれねえか？」
高「ん～・・・ちょっと待て」
すると、高雅は冷蔵庫にあった素材を全部取りだす。
何がしたいのか、出した素材を見て考え事をしていた。
A「何やってんだ？」
高「考え事」
A「見りゃ分かる。さっさとハンバーグを作ってくれないか？」
高「ん」
高雅が何気なく指を指した。
その方向を見ると出来たてのハンバーグが湯気を上げていた。
A「いつの間に！？」
高「・・・・・これならできるな」
すると、高雅は勝手に何かを作りだした。
それを横目で見ながらも、Aは料理を誰かに運ばせる。
それを終えて再び見ると、綺麗に輝く黒い粒粒が出来上がっていた。
A「？、何だそれ？」
高「キャビア」
A「はいぃ！？」
高「キャビア」
A「いや・・そうじゃくて・・・はいぃ！？」
高「食え。味見。舌を活性化してどんな感じか教えてくれ」
A「あ・・ああ。言っておくが、俺は本物のキャビアを食った事があるぞ。味は分かるぜ」
そう言って、Aは高雅の作ったキャビアをスプーンで一口食べた。
だが、咥えたスプーンを離す事が無かった。
A「あれ・・・いや、嘘だ」
そう言って、もう一口食べる。
今度は活性化して確実に味を調べた。
だが、食感も味もキャビアそのものであった。

A「お前・・・何した？」
高「色んな調味料もあったし、簡単な調合だ」
A「調合っておま・・・いや、待てよ。これ使えば勝てるんじゃねえか！？」
高「作ってやってもいいが、メニューとか書き換えるのは俺は嫌だぜ」
A「俺、ちょっと本気出すわ」
そう言った瞬間、Aは残像を残して消えていった。
だが、残像になったAはすぐに実像となった。
A「改装、終わりました！！」
Aはビシッと敬礼を決める。
高「ご苦労。それと最後に言っておくが」
A「ん？」
高「・・・俺は負ける事が嫌いだ。本気で勝ちたいか？」
A「おおともよ！！」
高「・・・じゃ、いっちょやるか！！」
こうして、高雅の究極の偽装料理とAの神速のメニュー書き換えが始まった。
A「俺、地味だなぁ」

一方、アリア達はと言うと、出し物をあらかた回りつくして、そろそろ帰宅しようとしていたところだった。

ア「どうする？。もう、殆ど回ったから帰る？」
フ「みゅ～・・・どうせなら、コウガ兄様と帰りたいです」
レ「では、どう時間を潰すのか？」
エ「また、コウガ君の所に行くのはどうだい？」
サ「それが最善の時間潰しかもしれぬのぉ」
ア「じゃあ、またコウガの所に行こっか」
目的を決め、歩き始める。
だが不自然にも、近づくにつれて人の数が多くなっていった。
ア「？、繁盛してるのかな？」
エ「行けば分かるだろう」
さらに進んで行くと、今度は列が見え始めた。
その最後列には見覚えのある顔があった。
ア「あっ、リンちゃんだ」
凛「？、あら、アリアさん。ごきげんよう」
ア「ねぇ、この列って何？」
凛「何でも、本物の高級料理を振る舞っていると聞いて、調べに来ましたの」
ア「そんな大そうな出店（でみせ）があるなんて、この学校で出来るの」
凛「そう言う物は禁止ですわ。ですから、生徒会長として調べに来ましたの」
ア「とか言って、ほんとはコウガに会いたいだけだったりして？」
凛「なななな、何を言います！？。そのような事はございませんわ／／／」
ア「目が泳いでるし、顔が赤いよ」
凛「そそ・・そんなこと、関係ありませんわ！！／／／」
フ「二人とも、目立ってるです」
フィーラに言われ、ふと周りと見ると見える範囲の全員がこっちを向いていた。
凛は咳払いをし、アリアは苦笑いをして間際（まぎわ）らせた。

待つこと数分、列の始まりが見え始めた。
すると、アリア達の前に一人のメイドがやって来た。
それはアリア達も良く知っている人物だった。
ア「あっ、リュウコ」
龍「あっ・・アリア・・・それに・・・他の人たちも・・・」
夢「こら、龍子。普通に呼んだらいけないんだぜ？」
龍「ご・・ごめんなさい・・・」
ア「いいよ、別に」
凛「それよりも、高級料理とはどう言うことでしょうか？。予算内に入っていますか？」
夢「そら、ビックリするぜ！！。崎村がそこら辺の材料と調味料を使って本物の様な高級食材を作ってるんだぜ」
龍「あ・・これ・・・メニュー・・・です・・」
凛はメニューを受け取り、中をすぐに確認する。
フォアグラやキャビア、大トロまで幅広くメニューが書いてあった。
見た目はどれも本物みたいであった。
凛「・・・信用、し難いですわ」
夢「だったら、特別に料理場を見せてやるぜ」
凛「・・そうですわね。そちらの方が分かりやすいですわ」
ア「ねえ、私達も行っていい？」
夢「いいぜ、特別に連れてってやるぜ」
龍「で・・でも・・・高雅君の・・・・許可が・・」
夢「気にしない、気にしない」
夢は勝手にアリア達を料理場に連れてった。
龍子はどうしようと悩んだが、仕事の方を優先した。
こういうことに関しては高雅が恐ろしい事を理解しているのだ。
夢「ほらほら、こっちだぜ」
そう言って、夢が指を指す。
その先には高雅がただ立っていた。

凛「？、何をしていますの？」
レ「ただ、立っているように見えるのだが・・・」
ア「え！？、思いっきり料理してるよ」
凛・レ「えええ！？」
エ「だが、とても肉眼で捕えるのは難しい速さだが」
サ「微かに、ブレているのぉ」
フ「ボクには全然分からないです」
高雅の速さを見切っているのはアリア、エクス、サミダレだけだ。
他はただ立っているようにしか見えないのだ。
凛「・・・周りを見ても、特に、それらしきものは見つかりませんわ」
高「何がだ？」
凛・夢「うわぁ！？」
瞬間で高雅が後ろに現れ、驚きく。
高雅の表情はかなりご立腹のようだった。
高「お前ら、ここは立ち入り禁止だぞ。どうしてここにいる？」
凛「な・・何か卑怯な手を使っていないか確認しに来ただけですわ」
高「ふ～ん。って、アリア達は何でだ？」
ア「あ・・えっと・・・ちょっと興味があったから」
高「じゃあ、お前は興味があれば国会議事堂にでも堂々と入るって言うのかよ」
ア「ごめんなさい・・」
アリアは深々と頭を下げる。
高「・・・まぁ、連れてきた奴が全責任を取るんだよな」
夢「えっ、ちょ・・・まっ――――」
夢と高雅は残像を残して消えてしまった。
すると、夢がいた所に夢らしき人形が置かれ、高雅が元の位置に戻って来た。
凛「・・・何をしました？」
高「罰」

それだけを言って、高雅はまた料理場につく。
凛「・・・まぁ、いいですわ。どうやら卑怯な手は使ってないようですし、これで失礼しますわ」
凛は確認を済むと、一人で裏から出ていった。
アリア達も出ようとしたが、アリアが何かを思いだして足を止める。
ア「あっ、コウガ」
高「何だ？」
ア「一緒に帰ろうよ」
高「・・・・知るか」
フ「え～・・」
高雅はアリアの質問に興味なく返す。
フィーラがブーイングをするも、高雅は何も答えない。
ア「ねぇ、一緒に帰ろうよ」
高「・・・俺が終わるのは４時ぐらいだ。そしてらさっさと帰ってやる」
ア「・・・くすっ、分かったよ」
アリアは高雅の不器用な態度に笑みを零し、裏から出た。
帰る途中、再び龍子と会う。
龍「あの・・・夢は・・・？」
エ「その答えはコウガ君のみがしる」
龍「？」
ア「と・・取りあえず、今はいないかな」
龍「・・・生きてる・・・よね？」
ア「大丈夫、きっと生きてるから」
あくまできっとである。
いつもそばにいるのだが、これだけは確信して言えなかった。
ア「取りあえず、大丈夫のはずだよ。それじゃ、私達はもう帰るから」
龍「あ・・うん。またね」
アリア達は帰ると言ってその場から去って行った。

龍子は夢の無事を心配しつつ、仕事に専念した。

文化祭一日目が終わり、高雅達は帰宅していた。
門の所で待っていたアリア達は高雅と合流したのだ。
ちなみに、高雅達の店は売り上げ一位で優勝を奪った。
高「ふぁ～、ねみぃ～」
ア「お疲れだね。明日もあるんでしょ、文化祭？」
高「まさか、また来るつもりか」
ア「えっ、だめ？」
高「やめとけ、二日目はステージでの出し物だからつまらないだろう」
フ「ステージです？。どんなことするです？」
高「俺の所は・・・『ｉｆ、桃太郎』だったな」
ア「い・・いふ？。いふって何？」
高「もしもってことだ。まぁ、これはつまらないだろう」
ア「皆、どうする？」
フ「行くです」
レ「行こう」
エ「行くさ」
サ「行こうかのぉ」
ア「はい、満場一致」
高「テメェら・・・」
高雅は呆れて溜息を零した。
高「取りあえず、面白さは保証しねえぞ」

ア「別にいいよ」
アリアは笑って答える。
その顔を見て、高雅はもう何も言わなかった。

★おまけ★

敗北したXは後片づけも手伝わずに落ち込んでいた。
X「何故だ・・・何故午後から落ちたのだ・・・」
そう、午前の部はXのクラスが断然一位だったのだ。
だが、午後の部から一気に最下位まで下がったのである。
原因はこっそり雇ったプロの人達にあった。
X「何故負けたんだ・・・」
すると、生徒が落ち込んでいるXに声を掛けた。
生「なぁ、早く片付けよう」
X「何で負けたんだ・・・」
生（何でって・・・君の雇った人がギャンブル下手くそだったじゃん・・）
これが原因である。
Xの雇った人は執事に関しては完全にプロだったが、午後から行(おこな)ったギャンブルはボロボロだったのだ。
お陰で、トップからビリと逆ごぼう抜きをしてしまったのだ。
X「くっそおおおおおおお、二日目は負けんぞおおおおおおおおおおおおおお」
生「早く片づけるぞ！！」
結局、Xは片づけをせずに燃え続けていた。
諦めた生徒はほったらかしにして片づけに戻った。

夢「お～い、誰かあたしを助けてくれ～だぜ」

# 文化祭　二日目　前編

緑淵高校体育館。
そこには地域の人たちで溢れていた。
その中にはもちろん、アリア達の姿もある。
フ「アリア姉様、いつになったら始まるです？」
ア「確か9時からだから、後5分ぐらいだよ」
レ「それにしても、すごい人の数だな」
現在、体育館には生徒と一般の人を含め、約８００人が埋もれていた。
サ「私はこんな人込みは嫌だのぉ」
エ「では、少し外にいくかい？。僕もつきそうが」
サ「そうか。なら、少し付き合ってもらおうぞ」
ア「じゃあ、二人は離脱って事で」
サ「すまんのぉ」
エ「君達だけで楽しいでくれ」
そう言い残し、サミダレとエクスは体育館から出ていった。
それと同時にステージに誰かが上がった。
凛「ご来場の皆様方。大変ながらくお待たせしました。私は今回の司会者であり、生徒会長の姫花凛です」
凛は礼儀正しく頭を下げる。
凛「それでは早速参りましょう。最初は1年クラス別の合唱です。どうぞ」
凛が礼をしてからステージを降りた。
そして、観客が一斉に拍手をし、1年生の合唱が始まった。

ステージの裏側。
ここでは、1年生が合唱をしている間に2年生が演劇の準備をしていた。
そんな準備のさかいに対立をしている二人がいた。
X「ふふふ、売り上げは負けてしまったが、今度はこの俺様が優勝を頂くさ」
A「言ってろ、負け犬。俺は今までとは違うんだよ」
X「昨日は誤算だったが、今回は完璧だ。これで負けたら逆立ちで町内を一周してやる」
A「いいだろう、俺もそれを賭けてやる」
X「いいのか。泣いても許さないからな」
A「こっちのセリフだ」
互いに頭をぶつけ、睨みあっていた。
周りから見ればバカなサボりとしか判断してなかった。
そんな二人に見飽きたのか、高雅がAの後頭部にハイキックをした。
しかし、Aは軽(かろ)やかに避け、そのままXの顔面に炸裂した。
高「おい、さっさと手伝えよ」
A「悪いねぇ。ちょっと挑発してた」
高雅は謝りもせずに、のびたXをほったらかしにして自分のクラスに戻った。
X「ぅ・・おい、この俺様を蹴って無言で帰れると思ってるのか?」
高「ところで、A。お前主役だろ。早く着替えねえと間にあわねえぞ」
A「やべっ。着替えどこに置いたっけ?」
X「おい、無視するな!!」
高・A「何だ、まだいたのか?」
高雅とAが声を揃えて言う。

完全におちょくっているのだ。
X「貴様らぁ・・・負けたらパンツ一丁で逆立ち町内一周だからなぁ！！」
高・A「へいへい」
高雅とAは軽くあしらってから去って行った。
そんな態度に、Xはマジギレ状態になっていたのは言うまでもない。

1年生の合唱が終わり、遂に2年生の演劇が始まろうとしていた。
フ「アリア姉様、コウガ兄様のクラスは何番目です？」
ア「えっと・・・あっ、どうやら最初みたいだよ」
フ「おお、早くみたいです」
ア「本人は見られるのは嫌がってたけどね・・・」
アリアがそんな告げ口をしても、フィーラは何の反応を示さずにステージの方をガン見していた。
凛「はい、1年生はどのクラスも練習の成果が発揮されてましたね。続きましては、2年生によるクラス別の演劇です。最初は2の2組による、『ｉｆ　桃太郎』です」
奇妙なタイトルに観客達はざわめき始める。
凛「最後に、この演劇において注意があります。この演劇は童話、桃太郎とは一切関係がありません。似ている面もいくつかありますが、あくまで関係ありませんので、その所は注意をお願い致します。それではどうぞ」
凛がステージから離れると、幕が上がり盛大な拍手と共に演劇が始まった。

昔々、ある所にお爺さんとお婆さんが住んでいました。
お爺さんは都会へ出稼ぎに、お婆さんは水道代節約のため川へ洗濯へ行きました。
婆「はぁ、節約とは言え、やはりしんどいのぉ」
お婆さんは愚痴を零しながらも選択を済ませる。
すると、川の上から巨大な桃が流れてきました。
お婆さんは瞬時に洗濯物を結び、投げ縄の要領で桃を捕えた。
婆「ほあああああああああああああああ」
そして、勢いよく川から飛び出た桃は思いっきり地面に叩きつけられ、真っ二つに割れた。
桃「い・・いてぇ・・・」
なんと言うことでしょう、中から普通の青年が現れました。
まるで何の取り柄もないようなちんちくりんな男の子?です。
桃「余計な事を言うんじゃねえ!!」
婆「これ・・・食えるのかのぉ」
桃「食うなぁ!!」
そんなこんなで、主人公が登場しました。

すると、ステージが暗闇に包まれた。
フ「何だか適当な感じです」
ア「主人公ってA君なんだ」
フ「あっ、明るくなったです」

桃太郎は成長する訳もなく、お婆さんからある情報を聞きました。
婆「桃太郎よ、お爺さんが鬼に捕まったらしいから助けに行け」
桃「命令系!?」
婆「ほれ、きび団子じゃ。これ食ってさっさと行け」
桃「だから、何で偉そうなんだよ!?。てか、何で捕まってんの!？」
婆「つべこべ言わずにさっさと行け。わしは寝る」
桃「うわっ、ちょ!?」
お婆さんは桃太郎を蹴り出し、日本刀を投げ渡して扉を閉めた。
桃「いててて・・・何だよ・・・てか、日本刀ってマジ?」
取りあえず、日本刀を腰に挿し、桃太郎の旅が始まった。

フ「も・・物凄い急展開です」
ア「他のクラスもあるし、時間の関係があるんだよ、きっと」
レ「そのようだろうな、きっと」

桃太郎が鬼ヶ島に向かっている途中、ある一匹の犬が現れました。
※ちなみに、犬役はBである。
犬「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰に付けたきび団子、全部私に下さいな」
桃「丁重にお断りいたします」
犬「ケチ」
桃「ケチじゃねえよ!!。何だよ全部って!?」
犬「ああん!?、テメェ、たかが団子一個で従うと思うなよ」
桃「そりゃ、そうだけどさ、こっちだって個数が限られてんだよ。頼むから全部は止(よ)してくれよ」
犬「つまらねえ。こんなやつ、従えるか」
犬は文句を言って茂みへと帰って行った。

空しくなった桃太郎は旅を再開しました。

フ「げ・・現実味が・・・」
ア「まぁ・・・言ってしまえば当たり前だけど・・・」
レ「だとしたら犬が喋るのはいいのか？」

桃太郎は木陰で休憩をしていました。
桃「ふぅ、遠いなぁ」
雉C「ばあ！！」
桃「うわあ！？」
突然、３羽の雉が木の上からひょっこりとやって来た。
※ちなみに、雉役はC・D・Eです。
雉CDE「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰に付けたきび団子、一つ私に下さいな」
桃「お・・おう、いいぜ」
桃太郎は3羽の雉にそれぞれきび団子を与えました。
雉は美味しく頂くと、お礼も言わずに飛び去って行きました。
桃「ちょ！？、おーーーい、食い逃げするなーーーーー」
桃太郎は腕を振りながら叫びますが、雉達は帰ってきませんでした。
猿「ウキー」
桃「あっ」
その隙に、木に隠れていた猿が桃太郎のきび団子を盗みました。
※ちなみに、猿役は夢です。
桃「うわああ、待ってくれえええええええ」
桃太郎は猿を追い掛けましたが、すばしっこい猿を捕まえることはできませんでした。
桃太郎はきび団子を失い、途方に暮れつつも鬼ヶ島を目指しました。
そこにしか、彼の行くところがありませんから。

フ「桃太郎が災難です」
ア「一応、面白いって言えば面白いね」
レ「これでは、人によるだろう」

後半へ続く

★おまけ★

外の風に当たっているエクスとサミダレはベンチに座っていた。
サ「中はどうじゃろうな」
エ「さすがに、透視能力は無いから分からないけど」
サ「まぁ、私は静かにのんびりする方が好きじゃ」
エ「そうかい。僕は少し賑やかな方が好きだな」
サ「ほっほっほ、好みは各々の勝手じゃ」
他愛もない会話をして時間を潰していた。
サ・エ「ッ！？」
そんな二人が同時に空を見上げた。
険悪そうな顔をして、空から目を放さなかった。
エ「まさか・・・」
サ「・・考え過ぎじゃろう」
エ「そうだよな」
そう言って、空から目を放す。
ただ二人は深刻な顔を変えずに考え込んでいた。

# 文化祭　二日目　後編

桃太郎は誰もお供を連れずに海まで辿り着きました。
向かい側には目的地である鬼ヶ島が見えます。
桃「ちくしょー、お供がいないと辛いな」
愚痴を零しながらも、桃太郎は置いてあった船に乗り込みました。
しかし、困ったことにその船にはオールがありませんでした。
桃「あれ?。普通、船とオールは一緒だろ?」
しかし、いくら探してもオールだけが見つかりません。
?「探してるのはこれか?」
そこに親切な誰かさんが桃太郎にオールを渡してくれました。
桃「おお、ありがとうございま・・・てっ、えええええ!?」
桃太郎が驚くのも無理はありません。
オールを渡した本人は鬼ですから。
※鬼役は高雅です。
鬼「何だよ?。んな鬼を見たような顔をして」
桃「鬼を見たんだよ!!」
鬼「そりゃ、良かったな」
桃「良くねえよ。俺はお前を討伐して、お爺さんを助けるんだ!!」
鬼「そうか。なら、早くあの島に行く事だな。そこにお前の爺さんと鬼達がいる」
桃「いや。今、目の前に鬼がいるから」
鬼「じゃあな」
鬼は言いたい事だけを言って海に飛び込みました。
そして、泳いで鬼ヶ島に帰って行きました。
桃「お・・泳げたのか?。取りあえず行くとするか」
桃太郎さんはあまり深く考えず、鬼ヶ島へ向かいました。
だが、鬼ヶ島が見えていたとしても、いつになってもつきませんでした。

桃「と・・遠いなぁ・・・距離感が分からねえ・・・腕が棒のようだ」
それでも、桃太郎はめげずに鬼ヶ島を目指しました。

フ「コウガ兄様が悪役です」
ア「ごめん。私、この先の展開が読める・・・」
レ「僕も少しだけ思い当るぞ」

一時間かけて辿り着いた頃、桃太郎の腕はパンパンになっていました。
これでは、日本刀は振れない状態です。
桃「く・・くそ・・・こんな状況で戦える訳ねえ」
辺りを見渡すも、局地的な嵐が発生しており、紫がかった雲が空を覆っているだけです。
桃「どこのラス面だよ」
鬼「待ってたぞ」
桃「えっ!?」
突然、鬼達が岩の裏からぞろぞろと現れました。
桃太郎は待ち伏せされていたのです。
※他の鬼は名もない生徒達です。
桃「な・・何故分かってたし!?」
鬼「俺がお前にオールを渡した時点で分かってた」
桃「わ・・罠か!?」
鬼「普通、気付くだろ」
鬼1「ヒャッハー!!、袋叩きだーー!!」
鬼2「いえええええええええええい」
桃「ちょっ!?、タンマ!?」
桃太郎は休む間もなく鬼達と戦い始めました。

が、たかが桃から生まれただけで能力が優れている訳でもなく、呆気なくボコられてしまいました。
桃「うぐ・・・」
鬼3「どうした、それで終わりか!?」
絶体絶命のピンチ。
お供もいなくればきび団子もありません。
あるのは今は振る事のできない日本刀だけ。
鬼「ひよっこ一人で何ができる?。お前ごときに人を救う力なんてねぇんだよ」
桃「ちくしょー、俺に力があれば・・・」
鬼「見苦しい。くたばれ」
鬼は金棒を振り上げ、トドメの一撃を決めようとします。
桃「お爺さん、お婆さん・・・すみません・・・俺・・帰れそうにありません・・・」
桃太郎が諦めかけたその時、雷が落ちました。
それも、振り上げた金棒の上に。
鬼はまる焦げになり、ピクリとも動かなくなりました。
桃「ん?、ラッキー」
鬼「と、思ってたか?」
桃「生きてるーーーーーーー!!??」
何と言うことでしょう。
鬼はまる焦げになりつつも普通に喋れました。
折角の奇跡も無意味であったのです。
鬼「今時、雷で鬼がくたばると思うな」
桃「嘘だろ!?」
鬼1「はっはっは、お前のマヌケ面はお笑いだったぜ」
桃「くっそ・・・ん?」
鬼2「くたばれえええええええええい」
桃「そうはいくか!!」
桃太郎は鬼の攻撃を避け、その隙に日本刀で胴体を斬りました。

いつの間にか、腕の疲れが大分取れていたのです。
鬼2「ぐわあああああああ」
鬼は悲痛な声を上げて散って行きました。
鬼1「この野郎！！」
桃「桃太郎をなめるなよ！！」
日本刀を持った桃太郎の右に出る者はいません。
鬼は次々に倒れ、残り一人となりました。
鬼「やるじゃん。だが、その程度でこの俺を倒せると思うなよ」
鬼は死んだ奴の金棒を持ち、二刀流の構えになりました。
桃「正義は勝つ。絶対にな」
鬼「正義はそれぞれが持つ。勝つのは当然だ」
桃太郎の最終決戦が今始まります。

フ「こ・・コウガ兄様、絶対に容赦してないです」
ア「演劇でも容赦無しって・・・」
レ「だが、その動きは観客を魅了してるぞ」
高雅とAの戦いはそこら辺の劇とは違い、お互いに本気でぶつかり合っている。
もちろん、紙一重で攻撃を避け、隙あらば最速で敵を斬る。
どう見ても本物の戦いである。
ア「これって本当に演劇？」
フ「ここだけはリアルです」
レ「まぁ、演技より面白いのは確かだ」

桃「ぐわぁ！！」
鬼の一撃を受け切れず、日本刀が弾かれてしまいました。
鬼「万策尽きたな」
もう、桃太郎を守る物はありません。

今度こそ、絶体絶命のピンチです。
？「おーい」
鬼・桃「？」
そんな時、空から声が聞こえました。
見上げると、３匹の雉に乗った犬と猿がいました。
犬「暇だから助けに来た」
雉Ｃ「まぁ、お礼を言い忘れたからな、ちょっとこっちに来ただけだ」
猿「ウッキー」
桃「お前ら・・・」
鬼「はん、下等生物がどれだけ集まろうと俺に勝てる訳がねえんだよ」
桃「どうかな？」
鬼「何？」
桃「俺にはこれがある！！」
そう言って取り出したのは、猿に奪われていたきび団子です。
桃太郎はきび団子を取り出そうとしました。
しかし、いくら探しても手は空気を掴むだけでした。
桃「あれ？」
雉Ｄ「あー、団子なら俺らが食ったわ。ここまで運ぶの大変だったし」
桃「ちょ！？、お前ら、何しに来た！？」
猿「ウキー」
犬「無理やり連れて来られた」
雉Ｃ「取りあえず、気持ちは恩返し」
桃「ありがた迷惑だ！！」
鬼「はっはっは、本当に愉快だな」
鬼は腹を抱えて高笑いしました。
雉Ｅ「なめるなよ！！」
雉達は勇敢にも鬼に立ち向かいました。

鬼「ぐおっ！？」
雉はありえない速度で鬼を翻弄しています。
きび団子の力がまだ残っているのです。
雉C・D・E「もらったあああああ」
雉は鬼の隙をついて腹を貫きました。
鬼「ぐはあああ」
鬼は倒れ、遂に全滅しました。
桃「ちょ！？、脇役がボスを倒してどうする！？」
雉D「主役が必ず倒すなんて決められてない」
桃「そりゃ・・・まぁ、そうだけど」
犬「で？、これからどうすんの？」
桃「そうだった。お爺さんを助けないと」
桃太郎は目的を思いだし、鬼ヶ島の奥へと向かいました。
桃太郎一行は道中の宝を勝手に持ち出し、お爺さんを救い出して鬼ヶ島を後にしました。
が、船に乗る時に、宝が重すぎたため、出航することができませんでした。
桃「しょうがない。いくつか置いてくか」
犬「ふざけるな！！」
雉C「性根が腐ってやがる」
猿「前世からやり直せ」
桃「何で！？。てか、猿が喋りやがった！？」
結局、意見が割れ、喧嘩になってしまった桃太郎一行。
この後、桃太郎が勝利し、お宝はいくつか置いてくことになりました。

フ「雉が最強です」
ア「最後は桃太郎が勝ったけどね。けど、猿と犬って何しに来たんだろうね？」

レ「終わりが近いから登場させて置いただけだろう」

家に辿り着いた桃太郎一行はお宝を山訳の話で盛り上がっていました。

雉E「俺が倒したから9割は俺の物だな」

桃「ふざけるな。大体、雉がお宝を持ったって意味が無いだろうが！！」

犬「俺は名犬だ。だから10割よこせ」

桃「お前のどこが名犬だ！！。大体、また全部かよ。っておい、猿！！、何勝ってに持って行ってるんだ？」

猿「ウキキ？」

桃「とぼけるな！！」

犬「よろしい、ならば戦争だ」

桃「もう、やだこいつらあああああああああああ」

桃太郎の叫び声は虚しく空に響き続きましたとさ。

お終い。

フ「め・・めでたくないです」

ア「すっごい、無理やりな終わらせ方だね」

レ「まぁ、面白い所は面白かったではないか」

ア「そうだね。それじゃ、エクスとサミダレを呼んでくるね」

フ「ボクもいくです。どうせ、他のに興味はないです」

レ「僕も行こう。いい加減、自分を装うのも疲れる」

三人は人込みを抜けて体育館を後にした。

外に出てすぐのベンチに二人は座っており、案外すぐに見つかった。

ア「おーい、二人ともー」

エ「ん？、終わったのかい？」

ア「うん。それで、これからどうするか相談しに来たよ」

サ「何じゃ、他の出し物は見物しないのか？」
フ「はいです。興味ないです」
レ「まぁ、正直な話、コウガのクラスがアレだったからな。他のに期待が持てん」
エ「はは、そうだったのか」
サ「まぁ、プロと言う訳ではない。厳しい言葉は程々にしとくんじゃ」
高「悪かったな。つまらない劇で」
ア「あれ、コウガ？」
いつの間にか高雅がすぐ傍にいた。
手には鞄を持っていて、まさに帰る準備万端だった。
レ「まだ終わってないはずだ。何故ここにいる？」
高「他の奴らの出し物なんて見ている暇があったら家で寝る」
ア「コウガらしいね。ところで、リュウコは何役で出てたの？。鬼の中にもいなかったし」
高「おい、龍子はナレーターだったぞ」
ア「嘘！？。あまりにもはきはき喋ってたから違うと思ったよ」
高「やる気になれば出来るんだよ、あいつも。と、言う訳で、さっさと帰るぞ」
ア「どう言う訳？」
高雅は人込みを使って先生にばれないように学校を後にした。
アリア達も高雅の後ろを追い、一緒に帰宅した。

★おまけ★

X「はっはっはっはっ・・・」

只今、Xは逆立ち全裸で町内を回っております。
ちなみに、Xのクラスはビリで高雅のクラスは後ろから3番目だった。
1番は凛のクラスのダンスパフォーマンスであった。
ちなみに、Xのクラスは漫才だったが、全部だだずべりだった。
X「今回は負けたが、次の勝負でひねりつぶしてやｒ「そこの君」はい？」
Xに話しかけたのは警察の人だった。
もう、何なのか分かりますよね。
警「猥褻物陳列罪で逮捕な」
X「はい？」
Xが？マークを飛ばしている内に手錠が掛けられ、連行されました。
その後、Xを見たものは誰もいなかった。

## 落ちてきた者たち（前書き）

久々４日投稿！！

最後の方に危ない表現がありますが、まあ気にしないでください。

それと、メリクリ！！

彼女のいない作者はモンハン３でもして過ごしますよ～

# 落ちてきた者たち

久しぶりの休日。
高雅は家でのんびり爆睡する予定だったが、それは狂わされて、高雅の家の皆は今、庭にいる。
高「・・・・・・・」
文「よし、セイクリッドの力を使ってみろ」
高「ダリィよ。寝かせてくれ」
高雅の睡眠時間を奪ったのは、天界監視官の三人だった。
いきなり押し掛けられ、そのまま庭に連行されたのだ。
紗「そうもいかないのよ。お願いだから、早く見せてくれる？」
高「何でだよ？」
勇「まぁ、念には念を、ってやつだ」
高「説明しろよな」
文「いいから、さっさとやれ。でないと、アリアちゃんにキスしちゃうぞ～」
ア「ええっ！？」
文夫が悪ふざけでアリアに唇を近づける。
その瞬間、高雅と紗奈恵の姿が消えた。

ドガッバキッ！！

文「アベシッィィィ！？」
高雅の光速の蹴りと紗奈恵の神速のビンタが文夫に炸裂し、文夫は星となった。
勇「今、結構ブレがあったぞ」
勇人が冷静に高雅の評価を付けたいた。
高「こんな時でも見てたのかよ」
勇「言っただろ。急いでんだよ」

紗「まぁ、初めてに比べてかなり馴染んでるみたいよ」
勇「それでも、あいつが来たら・・・」
紗「大丈夫よ。私達が倒せばいいじゃない。これは、あくまで念よ」
高「だーかーらー、何の話なんだよ？」
紗「ふふふ、未熟な高雅には教えません♪」
高「ひっでぇ」
文「まぁ、心配するな。俺達が何とかしてやるけど・・・」
高「けど、何だよ？」
文夫が深刻に俯き、その先を答えなかった。
文「おおっと、今、テレパシーで日本海に沈んでいる少女を詮索しろという命令が入った。これにて失礼する」
と、思いきや、嘘丸出しのセリフを吐き捨ててどこかに飛んで行った。
紗「ふふふ、じゃあね」
勇「次に会うときは勝負ぐらい出来るようになれよ」
そう言って、紗奈恵と勇人も文夫の後を追った。
結局、何が何だか分からないまま終わってしまった。
高「・・・寝よ」
高雅は溜息を零して、家の中に入ろうとした。
そんな時、エクスとサミダレが考え事をしているように見えたが、放っておいた。
蓮「こうがにいちゃーーーーん」
ロ「コウガっちーーーーーーーー」
高「ん？」
振り向くと、空から小さな飛行機に乗った蓮田がこちらに突進していた。
結構な速度を出しており、高雅の見計らった距離では絶対に止まらない。
と言うか、自分に直撃コースである。
高「アリア、あの無計画な行動を救済してやれ」

ア「はいはい」
アリアは軽く静寂の力を使い、速度を落としてやった。
地面に近づいた所で既に速度は無くなり、蓮田は飛び降りて着地し、
ログナは人間状態に戻った。
ロ「やっぱり、トップスピードで突っ込んで正解だったぜ」
蓮「うん、ちょっと怖かったけどこうがにいちゃんは頼りになるね」
高「で、そんなトップスピードを出す用事って何だ？」
蓮「そうだった。こうがにいちゃん、大変だよ！！」
ロ「ちょっとついて来てくれねえか？。言うより見た方が早い」
高「何で、俺の周りの奴らは口で説明しないんだよ・・・」
蓮「取りあえず、早く行こうよ！！。こんな時に頼りになるのはこうがにいちゃんだけだから」
ロ「お・・俺っちは？。この提案を出した俺っちは？」
蓮田はログナを無視して高雅の手を引っ張って急かす。
高「はいはい。レオ達は留守番を頼むわ。俺とアリアだけで行く」
レ「分かった」
エ「僕は少し出掛けてもいいか？」
高「いいけど、面倒は起こすなよ」
サ「私も一緒にいいかのぉ？」
高「ご自由に」
サミダレとエクスはどこかへ出かけ、高雅とアリアは蓮田の案内で
森へ向かった。
レ「さて、我は本を読むとするか」
フ「ふぁ～、ボクは眠いから寝るです」
レオとフィーラは家に入り、それぞれの行動をした。

蓮田に案内され、森の奥深くまで進んでいた。
蓮「こっちこっち」
高「どこまで行く気か?。随分と歩いたぞ」
ロ「それ程スゲーんだよ」
蓮「もうすぐだから」
蓮田はそれだけを言って、さっさと森の奥へ進んで行く。
その速さは結構なもので、高雅も追いかけるのが一苦労だった。
高「おいおい、少しは待ってくれよ」
蓮「こっちこっち。ほら、あれだよ」
蓮田が指を指した方に顔を向けると、そこには見慣れない生物が腰をおろしていた。
高「あれは・・馬?・・・じゃない、羽が生えてる」
ア「ってことは・・・ペガサス!?」
高「んなアホな!?」
だが、見る限り白馬に羽が生えた生物。
よくファンタジーなどで言われるペガサスである。
高「何でこんなとこに?」
ロ「さぁ?。最初見たときは怪我をしててな、まぁそんぐらいは俺っちが治してやったけど」
ア「それからどうすればいいから分からず、コウガに相談しに来た訳ね」
ロ「その通ーーーり!!」
ペ「ッ!?」
ログナの大きな声にペガサスは驚いてこっちを見た。
蓮「わわわ、大丈夫だよ。僕だよ。友達を連れてきたよ」
そう言って、蓮田はペガサスに近づき、優しく撫でてあげた。
それだけでペガサスは落ち着き、蓮田に擦り寄った。
高「相当なついてるな」

高雅は近づきながら思った事を口にした。
蓮「うん」
ロ「そりゃ、命の恩人だからな。俺たちは」
ア「でも、さっきログナの声に驚いてたよね」
高「つまり、お前はノーカンだな」
ロ「そんな訳ねえ。なぁ、ペガサス！！」
ペ「ビクッ！？」
ログナがペガサスに声をかけるとあからさまに驚いていた。
蓮「こら、ログナ！！。驚かさせない！！」
ロ「すんません・・・」
高「ざまぁねえな」
ロ「何故だあああああああ、俺が助けたみたいなもんだろおおおおお」
ペ「ビクッ！？」
蓮「ログナぁ！！」
諦めが悪いログナは蓮田に説教をされ始めた。
その間、高雅は少しだけペガサスに話しかけてみた。
高「なぁ、お前は喋れないのか？。てか、天獣か？」
ペ「コクッ」
ペガサスは一回だけ頷く。
高「今のは両方の回答に当てはまるのか？」
ペ「コクッ」
高「ふ～ん、天獣にも喋れない種類があるのか」
ア「ねえ、どうしてここに来たの？。怪我してたみたいだから何かあったの？」
高「あのな、喋れないのに、んな具体的な事が言えるか」
ア「そ・・そうだったね」
ペ「テクテク」
ア「ん？」
ペガサスはアリアに近づくとアリアの頭と自分の頭をくっつけた。

ア「え・・ああ・・・うん、成程ね」
高「？」
アリアが頷き、一人で納得していた。
ア「あのね、脳を近づけると自分の考えを伝える事が出来るみたい」
高「へー」
ア「それで、ある使いと戦いに敗れてここに落ちたんだって」
高「へむへむ・・・・・質問、いいか？」
ア「ちょっと待って・・・・うん、いいみたいだよ」
アリアはペガサスの頭に近づいて確認を取る。
ペガサスはアリアの事を認めているようだ。
ペガサスは高雅に近づき、同じように頭を近づけた。
高（何で現世で戦ったんだ？。天界で戦えば落ちることはなかっただろ）
ペ（実は急に派遣されたので、その時には既に使いは現世にいたので。どうにか相打ちまで追い込めましたが、多分死んでは無いかと）
高（ある使いって誰だ？）
ペ（・・・すみません。関係のない方には極秘なので）
高（把握）
高雅は頭を放してアリアに向き合う。
アリアは首を傾げて高雅の答えを待っていた。
高「取りあえず、こいつは天界に帰そう。現世でやるべきことは終わってる」
ア「そっか。じゃあ、真の契約をして空間を出す？」
高「そうだな。それ.j〈ゴンッ〉痛っ！？」
突然、ペガサスが焦ったように高雅の頭をぶつけた。
結構勢いがあり、軽い頭痛を起こした。
ペ（待ってください！！。証拠もなく、帰る事はできません！！）
高（だからって、思いっきりぶつけるな！！）
ペ「ビクッ！？」
ペガサスは高雅の怒鳴り声に怯え、アリアの後ろまで身を引いた。

ア「コウガ、怒鳴っちゃいけないよ」
高「よく分かったな」
ア「コウガのことぐらい、よく理解してるつもりよ」
アリアはペガサスを撫でて落ち着かせる。
高「よく、こんなビビりが使いと戦ったな」
ア「相変わらず厳しいね。でも、どうしたの？」
高「ああ、何か帰りたくないって」
蓮「だったら、ここに居ればいいよ」
説教を終えた蓮田がこちらに戻ってきながら言った。
後ろでは真っ白になったログナの姿がうかがえた。
蓮「僕がこの子の世話をするよ。羽が生えたお馬さんはあんまり人に見せたらいけないよね」
高「ああ、そうだな。この森から出るのは止めた方がいい」
ロ「だけどよ、植林活動の人間がこの辺りに来るぞ」
蓮「大丈夫、ここに来るのは火曜日と木曜日の１６時、向こうに来るのは月曜日と火曜日の１０時、それで――」
蓮田が事細かく人が森に来るのを説明してくれた。
ペガサスはアリアから蓮田の傍に歩み寄った。
ロ「さっすが蓮田。この森は最早蓮田の手中の中だぜ」
高「まぁ、そんなに知ってるなら、人と会うことはないだろうな」
ア「レンタ君、すごいね」
蓮「うん、僕もあんまり合わないようにしてるんだ。ログナもいるし」
高「お前、知らず内に蓮田に気、使わせてるんだな」
ロ「ありがとう、蓮田様。俺っちは幸せです」
高「・・・取りあえず、そう言うことに関しては問題ないな」
ア「それじゃ、この天獣はレンタ君に任せるね」
蓮「うん。それじゃ、名前を付けようよ」
ロ「よぉ～し、絶って名前はどうだ？。かっこいいだろ？」
ペ「ブルブル」

蓮「ペガサスだから、ぺーちゃんは？」
ペ「コクッ」
ペガサス改め、ぺーちゃんになった。
ログナの無駄にかっこつけた名前は呆気なく没にされてしまった。
高「んじゃ、そいつは任せる。俺は家に帰ってさっさと寝る」
ア「それじゃ、バイバイ」
蓮「うん、バイバイ」
ロ「じゃ～に～」
高雅とアリアはぺーちゃんを蓮田達に任せ、来た道を頼りに戻った。
複雑な道だったが、既に高雅の頭にインプットされている。
アリアは改めて高雅の天才ぶりを感心していた。
そんな中、高雅はふと思ってた。
高「俺、来る意味あったか？」

日本海上空。
文「そんじゃ、隈（くま）なく探せよ。絶対に零（こぼ）すなよ」
勇「言われなくても分かってる」
紗「住む所を壊されたくないものね」
そう言って、勇人と紗奈恵は日本海に飛び込んだ。
もちろん、空間を操って空気もあるし、濡れもしない。
文「さて、俺も探すか。しかし、自慢の天獣と相打ちとはな・・・ほんと、会わせたらまずいな」
そう思いながら、文夫も日本海に飛び込んだ。
その様子をさらに上空から二人が見ていた。

エ「やっぱり・・・これは満更でもないようだ」
サ「私らも協力するのか？」
エ「いや。コウガ君に伝えよう。あながち、間違いでもないだろう」
サ「そうじゃのぉ」
そう言って、サミダレとエクスは高雅の家へと向かった。
しかし、目の前には先程海に潜ったはずの三人が並んでいた。
エ「なっ！？」
文「気付かないと思ったか？」
勇「セイクリッドの者をなめるなよ」
紗「ごめんなさい。黙っておくなら、悪い事はしないわ」
サ「何故じゃ？。何故、コウガ殿に黙る必要があるのじゃ？。コウガ殿と関係があるはずじゃぞ」
文「負担を減らしてやりてぇんだよ」
エ・サ「ッ！？」
文「マリア様は普通に過ごして欲しいって祈ってたんだ。だから、あいつに降り掛かる火の粉ぐらいは払ってやらなくちゃな」
文夫がしみじみと訳を話す。
文「だから心配するな。お前らは楽しく生活してればいいんだよ」
勇「そう言う事だ」
紗「うふふ」
エ「・・・・・・コウガ君は本当にそれを望んでいるのかい？」
サ「そうじゃのぉ。自分勝手な行動かもしれぬぞぉ」
文「？、どういう・・・ッ！？」
文が急に空を見上げ、虚無のシールドを展開した。
さらに、紗奈恵と勇人も一緒に虚無の力を加える。

バギィイィイイイ！！

エ・サ「ッ！？」
何かが虚無のシールドにぶつかった。

それは、全く似つかわしくない小さな拳だった。
それだけで、虚無のシールドに罅(ひび)が入っていた。
それを通り越して、三人の手は血が出ていた。
文「ちっ」
サ「な・・何じゃ！？」
シールドを通り越して見えるのは少女の姿。
しかも、服は来ておらず、裸体の姿だった。
？「何の話ぃ？。お兄ちゃんと関係あるぅ？」
にこやかにそれだけを聞き、再び攻撃をしてきた。

## 探し探される（前書き）

今年ももう終わりですね。

来年も読んでくれると嬉しいです。

それでは、良いお年を。

## 探し探される

A「決着の時だな」
高「ふあぁ～、寝みぃ」
向かい合わせに立つ高雅とA。
そして、二人同時に駆けだす。
A「うらあああああああああああああああ」
高「でやあああああああああああああああ」
すれ違う刹那、斬撃を交わす。
そして、二人はジッとして動かなくなる。
A「・・・・・・」
高「・・・・・・ごふっ！？」
高雅の胸に一閃の斬撃が入った。
高雅は力を無くして倒れた。
A「・・・勝ったんだ。俺、勝ったんだ・・・」
Aはまだ実感しない勝利に茫然と立ち尽くしていた。
そして、徐々に湧いて来る実感が嬉しくなり叫ぼうとした。

A「やったあああああああああああああああああああ〈ゴンッ〉
あぐっ！？」
突然の痛みに目を覚ますA。
そして、冷静に今の事を判断する。

A「・・・何だ、お決まりの夢オチか」
Aは現実を知りながら、取りあえず着替え始める。
タ「主よ。何を叫んでおったのだ？」
A「久しぶりに喋ったな、タイト」
タ「何を言っている、主よ。拙者はよく喋っているではないか」
A「あ、いや、そう言う意味じゃなくて」
A母「Aー、起きてるのー？。遅刻するわよー」
A「分かってる分かってる」
Aは素早く着替えを済ませ、さっさとリビングへ向かう。
そして、用意されていたトーストを咥えてそそくさに出ていった。
ちなみに、活性付きの超全力疾走で登校中。
A「あむ・・・あー、良いロリとぶつからねえかなぁ」
非常に危険なセリフを吐き捨てながら器用にトーストを食べる。
A「お、早速四つ角に来た。さあ、今日こそフラグを立てたいぜ」
タ「主よ。いい加減にせねばその邪心を叩き斬るぞ」
A「じょ・・冗談だって。なははは・・・」
Aはトーストを一気に飲み込んで走りに専念する。
四つ角を完璧な減速とギリギリのインコーナーで曲がり切り、立ち上がりも問題ない。
ただ問題だったのは、死角に人がいたことだった。
いや、正確には人ではなかった。
A「うおお、高雅あああ！？」
高「んあ？」

ガゴンッ！！

A「あーーれーー」
寝ぼけながら自転車を漕いでいる高雅にもろにぶつかったAは星になった。
高「んあ？、何かぶつかったか？」

ア「さぁ？」
A「さぁ？、じゃねえぞ、コンニャロー！！」
星になっていたはずのAがいつの間にか戻って来ていた。
活性を使った全力疾走だったが、全く疲れてはいない。
高「ふぁ～、誰かと思えばお前かよ」
A「こんな時間に珍しいな。何だ？、夜ふかしでもしたのか？」
高「お前には話す価値がねぇよ。ふぁ～、ねみぃ～」
A「んな硬いこと言うなよぉ。ほら、仲間の相談なら聞いてやるから」
高「あー、さっき名前で呼んだな、コンニャロー」
A「ちょ！？、今それを出すかよ！？」
高「問答無用。それが俺の夜ふかしの理由だ」
A「嘘こけ！！。今さっきの事だろうが！！」
高「言ったろ？。問答無用って」
A「ひでぇ！？」
ア「二人とも、そんな暇なんてあるの？」
アリアが注意を促すと二人は思いだしたかのように学校がある方へ顔を向ける。
すると、タイミング良くチャイムが鳴り響いた。
A「こ・・こうしちゃいられねえ！！・・・ってあれ？」
気付けば、すぐそこにいたはずの高雅の姿は無かった。
代わりにあったのは秋の終わりを告げる一枚の落ち葉だけ。
A「もう、秋は終わりだなぁ・・・んな場合あるかぁ！！」
タ「急げ、主よ。あれはまだ予鈴と言うものである」
A「分かってる！！。もう一度頼むぜ！！」
タ「承知」
Aは再び全力疾走を始めた結果、ギリギリで間にあったそうだ。

いつもの数学の時間。
先「えー、このグラフの接線を・・・」
高「・・・・・」
先（お・・・起きてる・・・だと・・・！？）
毎度同じのように眠っているはずの高雅が普通に授業を受けていた。
先「さ・・・崎村君、答えなさい」
高「ハイ、（2，3）デス」
先「正解です」
高「・・・・・・」
高雅は答え終わったにも関わらず、寝ようとしない。
先（ふ・・不自然過ぎる！！）
そんなことを思いつつ、授業を進める。
その事を感じているのは何も先生だけではない。
A（・・・あいつ、授業サボって何をやってんだ？）
Aはそう思いながら高雅の方を見る。
Aは分かっていた、これは偽物だって。
とは言っても、高雅と仲が良い者は全員気付いているが。
A（全く、自分で抱え込まんで仲間に相談しろってんだよ）
先「A君！！」
A「う・・うぇい！？」
裏返った声で返事をしてしまい、周りから笑いが零れる。
先「ぼぅっとしないで、この問題をｔ「ｙ＝２ｘ＋６」せ・・正解・・」
A「なめないでください。これでも、勉強してますから」
人差し指で自分の頭を指しながら嫌みたらしく言う。
それにムカついたのか、先生は指の間、計８か所にチョークを挟む。

さらに、様々な色を使ってカラフルである。
先「調子に乗らない！！」
八本のチョークを纏めて投げた。
さらに、チョークにスピンをかける神業である。
A「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄」
何と、Aがチョークを指の間で取っていく。
そして、全てのチョークを指の間で取った。
周りの生徒は思わず拍手をしてしまった。

キーンコーンカーンコーン・・・

先「・・・号令」
先生は号令が終わった後、敗北感に押しつぶされながらも職員室へ戻った。
Aはチョークを黒板の溝に戻し、自分の指の間を見て言った。
A「・・・正直、熱かったです、はい」
スピンによる摩擦熱は尋常でなく、普通に火傷していた。
先生は知らない内に強くなっているのです。

一方、本物の高雅は真の契約を使って空にいた。
高「いたか？」
ア「いや、見当たらないよ」
二人は活性の力で視力を強化し、町を見渡していた。
高「エクスとサミダレ、どこに居やがるんだ」

ア「取りあえず、隅々まで探そうよ。きっとどこかにいるから」
そう、エクスとサミダレはあの日から高雅の家に帰って来ていないのだ。
それだけでなく、ちょくちょく見に来ていた文夫達も全く来なくなったのだ。
それを心配した高雅は碌に寝ずに探していたのだ。
高「ったく、人にこんな面倒な事をさせやがって。帰ってきたらタダじゃおかねえ」
ア「やっぱり、心配してるんだ」
高「ばっ・・心配とは違う!!。断じて違う!!」
ア「全く、懲りないね」
高「んなことはいいから、さっさと探せ!!」
ア「はいはい♪」
高雅の照れ隠しにアリアは笑っていた。
高雅は自分の顔を見られないようにアリアとは違う場所を探していた。
ア「・・・それにしても、どうしたんだろう、二人とも?」
高「本人に聞かない限り分かる訳が無い。帰ってきたら満足するまで聞けばいい」
ア「・・そうだね。そのためにも、早く見つけないとね」
高雅はさらに上空に行き、もっと広い範囲を見渡す。
そんな時、海の方に目が入った。
高「・・・ん?。おい、アリア。海の方を見てみろ」
ア「海?。海のどの辺?」
高「日本海の方。えっと・・・あれは鳥取の上の方か」
ア「えっと・・・鳥取の・・・ッ!?」
アリアが何かに気付いた瞬間、高雅は全速力でそこへ向かった。
そこには、無惨にも殺された五人が浮かんでいた。
ア「エクス!?、サミダレ!?」
高「監視官組も・・・・マジかよ・・・」

高雅は一瞬パニクったが、すぐに冷静さを取り戻し、五人を助ける。
まず、方向の力で水面から浮かせ、さらに再生の力で回復させる。
文「ぐ・・ああ・・・ッ!?、高雅!!」
文夫は高雅を見つけた瞬間、すぐに肩を掴んで揺すった。
文「無事か!?、まだあいつに会ってないか!?」
高「ちょ・・待てって!!。揺らすな!!。お前らこそ、一体何があったんだよ!?」
高雅が文夫の手を振りほどく。
文夫はそれで我に返って冷静さを取り戻した。
文「ああ・・悪い。実はな、あいつが下りてきたんだ」
高「いい加減、勿体ぶるな!!。さっさと教えろ!!」
文「分かった。いいか、良く聞けよ」
高「だーかーらー」
文「分かった分かった。実はな・・・
お前の妹が下りてきたんだよ!!」
高「・・・・・what?」
高雅は意味が分からない事を言われ、脳みその理解が遅れた。
文「とは言っても、腹違いだがな。ルシフェルが直々に育てたやばい奴だ」
高「そんなにやばいのか?」
勇「だから、俺達が死んでたんだろうが」
起き上がった勇人が悔しそうな顔で言った。
文「取りあえず、そいつとお前を会わせる訳はいかない。お前はこれから家から出るな」
高「なっ!?、ふざけるな!!。俺が関係するんだろうが!?。黙って家で寝てられるか!?」
紗「くぅ・・・取りあえず、言う事を聞いて」
紗奈恵が痛みに耐えながらも高雅に頼む。

完全に再生したはずなのに、何故か痛みが残っていた。
文夫が紗奈恵に静寂の力を掛け、痛みを和らげてあげた。
文「本当に頼む。これは天界の存続を賭けた問題だ」
勇「お前とそいつが会うと天界がお終いなんだ。だから頼む」
文夫と勇人が頭を下げる。
高雅は納得がいかずも三人の本気の顔を見て納得せざるを得なかった。
高「・・・分かったよ。寝てりゃいいんだろ。学校休めるし、この際、冬眠でもしてやらぁ」
文「安心しろ。1週間で終わる」
高「はんっ。大体、一度負けたのにどうやって勝つつもりだよ?」
文「任せろ。とっておきの秘策がある」
紗「まぁ、高雅はその二人の看病をお願い。多分、精神的に参ってるから」
高「あー、分かった」
勇「じゃあ、行きますか。ちなみに、そいつはバカだから、お前の居場所を騙してるし、すぐに見つかる事は無い」
文「そんな事だ。味わえない秋休みでも過ごしてろ」
高「へいへい。てか、早めの冬休みみたいなもんだろ」
紗「それじゃ、ちゃんと家に居てね」
文夫達は空間の力でどこかへと消えていった。
高雅も空間の力を使って家へと帰った。

南極上空。

？「お兄ちゃーーーん」
吹雪が舞う中、無邪気に呼んでいる裸体の少女がいた。
マイナスの気温に関わらず、全く持って平気な顔をしていた。
？「お兄ちゃーーーん、迎えに来たよぉーーーー」
文「残念だが、ここにお兄ちゃんはいないぞ」
どこからともなく現れる文夫に少女は首を傾げる。
勇「悪いが、お前を生かす訳にはいかない」
紗「ここであなたを止めるわ」
？「止めるぅ？。何をぉ？」
かわいらしく首を傾げるも、全く表情を変えない三人。
すると、少女は何か分かったのか、手のひらを叩いた。
？「そっかぁ、お兄ちゃん探しを止めるって事ぉ？。じゃあ、会わせてくれるのぉ？」
勇「そうだな、今度は北極に移動したかもな」
文「だが、行くことはできない。ここで俺らと遊んでもらう」
？「また遊んでくれるんだぁ。よーしぃ、張り切っちゃうぞぉ」
そして、彼らの遊戯が始まった。
殺気に満ち溢れたこの南極で・・・。

## 新たな恐怖の幕開け（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年も変わらずにこの小説を読んで頂くと、とてもうれしいです。
４日投稿を目指しましたが、ぎりぎり間に合いませんでしたｏｒｚ。
それでは２０１１年最初のお話をどうぞ。
あ、ちなみにグロ注意です。

## 新たな恐怖の幕開け

自宅待機で一週間が過ぎていた。
高雅は本当に冬眠に入ったかのように寝ている・・・わけない。
そんなことができる状況ではなかった。
高「で、二人の様子はどうだ？」
リビングで待機しているところにアリアが入り、すぐさま聞いて来る。
アリアは無言で首を振ってから答えた。
ア「まだ不安定で、とても話ができる状態じゃない」
高「・・・・・・・ったく、おちおち寝てられねえ」
あの日、帰った後にエクスとサミダレは意識を取り戻したが、二人はただ怯え、隅に体を縮めて震えていた。
どんなに話しかけようとしても、帰ってくるのは拒絶による攻撃のみ。
とても手が付けられない為、二人は落ち着くまで部屋にこもりっきりにさせてある。
レ「コウガ殿、心配するのは分かるが、自分の身を滅ぼしてまで心配するのは悪い事だ」
フ「ここ二日、不眠不休で心配続きです。流石に寝ないと危ないです」
高「別に心配してる訳でじゃない。寝る気がしないだけだ」
ア「コウガ、流石に少しは休んで。何が起こるか分からないし、まだ文夫さん達から連絡が無いから」
レ「そうだ。いざという時に動けなければ、邪魔になるだけだ」
フ「黙って寝ろです」
高「ちょ・・・・・・」
フィーラが容赦なく夢幻の力を使う。
高雅は防ぐことができず夢幻の世界へ落とされる。

高「あ～、気持ちいい～、モフモフだ～・・・・Ｚｚｚ」
高雅は抵抗することなく、一瞬で眠りに落ちた。
アリアは毛布を掛けてあげ、自分はソファーに腰を下ろした。
ア「ふぅ・・・・それにしても、何が起こってるんだろう？」
レ「コウガ殿の義妹（いもうと）。それが今回の元凶だな。一体、どんな奴なんだ？」
ア「本当に分からないの。コウガの腹違いの妹で、ルシフェルが直々に育てたってことだけ」
フ「情報が無過ぎるです」
レ「そもそも、何故、急にその義妹とやらが現れたのか、目的は何なのか、分からない事が多過ぎるな」
ア「でも、情報を集める方法なんて・・・」
アリアがそう言うと、三人は唸（うな）って考えるが、全く方法が見つからない。
フ「方法が・・・ないです」
ア「・・・朗報を待とうよ」
レ「それしかないな」
ただ待つしかできない三人は自分の情けなさに溜息を零した。
そんな時だった。

ピンポーン・・・

落ち込んでいた静寂な空間にインターホンが鳴った。
高「ふぁ～い」
ア「あれっ！？。いつの間に！？」
さっきまで爆睡していた高雅が体を起こして玄関へ向かって行った。
そのまま半開きの目のまま玄関を開け、客を確認した。
Ａ「ウェーイ、こんちゃー〈バタンッ！！〉うん、元気だな」
やって来たのはＡだった。
それを真っ先に確認した高雅は覚めてもない頭で家に入れないと命

令を出した。

バキャッ！！

A「お邪魔しま～す」

Aは自分の力を活性化して、玄関の扉を破壊して入って来た。

高「ぅおい！！」

A「いや～、最近、お前が来ないからどうしてんのかな～って訳」

ちなみに、高雅は自分の創造を学校に行かせてある。

少し本物と違うが、大抵は同じなのでこういう親近感がある人でないと気付けない。

それが1週間も続いたためか、心配になったAがやって来たのだ。

高「それで扉を破壊するな。粉々に粉砕するぞ」

A「いいじゃねえかよ。どうせ、後でアリアがやっておきましたって事にすれば」

高「人の使いを裏役に回すな！！」

A「んなことより、何で学校に来ねえんだよ？。あんな、偽者、俺以外の奴だって見破ってるぜ」

高「別に。普通の人間が、『あれは創造の力で創った偽の崎村高雅だぞ』とか言うか？」

A「・・・・言ってたら痛いな、そいつ」

高「お前の事だ」

A「俺は普通じゃないも～ん」

そう言って、Aは手首についてあるミサンガを自慢げに見せる。

高「気楽なお前が羨ましいな」

A「どいたまして」

ロ「おっす、コウガっち！！。遊びに来たぜ！！」

高「来んな！！」

何故か続いてログナと蓮田がやって来た。

蓮「あれ、玄関が壊れてるよ。取りあえず、お邪魔します」

ロ「おっじゃま～」
蓮田は家に上がり込むまではしなかったが、ログナは靴を脱いで図々しく家に潜入する。
高「おいっ！！」
ロ「いいじゃねえか。入場料として、扉は直してやったからよ」
高「そっか。じゃあ許す」
A「俺m「諦めろ！！」できぬぅ！！」
Aとの騒ぎはまだまだ続き、結果的に押し負けた高雅であった。
だが、いつの間にか元気を取り戻していたのは本人は知らない。

それから、Aとログナによるドンチャン騒ぎが幕を開けた。
そのたびに高雅の鉄拳制裁が炸裂していたのは言うまでもない。
ただ、高雅の笑顔が自然と回復していたのも言うまでもない。
A「んじゃ、休憩がてらにテレビでも見るか」
そう言ってテレビを付けた瞬間、真っ先に見えた映像により全員は衝撃を受けた。
チャンネルを回そうとしていたAも固まってテレビを見ていた。
その光景は

南極の一部が赤く染まっていたのだ。

A「ふっへ～、こりゃ魂消(たまげ)た」
ロ「これ、何っつう温暖化？」
蓮「あれ、温暖化って氷を赤くするの！？」
高「そんなことはない」

A「おお、あのモザイクは幼女のモザイクだ！！」
高「それはどんなモザイクだよ」
そう言って、高雅はテレビを見る。
そこには、確かに体がモザイクで隠された少女の姿が映っていた。
T「ごらんください。訳あってモザイクをしておりますが、少女がこちらに手を振っています。彼女は一体誰なんでしょう？。この赤くなった南極と関係があるのでしょうか？」
リポーターがヘリコプターから説明する。
A「じゅるり、あのモザイクは裸を隠してるモザイクだな。くぅ～、目を活性して、見透かしてやる！！」
タ「邪心は断ち切る！！」
A「ちょ！？、冗談冗談冗談冗談！！」
ロ「何だ、今度は紙一重ごっこか？」
蓮「？、かみひとえごっこって何？」
A達はテレビを放ってまた騒ぎ出した。
それでも、高雅達はテレビに釘付けになり、さらに冷や汗をかいていた。
ア「・・・まさか・・・」
高「・・・・・・・・・」
フ「コウガ様・・・怖いです」
レ「我も・・・震えが止まらない」
フィーラとレオは体が震えており、フィーラは高雅の腕にしがみ付いた。
高「テレビ越えの殺気か・・・それも、俺のと似てる気がする」
ア「まさか・・・あれが高雅の義妹！？」
高「普通、南極に少女なんている訳が無い。あいつらが騙してそこに行かせてなければな」
ア「じゃあ・・・やっぱあの子が・・・だけど、文夫さん達は！？」
高「あの赤い理由が物凄い残酷なことしか思いつかないけど、聞くか？」

ア「遠慮する・・・」
高雅達は自然と悟っていた。
天界監視官組に何が起こったのかを・・・

中継を終えたリポーターとカメラマンは少女の保護へ向かっていた。
リ「ねえ、大丈夫なの!?。どうして裸なの!?」
少女を毛布で包み込み、ヘリコプターに案内しながら尋ねる。
少女は無邪気な笑顔で自慢げに話し始めた。
？「あのねぇ、あたしねぇ、あんまり教えてくれないから少し怒っちゃったのぉ。そしたらねぇ、道連れをされかけちゃってねぇ、危なかったのぉ」
リ「え!?」
リポーターにとっては意味が分からないが、それでも少女は話し続ける。
？「でねぇ、頭を剥いちゃってぇ、脳みそから直接お兄ちゃんの居場所を教えてもらおうと思ったんだけどねぇ、死に際に記憶を消しちゃったんだよぉ。がっくりぃ・・・」
少女は頭を下げて、落ち込んだように見せる。
リポーターは戸惑いながらも、質問を続ける。
リ「え・・えっと、あなた以外に南極(ここ)に誰かいたの?」
？「もういないよぉ。話聞いてたのぉ?」
少女は機嫌を損(そこ)ね、ムスッと頬を膨らませる。
リ「ご・・ゴメンね。あなた、お兄ちゃんを探しているの?」

？「そうだよぉ。お兄ちゃんの居場所ぉ、分かるのぉ」
リ「ゴメンね。お兄ちゃんの名前を教えてくれたら、探してあげるけど」
？「名前ぇ？。んっとねぇ・・・わっかぁんなぁい♪」
かわいらしく微笑みながら言う少女にリポーターは唖然としていた。
？「あぁ、でもねぇ、見た目なら分かるよぉ。とっっっっってもカッコ良くて強いのぉ」
リ「でも、それだけだと、探すのは厳ｓ「大丈夫ぅ」えっ！？」
？「こうすればいいからぁ・・・えいっ☆」

グシャッ！！

少女は前触れもなく素手でリポーターの頭を貫き、脳みそだけを抜き取っていた。
少女はあろうことか、脳みそを食べ始めた。
？「はむ・・んく・・・ちゅ・・コックン♪。ん～、さっきの人達に比べると美味しくないなぁ」
少女は手に付いた血を舐め取りながら、お腹をさすっていた。
？「・・・ダメぇ。この人の記憶にお兄ちゃんが映ってなぁい」
不貞腐れながら、リポーターの死骸を足で突っつく。
その光景を見たカメラマンとヘリコプターの操縦士はあまりの出来事に腰を抜かしていた。
それに気付いた少女はニコニコ笑いながら歩み寄って行く。
？「おじさん達ぃ、脳みそぉ、ちょうだぁい？」
カ「ヒィィッ！？、来るなぁ！！」
カメラマンは命の次に大切なカメラを放り捨て、ヘリコプターへ走った。
操縦士も危険を感じ、カメラマンが乗った瞬間にヘリコプターを宙へ浮かせ、南極から離れてゆく。
カ「はぁ・・はぁ・・うっ・・・」

カメラマンはさっきの光景を思い出したのか、吐き気に襲われていた。
片手で口を押さえながらもう一方の手でバケツか何かを探していると、不意にその手が掴まれた。
目を向けると、そこにはいるはずもない少女が手を握っていた。
カ「うわあああああああああああ！！？？」
操「ッ！？、なっ！？、何でいるんだ！？」
操縦士がカメラマンの叫び声に驚いて後ろを振り返り、少女を見つけた。
？「えへへ♪、おじさんはぁ、お兄ちゃんを知ってるのかなぁ？」
カ「や・・やめてくれえええええええええええええ」
？「あれぇ？、怖がってるのぉ？。じゃあ、痛くないようにしてあげるぅ」
少女はカメラマンの頭を掴み、目を閉じる。
そして、徐々に唇を近づけていった。
カメラマンはその姿に魅了され、自(おの)ずと唇を近づけていた。
そして、触れる瞬間に・・・
？「やっぱぁ、やだぁ」
カ「へっ？」

グジュッ！！

少女はカメラマンの首をもぎ取った。
？「ごめんねぇ。やっぱりぃ、ファーストキスはお兄ちゃんがいいもぉん♪」
少女はカメラマンの頭から脳みそを取り出し、また飲み込んだ。
？「ッ？・・の・・・喉に・・詰まっちゃったぁ・・うう・・・」
噛まずに飲み込んだためか、脳みそが喉に詰まってしまった。
？「の・・飲み物ぉ・・・あ・・あったぁ♪」
操「え！？」

少女は操縦士を見つけると、そのまま飛びついた。
そして、服越しに首元に噛み付いた。
操「な・・あ・・・」
操縦士は訳が分からず、ただ震えていた。
だが、徐々に意識が飛んでゆくのを感じていた。
少女が多量に操縦士の血を飲み干しているのだ。
？「んく・・・こく・・・こく・・・ぷはぁ♪」
少女が満足げに離れた時には、操縦士はミイラになっていた。
少女によって、血も水分も全て吸い尽されたのだ。
？「おいしくなぁい・・・でも、詰まったのは取れちゃったぁ♪」
そうして喜んでいる内にあることに気付いた。
景色が傾いて徐々に海が近づいていた。
？「これ何だろぅ？」
しかし、全く構わずに操縦レバーを弄り始めた。
そのまま周りのボタンにも興味を示し、適当に弄っていた。
そのヘリコプターは滅茶苦茶な軌道を描きながら落下して行き・・・

ザバーン・・・・

海に落ちた。
その後、少女はどうなったかは誰も知らないが、こんな事で死ぬとは誰も思わないだろう。

## 新たな恐怖の幕開け（後書き）

これで、新しいお話のプロローグみたいなものは終わりです。
次回は少し飛んでこの少女と高雅のお話を書いて行きます。
はてさて、今度のお話は何ヶ月かかることやら・・・

# 最悪の贈り物編　その1、もう近くにいる贈り物

あの事件から一ヶ月が経過していた。
緑淵高校は終業式を終え、冬休みに突入していた。
だが、高雅に取って、ずっと家で待機しているので端から冬休みみたいなものである。
そんな余興に浸ることは出来てないが。
高「おーい、入るぞー」
高雅は扉をノックしてから開ける。
それもゆっくりと開けて刺激しないように。
手には飲み物とプリンを乗せた御盆を持っていた。
エ「おお・・・コウガ君か」
サ「ほっ・・・」
エクスとサミダレが高雅を確認すると安堵の息を零した。
この一ヶ月でようやく喋る事は出来たのだ。
しかし、義妹(いもうと)情報を聞き出そうとするも、思いだした瞬間に恐怖で暴れ出すため、義妹の事は禁句にしてある。
高「ほら、エクスにはホットココア、サミダレにはプリンだ」
エ「おぉ、ありがとう」
サ「す・・・すまんのぉ」
高「いいってことよ、別に。それよりも、精神的に落ち着いて来たか？」
エ「あ・・ああ、大分落ち着いて来たさ」
サ「すまんのぉ。いらぬ心配をかけてしもうて」
高「だから心配じゃねえって。ついでだ、ついで」
高雅は自分用に入れたコーヒーを飲みながら誤魔化す。
すると、扉をノックする音が聞こえた。
その音にエクスとサミダレが驚くが、しばらくしてから声がする。
ア「私、アリアだよ。入ってもいい？」

高「――っと、言う事だけど、どうする？」
エ「ぼ・・僕は構わない」
サ「私も・・いいぞ」
高「おーい、やっぱダメだぞぉ」
ア「こらー、嘘ついても無駄だよ。ちゃんと聞こえてるよ」
アリアは問答無用と扉を開けて入って来る。
怒ってはいたが、ちゃんと二人を気遣っており、声量はかなり落としてある。
ア「全く・・・それより、二人の調子はどう？」
エ「ああ、大分、回復してるさ」
サ「わざわざ心配してくれて感謝してるぞ」
ア「当然だよ。だって、家族だもん」
高「じゃあ、家族じゃなければ心配しないんだな」
ア「え！？・・ちょっ！？、そう言う意味じゃないよ！！」
高「おい、声」
ア「あっ」
アリアは気付いた時にはエクスとサミダレが怯えていた。
ア「あははは、ゴメンね」
高「そんなんより、お前、何しに来たんだ？」
ア「まぁ、心配もあるけど、A君が来たよ。後、蓮田君達も」
高「追い返せ。会うのがダルイ」
ア「それg「いえーい！！、ノッてるかーーい？」ちょ！？、A君、しぃー」
Aがいきなり扉を蹴り開け、超ハイテンションで入って来た。
アリアは静かにするように促すが完全に無視している。
A「暗い人生なんて吹き飛ばせ！！。パァーっと明かr「ちょっと来い」ゐ？」
高雅がAの肩を掴んで部屋を出ていった。
しかし、物音は全くせず、少ししたら高雅だけが戻って来た。
高「人間ってさぁ、粗大ゴミか？」

ア「さ・・さぁ・・・？」
アリアは苦笑いしながら適当に相槌を打っておいた。
Aがどうなったのかは高雅のみが知る。
高「悪い。空気が読めない奴が入って来てしまった」
エ「あ・・・ああ、少し驚いたが、大丈夫だ」
高「肩に力が入ってるぞ。後、拳が出来てる」
エ「え？・・・ああ」
エクスは今気づいたようで、深呼吸をして落ち着きを取り戻した。
サミダレも知らずに同じ事をしていることに気付き、自分も落ちつけていた。
高「完全回復はまだまだだな。まぁ、気楽に治せよ」
ア「相談だって乗るよ。何でも言ってね」
エ「ありがとう、二人とも」
サ「すまんのぉ」
高「サミダレ、謝り過ぎ。飲み終わったコップは外に出しててくれ」
ア「それじゃ、私達はリビングにいるから。また後で来るよ」
高雅とアリアは部屋を出た。
その瞬間、高雅はアリアを鬼の形相で睨みつけた。
高「うぉい・・・」
ア「ヒッ！？」
アリアは自然と体が震えていた。
高「何で俺の許可なしにAと蓮田とログナを入れたんだ？」
ア「あ・・いや・・・一応、知り合いだから・・・ねぇ？」
高「ねぇ、じゃねえぞ、おい」
ア「そ・・それより、会って来たら？」
アリアは誤魔化す様にリビングの方に指を指す。
高雅はアリアの頭を一発殴ってからリビングへ向かった。
フ「あ、コウガ様、二人はどうです？」
高「ん？、回復は好調だ」
フ「それは良かったです。ところで、何でアリア様は頭を抱えてる

です？」
ア「いや・・・ちょっとね・・・あいたた」
高「んでさ、蓮田達はどこだ？」
レ「台所へ向かったぞ」
高「・・・・・・・・や～な予感」
高雅はすぐに台所へ向かう。
すると次第に何かを漁る物音が大きくなる。
そして、二人の会話も次第に大きくなった。
蓮「ログナ、悪い事だよ。止めようよ」
ロ「いいか、蓮田。人は自分の身に危険が迫ると悪者になるんだ。俺は今そこにいる！！」
蓮「意味が分からないよ。あっ、だから食べちゃダメだって！！。こうがにいちゃんが怒るよ」
ロ「大丈夫！！。コウガっちが来たって、貧しい俺っちに飯を恵んでくれるさ」
高「そんなにいい奴なのか、その高雅は？」
ロ「そりゃ、冷蔵庫の物を全部食い漁っても文句一つ言わない人だ・・・って！？」
高「どんなに御人好しでも、自分家の冷蔵庫を漁られると怒られるぞ。しかも、俺は人間じゃない」
ロ「それってどういうｕ「お前は死んでもらう」ｏｋ把握」
ログナは窓から逃げ出そうとした。
しかし、いつの間にか体が動かなくなっていた。
目にも見えない速さでログナの首を絞めていた。
高「蓮田、悪い事はしちゃダメだからな」
蓮「は・・・はい」
高雅は優しい口調で言っているが、ログナの引きつった顔を見て怖がっていた。
高「分かったらリビングへ向かうように」
蓮「はい」

蓮田は恐怖を感じながらも返事だけを返し、固まった体を動かして台所から消えた。
その後、台所では悲鳴と絶叫が木霊（こだま）し続けた。

A「どうしてこうなった？」
Aは財布を片手にスーパーで買い物をしていた。
さらに、今はタイムセールで主婦達が一日限りの大戦争を起こしていた。
その中にもAは存在する。
A「主婦、怖ぁ～」
取りあえず、食材をゲットするために最強主婦との戦いに挑んだ。
どうしてこうなったのかは台所の騒動の少し後である。

高「はぁ、食材が一気に無くなった・・・」
ログナを制裁した後、食材チェックをしたところ、生だろうが冷凍物だろうが殆ど食べつくされていた。
高「まぁ、あれらは再生できると言っても、結構減ってたからな。買い物に行かねえとな」
A「じゃあさ、創造すりゃ良くね？。〈ボリボリ〉」
高「・・・・・・」
高雅の目の前に現れてたのはポテチを立ち食いしているAだった。
さっきフルボッコにしたはずなのに、もうケロッとしていた。
高「おい、A。買い物に行け」

A「何でだよ？。〈パリッ〉」
高「テメーも同罪だからだあああああああああ」
高雅はAが食べていたポテチを盗んで叫んだ。
もちろん、無許可で食べているポテチである。
高「人の物を勝手に食う奴がいるか！！。お前ら調子に乗るなよ！！」
ア「コウガ、あんまり大声だすと二人に聞こえるよ」
高「安心しろ。あっこは殆どの音を絶縁する部屋だ。扉の前ぐらいじゃないと音は聞こえん」
A「んで、喧嘩で決着をつけるのか？」
高「そんな喧嘩っ早いと主人公じゃねえぞ」
A「ッ！？」
Aは主人公と言う言葉に体が反応した。
それを見た高雅がニヤリと妖しい笑みを浮かべた。
高「それに主人公なら、仲間の為に何かしてくれるんだろ？」
A「ああ、そうさ！！。主人公は仲間を大切にするからな！！」
高「じゃあ、――」

こうして、Aはまんまと嵌(は)められてしまった。
A「しょーがねーなー。タイト、一気に買い物を済ますぞ」
タ「承知」
Aは活性の力を使い、主婦との戦争に割り込んだ。
最初は軽い活性だったが、それだと主婦の方が上だったので、最終的には6割は出していた。
Aは買い物主婦の最強さを身を持って思い知った。

何とか高雅に頼まれた物を手に入れたAは高雅の家に向かっていた。
しかし、足取りは滅茶苦茶で今にも倒れそうだ。
A「あ～・・・畜生・・・以外に疲れた・・・」
タ「中々良い修行になりそうだ」
A「勘弁してくれ・・・・」
Aはトボトボと歩き、ひたすらに高雅の家に向かう。
その時、Aの髪の毛の一部がピンと立ち上がった。
A「お父さん、近くに幼女がいるよ!!」
タ「何を言っている、主よ?。近くに主の父上はいないぞ」
A「あ、いや、気にするな。それより、幼女だあああああああああ」
Aはさっきまでの疲れはどこに行ったのか、突然駆けだして行った。
右へ右へ左へ右へ、高速で曲がり角を曲がって行く。
そして１００メートル走ったところでピタリと止まり、壁を伝ってゆっくり動き出した。
そして、曲がり角に差し掛かったときに頭だけを出して様子を窺った。
そこには不良が三人ほど誰かを囲っていた。
不１「よぉ、嬢ちゃん。お兄さん達と路地裏でいいことしようぜ」
不２「すっげぇ、気持ちいよぉ」
不３「お菓子もあるんだよ～」
明らかに危ない三人である。
それを端から見ていたAは腹を立てていた。
A「あの野郎共・・・んな事するから、ロリコンが危ないって言われるんだよ・・・」
タ「とにかく、早く助けるのだ」
A「分かってるわ!!。俺の怒りは有頂天に達しているぜ!!」

不１「誰だ！？」
堂々と大声を出していたので、呆気なくバレテしまった。
Ａ「バレちゃぁしょうがない。キエエエエエエエエエエエ」
何故か奇声を発しながら不良に立ち向かった。
Ａは活性を使うまでもなく不良三人を秒殺する。
片手に買い物袋とハンデも付いていたが、Ａにとっては楽勝であった。
不１２３「覚えてろよぉーー」
何とも悪役にありがちなセリフを吐き捨てて、不良は帰って行った。
Ａ「主人公がザコキャラに負けるなんて言語道断。っと、それより・・・」
Ａはしゃがみ込んで少女と目線を合わせる。
そして頭を撫でて優しい口調で話しかける。
Ａ「もう大丈夫だから安心しな」
幼「う・・・うん・・ありがとう、お兄ちゃん」
Ａ「はぅ！？」
少女は一礼して駆け足でどこかへ帰って行った。
Ａ「うっはあああああああ、お兄ちゃんって言われたあああああ。生きてて良かったあああああああ」
Ａは『お兄ちゃん』という言葉に自分を抱いて悶えていた。
完全に変態である。
自分の所為でロリコンの評判を落としているのを気付いていないバカでもある。

パチ・・パチ・・パチ・・

Ａ「？」
突然聞こえる虚しい拍手。
視線を上げると、毛布で体を巻いている少女の姿があった。
Ａ「幼女！！」

？「？、ようじょぉ？。何それぇ？」
タ「ッ！？」
Ａ「いいか、幼女というものは清く美しい拝めるべき存在なのｄ「逃げろ！！、主よ！！」ふぇ？」
タイトの唐突なセリフに首を傾げるＡ。
Ａ「何だ？。てか、一般人の前で喋るなって言っｔ「奴は一般人ではない！！」ふぅん」
？「誰と話してるのぉ？」
Ａ「誰かさんと話してるんだよぉ」
タ「ったく、主は！！」
完全にデレデレのＡに痺れを切らしたタイトは人間になってＡの腕を掴んで逃げた。
反動で買い物袋を落としてしまったが、構わずに走った。
Ａ「のわあああああああああ」
タ「主よ。奴は只者ではない！！。拙者らでは勝つことはできん！！」
Ａ「いやいや、幼女だぜ？。勝てるだろ？」
タ「敵は外見で決めるでない！！。奴の強さは異常だ！！」
Ａ「何で分かると？」
タ「殺気の量が半端でない。もし次に会えば確実に殺されるぞ！！」
Ａ「マジッ！？。幼女こえぇ！！。けどなぁ・・・」
Ａは自嘲気味に自分の足にしがみ付いている物を見せる。
そこには無邪気に笑っている少女の姿が。
？「わぁい、おもしろぉい」
Ａ「クソッ、可愛いな、おい！！」
？「それよりさぁ・・・聞きたい事があるけどぉ。よいしょ・・」
少女がＡの体をよじ登って顔に近づいて行く。
近づくにつれ、Ａの頭が沸騰して行く。
タ「主から離れろ！！」
タイトは突然、Ａを振り回し始めた。

Ａ「んぎぇえええええええええええ、目が回るううううう」
？「きゃはははははは」
少女は楽しそうに笑っていて全然放す気がない。
タ「こうなったら・・・」
タイトは刀を抜き、少女に狙って斬りかかった。
すると、少女は足を放して間合いを取った。
？「危ないなぁ。全くぅ・・・」
タ「黙れ、神の子よ!!。拙者らに何の用だ!?」
Ａ「か・・神?。神といったら・・・僕は新世界の神となる!!」
タ「ふざけるな!!、主よ!!。気を引き締めろ!!。死ぬぞ!!」
Ａ「え・・あ、はい」
Ａはタイトを刀に変え、少女と向き合う。
？「あのねぇ、この辺りにあたしのお兄ちゃんがいるんだけどぉ、知らなぁい?」
タ「主よ、答えるな。問答無用で斬るぞ!!」
Ａ「あ、はい。幼女を斬るのは申し訳ないが、タイトが言うなら仕方ないな」
？「戦うのぉ?」
少女は戦う意思を感じ取っているが、全く殺気を現さない。
最も、自然と溢れている殺気だけでタイトをここまで本気にさせているが。
タ「主よ。隙を確実に逃さず突くのだ。追い打ちは禁止だ」
Ａ「はいよ」
？「久しぶりの戦いだぁ。お兄ちゃんに劣らないようにしないとぉ」
少女はかわいらしくグッと握り、軽く力(りき)む。
そしてどこからともなく銃を取り出した。
？「じゃあ・・・いくよ?」
少女はニヤリと薄く笑みを浮かべ、殺気を放出した。
その瞬間、少女を中心とする半径１００メートルにクレーターが出来上がった。

その範囲内にはAもおり、軽く潰されてしまった。
？「どうしたの、早く掛かって来てよ」
少女の口調が変わり、完全に戦闘の体勢に入った。
A「おー、いてぇ。うん、やばいな」
殺気を感じ取り、初めて自分の身の危険を思い知った。
タ「だから言ったはずだ！！」
A「ったく、こんな危険な幼女はほっとく訳にはいかないな」
？「ふふ、長生きしてよ」
A「主人公の実力を思い知らせてやるさ」
Aの無謀な戦いが幕を開けた。
しかし、Aは知らなかった。
少女が2割の殺気と力しか出してない事を。

# 最悪の贈り物編　その2、出会い

Aが買い物に行っている間、高雅達は適当にトランプで遊んでいた。
ちなみに、内容は大富豪である。
高「なぁ、蓮田。ぺーちゃんはその後どうなったんだ？」
蓮「よく一人で散歩に出かけてるよ。でも、ちゃんと人には見つかってないし、夜前にはちゃんと帰ってくるよ」
高「そうか、ならいいや。ほい、革命」
フ「あみゅみゅ！？、そこで革命です！？」
レ「くっ、これは手痛いな」
ア「ふふっ、そう来るかと思って・・・はい、革命返し♪」
高「なっ！？」
フ「おおっ、すごいです、アリア様」
ア「これでも、コウガの手の内は大分読めるようになったよ」
蓮「わーい、僕、上がり」
フ「ボクもです」
レ「我も上がりだ」
ア「・・・あれ、利用されちゃった」
アリアの革命がえしにより、次々と上がって行く。
高雅は思いもよらぬ展開に焦りを隠せなかった。
ア「ふふ。しかし、高雅にも負ける時が来たようだね」
高「・・・ふっ、確かに、もう一番は無理だな。ただ、ビリにはならない」
ア「な・・何でよ？」
高「お前の手持ちはキングが3枚、エースが1枚だろ？」
ア「ッ！？」
見事、アリアの手持ちは当てられていた。
高雅は皆が捨てたカードを暗記し、残りのカードを計算しながら戦っていた。

ア「だ・・だけど、革命を狙ったって事は、高雅の手持ちは弱い物ばかりのはず！！」
高「俺は端から一番になる気はない。ただ、ビリにもなる気はない」
ちなみに、高雅の手持ちは3枚。
アリアはこれが何なのかは分かっていない。
ア「お・・脅しは効かないよ」
高「脅しかどうかはすぐ分かるさ」
ア「じゃあ、これで！！」
アリアが出したのはエースを一枚。
ア（さあ、どう来る！？）
アリアが高雅の動きをじっと待つ。
高雅は三枚の中から一枚だけを取り出す。
それはハートの2だった。
ア「ッ！？」
高「はい、流して、3を2枚」
ア「ガーン・・・」
アリアは高雅の策によって敗れてしまった。
高「簡単に脅し効いてるじゃん」
ア「うぐ・・・」
高雅の言葉に悔しがるアリア。
それを慰めてあげる蓮田だった。
そんな呑気に過ごしていた時間が急変した。

ピンポーン・・・ピンポーン・・・

突然、鳴りだすニ回のインターホン。
高「へいへい、今行きますよ～」
出ない訳にはいかないので、高雅が面倒くさそうに、玄関へ向かう。
そこにいたのは意外な人物だった。
龍「せぇ・・はぁ・・・こ・・高雅君！！」

高「え!?・・はぁ!?、龍子!?」
息を切らし、青ざめた龍子の姿があった。
高雅はAかと思っていたが、思いもよらぬ人物に声がひっくり返った。
高「何だ!?。何でお前が!?」
龍「すぅ・・はぁ・・・と・・とにかく・・A君が!!」
高「?」
龍「A君が・・・殺されそうなの!!」
高「ッ!?」

変わってAの場所は大惨事を巻き起こしていた。
A「はぁ・・はぁ・・はぁ・・」
決して幼女に〈ピーーー〉して紳士になっている訳ではない。
タイトは折られ、口から血を吐きだし、横腹からは血が溢れて必死に押さえていた。
それを見て笑っている少女がいた。
?「あははは、人間ってもろぉい」
Aの帰り血を浴びた少女の顔は悪魔の笑みに等しかった。
ただ笑っているだけなのに、自然と恐怖が空気全体を包み込んでいた。
A「くっそぉ・・・反則な強さだろぉ」
タ「ぐふっ・・・意識を保つので精一杯だ・・」
最早、A達に希望の光なんて物はない。
全て目の前の闇によって塞がれてしまう。
?「もう少し遊んでくれると思ったけどぉ、もう限界だねぇ」

A「主人公は・・・こんな絶望の時には何かがやって来るのだ！！」
？「・・・・ホントだねぇ」
A「ゑ？」
すると、少女の後ろから空間を使って羽の生えた気高き白馬が現れた。
そう、ペガサスことペーちゃんである。
前足で地面を掻き、殺気をフルに出して少女を睨みつけていた。
その殺気は文夫達よりも凄まじい物である。
？「へぇー、あの時以来だねぇ、お馬さぁん」
少女はペガサスに向き合い、銃を向ける。
ペガサスは前足に体重を乗せ、後ろ足を上げるとそのまま思いっきり後ろに蹴った。

ドゴッ！！

？「あぐっ！？」
後ろに思いっきり蹴った。
しかし、ペガサスの足の先が少女の背中を捕えていた。
空間を使った奇襲攻撃である。
少女はペーちゃんの目の前まで吹き飛ばされてしまった。
ペーちゃんはさらに前足を上げて踏みつぶそうとした。

グシャッ！！

ペーちゃんの足は少女の顔をもろに潰した。
A「うっわ～、グロイなぁ・・・って、こっち来た！？」
ペーちゃんはツカツカと歩み寄り、頭を近づける。
Aは何なのか意味が分からず簡単に頭をぶつけられた。
ペ（声が聞こえるでしょうか？）
A「あ・・はい」

ペ（あなたとそちらの使いさんを再生させますから、刀を地面に置いてください）
Ａ「え・・あ・・・お願いします」
Ａは良く理解していないが、取りあえず言われた通りにする。
すると、ペーちゃんが息を吹きかけた瞬間、タイトの折れた刃が再生し、Ａの傷も完治した。
Ａ「おお、ありがとう！！」
タ「か・・忝い（かたじけな）」
ペ（どういたしまして。それより、早くここを離れてください。彼女が再生する前に）
Ａ「えっ！？、死んでないと！？」
ペ（いえ、死んではいますが、すぐに復活します。完全に倒すにｈ「ねぇ？」ッ！？）
Ａ「？・・あぐっ！？」
ペーちゃんはＡを蹴り飛ばし、空間を使ってこの場から離れさせた。
そして、自分は高く飛び上がると、自分のいた場所に禍禍しいオーラを纏った槍が突き刺さっていた。
少女は地面に深く突き刺さった槍を意図も簡単に抜き、ペガサスを睨みつける。
？「今のぉ、痛かったよぉ」
ペ（思ったより再生が早い。流石、この私を本気にさせただけはある）
少女は先程よりさらに殺気を強め、少女の周りの空間が微かに揺れていた。
？「お馬さぁん、少しはやるようだねぇ。あの時は全然本気を出してなかったけどぉ」
ペ（・・・確かに、最初に戦った時は同士討ちだったが、その時以上の殺気を感じる。これは、私では難しいですね）
？「そろそろねぇ、あたしも怒っちゃうよぉ。お兄ちゃんが見つからなくてぇ、機嫌が悪いんだよぉ」

徐々に強くなってゆく少女の殺気。
そのたびに空気が揺れ、呼吸が苦しくなる。
ペ（・・・上司さん、そろそろ限界です。これ以上、戦いようがありません）
ペーちゃんは目の前の絶望に包み込まれ、戦意がなくなってしまった。
？「そろそろぉ、いなくなっちゃってねぇ」
そう言って、少女はペガサスに狙いを定め、目にも止まらぬ速さで槍を投げた。
戦意を失ったペーちゃんに避けれるはずがない。
？「殺ったぁ！！」
少女は勝利を確信し喜びながら跳ねていた。
しかし、突然ペーちゃんが急降下して少女の投げた槍を避けた。
？「あれぇ？」
ペガサスは地面にぶつかると思いきや、地面がトランポリンのように衝撃を吸収した。
しかし、反動は無く、地面はゆっくりと元の形に戻った。
その時、ペーちゃんの背中にいる人物を見て、少女は目を丸くした。
高「おい、ペーちゃん。ぼうっとするなよ」
それは高雅だった。
高雅は変換の力で地面をトランポリンのように変換したのだ。
さらに、落とす時にペーちゃんに負担が掛からないように消失の力で衝撃を無くしていた。
ペ（え・・コウガさん!?。どうしてここに!?）
高「俺の今日の晩飯の食材が死にかけてるって聞いてすっ飛んで来たんだ」
ア「コウガ、その言い方だとカニバリズムにしか聞こえないよ」
ペ（と・・とにかく、コウガさんはここに来てはいけません）
高「悪い。家にいるのは飽きたんだ。そろそろこっちから出向きたかったって言うのもある」

ア「文夫さん達の敵討ちもしたいしね」
高「それに、こんなに殺気を解放されてちゃ、周囲１００メートル以内の一般人は死ぬぞ」
ぺ（しかし、コウガさんを彼女に会わせる訳には・・・）
高「もう遅いだろ」
そう言って双剣を構え、少女と向き合う。
少女は目を輝かせながら高雅を見つめていた。
？「お兄ちゃんだぁ・・・やっと会えたんだぁ・・・」
少女はさっきまでの殺気を無くし、高雅に駆け寄った。
？「お兄ちゃぁぁぁぁん！！」
少女は高雅の胸へとダイビングをした。
しかし、高雅は受け止める気もなく、簡単に避けた。

ゴンッ！！

？「あうぅ・・・」
少女は頭を塀にぶつけ、軽い脳震盪（のうしんとう）を起こしていた。
そして、頭を抱えつつ涙目になりながらも高雅の方に首を向ける。
？「も・・・もぉう・・お兄ちゃんの照れ屋ぁ」
高「照れてもないし、お前の兄でもない」
？「ふぇ？。でもお父さんは、あたしはお兄ちゃんの使いになるために生まれたんだって言ってたよ」
高「知らねえよ。大体、そのお父さんに会わせろ。直接、話をつけてやる」
？「お父さんは５００年前に死んだよぉ」
高「じゃあ、何で今になって俺を探してるんだよ？」
？「今からじゃないよぉ。ずっと前だよぉ。お兄ちゃんがいなくなってからだよぉ」
高「悪いがお前と一度も会った覚えはない。人違いだろ」
？「そんなことないもん！！。ずっとあたしの頭を撫で撫でしてく

れてたもん！！」
突然、少女がムキになって声を上げる。
それでも高雅は表情一つ変えない所為か、少女は徐々に涙を流し始めた。
？「撫で撫で・・・してくれてたもぉん・・・ぐすっ」
高「知らない物は知らねえんだ。泣いても無駄だ。お前は大罪を犯している。それはもう、泣いて許される物じゃない」
ア「どんな理由であれ、関係のない方を殺しちゃうのは良くないよ」
高雅は冷たく当たり、アリアは優しく言いながらも正論を言う。
すると、少女の殺気が徐々に溢れだした。
？「・・・お兄ちゃんを元に戻す・・・」
高「は？」
？「お兄ちゃんを優しかったあの頃に戻す！！」
高「ッ！？」
突然爆発する少女の殺気。
高雅は殺気だけで吹き飛ばされてしまった。
しかし、冷静に着地して少女に向き合う。
高「いきなり怖くなったな」
ペ（コウガさん、これ以上は危険です。私が時間を稼ぎますから、早く逃げてください）
ペーちゃんが近づいて警告する。
しかし、高雅は逃げるつもりなど毛頭ない。
高「てか、あいつの事をよく教えろ。もう関係者だから極秘もねえだろ」
ペ（・・・分かりました。必要最低限だけを教えます。ですが、情報だけを送りますので、整理はコウガさん自身がしてください）
高「それってどういう・・くっ！？」
突然訪れる激しい頭痛。
さらに、ペーちゃんは高雅を蹴り飛ばして空間でどこかへ移動させた。

ぺーちゃんは一人で少女に立ち向かっていった。

高雅がついた場所は自分の家だった。
高「いってぇ・・・あの野郎、蹴り飛ばすのは酷いだろ・・・」
ア「すぐに戻る?。こっちだって空間が使えるから」
高「当たり前だ!!」
高雅はすぐさま空間を開けようとした。
しかし、開く場所はさっきの場所ではなく、真っ暗で何もない所だった。
高「?、あれ?」
ア「ここ、どこ?」
?「あたしの家だよぉ」
高「なっ!?」
突然、少女の顔がひょっこりと現れたと思いきや、高雅の手を掴んで引き寄せた。
高雅は瞬時に抵抗したが、その異常な力に引き寄せられる。
ア「コウガ!!」
アリアはいてもたってもいられず、人間になって反対側から高雅を引っ張ろうとする。
しかし、高雅に触れた瞬間、静電気の様な何かがアリアを襲った。
ア「きゃっ!?」
高「アリア!?」
?「今だぁ」
少女は絶好のチャンスと、最後の一踏ん張りで高雅を思いっきり引っ張った。

高「うわぁ！？」
高雅は少女と一緒に謎の空間に取り込まれ、消えていった。
ア「こ・・コウガ！？」
いなくなった高雅の場所には空(むな)しい空間だけがあった。
再びあの空間を開こうとするも、あの空間は二度と開けなくなっていた。
ア「嘘・・・コウガが・・・攫(さら)われた・・・」
信じがたい事実にアリアは脱力し、その場に腰を落とした。

# 最悪の贈り物編　その3、狙われた命

連れ攫われた高雅は少女に手を引っ張られて暗闇を進んで行く。
高「おい！！。どこに連れて行く気だ！？」
？「もう少しでつくからぁ」
少女はさっきから、これしか言っていない。
ずっと手を引っ張り高雅を導くだけだ。
すると、光の兆しが見え始めた。
それを見つけた少女が喜んで走り出す。
その光に包まれた瞬間、あまりの輝きに高雅は手で目を覆う。
高「くっ・・・なっ！？」
目が慣れてゆき、辺りを見渡すとそこは先程の暗闇とは違い、木々に囲まれ、綺麗な川が流れてあり、太陽が照らしていた。
高雅は想像とは全く違い、ただ茫然と立ち尽くしていた。
？「えへへぇ、ついたぁ！！」
少女は高雅の手を放して嬉しそうに駆け回る。
高「で、お前の目的は何だ？」
目的地に到着したところで高雅が少女に話しかける。
？「二人っきりだしぃ、名前で呼んで欲しいよぉ」
高「・・・・呼べば話すか？」
高雅がそう聞くと少女はにこやかに頷く。
高雅はしょうがないと溜息を零して名前を呼ぶ。
高「・・・・じゃあ、シリア。目的は何だ？」

彼女の名前が始めて出た所で軽い説明をしましょう。
シリアはルシフェルと名もない天使との間に生まれた子である。
しかし、ルシフェルはシリアが生まれた瞬間に名もない天使を殺し、一人で育てた。
力はアリア並みに全て使え、ルシフェルの力を備えてある。

以上、説明終わり。

シ「じゃあぁ、教えるよぉ。私の目的はお兄ちゃんを覚醒させること」

高「具体的に」

シ「えっとぉ・・・お父さんが言うにはぁ・・・一緒に生活しなさいってぇ」

高「ふ～ん」

全く持って具体的の欠片もないが、シリアに聞いたところで無駄だと思った高雅はそれ以上追及しなかった。

シ「取りあえずぅ、座ろぉ」

高「・・・それもそうだな」

立ち尽くすのも何だと思った高雅は適当に地面に座った。

シ「～♪」

高「お・・おい？」

シリアは高雅の足の上に座った。

高「退け」

シ「嫌ぁ♪」

高「退きなさい」

シ「嫌ぁ♪」

笑顔で答えるシリアに高雅も流石にウザさを感じていた。

高雅は無言でシリアの横腹を掴んだ。

高「・・・そおい！！」

シ「わぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そして痺れを切らしたのか、シリアを思いっきり空高く投げ上げた。

シリアは星となり、どこかへ消えてしまった。

高「はぁ・・・」

遂に一人になれた高雅は大きく背を伸ばして頭の後ろで手を組んで寝そべった。

ふと空を見ながら自分の置かれている状況を確認する。

高「俺って・・・攫われてんだよな」
特に縄で縛られている訳でもなく、一応閉じ込められているが空気は新鮮でむしろうまい方だ。
高「皆・・・俺の事、どう思ってんのかなぁ」
実は心配をされてみたいと思っている主人公。
意外と可愛い所があるんですよ、こいつも。
高「黙れ！！」
・・・取りあえず、高雅の機嫌も損ねさせたところで、他のところへ行きますか。

アリアは皆をリビングに集め、高雅が連れ攫われた事を話ていた。
ちなみに、龍子は出撃する前に家に帰るように言っていた。
ア「――――なんだけど・・・」
レ「それは・・・本当なのか！？」
アリアは重い頭を動かし、俯きながら頷く。
エ「殺されて無ければいいが・・・」
ア「え・・縁起でもない事を言わないでよ！！」
サ「・・・・・・・・」
静まりかえる空間。
蓮「大丈夫だよ。こうがにいちゃんは平気だよ。だって、とっても頼りになるんだよ」
ア「・・ふふ、そうだね」
蓮田の無邪気な言葉で少しだけ明るさを取り戻した。
ロ「ふぃ～、偉い目にあったぜぇ・・・」

そんな時、台所の方からログナがやって来た。
今の今まで高雅に粉砕されていたのだ。
粉砕される寸前に
ロ「あれ、コウガっちは？」
蓮「ログナ、しぃー！！」
ロ「？」
蓮田がログナに空気読めよと静かにさせる。
しかし、ログナにとっては全く見当がつかない。

ピンポーン・・・

A「邪魔するぞー」
突然、Aが高雅の家にやって来た。
インターホンを押して家の中の人の返事も待たず、すぐに高雅の家に侵入した。
ア「A君！？、無事だったの！？」
A「高雅はいるか？。道端でやべぇ奴に会ってきたから、その報告を一応しに来た」
ア「そ・・それが・・・」
アリアは俯いて答える事が出来なかった。
A「訳ありの顔だな。まぁ、詮索はしないでおくぜ」
ア「・・・いや、この際、A君にも知ってもらいたいかも」
A「ほぉ。んじゃ、一体高雅はどうしたんだ？」
アリアはAに高雅がどうなったのかを説明した。
それを聞いた途端、Aの目が輝きだした。
A「仲間救出のフラグじゃん！！。てか、幼女に攫われるなんて情けねえな」
タ「その者に敗北したのは誰だ？、主よ」
A「何も言えません」
ア「A君もあの子と遭遇してたんだ」

A「まぁ、こっ酷くやられたけど。畜生・・・思い出しただけで悔しいぜ。絶対、服従させｔ「させて、どうするつもりか？」何でもありません」
フ「今、ドスケベな事を考えていた顔をしてたです」
タ「ほう・・・少し、表に出てもらうぞ、主よ」
A「ちょ！？、既に抜刀してるじゃん！？」
タイトが問答無用で斬りかかる。
もはや、外に出るまで待てないようだ。

ピンポーン・・・

すると、また誰かが訪れた。
ア（家主がいなけど、出た方がいいかな？）
アリアは取りあえず顔だけは出しておこうと思い、玄関へ行く。
ア「はい、どちら様ですか？」
玄関の扉を少し開けて顔だけを出す。
すると、そこには顔を隠した白いローブを被った者が3人ほどいた。
その者達はアリアを見ると何も言わずに接近してくる。
ア「？、あの、家主はいないんですけど・・・」
アリアの言葉を聞いても、なお近づいて来る。
そこには殺気も含まれており、アリアは何か恐怖を感じた。
？「ラギュラバル・アリアだな？」
ア「？、天界の方ですか？」
？「質問に答えよ。ラギュラバル・アリアか？」
ア「えっ？、あっ、ｈ「逃げろ！！、アリア！！」ッ！？」
突然、大きな声が聞こえたと同時に、空から巨大なレーザーがアリアの目の前に落ちた。
ア「きゃぁ！？」
アリアは間一髪で当たらなかったが、目の前にいた白いローブを来た者は直撃した。

立ちこめる煙の中、白いローブの者は平然と立っていた。
？「邪魔をするな」
そう言って、白いローブの者達は後ろを振り返る。
そこには、文夫率いる天界監視官の方々である。
ア「えっ!?、文夫さん!?。生きてたんだ・・・」
文夫を見て、アリアは安堵の息を零した。
文「話は後だ!!。アリア、出来るだけ遠くに逃げろ!!」
？「そうはさせん!!」
白いローブの一人がアリアに向かって手をかざす。
勇「させねえよ!!」
勇人が飛び掛かり、さっき出したレーザーを撃った。
これは勇人が破壊・消失・虚無の力を使った完全に消滅させるやべぇレーザーである。
しかし、白いローブの物は散り散りに避ける。
その隙に紗奈恵はアリアのもとへ駆け寄った。
紗「さぁ、早く逃げるのよ」
ア「で・・でも!!」
紗「でももかしこも無いの。セイクリッドがあなたの命を狙ってるんだから」
ア「えぇ!?。何で!?」
紗「逃げながら説明してあげるから、この空間に逃げるのよ」
レ「待て、話は聞かせてもらった。我々も共に行くぞ!!」
騒ぎにかけつけてきたレオ達がアリアとの行動を志望する。
紗「ええ。仲間は多い方がいいからね」
そう言って、紗奈恵は皆に空間に入るように促す。
アリアを追い、次々と空間へ入る中、一人だけ空間に入らなかった。
それは、文夫達の戦いを見ているAだった。
紗「あなた、どうしたの?」
A「いや、あの戦ってる人達に聞けば、高雅の事が分かるかもって・・・」

紗「まぁ」
紗奈恵は口を押さえて驚いていた。
普通の人間はあの戦いを見ただけで足が震え、腰を抜かす程の殺気が溢れている。
それを抑えるべく、紗奈恵が打ち消してはいるが、それでも怯えるぐらいはするはずだ。
なのに、Aは全くそれを感じず、友である高雅の事を思っていたのだ。
紗「そうね。でも、あなたもこの空間に入ってもらうわ」
A「俺もあっちで戦って、高雅の居場所を知りたい」
紗「残念ながら、高雅の居場所は私達にも分からないわ」
A「・・・そっか」
紗「その代わり、あなたはアリアを守ってくれないかしら?。あなたなら、きっと守れるわ」
A「まっかせてくだせぇ!!。俺には補正が掛かり、絶対に負けませんから!!」
Aはそう言って空間の中へ入った。
紗奈恵は一度、文夫とアイコンタクトを取って空間の中に入り、空間を無くした。
勇「どうやら、逃げれたようだな」
?「貴様ら、我々を裏切るつもりか?」
文「お待ちください。我々は他の解決方法を見出したいんです!!」
?「だから貴様らに討伐を任せた。しかし、結果は取り逃がし、最悪にもマリア様の子を連れ攫われてしまった。もはや一刻の猶予もないのだ」
文「それは承知の上です!!。ですが、マリア様はそのようなやり方を望んではいないはずです!!」
?「言ったはずだ。一刻の猶予もないと」
勇「俺達、セイクリッドの者が殺しで物事を解決するなんて、醜いやり方だな」

？「何とでも言うがいい。お前達が何を言おうが変わりはない」
文「だから、力尽くでも止めさせてもらいます」
？「愚かな奴らだ」
勇「そっちが愚かだ。このド腐れ上司が」
文夫と勇人は自分を信じ、自分より上の者に立ち向かった。

紗奈恵が創りだした空間を抜けると、そこは何もない雲の上だった。
ア「？、ここはどこ？」
紗「私の空間よ」
A「雲の上って乗れるのか？」
Aがしゃがみ込んで指の関節で軽く叩きながら言う。
叩いた所からコンコンと音が鳴り、まるで地面の様に硬かった。
紗「あら、それは雲じゃなくて、イメージの塊よ」
A「へー、そうだったのかー」
ア「・・・そうだ。紗奈恵さん、私の命が狙われていることについて教えてください」
紗「そうね、どこから話そうかしら？」
レ「では、我から聞こう。1ヶ月前の南極では何があったのだ？」
紗「その時は、私達がルシフェルの子供、名前はシリアって言うけど、そのこと激戦の末に負けてしまったのよ。それに、彼女は口にしたものを吸収する能力があるわ。それを利用して、私達の脳を食べてあなた達の居場所をつきとめようとしたけど、間一髪で記憶を抹消したのよ」
レ「成程。だが、脳を食べられてしまえば再生は不可能ではないか

？」
紗「そうね。素になる物が無ければ再生は使えないわね。だから、新しい脳を創ってもらったのよ」
フ「脳を創るです！？。それだと、記憶とかはどうするです！？」
紗「大丈夫よ。こうなることは想定内だから、前もって同じ脳を創っておいたのよ。後は誰かさんに体を再生してもらって、その脳を取り付けてもらったって訳」
ア「じゃあさ、私の命が狙われてるってのは？」
紗「簡単な事よ。あなたを殺せば高雅も死ぬからよ。契約は切られていないみたいだし、高雅なら虚無で切られるって訳でもないからね」
ア「そっか。『選別の飾り』があったね」
紗「上の者はそれであなたを殺そうとしたけど、私達は反対したのよ。マリア様がそれを望んでないから」
サ「では、今度は私が聞いてもいいかのぉ？」
ア「サミダレ？、もう大丈夫なの？」
サ「安心せよ。お主らのお陰でもう殆ど回復しておるのじゃ。それに、こうなった以上、いつまでも怯える訳にはいかないからのぉ。他人と話すことはできる」
ア「そっか。良かったぁ」
サミダレの回復に心から喜ぶアリア。
サミダレだけでなく、エクスも殆ど回復しきっていた。
紗「それで、話は何かしら？」
サ「そうじゃった。敵の目的は分かるのかのぉ？」
紗「ええ、分かっているわ。シリアは高雅のうちに潜むルシフェルの力を覚醒させ、高雅を闇に染まらせる事で天界を壊滅させる事よ」
ア「そんな！？。一刻も早く高雅を見つけて助けないと！！」
紗「それだけど、高雅の居場所の目星がついたわ」
ア「本当！？」
紗「本当よ。さっき天国に移動しようとしたのだけど行けないから、

あえて私の空間を創ったのよ。これがどういう事か分かるかしら？」
ア「え・・えっと・・・」
紗「あなたと高雅の距離は常に５００メートル以内。しかし、お互いが天界と現世の間ではそれが無効になる」
ア「そっか！！。私が天国に入れないなら、高雅との距離が５００メートル以上って事か！！」
紗「そう。つまり、高雅は天国のどこかにいるのよ」
エ「成程な。いっきに探す範囲が縮まったな」
蓮「それじゃ、こうがにいちゃんは見つかるの！？」
ロ「それが、時間の問題って訳だぜ」
紗「・・・・でも、こっちも時間の問題ね」
そう言って、紗奈恵が遠くを見ると、割れた空間の先に先程の白いローブの者達がいた。
紗「あなた達はとにかく逃げなさい。あいつらの相手は私がするわ。それから、A君、皆を守りなさい」
A「おう！！」
紗奈恵はそう言って腕をハンマーに変えて構え、逃げ道の空間を開いた。
Aは気前よく返事をし、皆を連れて空間の中へ入って行った。
紗「さて、時間稼ぎの時間よ！！」
紗奈恵は一人で上の者に立ち向かった。
自分のやっている事が間違っていないと信じ込みながら。

# 最悪の贈り物編　その4、本気

シリアを投げ飛ばした後、シリアが落ちて来る気配はなく、ただ待つのもなんだから高雅は爆睡していた。
自分の立場は理解してはいるが、完全に囚われの身がやる行動ではない。
シ「・・・・・・・・・いいいいいぃぁぁぁぁぁあああああああん」
そんな時、シリアが遂に落ちてきた。
どれだけ高い所から落ちてきたのか、シリアの落下速度は１００キロを超えている。
しかも、両手を広げながら高雅の真上に落ちて来ている。
シリアは抱きつこうとしているのだが、このままいけば、高雅の骨の保障はない。
高「Ｚｚｚ・・・・ん・・」
シ「ふぇ？」

ドゴーン！！！

高雅の寝がえりによって、シリアは地面に勢い良くぶつかって地下深くへ潜っていった。
ちなみに、高雅は本当に眠っているのだ。
間近くで大きな音が出たにも関わらず、高雅は目を覚まさない。
シ「うう・・・あうぅ・・もぉ」
シリアがふわふわと土塗(つちまみ)れな体を浮かせて戻って来た。
膨れっ面になりながら高雅を睨みつけるも、すぐに表情は和らいだ。
シ「・・・やっとぉ・・・一緒だねぇ」
シリアは高雅の背中にくっ付きながら横になった。
シ「お兄ちゃんの背中だぁ・・・暖かぁい」

余程疲れていたのか、安心しきったシリアはすぐに眠りについた。
その寝顔はとても幸せに満ちていた。

何もない世界。
ただ白い空間。
地平線すら区別つかない空間。
そこに一人の少女が泣いていた。
？「ひっく・・ぐす・・・」
響きもしない鳴き声。
誰も聞こえはしない掠(かす)れゆく声。
一人にされた少女は泣き続けた。
？「・・・ひっく・・おとうさぁん・・・えぐ・・」
？「何で泣いてるの？」
？「ふぇ？」
どこからとなく少年が現れ、少女に話しかけた。
？「・・ひぐ・・・だぁれぇ？」
？「僕？、ずっとここに住んでる者だよ。君は誰？」
し「・・・あたしぃ・・しりあぁ。あなたのおなまえはぁ？」
こ「えっと・・・こうがだよ」

こうして二人は出会った。
この何もない封印された場所で。
年を取る事もなく、二人はずっと一緒に過ごした。
笑う時も泣く時も寝る時も歩く時も喜ぶ時も・・・

次第に少女は願うようになった。

ずっと・・・このままでいられるように、と・・・

し「えへへぇ・・・こうがおにいちゃぁん♪」

こ「はいはい、よしよし」

少女はいつものように少年に甘え、頭を撫でてもらっていた。

少女も少年もお互いに飽きることはなく、これだけは欠かさず行(おこな)っていた。

し「おにちゃんのてぇ、いっつもやさしいねぇ」

こ「どこが優しいのか分からないよ」

し「～♪」

少女はただ満足げに、はにかむだけだった。

少年も自然と笑ってしまい、ただただ頭を撫でてやった。

そんな幸せな時間も永遠ではなかった。

こ「・・・!?、うわぁ!?」

し「へっ!?」

突然、少年が撫でるのを止めたかと思えば、宙に浮かされていた。

後ろには白いローブをきた者がいた。

し「お・・・おにいちゃぁん!?」

少女はどういう事か分からず、白いローブの者は振り返ると空間を捻じ曲げてどこかへ行こうとする。

少女は必死になって止めようとするも、表情を変えることもなく蹴り飛ばした。

そして、白いローブの者は少年を連れていなくなった。

し「そんなぁ・・・おにいちゃぁん・・・」

また一人という振り出しに戻された。

少女は絶望し、涙すら流せなかった。

高「・・・・・・・・・リアルな夢だったな」
目が覚めた高雅は寝たまま背伸びをしながら夢の内容を思い出す。
高「？」
ふと背中に温もりを感じ、首をひねって後ろを見ると、シリアがくっ付いて眠っていた。
規則正しい寝息で幸せそうに眠っているのを見て、起こすのに罪悪感を感じていた。
高「・・・・二度寝するか」
高雅は特にやることが無いのでまた眠ろうとした。
シ「むにゃ・・おにぃ・・・ちゃぁん・・・」
高「寝言かよ。鬱陶しくて眠れね」
シ「んにゅ・・・・ずっと・・一緒ぉ・・・・・」
シリアは無意識に高雅の体に腕を回した。
高雅は別に退ける事もなく、そのまま眠ろうとした。
高（こいつ・・・何がしたいんだろうな・・・）
自分を覚醒させるとか言っていたが、特に何もしてこない。
実は何かされているのではないかと思うが、自分の身に何も感じない。
高（・・・まぁ、いいや。寝よ）
結局、深く追求する訳もなく、ただ眠たいので寝た。

一方、セイクリッドの者から逃げているアリア達は逃げていた。
ア「そのまんま過ぎないかなぁ？」
レ「アリア殿、足を止める暇などないぞ」
ア「だけど、私達はどこに向かってるの？」
フ「どこかです！！」
ア「そんなこと言われても・・・」
アリアは苦笑いして頬を引っ掻いた。
すると、Ａも立ち止り、突然振り返る。
ア「？、どうしたの、Ａ君？」
Ａ「なぁ、あの人？達ってさぁ、結構強いんだよな」
ア「まぁ、私達よりも強いね」
Ａ「じゃあ、逃げても無駄じゃね？」
ア「・・・・・・・・・・」
エ「確かに、それもそうだな」
サ「ならば真っ向勝負をするつもりか、お主は？」
Ａ「それもありじゃね？」
ア「ちょっ！？、いくらなんでも危険すぎるよ！！」
Ａ「いや、俺はマジだぜ。本気（ほんき）と書いて本気（マジ）だぜ」
Ａは肩を回しながらやる気を見せる。
ア「それでもダメ！！。敵の強さは未知数だよ！！」
Ａ「などと言っている内に未知数が接近中」
ア「えっ！？」
Ａが振り向き、空を見たげると風を斬り裂きながらペーちゃんが接近していた。
ペーちゃんはアリア達と少し離れた所に着地し、睨みつける。
蓮「ペーちゃんだ！！」

ロ「おおー、ほんとだー」
蓮田とログナが気付いて手を振るも、何の変化も現さない。
A「どうやら、殺気はこっちにぶつけてるみたいだ」
ア「まさか・・・」
ペーちゃんは前足を大きく上げて鳴き、地面に思いっきり叩きつけた。
それだけで大地震が発生し、アリア達の場所に地割れが起きた。
蓮「うわぁ!?」
ロ「蓮田!?」
A「とおぅ!!」
ログナは蓮田を抱えて飛行し、他の者は驚く様子もなく飛び上がった。
Aだけは高く飛び上がってタイトを剣に変え、ペーちゃんに切りかかろうとしていた。
A「一刀両断!!」
ペーちゃんは軽く後ろに跳ね、Aの攻撃を避ける。
Aはすかさず前に踏み込み、連続で斬りかかる。
ア「待って、A君!!。その馬は仲間だよ!!」
A「いや、あからさまに攻撃して来ただろ。それに、あの白いローブどもと同じ殺気だ」
ア「じゃあ・・・ペーちゃんがセイクリッドの者って言うの!?」
A「確率は2000%だ」
ア「じゃあ、ペーちゃんは私を・・・」
A「安心しろ、こいつは俺がぶっ殺す。前に蹴られて樹海に送られた恨みを晴らしてやる」
ア「よく帰って来れたね」
A「こまけぇこたぁどぅでもいいんだよ!!。それより、今度は本気で相手になってやる」
そう言うと、Aは刀の先端をペーちゃんに向け、力を込め始める。
そして、一度深呼吸をしてから叫んだ。

A「卍・か・・・じゃなくて、真の契約、発動！！」
何を言おうとしたのか知らない事にしておき、Aは真の契約を発動した。
Aの立っていた地面が粉々に割れ、それが砂塵となってAを隠す。
あまりの突風にアリア達は目を隠した。
ア「ま・・真の契約！？。A君も発動出来たの！？」
レ「しかし、あれは自分の何かを捧げなければならない。物によってはA殿は死ぬぞ」
レオの言葉に、無性に心配してしまうアリア。
砂塵が納まった時、Aは赤い刀身の刀を握っていた。
A「この前は手加減してたが、今回の俺は本気だぜ
Aはニヤリと余裕の笑みを見せ、刀の峰を肩に乗せる。
その瞬間、Aの服が着火した。
A「おあちゃあああああああ！？。忘れてたあああああああ！！」
Aは慌てて火を消すも、既に肩が露出していた。
非常にかっこ悪い所を見せてしまった。
ア「A君、真の契約って・・A君は何を捧げてるの！？」
アリアが単刀直入に言う。
後ろでは蓮田は意味が分からず、首を傾げていた。
A「俺の捧げる物は記憶だ。もちろん、全部じゃない。一回使う度に1年分の記憶を捧げてる」
ア「そんな・・・いつの記憶が無くなったの！？」
A「う～ん・・・はっきり言って、何も無くなってないんだよなぁ、これが」
エ「成程。元々忘れてしまった記憶を消されたのだろう。きっと、2歳の頃とかさ」
A「まぁ、そんな所じゃね？」
自分の記憶を適当に考えているAの姿を見て、特に問題は無いだろうと判断したアリア。
A「とにかく、こいつは俺に任せて、お前らは先に逃げてろって」

ア「でも・・・」
A「狙われてるアリアがいたら邪魔になるだろ。って、高雅なら言うかもな」
ア「ッ！？」
高雅という言葉に胸を打たれる。
高雅の事を考えた瞬間、自分のやるべきことを思いついた。
それは、争っていないで早く高雅を助ける事だ。
ア「・・・分かった。A君に任せるよ」
A「おう！！」
サ「後で追いつくのじゃぞ」
アリア達はペーちゃんをAに任せ、再び逃げ始めた。
しかし、蓮田とログナだけは足を動かさなかった。
ア「？、レンタ君？」
蓮「僕も残るよ」
フ「何を言ってるです！？。回復しかできないのに、残っても足手まといです！！」
蓮「でも、ペーちゃんは僕が面倒を見てるんだ！！。だから、ちゃんと話しあってみたいんだよ！！」
ア「でも・・・」
A「いいさ。回復役がいるなら、こっちも無茶が出来るもんだぜ」
ロ「んじゃ、俺っち達はエイっちにでも加勢するさ」
ア「・・・じゃあ、任せるよ。絶対、後で追いついてよ！！」
アリア達はA達を置いて逃げて行った。
A「・・・あのセリフ、死亡フラグだろ」
ロ「まっ、蓮田がフラグブレイカーにでもなってくれるさ」
蓮「？、何の話？」
蓮田が尋ねるも、Aとログナは笑ってごまかすだけだった。
A「・・・まぁ、取りあえず、あの待ってくれているペガサスを倒すか」
Aは隠していた殺気を放ち、目付きを変える。

それにつられて蓮田とログナも本気になった。
A「今こそ、裏で修行していた成果を出す時だな」
ロ「俺っち達はペーちゃんに近づいて話してみる。その隙を作ってくれないか？」
A「任せろ！！」
Aは活性の力で瞬間で移動した。
そして、ペーちゃんとAとの戦いが始まった。

## 最悪の贈り物編　その5、義務（前書き）

遂に自宅学習が始まり、暇と思いきやバイトを始め、励む毎日。

学校より忙しいかも・・・さすが、仕事だ。

それでも、５日投稿（もしくは４日投稿）を守る気です。

# 最悪の贈り物編　その5、義務

Aとペーちゃんが睨みあう中、先に動いたのはAの方だった。
A「先手必勝だあああああああ」
活性を利用したダッシュで瞬く間に距離を詰め、一閃を繰り出す。
しかし、ペーちゃんは冷静に前足の蹄（ひづめ）で受け止めた。
A「おっと、俺の剣は防御不能だぜ」
ペ「ッ！？」
ペーちゃんは焦ったようにAの刀を弾き飛ばそうとして距離を置く。
だが、Aの刀は弾き飛ばすことはできなかったが、距離を置くことに成功した。
そして、自分の蹄を見ると触れていた部分が溶けていた。
ペ（これは、活性による熱の増幅ですね。しかし、先程の速さといい、人間が力をここまで扱うとは・・・）
正直、ペーちゃんはAを見くびっていた。
理由はいたって簡単、Aはただの人間だからだ。
しかし、さっきの実力を見て、それは覆（くつがえ）されようとしていた。
ペ（しかし、私は静寂や虚無なら使える。これで打ち消すことができれば無力化できる）
A「ボケッとするなよ」
Aは既にペーちゃんの後ろに回り込んでいた。
しかし、ペーちゃんは焦ることなく、後ろ脚で応戦しようとしていた。
A「おっと」
それを簡単に反応し、刀で受け止めた。
A「また溶けるぜ」
ペ（無駄です。今度は静寂と虚無の両方の力を与えてます。溶けることなど・・・ッ！？）
ペーちゃんの顔が一気に苦しむ。

あろうことか、Aは静寂と虚無の両方の力を持ってしても蹄を溶かしていたのだ。
ペ（くっ・・バカな!?）
A「そのまま貫通だ!!」
油断していたペーちゃんは最早、回避することは不可能。
徐々に斬り込んでゆく刀に成す術もない。
ロ「待てぇい!!」
A「ぐげっ!?」
どういうことなのか、ログナが突然Aの首を絞めて止めさせた。
ロ「やり過ぎだ!!。俺っちの大切な友達を傷付け過ぎだっての!!」
A「ちょ・・おま・・・くる・・・・し・・」
ペ（なんですか、この方々は!?。しかし、今のうちに・・!!）
ペーちゃんは斬られている足を抜い反撃しようとした。
しかし、ずっと後ろに気を取られていた所為か、前に誰かいるのに気付かなかった。
蓮「ペーちゃん、聞こえるよね」
ペ（!?、レンタさん!?）
いつの間にか蓮田がペーちゃんの頭に近づいていた。
蓮「もうやめようよ。友達同士で争ってもダメだよ」
ペ（レンタさん、すみません。私には逆らえない方がいます。その方の為ならば、私は誰であろうと戦う覚悟はできていま・・）
蓮「バカっ!!!!!!!」

ロ「なっ!?」
A「うえ!?」
蓮田がペーちゃんに思いっきり怒鳴った。
人に思いっきり怒るような性格じゃない蓮田が始めて、それもかなりの大声で怒鳴った。

そして、蓮田は泣きながら怒鳴り続けた。
蓮「そんな悲しいこと言っちゃダメだよ!!。どんな理由があったって、友達を傷付けるなんて絶対ダメなんだよ!!」
A（お・・・俺は別にあのペガサスとは友達じゃないし・・・ノーカンノーカン）
ロ（俺っち、つい最近、コウガっちにバラバラにされたよな・・・それ、どうなんだろう？）
外野がふと思っていたが、それはあえて無視しましょう。
ペ（レンタさん・・・）
蓮「僕は嫌だよ・・・ぺーちゃんが傷付くとこを見るのが・・・折角、友達になれたのに・・」
ペ（だけど・・・やはり、逆らえません・・）
蓮「そんな人、こうが兄ちゃんが倒すから!!。絶対、こうが兄ちゃんがどうにかしてくれるから!!」
A「おおっと、この主人公である俺も忘れられたらこまるぜ。出来る限りは協力するぜ」
ロ「他力本願かい・・・まぁ、ろくに戦えないのは事実だしな、エイっちやコウガっちに任せたらいいんじゃね？」
ペ（皆さん・・・）
蓮「ほら、皆も協力してくれるから、戦うのは止めようよ」
ペ（レンタさん達はあの方の強さを知らないからそんなことが言えるのです。あの方は私よりもずっと強いですし・・・）
蓮「だから、僕らが協力するんだよ。一人でダメなら、皆一緒に戦うんだよ」
ロ「要するに、リンチだな」
A「言い方が悪すぎるだろ」
ロ「カタカナにすればカッコイイだろ」
A「バーカ。それだったら、『絆の力』ってシンプルでカッコイイだろ」
ロ「リンチだ!!」

A「絆の力だ！！」
何故かお互いに一歩も譲らず、睨みあう。
別にこれと言って特段にいいわけでもないが。
？「何をしている、天獣よ！！」
ペ「ッ！？」
蓮・ロ・A「？」
振り向くと、そこには白いローブを来た者達が並んでいた。
どうやら、もう追いついて来たようだ。
？「そいつらもアリア抹殺の邪魔する者ならば、迷わずに殺れ！！。
天界の命運の問題だぞ！！」
蓮「お前らだなー、僕の友達を困らせているのは！！」
蓮田が強がって一歩前に出た。
しかし、白いローブの者達は何の動きも見せなかった。
？「どうした？。早くそいつらを殺れ。犠牲は最小限に抑えるのだ」
ペ（・・・・・・・・・・）
蓮「うるさい！！。友達に命令するな！！」
？「何だこいつ？。先に始末してやる」
ペ「ッ！？」
白いローブの一人が蓮田に手をかざし、力を込める。
それを見たペーちゃんが突然駆けだした。
？「天界存続の犠牲となれ、人間」
蓮「！？」
かざした手に白い光が集束しだす。
ペ（まずい、あれは虚無の光だ。あんなものを受けたら一溜まりもない）
蓮「な・・何？」
集束した光が蓮田に放たれた。
それも、かなりの速さで蓮田では反応しきれない。
ロ「蓮田！！」
A「ちびすけ！！」

ログナとAは反応できるが、距離があって蓮田を助ける事が出来ない。
ただ叫ぶしかできなかった。

カッ！！

A・ロ「うおっ、まぶしっ！？」
突然、光が破裂してフラッシュが起こった。
何が起こったかは二人からは見えなかった。
ただ、二人の頬には飛び散った血が付いていた。
やがて光が晴れて視界が回復する。
ロ「おい・・」
A「なっ・・・あいつ！？」
そこには、蓮田を庇ってペーちゃんの体に穴が開いていた。
ペーちゃんは苦痛に耐えられなくなって倒れてしまった。
蓮「え・・ペー・・・ちゃん？」
蓮田が何があったのか分からず、目を見開いてただ立ちつくしていた。
ペーちゃんは既に息をしていなかった。
ロ「蓮田！！。今、ペーちゃんを再生させてやる！！」
ログナはペーちゃんに再生の力を使うも、傷は全く癒えない。
虚無を使っている為、生半可な力は全て打ち消されてしまうのだ。
？「まさか・・裏切られるとは・・・・バカな奴・・・」
蓮「許さない・・・」
？「？、こいつ・・・」
蓮「ログナ・・・こいつ、倒すよ」
ロ「イエス、マイロード・・・」
ふざけた返事をしているが、目は至って本気だ。
二人とも、怒りに満ち溢れ、目の前の敵しか見えてなかった。
A「あれ、あいつら・・・何かやべぇ」

タ「殺気が拙者達を越えておる」
A「んー・・・否定できない。だけど、あいつらって再生しかできないよな？」
タ「確かにそうだ。しかし、何かを感じる。恐ろしい何かを」
A「取りあえず、ほっとくのもあれだし、落ち着けさせるか」
Aは蓮田に近づいて行く。
一歩一歩進む度に体全体に恐怖が襲っていた。
A「おーい、ちびすけー。恐いぞー」
蓮「Aにいちゃん、こいつを倒すよ」
ロ「協力してくれ、エイっち」
A「分かってる。だけど、落ち着いてくれ。敵は未知数のやばい奴ら、勝てる道理なんてないぞ」
蓮「だったら、Aにいちゃん一人で逃げててよ。僕は絶対にこいつを許さない」
A「そしたらアリアに何言われるか分からない。大体、主人公が仲間を置いて逃げるか？」
ロ「そんじゃ、殺るぞ」
結局、落ち着けることは出来ず、このまま戦わせることにした。
？「ふん、私一人でいい。お前らは早く追え」
白いローブの者は一人だけ残して他の者は消えていった。
A「やべ、あいつら止めねえと」
蓮「Aにいちゃん、行くよ！！」
A「うえっ！？、ちょ！？」
蓮田はAを無視して目の前の的に立ち向かう。
ログナは弓になっていた。
A「ちょ！？、弓なのに接近！？」
タ「考えるのは後だ、主よ。援護するぞ」
蓮田の行動に理解できずも、自分も遅れを取らずに後を追う。
Aは活性を使っている為、すぐに追いついた。
A「なあ、どうやって戦うつもりだ？」

蓮「知らない」
A「無鉄砲かよ」
蓮「とにかく、あいつを倒す！！。ぺーちゃんの仇を取るんだ！！」
A「分かった、分かったから落ち着け。れれれ冷静になれ」
？「何を話しているか知らないが、貴様らも死に値する。今さら許しをもらえると思うな」
白いローブの者が被っていたフードを取った。
顔は厳(いか)つく、いたるところ傷があり、片目が傷によって塞がれていた。
そして、目を見た瞬間に空気が揺れた。
ゴ「覚悟しろ。セイクリッド最高指揮官、ゴドが直々（じきじき）に裁いてやる。感謝しろ、人間共」
そう言い放ち、ゴドは隠していた力を解放し、それをオーラにして現した。
それでも怯まずにAと蓮田は立ち向かって行った。

高「何でだよ・・・」
高雅も蓮田達の様子を別の場所から見ていた。
シリアに頼んで現世の様子を見せてくれているのだ。
高「ふざけんなよ・・・」
シ「お兄ちゃぁん、どうしたのぉ？」
高「あのセイクリッド野郎を殺してくる。連れてけ」
シ「ダメだよぉ！！。せっかく一緒になれたのにぃ」

高「じゃあ、テメーも来い。それならいいだろ」
シ「ん～・・・あたしが行ってくるよぉ。もちろぉんお兄ちゃんの友達には手を出さないよぉ」
高「俺がこの手で潰したいんだ。腐った考えをするセイクリッド共を」
シ「でもぉ・・・じゃぁ、あたしと一緒に行こぉ？」
高「・・・まぁ、いいだろう。早く空間を開けてくれ」
どこか話が戻ってきていると思ったが、今は早く現世に生きたいため、余計なことは口にしなかった。
シ「はぁい・・・ふふっ♪」
何故か突然笑い出すシリア。
その不可解な光景に高雅は首を傾げてシリアを見ていた。
高「何が可笑しい？」
シ「やっぱりぃ、お兄ちゃんは優しいねぇ」
高「バカ、これは優しさじゃない。責任だ」
シ「せきにぃん？」
高雅の不思議な言葉にシリアは首を傾げる。
高「あいつらは俺の所為でこんな目に遭ってるんだ。だったら、俺が責任もって守らなければならない」
シ「そっかぁ。じゃぁ、あたしもお兄ちゃんを守るねぇ」
高「ふざけんな。ガキに守られる程弱くねぇよ」
シ「えへへぇ、あたしは強いよぉ」
シリアがどこからともなく出した銃と槍を見せびらかせながら言う。
高「そうかい。とにかく、早く空間を繋げてくれ」
シ「分かったぁ。行っくよぉ♪」
シリアが空間を開けた途端に高雅は即行で移動した。
シ「あぁ、待ってよぉ！！」
シリアも高雅に遅れないように驚くことなく後を追った。

## 最悪の贈り物編　その6、染まりし悪（前書き）

今回は本気でグロを書いたよ。
本気といっても、この程度の小説を書く作者だからあんまり大したことないかも。

一応、本文の途中で警告を出します。

無理になったら飛ばしてください。

何があったかは最後に軽く説明させてますから。

# 最悪の贈り物編　その6、染まりし悪

刀を持ったAと弓を持った蓮田がゴドに接近していた。
蓮田は弓を大きく振り上げ、ゴドに思いっきり振り下ろした。
A「ちょ！？、弓の使い方違うだろ！！」
Aはツッコミながらも蓮田の邪魔にならないように剣を振るう。
ゴ「貴様らでは私に触れることすら叶わん」
A「勝手に吠え面見せてろ」
蓮田による鈍器攻撃、Aによる斬撃。
しかし、ゴドは避ける意思など全く見受けられなかった。
防ごうともせずに、ただ目を閉じて嘲笑(あざわら)っているだけだ。
A「もらった！！」
完全に敵を捕え、避けることも防ぐこともできない。
蓮田とAの攻撃はそれぞれゴドの横腹をついた。
しかし、攻撃した感触が無く、すり抜けていたのだ。
A「何！？」
蓮「すり抜けちゃった！？」
ゴ「すり抜けてなどない。ちゃんと避けてやったさ。それと、攻撃もな」
蓮「へ・・うぐ！？」
突然、横腹を抑えて蹲りだす蓮田。
A「ちびすけ！？・・・あれ？」
それを見たAが駆け寄ろうとした瞬間、足がもたついて転んでしまう。
気付くとAの横腹にエグイ傷を負っていた。
ゴ「貴様らが私に与えようとした傷だ。しかと噛み締めろ」
A「ちっ、洒落た芸をしやがって。ムカつく奴だな」
ゴ「私は神と同じ位に存在する者。貴様らでは到底勝つことはできん」

A「構わねえ！！」
Aが連続で斬撃を繰り出す。
全てゴドの体を捕えていているが全てすり抜けているだけ。
そして、ゴドの斬った場所と同じ所にAの体が斬られていた。
ゴドは全然動いた様子は見られない。
ゴ「どうした？。敵を手早く倒すなら、心臓と頭を狙うのが普通のはずだ」
A「うるせえ！！」
ゴドの挑発的態度に怒りを見せ始めている。
次第に剣の腕が荒れ始め、Aの傷が少しばかり荒くなる。
そして、Aは力尽きて倒れてしまった。
ゴ「これが力の差だ。私に刃物を向けた事を後悔するがよい」
ゴドが中指を曲げて親指で支える。
いわゆる、デコピンの構えである。

ピシッ

A「いてっ・・？」
至って普通のデコピンの痛さ。
しかし、それは束の間の休息にすぎなかった。
A「え・・あぐ・・うああ・あああああああ」
すると、Aの首が次第に後ろにまがってゆく。
Aが意図的にやっている訳でもない。
むしろ、Aは活性の力で首を止めようとしているのだ。
ゴ「無駄だ。首は取れるまで傾き続ける。苦しみながら死ぬのだな」
A「ち・・やめ・・・・あがあああああああ」
Aの首が次第に限界を越し、皮膚が裂け始めていた。
蓮「や・・やめろーーー！！」
蓮田が痛みに耐えながらもAの加勢に行く。
相変わらず弓で殴ろうと間違った使い方をしているが。

ゴ「私は子供だからと言って罪を軽くするほど甘くはない。貴様も同じ刑で死ね」
ゴドはAにやったのと同じように指を構える。
蓮田は無我夢中で突っ込んでいる為、何も意識してない。
蓮「わあああああああああ・・・うっ!?」
ゴ「？」
不自然に蓮田が倒れてしまった。
ゴ「先程の傷・・・いや・・・どうやら、本題が現れたようだな」
ゴドは新たな殺気にすぐに理解し、嘲笑っていた。
高「誰が本題だ、誰が？」
真打登場の瞬間である。
高雅は倒れかけた蓮田を抱えながら睨みつけていた。
実は、蓮田を気絶させたのも高雅自身である。
シ「ほらぁ、しっかりぃ、お兄ちゃんのお友達さぁん」
A「タオル一枚の幼女が支えてる!?。何と言う至福の時!!」
シリアはAの首を片手で元に戻していた。
ゴ「今さら何のようだ?。まさか、友達を助けに来たか？」
高「気に食わねえが、そのまさかだ。そちらさんの低脳の事情に巻き込む訳にはいかないからな」
ゴ「低脳?。私達は完璧な策略を立てておる」
高「ほー、関係の無い奴らを殺そうとして・・・腐ってやがるんだよ!!!」
高雅の殺気が急激に跳ねあがった。
シ「ふわぁ、中々凄ぉい」
A「あ・・あれで中々？」
Aはかなりビビッているが、シリアはニコニコしていた。
高雅はセイクリッドの力を込め、殴りに掛かった。
ゴ「ふ・・・無駄なこと」
Aと同じように全く動こうとしない。
高雅はそれでも構わず思いっきり殴るかと思いきや、寸止めで攻撃

を止めた。
高「俺がそんなくだらないお遊びに付き合うと思ったか？」
ゴ「何！？」
ゴドが初めて焦りを見せた。
高「シリア、あれを貸せ」
シ「はぁい」
シリアはそこら辺の木の枝でＡの首を支え、高雅に駆け寄って槍を渡した。
ちなみに、木の枝はシリアの活性の力が宿って折れはしない。
Ａ「ちょ！？、何その活性！？。強過ぎだろ！？」
Ａがそんな事を言うも、高雅は全くの無視である。
高雅は槍をゴドに刺そうとする。
すると、今まで動こうとしなかったゴドが血相を変えて避けた。
高「ほらほら、どうしたどうした？」
高雅が連続で突きを繰り出す。
それを必死で避けるゴドの姿にＡはハテナマークを浮かべていた。
Ａ「何で！？。ただの槍だよな！？」
シ「ん～、違うよぉ」
Ａ「はい？」
シ「あのねぇ、あのお偉いさんはねぇ、夢幻と変換を使ってたのぉ」
Ａ「はぁ？」
シ「自分が傷ついた所を相手に変換して本物は夢幻を使って逃げてたのぉ」
Ａ「それで？」
シ「あの槍はぁ、力を吸収しちゃうのぉ。だからぁ、刺さっちゃったらすぐに息絶えるのぉ」
Ａ「マジすか！？」
シ「マジだよぉ」
シリアのおっとりとした説明にリアクションを隠せないＡだった。
高「そう言う事だ、見習い手品師さん」

ゴ「ふん、私が一つしか能がないと思えるか？」
高「思わないからさっさと死ね！！」
高雅の鋭い一撃を避けたゴドは後ろに大きく飛躍して距離を取った。
高雅はすぐに接近して距離を縮めるも、ゴドはさらにさらにと後ろへ逃げ続けた。
ゴ（この程度だろう・・・）
ゴドはある程度距離を取り終え、両手に白い光を収束し始めた。
ペガサスに当てた虚無の光である。
それも、全身全霊全力全開の力を溜めていた。
高「ほぉ、莫大な力を吸収させてパンクさせる気か」
ゴ「中々の洞察力だ。だが、分かったとて、どうすることもできん」
ゴドは白い光を高雅に向けて放った。
余程の力が入っているのか、光は巨大で避けようにも避けることはできない。
シ「お兄ちゃん、半分は私が食べるよ」
シリアが高雅の隣に現れ、すぐさま作戦を伝える。
高雅は何も返事を返さずに槍を光に突き刺した。
黒い電撃が辺りを破壊し、シリアは綿飴（わたあめ）の様に千切っては食べ、千切っては食べていた。
本当に甘いのか、シリアの表情はとても満足げに食べていた。
高「ふっ、良く噛んでから飲み込めよ」
シ「はぁい♪。あむ・・・もぐもぐ・・・」
見てて微笑ましかったのか、高雅はつい、口に出してしまった。
光は二つの暴食によって呆気なく消えてしまった。
しかし、槍は吸いきれずに粉々に砕け散ってしまった。
シ「ごちそうさまでしたぁ♪」
ゴドは平然と立っている二人を見て、驚きを隠せなかった。
それが恐怖と変わり、次第に体が震え、動けなくなっていた。
ゴ「ば・・バカな。私の虚無を食い尽したと！？」
高「テメー、セイクリッドではかなりのお偉いさんだよな？。だっ

たら、今すぐにバカな作戦を止めさせろ」
ゴ「ふん、悪の命令になどに従うものか」
高「誰が悪だ!!。お前らの行動の方がよっぽど悪だ!!」
ゴ「貴様、どうやら自覚してないようだから教えてやるが、お前のセイクリッドはほぼ消えている」
高「何!?」
ゴ「貴様はあの少女と共にいる事で内なるルシフェルの力が増幅しておる。いずれ悪に染まり、この世を破滅させる」
高「そんなんだったら、俺を殺しに来いよ!!。これ以上関係の無い奴らを巻き込むな!!」
ゴ「一番楽な手を使って何が悪い?」
高「ッ!!、この野郎!!」
高雅の怒りは完全に頂点に達した。
高雅はルシフェルの力を込め、ゴドの顔面を思いっきり殴った。
先程の虚無でゴドは力尽き、何もできないのだ。
高「覚悟しろ!!。死にたいぐらい恐怖に染め上げてやる!!」
シ「お手伝いしまぁす」

この先、グロ注意。
でも、萌えもあったりして・・・?
無理になったら、一番下まで飛ばしてください。

高雅はゴドの腕を掴むと力いっぱい引き千切った。
さらに、ゴドが叫ぼうとした口に蹴りを入れ、何本もの歯を折る。
シリアは死なないようにゴドの生命力をかなり活性させていた。

さらに、片方の目を指で貫き、中をほじくり回した。
シ「よいしょっとぉ」
高雅が上半身を攻撃している間にシリアは足をもぎ取っていた。
もぎ取った腕や脚はもちろん、シリアの胃袋に収められている。
高「苦しいか?。そりゃ、苦しいだろうな。痛みの麻痺なんてさせないしな!!」
高雅は次に腹に手を刺し、内臓を潰し始めた。
胃、食道、肝臓、胆のう、すい臓、小腸、大腸と次々潰してゆく。
それでも死なないゴドは意識すら消すことも許されず、ただただ痛みを味わうだけだった。
A「おい!!、やり過ぎだ!!。いい加減に止めとけって!!」
見かねたAが高雅を止めに掛かった。
しかし、目の前にシリアが立ち塞ぎ、自分の身を包むタオルを掴んで紅潮した顔でいった。
シ「あたしぃ、お兄ちゃんの邪魔しなかったらぁ・・・好きなことさせてあげるぅ／／／」
A「・・・・・・・ゴバァッ!?」
Aは吐血して瞬時の貧血で倒れた。
シ「ちょろいちょろぉい♪」
Aの邪魔を阻止したシリアは再び拷問の再開をした。
しかし、既にゴドの体はどこも傷付ける場所など残っていなかった。
それでも、ゴドの意識はしっかりとあり、高雅の目を見ていた。
高「死にたいか?。そろそろ俺も飽きてきたんだ。死なせてやるよ」
シ「ワクワクぅ」
高「・・・食わせんぞ」
シ「ガァン・・・・」
期待の目で見ていたシリアを一気にどん底に突き落とした。
高雅はルシフェルの力を最大に発揮し、そのプレッシャーで体丸ごと潰そうとした。
シリアは普通に立っていられ、Aはシリアの活性で潰れなくしてあ

る。
ゴドの体が徐々に平たくなり、そして・・・
グジャァ！！
ただの肉片と化した。
高「あー、スッキリした」
シ「食べたかったぁ・・・」
高「はいはい、いい加減にそのカニバリズムを止めろ。普通の物を食え」
シ「じゃぁ、人間？」
高「お前の普通は人間かよ・・・」
改めて、高雅はシリアの食の違いに呆れ果てた。
シ「それじゃ、もう帰ろう？。血、いっぱい浴びちゃったからぁ、早く洗いたぁい」
高「じゃあ、繋げてくれ。後、Ａと蓮田とログナを皆のもとに送ってくれ」
シ「はぁい。えっと・・・ここかなぁ？」
シリアはＡ達の足下に空間を開き、どこかへ送っていった。
その後、自分達の変える場所へと空間を繋げ、高雅達は消えて行った。
★オマケ★

飛ばした人用の説明。
ロ「あ・・ありのまま起こった事を話すぜ。突然、コウガっちが現れたかと思うと変な少女と一緒で敵を残酷に殺したんだ。俺っちは余りの事に震えて声すら出せなかった。何を言っているのか俺っちも分からねえが、あれは（略）」
以上です。

# 最悪の贈り物編　その7、無力

A達を置いて逃げていたアリア達は近くにあった川の辺りで休んでいた。
流石に自分よりも強い者から逃げるとなると体がうまく動かないのか疲労がいつもより大きかった。
その所為もあって川の辺りで休んでいたのだ。
ア「皆、まだ走れる？」
フ「ボクは飛んでるから余裕です」
レ「問題ない」
エ「大丈夫さ」
サ「平気じゃ」
ア「そっか・・・なんか、ゴメンね。巻き込んじゃって」
フ「今さら水臭いです。大体、既に何回も巻き込んでるです」
ア「そうだけど、今回は何だか不安で・・・〈バシャッ〉キャッ！？」
突然、フィーラがアリアの顔面に川の水を掛けた。
フ「落ち込んじゃダメです。コウガ様に会わせる顔が無くなるです」
ア「あはは、そうだね。それじゃ、また出発しよっか？」
アリアは顔を手で拭(ぬぐ)って立ち上がり、先に行こうと歩きだした。
遅れて他の三人も立ち上がってアリアの後ろをついて行った。
しかし、アリアは突然尻もちをついた。
目の前には壁なんて物は無い勝ったが、何かにぶつかったかのように倒れたのだ。
レ「？、どうしたのだ、アリア殿？」
ア「いや、何だか後ろに引っ張られて・・・・」
フ「どういうことです？」
エ「まさか、もう追手が来たか！？」
サ「大丈夫じゃ、殺気はないぞ」

ア「・・・・・いや、あるよ」
アリアが振り向き、遠くを見つめる。
それは警戒している訳ではなかった。
レ「何、既に奴らが！？」
ア「違う。この感じ・・・コウガだ！！」
アリアはそう言った瞬間、皆を置いて構わずに逆に走り出した。
レ「そうか。アリア殿はコウガ殿から５００メートル以内にいなければならない」
エ「成程。だから、アリア君はこの先に行けなかったのか」
サ「だが、このまま引き返すと奴らに合うのじゃないかのぉ？」
フ「それはやばいです！！。早くアリア様を止めるです」
フィーラ達も慌ててアリアの後を追おうとする。
しかし、アリアとフィーラ達との間に二人の白いローブの者が割り込んだ。
アリアはそのことに気付かずに、ただ只管（ひたすら）に走っていた。
フ「あみゅ！？」
レ「くっ、既にここまで来てたか！！」
白いローブの者は首をアリアの方に軽く振ると、もう一人がアリアを追いかけて行った。
エ「しまった。アリア君を一人にさせるのは危ないぞ」
サ「じゃが、こいつは素直に通してくれそうにはないようじゃ」
白いローブの者は顔を隠していたフードを取った。
そこには人の顔など無く、機械で作られた顔があった。
レ「何だ！？。セイクリッドにはこのような生物もいるのか！？」
エ「しかし、生物独特の気が感じらない」
？「ピー・ガピー・・・ニンム　スイコウ。ナイヨウ　カクニン」
突然、謎のロボットが独り言のように喋り出した。
？「アリア　マッサツ、ウエ　ノ　ヤクメ　ニ　ヘンコウ。ゲンザイ　ノ　ニンム、アリア　ト　ソノ　イチミ　ノ　ゴウリュウ　ヨソシ」

サ「どうやら、邪魔する気らしいのぉ」
レ「こちらは４人だ。一人ぐらいは抜けられるだろう」
フ「じゃあ、ボクが夢幻を見せるです。その隙に誰かが抜けるです」
レ「では、我が行く」
エ「よし、僕らは援護をする」
サ「任せるのじゃ」
エクスとサミダレはロボを挟んで二手に分かれる。
？「ピー・・リョウシャ　コウゲキ　ケハイ　ナシ。ターゲット　エデン　ノ　モノ」
ロボが呟いた瞬間、ロボットは一瞬で消えた。
そして、フィーラの前に現れた途端、口から大量のコードを吐きだし、フィーラの首に巻き付けた。
その間、僅か０，１秒。
フ「・・わっ・・みゅみゅ！？」
？「エデン、サイテイ　ソクシ　デンアツ、１２マン４６００ボルト。サイコウ　シュツリョク、７０００マン　ボルト。マッサツカノウ」
レ「なっ！？、いつの間に」
エ「は・・早い！？」
？「ヒトジチヨウ　ノ　タメ、１２マンボルト　ニ　セッテイ。ホウデン　カイシ」
ロボは勝手に呟いた瞬間・・・
バリリリリッッッ！！！！
超高電圧がフィーラを襲った。
フィーラは声を上げることもできずに黒焦げになって倒れた。
レ「フィーラ殿！？」
？「ピピピ・・・テンジュウオウ　ノ　カンジョウ、キョウフ　トコンワク　ニ　ソマッタ。キケンド　ハ　アサイ」

レ「くっ、そこまで分かるのか！？」
？「ウシロ　ノ　モノドモ　ヲ　イレテ　ケイサンチュウ・・・カンリョウ」
ロボは後ろを振り向き目の様な部分からレーザーを放った。
狙いは不意打ちを狙おうと接近していたエクスだった。
エ「何っ！？」
エクスはギリギリで反応し、頬を掠って何とか避けた。
しかし、いきなりだった為、エクスは完全に隙だらけだった。
？「セッテイ　２０００マン　ボルト。マッサツ　カノウ。ホウデン　ジュンビ」
エ「しまっ・・・！？」
ロボはさっきと同じように無数のコードを出し、エクスの首に巻き付けた。
？「チャージ　カンリョウ。ホウデン　カイｓ〈ザシュッ！！〉エラー、エラー」
サ「やれやれ、久しぶりの姿じゃ」
サミダレが黒い龍の姿になっていた。
サミダレは前足についていたブレードの様な翼でコードを斬ったのだ。
エ「ありがとう、サミダレ君」
サ「当然の事をしたまでじゃ」
？「ビー・・ガー・・ギーギー・・・」
突然、ロボが動きがおかしくなってしまった。
？「セーフティーモード　ハカイ。セイギョ　フノウ。マッサツモード　シドウ」
ロボットの体を覆っていたローブが突然燃え、全身の姿が露わになった。
人間の形に様々な機械が組み込まれ、所々から火花が出ていた。
？「マッサツ　マッサツ」
ロボはエクスとサミダレの首に向かって腕を伸ばした。

エクスは横に飛んで避け、サミダレは前足で叩き落とした。
だが、サミダレが叩き落とした腕から細いコードが生え、サミダレを捕縛していった。
サ「しまった!?」
細いコードが徐々にサミダレの全身に巻きついて行く。
それを見たレオがサミダレを助けようと走りだした瞬間・・・

ドグシャ!!

レ「あぐぁ・・!?」
地面から出てきたドリルによってレオの腹を突き抜いた。
ロボの足を見ると、いつの間にか片足が地面に埋まっていた。
そこから足を延ばして、足の先をドリルに変えたのだ。
不意打ちを受けたレオは急所を突かれ、既に虫の息だった。
エ「レオ君!!」
サ「や・・やめるのじゃ・・く・・苦しい・・」
エ「なっ!?、サミダレ君!!」
いつの間にか、細いコードがサミダレの体に食い込んで血が出ていた。
助けに行きたくても、エクスは腕に追われていてどうしようもない。
気絶しているフィーラ。
ほぼ死んでいるレオ。
動きを封じられ、今殺されかけようとしているサミダレ。
そして、逃げまどうエクス。
どう考えても絶命的な状況だった。
エ「くっ・・何とか一撃だけでも攻撃を加えられたら・・」
?「ターゲット、ロックオン」
エ「!?」
ロボの顔がエクスの方を向いていた。
そして、目の部分に光が収束し・・・

ピシュン！！

エ「なっ・・・あぁ・・」
二つのレーザーを放った。
それはエクスの心臓と頭を貫き、風穴を開けた。
エクスは絶命したのだ。

ボギ・・バギゴリ・・

サ「あがぁ・・ぐぅ・・」
サミダレの方も圧迫が強くなり過ぎ、骨が折れていた。
？「ビビ・・ゼツメイ　マデ、ノコリ　１３ビョウ。ジカン　タンシュク　ノ　タメ、７０００マン　ボルト　ノ　ホウデン　ヲ　カイシ」
ロボが充電を始め出した。
もはや、誰の邪魔も入ることはない。
そして・・・

A「落ちるうううううう！？」
説明しよう。
幼女の誘惑を喰らった俺は気を失い、気がつくと変な空間を落ちていました。
ｂｙ　Ａ
A「おお、光が見えた！！。出口だな。てか、出口で合ってくれ！

！」

そう言いつつ、足を下にして着地の準備を図る。

ログナも人間になり、蓮田を抱えて着地の準備をしていた。

次第に光が大きくなり、やがて一面を包んだと思いきや、見えたのは川だった。

A「嘘っ！？」

ザバーッン・・・

浅かったものの、Aは自分が巻き起こした水飛沫（みずしぶき）でずぶ濡れになった。

とは言っても、陸に上がって活性でさっさと服を乾かしたが。

A「全く、ちゃんと着地地点を決めてほしぃ・・・」

ロ「どうした、エイっち？・・・って、うわあ！？」

Aはあまりの光景に驚きの声を隠せなかった。

A「どうなってんだよ・・・それに、何でナ〇ガク〇ガまでいるんだよ！？」

腹を貫かれたレオ。

頭と心臓に風穴があるエクス。

骨が様々な方向に折れ、黒焦げのサミダレ。

まるで地獄絵図をAとログナは見せられていた。

レ「く・・・あ・・」

A「！？、レオ！！、大丈夫か！？」

レオが気を取り戻したのを見たAはすぐさま駆けつけた。

ログナも駆け寄り、蓮田を木の下に下（お）ろしてレオの腹を再生してあげた。

だが、傷は全く癒えることはなかった。

レ「はぁ・・A殿か？」

A「ああ、俺だ！！。何があったか説明してくれ！！」

レ「じ・・時間が無い・・・急いで戻るのだ」

A「どゆこと！？」
レ「あ・・アリア殿が・・・コウガ殿の殺気を感じて・・・来た道を戻って行ったのだ」
A「マジッ！？。ここまで殺気が来てたのか！？」
レ「そのいいよう・・・どうやら、本当にコウガ殿がいたようだな」
A「あ・・ああ、俺達を助けてくれたみたいだ。でも、俺も気絶してしまって見逃してしまった」
Aは、あえてシリアの魅惑に負けた事を伏せていた。
もちろん、自分のプライドの為である。
ロ「俺っちは見てたぜ。エイっちは少女を見て鼻血を吹き出して倒れたんだ」
A「おいいいい、個人情報保護法はあああああああ！？」
ロ「んなこと、知りませ～んよ」
レ「いいから急ぐのだ！！。相手はフィーラ殿を人質としてアリア殿を殺すつもりだ！！」
バカやっている二人にレオが一喝を入れた。
それを聞いた途端、Aの目が本気になった。
A「幼女を人質だと！？。この俺に殺されたいようだな。ちょっと、殺してくる」
Aは活性の力を使い、一人でどこかに走って行った。
レ「A殿！！、逆だ！！」
A「うおっとっとっと、良し、今度こそ行ってくる！！」
Aは慌ててブレーキを掛け、１８０度回転すると猛スピードで走って行った。
残ったレオとログナはサミダレとエクスを再生してあげようとした。
しかし、いくら再生を行(おこな)っても傷は全く再生しない。
ロ「まただ！！。何で治んねえんだよ！！」
レ「我の目によると、傷に白いもやが覆っておる。おそらく、虚無の力だろう」
ロ「マジかよ・・・くっそぉぉおお！！」

ログナは抑えられなくなった怒りを地面にぶつけた。
ロ「何だよ!!。俺っちはこんなことしかできないのに、それができないなんて・・・これじゃ、無力じゃねえかよ!!」
レ「ログナ殿・・・」
ロ「ちくしょぉ・・・役に立ちてぇよ・・俺っちだって、皆と戦いてえよ・・・」
自分の無力さに悲しくなったログナは涙を流し始めた。
レオは励ますことも今では何の意味は持たないと判断し、そっとしておいた。
レ「そのようなこと・・・我も同じだ・・・」
レオもログナに聞こえないように呟いた。

# 最悪の贈り物編　その8、少女の涙

高雅の殺気を感じ取ったアリアは只管(ひたすら)走り続けていた。
ア「コウガ・・・・コウガ！！」
近づく度に確実に高雅の気を感じていた。
ア「コウガに会いたい・・・コウガに！！」
？「そうはさせないわよ」
ア「ッ！？」
別の殺気が後ろから感じ、振り向きもせずに瞬時に横へ避けた。
すると、もといた場所にクナイが刺さり、軽いクレーターが出来上がっていた。
ア「誰！？」
飛んで来た方を確認すると最後の白いローブの一人がいた。
？「セイクリッドで3番目に強いと言ったら？」
ア「嘘っ！？」
？「どうかしら？」
曖昧な返事をした瞬間、刺さったクナイがひとりでに動き始めた。
しかも、アリアの心臓目掛けて連続で飛びかかって来た。
ア「くっ、このぉ！！」
アリアは飛んできたクナイを見切り、キャッチに成功した。
しかし、それが罠だったとすぐに悟った。
ア「ッ！？、まずい！！」
危険を察したアリアはクナイをすぐに相手に投げ飛ばした。
すると、届くまでもなくクナイは爆発してしまった。
？「さすが、タダでは殺させてはくれないわね」
ア「コウガに会うまで死ぬわけにはいかない！！」
？「美しい愛情ね。でも、それが天災ならば、消えるべきよ」
ア「嫌よ。まだコウガと一緒にいたい。だから、コウガを助けて、また皆といつもの日々に戻る！！」

？「強い意志ね。でもね、こっちも天界を救いたい強い意志があるのよ。だから、あなたを殺すのよ！！」
白いローブの者はフードを取り、素顔を見せた。
コ「私の名はコイカよ。天界守護組織のリーダー、この計画の発案者でもあるわ」
ア「あなたが！？。じゃあ、もう止めてよ。それで、一緒にコウガを助けようよ！！」
コ「その計画の成功率は２％よ。さらに、成功したとしても、犠牲の数は人間、天使、悪魔、使いを合わせて軽く千は超えるのよ」
ア「そ・・そんな・・・」
コ「それで、あなたを殺し、連動してコウガを殺す。この成功率は９９％で犠牲は十も見たないのよ」
ア「で・・でも、もし私を殺してコウガを殺したとしても、あの少女はどうなるの！？」
コ「少女？。ああ、シリアの事ね。大丈夫よ。あの子も必然的に死ぬのよ」
ア「え！？」
アリアは意味が分からず、キョトンと驚いた。
コ「あの子の動向はこちらでも観察してたのよ。すると、あの子はコウガの愛情が欲しかったのよ。だから、コウガが死ねばシリアも追って死ぬか精神が壊れるのよ」
ア「そんな・・・いくら何でも酷いよ！！」
コ「じゃあ、あなたに何ができるのよ？。シリアはコウガの近くにいるだけでコウガのルシフェルの力が覚醒しつつあるのよ。それが覚醒してしまえば、いずれ天界が襲われ、ルシフェルの思い通りよ」
ア「それでも、何か最善の方法があるはず！！。そのシリアって子も幸せでコウガが覚醒しない方法が！！」
コ「夢を見るのもいい加減にし！！。そんな方法がある訳がない！！」
コイカは宙にクナイをいくつも創造し、アリアに向けた。

アリアも片腕を剣に変えて応戦体制に入った。
コ「さぁ、早く死になさい！！」
クナイが一斉にアリアに向かって飛んで来た。
アリアはさっきみたいに爆発する可能性があるため下手に弾き落とさずに掻い潜って接近した。
コ「無駄よ。クナイは何処までも追いかけるのよ」
外れたクナイはUターンして再びアリアを追い始める。
ア「じゃあ、これでどう？」
アリアは振り返り、剣でクナイを弾き落とした。
その様子を見たコアカはすぐに理解した。
コ「へぇ、静寂で爆破の力を打ち消した、か・・・でも、爆破だけとは限らないのよ」
ア「え！？」
器用に弾き落とす中にすり抜けた物があった。
ア「なっ、夢幻！？」
コ「だと、いいわね」
アリアをすり抜けたクナイは心臓目掛けてまっすぐに飛んでくる。
先程の言葉を聞いてアリアは体を傾けて避けた。
すると、服の掠（かす）った部分が綺麗に裂けていた。
ア「え！？」
コ「ほらほら、驚く暇は無いのよ」
ア「くっ」
変わった攻撃をされ、コイカに近づき難くなってしまった。
弾いていても、いくつかはすり抜け、体を使って避ける。
しかし、反応が少し遅く、次第に皮膚に掠り始めていた。
コ「反応が遅れてるわよ。死ぬのも時間の問題ね」
時が経つにつれてクナイの数が増えてゆく。
もう完全に避ける事は不可能になったアリアはもう掠りでは済まなくなっていた。
次々と新しい傷口から出る血によって動きが鈍くなっていた。

ア「何か・・・段々増えてるような・・・」
コ「あら、気付いたのね。でも、もう遅いのよ」
アリアは避け続けるにも限界があった。
そして、弱くなった意思の隙を付け込んで足がもたついてしまった。
ア「あ・・やばっ！！」
転んでしまったアリアは完全に無防備だ。
クナイはアリアの心臓に向かって止まることなどない。
コ「終わりのようね。これでとどｍ〈ゾクリ！！〉あがっ！？」
ア「！？、これは・・？」
突然、ピタリとクナイが停止し、地面に落ちた。
アリアは何が起こったか分からずにコイカの方を見ると、顔を真っ青にしていた。
コ（な・・何、今の殺気！？。まるで・・・セイクリッドの全員殺す宣告の様な殺気は！？）
ア「何だろう・・・様子がおかしい・・・それにしても今の殺気はコウガの物・・・」
アリア自身も謎の殺気は感じていた。
しかし、それが誰のものかは分かっていたが感覚がいつもと違ったのだ。
ア「コウガにしてはいくらなんでも黒過ぎる殺気だ。もしかして、この人が言っていた覚醒がもう！？」
アリアは自分の痛みやコイカの事など忘れて再び走り出した。
どうしてもコウガに会いたいのだ。
コ「あ！？、行かせｎ〈ゾクリ！！〉うぅ！？」
コイカがクナイを構えても、自分に向けられた刃の様な殺気に動けなくなってしまう。
段々とアリアが遠くなっていくなか、コイカは何もできずに見るだけだった。
ア「もう、誰も邪魔は無いはず！！。このままいけばコウガに会える！！」

高雅に会える希望が見えた。
そんな時だった・・・

ミチ・・ミチチ・・・

フ「きゃあああああああああああああああああああ」
ア「えっ!?」
突然の悲鳴に唖然として立ち止り、振り返る。
そこにはロボに腕を引っ張られているフィーラの姿があった。
フ「痛いです痛いです痛いですううううう!!!!」
?「ウゴクナ　ターゲット。ウゴケ　バ　ヒトジチ　ノ　ウデ　ヲ　チギル」
ア「なっ!?、それがセイクリッドのやり方なの!?。いくらなんでも汚いよ!!」
?「クチゴタエ　スルナ」
フ「うあああああああああああああ」
ロボがフィーラの腕を引っ張り、嫌な音が響き渡る。
ア「や・・止めて!!」
アリアが手を伸ばして叫ぶとロボは言われた通りに止まった。
アリアはフィーラの苦しむ顔を見るたびに心が痛みだす。
ア（このままじゃフィーラちゃんの腕が!!）
コ「ちょっとＳ－０４、人質を用意しろなんて命令してないわよ」
Ｓ「プログラム、ソナエアレバウレイナシ　ガ　ハツドウ　シタタメ、メイレイ　ナク　ヒトジチ　ヲ　トル　キョカ　ガ　クダッタ」
コ「・・まぁ、その通りの状況だけど・・・」
Ｓ－０４の言葉を受け、納得せざるを得なかったコイカであった。
コ「まあいい。さあ、アリア。今すぐ自分で宝石を壊しなさい。さもなくば、この子がどうなるか分かるよね?」
ア「く・・卑怯ｙ「きゃあああああああ」ッ!?、フィーラ

ちゃん!!」
S「クチゴタエ　ハ　モトメテ　イナイ。モトメテ　イル　ノハ　ターゲット　ノ　シ　ダケ」
ア「ううう・・・どうすれば・・」
自分が使える力は静寂だけ。
そして、離れてしまった距離ではどうしても助けることはできない。
どうしようも無いアリアは自ずとポケットに手を伸ばしていた。
フ「ダメです!!」
すると突然のフィーラの叫びに驚き、伸ばしていた手を止めた。
フ「アリア様!!、ボクなんかに構わずにコウガ様に会いにいくです!!」
ア「で・・でも・・」
フ「腕なんて後で再生してもらえばいいだけです!!だから、逃げるです!!」
ア「ダメだよ、そんなの。フィーラちゃんだって痛い思いはしたくないはずだよ!!」
コ「カッコイイ会話の所悪いんだけど、こっちはのんびりしたくないのよ」
フ「う・・・・・うあああああああああああああ」
ア「止めて止めて止めて!!!。分かったから!!。壊すから止めてよ!!」
アリアは急いでポケットから宝石を取り出した。
そして、思いっきり振り上げて地面に叩きつけて割ろうとしたが、勇気が出ずに止まってしまった。
コ「ほら、早くしないとこの子の腕が千切れるよ」
ア「くっ・・・ゴメン・・・コウガ・・」
フ「ダメです!!。アリア様あああああああああ」
アリアは決死の覚悟を決めて、宝石を叩きつけようとした。
それを泣きながら必死で叫び、止めようとするフィーラを無視しながら。

そしてアリアが腕を振り下ろした瞬間・・・

バギィッ！！

コ・フ・ア「！？」

Ａ「幼女を泣かせた奴はどこの誰だあああああああああああ」

Ａが鬼の形相を超える形相でＳ－０４の頭を蹴り飛ばした。

さらに、一瞬のうちにフィーラを抱えて救出していたのだ。

コ「しまった。別の殺気に包まれてて気付けなかった！！」

コイカは高雅の殺気によって、Ａの殺気に気付けなかったのだ。

さらに、Ｓ－０４は感情などが無い為、自然と殺気を感じる訳では無い。

Ａ「テメーら！！、耳の穴かっぽじってよぉーく聞け！！。幼女はな、人類の未来を変えるかもしれない至宝の宝だ！！」

ア「それは子供全員に匹敵するんじゃないの？」

Ａの謎のロリコン魂に呆れながらもツッコミをするアリア。

しかし、そんなロリコン魂のお陰で助かったのも事実である。

コ「あら？。どうやら、あの恐ろしい殺気が消えたみたいね」

ア「え・・・あ、コウガの殺気が無くなってる・・・」

消えてしまった手掛かりを無くし、気を落とすアリア。

すると、Ａがアリアの方を叩きながら励ました。

Ａ「大丈夫だって。あいつはすげーピンピンしてたぜ。どうせ、ひょっこり現れるって。主人公の俺が言うんだから間違いないって」

ア「ありがとう、Ａ君。でも、今は目の前の状況をどうにかしよう」

既にコイカは動ける状態になっている。

Ｓ－０４も頭が取れたぐらいで機能停止と言う訳ではなかった。

コ「今度こそ仕留めるよ」

Ｓ「アタマ　ヘノ　デンキ　キョウキュウ　ヲ　シャダン。セントウ　カノウ」

コイカはクナイを創造し、Ｓ－０４も戦闘準備に入っていた。

Ａ「へん、俺はあんたらの最高指揮官と戦ったんだ。なめんなよ」
コ「最高指揮官？。ああ、あのデシャバリ爺さんの仕業か」
Ａ「え！？」
コ「あいつはセイクリッドの中でも下の下の下の下よ」
Ａ「略してゲゲゲのゲ！？」
ア「略さなくていいよ、多分」
コ「・・・まぁ、あいつはデシャバリだから、よく偉そうに上を口にだすんだよ」
Ａ「え～・・・でも、俺は主人公！！。お前ら何ぞに負けるか！！」
ア「Ａ君もその人と同じデシャバリかも」
Ａ「何か言ったか？」
ア「う・・ううん、別に何も！！」
Ａ「・・・そう」
Ａに気付かれなかったことにホッと胸を撫で下ろすアリア。
Ａ「それより、この幼女を頼む。俺はあの二人をぶっ潰す」
ア「い・・いくらなんでも無茶だよ！！」
コ「もういいかい？。こっちものんびり待ちたくないのよ」
コイカが痺れを切らしてクナイを投げてきた。
だが、クナイはいきなり木っ端みじんに砕け散ってしまった。
コ「なっ！？」
Ｓ「キケン　キケン　キケン」
コイカは何があったか分からず、Ｓ－０４は警告の言葉を言い続けた。
すると、久しぶりにＡの髪の毛がピンと立っていた。
Ａ「父さん、幼女だ。幼女がいるよ」
タ「また訳の分からぬ事を・・・」
しかし、Ａの言った通りに空から幼女が下りてきたのだ。
それはタオル一枚っ子のことシリアだった。
だが、近くにいるはずの高雅の姿はなかった。
さらに、シリアの表情は泣き崩れていた。

シ「ひっく・・・ぐす・・・」
シリアは泣いているだけなのに、コイカは腰を落とし、ロボは警告し続けていた。
それは、確実にセイクリッドの二人に殺気をぶつけているからである。
シ「えぐ・・・お前達の所為で・・・」
ア「え!?」
シ「お前達の所為でぇ!!、お兄ちゃんがぁ!!」
突然、悲しみを怒りに変えたシリアはどこからか鋭利で禍禍しいブーメランを手に取り、コイカ達に向かって投げた。
コ「くっ・・・一時撤退よ」
勝機が無いと分かった瞬間、コイカは自分とＳ－０４の足下の空間を歪めて逃げて行った。
ブーメランはどこかへ飛んでゆき、標的を失ったシリアは再び泣きだしてしまった。
ア「どういうこと?」
シ「うあああああああああ、あ〝あああああああ」
Ａ「セイクリッド＝幼女を泣かせる＝今回の敵!!」
フ「変な式を立てるなです」
全く意味が分からないアリアは危険と思いながらもシリアに近づいた。
アリアがシリアの近くに屈(かが)むと頭を撫でながら優しく問いかけた。
ア「ねえ、一体どうしたの?。あなたと一緒にいるコウガはどこ?」
シ「ひぐ・・・お兄ちゃんはぁ、あいつらの所為でぇ、とても怖くなったのぉ・・えぐ」
ア「もっと具体的に話せる?」
追求しようとしても、シリアは泣き尽くし、答える事は出来なかった。
仕方なく、アリアはシリアを軽く抱擁し、慰めてあげたのだ。
その後、コウガがいない事が分かった為、アリア達はシリアを連れ

て皆の所に戻って行った。

## 最悪の贈り物編　その9、高雅、悪に手を染める

アリア達はシリアを連れてレオ達の所へ向かっていた。
あの後、シリアは泣き疲れて眠ってしまい、仕方なくアリアが負ぶっている。
もちろん、Aが負ぶろうとしたが安全の為にフィーラの夢幻で紛らわせた。
A「アハハハハ、アハハハハ」
ア「・・・A君、幸せそうだね」
フ「気持ち悪い奴です」
ア「ちょっと、同意」
流石のアリアも同意せざるを得なかった。
Aは丸太を負ぶって幸せそうになっている為、何も知らずに見るとただの変態である。
ア「それより、レオ君達はどうしたの？」
A「え・・ああ、それは・・・」
幸せ顔のAだったがその話を聞いた瞬間、暗い顔になった。
フ「ボクも知りたいです。いつの間にかやられてしまったです」
A「えっと・・・とても言い辛いけど・・・聞く？」
ア「皆・・・やられたんだ。私が知らない間に・・・」
A「何故分かったし！？」
フ「あんな言い方すればバカでも分かるです」
ア「それで、皆の容態は！？」
アリアが焦りながらAに問いただす。
Aはいつものようにバカを言うまでもなく、真実を伝えた。
A「黒い竜と確か・・・エクスと言う奴が死んでた。レオは死に掛けてた。だ・・だけどよ、ログナがいるからどうせ戻った頃には生き返ってるって」
ア「・・・・・・・・・」

フ「・・・・・・・・・」
Aが必死にフォローするも、アリアとフィーラは落ち込んでいた。
結局、Aは励ますこともできずにそのまま何も喋らずにレオ達の所へ向かった。

レオ達の所へ突いた時、絶望がさらに増した。
Aの考えは外れ、エクスとサミダレは死んだまま、レオも意識を失っていた。
そして、悔しそうに泣いているエクスの姿があった。
それが最初に見た光景だった。
A「どうしてだよ・・・」
ロ「うぐ・・・エイっち・・・すまねえ」
A「何で!?。何でお前は再生をさせてねえんだよ!?」
ロ「違う!!。俺っちは必死に再生させようとした!!。だけど・・・虚無が邪魔で再生できねえんだよ」
ア「そんな・・・それって・・・」
フ「二人は・・・本当に死んじゃうってことです!?」
あまりの事実にフィーラは腰を落とし、地面にへたり込んだ。
アリアはまだ納得が出来ずに、茫然と立ち尽くしていた。
ロ「すまねえ・・・俺っちが不甲斐(ふがい)ねえばかりに」
A「そう自分を責めるな。そうだ!!、その幼女の強さならどうにか出来ねえか!?」
ア「!、そうか!!」
そのことに気付いたアリアはシリアを下ろして体を揺さぶった。
ア「ねえ、シリアちゃん、起きてよ!!」

シ「むにゃむにゃぁ・・・お兄ちゃんがいっぱぁい・・・」
ア「それってホラーなんだよ!!。だから起きてよ!!」
A「言ってることが滅茶苦茶じゃないか?」
シ「ん・・・もぉ・・・うるさぁい」
シリアが寝ボケて謎のハンマーを生み出し、適当に振り回した。
適当だろうがブンブンと音を立てて、当たれば死ぬだろう。
ア「あわわ、危ないよ!!」
フ「わみゅ!?、すれすれです!!」
シ「くかぁ・・・んにゃぁ」
寝ぼけながらのハンマーもかなり恐ろしいものである。
全く起きないシリアにいい加減に起こりだした。
ア「こらー!!、起きなさーい!!」
シ「ふぁ!?」
流石に驚いたシリアは一瞬で覚醒し、ハンマーを落とした。
どういう状況か分からないシリアは周りをキョロキョロと見まわしていた。
そして、最後にアリアと目が合ってシリアは首を傾げた。
シ「・・・あっ、そうだぁ!!。おねがぁい、お兄ちゃんを助けてぇ!!」
ア「それは山々だけど、コウガはあなたと一緒にいたはずじゃ?」
シ「それがぁ・・・お兄ちゃんは亜空間で鍛えてるよぉ」
ア「だったら、わざわざ私達に頼む必要がある?」
シ「それがぁ・・・もぉ、あたしには止められないのぉ」
ア「どういうこと?」
シ「実はぁ・・・」
シリアは高雅がどうなったのかを話し始めた。

A達を助けた後の高雅達は元の場所に帰っていた。
高「はぁ、そういや、アリア達の方はどうなっているんだ？」
シ「ん、見たぁい？」
高「当たり前だ。早く見せてくれ」
シ「はぁい。ほらぁ」
シリアはサクッと空間を弄り、A達がいる所を見せた。
ちなみに、シリアが知らない場所の空間を開ける理由は殺気を感じ取ってその人の位置を把握しているのである。
高雅も似たような事は出来るのだが、シリアは例え天界だろうが現世だろうが一度感じた殺気はどこでも見つける事が出来るのである。
つまり、シリアとカクレンボすると世界中のどこに隠れても一瞬で見つかってしまうのである。
高「安い例えだな」
シ「？」
高「いや、何でもない。どれどれ・・・」
高雅が見た光景はAが丁度川に落ちた瞬間の所だった。
高「だっせぇ。全く情けねえ奴だな」
シ「ずぶ濡れだねぇ」
高「これはさっき送った時のものか？」
シ「そうだねぇ。あんまり時間経ってないからぁ」
高「ふ～ん。そういや、A達はどこに送ったんだ？」
シ「えっとぉ・・・適当に殺気が集まって良い殺気の所に送ったよぉ」
高「それで合ってんのか？」
シ「大丈夫だよぉ。だってぇ、その良い殺気が消えたもぉん」
高「・・・は？」

シ「だからねぇ、きっとセイクリッドの奴らに殺されたんだよぉ」
高「・・・・・・・」
高雅は訳が分からず、とにかくAが映る空間を見ていた。
すると、次第に最悪の光景が目に入った。
高「何だよこれ・・・エクスとサミダレが死んでるじゃねえかよ！！」
シ「お兄ちゃぁん？」
高「どうしてだよ！？。何で、こいつらがこんな目に遭わなきゃならねえんだよ！？」
シ「どうしたのぉ、お兄ちゃぁん！？」
高雅は傷ついたレオ達を見て激昂していた。
シリアは高雅の手を握って落ち着かせようとしたが、それがあだとなってしまった。
高「おい・・・」
シ「ひぅ！？」
シリアはあまりの殺気にビクついてしまい、大好きだった兄から逃げようとした。
しかし、掴んでいた手が逆に掴まれており逃げることは許されなかった。
高「今から俺はあの腐った考えをする奴らを根絶やしにして来る。連れてけ」
シ「で・・・でもぉ・・お兄ちゃんじゃぁ・・勝てないよぉ」
？「いいや、勝てるぞ」
高・シ「！？」
突然の第三者の声に二人は周りを見渡す。
しかし、その声の主らしき物はどこにも見当たらない。
シ「うぐぅ！？」
高「！？、シリア！？」
突然、シリアが胸を押さえてもがきだした。
シ「ううぅ・・・・い・・痛いよぉ・・」

？「シリア、お前はもういい。今までご苦労だった」
シ「ど・・どういう・・ことぉ・・・・うっ！？」
シリアは痛みに耐えられなかったのか、気を失ってしまった。
そして、シリアの体から黒い物体が出てきたのだ。
しかし、高雅はそれが何なのかは自然と理解していた。
高「・・・・ルシフェル」
ル「ほぉ、私の事が分かるのか。流石、私の息子だ」
高「どうでもいい。それより、勝てるんだろ？。だったら、早く連れてけ」
ル「そう焦るな。誰も今のお前が勝てるとはいっていない。今から私がお前を鍛えるべく、ある空間を生み出す」
高「その中で修行ってか。めんどくせぇ」
ル「安心したまえ。お前はそこで寝るだけでよい」
高「・・・成程。俺が寝てるうちに俺の中のお前の力を覚醒させる訳か」
ル「その通り。理解が早い息子を持って助かる」
高「・・・いいだろう。あいつらを根絶やしにできるなら、悪にだって染まってやる！！」
ル「よい決断だ。では、早速行くとするか」
ルシフェルと思われる黒い物体は不思議な動きをした後、また黒い物体を生み出した。
ル「さあ、この空間に来い」
高雅は言われるまでもなく、その空間へ足を運んだ。
シ「・・だ・・・だめぇ・・」
いつの間にか気絶していたシリアが起きていた。
そして、高雅を行かせまいと必死に足を掴んで止めていた。
高「退け」
シ「あうぅ！！」
高雅は容赦なく蹴り飛ばし、シリアを引き剥がした。
高「言っただろ。俺はテメーのことなんて知らねえんだよ」

高雅はシリアの名前を呼ぶこともなく、黒い空間の中へと消えていった。
ル「シリア、君はもう用無しだ。後は自由に過ごせ」
そう言ってルシフェルも黒い空間の中へ消えてゆき、黒い空間も消えた。
シ「ど・・・どうしてぇ・・・一人ぃ・・・やだよぉ・・・」
残されたシリアはただ泣き続けた。
誰もいない、自分しかいないこの空間で。

話を終えたシリアは思い出してしまったのか、再び泣きだした。
シ「ひっぐぅ・・・それでぇ・・あたしぃ、あいつらの所為だと怒ってぇ・・・」
ア「それで、あの時、現れたんだ」
アリアはシリアの頭を撫でながら自(おの)ずと理解していた。
シリアはアリアに甘え、背中に手を回して抱きついていた。
ア（この子は本当にさびしい子なんだ。ただ純粋に兄を求めてただけだったんだ・・・）
フ「アリア様!!、そんな奴の話を信じてはダメです!!」
ア「フィーラちゃん!?」
フ「今の話も全部、でまかせに決まってるです。ルシフェルなんてずっと前に死んだ奴です。だから、そんな話が信用できるわけ無いです」

シ「ッ！？、ホントだもぉん！！。あたしは嘘をついてないもぉん！！」
フ「信憑性がないです。どうやって信じろと言うです？」
シ「うるさぁい！！。食べちゃうぞぉ！！」
ア「二人とも、止めて」
アリアが二人の喧嘩を止める。
ア「どちらにしても、コウガを早く助けないといけないよ」
フ「それは・・・そうです・・・けど、戦力が少ないです」
シ「じゃぁ、こいつらを生き返らせるよぉ」
ア「でも、皆、虚無が掛けられて再生ができないんだよ」
シ「虚無ぅ？。そんなのぉ、退けちゃえばいいです」
ア「でも、虚無を消すなんてそんなこｔ「はぁい」えっ！？」
シリアはレオに手をかざすと腹の傷がみるみる癒えてゆく。
完全に癒えたら次にエクス、さらにサミダレと順序良く回復させた。
レ「ん・・・我は・・」
エ「くっ・・・」
サ「どうやら、生き返ったようじゃな」
ア「す・・すごい」
ロ「あの～、俺っちの価値って何？」
ア「それは・・・その内やってくるよ」
ロ「ショボーン」
ア「ほ・・ほら、元気出してよ。皆が生き返ったんだから」
落ち込むログナにどう接したらいいか分からないアリア。
シ「これでぇ、あたしのことぉ、信用してくれるぅ？」
フ「・・・まだ何か納得できないですけど・・・まあ、いいです」
レ「一体、どういう事だ？。それに、その子は一体・・・？」
ア「あぁ、えっとね・・・」
アリアはレオ達に一通りの事を説明した。
レ「・・・そんなことがあったのか」
エ「何とも、大変なことになったものだな」

サ「それで、これからの事は決まっておるのかのぉ？」
ア「いや・・・何も決まってないよ」
シ「決まってるよぉ。お兄ちゃんが行くところに行けばいいんだよぉ」
ア「それって・・・セイクリッド！？」
シ「それ以外ぃ、どこがあるのぉ？」
ア「で・・でも、シリアちゃんが戦えたとしても、私たちじゃ勝てないよ」
シ「目的はぁ、戦う事じゃなくてぇ、お兄ちゃんをぉ、取り戻す事だよぉ」
ア「そうだけど・・・」
レ「アリア殿、コウガ殿に会えるのであれば向かうべきではないか？」
レオはシリアの提案に賛成の形でいる。
ア「レオ君、危険なんだよ」
レ「だが、手掛かりを失う訳にはいかない」
A「そうだぜ。俺がいるから安心しろって」
心配そうにするアリアにAが余裕を見せる。
それが逆にアリアの心配にもなっているのだが。
ロ「俺っちはパスしてもいいか？。さすがに、自信無くしたぜ」
ア「・・・うん、無理にとは言わないよ」
シ「それじゃぁ、行っくよぉ」
シリアは早く行きたいのか、皆を無視して空間を開いた。
ア「あっ、待ってよ！！」
一人で勝手に行くシリアを追い、アリア達も空間の中へ入って行った。

# 最悪の贈り物編　その１０、早速の休戦

聖域・セイクリッド
そこは白い光に満ち溢れ、そして塔が建っているだけである。
その塔のある部屋に一人の男が優雅に飲み物を飲んでいた。
？「・・・うん、中々良い味が出てるな」
？「ただのコーラに何言ってるんですかバーカ」
？「おいおい、相変わらず酷いなぁ」
？「最高指揮官様は味が分からない奴ですバーカ」
？「まぁ、その通りだけどな」
そう言って、最高指揮官と言われた者は高らかに笑った。
だが、その近くにいた女性は表情を全く変えなかった。
？「あー、入っていいよー」
突然、男が扉に向かって誰かを招きいれる許可を下した。
すると、入って来たのはＳ－０４とコイカだった。
ちなみに、Ｓ－０４の顔は既に修理されている。
コ「ノックぐらいさせてください」
？「いいじゃん。無駄な労力を使わなくてさ」
Ｓ「ノック　ニ　ヨウスル　エネルギー　ノ　ショウヒ　ハ　０．０３％。ワタシ　ハ　エネルギー　ヲ　セツヤク　デキテ　ウレシイ　デス」
？「うん、ロボ君は素直でいいなぁ」
？「ただのケチですバーカ」
コ「・・・と、とにかく、これからどうしますか？。案は３つ程有りますが」
？「そうだな～、ここで争うのはマリア様が悲しんでしまうけど、そうも言ってられないもんな」
？「奴らはここを目指しています。どう迎撃しますか？、バカ最高指揮官様」

？「君はバカと言う口癖を止めろよ。可愛いのに」
？「ッ！？・・ば・・バーカ・・・／／／」
女性は顔を真っ赤にしてそむけた。
その仕草に、男はただ笑っていた。
コ「相変わらず、ラブラブですね」
Ｓ「キリカ　サマ　ノ　タイオン　ガ　キュウジョウショウ。ココロ　モ　ミダレ　テ　イマス。シコウカイロ　ハ　サイコウシキカンサマ　デ　ウメツクｓ＞バギッ！！＜エラー、エラー」
キ「黙れバーカ！！」
？「あーあ、また頭取っちゃって」
キ「私が修理しますから問題有りませんバーカ」
コ「ほんと、お姉ちゃんは・・・」
キ「コイカ、ここは職場よバーカ。ここでは姉妹の関係じゃないとあれ程言いましたよバーカ」
コ「うるさい、バカ姉（ねえ）」
キ「何ですって！？、バーカ！！」
？「ははははは、今日も賑やかだなぁ」
もはや、本来の目的はどうでも良く、完全に遊んでいる。
それ程、この事態は彼らにとっては何の事もない事なのだ。
？「さて、そろそろ本題に移ろうか？」
急に男が切り出すと全員が急に真剣な顔になった。
まぁ、Ｓ－０４は顔がないけど・・・。
？「まず、最も注意すべきは現在もなお覚醒しているコウガ君だ」
男達は既に高雅の事もルシフェルの事も知っていた。
理由は殺気で全てを読み取っているのだ。
外にも出ず、誰にも気付かれずに全ての出来事が見えているのだ。
キ「彼はシリアに隠されていたルシフェルの意思によって急激に覚醒していますバーカ」
？「そうだ。そこに気付かなかったのは俺らの失敗とも言える」
コ「ですが、シリアは我々が細胞一つまで細かく調べてあるはずで

す。それなのに、ルシフェルの意思が隠されていたとは思えません」
？「相手はあのマリア様と一度婚約したルシフェルだ。僕らが行き通れない所だってあるはずだ」
キ「相手はたかが意思ですバーカ。注意すべきはそんな奴ではありませんバーカ」
？「そ。最初に言った通りに注意すべきはそっちではなく、コウガ君の方だ。彼はとっても怒ってる。だから、注意しなければならない」
コ「・・・・理由が妙に納得できません」
？「じゃあ、コイカはクビにしよう」
コ「え・・はい！？」
キ「バーカバーカ」
突然の切り捨て宣告にコイカは訳が分からず男に理由を求めた。
コ「どうしてですか！？。もしかして、あのセリフが悪かったのですか！？」
？「だって、犠牲が出ちゃったじゃん。この計画の立案者が責任を持って罰を受けるべきだ」
コ「で・・・ですが、この状況で戦力を消すような行動の意味が分かりません」
？「そ、意味が分からない」
コ「？」
男はまるでその言葉を待っていたかのように呟いた。
？「彼は元々仲間と言う物を嫌っていた。それが、今では仲間の為に怒っているではないか」
コ「それは・・・」
？「それに、やはり俺は戦いを好まない。だから、なるべく誰も傷つかないで終わりたいんだ」
キ「どうやって、そうするんですかバーカ」
？「そりゃあ、もちろん・・・・」

塔の外部。
シリアの空間の転移によってアリア達はセイクリッドにやって来ていた。
ア「ここが・・・セイクリッド」
レ「まるで、ここにいるだけで恐れ多い感覚に襲われているようだ」
シ「・・・おかしぃい」
ア「え!?」
シ「だってぇ、あそこにぃ、殺気がいっぱい集まってるのにぃ、そこに行けなかったのぉ」
シリアは元々塔の殺気が集まっている場所に移動しようとしたのだ。
しかし、それが出来なくて首を傾げていた。
A「まぁ、ダンジョンは入口から入るのが普通だろ。まだ、何も探索してないのに続きから始めるのもあれだし」
フ「気楽に考えられるその脳みそが凄いです」
ア「とにかく、進もう。もしかしたら、コウガが来てるかもしれないし」
キ「まだ来てませんバーカ共」
殺気を隠して突然現れたキリカに一同は驚く。
そして、Aとレオはすぐに戦闘態勢に入った。
レ「くっ、いつの間に!?」
キ「喧嘩っ早いですよバーカ」
A「バカで結構」
ア「あなたは誰?」

キ「自分から名乗りなさいバーカ」
フ「バカって言う方がバカです」
キ「だったら、あなたもバカですバーカ」
フ「え・・あ・・・ボクはバカじゃないです!!、バーカ!!」
サ「とにかく、お主の目的は何じゃ?。どうも迎撃に来た様子じゃなさそうじゃな」
キ「あなた達を招待しに来ましたバーカ」
ア「招待?」
キ「とにかく来なさいバーカ共」
キリカは用件を伝えて回れ右をし、塔へ向かった。
その後ろ姿を見送っている内に、アリアはあることを思い出した。
ア(そう言えば、シリアはセイクリッドの人達を殺そうとしているのに、どうして静かだったんだろう?)
そう思ってシリアの方を見た。
すると、シリアはまるで凍えているように震えていたのだ。
ア「シリアちゃん!?」
エ「彼女が現れた途端にこうなったんだ」
エクスが見守っているがシリアはキリカが見えなくなってもずっと震えていた。
アリアは心配になってシリアの肩に手を置いて落ち着かせようとした。
シ「ひぃ!?」
ア「わ・・私だよ、アリアだよ」
シ「あ・・お・・お姉ちゃぁん?」
ア「大丈夫?」
シ「だ・・・大丈夫ぅ・・・じゃなぁい・・きゅぅ」
シリアは何かにやられた訳でもなく気を失った。
キ「さっさと来なさいバーカ」
ア「あっ、待って。シリアちゃんが・・・」
キ「そいつは危険な為、殺気で気絶させてるんですバーカ。良いか

ら来てくださいバーカ共」
ア「わ・・・分かった」
アリアはシリアを負ぶってキリカについて行った。
それを追うようにA達も後を追った。
もちろん、警戒を怠らずに。

キリカは早足で塔を登って行く。
アリア達はそれに必死で喰らいついていた。
ア「ちょっと・・・待ってください」
キ「このくらいで『待って』を使わないでくださいバーカ」
キリカは振り返らずに足を止めることはなかった。
冷たく当たるキリカに対し、レオは口を開いた。
レ「何故、我々の前に現れたかのように空間を使わないのだ?」
キ「この塔の内部に空間は繋がらないように虚無が張ってありますバーカ」
レ「そうだったのか・・・しかし、そのような事を我々に話しても良いのか?。一応、まだ信じてないんだろ?」
キ「当たり前ですバーカ」
A「だけどよ、どうしてのんびり敵さんを案内してるんだ?」
キ「最高指揮官様の命令ですバーカ。そうでなければ、真っ先にアリアを殺しますバーカ」
さり気なく恐い事を言うキリカ。
アリアはその言葉に一瞬だけ身震いした。
その後も黙々と上り続けること20分。
キリカはペースを落とすことなく上り切ったが、殆(ほとん)どの者はへばっていた。

キ「最高指揮官様、連れてまいりましたバーカ」
？「分かってる。入れてくれ」
キリカはノックをして知らせるも、男は既に把握していたようだ。
そのことはキリカ自身も分かり切っていることであった。
キ「ここからは謹んで行動するようにバーカ共」
そう言って、キリカは一足先に部屋の中に入って行った。
ア「えと・・それじゃ、私達も・・・」
アリアも恐れながらも扉の前に立つ。
ア「失礼します」
？「はいは～い、どうぞ～」
A「軽いなぁ」
さっきまでとは違い、あまりの軽さにAがついツッコミを入れた。
キ「マジメにしなさいバーカ」
？「いやいや、変に緊張させないために」
キ「敵に同情なんてどうでもいいですバーカ」
ア「あの～、入ってもいいですか？」
いつの間にか二人だけで話しており、置いて行かれたアリアは何とかこちらに意識を向けさせた。
？「ゴメンゴメン。どうぞ入ってくれー」
ア「じゃあ、失礼します」
アリアが扉に手を掛け、ゆっくりと扉を開ける。
すると、中から男が手を振って出迎えてくれた。
？「やあ、初めましてだな。俺はここの最高指揮官だ。どうぞよろしく」
そう言って男は手を伸ばして握手を求めた。
ア「あっ、初めまして。アリアです」
キ「既に知ってますバーカ」
？「おい、キリカ。改めてがあるだろ」
キ「そんなこと知りませんバーカ」
ア「最高指揮官にバカって・・・」

？「まあ、彼女は特別だから。それにしても、ここまで来るのに疲れただろ？。そこのイスに座りな」
そう言って予め人数分用意されてイスを勧める。
ア「どうも」
A「何か呪いとか無いだろうな？」
？「大丈夫。何にもしてないさ」
アリア達は余程疲れていたのか、早くイスに腰を掛けた。
Aも警戒しながらも疲労に負けて座った。
シリアは特別にソファーに寝かせてあげた。
？「さて、早速だが本題に移るとしようか」
男もイスに座って話を始めた。
？「君達はここに何をしに来たのかな？。まあ、言わなくても分かるけど」
ア「私達はコウガに会いに来ました」
？「だが、君達の連れてきたその少女は違うようだけど？」
ア「それは・・・だけど、あなた達にも責任があると思います」
？「おいおい、責任は俺じゃなくて立案者に言って欲しい者だ」
キ「その責任はいずれ最高指揮官様にも行き渡りますバーカ」
？「まあ、そうだな。ハハハハハ」
声を挙げて笑い出すも、完全に浮いていた。
ア「笑い事じゃありません！！」
？「ああ、悪い。少し調子に乗り過ぎたようだ」
ア「それで、どうして私達をここに誘いこんだのですか？。私が殺しやすいからですか？」
？「そう言うなって。ここで争うのは嫌いなんだ。だから、もう君達の命を狙わないと約束しよう」
フ「信用できないです」
？「しなくたっていいさ。とにかく、後１０分もしない内にコウガ君がここに来てしまう」
ア「！？、本当！？」

？「ただし、今までのコウガ君と思わない方がいい。彼はきっと覚醒しているだろう」
エ「・・・・協力しろと？」
？「話が早過ぎないか？」
キ「最高指揮官様が鈍過ぎるだけですバーカ」
？「・・・・・まぁ、そんなことだ」
ア「話が飛んでるような・・・」
アリアは一瞬、こんな人が最高指揮官かと疑った。
すると、扉からノックの音が聞こえた。
？「ほいほ～い。ご苦労さん」
コ「相変わらずな言葉ですね。取りあえず、言われた通りに配置しておきました」
声の主はコイカだった。
コイカは入るまでもなく用件を済ませた事を伝えた。
？「分かった。早速おびき出すとするか」
すると、男は立ち上がって部屋を出ようとした。
出る間際にアリア達の方を向いて呟いた。
？「来るなら来い。ただし、覚悟はしてもらう」
そう言い残し、男は部屋を出て行った。
それに続いてキリカも男の後を追った。
ア「皆、行こう」
サ「じゃが、この子はどうするのじゃ？」
サミダレが指を指した方にはシリアが眠っている。
ア「・・・置いて行こう。ここにいれば、きっと大丈夫だよ」
A「いや、あえて運ぼう。そして、俺がはk「自重しろです」ぎゃあああああああ」
Aの自重しない言葉にフィーラが軽くお灸をすえる。
ちなみに、Aは大量のお婆さんに襲われる夢幻を見せられている。
ロリ好きのAにとって、年上は毒なのだ。
エ「この子は僕が見ておく。君らで行ってきな」

ア「うん、じゃあ、お願いするね」
アリア達はエクスを置いて部屋を出た。
そして、男の後ろを追ってついた場所は塔の屋上だった。

# 最悪の贈り物編　その11、7年の歳月

塔の屋上に出向いたアリア達。
そこには、既に他のセイクリッドの者達が揃(そろ)っていた。
？「ちゃんと、全員いるな」
ア「これで全員？」
アリアがそう疑うのも無理はない。
セイクリッドの者達は既に知っている4人しかいない。
文夫や紗奈恵、勇人の姿はそこになかった。
？「そ。色々あってかなり減ったんだ」
ア「ねえ、文夫さん達はどうしたの？」
？「彼らは罰を与えている。この事件の関連する事が終わるまで監禁してる。まぁ、停学ってやつさ」
キ「ここは学校じゃありませんバーカ」
？「例えだよ、例え」
コ「そんなことより、早く作戦を決行させましょう」
？「分かった分かった」
コイカが男を急かすと突然アリアに近づいてきた。
ア「な・・何？」
不思議と恐怖がアリアを襲っていた。
そして、その恐怖は幻ではなかった。

ドクン！！

ア「う・・・」
アリアは急に大きな鼓動に襲われ、気を失った。
その瞬間、Aとレオが男に襲いかかった。
しかし、男は冷静にレオの腕を片手で止め、Aの剣筋を指二本で受け止めた。

？「待て、殺してない。仮死状態だ」
A「どういう訳かはっきりさせろ！！」
？「なーに、コウガ君をおびき寄せるためだ。一番大切な殺気を消せば、彼はきっとすぐに来る」
レ「そう言うことは先に言って欲しいものだ」
？「悪かったよ。きっと快く了承してくれないと思ってな」
キ「来ましたバーカ共！！」
キリカが叫んだ瞬間、暗雲が空を覆った。
そして、塔に次々と亀裂(きれつ)が走った。
フ「く・・崩れるです！！」
コ「この亀裂は塔のじゃない。塔を覆っている虚無の亀裂よ」
？「どうやら、直接ここに来るみたいだ」
僅かな時間で塔を覆っていた虚無が砕け散った。
そして、目の前に黒い空間の歪みが現れた。
S「ビビ、ターゲット　ノ　チカラ　ヲ　カクニン。スウチカ　シマス」
？「さあ、待望のご対面だ」
黒い空間からゆっくりと人影が揺れる。
そして、中から出てきたのは紛れもなく高雅だった。
高「・・・・・・・」
フ「こ・・コウガ様？」
サ「今までの面影が全くないのぉ」
A「これは高雅じゃねえ。高雅の皮を被った何かだ」
レ「力(ちから)特有の色が見えぬ。全てが黒く染まっておる」
探し求めていた人物のあまりの変わりように四人は動揺していた。
すると、男が初めてアリア達と合った時と同じように手を振りながら近づいた。
？「やあ、初めましてコウガ君。俺が君が狙うチームの最高指揮官だ」
高「・・・・・・・初めまして、ナノトム」

ナ（ッ！？、何故俺の名を！？）
高「早速で悪いが、アリアをどうした？」
キ「恐れ多いぞバーカ！！」
高「あ？」
キリカの挑発に高雅は呆気なく乗った。
しかし、ナノトムはその状態を好ましくないと思っている。
ナ「まずい！！。逃げろ、キリカ！！」
ナノトムが叫んだ瞬間、高雅がキリカの真下に空間を開けた。
キ「甘いですバーカ」
キリカは横に飛んで簡単に避ける。
さらに、簡単な虚無の弾を高雅に向けて放つ。
高「あー、うぜー。こんなひょろひょろな女がここで二番目に強い奴かよ」
ナ「おっと、この試合はタイマンじゃないぞ」
ナノトムが隙をついて高雅に拳を突きだす。
しかし、高雅はそれを呼んでいたのか、振り向きもせずに片手で払った。
ナ「見切り済みか。だが！！」
高雅がカウンターの蹴りをナノトムは受け止めようとした。
高雅の手の内もナノトムは見切っていたのだ。
ナ「なっ！？」
しかし、当たる寸前で咄嗟に回避した。
それには訳があった。
ナ「なんて蹴りだ。当たれば全ての骨が微塵（みじん）になってしまう」
活性した脚力に破壊と波動を容赦なく含んだ蹴り。
虚無で打ち消そうにも、塔の虚無を破壊する高雅の力を考慮して、避けたのだ。
キ「最高指揮官様！？」
高「休むな！！」
高雅は一瞬でキリカの前に現れる。

しかし、反応できないキリカではない。
キリカは逆に前に現れたことを利用してそのまま攻撃に移る。
キ「甘い過ぎますバーカ！！」
キリカはどこからともなくバズーカを出し、零距離で高雅に放った。
バズーカから出たのは弾ではなく、超極太の白いレーザーだった。
かなりの範囲を一気に吹き飛ばすキリカの武器である。
それを零距離で撃たれた高雅は姿を消していた。
キ「・・・ちょろいですねバーカ」
高雅の殺気が完全に消え、勝利を確証していた。
だが、キリカは完全に隙だらけであった。

バギッ！！

ナ「ぐっ！！」
キ「ッ！？」
キリカが気付いた時には既にナノトムが盾となって高雅の蹴りを喰らっていた。
ナ「中々良い蹴りだ。だが、やっと捕まえる事が出来た」
キ「最高指揮官様！！」
ナ「キリカは離れろ」
キリカはそう言われると反論をせずにすぐに離れた。
高「・・・ふーん、俺の中のルシフェルの意思を取りたい訳か」
ナ（なっ、名だけでなく思考まで読まれただと！？）
高「だけどな、ルシフェルの意思なんてもう無いんだよ」
ナ「何！？」
高「これは全て俺の意思だ。何ものにも囚われていない俺の意思だ」
ナ「では、何故ルシフェルの力を使っている！？」
高「テメーらを完膚（かんぷ）なきまでに潰すためだ！！」
高雅は掴まれていた足を思いっきり振り、ナノトムを振り払う。
そして、手から波動を撃ち、ナノトムを吹き飛ばした。

A「おりやあああああああああ」
高「・・・面倒だな」
高雅は飛んで斬りかかるAの方を向き、波動を放った。
しかし、Aは空中にも関わらずにいきなり急降下して避けた。
そして、そのまま斬りに掛かった。
A「あまあああああああああああああああああああい」
高「・・・なーる。下方向の力のベクトルを活性化させたか。考えたな」
A「人生、見える物だけが全てじゃなあああああああああああああい」
高「さっきから、うっせえ!!」
高雅はAの剣筋を指二本で止めた。
ちなみに、Aはナノトム達が戦っている間に真の契約をしている。
A「ちょ!?、何で溶けないんだ!?」
高「知るか。お前の活性が弱いんだろ」
A「これでも、全力全開全速前進だけど。てか、お前は誰だよ?」
高「お前の知ってる崎村高雅だ。まあ、お前らにとってはかなりの変わりようだが」
A「変わり過ぎだぜ。おもに殺気が」
高「かれこれ7年間はルシフェルの意思と戦ってたからな」
A「な・・・なな・・ななななな!?」
突然の事実に困惑するA。
しかし、高雅は分かっていたリアクションをされて呆れ果てていた。
高「まあ、お陰で殺気で色々分かるようになったし」
A「どこまで極めた?」
高「殺気だけで相手の考えが分かり、殺気を消したり増幅させたり、それぞれの個人情報も多少は理解可能。殺気も一人ひとりが持つものだからな」
A「ワーオ、そいつはすげーや」
高「それより、どうして俺に斬りかかった?。まあ、言わずとも分かっているが」

A「もち、主人公決定戦第三戦、実力の部門」
高「帰れ」
高雅は刀ごとAを投げた。
投げた先はレオ達がおり、Aを受け止めてあげた。
コ「あいつ、あんなに喋っているのに隙一つ見当たらなかった。相当な強さね」
S「プシュー・・・」
コ「こいつも計算だけでオーバーヒートしてる・・・。全く、恐ろしい奴」
高「・・・なあ、お前」
コ「!?」
いつの間にか、高雅がコイカの後ろに立っていた。
それに気付いてなかったコイカはいきなりの事に驚いた。
コ（こいつ、いつの間に来たの!?）
高「プシューのあたり」
コ「人の考えを読まないで!!」
高「るっせぇ。どうせ死ぬ奴が出しゃばるな」
コ「ッ!?」
コイカは自然と身を構えた。
だが、いつの間にかまた高雅の姿は消えていた。
コ「え!?」
高「意識すればするほど、俺は捉え辛いぞ」
高雅はさっきと同じように真後ろで声を掛けた。
しかし、コイカは全く気付いている様子はない。
キ「後ろですバーカ!!」
コ「!?」
キリカの声でようやく反応したコイカは既に遅かった。
ドグォッ!!

ナ「つぅ！！」
コ「さ・・最高指揮官様！？」
またナノトムが盾となり、コイカを守った。
だが、高雅の拳はナノトムの腹を貫き、血が滴り落ちていた。
高「弱い仲間を持つと大変だな」
ナ「ぐふっ・・・なあ、話しをしよう」
高「鼻塩塩？」
ナ「話をしようだ。先程、ルシフェルの意思と戦ったと言ったな？」
高「で？」
ナ「その話を詳しく聞きたい。意思とは言え、あのルシフェルを倒したのが本当かどうか」
高「ああ、あの七年掛かった戦いね。まあ、お陰でこんなに強くなったけど」
ナ「頼む、聞かせてくれ」
高「・・・まず死ね」
高雅が貫いた拳を動かし、腹を抉(えぐ)ってゆく。
ナ「がはっ！？」
高「俺はお前らを倒すためにルシフェルの意思を倒し、奴の力を吸収したんだ。そんな呑気な話が出来るか」
キ「最高指揮官様！！」
キリカがナノトムを助けに援護に向かう。
だが、高雅はキリカを睨みつけ、最大の殺気をぶつけた。
キ「い・・・あ・・・」
キリカはそのまま地面に倒れ、意識を失った。
ナ「ッ！！、キリカ！？」
高「お前も俺の大切な奴をこうやって弄(もてあそ)んだ。分かってんのか？」
ナ「俺は君を救うためにわざとそうしたんだ。力を玩(もてあそ)んでやった訳ではない」
高「救う？。バカジャネーノ？。仲間を殺そうとして救うなんてバカげてる」

ナ「君は上に立つものじゃないから分からないかもしれないが、君は将来、大量の罪を犯す」
高「もう犯してるだろ。俺は色んな奴らを殺して来た。すでに犯している」
ナ「だが、その千倍以上の罪を犯してしまう。それを黙って見過ごす訳にはいかないと思い、仕方なく殺そうとしたんだ」
高「それが俺だけならまだましも、他の奴らを巻き込むのは間違ってるだろ」
ナ「止むを得ないかったんだ。だが、今の君ならもう大丈夫だ。覚醒しても、なお意思を持っているのであれば」
高「結局、テメーらの行いは無駄に終わった訳か。だが、今さらそんなことを言って許せるｔ「お兄ちゃぁん！！」？」
突然、空気を読まずに割り込んできたのはシリアだった。
シリアは高雅の姿を確認すると一目散に駆けよった。
シ「やっと見つけたぁ」
高「・・・・・・・・・誰？」
シ「ぶぅ、意地悪しないでよぉ」
高「知らないな。顔も知らな・・・・・！？」
シ「？、思い出したぁ？」
突然、高雅が何かに気付いたかのようにシリアを見た。
シリア自身は首を傾げていた。
高「この感じ・・・まさか！？」
シ「どうしたのぉ、お兄ちゃ・・・あぐ！？」
シリアは胸を押さえ、急に苦しみだした。
高雅にはこの光景がデジャブに思えた。
高「こいつ、しぶといな！！」
高雅はナノトムを突き飛ばした後、シリアの肩を掴んだ。
そして瞳を閉じ、シリアに力を流し込む。
シ「う・・ぐあぁ・・・」
高「こんの！！。止まらねえ！！」

シ「ぐ・・・うあああああああ」
シリアからあの黒い塊、ルシフェルの意思が出た。
高雅は知っているあの塊だ。
ル「ふふふふ。驚いたか、高雅」
高「しぶといんだよ！！」
ル「しかし驚いた。いくら油断していたとはいえ、息子に負けるとは」
高「またぶっ潰してやる！！」
ル「当初の予定と狂ったがまあいい。結果オーライだ」
すると、ルシフェルの意思は高雅の脇を通り、目標へ向かってゆく。
その目標はナノトムだった。
ナ「くっ！？」
ル「貴様のマリアの力をもらおう」
コ「させないよ」
ナノトムの前にコイカが立ちふさがる。
ルシフェルに向かってクナイを放つも黒い塊は分散して避ける。
コ「あれじゃ、クナイが通用しないよ」
だが、呆気なく横を通られ、何もできずに終わった。
Ｓ－０４に至ってはまだオーバーヒートから回復していなかった。
ル「残念だったな」
ナ「や・・止めろ！！」
ナノトムはかなりの傷を負い、抵抗が出来なかった。
高「好きにさせるか！！」
高雅はルシフェルに接近するも、どこからともなく吹く強風に足が運べなかった。
そして、ナノトムが完全にルシフェルに乗っ取られてしまった。
ル「くくく、これでマリアの力を手に入れたも同然だ」
高「くっそ！！」
ル「それでは、さらばだ。これで復讐が出来る」
ナノトムを乗っ取ったルシフェルは用が済んだ途端に空間を開き、

この場から離れようとした。
何とか止めに掛かりたいが強風に襲われ、近づく事が出来なかった。
高「こんの、待ちやがれ！！」
ル「また会おう。その時には天界も現世も全て無くなっているが」
そう言い残し、ルシフェルは消えて行った。
残された者達は悔しさと絶望しか残っていなかった。
高「あの野郎、まだ生きてやがったか」
A「何か、とんでもな展開になって来たな。くぅ～、燃えるぜ」
レ「あれが伝説の惰天使ルシフェルか・・・意思とは言え、おぞましい威厳があったな」
フ「ルシフェル・・・まさか、本当に生きていたとはです・・・」
サ「一体、どうするのじゃ？」
高「・・・放っておきたいが、そんなことしたら何か悪そうだし」
高雅達がこれからを考えている間にコイカ達は既に行動に移っていた。
いつの間にか、キリカの意識も戻っていた。
そして、どこかに空間を開いてその中へ入って行く。
高「どこに行く気だ？」
キ「決まってるですバーカ。最高指揮官様の所ですバーカ」
コ「最高指揮官様に従う者として助けに行くのは当然よ」
S「オーバーヒート　カイフク。サイキドウ　カンリョウ」
そう言って三人は空間へ入って行った。
シリアと同じように彼女らも殺気で居場所が分かるのだろう。
A「こっちも追うか？」
高「待て、アリアが起きてからだ。武器が無いと何か戦い辛い」
高雅はアリアを抱え、塔の中へ入って行った。
それに続いて他の皆も高雅の後ろをついて行った。
最初は高雅の事を疑っていたが、雰囲気が変わっても本物の高雅であることに気付いた皆は普通に慕っていた。

## 最悪の贈り物編　その１２、待つ者と行く者

塔の内部に入り、適当に降りているとエクスと合流した高雅はアリアを空中に寝かせていた。
床に寝かせるのも悪いし、寝かせる場所が無い為こうしているのだ。
Ａ「なあ、これはどこのシー○」
高「知るか」
レ「なあ、コウガ殿。どうして力が使えるのだ？」
レオはふと思った事を口にした。
高「そりゃ、ルシフェルの意思をぶったおした時に力をちょいっともらった訳。まあ、ちょいっとと言っても殆どの力があるけど」
そう言って高雅は色んな力を披露する。
まず、Ａを活性の力でぶん投げ、空気抵抗を消失で失くし、壁にぶつかる寸前で方向を操って高雅の方に戻し、高雅にぶつかる瞬間に今度は空間を開き、出た先は塔の外だった。
Ａ「うわあああああああああああ、何でだあああああああ」
何故、自分を実験台に使ったのか分からずに落ちてゆくＡ。
それを見ていたレオ自身も理解していなかった。
レ「・・・まぁ、大体分かった」
エ「ところで、シリア君はどうしたんだい？」
高「知らねえよ。あいつはどうでもいい」
サ「酷いのぉ」
高「んなことより、どうしてアリアは起きねえんだよ？」
かれこれ３０分は眠ったまんまである。
何度も声を掛けてやったが全く起きなかった。
フ「コウガ様の力でどうにかできないです？」
高「出来たら苦労しない。活性や再生を施しても全く無意味だ」
レ「だが、力が使われているようではない。我の目には何も映っていない」

高「・・・なあ、レオ。ちょっと俺の手を見ててくれ」
レ「？、分かった」
高雅は何か思いついたのか、手に力を込める。
そして、レオがその手を見る。
高「何が見える？」
レ「・・・何も見えない。全くだ」
高「そうか」
フ「今、何をしたです？」
高「マリアのもう一つの力だ」
エ「ま・・マリア様のもう一つの力！？」
サ「血が繋がっているとは言え、誰も習得出来ないあの力なのか！？」
高「そーゆーこと。ルシフェルと戦っている時に何か習得した」
フ「こ・・コウガ様は相変わらず凄すぎです」
高「しかしまあ、マリアの力を使っているとは厄介だ」
A「どうにか、ならないのか？」
いつの間にか戻って来たAが何事もなく話に入る。
高「能力だったら虚無で消せるが、マリアの力はそんな、軟(やわ)じゃない」
エ「なあ、コウガ君。そのマリア様の力とルシフェルの力について詳しく教えてくれないか？」
高「ん？、ルシフェルの力は簡単に言えば全ての力を強化するみたいなものだな。その代わり、自分の意思を強く持たないと狂われる。もっと簡単に言えばバーサーカーだな」
フ「コウガ様は狂わないです？」
フィーラが最も注意すべき点を聞く。
心配そうに見るフィーラを高雅は頭を撫でながら答えた。
高「大丈夫だ。あいつの意思に勝った俺が狂う訳がねえ」
フ「ふぅ、良かったです」
エ「では、マリア様の力は？」

高「簡潔に言えば対闇属性の攻撃かな」
エ「そうか、では、マリア様のもう一つの力と言うものは？」
高「ん～・・・何と言うか、創生＋虚無みたいなものかな？。まあ、生命を自由に操ったり、有生物を創ったりみたいなものか。それに虚無を重ねるんだ」
フ「創る所は創造と同じです？」
高「同じと言えば同じだが、マリアの力は使った後、創生物を残して力自体は無くなるんだよ」
A「成程、分からん」
高「お前に分かるように言うと、あるカードゲームでリビングデッドはモンスターを復活させても、そのカードは場に残るだろ？。だが、死者蘇生は復活させた後は消える」
A「成程。で、それがどうなるんだ？」
高「同じ例えを使うと、リビングデッドが消えればそのモンスターも消えるが、死者蘇生はその場に無い為、直接モンスターを倒さなければならない。しかし、そのモンスターは魔法、罠、効果を受け付けない」
A「つまり、アリアの仮死状態は既に力は掛かって無く、かつ別の力で治せないって訳？」
高「そうだ。だから虚無とか使っても無意味だった訳。でも、再生が通用しないのはマリアの力自体に虚無があるからだ」
高雅はやっと理解してくれ、疲れを溜息を表現した。
その言葉を聞いたフィーラがあることを思いついた。
フ「だったら、コウガ様がマリア様の力でアリア様を起こせばいいです」
高「それが出来たらとっくにやってる。マリアのもう一つの力を扱うのはかなり難しいんだ。仮死と言ってもほぼ死んでいるに等しい。それを復活させるのなんて相当難しいんだ。もしミスれば一生起きない」
エ「では、アリア君を起こすにはナノトムの協力がいる訳か」

高「そうだな。賭けしてミスったらやばいし、これはあいつにやらせるか」
サ「それじゃ、奴の所へ向かうかのぉ」
高「まあ、待て、丁度いい仲間が近くにいるだろ？」
シ「それってぇ、あたしぃ？」
屋上にいたはずのシリアがいきなり現れた。
高雅は殺気で気付いていたが、他の皆は気付いてなくて驚いていた。
高「・・・お前は・・・ビミョーだな」
シ「えぇ、何でぇ？」
高「あいつの殺気を読み取ると、お前がいると色々と厄介なんだよ」
A「そっか。お前、敵の考えが分かるのか」
高「まあな。どうやら、シリアを媒介として生き返るみたいだし、シリアをどうにかしてから奴を叩かないとどうにもならない」
シ「ふぇ、そうなんだぁ」
高「それに、シリアの力を使って再生してるから、再生を繰り返されると、いずれシリアが死ぬ」
レ「成程。犠牲を出さないコウガ殿らしい考えだな」
高「そんなんじゃねえよ。ただルシフェルを倒すための作戦なだけだ！！」
フ「雰囲気が変わっても、優しさは変わらないです」
高「るっさい！！。とにかく、相談に乗るためにある奴らを助けに行くぞ！！」
高雅は照れ隠しのような空間を開け、そそくさに入って行った。
その光景を笑いながら皆は後をついて行った。
その先は薄暗い牢獄の中だった。
高「親父、母さん、兄さん、迎えに来たぞ」
文「！？、高雅！？。無事だったのか！？」
紗「高雅なの！？」
勇「高雅！？」
やって来たのは文夫達がいる所だ。

高雅は触れることなく文夫達の鎖を解いた。
高「早速で悪いが相談がある」
文「何だ、相談って?。てか、雰囲気変わったな」
高「それは置いといて、ルシフェルについて知っている事を全て話してくれ」
紗「どういうこと?。それに、アリアは?」
高「まぁ、今からルシフェルを倒しに行きたいが、こいつを使って復活するんだ」
そう言ってシリアの頭をポンポン叩く。
文「そうか。ルシフェルはシリアを媒介とし、再生をしていたのか」
高「で、どうすればいいかなぁ~って迷っている所だ」
紗「成程ね。じゃあ、そのことは私達に任せていいわよ」
勇「ところで高雅、お前の嫁はどうした?」
高「アリアは嫁じゃない」
勇「あれ~、別にアリアの事は言ってないんだけどな~」
高「・・・殺すぞ」
勇「弟が兄に勝ると思っているのか?」
高「今の俺なら5秒あれば勝てる」
お互いに頭をぶつけ、睨みあう。
紗「あらあら、私の前で喧嘩をするんだ・・・」
紗奈恵が殺気を解放すると、勇気は体を跳ねらせて驚いた。
しかし、高雅の方は全く驚いてなかった。
紗「あら?。高雅は驚かないの?」
高「悪いが、もう母さんで怯える年頃じゃないんで」
紗「偉いわね。でも、本当にアリアはどうしたの?」
高「色々と事情があって今は寝てる。取りあえず、ルシフェルを倒せばアリアも必然的に起きるから」
勇「んな事やらなくても、王子様がキスをすれば起きるんじゃね?」
高「黙れ」
今度は高雅自身が勇人に殺気をぶつけた。

その量は紗奈恵を超え、勇人は腰を落としてしまった。
それを見ていた文夫が感心していた。
文「ほぉ、強くなったな高雅」
高「まぁな。それじゃ、シリアは任せていいか？」
紗「ええ、再生の事は任せて、あなたは行ってきなさい」
高「ああ。後、一つだけ条件がある」
紗「何かしら？」
高「シリアを殺すな。それだけだ」
紗「・・・ええ、分かったわ」
紗奈恵は高雅の条件を約束し、高雅はシリアを渡そうとした。
しかし、シリアは高雅にしがみ付いて離れようとしなかった。
シ「うぅ～」
高「こいつらの言う事を聞いて待ってろ。そしたら、また会ってやる」
シ「ほんとぉ？」
高「本当だから、さっさと行ってこい」
シ「うん！！」
シリアは快く返事をすると高雅を離れて紗奈恵の所へ向かった。
高「んじゃ、そっちは任せる」
紗「必ずアリアを救ってあげなさいよ」
文「息子が親父をぶっ倒してこい」
勇「必ず勝てよ」
高「分かってるさ、んじゃ」
高雅は三人の激励を受け、空間を開く。
行き先はルシフェルのいる場所だ。
入る前に高雅は皆の方に顔を向けた。
高「あー、フィーラ、レオ、エクス、サミダレ、お前らは留守番だ」
レ「なっ！？」
フ「何でです！？」
エ「何故僕もだい？」

高「正直に言うと足手纏い。だから来るな」
レ「では、何故A殿は連れて行くのだ？」
高「こいつは死んでもいいからな」
A「ちょ！？、おま！？」
高「嘘だ。でも、お前らが足手纏いのは本当だ。だから来るな」
高雅は酷い事を言いながらも皆の事を第一に考えた言葉だ。
それを、自ずと皆は理解してくれていた。
レ「分かった。我はコウガ殿とA殿の帰りを待つとしよう」
フ「悔しいけど、分かったです」
エ「僕らは一度負けている。それなのに、その負けた相手より強い奴に向かうのは間違いなく足手纏いだな」
サ「事実じゃし、しょうがないのぉ」
４人は快く引いてくれた。
高雅は内心ホッとし、静かに笑った。
高「ありがとな。行くぞ、A」
A「おうよ！！」
Aは高雅の声に快く返事し、二人は高雅が開いた空間の中へ入って行った。
他の者は二人の無事を祈りながら見送った。

ついた場所は高層ビルが並ぶ大都会の様な場所だった。
Aは全く予想だにしない所に驚き、辺りを見回していた。
A「ほえ～、てっきり暗雲が掛かった、いかにもラスボスっぽい場

所かと思ったぜ」
高「ここはルシフェルが創造で作った世界だ。広さは半径5キロ、それより外は空間の狭間に閉じ込められる」
A「ワーオ、ナニソレ？」
高「ようはブラックホールだ」
A「成程納得」
高「ここにいる一般人はお前ぐらいだ。それ以外は全員人外だ」
A「つまり、ここには敵とあの変な三人と俺らだけってことか？」
高「惜しいな、その変な三人は既に一人だ」
A「つえーなー、そのルシフェルって奴」
高「取りあえず、あっちに行くぞ。お前は活性で走れ。俺は飛ぶ」
A「じゃあ、競争な」
高「よーい、ドン」
高雅は勝手に声を掛け、勝手に空を飛んで行った。
それを見かねたAは慌てながら活性を使って走り出した。
A「テメっ！！、ずるっ！！」
二人の速さは異常で2キロ先の場所に30秒で到着した。
そこには、壊されたS－04とコイカの死体があるだけだった。
A「畜生・・・負けちまった・・・んで、用はこの死体か？」
高「・・・A、悪い」
A「ん？」
高雅が頭をポリポリ掻きながらAに謝った。
Aは意味が分からず首を傾げる。
すると、バラバラになっていたS－04が再生し、コイカがゆっくりと起き上がった。
高「罠だ、これ」
A「マジすか？」
高「マジです」
コ「あ・・うぁ・・・コロ・・ス・・」
S「データ　ヨミコミ　チュウ。ミッション　カクニン。サキムラ

コウガ　ト　Ａ　ノ　マッサツ」
Ａ「何だよ、この、かゆ・・・うま・・・状態の奴は!?」
高「何か、ロボのデータが書き換えられてるみたいだな」
Ａ「おい、どうすんだよ!?」
高「既に空間で閉じ込められてるから逃げられない。後、この女の方はマリアの力で復活してる。ロボはルシフェルの力でかなり強化されてる。さあ、どっちを選ぶ?」
Ａ「それって、戦うしかないってこと?」
高「んで、どっち?」
Ａ「・・・女の子を志望します」
高「あえて強い方を取ったか。お前らしいな」
Ａ「え!?、嘘!?。俺はただ女の子の方が良いなとおｍ「来るぞ!!」ＨＥＹ!!、マジかよ!?」
Ｓ－０４とコイカが同時に接近してくる。
高「ロボは責任もって俺が倒す。だから、お前もそいつを倒せ」
Ａ「殺すのは何か嫌だけど・・・しょうがないか!!」
高雅とＡは互いに向かい合うビルの壁を駆け登って行く。
そして、Ｓ－０４は高雅を追い、コイカはＡの方を追って行った。
こうして、二人の戦いが幕を開けた。

## 最悪の贈り物編　その１３、ｓｉｄｅ高雅

ビルを垂直に駆けのぼり、高雅は途中でガラスを割って中に入った。
中はオフィスビルだったのか、大量の机やパソコンが置かれていた。
高「人がいないのに、無駄に創り込んでいるな」
のんびりと周りを見渡している内に、後ろからエンジン音が大きくなってくる。
高「のんびりできないな。取りあえず・・・」
そう言って、高雅は取りあえず、適当な机の下に隠れる。
それと同時に、Ｓ－０４がガラスと壁を壊して入って来た。
Ｓ「ビビ・・ネツタンチ　ヲ　ハジメ　マス」
Ｓ－０４が熱探知を始める。
部屋全体を見回し、ある所で首が止まった。
Ｓ「ヒト　ノ　オンド　ト　オモワレル　バショ　ヲ　カクニン」
高「ありゃ？」
Ｓ「・・・シュツリョク　サイダイ。３オク　ド　ノ　クウカン　ヲ　ソウゾウ」
Ｓ－０４は机の下に３億度の空間を一瞬で創りあげた。
ちなみに、Ｓ－０４の最高出力は格段に上がっている。
３億度などは軽く出せるのだ。
そして、近くに遭った机、床は全て溶け、下の階へ繋がっていた。
Ｓ「ニゲタ　ウゴキ　ハ　ナイ。ニンム　カンリョウ」
高「あー、寒い～」
Ｓ「！？」
Ｓ－０４が高雅の声に反応して振り返る。
しかし、Ｓ－０４は辺りを見回しても高雅を認識できなかった。
高「いつまで熱探知してるんだよ、バーカ」
高雅はＳ－０４の目の前にいた。
だが、高雅の体温は気温と全く同じの為、熱探知では探し出すこと

が出来ない。
先程の熱は高雅が創造した物である。
高「おらぁ！！」
高雅はＳ－０４の頭目掛けて回し蹴りを喰らわした。
Ｓ－０４はかなり硬く、頭は飛ばずにへこんだだけだった。
しかし、高雅の蹴りはケタ外れの威力でＳ－０４は転がって外に吹き飛んだ。
もちろん、高雅自身は反動とかでダメージを受けていない。
高「しかし、強いな。威力だけでなく、虚無や消失とかで一撃必殺を狙ったのにな」
高雅は分かっていた。
Ｓ－０４はまだ動ける。
そして、必ず戻って来ると。
高「味方だったら厨二で敵だったら嫌な言葉だな」
そう言っている内に、エンジン音が近くなっている。
Ｓ－０４が来る前に、高雅は適当に武器を創造する。
とはいっても、創る物は既に決まっているのだが。
高「やっぱ、馴染んでいる双剣だろ」
高雅は二つの剣を装備する。
同時にＳ－０４が再びビルに潜入し、そのまま高雅に向かって体当たりをくりだす。
高「単調だな」
高雅は軽く横に避け、そのまま斬る。
しかし、斬ったものは感触がなかった。
完成度の高い偽物だ。
高「やべっ！？」
高雅の隙は少し残っていた。
それを逃さずに本物のＳ－０４が突進をした。
高雅は瞬時に盾を創るも、力が碌（ろく）に入って無く、ルシフェルの力を得たＳ－０４の突進で呆気なく砕けた。

高「つうっ！！」
高雅は何とか剣で受け止めるも、そのまま引きずられてしまう。
押し返そうにも、Ｓ－０４は異常な力で全く歯が立たなかった。
高（ルシフェルの野郎、こんなにも力をあり余ってたのかよ）
高雅はなすがままに吹き飛ばされ、ガラスを突き破って外に出た。
しかし、Ｓ－０４は止まることなく、隣のビル目掛けて突進を続ける。
そんな時だった。
高「あ」
Ａ「お？」
Ａもさっき高雅がいたビルに向かって飛んでいた。
しかし、Ａの場合は高雅と違い、コイカの顔面を殴ってそのまま突き飛ばしていた。
そのまますれ違い、Ａはビルの中へ入っていった。
高（どうやら、あっちは押しているようだな）
Ａの事を考えている内に、ビルに到達した。
そして、同じようにガラスを突き破り、部屋の壁に叩きつけられた。
高「あがぁ！！」
後ろの壁を活性したのか、相当の反動が高雅に帰って来た。
高「この、バカ力が。調子に乗るなよ！！」
高雅はそのまま虚無と静寂の入った蹴りを喰らわす。
だが、Ｓ－０４はその力すら防いだ。
高「計画通り」
高雅は既にこうなる事を予想していた。
狙いはＳ－０４の足下の床だ。
Ｓ－０４を通して足下の床を虚無と静寂で脆くしたのだ。
床はＳ－０４の重みに耐えきれずに崩れた。
Ｓ「！？」
いきなりだった為、Ｓ－０４は高雅を放して着地の方に集中した。
Ｓ－０４は下の階に着地し、すぐに上階を見上げる。

だが、そこには既に高雅の姿は無くなっていた。
高「遅(おせ)えんだよ！！」
高雅はＳ－０４の胴体を斬る。
だが、その鋼体はとてつもなく硬く、易々と斬れるものではなかった。
高「くそ、相当硬くなってるな」
Ｓ「スキアリ」
Ｓ－０４は背中のハッチを開けると、中から大量のコードを出した。
それは意思があるかのように高雅目掛けて襲い掛かって来た。
高「おっと」
高雅は空間を使ってやり過ごし、コードを回避して行く。
だが、少し甘かった。
Ｓ－０４も空間を使って来たのだ。
高「やべっ！！」
目の前に出されたコードに反応しきれず、高雅は拘束されてしまう。
拘束力はかなり強く、腕に力が入らずに双剣を落としてしまった。
高「このっ、放しやがれ」
Ｓ「ホウデン　ジュンビ。セッテイ　３チョウ　ボルト。ジュウデン　カンリョウ　マデ、アト　５ビョウ」
高「やばいって！！」
高雅は力を使って逃げようとするも、全く動けずにいる。
静寂を使っても治まらず、活性を使っても振り千切る事はできない。
破壊、消失・虚無を使っても、全く通用しない。
Ｓ「ホウデン　ジュンビ　カンリョウ。ホウデン　ヲ　カイシ　シマス」
高「ちょ！？、タンマ！！」
高雅の言うことなど聞いてくれず、Ｓ－０４が青白く光る。
だが、高雅は別の力を外から感じ取った。
高「ん、何だ！？。デカイ虚無がこっちに向かって・・・」
言い切る前に、その虚無はやって来た。

巨大な白いレーザーと化した虚無が突然外からやって来たのだ。
しかも、運よくＳ－０４だけに辺り、高雅はコードから抜け出せた。
高「何と言う補正だ」
ふと、自分の幸運に恵まれた事を思いながら落とした双剣を拾う。
しかし、虚無のレーザーが晴れたが、Ｓ－０４は全くの無傷だった。
高「あの虚無を喰らっても効かないか・・・」
Ｓ「ロックオン・・・ミサイル　ハッシャ」
高「そんな間にも既に攻撃準備かよ」
Ｓ－０４は腹のハッチを開き、中から数発のミサイルを飛ばした。
高雅は撃ち落とす事もなく、簡単に避ける。
だが、ミサイルはホーミング機能はなく、窓ガラスを突き破って外へ出ていった。
高（そうだ、外が硬ければ中は軟いはずだ。パターン的に）
高雅は勝手にそう思い込み、すかさずＳ－０４に前進する。
そして、ハッチが閉まる寸前に剣を投げた。
剣はハッチの閉まるギリギリで中に入るも、途中で挟まってしまった。
高「十分だ」
すると、剣が黒と赤のグラデーションの光に包まれる。
融合力で出来る爆破の力だ。
それも、ルシフェルの力を使った最強の爆発である。
もちろん、高雅は手加減などする気はない。
つまり・・・

ドゥオォォォォン！！！！

あまりの爆音に少し音が鈍くなっていた。
当然、高雅がいたビルはバラバラに崩壊。
隣接したビルも当然のごとく崩壊。
辺りには巨大な地響きが広がった。

高「これだけ強ければ、流石に壊れるだろ」
そう言って、瓦礫から出てきた高雅は空間に守られていた。
取りあえず、瓦礫を踏んでちゃんとした足場に立つ。
高「うん、ロボの殺気は無いようだな。てか、元々あいつに殺気は無いか」
高雅は頭の後ろを掻きながら後ろを振り返る。
目の前には、Ａが戦っているビルがそびえ立っている。
高「一応、邪魔はしないようにビルごと守ったが、あいつはどうやら意外に勝ちそうだな」
高雅の心遣いでＡのいるビルだけは何も起こっていない。
だが、周りのビルは粉々に崩れ落ちている。
高「一つだけ建っているビルも何か不自然だな」
そう言って、ビルを見上げる。
すると、妙に不自然な点に気がついた。
高「そういや、どうして青空なんだ？」
空は程良いぐらいに雲が掛かっている。
だが、太陽の姿は何処にもない。
どうして青空なのかが不思議に思うのだ。
高「・・・妙な趣味をしてるな、ルシフェルも」
ふと、一本になった剣を見た。
高「いつもは、アリアが何か喋ってくれるのにな。あいつの声、ずっと聞いてないな」
物想いにふける高雅。
そんな高雅に黒い影がさしかかった。
Ｓ「ビビ・・ガーピー・・・・」
高「太陽が無いのに、何で影が出来るんだ？」
そんな事を思うと同時に、Ｓ－０４が高雅の頭目掛けて拳を振るう。
高雅は瞬時にしゃがみ、Ｓ－０４から離れながら振り返る。
Ｓ－０４の体は黒焦げで動いているのが不思議なくらい壊れていた。
高「しぶといな」

S「ビビビビ・・・コノ　クウカン　ゴト　ジバク　シマス」
高「ちょ！？、それはまずいって！！」
高雅が止めに懸かろうとするも、いつの間にかコードが足に絡まっていた。
高「くそっ！！」
徐々に進む空間の崩壊に焦る高雅。
そんな時、Ｓ－０４の真上から光の反射が見えた。
高「だから、太陽が無いのに（ｒｙ」
その光は徐々に大きくなり、姿を現す。
高「あれ・・Ａか！？」
そして、Ａと思われる物が着地した瞬間、爆発が起きた。
高雅のように力で作った爆発とは違い、自然に発生したような感じだった。
Ａ「ふぅ、やれば出来るもんだな・・・ってあれ？」
高「良くやった、流石主人公」
ポンとＡの肩に手を置く高雅。
Ａの足下には既に息を引き取ったコイカと機能停止したＳ－０４姿があった。
Ａ「おいおい、ビルが全部亡くなってるぜ」
高「無生物にその漢字を使うな。取りあえず、どうやら閉じ込められていた空間から抜け出せたようだ」
Ａ「何、その敵を倒したら道が開くＲＰＧの設定は？」
高「ルシフェルが招待してるんだ。大人しく従ってろ」
Ａ「へいへい。所で、いつの間にビルが無くなってるんだ」
高「ここら辺に原爆が落ちたんだろ」
Ａ「へいへい、どうせお前の仕業ですこと」
高「分かってるなら聞くな」
Ａ「んで、次はどこに向かうんだ？」
高「この殺気が嘘じゃなければあっちに４キロだ」
高雅は指を指して道を教える。

するとAはすぐに足を活性させ、走りだした。
A「またレースな。次は負けねえぞ」
高「フライングとか卑怯を使って勝っても面白くねえだろうが」
高雅は走って行くAの前に空間を開き、ビルの壁の目の前に繋げた。
もちろん、Aは思いっきり壁にぶつかった。
そして、ヨロヨロと鼻をおさえながら高雅に近寄った。
A「おま、競技者を負傷させるなんてどんだけ悪質な妨害だよ」
高「また罠かも知れないだろ?。相手は殺気で読み取られるのを利用して罠に掛けたんだ。少しは用心しないとな」
A「主人公が恐れていて何が主人公だ!!」
高「主人公なんてどうだっていいんだ。今は敵の強大さを少しは身に染みてろ」
A「大丈夫だ。補正ぐらい掛かるって」
高「もういいや、こいつ。どうにでもなれ」
高雅が諦めた瞬間、Aは再び走りだした。
高雅はやれやれと首を振りつつ、後に続いた。

## 最悪の贈り物編　その１３、ｓｉｄｅ高雅（後書き）

次はＡの戦いを書きますので、話は進みません。

# 最悪の贈り物編　その１４、ｓｉｄｅＡ（前書き）

前回の話のＡ視点です。

# 最悪の贈り物編　その１４、ｓｉｄｅＡ

Ａは高雅と違って屋上まで駆けあがり、振り返って敵を待つ。
さらに、真の契約をして刀を構える。
Ａ「さあ、どっからでも掛かって来い！！」
自分でどっからでもと言っておきながら前から来ることしか考えてなかった。
当然、コイカが前から現れる事はなく、予想外の場所から現れた。
コ「ウァァ・・・」
タ「主よ、上だ！！」
Ａ「嘘っ！？」
咄嗟に見上げ、そこに大きく口を開けて迫って来ているコイカの姿があった。
Ａ（いや、これはチャンスか！？）
Ａの判断は逃げるかと思いきや、あえて攻撃に出たのだ。
相手は体を使っての攻撃、Ａは武器を使っての攻撃。
完全に有利だと思い込んだＡはあえて攻撃に出た。
Ａ「甘いッ！！」
瞬時に剣を振り上げ、頭を叩き斬った。
だが、刃（は）は皮膚すら斬る事は出来なかった。
さらに、コイカは刃に触れているに関わらず、活性で溶けることはなかった。
Ａ「なっ！？」
コ「キシャァァァ！！」
タ「主よ、このままでは押し切られる！！」
Ａ「分かって・・・らぁ！！」
Ａが踏ん張り、何とかコイカを突き飛ばす。
コイカは宙を舞い、屋上から落ちた。
Ａ「硬（かて）ぇ、どんだけだよ、おい」

タ「主よ、奴はどこからとなく現れたのだ。広い場所では不利ではないか？」
A「そうだな・・・よし、ビルの中に入るか」
Aは中に入るドアを探し、辺りを見回す。
すると、一つのドアを見つけ、ドアを破壊して中に入った。
階段を適当に駆けおり、ある程度降りたところで廊下に入った。
そして、また適当に駆け、適当な部屋に入った。
A「えっと・・・ここは？」
タ「応接室、といったところか」
その部屋は黒いソファがあり、真ん中には大きな机がある。
A「ここなら対応できそうだ」
タ「敵は未知数だ。気を抜くでないぞ」
コ「バァァア・・・」
A「気を抜く前に現れた！？」
コイカがガラスに張り付いてAを睨んでいた。
A（あれ、これってまたチャンスじゃね！？）
コイカをみる限り、ガラスを割ろうと殴っている。
しかし、ガラスは強化されているのか、全く割れない。
A（いや、あの化け物が殴って壊れないなら、こりゃ俺が壊せそうにないか？）
だが、コイカのパンチをみる限り、碌に力が入っていない。
まるで、子供が適当にドアを叩いているような感じだ。
それを見たAはもしかするとと思い、攻撃の準備に出た。
A「・・・よし、ちょっと本気出すか」
タ「？、何をする気だ、主よ？」
A「まあ見てなって。でも、活性は手伝ってくれ」
タ「承知した」
Aはまず、壁と自分に活性を掛ける。
そして、壁に立つと膝を曲げ、コイカに狙いを定める。
A「準備完了。何で壁に立てるかは突っ込まないでくれ」

そんな事を零し、拳と足に最大限の活性を込める。
A「喰らいやがれぇ!!」
壁を力の限り蹴り、コイカの顔面目掛けて拳を突きだした。
すると、案の定うまく行き、ガラスを突き破ってコイカの顔面を殴った。
勢いは止まることなく、そのまま向かいのビルへ飛んで行った。
そんな時だった。
高「あ」
A「お?」
高雅もさっきAがいたビルに向かって飛んでいた。
いや、飛ばされていたと言う方が正しい状態だ。
A(あいつが負けてる!?。まさか、本当に強いのってあっちのほうじゃ・・・)
タ「主よ!!、油断するな!!」
気が高雅の方に向いており、Aはコイカの事を忘れていた。
コイカはAの腕と顔面を掴み、ぐるりと半回転して立場逆転した。
しかし、Aは視界が塞がれており、どうなったか分からなかった。
A「くそっ、見えねえ」
タ「主よ、衝撃に耐えるのだ」
タイトがそう言った瞬間、ガラスを突き破る音が聞こえた。
それでも、Aが地面に落ちることなく、そのまま壁にぶつけられた。
A「いってぇ!?」
体は活性しているも、かなりの衝撃がAを襲った。
Aは一瞬だけ怯(ひる)むも、すぐにコイカの腹に蹴りを喰らわす。
しかし、コイカはかなり硬く、何とか引き離すことは出来たが足に衝撃が残った。
A「ってぇ・・・こんな硬(かて)え奴を斬ることなんて出来るのかよ?」
タ「諦めるな、主よ。何か方法があるはずだ」
A「何かって何だよってツッコミたくなるセリフだな」
タ「それは・・・分からない」

A「悪かった、変なこと言って」
そんな呑気に会話している内に、コイカは既に行動に入っていた。
口を大きく開き、虚無の光を収束していていた。
A「なっ、やべ」
Aが気付いた途端にコイカは虚無の光を放った。
Aは活性で素早く逃げ、何とか虚無の光を避けた。
A「今の・・・弱くね？」
タ「つまり、次がある事だ」
タイトの言った通り、コイカはまた同じように虚無の光を収束していた。
Aは避けようとするも、後ろを見て少し躊躇してしまった。
A「後ろに高雅がいるビルが・・・ま、いっか」
Aの戸惑いは一瞬で消えた。
高雅の事を信頼しているのか過剰評価しているのか、Aは避ける準備に入る。
しかし、コイカの放った虚無は超特大だった。
A「ゑ？」
タ「まずい！！」
想定外の範囲にAは口を開けて間抜けな顔をする。
はっきり言ってAの避けられるデカさではないのだ。
A「ややややばいって！？。うわあああ、穴があったら入りたいいいいい」
タ「ッ！？、主よ、床に穴がある！！。そこに逃げるのだ！！」
A「ご都合主義キタコレ！！」
Aはすぐに穴に向かってダッシュし、スライディングしてギリギリ間に合った。
下の階に逃げたAはコイカが気付かない内に作戦を考え始めた。
A「さぁて、このゆとりの合間に何か考えないと」
タ「やはり、拙者らでは力不足かもしれない。ここは耐えてコウガ殿に頼るのがいいかもしれない」

A「主人公が仲間に頼るなんて情けねえよ。絶対に俺らがどうにかするんだ」
タ「しかし、拙者らではあやつを斬る事はできぬ。どうやって勝つ気である？」
A「どうもこうもない。俺らには活性と言う最大の武器がある。それを使って勝てなかったことなんて、今まで一度もない」
タ「いや、あるぞ。普通に」
A「俺が負けを認めてないからノーカンだ！！」
コ「アァァ・・」
コイカがAの通った穴から顔を出した。
A「あれ、もう来たか」
タ「何も考えが無いぞ」
A「またご都合主義が助けてくれる」
コ「キシャアァァァ・・」
コイカは口からクナイを数発飛ばしてくる。
Aは刀で難無く落とし、反撃に出る。
だが、コイカはすかさず飛び降り、逃げまどう。
A「待ちやがれ、この鉄壁女」
Aが追いかけるもコイカはただひたすら逃げる。
A「意味が分からねぞ」
タ「敵に策があるかもしれん」
A「あんなゾンビっ子に策を思いつくなんて考えられないけどな」
タ「ならば、何故あやつは奇襲をしたのだ？」
A「そりゃ・・・そうだな」
Aは最初に予想外の奇襲された事を思い出し、タイトの言っている事に納得した。
すると、コイカは急にAに向かって飛びかかって来た。
Aは最初と同じように顔面目掛けて剣を振り下ろすが、結果は変わらなかった。
A「くそ、ちょっとでも傷が付いたらいいのになぁ」

Aは硬い事を知っておいたため、押し負ける事は無く、簡単に弾き返した。
コイカと距離を取ったその時だった。
突然、ガラスを突き破ってミサイルが飛んで来たのだ。
A「ちょ!?、どこのだれの援護射撃!?。いや、このさい援誤射撃だ!!」
などと言っている内にミサイルは不思議な軌道を描き、予測不能の動きだ。
だが、幸いな事にミサイルは全てコイカの方へ飛んで行った。
A「ワォ、凄まじいぃ」
Aは床に刀を指して爆風に飛ばされないように踏ん張っていた。
ビルは崩れるかと思ったが、Aが活性させてやったので崩れることはなかった。
煙が晴れ、コイカを見ると少しばかりダメージを受けていた。
A「今日の俺は超ごちゅごうしゅぎ」
タ「噛んだな」
A「黒歴史が新たに刻まれた瞬間だ」
タ「いいから、今の隙に大きな攻撃を」
A「その辺に抜かりはない。今まで溜めてきた活性がある」
実はAは最初から別に活性を溜めていたのだ。
その量は先程まで使っていた量とは桁違いである。
A「さぁ、俺の最大限にまで溜めてあった活性を今こそ使う時だ!!」
その活性はあまりの強さに周りの空気が発火する。
A「まさに、炎の剣士状態だぜ」
タ「そうだな」
A「・・・いや、突っ込んでください」
タ「?」
A「もういいです」
Aが期待していた事はスルーされ、取りあえずコイカに接近する。

コイカは先程のダメージが残っており、全く動けない。
A「どりゃぁ!!」
Aの最大の斬撃をコイカに浴びせる。
すると、さっきまで傷一つ付かなかったコイカの体に軽い傷がついた。
虚無のレーザーの使い過ぎとミサイルのダメージで体が柔らかくなったのだ。
A「キタコレ!!」
タ「よし、一気に叩きこむのだ!!」
Aは休むことなく、一気にケリを付けに掛かる。
燃費切れのコイカを刻むのは容易なことであり、Aの勝利は既に確定していた。
A「よし、いっちょ大技で決めてやらぁ!!」
Aはコイカに瞬時に踏み込み、コイカを斬って外に飛ばした。
そして、Aはコイカに吸い込まれるように近づき、剣を握って空中で滅多切りにする。
A「〇・天・空!!」
何か叫びつつ、時折、蹴りを入れてフルボッコにする。
斬るたびに周りの空気が燃え、Aの周りは炎に囲まれていた。
そして、最後の一撃に剣を大きく振り上げ、叩き斬ると同時に叩き落とす。
軽く高さは１００メートルはあっただろう。
その間にさらに活性を追加する。
そして、地面が見えてきた所でAは衝撃に耐えるべく活性を自分にする。
A「くたばれえええええええええええ」
そして、地面についた瞬間、巨大な爆発が起きた。
Aの斬撃、蹴り、そして最後の爆発をもろに受けたコイカは既に息を引き取った。
A「ふぅ、やれば出来るもんだな・・・ってあれ?」

ふと、足下が地面とは違い、妙な機械の上だと気付く。
高「良くやった、流石主人公」
すると、高雅の声が聞こえ、それと同時に高雅はＡの肩に手を置いた。
Ａの足下にはさっき息を引き取ったコイカと機能停止したＳ－０４姿があった。
Ａ「てかおいおい、ビルが全部亡くなってるぜ」
コイカとの戦いに集中していたのか、大〇空の時に周りが見えていなかった。
その為、いざ周りを見ると最初見た時とは違い、原爆にでもあったかのようにビルが瓦礫と化していた。
高「無生物にその漢字を使うな。取りあえず、どうやら閉じ込められていた空間から抜け出せたようだ」
Ａ「何、その敵を倒したら道が開くＲＰＧの設定は？」
高「ルシフェルが招待してるんだ。大人しく従ってろ」
Ａ「へいへい。所で、いつの間にビルが無くなってるんだ」
高「ここら辺に原爆が落ちたんだろ」
Ａ「へいへい、どうせお前の仕業ですこと」
高「分かってるなら聞くな」
Ａ「んで、次はどこに向かうんだ？」
高「この殺気が嘘じゃなければあっちに４キロだ」
高雅は指を指して道を教える。
するとＡはすぐに足を活性させ、走りだした。
Ａ「またレースな。次は負けねえぞ」
高「フライングとか卑怯を使って勝っても面白くねえだろうが」
高雅は走って行くＡの前に空間を開き、ビルの壁の目の前に繋げた。
もちろん、Ａは思いっきり壁にぶつかった。
そして、ヨロヨロと鼻をおさえながら高雅に近寄った。
Ａ「おい、競技者を負傷させるなんてどんだけ悪質な妨害だよ」
高「また罠かも知れないだろ？。相手は殺気で読み取られるのを利

用して罠に掛けたんだ。少しは用心しないとな」
A「主人公が恐れていて何が主人公だ！！」
高「主人公なんてどうだっていいんだ。今は敵の強大さを少しは身に染みとけって」
A「大丈夫だ。補正ぐらい掛かるって」
高「もういいや、こいつ。どうにでもなれ」
高雅が諦めた瞬間、Aは再び走りだした。
Aは止まることなく、目的地へ駆けて行った。

# 最悪の贈り物編　その１５、感謝

Ａ「どぅおおおおおおおおおおお」
高雅の指した方向を駆け続けるＡ。
高雅を置いて行き、完全に独走状態になっていた。
Ａ「よし、あいつが○ラーを出し続けない限り勝てる！！」
とか何とか言いつつ走る事５分。
目の前に見えてきたのは禍禍しいオーラを放つ者。
傷だらけで力尽きている者。
禍禍しいオーラに対して双剣を構える者。
その三人がＡの視界に入った。
Ａ「・・・って、おい！？。何でお前が居ると！？」
高「は？。普通に空間が使えたからそれを使ったまで」
Ａ「最初から使おうぜ・・・」
高「しゃーねーだろ。コイカ達の方に行く時は使えなかったんだよ」
Ａ「俺の活性を返せ！！」
高「無理だ」
キッパリと言う高雅にＡはムキになる。
そんな二人の間に突風が通り、意識を敵に向ける。
ル「お前らは何しに来たんだ？」
高「取りあえず、その体を本人に返して、お前は成仏しろ」
ル「実の親に酷い事を言うとは、さすが私の息子だ」
高「そんなことで流石を使うな。問答無用でさっさと成仏しろ」
ル「残念だがそれは出来ない。何百年と待ち、遂にやって来たこの機会を逃す訳にはいかない」
高「そうかい、だったら力尽くで止めようじゃねえか」
高雅は双剣を構え直し、殺気を解放する。
Ａも刀を構えて同じように殺気を出す。
ル「遅い」

A「なっ！？」
Aが気付いた時には既に後ろを取られていた。
高「じゃあ、テメーはもっと遅い」
だが、高雅も負けずとルシフェルの後ろを取っていた。
ル「ほぉ、流石に一度負けてしまったことはある。こうも簡単に後ろを取られるとは」
高「さっきのロボは殺気が無くて読み取れなかったが、お前は有生物だから色々と分かるんだよ」
ル「そうか。やはり、このまま殺すのは惜しいな。どうだ、お前ら。私の仲間にならないか？」
高・A「断る」
その瞬間、Aは高く跳び上がった。
そして、高雅はルシフェルの背中目掛けて大きく斬りかかった。
しかし、斬ったのは残像であり、今度こそ、ルシフェルは高雅の後ろを取った。
A「仕込み済みだ！！」
後ろに回ったルシフェル目掛けて、Aが空中から刀を振り下ろしていた。
ルシフェルが一瞬Aに気を取られている内に高雅は振り返りざまに剣を振るう。
ルシフェルは後ろに跳んでやり過ごそうとするも、高雅はそれすらも読んでいた。
高「読み済みだ！！」
高雅は剣をそのまま投げたのだ。
投げた剣は後ろに跳んだルシフェルに沿って綺麗に跳んでゆく。
ル「ふん」
高「ちっ」
ルシフェルは剣を高雅に向けて弾き返した。
高（お互いに読み合いの試合だな、こりゃ）
実はこの後、Aをぶん投げて追撃をしようとしたが、投げる軌道に

剣を弾き返されてしまった。
Aが弾いてくれると思いたいが、ミスれば確実に死ぬ。
それに、投げると言っても、マッハを超える為、事前に教えてもAでは反応できないだろう。
その事を踏まえ、高雅は追撃を止めたのだ。
高雅は剣を避けて、スルーする。
A「どした？。投げるんじゃなかったのか？」
高「あのまま投げれば、お前の脳天に剣が刺さるから止めた」
ちなみに、高雅は殺気を操って相手に自分の考えをも伝える事ができるのである。
だから、Aは最初から高雅の後ろに跳ぶ気だったのだ。
ル「では、攻守交代だ」
ルシフェルがそう言うと同時に、Aの腹に波動が撃ち込まれた。
A「ごふっ！？」
高「なっ！？」
ル「ふふっ」
ルシフェルは高雅を無視してAに追撃を仕掛けようとする。
それを黙って見る高雅ではない。
すかさず、Aの前に立ちはだかって援護する。
ル「だから、遅い」
高「何っ！？」
高雅はルシフェルの行動が分かったとしても止める事が出来なかった。
分かっていても、その力の差で止める事が出来なかったのだ。
そのままルシフェルはAを空に蹴り飛ばしてさらに追撃を続ける。
高「待ちやがれ」
高雅も慌ててAとルシフェルを追うも、速さの違いが歴然とあった。
ルシフェルはAをさらに蹴りあげ、どんどん上へと飛ばしてゆく。
最後にルシフェルはAの上に回り込み、追ってくる高雅目掛けてAを一気に突き落とした。

高「なっ、うぁ！？」
Aを受け止めるも落下は止まらない。
結局、高雅は止まる事が出来ず、Aと一緒に地面に叩きつけられた。
かなりの衝撃が二人を遅い、動けない状態の時に、ルシフェルが二人の所に降りて来た。
ル「残念だ、お前らを殺すのは惜しいが仕方ないな」
そう言って、ルシフェルは高雅とAの肩を軽く叩いた。
その瞬間、高雅とAに突然胸の苦しみが襲った。
A「うっ！？」
高「て・・テメ・・・」
ル「お前が欲しかったマリアの力さ」
ルシフェルは高雅とAにマリアの力を掛けたのだ。
それで、二人の命を摘み取ったのだ。
ル「永遠に眠れ、未熟な息子よ」
高「く・・・そ・・・・・・・・・・おぼ・・え・・・て・・ろ・・」
A「あ・・花畑・・・見えない・・・・・」
二人の心臓は停止した。
ル「くくくく・・・はははははは！！」
完全に邪魔がいなくなり、抑えていた笑いが今になって込み上げてきた。
ルシフェルの笑い声が辺りに響き渡り、木霊が返ってくる。
ル「これで天界も現世も私の物だ。まずは全ての有生物に私の偉大さを知らしめてやる。そして、天界を滅ぼし、私の空間を広めるのだ」
ルシフェルは気が済むまで笑い続けた。
勝利した者の至福の時を味わいながら。

？「・・・て・・・・よ・・」
高「・・・・・ん・・・・あ・・？」
？「きて・・・起きてよ、高雅」
高「んあ・・・くぅぅぅぅ」
誰かに起こされ、大きく背伸びする高雅。
ふと、自分の状況を思い出した。
高「・・・・あ、俺死んだ」
漠然と自分の事を思い出す。
そして、天国か地獄にいると思って周りを見渡すも、そこは両方とも違った。
辺りには空に浮かぶ島々があり、高雅もその一部に乗っていたのだ。
だが、一つ一つの島は小さく、半径１０メートルの真っ平らな床だった。
？「驚かないのね」
高「お前・・・あれ？」
傍に誰かが居り、顔を見ようとするも黒いもやが掛かって見る事が出来なかった。
しかし、見覚えのある蒼いロングの髪であった。
？「高雅、お願い。ルシフェルを倒して」
高「いや、死人に頼むのはおかしいだろ。生きてるレオや義父さん達に頼んでくれ」
？「ダメだよ。高雅じゃないと誰も勝てないよ」
高「てか、お前誰だよ？。何で俺の名前を知ってんだよ？」
？「それは・・・ゴメン、教えられない・・・」
高「意味が分からねえよ、ったく」
高雅は不貞腐れて再び横になる。
？「ちょ・・ちょっと」

高「いくらなんでも根拠が無過ぎる」
？「それは私だから？。アリアちゃんだったらいいの？」
高「な・・何でそこでアリアを出す。大体、何でアリアを知っている？」
？「くすっ、動揺してる」
高「動揺なんてするかよ、あんな奴に・・・」
？「あんな奴ってこんな顔？」
高「そーそー、そんな・・って、アリア！？」
ふと見上げるとアリアの顔があったことに驚いた。
だが、さっきまで話していた女性とは別人である。
高「おまっ！？、何でここに！？」
？「私が連れてきたのよ」
ア「そう言う事だから」
高「納得できるか！！。テメェ、いい加減に名乗りやがれ！！」
？「だから、教えられないのよ。それより、アリアちゃん」
ア「はい？」
女性がアリアを呼んで耳打ちする。
だが、高雅にとっとそれは無意味だった。
高「おい、アリアを使って頼んでも無駄だぞ」
？「あら、分かっちゃうんだ」
高「殺気を読み取るまでもなく分かるわ！！」
ア「殺気を読み取る？」
高雅の言葉の意味をアリアは理解していなかった。
アリアは高雅が7年もの戦いをしていた事は知らされていないからだ。
高「てか、お前らって並んでみると双子のようだな。髪の色も声も喋り方も似てる」
ア・？「そうかな？」
二人同時に首を傾げる。
仕草まで同じだと、さすがの高雅も呆れていた。

？「まぁ、それもそうかもね。アリアちゃんは色々な所が私と似てるもの」
ア「そうなの？」
？「うん。特に、好きになる人なんて全くの同じよ」
ア「ええ！？」
唐突なセリフが飛び出し、慌てるアリア。
その様子に高雅は首を傾げていた。
高「何だ？、好きな人か天使とかいるのか？」
ア「え！？・・・うん、一応／／／」
高「ほー・・・てか、そんな話はどうでもいい！！」
ア「良くないよ！！」
高「は？」
ア「えぁ・・いや、その・・・」
？「そろそろいいかな、二人とも」
二人のやり取りを見て、取りあえず口を挟んだ。
？「とにかく高雅、それとアリア。あなた達は今から生き返らせるから、ルシフェルの野望をくい止めて」
高「生き返るていっても、マリアの力で死んでいる俺達をどうやって・・・」
？「いいから、私に任せて。いくらなんでも本人より勝ることはないから」
高「本人？」
？「それじゃ、早く行った行った」
女性は高雅とアリアの背中を押し、島から突き落とした。
高「ちょ！？」
ア「え！？」
？「行ってらっしゃい。結婚祝いはその時に出来なさそうだから、今のうちにお祝いで私の力を完全に使えるようにしてあげる」
高「お前、何言って・・・」
ア「きゃあああああああああああ」

高雅とアリアは落下して行き、元いた場所から見えなくなっていた。
？「お願いね、高雅。私はもう消えるから・・・声・・・もう聞けないよ」
そう呟いた途端、周りの島々が突然崩れ始めた。
この空間は女性が一人で全て創っていたのだ。
それが限界に達し、崩壊を始めたのだ。
？「私、最後まで最低の母親だったね。高雅を幸せにできたかな？」
徐々に光の粒となり、体が消えてゆく。
力が入らなくなったのか、その場で腰をおろして手で顔をおさえた。
そして、手の隙間から涙が零れ落ちてきた。
？「ぐす・・・私なんか・・・子供を産む資格なんて最初から・・・ッ！？」
泣き崩れても自分の体の消滅は進む。
自分の顔を隠すための手が先に消えてしまった。
その時、地面にある字が彫られていた。
？「・・・・・・・えぐ・・・バカな・・・息子よ・・・ったく・・・」
最後に女性はその字を見て微笑んだ。

“ありがとう、母さん”

そして、女性、マリアは完全に消えた。
しかし、その最後は彼女にとって悔いはなかっただろう。

# 最悪の贈り物編　その１６、高雅ＶＳルシフェル（１）（前書き）

タイトルが何も思いつかなかったｏｒｚ

# 最悪の贈り物編　その16、高雅VSルシフェル（1）

高雅達を倒したルシフェルは今まさに現世に行こうとしていた。
空間を開き、顔を出して中を覗く。
そこは、緑淵町の空だった。
ル「まずは緑淵町を滅ぼすか。そして、私の偉大さを知らしめてやろう」
ルシフェルが手に巨大な爆破の力を収束する。
そして、静かにその力を落とした。
その時だった。
高「どけぇ！！」
ル「ぐおっ！？」
高雅ががら空きだった背中に飛び蹴りを喰らわして一緒にルシフェルの空間を出た。
高雅は落ちてゆく爆破の力を虚無で消し、そのまま一軒家の屋根に着地した。
ルシフェルも空中でバランスを立てなおし、一軒家に着地した。
ル「お前、何故生きている！？」
高「厚かましいお前の嫁に生き返させられたんだ」
ル「マリアか・・・まだ、残骸があったか」
高「安心しろ。もう成仏した」
ル「そうか。なら、手間が省けた。マリアはかなりの邪魔ものだからな」
高「自分の嫁を邪魔ものとか・・・最低な奴だな」
ル「私の計画を邪魔する奴は皆、邪魔ものだ。もちろん、お前もな」
高「そりゃ、お前のバカな思考回路を理解してくれる奴なんている訳が無い。だから、俺はお前を倒す」
高雅は真横に空間を開き、その中に手を伸ばす。
そして、思いっきり何かを引っ張りだした。

ア「うわぁっとととと!?。もう、もっと優しく引っ張ってよ!!」
高「知るか」
取り出したのはアリアだった。
その光景に少しならずルシフェルは驚いていた。
ル「ほぉ、アリアも生き返っていたとは」
ア「あれ、最高指揮官さん?」
高「今は違う。ルシフェルの意思が乗っ取っている。俺らが倒す相手だ」
ア「そっか。うん、分かった。所でコウガ、私がいないのに、どうやって空間の力を使ったの?」
高「お前には戦いながら説明してやる。真の契約をするぞ」
ア「うん」
高雅は真の契約を交わし、双剣を構える。
すると、アリアは高雅の違いを感じ取った。
ア「・・・何か、変わったね」
高「かれこれ7年も会ってないんだ。変わってもおかしくない」
ア「な・・・7年!?」
高「その説明も後後(のちのち)」
ル「準備はいいか?」
ルシフェルはどこからとなく銃を取り出した。
見た目は小型のピストルだが、高雅は警戒を怠らない。
ルシフェルは高雅の頭目掛けて一発放った。
だが、高雅は撃たれる前に動いていた為、当たる事はなかった。
高「おらぁ!!」
高雅はルシフェルの後ろを取り、剣を突き刺す。
しかし、ルシフェルは振り向きと同時に避け、さらに高雅の側頭部を殴り飛ばした。
高「つぅ!!」
ル「死ね」
吹き飛んだ高雅に追撃の銃弾を数発放つ。

何とかアリアが虚無のシールドを張り、弾を防いだ。
その間に高雅は速度の力を溜め、もう一度接近する準備をしていた。
高「アリア、お前の速度も借りるぞ」
ア「ちゃんと返してよ」
高雅はアリアの速度の力も溜め、反撃の準備に出る。
そして、シールドが消えた瞬間、ルシフェルの正面目掛けて突っ込んだ。
高「喰らえ！！」
ル「！？」
アリアの力を借りた速度は、さっきまでの速さとは段違いでルシフェルは反応が遅れた。
高雅は勢いを殺さずに斬りかかるも、ルシフェルは掠り傷しか負わせなかった。
そのまま高雅は飛んで行くも、ルシフェルは剣の紐が伸びているのに気付いた。
それは、自分の真横に突き刺さっている剣から繋がっていた。
ル「くっ」
ルシフェルはすぐに破壊しようとするも、そのときは高雅を見失っていた。
高「うらぁ！！」
ル「がはっ！？」
高雅は紐の伸縮を利用した反動でラリアットをかました。
高雅はそのままルシフェルを山へ叩きつけた。
巨大な砂の粉塵が舞い、二人の姿が見えなくなる。
高「・・・くそ、ギリギリで避けられた」
高雅の足下には大きくへこんだ山だけでルシフェルの姿はなかった。
辺りを殺気で探すも、感じ取ることは出来なかった。
ア「コウガ、上！！」
高「何！？」
見上げると、煙から微かにルシフェルの姿が見えた。

高雅はすぐに空間を開いてルシフェルの真横に現れる。
しかし、そこで会ったのは適当に創られた人形だった。
ア「あれ、違う!?」
高「くそ、どこにも殺気が見当たらない」
辺りを見回しても、殺気を感じ取ろうとしてもルシフェルは見つからない。
ア「どうしよう、コウガ?」
高「待て。今、色んな空間を調べて探し出してる」
高雅は天界やさっきいたルシフェルの空間、セイクリッドなどあらゆる空間を調べた。
だが、ルシフェルの姿は何処にも見当たらない。
そんな隙だらけの高雅の側頭部にひんやりとした何かを突きつけられた。
ル「チェックメイトだ」

ズガンッ!!

言葉と同時に発せられる銃弾。
そして、貫かれる頭。
ア「コウガ!?」
いきなりの事に驚きを隠せないアリア。
そんなこと関わらず、頭から血を流しながら落ちてゆく高雅。
ル「残念だ。殺気に頼りすぎたな」
高「テメーがな!!」
ル「ッ!?」
ルシフェルの頭の上から空間が開き、そこから高雅が現れた。
高雅は手と手で握り、ルシフェルの頭をダンクした。
高雅は追撃はせずに空間を開いてそこからアリアを取り出した。
ア「コウガ、いつの間に創造を!?」
高「さっきルシフェルを探している時だ。それと、俺はマリアの力

で作ったもう一人の高雅だ」
ア「え!?」
高「安心しろ、記憶も能力も全て同じだ」
ア「そうなの!?」
高「そうなんだ。ほら、来るぞ」
高雅が指を指した方向にはルシフェルが新しい武器を手にしていた。
今まで使っていた銃は捨て、今度は槍を手にしていた。
ル「本当に惜しいな、お前を殺すのは」
高「負け惜しみは負けてから言え。・・・次は槍か」
ル「見せてやろう。私の8割の力を」
高「最初から本気で来やがれ!!」
高雅とルシフェルは同時に接近した。
そして、お互いの得物を打ちつけ、甲高い音が辺りに響いた。

変わってセイクリッド。
文夫達は牢獄からナノトムの部屋へ移動していた。
部屋に入った途端、異変に気付いたのは言うまでもない。
フ「大変です!!。アリア様がいなくなってるです!!」
レ「何!?」
エ「まさか、誰もいない隙に攫(さら)ったのか!?」
紗「どうやら、そうみたいね」
紗奈恵が意味深げな微笑を浮かべて同意する。

だが、誰も紗奈恵の考えに気付かなかった。
サ「一体、誰がじゃ!?」
文「このセイクリッドに足を踏み入れるとは相当な者だな」
勇「やばい奴なんだな」
紗「そうね。天界一強いかもね」
レ「やはり、ルシフェルか!?」
強いという言葉に、すぐに答えを出すレオ。
しかし、紗奈恵はその答えを期待していなかった。
紗「あなた、仲間を信じてないのかしら?」
レ「どういう・・・意味だ?」
勇「推測の仕方が違うんだよ。そもそも、死体を欲しがる奴はいないと思う」
エ「では、アリア君は何らかの方法で生き返り、そして連れて行かれた、とでも言いたいのかい?」
紗「そうね。それが妥当かしら」
フ「バカバカしぃです!!。一体、ナノトム以外に誰が生き返させられるです!?」
紗奈恵の適当な発言にフィーラが厳しく言う。
紗「でも、ナノトム以外に使える者もいないとは言えないのよ」
フ「それは・・・そうかもしれないです・・・けど、確証がないです!!」
紗「そんなの、いない事にも確証が持てないわよ」
フ「あ・・う~・・・」
フィーラは困り果て、うなだれてしまった。
紗「くすっ、まだまだね」
レ「しかし、その言いようでは何か心当たりがあるみたいだな」
紗「中々の洞察力ね」
エ「では、本当にいるのかい?」
文「たった一人な。そのお方は完全に消滅してしまったけどな・・・」

紗「まぁ、アリアがどこにいるかは見当がつくけど」
そう言ってある場所に空間を開く。
その先には高雅とルシフェルが互いに打ち合っていた。
フ「コウガ様です！！」
レ「ああ。それに、あの剣はアリア殿だ」
エ「本当にルシフェルと戦っているのだな」
サ「皆で助けに行くかのぉ」
紗「それだけはやめなさい」
紗奈恵がサミダレの提案を否定する。
紗「彼らは殺気をも操り、強大な力と私達には無い力を使って戦っているのよ。行っても邪魔なだけね」
レ「・・・考えればそうだな。我々では力不足だな」
エ「仕方ない。僕らは見守ろう」
サ「悔しいが、それが一番じゃな」
シ「ふぇ？、おにいちゃぁん？」
今までジッとしていたシリアが空間越しに高雅の姿を見て反応した。
紗「こら、絶対に向かっちゃダメよ」
シ「分かってるよぉ」
紗「なら、いいわよ」
文「しかし、あいつがルシフェルを倒せるのか？」
紗「いくら意思だとは言え天界で最強の位置に君臨しているルシフェルを倒すのは正直、無謀な話ね」
フ「大丈夫です。コウガ様ならやれるです」
フィーラが自信満々に言う。
それを見ていたレオ達も少し笑ったが、考えている事は同じだった。
根拠などはないが、高雅なら必ずやってくれる。
今までがそうだったから。
レ「確かに、コウガ殿なら大丈夫だ」
エ「コウガ君は強いからな」
サ「心配せずとも、良い結果を出してくれるじゃろ」

心の中で信頼しきっていた彼らに迷いはなかった。
紗「そう」
その言葉に紗奈恵も安心した。
そして、同時に嬉しさも込み上げていた。
紗（高雅、こんなにも良い友達を持ったのね。だから、絶対に負けてはダメよ）
紗奈恵はそう思い、高雅の無事を祈りつつ戦いの様子を見た。
皆も紗奈恵と同様に高雅の戦いを見守った。

# 最悪の贈り物編　その17、高雅ＶＳルシフェル（2）

高雅とルシフェルの戦いは、ますます激しくなっていた。
吹き飛ばしたかと思えばすぐに接近し、吹き飛ばし返す。
やっとの思いで掠り傷を負わせたと思えば、すぐに同じ傷を負わせる。
そんな一進一退の攻防が続き、やがて辺りは夜の闇に包まれていた。
さらに、高雅とルシフェルの戦いにより、緑淵町の住民は避難を強いられていた。
高「つぅ・・うらぁ！！」
ル「ぐっ・・・ふん！！」
互いの攻撃が通り、両者のダメージは大きかった。
それでも、攻撃の速度を落としたりはしていない。
高雅はルシフェルの攻撃を大きく弾いて距離を置いた。
ルシフェルは追撃をせずに、その場で落ち着いた。
高「ぜぇ・・・ぜぇ・・・つらいなぁ・・・」
ア「大丈夫？。まだ行ける？」
高「ああ。だが、このままだとジリ貧だな。お互い様だが」
ア「何か手はあるの？」
高「全くない。相手のミスを拾う以外はな」
ア「でも、どうやってミスを誘うの？」
高「だから、そんなの行きあたりばったりで行くしかない」
高雅は深呼吸してルシフェルに向き合う。
足に力を入れ、一気に跳んで近づこうとしようとした瞬間、思わぬ邪魔が入った。
？「高雅君！？」
高「ッ！？」
ア「この声・・・リュウコ！？」
見下ろすと、そこには高雅を心配そうに見つめる龍子の姿があった。

思いもよらぬ人物に高雅は一瞬の隙を見せてしまった。
高雅はしまったとばかりに急いでルシフェルの方を見るも、既にいなくなっていた。
龍「きゃあああああああ」
高「なっ！？」
龍子の悲鳴が聞こえ、視線を龍子に向けるとルシフェルが龍子の首に槍を突きつけていた。
ル「勝負ありだ」
高「卑怯者が！！」
ル「戦いに卑怯はない。当然の事だ」
高「くそっ！！」
ル「ふっ」
ルシフェルは高雅の動けない隙を狙って一気に接近した。
高雅は殺気を読み取れず、ルシフェルの接近に少し怯んでしまった。
高「しまっ！？」
ル「死ね」
ルシフェルが高雅の心臓目掛けて突きをくり出す。
今の高雅に避ける術は無かった。
しかし、高雅の心臓に刺さる寸前に虚無のシールドが展開され、高雅の身を守った。
それは言うまでもなくアリアのお陰だ。
ル「ちっ」
高「助かった」
ア「どういたしまして」
高雅は短く礼を述べ、すぐさま龍子のもとへ下りた。
龍「わっ！？・・高雅君！？」
高「このバカが！！。激戦区に来るやつがあるか！！」
龍「だ・・だって・・・心配で・・」
高「俺はピンピンしてるから、さっさと逃げ・・ちっ」
高雅は龍子と話しの途中に振り向きと同時に剣を振るう。

それは丁度ルシフェルの槍の先端を受け止めた。
高「いいから逃げろ!!。腰を抜かして動けなくなる前に!!」
龍「あ・・・ああ・・・」
龍子は目の前に光景に恐怖し、口を開いて震えていた。
それを一瞬で悟った高雅はルシフェルに問いただした。
高「テメッ、何かしただろ!?」
ル「金縛り程度の殺気を与えた。大事な人質だからな」
高「龍子は関係ねえだろ!!」
ル「お前を殺す為の大切な道具だ」
高「黙れぇ!!」
高雅がルシフェルを弾き飛ばす。
ルシフェルは空間の中へ姿を消し、高雅の視界から消えた。
ル「さあ、その娘を守りながら私を倒せるか?」
ルシフェルの声だけが響き、姿は見当たらない。
高雅は五感と殺気を研ぎ澄まし、全力でルシフェルを探す。
その間にアリアが龍子に話し掛けた。
ア「リュウコ、大丈夫?」
龍「え・・・アリア・・?」
ア「うん、リュウコは私とコウガが絶対に守るから。だから、安心して」
龍「ご・・ごめんなさい・・・」
ア「謝らなくていいよ。仕方ないよ、リュウコはコウガの事を思ってたんだから」
龍「でも・・・」
ア「そんなに責任を感じないで。大丈夫だから」
高「・・・・見っけ」
アリアが龍子を落ち着けている内に高雅がルシフェルを探し当てた。
それを聞いたアリアが会話と終え、気を引き締める。
高「アリア、お前は龍子を見守れ」
ア「え・・でも、それじゃコウガが危険だよ。さっきだって危なか

ったし」
高「お前が龍子をちゃんと見てれば、もうあんなヘマはしない」
ア「そう？。じゃあ、リュウコを優先に見守るよ」
高「頼む」
話しを終え、高雅は剣を一本だけ地面に刺した。
そして、空高く跳び上がり、五感と研ぎ澄ました目で空間の歪みを斬った。
斬った先にはルシフェルの姿があった。
ル「ほぉ、殺気を消したつもりだが」
高「殺気だけじゃないのを教えたのはお前だろ」
ル「確かにそうだ。しかし、これだけ離れて守れるのか？」
そう言ってルシフェルは再び空間へ姿を消した。
出てきた場所は読むまでもなく龍子の近くだ。
龍「きゃ！？」
ル「ほぉ、虚無のシールドか。しかし、この程度の壁など他愛もない」
ルシフェルが虚無で虚無を打ち消そうとした瞬間、近くに刺さっていた剣が抜け、空高く上がった。
その行為はまるで龍子を見捨てるかの様に見てとれた。
ル「結局、見捨てるのか。やはり、人間など邪魔でクズだからな」
ルシフェルが龍子を守っているシールドに手を伸ばす。
しかし、そう思い通りに行かせないのが高雅クオリティーである。
ル「ッ！？、これは！？」
気付いた時には既に時遅し。
ルシフェルの足下には膨大な範囲に爆破の力が掛かっていた。
高雅が剣を刺したのは龍子を見守るのと同時にこの為でもあった。
地面には大量の爆破の力が込められていたのだ。
さらに、一度着地したら動けなくするように静寂も込められていた。
龍「わっ！？」
突然、龍子の足下に空間が開き、どこかへ消えた。

そして、爆破の力が発動をし始めた。
ル「くっ！！、くそぉぉぉ！！」
ルシフェルが叫ぶと同時に巨大な爆破の力が発動した。
半径1キロに及ぶ大爆発である。
緑淵町が半滅したと言っても可笑しくない。
それを高雅は龍子を抱えながら見下ろしていた。
ちなみに、双剣は腰に刺しています。
高「逃げた感じは無い。直撃したな」
龍「・・・・／／／」
高「？、龍子？」
高雅に抱えられ、零距離で見える顔に恥ずかしくなっていた。
不意に目が合うとすぐに目を逸らした。
高「・・・あっ、高い所がダメか？」
ア「雰囲気が変わっても鈍感は変わってないね」
高「・・取りあえず、どこか下ろす・・ッ！？」
高雅は龍子を片手で持ち、剣を構える。
それと同時に爆煙をかき分けてルシフェルが飛んで来た。
今度は槍ではなく、剣を持っていた。
高雅はルシフェルの剣を見切り、剣で受け止めた。
高「さっさと、くたばれよ」
ル「容赦のしない私を倒す事などは不可能だ」
高「だが、爆発は少なからずダメージが通っているようだ」
ルシフェルの体は爆発にやられダメージが通っていた。
だが、それでもルシフェルの調子が狂う訳ではない。
高「ちっ、龍子を抱えながらじゃ辛いな」
龍子を抱えている為かうまく力を入れる事が出来ず、押し返す事が出来なかった。
ル「くっくっく、そのまま真っ二つにしてやる」
両手のルシフェルに対し、高雅は片手で耐えている。
あからさまに不利であった。

だが、思わぬ転機が高雅にやって来た。
ル「ん？」
高「あ？」
突然、高雅達目掛けてミサイルが飛んで来たのだ。
まっすぐ向かってくるミサイルを見て、ルシフェルは一旦高雅から離れた。
すると、ミサイルはルシフェルの方へ軌道修正をしたのだ。
ル「くっ」
避けれそうもなかったので仕方なく、ルシフェルは虚無のシールドを展開して防いだ。
その間に、高雅は龍子を下ろしていた。
高「一体、何だ！？」
高雅はミサイルが飛んで来た方を見ると、そこにはランチャーを装備したヘリコプターが飛行していた。
さらに、ヘリについてあるスピーカーから聞き覚えのある声が聞こえた。
凛「高雅さん、大丈夫ですか！？」
高「この声は凛か！？」
凛「私が助けに来ましたわ」
高「ただの邪魔だけどな・・・」
高雅は誰にも聞こえないように愚痴を零した。
そんなことに構わず、ヘリがルシフェルに目掛けてミサイルを連発する。
だが、高雅は当たっていない事は分かっていた。
高「・・・取りあえず、龍子を連れて逃げてもらうか」
そう言って、高雅は目の前の空間を開き、一気にヘリの中へ潜入した。
凛「こ・・高雅さん！？」
高「よぉ、凛。久しぶりだな。取りあえず、龍子を任せるから逃げろ」

凛「な・・・何勝手な事を言いますの!?。それに、もう決着はついたはずですわ」
凛がモニター越しに爆煙を指差す。
一般人から見ればミサイル直撃＝死亡と言うことだろう。
だが、相手は人間でもない化け物である。
高「残念ながらノーダメージだ。早く逃げろ」
凛「嫌ですわ!!。このまま引き下がりたくありませんわ!!」
高「ここにいても死ぬだけだ!!。負け戦なんてするな!!」
凛「負け戦じゃありませんわ!!。現に倒していますわ!!」
高「だから傷一つ付けられｔ「コウガ!!」ちっ」
アリアが高雅を呼び、高雅はすぐに空間を開いて外に出ようとした。
しかし、凛が高雅の手を掴み、行かせないと引っ張った。
高「ったく、何だよ!?」
凛「行かせたくありませんわ。あんな危険な所に・・・」
高「だからって、あいつを放っておくといずれこの世が終わるぞ」
凛「それでも・・・」
高「あー、もう!!」
ア「コウガ、私が話してみるよ」
高雅に代わり、アリアが凛に話しを掛ける。
ア「リンちゃん、コウガは死なないよ」
凛「!?」
死なないという言葉に反応する凛。
アリアはゆっくりと話の続きをした。
ア「それに、コウガはリンちゃんやリュウコをこれ以上、非現実な出来ごとに巻き込みたくないんだよ」
高「・・・・・」
ア「リンちゃんは普通の女の子なんだから、危険なことに身を乗り出す必要はないんだよ。リュウコも同じだよ」
龍「あ・・・うん・・」
ア「とにかく、今は逃げて。それと、この事の記憶は消すから。既

に教えておくね」
凛「え!?」
龍「どうして・・?」
ア「だから、少しでも普通の女の子にさせる為だよ。だから、コウガの気持ちを分かってあげて。ね?」
凛「・・・・・・・・」
龍「・・・・うん・・・」
凛は無言で、龍子は答えて頷いた。
高雅は照れ臭かったのか、何も言わずにヘリの外へ出て行った。
それと同時にヘリは旋回し、どこかへ飛び去った。
高「これでよし」
ア「コウガも、少しは素直にいいなさいよ」
高「俺はいつでも素直だ」
ア「よく言うよ・・・」
高「それより、ルシフェルに何か変化があったんじゃないのか?」
ア「そう言えば、そんな感じがしてコウガを呼んだんだけど・・・」
まだ晴れていない黒煙の先にルシフェルがいる事は分かる。
さらに、殺気が徐々に大きくなっているのも手に取るように分かっている。
ル「・・・お前らは最大のミスを犯したな」
高・ア「ッ!?」
突然、煙が弾け飛び、中からルシフェルの姿が現れた。
さらにルシフェルの武器である剣が二つに、双剣になっていた。
ル「私が本気を出すためには少々時間が掛かるのだが、それを与えてしまったようだな」
高「・・・なーんだ、やっと本気になってくれたか」
そう言って、高雅は腕を回し、指を鳴らした。
高「つまり、今度こそ、お前を倒せばお終いだな」
ル「そう上手く行くとおもうか?」
お互いに得意とする得物を持ち、殺気をぶつける。

そして、同時に動き出し、本気のぶつかり合いが始まった。

# 最悪の贈り物編　その18、高雅VSルシフェル（3）

高雅は素早く動き回り、ルシフェルを翻弄する作戦に出た。
殺気を消し、敵に読み取られないようにしながらだ。
しかし、ルシフェルは高雅の後ろをついて行く。
ル「どうした？。遅いな」
高「この野郎」
本気になったルシフェルに速さで敵う事は出来なかった。
ならばと思い、振り向いてルシフェルの首に剣を振りかざした。
だが、既にルシフェルの姿はなかった。
ル「所詮、お前もその程度だっただけだ」
高「ッ！？」
高雅が気付いた時には、既にルシフェルはゆっくりと剣を振っていた。
その剣は高雅の両肩をことなく斬った。
そして、遅れて来る痛みと落ちる両腕に高雅は悲痛な叫びをあげた。
高「うあああああああああああ！？」
ア「こ・・コウガ！！」
アリアも何が起きたか分からなかった。
気がつけば、自分は高雅の両腕と一緒に地面に落とされたのだ。
それでも、アリアはすぐに高雅の両腕と溢れた血を再生し、傷跡は無く元通りに治した。
ル「どうだ？。痛いだろ？」
ルシフェルの声が聞こえる。
しかし、本体がいる訳ではなく声だけが聞こえるのだ。
高「ちっ、油断した・・・」
ル「本当は首を切り落としてもよかったが、それでは面白くないからな」
高「悪趣味な奴だな」

ル「ふふっ、それでは、次は両足を落とそう。もちろん、腿からだ」
ルシフェルは次に攻撃する場所をわざと宣告する。
完全に高雅を挑発しているのだ。
ル「さあ、活性でも何でもして、足を防御するんだな」
高「調子に乗りやがって・・・」
ル「これが私の実力だ。お前では絶対に辿り着かない力だ」
そう言って、ルシフェルの声は途絶えた。
嘗められた高雅は無性に腹が立っていた。
高「くそが。俺を買い被りやがって・・・」
ア「落ち着こう、コウガ。感情に身を任せたら負けちゃうよ」
高「んな事、言われんでも分かってる!!」
ア「分かってないよ!!。私は殺気が良く分からないけど、気持ちは分かるんだよ!!」
高「んな綺麗ごと、哀れとしか言いようがないな」
ア「ムカッ!!」
高「気持ちが分かるなら、相手の行動も少なからず読めるってことだ。読めてないなら、気持ちなんて分かってないんだよ」
ア「あーそうですよ!!。ホントは分かってないよ!!」
アリアは怒り、人間の姿になって高雅の前に立った。
しかし、怒っているのに顔は涙ぐんでいた。
高「!?」
ア「だって・・・コウガに取って、7年も離れてたんだよ・・・どれだけ変わったとか分からないよ・・・」
高「な・・泣くなよ」
ア「私だって、コウガの気持ちが知りたいんだよ!!。でも、コウガは素直じゃないから分かり難いよ!!」
高「わ・・・悪かったって。言い過ぎたよ・・・」
ア「そ♪」
高「テメッ!!、嘘泣きしやがったな!!」
ア「騙される方が悪いんだよ♪」

かわいらしく舌を出すアリアに怒りの沸点が達した。
高「おい、１００発殴らせろ」
ア「いやいや、死んじゃうよ」
高「いいから殴らせろおおおおおお！！」
完全に主旨が変わってしまっている現在。
そんな中でもルシフェルは行動を開始していた。
高雅がアリアに接近しようとした瞬間、上半身が倒れ出した。
そして、倒れ間際に見た足はいつの間にか切断されていた。
高「うがあああ！？」
ア「嘘ッ！？、いつの間に！？」
ル「遊んでいると見せかけて、それなりに作戦でも考えていたのか？」
不意にルシフェルが姿を現した。
ルシフェルの双剣には高雅を斬っている事を証明するかのように血が滴り落ちていた。
高雅は自分で足を再生して立ち上がり、アリアは双剣にして構える。
高「はん、作戦なんて無い。俺達はいつものようにやるだけだ」
ル「そうか。では、掛かって来い」
ルシフェルは構えを見せる訳もなく、ただ立っているだけだ。
それでも、高雅に取って隙のない構えだと見てとれる。
高「じゃあ、遠慮なく！！」
高雅は動き出した。
変に様子見をする訳もなく、真っ向から立ち向かった。
だが、高雅の剣筋に合わせてルシフェルは受け止める。
ル「もう終わりか？」
高「まだまだあ！！」
高雅は剣を打ちつけると同時にマリアの力で命を取ろうとした。
しかし、相手も同じようにして簡単に打ち消される。
ル「お前には失望した。本気の私に傷一つ付けられないとは」
高「黙れ！！」

高雅はムキになって大きく振ってしまった。
それがあだとなり、ルシフェルは柄で高雅の腹を思いっきり殴った。
高「ぐはっ！？」
ルシフェルの攻撃は吹き飛ばせる攻撃ではなく、その場で怯ませる攻撃だ。
高雅は重い一撃で身動きが取れなくなっていた。
ア「させない！！」
アリアが必死に虚無のシールドを張る。
しかし、今のルシフェルに取っては無意味だった。
ルシフェルは虚無のシールドを割り、多量の切り傷を負わせた。
トドメに回し蹴りを喰らわせ、吹き飛ばした。
高「ぐふぅあ！！」
ア「コウガ！！」
アリアがすぐに高雅を再生させようとする。
しかし、ルシフェルがアリアを掴んでそれを許さなかった。
ア「きゃあ！？」
ル「やめろ。苦しめるだけだ」
ア「放してよ！！」
ル「それはそうとお前、私と共に来ないか？」
ア「え！？、ちょ！？」
突然、ルシフェルがアリアの顎を掴んで顔を寄せる。
いきなりの事にアリアは驚いていた。
ル「私の使いとなれ。そうすれば、破壊した後の世界は譲ろう」
ア「ふざけないで！！」
ル「いつまでもあんな弱者といるのは辛いだろ。私の使いになれば、全てが手中ｎ〈ドゴッ！！〉ぐっ！？」
突然、顔面をぶん殴られ、思いっきり吹き飛ばされた。
殴ったのはいつの間にか接近した高雅だった。
高「ぜぇ・・・はぁ・・ふざけんな・・」
ル「ッ！？、今、何をした！？」

ルシフェルは何が起きたのか分からなかった。
アリアと話している最中でも、高雅には常に気を回して気を付けていたのだ。
しかし、気がつけば高雅に殴られ、吹き飛ばされていた。
高「何、口説いてんだよ・・・この野郎・・」
ル「何!?」
高「だから・・・」
高雅は息を大きく吸い込み、思いっきり喋った。

高「俺のアリアに何口説いてんだって言ってんだよ!!!!」

ア「っ!?」
ル「・・・くくく、それがどうした?」
高「アリア!!、こんな奴、ついて行くなよ!!」
ア「わ・・わかった／／／」
高雅は自分で言っていることを分かっているのか知らない。
ただ、口走って言ったのか、それとも本当に思って言ったのか。
高「こうなったら、賭けだ!!」
ア「な・・何をするの?」
高「何が起きるか分からない融合力を使うんだ。それも、マリアとルシフェルの力をな」
ア「できるの!?」
ル「無理だ」
高雅の代わりにルシフェルが答えた。
ル「お前も分かっているのだろう。その力は普通の力とは違う。お前の装飾が証明しただろう」
高「そうだな。選別の飾りでも防げなかったな。だから、面白いんだろ」
ル「ふっ、察しが悪いな。そんな融合力、私が試さないと思ったのか」

ア「じゃ・・じゃあ!!」
ル「無理だ。どんなに細工を施しても反発しあい、消える」
高「それはお前が下手くそだからだろ」
高雅はルシフェルが無理だとしても、融合力を続けた。
しかし、ルシフェルの言った通りに打ち消し合って上手くできなかった。
ル「無駄な事を・・・」
高「・・・・・・・・・・」
ル「しかし、私が時間を譲ると思ったか?」
ルシフェルが瞬間移動して高雅の目の前に現れた。
そして、今度は首目掛けて斬りかかった。
ア「させない!!」
それをアリアが腕を剣に変えて受け止めた。
ル「弱者が出しゃばるな!!」
ア「くっ・・あっ!!」
ルシフェルの力にアリアは簡単に吹き飛ばされた。
ル「終わりだ!!」
そして、再び高雅の首に剣を振るう。
ア「コウガ、避けて!!」
高「・・・・・・・・・・へっ」
高雅は瞬時に後ろへ下がって攻撃を回避した。
ル「無駄だ」
ルシフェルはもう一つの剣で突きを繰り出す。
しかし、高雅は指二本で受け止めた。
ル「何!?」
高「おー、こいつは面白いな!!」
ル「お前、まさか!?」
高「ご明察。おらぁ!!」
高雅はルシフェルの腹目掛けてパンチを繰り出す。
ル「くっ」

ルシフェルは咄嗟に防ごうと剣を構える。
しかし、高雅のパンチは想像を遥かに凌駕(りょうが)していた。
その威力は剣を伝わり、ルシフェルを伝わってさらにルシフェルの後ろの山に伝わり、巨大なクレーターが出来上がっていた。
もちろん、ルシフェルのダメージも半端なものではない。
ル「が・・・あ・・・」
吹き飛びはしなかったものの、あまりの威力に声すら上げられない。
その間に高雅は反動をものともせずにアリアの方に近づき、手を掴んで起こしてあげた。
高「何が出来ないだ?。出来ちまったぜ」
ア「い・・一体・・・どういう力なの!?」
高「さぁな。ただ、無性に体が軽くなった感じかな」
ル「お・・お前・・・どうやって・・・」
高「・・・母さんのお陰だな、きっと」
ル「!?」
高「まあ、俺も本気になった事だし・・・」
高雅はアリアを双剣に変え、ルシフェルに向けて殺気を解放する。
高「互いに本気をぶつけあおうぜ!!」

## 最悪の贈り物編　その１９、高雅ＶＳルシフェル（４）（前書き）

これで、この章はおしまいです。

# 最悪の贈り物編　その19、高雅VSルシフェル（4）

先に動き出したのは高雅だった。
殺気を隠す事もなく全開だ。
ルシフェルに取って、それを読み取るのは容易い事だ。
しかし、読み取ったものの夥しい量の情報が脳を刺激した。
ル「な・・何!?」
あまりの情報に混乱するルシフェル。
やる事が分かっていても、対策がつかなくては無意味である。
高「どうしたどうしたぁ？」
高雅の猛ラッシュに圧倒されるルシフェル。
このままで確実に負けてしまうと思ったルシフェルは反射で高雅の攻撃を受けて立った。
思いのほか高雅の攻撃を防ぎ、高雅は少しならず驚いていた。
高「へぇ」
ル「図に乗るな!!」
ルシフェルが数少ない隙を見て高雅の首を斬る。
しかし感触が無く、斬ったのは残像だった。
ル「くっ」
高「完全に逆転したな」
高雅は後ろに現れ、ルシフェルを鼻で笑って軽く煽る。
ルシフェルは憎たらしそうに睨みつけ、怒りを現す。
高雅に取って、そんなものは悪あがきにしか見えなかった。
高「お前とも、もうお別れだ。最後ぐらいは大人しくやられろ」
ル「ふざけるな!!。私の復讐が終わる訳にはいかない!!」
ルシフェルは自分の力を最大限に解放し、高雅に立ち向かう。
しかし、今の高雅ではただの子供騙しにしか見えなかった。
高「お前には一応感謝してる。俺を作ってくれた事だけはな」
高雅は剣を逆手で持ち、ルシフェルの攻撃を紙一重で避ける。

そして、がら空きの腹目掛けて剣を柄を喰い込ませた。
ル「げほっ!?」
高「ただ、お前は道を外し過ぎだ。それも、もう取り返しがつかない程な」
ル「ま・・待て!!」
ゆっくりと剣を構える高雅。
それは、ルシフェルの死のカウントダウンと等しかった。
ル「は・・話しを聞け。お前と私が組めばこの世は私達の物だ。悪い話ではないだろ?」
高「・・・・・・」
ル「この世の半分、いや8割をやる!!。それで手を打たないか!?」
高「最終的に物でつるか・・・・ふざけるな!!」
ル「ま・・待て。私を殺すと、この体はどうなる!?」
高「そんな体、もう用はない!!。俺は元々、セイクリッドの奴らを殺す気でいた。それに、目的は既に達成済みだ」
高雅の目的はアリアを起こすことである。
しかし、思いのよらぬ展開でアリアは復活し、それからナノトムの事など考えてない。
ル「やめろ!!」
高「これで、終わりだ!!」
高雅がルシフェルの心臓目掛けて剣を振りかざす。
先程の攻撃でルシフェルはまだ動ける状態ではない。

ザクッ・・・

剣は的確にルシフェルの心臓を貫いた。
ル「がっ・・・ぐ・・ふふふ」
高「!?」
しかし、死に際でルシフェルは笑い、勝ち誇った顔をした。

ル「バカが。例え、死ん・・・・でしまおう・・が・・・意思さ・・え・・・あれば・・また・・・・こうして生き・・返られる。まだまだ・・・甘かったな」
高「その点に抜かりは無い。まぁ、逝けば分かる」
ル「くっくっく・・・私の復讐・・・は達成する・・まで・・・不滅・・だ・・・・」
最後まで余裕の顔でルシフェルは息を完全に引き取った。
ルシフェルの言った言葉で心配になったのか、アリアは不安だった。
ア「ねぇ、本当に大丈夫なの？」
高「ああ。俺の中の全ての力を9．9割のアリアの力に託して与えた。意思がどうなるか見なくても分かる」
ア「そっか。コウガがそう言うなら大丈夫だね」
高「そう言う事だ。さあ、帰るか」
ア「まずは皆を迎えに行かないと」
高「分かってる」
高雅は空間を開いてその場を去った。
もちろん、破壊した山やあり得ない出来ごとの記憶の忘却も怠らずにやった。
一般人にとって、何もない一日となった。

その後、ルシフェルは意思となり、天国でも地獄でもない所を彷徨っていた。
ル「まさか、この私が負けてしまうとは。まぁ、私はシリアが存在する限り、無限に生き続ける」
？「それはもうお終いよ」

ル「何ッ！？」
ルシフェルの前に現れたのは具現化しているマリアだった。
マ「シリアちゃんはもうあなたの物じゃないよ」
ル「ふん、だからどうした？。他の体を使えばいいではないか」
マ「それもダメ。あなたを私の中に封印し、そのまま一緒に消滅よ」
ル「何だと！？。くっ、放せ！！」
マリアはルシフェルの意思を優しく包み、自分の胸に押し当てる。
ル「やめろ！！。くそ・・・そうだ！！、やり直そう！！。そして、また・・・」
マ「あなたの気持ちは良く分かったよ。でも、もう子作りは嫌。それを学んだのよ」
ル「やめろおおおおおおおおおおおお・・・・」
ルシフェルはマリアの中に封印された。
そして、自分の消滅が始まった。
マ「高雅にもらった力が切れたみたいね。ふふ、ありがとう、高雅」
最後に自分の息子に心からお礼を述べる。
そして、今度こそ、最後を遂げた。
もうどこかに留まることなく、二人は完全に消滅した。

そのころ、高雅はＡを連れ出し、セイクリッドにやって来ていた。
残りの０．１割の力でＡを復活させたのだ。
セイクリッドについた途端は皆が嬉しそうに一斉に近づいて来たのだ。
シリアとフィーラはあまつさえダイブして来た。

まぁ、それをヒラリと高雅は避けて、二人は壁に顔面を打ちつけた結果になった。
そんなこんながあり、皆が落ち着いた所で高雅が文夫達に問いかけた。
高「そう言えば、シリアはどうなった？」
文「ん？。ああ、大丈夫だ」
高「それは見れば分かる。何をしたかを知りたいんだ」
紗「シリアちゃんは完全に力を失ったわ」
高「え！？。それって・・・」
勇「普通の人間って事だ」
高「約５００歳の合法ロリだな」
ア「そしたら、コウガは約１０００歳の高校生だよ」
高「そんなの、知らん」
ア「もぉ、自分の都合のいいようにして・・・」
アリアがそんなことを言うも、高雅は知らんぷりだった。
高「それはそうと、シリアはこれからどうするつもりだ」
シ「お兄ちゃんの家に住むよぉ」
高「誰が許した、誰が？」
紗「私よ」
紗奈恵が普通に自首する。
高雅は紗奈恵相手だろうが怒っていた。
高「勝手に決めるな！！」
紗「あれは元々私の家なのよ。決定権はあってもおかしくないはず」
高「そりゃ・・・そうだけどよ・・」
シ「えへへぇ、一緒だねぇ」
シリアが嬉しそうに高雅の手を握って揺らす。
そんなのお構いなしに、紗奈恵は勝手に話を進めた。
紗「それじゃ、決定ね」
高「いや、ちょ！？」
紗「いいじゃない、追加の贈り物よ」

高「最悪な贈り物だよ!!。こんな、カニバリズム少女なんか手に負えるか!!」
文「そうか。よし、俺がお義父さんｎ「あら、何か言いたいの?」
イイエ　メッソウ　モ　アリマセン」
紗奈恵の殺気に怯え、文夫の出しゃばりは一瞬で切り捨てられた。
そんな中、エクスがマジメな質問をしてきた。
エ「割り込んで悪いが、今後のセイクリッドはどうなるんだ?。皆、死んじまったぞ」
紗「確かにそうね・・・高雅が皆を生き返らせればいいじゃない」
高「残念ながら、既に俺の力は全部なくなった。つまり、マリアの力もルシフェルの力もない」
勇「セイクリッドが無くなるとなると、天界は大混乱を起こすな」
紗「う～ん・・・まぁ、私達が何とかするわ」
紗奈恵がそう言い切る。
改めて、紗奈恵の妙な凄さを高雅は認識した。
紗「はい、それじゃ今日はお開き」
高「勝手に進めるな!!」
紗「じゃあ、高雅とアリアは残って、他は解散」
紗奈恵がパンパンと手を叩きながら空間を開く。
紗「後で私達だけ話があるから、他の皆はこの空間を潜(くぐ)って。ちゃんと、高雅の家に通じてるから」
レ「では、我らは先に帰られよう」
フ「お先に失礼です」
シ「また後でねぇ」
次々と空間内に入って行き、高雅とアリア、文夫達以外はこの場からいなくなった。
高「んで、話って何だ?」
紗「何もないわよ」
高「は?」
ア「え?」

高雅はアリアは同じようにキョトンとしていた。
紗「それじゃあ、お二人さん」
文「またな」
勇「じゃあな、高雅」
結局、何の話もする事もなく文夫達はどこかへ行った。
残されたのは高雅とアリアだけだった。
高「・・・ったく、気を使いやがって・・・」
ア「何だったんだろうね？」
高雅は溜息を零し、アリアに至っては全く理解していない。
ア「コウガ、私達もかえｒ＞ガバッ！！＜むぐっ！？」
突然、高雅がアリアに抱きついたのだ。
アリアは何が何だか分からず、高雅から離れようと暴れ出した。
しかし、高雅はそれさえも受け止めて強く抱きしめる。
高「会いたかった・・・」
ア「え！？」
突然、高雅の言葉に大人しくなるアリア。
アリアは高雅の胸を引きずって何とか顔を上げると、高雅が赤面して恥ずかしそうにしていた。
高「会いたかったって言ったんだよ／／／」
ア「え・・ああ・・・どうしていきなり？」
高「あんなバトルの最中にこんなことが出来るか！！」
ア「あ・・あははは、そうだね」
高「とにかく、お前にとっては1日も経過してないけどな、こっちは7年も会ってないんだぞ！！」
ア「そ・・・そうだったね、ゴメン・・・」
高雅の気持ちに気付けなかったのが効いたのか、アリアは暗い顔になった。
高「そ・・そんなに落ち込むなよ」
ア「うん、ゴメンね。私もコウガに会いたかったよ」
高「・・・・・・・そっか」

お互いにかなり良いムードになって来た所で、アリアは思いきって言った。
ア「ねぇ！！、あの時のセリフって・・・」
高「あの時？」
ア「ほら、俺のアリアを――――って」
高「そりゃ、そのまんまの意味だろ」
ア「そ・・・それって・・・／／／／」
高「ああ、そう言う事だ」
ア「わ・・・／／／／」
事実を知ったアリアは一気に体温が上昇した。
しかし、当然高雅は期待を裏切らなかった。
高「お前は俺の使いだろうが」
ア「そう・・・・え？」
高「結構強いのに、あんな奴に取られたくないし。アリアは結構便利・・・？、アリア？」
高雅はつい目を放した隙に、アリアは豹変していた。
そして、負のオーラ全開のアリアは思いっきり怒鳴った。
ア「コウガのバカアアアアアアアアアアアア」
そして、泣きながら腕を剣に変え、襲い掛かって来たのだ。
高「はぁ！？、いや、何で逆ギレ！？」
ア「バカバカバカバカ！！」
こうして、数十分間鬼ごっこをした後に二人は帰ったのであった。

結局、シリアは高雅の家に住むことになり、高雅の家族が増えたのであった。

最悪の贈り物編　これにて閉幕

# 最悪の贈り物編　その１９、高雅ＶＳルシフェル（４）（後書き）

本気になってから、ルシフェル死ぬの早いなｗｗｗ。
取りあえず、約３ヶ月によってこの章が無事に終わりました。

そして、作者は大学に入学いたしました。
やべ、忙しすぎるｗｗｗ。

長かったバイトとネットの生活もここで終了か・・・・
いや、ここから始まるのだ（↑何言ってんだろ、俺ｗｗｗ）

取りあえず、引き続き、読んでいただけると嬉しいです。
こんな、駄文しかない小説を読んでいただいて本当に恐縮です。
とにかく、不慮の事故（死ぬとか、目が見えなくなるｅｔｃ）とかがない限りは完結まで書きます。
下手だからって、途中で投げ捨てたりはしません（キリッ

それと、先ほど言いましたように大学が始まって忙しくなりそうです。
５日投稿ができず、もしかすると１週間以内投稿すら難しくなるかもしれません。
しかし、そんなフラグはへし折るつもりで頑張ります。

それにしても、１からここまで読んでる人なんているのだろうか。
いや、いないｏｒｚ（反語）

# お買いもの

学校は冬休みを迎え、高雅は退屈で平和な日々を送っていた。
の、はずだった。
高「♪」
ベットに寝ながらゲームをしている。
しかし、その楽しい時間は一瞬にして無くなってしまった。
レ「コウガ殿おおお!!、助けてくれえええ!!」
高「・・・・・・・・・」
ゲームをしている高雅の部屋にノックなしでいきなり掛け込んで来たのは獣状態のレオだった。
そして、その後ろからやって来たのはシリアだった。
普通の生活に戻っていても、相変わらずのタオル一枚姿だった。
シ「お～に～く～ぅ～」
レ「先程からあの状態なのだ。助けてくれ!!」
高「お前ら・・・・・」
レ「え?」
シ「ん?」
高「・・・・死ね」
レ「な!?」
シ「ふぇ!?」
高雅の冷酷な声に体を震わせる二人。
そして、高雅はゲーム機を置き、何故かあった包丁を手にして二人に襲いかかった。
高「いっぺん、死にやがれえええええ」
レ・シ「うわあああああああああああ」
高雅の邪魔をした者には制裁が下されようとしていた。

高「と、言う訳で買い物に行け」
ア「全然意味が分からないし唐突すぎるよ。それに、私はあんまり離れられないよ」
高「大丈夫だ。場所は５００メートル以内だし、金もやるから買い物に行け」
ア「だとしても、何を買うの？」
高「あいつの服だ」
そう言って、指を指す方にはレオと一緒に正座しているシリアがいた。
それを見たアリアは本当の理由を把握した。
ア（静かに寝たいんだ・・・）
高「何だ、その顔？」
高雅の相変わらずな考えに、ついあきれ顔になる。
ア「ううん、何でも」
高「なら、さっさと行け。俺は寝る」
ア「こういう所は素直なんだから」
高「何か言ったか？」
ア「何でもないよ。じゃあ、行ってくるよ」
高「誰が一人で行けと言った？」
高雅は振り返って皆の顔を見る。
高「俺以外、全員で行くんだ」
ア「えっ？。わざわざそこまでしなくても。それに、シリアちゃんの姿じゃ注目を浴びちゃうよ」
高「いいから行ってこい！！」
もはや、自分の至福の時間を誰にも邪魔されたくないのだろう。

高雅の徹底した考えに最早反論は許されない。
ア「分かったよ。じゃあ、皆で行ってくるね」
高「のんびりして来い。後、服屋の場所は自分で探せ」
ア「ちょ！？・・・」
アリアが何かを言おうとした瞬間、高雅は自分の部屋へと逃げて行った。
そこまでして、一人の時間が恋しいのだろう。
ア「・・・仕方ない。行こっか？」
レ「しかし、本当にシリア殿を連れて行く気か？」
流石にレオは高雅の言う事だと言っても、反対だった。
結局、タオル一枚しかない少女を外に歩かせるのは不自然だ。
そして、変な目で見られるのはシリア自身ではなく、年上のアリア達なのだ。
ア「でも、コウガは本当に一人っきりになりたいみたいだよ」
エ「確かに、いつもに比べて聞く耳を持っていなかった」
サ「元々、持っているようには見えないがのぉ」
フ「きっと、コウガ様は疲れているです。こういうときは黙って従う方が身のためです」
ア「確かに・・・」
高雅が暴れ出したら誰も止めることは出来ないだろう。
何と言っても、あのルシフェルを倒したのだから、アリア達にとって天界一最強である。
そんな高雅の機嫌を損ねさせ続けると、いずれ火の粉は自分達に降りかかると予測していた。
ア「まぁ、人気（ひとけ）の少ない所を通って行こう」
シ「買い物ぉ？」
シリアがゆっくりと立ち上がり、アリアに近づいた。
しかし、正座で足がしびれたのか歩くのに必死になっていた。
ア「うん。シリアちゃんの服を買ってあげるの」
シ「コウガお兄ちゃんは来るのぉ？」

ア「いや。コウガは眠たいから来ないって」
シ「えぇ～、つまんないよぉ・・・」
シリアは膨れて座り込んでしまった。
それを、アリアが脇の下を抱えて起き上がらせる。
ア「ほら、我が儘言うとコウガに嫌われるよ」
シ「うぅ～・・・・・・あ」
レ「うっ！？。物凄い殺気が！？」
レオの殺気の感知は間違っていなかった。
シリアがレオに熱いまなざしを送っていたのだ。
それも、涎（よだれ）を垂らしながら・・・
シ「じゅるる・・・おいでぇ」
レ「断固として断る！！」
シ「じゃぁ、こっちから行くねぇ！！」
レ「く・・来るなあああああああああああ」
レオが猛スピードで外へと逃げ出し、後に続いてシリアも出た。
ア「はぁ、この先が思いやられるよ」
サ「まぁ、退屈はしなさそうじゃな」
ア「他人事（ひとごと）にならないよ、きっと」
この先の出来事が不安でいっぱいのまま、アリア達の買い物が始まった。

奇跡的にアリアの不安な出来事は起きなかった。
レオも食べられずに済んだし、人とは未だに誰とも会っていない。
さらに、時間もそんなに掛からずに服屋を見つけてしまう、いいことづくしであった。

ア「さて、ここまでは人に会わなかったけど・・・」
奇跡はここまでである。
店に入るからには確実に店員と言う人がいる。
ア「・・・まぁ、仕方ないか。普通に入ろう」
アリアはあんまり隠れて行動するのも逆に怪しいと思い、諦めて普通に入ることにした。
自動ドアの前に立ち、自ずと扉が開かれる。
それと同時に営業スマイル全開の店員が声を掛ける。
店「いらっしゃいませ！！」
深々と頭を下げ、再びあげた時には唖然としていた。
もちろん、原因はシリアである。
ア「あの、この子の服を探しているのですが・・・」
店「え・・ああ！！、はい、分かりました」
ア（完全に引かれてるよ・・・）
店員は表情に出さないようにしているが、アリアは殺気で読み取っていた。
今まで強大な殺気を感じてきた所為か、ほんの少しだけ考えが分かるようになっていた。
とは言っても、この程度なら分かる人も結構いそうだが。
店「それじゃ、子供用の服はこちらになっております」
ア「はい。あっ、レオ君とエクスはついて来ちゃダメだから」
レ「何故だ？」
ア「そのぐらい、察してよ・・・」
アリアが呆れながら首を振る。
レオは分かっていないが、エクスの方は理解ていた。
エ「レオ君、僕らは暇つぶしでもしよう」
レ「わ・・分かった」
レオは理解できていないがエクスが無理やり引っ張ってこの場を離れた。
ア「さてと、のんびり決めようか」

シ「はぁい！！」
シリアがはしゃぎだし、店を駆け回った。
アリアはその光景に、はにかみながら店内を巡った。

アリア達の買い物は数時間にも及んだ。
そして、決まったのはワンピースだけだった。
シリアは同じようなワンピースを選び、結局ワンピースだけになった。
買ってすぐに着替え、ようやくシリアは服を着たのであった。
シ「えへへぇ・・・」
フ「嬉しそうです」
ア「そうだね」
その後店を出て、余ったお金でソフトクリームを買って近くの公園で休んでいた。
ちなみに、レオ達とは未だ合流していない。
サ「それにしても、二人はどこへ行ったのかのぉ？」
ア「そうだね。あんまり遠くに行ってないはずだと思うけど・・・」
ベンチに座りながら、周りを見渡す。
しかし、どこにもレオとエクスの姿は見当たらない。
ア「二人一緒にいると思うけどなぁ」
フ「まぁ、その内見つかるです」
ア「・・・そうだね。二人とも、子供じゃないし」
アリアは心配する事を止め、ソフトクリームを一口食べる。
ア「うん、おいしい」
フ「それで、この後はどうするです？」

ア「目的は達成しちゃったし、レオ君達と合流したら帰ろうか。家で静かにしてればコウガも怒らないよ」
フ「そうと決まれば、のんびりアイスを食べて待つです」
サ「そうじゃな」
ア「全く・・・まぁ、いっか」
三人は動かずに、相手から見つけてもらう作戦に出た。
つまり、見つかるまでは休憩である。
だが、それは悪い方で敵わなかった。
？「ふざけてんじゃねーぞ、ゴラァ！！」
ア「？」
離れた所で怒鳴り声が聞こえ、その方を見るとシリアが大人の人に怒られていた。
しかし、シリアもシリアで謝る意思は見受けられなかった。
気になったアリア達はシリアの所へ向かい、何があったか訊(たず)ねた。
ア「すみません、どうしましたか？」
大「あんたが責任者か？」
ア「まぁ、一応・・・」
大「丁度いい、このガキがこの俺の服を汚しやがったんだ！！」
裾(すそ)の部分を持って服を伸ばして見せる。
そこには、シリアが食べていたと思われるソフトクリームがべっとり付いていた。
シ「違うよぉ！！。この人が勝手にあたしのアイスを取ってぇ、自分で付けたんだよぉ」
大「そんなことをする訳、ねえだろぉが！！」
シリアの言葉はバカバカしく、アリアは嘘だと思い込んでいた。
ア「そうだよシリアちゃん。謝った方がいいよ」
シ「違うよぉ！！。信じてよぉ！！」
大「ったく、こういう奴は警察に連れて行った方がいいだろう」
すると、問答無用でシリアの手を掴み、自分の車へと連行した。
シ「わわぁ、放してよぉ！！」

しかし、シリアも必死で抵抗するも、全く解放できない。
ア「ま・・待ってよ!!。いくらなんでもそれは・・・」
アリアは目の前に立ち塞がった。
だが、歩みを止めることはなかった。
大「うるせぇ!!。退け!!」
ア「きゃ!?」
シ「あ・・・きゃぅ!!」
大人はアリアを振り払い、シリアを後部座席へ投げ入れた。
そして、運転席に乗ろうとした瞬間、フロントにある人物が座っているのに気付いた。
?「子供相手に警察沙汰か・・・」
大「ぁあ!?」
ア「え!?」
アリアが驚くのも無理はない。
フロントに座っていたのは高雅だったのだ。
大「何だよお前!?。そこを退け!!」
高「アリア、こいつも買って来てくれ」
高雅は無視してアリアに紙切れを投げた。
それを、アリアは見事キャッチし、中身を確認する。
見る限り、晩飯の材料であった。
高「んじゃ、よろしく」
大「さっさと、退け!!」
高「・・・・子供に無理やり罪を作り、無理やり警察に連行すると見せかけ、路地裏で無理やりいかがわしい事をする、か・・・典型的な犯罪ロリコンだな」
大「なっ!?」
高雅がそう口をした瞬間、近くに人影が映った。
そして、空高く登場した人物は綺麗に着地し、大人を睨みつけた。
A「許せんっ!!」
それは自称良いロリコン、Aである。

しかし、良いも悪いもないと思うのはこの場にいる全員が思っていた。
大「な・・・何だよ、お前達!?」
A「この世の幼女の味方、Aだ!!。さあ、覚悟しろ、幼女の敵め!!」
高「テメーが言うな、テメーが」
大「な・・・ふざけるな!!」
流石に子供の遊びに見えたのか、大人は付き合ってられず、運転席に乗り込んでエンジンを掛けた。
そして、アクセルを全開にするも、何故か進みはしなかった。
大「な・・何故だ!?」
高「車という物は後ろタイヤがちゃんとした地面に着いてないと走らない。常識だろ」
大「は!?」
意味が分からず、後ろを見るとAが少しだけ車を浮かせていた。
さらに、その隙にアリアが後部座席にいるシリアを救いだした。
高「無意識運転は止めましょう」
そう言った瞬間、Aは車を放して後ろタイヤが地面につく。
唖然としていた大人は無意識の内にアクセルを踏みっぱなしだった為、急加速で発進し、ふらついて電柱にぶつかった。
A「よーし、帰るか」
Aは任務を達し、どこかへと消えていった。
この為だけに来たというのは寂しいことである。
高雅も、死んでないと殺気で確認すると自分の家へ歩き出した。
ア「こ・・コウガ・・・」
高「勘違いするな。俺はお前に追加の注文をしに来ただけだ」
そう言い切り、それ以上会話をしようとはしなかった。
しかし、アリアは高雅の気持ちがしっかりと理解していた。
ア（そんなことなら、意思会話すればいいのに。ほんと、素直じゃないね）

フ「コウガ様、相変わらずです」
レ「アリア殿！！」
後ろから声がし、振り返るとレオの姿があった。
もちろん、エクスと一緒だ。
レ「何か大きな音がしたが、無事か！？」
ア「うん、大丈夫。後、追加で買って来いと言われたから、今度はスーパーに行くよ」
レ「なっ！？・・・またか・・・」
ア「大丈夫。今度は一緒にいいよ」
レ「それは良かった。また探し出すのは大変だ」
ア「それじゃ、行こっか」
シ「はぁい！！」
今度はスーパーを目指して６人は歩き始めた。
隠れるような事はせずに堂々と歩いて行った。

# 困難極まりない計画

ア「こ・・・これは!?」
突然だが、アリアは今、信じられない光景に局面していた。
それはアリアにとって地獄絵図に等しいだろう。
ア「いや!!、嘘よ嘘よ!!」
夢なら覚めて欲しいと目を瞑って頭を叩く。
しかし、恐る恐る目を開けると、何も変わっていない。
ア「いやあああああああああああああああああ」
アリアの悲鳴は空しく響き渡ったのだった。
そして、アリアは崩れ落ちて涙を流し始めた。
ア「どうしてこんなことに・・・ねぇ、どうして!?」
誰もいないのに自然と訴えかけていた。
しかし、答えてくれる物はいなかった。
アリアは諦めて目の前の現実を受け入れたのだ。

ア「何で2キロも太ってるのよおおおおおおおお」
高「さっきから、うるせぇ！！」
ア「いたっ！？」
突然やって来た高雅は問答無用でアリアの頭を叩いた。
実は、アリアは洗面台で体重計の上にいたのだ。
そして、それを大袈裟に表現していたと言う訳でした。
高「たかが、2キロ太ったぐらいで大袈裟なんだよ。てか、お前は常時絶食してるだろ？」
ア「まぁ・・・確かに・・・・・」
アリアは高雅の目を逸らしてから肯定した。
その行動はまさしく嘘だと言うのは誰でも分かる。
高「・・・何を食った？」
ア「・・・・・・この前、ソフトクリームを・・・」
高「誰の金で？」
ア「コウガのです・・・」
高「俺の許可は？」
ア「ありません・・・」
高雅の質問攻めで徐々に小さくなってゆくアリア。
さらに、高雅は指をポキパキと鳴らしていた。
高「ほぉ、それは俺に殴られても文句一つ言えないよな？」
ア「はい・・・」
高「人の金を勝手に他の事に使うな！！！」
高雅の怒りでアリアの脳天に鋭い一撃を負わせた。

レ「何だ、どうしたのだ？」
フ「喧嘩です？」
高「アリアがデブの仲間入りだと」
ア「い・・・ちょっ！？、そこまで太ってないよ！！」
アリアは痛みに悶絶しながらもきっぱりと否定した。
エ「要するに、アリア君が太った、と」
ア「いや・・その・・・・うん」
否定したかったが、紛れもない事実を見て正直に話した。
サ「なら、ダイエットじゃな」
ア「うう～・・・」
高「嫌がるなら最初から人の金で食いものを買うな」
ア「ごめんなさい・・・」
シ「でもぉ、美味しかったよぉ」
高「シリアは黙ってろ」
シ「シュゥン・・・」
高雅に叱られ、シリアは俯いて静かになった。
レ「では、ダイエットをするのか？」
ア「・・・仕方ないよ。自業自得だし、ダイエットをやってみる」
エ「うん、その意気だ」
レ「我々も手伝うぞ」
高「寝かせろ」
サ「コウガ殿がいないと、アリア殿の活動範囲が狭まるじゃろ。ついて来るのじゃ」
高「勘弁してくれ・・・」
高雅も強制的に手伝いに参加させられた。
ア「それじゃ、早速外に行こうよ！！」
やる気があるのか、自ら外へ出て行こうとする。
既にアリアの頭の中で大体は決めているのだろう。
高雅達もアリアの後ろを追うように外へ出る。
高「？、フィーラ？」

ただ一人、フィーラだけ暗い顔をして立ち尽くしていた。
高雅は不審に思い、声を掛ける。
フ「は・・はいです！？」
フィーラの様子はあからさまに焦っていた。
高「何している？。さっさと行くぞ」
フ「あ・・あの、ボクは留守番をするでｓ「早く来い」・・・はいです」
フィーラの提案は高雅が無理やり止めさられた。
フィーラは恐る恐る高雅の横を通り過ぎ、外へ出て行った。
高「・・・・全く、ダルイな」
高雅も家の鍵を閉め、皆の後を追って行った。

こうして、アリアは高雅の案も借りてダイエット計画を立てたのであった。

アリアのダイエット計画。

その１　『登山ランニング』

高「普通のランニングに加え、山登りをしよう」
シ「わぁい、パチパチィ～」
ア「確かに、普通に走るよりは効果的かも」
アリアは準備運動をして張りきっている。
高「・・・・まぁ、頑張るんだな」

ア「うん。それじゃ、行ってくるね」
アリアは皆に手を振って山へ向かって走り始めた。
高「・・・さて、俺達はどうサポートするつもりだ?」
アリアを見送った後、高雅は１８０度回転して皆に顔を向ける。
しかし、全員アイデア一つ思いついていなかった。
エ「いや、まさか山を登るとは・・・僕の考えが甘かった」
シ「アリアお姉ちゃんはぁ、頑張り屋さんだよぉ」
レ「先回りするも、かなり辛そうだな」
高「じゃあ、フィーラが飛んで行って水を渡せばいいだろ」
フ「ぼ・・ボクです!?」
突然の指名に驚くフィーラ。
高「お前は飛べるから楽だろ?」
フ「そ・・それでｍ「楽だろ?」う・・はい・・・」
高「じゃあ、行って来い。ほら、水だ」
フ「分かったです・・・・」
シ「頑張れぇ」
フィーラは高雅から水が入ったペットボトルを受け取り、渋々山へ飛んで行った。

フィーラが飛んで2時間後。

フィーラとアリアが一緒に山を下りてきたのだ。
どうやら、山頂まで往復してきたみたいだ。
ア「ぜぇ・・・ぜぇ・・・疲れたよぉ・・・・」
フ「ひぃ・・・・ひぃ・・・・ぼ・・ボクもですぅ～」
高「お疲れさん。これで、足腰は鍛えられただろ?」
ア「・・・・・・あれ?」
高雅の言葉に何かが突っ掛かる。
それを、アリアは高雅に聞いてみた。

ア「ねぇ、それってどういう・・・」
高「そりゃ、少しはいい運動だが、登山ランニングはどっちかと言うとダイエットと言うより足腰を鍛えるもんだ」
ア「コウガ、それ、知ってた？」
高「当たり前だろ」
ア「最初に教えてよおおおおお」
高「はいはい、次々」
アリアの言葉を無視し、高雅は次の作戦を始めさせる。
アリアは黙って睨みつけるも、高雅相手に睨みつけたとしても何の意味もない。
それを理解したアリアは溜息を一つ零してから次の計画へと場所を移動した。

アリアのダイエット計画。

その2　『激流水泳』

高「普通の水泳の何倍もの効果を得られるのが激流水泳である」
シ「おおぉ～」
ア「・・・・・・・・・・」
高「・・・と、言う事で激流がある場所へ来ました」
ア「・・・・・・・・・え？」
高雅の示す激流、それは天から落ちてくる水、すなわち滝だった。
アリアは意味が分からないと口をあんぐり開けていた。
ア「ねえ、コウガ。私は激流がある所っていったんだよ。これ、滝だよね？」

高「この滝は結構強いからな、滝つぼには気をつけろよ。巻き込まれたら死ぬ可能性大だから」
ア「今、自分で滝って言ったよね?。じゃあ、これって激流じゃないよね?」
高「つべこべ言わずにフィーラと泳いで来い!!」
ア「え?」
フ「あみゅ?」
高雅が二人の背中を押し、滝つぼへと落とした。
ちなみに、より体を運動させるために着衣水泳である。
ア「えええ!?」
フ「ボ・・ボクもですううう!?」
二人が叫ぶも、その声は滝つぼに消された。
レ「・・・・コウガ殿、楽しんでないか?」
高「いんや、寧ろ楽しんでる」
エ「言っている事が矛盾していないか?」
高「さぁ?」
サ「相変わらず、厳しい奴じゃの」
シ「お兄ちゃぁん、二人が見えないよぉ」
高「さーて、釣りの時間だ」
高雅はどこからか釣竿を取り出し、糸を滝つぼに落とした。
そして、1秒も経つことなく引き上げるとそこにはアリアとフィーラが釣れていた。
二人はそのまま地面に強く打ちつけられた。
ア「げほっ、ごほっ!!、こ・・・コウガ・・いくら何でも・・」
高「別に、“何でもあり”だろ?」
ア「だ・・・だからって、げほっ・・やって良いことと悪い事があるよ!!」
高「はいはい、次々。まだ終わらせねえぞ」
ア「ちょっ!!、いい加減に・・・いや、ゴメン!!。勝手にお金使った事は謝るから」

高「知ーらね。さて、次は・・・・『麻酔なしで脂肪摘出手術』をするか?。この場でできるし、確実だぞ?」
そう言って、高雅はどこからか包丁を取り出し、アリアににじり寄る。
ア「え!?、いや!!。さすがにそれは・・・」
高「大丈夫だって、後で周りの傷を再生させてやるから」
ア「いや、それｈ「つべこべ言わずに腹を出せ!!」だから、嫌だって!!」
高「なら仕方ない。レオ、エクス、サミダレ、シリア。アリアを押さえろ」
レ「うむ」
エ「了解」
サ「任せるのじゃ」
シ「はぁい」
ア「え、皆!?」
レオ達が容赦なくアリアを取り押さえる。
これで、完全に逃げる方法を失ったアリアは絶望の淵に立たされていた。
高「んじゃ、麻酔なしの脂肪摘出手術を行いま〜す」
ア「ま・・待って!!。止める!!。ダイエットは止めるから、ねぇ!!」
高「最後まで諦めるなよ。なぁに、すぐに済む」
ア「いや!!、本当に怖いの!!。だから、止めてえええええええええ」
アリアがどんなに懇願しようとも、高雅は手を止めない。
やがて、アリアの服を捲って腹を出し、包丁をゆっくりと近づける。
フ「ご・・ごめんなさいです!!!!」
そんな時、フィーラが突然、大きな声で謝った。
それを聞いた高雅は手をピタリと止めた。
高「誰に謝ってるんだ?」

フ「アリア様です！！」
ア「えっ！？、私！？」
フ「はいです。実は、あの体重計にイタズラをしたのです！！」
ア「イタズラ？」
フ「はいです。アリア様は本当は太ってないです。つい、出来心でしてしまい、こんなに深刻な状態になるなんて思ってなかったです。本当にごめんなさいです！！」
ア「え・・・まさか、皆！？」
アリアは皆の顔を窺う。
レ「我は見えるのだ。気付くのも容易いことだ」
エ「僕は登山の合間にコウガ君に教えてもらったのさ」
サ「同じく」
シ「お兄ちゃんに教えてもらったよぉ」
高「殺気見てから余裕でした」
ア「そんなぁ・・・」
真実を聞いて脱力するアリア。
自分とフィーラ以外、皆把握していたのだから。
高「さて、これに懲りたらフィーラはもうイタズラするなよ」
フ「はいです・・・」
高「・・・んじゃ、フィーラも反省してるし・・・」
高雅は置いてあった釣竿に手を伸ばした。
実は、アリア達をつった後に再び糸を入れていたのだ。
そして、勢い良く振り上げるとそこには糸に連なって魚が釣られていた。
その数、なんと１４匹！！。
高「帰って飯にするぞ。今日は魚料理でも作るか」
シ「やったぁ、お魚ぁ♪」
エ「ちょうどお腹が空く頃だったんだ」
フ「あみゅ・・・ボクは昨日食べたから、まだ空いてないです」
サ「ふむ、魚かぁ。どんな物か食べてみたいのぉ」

レ「我も、少々興味がある」
高「んじゃ、さっさと帰って飯だ！！」
「おー！！」
高雅の言葉に続き、次々と足を運びだす。
しかし、その中で一人だけ皆について行かない者がいた。
高「・・・・・お前も、さっさと来いよ。反省しただろ」
ア「ねぇ、コウガ。ダイエットって辛いね」
高「そりゃ、そうだろ。そんな下らない事するなら腹一杯食べたほうが幸せだ」
ア「・・・くすっ、確かに。食べてる時は幸せだもんね」
高「そう言う事だ。ほら、帰るぞ」
ア「うん」
高雅はアリアに手を伸ばし、アリアはその手を取る。
そして、二人は皆の後を追ったのであった。

## 困難極まりない計画（後書き）

みなさんも、体を気にしてダイエットするのはよろしいですが、ちゃんとストレスを作らずに規則的に行いましょう。
そして、ご飯を必ず食べましょう。

決して、本文にあるような無謀なダイエットはしないように。
てか、滝登りはできないかｗｗｗ

# 高雅の平和な休息（前書き）

今回は日常かな？

# 高雅の平和な休息

高雅は久しぶりに学校へ登校していた。
しかし、今日は授業が無く、終業式だった。
その為、朝から体育館に並んでいる。
校「え～、短い期間の休みですが、羽目を外しすぎないように――」
そして、恒例の校長スピーチ。
冬の体育館は気温がかなり低く、全員の体力をも削っていた。
高「・・Ｚｚｚ」
しかし、その中でも立ったまま高雅は寝ていた。
ア「相変わらず、どこでも寝るんだね・・・」
誰にも聞こえないようにアリアが呟いた。
そして、３０分経過したところで、やっと校長の話が終わった。
その後、校歌斉唱や諸連絡などがあり、終業式は幕を閉じた。
高「・・・・Ｚｚｚ」
終わったと言うのに、高雅はまだ眠っていた。
それを優しく龍子が起こしてあげた。
龍「高雅君・・・終わったよ・・・」
高「・・・・Ｚｚｚ」
龍「起きない・・・」
ア「いいよ、私がどうにかするから、先に教室に戻ってて」
龍「じゃあ・・・任せるよ・・」
龍子はアリアに高雅の事を任せ、自分は先に教室へ返った。
アリアは誰もいなくなった所で姿を現し、高雅を揺すった。
ア（誰もコウガに声をかけないなんて・・・）
アリアは龍子以外の皆が高雅を無視したことに少しイラついていた。
そんなことを思いつつもアリアは高雅を揺する。
ア「ほら、もう終わったよ。起きてよ」

高「むにゃ・・・俺の・・・眠りを妨げるなぁ～」
ア「いっ！？」
高雅は寝ぼけながらアリアの顔面にストレートパンチを繰り出した。
アリアは寸前で避け、尻もちをついた。
ア「これか・・・」
そして、高雅が起こされなかった理由を自ずと理解した。
その後、何度もパンチを避けながらも高雅を起こした。

教室で先生が前で話している中、高雅は普通にドアを開け、席に着いた。
皆が高雅に注目する中、高雅は普通に寝た。
先「寝るな！！」
先生の魔球チョークが飛び出す。
そのチョークは縦にジグザグを描きながら高雅の頭へ飛んでゆく。
名称、W（ホ〇イト）チョークである。
しかし、そのチョークは高雅の頭から逸れ、何故かAの頭に直撃した。
A「あがっ！？」
先「ちっ、未完成か・・・」
などと呟きながら、本題に入った。
A（未完成かよ！？）
Aは心の中でツッコミながらも頭を押さえていた。
ちなみに、先生の技は決して未完成ではなく、高雅の日頃出ている殺気で逸れたのである。
高雅の眠りバリアみたいな物である。

先「それでは、大掃除に入ります。日頃していない部分も徹底的にしますので、皆さんしっかりと掃除するように。特に崎村君は人一倍掃除するように」
先生が釘を打つも、高雅は爆睡しており、全く聞いていない。
先生の話しが終わったところで、皆（高雅は除く）は一斉に机を後ろに下げ始める。
その後、高雅は龍子に起こされ、しょうがなく掃除に参加した。
高雅の担当場所は黒板であり、他にAとCと龍子、そして夢がいた。
A「おい、高雅。黒板消しでも叩(はた)いてくれ」
高「俺に命令、さらに、下の名前で呼んだため、処刑を決行する」
A「出来るものならやってみな」
高「上等！！」
高雅とAは掃除をすっぽかして喧嘩に入った。
高雅は置いてあった４つの黒板消しをまとめて投げる。
Aはそれを箒で打ち返した。
しかし、打つ所が悪く、Aの周りにチョークの粉が漂った。
A「しまっ！？」
完全に視界が奪われ、殺気と音だけで高雅を探そうとする。
しかし、Aはそこまで器用ではなく、呆気なく、高雅に後ろを取られていた。
高「出直しな」
A「なっ！？」

ゴンッ！！

高雅は持っていたバケツでAの脳天に一撃を加えた。
Aはばたりと倒れ、気を失った。
夢「・・・って、人手を減らしちゃだめでしょ！！」
高「お前が人三倍働けばいいだけだ。んじゃ・・・ＺＺＺ」
夢「嫌だよ！！。たまには真面目に働けよー・・・って、聞いてな

いし」
龍「仕方ないよ・・・二人で頑張ろ？」
C「あの・・・俺は？」
夢「・・・そうだね。二人で頑張ろう」
C「おい！！。少しは活躍させてくれ！！」
龍「じゃあ・・・黒板消しは・・・私が綺麗に・・・する」
夢「それじゃ、あたしは溝を綺麗にする」
C「じゃ、俺は全体を・・・・って、無視するなゴラァ！！」
結局、Cは龍子と夢に気付かれず、無視され続けた。
決して、いじめで無視している訳ではない。
本当に気付いていないのだ。
C「・・・・・・鬱だ、死のお」
結果、男性陣は碌（ろく）に働かずに終わった。
龍子と夢の連携で黒板はより綺麗になった。

飛んで放課後。
昼に終わったため、高雅は家に行かずに商店街によっていた。
高「今日は楽園組は飯の日じゃないし、適当にフードショップで済ませるか」
ア「何で？」
高「あいつらがいると、何かゆっくりと飯が食えない」
ア「まぁ、少し分かる気がする・・・」

高雅が家の事を思っている時、丁度高雅の家では・・・
フ「あーー！！、ボクのプリンが無いです！！」
シ「プリィン？、美味しかったよぉ」
フ「もしかして、食べたです！？」
シ「うん！！」
元気良く頷くシリアに対し、怒りで震えだすフィーラ。
フ「吐きだせですううううううう」
シ「きゃわぁー♪」
怒るフィーラに笑いながら逃げまどうシリア。
夢幻を使いながら追い掛けるも、何故かシリアは効かない。
レ「全く、騒がしいな」
エ「いつもの事ではないか」
サ「そうじゃのぉ」
それを傍観する平和組みの三人。
しかし、火の粉が降りかかるのは言うまでもない。
フ「三人とも手伝えです！！」
レ「何故我らが？」
フ「いいから手伝えです！！。ボクのプリンを取り返すです！！」
サ「無理じゃ。既にシリア殿の栄養分として吸収されておる。諦めるのじゃ」
シ「かわいそぉ」
フ「お前の所為です！！」
再び始まる鬼ごっこ。
シリアは常に笑いながら逃げ、フィーラはその度(たび)に怒りが上昇していた。
レ「コウガ殿、早く帰って来てくれ」
レオが切願するも、それは叶わぬ願いだった。

家でそんなことが起きている事も知らずに高雅は某ハンバーガーショップで昼食を取っていた。
高「偶(たま)には一人でのんびり食べるのも悪くないな」
ア「私がいるけど」
高「人間状態じゃなければノーカンだ」
そう言ってポテトを摘まむ。
高雅はゆっくりできる貴重な時間を満喫していた。
高「さて、偶には遊んで帰るか」
ア「完全に家をほったらかしてるね」
高「こんな事をしても罰(ばち)は当たらないって。いつも迷惑掛けられてるからな」
ア「はぁ、しょうがないか」
高「そう言う事だ」
高雅は食べ終わったゴミを捨て、店を出た。
向かった場所は学生の寄り道トッププテンにきっと入るであろうゲーセンである。
高「まぁ、調べてないし、願望系になるな」
ア「？、？？、？？？」
高「これまた懐かしい」
そんなことを呟きながらも目的地であるゲーセンに辿り着いた。
そして、一目散にガンシューを目指す。
高「久々うちますか」
1コイン入れていざ始める。
そして、ノーコンノーミスを叩きだし、ゲームを終える。
しかし、ランキング1位ではなかった。
高「上には上がいるな」
ア「コウガより上手い人がいるんだ」
高「もはや、人外だな」
ア「高雅は本当に人外でしょ」
高「まぁ・・・そうだな」

そう言って場所を後にし、今度はクレーンゲームの場所へ行く。
また1コイン入れてクレーンを動かし、商品を頂く。
高雅からすれば、ただの１００ショップである。
高「はいゲット」
手に入れたのは可愛らしい猫のぬいぐるみである。
ア「どうするの、それ？」
高「ん～・・・お前にやるよ」
ア「えっ！？」
高「何だ、嫌か？」
ア「いや・・・そうじゃなくて」
高「じゃあ、受け取れ」
ア「うん・・・ありがと／／／」
アリアは嬉しそうに呟いた。
やると言っても、アリアはブレスレット状態の為、帰ってからやることになっている。
その後、一通りのクレーンゲームを制覇し、ゲーセンを後にした。
時間潰しは終わり、高雅は帰路に着いた。
高「ん～、いい暇つぶしになったな」
ア「そうだね。家ではどうしてるかな？」
高「知らん」
ア「きっぱり言ったね」
高「知らん物は知らん。まぁ、どうにかしてるだろ」
ア「家が無くなってたりして」
高「・・・それ、フラグ」
そう言って最後の曲がり角を曲がる。
そこからは高雅の家が見えるはずだったが・・・
高「残念、フラグブレイカーでした」
普通に高雅の家が見えました。
高雅は玄関に立ち、ドアノブを回す。
高「ただいま～」

高雅が声を出すも、誰も返事を返さない。
不審に思い、リビングの扉を開けながらもう一度声を掛ける。
高「ただ・・・」
その先の言葉が出なかった。
中は散らかっており、無茶苦茶な状態になっていた。
高「ど・・どうなってんだよ!?。皆は!?」
ア「まさか・・・敵襲!?」
高「くっ・・・俺が油断したからか」
今になって後悔してももう遅い。
既に起こった事を戻す事など不可能だから。
ア「とにかく、皆を探そう!!」
高「そうだな。それが先決d「わぁ!!」ぶっ!?」
可愛らしい声と共に、高雅の腹にタックルして来たのはシリアだった。
本人は驚かそうとしているのだが、全く別の方向になってしまっていた。
シ「あははは、お帰りぃ」
ア「シリアちゃん!!。皆は無事!?」
シ「えぇ?、無事に決まってるよぉ」
フ「そこにいたです!!」
ア「フィーラちゃん!?」
シ「あははぁ、バレちゃったよぉ」
フ「待つです!!」
フィーラとシリアの追いかけっこはまだ続いていた。
そして、後からレオ達も姿を出した。
レ「おお、帰っていたか、コウガ殿」
エ「早速で悪いが、あの二人を止めてくれ。僕らでは手に負えない」
高「・・・テメーら・・・」
高雅がゆっくりと起き上がり、殺気を溢れださせる。
それに気付いた皆は体が硬直し、冷や汗をかきだした。

高「全員、そこに直れ！！」
そして、追いかけっこに高雅も加わり、さらにヒートアップしたのは言うまでもない。
まぁ、結果は言うまでもなく高雅が勝つのだが。

## 蓮田と香凛の観察（前書き）

今回は砂糖注意です。

## 蓮田と香凛の観察

高雅は今、台所で今日の昼ご飯を作っていた。
ちなみに、楽園組も今日は食べる為手伝わされている。
高「砂糖取ってくれ」
フ「はいです」
エ「待て、それは塩ではないか？」
フ「これは砂糖です！！。絶対に砂糖です！！」
エ「しかし、こちらの方がサラサラ感があるだろう」
フ「うるさいです。それだったら、食べたほうが早いです！！」
フィーラが塩か砂糖か分からない白い粉を摘まんで食べる。
フ「っ！？、ぺっぺっ！！」
どうやら塩に当たってしまった。
フィーラは舌を出して唾を吐いていた。
高「早くしろ」
エ「おっと、すまないな」
エクスが正解の方を渡し、高雅はテキパキと料理する。
高「味付け完了。後は盛り付けっと・・・」
皿を取り出し、盛り付けをする。
それをテーブルに置いた後に炊飯器でご飯を盛る。
それらをエクスとフィーラに運ばせて準備完了。
高「はい、じゃあご一緒に」
エ・フ「頂きます（です）」
ア「小学校じゃないんだから・・・」
アリアのツッコミを無視して食事を始める。
フ「美味しいです」
エ「さすがコウガ君が作っただけはある」
高「褒めても何も出ないぞ」
ロ「なぁ、コウガっち。醤油（しょうゆ）取ってくれ」

高「ほらよ」
ロ「サンキュ」
フ「・・・・・・・って、ログナです！？」
ロ「あ、バレちまった・・・って、ヒーーー！？」
突然、ログナが火を噴き出した。
高「あ、それ、醤油じゃなくて茶色いワサビだから」
ロ「ひぎゃあああああ、口の中が爆発してるぞおおおおお」
ア「相変わらず、えげつない事するね」
高「一般常識、一般常識」
ア「さすがにそれは無い」
アリアがそう指摘している間もログナは火を吹きながら暴れ回っている。
平穏な食卓終了のお知らせである。
ロ「みずううううううう、みずをくれえええええええ」
高「ほい」
そう言って、透明な液体の入ったコップをログナに渡す。
もちろん、これが水な訳が無かった。
ロ「ひぎいいいいいいいいいいいいいいい」
ア「今度は何をしたの？」
高「なーに、どうにか化学反応をさせて透明の液体にしたワサビだ。害はない」
ア「それはすごいこと・・・じゃないよ！！」
流石にやり過ぎだと思ったのか、アリアが反論しだした。
ア「いくらなんでも、かわいそうだよ」
高「働かざる者、食うべからずだ」
ア「だけど・・・」
高「もう、何も言うな。あいつだって嬉しそうに跳ねまわってるじゃねえか」
ロ「ちげえええええええええええええ」
ログナの暴走はさらにヒートアップ。

ワサビ醤油とワサビドリンクを得たログナの暴走に右に出るもの無し。
ログナはその後、高雅の家を出ていってどこかへ去って行った。

高「Ｚｚｚ・・・」
昼ご飯を食べ終わった高雅は真っ先に寝た。
ア「相変わらず、寝るのだけは一流だね」
レ「しかし、ログナ殿は一体何しに来たのだ？」
ア「さぁ？。ご飯でも食べたかったのかな？」
ロ「いやぁ、実はさぁ、ちょっと蓮田の事で相談が」
ア「うわぁ！？、いつの間に！？」
ロ「いや、今さら。俺っちは神出鬼没だろ」
ア「まぁ、そうだけど・・・で、一体、何？」
ロ「それがさ・・・実は・・・」
そう言って、ログナの回想シーンが始まった。

ロ「蓮田、今日は何するか？」
蓮「えっと、ゴメン。今日は用事があるんだ」
ロ「おいおい、聞いてないぞ。何だよ用事って？」
蓮「実は今日、かりんちゃんと遊ぶ約束があるんだ。もうすぐ迎えに来るらしいけど」

ロ「へ～・・・で、俺っちは？」
蓮「もちろん、お留守番。後、ちょっと遠いから契約を今の間だけ破棄して欲しいんだけど・・・」
ロ「な・・・なななな！？」
蓮田からの言葉にログナは信じられない顔をする。
蓮田は手を合わせながらも必死にお願いしていた。
ロ「へ・・え・あ・・・今、なんて・・・？」
蓮「ゴメン、ログナ。かりんちゃんがどうしても二人っきりがいいって言うから」
ロ「あ・・はは・・・・こんちくしょおおおおおおお」
蓮「ログナ！？」
ロ「うわあああああああああああああん。蓮田のばかあああああああああ」
ログナは叫んだかと思いきや急に号泣してどこかへ去って行った。
その後、蓮田は後味が悪いまま、かりんとの待ち合わせ場所へ向かったのだ。

ロ「なぁ？、あんまりだ、と思わないか？」
ア「全然」
レ「全くだ」
サ「普通じゃ」
フ「レンタが正しいです」
シ「？」
高「Ｚｚｚ・・・」
ロ「ちくしょおおおおおおおおおおおお」

最早、ログナの味方など誰一人としていなかった。
全員が蓮田の味方であった。
ロ「うわあああああああああああん」
ア「相変わらず感情表現が激しい事」
レ「しかし、いいではないか。二人っきりにさせるのも」
ロ「だけどよ・・・・・・」
フ「一人でいられない、情けない奴です」
ロ「ちっがう!!。何でそうなる!?」
フ「レンタの事を考えるなら、理解者として見守るべきです」
ロ「見守る・・・それだ!!」
高「さっきからうるせぇ!!」
目を覚ました高雅がログナの顔面に一発殴る。
ログナは思いっきり吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。
ロ「いてぇ・・・・」
高「そんな下らねえ事で俺に頼るな!!。自分で何とかしろ!!」
ロ「わかりますた・・・」
ログナは痛みにこらえながらもトボトボと家を出て行った。
そんな後ろ姿を心配そうにアリアは見つめていた。
ア「大丈夫かな?」
高「変装なしで行くから大丈夫ではない」
ア「・・・よく考えればそうだね」
当たり前な事を言われ、苦笑いするアリア。
すると、高雅は押入れの中から何着か服を取り出した。
高「ほら、これでも届けて来い。心配なら、お前らも見て来い」
フ「ん〜、面白そうですから、行ってみるです」
シ「あたしもぉ!!」
フィーラとシリアが面白半分で服を漁る。
高「そうだ、皆で行って来い。そして、俺は寝る」
ア「相変わらず過ぎる」
俺「それじゃ、後は頑張れ。蓮田とログナはお前らに掛かってるか

ら」
ア「そう言われると満更でもないかも」
そう言って、高雅の出した変装用にの服を横目に見る。
その間に高雅は自分の部屋に行った。
ア「・・・仕方ないか」
そう言って、高雅の策略通りにアリアは変装の服に手を伸ばした。

とあるどっかであちらの方にある遊園地。
要するに緑淵町にはない遊園地。
香「今度はこっちに行くの」
蓮「うん」
蓮田と香凛が楽しそうに園内を駆け回る。
ちなみに、ＳＰもガードマンも誰もいない。
さらに、客すらいない。
金持ち特権の完全貸し切り遊園地である。
香「次はあっちなの」
蓮「待ってよー」
そんな幸せそうな二人に影から怪しい者が見ていた。
ロ「ぐぬぬぬぬ、幸せそうだな」
ア「まぁ、いい事じゃない」
フ「素晴らしい事です」
シ「羨ましいなぁ」
もちろん、彼らである。
ログナの追って来たのはこの三人で他は家にいる。
何故アリアが来れたかと言うと、アリアも蓮田達と同じように高雅

との契約をこの時の間だけ破棄している。
そして、彼らの変装なのだが・・・
ア「これ・・・絶対に怪しいよね」
全員一致で黒いスーツ、黒い帽子、黒いサングラス、黒いマスク、黒いズボンである。
フ「気にしないです。何か楽しいです」
シ「あたしもぉ」
ア「あははは、せめてマスクにはツッコミが欲しかったよ」
ロ「おい、動き出したぞ」
ログナが冷静に二人の動きを観察する。
二人はお化け屋敷に向かったのである。
香「こんな人が作ったものなんて驚きもしないなの」
蓮「それじゃ、一生懸命作った人に失礼だよ」
香「そ・・・それは、ごめんなさいなの」
蓮「うん。それじゃ、行ってみようか」
香「はいなの」
二人はお化け屋敷へと入って行った。
もちろん、三人も後を追って入って行った。

そして、数十分後。

二人は出て来て、遅れて三人も出てきた。
香「やっぱり、驚かなかったの」
蓮「でも、所々で手を強く握ってたよ、あれって・・・」
香「そ・・それは違うの!!。ただ・・えっと・・・もぉ、蓮君の意地悪なの!!」
蓮「あっ、ちょっと待ってよ」
香凛が照れ隠しのように蓮田を置いて走って行く。
それを追うように蓮田も走る。
そんな光景を三人は微笑みながら見ていた。

ア「ふふ、レン君なんて。二人の展開は絶好調だね」
フ「甘い展開です」
シ「あまぁい」
ロ「ゴパァ！！」
ア「あ、砂糖吐いた」
ログナは二人の甘さに砂糖を吐いてしまった。
その後もログナは砂糖を吐き続けながら二人の尾行を続けた。

そして、夕暮れ。
開園時間も残りわずかになり、二人のデートも終盤になる。
蓮「今日は楽しかったよ」
香「カリンもなの！！」
二人は出口に向かいながら今日の出来事を語り始める。
そして、話し終わった頃には既に外に出ており、目の前にはお迎えのリムジンがあった。
香「乗ってなの。送ってあげるの」
蓮「・・・ごめんね。やっぱり、一人で帰るよ」
香「え、どうしてなの！？」
蓮「その・・・僕も男の子だから、あんまり、女の子のかりんちゃんの手を借りるのも・・・」
香「だ・・大丈夫なの！！。別にそんなことは気にしてないの」
蓮「ううん。これは僕の思いなんだ。僕も男の子として、こうがにいちゃん見たいにカッコ良くなりたい」
香「・・・分かったなの。じゃあ・・・」
香凛は蓮田に近づいて・・・
ちゅ・・・

頬っぺたにキスをした。
蓮「！？／／／」
香「えへへ、頑張れのキスなの／／／」
蓮「あ・・ありがとう／／／」
香「じゃ・・じゃあ、頑張ってなの。バイバイなの／／／」
香凛は恥ずかしくなって駆け足でリムジンに乗った。
それを見ていた三人はニヤニヤしていた。
ア「あまあまだね」
フ「見てるこっちが恥ずかしいです／／／」
シ「いいなぁ」
ロ「ゴパァアアアアアアアアアア」
ア「あらら、砂糖が滝のように・・・」

こうして、蓮田は一人で帰り、三人の尾行は終わった。
もちろん、蓮田は周りの人たちから聞いて電車などを使って帰ったのである。
周りの人たちの中に三人が入っていたのは言うまでもない。

# 高雅がアリアでアリアが高雅で

朝起きて、
ア「ん・・くぅ～・・・・」
少し背伸びをしてから、洗面台へ向かい、
ア「ふぁ～・・・まだ眠い・・・」
そんな愚痴を零しながらも一歩一歩洗面台へ向かい、
ア「・・・・・？」
顔を洗って意識がはっきりし、髪を整えようと鏡を見ると、
ア「え・・・あれ・・？」
もう一度顔を洗って鏡を見ると、
ア「なんじゃこりゃあああああああああああ」
アリアになってました。

ｂｙ　高雅

フ「な・・何事です！？」
レ「今のはアリア殿の悲鳴だ」
フィーラとレオがアリアの悲鳴に駆けつける。
アリアは唖然と口を開けて鏡を見ていた。
レ「どうしたのだ、アリア殿！？」
ア「どうしたもこうしたもねぇ！！。何なんだよこりゃ！？」
フ「あ・・・アリア様！？。随分口調が怖いです」
ア「俺はアリアじゃねえ。コウガだ！！」
レ「何を言っているのだ！？」

ア「そのまんまの意味だ!!」
フ「どういう「きゃあああああああああああ」っ!?」
ア「マジかよ・・・」
突然、高雅の叫び声が聞こえた。
しかし、その叫び声は似つかわしくない女の様な叫び声だった。
そして、ドタバタと騒がしく洗面台へやって来た高雅。
アリア達を綺麗に駆け抜けて鏡で自分を確認する。
高「え・ええ・・えええええええええええ」
ア「うるせぇ!!」
アリアが叫ぶ高雅に一発殴る。
フ「あ・・・アリア様が打ったです」
レ「す・・凄い光景だな」
高「い・・・・痛いよ、高雅・・って、私!?」
ア「俺が俺の名前を呼ぶな。そして、気付くのが遅い」
エ「さっきからどうしたのだ?」
騒ぎに駆けつけ、エクスとサミダレがやって来た。
フ「えっと・・・アリア様がコウガ様を打ったです」
サ「それは大事件じゃな」
ア「問題はそこじゃねえ!!」
エ「こ・・怖くなったな、アリア君」
ア「おい、フィーラ!!。お前、夢幻使ってねーだろうな!?」
フ「ち・・・違うです。ボクは何もしてないです!!」
エ「一体、どうなっているのだ?」
高「あのね、よく分からないけど実は・・・」
高雅は自分で理解したのか、今把握している分だけ説明を始めた。
レ「成程。つまり、コウガ殿とアリア殿が入れ替わったと」
ア「そう言う事だ」
サ「どうしてこうなったのじゃ?。何か思い当ることはないのか?」
ア「全くない」
高「同じく・・・」

フ「じゃあ、どうして入れ替わったです？」
ア「こっちが知りてぇよ」
高「ん～・・・昨日、何を食べた？」
ア「至って普通の和食料理だよ！！。変なものなんて一つも食ってねえよ！！」
高「う・・疑ってる訳じゃないよ」
シ「ふぁ～・・・？、どうしたのぉ？」
シリアが今さら起きてきた。
あらだけ騒いだというのに今起きて目を擦(こす)っていた。
頭がはっきりしてないのか、足取りがフラフラになっていた。
高「おっと、大丈夫？」
シ「ふぇ？」
高雅がフラフラになっているシリアを支える。
その光景はシリアにとって驚きと喜びの両方があった。
シ「お兄ちゃんが優しぃ！？。あたしを支えたぁ・・・」
高「え・・ああ、私はアｒ「はぅ、夢心地ぃ・・・」もしもし？」
シリアは幸せに満ちて再び眠った。
高「寝ちゃった・・・」
ア「そこら辺に捨ててろ」
高「それは酷いよ！！」
ア「知るか。もう俺は寝る。寝りゃ治るだろ」
高「睡眠が万病にいいって言っても、これは流石に・・・って、聞いてないし」
アリアは高雅を無視して部屋に向かった。
高「・・・どうしよう」
エ「とにかく、今はシリア君を横にさせよう。話しはそれからだ」
高「そうだね」
高雅達はリビングへ向かい、ソファにシリアを寝かせた。
そして、今後の事について考えだした。
高「さて、どうやって元に戻るんだろう？」

フ「テンプレ通りに頭と頭をぶつけるです」
高「でも、入れ替わった時は頭なんてぶつけてないよ。それに、昨日の寝るまでは自分の体にいたし・・・」
レ「では、アリ・・コウガ殿が言っておられたように眠ってみるか？」
高「それもそれでどうだろう？」
サ「それじゃ、いっそこのままコウガ殿になりきるのじゃな？」
高「それは無理。私に高雅を真似ることなんてできない」
エ「まぁ・・・それぞれ試すしかないな」
こうして、高雅とアリアを元に戻すために試すのであった。

まずは、ありがちな頭をぶつけて治す作戦である。
アリアが眠っている部屋にこっそりと潜入する。
ア「Ｚｚｚ・・・」
高「よかった。ちゃんと寝てる」
眠っているアリアにそぉっと近づき、頭を狙う。
高「よし・・・思いっきり・・・てい！！」
そして、思いっきり振りかぶって・・・

ガンッ！！

ア「いっ！？」
突然の衝撃に目を覚ますアリア。
そして、次第にいたみだす頭。
その傍らで蹲っている高雅。
次第に高雅の考えを理解し、怒りに燃えるアリア。
ア「テメェ・・・」
高「いたたた・・・あ！？」

ア「下らねぇ考えをしやがって・・・」
高「あ・・あははははは・・・」

ドゴッ！！

アリアによる手痛い一発を高雅の脳天に浴びさせた。

頭を撫でながら戻って来る高雅。
高「ゴメン、ダメだった・・・」
フ「見れば分かるです」
レ「見事なタンコブだ」
高「つぅ・・・かなり痛いよぉ・・・」
エ「では、次の作戦だな」
サ「お主、少し楽しんでおらぬか？」
休む間もなく、次の作戦へ実行に移した。

次の作戦は大した差はなかった。
フ「今のは故意でやってからできなかったです。ですから、次は自然な形で――」
と、言った案は高雅が部屋を出た瞬間にアリアも部屋に入ろうとし、自然に頭をぶつける作戦だ。
高（・・・いや、作戦の時点で既に故意のような・・・）
高雅はそんなことを思ったがそれを気にしてはお終いである。

すると、高雅の部屋の屋根裏に潜んでいるフィーラから連絡が入る。
フ「こちらフィーラです。アリ・・・コウガ様が動き出したです。チャンスです」
高「う・・うん、分かった」
高雅がドアの前に立ち、スタンバイする。
高「自然に・・・自然に・・・」
大事な事を何度も復唱する。
しかし、明らかに不自然である事はここだけの秘密である。
すると、ドアノブが回りだした。
高（今だ!!）
高雅もドアノブに手を伸ばした。
だが・・・

ガチャ・・ガンッ!!

高「あう!?」
ア「？」
ドアが高雅にアタックして高雅は倒れてしまった。
高（そっか・・・スライド式じゃないからこうなるよね・・・）
ア「何やってんだ、お前?。ドアの前に立つなよ、危ないから」
高「うん、ゴメン・・・」
フ「作戦は失敗です」
屋根裏から見ていたフィーラが溜息を零しながら、そう呟いた。

結局、色々試してみたものの夜になっても高雅とアリアは元通りにならなかった。
高「はぁ・・・全然ダメだよ」
フ「どうするです?。もお、ありとあらゆる手段を使ったです」
高「その度(たび)におでこが痛くなったけど・・・」
ア「お前ら、さっきから何で簡単な方法に気付かないんだよ・・・」
アリアがリビングにやって来て高雅達にそう言った。
高雅達は分からない顔をして首を傾げていた。
高「どういう事?。てか、やっと起きたね」
ア「お前らの所為でぐっすり眠れなかっただけだ。それで、誰も分からないのか?」
フ「全くです」
レ「えっと・・・」
エ「俺はパース」
サ「ふっふっふ」
ア「そこの二名、分かってるだろ!!」
アリアが二人にビシッと指を指す。
サ「当たり前じゃ」
エ「パース」
フ「どういう・・・事です?」
ア「あのな、こいつは俺の使い。つまり力が使える。しかも、殆どのな」
高「はっ!?」
高雅はやっと理解したのか手を口に当てて目を見開いた。
それを見たアリアが溜息を零して呆れた。
それに続いてフィーラも理解した。
フ「そうです!!。魂を入れ替える力もきっとあるはずです」
ア「全く、最初に思いつけよ」
レ「では、真の契約をして力を使うのだ」
高「真の契約・・・つまり、キス・・・／／／」

ア「自分とキスするなんて、何か嫌だな」
周りから見れば至って普通の光景である。
だが、高雅とアリアから見れば、自分にキスをするのと同じである。
その事に何か嫌気がしていた。
エ「さっさとキスしてしまえよ」
ア「いや、自分とキスするなんて何か抵抗があるだろ。ナルシストじゃねーし」
エ「んじゃ、目を瞑って相手の事を妄想しろ」
高「それなら・・・」
ア「それならじゃねーよ!!。・・・けど、仕方ねーな」
高「えっ・・・ん／／／」
アリアが高雅の肩を掴んで手早くキスをした。
フ「コウガ様が赤くなってるです」
レ「正確にはアリア殿だがな」
ア「さて、さっさと力を使って元に戻そうぜ」
高「力使うって、私の体を使ってるコウガの役目だよ」
ア「おっと、そうだった。んじゃ・・・こうすればいいな」
アリアは交換の力を使い、自分の魂とアリアの魂を入れ替えた。
どうやら、お互いに価値は同じだった為、上手く成功した。
高「はぁ、やっと戻って来れた」
ア「やった。自分の体だ!!」
フ「・・・呆気ないです」
フィーラはさっきまでの苦労は何だったのかと思うと疲れがドッと出た。
高「さて、俺はもうひと眠りをするか。てか、もう明日まで寝る」
フ「今日は常に寝てるです。もう少し起きるです」
高「ふぁ〜、眠ぃ〜」
高雅はフィーラの言葉を無視して自分の部屋に向かう。
目的が終わればすぐに帰って行くのであった。
レ「全く、コウガ殿は」

エ「ま、あいつらしいじゃねーか」
ア「そうだね。それにしても、あんな簡単に戻せるなんて、どうして気付かなかったんだろう・・・」
サ「何事も難しく考えると見えなくなる物もあるのじゃ。それが分かったじゃろ？」
ア「・・・うん。で、何でエクスとサミダレは教えてくれなかったの？」
アリアがサミダレとエクスを睨む。
サミダレとエクスは目を合わさずに答えた。
エ「俺は夜に現れるし。てか、一瞬で気付かない方がアホだ」
サ「ただ単に面白かったからじゃ」
ア「もぉ！！、酷いよ！！」
シ「ふぁ～・・・よく寝たぁ」
今さらながら起きたシリア。
今の今までずっと眠っていたのである。
シ「お腹すいたぁ」
レ「ビクッ！！」
シリアの言葉に自然に体を震わすレオ。
そして、すぐにシリアの視界から姿を隠した。
シ「・・・よしぃ、お兄ちゃんにたのもぉ」
シリアは起き上がるとすぐに高雅の部屋へ向かった。
ア「あっ、コウガの睡眠の邪魔をすると・・・って、聞いてない」
フ「身を持って味わうといいです」
少しして、シリアがリビングに戻って来た。
その頭には大きなタンコブが作られていた。
シ「ひっく・・・お兄ちゃん・・・怒ったぁ・・・・えぐ・・」
ア「もぉ、よしよし」
シ「うえええええええええええん」
こうして、シリアをあやすのに一苦労をさせられたアリアであった。

一方、高雅の部屋では・・・

高「頭がいてぇ・・・」

身体的ダメージを受けている体の所為で高雅はひどい頭痛に見舞われていた。

# クリスマスパーティ　前編

今、高雅達の世界ではクリスマスを迎えていた。
しかし、高雅はこれと言って予定は無く、ただ家で寝てるだけであった。
高「Ｚｚｚ・・・」
フ「コウガ様、相変わらずです」
レ「まぁ、いつも通りでいいではないか」
ア「でも、今日はちょっと違うみたいだよ」
そう言って、アリアが差し出したのは一通の封筒。
中には一枚の手紙と６枚の招待状が入っていた。
アリアは高雅を揺すり起こし、手紙を渡した。
ア「コウガ、起きて。はい」
高「ん・・・・・ガス代は払った・・・って、違うか」
寝ぼけながらも手紙に目を通す。
気になってフィーラやシリアも顔をのぞかせる。
高「えっと・・・『崎村家にいる皆さんへ――――』」

今日、１７時から屋敷でクリスマスパーティを行います。
同封した招待状を持ってぜひ参加してください。
ただのパーティですので、プレゼントなどは要りません。
気軽にいらしてください。
蓮田君やログナ君もぜひ誘ってください。

姫花家一同より

高「今日って・・・唐突だな」
ア「でも、暇でしょ？」
高「暇じゃない。寝る用事がある」
ア「それは暇と言うんだよ」

フ「でも、全員分が無いです」
レ「確かに。レンタ殿とログナ殿の分を考えると四人分しかない」
明らかに不足していたのは分かっていた。
しかし、それは仕方のない事だというのも高雅は理解していた。
高「あっちはエクスとサミダレ、そしてシリアがいる事を知らない。いきなり家族が増えることなんて検討してないだろ」
エ「事実だな。あちらは僕らの事を知らない」
サ「それじゃ、私らは留守番じゃの」
シ「えぇ～、パーティ～行きたぁい」
潔く諦める二人と駄々をこねる一人。
高「じゃあ、俺の分やるから行って来い」
シ「ほんとぉ！？」
ア「それじゃダメ！！。意味が無いよ」
高「別に、俺に来いって言ってる訳じゃねえし、崎村家なら誰でもいいじゃねえか」
ア「崎村家の大黒柱的な存在のコウガがいないと」
高「関係ないって」
ロ「取りあえず、俺っち達のはもらっておくぞ」
高「どーぞどーぞ」
神出鬼没のログナが招待状を二枚取ってすぐに帰って行った。
もう、いきなり現れても普通に接していた。
ア「僅か一行（いちぎょう）で消えるとは・・・」
高「ふぁ～、んじゃ、俺は寝る」
サ「ちゃんと夕方に起きるのじゃぞ」
高「へーへー」
適当に流して高雅は自分の部屋へ向かう。
しかし、さり気なく起きる事を約束しているのはアリアだけが分かっていた。

飛んで夕方。
高雅達は蓮田達を率いて姫花家の門前にいた。
もちろん、シリアではなく高雅が来ている。
シリアは高雅が寝ている内にアリア達が何とか説得したのである。
高「あ～、最近、寝続けて体がダルイなぁ」
ア「全く、偶(たま)には運動ぐらいしたら？」
高「知らねーよ。とにかく行くぞ」
高雅はデカイ門を片手で開け館の入口へ歩いて行く。
そんな時、後ろからリムジンがやって来た。
高雅達を前にしてもスピードを落とすことなく、そのまま突っ込んでくる。
しかし、誰一人として避けようとはしなかった。
ア「危ないね」
高「危ないな」
フ「危ないです」
レ「危ないだろうな」
ロ「わー、こえー」
蓮「大丈夫だよ。止まってくれるよ」
危機感ゼロの六人はただ道の真ん中に立ってリムジンを見ていた。
ちなみに、蓮田以外は全員棒読みである。
すると、高雅がリムジンから見て皆の前に立った。
高「おら」

ガゴン！！

リムジンの暴走を片足で止めた。

リムジンはかなりへこみ、受け止めた高雅は全くの無傷である。
すると、変形したリムジンの中からある人物が出てきた。
伊「貴様ら・・・この伊刈家の車になんて事を・・・」
高「・・・誰？」
ア「ん～、見たことないって顔じゃないけど」
中から現れたのは誕生日パーティ以来の伊刈である。
しかし、記憶は消してある為、高雅達の事は初見である。
そんな時、さらにもう一台、リムジンやって来た。
それは高雅達を避けて、高雅の真横で一時停止する。
そして、窓が開かれると知っている人物が現れた。
凛「あら、いらっしゃったのですね」
高「半ば無理やりだったけど」
ア「けど、来たってことは意思があったってことだよ」
高「・・・んで、お前は何で外にいたのだ」
凛「彼女をお迎えに参られてましたの」
高「ん？」
凛の後ろには控え目に座っている人物が見えた。
龍「こんばんは・・・」
高「龍子か。てか、何で龍子はお迎え付きなんだよ」
凛「まぁ、姫花家の礼儀ですわ」
高「俺に礼儀はねーのかよ。てか、完全に贔屓(ひいき)だろ、これ」
凛「ま・・まぁ、取りあえず、先に待っているわ」
そう言って、凛は窓を閉めて車を走らせた。
高「・・・ったく」
ア「ま、早く行こっか」
伊「待て！！」
高雅達はあえて無視して屋敷へと歩き出した。
名前が知らなくても、かまうだけ疲れるのは知っていた。
警「そこの者。不審な車に乗って何をしている？」
伊「おい、私は伊刈家のものだぞ！！。ここに招待状が・・・って

無い！？」
警「では、不法侵入として連行だ」
伊「待て、話せば分かる！！」
警「いいから来い！！」
伊刈は警察に連行され、パーティには参加できなかった。
そんな隙に高雅達は玄関前までやって来ていた。
すると、使用人が前に現れ、道を塞ぐ。
高「ほら、六人分だ」
高雅はすかさず招待状を見せると使用人達は念入りに調べる。
３０秒後にやっと使用人が玄関の扉を開けてくれた。
高「念入りだな」
ア「ところで、コウガ。その招待状はどうするの？」
実は一瞬のうち伊刈から招待状を盗んでいたのだ。
高「ん～、どうするかね～」
そう言って招待状を見る。
すると、狙ったかのように一瞬強い風が吹き荒れた。
高「あっ」
そんな時、高雅の持っていた招待状が空へ舞い上がった。
高「・・・ま、いいか」
わざわざ取るのも面倒なので高雅は無視して屋敷へと入った。
入ってすぐに使用人がずらりと並んでいた。
使「ようこそ、いらっしゃいませ！！」
ア「丁寧な歓迎だね」
フ「ちょっとビックリです」
高「何かコンビニみたいだな」
使「それでは、時間まで控室の方で待機していてください。案内します」
高「それはどうも」
高雅達は使用人に案内され、控室の方へと向かった。
何度も曲がりながらやっとの事で辿りついた。

使「それでは、こちらでお待ちください。お時間になりましたらこちらからお呼びします」
高「ご苦労さま」
高雅は部屋に入り、イスに腰を掛ける。
他の者もそれぞれソファやイスに腰を掛けた。
フ「ちょっぴり疲れたです」
ロ「それにしても、あのひき逃げしようとした奴は誰なんだ?」
高「さぁ?。記憶の片隅にもない」
ア「あははは、あっちは確かに無いけど・・・」
レ「我は全く知らないが・・・」
蓮「僕も知らない」
高「世の中には知っていいことと知らなくていい事がある」
ア「なーんか、使いどころが違うような・・・」
のんびりと会話をしているとノックが鳴った。
香「蓮君いるの?」
蓮「あっ、かりんちゃんだ!!」
香凛の声が聞こえた瞬間、蓮田が嬉しそうに扉を開けた。
香「えへへ、待てなくて来ちゃったの。時間まで散歩しようなの」
蓮「うん、いいよ」
蓮田と香凛は手を繋いで部屋を出て行った。
ア「仲がいいね」
フ「ラブラブです」
ロ「きぃいいいいいいいいいい、羨ましぃいいいいいいいい」
高「そこ、ハンカチを噛むな」
ログナが涙を流しながらハンカチを噛んでいた。
高「ふぁ、寝るか」
レ「コウガ殿、時間はそれ程ないぞ」
高「・・・Ｚｚｚ」
ア「一分一秒も大切に使うね」
フ「これがコウガ様のクオリティです」

結局、高雅は時間ぎりぎりまで眠り、アリア達は適当に過ごした。

空を舞う一枚の紙。
A「お、札か!?・・・何だこれ?」
その紙は偶然通りかかっていたAの手に舞い降りた。
A「招待状・・・姫花家・・・あ、あの高雅にテストで挑む奴か」
Aは内容を理解し、場所を確認する。
丁度、購買部組と隣町にお出かけしていたので、場所は近かった。
A「ん～、主人公の血が騒ぐ・・・行かなければ」
こうして、一枚の紙は一人の青年を誘った。
これが吉となるか凶となるのかは続きで。

# クリスマスパーティ　後編（前書き）

クリスマスの含み率　０％　でお送りします。

もうネタ切れ間近でレポートに追われているこのごろで全然うまく書けないｏｒｚ。

# クリスマスパーティ　後編

高雅のいびきが響き渡る部屋にノックの音が聞こえた。
レ「来たか・・・」
ア「ほら、起きて」
高「んにゃ・・・・・・あと３６０日」
ア「下らないジョークはいいから、早く・・・あっ」

ドタッ！！

アリアが高雅を揺すり、そのままうっかり床に落としてしまった。
高「づっ！？」
ア「ご・・ゴメン！！」
高「テメェ・・・」
レ「早く出るのだ」
高「ん・・ああ」
レオが何とか気を逸らしてアリアの危機は去った。
そして、扉を開けた先にはドレス姿の凛があった。
高「お、直々にお迎えか」
凛「ええ。前回のパーティとは少し違いますから」
高「ふーん。取りあえず、案内よろ」
凛「では、ついて来てください」
凛が後ろを向いて歩きだす。
それに続く高雅達だったが、ふと気付いた事があった。
高「そういや、蓮田達は？」
凛「既に会場にいらしていますわ。もちろん、杉野さんも」
高「あっそ」
分かったところで喋る事は無くなり、高雅は会話を止めた。
しかし、それはアリアが防いだ。

ア「ねぇ、パーティって具体的には何をするの？」
凛「そうですわね・・・言ってしまうと、ただのお食事会ですわね」
フ「それだけで十分です。今日は丁度お腹が空いてるです」
凛「では、満足するまで頂いてください」
フ「遠慮なく頂くです」
フィーラが胸を張って言い切る。
これじゃ、大食いキャラに見られても文句は言えない。
凛「さぁ、着きましたわよ」
凛が大きな扉に手を掛け、開ける。
そこは前のパーティの場所とは違い、少しだけ狭い部屋だった。
狭い部屋と言っても、一般の体育館の半分ぐらいの広さはあった。
香「あっ、来たの！！」
龍「あ・・・・」
高「おー、皆そろってるな。にしても、少ないな」
今回は姫花家の親戚や仕事関係などは全くいない。
いるのは、崎村家、姫花姉妹、蓮田とログナ、そして龍子である。
凛「まぁ、前回みたいに面倒を起こされては困りますから」
高「ありゃ、俺じゃねえ。こいつだ」
ア「なっ！？」
高雅がクイックイッと指を指す。
ア「ち・・違うよ！！。私じゃなくて、あのリンちゃんにちょっかいを掛けた変な人だよ」
高「それにちょっかいを掛けたのはアリアだろ。そして、あいつにおちょくられて、まんまと嵌められたのは誰だ？」
ア「それは・・・・そうだけど・・・」
凛「過ぎた事を責めても意味がありませんわ。今を楽しみましょう」
香「そうなの。最高のパーティにするの！！」
ア「そ・・そうだね」
凛「それでは・・」
空気を変え、凛が仕切り始める。

そんな空気を読まずに一人食事を始めている者がいた。
ロ「うん、うまいうまい」
高「ん、どれどれ・・・おお、確かに」
凛「・・・もぉ、楽しんでください。以上ですわ」
香「お姉ちゃんが吹っ切れたの」
凛は面倒になったのか、能書きを省いた。
そして、皆は食事を始めた。
ア「あむ・・・うん、おいしいよ」
凛「当然ですわ。星三つのレストランを経営しているシェフの作ったものですから」
香「正直、カリンは飽きたの」
蓮「すごいね。僕なんか食べ物を探すので精一杯だよ」
香「だったら、ここに住むの。そして、一杯食べるといいの」
蓮「それもいいけど、今の生活も嫌いじゃないんだ。だから、このままでいいよ」
香「そっか・・・でも、いつでも来ていいの」
蓮「うん。ありがとう」
ア「二人とも、凄く仲が良くなってるね」
香「当然なの。もう、結婚も約束したの」
蓮「そ・・それは・・・」
香凛がさらりと、とんでもない事を言っているが本気であった。
もちろん、蓮田はそんなことは全く持って約束していない。
でも、どこか否定する気持ちが湧かなかった。
そんな傍らで、ログナが石化して勝手に砕け散っているのは言うまでもない。
蓮「か・・かりんちゃん、嘘はダメだよ」
香「カリンは嘘じゃないの。本気なの」
蓮「でも、僕らはまだ子供だから、もっと大きくならないと」
香「じゃあ、将来を約束してくれるの？」
蓮「それは・・・えっと・・・」

香「どう・・・なの？／／／」
香凛が恥ずかしそうに聞いて来る。
と、言うか、周りの皆も恥ずかしそうに聞いていた。
蓮「でも・・・」
香「今の気持ちを教えて欲しいの」
蓮「それも・・・もｔ「ここだぁ！！」！？」
突然、豪快に扉を開けると同時に叫ぶ声が聞こえ、一同は扉に注目した。
そこには、招待していない人物が立っていた。
ア「え・・・A君！？」
A「いやー、やっぱ高雅もいたか。これは、いい加減に主人公を決めないとな」
香「・・・・」
香凛が自ずと携帯を取り出して電話を掛ける。
そして、冷めた声でゆっくりと言った。
香「もしもし、害虫が忍び込んだの。今すぐ抹殺をお願いするの」
A「ゑ？」
香凛が電話を切った途端、天井や床下からＳＰが現れた。
そして、一斉に銃をAに向けた。
A「なぁにこれぇ？」
高「死亡フラグだろ」
S「撃てえええええええええええ」
ＳＰの一人がそう言った瞬間、一斉射撃が始まった。
Aは消えるようなスピードで部屋を出て行った。
レ「何しに来たのだ？」
フ「知らないです」
高「まぁ、空気読まない奴の末路だ」
香「ところで蓮君。何を言おうとしたの？」
蓮「え！？・・・それは秘密！！」
香「えええー！？。どうしてなの！？」

蓮「どうしても！！」
蓮田は逃げるように香凛から離れていった。
それでも、香凛は追いかけて問い詰めに行った。
ア「レンタ君の勇気が打ち消されたね」
凛「まぁ、香凛は早とちりですわ。まだ子供ですから、深く考えていないのでしょう」
フ「でも、早めに取っておくのはいいことです」
凛「ま・・・まぁ、そうですわね」
フ「ボクは二人に言ってるです」
ア「それって・・・私とリンちゃん？」
フ「そうです」
そう言って、フィーラは高雅の方に指を指す。
高雅は黙々と食事をしていた。
それも、龍子と一緒にだ。
高「これ上手いな」
龍「そう・・だね・・」
ア「ちゃ・・・ちゃっかりしてるね、リュウコ」
フ「だったら、誘うです」
ア「よし、私が・・・・・って！？」
高「Ｚｚｚ・・・」
アリアが高雅の所へ行こうとした瞬間、既に眠っていた。
ア「何で寝るの？」
凛「分かりませんわ」
レ「全く、コウガ殿はマイペースだな」
フ「マイペース過ぎです」
流石に高雅の行動に皆呆れてしまう。
ア「・・・まぁ、これがコウガの魅力でもあるかな？」
凛「・・・魅力の欠片もありませんわ」
ア「そうかな？」
レ「アリア殿、コウガ殿を見る目を失ったか？」

フ「あれはただの自分勝手でぐーたらな姿です」
ア「でも、コウガは一人で7年間も戦ったみたいだし、ぐーたらになっても仕方ないよ」
凛「7年?。どういう意味ですの?」
ア「それは・・・こっちの話で・・・。と、とにかく、コウガはにとっては凄く久しぶりに皆と過ごしているから皆との過ごし方を忘れたんだよ」
フ「それと魅力とどう関係があるです?」
ア「だから、コウガはコウガなりに一生懸命にまた皆となじもうとしてるんだよ」
アリアが高雅の事をフォローするも、爆睡している姿を見てどうも信じられない状態だった。
フ「そんな感じなんて全くしないです」
ア「しなくても、そうなの!!」
龍「アリアは・・・高雅君を・・・理解・・してるね・・・」
ア「いやいや、いつも一緒にいると自然と分かってくるよ」
凛「いえ、ただ傍にいるだけでは理解できない事もありますわ。今のように」
ア「そ・・そうかな／／／」
自分の言っている事がそれ程凄い事だとは思っておらず、アリアは知った瞬間に恥ずかしくなった。
レ「そこで、コウガ殿はどうするのだ?」
レオが話しを変える。
そして、机に突っ伏して爆睡している高雅の方を見ながら皆は考えた。
ア「もう、コウガは起きなさそうだし、このままお開きにする?」
凛「別に構いませんが、泊まってもよろしいですわよ」
ア「ううん、家に帰るよ。他の家族が待ってるから」
凛「他にもいらっしゃいましたの!?」
ア「う・・うん、あと三人ほど」

凛「それは大変失礼な事をしましたわ。ただちにお詫びへ・・」
ア「いや、いいよ。リンちゃんだって家族が増えてるなんて知らなかったし、しょうがないよ」
レ「では、我はコウガ殿を乗せて運ぶか」
レオが獣になり、高雅を背中に乗せる。
そして、フィーラもレオの背中に飛び乗る。
ア「じゃあ、私達はこれで。リュウコも乗ってく？」
龍「いや・・・ちょっと・・・怖い・・・」
ア「そっか」
凛「そのような事をしなくても、送りますわよ？」
ア「いいよ。早く帰らないと家の皆も心配してるから」
凛「そうですね。では、窓をお開けしますわ」
凛は大きな窓を開け、その間にアリアもレオの背中に乗った。
ア「じゃ、またね。レンタ君は一人でも大丈夫だよね？」
蓮「うん」
香「蓮君はカリンと一緒に寝るの」
フ「さり気ない危険発言です」
ア「あははは・・・」
フィーラの言葉に苦笑いするアリア。
もちろん、香凛はそんなやましいことは考えておらず、純粋な意味である。
ア「それじゃ、バイバイ」
凛「ええ、ごきげんよう」
龍「またね・・・アリア・・」
蓮「バイバーイ」
香「また来てなの」
別れの挨拶を終え、レオは三人を連れて窓から外へ飛び出した。
龍子と蓮田達は泊まることにし、その後も楽しんでいた。
家に辿り着いたアリア達は真っ先に高雅をベットを投げ込んだのは言うまでもない。

# 大晦日

今日は１２月３１日。
今年の最後の日付である。
高「今年も今日でラストかー」
ア「そうだね」
高「と、言う訳で大掃除だ」
高雅がどこからとなく掃除道具が入ったバケツをドンと出した。
高「ここに住んでいるには協力を回避させないからな」
ア「そんな事しないよ」
レ「世話になっている感謝のようなものだ」
フ「じゃあ、ボクはそこら辺の雑巾掛けをするです」
エ「では、僕は廊下を」
サ「私は台所をするかのぉ」
シ「えっとぉ・・・えっとぉ・・・」
フィーラ、エクス、サミダレは勝手に道具を取って行ってそれぞれ勝手に決めた持ち場に向かった。
高雅はてっきり嫌がるかと思ったが、自分から行動するのを見て内心驚いていた。
高「それじゃ、俺は自分の部屋をやるから、お前らも何かしろよ」
ア「了解」
レ「任せろ」
シ「えっとぉ・・・えっとぉ・・・」
高「シリアはアリアと一緒に掃除しろ」
シ「はぁい♪」
こうして、それぞれの行動が始まった。

高雅ｖｉｅｗ

高「さてと、最初は当然、上からやりますか」
高雅はマスクをし、はたきを使って埃を落とす。
落とした埃は掃除機を使って吸い込み、その後雑巾掛け。
至って普通で何もない事だが、この間、僅か1分。
高「次は窓だな。その次は壁をやって、後は買いだしで――」
高雅はさっさと終わらせる作戦にでていた。
それが何のためかは大体察しの通りです。
高「人間の三大欲求は睡眠、爆睡、熟睡だ」
人間じゃない人が偉そうに三大欲求を欲求すらなくさせていた。
高雅はハイスピードで掃除を終わらせようとしていたのであった。

アリア・シリアｖｉｅｗ

ア「じゃあ、私達は玄関でも掃除しよっか」
シ「はぁーい」
アリアは箒を使って玄関を掃わき、それをシリアが塵取りで取る。
綺麗な連携に思われたが少しだけ穴があった。
シ「ふぁ・・ふぁ・・・っくしゅ！！」
ア「あっ！！」
シ「あぁ・・・」
極度に小さな塵がシリアの鼻をくすぐったのか、勢いに乗ったくしゃみは塵取りのゴミを吹き飛ばしてしまった。
何度も集め直しては吹き飛ばし、また集めては吹き飛ばしの繰り返し。
ア「・・・私が塵取りするから、シリアちゃんは箒をお願い」
シ「はぁい」
結局、役目を入れ替えて再度始める。
しかし、思い通りに行かないであった。

ア「ちょ！？・・ケホッ・・シリアちゃん！！。強く掃き過ぎ！！」
シ「あはははは♪。お掃除たのしぃ」
こんな調子で掃除が全く進まなかったのであった。

レオ・フィーラｖｉｅｗ

レ「我々はリビングでも綺麗にするか」
フ「よーし、任せろです」
フィーラが張り切って雑巾を掛け、走り回る。
レ「ま・・待つのだ、フィーラ殿。まずは物を退ける作業からだ」
フ「じゃあ、レオに任せるです。ボクは雑巾を任せろです」
レ「では、少し待ってくれ」
レオは急いでリビングにある物を退ける。
それと同時にフィーラが雑巾を掛けまわる。
レオが必死にフィーラのペースに合わせているのだ。
フ「ほらほら、退くです」
レ「少しは手加減してくれ」
フィーラが問答無用で走り回る。
レオはついて行くだけで必死だった。
最早、空気は完全にフィーラのものになっていた。
フ「続いてワックスです」
レ「はー・・はー・・で・・では、我は窓を掃除しておこう」
全速力で物を退けたためか、既にレオの体力は半分以上消費していた。
そして、レオが過労で倒れたのはちょっと先の話である。

エクスｖｉｅｗ

エ「まずは、モップで埃を取ってだな」
エクスはモップを片手に廊下を掃除し始める。
エ「しかし、ここに来て僅かだと言うのだが、コウガ君はかなり成長したものだな」
掃除をしながら高雅の変わりように驚いていた。
出会ってまだわずかだと言うのだが、高雅は相当変わっていた。
エ「正直、あんなに強くなるとは・・・さらにはあのルシフェルを超えるとは・・・ハハ。最早、誰もコウガ君を止められないな」
高「何か呼んだか？」
エ「あ、いや、ただの独り言」
高「そうか。俺は買い出しに行ってくるから、留守番を頼む」
エ「もう掃除は終わったのかい？」
高「ああ、軽くな。それじゃ、行ってくる」
エ「行ってらっしゃい」
高雅を見送り、自分も早めに切り上げようとペースを上げ始めた。

サミダレｖｉｅｗ

サ「さぁ、軽く始めるかのぉ」
サミダレは早速、台所の整理を始める。
サ「・・・なんじゃ、綺麗に片付いておるのぉ」
普段、高雅が片づけている為か、台所は全く持って汚れていなかった。
サ「これじゃ、掃除のしどころがないのぉ」
台所を隅から隅まで探すも、ゴキブリ一匹住めそうな場所すらない。
高雅の衛生管理が１００点満点である。
仕方なく、冷蔵庫を開けてプリンを取り出す。
どこが仕方ないのかはツッコミなしで。
サ「さて、頂くかのぉ」

フ「あーー！！、ずるいです！！」
休憩にやって来たフィーラと鉢合わせになってしまった。
プリン好きの二人はこれに関して完全にライバルである。
サ「ふふふ、取ったもん勝ちじゃ」
フ「待つです！！」
サミダレが逃げ始め、それを追うフィーラ。
掃除をそっちのけでプリン合戦が始まってしまった。

時がたち、辺りは暗闇に包まれていた。
あれから高雅の家はピカピカになり、年越しの準備を迎えていた。
高「２３時５０分。ふぁ～、ねみぇ」
ア「寝ちゃダメだよ。年越しぐらいは起きていないと」
高「とか言ってるけどな・・・」
辺りを見渡すと、既に高雅とアリア以外は全員眠っていた。
高「俺ら以外、全滅じゃねえか」
ア「あ・・あはははは・・・まぁ、敵討(かたきうち)ってことで」
高「敵(かたき)は誰だよ、おい」
ア「えっと・・・」
高「悩むな」
アリアは言い訳を考えていたのか、唸っていた所を高雅に止められた。
ア「あはははは。でも、今年はいろいろ変化があったんじゃない？」
高「あり過ぎる。お前と出会って滅茶苦茶だ」
ア「それはどういう意味で？」

高「・・・良くも悪くもない意味でだ」
ア「そっか・・・今年はどうだった？」
高「・・・・・・・・色々と信じられない」
ア「それもそっか」
高雅は今年の出来事を振り返ってみた。
高「だってよ、お前と出会い、変に命を狙われるの、俺が人外だの、仲間が増えるだの、生活が１８０度変わった」
ア「でも、良くも悪くもないでしょ」
高「・・・まあな」
高雅は傍らに置いてあったジュースを飲む。
ア「・・・私は良かったかな」
高「へぇ。どこが？」
ア「だって、色んな友達を作ったり、怖かったけど色々な体験をしたり、とても有意義な一年だったよ」
高「そんな、ありきたりな。まぁ、やった事はありきたりじゃないが」
ア「まぁ、何よりコウガに出会えた事が一番の幸せかな」
高「？」
アリアが突然変な事を言ったと高雅は思い、？マークを浮かべていた。
ア「だって、この出来事全てがコウガと一緒だったから。コウガがいなかったらこんな楽しい出来事達にはあわなかったよ」
高「命狙われ、幾度の血を流しまくったのが楽しい思い出って言うのか？」
ア「そ・・それは違うよ。誤解だよ」
高「ふっ、嘘だよ。お前がそんな奴じゃないって俺は知ってる」
ア「もー」
高雅のちょっとした意地悪にアリアの頬が膨れる。
しかし、アリアも分かっていたのか、膨れっ面はすぐに笑顔に変わった。

ゴーン・・・ゴーン・・・

そんな時、鐘の音が辺りに鳴り響いた。
ア「？、こんな時間に鐘？」
高「除夜の鐘だ」
ア「じょやのかね？」
高「要するに、年明け間近って訳だ」
レ「それは少し違うのではないか？」
起きてきたレオが高雅に問う。
レオだけでなく、他の皆も丁度起きていた。
高「細かい事は気にするな。気になるならｇｇｒ」
フ「みゅ～、何かうるさいです～」
シ「ふぁぁぁ、何の音ぉ？」
エ「んなことより、蕎麦食おうぜ蕎麦」
サ「年越し蕎麦を食べてみたいのぉ」
高「そうだな。よし、用意するか」
ア「私も手伝うよ」
高雅とアリアは立ちあがり、台所へ向かう。
ほぼ用意されていたので、後は蕎麦を茹でて盛りつけるだけである。
除夜の鐘の音を聞きつつ、出来上がった頃には丁度１０８回目が鳴った。
高「いっちょ上がり」
ア「どうぞ」
高雅とアリアが蕎麦を皆の前に運び、自分達も席に着く。
そして、高雅から一言。
高「あけましておめでとう。これからもよろしくな。んじゃご一緒に――」
全「いただきまーす（です）（う）」

こうして、高雅達の1年を締めくくり、新たなる年が始まった。

# 元旦

今日の高雅は違った。
何と、休みに関わらずに早起きをしたのだ。
しかも、早朝の7時である。
高「・・・何か、バカにされた気がする」
そんなことはさて置き、高雅は顔を洗って支度をする。
もちろん、元旦に向かう場所と言えば絞(しぼ)られる。
高「準備はいいか？」
高雅がリビングに顔を出すと、既に出掛ける用意をしている皆がいた。
ア「うん」
フ「ばっちりです」
レ「問題ない」
エ「いつでも」
サ「よいのじゃ」
シ「大丈夫ぅ」
それぞれ答え、立ちあがる。
高「んじゃ、さっさと行くぞ」
そして、高雅の後を追うように家を出た。

やって来たのは近くにある緑淵神社である。
緑淵神社は結構広く、屋台も出す程である。

元旦には、ほぼお祭り雰囲気になる場所なのだ。
もちろん、それだけあって人の数も尋常ではない。
フ「わぁ～、すごい人です」
高「逸(はぐ)れるなよ。逸れたら探さないからな」
ア「とか、言っている内にシリアちゃんがいなくなってるよ」
高「・・・あいつは喧嘩売ってんのか」
着いた途端に迷子が出現。
幸先(さいさき)が悪い高雅は呆れながらも神社の敷地内へと入って行った。
特に目的もなく、ただぶらぶらと歩き、賽銭箱があれば投げ入れるの繰り返し。
しかし、シリアは全く見つからなかった。
高雅は適当にあった焼き鳥の屋台から焼き鳥一本買って食べていた。
高「あ～、シリア見つからねーな」
ア「探してるんだ、一応」
高「あくまで一応な」
レ「しかし、こうも人が多くては探すに探せぬ」
エ「二手に分かれるか？」
高「・・・いや、いい奴を見つけた」
高雅の目線の先には出店の前で気を溢れさせながらおみくじと戦っている人がいた。
A「今年こそ～、今年こそは～、大吉を～」
タ「主よ早く引け。後が差し支えておる」
A「おりゃあああああああああ」
勢い良く引き、そのまま紙を広げる。
その瞬間、Aは崩れ落ちていった。
A「NOOOOOOOOOOOOOOO」
高「どうやら、大凶だな」
タ「ん、高雅か。来ていたのか？」
高「よ、タイト。お前の主人は新年に関わらず騒がしいな」
高雅が軽く手を上げて挨拶すると、Aが一瞬で起き上がった。

A「何だ、高雅か。何しに来たんだ？」
高「俺が神社にいたら悪いのか、おい。・・・まぁ、それより頼みたい事が」
A「ダメなんDA」
高「別にネタでやった訳じゃない。お前の力で人をさがしてくれ」
A「いやいや、人なんて無理だろ」
高「その人は身長はフィーラぐらいの大きさで女の子。しかし、人間ではない」
A「・・・・・・ピーン」
Aの髪の毛がまっすぐに立ちあがった。
高雅が利用としたのはAのスキルである幼女レーダーだ。
高雅の思惑通り、Aのレーダーは一瞬で反応を示した。
A「あっち」
高「ご苦労。そして、俺を名前で呼んだ罰だ」
A「あぶっ！？」
高雅はAを一発殴ってからAの指差す方へと向かった。
フ「気の毒です」
ア「あははは・・・」
Aを横目に見ながら哀れみ、アリア達も高雅の後を追った。
Aの指を指した方向を歩き続けると、それらしき人物が目に入った。
高「おい、シリア」
シ「？・・・あっ、お兄ちゃぁん！！」
案の定、シリアは見つかった。
シリアは高雅を見つけた途端に駆け寄って来た。
手には綿飴を持っており、手で千切りながら食べていた。
シ「あむ・・探したよぉ」
高「こっちのセリフだ。てか、何だそれは？」
シ「綿飴ぇ」
高「どうして持っている？。金は無いはずだろ？」
シ「あのお姉ちゃんが買ってくれたのぉ」

シリアが指を指した方を見ると見慣れた人物がいた。
夢「あれ、崎村じゃん」
龍「あ・・・」
高「お前らか」
そこには夢と龍子が立っていた。
シリアはこの二人と行動を共にしていたのだ。
龍「あ・・あけまして・・・おめでとう・・・」
ア「おめでとう、リュウコ」
夢「あけおめ。てか、探してたお兄ちゃんってあんただったんだ」
高「探してたのはこっちだ」
夢「ふ～ん。んで、あんたって妹とかいたっけ？」
高「あいつは遠い遠いそのまた遠い親戚だ」
龍「そ・・・そうなんだ・・・」
夢「しっかし、子供はちゃんと手を繋いで見張ってないと。こんな人だかりなんだから」
高「見張るもなにも、到着した時からいなくなってたんだ」
シ「だってぇ、美味しそうな匂いがしたんだもぉん」
高「お前な・・・」
シリアの呆れた理由を聞いて、高雅は一気に脱力した。
高「もういい、おみくじでも引いて帰る」
夢「あんた、相変わらずね」
龍「それじゃ・・・私達も・・・一緒に・・」
夢「はっ！？、崎村と同行！？。無理無理、死ぬって」
夢は高雅が誰かと一緒にいるのは危ないと思っているらしい。
しかし、今の高雅は人嫌いでは無くなっている。
高「別に、お前らが何もしなければついて来てもいいけど」
夢「はっ！？。崎村が許した！？。あり得ない・・・」
夢が高雅の変わりようを信じられず、茫然（ぼうぜん）と立ちつくしていた。
それを見た龍子が夢の肩を叩いて目を覚まさせる。
龍「夢ちゃん、行こ？」

夢「え・・・あ・・うん」
龍子に押されつつも、夢は高雅達が向かった場所へと行った。
高「さーて、今年の運勢は・・・・」
高雅は適当に紙を一枚引く。
それに続いて皆も紙を引いて行った。
フ「えっと・・・やった、大吉です！！」
レ「うむ、末吉か」
エ「僕は中吉だ」
サ「小吉じゃ。つまらないのぉ」
シ「吉だったよぉ」
高「へー、凶はいなかったかぁ・・・あ」
高雅が確認した時、真っ先に目に入った文字は大きく書かれた凶だった。
高「ありゃ、凶かよ・・・まぁ、大凶よりはましだな」
自分の運気を見た後は適当に健康運を確認する。
そこには・・・

健康運：大丈夫だ、問題ない。

高「・・・・・・・」
次に恋愛運を見た。

恋愛運：はよ気付け、アホ。

高「・・・・・・・」
さらに勉強運。

勉強運：なんとかなるっしょ♪

高「・・・・・・・イラッ」

凶であって凶じゃないことを書かれていた。
高雅は何故か腹が立ち、おみくじの紙をビリビリに引き裂いた。
それを心配そうに見ていた龍子が恐る恐る話しかけた。
龍「ど・・どうしたの・・・高雅君・・？」
高「何でもない・・・・ただ、腹が立っただけだ」
龍「そ・・そう・・・」
何でもないのは一目瞭然だが、下手に追求するのは危険な事を龍子は知っている。
龍子は次にアリアの方を確認した。
龍「アリアは・・・どうだった・・？」
ア「え・・あぁ、何か最悪だよ」
アリアの紙に書かれていたのは大凶だった。
勉強運も健康運も何もかも悪い事ばかり書かれていた。
ア「でも・・これだけは唯一の救いかな？」
ただ、一つだけ不思議な事を書かれていた。
それは恋愛運だった。
龍子が確認するとそこにはこう書かれていた。

恋愛運：苦難の先に成熟あり

龍「成熟・・・あり・・・」
ア「うん。でも、あくまでおみくじだし、それに苦難が無いと成熟しない訳だよ」
龍「そ・・そうだね」
ア「・・・それで、この紙ってどうするの？。持って帰ってもいいの？」
龍「あ・・・こうやって・・・木に結んで・・・」
龍子がお手本で先におみくじの紙を木に結んだ。
それに続いてアリアや見ていたフィーラ達も結び始める。
ア「これで・・・よしっと」

高「それじゃ、帰るか」
夢「あんた、早すぎる」
高「何事も迅速に寝なくては」
夢「結局それかーい！！」
高「当然だ。それじゃ、俺達は帰るぜ」
龍「うん・・・・バイバイ・・」
龍子が手を振って高雅と別れた。
ア「それじゃ、バイバイ」
シ「綿飴ありがとぉ」
アリア達も龍子達に手を振って高雅に続いて別れた。
アリア達と別れた後、夢は龍子に話しかけてきた。
夢「ねぇ、あんたはどうだった？」
龍「だ・・・大吉・・・だよ・・夢ちゃんは・・？」
夢「あ・・・うん・・・まぁ・・「大凶・・・・」はい」
龍子に当てられ、落ち込む夢。
その後、龍子は夢の機嫌を取るのに必死に頑張ったのであった。

# 修学旅行編　その1、初日の出来事

冬休みも明け、高雅は久しぶりの学校にきていた。
現在、ホームルームの真っ最中である。
先「皆さん、お待ちかね。明日から4泊5日のスキー・スノーボード研修こと、修学旅行が始まります」
「しゃあああああああああああああ」
クラスの9割がはしゃいだ。
もちろん、高雅は何の興味もなく眠っていた。
先「だからと言ってはしゃぎ過ぎないように。高校生としての態度を忘れずに」
先生が釘を刺すも、生徒達は全く聞いていなかった。
先「・・・はぁ。では最後にスキーとスノーボードのどちらにしたいか決めて今日は終わりです」
高「スノボー」
そう言って、高雅は鞄を持って帰って行った。
それから、高雅に続いて次々と決めて行き、僅か5分で教室は空(から)になった。

その日の夜。
高雅の家では作戦会議が行われていた。
高「さぁ～て、どうやってあいつを説得させようか」
ア「さすがにしばらく遠くに行くからね。色々と問題だよね」
高「正直、お前も連れて行きたくないが・・・まぁ、しょうがないし」

ア「・・・なんて言おうか？」
高「最初は正直に言って、後は力でねじ伏せる」
ア「それはちょっと・・・」
高雅はアリア以外には修学旅行の事は話していなかった。
高雅自身が面倒くさいと言うのもあったが、急に話しても理解してくれるだろうと考えていた。
ただ、一人の除いて。
高「まぁ、どうにか黙らせるか」
ア「あははは・・・」
取りあえず、高雅とアリアはリビングへと向かった。
レ「ああ、コウガ殿。ちょっといいか？」
入った途端にレオが突然が聞いてきた。
高「ん？」
レ「この大きな鞄は何だ？」
高「あっ・・・ああ」
リビングに堂々と置かれた旅行鞄を指差しながらレオが高雅の顔を窺う。
高「そういやそこに置いてあったな」
レ「中には服やタオルがあるが・・・まさか家出か！？」
高「違う違う。明日から学校行事で旅行に行くんだ。それで、お前らは留守番」
シ「えええええええええええええええええええぇ」
予感的中、シリアが思いっきり反応した。
しかし、次の瞬間、全く予想しなかった答えが返って来た。
シ「・・・でもぉ、仕方ないかぁ」
ア「！？」
何と、シリアが潔く諦めた。
あまりの出来事にアリアは目を丸くして信じられなかった。
ア「え・・・あの、シリアちゃん。今度はすぐに帰って来なくて、5日ぐらい帰って来ないよ」

シ「じゃぁ、五日間我慢するぅ」
ア「そ・・・そっか。偉いねシリアちゃん」
シ「えへへぇ」
アリアに頭をなでられ上機嫌なシリア。
高雅はその不可解な様子を殺気から感じ取っていた。
高（・・・王道にも、俺の旅行鞄に入るつもりか・・・そんなにうまくいく訳ないけど）
シリアの考えが分かったところで特に対策を練る訳でもなく、リビングを後にした。
高「明日は早いから、俺は寝る。起きた頃にはいないだろう。楽園組とシリアの飯は冷蔵庫に作り置きしてあるから、それを食え」
レ「そうか。では、存分に楽しんでくるのだ」
フ「お土産待ってるです」
エ「行ってらっしゃい」
サ「怪我だけはせんようにじゃぞ」
シ「おやすみぃ」
こうして、高雅は明日に備えて早めに寝たのであった。

翌日、朝。
高雅はさっそく旅行鞄の中からシリアを取り出す。
丁度良く、シリアは眠っていたので起こさないようにソファに寝かせた。
高「全く、本当に入っているとは・・・・」
ア「どおりで昨日は潔かったんだね。でも、良く分かったね？」

高「重さでも殺気でも分かる」
ア「そういやそうだね」
高「・・・取りあえず、こいつが起きる前に出るとするか」
ア「うん。忘れ物はない？」
高「俺がする訳がない」
ア「えらい自身だね。でも、まぁそんな気がするけど」
高「なら、聞くな。行くぞ」
ア「分かった」
高雅は音を立てずに家を出た。
その後、シリアがどうなったかはご想像で。

緑淵高校2年生は駅に集合していた。
もちろん、高雅もその中にいる。
先「それでは、出席を取った人から新幹線に乗ってください。なお、他の車両は一般の人もいますから車両の移動はしないでください」
先生が出席を確認すると同時に生徒達が新幹線へと乗り込む。
高雅も皆と同じように出席を確認してもらい、新幹線に乗り込む。
そして、席に着くなり真っ先に寝た。
ア（だと思った）
高（うるさい。早起きで眠たいだけだ）
高雅は耳栓で防音対策までをも施し、夢の中へと堕ちて行った。
生徒全員が席に着き、先生が最後に席に着いた所で新幹線は目的地へと向けて発進した。
皆は席を移動して話し合ったり、隠して持って来たゲームやお菓子

で時間を潰していた。
楽しい移動となるはずだったが、こんな時に限って不幸がやって来るのだ。
？「うらあああああああ、騒ぐんじゃねえええええええ」
突然、扉を乱暴に開け、銃を向けながら脅しがやって来た。
車両内は一瞬で静寂に包まれ、緊張が走った。
？「この電車は俺達が乗っ取った。少しでも変な行動をしたら撃ち殺すぞ！！」
Ａ（え～、バスジャックじゃなくてえっと・・・トレインジャック？。いや、ハイの逆のロージャック？）
Ａは余裕をかましてアホな事を考え始めていた。
もちろん、余裕な人は彼だけではない。
高「Ｚｚｚ・・・」
事態を全く知らずに、ただ自分の欲を満たすために眠っている高雅。
それに気付いたトレインジャック犯（仮名）ゆっくりと高雅の方へ向かった。
ト「こいつ、何寝てやがる。おい、起きろ！！」
トレイン（ｒｙが高雅の頭に銃を突き付けながら揺さぶる。
トレイ（ｒｙは今、空を見上げると北斗七星の近くに赤く光る星が見えるだろう。
Ａ（うわぁ、死んだなぁ）
高雅を知っている誰もが心の中でトレ（ｒｙの死を予想した。
その予想は外れる事のない絶対である。
高「・・・・・あ・・・」
ト「分かってんのか、お前？。ｃｎ〈グチャ〉は？」
高「あ、悪い。指一本潰した」
ト「え・・・」
いみが分からず、自分の指を見る。
そこには、ぐちゃぐちゃに変形した指の姿が・・・
ト「ぎゃあああああああああああああ」

泣き叫ぶ（ｒｙに対して、高雅がゆっくりと立ち上がり、（ｒｙの頭を掴んでどこかへ連れ去った。
そして、悲痛な悲鳴が木霊し、車両は別の静寂に包まれてしまった。
少しして、高雅が戻って来たが、何故か真っ赤な血の様なものがついていた。
高「ふぁ～、寝ぼけてケチャップを服に付けてしまった・・・」
ア（ものすごい無理やりだーー）
Ａ「ケチャップなら仕方ないな」
ア（１人、空気読んでくれたーー）
高「・・・所で、さっきの人は誰だ？」
もはや、高雅のやったことに先生までもが固まっていた。
ちなみに、（ｒｙは半殺しで死んではいない。
ただ、どこでも一発殴ったらもう死ぬ状態である。
Ａ「トレインジャックと言ってな、このままだと修学旅行が台無しだ」
高「じゃあ、お前が何とかしろ」
Ａ「ラジュ！！」
Ａは一番前の車両を目指して飛び出した。
こんな状況では先生も何もできなかった。
ア（いいの、Ａ君一人に行かせて？）
高（どこをどう間違えたとしても、Ａが負けるはずがない）
高雅は何の心配もなく、席に戻って眠り始めた。
しかし、勇敢にもそれを妨げようとする人がいた。
龍「ねぇ・・・ほんとに・・・大丈夫？」
高「大丈夫だって。だから寝かせてくれ」
龍「・・・でも・・・Ａ君・・・車両の後ろ・・・に・・・」
高「どんなボケだよ、あいつは」
前と後ろの区別も出来ないＡであった。
仕方なく、高雅がＡと逆の方へと向かうのであった。
こんな時に、先生は何もできないでいた。

一つの車両を進むたびに（ｒｙを倒し続け、遂に一番前の車両に着いた。
先に見えるのは運転席を占領した（ｒｙが５人もいた。
さらに、車両を監視するために別の二人、計７人もの敵がいた。
まぁ、高雅に取っては何の差し支えにならないが。
高雅は何の迷いもなく堂々と歩いて行った。
ト「おい、何だテメーは」
高「お前の仲間に昼寝の邪魔をされた。その恨みでお前らを死直前まで殴りに来た」
ア（こわっ！？）
ト「ガキがよくそんな口をきけｒ「退け」・・・・」
（ｒｙは突然意識を失って倒れた。
高雅が死なない程度に殺気を与えたのだ。
異変に気付いた（ｒｙが皆出てきた。
ト「このガキ！！。何をした！？」
高「死の淵まで旅行したい奴だけ来い」
指の関節を鳴らしながら余裕を見せる高雅。
挑発に乗った（ｒｙ達は一斉に高雅に立ち向かった。
高「全く、可愛い敵だ」
ア（そりゃあ、ルシフェルとか倒したし、こんな人達が可愛く見えてもしょうがないよ）
高「ごもっとも」
ト「何一人でベラベラト喋ってやｇ〈ゾクッ！！〉が・・・」
まるで、心臓を鷲掴みされたような感覚が襲い、（ｒｙ達は全員倒れた。
周りの乗客は何が起こったか全くわかっていなかった。
高「・・・一件落着。さて、記憶を消すか」

ア（え、どうして？）
高「色々と面倒が起こるからだ」
ア（・・・なら、仕方ないね）
高雅は破壊の力を使って新幹線内の人の記憶を消し、（ｒｙを外に捨てた。
ただし、消してない人も少しは含まれていた。
高雅は元いた車両に戻り、すぐに寝た。
ちなみに、後ろの車両にも数人は（ｒｙがいた為、Ａは高雅と同じように外に捨てたのであった。
高雅が記憶を消す事を既に考慮して誰も見てないタイミングで捨てたのだ。
結果的に纏めると、（ｒｙなんていなかった。
そして、新幹線の後はバスに乗り換え、スキー場へと向かった。
当然のように高雅は雪景色を見るまでもなく眠り続けていた。
こうして、何か余分な事が起こりつつも無事にスキー場に到着したのである。
先「それでは、今日からお世話になるホテルのスタッフに挨拶をかねてオリエンテーションを行いますので、荷物を置いてホールに集合してください」
一時的に解散し、高雅は荷物を持って部屋に向かった。
そして、荷物を整理した後は真っ先に寝た。
ア（ちょ、オリエンテーションは！？）
高「めんどい、だるい、ねむい」
ア（いや、いくらなんでもダメでしょ。てか、今日は殆ど寝てるよ！！）
高「いつものことといつものこと」
ア（そ・・・それはそうだけど・・・）
アリアが肯定している内に高雅はすぐに眠りについた。
部屋が一緒の生徒が高雅を起こそうとしたが、死の危機を感じたため、放っておいた。

むしろ、放っておかないといけなかった。
高雅は勝手に晩御飯を食べ、勝手に風呂に入り、勝手に一日を終わらしたのであった。
集団行動を完全に無視した高雅の初日だった。

## 修学旅行編　その2、初めてのスノーボード

二日目の朝。
生徒達は厚着をして手袋、ゴーグルを付けてゲレンデに集合していた。
それぞれスノーボード、スキー用具を片手に綺麗に整列している。
先「えー、くれぐれも一般の方や他の高校の生徒とトラブルが無いように気を付けてください。それでは、インストラクターを紹介します。その後、各班に分かれてインストラクターさんの言う事を聞くように」
C「せんせー、Aと崎村がいません」
先「・・・・・今度はA君もですか・・・」
最早、恒例の事になっており先生はもうどうでも良かった。
先（お願いだから、トラブルだけは起こさないように・・・）
ただ、それだけを祈っていた。
もちろん、自分が面倒だからである。

高雅はゲレンデの一番上、つまり上級者コースにやって来ていた。
かなりの急斜面で学生は立ち入り禁止区域である。
高「絶好の眺めだ」
ア「いや、いい加減集団行動を守ろうよ」
高「集団になるとお前と喋れないーーー」
ア「えっ！？／／／」
高「ーーーと言うのを口実にここに来た」

ア「・・・だと思ってたよ、うん・・・」
高「それはさて置き」
高雅はスノボーに足を乗せて準備をするも、目の前には他の高校生がたむろしていた。
スキーを楽しむと言うよりも、ただ自己満足に居座っているだけである。
簡単に言えば、大迷惑な奴らだ。
高「・・・あいつら、轢き殺していいか？」
ア「殺人はまずいよ、人間だし」
高「人間じゃなければいいって言ってるのか、それ？」
ア「そう言うつもりじゃないけど・・・」
高「まぁ、堂々と滑走路にいるってことは轢かれても文句ないよな」
ア「あっ、ちょ！？」
高雅はアリアが止めようとするも無視して滑り始める。
一方、高雅が迫って来ているとも知らずに偉そうにたむろっている。
？1「はぁ、スノボーなんざくそだりぃ」
？2「そこら辺に滑ってる奴に石あり雪玉でも投げるか」
？3「それ、さんせー」
？1「んじゃ、あのガキにでも投げるか」
他校の学生が高雅に目掛けて雪玉を投げた。
もちろん、石が入っている。
高「ほぉ、調子に乗ってるな」
高雅は回転ジャンプをして雪を弾いた。
そして、着地と同時に膝を曲げて滑りながら雪をすくい、三人の顔面に投げ付けた。
？達「ぶっ！？」
高「あばよ、障害物共」
？2「っの野郎！！」
高雅の挑発にまんまと乗った三人はすぐにスノボーに乗って高雅を追い掛け始めた。

のんびりしていた割には意外と滑れるようだ。
？１「待てや糞野郎！！」
高「待てと言われて待つ奴がどこにいる、低脳君」
？３「あいつ、殺そう」
ゲレンデを高速で滑り降りる四人。
そんな中、一人新しく混じろうとしていた。
Ａ「退けえええええええええええ」
？１「うおぁ！？」
Ａだった。
Ａが障害物を突き飛ばしながら高雅に接近していた。
ちなみに、Ａもスノボーである。
？２「何だこいつは！？」
Ａ「邪魔だあああああああああああ」
？３「がっ」
Ａがさらに加速し、徐々に高雅に迫って行く。
その行く先にある障害物は全部突き飛ばしていた。
？２「テメぇ、いいかげんｎ「お前なんかに用はない！！」ぬあ！？」
遂に、三人とも吹き飛ばし、高雅に迫っていた。
Ａ「高雅！！、今日こそ俺が主人公である事を証明してやる！！」
高「生憎、俺はのんびり滑りたいだけだ」
Ａ「ならば、転ばして雪だるまにしてやる」
Ａが高雅と並び、ゆっくりと迫って来る。
先程の三人とはレベルの違いを分かっている為、Ａは慎重に狙っていた。
高「俺に素直な攻撃が通用するとでも？」
Ａ「だから、あれで隙を狙ってんだろ」
Ａが指差す所にはリフトを支える為の柱があった。
それも二人が激突してしまう場所にだ。
Ａ「さぁ、避けろ。その隙に突き飛ばしてやる」

高「それはどうかな」
高雅は回転ジャンプしてスノーボードをAの膝の後ろに当てようとした。
膝カックンで転ばそうとする作戦だ。
しかし、Aは分かっていたのか高雅よりも高く跳んで避けたのだ。
A「お返しだ」
そのままAは回転し、高雅にスノーボードをぶつけようとする。
高「バカだな」
高雅は着地と同時に体を大きく傾けて曲がり、スレスレでAの攻撃を避けた。
A「何!?」
高「せいぜい、柱とズキュゥゥゥンでもしてろ」
A「あっ」
Aが前を見た時、既に柱は目と鼻の先に合った。
さらに、まだ空中にいる為避ける事は不可能である。
A「うわあああああああああ」
そして、Aは柱にぶつかりその場に倒れた。
もちろん、柱にはクッションが巻いてあるため大事には至らなかった。
高「まだまだだな」
その後、高雅は一人で快適に滑って行った。

滑り始めて2時間後。
高雅はゲレンデの一番上にあるベンチで休憩していた。
高「ふぅ、大分滑ったな」
ア「ありとあらゆるコースを制覇したね」

高雅はこの2時間でこのスキー場の全てのコースを制覇したのであった。
高「まぁ、普通に楽しかったし、もう満足だな」
ア「そっか。はぁ、私も滑りたいなぁ」
高「だったら滑るか？」
ア「え！？」
高「今なら誰も見てないし、人間状態になれば貸してやるぞ」
ア「だったら、滑ってみようかな」
アリアは人間状態になり、地面に立とうとした。
ちなみに、服やゴーグルは創造で作った物を付けている。
ア「きゃ！？」
しかし、重さで一気に埋もれてしまい、体の3分の2が雪の中へと消えた。
高「アホか。そのまま立ったら埋もれるに決まってるだろ。ほら、取りあえずベンチに立ってろ」
高雅はアリアに手を掴み、ベンチへ引き上げた。
ア「あ・・・ありがとう」
高「俺はここにいるから、思う存分に楽しんで来い」
ア「い・・いや。私、滑り方分からない」
高「・・・知るか」
高雅はスノーボードを渡すだけで何も教えなかった。
高「俺だって初めてだったんだ。教えられる訳が無い」
ア「あれだけ滑って今さら初めてだなんて・・・」
高「いいから、滑ってろ。いつか体で分かる時が来る」
ア「・・・まぁ、仕方ないか。それじゃ、頑張ってくる」
アリアは自分を信じてゲレンデへと向かった。
ただ、ここが上級者向けの急斜面と言う事を忘れたまま。
高「変に怪我をしなければいいが・・・ま、いっか」
「きゃあああああああああ」
高雅がどうでもよくなった途端に叫び声が響いた。

高雅は溜息を吐きつつも少しだけ心配していた。
高「えっと、何か移動できる手段は・・・おっ」
周りを見渡すと丁度いい大きさの木の板があった。
高雅はそれに乗って、そのまま滑り始めた。
滑って僅か5秒の所でアリアが転んでいる場所に辿りついた。
高「おい、変な騒ぐな。恥ずかしい」
ア「わ・・私じゃないよ。目の前を横切った人だよ。私はそれに驚いて転んだだけ」
高「ふ～ん・・・ん?」
高雅がふと目をやると、小さな雪山に人が頭から埋もれていた。
足だけが露わになっており、かなりの芸当である。
高「あれか?」
ア「ん?・・・もしかしたらそうかも」
取りあえず、二人は埋もれた人の方に近づき、足を掴んで引っ張りだした。
?「ぷはぁ!!。ふぅ、偉い目にあったよぉ」
高「あれ、この口調・・・」
高雅の頭の中にある人物が過る。
しかし、それはちゃんと家に置いて来た筈である。
高「・・・お前、誰だ?」
念のために名前を確認する。
?「・・普通ぅ、自分から名乗るのが礼儀ではありませんかぁ?」
当たり前な返答を返され、少し戸惑う高雅。
その間にアリアが先に名を名乗った。
ア「あ、私はアリア」
高「・・・俺は崎村。ほら、今度はお前の番だ」
紫「私は村井　紫理奈ですぅ。よろしくぅ」
丁寧に手を差し伸べて来る。
一応、高雅もそれに答えて握手を行った。
紫「あぁ、お礼がまだでしたぁ。ありがとうございましたぁ」

高「いや、あのまま埋まっておくと大惨事になりそうだし、面倒を起こしたくなかっただけだ」
紫「そうでしたかぁ。所でぇ、あなたも修学旅行の方ですかぁ？」
高「も、と言うとお前は修学旅行の者か」
紫「はぁい、黒淵高校ですぅ」
高「黒淵・・・成程ね・・・」
高雅は何かを理解した。
気になったアリアが首を傾げながら尋ねる。
ア「何が？」
高「さっきの障害物共のことだ。あいつらは黒淵高校の者だったんだな」
紫「あぁー！！、もしかして、迷惑かけちゃいましたかぁ！？」
高「まぁ、返り討ちにしたけどな」
紫「ごめんなさぁい・・・私がしっかりと管理をしなかったばかりにぃ」
ア（管理？）
高「別に。それじゃ、俺はこれで」
紫「はぁい。本当にありがとうございましたぁ」
高「行くぞ、アリア」
ア「ま・・待ってよ」
高雅は木の板で器用に滑り下りてゆき、アリアがふらつきながらも必死に後ろを追い掛ける。
なるべく隅っこを滑り降り、誰にも見つからずに一番下まで辿り着いた。。
高雅はスノボー用具を直し、ホテルのロビーにあるソファに座って寛ぎ始めた。
アリアもその隣に腰を下ろした。
高雅はホテルの人と誰にも会ってないため、学生と言う事は分からないのである。
最も、見た目で分かってしまうが。

ア「ねえ、コウガ。あの人、管理って言ってたよね」
高「ああ、黒淵の奴らは野蛮な奴らが学校内全員合わせて９．９割で埋まっている」
ア「そ・・それはやばいね」
高「やばい方はその０．１割の方だ。そいつは学校全体を管理しているらしい。何もかも全てな」
ア「どういう・・こと・・・」
高「今に分かるさ。黒淵高校は国から独立したと言っても過言じゃないような所だ」
ア「こ・・怖いね」
高「ふぁ～、俺は部屋に戻って寝るかな」
ア「じゃあ、私はもっと滑ってくるね」
こうして、高雅は部屋に、アリアは再びゲレンデと戻って行った。

# 修学旅行編　その3、昇格

ゲレンデから離れた山奥。
天候は急変し、猛吹雪となっていた。
そこに黒淵の生徒が血相を変えて逃げていた。
それも、先程高雅達の邪魔をしようとした人達の方割れである。
黒1「うあああああああああああああ」
ただ叫んで走り続ける。
体が雪に埋もれようとも、必死に雪をかき分けて逃げ道を作った。
黒1「はぁ・・はぁ・・」
夢中で逃げ続ける途中でようやく落ち着きを取り戻した彼は後ろを振り返る。
そこには自分が通った雪跡が残っていてそれ以外は見当たらなかった。
黒1「に・・逃げ切ったか・・・」
ホッと一安心して呼吸を整える。
だが、そんな猶予も与えずに恐怖が帰って来た。
？「逃げないのですかぁ？」
黒「ひっ・・・・」
見上げる先には今まで一緒にいた生徒の首を持った女子生徒が木の枝に座っていた。
？「あなた達は管理会議で処刑が下されましたぁ。後はあなただけですぅ」
黒1「い・・いやだ!!。死にたくない!!」
？「管理会議の決定は絶対ですぅ。諦めて死にましょぉ」
黒1「いやだあああああああああああ」
彼は再び逃げようとした。
しかし、振り返った先には血が滴っている刀を持った人が立っていた。

それはついさっきまで話していた女子生徒である。
？「もう逃げられませんよぉ」
黒1「う・・うわあああああああああああああ」
彼の声は吹き荒れる吹雪の中へと消えていった。

一方、ゲレンデの方ではアリアが爽快に滑っていた。
僅かな時間で感覚を掴み、高雅には劣るけれども十分に上手くなっていた。
ア「やっほぉ♪」
時々、ジャンプを混ぜながら楽しく滑っている。
ジャンプを混ぜる時点でかなり上手になっている事が分かるだろう。
周りからも注目を浴びていた。
ア「ふぅ、流石に疲れちゃった」
熱中し過ぎたせいか3時間休まずに続けて滑っていた。
疲労を感じたアリアはゴーグルを外してホテルへと戻って行った。
その途中でナンパされたりしたが、殆ど無視して高雅のいる部屋へと向かった。
ア（あっ、他の生徒がいたら大変だから確認しておかないと）
ふとアリアが重要な事に気付いた。
あくまで高雅が修学旅行できている事を思い出し、意思会話を始める。
いくら高雅でも個室まで借りようとはしなかった。
ア（コウガ、今部屋にいる？）
高（ん、いや、今は昼飯を食ってる所だ。1階のレストランにいる）
ア（そっか。そっちに行ってもいい？）

高（悪いが少なからず他の生徒がいる。合流は止めておけ）
ア（そっか。じゃあ、散歩でもしてるね）
高（トラブルだけは起こすなよ）
ア（はいはい）
アリアは高雅との会話を終えロビーへ向かい、そこにあるソファに座った。
ア「少し休憩したらリュウコやリンちゃんを探そうっと」
アリアは体をソファに預けて休み始めた。
すると、目の前に三つ人影が立ちはだかった
ア「ん？」
顔を上げるとそこにはいかにもごろつきの悪い奴らである事が分かった。
アリアは一瞬で黒淵の生徒達だと理解した。
黒４「よぉ、俺達と一緒にスキーしないか？」
ア「ゴメン、今疲れてるから」
黒５「何々、何で疲れてるの？。もしかして腰が疲れてるの？」
黒６「うはー、昼間からとか、どんだけー」
ア「何の話？」
バカな会話について行けないアリア。
いくらそっぽを向いても三人は諦めようとしない。
黒５「なぁなぁ、今度は俺と一緒に疲れようぜ」
ア「もぉ、いい加減にしてよ」
黒６「お前じゃダメだ。ここは俺が」
黒４「いやいや、俺だろうjk」
アリアの話しを聞かずに勝手に話し続ける三人。
流石に愛想をつかしたのか、アリアは席を立った。
黒４「待てよぉ」
ア「もぉ・・・いい加減にして！！」
黒達「ヒッ！？」
ア「え？」

アリアが軽く怒鳴っただけで、黒淵の生徒達は腰を抜かして座り込んでしまった。
彼らだけじゃない、周りにいる一般の人もアリアに怯えていた。
ア「あれ？」
何が起きたか自分でも分かっていなかった。
ただ、自分の方を見て腰を抜かしている人達で囲まれていた。
高「おいこらアリア、お前いつの間に習得した？。もぐもぐ・・」
そこに高雅がプリンを食べながらやって来た。
昼食の途中だったのだろう、それでもデザートは譲れなかったのだ。
ア「え・・コウガ・・・その・・」
高「話しは人がいない所でだ。来い」
高雅はプリンを一気に食べ終え、アリアの腕を掴んでそそくさに出ていく。
上着は脱いでいるので、活性の力を使ってそのまま外へと向かった。
流石に普通の服で雪山にいるのも怪しいので、人気が少ない山の奥へと向かった。

歩く事5分。
雪を何とも思わずに突き進み、普通の人だと来れないような山奥までやって来た
高「ここまできたらいいだろう」
ア「それより、私、あの時何をしたのか分かる？」
高「殺気だ」
ア「え！？」

高「お前、俺の殺気の所為か、それともルシフェルやらなんやら強い奴と戦った所為か殺気が出せるようになっている。まぁ、一般人にとってみれば恐怖の一つだな」
ア「わ・・私も殺気が出せるの！？」
高「まぁ、そうなるな。しかし、出せるようになったからには扱えるようにならないとな」
ア「た・・確かに。一般の前で殺気は押さえないと。つい、カッとなったからって許されないよね」
高「当たり前だ。最終的に、殺気を一部だけに放出するようにならないとな」
ア「先は長そうだね・・・ん？」
高「殺気だな・・・」
アリアと高雅が同時に殺気に気付く。
高「それも人間じゃない」
ア「こっちにくるよ」
徐々に近づいて来る殺気に構える二人。
しかし、出てきたのは意外な人物だった。
紗「はぁい」
高「なっ！？」
物陰からやって来たのは紗奈恵だった。
高雅は殺気を読み取ったりしていたのだが、全く紗奈恵とは分からなかった。
紗「ふふ、殺気を少し変えてみてね。どう、分からなかったでしょ？」
高「全く別人かと思ってた。しかし、考えが読みとれなかったから、俺を知っている人物かと思ってた」
紗「いい読みね」
ア「ところで、どうしてこんな雪山にまでやって来たのですか？」
紗「そうそう、あなた達に教えないといけない事があったの」
高「何だ？」

紗「朗報です。高雅とアリアが天界の王と王女に任命よ」
高・ア「・・・・・・・はぁ!?」
突然の事に驚く二人。
それでも紗奈恵は表情一つ変えない。
高「ちょ・・ちょっと待て!!。勝手に決めるな!!」
紗「そぉ?。二人ならお似合いだし、天界の皆が文句なしで」
高「待て待て、天界の皆って・・・地獄は俺を殺すつもりだし、天国は俺の事を指名手配してただろ!!」
紗「ん・・・ああ、その事ね。地獄は何だか高雅におじけついたみたいだし、天国の指名手配は私達が消したわよ」
高「おいおい」
紗奈恵の職権乱用っぷりに呆れかえる高雅。
紗「あっ、それと重要な情報。ここからは私の独り言だから」
ア「え?」
紗「天国である事を決行するのよね。何でも、シリアちゃんを殺しちゃうとかね」
高「ッ!?」
紗「またルシフェルが復活したら危ないらしいからみたい。それで、高雅の所に向かってるらしいわね」
ア「そんな・・・」
紗「これは高雅には秘密だから、絶対に喋らないようにしないとね。ん?・・・ええ、分かったわ」
高「お・・・おい、それってマジ?」
紗「ゴメンね高雅。連絡が入ったからもう帰るわ。じゃあね」
高「って、おい!!」
紗奈恵は一人勝手に喋って勝手に帰った。
高雅は紗奈恵が言った独り言を頭の中で復唱した。
高「事実なら、やばいな」
ア「で・・でも、今はコウガの家にいるから大丈夫じゃ・・・」
高「普通、俺の所に来るなら家に行くのが普通だろ」

ア「そっか・・・って、まずいよ!!」
高「最初からそう言ってるだろうが。とにかく、真の契約をして空間の力で戻るぞ」
ア「うん」
高雅がアリアにキスをしようとする。
しかし、殺気を感じた高雅は動きを止める。
アリアはまだかまだかとずっと目を閉じていた。
高「誰だ!?」
ア「え!?」
突然、高雅が叫び、驚くアリア。
そして、木の陰から出てきたのは午前中に会った人物だった。
紫「えへへぇ、こんな所で何をしているのですかぁ?」
高「村井か。どうしてここに?」
紫「それはこっちのセリフですぅ。こんな山奥に女の子を引きつれて何をしようとしているのですかぁ?。それも、そんな薄着でぇ」
高(面倒だな。適当に誤魔化すか)
今は紫理奈よりもシリアの方が優先である。
そう思った高雅はアリアの手を握って速度の力を溜めた。
高「お前が見たのは幻覚だ。目を擦ってみろ」
紫「ほんとですかぁ?」
紫理奈は全く目を擦る気が無かった。
しかし、高雅は紫理奈が瞬(まばた)きをした瞬間に速度の力を発動し、あたかも消えたように見せた。
上手く出来ていたが、紫理奈は騙されていなかった。
紫「・・・逃がしませんよぉ」
紫理奈は笑みを浮かべて不気味に笑いだした。
その刹那、紫理奈はその場から消えた。

# 修学旅行編　その4、異常（前書き）

遅れてすみません。

投稿時間は気にしたら負けです。
こうでもしないと投稿できないのです。

レポートとバイトのダブルアタックに暇という暇を潰されてしまいました。

「駄文のくせに定期的な更新もできず、さらに言い訳とかマジきめぇｗｗｗｗ」

と思っていらっしゃるかもしれませんが、何も言い返せません。

待っていた方々、本当に申し訳ありませんでした。

# 修学旅行編　その4、異常

紫理奈から軽く逃げた高雅はホテルに戻っていた。
しかし、さっきの騒動もあってか周りからは奇妙な目で見られていた。
アリアは俯いて目を合わせないようにしたが、高雅は逆に殺気を操って脅していた。
謎の恐怖に追われた外野共はそそくさに高雅から逃げて行った。
高「ったく、人を変な目で見やがって」
高雅はそんな言葉を吐き捨てながらソファに座る。
アリアも高雅の隣に座った。
ア「仕方ないよ。私達は普通じゃないし」
高「はぁ。それよりも、村井の奴、何であんな所にいたんだ？」
ア「分からないよ。吹雪の中、山奥に行くなんて普通は危ないよね」
高「あいつも普通じゃない、と。だとしたら、やっぱり・・・」
？「ちょっと、いいか？」
高・ア「？」
高雅達に話しかけて話しかけてきたのは少し雰囲気が違う人だった。
いや、高雅は人じゃない事を殺気から理解していた。
高「誰だテメェ。人間じゃねえだろ」
天「私は天使の一角にすぎない。目的ｈ「シリアの抹殺だろ」ほぉ、誰から聞いた？」
高「誰からも聞いていない。誰かさんの独り言が耳に入っただけだ」
天「そうか。では、そのシリアをこっちに渡してもらおう。コウガ様も嫌っていただろう」
高「ああ、無理やり押し付けられたからな。でもまぁ、もう少し前だったら考えてやったけどな」
ア「と、言う事は？」
高「おととい来やがれってことだ」

高雅は天使に向かって手を払う。
しかし、天使は帰るつもりは全くない。
天「悪いがコウガ様。私はあなたを逃がさない為に来ました」
高「はぁ？」
天「コウガ様には悪いが、他の先鋭部隊が家に向かっている。さすがにコウガ様には誰にも勝てないから、私が足止めにきたのだ」
高「・・・安心しろ。俺はお前が来ようが来なかろうが途中で家に帰ったりはしない」
ア「え！？」
流石のアリアもこの言葉に驚いていた。
いくらツンデレな高雅でも、最終的に助けに行くのは必然だ。
高「こいつらはフィーラにすら勝てない。実力が無過ぎる」
ア「そう・・なの？」
高「そうだ」
天「それは私の殺気を読みとっての回答か。この程度で王とは、呆れて物が言えん」
天使は高雅に失望したのか、溜息を零していた。
そして、いきなり高雅の胸倉を掴んで立たせ、怒鳴りだしたのだ。
いきなりの事に驚いたアリアは無意識に立ち上がった。
天「いいか！？。ただ強いから上に立てると思うな！！。私は貴様を認めはしない！！」
高「認めなくて結構。俺は天界の王なんてやる気は無い」
天「ふん、逃げに入ったか。まぁ、民（たみ）もシリア抹殺計画には過半数が賛成している。貴様なんかに王が務まる訳が無い」
高「それはありがたい。王なんか下らねえって思ってたところだ」
天「貴様に王の座を侮辱する資格は無い！！」
天使の怒りは頂点に達し、高雅を突き飛ばした。
高雅はバランスを取れずに尻もちをついた。
高「ってぇ」
ア「コウガ、大丈夫？」

天「私は空間の力に優れた者だ。この辺りは私の空間の支配下にある。例え貴様が本気を出そうとも出る事はできん！！」
天使はそれを最後に吐き捨て、去って行った。
天（愚かな奴だ。確かに、私は実力こそないが力はあり余っている。先鋭部隊は実力も力も優れた団体だ。私の殺気だけで判断したのは実に愚かだ）
そう思いつつ、天使はどこかへと消えた。
高雅は何事もなかったかのように起き上がると元いた場所に座った。
高「ったく、うざってぇ奴だったな」
ア「でも、高雅が王になるのは皆が認めてなかったんだね」
高「元、指名手配人をいきなり王だと言っても、誰も信用しないのは当たり前だ」
ア「そうだね。でも、私はコウガが王に相応しいと思うよ。強いし頭もいいし優しいし」
高「仮に俺とお前が王と王女になったら、俺はお前に全てを任せて寝る」
ア「もぉ、言うと思った」
アリアが溜息まじりに言う。
すると、高雅が立ち上がり、アリアも首を傾げながら立ち上がる。
ア「移動するの？」
高「ん、部屋に行って寝る」
ア「そっか・・・てか、コウガ。いい加減に集団行動を」
高「できぬぅ！！」
全力否定の高雅に、もう、どうにでもなれとアリアはブレスレットになって休憩する。
渡り廊下を歩き、部屋の目の前までやって来た。
後は、扉を開けて布団に寝るだけである。
高「ッ！？」
しかし、ドアノブに触れようとした瞬間に、高雅は妙な感覚に襲われる。

最初は殺気と思ったが、さっきとはまた違った感覚だった。
ア「?、どうしたの?」
高「・・・いや、妙な感覚が・・・」
ア「妙な感覚?」
高「殺気じゃない。不安のような感じがする」
ア「・・・そう言う嫌な予感は当たるから気をつけた方がいいよ」
高「はぁ、外れればいいけどな」
高雅は特に気にする事もなく、部屋に入ってそのまま布団に倒れて眠りについた。
ただ、襲われる謎の不安の様な感覚のせいで寝つけがいつもより悪かった。

一方、ゲレンデの方は悪天候のため、研修を中止にするか会議をしていた。
全員をホテルの玄関前に集め、先生達とインストラクター達が話しあっていた。
A「それにしても、すげぇ吹雪だな」
その悪天候とは吹雪の事で、異常なまでの強烈な風と雪が視界を覆い尽していた。
玄関前に集まっていても、玄関が微(かす)かに見えるほどの量である。
B「こういう中でも滑ってみたいよな」
C「どうせ、柵に突っ込んで終わるだろうよ」
D「あー、雪合戦でもするか」
E「ひょい」
Dがそう言った瞬間に、EがDの顔面に雪玉を投げた。

D「え・・ごぶ!?」
E「は?」
しかし、Dに当たる時には恐ろしいぐらい大きくなっていた。
片手でできる極小サイズの雪玉がDの顔にある時には人の頭ぐらいまで大きくなっていた。
D「やったな、この!!」
E「い・・ぼふっ!?」
Dに火がついてやり返す。
やり返した雪玉はEに当たるまでの間にバランスボールほど大きくなった。
D「おお、すげぇ」
E「ざけんな!!」
C「ハハッ、これは面白い」
B「皆で雪合戦だ!!」
小さな戦いは周りに火を付け、いつの間にか生徒全員で雪合戦が始まっていた。
先「・・・って、こら!!。ジッとしなさい!!」
先生に叱られても、なお止めない生徒達。
雪合戦はかなり燃え上がり、一種の騒ぎにまでのぼりつめた。
先「いい加減ｎ〈バゴッ〉いた!?。こらぁ!!、石を入れた人は出てきなさい!!」
収まる事のない小さな戦争。
やがて、それは飛んでもない事件を起こしていた。
夢「ちょ・・わわ、ちょっと待てぇい!!。龍子がいないじゃない!!」
A「は?」
行方不明者が出たと聞いた途端に全員の動きが止まる。
そして、夢はいてもたってもいられずに動き出した。
夢「きっと、近くにいるはずだから探してくる!!」
先「待ちなさい。いくらなんでも無茶です。ここは先生達に任せて

あなた達は部屋で待機してなさい」
先生が無我夢中で飛び出す夢を抑え、生徒達を部屋で待機するように促さす。
行方不明者が出たとなれば、流石に大人しくなる生徒達は先生に従って部屋へと向かった。
先生はインストラクターの方々と協力して龍子の捜索を開始した。

龍「・・・ここ・・・どこ?」
猛吹雪の中、龍子は雪合戦から逃げ出すために少し離れようとした。
しかし、たった少し離れただけで居場所が分からなくなり、遭難してしまったのだ。
決して方向音痴ではなく、視界が本当に見えないのだ。
見えて数メートルの先の物体である。
龍「・・どうしよう・・・」
今、どのくらい離れたのか、どの位置にいるのかもすら分からない状況のため、移動はしない。
しかし、猛吹雪で徐々に体力が減りつつあった。
龍「さ・・・寒い・・・」
防寒着はバッチリのはず。
どこにも穴などは開いてないが外の温度があまりにも低いのだ。
さらに、ジッとしていた所為で足下に雪が積もって動けなくなっていた。
龍「た・・・助けて・・・」
助けを求めるも周りには白い視界しかない。

叫んだとしても風の音でかき消されるのがおちである。
龍「死んじゃう・・・本当に・・・死んじゃう・・・」
絶望に呑まれ、死を覚悟し始める龍子。
しかし、そこで救いの手を伸ばさない程、世界は薄情ではなかった。

ポン

龍「え?」
龍子の肩に触れる手。
そして、服越しに伝わる温(ぬく)もり。
その温もりは自分の体を自然と温(あたた)めていた。
高「ったく、猛吹雪の中を探検とか。お前は勇気ある奴だな」
龍「こ・・・高雅君!?」
振り返ると、そこには紛れもなく高雅の姿があった。
高「眠れないから外を見ると猛吹雪。そして、一つ離れた殺気を辿って来てみたらお前かよ」
ア「とか言いつつ、リュウコが遭難したと生徒の話から聞き取った途端に外へ出たくせに」
高「知らん!!。そんなことは知らん!!。全く知らん!!」
アリアの言葉に必死に否定する高雅。
アリアはその言葉が逆に肯定の意味に聞こえていた。
ア「ったく。それより、大丈夫、リュウコ?」
龍「う・・うん・・・何だか・・・・寒くない・・・」
高「アリアのお陰だな」
アリアは活性の力を使って龍子の失った体温を補っていたのだ。
もちろん、高雅とアリア自身も同じことを施している。
高「さて、早いとこ帰ろうぜ。こんな猛吹雪の中にいたくないからな」
龍「う・・うん・・・」
高雅は龍子の手を引いてホテルへ案内する。

ホテルまではそこまで離れてなく、5分で到着した。
高「さて、お前は先生にでも会って事件を解決させろ」
龍「うん・・・ありがとう・・・」
高「知らん」
ア「ほんと、いい加減に素直になろうよ」
高「知らんものは知らん!!」
そう言って、高雅はホテルの外へと飛び出した。
龍「・・・ありがとう・・・」
龍子は出ていく高雅の背を見ながらもう一度だけお礼を言った。

山の深層部。
そこには一人の天使が一人の人間に剣を突きつけていた。
天「見つけたぞ、シリア」
？「え・・・何ぃ？」
天「やはり、あいつの近くにいたか。お前は天界に恐れられる存在とみなされ、今ここで処刑されるのだ」
？「天界ぃ？、処刑ぃ？」
天「惚けても無駄だ。貴様は私の手によって処刑が下される。さぁ、死ぬがよい」
？「えぇ？・・・」
天使は突き付けた剣をそのまま・・・

ザクッ！！

人間の喉に突き刺した。

## 修学旅行編　その5、遭難（前書き）

一日分だけ遅れを取り戻すことができたぞ

やったね

# 修学旅行編　その5、遭難

ゲレンデを全速前進で上っている高雅。
猛吹雪の中でも低空飛行を続けてある場所へと向かっていた。
ア「コウガ、どこに向かってるの!?」
高「あのムカつく天使野郎の所だ」
ア「どうして?」
高「殺気が一つ消えたからだ。やな予感がやっと分かった」
ア「え、どういう・・・」
高「あの天使の殺気を読みとった時、シリアがどういう奴か分かっていなかったんだ」
ア「嘘!?」
高「あいつからシリアの情報を盗み感じた時、そこに素顔は無く、子供と口調と性別しかなかった」
ア「口調と子供と性別しか知らないの?」
高「ああ。冷静に判断すると、フィーラは楽園の者だからあいつは知っていた。サミダレを知らないとしても大人だから大丈夫。つまり、あいつは口調だけで探していることになる」
ア「それって・・・まさか!?。でも、探しているのは子供のはずじゃ・・・」
高「あいつから見れば、二十歳以下は全員子供だろ」
ア「・・・シリナちゃんが危ない!!」
高「手遅れになる前にどうにかする」
そう言って、全速力で山を駆け抜けた。

天「ふっ、まさか私が倒してしまうとは。まぁ、誰が倒しても関係ないか」
天使はシリアを殺したと思い、あまりの呆気なさに溜息を零した。
天「これが本当にルシフェルの子か。まぁ、いい。後は完全に消すだけだ」
天使は異界へと空間を開き、死体を投げ捨てようとする。
しかし、投げる直前で空間が閉じられてしまった。
天「気付かれたか」
そう言って天井を見上げると、高雅が重力に反して立っていた。
すると、一回転してから地面に着地する。
ちなみに、ここは洞窟内の為、雪は積もっていない。
高「よっと。ったく、こんな洞窟の奥深くにいるとか面倒なやつだな」
高雅は山を駆け抜け、洞窟を抜け、その最深部にまで辿り着いたのだ。
そこに、天使と殺されて紫理奈がいたのだ。
高「お前は引き籠りか？」
高雅が紫理奈の首を再生しながら冗談半分で問う。
しかし、天使がそれを許すほど甘くは無い。
だが、天使に邪魔をさせるほど高雅も甘くは無い。
天「貴様、止め・・・くっ！？」
高「動く訳ねえだろ。お前は既に静寂に飲みこまれてるよ」
天「くっ・・・だが、こんなこともあろうかと！！」
天使がそう言うと、どことなく空間を引き裂いて誰かがやって来た。
天使には静寂が掛かってあるため、やって来た誰かが空間を開いたと高雅は理解する。
現れたのは腰に長剣と短剣を刺した使いだった。
天「彼女は私の使いだ。さぁ、ケリンよ。奴を足止めするのだ」
ケ「いや」
天「は！？」

いきなりの命令無視に驚く。
ケリンと呼ばれた使いは振り返って長剣を抜き、天使の首に突き付けた。
ケ「ふざける、ダメ。私、賛成。主人、反対。主人、王より、下」
片言しか喋らず、天使の命令を全く聞くつもりがない。
天「ふ・・ふざけてるのはお前だ!!。私の命令に従えないのか!?」
ケ「〈コクッ〉」
ケリンは無言でうなずく。
天「貴様・・・主人の言葉が聞けないとはいい度胸だ」
高「なぁ、茶番は終わりか?」
高雅は既に紫理奈を生き返らせ、抱えてこの場から去る準備をしていた。
ちなみに、紫理奈は生き返ってはいるが意識は取り戻していない状態である。
ケ「待って」
しかし、ケリンがすぐに高雅の首に長剣を突きつけて動きを止める。
高(・・・地味に狙いが上手いな)
そんなことを思いつつもケリンを睨みつける。
ケ「私、あなた、戦いたい。手合わせ、したい。戦いたい」
余程戦いたいのか、同じ事をニ回も言って強調させる。
高「おい、お前は俺と戦わないんじゃないのか?」
ケ「主人、どうでもいい。私、意思」
天「なっ!?」
高「名無しキャラ乙」
ケ「とにかく、私、戦う。戦いたい」
高「悪いが、俺は好戦的じゃないんだ。そこで黙って寝てろ」
そう言って、高雅は強力な殺気をケリンにぶつける。
ケ「ッ!?」
ケリンは目を丸くして驚く。

一瞬で高雅が恐ろしい相手だと言う事が分からされたのだ。
ケリンを通して天使は気絶していた。
しかし、ケリンは震えているだけで気絶まではしなかった。
高「気絶しないとは、少しはやるようだな。しかし、戦えるか？」
ケ「・・・・・・〈ガッ！！〉」
ケリンは自分の震えている手を思いっきり殴った。
すると、ケリンの恐怖により硬直は解けていた。
ケ「戦える」
高「訂正、かなりやるようだな」
ケ「負けない」
ケリンは踏み込んで高雅との間合いを詰める。
そのままの勢いで、長剣でなぎ払う。
それを高雅は片手で紫理奈を抱えつつ、片手で剣を持って斬撃を受け止める。
高「悪いが俺と戦う前に、まずはAにでも勝てるようにならないとな」
ケ「A？」
高「そ、俺と同い年の殺気を感じる事のない人間だ。そいつに勝つまで、俺との勝負はお預けだ」
ケ「・・・やだ」
ケリンは否定して短剣を抜き、高雅の首を狙う。
狙いは完璧で当たれば即死は逃れられない。
しかし、そんな正直な攻撃を高雅が見破れない訳がない。
高「狙いは完璧だ。だがワンパターンじゃ、いつまでも三流だな」
高雅は体を逸らし、紫理奈を一瞬手放した。
紫理奈が落ちるまでに、ケリンの腹を一発殴り、さらに蹴り飛ばした。
その間、僅か0．5秒。
そして、高雅はさっきと同じように紫理奈を抱え、ケリンは壁に叩きつけられて倒れていた。

ケ「うぐ・・・」
高「さーて、帰るか」
高雅は天使とケリンをそのままにして洞窟を出て行った。

外に出ると相変わらずの猛吹雪によって視界が真っ白になっていた。
高「天気、回復しないな」
ア「そうだね。急に悪くはなったけど、良くはならないね」
高「全く。天気は気紛れだな」
ア「それにしても、コウガ。どうしてあの時A君の名前をだしたの？」
高「戦うことに執念深い奴は戦いたい奴に言われた通りにするのがセオリーだと思ったから」
ア「だからって、A君の名前をだしたの？」
高「面白半分で」
ア「あ・・あははは・・」
おしゃべりをしつつも、人が集まっている殺気を辿ってホテルへと向かう。
高「・・・あれ、殺気が近づいて来る」
ア「え？」
こんな猛吹雪の中、高雅の方へと殺気が一つ近づいて来ていた。
高雅は集中して誰の殺気かを読みとる。
高「・・・はぁ」
誰か分かった瞬間、高雅は溜息を零した。
そして、足下の雪が溶け、その人物はやって来た。

A「おっす。やっと見つけた」
やって来たのはAだった。
ただ、高雅は雪の上に立っているが、Aは頭以外雪に埋もれていた。
しかし、活性の力を利用して全て溶かして来たのだ。
高「お前、何やってんだ?」
A「いやー、お前がホテルにいなかったから探しに来たんだ。主人公が仲間を心配するのは当然だろ?」
高「言ってろ」
A「まぁ、それは置いといて、抱えている女性は誰だ?。まさか、そこの洞窟でキャッキャウフフを!?」
高「黒淵高校の奴だ。遭難していた。それだけだ」
あえてAのツッコミをスルーし、嘘の事を教える。
だが、Aは首を傾げていた。
A「じゃあ、何で戦った形跡があるんだ?」
高「・・・・・・・」
高雅は無言で何も答えなかったが、内心は相当驚いていた。
確かに、高雅は戦ってはいたが、形跡は見るだけでは分からない。
感覚だけで高雅の所に辿り着き、厚着をしている人を女性と見分け、さらに戦っていたと言う事を理解している。
高(どれもこれも殺気を読みとれば分かる事。こいつ、まさか・・・)
Aは殺気を読みとれるようになったのかと思ってしまう。
A「んー、何となくだけど戦ったような感じだよな。なぁ、合ってるか?」
高「・・・正解だ。よく分かったな」
A「だから、何となくだって」
高雅は理解した。
本人は分かっていないが無意識に殺気を感じ取っているのだと。
高「何となくって・・・・ッ!?」
A「パスパス」

高雅は後ろからの殺気を感じ取った。
それと同時にAは紫理奈をこっちに投げるように仕向けた。
高雅は紫理奈をAに投げ、振り返る。
Aは軽々と紫理奈を受け止めて、警戒態勢に入る。
ケ「追いついた」
殺気の犯人はケリンだった。
早くも気絶から意識を取り戻したのだ。
ケ「まだ、終わってない。戦う」
A「おいおい、エンカウントじゃね？。俺、今ならやる気あるぜ」
高「Aは黙って帰れ」
ケ「A？。あなた、A」
高「あ・・・」
ついケリンの前でAという言葉を出してしまった。
ケリンの視線がAの方へ変わる。
ケ「あなた、王、認めた、人間。戦いたい」
高「パスパス」
今度は高雅は紫理奈をこっちに投げるように仕向ける。
Aは迷わず投げ、刀を構える。
その瞬間、ケリンはAに向かって飛びかかった。
A「おっと。女性なのに力強いこと。高雅、先に帰ってろ。こいつは俺が何とかする」
高「おいおい、大丈夫か？」
A「はっはっは。俺が負けるとでも？。俺は主人公。絶対に死なん！！」
高「フラグ立てすぎだろ。まぁ、お望み通りに任せる。帰ったら名前で呼んだ事で倒すから」
高雅はケリンをAに頼み、高雅は山を下りようとした。
だが、少し下りた所で事件が起こった。
A「いくぜ！！。新必殺技、バーニングバースト！！」
痛い叫び声と嫌な技名で振り返る。

そこには、活性で作った超高温の斬撃を飛ばすAの姿があった。
高「アホか！！」
ア「やる気があるって、あの技を試したかったんだ」
高「そんな呑気なこと言ってる場合じゃねえ！！」
高雅が最も恐れていたのことが起きてしまった。
山の雪が一気に崩れ、雪崩が発生したのだ。
ケ「ッ！？」
A「甘かったな。これが俺の狙いだ」
高「かっこつけてる場合か！！。お前はどうする気だ！！」
A「安心しろ。主人公だから死にはしない」
Aもそれなりに考えがあるようだ。
どうみても、バカな考えだが。
そうしている内にも猛吹雪によって大量に積もった雪が一気に崩れた。
それはかなりの規模の雪崩だった。
Aは自分しか考えておらず、碌に周りを見ていなかったのだ。
ケ「くっ・・・撤退」
ケリンは空間を開いてこの場から離れた。
ア「コウガ、私達も空間で逃げないと」
高「ダメだ。真の契約が間にあわねえ！！」
ア「じゃあ、活性で」
高「それはダメだ」
ア「何で！？・・・ひ・・きゃあああああああああああ」
高「うわあああああああ」
A「あばばばばばばばばばばばばば」
高雅の理由も聞けずに、高雅達は雪崩に呑みこまれた。

雪崩が収まり、猛吹雪も次第に弱まり、雪山に平穏を取り戻した頃。

ズボッ！！

そこに一つの手が生(は)えた。

さらにもう一つの手が生え、次第に一人の人影が生まれた。

その姿は高雅だった。

高「・・・・・・・・・」

しかし、高雅の腕にはアリアのブレスレットや紫理奈の姿が無かった。

雪崩の時に逸(はぐ)れてしまったのだ。

今の高雅は薄着でアリアがいなければ凍え死んでもおかしくない。

高雅は雪の中から脱出はできたものの、既に体力が無くなっていた。

高「・・・・・・・・」

意識があるだけでもおかしい状態だが、高雅はその場に立ち尽くした後、何もできずに倒れてしまった。

## 修学旅行編　その6、黒淵の異変（前書き）

何とか追いついたようだ。
しかし、またレポートに追われる日々に戻った。
また、遅れそう・・・

# 修学旅行編　その6、黒淵の異変

時を少しさかのぼり、Aがこっそりと高雅を探しに出かけた頃。
ホテル内では両学校が広間に集められていた。
予想外の猛吹雪に見舞われ、遭難者も出たことから今後について大会議を開いているのだ。
その間、緑淵は黒淵の生徒達を危険視していた。
緑1「あいつらと一緒にいると怖いな」
緑2「全国で最も危険な人の集まりらしいわね」
緑3「関わりたくねーよな」
ひそひそと陰口を叩いているが、黒淵の生徒達には聞こえていたのだ。
そして、抑えきれなくなった一人の黒淵の生徒が緑淵の方へと歩み寄った。
黒a「ウジウジ言ってんじゃねーぞ!!。殺されてえのか!!」
緑4「ひぃ!!」
黒淵の生徒は適当に緑淵の生徒の胸倉を掴み上げた。
そのまま無関係の生徒を殴り飛ばした。
騒ぎにかきつけ、先生達が止めに掛かった。
B「こえ～、流石、ある意味有名校だな」
C「ところでさ、Aの奴、どこ行った?」
D「さぁ?」
E「そういやさ、崎村って見たか?」
C「・・・新幹線以来、全く」
B「まぁ、あいつは元気にやってるだろ。雪山で裸になっても死ななさそうだし」
D「それ、同感」
購買部組はお喋りをして暇をもてあそんでいた。
いや、購買部だけじゃなくて他の皆もお喋りをしていた。

黒淵の生徒は先生にまかせっきりだった。
しかし、先生に任せると言っても、黒淵の生徒は先生に向かって全員が喧嘩を始めたのだ。
最早、広間は戦場と化していた。
会議をしていた従業員、先生達全員で黒淵を止めるも、人数の面で不利だった。
何人かの生徒達は広間から逃げ出していた。
夢「ほら、こっちこっち」
龍「う・・うん・・・」
夢達も逃げていた。
夢が龍子を引っ張って部屋へと逃げ切った。
夢「はぁ、相変わらずあの有名校だけは嫌だね」
龍「うん・・・けど・・・」
夢「ん?」
龍「何か・・・変だよ」
夢「そりゃぁ、あの学校は変だよ」
龍「違う・・・そうじゃなくて・・・その・・・」
夢「?」
龍「皆・・・怖い・・・」
夢「?、そりゃ、黒淵は怖いけど・・・どういう意味?」
龍「ゴメン・・・説明・・できない」
龍子は俯きながら謝る。
夢はその訳を知ることはなく、首を傾げたままだった。

時を戻し、とある山小屋。
そこに高雅が眠っていた。
高「・・・・・・・んぁ？」
目を覚ました高雅が訳も分からずに周りを見渡す。
自分は暖炉のそばに眠っており、何故か生きていた。
てっきり、雪山に凍死でもしたのかと思ったが、天国でもないと判断する。
瞬時に状況を理解しようとするも、流石の高雅も理解できなかった。
高「俺、何でこんな所に？」
？「起きたようねぇ」
高「！？」
ついさっき周りを見渡したはずなのに、いつの間にか人がいた。
自分と同じように厚着どころか手袋も全くない。
驚いて警戒態勢を取るも、その人物の顔を見てさらに驚いてしまった。
高「・・・って村井！？」
？「？、何で分かったのかしらぁ？」
高「何でお前生きてんだよ！？。大体、意識が戻ってたのかよ！？」
？「えっとぉ・・・あなたぁ、紫理奈を知っているのかしらぁ？」
高「紫理奈？。紫理奈ってお前のことだろ」
？「くすっ、あははは」
高雅の言葉を聞いて突然笑い出した。
高「何だよ、テメェ。さっきから訳が分からねえ事を」
？「あははは、面白いわねぇ」
高「だから・・・ん、あれ？」
高雅はムキになって殺気を読みとろうとして考えを確認しようとした。
しかし、感じ取った殺気は紫理奈のものではないと気付いた。
高「あれ、誰だお前？」

詩「やっと気付いたのねぇ。私は村井　詩智安（しちあ）。紫理奈の双子の姉ですぅ」
高「双子ぉ!?。通りで似て違う訳か」
謎が解けた事で現在の状況を事細かに聞いた。
高「助けたのはお前か?。俺を助けた時に他の奴は見なかったか?。時間はどれくらいたった?。お前一人か?」
詩「落ち着きなさぁい。私も遭難した者だからぁ」
高「あっ、そうだったのかよ」
詩「まぁ、答えられるものだけ答えるとぉ、私は一人で時間はそれ程立っては無いのよぉ。後、他の人は見なかったわぁ」
高「そっかぁ・・・・」
高雅は落ち込み、暗い顔をする。
彼でもアリアや紫理奈の事を心配しているのだ。
詩「大丈夫よぉ。思っていればきっとぉ」
高「そんな根拠のない話で元気が出るか!!」
詩「出てるわよぉ」
高「これは怒りだ!!。元気とは違う!!」
詩「声が出せれば元気よぉ」
高「言ってろ!!」
高雅は怒りの勢いに任せて山小屋を出ようとした。
しかし、冷静に自分の状況を思い出す。
高（アリア無き今、こんな薄着で外に出るのは危険だよな・・・）
今、高雅は動きやすい普段着で薄着である。
アリアで活性を使ったお陰で外でも平気に移動できたが、アリアがいなければ無理である。
その姿で外に出るとさっきまでに逆戻りである。
詩「外に出るのかしらぁ?」
高「・・・いや、バカな真似はしない」
詩「賢明ねぇ」
高「――と言いたいが、これが動かずにはいられない」

立ち止まると思いきや、高雅は扉を思いっきり開けた。
気温はかなり低いものの、吹雪は止んでおり視界は全快だった。
詩「あらぁ？」
高「動き続ければ冷えないだろ」
詩「でもぉ、どこに行くか分かるのかしらぁ？」
高「俺は特殊でな。そんぐらいは分かる」
詩「そぉ。気を付けなさぁい。そぉそぉ」
詩智安が出て行こうとする高雅に一言はなった。
詩「管理無き黒淵はきっと暴走してると思うから気を付きなさぁい」
高「やっぱり、お前、黒淵の管理している奴か」
詩「まぁ、双子だからねぇ。でもぉ、私の担当は責任重大なのよぉ」
高「そうかい。んじゃ、俺は行く。拾ってくれてどうも」
そう言って、高雅は雪山の中へと駆けだした。
詩「・・・くす、私も動こうかしらねぇ」
詩智安も立ち上がり、山小屋を出て行った。

雪山を駆けまわる事１０分。
足は雪に埋もれるわ、動いても寒いわ、アリア達は見つからないわでイラついていた。
高「ぅへっくしゅ！！。うぅ～、寒ぃ。見つからねぇ」
殺気を頼りに探すも、意識を失っているのか殺気を見つけるのが困難な状態である。
いくら動き続けたとしても周りの気温によって体温は上がらず奪わ

れるだけだった。
高「さっき意思会話も試したのに反応なし。早いとこ見つからねーかなぁ」
辺りを見渡し、殺気を感じ取ろうとするも反応は無い。
次第に不安が積もってくるも、それを払いのけて探す事を諦めない。
高「・・・今度はあっちに行くか」
ダメもとで違う場所へ向かおうとする。
高「ん？」
いざ行かんの寸前で殺気を感じ取って立ち止まる。
そして、殺気を感じ取った方に目をやると人影が見えた。
高「殺気からして探している奴に一致してない。遭難者か？」
取りあえず、その影に近づいてみる。
もしかしたらアリア達の事をどこかで見たのかもしれないと思って。
高「おい、あんた。何してるんだ？」
肩を叩き、こっちの存在を気付かせる。
見れば黒淵の生徒だと言う事が分かった。
しかし、高雅は足下を見て目を丸くした。
高「ん・・・ッ！？」
高雅は飛びのいて距離を取った。
その人の足下には大量の血が滴り落ちていたのだ。
しかし、その人本人の者ではなく、手に持っていた刃物から滴り落ちていた。
高「テメェ、何をした！？」
？「・・・足りない・・・」
高「あ？」
？「・・殺し・・・足りない・・・」
その人がくるりと振り返り、高雅に刃物を突きつける。
その時、高雅の頭にある言葉がよみがえった。
高「・・・そう言う事か」
そう言って自分に襲いかかって来るあいてを睨みつける。

相手は刃物を持っていようとも普通の人間、高雅の敵ではない。
殺気をぶつけて簡単に気絶させた。
高「・・・こりゃ、ホテルも危険だな」
Aがいれば、ホテルの騒動は全て任せられるが、彼も雪山のどこかに埋まっているはずである。
高「・・・ホテルでの大量殺人を止めるか、今にも死にそうな奴らを助けるか・・・どっちも死が関係してるな」
寒さを忘れ、真剣に悩み出す。
流石の高雅も一人じゃ両方を解決することはできない。
高「せめて使える手伝いが一人でもいたら・・・」
ロ「困っているようだな」
いつものように突然現れるログナ。
雪山に関わらず、厚着をしていない。
高「・・・・いや、今は神出鬼没に感謝だな」
蓮田の事やどうしてここにいるかと色々とツッコミをしたかったが、今は一刻の猶予もない。
高「おいログナ。お前はホテルで起こっている事をどうにかして欲しい。解決しろとは言わない、死人がいるはずだからそいつらの再生を頼む」
ロ「ラジュッ!!。だけどよ、ホテルってどこよ?」
すると、高雅はログナの首根っこを掴んで振りかぶった。
高「6秒で着く。後は頑張れ!!」
ロ「サー、イエｓ〈ブンッ!!〉サアアアア?」
ログナを思いっきり文字通りブン投げた。
高「さて、こっちも早めに見つけねーとな」
高雅も殺気に集中してアリア達を探す。
そして、雪山の奥へ再び姿を消した。

Ａ「・・・・・・・ぶはぁ！！」
雪に埋もれていたＡが元気良く飛び出した。
さすがに雪崩の勢いで気絶はしていたようだ。
そして周りを見渡すも見えるのは雪景色のみだった。
Ａ「・・・いや～、こうしてみると雪もいいな～」
などと呑気な事をいいつつも歩き始める。
タイトはちゃんとＡのミサンガとしてそばにいた。
そのお陰で凍死は逃れたのだ。
タ「主よ、これからどうするつもりだ？」
Ａ「ん～、高雅の感覚は結構分かってるはずだが、感じないな。まぁ、適当に山を下りながらぶらつくさ」
タ「そうか。しかし、他の者はどうするのだ？」
Ａ「大丈夫だ。主人公が探せばすぐに見つかるさ」
タ「ならいいのだが・・・ん、待て、主よ」
Ａ「どったの？」
タ「あれはアリアではないか？」
Ａ「え！？」
Ａはタイトに言われ、良く目を凝らすと蒼いブレスレットが落ちていた。
Ａ「マジだ。ナイスだタイト」
Ａはブレスレットに駆け寄って手に取る。
それは相当冷えており、呼びかけても何も返事を返さなかった。
Ａ「おいー・・・アリアー・・・って、手に張り付いた！？」
握っていたため、Ａの手にブレスレットが張り付いた。

つい驚いて手を振り回す。
タ「待て主よ。活性を送って軽く温めるのだ」
A「おおっと、そうだった。ほれぇ～」
間抜けな声を出しながらも活性を送る。
しばらくするとブレスレットから声が聞こえた。
ア「ん・・・んぅ～・・・A・・君？」
A「起きたな。もう平気か？」
ア「・・・ゴメン。まだ、体が上手く動かない」
A（体が動かない→何しても動かない→やりたい放題！！）
タ「主よ。邪心が見えるぞ」
A「おおっと、俺自重」
ア「？」
Aはバカな妄想を止め、本題に入った。
A「なぁ、高雅に連絡とれないか？」
ア「できるよ。やってみるね」
アリアは高雅と意思会話を始めた。
しばらくして、高雅の声が帰って来た。
高「もしも～し、生きてるか～」
ア（あっ、コウガ。コウガは大丈夫だった？）
高「この通りピンピンしてるけど」
ア（・・あれ、何か声が直に聞こえるような・・・）
高「ここにいるぞーーー！！！！」
A・ア「わっ！？」
Aの背後から高雅の叫び声が聞こえた。
そして、Aからアリアを取り上げ、腕に巻いた。
A「ったく、手を焼かせやがって」
高「どっちのセリフだ、ゴラ。俺はずっと起きてからすぐに探し続けて・・・あっ」
ア「そんなに心配してくれたんだ」
つい本音を零すも、素直じゃない高雅は最後の最後まで言い切らな

かった。
しかし、アリアには十分に伝わったようだ。
高「黙れ！！／／／」
ア「良かった。いつも通り元気だね」
高「この野郎・・・・の前に！！」
ア「え！？」
A「どったの？」
高「ホテルが大変だ。多分、大量殺戮が行われてるほど」
ア「えぇ！？」
A「ナ、ナンダッテー」
高「だから、Aは今すぐホテルに戻れ。俺は後一人探すべき人がいる」
A「サーイエッサー。んで、ホテルってどｔｔ〈ブンッ！！〉ちいいいいいいいいいいいいいい！？」
高雅は問答無用でAをブン投げた。
ア「コウガ、ホテルで大量殺戮ってどういう意味！？」
高「説明は後だ。早く村井を探すぞ。あいつは普通の人間だからとっくに凍死していてもおかしくない」
ア「わ・・分かった」
高雅は残り最後の紫理奈を探すために殺気を集中させた。
そして、当てずっぽうで雪山を駆け廻り始めた。

## 修学旅行編　その7、全員集合（前書き）

結局、遅れる始末に・・・

バイトも人手不足で毎週5日以上。

しかし、遅れようとも絶対に書き終えてやる！！。
ここで投げ出すわけにはいかねえ！！。

高「取りあえず、遅れたことに謝罪しろ」

スミマセンでしたｏｒｚ

一方、ログナはホテルに投げ飛ばされ、戦争に参加していた。
ロ「うおおおおおおおお、俺の屍を越えて行けえええええええ」
何故か死ぬ奴のセリフを叫んでいる。
と、いいつつも死ぬ気は無く、寧ろ襲ってきた奴らを返り討ちにやっている。
ロ「ぬおおおおお、俺の屍ｗ（ｒｙ」
こんな時のセリフが思いつかないのか、同じ言葉を繰り返す。
？「じゃあ、越えさせてもらうぜ」
ロ「うお？」
誰かに頭を踏み台にされ、そのまま敵に踵落としを喰らわせる。
？「よっ・・あらっ・・ごふっ！？」
カッコ良く着地すると思ったら何故かずるりと足を滑らせ、そのまま頭を地面に激突。
結果、カッコ悪くのたうち回ることになった。
ロ「誰かと思えばエイッちじゃん」
Ａ「はっはっは、主人公が来たからにはもう安心だ」
ロ「それは頼もしいぜ。人間相手に苦戦はしないが頼もしいぜ」
Ａ「まぁ、俺の力にすればこんな騒動。１分も掛からないぜ」
ロ「んじゃ、あれを倒してくれ」
Ａ「おお、まっかせｒ・・・」
ログナの指差す先には大男が立っていた。
体長は２メートル越え、筋肉ムキムキで斧を担いでいる。
Ａ「タンマ」
ロ「ノット、タンマ」
Ａ「いや、マジでタンマ」
ロ「ユーキャントタンマ」
Ａ「では、一つだけ質問。あれは人間ですか？」

ロ「アイドントノー」
A「こら」
男「うがあああああああああああああ」
待ちきれない大男が斧を振り回して襲いかかって来た。
ログナは大胆に、Aは紙一重で避け続ける。
ロ「こうなったらエイッちがどうにかするしか」
A「なあ、あれって人間？。人間じゃなかったら普通に倒すけど、人間だったらちょっとな・・・」
ロ「いや、俺っちに聞かれてもわかんね。コウガっちに聞いたら？」
A「高雅は只今、雪山で捜索中。何を捜索しているかは忘れたけど」
ロ「ふぅん。よっと」
攻撃を軽々避けつつ、二人は会話を続ける。
A「まぁ、正体不明の物体Xと言うことにしてやる・・・あぁ、何かXの奴思い出して来た」
自分で言っておきながら、嫌いな人の名前を出し、勝手に気分が削(そ)がれる。
そして、そのむかっ腹を大男にぶつけた。
A「おらあああああああああああああ」
男「ごふっ！？」
Aの回し蹴りが綺麗に鳩尾(みぞおち)に当たった。
大男は腹を抑えて膝をついた。
あらかたの敵を倒し、ログナとAは体を伸ばして一休みを始めた。
A「あーあ、弱いなぁ。もっと強い奴でもいないかなぁ」
ロ「そりゃ、コウガっちしかいないだろ」
A「・・・そうだな」
そう言って、窓から外を見つめる。
A「俺も、あいつを追ってここまで強くなったなぁ」
ロ「エイっちって、何で強くなろうとしてんだ？」
A「そりゃ、身近にあんな凄い奴を見て、黙っていられるか？」
ロ「大抵の奴はあんな凄さを見せつけられて競争しないだろ」

A「ちっちっち。俺は昔から努力家なのさ」
ロ「とか言いつつも、エイっちの修行なんて見たことないぞ」
A「そりゃ、こそっとしてたからな」
ロ「照れ屋さんめ」
A「そういうわけじゃないやい！！」
ロ「・・・っと、取りあえず、この騒動を片づけようぜ」
A「無理やり終わらすなあ！！」
ログナは一人でどこかへと向かう。
A「・・・あれ、一緒に行動しないのか？」
ロ「敵は弱いんだし、二手に分かれて鎮めた方が早いだろ？」
A「なーる。んじゃ、その作戦で行くか」
ロ「死ぬなよ」
A「・・・ああ」
中途半端に真面目な雰囲気を出し、最後はきっちりと終わらせようとする。
しかし、二人とも転がっていた敵に足を躓いて転んだのは二人だけの内緒。

雪山を捜索する高雅は殺気で探すのが面倒になり、真の契約を使ってさらに詳しく探していた。
高「この辺りなのだが・・・」
ア「ねえ、コウガ。ホテルで大量殺戮ってどういうこと？」

高「ああ、あくまで推測だが黒淵の奴らは管理がいなければ気が狂うように暴れると思う」
ア「な・・何で!?」
高「だから、詳しくは知らねえよ。言われただけだし。ただ、俺も襲われたと言えば襲われたんだが」
高雅にとってみれば、弱い奴が無謀に突っ込んできただけであるが。
しかし、一般の人から見ればかなり怖い存在になってしまう。
高「まぁ、お前らを見つけた事だし。早く管理の誰かさえ連れて行けば何とかなるだろ」
ア「成程ね。それでシリナちゃんを探してるんだ」
高「まぁ、あいつはまだ見つけてないし、さらに管理の奴だからな。救えば一石二鳥だろ」
ア「成程。それで、シリナちゃんを探している訳ね。でも、シリナちゃん以外の管理の人なんて誰も知らないよね」
高「・・・一人だけ知ってる。ただ、何か企んでるからあえて無視した」
ア「そうだったんだ。じゃあ、シリナちゃんを探そう」
高「取りあえず、少しだけ適当に雪を溶かすか」
高雅は雪崩が起きないように少しだけ雪を溶かした。
すると、雪の中から手が見えてきた。
高「いきなりビンゴか?」
取りあえず、手を掴んでそのまま引っ張り上げた。
引き上げたのは探していた紫理奈だった。
高「いきなり当てるとはラッキーだな」
高雅は紫理奈を負ぶると活性で温めつつ、ホテルに向かって進路を向けた。
高「着く頃には起きてるだろ。ホテルに行くぞ」
ア「うん」
そして、空間を開いて一気にホテルへと向かった。
位置は適当に殺気の集まっている場所と判断し、そこに空間を開い

た所、案の定、到着した。
到着した所はホテルの玄関前だった。
高「さぁ、ご到着だ」
そう言って、高雅は自動ドアをくぐり、ホテル内へと入った。
真っ先に目に入った視界は人がゴロゴロと倒れている場面だった。
高「こりゃ、想像以上に酷いな」
ア「し・・死んでるの？」
高「この中の数人は死んでる。だが、大半の人が気絶しているだけだ」
きっとログナ達が何とかしてくれたのだろうと高雅は思い、取りあえず紫理奈をソファに寝かせた。
ア「・・・起きないね？」
高「そうだな。思ったより重症だったか？」
ア「・・・ッ！？、コウガ、後ろ！！」
高「分かってる」
アリアが焦りながら高雅に注意を呼び掛けるも、高雅自身も気付いていたようだ。
振り向くと、そこには凶器を持った黒淵の生徒達が高雅達を囲っていた。
高「俺に歯向かうとは、その哀れな根性は認めてやるよ」
高雅は指の関節を鳴らしながら自ら近づきだす。
それだけで、十分恐怖を感じたのか、黒淵の生徒達は震えだし、後ずさりを始めた。
高「けっ。結局、ビビりかよ。情けねぇ」
ア「コウガに歯向かうのはA君だけだよ、きっと」
高「まぁ、そうかもな」
紫「う・・ううん・・・」
高「おっ」
ア「あっ」
目を覚ました紫理奈が回りを見渡す。

本人は殺されてから何がどうなったのかを理解するのは不可能だった。
紫「・・・？」
高「おーい、大丈夫か？。今すぐ働けるか？」
紫「？・・あぁ、分かりましたぁ」
なんと、この状況をすぐに理解したのだ。
紫理奈は立ち上がり、皆の前に立つ。
紫「・・・えぇ・・・静まりなさぁい」
おっとりとした声の中に恐ろしい程の威厳があった。
まるで、高雅みたいに殺気を扱えているようだ。
しかし、黒淵の生徒達は全くと言っていいほど静まらない。
紫「あらぁ？」
高「どうした？」
紫「大人しくならないのぉ」
高「おい、管理の仕事はどうした？」
紫「私一人だけじゃないのよぉ。三人でやってるのよぉ」
高「とか言われてもな・・・」
現在、周りには敵視する人物で囲まれている。
しかも、ぞろぞろと敵の数が増えていた。
紫「きっとぉ、真面目なクゥちゃんに何か遭ったのかもぉ」
高「くぅちゃん？。誰だそりゃ？」
ア「話はそこまで！！。来るよ！！」
アリアがそう言った瞬間、黒淵の生徒達が一斉に襲い掛かって来た。
高雅は紫理奈の前に立ち、殺気を使って敵の動きを止めようとする。
しかし、一度感じた恐怖に耐性ができたのか止まることは無かった。
高「こいつら！！」
通用しないと分かり、高雅は紫理奈の手を掴み、最も敵が薄い所に向かって走り出した。
そして、敵を弾き飛ばしながら道を作り、アリアも分かっていたのか高雅のサポートに回った。

実力では遥かに高雅が上で、例え誰かを守りつつも余裕があった。
取りあえず、高雅は大勢の敵を振り切って安全な場所を探し始めた。

天「やっとか・・・」
同じ頃、天使がホテルの玄関前に戻って来てた。
洞窟に取り残されていたのにも関わらず、体は冷え切っていない。
天「あの邪魔が無ければ上手くいったものの。あいつは何を考えている」
自分が間違った獲物を殺したことに全く気付いていない。
さらに、殺し損ねた為、再びホテルに戻って来たのだ。
ケ「待って」
その後ろからケリンがやって来た。
しかし、その声を聞くだけで天使はケリンにビンタした。
天「貴様なんぞ、ただの面汚しだ!!。二度と顔を出すな!!」
ケ「・・・分かった。契約、破棄」
ケリンは契約を破棄し、天使の前から消えた。
天「さぁ、民の為に、一刻も早く殺さねば」
そう言って、天使もホテルの中へと足を踏み入れた。

# 修学旅行編　その8、三人の行動

Ａ　ｓｉｄｅ

Ａは適当に三階を捜索していた。
ここは緑淵の生徒達が泊まっている部屋がある階である。
Ａは普通の人はここに逃げ込んだと思い、取りあえず無事を確認しようとしていた。
思った通り、この辺りは黒淵の生徒が少なく、安全地帯だった。
Ａ「じゃあ、まずは自分の部屋の同伴の奴を探してみるか」
Ａは自分の部屋に向かい、取りあえず自分と同じ部屋の人を探した。
ノックをすると、中から怯えた声が聞こえてきた。
Ａ「おーい、俺だー。Ａだー」
Ｂ「合い言葉を言え！！」
Ａ「・・・は？」
同伴のＢにいきなり合い言葉を聞かれ、戸惑うＡ。
もちろんこんなことは事前に聞いていない。
Ａ「・・・いや、合い言葉なんて知らん」
Ｂ「じゃあ、お前は黒淵の奴だ。帰れ！！」
Ａ「いや、黒淵に俺と同じ声色がいる訳がない」
Ｂ「これは罠だ！！。俺達を陥れる為の罠だ！！」
Ａ「シェバンニが・・・・・・・いや、ネタをやっている場合じゃない。取りあえず、お前らはそこにいろよ」
Ｂ「うるさい！！。Ａの偽物が！！」
Ａ「へいへい・・・ここの所が高雅に似てしまったな」
そう思いつつＡはこの場から離れた。
そして、少し歩いた所にまた黒淵の生徒が立っていた。
Ａを見た途端に一目散に襲いかかって来た。
Ａ「全く、主人公は大変だぜ」

その後、Aは全員を峰打ちで黙らせ、溜息を零した。
そして、また現れた一つの殺気に対して目を向ける。
A「はいはい、今度はどちら様で・・・」
ケ「また会った。今度、倒す」
であったのはケリンだった。
A「ま　た　お　ま　え　か」
ケ「今度、倒す」
ケリンは問答無用でAに襲い掛かる。
前と同じように長剣と短剣を使ってAに迫る。
A「どうして、こうも俺とやりたいんだ?」
ケ「王、認めた。戦いたい」
A「oh・・・とまぁ、シャレはこれぐらいにしてっと」
Aは長剣は刀で、短剣は素手で受け止める。
A「王が誰かは知らないが、主人公に喧嘩売って勝てると思うなよ!!」
Aが足で攻撃しようとしたところ、ケリンは剣を放して距離を取った。
Aはすかさず活性で剣を溶かし、使えないようにする。
A「さあて、お前の武器は無くなったぞ。どうするつもりだ?」
ケ「こうする」
ケリンがAに向かって手をかざす。
Aは意味が分からず、ただジッとケリンを見ていたが突然、衝撃を感じた。
A「うぐっ!?」
腹を見えない強い力で押され、Aは吹き飛んだ。
いきなりの事でも空中で体制を立てなおし、着地する。
A(何だ?。素手を使わずに吹き飛ばした?)
Aは今、何が起きたのか分かっておらず、混乱していた。
そこに、タイトが気付いたのか答えではなくヒントを与えた。
タ「主よ、あれも力の一環である」

A「つまり・・・どういうことだってばよ?」
タ「自分で考えよ」
A「へいへい。まぁ、何か見えない弾を撃つような力だろ」
ケ「本気、出す。絶対、勝つ」
ケリンは十分な意気込みを見せ、今度は何も持たずに接近して来た。
Aもさっきの攻撃を警戒しつつ、接近した。
Aとケリンの戦いが始まった。

ログナside

ログナは下の階を散歩していた。
場所は1階の厨房であった。
ロ「やべぇ、肉うめぇ」
そこで騒ぎに紛れて勝手に食材を食べていた。
ロ「あり、この魚、何か目がやべぇな」
何でもバグバグ食べていたログナがその魚を取ってピタリと止まった。
手に取った魚の目は真っ赤になっており、白目の部分も真っ赤になっていた。
ロ「何でいかにもヤバそうな物が調理場においてあるんだ?」
普通ならこんな異常な魚を調理場に置くなどはしないはず。
それがここにあると言う事で怪しむのは当然である。
ロ「こんなの、人間が食ったらどうなるんだろ。あんな風に狂うのか?」
魚の尾を持てぷらぷらと揺らし、妙な事を考える。
しかし、のんびりしていると扉を開ける音が聞こえ、すぐに目を向ける。

そこには黒淵の生徒ではなく、先生がいた。
ロ「何だ、大人か。なら、平気か」
そう言って緊張を解き、再び肉を食べ始めた。
先生達はログナの方に近づいて来る。
ロ「ん、食いたいか？」
そう言って、ログナは骨付き肉を向ける。
その瞬間、先生達は目が変わったように跳びかかった。
ロ「うおぉ！？」
驚いたログナは肉を遠くに放り投げた。
先生達はすぐに肉に目が行き、一斉にしゃぶりつく。
ロ「うぉ、こえぇ」
肉が一瞬で骨だけになり、先生達はログナに目を向ける。
ロ「え、何、人肉・・いや、天肉を食べる気？」
ログナの想像通り、先生達はログナに飛び掛かって来た。
ロ「やっぱりいいいいいいいいいい」
ログナは急いで厨房を出て逃げる。
普通に勝てるはずだが、目の前で無惨に食われた肉を見て少し怯えていた。
しかし、後ろから先生達が追って来る。
ロ「うおおお、助けてくれえええええええええええ」
いきなりの出来事で自分が人間より強い事を忘れ、必死に逃げていた。
ログナの下克上が勝手に始まっていた。

高雅ｓｉｄｅ

高「さぁて、止められない今、どうするかな～」
てっきり、紫理奈を使えばすぐにおさまると思っていた騒動も治まらず、高雅は途方に暮れていた。
さらに、敵は殺気を使っても動けなくなるだけで気絶まではしなかった。
高「あっちも俺の殺気に慣れてるせいか、そこまで効かなくなったし、どうしたもんだか」
ア「そうだねぇ」
紫「どうしましょぉ？」
適当な部屋に籠って作戦を考える三人。
そんな中、高雅とアリアは意思会話で紫理奈に聞こえないように会話していた。
ア（ねぇ、何でさっき私を使って蹴散らさなかったの？）
高（あのな、普通、人が剣に変わるなんてこの世ではありえないんだよ。だから、あいつがいる限り、お前は人間状態でいろ）
ア（そっか。うん、分かった）
アリアを分からせた所で高雅は再びこれからについて考え始めた。
すると、高雅は紫理奈のある言葉を思い出した。
高「なぁ？。さっき、くぅちゃんとか言ってたよな？」
紫「？、クゥちゃんがどうしたのぉ？」
高「そいつが何かあったから、お前の言うことを聞かなかった訳だよな」
紫「そうよぉ。私含め、管理三人が一人でも掛けると黒淵どころか、世界がどうにかなっちゃうのよぉ」
ア「せ・・世界！？」
あまりの規模の大きさにアリアが目を丸くして驚く。
高雅は特に大きな反応を示さず、別にといった感じである。
高「お前らは一体、どういう学校・・・いや、組織なんだよ」
紫「そうねぇ、あなたには教えてもいいけどぉ・・・」
高「けど、何だよ？」

紫「警察に言わないでねぇ」
高「・・・とんでもないと自白してるもんだろ、それ」
紫「そうかしらぁ？」
逆に自爆してるだろと呆れる高雅。
紫理奈自身は特に意識はしていないみたいだが。
紫「じゃぁ、言っちゃおうかしらねぇ」
ア「結局、言ってくれるんだ」
紫「実はねぇ、私達は薬の開発をしているのよぉ」
高「うわぁ～、何か読めてきた」
決して、殺気を使っている訳ではない。
ただ、純粋にそう思っただけである。
紫「薬と言ってもねぇ、普通の薬じゃないのよぉ」
高「お前らの生徒を見ればそれぐらいは分かる」
紫「そうねぇ。あれは副作用だから。本当は純粋なドーピングよぉ」
高「純粋って、おま・・・」
ア「ドーピングって何？」
一人だけ分かってないのがいるが話は進む。
紫「色々研究しているのだけどぉ、どうしても副作用で狂っちゃうのよぉ。そこで、抗剤を作る天才のクゥちゃんに副作用を抑える薬を作ってもらってたのよぉ」
高「何で抗剤は作れるのに目的の薬はできないんだよ・・・」
紫「さぁ？。何でも、クゥちゃんは『打ち消すのは簡単、難しいのは生み出すこと』って言ってたわよぉ」
ア「そのクゥちゃんって人、凄いね」
紫「でもぉ、クゥちゃんがちゃんと抗剤と投入してないから、今みたいな騒動が起きてしまったのよぉ。でも、真面目なクゥちゃんが抗剤を投入しないなんてぇ・・・」
ア「・・・その子の身に何かあったのかもしれない」
高「それが妥当か考え過ぎかのどっちかだな」
紫「どうしましょぉ」

再び考えだす三人。
しかし、これと言って案がない。
そのクゥちゃんを探すとしても、どこにいるのか全く分からないため、紫理奈を連れて無暗に動くのは危険である。
それを思い、高雅はこの案を言わなかった。
ア「じゃあ、クゥちゃんをさがしｎ「アホ！！」むぐっ！？」
今、高雅が消した案をアリアがさらりと言おうとした。
それを防ぐべく、高雅は手をアリアの口の中に突っ込んだ。
高「俺とお前だけならまだましも、村井がいることを考えろよ」
ア「むぐ・・んぐぐ・・んむぅぅう・・・」
何かを訴えたいのだろうけど、手が口の中にあり喋ることができない。
紫「あらぁ、私の事は気にしなくてもいいのよぉ」
高「目の前で殺されて気にしない訳が無い。色々と狂うから止めてくれ」
紫「そぉ。じゃあ、どうするのぉ」
高「こうなったら、完全に安全な場所を探すしかない。そこで紫理奈を置いて、俺達でそのくぅとやらを探す」
紫「ん～、しょうがないわねぇ」
高「誰の所為だと思ってんだ、テメェ」
紫理奈の態度に次第と怒りを覚える高雅。
アリアの口から乱暴に手を引っこ抜き、近くに置いてあったタオルで手を吹いた。
しかし、そんな怒りも扉を叩き破る音によってかき消された。
高「全く、またお前らか」
つまらないと思い、殺気をぶつけて動きを止め、その内に部屋を飛び出して逃げた。
逃げながら、アリアは高雅に質問をした。
ア「ねぇ、ドーピングって何？」
高「昔のＡが１秒で今のＡになる事だ」

ア「とても分かりやすいね」
そんなやり取りをしつつ、黒淵の生徒をまいて行く。
しかし、紫理奈の足下に突然穴が出来上がった。
紫「きゃぁ？」
高「なっ！？」
高雅は見た瞬間にその穴が空間で作られたいたのが分かった。
ア「きっとあの天使だよ！！。戻って来たんだ！！」
高「あの野郎・・・アリア、今のうちに剣になれ」
高雅はアリアを双剣に変え、空間の後を追った。
その先は玄関前のホールであの天使が紫理奈を殺そうとしていた。
天「何だ、また邪魔するか」
高「まぁ、目の前で人殺しをされて黙ってる訳にもいかないのでな」
天「貴様、何故そこまでしてルシフェルの子を庇う？」
高「俺もルシフェルの子だし、そもそもそいつは人違いだ」
天「残念だが、特徴が一致している。嘘は吐けんぞ」
高「はぁ」
天使は完全に紫理奈をシリアと勘違いし、大人しく引こうとしない。
勘違いに呆れ、高雅は溜息を零した。
高「全く、王の命令は絶対だろ？」
天「貴様、都合のいい時だけ王を名乗るな！！」
天使が激怒し、高雅に剣を向ける。
その瞬間、高雅は一瞬で紫理奈を助け出し、距離を置いた。
天「しまっ！？」
高「油断大敵だな。取りあえず、紫理奈。お前はこの部屋にでも籠ってろ」
紫「・・・あなたぁ、何者ですかぁ？」
高「知らなくていい。黙って入ってろ」
高雅は無理やり紫理奈を近くの部屋に入れ、扉をロックした。
もちろん、周りには空間すら繋げられないように虚無の力を張ってある。

高「さぁて、罪のない人を殺そうとした罪はでかいぞ」
天「貴様、これ程の人を狂気に陥れて、なお罪でないと言えるのか」
高「あー、それはー・・・」
天使が考えているのとは別の方法で狂気に陥れている事に変わりはない。
そう思った高雅はちょびっと罪悪感に襲われていた。
高「・・・まぁ、お前が裁く事じゃないから。だから大人しく帰れ」
天「貴様が裁くと甘くなる。私が裁くべきだ」
高「悪いが天と地の法律は全く異なる。ので、お前は力づくでも帰ってもらう」
高雅が殺気を出しながら戦闘態勢に入る。
それに応じて天使も剣を構える。
高「手加減をしてやるほど、俺は甘くはない」
ア「あれ、何か棒読みな感じが・・・」
高「気にしたら負けだ」
アリアの言葉を流し、高雅の勝負は始まった。

# 修学旅行編　その9、行方（ゆくえ）

Ａｓｉｄｅ

Ａとケリンの攻防は続いていた。
Ａは隙を見つけては斬り、なければどこまでも逃げ続ける。
ケリンは見えない攻撃を仕掛け、追い詰めようとするも不意をつかれて後一歩が届かないでいた。
Ａ「ちくしょぉ、あいつがちょっと反応が遅かったら攻撃が当たるのによ」
タ「主よ、奴の攻撃を見切ってはいるのか？」
Ａ「ん～、良く分からん。どのくらい避ければ当たらないのかとか、まだ把握してない」
タ「ならば、まずはそれを把握すべきである。最小限な動きをすれば捉えられるはずだ」
Ａ「でもよ、見えない攻撃なんてどうやって把握するんだ？」
ケ「無駄。絶対、理解、無理」
Ａがタイトと話している最中でも、ケリンは容赦なく攻撃をくり出す。
見えない攻撃の為、大きな動きで避け続ける。
先程いた場所にあった壁は粉々に崩れていた。
反撃にでるも、遅れて攻撃を読まれてしまう。
Ａ「ちっ、攻撃が見えればいいのによ」
ケ「私、攻撃、完璧。絶対、分からない」
ケリンはＡの反撃を避け終わった後にすぐに攻撃を再開する。
Ａは取りあえず逃げ、ケリンと距離を取った。
Ａ「どうすりゃ、見えるかなぁ・・・」
逃走しつつ、対策を練るＡ。
どうしたら相手の攻撃が見えるのか、はたまた規模が分かるのかを。

A「見えないってこんなに厄介だったのかよ」
タ「だが、永遠に使えるとは限らない。あれだけの破壊力があるのだ。こちらが避け続けばいずれ」
A「そうだなぁ。でもよ、体力がどのくらいあるかも分からない。あいつ正体不明すぎるだろ」
ケ「正体、隠す。勝機、上がる」
A「んげぇ！？」
逃げてもすぐに追いつき、僅かな攻防が始まる。
正直、逆に体力が持たないと思っているAであった。
ケ「遅い」
A「やべっ！？」
少しだけ反応が遅れてしまったAは、衝撃に耐えるように歯を噛み締める。
そして、衝撃に吹き飛ばされ、壁を貫いて外に出された。
そのまま落下し、雪の上に落ちるかと思いきや、露天風呂に落ちた。
A「ぶはぁ！！、おー、いてぇ」
タ「ぼさっとするでない！！。次が来るぞ！！」
見上げればケリンが追って来ていた。
そして、空中で再び攻撃をしようとしていた。
A「・・・よし」
Aは逃げるかと思いきや突然、風呂に潜り始めた。
決して深くは無いのだが、何故か潜ったのだ。
ケ「血迷った。勝ち」
ケリンはAが潜った場所に向けて攻撃を放った。
その攻撃で露天風呂が粉々に吹き飛んだ。
お湯は一気に飛び散り、最早露天ぶろは瓦礫の山となっていた。
ケ「・・・・・・・」
ケリンは無言でAの姿を確認する。
しかし、Aはどこにも見当たらず見失っていた。
瓦礫に潰れて死んだと思いたかったが、高雅が認めた相手だと言う

事を改めて思い出し、姿を確認するまで勝利を実感しなかった。
すると、瓦礫の中から腕が飛び出した。
間違いなく、Ａの腕であった。
Ａ「お～、いてぇ～。水で緩和できると思ったら・・・上手くいかないものだな」
ケ「見つけた」
傷だらけのＡを見つけ、また攻撃の準備に出る。
Ａは横に跳び、何とか二回目の攻撃を避ける。
ケ「まだ」
Ａ「ちっ」
ケリンがすかさず攻撃を繰り返す。
先程の攻撃で傷を負ったＡは動きが鈍くなり、また、もろにダメージを受けてしまった。
Ａ「がはっ！？」
吹き飛ばされ、柵を越えて雪の上に投げ出された。
Ａ「つぅ・・・痛みで体が動かねぇ・・・」
最早Ａの体は限界に近かった。
雪の上に突っ伏したまま起き上がることすらできなかった。
ケ「これ、お終い」
ケリンがトドメの一撃を溜め始める。
先ほどよりも強く、確実にＡを倒す程の威力を誇っている。
だが、Ａは仰向けに倒れてその光景を拝むしかできなかった。
Ａ「あぁ、殺されるなら幼女に殺されたかったな・・・」
最後までロリコンを貫き通し、ケリンが攻撃を放つ所を見届けた。
そして、間もなく今までにない衝撃がＡの体を襲った。
Ａ「ッ・・・」
悲鳴すら上げられず、Ａは倒れた。
その威力はＡを中心に半径１０メートルのクレーターが出来上がっていた。
ケ「・・・勝った。王、戦える」

ケリンは勝利を確証し、すぐにホテルに戻って高雅を探そうとした。
A「・・・にっしっしっしっし」
ケ「ッ！？」
しかし、不気味な笑い声に反応し、すぐに振り返った。
そこにはAが倒れたまま笑っていた。
A「いやー、俺の演技も捨てたもんじゃないねぇ」
ケ「な・・・生きてる。倒す」
ケリンが再び構え、攻撃をくり出す。
すると、Aは傷だらけにも関わらず普通に起き上がり、三歩横に移動した。
そして、ケリンの攻撃をギリギリで避けたのだ。
ケ「ッ！？」
A「見える、見えるぞ！！。お前の攻撃が全て見えるぞ！！」
ケ「嘘！！。見えない、完璧！！」
そう言って、ケリンが再び攻撃を繰り返す。
しかし、全攻撃をAは全て紙一重で避けきった。
A「なぁーっはっはっは。お前の攻撃のデカさや規模も全てお見通しだ」
ケ「どうして！？」
A「どうしてもこうしても、ずっと調べてたからだ。お前の攻撃のデカさと強さを」
Aはケリンの攻撃をずっと見ていたのだ。
自分が避けた場所に活性を施し、少しだけ壊れにくくしていたのだ。
そして、壊されるたびに次回は活性の量を増やし、どのくらいで耐えられるのかを測っていた。
結果、吹き飛ばされた時の後ろにあった柵が壊れなかったのを見て、規模が分かった。
最後は大きさだった。
大きさと言っても、攻撃ごとにまちまちな事はAも理解していた。
さらに、攻撃の跡が瓦礫となって視覚的に分からないのも問題だっ

た。
その為、最も跡が残り易い雪の上で、さらにトドメの最大攻撃をしてくる瞬間を待っていたのだ。
全て、ケリンはAの手のひらで踊っていたのだ。
A「さぁて、こっちも本気で行くとするか」
Aは自分の傷を活性で回復させ、剣を高らかに上げた。
A「真の契約、発動ぅうううううううううう」
バカに叫び、真の契約を発動させた。
真っ赤に染まった日本刀を軽く振るう。
それだけで、周りの雪が殆ど解けていた。
雪崩は起きないように活性は自重気味である。
A「本気で行くぜ。主人公の本気、マジ最強」
Aはケリンに向かって一気に踏み込んだ。
ケ「なめないで!!」
ケリンは近づかせないように攻撃を繰り返す。
しかし、Aは紙一重で避け、最小の動きでケリンへと近づいた。
A「無駄だぜ。お前の最大の攻撃から威力や大きさを比例させてるんだ。手に取るように分かる」
ケ「くっ」
Aがケリンの前までやって来た瞬間、Aは消えた。
ケ「!?」
どこに行ったのか探し回ると後ろで剣の歯を鞘から少しだけだしていた。
A「またつまらぬ物を斬ってしまった」
そう言って、剣を完全に鞘に収めた瞬間、ケリンはその場に倒れた。
A「・・・とか言っても、峰打ちだけどなぁ」
などと笑いつつ、ケリンに歩み寄る。
瞬速の一太刀でケリンを一撃で倒したのだ。
A「・・・俺を倒せるのは幼女しかいない!!」
などど名言を言っているかのようにケリンに剣先を突き付けながら

言った。
結局、最後までバカなセリフを吐き捨てていた。

高雅　ｓｉｄｅ

一方、高雅の方は既に試合が終わっていた。
高「まぁ、普通な奴が俺に勝てる訳がない」
倒し方はいたって簡単、全力全開の殺気をぶつけただけである。
戦闘経験の少ない天使は実力もさほどないため、大き過ぎる殺気に耐えきれなかったのだ。
ア「取りあえず、シリナちゃんを呼ぶ？」
高「そうだな。お～い、終わったから出てこ～い」
高雅がドアに向かって叫ぶ。
しかし、何の反応も示さなかった。
高「・・・寝てるのか？」
ア「こんな状況で寝るなんてコウガじゃあるまいし」
高「取りあえず、何か言え～」
何度か返事を求めるも、全く帰って来ない。
高「・・・ちょっと気が引けるが、勝手に開けるぞ」
高雅は仕方なく、紫理奈がいる部屋に入ろうと扉に手を掛けた。
？「うわあああああああああああああああ」

その瞬間、聞き覚えのある叫び声が聞こえた。
さらに、その声は徐々に大きくなっており、こちらに近づいているのが分かった。
高「この声・・・」
ア「ログナだよね？」
アリアの思った通り、間もなくログナの姿が見えてきた。
そして、その後ろには黒淵の先生達が獲物を追い掛けていた。
高「おいおい、先生にまで手を出していたのかよ」
ロ「うおおおおおお、コウガっちいいいいいい、助けてくれえええええええええ」
ログナが目の前で止まり、肩で息をしていた。
高「お前、そこら辺の人間には勝てるだろ。自分で何とかしろ」
ロ「いやいや、あれ見るとそこら辺の分類に入らないって。マジでやばいって」
高「ん～、確かに殺気が一味違う。まぁ、狙いはお前だから俺には関係ないな」
ロ「ちょ！？、酷くね！？。もうい少しは心配してくれよ」
高「宝石が壊れなければ何度でも蘇るだろ」
ロ「いやいや、そうだけどよ・・・ってえええええええ、追いつかれるうううううううう」
結果、ログナに救いは無く、再び走り出した。
黒淵の先生達は高雅を無視し、まっすぐログナに向かっていた。
高「一度狙った獲物は変えないのか？」
そう思いつつ、ログナを見捨て、再びドアと向き合う。
今度は何も声を掛けずにさっさとドアを開けた。
すると、部屋はもぬけの殻となっていた。
高「あれ、いないぞ」
殺気で探すも、全く見つからない。
完全に消えていたのだ。
ア「ど・・どうして！？」

高「荒らされた様子はない。となると・・・」
ア「？」
高「・・・取りあえず、適当にぶらつくか」
ア「え？・・ちょっと！？。どういう意味！？」
高「確信が持てないからまだ教えられない。まぁ、結果なんて気長に待てばいずれ訪れるモノだ」
ア「いや、そんなこと言っても納得しないからね」
高「ちっ」
ア「舌打ちしないでよ」
取りあえず、高雅は何もない部屋を出て行き、ホテルの詮索を開始した。
目的は取りあえず最初に決めていたクゥちゃんという人物を探すこと。
それと同時に消えた紫理奈の行方を知ること。
他にも、緑淵高校の人達の無事を確認や薬の在りかなどと色々とやることが積もっていた。
高「一つずつ片付けるか、一気に連鎖して片付くのを期待するか」
ア「取りあえず、どれかを片づけたら自然と他のも片付くよ、きっと」
高「・・・そうだな。取りあえず、優先順位を考えないとな」
ア「えっと・・・リュウコやリンちゃんも気になるし、けど、薬があると全て解決しそうだし、クゥちゃんって人やシリナちゃんも気になるし・・・」
高「おい、オール1位は禁止だぞ」
ア「うぅ、考えられないよ」
高「・・・じゃあ、行き当たりばったりで行くか」
ア「あれ、コウガの意見は！？」
高「責任はお前に預けた」
ア「えええええええええええ！？」
いきなり責任を任せられ、高雅は歩みを再開した。

取りあえず、ログナの後ろでも追ってみようかと思いこんでいたのは高雅の密かな優しさであった。

ログナ　ｓｉｄｅ

ロ「おおおおおおおおおおおおおおおおおお」
相も変わらず全力疾走中。
そして後ろも全力疾走で追い掛け中。
ロ「しつけえええええええええ。マジ、しつけえええええええ」
かれこれ１０分以上は逃げ続けていた。
それでも、敵は諦めずにログナを追い続けていた。
ロ「俺さぁ、最近悪いことしないぞ。なのに、どうしてこんな目に会うんだよおおおお」
取りあえず、開いていた扉の中へ逃げ、すかさず鍵を閉めた。
ドガドガと扉にぶつかる音が聞こえるも、鉄製の扉はビクともしなかった。
ロ「ふぅ、間一髪だった・・・んで」
落ち着いた所で辺りを見渡す。
ここはホテルの地下１階。
上階と全く違って薄暗く、不気味な雰囲気が漂っていた。
ロ「う～ん、使わなくなった客室かな。埃も結構あるみたいだし」
そう言って、適当に探索をしてみる。
ロ「んー、暗くて良く見えｎ〈ガタッ〉うおっ！？」
突然の物音に驚くログナ。

そして、恐る恐る音がした方へと近づきだす。
ロ「し・・・真実を暴くんだ、俺っち。幽霊なんぞいない事を！！」
自分の存在が十分不可思議な事は言わないで欲しい。
辿り着いたのは一つのタンスがあった。
ロ「ゴクリ・・・」
ログナは息をのみ、ゆっくりとタンスを開ける。
？「んぐ！？、んむーー！！」
そこでログナはガムテープを口に巻かれ、手足を縛られている少女と出会った。

## 修学旅行編　その１０、ログナ、恋に堕ちる（前書き）

更新速度が遅れては追いつき、遅れては追いつき。

安定してないようで安定しているのが不思議でたまらない。

あ、次は遅れる可能性が上がっております。

まぁ、テスト勉強が本格的に始まり、ましてやレポートもありでやばいやばいｗｗｗ

# 修学旅行編　その10、ログナ、恋に堕ちる

場所が一転し、緑淵町の崎村家では・・・
レ「全く、コウガ殿が留守の間に敵襲とは・・・」
フ「でも、弱かったです」
シリアを狙って高雅の家に潜入した天使共を撃退していた。
敵数はそれほどいたのだが、レオやサミダレが本気になり、さらにフィーラの夢幻、エクスの虚無に勝てる術がなかった。
結局、何しに来たのか分からない程、完封勝利を収めたのであった。
エ「彼らはコウガ君が王となるのが許せなかった者達だったようだ」
サ「その理由がシリア殿と言う訳じゃな。まぁ、分からんこともないがのぉ」
シ「ん～、あたしってぇ、嫌われてるのぉ？」
フ「仕方ないです。誰かが誰かを嫌うのは当然です。でも、誰かに好かれているのもまた当然です」
レ「似合わず哲学的な事を喋ったな」
フ「うるさいです。ボクだって偶にはいいことを喋るです」
エ「誰も、哲学がいい事とは言ってないぞ」
フ「黙るです！！」
フィーラが怒り、ポカポカとレオとエクスを叩く。
夢幻は最強だが、体は幼稚な為叩かれても全く痛くない。
サ「しかし、コウガ殿がいない時に襲ってくるとは、私らもなめられたものだのぉ」
レ「・・・確かに。しかし、その油断のお陰で簡単に勝利を収められたものだ」
フ「別に油断してなくても余裕だったです」
エ「それより、こうなっていること、コウガ君は知っているのだろうか？」
レ「分からないな。何か連絡をとる手段はないのか？」

高雅がどこに行ったのかは皆分かっていない。
その為、何か合った時の連絡先などは全く聞いていない。
第一、何かあるとは事が起きるまで誰も思ってもいなかったのだから。
サ「考えるのじゃ、奴らはコウガ殿が王となるのを反対していた。では、その本人の所にも行くのが妥当ではないかのぉ？」
フ「確かにです。きっと、コウガ様の所にも何人かが向かっているはずです」
レ「だとすると、シリア殿を殺すと宣告して焦らす考えも有りうる」
エ「そうだとして、来ないということは僕らの手に負えると言う事を分かっていたと言うのだろうか」
レ「殺気で実力すら読みとるコウガ殿では可能だな」
シ「合点したよぉ」
皆の推理で大体の話の筋が通った。
しかも、殆どが正解の道に辿り着いていた。
やはり、仲間としてそれぞれの考えを理解し合っているのだろう。
シ「だけどぉ、これから何が起こるのかなぁ？」
フ「どうせまた適当な天使共でも送って来るです。そしたら、また返り討ちにするです」
レ「コウガ殿が帰って来るまで、耐えれない事は無い。大丈夫だろう」
サ「ほっほっほ、私はお茶でも飲んで置くかのぉ」
フ「ボクはプリンを食べてるです」
シ「ふぁ～、あたしは眠ってるぅ」
エ「余裕だな、皆」
そう言いつつも、エクスとレオは読書を始め、特に警戒をしようとは思っていなかった。
例え敵襲が起ころうとも、皆今まで通りに過ごすだけであった。

場所は戻り、ホテル階段。
高「へぇ、こんな所に地下へ通じる階段があったんだ」
高雅はログナを追った先の階段で地下へと下りていた。
この階段だけが地下へ通じており、高雅は興味本意で地下へと向かっていた。
ア「気を付けて、随分と暗いよ」
高「こっちのセリフだ。気を抜くなよ」
地下は明りが殆どなく、ポツポツと蝋燭(ろうそく)が照らしているだけだった。
上に比べ、別世界のように雰囲気が変わっていた。
高「立ち入り禁止の看板もあったし、色々とここが怪しいだろうな」
先が見にくい廊下を渡り、色々な扉があったが取りあえず奥を目指した。
すると、ある扉に群がっている黒淵の先生達が視界に入った。
高「あ、あいつらはログナを追っていた奴ら」
黒「あー・・・・」
高雅の声に反応し、一斉に先生達が振り返った。
ア「何だか矛先を変えたみたい」
高「勘弁してくれ」
高雅が殺気を解放するも、気絶はしない。
仕方なく、高雅は剣を構える代わりに手をかざした。
高「寝てろ」
そして、波動と静寂を合成させた力を放つ。
波動を浴びた先生達はその場に倒れた。

高「さて、この先に行くか」
取りあえず、ログナが向かったと思われる鉄の扉を破壊し中に入る。
破壊した扉は後(あと)から誰かが来ないように再生し、活性で厳重に閉めた。
最早、開かずの間と化していた。
高「お～い、ログナ～、いるか～」
ロ「こ・・・コウガっち・・・」
高「お、いた・・・ッ!?」
高雅はログナの顔を見た瞬間、驚いていた。
ログナの顔には大量の血が付いていた。
高「どうした!?、誰にやられた!?」
ロ「お・・おお、俺っち・・・幸せだぁ」
高「・・・は?」
高雅の温度が一気に冷めた。
冷静に見ると、ログナの血が鼻から出ている事が判明し、さらに幻滅。
そして、ログナを見る目が冷たい目になっていた。
ロ「無念・・・ガクッ」
高「一生寝てろ・・・ったく、こんな時に何やってんだか」
ア「?、ねぇ、誰か見てるよ」
高「ん?」
?「ヒッ!?」
暗い部屋でも僅かに見えた人影に首を向ける。
影は気付かれたと思ってすぐに引っ込んだが、手遅れであった。
高「誰だ、テメェ。今すぐ出て来い」
?「えう・・・」
高雅の脅しで怖気づいたのか、ゆっくりと影がこちらに近づいて来た。
影は小さく、現れたのは高雅よりもいくつか年下だった。
高「んで、誰だ、テメェ」

空「えと・・・嶋野(しまの)　空(くう)です・・・」
高「ん?、お前って、まさか管理の一人か?」
空「た・・・食べても・・・美味しくないよ・・・」
余程怯えているのか、高雅に対しておかしな返答をして来る。
まぁ、近くに双剣を持った人がいれば、怯えない方がおかしいが。
高「誰が食うか」
空「わ・・・私が・・・空(くう)です・・」
高「あーもう、話が進まねえな!!」
空「ひう!!」
高雅が怒鳴り、空は怯えて逃げて行った。
それを見かねたアリアが溜息を零していた。
ア「全く、年下相手に上から目線はダメだよ」
高「知るか。大体、こんな所に子供がいる時点でおかしいんだよ」
ア「そんなこと言ったって、もしかしたら探していたクゥちゃんかもしれないよ」
高「・・・まぁ、だよな・・・でも、子供と話をするのは苦手だ」
ア「仕方ない。私が話をするよ」
アリアは一旦、人間状態になり、空を追った。
怯えさせないようにゆっくりと歩きながら奥の部屋へと向かった。
ア「えっと・・・クゥちゃん。怖がらないで。私達は味方だよ」
試しに暗い部屋で声を掛けるも反応は帰って来なかった。
アリアが空を何とかしている間に、高雅はログナを叩き起こして事情を聞き取ろうとしていた。
高「おい、起きろアホ。鼻血で死ぬなんてアホの極みだぞ」
ロ「お・・俺っちは死なん・・・恋人を作るまでは・・・」
高「じゃあ、作ったらぽっくり死ね。取りあえず、色々と教えろ」
ロ「おお・・・分かったぜ・・」
気が落ち着いた所でログナは自分の血を再生させた。
そして、空について知っている事を教えた。
高「・・・成程。タンスの中に縛られて入っており、それを助けた。

それだけか」
ロ「おう。俺っちがここに逃げ込んで物音が聞こえたらあの子がいたんだ。それを助けただけだ」
高「ふぅん。しかし、もし彼女が探している、くぅちゃんだとしたら抗剤を作らせて騒動を止めることができるな」
ロ「何だ?。あの子に何か鍵があるのか?」
高「まぁ、もしそうだったらそうだな」
ア「ほら、大丈夫だって」
アリアの声が聞こえ、振り返るとアリアを影にして空がやって来ていた。
どうやら、話はそれなりについたようだ。
空「うぅ・・・・」
ア「この怖い人は凄く優しいし、この血まみれな人はあなたに惚れてるだけだから」
高「怖い人だ。優しさの欠片もない」
ロ「おおおおれっちちちちの恋心ををををばばば暴露したあああああ!?」
空「ひ・・・」
高雅の怖い声とログナの挙動不審な声に怯える空。
しかし、先程に比べれば怯えは弱くなっていた。
ア「もぉ、二人とも。怖がらせたらダメだよ」
高「は、知るか。それよりも、お前。黒淵の奴らに抗剤を作れるか?」
空「あ・・・いけない!!・・・作らないと!!」
空は思い出したと思いきや、突然、ポケットから小さな袋をいくつか取り出した。
空「えっと・・お皿・・・えっと・・・」
辺りを探し始め、皿を探す空。
高「ほら」
すると、先に見つけた高雅が空に皿を渡そうとした。

しかし、高雅の顔を見ると怯えてしまい、戸惑っていた。
空「えう・・・・」
高「いいからさっさと作れ」
空「は・・・はい・・」
空は皿を受け取り、袋に入っていた粉を入れ、それぞれ混ぜ合わせた。
その様子を高雅達は後ろで見ていた。
空「これで消滅反応ができて・・・あと・・・副作用を弱める為に・・・それと、人体の影響を少なく・・・」
空は完全に自分の世界に没頭していた。
高「何とか騒動が治まりそうだな」
ア「はぁ、やっと休めるね」
ロ「かわいいなぁ～、スギっちみたいに物静かかと思えば興味がある事には熱心だぁ。くぅ～～～、どストライクだぁ～～」
高「うるさい」
高雅が回し蹴りでログナの後頭部を蹴ろうとする。
しかし、寸前でかわして再び悶え始めていた。
ロ「かぁ～～、絶対に堕とす!!」
高「こいつ、A並みに性質(たち)が悪いな」
ア「あははは、恋に熱心だね」
高「気持ちが分からねぇな」
空「出来た!!!!!」
空が突然、皿を高らかに掲げた。
その中には複数の粉から生まれた錠剤が数十粒ほど出来上がっていた。
空の表情は嬉しさに満ち溢れていた。
高「へぇ、水を使わず、ただ薬を混ぜただけで綺麗な錠剤ができたのか？」
空「はい!!。この薬は空気の触れ具合や混ぜるタイミング、それにお皿の温度や部屋の湿度で・・・あ・・・」

気付いた時には嬉しさのあまり、高雅と普通に喋っていた。
ふと我に戻ると恥ずかしさで俯き、喋るのを止めた。
空「ごめんなさい・・・」
高「別に。取りあえず、その錠剤をどうすればいい？」
空「水無し・・・一錠・・・」
ロ「頭痛にｂ〈ゴンッ！！〉おぶっ！？」
高「さすがに自重しろ。それに間違ってる」
高雅の回し蹴りが遂にヒットした。
空「でも・・・飲ませるのは・・・危ない・・・」
高「安心しろ。その役は俺とこのバカがやる。お前とアリアはここに居ろ」
ロ「お・・おお・・・」
気絶寸前のログナが倒れながらも弱弱しく手を上げ、やる気を見せる。
少しでも空にかっこいい所を見せようとあがいているのだ。
空「・・・分かった・・・でも・・・作ってから・・・１０分・・・以内でないと・・・」
ロ「効き目が無くなるのですね、分かります」
空「うん・・・」
高「じゃあ、早くしないとな。それをよこせ」
空「でも・・・走る振動でも・・・ダメになる・・」
高「それ、相当神経使うな」
空「そ・・・即席だから・・・普通・・・１時間・・・掛けるから・・・」
ロ「ま、何とかなるだろ。あるだけ良いだろ」
高「それもそうだな。んじゃ、アリア、嶋野は任せるぜ」
ア「うん、分かった」
高雅は空から抗剤をもらい、早歩きで部屋を出て行った。
ログナも意識朦朧（いしきもうろう）しながらも高雅の後を追った。
ア「それじゃ、ここで待機しておこうね」

空「はい・・・」

アリアと空は大人しく部屋で待機することにした。

これで騒動が終わる、そうすれば、何もかもが解決の方へ向かう。

そう思っていたアリアだった。

# 修学旅行編　その１１、多忙（前書き）

最近、グロ系を書いてないと思うこの頃・・・

# 修学旅行編　その11、多忙

高雅が出て行き、アリアは空と話していた。
ア「ねぇ、誰がクウちゃんを縛ったか覚えてない？」
空「分からない・・・昨日の夜・・・後ろから・・・薬を飲まされて・・・」
ア「そっか」
空「それで・・・気付いた時には・・・もう・・・」
ア「タンスの中にいたってことね」
空「何が何だか・・・分からなくて・・・暴れてたら・・・あの人が・・・」
ア「きっと、ログナの事だね。じゃあ、目を覚ましてからそれ程時間が経ってないの？」
空「うん・・・」
ア「怖かった？」
アリアが優しく頭を撫でながら問う。
すると、空が体をアリアに預けてきた。
ア「・・・ふふ、よしよし」
アリアは心を許してくれたことに嬉しく思い、さらに頭を撫でる。
空も落ち着いて少し目を擦っていた。
ア「眠っていいよ。私が見てるから」
空は無言で首を振り、否定を意味する。
しかし、その力弱い首の振り方は眠たいと主張していることと同じに思えた。
ア「大丈夫。ゆっくり休んで」
アリアがそう言うも、空は首を横に振る。
しかし、限界に達してきたのか、首をコクッと落とし始めた。
そんな姿をアリアはクスッと笑っていた。
ア「よしよし、良く眠り」

そう言って頭を優しく撫でると、流石に我慢が出来なくなったのか再び眠りについた。
その間に、アリアはたった今、得た情報を高雅に伝えようと意思会話を始めた。
ア（コウガ、クウちゃんの事だけど）
高（ん、何か分かったのか？）
ア（それが、昨日の夜に後ろから薬を飲まされたみたいで、相手の顔も見てない。それで、ログナが来る少し前に自分は目覚めたらしいよ）
高（ふぅん、成程。良い情報だった）
ア（え？）
高雅の言うことをいまいち理解できないアリア。
アリアのリアクションを聞いて高雅は溜息を零した。
高（お前、気付けよ）
そう言って、高雅はアリアとの意思会話を止めた。
ア「・・・何だったんだろう？」
高雅の事が理解できていないアリアであった。

一方、高雅達は順調に抗剤を飲ませていた。
走るギリギリの早歩きで進み、敵の攻撃は体に負担が掛からないように流れるように避ける。
あるいは、丁寧に投げ入れるなどと抗剤を一つも無駄にすることなく使っていた。

高「あらかた終わったな」
一息ついて周りを見渡すと抗剤を飲んだ瞬間に眠った黒淵の生徒や先生達で埋もれていた。
ロ「半分は静まったか？」
高「だろうな。そろそろ抗剤が無くなりそうだし、一旦、補給しに戻るか」
ロ「けどよ、この残りは後5分は保つぞ」
高「誰も二人で取りにいくとは言っていない。お前はこのまま残りの抗剤を飲ませ続けろ。俺が一人で取りに行ってくる。お前だと、俺より早歩きが遅いだろ」
ロ「なーる」
ログナは納得したかのように手を叩く。
高「それじゃ、残りは任せたぞ。なるべく多くの奴らに食わせろよ」
そう言って、高雅は走って地下へと戻って行った。
ログナは見送りせず、速やかに黒淵の人達を探し始めた。
ロ「さぁて、俺っちもいいとこ見せてやるぞーー」
やる気を十分に出し、いざ走り出すログナ。
ロ「・・・・あっ」
やっと自分のバカな行動に気付いたログナであった。
恐る恐る抗剤を確認すると、粉々に砕け散って粉塵と化していた。
ロ「・・・ゴメン、コウガっち。俺っちもそっちに行きます。そして、土下座します」
自分に言い聞かせた後、ログナは高雅の後を追うように地下へと向かった。
？「あれ、ログナじゃねえか」
だが、いざ走ろうとした瞬間、いきなり声を掛けられて振り向くとそこにはAの姿があった。
ロ「おお、Aっちじゃん。何してたんだ？」
A「いやぁ、俺もモテモテで。女の子に戦いを挑まれてた」
ロ「戦い・・・まさか、夜の方の!?」

A「おえええええええええ、止めろ。想像するだけで吐き気がする」
ケリンに対して異常なまでに失礼だが、Aにとって幼女以外の体は嘔吐ものである。
昔はそこまで無かったのだが、ここ最近、かわいい幼女（A視点）を見つけてからロリコン魂が強くなり、普通の女性に対して吐くようになったのである。
ロ「お・・おいおい、どったの？」
A「いや・・・最近さ、俺の周りにかわいい幼女をよく見かけてな。極度にロリコンの道を進んだ訳だ」
ロ「へー」
大そう、関心が無い返事をする。
A「ここまできたら引き返さねえ！！。ロリコン王に俺はなる！！」
ロ「よっ、男前！！」
Aのバカな宣告に適当に上げておくログナ。
そんなどうでもいいことを大声で言っていたため、周りには黒淵の人が集まりだした。
A「へっ、アグ○スの変わり身か。俺は、誰にも止められないぜ。日本だろうが世界だろうが相手になってやる！！」
ロ「じゃあ、コウガっちは」
A「・・・あー、あんまり相手したくないかも。強いし」
ロ「やっぱり」
次の瞬間、ログナとAは踏み込んで敵集に突っ込んだ。
もう見慣れたのか、ログナは黒淵の先生を全く怖がっていなかった。
二人は先程の話のお陰で変に緊張することなく、順調に倒していった。

上で騒動が起きている頃、高雅はアリア達がいる地下室へと到着した。

ア「あ、コウガ」

高「薬が切れたから取りに来た。んで、そこの奴に起きてもらう」

ア「でも・・・」

流石に眠っている空を起こすのは悪いと思い、ためらうアリア。

しかし、高雅は容赦なく肩を揺さぶって起こそうとする。

ア「ちょ、ダメだよ。寝かせてあげないと」

高「いいんだ。こいつには聞きたいこともある。おい、起きろ」

空「ふ・・・んん・・・」

空が目を覚まし、瞬(まばた)きを繰り返す。

目を擦りつつも目の前の人物が敵ではない事を理解する。

空「あれ・・・ん・・・？」

高「目が覚めたか。早速で悪いがあの抗剤を作ってくれ」

空「あ・・・ゴメン・・・もう・・・材料が・・・」

高「そっか・・・じゃあ、質問をしたいがいいか？」

空「は・・はい・・」

高「あの抗剤の効き目はどのくらいだ？」

空「えっと・・・半日・・・ぐらい」

高「今の時間は既に夕刻か・・・なぁ、おかしくねえか」

ア「え？」

空「・・・・・・」

高雅がアリアの方を向いて聞いてみるも、アリアは何の事か分かっていない。

高「お前、頭悪いな。どう考えても矛盾の可能性が高いだろ」

ア「え・・・」

空「・・・・・・・」
さっきから空が俯いており、何も言おうとはしなかった。
そこに、高雅が言葉を送った。
高「どうして俺が抗剤を作ってくれと言って時間も確認せずに作った？」
空「それは・・・その・・・」
高「管理者でもなく、顔見知りでもない俺が抗剤をのことを知っていて、何故躊躇なく抗剤を作った？」
空「えっと・・・その・・・」
高「そりゃ、既に半日経っていることに気付いていたのだろ」
空「・・・・・・・」
空の代わりに高雅が答えを言う。
高雅の言葉に全く否定を示さない空。
アリアも高雅の言葉に目を丸くし、空を心配そうに見ていた。
高「否定しないか。じゃあ、こんな窓もない場所で半日以上眠っていたのを知っていたんだな」
空「・・・・・・・」
高「まぁ、俺が怪しいと思うのはここまでだ。決定的な証拠もないし、ただの俺の考えだけだがな」
？「結構ぅ、いい線いってるわよぉ」
高・ア「！？」
振り向いた先には暗闇の中に人影があった。
高雅は注意深く目を凝らし、同時に殺気を読みとる。
ア「今の声、シリナちゃん！？」
高「違う。声だけじゃ分からないが、あいつは詩智安の方だ」
ア「シチア？」
聞かない言葉に首を傾げるアリア。
しかし、高雅はさらに警戒する。
詩「正解よぉ。良く分かったわねぇ」
そして、影から姿を現す詩智安。

見た目や声色は完璧に紫理奈と瓜二つで違いが全く分からない。
その為、アリアはまだ紫理奈だと思っていた。
高「まぁ、俺は少し特殊でね」
詩「そぉ。じゃぁ、すぐに当てたからいいこと教えてあげるぅ」
高「？」
詩「薬を飲んだのは何も黒淵だけとは限らないわよぉ」
高「それって・・・まさか！！」
詩「それじゃぁ、クゥちゃんを返してもらうわねぇ」
そう言った瞬間、詩智安の影が消え、いつの間にか空も消えていた。
ア「あ・・・あれ！？」
高「何者だ、あいつ」
ア「一体、何だったの？」
高雅達に危害を加える訳もなく、詩智安は突然現れたと思いきや空を連れて風のように去って行った。
高雅は詩智安の事を人間と見ることを疑い、アリアにとっては何が起きたかさっぱりだった。
高「この騒動、普通に考えると管理者が何かしてるな」
ア「そうだね。それに、さっきの意味は何だろう？」
高「・・・薬がどのようにして回っているか、俺達は知らない」
ア「そうだね・・・それで？」
高「お前、バカ過ぎる。少しは考えろよ。どうやって、黒淵以外に薬を回す方法を」
ア「えう・・・んー、ご飯に混ぜるのは？」
高「一番考えられるパターンだな。しかし、俺はこうして元気だぞ」
高雅は皆と一緒にご飯を食べてないだけで、食べた食材は全く同じである。
アリアの考えは一瞬にして打ち砕かれてしまった。
アリアが首を落として落ち込んでいる所に、高雅は鼻で笑う。
高「・・・だが、今日の朝は食べても、俺は昼を食べていない」
ア「え・・・じゃあ」

高「あくまで推測だ。もしかしたら感染するという事もある。しかし、当たっているとやばいな」
薬自体がどのくらいの時間で作用するのかは分からない。
飲んですぐなのか、それとも少し経った後なのか。
さらに、人から人へと感染するのかも分からないのである。
高「まだ狂った緑淵の奴らは見ていない。早めに探して対策を打たねえと」
ア「とにかく、まずは皆を探さないと。もしかしたらA君も暴れる可能性もあるし」
高「そうだな、ここを出るぞ。剣になれ」
高雅は地下室を出てログナがいる所へと向かった。
道中、黒淵の人が襲ってきたが、軽く流して突破した。
高「さて、ここにいるはずだが・・・」
一応、念入りに注意すべく、そろりと覗(のぞ)く。
だが、見渡す限り気を失っている黒淵の人ばかりでログナの姿は見えなかった。
高「おかしいな。襲われて避難したか？」
ア「・・・ッ！？、こ・・コウガ！！」
高「どうした？」
ア「床に・・・血が！！」
高「なっ！？」
高雅は殺気ばかりで探していたため、視界に入るのは殆どスルーしていた。
しかし、アリアは目に見える情報だけで考えていたため、床にある血が不自然なことに気付いた。
高「ログナが血を出すような攻撃をする訳でもないし・・・だとすると」
高雅は嫌な予感がし、床に着いた血に近づく。
まだ新しいのか、固まってなく液体のままだった。
高「・・・新しいな。それに、人間の血ではない」

高雅は人差し指に血を付けて軽く観察した後、判明した。
高雅は既に天使や使い、楽園、セイクリッドなどの人達の血を戦いを通して見ており、一通り理解していた」
また、血で相手がどんな奴か分かるため、それぞれ分別が付くほど理解していた。
ア「じゃあ・・・」
高「ああ、ログナのだ」
アリアの血の気が引き、顔が青ざめる。
高雅は殺気を頼りにログナを探すも、見つかることはなかった。
高「見つからねえな」
ア「ログナ・・・死んでないよね？」
高「バカ言え。再生ができる奴が死ぬのは一撃必殺のみだ。なのに、ここに血があってログナが無ければ生きてる可能性は大だろ」
ア「そ・・そっか。そうだよね。じゃあ、ログナを探そう！！」
高「・・・お前、やることを増やし過ぎだ」
ア「え！？」
高「緑淵の奴らやAを探す、紫理奈を探す、ログナを探す、詩智安の目的を探る。多過ぎだろ」
流石に高雅もこの量は手に負えないと参っている。
ア「じゃあ・・・えっと・・・」
高「誰か、助けがあれば楽だけどな・・・」
とか思ってみればいきなり助けが現れる訳もなく、逆に敵さんがやって来た。
高雅は溜息を零しつつ、目の前の事を解決しようと決めたのであった。
敵を蹴ったり殴ったりで体に傷が残らないように配慮しながら戦っていた。
そんな時だった。
？「コウガアアアアアアアアアアアアアア」
高「なっ！？」

巨大な声と共に何者かが真上から振って来る。
相手は日本刀に武器を持っており、今までとは違う雰囲気を発していた。
それで、相手がだれか気付き、高雅は全快の静寂で相手の斬撃を受け止めた。
高「A！！」
A「ウアアアアアアアアアアアアアア」
その正体はAだった。
Aはただひたすらに高雅に攻撃を加え続けた。
高「このっ、いい加減にしろ！！」
ア「コウガ、A君はきっと・・・！！」
アリアがAの様子から薬の所為だと思い込む。
その間に、Aは高雅の腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。
高「うぐっ・・・っつぅ」
高雅は腹を抑えつつ、着地した。
そして、その目は怒りに満ち溢れていた。
高「ここまでした以上、容赦はしねぇ！！。土下座しても許さねえからな！！」
殺気を全開にし、Aへ攻撃を始めた。

# 修学旅行編　その12、高雅　ＶＳ　Ａ

高雅とＡの交戦は激しさを増していた。
高雅は静寂を、Ａは活性を使い、互いに打ち消し合いながら剣を打ちつけていた。
それも、一瞬撃ちつけては一瞬で離れ、また一瞬で打ち付ける。
その分、音が甲高く鳴り響き、周りに黒淵の人が集まるも、全く割り込まない。
いや、割り込んだその時、殺されると狂ったとしても本能で悟っているのだ。
殆どが傍観していた。
Ａ「ウオオオオオオオオオオオオオオ」
高「うざってぇ！！」
お互い一歩も引かない戦い。
Ａの豪快な攻撃に対し、高雅は確実な攻撃で出る。
だが、互いに対策されており、攻撃は全て剣に通るだけだった。
Ａ「ウアアア！！。ウラアアアアアア」
高「でりゃぁ！！」
そして、同時に本気の一撃を放ち、剣に当たる。
それだけで周りに膨大な風圧が起こり、ギャラリー達を吹き飛ばしていた。
高雅とＡはすぐに離れず、互いに押し合って睨みあっていた。
高「ここまで強いとは思ってもいなかったぜ」
Ａ「ウアアア・・・・・」
高「タダの人間がこんなにまで強くなるなんて、今時にしてはふざけた世の中だな」
高雅は鼻で笑いつつ、さらに力を込める。
その反動で、高雅の後方にあった壁がへこんでいた。
Ａ「ツウウウウウウウウウウウウウ」

高「まだまだ弱いんだよ！！」
耐えられなくなったＡは吹き飛ばされ、後方の壁に叩きつけられた。
高雅はすかさず波動を撃って追撃するも、Ａはすぐに動きだし、追撃は当たらなかった。
Ａの速さはダメージを受けたとは思えない程早く、高雅は不意をつかれた。
Ａ「ウオオオオオオオオオオオオ」
高「なっ・・・くっ！！」
すかさず防御するも、Ａの活性した腕力は強く、簡単に吹き飛ばされてしまった。
高雅は後方の壁に叩きつけられるどころか、そのまま貫通した。
高「っの野郎！！」
高雅は背中の激痛に耐えながらも着地して粉塵に紛れて突進した。
Ａ「ッ！？」
Ａは高雅の動きを読めなかったのか、少し呆気を取られていた。
そして、自分がされたと同じように高雅はＡを吹き飛ばした。
今度は一枚で終わらずに、何枚もの壁を突き破ってようやく停止した。
Ａ「アグウウウ・・・」
高「くたばっていないだろ」
高雅は倒れているＡの目の前に移動していた。
そして、片足を上げ、Ａの頭に落とそうとした。
Ａは紙一重で避けるも、高雅の踏みつけの威力は高く、鈍い音と共に粉塵が舞いあがった。
Ａは粉塵が目に入ってしまい、目を閉じてしまった。
高雅は柄でＡの顔面を殴り、怯んだ所を蹴り飛ばした。
Ａはまた何枚もの壁を突き破り、元いた場所にまで戻されていた。
Ａ「い・・・げほっ！！」
相当なダメージがＡを襲い、血を吐き出してしまった。
Ａ「つ・・・ゲホッ・・・うえっ・・ぶはぁ！！」

喉に詰まりかけた血を思いっきり吐き出す。
その最中、高雅がAの頭に足を乗せていた。
高「まだやるのか、おい？」
A「ず・・ずみ〝ま〟ぜん。許して下さい。無理です。負けました」
高「あっそ」
高雅は最後にAの頭を地面に叩きつけ、殺気を抑えた。
そして、無意味に大きく背伸びをした。
ア「・・・・どういう・・・こと？」
Aのいきなりの変わりように戸惑うアリア。
しかし、高雅は最初から分かっていたかのように話した。
高「こいつは別に狂ってない。殺気でも分かるし、何より最初に俺の名前を呼ぶ時点でおかしい」
ア「えええええええええええええええ」
アリアは心底驚いた。
すると、高雅はやれやれと首を振り、Aの方に首を向けた。
高「お前なぁ、よく考えろよ。それに、こんなことになっているならタイトが黙っていないだろ」
タ「そこまで見破られておったか」
高「んで、テメェは何でこんなことをしたんだ、おい」
A「説明します」
Aは頭を下げたまま高雅に説明し始めた。

高雅が地下室で空と話している頃。

実はAとログナは地下室へと向かっていた。
ダメになった抗剤を持っていても仕方なく、ログナは高雅の所へ行くことにしたのだ。
Aはただの付き添いである。
A「へぇ、そんな薬があったんだ」
ロ「まぁな。んでもって、その抗剤を取りに行っている訳だ」
道中、ログナはAに抗剤の事を教えていた。
ちなみに、自分が壊したと言う事は隠していた。
ロ「お、この扉の先だ」
ログナが扉に手を掛け、開けようとした瞬間・・・
ア「今の声、シリナちゃん!?」
ロ「おや?」
扉を少し開けた瞬間、アリアの声が聞こえ、ログナは停止した。
そして、半開きの扉から覗いて中の様子を窺った。
A「何だ?」
ロ「さぁ、何か言い合っているみたいだが」
中は薄暗く、良く確認できないが声は良く聞こえていた。
詩「そぉ。じゃぁ、すぐに当てたからいいこと教えてあげるぅ」
ロ「ん?」
A「何だ、いいことって?」
詩「薬を飲んだのは何も黒淵だけとは限らないわよぉ」
A「薬・・・あの狂った症状の事か?」
ロ「そうみたいだな。それが、あっちの学校の奴らだけじゃないみたいだな」
A「へー・・・じゃあ、俺も薬を投薬されてる訳か?」
ロ「じゃね?、多分」
A「・・・ふっふっふ、いいことを思いついた」
ロ「どったの?」
A「俺が狂ったことにして高雅と戦う、とういう訳だぁ。ふぅあ～っはっは」

Aがビシッと親指を立てながら誇らしげに言う。
そして、いみが分からない笑い声を上げた。
もちろん、中の人達に気付かれないように。
A「と、言う訳で、俺は狂った振りをする。お前はどっかに隠れてろ」
ロ「なして？」
A「高雅は相手の考えを読めるだろうが。だから、今、合流する訳にはいかねえだろ」
ロ「マジかよ、なーるほど。じゃあ、俺っちは適当にどっか行ってるぜ」
A「おうよ。俺が勝つシーンでもどっかで眺めておくのだな」
そう言って、Aとログナは別行動し、地下室から去って行った。

A「と、言う訳だぁ！！」
最後には何故か強気であったA。
高「ほぉ、実に下らないな」
高雅は眉をピクピク動かしながらも怒りを抑えていた。
さり気なく、アリアが静寂で高雅の怒りを抑えようとしていた。
高「しかし、ログナの血まで使っての演出することか？」
A「・・・・・は？」
Aは心底分からない顔をしていた。
それを妙に見た高雅がもう一度たずねた。
高「床に転がっていたログナの血は何だって聞いてんだよ」
A「え、血？。そんなことは知らんぞ」
高「・・・・・は？」

今度は高雅が心底分からない顔をしていた。
高「いや、普通に床にログナの血が転がっていただろ」
A「おいおい、そんな考えはしてないぜ。ただ、お前は隠れてろって言っただけだぜ」
高「どういう訳だ？」
？「こういう訳よぉ」
高・A「ッ！？」
第三者の声に過剰に反応する二人。
高「なっ！？」
A「いっ！？」
ア「嘘・・・・」
そして、見えた光景に目を丸くする高雅とA。
さらに信じられないと絶句するアリア。
それは、詩智安が血まみれのログナの髪を持って引きずっていたのだ。
詩智安の周りには紫理奈と空の姿もあった。
詩「ん、これぇ？。私達の話を聞いちゃったからお仕置きしただけよぉ」
ロ「が・・げほ・・・」
さらに蹴りを加え、血を吐かせる。
その光景を見かねたAが瞬時に仕掛けた。
高「止めろ！！」
高雅の声に従わず、Aはログナを助けようと立ち向かう。
詩「ふふ」
A「ッ！？、マジ！？」
しかし、詩智安は指一本でAの斬撃を受け止めたのだった。
峰打ちとは言え、活性を施したAの攻撃を普通の人間が受け止めたのだ。
詩「素晴らしい力だわぁ」
詩智安が指を弾くとそれだけでAは天井へ吹き飛ばされた。

A「いっっってぇ！？」
高「おいおい・・・マジかよ」
ア「A君！？」
詩「？、今ぁ、女の声がしたかしらぁ？」
詩智安がいないはずのアリアの声に反応する。
高「さぁな。取りあえず、今すぐログナを返せ。そして、この騒動を終わらせろ」
詩「それはダメよぉ。この騒動で私達の凄さを思い知らせるのよぉ」
高「知らん。てか、間違った凄さは凄くない。誰からも賞賛されない」
詩「そぉ？。力こそ最大の何とかって言うでしょぉ？」
高「防御な。別にむずかしい言葉でもないのに覚えてろ。そして、使いどころが全く違う」
グサグサとツッコミを入れながら一歩一歩詩智安に近づいていた。
詩「いいじゃなぁい。そんなことはどうでもぉ。今はお友達を助ける事が重要でしょぉ？」
高「じゃあ、返せ。今すぐ返せ。死にたくなければ返せ！！」
高雅は剣を突き付けながら殺気を放つ。
しかし、三人とも殺気を浴びても変わりようはなかった。
詩「物騒な物を持っているわねぇ」
高「生憎、こういう物を持ってないと生きられない生活をしててな」
詩「大変ねぇ。取りあえずぅ、あなたも戦うのかしらぁ？」
高「抵抗するなら仕方が無い」
詩「それじゃ、紫理奈とクゥちゃん、任せるわぁ」
紫「はぁい、お姉様ぁ」
空「はい・・・」
紫理奈と空が一歩前に出て、詩智安はログナを置いて去って行った。
詩「二人に勝てたらその人は返すわぁ。そしてぇ、その後私に勝てたら騒動を止めてあげるわぁ」
高「その言葉、本当だろうな」

詩「えぇ」
詩智安はそれだけを言い残し、消えた。
そして、残った二人が高雅に挑む。
紫「ふふふ、私達のドーピング技術は天下一品よぉ。勝てるかしらぁ？」
空「ごめんなさい・・・・これも・・・詩智安さんの・・・ため・・・」
高「悔いはないな。女、人間だからって容赦なしだからな」
A「とぉぉぉう！！。俺もいつまでも天井に張り付いていないぜ！！」
Aが下りて来て、高雅の隣に並ぶ。
こうして、2対2の幕が上がったのだ。

# 修学旅行編　その１３、誰かのために

睨みあう二人と二人。
一番先に出たのは意外にも高雅だった。
それを見てから紫理奈と空も動き出し、Ａは動かなかった。
高「でりゃ！！」
高雅は様子見も兼ねて、普通に斬りかかった。
しかし、詩智安がＡにやっと時と同じように空と紫理奈と空は指一つで流し、瞬時に反撃に出ようとした。
高雅も様子見だったため、後ろに跳んで簡単に避ける。
そして、入れ替わりでＡが空に突っ込んできた。
Ａ「おらあああああああああああああああああ」
空「ん・・・」
空は両手でＡの斬撃を受け止めた。
足が床に少し埋まるも、空のダメージはゼロだった。
さらに、受け止めた腕も溶けていない。
Ａ「ヒュ～、流石ロリだな。うん、強い強い」
などとバカな関心をしている。
空「本気・・・じゃないと・・・死ぬよ・・」
なめてかかったＡを見て少しばかり怒りを見せる空。
Ａ「悪いが本気になれない。俺はロリを斬るつもりはないのでな」
空「じゃあ・・・これは・・・」
空は今まさに受け止めている状況を説明させようとした。
ちなみに、決して峰打ちではない。
Ａ「いや～、ロリを信じるものなら刃(は)でも大丈夫かと」
空「・・・あなた・・・なめてる・・・」
Ａ「うおぉ！？」
空は瞬時に刀を持って後ろを向き、背負い投げをする。
Ａは無様に宙を舞い、地面に叩きつけられる。

空は手を放し、追い打ちで目の前に倒れたAの腹を蹴り飛ばした。
A「ぶはっ！！」
高「何やってんだ、あいつ」
紫「よそ見はダメよぉ」
紫理奈は高雅に拳を連続でくり出す。
それも、秒速0．1秒の神速である。
高雅は避けつつ反撃の隙を狙っていた。
高（とんだドーピングだ。最早人間じゃないな）
などと思いつつも両手に活性を込める。
高「へ、少しは面白くしてやる」
高雅は紫理奈の拳を自分の拳で受け止めたのだ。
紫「へぇ、骨が無くなるわよぉ」
高「どっちがだ？」
次の瞬間、高雅と紫理奈の拳のぶつけ合いが始まった。
目に捉えられない早さで拳で拳を征していた。
どちらも一歩も引かず、戦いは停滞していた。
高（くそ、どんな手だよ。普通はバラバラだぞ）
高雅の活性が籠った拳と紫理奈の薬によりできた拳はほぼ同じだった。
そして、先に限界が見えてきたのは高雅の方だった。
高（ちくしょう、鈍くなってきやがった。痛みの所為か・・・）
流石に、いくら活性しているとはいえ、ダメージをゼロにすることは出来ない。
だが、相手の紫理奈はまだまだ衰えてはいなかった。
紫「ふふっ、甘いわよぉ」
高「ッ！？、やべっ！！」

ボゴッ！！

一瞬遅れた高雅の隙をついて紫理奈の拳が腹を捉えた。

瞬時に防御に専念したものの、高雅は絶大な痛みと苦しみに襲われ、怯んでしまった。
高「うぐっ！！」
紫「私のターンねぇ」
そう言って、紫理奈は神速の拳を高雅の全身に浴びせた。
最後の一撃の回し蹴りで高雅は吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。
ア（コウガ！！、大丈夫！？）
高「い・・・っつ・・・」
何とか動けるがダメージは計り知れないほどだ。
余裕を見せながら紫理奈はゆっくりと高雅に近づいた。
紫「どぉ？、こうさぁん？」
高「けっ、誰がするか」
紫「友達のよしみでぇ、降参するなら管理に入れて上げてもいいわよぉ」
高「いーや。そんな危険なチームに入るか」
紫「一緒に世界を見かえさないのぉ？」
高「世界なんて知るか。俺は今後の安眠の為に戦うだけだ」
ア（相変わらず、規模が小さなぁ・・・）
紫「そぉ、それじゃ仕方ないわねぇ」
紫理奈は急に加速し、高雅もそれを読んでいたのかすぐにその場から離れた。
高雅の元いた場所は紫理奈の拳によって粉々に砕かれていた。
紫「仕込み済みよぉ」
高「こっちもだ」
高雅がそう言った瞬間、紫理奈のいた場所が突然、爆発した。
そして、高雅の逃げた場所には空が迫っていた。
空「ごめんなさい・・・」
空は高雅の腹を殴り、そのまま壁に叩きつけた。
A「待てこらあああああああああ」
傷だらけのAが空に向かって全力疾走していた。

空はAを見るとすぐに逃げ始めた。
Aは追わずに高雅の無事を確認していた。
A「おい、生きてるか？」
高「生憎この様だ。ったく、なんて奴らだ」
高雅は壁に埋まってある体を引き出し、服を叩いて汚れを落とす。
A「んで、このまま押されてゲームオーバーか？」
高「お前はそうだとして、俺は違う」
A「おいおい、これはチームだぜ。主人公が死んだら強制的にゲームオーバーだろ」
高「ゲームとリアルを一緒にするな。取りあえず、このまま負けるつもりはない」
A「だろうな。主人公は最初は負けていても最後は勝つからな！！」
高「けっ、ほんと主人公が好きだな」
A「当たり前よ！！。それが生きていく価値だからな」
高「価値なんて睡眠だけで十分だ・・・・行くぞ」
A「あいよ」
高雅は双剣を構え、Aは空の後を追った。
紫理奈の方を見て、高雅は余裕を見せる。
高「来いよ。俺はまだまだやれるぜ」
紫「ふふふ、面白いわねぇ」
煙の中から紫理奈の姿が現れる。
高雅は挑発気味に人差し指をクイクイッと曲げる。
紫理奈はまた一瞬で高雅に近づいて腹を殴ろうとするも、高雅はそれを受け止める。
紫「爆弾を仕掛けるなんて不思議な事をするわねぇ」
高「俺は特殊だからな」
紫「ほんとぉ、面白いわねぇ」
高「余裕もそこまでだぜ」
高雅はまた爆破の力を溜め始めた。
一度喰らった技を見抜いているのか紫理奈はすぐに高雅から離れた。

しかし、高雅は紫理奈の腕を掴んで逃がさないようにした。
高「吹き飛ぶ覚悟はできたか？」
紫「道ずれするつもりかしらぁ？」
高「いや、どっちが消し飛ぶか持久戦といこうぜ」
高雅は床に剣を刺し、溜めていた爆破の力を発動した。
紫理奈は反射的に高雅の腕を掴み、爆風に耐える準備をした。
そして、高雅と紫理奈の間に巨大な爆発が起きた。
高「くっ・・・ぐぐ・・・」
紫「うぐ・・・・・・」
二人とも、巨大な爆風の中、吹き飛ばされないように必死に耐える。
お互い、高熱の爆風を浴び、体力は消耗していた。
だが、二人の体力よりも先に潰れてしまう物があった。
紫「こんなことしてぇ・・・このホテルはどうなるのぉ！？」
高「安心しろ。壊れることはない」
高雅は建物自体に活性を施してあり、この爆風で壊れる事はなかった。
しかし、高雅も自分の活性を超える力を出さなければ紫理奈に勝つことはできないと分かっていた。
紫「くっ・・・」
高「辛そうだな。俺はまだまだいけるけど」
紫「あなた・・・何か・・・したのかしらぁ？」
高「まぁな。純粋に勝てそうにないので弱らせてもらった」
実は、高雅はあの殴りあう所で常に静寂の力を送り込んでいたのだ。
その為、紫理奈の動きは鈍くなっており、体力も減少していた。
紫「小癪な真似をぉ・・・」
次第に紫理奈の握力が弱まって来ているのを高雅は感じていた。
紫「・・・くすっ、ここまでねぇ・・」
紫理奈はクスリと笑い、手を放そうとした。
しかし、高雅は突然、爆破の力を止めたのであった。
紫「え・・・」

高「もういい。命はとらねえよ」
高雅は手を放し、紫理奈を解放してあげた。
しかし、念のために静寂を解いてはいない。
紫「どういう・・つもりかしらぁ？」
高「どうもこうも、命を取る気はないだけだ。多分、あいつも空を生かしくるだろうな」
そう言って、Aが追いかけた方を見ると、Aが空を負ぶりながら手を振っていた。
どうやら、あちらもケリがついたようである。
A「いやぁ、俺の活躍シーンを見せてやりたいところだったぜ」
高「あっそ。取りあえず、そいつはそこに置いて次行くぞ」
A「あいよ・・・って、主人公に偉そうに命令するな！！」
高「ちょっと前に戦って勝ったのは俺の方だろ。だから、実力部門とやらは俺の勝ちだ」
A「へーん、それでも2対1で俺の勝ちだ！！」
高「あんなの認める訳にはいかねえ。特に、知識の部分は認めねえぞ！！」
A「負け犬の遠吠えか。カッコわｒ〈ボゴッ！！〉オフゥ！？」
高「調子に乗るなよ・・・テメェ」
高雅の怒りが頂点に達し、Aの顔面を殴った。
さすがにやり過ぎたのかと思ったのかAは少し後悔していた。
A「いや・・・そうだな、うん、再試験てと言う事で」
高「そんなことはどうでもいいんだよ。俺はテメェが偉そうにしているのに腹が立ってんだよ！！」
A「いやー、性格（キャラ）上、仕方ないよ」
高「ブチッ」
遂に、高雅の堪忍袋の緒が切れた。
何故か高雅とAの戦いが始まってしまったのである。
ア「何してるの二人とも！！。今はシチアちゃんを止めるのが先でしょ！！」

アリアの喝で喧嘩が一瞬で止まる。
高「・・・しゃーねぇ、これはお預けだ。後で叩きのめしてやる」
A「ふぅ、助かったぁ」
紫「・・・今のぉ、アリアの声かしらぁ」
高「・・・説明は後だ。取りあえず、お前らは後で警察にでも突き出してやる。詩智安を止めた後にな」
紫「そぉ、分かったわぁ。でもぉ、姉様はとても強いわよぉ」
高「同じ薬を飲んだ奴に負けるかよ。行くぞ、A」
A「おいおい、ログナはどうするんだ?」
高「ここに置いてろ。持って行ったって邪魔なだけだ」
A「ラジュゥ!!」
Aはビシッと敬礼し、高雅の後を追った。
その後ろ姿を見ながら、紫理奈は眠っている空の頭を撫でてやった。
紫「彼らなら・・・きっとお姉様を止められるかもぉ」
そう、呟いたのであった。

★おまけ★

Aが高雅と別れ、空の後を追った後の話。
A「待ちやがれえええええええええ」
懸命に空の後を追うA。
空はさっきいた場所からかなり離れた所でやっと止まったのだ。
Aも空の前で止まり、剣を構える。
A「このロリ野郎!!。お兄ちゃんで遊ぶんじゃねぇ!!」

空「・・・きもち・・・悪い」
変に矛盾している言葉を言いつつ、かなり危ない言葉を並べるA。
空もさすがにドン引きしていた。
A「お前、少し大き過ぎる!!。もうちょい、ちっちゃかったら許してやるのによ」
空「うるさい・・・黙って・・・」
Aのロリコンの言葉にさぞかし気味が悪く、一気に接近した。
そして、黙らせようと顔面に殴りかかった。
しかし、Aは片手で受け止める。
A「こんな小さな手で人を殴るなんて、悲し過ぎる」
空「うるさい!!・・・お前に・・・何が分かる!!」
空がいきなり乱れ始め、声が上がっていた。
そして、乱暴に殴り続ける。
Aはそれをただただ受け止めていた。
空「認められない・・・どんなに頑張っても認められない!!。そんな経験・・・お前に分かるの!!」
A「・・・・・・・・・」
空「私は・・・そんな悲しい人を・・・助けたかった・・・・」
次第に空の拳は弱く、遅くなっていった。
最後にAを捉えたかと思ったが、その時は既にパンチではなく、ただ手を置いただけだった。
空「あの人は・・・凄い才能を持っているのに・・・認められないで・・・ずっと一人で・・・」
A「・・・その人の為にこんなことをしているのか?」
空「あの人・・・詩智安様は・・・私の・・・初めての友達・・・だから・・・」
A「友が間違っていたら、正して上げるのも友だろ。お前ら、間違っていると気付いていないのか?」
空「分かってるよ・・・ただ、それで認められるならいい・・・」
A「・・・そうか。なら、どうして俺を倒さない?」

空「！？」
A「俺はその詩智安って奴を邪魔しに行くところだぞ。何で倒さない？」
空「・・・・・・・・・・」
A「止めて欲しいんだろ。自分の代わりに」
空「そんなこと・・・」
A「いいから黙って頷け。それがロリだろ」
Aはさり気なく、勝手に自分の理想のロリと一生にしようとしている。
それでも空は自然と頷こうとしていた。
空「・・・いや・・・私は・・・詩智安さんの・・為に！！」
しかし、自分の迷った気持ちに邪魔され、頷けなかった。
A「強情だな。でも、迷いがあり過ぎるぜ」

ガッ！！

空「ッ！？・・・」
Aは空の後ろ首に一撃を喰らわし、気絶させた。
そして、空を背中に負ぶり、高雅達の所へと向かった。
A「・・・こんな少女に思い込ませるとは、詩智安って奴は許さねえな」
詩智安に対する怒りを燃やし、闘争心を上げる。
そして、負ぶっている時に、さり気なく空の尻の方に手を伸ばしていた。
タ「・・・・・・・・・」
A「・・・・・・・・・ごめん」
タイトの殺気を受けたAは何も言わずに謝った。

# 修学旅行編　その１４、黒幕

詩智安の殺気を頼りに、高雅は上に階を目指していた。
Ａ「なぁ、ホントにこっちにいるのか？」
高「知るか。殺気頼りに適当に走ってるだけだ」
Ａ「へー・・・〈ドガッ〉んでさぁ、〈バギッ〉」
高「あ？」
Ａ「〈ダダダダ〉あいつらって〈バギッ〉さぁ、過去になん〈ドグォ〉か色々あっ〈ボギッ〉たみたいだぜ」
高「お前の殺気から分かるっての」
Ａ「ありゃ。も〈ドゴッ〉う読みと〈ガッ〉ったか？」
高「ああ。あらかた読み取った」
Ａ「そっか。ん〈ガスッ〉でさ・・・」
高「あ？」
Ａ「〈チュドーン〉何で俺しか襲われ〈ドーン〉てないのかな？」
高「さぁ？」
Ａ「〈ギギギギギギ〉いや、お前の仕業だろ。〈ギチチチチ〉てか、効果音ヤベェ」
実は、高雅達の進路には黒淵の人達が待ち構えていた。
しかし、高雅は全く襲われず、何故かＡだけが襲われていた。
ちなみに、Ａは軽傷で済ませ、動けなくさせているだけであった。
高「さぁ？。なぁに、気にすることはない」
Ａ「都合のいいと〈ガス〉とき〈バゴッ〉だけく〈ガガガッ〉うきに〈ガッ〉なる〈バガッ〉なよ。て〈ズドッ〉かなん〈ゴッ〉か〈ダンッ〉数が〈ボスッ〉増え〈バチッ〉てねー〈ガンッ〉か？〈ズドドドッ〉」
高「人気者だな」
高雅は呑気な事を言いつつ、Ａを無視してさっさと先へ進んだ。
Ａは何故か増え続ける敵を張っ倒し、なんとか高雅に付いて行った。

渡り廊下を抜け、非常用階段を上った先に詩智安の殺気を感じた。
高「この先だな・・・」
目の前にある扉の先はホテルの屋上だった。
A「ぜぇ・・・ぜぇ・・・軽く体力が消耗されてもうたわい」
高「知るか。とにかく、覚悟はいいか？」
A「ああ、掛かってきやがれ。屋上でラストバトルと行こうぜ！！」
Aの意思を確認し、高雅は扉を開けた。
外は雪は降っているが視界は良好だった。
だから、入ってすぐに詩智安の姿が確認できた。
詩「来たのねぇ」
高「単刀直入に言う。今すぐに騒動を止めろ」
A「そーだソーダ」
詩「何故かしらぁ？。こんな素晴らしい薬を作ったのよぉ」
A「そーだソーダ」
高「こんな争いしか生まない薬のどこが素晴らしいんだよ。下らない事は喋らずにさっさと止めろ」
A「そーだソーダ」
詩「ならぁ、騒動を止めて欲しいならどうしてクゥに頼まなかったのかしらぁ？。クゥは抗剤を作れるのよぉ」
A「そーだソーダ」
高「お前が命令しないと空は動く気がしない。お前が心を改心しないと空は動かないからな」
A「そーだソーダ」
詩「私が改心？。ふざけないで！！」
A「そーだソーｄ〈グシャ〉デュクシ・・・」
いい加減ウザく感じた高雅はAの顔面を崩壊させた。
Aは壊れた顔面を粘土細工のように形を整えた自力で再生させた。
そして、詩智安がいきなり怒鳴り、のほほんとした口調が変わった。
詩「何故認めようとしないの！！。誰も成し遂げられない究極の増強剤を私は作ったのよ！！」

高「だから、それを使って世の中にどう役に立てるつもりだ？。戦争用の道具か？」
Ａ「具体例は宅急便が車を使わずに薬で頑張りコストダウンｎ「そんな薬が１００円とかで買えると思うなよ」・・・コストアップでした」
高「大体、あんな凶暴な副作用があったら誰も認める訳がねえだろ」
詩「それももうお終い。遂に研究は完成したのよ。それを、今から実証して上げる」
詩智安は距離があるにも関わらず、高雅に向かってデコピンを始めた。
指をピンとはじいた瞬間、高雅は首を少し曲げた。
そして、高雅の後ろにあった出入り口は粉々に砕け散った。
高「やる気まんまんだな」
Ａ「かっけぇ」
詩「残念だけど、尊い犠牲となってもらうわ」
高「なる気はないけどな」
Ａ「右に同じ」
Ａと高雅が剣を構え、戦闘態勢に入った。
その瞬間、詩智安が高速でラリアットをしてきた。
高雅はしゃがんで避け、Ａは横に跳んだ。
詩智安はすぐに踵を返し、また同じように戻って来た。
高「偉そうに突っ走りやがって」
高雅は向かってくる詩智安の腕を掴み、投げ飛ばした。
Ａ「おらぁ！！」
そこにＡが踏み込んで斬りかかった。
Ａは容赦なく日本刀を振り、詩智安を真っ二つにしようとした。
しかし、Ａの斬撃は詩智安の体に傷一つ付けることができなかった。
Ａ「かーーー、しびれるうううううううう」
詩「ふふ、そんなぬるい攻撃で私の体は傷つかないわよ」
Ａ「知ってまーす」

詩「？」
高「がら空きだ」
Aに気を取られている内に高雅がすぐそこまで迫っていた。
そして、高雅は詩智安の首を掴み、静寂を込めた。
斬れない相手は止めるのが高雅の戦法である。
詩「何かしら？」
高「・・・・・・・・」
A「・・・・・おい？」
高「止まった」
A「え・・・・・」
詩「何がかしら？」
高「お前の心臓だ。何で死なない？」
高雅は詩智安の行動を止めようと静寂を掛けているが、全く止まる気配がなかった。
そのまま静寂を与え続けた結果、遂に心臓を止めてしまったにも関わらず、詩智安は余裕な顔をしていた。
詩「戦場では第一に心臓を狙うのよ。心臓は人間の中で最も脆(もろ)くて弱い所だからよ」
高「今、こうして狙ったじゃねーか。どうして死んでない！？」
詩「この薬は心臓が停止しようと破壊されようと血液は止まらないのよ」
高「マジかｙ「時間よ」〈ザシュッ〉ッ！？」
高雅が気付いた時には自分の心臓が貫かれている時だった。
高雅は力を無くし、詩智安を手放して倒れた。
A「あ・・・ああ・・・・ああああああ」
詩「ふふ、友達が死んで狂ったのかしら？」
Aは震えた体を動かし、高雅に近づいた。
近くまでくるとへたり込み、震えた手で高雅を触ろうとした。
しかし、全く反応が見えないので触るのを止めて、その手を地面に打ち付けた。

そして、こう言った。
A「ウソダドンドコドーン」
高「アホか」
詩「えっ！？」
Aのバカ発言した瞬間に、高雅が粉々になった入口の前に立っていた。
これで分かったと思うが一応説明を。
今まで詩智安と対峙していたのは予め作って置いた創造である。
高雅の高性能な創造は本物と瓜二つの為、何も知らない詩智安はある意味恐怖していた。
詩「な・・・何でなの！？」
高「ん、俺がいる意味か？。そりゃ、それが偽物だからだろ」
詩「偽物！？。あなた、双子なの！？」
高「いや、そうじゃなくてだな・・・その・・・」
どう説明したらいいのか、高雅は迷っていた。
すると、突然アリアが人間の状態になって現れたのだ。
高「ちょ！？」
ア「いいから。このまま争いが終わるかもしれないから」
詩「あ・・・あなた、今、剣から人に！？」
目の前の現実に戸惑う詩智安。
ア「あのね、私達はちょっと特殊で・・・」
詩「一体、どういう薬を開発したのかしら、ねえ！？」
ア「え・・ちょ・・・」
遂に壊れたのか、目を輝かせながらアリアを問い詰め始めた。
アリアは落ち着かせようとするも、興奮していて聞いていなかった。
詩「そんな素敵な薬を持っているなんて、誰が創ったの！？。もしかして、あなた自身が！？」
ア「ストップ！！。今から説明するから聞いて！！」
詩「分かった。だから早く！！」
高「ほんとに分かってるのか、こいつ」

高雅は詩智安の興奮状態を見てさっきまでの戦いは何だったんだと思っていた。
と、言うかAの方は芝居をしただけで終わっているのだ。
A「認めん!!。これがラストバトルなんて認めんぞおおおおおおお」
高「うるさい。このまま終われば楽でいいだろ」
A「ヤダヤダー、もっと戦いたいー」
高「キモイ」
高雅はAをアイアンクローで黙らせる。
時々、メキメキと音が鳴っていた。
A「お許しください、高雅博士」
高「ここから落とすぞ」
A「ゴメン、今のは気付かないと思って・・・」
高「取りあえず黙れ」
A「はい・・・」
Aが正座をしてやっと静かになった時、既にアリアの説明は終わっていた。
しかし、詩智安は全く信じていなかった。
詩「使い?。力?」
ア「信じられないと思うけど・・・私は天の使いでコウガは私の契約者なの」
詩「・・・バカにしているのかしら?」
ア「ホントだよ!!。信じてよ」
高「普通、信じる訳ねえだろ」
思いっきり単刀直入に説明したアリアの頭を軽く殴る高雅。
軽くと言っても、痛みが地味に残っている程度である。
ア「いった・・・」
高「全く・・・まぁ、こいつの言ったことに嘘はない」
詩「・・・分かったけど、私はこの騒動を止めるつもりはないわよ」
高「ちぇ、空気が変わったと思ったのによ」

詩「認めてもらうまで、この薬の感染は止まらないわよ。早くしないとこのホテル全員が狂いだすのよ」
高「待った。どうやって感染している!?」
詩「このホテルの空調機を利用しているのよ。気体にさせてホテル内全域に行き渡っているのよ。もちろん、あなたも感染しているでしょうね」
高「ふ～ん。そんな方法で来たか・・・」
詩「後1時間もすればあなたも含め、全員が狂いだすのよ」
高「迷惑な話だ。今すぐにでも抗剤を作らないとな」
詩「無駄よ。だって、命令する気がないからね」
高「嫌でも命令させてやる」
高雅がアリアを剣に変え、再び構える。
詩智安はさっき聞かされた為、驚いた表情はなかったものの、やはり内心は驚いていた。
高「さぁ、行くぜ」
高雅が足に力を入れて踏み込もうとした瞬間・・・
？「動くな!!」
A「お?」
高「ん?」
詩「?」
てっきり警察が来たかと思った高雅とAだったが、やって来たのは黒いスーツとサングラスに身を隠し、銃を構える人だった。
それも一人ではなく、軽く十は越える人数だ。
さらに、後ろには縛られた紫理奈と空の姿もあった。
詩「紫理奈!!、クゥ!!」
？「いやはや、大したものですな」
スーツの人達の中から一人だけ詩智安に近づいた。
そして、サングラスを外して詩智安を睨んだ。
？「元気にしていたか?」
詩「組長・・・何でここにいるのよ」

組「何でって、お前らの行動はずっと監視されていたのだぞ」
詩「それは本当なのかしら？」
組「本当さ、なぁ空」
空「ビクッ・・・」
組長は次に空に近づいて頭を撫で始めた。
組「空が全部喋っていたのさ。毎日毎日欠かさずに」
詩「嘘・・・それじゃ、空は裏切り者だっていうの！！」
組「裏切るも何も最初から仲間じゃないし。俺の娘でこっちに所属している者だけど」
詩「・・いや・・・嘘よ！！。クゥが・・そんな・・・」
組「本当さ。なぁ空？」
空「・・・・・・・・・・・・・」
空は何も答えず、意思の表示もしなかった。
だが、否定しなかった事が詩智安の心を大きく動かしてしまった。
詩「・・・嘘・・嘘嘘嘘嘘！！！！！、嘘よおおおおおおおおお！！！」
高「お・・・おい！！」
詩智安は暴走し、組長に向かって走った。
あまりに我を忘れていたため、高速で動ける事を忘れていた。
組「・・・やれ」
その一言で、詩智安は一斉射撃を喰らった。
詩「え・・・」
薬で頑丈な体にも関わらず、詩智安の体は一気に蜂の巣となった。
紫「おねえええええええさまあああああああああ」
薄れゆく意識の中、紫理奈の声が痛いほど響き、視界には組長が笑っていた。
組「『打ち消すのは簡単、難しいのは生み出すこと』」
ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら組長は喋った。
それは、空が良く口にする言葉だった。
その瞬間、組長の言うことが本当だと分かり、完全に絶望の淵に落

とされたまま詩智安は息を引き取った。
紫「いやあああああああああああああああ」
高「何だよ、こいつら」
A「真打登場ってか？」
組「さて・・・早速で悪いが、君達は死んでもらう」
そう言った瞬間、今度は高雅とAに銃口が向けられてた。
二人は焦る様子など見せず、そのまま組長に話しかけた。
高「おい、どういう事だ？」
組「見ての通り、感染者の撲滅さ」
A「打ち消すのは簡単だって言ってたじゃん。感染ぐらい打ち消せよ」
組「私も暇じゃないんだ。この女が作った薬を私が開発したことにし、世界に名を轟かせるのだ。その為、時間短縮のため死んでもらう訳さ」
高「ひでぇ話だ」
A「なんて酷い事をするんだ！！」
組「尊い犠牲だ。気にすることはない」
高「A・・・」
A「ああ」
組「死ね」
組長は手を下ろした瞬間、高雅とAの姿が消え、周りの奴らを一掃していた。
そして、組長の首に同時に剣を向けた。
高「お前は絶対にぶっ倒す！！」
A「お前は絶対にぶっ殺す！！」
完全に一致した動きを見せた二人であった。

## 修学旅行編　その１４、黒幕（後書き）

ネタ分かってるか心配なので、一応ヒントを

ウソダドンドコドーン

『嘘だそんなことーー！！』を活舌を悪くして言ってください。

お許しください、高雅博士。

良くもこんなキチガイパクリを

# 修学旅行編　その15、三人の思い

高雅とAが組長の首に剣を突きつけ、組長は少し引いて驚くもすぐに笑みを浮かべた。
組「くっくっく、お前らも薬を飲んでいるのか？」
高「全く。俺は薬中じゃない」
A「それよりもロリを使って悪用するお前が許せねぇ」
組「お前らが何者で何の関係があるかは知らないが、結局は死んでもらうからな」
高「はっ、負け惜しみを。この状況でどうやって勝つつもりだ？」
既に組長以外は全員倒れ、空と紫理奈も救出されていた。
空と紫理奈は詩智安の傍にいて涙を流していた。
組「あいつの研究データは全てこちらに回ってある。つまり、既にあいつが作った薬もあるのだ」
高「へぇ、飲む暇はあるのか？」
組「何、勘違いをしている？」
A「ひょ？」
もちろん、組長はふざけて言った訳ではない。
Aはふざけているが。
すると、組長は残像を残して消え、高雅とAの後ろに回り込んだ。
高・A「ッ！？」
組「既に作用しているのさ！！」
まだ飲んでないかと思っていた二人は意表をつかれ、反応が遅れた。
A「うおっ！？」
組「星になれ！！」
組長はAの頭を鷲掴みすると、思いっきり空へ投げ飛ばした。
その間に高雅は体勢を直し、組長と向き合う。
高「ちっ」
組「お前も同じように星にしてやる」

組長はAと同じように頭を掴もうとするも、既に体勢を整えた高雅は紙一重で避け、顎にサマーソルトキックを浴びせる。
組長は空を見上げるだけでダメージはゼロだった。
組「くっくっく、全然痛くない・・・ん？」
頭を戻した時、既に高雅は目の前にいなかった。
高「どこを見ている？」
後ろから高雅の声が聞こえ、振り返った瞬間・・・

ドゴォッ！！！！

高雅の全身全力全開活性のパンチが組長の腹を捉えた。
組長は吹き飛ばされ、雪山のどこかに落ちた。
高雅は相当な力を使ったため、息切れを起こしていた。
高「ぜぇ・・ぜぇ・・まぁまぁだな」
高雅は手をはたきながら空の下に歩み寄った。
空は首を上げ、高雅の顔を見ていた。
高「おい、あいつが言ったことは本当なのか？」
空「・・・・コクン」
空は正直に頷いた。
高「じゃあ、何で詩智安の死に涙を流している？」
空「・・・それは・・・」
紫「・・・・私ぃ、どうしてもクゥちゃんが裏切ったなんて信じられなぁい。あの組長が嘘を言ってるしか・・・」
空「・・・全部・・・本当・・・でも・・」
紫「？」
空「言う通りにしないと・・・皆殺しって・・・だから・・・私・・・」
紫「あ・・・」
空が隠し事をしていたことは二人とも知らなかった。
空は二人を守るために仕方なく言うとおりにしていたのだ。

空「でも・・・結局・・守れなかった・・・グス・・私・・・裏切った挙句・・・詩智安さんを・・・殺した・・・」
詩「・・・クゥ・・・・」
空「ッ！？」
紫「ね・・姉様！？」
高「生きてる・・・だと！？」
見る限り脳天や心臓を貫かれて死んでも当然な状態だ。
詩智安は薬を無効にする弾を撃たれているのにも関わらず息を吹き返したのだ。
高雅も再生の力など使っていない、完全に詩智安の力だけである。
詩「ごめんね・・・そんなことも知らずに・・・私、薬を作ることに必死で・・・」
空「詩智安・・さん・・・」
空は優しく詩智安の手を取り、自分の顔に近づけた。
詩「あんな奴の所から離れて自由に薬を作れると思ったら、利用されてるなんて・・・情けないわね」
空「詩智安さんは・・・凄い人です・・・私の・・尊敬する人・・です」
詩「ありがとう・・・ゴフッ！！」
紫「姉様！！」
詩智安は血を吐き、せき込み始めた。
もう、体力もなくなり限界が訪れているのだ。
詩「ゲホッゴホッ・・・紫理奈、お姉ちゃんの我が儘に付き合わせてゴメンね」
紫「私は自分の意思で姉様に従ったのよぉ」
詩「・・・クゥ・・・守ってくれて・・・ありがとう・・・」
空「・・・・・・・・」
詩「私は・・・二人のお陰で・・・幸せよぉ」
最後に微笑みを見せ、詩智安は完全に息を引き取った。
それを悟った紫理奈と空は息をのんだ。

しかし、乱れることはなく、静かに呟いた。
紫・空「ありがとう」
高「・・・・・・・・」
ア（ねぇ、再生で生き返らせてあげないの？）
高（そんなことしたら今までの時間が無駄になる。いきなり戻ってきたら逆に困る）
ア（そっか・・・やっぱり、死ぬ所を見ると悲しいね）
高（いずれ受け入れる出来事だ。ただ、それが早かっただけだ）
高雅は振り返って組長を吹き飛ばした方を向いた。
それに気付いた紫理奈が咄嗟に高雅を呼びとめた。
紫「待ってぇ。まだあいつが死んで無いのよねぇ？」
高「ああ。ただ飛んだだけじゃ死なないだろうな」
空「私・・・薬を・・・無効化する・・・薬を作る・・・」
高「どうやって？」
空「詩智安さんから・・・薬の成分を・・・抽出して調べる。自分の部屋に・・・材料は・・・あるから」
高「分かった。時間は？」
空「・・・30分・・・」
高「じゃあ、任せる」
高雅は空を見上げ、遠くを見つめた。
すると、ある落下物がこちらに落ちて来るのが見えてきた。
A「・・・・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああ」
紛れもなくAだった。
高雅はAが地面にぶつかる瞬間に蹴り、そのまま組長を吹き飛ばした場所に飛ばした。
A「あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」
高「薬は任せたぜ」
高雅も後に続いて向かった。
空と紫理奈は詩智安を抱え、ホテルの中へと戻って行った。

Ａ「・・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああ」
雪山に向かって突っ込むＡ。
綺麗にも頭から雪の中に突っ込んだ。
高「よっと。我ながら良い蹴りだったな」
高雅は普通に着地をする。
雪の上なので埋まらないように方向の力で少しだけ浮いている状態だ。
Ａ「ぶはぁ！！。おい、地面に頭が当たったぞ！！」
高「そりゃ良かったな」
Ａ「良くねえよ！！」
Ａは顔だけを出し、高雅を睨みつけていた。
高雅はどうでもよさそうに耳を弄って無視していた。
すると、少し離れた所に殺気を一つ感じ取った。
高「・・・来るな」
Ａ「え・・ちょ！？」
高雅はＡを置き去りにしてその場から離れた。
すると、雪を吹き飛ばしながらこっちに向かってくる影が見えた。
こんな人間離れした事が出来るのは二人を除いて今は一人しかいない。
組「わざわざ殺されに来たか！！」
Ａ「ゲゲッ、組長！！」
Ａは咄嗟に跳び上がり、木の上に着地した。
しかし、組長は止まらずにＡがいる木にタックルし、圧し折った。
Ａ「うわわわわわ！！」

Aは別の木に跳び移り、すぐに組長に向かって飛び降りた。
A「と、見せかけおりゃあああああ」
組「甘い」
組長は紙一重で避けた。
しかし、反撃には出ず、その隙にAはそのまま雪に潜って逃げた。
組「逃げたか・・・んん？」
高「あ・・・」
高雅は遠くで力を溜めているのがばれてしまった。
何をしているのかすぐに分かったのか、組長は一瞬で高雅の目の前に移動した。
組「朽ちろ」
高「嫌だ」
高雅は咄嗟に組長の腕を掴み、攻撃を阻止する。
そのまま静寂の力を込めて動けなくしようとするも詩智安と同じように効いていない。
高「やっぱダメか」
組「何がしたい？」
組長は高雅を蹴り飛ばした。
高雅は後ろの木に叩きつけられ、気を失った。
組「終わりだ」
組長は吹き飛んだ高雅の下に一瞬で移動し、トドメの一撃の蹴りを喰らわした。
高雅の腹は木ごと貫通してしまった。
組「さて、残るは一人か」
組長が振り返るとその先に少しだけ盛り上がっている雪が見えた。
A（バレてない、バレてない）
組「・・・・・・死ね」
組長は盛り上がった雪を思い切り踏んだ。
組「？」
しかし、人を踏む感触はなかった。

よく見るといくつも雪が盛り上がっていたのだ。
殺気を操れない組長はAの場所が分かる訳もなかった。
の、はずだった。
組「それで隠れたつもりか？」
組長はいくつもの雪の中から一つだけ既に決めていた。
そして、さっきと同じように踏みつけると風圧で雪が舞い、中から
Aの姿が見えた。
Aは咄嗟に腕で組長の足を受け止めていた。
A「ちょ！？、何で分かった！？」
組「身体能力のみが力だけではない。今の私は敵の位置も把握できるのさ」
徐々に力を上げる組長に対し、Aは苦しい顔をしていた。
A「いぃぃぃ、どんだけ強いんだよぉぉ・・・」
組「どうした？。まだ半分しか出してないぞ」
Aの活性の力が劣っていた。
次第にAの骨が悲鳴を上げ、支えられなくなりつつあった。
組「終わりだ」
A「くっそおおおお、主人公は逆境を跳ね返すううううううう」
Aは主人公補正を信じつつ、必死に耐えていた。
すると、それに答えたかのようにAと組長に影が覆った。
組「？」
高「ちっ、気付いたか」
高雅は気付かれようと、そのまま串刺しにしようと剣を下ろす。
A「ちょ！？」
組長は横に回避し、Aも体を逸らしてギリギリで避けた。
A「おま、俺ごと殺す気か！！」
高「避けたか・・・」
A「それってあいつに言ってるのか！？、それとも俺に言ってるのか！？」
高「両方」

A「言いやがってこいつ！！」
高雅は明後日の方を向きながら無関心に答えた。
組「ほぉ、生きていたか」
高「いや、アレは分身だし」
そう言って指を指す方を見ると今だ死んでいる高雅の姿があった。
しかし、組長が顔を向けた瞬間、創造の分身は雪へと化けた。
組「小癪な真似をしたがる」
高「そんな小癪な真似に引っ掛かったアホを誰だ？。バカに付ける薬はないって事だな」
組「うるさいハエが」
組長は高雅の挑発に乗り、全力で向かって来た。
高雅は剣を構え、相変わらず余裕な笑みで迎える。
A「俺を忘れるなあああああああああ」
Aも立ち上がり、高雅と並んで剣を構えた。

# 修学旅行編　その１６、ラスボス（前書き）

暇な夏休みを使って一気に遅れを取り戻したこの瞬間。

# 修学旅行編　その16、ラスボス

睨み合うなか、三人は静かに動かずにいた。
雪が止み、雲から顔を出した日差しに木の上にある雪が溶けて落ちていた。
その瞬間、高雅と組長が消えた。
A「・・・ウェ？」
Aも遅れて消える。
そして、空中で何度も何度も火花が散った。
何が起こっているのかは目視出来るレベルではない早さだ。
高「ってぇ・・」
A「おおおおおおおおおおおお」
組「ふん」
高雅は冷静に、Aは大体に、組長は確実に攻撃をしていた。
すると、お互いに一旦離れ、停止した。
高「ふぅ、中々攻撃が入らないな」
A「いやー、これがラスボスだよな」
高「感心するなら十発攻撃を当てろ」
A「任せろ！！」
Aは無理とは言わずに高雅の条件に乗った。
すると、勝手にAは組長の所へと向かっていった。
高「・・・・手が掛かる」
高雅もすぐにAの後を追って組長の所へ向かった。
変わって組長は余裕を見せるように立っていた。
A「一発目えええええええええ」
Aが大声を出しながら背後から斬りかかった。
完全にバカ丸出しである。
組長は振り向くまでもなく、雪を拾って後ろに投げた。
その軌道は綺麗にAの顔面へと描いた。

A「うわっぷ！？」
Aは咄嗟に目を閉じて雪を払う。
次に目を開けた時には、目の前に拳が見えていた。
組「ふん」
A「ぶっ！？」
組長のパンチがAの顔面を捉えた。
Aは木をなぎ倒し、どんどん飛ばされていく。
すると、入れ替わりで高雅が組長に接近していた。
組「今度はお前か」
高「今度は俺だ」
高雅は組長の顔面を殴るかと思いきや、寸前で消えて後ろに回った。
しかし、読まれていたのか組長はさらに高雅の後ろに回っていた。
高「いっ！？」
組「甘い」
組長はぶっ飛ばそうと殴ったが、高雅がギリギリでバク転し踏みつぶそうとした。
組長は避けてしまうも雪が粉となって舞いあがり、視界が悪くなった。
組「く、ちょこまかと・・・うぉ！？」
A「一発目ぇ！！」
Aが視界が悪い中にも関わらず、組長に一撃を浴びさせた。
高「上手くいったようだな」
実は、高雅がAを取りに行ってそのまま組長に向かって投げていた。
視界が悪くても殺気さえあれば高雅にとって場所を知るのはお手のものである。
高雅は吹き飛んだ組長を追い、Aもすぐに組長を追った。
組「子供にしては上出来だ」
組長は吹き飛ばされている最中に体勢を立て直した。
そのまま雪の上に着地し、雪を散らしながら止まった。
組「だが、これはどうだ？」

組長は器用にも指の間で小さな雪玉を作りあげた。
一気に作った八つの雪玉を纏めて投げた。
それは頑丈に作られており、弾丸に化していた。
それを何度も何度も放った。
A「ワオ」
高「小細工だな」
高雅とAは雪玉で作られた弾丸の嵐を潜り抜けながら組長に接近していた。
時々、高雅はAの体を盾にして遊んでいた。
A「って、おい！！」
高「ははは、わりぃわりぃ」
完全に悪気が有る態度をとる高雅。
ちなみに、こんな最中でもちゃんと雪玉を避けている。
組「なめるな！！」
高「おっと」
A「ろっと」
ある程度近づいて来た高雅とAに向かってラリアットをする組長。
しかし、高雅とAはしゃがんで避けてやりすごす。
高雅は何故か空中へ飛びあがり、Aはそのまま組長と一騎打ちに出た。
A「勝負だこんにゃろおおおおおおお」
組「いいだろう」
Aは連続で斬り刻み、組長は素手でやり過ごす。
素手は全くの無傷でダメージも通っていなかった。
A「硬(かて)ぇなこのにゃろおおおおおお」
組「これが薬の力さ。弱い人間の為に作られた最大の薬さ」
A「何が薬だ！！。だったら、こっちはロリを思うパワーで勝ってやる！！」
相変わらずのAはバカな発言をする。
しかし、目は本気で決して遊びで言っている訳ではない。

組「では、この薬で小さな子にモテようと思わないか？」
A「ん・・・・・・・」
組「甘いな」
A「ぶっ！？」
簡単な誘惑でAは戸惑いを隠せず、隙を見せてしまった。
その隙で組長はAの顔面を殴り、空中へ吹き飛ばした。
そのまま組長はAを追撃に向かうが高雅が間に入った。
組「今度はお前か」
高「ここまで吹っ飛ばしてもらうつもりだったが、あいつは使えない。俺が直接相手してやる」
高雅は双剣を構え、接近する。
最初と同じように火花を散らし合う。
ぶつかっては離れ、ぶつかっては離れを高速で繰り返す。
組「その程度の力で私を殺せるのか！？」
高「さぁ？。どうにかなるだろ」
高雅は適当に返事をし、攻撃を再開する。
所々斬撃が組長を捉えているが傷は全く付かない。
組「すばしっこいな。では・・・」
高「？」
組「はあああああああああ」
組長は力を溜め、高雅が近づいた瞬間に力を解放した。
高雅は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる瞬間に体勢を立て直した。
高「っと、危ねえ」
高雅は再び接近する。
組長は力の使い方を知らなかったのか、少々疲れが見えていた。
その隙に、高雅は下から勢いに任せて蹴る。
すると、Aも上から同じように蹴りをする。
高「おらぁ！！」
A「おりゃぁ！！」

高雅とAの蹴りがクロスする。
二人の同時攻撃は、組長を軽く怯ませた程度であった。
組「くっ・・・やるな」
組長は口から血を少し流した。
ダメージがほんの少し通った瞬間だ。
高「あれだけの蹴りで血がちょびっとか・・・」
A「こりゃ、勝てるな」
Aが余裕を見せると高雅も少しだけ余裕を見せていた。
組長は血を手で拭い、口の中の残りはそこら辺に吐き捨てた。
高「・・・・・？」
A「ん?、どった?」
突然、高雅はホテルの方を向いた。
それに気付いたAは首を傾げながら尋ねた。
高「どうやら注文の品が出来たようだ。時間稼ぎ頼めるか？」
A「成程、トドメのロケットランチャーフラグだな。任せろ」
高「・・・まぁ、任せた」
高雅はその場から離れ、ホテルへと向かった。
しかし、組長はそれを許さずに高雅の目の前に現れる。
組「何を企んでいるが知らないが逃がしはしない」
高雅は目の前に立ち塞がれようともまっすぐ走る続ける。
組長が高雅に向かって殴ろうとした瞬間、その手は高雅の体をすり抜けた。
組「!?」
A「あー、高雅はもういねぇぞ」
高雅は組長に夢幻を見せていたのだ。
手の内を隠されていた組長は容易に高雅を逃がしてしまった。
組「・・・まぁいい。お前を殺した後にホテルの奴らも全員殺すからな」
A「かかってきな。主人公は一人になった瞬間に本気を出すものだぜ」

Aは挑発しながら剣を構える。
組「はたして、本気を出していなかったのはどっちだったか・・・」
A「？」
組長はポケットに手を入れ、余裕を見せるかと思いきや、ポケットからある物を取り出した。
Aは警戒しつつ相手の行動を注意深く見ていた。

高雅は屋上へひとっ飛びし、そこには既に紫理奈と空の姿があった。
高「出来たか？」
空「これ・・・」
空が差し出したのは液体が入った一本のビンだった。
高雅はそれを受け取るとマジマジとビンを見つめていた。
高「これが本当に効くのか？」
紫「効果はバッチリよぉ。現に姉様の薬の作用は全て打ち消したからぁ」
高「ならいいや。それより、聞きたいことがある」
紫「何かしらぁ？」
高「俺の高校の奴らに薬を飲ませてないだろうな？」
紫「大丈夫よぉ。姉様はそんなことをしなかったわぁ」
空「食事に・・・薬を混ぜたのは・・・黒淵・・だけ・・・」
高「そうか・・・じゃあ、あいつの言ってた意味は何だろうな」
紫・空「？」
高雅の言葉に首を傾げる二人。

高「いや、詩智安がさ、薬を飲んだのは黒淵だけじゃないって言ってたからな・・・てっきり緑淵の奴らにも飲ませたかと思ってな」
紫「・・・もしかしたらぁ、姉様は組長の企みを知っていたのかもぉ」
空「え・・・私・・・気付かれてたの・・・」
高「・・・まぁ、あいつならありえそうだな」
空「じゃあ・・・何で・・・何も言わなかったの・・・」
紫「関係を壊したくなかったのよぉ。きっとぉ」
高「まぁ、スパイがいると気付けば普段通りにいかなかっただろうな」
空「・・・助けられたのは・・・私の方だったんだ・・・」
紫「姉様には敵わなかったわね」
そう思うと、二人は少しだけ笑みを零した。
高雅はその関係が少し羨ましいと思いつつも照れ隠しで後ろを向き、再び組長の所へ向かおうとした。
紫「最後に一言いいかしらぁ？」
高「何だよ？」
高雅は振り向きもせずに立ち止まる。
紫「あなたにもお礼を言いたいのよぉ」
高「俺はお前らの事を妨害していたのだぞ」
空「あなたの・・・お陰で・・・終わりそうだから」
紫「もぅ、私達はどこかに消えるわぁ」
高「そうか。好きにしろ。俺は自分のためにやってるだけだ」
そう言って高雅は飛び出そうとするも、腕を掴まれてしまった。
高「まだ何かあるのかよ」
高雅はやれやれと思いつつも振り返った。
すると、紫理奈と空は高雅の目を見ながら言った。
紫・空「ありがとう」
高「・・・どういたしまして」
空「・・・そうだ・・・アリアさんにも・・・」

紫「そうだったわねぇ」
高「安心しろ。アリアも聞いている。これは本当だ」
空「なら・・よかった・・・」
紫「嘘じゃなさそうねぇ。それじゃぁ、私達はこれで」
高「もういなくなるのか。あいつがくたばる所でも見ればいいのに」
空「もう・・・警察・・・呼んだ・・・あと・・医者も・・・」
紫「そう言うことよぉ。サツが来る前に終わらせてねぇ」
高「へいへい。また勝手なことを」
空「それじゃ・・・さよなら・・」
紫「彼氏にしてあげてもいいわよぉ」
高「ごめんこうむり願いたい・・・あばよ」
高雅は飛び立ち、場を離れた。
そして、二人は高雅を見送った後にホテルを出て行った。

# 修学旅行編　その17、初めて働くポリス（前書き）

5日、間に合わなかったｏｒｚ

# 修学旅行編　その17、初めて働くポリス

薬を持って来た高雅はAを探していた。
薬のある事を知らせないと色々と行動されては面倒だからである。
高「・・・・」
しかし、辺りを見回してもAの姿も組長の姿もなかった。
ア「どこ行ったんだろう？」
高「さぁな」
適当に返事をして殺気を使って探す。
アリアも微弱ながら殺気を感じ取ろうと努力していた。
高「・・・・・・」
ア「・・・いないね」
高「そうだな・・・殺気を感じられない・・・」
Aが倒したとしても、Aの殺気を感じられないのはおかしい。
もしAが負けたとしても組長の殺気を感じられるはず。
二人とも感じられないのは明らかにおかしかった。
高「ただの人間が薬を使ったとしても殺気を扱える訳がない」
ア「遠くに離れたとかは？」
高「既に殺気で範囲１０キロは見た。しかし、あったのはどこかに向かう二人の殺気だった」
ア「それってシリナさん達のこと？」
高「そうだ」
ア「それは私も感じ取ったよ。でも・・・」
相当遠くまで探したが結果はダメ。
どうしても二人の殺気が見つからなかった。
高「本当に遠くに行ったのか？」
ア「う～ん・・・A君が思いっきり吹き飛ばして追いかけたとか？」
高「ないとは言い切れないな」
Aのアホな言動とバカな行動を考えると考えられる。

高「だとすると、もうすこし捜索範囲を広げるか」
高雅が殺気の範囲を広げようとした瞬間、何かの殺気を感知した。
その殺気は高雅に向かって高速で移動していた。
高・ア「来るッ！！」
二人は同時に殺気を感じ取った。
さっきまで数十キロ先にあった殺気が数秒ですぐそこまで来ていた。
そして、高雅は思いっきり剣を振った。

ガキンッ！！

その剣は空を斬らず、組長の腕を捉えていた。
組「よく反応できたものだ」
高「俺は特殊でな」
もう何度もこのセリフを吐き捨てている高雅。
この言葉を高雅は飽きずに使い続けていた。
そんなことよりも、高雅が真っ先に目が入ったのは血に染まった組長の腕だった。
高「その血・・・」
組「そうさ。お前の仲間の血だ。ロサンゼルスにでも埋めてやった」
高「ほぉ。そいつはご苦労な事だな」
高雅は一度弾いて距離を置いた。
しかし、組長はすぐに距離を詰め、高雅に体勢を立て直させなかった。
仕方なく、高雅は組長の攻撃を受け止め続けた。
組「嘘ではない。本当の話だ。お前の友達はもうこの世にいない」
高「空飛んで来たなら本当だろうな。それに、あんな奴、一匹減ろうがニ匹減ろうが関係ない」
組「動揺を隠しているのか？。強がりな」
高雅は何度も吹き飛ばすも組長はコンマ一秒すら間を開けずに攻めて来る。

懲りずにやって来ることに高雅は次第に調子が狂っていた。
組「調子が悪そうだな」
高「うるせぇ・・・」
見透かされることに高雅は少しばかり怒りを覚えていた。
組長はその隙を狙っていたかのように高雅の腹を殴った。
絶対的な隙をつかれた高雅はかなりのダメージを喰らった。
高「つッ!?」
組「弱い。お前もロサンゼルスに埋めてやろうか?」
高「ぐ・・・ふざけるな・・・逆に埋めてやる」
組「負け犬の遠吠えを」
組長はさらに高雅を空へ蹴り飛ばした。
追撃に向かう組長だが高雅は苦痛に耐えながらも体勢を立て直した。
高「俺がいない間に何をした?」
組「ただ本気を出しただけだ」
組長は光速で高雅の周りを移動しながら攻撃していた。
高雅は殺気でそれを全て読み取り、防御していた。
しかし、読み取ったとしても早すぎる攻撃に反撃ができなかった。
組「所詮子供。お前はその程度だったのだ」
組長は高雅が防御している状態にも関わらず、地面に叩き落とした。
高雅は雪に叩きつけられ、辺りは雪の粉塵が舞った。
組「この程度。ガキは大人には勝てないのさ」
組長が醜い言葉で挑発をする。
すると、高雅はむくりと起き上がって不機嫌そうな顔をしていた。
まるで、大好きな睡眠を邪魔されたかのように。
高「・・・あのさ、俺らが本気を出してなかったら、いくら調子に乗るつもりだ?」
組「何?」
高「ガキが大人に勝てない時代は古過ぎる。時代遅れが現代の奴らを知ったかか?」
高雅は皮肉な顔をして言う。

挑発していた組長の方が逆に挑発されていた。
組長は雪の粉塵の中であろうと高雅の目の前に現れて殴り飛ばした。
高雅は木にぶつけられたが表情一つ変えなかった。
高「ガキの挑発に乗せられて分かってないようだな」
組「何だと?」
高「最初はお前の薬を無効にする薬を作ってもらったが・・・」
高雅はポケットから薬を取り出し、ぶらぶらと見せびらかす。
すると、高雅は手が滑ったように薬を落とした。
高「ふぁいと~・・・」
やる気が無い声で謎の小さい掛け声をする。
その瞬間、高雅の真下の雪から腕が現れ、その腕が高雅の落とした薬をキャッチした。
A「いっぱあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああつ」
現れたのはロサンゼルスに埋められているはずのAがやって来た。
Aの存在に組長は完全に度肝を抜かれていた。
A「いやー、地面の中は色々面白かったぞ」
すると、Aはポケットの中から化石や謎の生物を次々と出した。
小さなポケットから大きな恐竜の全体の化石を出した時にはポケットの四次元を思わせた。
A「ああ、疲れたからこれ飲むな」
Aは薬をグビグビと一気に飲み干した。
すると、口を拭い、ビンを組長に投げ捨てた。
A「ぶはー、うめぇ」
高「こういう事だ。俺らが全力でお前を倒す」
組「・・・自ら望みを絶やすとは、バカな奴だ」
A「いやいや、アレを呑んだ俺はこの後スーパーサイ◯人になってお前を倒すぜ」
高「ここからは俺も本気になろうか。お前の自称上級者気取りを見るとムカつくからな」

高雅は殺気をさらに開放させる。
その殺気だけで雪が舞い、組長の体を縛りつける。
Aは刀に活性を込め、刃を揺らがせていた。
A「今度は何もかも溶かすぜ。そのいかれた体もな」
組「面白い。二重に服用した私の力、あの世へ招待してやろう」
二人の殺気を前にしても組長は余裕を見せていた。
ふと、Aはある事を思い出し、高雅に伝えた。
A「そうそうそう。あいつ、もう一個薬を飲みやがったぞ。パワー二倍ってやつだな」
高「あっそ。倒す相手の情報など要らん」
高雅とAは横に並び、力を解放させる。
組長も二人と向き合い、力を溜める。
第二ラウンドが始まる瞬間である。
高「・・・・・・・・・・」
A「・・・・・・・・・・プッ」
Aが屁を振った瞬間、高雅とAが一気に動き出した。
組「何!?」
今までよりずっと速く、捉えられない動きだ。
組長は咄嗟に防御の体勢に入る。
高雅の蹴りとAの斬撃を一緒に受けた組長の顔はかなり苦しそうだった。
高雅の蹴りは波動と破壊を帯びており、組長の骨や内臓の全てに衝撃を与え、破壊し尽くした。
さらに、Aの斬撃で今まで溶けなかった右腕が溶けていた。
この一撃だけで組長の支える骨が無くなり、倒れた。
普通なら試合終了な致命傷だが、組長は普通に生きていた。
組「たかが内臓の破壊ごときで私が死ぬと思ったか?」
高「たかがのレベルじゃねーけどな、お前が死ぬなんて思ってない」
A「まぁ、動けるレベルじゃなさそうだけどな」
いくら死なないと言っても、痛みが無い訳ではない。

本当は狂いそうなくらい痛みに襲われている。
強情にも組長は耐えていたが、骨がバラバラにされて動けなかった。
高「それにしても凄いな。内臓も骨も終わってるのに生きてるなんて。心臓すら破裂しているはずだぞ」
A「まぁ、あれだ。漫画は心臓以外刺されても死なないってやつだ」
高「いや、普通に心臓を壊してるし」
A「それはそれ、これもこれ」
高「通用するか」
Aのふざけた言葉をバッサリ切り捨てる高雅。
こんなにも余裕を見せるのは、二人が本気になった瞬間に一気にカタが付いたのだ。
組「お前ら・・・一体・・・」
高「俺は普通の高校生」
ア（いかにも普通じゃないって言葉だよ、それ・・・）
A「俺は主人公一の主人公、Aだ!!。その名をよく身に刻み込んでおけ!!」
高雅は面倒そうに髪をいじりながら目を逸らし、Aは組長にビシッと指を指す。
すると、タイミング良くサイレンの音が近づいて来ていた。
高「警察のようだな・・・」
A「よく、こっちだって分かったな」
高「雪の粉塵や戦いの跡で分かるだろ」
A「よぉし、俺の偉業を事細かく説明すr「帰るぞ」どって？」
高「子供二人、武器持参、怪我一名、犯人はだぁれ？」
A「よし、帰ろう」
高雅とAは踵を返し、遠回りをしてホテルへ向かおうとした。
もちろん、足跡を残さないように方向の力で少しだけ浮いている。
Aも浮いているが初めてで慌てふためいていた。
A「うわあああああああ、飛行能力はどうやって扱うんだあああああ」

高「俺が扱うからお前は無駄だ」
A「何のこれしきいいいいいいい」
Aは活性で空気を思いっきり殴り、その反動で勝手に進みだした。
高「ご苦労な奴だ」
組「待て・・・」
高「何だ?。埋めるのはまた今度にでもしてやる。今度が訪れるか知らないが」
組「お前・・・・何者・・・」
高「・・・・・人間でも怪物でもない生命体とでも言っておく」
組「まさか・・・宇宙人・・・」
高「ご自由な解釈で」
そう言って、高雅は姿を消した。
速度の力で早急に離れたのだ。
高雅が消えたタイミングと同じ時に警察が組長を発見したのであった。

ホテル内、夜。
騒動はひと段落を迎えていた。
黒淵の人は組長も全員病院に連れて行かれた。
修学旅行は中止かと思いきや、何故か終わらせずに続行の形になった。
と言ったものの、次の日の午前で終わり、午後には帰るのだが。
高「よくも、まぁ続けるものだ。生徒の親が黙っていないぞ」
ア「緑淵は不思議な所で凄いね。運動会の時といい、今といい」

現在、戦いの疲れを癒す目的で高雅はベットで横になっていた。
部屋には高雅以外誰もいないため、アリアは人間状態になって外を眺めていた。
ア「シリナさんとクウちゃんはどうしてるかな？」
高「平和に暮らしてるだろ。最も、警察に追われて無ければな」
ア「警察は気付いてるのかな？」
高「さぁな。あいつらが秘密組織なら少しは大丈夫だが・・・」
ア「あんなやばい薬なら秘密にしてるはずだよ」
高「まぁ、秘密組織だろうがいずれ、やばい組織だった事がばれ、関わった人間全員を捕まえるだろ。それにあいつらも含まれる」
ア「全然大丈夫じゃないじゃん！！」
高「あくまで少しだけだ。僅かな時間の差だけ。あの組長に色々と聞きだすだろうよ」
ア「そっか・・・」
アリアは少しだけ俯いていた。
二人には幸せになって欲しいと心から願っていたのだ。
それが、関わっているだけで破壊されてしまうのが可哀そうに思えていたのだ。
高「同情なんてするなよ。あいつらも分かっている事だ」
ア「でも・・・」
高「分かっているからそれなりに対処するだろ。まぁ、自首するってこともあり得るけどな」
ア「だったらわざわざ逃げたりしないよ。ホテルに残って一緒に捕まるはずだよ」
高「あくまで、今はそう考えても、いずれ罪悪感を感じて自首するってこともあり得るって事だ」
ア「そっか」
高「後日考えが変わるってのはよくある事だ。取りあえず・・ふぁぁ～・・・寝る」
ア「うん、今日はお疲れ様。お休み」

高「明日の・・午後まで寝るぅ・・・・Ｚｚｚ」
ア「クスッ」
どんなことが起きようとも、変わりのない高雅を見てアリアは自然と笑みを浮かべていた。
ア「ふぁ～・・・私も眠ろうかな」
流石にアリアも疲れたのか、ブレスレットになって高雅の腕に巻き付いた。
そして、二人は夢の中へと招待されていった。

## 修学旅行編　その１７、初めて働くポリス（後書き）

遂に警察が動き出しました。
前々から動かそうと考えていましたが、どうも色々と話が面倒なことになると思って今まで出しませんでした。

初めての登場が１７１話目とは・・・ここのポリは終わってるｗｗｗ

# 修学旅行編　その１８、帰宅

次の日の朝。
緑淵の（高雅を除く）生徒達はロビーに集められ、最後のオリエンテーションが行われていた。
校「え～、色々とありましたが誰一人掛けることなく、最後まで存分に――」
校長の変わらない長く苦痛な話が始まる。
流石に貴重な時間を潰したくないためか、生徒全員が猛反発し、話は途中で終わった。
生徒達は順番にスキー・スノーボード用具を取りに行き、そのままゲレンデへと進んで行った。
待っている生徒達はまだかまだかとただ焦っているばかりであった。
たった、一人を除いて。
Ｂ「どうした、Ａ。やる気がなさそうだな」
Ａ「ふぁ～。俺は昨日、働き過ぎて疲れてるんだよ～」
高雅並みにダルそうに欠伸をするＡ。
目を擦(こす)りながらも必死に目を開けている状態だ。
Ｂ「大変だな」
Ａ「お前、他人事のように・・・」
Ｃ「他人だろ」
Ａ「友達と他人は物凄く違うぞ、バカヤロー」
Ｄ「け、レギュラーになった途端に上から目線か」
Ａ「おま・・・話し聞いてたか、バカヤロー」
Ｅ「ほら、さっさと行くぞ、糞野郎」
Ａ「性質(たち)、悪ッ！！」
色々と話している内にＡ達の番になり、素早く準備を済ませてゲレンデへと出た。
最後の日の予定は自由に滑る事である。

生徒全員が自由に行動し、時間一杯まで好きなように滑る事が出来る。
しかし、先生達はそこまで練習が出来てないためちゃんと滑れるか不安があった。
不安に駆られながらも生徒全員を見守るように傍を滑ることにした。
意外なことに、生徒の殆どが滑れるようになっており、先生達の不安は解消された。
B「イエー、ハッハー」
C「YAHHOOOOOOOOOOOOOOO」
D「ぶるあああああああああああああああああ」
E「・・・なぁに、気にする事はないさ」
購買部組もいつものテンションで滑っていた。
しかし、最もテンションが高いはずのAが物静かに滑っていたのは意外だった。
A「スイー」
B「おりゃぁ!!」
A「おぶっ!?」
Bのスキー板がAの後頭部を殴り、Aは顔面から雪へ埋まった。
B「テンション上げやがれえええええええええ」
A「悪い。本当に疲れてんだ・・・休ませてくれ」
Aは雪に顔を埋めながら喋っている為、殆どBの耳に聞こえてなかった。
BはAの足を掴んで引っ張りだすと、そのままリフトへ持って行った。
中腹まで上り、AとBの他に既に到着していたC~Eまでいた。
C「よぉし、もう一度行くぞおおおおおおお」
B「うっしゃあああ・・・ぉん?」
いざ滑ろうとした瞬間、Bが何かに気付いたようだ。
それに伴ってC~E達もBの様子に気付いた。
D「どったの?」

B「・・・なぁ、あっこに可愛い子がいるぜ」
E「あんな厚着で良く分かったな」
B「俺は美女と野獣の区別は出来るのさ」
C「そりゃ、出来なかったら視覚障害だろ」
当たり前な事をCが言う。
すると、Bは彼女のもとへ向かい始めた。
それに続いてC～EもBについて行った。
タ「主よ、体の具合はどうだ？」
誰もいなくなった所でタイトが話しかけてきた。
普段、無口なタイトでもAの事を心配しているのだ。
A「はは、心配するな。ぐっすり眠れば治るさ」
タ「では、何故睡眠を取らぬのだ。体に毒だ」
A「いやいや、皆に余計な心配を掛けさせたくないだろ。まぁ、今頃、高雅は爆睡してるだろうけど・・・」
高雅は元々の性格のお陰で勝手な行動をしても何も思われない。
しかし、Aはそう言う訳にはいかない。
Aが自分勝手な行動をすると流石に不審に思われるため、心配かけさせないようにしているのだ。
A「お前の活性があれば今日ぐらいは乗り切れるって」
タ「拙者の活性も昨日の事で弱くなっておるのだ。あまり期待はできん」
A「大丈夫。俺は・・・どうにか・・・」
既に睡魔に負けそうな状態である。
首がコクコクと勝手に頷き、瞼がいつもより数倍重かった。
高「よくもまぁ、スノボーする気になるな」
すると、後ろから高雅が話しかけてきた。
しかし、高雅の姿は普段着で厚着もしていない。
さらにAの感覚で偽物の高雅と気付くのはさほど時間が掛からなかった。
A「どった？」

高「昨日はよく頑張ったから、これやる」
高雅が差し出したのは茶色いビンに入った飲み物だ。
A「オロナミ○Cですね、分かります」
高「いいから飲め」
A「おぶ!?」
高雅はビンごとAの口に放り込んだ。
Aは口の中で器用に液体だけ飲んでビンを吐きだした。
A「・・・・・・お?」
高「俺が作った活性の元気ドリンクだ。今日限り元気は出る」
A「おいおい、お前も疲れてんだろ?」
高「気付いていると思うが俺は偽物だ。本物は寝てる」
A「いいよなぁ。お前はそんなことができるから」
高「普段の行いがいいからな」
A「ねーだろ」
高「まぁ、俺の役目は終了だ。そんじゃ」
高雅は片手を上げた瞬間、雪に化した。
A「・・・よっしゃあああああああ、滑るぞおおおおおおおおおおお」
いつものテンションに戻ったAは一人、楽しく滑り始めた。
そのバカ騒ぎを見たB達はナンパを止め、Aの所へと向かった。

一方、部屋で爆睡している高雅はふと目が覚めていた。
高「ふぁ〜、良く寝た」
ア「おはよう」
既に起きていたアリアが挨拶をする。

高雅は時計を見ると丁度午後前だった。
スキーが終わる丁度1時間前である。
高「さぁて、顔洗って帰る準備でもするか」
ア「スノボーは楽しまないの？」
高「俺は寝る方が楽しいんだ」
ア「全く・・・」
高「――っと、その前に聞きたいことがある」
ア「ん？」
高「勝手に真の契約をして何をした？」
ア（ば・・バレてる！？）
アリアは正直に高雅に話した。
数時間前の事だった。
偶然、窓の外を見ると辛そうにしているAの姿があった。
その為、協力しようと思ったアリアは勝手に真の契約をして活性で作った元気ドリンクを作り、創造の高雅に渡させたのであった。
それを聞いた高雅は『このお節介（せっかい）が』と言うだけで何もしなかった。
アリアは心の中でホッとし、高雅は顔を洗いに向かった。
高雅が顔を洗っている内にアリアは少しだけ片づけの準備を手伝った。
そんな時、一枚の紙を見つけた。
ア「あれ、何だろう、これ？」
広げて見ると文字が書かれており、それが手紙だと気付くのは容易だった。
ア「・・・・！！、コウガ！！」
アリアはざっと見た後、すぐに高雅を呼んだ。
高雅はうるさそうに思いながらもやって来た。
高「うるせぇな。何だよ？」
ア「これ見て」
アリアが手紙を高雅に渡す。
高雅は一秒だけで見終わって中身を理解した。

高「・・・わざわざ手紙まで書いておくとは」
差出人は紫理奈と空のものだった。
手紙には感謝の気持ちが綴られており、高雅は呆れていた。
高「何度もお礼を言いやがって・・・」
ア「でも、文を見る限り本当に感謝してるみたい」
高「さっきも言っただろ。こういうのはお節介だ」
ア「本当は嬉しいくせに」
高「何かいったか？」
ア「いや、全然」
実際は聞こえていたが、わざわざ反応するのも面倒の為、簡単に終わらせた。
高雅は再び準備に取り掛かった。
高「あれ、タオルが一枚足りないぞ？」
ロ「それなら俺っちが持ってるぞ」
高「ほい、どうも」
ログナが持っていたタオルを受け取り、何事もなかったかのように片づけを始める。
何も反応しない高雅に対し、ログナは少しだけ眉をひくつかせていた。
ロ「・・・・・・それだけ？」
高「それだけ」
ロ「ふざけるなあああああああああああ」
ログナが激怒し、高雅の首を掴み上げる。
ロ「正直に言え、忘れてただろ！！。俺っちのこと、忘れてただろ！！」
高「ああ、忘れてた。昨日は色々あったからな」
ロ「お陰で変な濃い青色の制服を着た正義感たっぷりな人達に連れて行かれそうになったわい！！」
高「知るか。いつまでも寝てるお前が悪い」
ロ「無茶言うなよ！！。あんな状況で気絶したのをすぐに起きろな

んて無理だろ！！」
高「戦場で寝る奴は真っ先に死ぬ。よく覚えておけ」
ロ「なに、教官染みたことを言ってんだよ！！」
ア「まぁまぁ、落ち着いてよ」
ロ「アリアっちも忘れてただろ！！」
ア「え・・・ああ・・・・うん」
ロ「ちくしょおおおおおおおおおおお」
アリアにすら忘れられ、さらに叫び出すログナ。
はっきり言って高雅に取っては耳障りしかなかった。
高「そういや、あえて聞かなかったが蓮田はどうした？」
ロ「・・・・・・・・・・ア゛！！。昨日から会ってない！！！！」
ログナの顔が一気に青ざめ、凍えているかのように体を震わせた。
ロ「やべぇよ・・・滅茶苦茶心配してるよ、きっと・・・俺っち、大罪を犯しちまったよ・・・」
高「今すぐにでも会いに行ってやれ」
ロ「レンタあああああああああああああああああああああああああ」
ログナは叫びつつ真っ先に飛び出して行った。
高雅は思い通りとニヤリと微笑を零した。
片づけの準備に戻ろうとしたが、既にアリアが準備を終わらせていた。
視線に気付いたアリアがニコリと笑った。
高「ご苦労」
ア「どういたしまして。それにしても、ログナって何時でも現れるけど、ちゃんと近くにレンタ君はいるのかな？」
高「さぁ？。もしかしたら、常時、真の契約してるのかもな」
なんて冗談を言いつつ高雅は鞄を持ち、アリアはブレスレットになった。
そして、ロビーに着いた頃には既に他の生徒達が並んで出発式が行われていた。

それに混じって高雅も列に入った。
先生達は高雅の事を睨んでいたが何も言わずに話を進めた。
先「・・・それでは、バスに乗ります。最後にホテルとインストラクターの方々にお礼の挨拶を述べましょう」
生徒達は生徒会長である凛の号令で一斉にお礼を述べた。
そして、順番にバスに乗り込んだ。
来た時と逆でバスに乗った後は新幹線に乗り、一気に緑淵まで向かった。
高雅はバスの間も新幹線の間も死んだように眠り続けていた。
行く時とは違い、何も事件に関わることはなかった。
無事に緑淵駅に着いた緑淵高校の皆は駅で解散し、それぞれの帰路へと向かった。
高雅も同じように帰路についていた。
龍「こ・・高雅君」
不意に声を掛けられ、高雅は立ち止まって振り返る。
そこには心配そうに高雅を見つめる龍子の姿があった。
高「何だよ?」
龍「その・・・今回の騒動・・・高雅君が・・・終わらせたの・・・?」
高「・・・まぁ、5割当たってる」
龍「怪我・・・しなかった・・・?」
高「・・・したが治した。俺だったら簡単な事だ」
龍「そう・・・解決してくれて・・・ありがとう・・・・・でも・・無理・・・しないで」
高「俺がずっと寝ていたら騒動はどうなっていた?」
龍「それは・・・」
龍子は答えることができなかった。
高雅がいなければ警察がいる。
しかし、そんな当たり前な事が通用するような騒動じゃなかったのは龍子も理解していた。

高「俺だって無理はしていない。安心しろ」
高雅はそう言って龍子を残し、去って行く。
龍子は遠くなる高雅の背中を見つめ、夢に声を掛けられてふと我に帰り、夢と共に帰路に立った。

高「ただいま～」
ア「ただいまー」
遂に到着した我が家。
帰った途端に全員が玄関に出迎えた。
レ「無事か!?」
フ「変な奴に遭遇してないです!?」
エ「何か、妙なことが起こらなかったかい?」
サ「犠牲はなかろうのぉ?」
シ「楽しかったぁ?」
高「一斉に喋るな!!」
ア「ははは、皆も元気してた?」
高雅は耳を塞ぎながら叫んでいた。
アリアはブレスレットから人間の姿になり、久しぶりの再開を喜んでいた。
その後、お互いに起こった事を話し合った。
高「やっぱり、そっちも何か来たか」
レ「やはりということは、分かっていたのか?」
高「まあな。大した事はなかっただろ?」
フ「余裕です」
エ「確かに、歯ごたえはなかった」

ア「楽勝って感じだね」
高「感じじゃなくてそうなんだろ」
サ「そうじゃな」
高雅の言葉にアリア以外の全員が頷く。
取りあえず、お互いに襲われたりもしたが無事に顔を合わせることができ、よしとした。
レ「奴らは何回かに分けて襲って来たものの、そのつど撃退をした」
フ「今頃、諦めて天国の隅で丸まってるです」
高「ざまぁｗｗとでも、言っておくか」
ア「ちょっと可哀そうかな・・・」
高「勘違いで人殺しをする連中が？」
ア「・・・ゴメン、やっぱり同情しない」
高「それが正しい」
高雅に言われ、すぐさま訂正するアリア。
天使達涙目である。
高「取りあえず、俺は寝る。休日も全部寝る」
フ「それは寝過ぎです」
ア「そうだよ」
高「うるさい」
高雅は問答無用で自分の部屋へ向かう。
アリアはやれやれと思いつつも、大人しく行かせて上げた。
ア「それじゃ、寝るにはまだ速いし、何しよっか？」
フ「スマXです！！」
エ「フィーラ君は最近、それにハマっていて・・・」
レ「我々じゃ手に負えないのだ」
フ「どんどん掛かって来いです！！。リンチされても負けないです！！」
ア「強気だね、フィーラちゃん。それじゃ、やってみようかな」
シ「あたしもするぅ！！」
アリア達はゲームで時間を潰すことにした。

こうして、高雅達の修学旅行は無事に終わり、また皆と笑いあう日々に戻ったのだった。

修学旅行編　終

★おまけ★

これ読んでいるころ、私達は既にどこかに消えているはずです。
・・・文を書くと、少し丁寧になるわね。
ゴホン、私達は組織から落とされ、三人で仲良く研究していました。
それでも、私は気付いたのです。
これは間違った研究をしているのではないかと。
でも、姉様は薬を作っている時が一番幸せそうだったから、私は止められなかった。
空も一緒だったみたいね。
姉様の研究が上の者に利用されているなんて事を言えなかったからね。
でも、あなたのお陰で全てが水に流された。
これはいい意味で言ってるのよ。
姉様の犠牲は大きいかったものの、最後まで姉様は尊敬する立派な人だった。
私もそれに負けないようにどこかでひっそりと頑張るつもりよ。
もちろん、空と一緒にね。
だから、私達は再スタートをできたわ。
本当に感謝しているわ。

ありがとう。ありがとう。

紫理奈&空より

最後のありがとうは筆記の形が微妙に違い、二人が別々に書かれたものと思われる。

# 修学旅行編　その１８、帰宅（後書き）

正直言います。
自分、途中でどう終わらせるか完全に迷いました。
そして、この結果。
情けなすぎる・・・

後、もう少ししたらこの小説は終わると思います。
実際、夏ぐらい終わるかと思いきや、意外と伸びていつになるのか分かりませんが1年はないはず。

作者は気まぐれ過ぎて自分でも分かりません。
取りあえず、投げ出すことは絶対にしません。
ので、温かい目で見守るなり、ザックリ切り捨てるなどしてください

# 学校探検　前編

あれから何日か経ち、今日は休日。
高「Ｚｚｚ・・・」
あいもかわらず、高雅はいつものように寝て過ごしていた。
アリア達は適当にゲームするなり読書するなりして過ごしていた。
一ミリも狂いが無い、崎村家の日常だった。

ピンポーン

そんな時、インターホンが鳴った。
レ「・・・誰が出るのだ？」
ア「家主は寝てるし・・・」
フ「はい、誰です？」
ア・レ「って、フィーラちゃん（殿）！？」
アリアとレオが考えてるうちにフィーラが勝手に出た。
フィーラは数回頷くと受話器を直した。
フ「セイクリッドの者が来てるです。今から入って来るです」
ア「そこまで勝手にしていいのかな・・・」
フィーラは高雅の許可を取らずに勝手に人を家に上げていた。
色々と考えている内にその者がドアを開けてリビングにやって来た。
紗「どうも。元気してるかしら？」
勇「・・・高雅がいないな」
文「寝てるんだろうよ」
堂々と自分の家のように入って来る三人。
とはいえ、元は自分の家だったのだが。
紗「変な天使が動いていたようだけど、大丈夫だったかしら？」
ア「うん。色々あったけど、無事に解決したよ」
フ「余裕です」

紗「そう。良かったわ」
まずは無事を確認し、安堵する紗奈恵達。
高「ったく、何でいるのだ？」
すると、寝起きの高雅がリビングにやって来た。
半分しか開いてない瞼を擦りながらダルそうにソファに座った。
紗「あなた達にお願いがあるのよ」
高「面倒な事だけは止めてくれよ」
勇「内容は簡単。最後の楽園の賜物を探してくれ」
改めて説明すると、楽園の賜物とは楽園の者が作ったと言われ、この世とあの世のどこかに3つだけある強力な道具のこと。
高雅はその一つである『選別の飾り』を持ってある。
セバスチャンが持っていた『ホープミラー』は宮殿の修理の時に文夫達が回収して厳重に保管している。
つまり、あと一つだけ見つかっていないのだ。
高「相当、面倒な内容じゃねえか」
紗「でも、目星は付いているのよ。運動会の時の事を覚えているかしら？」
高「運動会がどうした？」
紗「妙な事が起きていたわよね・・・」
高「妙過ぎるけどな」
紗奈恵が何でもリレーの事を言っているのはすぐに理解できた。
何の力もない生徒達があらゆる事を行っていた。
ＡＴフィールドを発生させたり、ＵＢＷをも展開させた。
どう考えてもおかしい。
紗「それで、最後の賜物は『創生の信念』。あらゆるものを生み出す物よ」
高「・・・ドンピシャだな」
もし、その『創生の信念』が学校のどこかにあるとしたら、運動会の時に生徒達がふざけた事が出来たのが納得できる。
紗「学校に侵入するのは簡単でしょ？」

高「それはお前らも同じだろ」
勇「まぁ、学生じゃない俺達がばれたら色々と面倒だからな」
高「結局、押し付けじゃねえかよ」
つい本音がでた勇人の言葉を高雅は聞き流さなかった。
文「まぁ、楽園の者を従えていて学校の者ならお前が適任だろ？」
高「休日ぐらい、学校から離れさせてくれ」
文「じゃあ、もし世界を壊す兵器を創られたら、どうするんだ？」
高「だから、お前らがやれよ。フィーラ借してやるから。誰にもバレないで潜入ぐらい出来るだろ」
勇「学校に詳しいのはお前だけだ。諦めて働け」
紗「誰にも邪魔されないように夜に行ったらいいじゃないかしら？」
高「話を進めるな！！」
高雅の休日は今まさに壊されようとしていた。
高雅は必死に自分の休日を守ろうと抵抗していた。

結果から言うと負け。
そして、高雅は真夜中の学校の門にやって来ていた。
高「・・・・・・・・・・・・」
ア「取りあえず、探してみて、なかったらどうしよう？」
高「そん時は天国は無くなると思え」
ア「天国規模！？」
高「俺の休日は天国ごときで納まるか・・・」
フ「楽園で良かったです」
内心ホッとするフィーラ。

ちなみに、やって来たのは高雅とアリア、そしてフィーラの三人だけである。
高「ところで、信念と言う限り、物ではないのだろ？。どうやって探すよ？」
フ「大丈夫です。ボクに任せるです。実物を見たことがあるです」
ア「じゃあ、別れて探してもしょうがないからフィーラちゃんを中心に探そうか？」
高「だな。じゃあ、とっとと行くぞ」
高雅は門を軽く跳び越え、フィーラは空を飛んで簡単に中に潜入。
ア「よっ・・わ！？」
アリアも高雅と同じように跳び越えようとしたが、足が引っ掛かってしまい、顔から落ちそうになった。
しかし、高雅がアリアの服を掴み、地面スレスレで落下が止まった。
ア「あ・・ありがｔふぎゃ！？」
高「のんびりするな。さっさと行くぞ」
高雅は掴んで上げた時間は1秒だけだった。
つい安心しきっていたアリアは油断して地面に腹を打った。
ア「いったたた・・・」
フ「アリア様、早く行くです」
ア「う・・うん・・・いたた～」
アリアは腹を擦(さす)りながらも高雅の後をついて行った。

同時刻、裏門にはある人達が集まっていた。

A「・・・・で?、何で俺が?」
B「いやー、宿題忘れたから一緒に来てもらおうと」
A「だから、何で俺なんだ?。これでも暇じゃなかったんだぞ」
裏からはAとBがやって来ていた。
理由はBが宿題を忘れ、取り行くのに何故かAを一緒に連れてきたのだ。
B「お前さ、夜の学校とか興奮して嬉しがるかと思って連れてきたんだよ。決して、俺が怖いからじゃない」
A「ふざけるな。俺は日々、高雅に追いつくために修行をしているんだぞ!!」
B「いくら頑張ったって崎村には勝てないって」
A「うるせー!!。俺は高雅を超える!!」
Aが興奮して騒ぎだす。
今は真夜中だったため、近所の人が顔を出し、怒鳴りながらあらゆる物を投げ付けて来た。
AとBは逃げるように門を乗り越え、校内へと入って行った。

高雅達が入って数分後。
夜の学校に訪れようとする者がまだいた。
龍「高雅君・・・何をしに・・・行ったの・・だろう?」
それは龍子だった。
急な買い物を頼まれ、コンビニへ向かうの途中に高雅の姿を見たの

だ。
その後をつけ、学校へ入って行くのを見ていたのだ。
龍「夜の学校・・・入っちゃ・・ダメだよ・・ね・・？」
誰かに聞かれている訳でもなく、自分に言い聞かせる。
悪いと言うことは認識しているが、自然と好奇心が龍子を動かしていた。
龍子は門を乗り越え、夜の学校へと侵入した。
少しだけと頭の中で理解しつつ、高雅を探しに向かった。

一方、高雅は狭い所から探すことにし、最初は体育館を探索していた。
高「何か分かるか、フィーラ？」
フ「全然です。何も感じないです」
ア「それにしても、創造の信念って形はどういうの？」
フ「形はないです。光の集合体と言った方が近いです」
高「ふぅん」
高雅は適当に返事をしてその光の集合体を探す。
アリアとフィーラも隅々まで探す。
しかし、それらしき光は全く見えず、見当がつかない。
高「・・・仕方ない。場所を変えるぞ」
ア「うん」
フ「了解です」
諦めて高雅は場所を移す。
つぎに目指したのは旧校舎だった。

道中、フィーラは懐かしむように周りを見渡していた。
フ「懐かしいです・・・」
高「そういや、初めてお前を見つけた場所だったな」
ア「そうだね。ここでフィーラちゃんと出会ったね」
フ「ずっとここで一人で・・・でも、今は一人じゃないです！！」
ア「うん、私達と一緒だよ」
高「・・・・・・・・・・ふん」
高雅は興味が無いのか足を速めた。
しかし、それが照れ隠しであることを二人は理解していた。
フィーラとアリアは笑いながらも高雅の後をついて行った。
旧校舎に着いた高雅はドアを蹴り開け、さっさと探索を開始する。
ア「もう、待ってよコウガ」
フ「ペースが速いです」
高「お前らがのろまなだけだ」
高雅は教室を開けて、中を少し見渡しては閉めて次の教室へ。
かなりのハイペースで探索していた。
フ「待つです。ちゃんと探ｓ〈ピト〉ひゃう！？」
ア「ん、どうしたの？」
フ「い・・・今、顔に冷たい何かが！？」
ア「冷たい何ｋ〈ピト〉ぅわぁ！！」
高「うるせぇな、さっきかｒ〈パシッ〉目障りだ！！」
高雅は視界が悪い中でも迫って来る正体不明の物体を掴んだ。
それはコンニャクであったが、何も繋がれていない。
高「？」
？「クススス・・・」
ア・フ「！？」
冷やかな笑い声が聞こえ、姿は見えない。
高雅は辺りを見回すもそれらしきものは見つからなかった。
高「・・・おかしい。殺気を感じない」
フ「じゃ・・・じゃあ・・オバケです！！。間違いないです！！」

高「非科学な話に入ったな」
ア「じゃ・・・じゃあ、誰の笑い声だったの？」
高「さぁ？」
フ「コウガ様、危機感なさすぎです」
高「いずれ分かるだろ。気長に判明させればいい」
そう言って、高雅は探索を再開した。
アリアとフィーラは少し怯えながらも探し続けた。

# 学校探検　中編

一方、現校舎ではＡとＢが自分のクラスへ向かっていた。
暗い廊下でも、既に１年以上通っている為、月の光で十分進めた。
Ｂ「あ」
Ａ「ん？」
Ｂ「いや、鍵を取りに行かないとな・・・で」
Ａ「・・・おま」
Ｂ「よぉし、ここはじゃんけんで決めようか」
Ａ「っの野郎・・・はぁ、いいぜ。じぇんけん――」
どちらが鍵を取り行くか、正々堂々とじゃんけんで決める。
数回のあいこを繰り返し、最終的に勝ったのはＢの方だった。
Ａは溜息を吐きつつ、負けを認めて職員室へ一人で向かった。
Ｂは先にクラスの前で待つそうだ。
Ａ「ったく、何で付き添いの俺が面倒な事を・・・」
Ａはぶつぶつと文句を言いつつ、職員室へ向かっていた。
しかし、いつまで経っても職員室へは辿りつかなかった。
Ａ「・・・あれ？。おかしいな」
普通は到着してもおかしくない。
しかし、Ａは暗い廊下を彷徨っていた。
道を間違えた覚えはなく、Ａは訳が分からずに頭を掻きながら途方に暮れていた。
Ａ「土曜日に改装でもしたのか？」
何も連絡もなしに、さらに１日で構造を変えることはまずあり得ない。
Ａは取りあえず、勘を頼りに廊下を歩いて行った。
？「クススス・・・」
Ａ「ん？。誰かいるのか？」
怪しい笑い声が聞こえ、Ａは振り返る。

しかし、暗闇へと続く廊下が見えるだけで他は何もなかった。
Aは首をかしげつつ、職員室を目指した。
B「ぎゃあああああああああああああああああああ」
A「ッ！？」
突然、Bの叫び声が響いた。
A「何か遭ったのか！？」
AはBの叫び声が心配になり、来た道を戻って行った。
活性を使って全速前進で走っていた。
しかし、自分のクラスにさえ辿り着くことはなかった。
A「くそ、訳が分からねえな！！」
タ「まさか、敵の夢幻に嵌(はま)ったか！？」
A「誰かがいた感覚はなかったぞ」
タ「しかし、何者かの声がしたのだ。可能性はありうる」
A「だとしたら、目的を探る必要があるな」
Aは幸せな頭を使って考えていた。
しかし、その幸せな頭からBの事は除外されていた。
A「よぉし。早速、捜索開始だ！！」
Aは張り切って手を上げ、やる気を示した。
そして、どこに辿り着くかも分からない廊下を彷徨い始めた。

Aがやる気を出している頃、高雅達は旧校舎から現校舎へ向かっていた。
高「見つからねーなぁ・・・」
ア「どこにあるんだろうね？」

フ「毎日、百人以上の人が出入りするはずです。だから、誰にもバレないような場所にあるはずです」
高「そんなことは既に考えてある。だから、現校舎は後回しにしてただろ」
ア「そうだね・・・でも、全く見当たらなかったね？」
高「それを言うな」
高雅は考えが外れた事を言われ、少し腹が立っていた。
それを悟ったアリアは咄嗟に口を塞いだ。
フ「とにかく、灯台もと暗しって言うです。だから、あっちの校舎も探すです」
高「分かってる」
高雅はダルそうに現校舎へと向かった。
いつものように、げた箱がある場所から入り、律義に上靴に履き替えていた。
高「それじゃ、一階から探してみるか」
まずは一年生のクラスがある一階から捜索を開始した。
中には入れないため、窓から部屋を覗いているだけである。
ア「ねぇ、覗いて見えるなら、とっくに他の人が見つけているはずだよ」
高「・・・お前、気付いてねえだろ」
ア「？」
高「この教室、見てみろ」
高雅はアリアに教室を覗かせるように言った。
アリアは言われた通り、窓から教室の中を確認した。
ア「・・・？、普通の教室だよ？」
高「ここは保健室だろ」
ア「え！？」
アリアは高雅に言われた後、もう一度確認した。
しかし、アリアの目には普通の教室にしか見えなかった。
アリアは少し考え、考えた結果フィーラの方を見た。

フ「ぼ・・・ボクじゃないです！！」
フィーラは首と手を振って否定する。
高「嘘だよ」
ア「な・・何だ嘘か・・・」
高「ここは机も何もない空いた教室だ」
ア「へ・・・？」
アリアはしっかりと並んだ机を見ており、いかにも使っているクラスに見えた。
ア「え・・・じゃあ、私、夢幻に掛かってるの！？」
高「いや、創造だ。誰かがここに机を並べたようだな」
フ「一体、何が目的です！？」
高「んなこと、分かるかよ。これだけ見せられても分かる訳が無い」
フ「んー、こんなことしても何も価値が無いです。暇つぶしです？」
高「だといいな」
ア「でも、学校（ここ）にあるのは間違いなさそうだね」
高「間違っていればすんなり帰れるのにな・・・」
高雅は残念そうに溜息を零した。
本当に残念そうにしていたため、アリアは少し呆れていた。
ア「とにかく、誰かに悪用されないように私達が見つけないと」
フ「そうです。さっきの笑っていた奴より先に見つけるです！！」
高「取りあえず、色々と創造で滅茶苦茶になっているかもしれねえな。気をつけて進むぞ」
ア「へぇ、心配してくれるんだ」
高「心配じゃない、注意だ」
ア「分かってるよ」
高「なら、言うな」
高雅は早足で先へ進みだした。
アリアとフィーラは微笑しながら高雅の後をついて行った。

それから、数時間後。
途中で道が滅茶苦茶になっていようと、全てを探索し終えた高雅は職員室から校長室へ入り、イスに座っていた。
高「ったく、見つからねーじゃねーかよ」
フ「てか、ここの学校は広すぎです」
ア「普段はこんなに複雑な構造じゃないよ。きっと、誰かがイタズラしてるんだよ」
高「見つけたらタダじゃおかねえ」
高雅は怒りを燃やしながら、校長先生のイスでぐるぐる回って遊び出す。
ア「ちょ、足を伸ばすと危ないよ」
高「校長のイス、大回転アタック～～～」
フ「きゃはははは」
高雅はドンドン回転数を上げ、フィーラは背もたれにのっかかって一緒に楽しんでいた。
アリアは危ないため、距離を置いていた。
ア「もう、二人とも・・・」
目的を忘れて遊ぶ二人を適当に見ていた。
アリアは棚に寄りかかり、自分も少し休憩しようとした。
そんな時、誰かが校長室に入って来た。
ア「ッ!?、誰!?」
高「龍子だ」
龍「え!?・・・」
入って来たのは龍子だった。
しかし、既に高雅には気付かれており、龍子は驚いていた。
高雅は回転中にも関わらず、イスから飛び降りた。
高「何でここにいる?」
龍「あ・・・いや・・・あの・・・心配・・・だから」
高「おいおい、俺を心配する必要はねえっての」
龍「でも・・・」

高「でもじゃない。大体、お前が心配した所で、何も変わりはしない」
龍「!?」
ア「ちょ、コウガ!!」
高「俺と一緒にいて死ぬような恐怖を味わって、なおも俺の近くによるとは・・・早死にするぞ」
龍「・・・・・・・・・」
ア「コウガ!!、リュウコはコウガの事がｓ「お前は黙ってろ!!」ッ!?」
アリアを怒鳴り、黙らせた。
フィーラも回転が納まった背もたれの上で見ていた。
高「いいか!!、俺の事を思うのはやめろ。俺はお前が分かっているより複雑なんだよ!!」
龍「・・・・・・・・」
高「・・・・俺に恋心を抱くのは勝手だが、相手を選べ」
ア「こ・・・コウガ・・」
フ「鈍感なコウガ様が気付いてたです!?」
高雅が龍子の気持ちを理解していた。
龍子の殺気を読みとったのかもしれない。
それを知った上で冷たくあたったのだ。
龍「・・・うん・・・高雅君の・・・気持ち・・分かったよ・・」
高「分かったなら家に帰れ」
龍子は俯きながら部屋を飛び出した。
ア「こ・・・コウガ・・・」
高「何か文句でもあるのか?。俺は俺の気持ちを答えただけだ。一つも嘘はなく」
ア「だからって、あんな言い方・・・酷過ぎるよ!!」
高「じゃあ何だよ。あのまま引き延ばして面倒にするつもりか?」
ア「そうじゃないよ!!。言い方の事だよ!!」
高「言い方が違えど、傷付くのは変わらねえよ。心の傷の大小なん

て無いんだよ」
フ「コウガ様の言う通りです。優しく言われても、きつく言われても失恋に変わりないです」
ア「それは・・・そうだけど・・・」
高「・・・ッ!!、あった!!」
ア・フ「え!?」
高雅が指差した先に銀色に輝く光の集合体が見えた。
まさしく、『創造の信念』そのものである。
高雅に気付かれた光は不思議な軌道を描いて近くを飛び回り、どこかに逃げて行った。
高「あの野郎、なめてやがる。行くぞ」
高雅は一目散に飛び出し、追い掛けた。
アリアとフィーラも遅れて追いかけようとしたが、いきなりドアが閉まった。
ア「え!?」
フ「あ・・開かないです!!」
何者かが抑えている訳でもなく、固まったかのように開かない。
フ「こうなったら、窓から出る・・・って!?」
窓を見ると、みるみるコンクリートが積み上がり、完全に塞がれた。
そして、最後に電球が急に弾け、明りが全て無くなった。
フ「ま・・真っ暗です!!」
ア「どうしよう。何も見えないよ」
フ「それに・・・何だが息苦しいです」
ア「外とのつながりが完全に断たれたから空気が無くなってきてる!!」
フ「やばいです!!。ボク達、窒息死しちゃうです!!」
ア「あまり叫ばないで。空気が早く減っちゃうから」
フ「あみゅ・・・でも、怖いです」
ア「大丈夫だよ。コウガに知らせるから助かるよ」
フィーラは不安になりながらも高雅の助けを待った。

アリアも無暗に動くことができず、冷静になってその場に座り込んだ。
高雅がきっと助けてくれることを信じながら。
ア（コウガ・・・助けて！！）
高（お前・・・あれだけ偉そうに言っておきながら、助けてだ？）
ア（え・・・！？）
高（少しは反省しろ。お前など、いなくても十分だ）
ア（・・・・・・・・・・）
高雅に冷たい言葉を言われ、俯いてしまう。
しかし、アリアは理解していた。
ア（・・・・・誰？）
高（？）
ア（あなたはコウガじゃない。誰なの！？）
高？（・・・クススススス）
旧校舎で聞こえた笑い声と全く同じだった。
高？（クススススス、負けちゃった）
ア（負けた？。どういうこと？。それに、どうやって意思会話を傍受できたの！？）
高？（クススススス・・・）
謎の声は何も答えず、ただ笑っただけで会話が途切れた。
フ「？、アリア様？」
ア「ゴメン。コウガと連絡が取れない」
フ「あみゅみゅ！？」
外との連絡方法が完全に途絶えてしまい、絶望に落ちる二人。
フ「ボク達・・・これからどうなるです！？」
ア「分からない・・・でも、コウガが助けてくれるよ、必ず」
アリアはどんな時でも高雅の事を信じ切っていた。
二人は助けが来るまで大人しく待ち続けた。

## 学校探検　中編（後書き）

え、深夜なのに校舎内に侵入できる？
職員室は常にフルオープン？

こまけぇこたぁどぅでぇもいいんだぁよぉ

ごめんなさい

# 学校探検　後編

逃げまどう創造の信念を追う高雅。
途中でアリアやフィーラが来てない事に気付いたが、いずれ来るだろうとほったらかしていた。
？「クススス・・・」
高「余裕を見せやがって、おりゃあああああ」
高雅は間合いが縮まった所で一気に飛びかかった。
しかし、考えが気付かれていたのか、寸前で軌道を変え、高雅の手から逃れた。
高雅も避けられる事を前提にしていたため、すぐに反応出来た。
高「まだまだぁ！！」
高雅が手を伸ばし、創造の信念に触れた。
すると突然、動きが大人しくなり、逃げるのを止めた。
高雅は両手でがっちりと掴み、逃げられないようにしていた。
高「観念しろ」
？「クススス・・・負けちゃった」
高「？」
？「あなた達、強い。全戦全敗」
高「何が全戦全敗だ。お前と戦った覚えはない」
？「だって、遊んでた。コンニャクぶつけしたり、イタズラ電話したり、お姫様ごっこさせたり」
高「知らん・・・って、最後の二つはどういう意味だ？」
？「あなたと一緒に来てた女の人、嘘の電話したけどすぐにバレて、今はお姫様ごっこの途中」
高（嘘の電話？。あいつが携帯持ってる訳じゃねえし・・・意思会話の事か？。後、お姫様ごっこはどういう意味だ？）
取りあえず、嘘を言っているようには思えなかったので、推測した。
その結果、色々と考えがまとまった。

？「さぁ、王子様が助けに行く。そして終わり。それで満足」
高「はぁ！？」
？「満足したい。そしたら、セイクリッドに行く」
高「良く分からねえが、ルールは何だ？」
？「簡単。助けるだけ。ただし、行くあてに色々あるだけ」
高「・・・・・面倒だな。勝ったら本当にすんなりセイクリッドに行くのだろうな？」
？「うん」
高「・・・分かった、交渉成立だ」
高雅は創造の信念を持ったまま、くるりと１８０度回転し、校長室へと向かった。
しかし、少しだけ進んだ先に見たこともないような化け物が待ち構えていた。
角が生え、人間の3倍以上の体格で鬼の形相をしている。
高「化け物まで創造しているのかよ」
？「姫への道のりは険しい」
高「あんな奴ら、姫でも何でもねえ！！」
高雅はむかっ腹で目の前の化け物を蹴り倒した。
行く道にトラップや魔物など、あらゆる障害物にぶつかっても、高雅は止まることはなかった。
順調に進んでいるかと思いきや、道が滅茶苦茶になっている為、容易に校長室には辿りつけなかった。
高「くそぉ・・・おい、校長室はどこだ？」
？「囚われのお姫様、場所を知っている訳がない」
高「テメェ・・・ったく」
色々と言いたかったが、下手に機嫌を損ねさせるとまたどこかに逃げてしまうかもしれない。
だとしたら、また探す羽目になる可能性が高いと思うと高雅は口を閉じた。
面倒事はなるべく避けたい高雅の性格である。

高「いいか。この遊び、俺が勝ったら絶対にセイクリッドに行けよ」
？「約束守る」
高「絶対だからな！！」
高雅は念を押し、再び動き出した。
向かう場所が定まってなく、適当に走り続ける。
そんな時、知っている顔が目の前に現れた。
A「おっ、高雅じゃん。やっぱ、お前もいたんだな」
高「おい、やっぱって何だよ。最初から分かっていたような口だな」
A「いやー、そんな感じがしたんだよな。んで、何もってんの？」
高「お前に関係ない。死にたくなければ帰れ」
A「帰りたくても帰り道が分からねーし、それにBの叫び声が聞こえたし」
高「お前の活性で壁でも突き破って出ればいいじゃねえか」
A「いやいやだから、Bをほっとく訳にはいかねえし」
高「じゃあ、勝手にしてろ」
高雅は立ち去ろうとしたが、Aが高雅の肩を掴み、進行を妨げた。
高雅は首だけを動かし、殺気を放っていた。
高「んだよ」
A「いやー、お前ってさ、何か面白い事を引き起こすだろ。だから、主人公である俺が一緒にいてあげようと」
高「消えろ」
A「うおっ！？」
高雅はAの手を振り払い、さらに足払いで転げさせた。
Aは咄嗟に片手で体を支え、肘の動きを利用して飛び上がり、そのまま着地した。
A「１０点！！」
高「０だ。お前の存在だけで０点だ」
A「酷っ！！」
高「今更だろ」
高雅は今度こそ立ち去ろうとした。

しかし、Aは後ろからついて来ていた。
何度倒そうとも、Aは負けずにしつこくついて来た。
遂に、高雅の方が諦めていた。
Aが勝手についてこようとも、高雅は自分のペースを崩すことはなかった。

１０分後。
怪物やら魔物やら化け物やらと遭遇しつつも、二人は怯みもせずに切り抜けた。
そして、怪しい場所を見つけたのである。
高「・・・・ここ、校長室のはずだよな」
A「ですよね・・・」
二人の目の前には校長室へと繋がる扉がある場所だ。
しかし、見た所コンクリートの塊が扉を隠してあり、元々扉があった場所となっていた。
高「おい」
？「助ける、お姫様を」
高「・・・・・・・・・くそ」
高雅は迷うことなく、創造の信念を置いてコンクリートを殴った。
何の力もない高雅の拳は人並み以上の威力は誇るもコンクリートに罅すら付けられない。
A「お・・おい、俺がやるって。こんなの、活性パンチで一撃・・・」
高「お前は勝手について来た奴だ。関わる必要はない」

高雅は何度も何度も殴り続ける。
辺りは骨が砕ける音や血が飛び散る音で響いていた。
激痛が高雅を襲うも、全く止めるつもりはない。
A「おい、手が壊れるって。てか、もう壊れてるって！！」
高「都合良くダイナマイトもないし、そんなことをして、もし壁の近くに二人がいたら危険だろ」
A「お前・・・」
高雅の優しさに心打たれるA。
だから、高雅の力になりたかった。
A「タイト、活性を」
タ「承知」
高「おい」
Aがやろうとしたのはすぐに分かった。
しかし、Aは止まらなかった。
A「か、勘違いしないでよね！！。ただ、Bがこの中にいると思っただけなんだからね！！」
高「なんてキモいツンデレだ・・・まぁ、今は許してやる」
Aが活性の籠った拳を振るう。
その瞬間、コンクリートに一気に亀裂が走った。
A「今回のおいしい所をやってやる。トドメをやってくれ」
高「・・・けっ、Aに助けられるとは。名前で読んだ分はチャラにしてやる」
高雅はAに感謝をして深呼吸をする。
高「うおおおおおおおおおおおおおおお」
そして、思いっきり力を込め、最後の一撃を放つ。
その一撃でコンクリートは砕け散り、扉が姿を現した。
高雅はすぐに扉に手を掛け、中に入った。
一瞬、吸い込まれるような風を感じ、高雅の嫌な予感は当たった。
高（やっぱり、あいつ空気の事は考えてなかったな）
殺気が読めないが、性格や考え方が幼稚であることが分かったため、

最悪を予想していた。
中にいたのは衰弱しきったフィーラとアリアの姿だった。
後、数分遅かったらどうなっていたか考えるのはすぐに止めた。
高「二人とも、無事か！！」
ア「こ・・・コウガ・・・・」
フ「ギリギリ・・・セーフ・・です・・・」
辛うじて答える二人。
二人の無事を確認した高雅はすぐに創造の信念へ視線を向けた。
高「おい、約束は約束だろ」
？「負けちゃった。凄い」
高「どうでもいい。さっさと行け」
？「約束守る」
創造の信念は壁をすり抜け、どこかへ飛んで行った。
きっと、セイクリッドへと向かったのであろう。
A「俺、空気ッスね」
高「お前も帰れ」
A「そうだな。それじゃ、Bでも探して帰るとしますか。じゃあな」
Aは手を上げ、Bを探しに向かった。
高雅は一息ついた後、何も言わずに二人を抱えた。
ア「わわ！？」
フ「んみゅ！？」
高「さっさと帰るぞ。お前らの回復を待つのは面倒だ」
ア「で・・・でも、手、怪我してるよ！！」
高「言っただろ。回復を待つのは面倒だ。手ぐらいさっさと帰って寝れば治る」
フ「絶対、そんな怪我に見えないです」
二人が色々と言うも、高雅は馬耳東風状態。
申し訳ないと思いながらも二人はそのままの状態で抵抗を止めた。

あれから家に帰った途端、高雅は力尽き、その場に倒れてしまった。
慌てて皆が駆け寄り、アリアが再生を施してすぐに安静に寝かせた。
後日、文夫から創造の信念が自らやって来たとの連絡があり、一件落着となった。
ちなみに、高雅は次の日は休んで1日中眠っていたそうだ。
数日後に高雅は目を覚まし、完全回復した。
そして今は夕刻の時。
高雅は皆とリビングでゲームをしていた。
ゲームの内容は某大乱闘である。
ア「そう言えばさ」
高「ん？」
ア「創造の信念はどうして自らセイクリッドに向かったの？」
高「あいつ、モノのくせに意思を持っていて、しかも幼稚だ。簡単な賭け事に乗ってくれた訳だ」
フ「じゃあ、あの机が無かった教室に机が並んでいたのはどうしてです？」
高「幼稚なあいつが見よう見まねで作っただけだろうな」
フ「成程です・・ってわあああああああ、ハンマー持ってこっちに来るなです！！」
ア「ははは、皆やっつけちゃうぞ」
高「ボム兵投合」
ア「あっ！！。吹き飛んだ！？。無敵じゃないの！？」
高「ハンマー状態が無敵、誰がそんなことを言った？」
フ「コウガ様、隙ありで・・なっ、センサーがあったです！？」
高「３０秒前に仕掛けたものぐらい、覚えてろよ」
レ「やはり、コウガ殿は強いな」
高「褒めてるレオにはバンパーをやる」
レ「ぬお！？」
結果、高雅の完全勝利。
その後、何度も高雅が勝利を収め、フィーラは顔真っ赤になって必

死に勝ちを求めていた。
高雅はゲームを楽しめと言い聞かせ、フィーラの勝ちへのこだわりは終わった。

★おまけ★

高雅と別れ、AはBが居るはずであろう自分のクラスに向かって行った。
既に構造は元通りになっており、鍵もちゃんと取っている。
A「さーてと、あいつは生きてるかな」
タ「無事だといいが」
既に校内で怪物と戦って来たAであるが、もしBが遭遇していたら危険である。
Aにとって雑魚であっても、Bから見れば恐怖の塊である。
取りあえず、考えるよりも先に行動し、クラスへと向かう。
A「到着って・・・」
目に入ったのは破壊された扉だった。
Aは周りに気をつけながらゆっくりと中を覗く。
中もぐちゃぐちゃになっており、机が散乱していた。
A「中は・・・誰も・・いや」
見た感じは誰もいないが、Aは何かを感じた。
契約の力を発動し、刀を構えてゆっくりと掃除用具入れに近づく。
そして、掃除用具入れを思いっきり開けて中にいる者に刀を向けた。
B「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」
A「あ、わりい」
Aはすぐに契約の力を解き、剣を戻して普通の姿に戻った。
酷く怯えていた状態だったのか、BはAが刀を持っていようと袴姿

だったろうと覚えてなかった。
A「おーい、俺だぞー」
B「オレ!?。俺はオレなんて奴を知らない!!。早くどっか行け!!」
A「・・・デジャブ?」
B「デジャブ!?。誰だそれは!?」
A「こいつ、ビビると滅茶苦茶な思考になっているな」
タ「これではどうしようもあるまい。諦めるのだ、主殿」
A「そうだな、どうせ化け物はもういねえし、どうにでもなるだろ」
AはBの宿題を目の前に置いて上げ、家に帰った。
その後、Bが帰ったのかは誰にも知らなかった。

次の日。
龍「・・・・・・・・・?」
B「ブルブルブルブルブル」
朝一に来た龍子は何故Bが掃除用具入れの中で震えているのか分からなかった。
龍「宿題・・・そんなに・・・嫌・・?」
目の前に置いてある宿題に怯えているのかと思ったが、Bは何も答えない。
結局、宿題はしてない、怖い思いはする、皆の我々者になる、先生に怒られるの最悪の結果に終わってしまったBであった。
ちなみに、Aは寝坊で遅刻したらしい。
原因は言わずと知れていること。

# 幸せになってもいいですか？

高校二年生も残すところ僅かの二月。
雪が降っているなか、高雅は放課後に商店街に向かい、夕飯のおかずを買いに行っていた。
高「今日の飯はどうするかな～」
色々な食材を見て回り、今日の献立を考えていた。
高「冬のカレーもまた悪くない。いや、普通にホワイトシチューがいいか・・・」
ア（そう言えば、フィーラちゃんがおでんって言うのを食べたいですって行ってたよ）
高「おでんか・・・それも悪くない。しかし、おでんは前日に作った方がいいから後日だな」
ア（じゃあ・・・）
高（――って、何で食わないお前が色々考えてんだよ？）
ア（あ・・いや・・・ちょっと興味が・・・）
高（まぁ、別にいいけどな）
高雅は結局ホワイトシチューにすることに決めた。
必要な材料を買ってまっすぐ家に帰る。
しかし、その途中であるものを見つけた。
猫「ミャー」
高「ん？、猫か」
それは野良猫だった。
高雅は足を止め、猫を観察していた。
猫「ミャーミャー」
すると野良猫は高雅を見つけると逃げずに擦り寄って来た。
寒いのか、何か暖が欲しいのだろう。
ア「あは、可愛いね」
高「鬱陶しいな。蹴り飛ばすか？」

ア「とか言って。本当はそんな気ないでしょ？」
猫「ミャーミャー」
ア「？、何だか寂しそうだね」
高「・・・・・・・・俺はお前の親じゃない。さっさと帰れ」
猫「ミャー・・・」
高「親の死を受け入れられないか・・・まぁ、気持ちは少しだけ分かるが」
ア「え！？」
高雅の言葉に驚くアリア。
殺気を読みとって分かったのだろう。
ア「まさか、猫と喋ってる？」
高「殺気を読みとってるからな。しかし、こっちの言葉が通じているかは知らねえが」
猫「ミャー・・・ミャー・・・」
高「うるせえな。俺はお前の親の代わりになれない。けど・・・」
高雅は猫の頭を撫でた。
そして、抱えてあげると優しく微笑みかけた。
高「その苦しみを癒すぐらいはできる」
高雅は少し強く抱きしめた。
すると、猫は普通は滅多に見せない涙を見せた。
親の死を素直に泣けなかったのだろう、猫の涙腺が崩壊していた。
ア「コウガ・・・」
高「全く、猫一匹慰めるぐらい簡単だろ」
ア「異常なまでに優しくなったね。前は猫一匹に全力で追いかけまわしていたのに」
高「あんな猫、もう忘れた」
アリアと高雅が話している内に、猫は割り切ったのか、高雅の手から飛び出した。
猫「ミャー」
別れ際に振り向き、一言置いてからどこかに走って行った。

ア「ねえコウガ、さっき何って言ったの？」
高「わざわざ聞くこともねーよ」
そう言って、高雅は再び歩き始めた。

家に着いた高雅は真っ先に寝ると思いきや、普通にご飯を作っていた。
献立は最初から決めていたホワイトシチューである。
フ「何だか美味しそうな匂いがするです」
シ「ご飯まだぁ？」
高「そろそろ出来るから席に着け。今日は楽園組も食うだろ」
フ「はいです」
シ「はぁい」
フィーラとシリアは元気よく返事をして台所を離れる。
高雅は食べる人の分だけを皿に注ぎ、お盆を使わずに器用に纏めて運ぶ。
高「で～きたぞ～」
フ「待ってましたです！！」
シ「わぁい！！」
エ「今日の飯は白いな。牛乳のスープか？」
高「１０％正解とでも言っておくか」
高雅は皿を並べ、スプーンを渡す。
全員に行き渡った所で高雅も席につき、手を合わせる。
高「頂きます」

フ「頂きますです」
シ「頂きますぅ」
エ「あー、うめぇ」
一人除いて合唱し、スプーンを握って食事を始める。
一人は目の前に皿とスプーンが置かれた瞬間から食べ始めていた。
フ「美味しいです」
シ「おいしぃ」
エ「うまいな」
高「俺ながら上出来」
ア「ホント、美味しそうだよね」
サ「食べてみたいのぉ」
高「食いたければ勝手に食えばいい。鍋で作ったからまだまだあるぞ」
サ「ほぉ。では、私も頂くとしようかのぉ」
ア「私も食べてみようかな」
サミダレとアリアが台所へホワイトシチューを注ぎに向かった。
高雅は平凡に過ごす時間を味わっていたが、ふと気付いたことがあった。
高「そう言えば、レオが見当たらないが」
フ「朝早くから出たです。行先は不明です」
高「夜になっても帰って来ないとは・・・後で仕付でもするか」
エ「何だ?、火炙(ひあぶ)りでもするのか?」
高「ギロチンでいいや」
ア「どっちも良くない!!」
聞いていたアリアがツッコむ。
アリアは高雅の隣に座り、手を合わせてから食べ始めた。
ア「でも、レオ君がいなくなるなんて意外だね」
フ「そうです。何だか、前日から元気がなかったです」
サ「今日が何か特別な日じゃろう・・・あ」
エ「何だ、そのいかにも思いだしたみたいな『あ』は」

サ「いや、実はじゃの・・・」

何もない平地。
そして、現世でも天国でも地獄でも楽園でもセイクリッドでもない場所。
またの名を元天獣の生息場所。
レ「・・・・・・何年振りだろうか」
毎年、訪れている訳ではないが今回はふとここにやって来た。
1億年も見ていないと流石に見たくなる衝動に駆られていたのだ。
レ「・・・我は・・・楽しんでいいのだろうか・・・」
ここに来るたびにそう思っている。
自分とサミダレ以外の天獣は死んでいる。
また、行方不明でどこにいるのか分からないとしても、死んでいると数えて殆ど間違っていない。
それなのに、今の生活を心から楽しんでいた。
時には戦うこともあるが、何より高雅達と一緒に過ごす時間は楽しかった。
レ「ここに来ると、王として不甲斐なさを感じる。我は・・・どうしたらいいのだろう」
自分に問いかけ、自分で答えを求める。
しかし、ありもしない答えを見つけるのは不可能に近いことだ。
レ「父上、母上。我に知恵を与えてくれ。この器のない王に・・・」
？「そいつぁ、無理な話だな！！」
レ「ッ！？」

謎の声が聞こえた瞬間、光弾が数発迫って来ていた。
レオは身軽に避け、光弾を撃った犯人を探す。
？「ヒッヒッヒ、どこを見ている」
レ「くそっ、姿を現せ！！」
？「こんな平地で見つけることも出来ないか。情けねえな」
レ「くっ・・・」
悔しがるレオに再び光弾が飛んでくる。
レオはそれを避けては探し続けるも、全く見つからない。
レ「何故、我を狙う！？」
？「簡単なこと。昔、滅ぼしそこねた天獣を狩るだけだ」
レ「まさか・・・貴様が！？」
？「ケッケッケ、生き残りの王子が立派な王になっているとはね・・・」
レ「貴様が仲間を・・・家族を・・・！！！！」
レオは怒りに満ち溢れ、我を忘れていた。
鋭い牙を光らせ、地面を抉り、殺気を奮い立たせる。
レ「出て来い！！！！。その首、噛み千切る！！！！」
？「出て来いと言われて出る分けねーだろ、バァカ」
レ「殺す！！！！」
レオは意地でも探し出そうとしていた。
しかし、憎しみと憤怒で出来た偽りの理性は判断を鈍らせる。
さっきまで避けていた光弾を殆ど避けていなかった。
寸前で避けているか、かすり傷を負っていた。
？「ヒーッヒッヒッヒ」
レ「卑怯者！！！！、小癪な真似をしなければ戦えないのか！！！！」
？「戦いに卑怯もねーよ、バァカ。その不意打ちに死んでいった哀れな天獣が悪いんだよ」
？「だったら、人数においても文句はないよな」
？「あ？」

ドゴッ！！！！

かなり鈍い音が聞こえ、レオの目の前に転がって来たのはエクスの姿だった。

レ「！！、やはり貴様が！！！！」

高「おい待て、それはエクスじゃない。似てるだけだ」

レオが声に反応し、目線を上げると高雅の姿があった。

高雅だけではなく、他にもアリアやサミダレ、フィーラとシリア、もちろんエクスの全員がいた。

高雅は既に真の契約をしており、双剣を構えた状態だ。

エ「そうだぜ。ったく、そんなクズと一緒にするなっての」

？「くそぉ・・・お前ら、何者だ！！」

高「俺か？。名乗る程でもねーよ」

フ「名無しに名乗る名はないです」

サ「確かに、名無しに名乗ってものぉ」

エ「今から消える奴に名前教えてどうする」

シ「皆ぁ、教えないからぁ、あたしも教えなぁい」

ア「あははは・・・」

全く教える気が無い全員に苦笑いするアリア。

？「お前らが何であろうと、俺ｈ〈グシャ〉あがっ！？」

高「！？」

レ「黙れ・・・お前がものを言う権利はない。死ね」

ア「れ・・レオ君！？」

レオが前足で腹を押しつぶし、殺しに掛かる。

いつもとは違う残虐的な殺し方に一同は少し驚いていた。

レ「我の苦痛を・・・皆（みな）の苦痛を・・・存分に味わって死ね！！！！」

？「あぎ・・あががが・・・」

レオは内臓を抉り、じわじわと苦痛を味わうように少しづつ傷付け

る。
すると、高雅がレオの前足を引き抜き、名無しを蹴り飛ばした。
蹴った場所には狙っていたかのように（てか、狙っていた）宝石があり、破壊していた。
名無しは宙を舞いながら消滅した。
しかし、レオは全く満足していなかった。
レ「コウガ殿！！、何故邪魔をした！！。もっと苦痛を味わらせるべきだったのだ！！」
高「お前、そんな血まみれな前足で俺の家に上がり込むつもりか？。いくらなんでもそれは許さねえぞ」
レ「こんなもの、洗えばどうにでもなろうが！！」
高「そうだな・・・足は洗えばどうにでもなるが・・・お前、周りを見てみろよ」
レ「！？」
高雅に言われ、レオはフィーラ達の方に顔を向けた。
皆、レオを見て少し怖がっていた。
そして、今まで自分がやって来た事を思い返した。
レ「我は・・・何と恐ろしい事を・・・」
高「気付いたか、アホ。憎しみで殺しをしても、碌（ろく）なことにならねえよ」
レ「・・・すまないコウガ殿」
高「全く、外は洗剤で洗えるが、中はどうやっても洗えないからな。気をつけろよ」
レ「分かった・・・」
ア「良かった。レオ君が道を間違えるかと思ったよ」
高「サミダレから天獣が滅んだ日って聞いて、何か嫌な予感がしてな」
フ「もしかしてと思って全員でここに来たです」
エ「予感的中。まぁ、これで俺の疑いも晴れたな」
レ「あ・・ああ、疑ってすまぬ」

サ「しかし、王たるもの感情に流されるとは、まだまだ子供じゃのお」
レ「く・・・何も言えん」
高「そう責めるなサミダレ。失う悲しさはお前も同じだろ？」
サ「私は大人じゃ。わざわざ感情に流されたりはしないのじゃ」
ア「取りあえず、もう帰ろう？。現世じゃ深夜だよ」
高「そうだな。んじゃ、帰るか」
高雅は空間を開いて自分の家へとつなげた。
高雅に続いて次々と空間に入って行く。
しかし、レオが入ろうとした瞬間、アリアが人間状態になって止めた。
ア「待って。そのまま入ったら床が汚れて怒られるよ」
レ「あ・・ああ、すまない。タオルを頼む」
高「ほらよ」
アリアの代わりに高雅がタオルを投げ渡す。
高「それは捨てる予定のタオルだ。どうしたって構わない。後、吹いた後は風呂場でちゃんと流せよ」
レ「分かった。すまない」
レオは血の付いた足をよく拭きとり、風呂場へ向かった。
ア「あ、私が洗い流してあげるよ」
レ「そうか。よろしく頼む」
アリアも一緒に風呂場に向かって行った。
取りあえず、シャワーで一通り流してから洗剤で洗い流す。
そんな時、アリアが口を開いた。
ア「あのね、やっぱり辛いかもしれないけど・・・」
レ「ん？、何だ？」
ア「私達が一緒にいるから。辛いことも楽しい事も共有しあおうよ」
レ「・・・ふ、ありがとう。しかし、我は天獣の皆を置いて幸せを手にするのは・・・」
高「じゃあ、そいつらの分まで幸せになればいいじゃねえか」

いつの間にかやって来ていた高雅が横から口を出す。
高「幸せに権利なんてものはねえよ。自分で手にするかどうか好きにしろ。ただ、何があろうが幸せになってもいいんだよ」
レ「・・・・・分かった。では、我はここで楽しく生きるとしよう」
ア「うん、それがいいよ」
高「もう、迷惑だけは懲り懲りだからな」
レ「うぬ・・・すまない」
高「分かればよろしい。じゃ、俺は寝る。お前らもさっさと寝ろよ」
ア「うん、お休み」
高雅はこの場を離れ、就寝準備に取り掛かった。
レオ達も事が終わったらすぐに眠りに着いた。

# 静寂ＶＳ活性　前編

高雅は休日に何もやることが無く、適当に散歩していた。
高「あー、暇だなー」
ア「平和って事でいいじゃん」
高「暇と平和を一緒にするな」
Ａ「そんな暇を破壊する男、スパ○ダーマッ！！」
いつもの神出鬼没はログナのはずなのに今日は違った。
目の前に失礼にも指を差すＡの姿があった。
Ａ「今日はそろそろ因縁の対決も終わりにしようと思いました」
高「過去形ならどうでもいいな。んじゃ、俺は散歩の途中だから」
高雅はＡの横を何もなかったかのように通り過ぎて行った。
通り過ぎた後、後ろから妙な殺気を受けた瞬間、高雅は大きく跳んだ。
そして、空中で一回転をして振り向き、剣を構えていた。
高「何だ、喧嘩っ早いな」
Ａ「そろそろ、本気で戦いたくなってな。どっちが最強の主人公か決めようぜ」
高「またそれかよ」
Ａ「今回は本当に最後だ。これに負けたら主人公は諦める」
高「・・・なーんか、急展開だが、相手がマジだし・・・こっちも付き合うか？」
ア「うーん、Ａ君は本気だし、いいんじゃないかな？」
高「んじゃ、やってやるか。もう剣は構えている事だし」
高雅は人差し指をヒョイと曲げて挑発した。
高「場所を変えるぞ。こんな町のど真ん中はゴメンだ」
Ａ「ｏｋ」
高雅は高く跳躍し、屋根を渡ってどこか遠くへ行く。
Ａもそれを追って屋根に跳び移った。

ひたすら進むこと数十分、高雅がやって来たのは途中で中止になり、中途半端のまま残された工事現場だった。
周りは平地で何もなく、人の姿も全くない。
障害は鉄筋で組み立てられた大きなジャングルジム。
この二人が暴れるのにはうってつけの場所である。
高「ルールはどっちがが倒れるまで。それでいいな？」
A「おｋ。所で、賭けをしねえか？」
高「何を賭けるつもりだ？」
A「もち、俺は主人公の座だ」
高「どうでもいい・・・」
A「バカヤロー！！。主人公の座がどうでもいいとか、どうかしてるぜ！！」
高「価値のない賭け事だな、おい」
A「じゃあ、お前は何を賭けるんだよ！？」
高「そうだな・・・じゃあ、お前の記憶を再生させてやる」
A「それ、賭けてなくね？」
高「どうでもいいから、開始な」
すると、高雅は一気に踏み込んだ。
Aは構えてなくても高雅の斬撃を受け止めた。
A「おまっ、不意打ちとか！！」
高「ボゥっとするお前が一方的に悪い」
高雅はAの刀を弾き、鉄筋のジャングルジムへ蹴り飛ばした。
Aは鉄筋に背中を打ちつつも、すぐに立ち上がった。
A「ってえ、こりゃ、俺も本気で行くしかないな」
Aは鉄筋を伝って上へ昇り始めた。
少し離れた場所でも高雅が同じように鉄筋を伝って上へ駆けだしていた。
その途中、二人同時に飛び出し、空中で何度か斬撃を交えて鉄筋に着地する。
お互いの位置が入れ替わっただけでダメージはなかった。

A「ぬおっ！？」
しかし、Aが着地した鉄筋はバラバラに斬られていた。
高雅が飛ぶ際に細切れにしたのだ。
Aは仕方なく近くの鉄筋に着地しようとしたが、高雅がそれを許さなかった。
既に高雅が目の前に迫っており、Aは着地より高雅の動きに対応した。
しかし、高雅が残像だったことに気付いたのは背中を打ってからだ。
A「いってえ・・・うお！？」
さらに、追い打ちを賭けるように上から鉄筋が降って来ていた。
そんな様子を見ていた高雅はAが鉄筋に押しつぶされて見えなくなってしまった。
高「こんなもんか」
ア「だと、いいね」
呑気に一番てっぺんから見下している高雅。
欠伸をしながら目尻を擦っていた。
高「あ～、ねむてー」
ア「ホントに終わったのかな？」
下の様子は全く変動なし。
勝負は付いたかのように思われた。
高「・・・・・・・・ん？」
高雅は空を見上げると、太陽の光が目に入り、手で軽く遮る。
そして、重なって見える影を目視した。
A「おらあああああああああああああああ！！」
高「普通にピンピンしてるな」
高雅はその場から跳び、移動を開始した。
Aはそのまま高雅が元いた場所に剣を振り下ろし、鉄筋を真っ二つにした。
A「逃がすか！！」
Aはすぐに体勢を立て直して高雅を追う。

高雅は鉄筋のジャングルジムを降りつつ、接続部分を斬っていた。
そして、負って来たAが乗った瞬間、Aの足下の鉄筋が崩れ落ちる。
A「またぁ！？」
高「学習しろよ」
高雅が遠くからAの無様な姿を眺めていた。
しかし、Aは落下中に活性を込め、高雅に向かって斬撃を飛ばした。
体勢が悪いにも関わらず、狙いは完璧で真っすぐ高雅に向かって来ていた。
高雅は跳んで上の鉄筋に乗ってやり過ごそうとした。
しかし、斬撃が丁度、真下に到着した瞬間、それは爆発をした。
高「うおっ！？」
決して爆破の力を使った訳ではない。
ただ、活性の大き過ぎる力が勝手に爆発を行（おこな）っただけだ。
高雅は爆風でバランスを崩し、吹き飛ばされた。
いつの間にか体勢を立て直していたAが隙だらけの高雅に接近していた。
A「おらぁ！！」
高「ち、少しはやるな」
高雅はAの斬撃を受け止めるも、勢いに負けて吹き飛ばされた。
高雅は鉄筋のジャングルから外に出てしまい、このままではかなりの高さから落下してしまう。
高「ひょいっと」
高雅は片方の剣を投げ、鉄筋に紐を巻きつける。
そして、その伸縮を利用してジャングルジムに戻って来た。
しかし、着地した瞬間、鉄筋はバラバラに崩れ落ちた。
高「なっ！？」
A「パクったぜ」
Aが既に高雅の着地位置を予測して斬り刻んでいたのだ。
高雅のバランスが崩れた隙を狙ってAが追撃する。
流石に、先程で受け止めても同じように吹き飛んで繰り返しになる

ため、高雅は別の方法で出た。
Aが剣を振った瞬間に、身を翻して寸前で避けきった。
高「俺はお前と違って学習するんだよ！！」
そのまま、空中で横一回転して蹴りを喰らわせる。
A「俺だって、お前の蹴りぐらい予想していたぜ」
Aは高雅の蹴りを体で受け止め、そのまま足を掴んだ。
その隙に、Aは動けなくなった高雅を狙った。
しかし、間近くにいる為、高雅もチャンスである。
A「肉を蹴らせてぇ・・・・・」
高「肉を掴ませてぇ・・・・・」
同時に得物を構え、そして・・・
高・A「骨を断つ！！！！！」

ザシュ！！

同時に斬った。
互いの胸を大きく斬り、大量の血が噴き出した。
高・A「つぅッ！！」
流石の傷の大きさに、互いに力を無くして落下した。
ア「コウガ！！」
タ「主よ！！」
アリアは再生を施し、タイトは活性で細胞の再生を促進して傷口を塞いだ。
傷が治った瞬間、二人は空中で一回転して体勢を立て直し、鉄筋に着地した。
高「浅かったか・・・」
A「こっちのセリフだ。ったく、油断も隙もねえよ」
高「戦いにそんなものがあったら、とっくに負けてるだろ」
A「ですよねーw」
そう言って、Aは軽く剣を振ってから構える。

Ａ「さぁ、休憩はお終いだ。第２ラウンドに行くぜ」
高「休憩なんて最初からなかった」
Ａ「ゑ？」
そう言った瞬間、高雅はその場から離れて上に向かった。
すると、Ａに影が差しかかり、振り向くと鉄筋が倒れて来ていた。
Ａ「うおおおおおおおおおおおおおおおおグレイズッ！！！！」
Ａは寸前で横っ跳びで回避して下へ逃げた。
高「まだまだ弾幕が終わると思うなよ」
高雅は上から次々と鉄筋を落としてきた。
Ａ「グレイズグレイズグレイズグレイズ！！」
Ａは全ての鉄筋をギリギリで避ける。
Ａ「実はルナティックシューターだった俺を舐めるｎ「隙あり」ごふっ！？」
適当に駄弁りながら避けることに夢中になっていたＡは鉄筋に乗って一緒に下りて来ていた高雅に気付かなかった。
高雅は持っていた鉄筋でＡの顔面を殴り飛ばした。
Ａ「いてぇ・・・首が吹き飛ぶかと思った」
タ「実際、活性が無ければ吹き飛んでいたはずだ」
Ａは着地して首が繋がっているのを確認するかのように首を擦(さす)っていた。
何とか骨は無事で痛みだけで済んでいた。
高「よっと、俺が優勢だな。このまま終わるか？」
高雅がＡの近くにやって来て挑発していた。
完全に余裕を見せつけていた高雅にＡは自然と闘志を燃やしていた。
Ａ「まだだ。まだ、終わらんよ！！」
高「終われよ」
Ａは刀を構え、高雅に向かって踏み出す。
高雅は後ろに下がって、そのまま落ちて行く。
Ａはすぐに反応してそのまま追って行く。

落ちている最中にもかかわらず、二人は剣を何度も交える。
一番下に着いた途端、二人は同時に攻撃を止めて着地する。
そして、一回だけ剣を振ってお互いに弾いて距離を取る。
A「おらぁ！！」
Aは距離を取っても、斬撃を飛ばして遠距離攻撃をする。
高雅は軽く弾いて軌道を逸らし、空の彼方へと斬撃を飛ばした。
A「ちっ、ダメか」
高「ちょっと少し戦術を変えるか」
高雅は創造を使って自分の分身をいくつか創りだした。
A「質量のある残像だと！？」
高「普通に分身だ。質量のある、な」
すると、数人の高雅がAに向かって接近した。
数人の高雅はAの隙を狙うように絶妙な距離で待機していた。
隙を狙われていることをAは理解していた。
Aは隙を出させないように最小の動きで数人の高雅をやり過ごす。
A「よっ、ほっ、とっ」
高「ああ、言い忘れたけど。あと2秒でそいつら爆発するぞ」
A「なっ、んっ、だっ、とおおおおおおおおおおおおお！？」
高雅は自分の周りにバリアを創った瞬間、創造の高雅が一斉に爆発した。
辺り一帯は爆炎に呑みこまれた。
さらに、近くにあった鉄筋のジャングルジムも耐えきれなくなって崩れ落ちた。
落ちた場所は狙っていたかのようにAがいた場所だった。
爆炎が落ち着いて視界が良くなった所で、高雅はバリアを消して目の前の状況を確かめる。
高「これで勝ちは確定だな」
ア「あははは、容赦ないね」
高「これでこいつは俺にかまってこないだろうな」
そう言って、高雅は踵を翻して帰ろうとした。

しかし、後ろから強烈な殺気を受けた瞬間、足を止めた。
高「・・・・・・・・・」
ア「まだ・・・・だね」
高「はぁ・・・」
高雅が振り返った瞬間、崩れた鉄筋の山がいきなり吹き飛んだ。
そして、中から真の契約をしたAの姿が目に移った。
A「第3ラウンド開始だ」
高「・・・しぶといな」
Aは一瞬で高雅の目の前まで接近した。
高雅は反応して攻撃を紙一重で避けるも、刀の熱気で軽いやけどを負った。
高雅は跳躍して距離を取った。
そして、やけどを負った頬を触って確認する。
高「あいつの熱、かなり上がったな」
ちゃんと静寂で打ち消したつもりでいた。
しかし、打ち消し切れてなく、やけどを負ってしまったのだ。
もし、対抗していなかったら頬は溶けて無くなっているだろう。
高「やばいな・・・ッ!?」
そう思った瞬間、高雅の視界がグラリと揺れた。
Aが見えない速さで近づいて殴ったのだ。
高雅は吹き飛んで小さな土山にぶつかって砂塵を上げた。
A「はっはっは、どうだ参ったｋ〈ゾクリ!!〉おふぅ・・・」
Aは高らかに笑っていたが、いきなり目の前から強大な殺気を浴びた。
つい、情けない言葉を上げてしまうも、目の前の殺気の強さに黙り込んでしまう。
そして、さっきAが鉄筋を吹き飛ばしたのと同じように砂を吹き飛ばして高雅が現れた。
もちろん、真の契約済みである。
高「そっちがその気なら、こっちだってマジになる権利はあるだろ

？」

A「最終ラウンドの始まりだな」

高「後悔するなよ、俺に挑んだ事を」

A「まさか。返り討ちにして主人公になってやるぜ」

殺気に慣れたAが余裕を見せながら刀を構える。

そして、高雅も殺気を全開にして剣を構えた。

# 静寂ＶＳ活性　前編（後書き）

鉄筋と鉄骨、どう違うか分からないのは自分だけのはず。

# 静寂ＶＳ活性　後編

万物を鎮めるような殺気を放つ高雅。
灼熱のオーラを纏って空気を揺るがすＡ。
二人は睨み合いをするだけで押しつぶされるようなプレッシャーがあった。
高「で、いつまで睨み合うつもりだ？」
Ａ「あの枯れ葉が地面に落ちたら」
高「何とも季節外れ枯れ葉だか・・・」
そう言いながらも、ゆらゆらと自由に落ちる木の葉に集中する。
そして、地面に木の葉が付いた途端、半分燃えた瞬間、鎮火した。
その様子が終わる前に、高雅とＡは一瞬で得物を打ちつけていた。
お互いの力が打ち消し合い、高雅とＡを境に空気が変わっていた。
Ａ「押し切る！！」
Ａはさらに活性で力を増し、徐々に高雅を押していた。
高「ち、力じゃ負けるか」
高雅は潔く負けを認めていた。
しかし、それは活性の力のみである。
Ａ「ぬお！？」
いつの間にか、Ａの足下がぬかるんでいた。
高雅が変化の力で地面の硬さを変えたのだ。
足下が緩んで上手く力が入らない隙を狙って高雅が逆に押し返した。
高「おらぁ！！」
Ａ「ちっくしょぉ・・」
高雅は最後の一撃に思いっきり波動の力を込めて吹き飛ばした。
高雅は吹き飛んでいるＡに向かって追い打ちをするべく、高速で追いかけた。
追いついた瞬間、まだ立て直していないＡの顔を掴んでそのまま地面に引きずらせた。

A「まだまだぁ！！」
高「うおっ！？」
引きずっている最中にAは高雅を蹴りあげた。
高雅が離れている間に体勢を立て直すA。
高雅も空中で体勢を立て直し、方向の力で滞空していた。
A「全く、容赦ねえな」
高「誰が容赦するか。したら、正直危ないからな」
A「おっ？。実力を認めてくれるか？」
高「まぁ、活性は俺より上だな。他はどうだか」
A「それだけで勝利条件は十分だぜ」
高「果たして、そのセリフは本当だろうか」
A「ぬかせ！！」
Aは高くジャンプして高雅に迫った。
高「飛べない奴が跳んでくるか？、普通」
高雅は向かってくるAに対して方向の力を真下に向かって思いっきり掛けた。
A「うおっ！？、重力の反乱！？」
高「埋まってろ」
Aの力は活性だけでどうやっても空中で重力に逆らうことはできない。
Aは地面に叩きつけられ、体が少し埋まってしまった。
動けないA目掛けて高雅が空中から方向の力付きで落下して来た。
さらに、活性を込めて強力な一撃を作る。
A「防御してやる」
高「真っ向勝負か。上等だ！！」
高雅は落下の力と活性を合わせてAの腹を思いっきり殴った。
Aはとことん活性して防御した。
殴った瞬間、強大な威力で砂塵が大量に舞い上がった。
砂塵が止んだ時、高雅の拳はちゃんとAの腹を捉えていた。
A「く・・ぐぐ・・・」

高「耐えやがった・・・」
Aは口から血を吐いているものの、高雅の攻撃を耐えていた。
A「今度は俺のターンだ」
Aは隙だらけの高雅の腹を思いっきり蹴った。
今度は吹き飛ばさずに、内臓に衝撃を与える蹴り方だ。
もちろん、活性で威力は半端ない。
高雅も防御したが、威力を完全に抑えきることができなかった。
高「ゲホッ！？」
高雅はのけぞり、大きな隙を見せてしまった。
Aはその隙に地面から抜けだし、追撃にでた。
今度は怯んでいる高雅を蹴り飛ばした。
Aは追い掛けずに、その場で力を込めていた。
A「きゅらえ～！！」
情けない声と共に高温の斬撃を飛ばした。
高雅は吹き飛びながらも体勢を立て直し、虚無の力を込める。
高「うざってぇ！！」
迫って来る斬撃を虚無の力で打ち消した。
そして、方向の力ですぐにAに近づいた。
A「読めてるぜ」
高「こっちもな」
高雅は地面に向かって思いっきり静寂の力を放った。
Aは地面の奥深くを活性して噴火させようとしていた。
だが、高雅の静寂が上回っていたため、噴火は起きなかった。
A「あり？」
高「バカ丸出しだな」
隙だらけのAの顔面に剣を柄をぶつけた。
Aの顔面は思いっきりへこんだ。
高「言っただろ。負けているのは活性だけだって」
高雅は追い打ちで衝撃を打ち込んだ。
今度は吹き飛ばさせるのではなく、内面的に攻撃を仕掛けた。

A「ごふっ・・・」
Aは内臓の直接攻撃により、意識が朦朧とし始めていた。
高「こいつでトドメだ!!」
高雅が容赦なく、Aの顔面を殴り飛ばした。
そして、Aは倒れて動かなくなった。
Aから殺気が消え、高雅は剣を地面に刺した。
高「ふぅ・・・マジできつかった」
疲れた溜息を零して正直な感想を述べた。
ア「A君、凄く強くなってなたね」
高「こいつ、本当にタダの人間か?。修行したからって言ってもレベル上がり過ぎだ」
ア「努力と才能が組み合わさった結果かな?」
高「そりゃ、恐ろしいな」
A「く・・まだ・・・終わっちゃ・・・いねえ!!」
高・ア「ッ!?」
Aが体を震わせながらも無理やり立ち上がった。
尋常じゃない体力に高雅とアリアも普通に驚いていた。
高「お前、いつから人間卒業した?」
A「俺は・・・主人公だから・・・負けねえ!!」
Aは活性を込め始める。
今までよりもずっと強く、濃い活性をである。
高「最後の一撃か・・・じゃあ、こっちも対抗するか」
高雅は剣を抜いて少し距離を取った後に静寂の力を込め始めた。
もう絶対に起きれないように限界まで集中する。
A「俺は・・・負けたくない!!」
高「こっちもお前には何か負けたくないな」
お互いの力が最大に溜まったところで、それを全てお互いの得物に流し込んだ。
A「高雅!!、最後に言わせてくれ!!」
高「何だよ?」

A「ありがとよ、認めてくれて」
高「お前を認めた覚えなどない」
A「ひっでぇ!?。まぁ、この一撃で全てが終わる」
高「お前の人生も終わらせてやるよ」
A「返り討ちにしてやるぜ」
二人は笑いあいながらも、いつでも動けるように準備していた。
そして、笑顔も真面目な顔つきに変わって、静かに時が来るのを待った。
A「最終奥義・・・フルパワーアタァァァァック!!!!!」
高「どりゃあああああああああああああああ!!!!!」
二人同時に剣を振って斬撃を飛ばした。
地面を抉(えぐ)りながら飛ぶ二つの斬撃は互いに目標に向かって真っすぐ飛び、やがてぶつかった。
その瞬間、眩い光が発生し、辺り一面を真っ白にした。

高・A「・・・・・・・・・・・・・・・」
二人は傷だらけで、ただ立っていた。
力を完全に出し切ったため、もう回復することはできない。
高「・・・・・・・・・っ」
最初に動いたのは高雅の方だった。
しかし、前に倒れるだけで体力が完全に無くなったのを示しただけだった。
高「ち・・・・体が動かねえ・・・」
A「・・・・・勝った・・・・・・・・・」
Aも遅れて倒れ、そのまま気絶した。
すると、二人の真の契約が自然と切れてしまった。
ア「ふぅ・・・お疲れ様」
タ「はぁ・・・はぁ・・・」
アリアとタイトは人間状態になり、二人の傍に座った。
高「あ～あ、先に倒れてしまったなぁ・・・」
ア「負けちゃったね」
高「正直、油断してました」
ア「全く・・・」
タ「・・・いや・・ぜぇ・・・拙者らの負けだ」
高・ア「？」
高雅が潔く負けを認めたが、タイトはそれを認めていなかった。
タ「拙者らは・・・もう・・・指一つ動かすことができぬ。しかし、その余裕な会話を見る限り、拙者らの負けである」
高「そう言うなって。形はそうだが、先に倒れたのは俺だぜ。その時点で勝負がついてるって。俺らの負けだ」
タ「しかｓ「いいからもう黙れ。あんまり喋れる程元気じゃないんだ」そうか・・・忝い（かたじけな）」

高「いいって・・・・・こと・・よ・・・・」
遂に、高雅も意識を落とした。
あれ程のダメージでは流石の高雅も身が持たなかったのである。
ア「流石の高雅も限界だったみたいね」
アリアは高雅の頭を撫でながらそう言った。
タ「・・・拙者らはこれからどうするのだ？」
ア「そうだね・・・二人が起きるのはしばらく時間が掛かるし・・・どうしよっか？」
アリアは苦笑いしながら逆に聞いて来た。
タイトは呆れて溜息を零していた。
そんな時、困り果てていた二人にある者が訪れた。
レ「一体・・・どういう状況なのだ！？」
ア「あっ、レオ君！！」
都合良くレオがやって来た。
レ「莫大な力を見てここに来たのだが・・・まさか、コウガ殿とA殿の仕業か？」
ア「うん、今まで二人の決着をつけてたの」
レ「コウガ殿があれ程の力は分かるが、まさかA殿が引かぬ強さを持っておるとは・・・」
レオも正直に驚いていた。
ただの人間がここまで強い事に。
ア「それで来てすぐに頼みがあるのだけど・・」
レ「乗せてくれと言いたいのだろ」
ア「ゴメンね」
レ「仕方ないさ」
アリアは高雅をレオの背に乗せ、自分も乗った。
高雅が振り落とされないように後ろから手を回してしっかりと固定する。
レ「アリア殿、タイト殿とA殿はどうするのだ？」
ア「流石に、重量オーバーだし、私も早く気絶したいから、家に帰

った後にレオ君を向かわせる。それでいい？」
タ「十分だ」
ア「ゴメンね。じゃあ・・・お願い・・レオ君・・・」
レ「分かった。では、タイト殿。しばし待たれよ」
レオはタイトに一言申してから高雅の家へ向かった。
タ「さて・・・拙者も・・もう・・・・」
誰も話す相手がいなくなった所でタイトは気絶した。
ずっと耐えていたのだが、その必要が無くなったからだ。

その後、アリアは家に辿り着く前に気絶してしまい、レオが振り落とさないようにゆっくり帰っていた。
家に着いた途端、レオは他の皆に高雅とアリアを任せてＡとタイトの迎えに行った。
しかし、サミダレがレオを呼びとめた。
サ「待つのじゃ。事情が分からぬが・・・」
レ「コウガ殿とＡ殿が決闘をしたのだ。我もこれぐらいしか分からん」
サ「だとすると、Ａ殿も気絶しておるはずじゃ。私も行くのじゃ」
レ「そうか。済まぬ」
こうして、レオとサミダレはＡとタイトの迎えに行った。
サミダレの言うとおり、Ａとタイトは気絶しており、サミダレが二人をレオの背に乗せて家に送ってあげた。

★おまけ★

高雅は三日間、アリアは二日間眠っていた。

A達もこれと同じぐらい眠っていて学校を休んでいた。
眠りから覚めた高雅はアリア達にどうなっていたか事情を聞いていた。
そんな時、ある疑問がわき上がった。
高「なあ、Aはあの後どうしたんだ?」
レ「我とサミダレ殿が家まで運んでおった」
高「?、家って・・・ちゃんと中か?」
サ「それは流石に無理じゃったから玄関の前に放置しておいたのじゃ」
高「・・・それ、まずくね?」
サ「気にしたら負けじゃ」
高「・・・・嫌な予感が・・・・」

A母「・・・さて、A。起きて早々に悪いけど、事情を説明してもらいましょうか?」
A・タ「・・・・・・・・・」
A父「Aよ、お前とこの人は何故家の前で倒れていたんだ?」
A「えっとですね・・・そこには子供の事情が」
A父「惚けるな!!!!」
激怒したAの父親が机を強く叩く。
Aは驚いて一瞬、身を引いた。
A父「日頃、誰かの話声が聞こえていたのだが、それもこの人と関係があるのか!?」
A「えええええええええっとととととと、でですすすねねねねねね」
完全に動揺していた。

ピーンポーン

？「どうもー、宅急便で―す」
A「!?」
タ「この声・・・」
A父「こんな時に・・・」
A母「私が出ますよ」
そう言って、Aの母親は判子を持って席を外した。
A母（それにしても、何か荷物頼んだかしら？）
身に覚えがないと思いつつも、取りあえず出てみる。
？「どうも、お騒がせしました」
A母「？」
意味が分からないと思った瞬間、Aの母親の意識が飛んだ。
そして、宅急便の人は家に上がり込んだ。
A父「何だお前h「お騒がせしました」あ・・・」
Aの父親もすぐに倒れてしまった。
しかし、分かっていたAとタイトは驚いていなかった。
A「お前か・・・」
高「お前だよ」
そう言って、帽子を取って素顔を見せる高雅。
高「アリア達に事情を聞いて、こんなことになっているだろうと思ってよ」
A「まあ、玄関放置はまずかったな」
タ「拙者が姿を変えておかなかった所為だ。済まぬ」
高「考えなしに送ったこっちも悪いし、おあいこだ」
A「それよりも、俺は負けてしまったようだな」
高「先に倒れたのは俺だろ？」
A「もういいさ。お前に主人公の座を譲ってやるよ」
高「あっそ。んじゃ、こっちも負けたと思ってるから」
高雅はAの頭に手を乗せ、記憶を再生させた。
ただ、再生のショックで混乱しても困るから気絶もさせた。
高「これでよし。じゃ、俺は帰るぜ。二人の記憶は消してあるから

安心しろ」
ア「じゃあね」
タ「本当に忝い」
高雅はAの家を出て、自分の家に向かった。

# 絆編　その1、覚悟（前書き）

これが最後の章。
悔いがないように書き終えたい・・・

# 絆編　その1、覚悟

春の陽気が訪れる頃。
何もない通学路を自転車で学校へ向かう。
至って平凡な日常。
高「もうすぐ、三年生か・・・受験だな・・・」
ア「じゅけん？」
高「まぁ、勉強を頑張らないといけないって事だ」
ア「ふぅん。でも、コウガは頭いいから大丈夫じゃない？」
高「・・・まぁ、ノーベンでそこら辺の名門は軽く行けるな」
ア「頑張っている人に謝った方がいいんじゃ・・・」
高「事実だ。受け入れない奴は情けない心の奴だ。そんな奴が名門に行く必要はない」
ア「相変わらず、厳しい事を言うね」
そうして話している内に、学校に到着した。
全く変わらない足取りで教室へ入り、いつものようにチャイムまで寝る。
ア「ホント、変わらないな・・・」
変化しない日々に少し物足りなさを感じるアリア。
そう思っている内に自分も眠気を感じ、眠りだした。

飛ばして放課後。
学校は卒業式の準備のため、昼で終了していた。
高雅は寄り道をせずに真っ直ぐ家に帰っていた。

高「早く帰って寝るか」
ア「ホント、相変わらず・・ッ!!、ゲホッゴホッ!!」
高「何、咽(むせ)てんだ?」
ア「ゴメン・・ゲホッ、・・・急に胸が・・」
高「ふ～ん。体は大切にしろよ」
ア「別に無理はしてないよ・・・って、治ってる」
高「あっそ」
胸の痛みが治った所で話は終わった。
家に辿り着き、玄関を開けて家の中に入ると、見慣れぬ靴があった。
高「?、ただいまー」
レ「コウガ殿!!、アリア殿は無事か!?」
高「は?」
高雅が帰って来たとたんにアリアの心配をするレオ。
しかし、それはレオだけではなかった。
フ「アリア様、元気です?」
ア「げ・・・元気だけど」
アリアが人間の姿になって無事なのを見せる。
エ「本当に無事かい?」
サ「痛みはなかったかのぉ?」
ア「痛みはさっきあったけど、もう治ったよ」
サ「な・・・・」
エ「本当に・・・・」
高「さっきから何の話をしてるんだ?。分かるように説明しろ」
紗「それは私から説明してあげるわ」
現れたのは紗奈恵だった。
紗奈恵の他に、文夫と勇人のお決まりメンバーが揃っていた。
文「既に他の奴らに話したが、まさか話した直後になっているとは・・・」
勇「正直、高雅が暴走しなければいいが・・・」
高「意味が分からねえよ。お前らは本当に意味が分からねえ会話か

ら始めるな」
紗「取りあえず、二人とも来なさい。そして、他の子たちは落ち着く事ね」
レ「・・・そうだな」
フ「正直、ボクは・・・」
エ「フィーラ君、心を決めなければ」
サ「まぁ、無理を強いるでない」
シ「あぅ・・・」
暗い顔をしつつ、五人はリビングを離れた。
残された高雅とアリアはソファに座り、話を聞き始めた。
紗「さて、高雅。これから話すことは嘘でも冗談でもないわよ」
高「はいはい、どーせルシフェルが復活したとか、そんな面倒なことだろ」
文「アリアはもうすぐ死ぬ」
ア「え・・・!?」
高「・・・・・・・・・」
文夫がそう言った途端、アリアは絶句し、高雅の動きも止まった。
そして、高雅は殺気を全開にして文夫の胸倉を掴み上げた。
ア「こ・・・コウガ!?」
高「喧嘩売ってんのか?」
文「落ち着け・・・と言っても無理な話だろう」
紗「でも、落ち着かなければ無理矢理でも止めさせてもらうわ」
高「・・・・・・・・・・・ちっ」
流石の高雅でも既に戦闘態勢に入った三人に勝つのは苦労するだろう。
勝てない事はないが、分が悪かったり、家で血を出すのも気に食わないため文夫を下ろした。
ア「えっと・・・どういう・・・」
紗「アリア、さっき胸が痛んだって言ったわよね」
ア「あ・・はい」

紗「やはり、その体、もう持たないかもしれない」
高「さっさと説明しろ」
高雅が怒りを抑えつつも、低い声でドスを効かせる。
文「いいか。アリアは元々普通の使いだ。それが、一人で大多数の力を扱えている」
勇「タイヤに空気を入れまくるとどうなる？」
勇人が分かりやすいように例えで教える。
それで感づいた高雅はすぐに言い当てた。
高「まさか・・・アリアの力の数が体に合ってないって訳か？」
文「そうだ。流石天才だな」
高「今さら、おかしいだろ！！。何で生まれた瞬間に死ななかった！？」
紗「最初から力が覚醒している訳じゃないのよ。アリアは貴方とであった力を覚醒させたため、体の負担が相当なものになったのよ」
高「じゃあ、俺がルシフェルを倒すように二度と回復しないよう全部出し切れば・・・」
紗「そんな簡単な策が思い浮かばないとでも？」
高「じゃあ・・・」
どうすればアリアは助かるのか、高雅は考え付かなかった。
真剣に考える高雅の横顔をアリアは心配そうに見ていた。
紗「高雅、受け入れなさい。そして、最も辛いのはアリアの方よ」
高「分かってる！！！！。だから、見殺しにする訳ねーだろ！！！！」
ア「コウガ・・・」
高「お前もぼさっとしないで、助かる方法を考えろ！！」
ア「う・・・うん」
紗「考えるのもいいけど、受け入れる覚悟をしなさい」
高「分かった分かった。お前らも考えろよ」
文「まぁ、最善は尽くすつもりだ」
勇「策が見つかるといいな」

三人は伝えるだけ伝えて帰って行った。
それを見計らって、レオ達がリビングへと戻って来た。
レ「コウガ殿・・・」
高「落ち込む暇があるなら考えろ。アリアを生かす方法を」
フ「で・・・でも、まだ決まった訳じゃないです」
エ「希望はまだ消えた訳ではない」
サ「協力して、方法を見つけ出すのじゃ」
シ「おぉ～！！」
ア「皆・・・うっ！？」
突然、アリアが胸を抱えて苦しみだし、床に倒れてもがきだした。
それを見た皆は全員が目を見開いた。
高「アリア！！！！」
真っ先に叫んだのは高雅だった。
アリアはもがき苦しんだ後、力尽きて気絶した。
皆、息を飲んでまさかだと思いこみ、棒立ちになっていた。
ただ、一人を除いて。
高「何してんだ！！。早くベットに運ぶぞ！！」
レ「え・・あ・・・ああ、済まない」
高「っち、お前ら・・・」
口では協力しようと言っていたが、いざとなって動けなくなった所を見て、高雅は怒っていた。
高雅はレオの背中にアリアを乗せ、取りあえず自分の部屋のベットへと運んでいった。
ロ「おぉぅ、まさか、こんなことになっているとは」

窓から中の様子を窺っていたログナが唖然としていた。
いつものように突然現れて飯をもらい、さっさと帰ろうと思っていたが、予想外の出来事を目撃してしまった。
ロ「アリアっちが死ぬだと・・・嘘だろ・・・」
ログナもまた、現実を受け入れられなかった。
しかし、目の前でアリアが倒れるのを見て、事実だと言うことは自覚していた。
ロ「やべぇよ。飯どころじゃなくなってるぞ、これ」
取りあえず、飯は諦め、ログナは戻って行った。
戸惑う心を落ちつける為に。

アリアが倒れた後、高雅が付きっきりで看病していた。
取りあえず、息はしている為、死んでない事は確かだった。
リビングで待機していた他の皆はこれからについて考えていた。
それも、最悪を備えての考えだった。
レ「アリア殿の身がもう持たなくなってしまったら、これからどうなるのだろう」
フ「今まで通り・・・にはいかないです」
エ「僕らが一人でも欠ければ、繋がりは狂いだすだろう。最悪、それぞれの道も考えられる」
サ「別れか・・・」
シ「えぇー!!」
皆、嫌なことばかり浮かんでしまっていた。
暗いムードから脱出不可能な状態になっていた。
そこに、高雅がやって来た。

高「目を覚ました。が、動ける状態じゃないみたいだ」
レ「そうか、良かった」
高「嘘つけ・・・」
レ「！？」
高「散々、アリアが死んだ後の話をしていて、生きてて良かったなんてよく言えるな」
フ「ち・・・違うです！！。そう言う訳じゃないです」
高「じゃあ、意味が無ければいいのか！？。お前ら少しは現実から抗え！！」
エ「しかし、仮にアリア君が生き抜いたとしても、その可能性は今の所０だ」
サ「万物はいずれ死を受け入れなければならないのじゃ。分かっておろぉ？」
高「・・・・・ふざけるなぁ！！！！！！！」
今までにない怒りを見せ、さらに殺気を放つ。
もろに殺気を浴び、皆は震えて動けなくなっていた。
高「何が受け入れるだ！！。そんなことは百も承知だ！！！！。問題はそれに抗うことだろうが！！！！。覚悟を受け入れたら、お前らは何もしないのか！！！！」
高雅の言葉に何も返事がすることができない五人はただ目を見開いて聞いていた。
高雅は怒りどころか呆れ果てていた。
高「現実ぐらい、俺だって見ている。ただな、あんな現実はぶっ潰す」
そう言って、高雅はリビングを出た。
残った皆は一斉に止まっていた息を吐きだした。
レ「我らは、何をしているのだろう」
フ「さっきの無駄な時間を取り戻すです」
エ「そうだな」
サ「行くかのぉ」

シ「お兄ちゃんを助けるぅ！！」
今までの暗かったムードは一気に変わった。
五人にもう最悪の想像は無くなっていた。
そして、皆は高雅の部屋へと向かった。
しかし、出た途端に高雅とアリアが目の前で立っていた。
アリアは高雅の肩を借りて立っていた。
高「やっとやる気が出たか」
ア「皆・・・ありがとう」
レ「いや、まず謝らせてくれ。我々は最低だった」
フ「覚悟とか言って怖いことから逃げてたです」
エ「だから、僕らも一緒に戦うよ」
サ「遠慮するんじゃないぞ、アリア殿」
シ「あたしも頑張るぅ！！」
それぞれアリアを助け出す方法を探す事を誓った。
それを見た高雅が小さく笑みを零した。
高「ふっ、勝ってな奴らだな」
ア「でも、嬉しいよ。ありがとう、皆」
高「んじゃ、たった一人の家族のために、俺も頑張るとするか」
ロ「ちょっと待ったあああああああああああああ「うざい」ごふっ！？」
突然、ログナが玄関を蹴り開けて割り込んできた。
しかし、高雅がアリアを一瞬放し、ログナの腹に蹴りを入れた。
再びアリアに肩を貸して元の体勢に戻った。
ア「ロ・・ログナ？」
ロ「は・・・話は聞いてたぞ・・・俺っちも協力するぜ」
蓮「ぼくだって協力するよ」
遅れてやって来た蓮田が顔を出す。
ロ「と・・・取りあえず、肩貸して」
高「その場で倒れてろ」
ロ「おぉ、贔屓（ひいき）だ・・・」

結局、ログナはその場に倒れてぴくぴくと痙攣していた。
蓮「ログナから聞いたけど、本当なの、こうがにいちゃん？」
高「どう聞いたか知らないが、多分本当だろう」
取りあえず、ログナが盗み聞きしていたのは高雅自体も気付いている。
ログナの伝え方は全く知らないが、きっとまともであることと信じたいことだ。
高「とにかく、アリアを助け出す方法を探すぞ！！」
皆「おおー！！」
廊下につっ立って話し続ける訳もいかないため、取りあえず現状況で締めた。
何とか締めくくれた所で、高雅達はリビングへと向かった。

リビングに集合して策を考えていたが、誰もアイデアが思いつかなかった。
全員、頭をフル回転させるも全く閃かない。
ロ「ああ～、寿司食いて～〈ボグォ！！〉うっ！？」
真剣な空気を和ませようとしたのか、ログナが変なことを言いだした。
が、結果は高雅の腹パンを喰らうだけであった。
フ「・・・思いついたです！！」
フィーラが高らかに手を上げて主張する。
全員の項垂れていた顔が一気にフィーラを注目した。
フ「コウガ様の持っている『選別の飾り』をアリア様が使うです」
高「それは思いついて既にやっている」
フ「ええ！？」
高「どうやら、アリア自身が力を作るため、これを使っても無駄だった」
そう言って、自分の首から『選別の飾り』を取りだす。
希望を無くすかのように虚しく揺れていた。
フ「そんな・・・これはキタと思ったのにです・・・」
レ「そうか、それを使っても無理だったのか・・・」
エ「楽園の賜物が通用しないとなると、生半可な考えではダメか・・・」
蓮「ねえ、こうがにいちゃん」
高「ん？」
蓮「どこかで調べることはできないのかな。その・・・アリアねえちゃんの助ける方法」
高「調べるねぇ・・・お」
蓮田にそう言われ、アリアを救うために調べる事を出来るのか考え

た。
すると、一つだけ思いついた。
高「確か、ずっと前にセバスチャンがお前の真の契約の方法を本で調べたよな」
ア「へ？」
高「って、その時はこっちが勝手に会話してたな。取りあえず、天国の宮殿に調べる場所があるはずだ」
ア「でも、一回崩壊してるし、もう無くなってる可能性も・・・」
高「じゃあ、見てくりゃいいじゃねえか。なぁ？」
ロ「・・・・・・は？」
高雅がログナの方を見ながら聞いて来る。
ログナは意味が分からず首を傾げるが、すぐに理解した。
ロ「・・・いやいやいや。俺っち、あの宮殿なんてそう簡単に行けないって！！」
高「どうにか潜入してくれ。これも人助けなんだ」
ロ「くぅぅぅ・・・流石の俺っちも、これは・・・」
蓮「ぼくからもお願い、ログナ」
ロ「わ・・・分かったぜよ」
こうして、ログナの潜入捜査が始まろうとしていた。

ロ「こちら、ログナ。正門に着いた。これよりミッションを開始する」

ログナが正門の前まで来ていた。
取りあえず、大きめの段ボールを被ってばれないようにしていた。
そして、段ボールを被ったまま宮殿内へ潜入しようとした。
兵「誰だ、こんな所に段ボールを捨てたのは？」
しかし、運が悪いと言うか何と言うか兵士に見つかってしまった。
兵士は段ボールを持ち上げてしまった。
ロ「！」
兵「！？、誰だきさｍ「強行突破ぁ！！」ぐはぁ！？」
もうふざけてられないと思ったログナは兵士を殴りとばして宮殿へ駆けこんだ。
しかし、兵士の伝達は迅速で、一瞬にして宮殿内全域にログナの侵入がバレてしまった。
宮殿内はどこもかしこも兵士だらけでログナは碌（ろく）な捜索が出来てなかった。
ロ「ちくしょ～、コウガっちめ～。報酬は飯1年分だぞこれ」
そう言って、愚痴を零しながらも影に隠れながら探す。
慎重になるログナであったが、背後から忍び寄る手に気付かなかった。

トン・・・

ロ「のわあああああああああ、許してえええええええええええ」
フ「うるさいです」
ロ「・・・へ？」
エ「やあ、ログナ君」
ログナの肩を叩いたのはエクスだった。
振り返るとエクスとフィーラが堂々と立っていた。
すると、一人の兵士がログナを見つけた。
兵「見つけたぞ、侵入者・・・っと、これはエクス様とフィーラ様」
エクスとフィーラをみた瞬間に敬礼し、背筋を伸ばした。

エ「彼は僕らが処分する。君等はもう持ち場についていい」
兵「し・・しかｓ「楽園の王の命令が聞けないとは・・・命知らずな」し・・失礼しました！！」
兵士はエクスの言葉を聞いた瞬間に急いでこの場を立ち去った。
ログナはこの様子を見て、どうも怪しいと思ったことがあった。
ロ「なぁ、最初からお前ら二人がいけば良かったんじゃね？」
フ「そんなこと、コウガ様は最初から気付いてたです」
エ「まぁ、気付いていてもさせるのがコウガ君だな」
ロ「くそぉ・・・」
フ「今さらです。とにかく、図書館でも資料室でも見つけてアリア様を助ける方法を探すです」
すると、今度は別の兵士が通りかかった。
ログナを見た瞬間に身構えたが、エクスとフィーラが目に入った時に真っ先に敬礼した。
エ「そうだ。君、資料室はどこにあるのかい？」
兵「はい、あのつきあたりの階段を上り、４階まで上って真っ直ぐ行き、３番目の曲がり角を右に曲がって５番目の右の扉です」
フ「え・・えっと・・」
エ「うん、分かった」
フィーラは途中で訳が分からなくなったがエクスはしっかりと理解した。
兵「ところで、そこで何を？」
エ「この不届き者に勉強を少し」
ロ「おまっ！？」
兵「成程。では、そのバカにバカな真似はさせないようにしっかりとお願いします」
そう言って兵士は礼をしてこの場を去った。
ロ「おい！！、不届き者ってなんだ、おい！！」
エ「これも場所を聞き出すため、コウガ君が考えていた事だ」
ロ「コウガっちめ・・・抜け目がねーなー」

フ「それより、早く行くです」
改めて、高雅の考えに呆れるログナ。
取りあえず、ログナを連行する形でエクスとフィーラは資料室を目指した。

一方、家で待機している高雅達は容態が変化したアリアを看病していた。
アリアは再び高雅のベットで寝込んでいた。
全員が高雅の部屋に入るのも邪魔な為、部屋にいるのはサミダレと高雅だけである。
サ「それにしても、急よのぉ」
高「そうだな・・・」
アリアが落ち着いて眠っている間に会話する二人。
高「こいつが死ぬなんて考えられねえっての。またどうせ、ケロッと治ってトラブル持ってくる人生の逆戻りだ」
サ「ほっほっほ、私は皆とプリンを食べたいのぉ」
高「フィーラと食ってろ」
サ「そうじゃ、三個入りのプリンを買うのを止めてくれぬか」
高「どうして？」
サ「最後の一個で喧嘩になるからじゃ」
高「俺の分という考えはないのか！！」
自分たちの分しか考えていないサミダレに対し、怒りの声を上げる。
ついカッとなって大声を出してしまい、咄嗟にアリアの方を向いた。
すると、アリアは目を開けて高雅の方を見ていた。

高「あ、わりぃ。起こしたか？」
ア「ううん、実を言うと最初から起きてた」
サ「何じゃ、眠っていなかったのか？」
ア「正直・・・眠るのが怖いから」
高「あれか、寝たら一生起きないと思っているのか？」
ア「良く分かるね？」
高「ベタだからな・・・」
ア「？、？？、？？？」
高「何でもない。容態は？」
ア「大丈夫。ありがとう」
高「んじゃ、待機組に報告してくる。ついでに飯でも食うか」
帰って来てから落ち着きが無く、昼ご飯も食べてなかった高雅は空腹だった。
それを悟ったアリアは申し訳なさそうな顔をした。
ア「ごめんね」
高「謝ったって空腹が解消される訳じゃない。サミダレ、看病よろ」
サ「分かったのじゃ。たらふく食ってくるといいのじゃ。それと、プリンを持ってきてくれるとありがたいのぉ」
高「やだ」
そう言って、高雅は部屋を出た。
サ「全く、素直じゃないのぉ」
ア「十分過ぎるくらい素直だよ」
サ「そうかのぉ・・・」
ア「そうだよ。すぐにプリンを持ってくるよ」
アリアがそう言った途端、ドアが少し開き、隙間からプリンが投げられた。
遅れてスプーンも投げ出され、全てサミダレに向かって真っすぐに飛んでいた。
そして、何も言わずにドアは閉められた。
ア「ほらね」

サ「アリア殿は良く見ているのぉ」
ア「そりゃぁ、いつも一緒だからね」
サ「ほっほっほ、そうじゃのぉ」
二人は笑い、場を和ませていた。
サ「まぁ、元気そうでなによりじゃ」
ア「私は大丈夫だよ。今度は本当に眠るからリビングで皆と喋ってきたら？」
サ「そうじゃのぉ・・・すまんがそうさせてもらうかのぉ」
ア「コウガには、私は平気って伝えてて」
サ「分かった」
サミダレも立ってドアを開けた瞬間、入れ替わりで高雅が入って来た。
サミダレは驚きつつも、高雅が「リビングに行け」と言って向かわせた。
ちなみに、高雅の手にはお湯の入ったカップラーメンと箸を持っていた。
そして、寝ているアリアの隣に座った。
ア「・・・・・・・・・」
高「・・・・・・・・・」
ア「・・・・・・・・・ねぇ？」
高「ん？」
ア「もしかして、分かってた？」
高「バレバレ」
ア「・・・・はぁ」
高雅は完全に見破っていた。
まだ、アリアが苦しんでいることを。
無理して笑顔を作っていたことを。
ア「やっぱり、コウガにはバレちゃうか」
高「ま、俺に隠し事は無理だ。諦めろ」
ア「は～い」

アリアは残念そうに返事をする。
高雅はカップラーメンのふたを開けて昼食を摂り始めた。
そんな光景をアリアはマジマジを見ていた。
高「・・・なんだよ？」
食べづらくなったのか、高雅が手を止めて話しかけてきた。
ア「いや・・・美味しいのかなって」
高「食うか？」
ア「いや、いいよ。私が食べても意味ないし」
高「そうか」
そう言うと高雅は再び手を動かした。
しかし、アリアはマジマジと見るのをやめなかった。
高「・・・食うか？」
ア「違うよ。高雅は人間じゃないのに、人間と同じ周期で空腹を感じるんだねっと今更ながら思っちゃって・・・」
高「そういやそうだな。まぁ、ログナも一緒だろ」
ア「そっか。じゃあ、私が変わってるのかな？」
高「俺はタイトが飯を食っている様子を見たことがない」
ア「そう言えば・・・」
高「まぁ、個人個人のことだ。深く考えるな」
ア「うん、そうするよ」
会話が終わり、高雅はまたまた手を動かし始める。
アリアも疑問が解けたのか天井を見つめていた。
数分間、何も喋らずに高雅は食事を終えていた。
高「それにしても、あいつら遅いな」
ア「？」
高「侵入に向かわせた奴らだよ」
ア「ああ、ゴメン。ボケてた」
高「しっかりしろよ。自分の事だろうが」
ア「ゴメン・・・」
高「・・・はぁ、何か面白くないなー」

ア「情報が見つかるまで暇だもんね。しょうがないよ」
高「有力な情報が手に入るまで動けないとは、暇で暇でつまらね」
退屈に飽きて溜息を零していると、玄関が開く音が聞こえた。
すると、リビングに向かうかと思いきや真っ先にこちらに足音が近づいていた。
ドアが開き、入ってきたのは想像していたのとは違う人物だった。
紗「また来たわよ」
高「今度は何の用だよ？」
やってきたのは紗奈恵一人である。
紗「アリアを預かりに来たわ」
高「・・・・は？」
ア「え？」
高雅もアリアも全く訳が分からなかった。
紗「こちらも全力で救い出す方法を探したわ。けど、その時に恐ろしい事実が分かったのよ」
高「今さら、死より恐ろしいことがあるのか？」
紗「これはアリアの事じゃないのよ。あなた達に被害が出るのよ」
ア「！？」
高「もっと意味が分からん」
紗「じゃあ、仮の話をするわ。アリアが消えてしまったとするわよ」
高雅は仮の話でもアリアが消えることに怒りを覚えていた。
しかし、アリアがそぉっと手を乗せて落ちつかせた。
紗「アリアの中にあった無数の力は共に消滅せず、抑えきれなくなって暴走してしまい、最後には・・・」
高「・・・何だよ？」
紗「軽く、この世を壊すわ」
高「い！？」
ア「この世を・・・壊す？」
紗「だから、この世でもあの世でもない異空間に隔離してもらうわ。大丈夫よ、私達が管理するから」

驚く二人を差し置いて紗奈恵は話を進める。
紗「それから、高雅は何をしでかすか分からないから、今後一切アリアと会うのを禁止するわ。もちろん、契約も破棄して、アリアに関する情報も与えないわ」
高「ふざけるな!!。勝手に決めるんじゃねえ!!」
紗「それと、アリア自身もこれから影響が出始めるわよ。記憶があいまいになったり、体が動かなくなったり・・・」
ア「え!?」
高「それが何だってんだよ!!。大体、アリアが死ぬわけねえだろうが!!」
ア「・・・・・・・・・・」
紗「高雅。アリアの体は崩壊を始めているわ。今は目に見えないけど、思い当ることがあるでしょ?」
高「それは・・・」
確かにあった。
先程、アリアはエクス達が資料を探しに行っている事を忘れていた。
単なるボケだと高雅は信じたいが、先程の話を聞いて疑心暗鬼になっていた。
ア「あの・・・私、行きます。異空間に」
高雅が迷っている隙に、アリアが勝手に決めだした。
高「お・・・おい、何勝手に決めてんだよ!!」
ア「ゴメン・・・けど、私は――」
アリアは何かを言いかけたが何も言わずに目線を逸らした。
そして、契約の紐を出し、高雅の前で断ち切ろうとした。
高「おい、止めｒ〈ガッ!!〉ぐっ!?」
高雅はすぐに止めさせようとするも、紗奈恵に取り押さえられた。
その隙に、アリアは紐を思いっきり引き千切った。
ベットから立ちあがり、アリアは紗奈恵にあることを言った。
ア「サナエさん、コウガを気絶させてください」
高「テメェッ!!」

紗「・・・分かったわ」
そう言って、紗奈恵は高雅の腹を殴り、壁に突き飛ばした。
容赦をすれば気絶しない程、高雅は頑丈の為、全く容赦しなかった。
その為、高雅は声を上げるまでもなく気絶した。
紗「・・・これでいいのね？」
ア「はい・・・」
紗奈恵は目の前で空間を開き、アリアを連れていく。
アリアは空間の入口で振り返り、高雅を見つめた。
ア「・・・さよなら」
雫を零しながらも、アリアは別れの言葉を掛けて、空間へ入った。
そして、高雅の部屋には寂しさを語る静寂が訪れた。

## 絆編　その3、心のつっかえ棒（前書き）

言い訳タイム

１０月に入って学校が始まった途端、課題パラダイス。
さらに、急にバイトが入ったりとどうしようもないぐらい時間がない・・・。

はいはい、いつも通りの言い訳ですよ。

本当にごめんなさい。

# 絆編　その3、心のつっかえ棒

レ「コウガ殿!!、どうしたのだ!!。コウガ殿!!」
高「・・・う・・・あ」
高雅が目を覚ました時、自分はベットで寝ていた。
心配そうに見る皆の姿の中にアリアの姿が無いのはすぐに気付いた。
高「あ・・アリアは!?」
レ「分からぬ。大きな物音が聞こえてやってきたが、気絶していた
コウガ殿しかいなかったぞ」
高「そっか・・・いっつ・・」
高雅は腹を抱えて苦しみだした。
あの時のダメージがまだ残っていたのだ。
シ「お兄ちゃん!?」
心配そうに手を掛けるシリア。
しかし、高雅には全く気が入ってなかった。
レ「コウガ殿、どうしたのだ!?。それに、アリア殿はどこだ!?」
高「・・・うるさい・・・」
レ「？」
高「あいつの事はもういい。終わったんだ」
レ「は？」
サ「意味が分からんのぉ」
高「もういいって言ってんだよ!!」
高雅が激怒して怒鳴る。
高「・・・・一人にさせてくれ」
そう言って、高雅は心配する皆をかき分けて部屋を出て行った。
高雅を追う者は誰もいなかった。
殺気で脅された訳ではなく、ただ悲しげな顔をする高雅を追い掛け
ることができなかったのだ。
皆はただ黙って高雅の背中を眺めるしかできなかった。

フ「コウガ様・・・凄く悲しそうだったです」
レ「これは、事が急変している。それも、コウガ殿がくじけている程だ」
サ「・・・・・それで、私らはどうするのじゃ？」
アリアもいない、高雅もいない。
何をすればいいか分からないレオ達は途方に暮れていた。
そんな時、玄関の扉が開く音がした。
ロ「俺は帰って来たぞおおおおおおおおお」
フ「一々うるさいです」
エ「まぁ、テンションが上がるのもしょうがないけど」
捜索を終えた三人が帰って来たのである。
少しして足音がこちらに向かって来ており、ドアが開かれた。
フ「あっ、いたです。リビングにいなかったからどこに行ったかと思ったです」
エ「皆でアリア君の看病かい？」
ロ「およよ？、アリアっちは？」
入った途端にそれぞれ言葉を話す。
エ「？、アリア君と高雅君はいないようだね」
レ「その事だが・・・」
レオが何があったか軽く話した。
しかし、本当に何があったか分からなかったため、本当に軽くである。
エ「・・・ふむ、物音がして、部屋に入ったらアリア君は既にいなくなり、コウガ君が悲しんでいた・・・」
レ「すまん。我にも分からないのだ」
エ「奇襲があったのかい？」
レ「それも分からぬ。ただ、コウガ殿が気絶していたため、考えられる」
フ「それで、コウガ様はどこにいったです？」
サ「一人にしてくれと言って、どこかに行ったのじゃ」

ロ「おいおいおいおい。こっちは命からがら、いい情報を得たのによぉ・・・」
レ「それは本当か!?」
ログナの言葉に喰らいつくレオ。
ログナは少し驚いて身を引いた。
ロ「落ち着けって。けどよ、肝心のコウガっちがいないんじゃ意味が無いんだ」
レ「それはどういう事だ?」
エ「僕から説明しよう。その間にログナ君はコウガ君を探してくれないか?」
ロ「けどよ、どこにいるのか分からねえじゃん」
エ「君が無意識に歩いていけばすぐに見つかるさ」
ロ「?、まぁ、分かった。じゃあ、蓮田を頼む」
エクスに言われた通り、ログナは再び外へ出た。
ログナが高雅捜索に出ている時にエクスは皆にアリアを助ける方法を教えた。

家を飛び出した高雅は人気のない森に入っていた。
高「・・・・・・」
今にも雨が降りそうな曇り空を眺めるも、虚空を見つめるばかり。
全てに関してやる気が無くなっていた。
高「・・・・・・・・・・・はぁ・・」

深い溜息を零し、その場に腰を落とす。
随分、奥まで歩いてきて疲れたのか、それともう動きたくなかった自分でも分かってなかった。
高「たった一人の存在が消えたぐらいで何でこんなに落ち込んでんだろう・・・俺・・・」
家族を失う悲しみもあった。
殺すことの感情にも慣れていた。
ただ、今回はまた違った感情が込み上げていた。
高「・・・・・・くそ!!!!」
訳の分からない感情に苛立ち、地面を殴った。
自分で自分が分からなくなり、頭を抱えて蹲った。
高「何なんだよ・・・もう・・・」
どうしてこうなったのか、何が原因で自分がこんな状態になっているのか。
ロ「コウガっちよ、お前にアリアっちが救えるか?」
高「・・・何の用だ?」
ロ「ノリ悪いなぁ」
エクスの言った通り、ログナは高雅を見つけることが出来た。
正確には、神出鬼没スキルで高雅の目の前に現れたと言う方が正しい。
高「で、何のようだ?」
ロ「いやいや、アリアっちを助ける方法が見つかってさ」
高「!?、本当か!?」
高雅が飛び起きてログナの肩を掴んだ。
問答無用で揺さぶられてログナの脳みそは大地震に見舞われていた。
ロ「おま・・ちょ・・・落ち着け!!」
高「あ、わりい。今更だったよな」
ロ「は?」
ログナの肩を話すと高雅はまた暗くなった。
急変する高雅を不思議に思い、首を傾げるログナ。

高「アリアは消えちまったからな。もう、どうだっていい」
ロ「え・・・」
すると、ポツポツと雨が降り始めた。
高「・・・にわか雨だな。結構降るぞ」
ロ「なぁ、コウガっちはどうするんだ？」
高「もうちょっと一人になって、アリアの事をふっ切るさ」
ロ「おま・・・・・いいのかそれで？」
高「いいんだ。あいつがそうしたからな」
ロ「へ？」
高「・・・・あーもう、面倒だな」
そう言って、高雅はログナに軽く説明した。
ログナはうんうんと頷きながら高雅の話を聞いた。
高「――――と、いう言う事だ。もういいだろ」
ロ「・・・お前、本当にいいって思ってるのか？」
高「は？」
ロ「どう見てもＢＡＤ　ＥＮＤじゃねーか！！」
ログナが高雅の肩を掴み、訴える。
しかし、高雅は足払いをしてログナを呆気なく転ばせた。
ロ「ふぎゃ！？」
高「そんなお気楽な考えを現実と一緒にするな」
ロ「でもな、コウガっちは諦めたくないだろ？」
高「バカ言え。あんなトラブルメーカーが消えればどれだけ平和になる事だか」
ロ「ほほぅ。だったら、何で俺っちがアリアっちを助ける方法を教えようとした時、焦ってたのかなぁ？」
高「焦ってねえよ」
ロ「焦ろよ！！」
ログナはすぐに立ちあがって高雅の肩を掴んだ。
しかし、さっきと同じように簡単に転ばせた。
ロ「おふぅ！！」

高「あいつはもう関係ない。契約もとっくに切れている」
めげないログナに対し、高雅は全くやる気を見せない。
すると、ログナの怒りが爆発し、高雅に掴みかかった。
ロ「んなこたぁ!!、どぅでもいいんだよ!!。大事なのはコウガっちがどうしたいかだ!!」
高「どうもしたくねえよ!!。あいつからふっ切ったんだよ!!。だから、どうでもいいんだよ!!」
二人ともムキになり、怒鳴りあう。
高雅がどんなに圧力を掛けてもログナは引くことはなかった。
そして、ログナが渾身の一撃を突いた。
ロ「じゃあ、何でアリアっちのことでそんなにムキになれるんだよ!!」
高「ッ!?」
高雅は自分でも気付いていなかったのか、かなり驚いていた。
それに気付いたログナが追い打ちを掛けるよう、さらに一言。
ロ「アリアっちの事で悩んでいるなら、本人に会いに行けばいいじゃねえかよ!!」
高「・・・・・・・・・・・・・・・」
高雅の動きが完全に止まった。
ログナは高雅を放し、ふと振り返って背中を見せる。
そして、カッコ良く渋い声でこう言った。
ロ「コウガっちよ、お前にアリアっちが救えるか?」
高「・・・・何やってたんだよ、俺・・・」
高雅は自分の情けなさに溜息を零した。
そして、立ちあがって意気揚々とやる気を取り戻した。
高「そうだよ、容赦なく殴れば解決じゃねーか」
ロ「・・・え?」
どこで道を間違えたのか、高雅はそう言って怖い笑みを浮かべていた。
高「そうだな。勝手に契約を切ったりしやがって・・・死より恐ろ

しい苦しみを味あわせてやる」
ロ「いや・・・助けｒ「おい、帰って作戦を考えるぞ。どんな拷問にしてやろうか」おーい、コウガっちー？」
ログナを置いて行き、高雅は元気を取り戻して家に帰って行った。
ロ「・・・えっと・・・イエイ」
何を言えば良かったのか、適当にピース。
自分で何をしているのか虚しくなり、ログナも高雅の家へと向かった。
そんな時、ふとログナは気付いた。
ロ「あれ、俺っちとコウガっちの感情が逆転してね？」

エ「――――と、いう訳だ」
ログナが高雅を探している間にエクスが皆にアリアを助ける方法を教えていた。
レ「成程。しかし、どうやるかが問題だな・・・」
サ「次は、それを実行する方法じゃのぉ」
フ「ん～、難しいです」
方法は分かったとしてもそれを実行するのが困難だった。
皆が迷っている中、玄関の扉が開かれると大きな声が聞こえた。
高「全員、リビングに集合！！」
高雅の声が家全体に響き、誰も聞き逃すことはなかった。
皆は突然の事でも何の迷いもなくリビングに向かった。
レ「コウガ殿！！」

フ「もぉ、どこに行ってたです？」
シ「お兄ちゃぁん♪」
サ「どうやら、元に戻ったようじゃな」
エ「良かった。いつものコウガ君だ」
蓮「あれ、ログナは？」
高「さぁ？。それよりも、皆、聞いてくれ」
高雅が皆の注目を引いて発表する。
高「いいか、アリアはどっかの異空間にいる。その場所を知っているのは紗奈恵達三人だ」
レ「ど・・・どういう事だ！？」
高「アリアの力は莫大過ぎてアリア自身を破壊するらしい。もちろん、体もあるが記憶とかも含まれる。そして、アリアの体が完全に壊れ、力が外に出た時、力の抑える媒体が無ければ・・・この世が吹き飛ぶ」
高雅は誰にも割り込みさせないで一気に喋った。
皆はいきなりすぎて少し困惑したが、あらかた追いついていた。
高「それで、紗奈恵達はアリアを異空間に入れてこの世でもあの世でもない場所にやったんだ。しかも、アリアは自分の意思で行きやがった」
フ「そ・・それは本当です！？」
高「ああ。だから・・・勝手な行動をしたあいつに会って、殴り飛ばす！！」
エ「え・・・助けるのではなくて？」
高「殴り飛ばす！！。助けるのはその後でいい。てか、助けなくてもいい！！」
ロ「そりゃねーよ！！」
突然、現れたログナがツッコミを入れる。
しかし、高雅は無視して話を続けた。
高「アリアのいない俺じゃ、あの三人の誰にも勝てない。だから、お前らの協力が必要なんだ！！。アリアを殴るために、頼む！！」

高雅が自らの頭を下げた。
フ「コウガ様・・・素直じゃないです・・・」
サ「・・・いや、素直じゃ」
フ「？」
高雅の行動を見て、サミダレはある言葉を思い出していた。
アリアが先程言っていたあの言葉だ。
サ「十分過ぎるくらい、素直じゃ」
フ「そう・・です？」
サ「それが分からぬとは、コウガ殿と釣り合えそうにないのぉ」
フ「意味が分からないです！！」
フィーラが怒り出すも、サミダレは見向きもせずに高雅に近づいた。
サ「頭を上げるのじゃ、コウガ殿。私はついて行くぞ」
高「サミダレ、お前・・・」
サ「ほっほっほっほ。面白くなってきたのぉ」
サミダレが笑い出し、面白がっていた。
すると、他の皆もサミダレに続いた。
レ「我もついて行くぞ」
フ「ボクだって行くです」
エ「全く、コウガ君は誰にも止められないな」
蓮「行こう！！、皆で！！」
ロ「べ・・別にコウガっちの為じゃないんだからね！！。ただ、コウガっちがアリアっちを殴らないように監視するだけなんだからね！！」
シ「あたしもぉ」
高「・・・悪いな」
そう言って、高雅は立ちあがり、目を閉じて軽く深呼吸する。
次に目を開けた時、高雅が心を決めた時だった。
高「行くぞ、皆！！。セイクリッドに殴り込みだ！！」
皆「おぉー！！！！！」
高雅に続いて全員が高らかに拳を上げた。

そして、セイクリッドへの挑戦が始まった。

アリアのノート、一ページ目

今から私、アリアは異空間に閉じ込められている間、サナエさんからもらったノートに文章を書きます。
何を書こうか決めてないけど、取りあえず、暇だから思い出でも書こうかな?。
まず、コウガと初めて出会ったのはコウガの家の玄関前。
・・・何も変哲もない場所だった・・・ちょっぴり寂しい・・・。
それから・・・・・修学旅行があったり・・・。
あれ、思い出せない。
記憶が消え始めている見たい。
記憶が無くなる前に、皆の事でも書いておこうかな。
コウガ、サミダレさん、フィーラちゃん、レンタ君、れ・・・レナ?、いやレタだっけ?。
それと・・・アリア?。
いや、これは私の名前だけど何か似ている響きがあったような・・・
後・・・リュウコ、リン、A君、B君、C君・・・あれ、どこまでだっけ。
確か・・・Eぐらいまであったような・・・でも、Dまでだったよ

うな。

・・・書き始めからグタグタだよ。

次はちゃんと書こう。

# 絆編　その4、侵略開始

天国は今日も平和であった。
外で門番している兵士が欠伸をするほどである。
門1「それにしても、暇だな～」
門2「そうだな。これも、コウガって奴のお陰だな」
門1「あーあ、一度でいいからコウガって方に会ってみてーよ」
暇すぎて他愛のない会話をしている二人。
すると、目の前にある訪問者がやって来た。
それは、先程来ていたフィーラとエクスであった。
門1「おや、エクス様にフィーラ様。忘れ物ですか？」
エ「ああ、今回も用事でここに来たんだが・・・」
門2「何でしょうか？」
フ「ふっふっふ、それは・・・」
フィーラが一息置いてから門番に堂々と言った。

フ「天国を乗っ取りに来たです！！！！」

その瞬間、空を飛ぶ黒い龍が宮殿に体当たりした。
さらに、空は突然発生した黒い雲が一気に覆い隠した。
門1「な！？」
エ「悪いけど、これは冗談ではない」
エクスは把握しきれていない門番の隙をついて腹を殴り、気絶させた。
フィーラも、夢幻でもう一人の門番を再起不能にしていた。
エ「さあ、かなりの大手に喧嘩を売ってしまったぞ」
フ「全てはアリア様のためです。家族のために、頑張るです！！」
エ「そうだな」
フィーラとエクスは門から普通に宮殿へと入り込んだ。

変わって、屋上。
サミダレが宮殿に体当たりし、崩壊した所から数名侵入していた。
高「よっと、サンキュ。サミダレ」
ロ「派手にいったなぁ」
蓮「怒られないかな？」
レ「怒りで冷静さを無くさせるのは良い作戦だ」
シ「とうちゃぁく」
高「んじゃ、サミダレはそのまま空を支配してくれ」
サ「任せるのじゃ」
サミダレは高雅達を送り届けて再び空へと飛び上がった。
レ「しかし、本当にこれでいいのか？」
高「天国が荒れればセイクリッドも動くだろう。後はとっ捕まえて聞き出すだけだ」
ロ「よっしゃー、暴れるぜぇ！！」
蓮「あ、待ってよログナ！！」
ログナは一人で走り出し、それを追う蓮田。
レ「いいのかコウガ殿。自由にさせておいて」
高「別に。暴れてくれればそれでいい。お前らも自由にしていいぞ」
レ「いや、我はコウガ殿といよう。一応、コウガ殿は非戦闘員みたいなものだ」
高「おいおい、あまりなめるなｙ「見つけたぞ！！、侵入者」早速だな」
兵士がすぐさま駆けつけて来て剣を構えた。
しかし、兵士は高雅が襲って来たというのに少ししか驚いていなか

った。
兵「本当に・・・紗奈恵様の言う通りだったのか」
そんなことを呟く兵士の声を高雅は聞き逃さなかった。
高「つまり、こうなることをあいつらは読んでいたと言う事か」
兵「と・・とにかく、本当ならば何としてでも天国を守る!!」
高「カッコイイ信念だな。けど、こっちも心のもやを無くすために天国を乗っ取るつもりだ!!」
そう言って、高雅はありったけの殺気を兵士にぶつけた。
強大な殺気の前に、兵士は震え、構えていた剣を落とした。
高雅はその隙に一気に踏み込んで兵士の目の前まで迫った。
高「所詮、覚悟の違いだ。そんな仕事の信念とかじゃなくて、自分の為の信念を持ちな」
高雅は兵士の腹を思いっきり殴った。
軽めの鎧もついているが、あまりの威力でかなりへこみ、普通にダメージが通っていた。
兵士は一撃で倒れた。
高「俺だって、こんな下級兵士ぐらい倒せる」
レ「そうか。ならば、コウガ殿の護衛は最小限で十分だな」
高「と、言う事で班は俺一人で」
レ「ま・・待つのだ!!。さすがに一人は危険ではないか!?」
高「心配するな。危険なの別の方だ」
レ「・・・そうか、シリア殿か。確かに、戦闘は出来ないだろう・・・」
高「いや、そっちじゃない」
レ「?・・・〈カプッ〉ッ!!」
レオの手に謎の感触が襲い、ゆっくり顔を向けるとシリアが噛み付いていた。
シ「おああういあぁ～《お腹すいたぁ～》」
レ「まさか・・・コウガ殿・・・」
レオが高雅に聞こうと首を戻すも高雅の姿は既になかった。

シ「おいうぅ～《お肉ぅ～》」
レ「止めるのだシリア殿！！。我を食べてもおいしくないぞ！！」
シ「うぅ～」
噛み付いた手を全く放そうとしないシリア。
このままレオが骨になるのも時間の問題である。
最も、骨すら残らない可能性が高いが・・・。
レ「あああああ、まずは厨房を占領するぞ！！」
シ「ふぁい」
レオは消えた高雅を気に掛けずにとにかく厨房を目指した。
自分の手が消えない内に・・・

門から堂々と入ったフィーラとエクスは順調に侵略していた。
来る兵士全員、夢幻の世界に閉じ込め、逆に操って戦わせたりと着実に進んでいた。
フ「おらおらー、やれやれーです！！」
エ「死なない程度、忘れてないだろう？」
フ「そのぐらい分かってるです！！」
そう言って、フィーラは夢幻に囚われている兵士達を巧みに操って進んで行く。
エクスは何もしていない訳でもなく、遠くから狙ってくる狙撃兵を空間を使っての不意打ちで気絶させていた。
そんな死角のない二人の侵略を止めるのは一筋縄ではいかない。
フ「適当にここにでも入ってみるです」

フィーラは一際大きな扉を見つけ、手に掛けた。
鈍い音を立てながらゆっくりと開き、中には巨大な階段が待ち構えていた。
エ「成程、ここは玉座のようだ」
フ「でも、誰もいないです」
そこには王様はおろか、兵士の一人も待ち伏せしていなかった。
流石に不審に思った二人は警戒を解かなかった。
すると、玉座の後ろからある人物が現れた。
紗「全く、楽園の王と女王が何をしているのかしら？」
フ・エ「ッ！！」
現れたのは紗奈恵だった。
今回は一人だけで他の二人は一緒でなかった。
紗「やっぱり、高雅の考えは怖いわね」
紗奈恵はゆっくりと階段を下りて来た。
そして、二人は徐々に大きくなる殺気に警戒心を強める。
紗「例え楽園の者だとしても、許さないわよ」
フ「ボクらだって負ける訳にはいかないです。何としてでも、アリア様を見つけるです」
エ「その為にも、サナエ君。君に口を開いてもらいたい」
紗「・・・随分と偉そうになったわね」
フ「普通に偉いです」
エ「そうだな」
紗「ふふ、そうね。でも・・・」
そう言って、紗奈恵の腕がハンマーと化す。
それと同時に、感じていた殺気が最大になった。
紗「今じゃ、強い方が偉いのよ」
フ「んぐ・・・でも、負けないです」
エ「ああ。アリア君の為にも僕らは反抗させてもらうよ」
紗「・・・はぁ、普通はすんなり言うこと聞くはずなのに。これも高雅のせいね」

エ「そうかもしれないです」
フ「確かに、コウガ君の影響が強いな」
二人は紗奈恵の殺気の前で高雅の名が出ただけで笑っていた。
紗「じゃあ、始めるわよ。こっちも高雅の為と思って動いてるのよ」
フ「そのコウガ様が反逆しているなら、ボクはコウガ様について行くです」
エ「僕もだ」
紗「そう、それじゃ、容赦しないわよ」
紗奈恵が構え、続いてフィーラとエクスも構える。
この広い玉座で２ＶＳ１が開始された。

変わってレオとシリア。
レオは動きやすいように獣状態で全力疾走していた。
ちなみに、今度は手から首の後ろを噛みつかれていた。
決して、腕を噛み千切られた訳ではない。
レ「厨房はどこにあるのだ！！」
シ「もぉ、あてあいおぉ《待てないよぉ》」
レ「待ってくれ！！。まだ顎に力を入れないでくれ！！」
徐々に血がにじみ出すも、レオは必死に堪えて宮殿内を駆け巡る。
途中、兵士がやってくるも軽くあしらって走ることを止めなかった。
？「おい、厨房はこっちだ」
レ「何・・・ッ！？」
走っていたレオが急に止まった。
それもそのはず、目の前には文夫の姿があったからだ。

今回は煙草を吸って壁にもたれかかっていた。
文「何している。首が無くなるぞ」
レ「あ・・・ああ」
怪しいと思い気も、首の痛みでそんなことを考える余裕はなかった。
レオはすぐに文夫が指差す扉に入った。
そこは本当に厨房であり、食材も放置されていた。
レ「さあ、シリア殿。好きなだけ食うが良い」
シ「んぁ？」
シリアがついにレオから離れ、目の前に置かれた食材を見つめていた。
シ「いただきまぁす」
そう言って、シリアは料理されていない食材にそのままかぶりついた。
シリアにとって、空腹を満たせればそれだけでいいのだ。
そんなシリアをしり目に、レオは文夫の方へ顔を向けた。
レ「どういう・・・事だ」
文「争いは好まねぇだけだ。今は紗奈恵がいないから本気出せねえし」
レ「しかし、セイクリッドの一員としてそれなりに実力は持っているはずだ」
文「怖いねぇ」
警戒心を全く解かないレオに対して余裕を見せる文夫。
文「お前達の行動は知っている。アリアの居場所だろ？」
レ「そうだ。我に教えてくれぬか？」
文「タダで教える訳にはいかねぇ。これも、元息子の為にやっている事だ」
レ「どういう事だ？」
文「俺らだって、嫌がらせで動いている訳じゃない。高雅に失う悲しみをこれ以上持って欲しくないだけだ」
シ「・・・そんなの・・・」

シリアが手を止めて文夫を睨みつけた。
そして、怒りを込めて文夫に怒鳴った。
シ「そんなの、酷過ぎる!!。生きてるか死んでるか分からないのはとても辛いよ!!」
いつもの緩い口調は消え、本気で言葉をぶつける。
シ「そんなことなら、いっそ死を確認した方がいいよ!!。あたしは・・・ずっと分からなくて・・・」
シリアが目尻に涙を溜め始めた。
シ「だから・・・お兄ちゃんに同じ思いをさせたくないのぉ・・・」
文「・・・そうか。別に永遠に隠すつもりはない。落ちついた頃にでも伝えようと思ってたさ」
レ「その言いよう、まさか・・・」
文「安心しろ。まだ生きている」
レオは文夫の言い方が気に入らずに怒りを込み上げる。
レ「善処は尽くすと言ったはずだ!!。なのに、そのやる気のなさはなんだ!!」
文「はっきり言ってやろう。もう助からない」
レ「ふざけるな!!。我々はアリア殿を助ける方法を見つけたのだ!!」
シ「あたし、もう怒った!!。この人、許さない!!」
文「おいおい、勘弁してくれよ・・・」
文夫はただ正直に言っただけと言う面倒そうな顔をしていた。
レ「そのやる気のなさ、訂正してやろう」
シ「残さず食べてやる!!」
文「全く」
文夫は頭を掻きながら、煙草をそこら辺に捨てる。
レオとシリアは未だにやる気を見せない文夫に向かって接近した。

アリアのノート、ニページ目

今度こそ、ちゃんと書くぞ。
取りあえず、さっきの事でも書いておこう。
確か、サナエさんがやって来て、コウガがどうとか伝えてたような。
それに、他の二人と一緒に天国へ向かうって言ってたし。
二人の名前はえっと・・・
もう、これじゃ、またグタグタだよ。
取りあえず、コウガが何かしている事が分かったってことで。
それはそうと、足の指って４本だっけ?。
確か５本だったような気がするけど、見てみると４本だし・・・
う～ん、どっちが正しいのだろう?。
手は５本だけど、足は違うのかな?。
取りあえず、今は４本だし、４本って事にしておこ。

## 絆編　その5、飛び入り参加のA（前書き）

取りあえず、これ程までに遅れた理由を話します。
めんどい人は飛ばして下さい。
最初に言いますが、実話です。

そして、本当にごめんなさい！！。

１０月１９日

課題やバイトで時間がなくても、やっと書き終えた作者。
作「ふぅ。にしても、１話分の間が空いてるな・・・」
こんな作品を温かな目で見てくれる人に感謝しつつも投稿しようとする。

投稿完了しました。

作「これでよし。息抜きにス○ブラXのタイマン募集でもしてから課題するかな」
そして作者は何事もなかったかのようにあるサイトでの募集へ向かった。

１０月２３日

作「次の話が大体書けたな」
今回は速い段階で次の話が7割以上完成した日。
久々四日投稿でも狙って見ようと思ってたこの時に気付いてしまっ

た。
作者は息抜きにアクセス解析でも見ようとログインした。
その瞬間、妙なことに気付いた。
作「・・・・え、１０月１３日？」
最新の投稿日が明らかにおかしいと思った。
バグかと思って何回かログインを繰り返すも変わらない。

つまり、投稿出来ていなかった。

作「え・・・どうして？」
１９日の分の話のデータは既に新しい話で上書きされている。
つまり・・・・。
作「・・・・うわ。やべぇ」
幸いにも、内容はそれなりに覚えていた。
だから、この記憶が持つ内に急いで書き始めた。

これ、実話です。
本当にごめんなさい。
ちゃんと投稿完了の文字は見て、チェックしたときは「その５」ありました。
何が起きたんだろう・・・。
とにかく、本当にごめんなさい。
今日は一気に二本投稿します。

これは、叩かれても何も言えない・・・

一方、高雅は人の気配が感じられない廊下を歩いていた。
高「どこに行くかなぁ・・・」
高雅は適当に宮殿内を巡っていた。
もちろん、莫大な殺気を放ちながらである。
その殺気のお陰で居場所はバレバレだが、誰も襲って来なかった。
いや、襲えないのである。
高「・・・！！、この殺気は・・・来たようだな」
新たな殺気を三つ確認した高雅。
それが誰のものであるのかはすぐに分かった。
高「既に二つは対峙しているのか。無事に何とかなればいいが」
他の方を心配しつつも、取りあえず自分は歩きまわる。
すると、背後から大きな殺気を感じた。
高雅は振り向きと同時に首を横に傾けた。
その瞬間、頭が元あった場所に拳が通った。
勇「避けたか」
高「まあな」
その拳の持ち主は勇人だった。
勇「お前、随分とデカイ事を起こしているな」
高「別にいいだろ。それよりも、吐いてもらうか」
勇「アリアの居場所だろ。聞いてどうする？」
高「殴りに行く」
勇「・・・・お前、アリアが助かると思ってないだろうな」
高「日本語分かるか？。俺は殴りに行くって言ったんだ」
勇「一つ教えてやる。もうアリアの体の一部は崩壊している。はっきり言って、助かるはずがｎ〈ドゴッ！！〉ぐっ！？」
高雅は勇人の言葉を遮るように顔面を殴った。
構えもなく殴ったのに威力は絶大で、勇人は数十メートル吹き飛ば

された。
勇人は空中で一回転して体勢を立て直し、着地した。
勇「ったく、現実を受け入れられない奴だな」
高「勇兄が運命を決める訳じゃないだろ。なのに、調子に乗って偉そうなことを言うのが悪い」
勇「いい加減にしろ!!。アリアの助かる道は無いんだよ!!」
勇人が怒り、殺気を全開にする。
高「勝手に人の運命を決めるなって言ってんだろうが!!」
高雅も怒り、殺気で周りにある窓ガラスを割る。
勇人はどこからか刃のついた巨大なブーメランを取り出した。
勇「言っておくが、力が無いからって容赦はしない。お前を半殺しにするまでズタズタにしてやる!!」
高「力が無かろうが、顔面殴れば倒れるだろ。ガタガタにしてやる!!」
天国で壮絶な兄弟喧嘩が始まろうとしていた。
どちらかが倒れるまで、喧嘩の収まりはないだろう。

宮殿の外。
こちらでは、サミダレが制圧していた。
既に相手からの攻撃はなく、サミダレは宮殿の屋上で休憩していた。
サ「龍一匹も手に負えないとは、情けない奴らじゃの」
外は完全に静かになっており、敵は一人も見当たらない。
ただ、中の騒動で物音はしていた。

サ「さて、これからどうするかの・・・ん？」
ふと、遠くを見ると人影が数個見えた。
距離は結構あるため、この場所からでは何なのかはまたく分からない。
サ「気になるの。行ってみるとするか」
サミダレは羽ばたいてその場所へ向かった。
近くで見たところによると、何者かが3人の天国の兵と戦っていた。
兵1「貴様、天国の者じゃないな。誰だ！！」
？「俺は屋根裏である事情を聞いてここに来た。主人公を助けにな」
兵2「どうやら、戦う気みたいだな」
兵3「ならば、容赦はしない！！」
兵士が一気に接近する。
しかし、突然暗い影が覆われ、兵士たちは足を止める。
何事かと周りを見渡すが、誰も空には注目しなかった。
サ「ほれ！！」
その隙に、サミダレが思いっきり羽ばたき、兵士を吹き飛ばした。
謎の人物は刀を地面に刺して耐えていた。
サミダレは向き合うように目の前に着地する。
？「なななななななななナ〇ガク〇ガ！？」
サ「お主、一体何者じゃ？」
？「俺は正義の味方、カイバーｍ「A殿じゃろ」・・・バレてる！？」
サ「バレバレじゃ」
サミダレの言葉に、謎の人物ことAが驚く。
サミダレはつい最近に気絶しているAを運んだことがあるため覚えていたのだ。
最も、それより前にもあったことはあるのだが。
A「てか、喋ってるし。ナル〇クル〇変種か？」
サ「それより、お主は何しにここに来たのじゃ？」
A「え・・ああ、主人公の高雅の助けに来た」

サ「ほぉ。何をしているのか分かっているのかの？」
A「あいつの考えは知っている。屋根裏から全部聞いてた」
サ「人様の家に勝手に侵入して盗み疑義とは趣味が悪い奴じゃ」
サ「そ・・・そういうお前は誰だよ！？」
Aは話を逸らすようにサミダレの事を聞いて来た。
龍の状態のサミダレを見るのは一応、初めてではないが、生きている状態で見るのは初めてである。
あの頃は、ただ〇ルガ〇ルガが死んでいるとしか見えてなかったのだ。
サ「私はサミダレじゃ」
A「サミダレ・・・サミダレってあれ？」
Aはふとサミダレの姿を思い出すも、人間の姿しか思いつかなかった。
サ「まぁ、お主が迷うのも無理はない。レオ殿と一緒と言えば分かるはずじゃが」
A「あ・・・トランスフォー〇ーだな」
サ「意味が分からぬが理解した顔になったようじゃ」
Aの言葉を理解できてないサミダレだが、あまり深く説明する気もないので、そういうことにしておいた。
サ「取りあえず、宮殿へ行くのか？」
A「ああ。高雅を助けるのが、仲間の役目だろ？」
サ「ふっ、そうか。なら、私に乗るといい。連れてってやるぞ」
A「ウワァオ、ナ〇ガクル〇に乗るなんて夢のようだ。乗せてもらうぜ」
Aは一っ跳びでサミダレの背中に着地した。
そして、サミダレは再び羽ばたきだし、Aを乗せて宮殿へ向かった。

宮殿内、玉座の間。
エクスとフィーラが紗奈恵と戦っているも、相手に全くダメージを与えられていなかった。
夢幻を見せたり、虚無で攻撃を撃ち消したりするも、それが手一杯だった。
フ「はぁ・・はぁ・・このままじゃ負けるです」
エ「確かに、僕らには攻撃方法が少なすぎる」
紗「そうね。あなた達は攻撃面で劣っているわね」
フィーラは完全に夢幻しか使えず、エクスは多少、力が使えるが威力が無過ぎる。
メインの虚無も打ち消す程度で攻撃には使えてなかった。
紗「そろそろ諦めたらどうかしら?」
フ「嫌です!!。諦めたくないです!!」
紗「そう・・・なら」
紗奈恵は手を上げると巨大なハンマーを創りだした。
それを見たフィーラが目を丸くして驚く。
フ「あ・・・あんなの避けれないです・・・」
紗「さぁ、これでも諦めないのかしら?。潰されたら痛いじゃ済まないわよ」
紗奈恵が脅しを掛ける。
フィーラはさっきまでの威勢がどこに消えたのか、巨大ハンマーを見た瞬間に怯えきってしまった。
しかし、エクスだけは諦める気はなかった。
エ「諦めない。僕らは家族のために戦っているから」
紗「・・・そう。高雅のダメな所を似てしまったわね」
そう言って、紗奈恵はハンマーを振り下ろした。
エ(く・・・この大きさでは空間に納まらない。どうすれば・・・)

フ「もうダメですーー！！」
フィーラは目を強く閉じて覚悟を決めた。
エクスは振り下ろされるハンマーから目を逸らさずに考えるが、何も策が思いつかない。
エ「くそ・・・済まない、コウガ君」
迫りくるハンマーの脅威に負け、諦めてしまうエクス。
しかし、その瞬間に窓から何かがこちらに向かってくるのが見えた。
エ「あ・・・あれは！！」
黒い影が段々近づいて・・・

ドゴォォン！！

止まらずに壁を破壊して侵入して来た。
紗「ッ！？」
エ「サミダレ君！！」
大胆な事をした犯人はサミダレであった。
サミダレは止まらずに、巨大なハンマーにもぶつかった。
紗奈恵はその反動で吹き飛ばされ、瓦礫に埋め尽くされた。
エ「おっと」
フ「あいたっ！？」
エクスは降って来る瓦礫を避けるも、フィーラは目を閉じたままのため、頭に瓦礫をぶつけた。
サミダレはエクス達の前に着地し、顔を合わせる。
サ「取り込み中だったかの？」
エ「いや、丁度いいタイミングだった」
A「な、俺の言った通りだろ？」
フ「ゲゲッ、なんであいつがいるです！？」
背中に乗っているAの顔を見て、フィーラが嫌な反応を示す。
Aはサミダレの背中から飛び降り、それを確認したサミダレは人間の姿になった。

A「よっと、いつ以来だっけ？」
エ「まぁ、話しては無いが、一応はシリア君が登場した辺りだ」
A「そうそう、お前ら死んでたなw」
エ「・・・なにか殺意が湧いた」
A「悪かったでござる」
少し調子に乗っていたAが頭を下げる。
そんな中、後ろの瓦礫が吹き飛んで殺気を感じ、すぐに警戒態勢に入った。
紗「大胆な事をするようになったわね、サミちゃん」
サ「意外と体を使うのが面白くてのぉ」
紗「本当に高雅の悪い所が似たわね」
A「あれ・・・あの人」
紗奈恵は砂を叩き落としながら殺気を強める。
Aは紗奈恵の事を思い出し、手のひらを打っていた。
A「ああ、あの時の良い人か」
紗「久しぶりね。けど、今回はいい人とはかぎらないわよ」
紗奈恵の殺気が徐々に強くなるにつれて、四人も殺気を放って体勢を取る。
とくに、Aの殺気だけは格別に違った。
エ（彼の殺気、凄いな。コウガ君に引けを取らないレベルだ）
フ（こいつ、本当にロリコンです！？）
A「どうやら、今回は敵みたいだな。けど、俺は高雅について行くぜ」
紗「ほんと、高雅の周りには悪い子ばかりね」
A「そりゃ、あいつは授業中はいつも寝ている悪い奴だからな」
エ「そんなコウガ君に不思議とついて行きたくなるものだ」
フ「例え悪に染まろうとも、ボクは仲間の為に戦えるです」
サ「皆、それぞれコウガ殿の魅力に見せられているのじゃ。当然、私もじゃがな」
紗「戦いは避けては通れないわね」

紗奈恵がハンマーを持ち、Aは刀を持ち、サミダレが龍になる。
A「あんたとは戦いたくないが、俺は主人公について行く！！」
紗「私に喧嘩を売ったこと、後悔しちゃダメよ」
Aとサミダレが合流し、攻撃を得たエクスとフィーラが紗奈恵に再び挑む。
４ＶＳ１と卑怯にも見えるが、紗奈恵から見ればまだ余裕がある実力だった。

アリアのノート、三ページ目。

コウガは今、何をしているのだろう？
私なんか忘れて、皆と楽しく過ごしてるのかな？
皆って誰？
皆の中に私はいるの？
それとも、私はいらないの？
・・・書きたい事が思い浮かばない。
楽しいことも、悲しいことも、辛いことも思い浮かばない。
何もない・・・
何が楽しくて何が辛くて何が悲しいのかな？。
今は・・・わからない。

# 絆編　その6、皆は一人のために、一人はひとりのために

A「必殺、バーニングバーストオオオオオオオオオ！！！」
Aは厨二病全開な名前を言いながら斬撃を飛ばした。
活性を込めた灼熱の斬撃である。
ちなみに、これは前に雪山で使ったわざと同じであり、名前が変わっているのは本人が忘れたからである。
しかし、紗奈恵はいとも簡単にハンマーで叩きつぶした。
A「うっそん」
紗「甘いわね」
紗奈恵は速度の力を使って一気に間合いを詰めた。
Aは活性で身体能力は強化していたため、反応は出来た。
紗奈恵の神速の攻撃を紙一重で避けたAは冷や汗をかいていた。
A「こわ・・・当たったら首が無くなるって」
紗「私は本気よ。おじけついたなら諦めて帰りなさい」
A「まだまだ！！」
Aが思いっきり刀を振るうも紗奈恵はすぐに距離をとった。
すると、龍になったサミダレがすぐに紗奈恵に跳びかかった。
紗奈恵は休む間もなく飛び上がり、サミダレは床に着地したと同時に追い掛けた。
A「おらあああああああああ」
Aもそれを予測して紗奈恵を追い掛けるため跳んでいた。
紗「なら、これでどうかしら？」
紗奈恵はハンマーを振り、空気を殴って波動を撃った。
狙いは体の大きなサミダレの方である。
しかし、その波動は途中で消えた。
紗「？」
紗奈恵は一瞬何が起こったか分からなかったがすぐに理解した。
遠くでエクスが虚無の力を使っていたのだ。

A「大チャンス、キタコレ！！」
サ「頂きじゃ」
紗「まだよ」
紗奈恵はAの攻撃を防ぐも、サミダレの体当たりまでは防げなかった。
Aも一緒に吹っ飛ばしたが、Aは活性している為、ダメージは少ない。
紗「ぐっ」
A「落っちろぉ！！」
吹き飛んでいる最中にAが紗奈恵を蹴り落とす。
落ちてきた所をサミダレがもう一度体当たりする。
紗「やるじゃない」
しかし、紗奈恵はギリギリで空間を開き、その場から逃げた。
A「読んでたぜ！！」
紗「なっ！？」
Aが紗奈恵の出てくる場所を読んで先回りしていた。
さすがの紗奈恵も読まれるとは思ってなく、隙だらけであった。
A「喰らえ！！」
紗奈恵はすぐさまハンマーでガードしようとするも、その瞬間にAの姿が揺らいだ。
紗「夢幻！！」
A「ブラストフレアアアアアアアア！！」
紗奈恵が気付いた時には、Aが最初と同じ技を放っていた。
名前が変わっているのは言うまでもない。
翻弄されていた紗奈恵にAの必殺技が決まった。
紗「が・・・」
紗奈恵はガードも出来ずにもろに喰らった。
灼熱の斬撃で皮膚は焼け、腹から血が溢れていた。
A「しゃあああああああああああ」
エ「いい連携だ」

サ「私らもやればできるもんじゃ」
フ「でも、相手が相手です。まだ油断できないです」
フィーラの言うとおり、紗奈恵は傷口をすぐに再生させていた。
サ「少し油断したわ。中々やるようね」
A「俺は元主人公だからな」
フ「一度たりともそんなことはなかったです」
紗「でも、私もアリア程じゃないけど、大抵の力は使えるわよ。力を封じないと再生し続けるわよ」
エ「確かに言うとおりだな。では、僕が彼女に虚無を撃ちこむしかない」
紗「まぁ、そうなるわね。けど、次であなた達は是認終わりよ」
紗奈恵は遠くにいるにも関わらず、腰を捻ってハンマーを構える。
紗「避けれると思わないように」
A「？」
紗奈恵の行動に？マークを浮かべる四人。
すると、紗奈恵は攻撃の範囲外だがハンマーを振った。
それと同時に空間の力を使った。
狙いはもちろん、四人である。
A「うお！？」
フ「みゅ！？」
エ「しまっ！？」
サ「何！？」
四人の足下は紗奈恵の力によって落とされ、落とされた場所は当然・・・
紗「終わりね」
紗奈恵の目の前であり、攻撃範囲でもある。
A、エクス、フィーラは着地に失敗し、サミダレだけが反応出来ていた。
サ「させぬ！！」
いち早く反応したサミダレが全員を庇うように覆いかぶさる。

自ら犠牲になって皆を守るつもりである。
紗「ふふっ」
A「ッ！？、やべっ！」
Aは何か気付いたのか、体を無理やり転がして庇ってくれているサミダレから離れた。
そして、Aが抜けたと同時にサミダレの体にハンマーが当たった。
サ「ぐっ」
エ・フ「ッ！？」
サミダレは潰されずに耐えきった。
耐えきったはずだったのだが、全く動かなくなった。
庇ってもらったエクス達も全く動かなかった。
エ「か・・・体が・・」
フ「動かない・・・です・」
A「あちゃぁ・・・やっぱり」
紗「感じてから動いたみたいね。良い反応ね」
三人の動きを封じた紗奈恵はAに向かい合う。
Aは頭を掻きながら困っていた。
A「静寂には敏感になってな。誰かさんのせいで」
Aは紗奈恵のハンマーから静寂の力を感じ取っていたのだ。
その為、無理やり体を動かしてサミダレから離れたのである。
それに気付かなかった三人は完全に機能停止していた。
紗「高雅ったら、本当に余計な事を教えるわね」
A「いやいや、こうして役に立っている事だし、余計じゃないぜ」
紗「私から見たら余計な事よ。でも・・・」
紗奈恵は再びハンマーを持ち、殺気をAだけに放つ。
対象は一人だけになったため、さっき感じたものとは段違いだった。
紗「入れ知恵は一人だけだったみたいね」
A「おお、こわいこわい」
紗「さぁ、あなたの活性だけで、私を倒せるのかしら？」
A「やってみなくちゃ分かんねえええええええ」

Aも殺気を紗奈恵に向けてぶつける。
勝ち目が薄いと言うのに、今だやる気があるAを見て紗奈恵は驚いていた。
紗「・・・全く、高雅には困らされてるわね」
A「主人公の仲間の末路は二つ。死ぬか勝つかだ!!」
紗「安心しなさい。殺したりはしないわ。でも、勝たせたりもしないわ」
紗奈恵は一段と殺気を強くするも、Aの変化は見受けられない。
Aは例え高雅の殺気だろうが引けを取らない肝っ玉の持ち主である。
紗奈恵は溜息を零しながら小さく愚痴を零した。
紗「ほんと、高雅も高雅の周りも成長したわね・・・」
A「先手必勝、おりゃあああああああああ」
軽く項垂(うなだ)れていた紗奈恵に向かって先に動き出すA。
紗奈恵も気を引き締め、迫りくるAに迎え撃った。

変わって厨房。
文「全く、せわしない奴らだ」
文夫はダルそうに頭を掻きながらレオの攻撃を避けていた。
レオは獣状態になり、障害が多い厨房の中でも自由に動き回っていた。
レ「そこだ!!」
文「おっと」

レオが的確に文夫の隙を狙うも、全て避けられてしまう。
しかし、避けたと同時に背中に重みを感じた。
文「ッ！？」
シ「あ～ん♪」
背中から抱きついて来たシリアが大口を開けていた。
そのまま、シリアは文夫の首裏に噛みついた。
レ「いいぞ！！」
文「全く、油断も隙もない奴らだなぁ」
レ「なっ、効いていないのか！？」
シ「硬ぁい・・・」
シリアは涙を流しながら口を開けていた。
文夫の首裏にはしっかりと歯型が残っていたものの、平気そうな顔をしていた。
文「軽くトラウマ思いだしたぞ」
シ「うぅ・・・顎が痛いよぉ・・・」
レ「大丈夫か、シリア殿？」
シリアが泣きながらレオの方へ向かう。
レオは心配そうに前足で頭を撫でてあげた。
文「仲間思いだな」
レ「当然だ。コウガ殿に教えてもらった」
文「あいつが仲間思いなわけ・・・あるか」
直接は教えるはずがないが、高雅を理解している者なら自然と分かって来るのだ。
素直じゃない高雅の事は文夫もそれなりに知っているが、レオ程ではない。
レ「文夫殿にはコウガ殿の良さが理解できないだろう」
文「あんな素直じゃない奴の良さなんて分かるか」
レ「ふっ、やはり理解してないな」
文「何？」
レオは文夫の事を鼻で笑った。

レ「コウガ殿は素直だ。そして強く、優しいのだ！！」
文「優しさで天国侵略とは感心せんな」
シ「お兄ちゃんは家族の誰が欠けても嫌だからぁ、本気で救おうとしているだけぇ」
レ「そして、その気持ちは我らも同じだ」
文「いい家族愛だな。だが、譲る気はしない」
文夫は首を回して軽く体を伸ばし始めた。
文「これ以上、舐めていると失礼だな。本気でやらせてもらうぞ」
準備運動が終わったところで、文夫も本気で殺気を放つ。
先ほどまでとは違う空気が一気に包み込んだ。
レ「シリア殿、戦えるか？」
シ「ちゃんと食べられるよぉ！！」
レ「そうか。ならば行くぞ！！」
レオとシリアが再び文夫に接近した。
文「こっちも高雅の為に動いてんだ。精々勝負になってくれよ」
文夫も指の骨を鳴らしながら迎え撃つ。
レオ達は使いの紗奈恵がいない文夫の実力は分からない。
それでも、只者ではない事をレオ達は自然と理解していた。

宮殿のある廊下で激しい兄弟喧嘩が繰り広げられていた。
勇「おらぁ！！」
勇人の投げたブーメランは壁を斬り裂きながら高雅に向かって真っすぐ飛んで行った。
高雅はそれをしゃがんでやり過ごし、一気に勇人に詰め寄った。

高「うらぁ！！」
勇「遅いんだよ！！」
高雅の速さは勇人から見ればたかが知れていた。
勇人は軽く交わして腹にクロスカウンターを入れる。
そのまま拳を振り切って高雅を吹き飛ばした。
高「がっ・・・つぅ・・・」
壁に背中を思いっきり打ちつけられ、高雅は痛みに堪えていた。
高「ッ！？」
その隙を測ったかのようにブーメランが高雅の首目掛けて飛んで来た。

ガッ！！

ブーメランの両先が綺麗に後ろの壁に刺さり、高雅を捉えていた。
少しでも動けば、高雅の首にブーメランの刃が襲う状態だ。
勇「そこからどうする？」
高「くっそ・・・・」
勇「・・・気付いていると思うが、お前の仲間も母さんと父さんに会ってる。当然、意味が分かるよな？」
高「アリアの場所がもうすぐ分かるって事だろ」
勇「アホ。お前らの負けが決まったって事だ」
勇人が近づいて来て近くに会った窓枠に腰を下ろした。
勇「お前さ、もう何も失いたくないだろ？」
高「・・・・・・・・・・・・」
勇「お前は色々と失って来た。普通の日常や親、自分の存在とかな」
高「それが何だよ・・・」
勇「お前のお陰で、天界が平和になった。地獄の奴らの動きも止まった。それは感謝している」
高「だから・・・何だよ・・・」
勇「これを期に楽になれ。日常に戻れ。非現実なことから離れろ」

高「・・・・・・・・・・ざけんな」
高雅はゆっくりとブーメランを持ち、力を入れ始める。
勇「止めとけ。血が無駄になるぞ」
軽く握るだけで皮膚がかなり抉られ、血が溢れていた。
しかし、高雅は止めようとしなかった。
高「俺の存在やら、天界やら、日常が恋しいやら、もうどうでもいい」
勇（・・・こいつ、まさか）
高「日常に戻れだ?、そんなことは俺が決める。ただな、その前にやることがあるんだよ」
徐々にブーメランが外れると同時に高雅の手が真っ赤に染まっていた。
それでも、高雅の目に揺らぎはなかった。
高「アリアを・・・アリアを殴らなくちゃいけねーんだよ!!!!!」
遂に高雅はブーメランを外し、勇人に投げ返した。
勇人は焦らずに普通にキャッチする。
高雅と違って力があるため、手は傷つかない。
高「こんな面倒事を呼び起こしたあいつを、殴らなねえと気がすまねえんだよ!!!!!」
殺気を爆発させ、宮殿内全体にプレッシャーが発生する。
尋常じゃない殺気の量に、勇人の体は硬直していた。
勇「ぅ・・・・やべぇ・・」
高「お前ごときに、俺の道を譲る訳にはいかねえんだよ!!!!!」
高雅は殺気と血を纏った拳で動けない勇人の顔面を思いっきり殴った。
今までとは違う威力に、勇人は外に思いっきり吹き飛ばされた。
しかし、すぐに体勢を立て直して空中で止まり、高雅を睨みつける。
高「俺はお前をぶっ倒してアリアを殴る!!!!!」
勇「おもしれぇ。義弟（おとうと）が義兄（あに）に勝ると思うなよ!!!!!」
兄弟喧嘩はさらにエスカレートした。

倒れても収まる様子ではない。
どちらかが、完全に再起不能になるまで続きそうだ。

アリアのノート、四ページ目

何だか身震いがする。
寒くないのに、怖いと言うか何と言うか・・・
でも、変だと思うけど・・・安心する。
私はこの感覚に覚えがある。
・・・・・いや、覚えてる。コウガだ。
・・・やだ・・・やだやだやだやだやだやだ――
コウガだけは忘れたくないよ・・・
一瞬だけでもやだよ・・・
コウガ・・・

## 絆編　その7、勇人マジギレ（前書き）

睡眠時間を削っての投稿。
こうまでしないと時間がないのです・・・

# 絆編　その7、勇人マジギレ

レオ達は厨房を抜け出し、戦いながら別の場所へ移動していた。
レ「待て！！」
文「落ち着け。戦いやすい場所に移動するだけだ」
レ「その前に貴様を倒す」
レオが猛攻をくり出すも、文夫に呆気なく避けられてしまう。
シリアもレオの背中に乗って出方を窺っているが、隙が見当たらなかった。
文（この辺りか）
すると、文夫は急に進行方向を変え、窓ガラスへと突っ込んだ。
ガラスを破って外へ向かい、レオ達も遅れないように後に続く。
そこには広めのバルコニーがあった。
そして、文夫は逃げるのを止め、レオ達に向き合った。
シリアも一旦レオから降りて床に立つ。
文「ここならさっきよりも戦いやすいだろ」
レ「それは我々も同じことだ」
文「度合いが違う。お前の戦い方じゃ、どこでも同じだろ」
レ「ふん。では行くぞ！！」
まず最初に動き出したのはレオだった。
レオはまっすぐ突っ込むかと思いきや、目の前で飛び上がった。
しかし、文夫は目でレオを追おうとはしなかった。
文「日の光で目くらましがしたかったようだが、お見通しだ」
文夫は殺気だけを頼りにレオの攻撃を避けた。
レオはすぐに文夫が避けた方を見たが、そこに文夫の姿はなかった。
シ「上ぇ！！」
シリアが空に指を差し、レオはすぐに顔を上げた。
レオはすぐに文夫を確認でき、相手の攻撃に備える。
しかし、文夫は空中で移動し、影に隠れていた日光がレオの目に入

った。
レ「くっ、しm〈ドゴッ！！〉がはっ！？」
レオが一瞬目を閉じたと同時に、文夫がレオの懐に潜って腹を殴った。
そのまま、レオを空中へ殴り飛ばし、一瞬で先回りして蹴り落とした。
シ「わっ！？」
文夫が狙った場所はシリアがいる所だった。
レオはシリアを巻き込んで地面に叩きつけられた。
文「まだまだだな」
文夫はポケットから煙草を取り出して火をつけ、余裕を見せる。
レ「く・・・・シリア殿・・・済まない」
シ「うぅ・・・痛いよぉ・・・」
レオに押しつぶされたシリアは相当なダメージがあった。
レオはすぐに立ち上がれたが、シリアは倒れたまま泣いていた。
レオは一旦、人間状態になり、シリアを抱えてバルコニーの隅へ避難させた。
レ「ここで待ってくれるか？」
シ「痛いよぉ・・・ひっぐ・・・」
レオの呼びかけより痛みの方が大きいようだ。
レオは自分の不甲斐なさでシリアを傷付けてしまったことに、少し日木津っていた。
文「もういいか？」
煙草を吸い終わってレオを睨みつけていた。
レ（くっ、油断していたとはいえ、シリア殿が瀕死にされてしまった。これはまずいか）
文「分かったか。お前では俺に勝てない」
紗奈恵がいないとは言え、想像以上の強さである文夫。
だが、レオには引くことを許されていなかった。
レ「済まないが我は諦めるつもりはない」

文「ふぅー、そう簡単には折れないか」
文夫は残っていた煙草の煙を吐き出し、指を鳴らした。
文「次は骨をいくぞ」
そして恐ろしい予告をする。
その言葉を聞いただけでレオは一瞬、身震いした。
しかし、それを押し殺して獣状態になる。
諦めを見せないレオを確認し、文夫は動き出した。
文「後で後悔するぞ」
文夫は一気に走り出したかと思えば、急に姿が消えた。
しかし、レオは焦ることなく意識を集中する。
レ（・・・ここだ！！）
レオは振り向きと同時に噛みついた。
噛みついた場所は文夫の腕であった。
文「何！？」
レ「ぐぐ・・・ふん！！」

ギチッ！！

レオはそのまま顎に力を入れ、文夫の腕を噛み千切った。
文「ぐっ！！」
文夫は後ろによろけるも、何とか踏みとどまる。
そして、溢れる血と強大な痛みに声を上げられなかった。
レオは噛み千切った腕をそこら辺に吐き捨てた。
レ「安心するのだ。事が終わればログナ殿に頼んで再生してやろう」
文「ぐ・・・やりやがったな」
レ「我もバカではない。コウガ殿の殺気に当てられて色々と学んでいるのだ」
レオもレオなりに成長していた。
まだまだ殺気には疎いが、それなりに理解はしているのだ。
レ「まだ再生を使わないということは、再生の力を持っていないよ

うだな」
文「まぁな。俺は使いじゃないからあまり力を持っていない」
レ「では、その出血だと長くは持たないようだ。勝負あったな」
文「ふっ、その甘さも高雅から教えてもらったのか？」
レ「何・・・がっ！？」
文夫がそう言った瞬間、大量の血を出しているにも関わらず、速攻でレオの上に乗った。
そして、レオの首に腕を撒いて締め上げた。
文「瀕死になったら道連れは基本だろ。甘いな」
レ「く・・・そ・・はな・・せ・・・」
振り落とそうとするも、首が上げられて上手く動けない。
文「くそ・・くらくらして来たか・・・」
文夫自身も限界に近付いていたが、先にレオの方が落ちそうであった。
レ「・・・こ・・が・・・ど・・・」
レオの足が震え、今にも倒れそうだった。
しかし、レオは意地を張って中々落ちてはくれなかった。
文「く・・・しぶと・・い・・・」
もう、どちらが先に落ちてもおかしくない状態だ。
二人は根気で耐え抜くしかなかった。
すると、文夫の背中に軽い重みが圧(の)し掛かった。
文「？」
シ「あ～ん」
乗ったのはシリアだった。
どうやら、外傷は擦り傷だけで中は平気だった為、加勢に来たのだ。
そして、大きな口を開けたシリアはそのまま・・・

グチャッ！！

文夫の首を噛み千切った。

獣状態のレオをも超える力で、一瞬で噛み千切ったのだ。
文夫は意識を無くし、レオから滑り落ちた。
レ「ぐ・・・げほっ、ごほっ！！」
レオは解放された瞬間に倒れ込んで咳き込んだ。
シ「大丈夫ぅ？」
レ「ああ・・げほっ・・す・・済まな・・・」
レオは咳き込みつつも、シリアの顔を見ようとした。
そこには、口から大量の血を流すシリアに似た悪魔の少女が見えた。
最も、それがシリア自身だが。
レ「ぎゃあああああああ、食わないでくれえええええええええ」
シ「？、食べないよぉ」
ついシリアに追いかけ回させられる恐怖を思い出し、さらに血で雰囲気が恐ろしい事になっていた。
ただ、自分の口にも血はついているのだが。
しかし、レオはその恐怖のお陰で咳き込むのが治っていた。
レ「あ・・ああ、済まない。しかし、これでは殺しているな」
そう言って、文夫の方を見る。
腕と首の後ろから大量の血を流し、目を開いたまま倒れていた。
いや、もう死んでいると言っていいだろう。
シ「再生はできるよぉ」
レ「それはそうだが、少し罪悪感が残るな」
シ「これもお兄ちゃんのためだよぉ。こうなる覚悟を決めてるはずだよぉ」
レ「・・・そうだったな。それよりも、シリア殿の怪我は大丈夫か？」
レオはシリアを押しつぶしたことを思い出し、心配する。
シ「大丈夫だよ。あたしは丈夫だからぁ」
レ「そうか。しかし、聞き出すことは不可能だな」
アリアの居場所を聞き出すのが目的だったが、結果的に殺してしまった。

シ「大丈夫だよぉ」
レ「？」
しかし、シリアは死んだ文夫に近づいて頭を掴んだ。
すると、レオに見せるように頭を指差した。
シ「ここを食べれば分かるよぉ」
レ「なっ！？」
流石に驚いたレオはシリアを引き止める。
レ「待つのだシリア殿！！。それはまずい！！。それ以上、追い打ちをかけてはならん！！」
シ「だってだってぇ」
レ「第一、シリア殿は力を失っている。食べても人肉の味がするだけだ」
シ「それでもいいもぉん。頭は一番おいしいからぁ」
レ「止めるのだ！！。本当に色々とまずい！！」
レオが必死にシリアを止める。
しかし、シリアは本当に食べたいのか口を開けて被り付こうとする。
レ「そ・・・それよりも、早くコウガ殿に会いに行くぞ」
シ「！！、お兄ちゃぁん？」
レ「そうだ！！。頭は諦めて速く行くぞ！！」
シ「うん行くぅ！！」
何とかシリアを諦めさせることに成功し、レオは一度高雅と合流に向かった。
ちなみに、文夫は放置したままである。

変わって崩壊寸前の廊下。
そこには高雅と勇人が激しく争っていた。
勇人は辺り構わずブーメランを投げ、壁や床を斬り裂き、高雅は問答無用のパンチでそこらじゅうにクレーターを作っていた。
その所為で、廊下はいつ崩れてもおかしくない状態である。
勇（こいつ、本当に力がないのか！？）
高雅の攻撃力は軽く活性したレベルである。
そして速さも普通に比べると速すぎる程。
勇（やっぱ、マリア様とルシフェルの子はふざけた奴だな）
高「悪かったな、ふざけた奴で」
勇「殺気で読むな！！」
勇人はブーメランを振り回すも高雅は軽く避けている。
高雅は隙を見ては殴りの繰り返しで、力がなくとも、経験と殺気で勇人を上回っていた。
高「おらおらおらぁ！！」
とことん殴り続ける高雅に対し、勇人は限界が近づいていた。
しかし、高雅自身にも限界はあった。
勇（お？、動きが遅くなってる。手の血が効いてるようだな）
高「うるせえ！！」
しかし、高雅自身も手から血が流れ、動きが鈍くなっていた。
勇人は少し離れると、再生の力で外傷を治した。
勇「お前じゃ俺に勝てないな。俺は何度でも再生できるからな」
高「だったら、再生される前に潰すだけだ！！」
高雅は休む間もなく勇人に立ち向かう。
しかし、次第に勇人の攻撃が避けきれなくなっていた。
勇「もう限界が近いな」
高「まだまｄ〈ザシュ！！〉つぅ！！」
今度は勇人が高雅の隙を窺い、ブーメランで斬った。
高雅はさらに出血が増え、よろめき始めた。

高「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」
勇「はぁ・・はぁ・・お前の負けだ。そのまま倒れろ」
高「ふざけるな・・・俺は・・まだ・・・」
強気な言葉を言うも、体はいうことを聞いてくれず、その場に座り込んだ。
すえに、高雅の目眩(めまい)に襲われ、まともに立つことすら難しかった。
高（くそ・・・動けよ!!。後少しで勝てるんだよ!!）
勇「はぁ・・・こいつで終わりだ」
勇人はブーメランを振り上げる。
しかし、高雅は全く動けないでいた。
ロ「ピンチの時に俺登場!!」
勇「何!?」
高「タイミング滅茶苦茶だな、おい。もうちょっといいタイミングはなかったのか?」
ロ「アホか。コウガっちがやばいのにタイミングとかあるか!!」
高「ごもっとも」
勇「ちっ」
勇人は焦ってブーメランを振り下ろすも、先にログナの再生の方が早かった。
高雅はすぐに避け、後ろに飛躍しながら距離を置く。
蓮「大丈夫、こうがにいちゃん?」
高「ああ、お前らのお陰で助かった」
ロ「まぁ、感謝なんかより飯をくｒ「腹一杯、殴ってやるよ」ごめんなさい」
ログナはすぐに土下座した。
勇「全く、お前は・・・」
高「勇兄も再生使うからおあいこだろ?。それとも、再生されると勝てないか?」
高雅がニヤリと笑いながら勇人を挑発する。
冷静さを保てない勇人は呆気なく挑発に乗り、怒りが爆発した。

勇「テメェ!!、手加減しているとは言え、もうブチギレだ!!」
勇人はポケットからあるものを取り出した。
高「ん?」
勇「言っておくけど、俺は母さんより強いぜ」
高「今さら脅しか?。完全に追い込まれてる証拠だぜ」
勇「どうかな。後悔しやがれ!!」
勇人が取り出したのは小さな赤い球体である。
それを、ブーメランにセットするだけで、いきなり高熱が発生した。
ロ「あつっ!?」
高「な・・なんだ!?」
勇「俺の武器は本来の力をあと二つ隠している。その前にお前らを潰す」
高「どこのフリー○だよ!!」
勇「うるせぇ!!」
勇人が問答無用でブーメランを投げる。
灼熱を纏ったブーメランは斬り裂かずに障害を溶かしていた。
高雅達はすぐにその場から離れた。
高雅達のいた場所はドロドロにとかされ、さらに廊下が限界を達して崩れ始めた。
高「おっと」
蓮「うわあああああああ」
ロ「死にたくなあああああああああああい」
高雅は軽く崩れゆく中でも冷静だが、蓮田とログナは違った。
高雅は崩れている最中にログナと蓮田を肩に抱えて下の階に着地した。
蓮田とログナを下ろして、すぐに勇人を睨みつける。
高「お前ら、離れてろ」
ロ「わ・・・分かった」
蓮「傷ついたら再生するから」
そう言って、ログナと蓮田は少し離れた。

勇「さぁ、第二ラウンドと行くか」
高「やってやろうじゃねーか」
勇人は戻ってきたブーメランをキャッチし、高雅は指の骨を鳴らす。
そして、二人は同時に動きだした。

アリアのノート、五ページ目

きえていくのをかんじる。
じかんがない。
かくごはきめてる。
でもこわい。
きえたくない。
あいたい。
こうがにあいたい。
そしてつたえたい。
ごめんなさいって。
かってなことしてごめんなさい。
でもね・・・
こうがのきおくにこんなわたしはいらない。

## 絆編　その8、兄ＶＳ弟（前書き）

月～金まで深夜からしかフリーな時間がない週ばっかり。
土日もバイトと睡眠で大抵が潰れる。
自分の生活を見返すと本当にギッシリだｗ。

笑い事じゃないですね。
遅れてすみません。

# 絆編　その8、兄ＶＳ弟

廊下が新しくなり、試合は元に戻る。
勇人は灼熱のブーメランを肩に担いで余裕を見せる。
勇「さぁ、仕切り直しと行こうか」
高「何が仕切り直しだ。お前のダメージは残っているだろ」
勇「だったら、追いつくまでだ！！」
勇人はブーメランを投げずに、接近して来た。
高雅に取って、唯一ダメージを与えられる接近戦であるため、好都合ともとれる。
勇人はブーメランを振り回し、打撃として使う。
高雅はそれをことごとく避けていくが、所々皮膚が焼けていた。
高「あっつ！！」
勇「どうした？。もうダメージが追いついたか？」
高「ぬかせっ！！
高雅は隙を見て勇人の頭を蹴ろうとしたが、見切られてしまいブーメランで防がれてしまった。
ブーメランに触れた靴は燃え上がり、高雅は目を丸くして焦った。
高「あちいいいいいいいいいいい」
高雅は足を振り回して消火しようとするも、火は全く消えない。
その隙を狙って勇人がブーメランを振りかざす。
勇「もらった！！」
高「なわけねーだろ」
勇「なっ！？」
勇人は殺気まで読みとって、高雅が本当に焦っているのが分かっていたが、それは違った。
高雅は焦っている殺気を放っていたのだ。
勇人は殺気を感じることはできるのだが、相手の思考まで読むことは出来ないのだ。

高雅は後ろから狙っている勇人をジャンプして避け、そのまま回し蹴りで勇人の顔面を蹴った。
それも、燃えている靴を使ってだ。
勇人は数メートル吹き飛ばされて倒れた。
高「おまけだ」
高雅は燃えている靴を蹴って脱ぎ、器用に勇人の腹の上に乗せた。
勇「うわちちちち！！」
勇人の服は直に炎を浴びて、燃え上がり始めた。
勇人は手や地面で擦って必死に鎮火させていた。
その光景を高雅は笑いながら指を差していた。
高「ははははは、おもしれぇ！！」
ロ（すげぇよ。力がないのに翻弄してるぜ）
蓮（やっぱり強いね、こうが兄ちゃんは）
影から見ていた蓮田達がつい呟く。
すると、勇人が起き上がってポケットから青い球体を出した。
勇「調子に乗るなよ！！」
高「もう次を使うか。追い詰められ過ぎだろ」
高雅の言葉も聞かずに、勇人は青い球体を装着した。
すると、ブーメランの周りに水蒸気が発生した。
高「次は何だ？」
勇「受けてみれば分かる」
そう言って、勇人はその場でブーメランを振った。
すると、高雅は熱い蒸気が体全体に当たった。
高「？、そこまで熱くないぞ」
勇「どうかな？」
高「・・・！！、あっつ！！。てか、動けね！！」
急に高雅についていた水滴の温度が上がり、高雅の動きを封じた。
徐々に上がる水滴の温度に、高雅はまたやけどが増えていた。
拭いたくても、全然動けない体でどうしようもなかった。
勇「へっ、静寂を兼ねた水で動けないだろ。こいつで終わりだ！！」

勇人は高雅に向かってブーメランを投げた。
ロ（おいおい、やばいぞ！！）
蓮（こうが兄ちゃん！！）
二人は助けに行きたくても、既に間にあう距離ではない。
高雅がきっと何かしてくれると祈り続けた。
高「・・・・こんな単純な騙しに引っ掛かるとか、情けない」
勇「何っ！？」
高雅は普通に手を動かし、ブーメランをキャッチした。
そして、水滴を拭って静寂が全く通用してない事を示した。
勇「何故だ！？」
高「これ、忘れてないか？」
そう言って、高雅が取り出したのは『選別の飾り』である。
アリアからもらったネックレスであり、自分の好きに力を無効にできる代物だ。
ただし、直接自分の体に影響が出るものではないと、その効果は発揮しない。
高「活性自身は水滴の方だったからどうにもできなかったが、静寂は余裕だろ」
勇「くっ・・・うかつだった」
高「そして、何もない俺は武器が欲しい所さ。勇兄の殺気で読ませてもらった。ブーメランが強化するってことを」
勇「だから、最初はブーメランを取ろうとしなかったのか」
高「そっ。ぶっちゃけ、活性だけだったら触れられなかったが、静寂が入ったお陰で俺にも触れられるようになったし、そろそろ盗み頃かなっと思った訳だ」
ロ「すげえええええええええええええええええええ」
遠くから聞いていたログナが大声でほえる。
蓮田はログナと違って静かに高雅の凄みを感じていた。
高「さぁて、一気に決めてやろうか」
勇「ふん、例え武器がなくても、お前ごときにやられる訳がねーだ

ろ」
高「どうかな？」
高雅はブーメランから赤い球体を取り外した。
すると、ブーメランから水蒸気は消えた。
勇「何をするきだ？」
高「これって言わば活性の塊だろ。利用するしかねーだろ」
高雅は赤い球体を握り、活性を吸収した。
かなり濃縮された活性が全て高雅の体へと移ったのだ。
赤い球体は透明な球体へ代わり、高雅はそれを投げ捨てた。
そして、高雅は一回だけ深呼吸した。
その瞬間・・・

ドゴッ！！

勇「がはっ！？」
高雅は瞬く間に勇人に近づき、腹を殴った。
活性で身体能力は尋常ではなく、速さも強さも何十倍にも上がっていた。
そんなパンチをもろに喰らった勇人は痛みで硬直していた。
さらに、高雅は器用に勇人を吹き飛ばしてなかった。
高「ふ～ふふ～ん♪」
適当な鼻歌をしながら、勇人の後ろに回った高雅は腕をぐるぐる回転させていた。
そして、その回していた腕を思いっきり振って「くの字」になっていた体を「逆くの字」にした。
用は後ろから思いっきり殴ったってことである。
今度はぶっ飛ばし、壁に叩きつけた。
高「中々な活性だな」
そう言って、勇人の飛ばした方を見る。
殺気がまだ消えてないため、勇人は倒れていない。

高雅はそれが分かっていて勇人から目を放さなかった。
勇「・・・てめぇ、本当に俺を怒らせたな」
高「何回怒れば気が済むんだ？」
勇「黙れ！！」
勇人は何かする訳でもなく、怒りのまま高雅に突進して来た。
高雅は突進してくる勇人の頭を掴み、受け止めた。
高「このまま潰す訳にもいかねえ。さっさとアリアの居場所を吐け」
勇「さぁな。俺は何も知らねえ」
高「・・・そのようだな。殺気からも読みとれねえ。だとすると・・・」
高雅は勇人を放り投げ、壁に叩きつけた。
そして、ブーメランを投げ、先端を器用に刺して勇人を捕えた。
だが、勇人は既に気絶しており、もう戦う力は残ってなかった。
高「結局、あいつしか分かってねえだろうな」
三人の中で一番強くて権利がある奴と言えば一人。
おのずと答えが見えてきて、高雅は溜息を零した。
高「・・・仕方ない。ジッとしている暇はない。てか、天国兵の動きがないな」
高雅は勇人と一緒に襲ってくるかと思っていたが、勇人が倒れた今でも兵は来ない。
殺気は既に解いており、とくに近づけるはずである。
ロ「よっ、おつかれちゃん」
高「どこの上司になったつもりだよ」
蓮「すごいね、こうがにいちゃん」
蓮田とログナが顔を出す。
レ「おお、ここにいたか、コウガ殿」
シ「お兄ちゃぁん！！」
続いて反対側からレオと手を振っているシリアがやって来た。
高「あれ、お前ら無事だったんだ」
レ「まぁ、少しばかり強行したが、何とかな」

高「別に頭は食べて良かったぞ」
レ「なっ！？」
高雅が呆気なくレオの殺気を読みとり、何をしていたか理解した。
そして、レオが最も気にしていた所を読み当てた。
レ「いやいや、教育上よろしくないぞ！！」
高「人を食う時点で手遅れだけどな」
シ「あの人ぉ、食べていぃ？」
シリアが指を差すのは勇人の事である。
蓮「た・・・食べちゃうの！？」
ロ「マジで食うの！？」
高「アホか。そんな暇はない。さっさと行くぞ」
高雅はシリアの話をさっさと流し、歩き始めた。
レ「さ、シリア殿。速くコウガ殿について行くぞ」
シ「うぅ～・・・お腹すいたぁ・・・」
レ「ビクッ！？」
最も恐ろしい言葉を聞いて、レオは一気に高雅に隠れた。
レ「こ・・・コウガ殿。何か、シリア殿の腹を満たす物はないか？」
高「ない」
レ「わ・・・我はどうすればいいのだ？」
ロ「笑えばいいと思うよ」
高「生きれ」
レ「他人事のように言わないでくれ！！」
シ「じーっ」
レオが必死にせがむんでも、高雅は相手にしない。
シリアがレオを何かを訴える眼差しで見つめていた。
ちなみに、涎（よだれ）を垂らしながら。
どう見ても、得物を狙う目であった。
レ「シリア・・・殿・・・？」
シ「あのぉ・・・レオさぁん・・・ちょっといいですかぁ？」

レ「敬語!?。シリア殿が敬語だと!?」
シ「そのぉ・・・腕一本・・・必要でｓ「いるに決まっておる!!」
なぁんだぁ」
シリアがさぞかし残念そうに項垂れる。
だが、シリアの殺気を感じているレオは常に警戒していた。
高「・・・いい加減に行くぞ」
痺れを切らした高雅が声を掛ける。
普通に喋っていたが少しばかりの殺気を感じ、皆は大人しく従った。
その後、シリアの空腹はそこら辺にいた兵を食べさせておいた。
ちなみに、蓮田とログナにはその光景を見せていない。

アリアのノート　六ページ目

むねがいたい。
はりさけそうなほどいたい。
・・・くるしい。
・・・さみしい。
・・・こわい。
・・・つらい。
・・・かなしい。
・・・しにたくない・・・。
またわらいたい。
みんなと・・・みんな・・・
・・・みんなって・・・なに?

# 絆編　その9、最後の関門（前書き）

よく見たら7日投稿になっているこの頃。

# 絆編　その9、最後の関門

玉座の間
そこでは、紗奈恵が玉座に座って優雅にカップに入れた紅茶を飲んでいた。
そして、巨大なハンマーに体を潰されて倒れているＡの姿があった。
紗「高雅はまだかしら？」
Ａ「ち・・・ちくしょぉ・・・」
紗「残念ね。あなたじゃ役不足だったみたい」
Ａ「高雅・・・来てくれ・・・こいつは主人公じゃないと勝てねぇ」
紗「安心しなさい、もうじき来るわよ」
Ａ「あ～あ、全然手が出なかったなぁ」
紗「体が潰れているのに余裕ね」
Ａ「まぁ、活性してるから大丈夫だけど、持ち上げられません」
紗「無理ね。そのハンマーの重さは裕に１０トンは越えているのよ」
Ａ「１０トンは持てるんだけどそれ以上はきついな」
紗（・・・本当に彼は人間かしら？いくら活性しているとはいえ、１０トンを持ちあげられるかしら）
Ａの常識外れに紗奈恵は本当に驚いていた。
本気でＡを強くすれば、いつか高雅を超えるかもしれない。
そういう考えすら出ていたのだ。
紗「・・・来たようね」
Ａ「おっ？」
天井に罅（ひび）が入り、小さな瓦礫がこぼれ落ちる。
次第に罅は大きくなり、亀裂に変わっていった。
最後に、崩壊と共に人影が見えた。
紗奈恵は立ち上がって落ちて来る者達を見ていた。
Ａ「きたきたきたきｔ〈ゴンッ！！〉ぶっ！？」
瓦礫がＡの頭に落ち、さらにハンマーの上に落ちてきた者達は着地

した。
その正体は当然、高雅達であった。
高「到着っと。てか、何でハンマーが落ちてんだ？」
レ「分からぬ。戦った後かもしれん」
ロ「し・・死ぬかと思った・・・」
蓮「怖かったけど、おもしろかったよ」
シ「あぁー！！、皆が倒れてるぅ！！」
シリアが驚いて指を差す方にはサミダレ達が倒れていた。
ちなみに、高雅達はＡの存在に気付いていない。
まぁ、高雅は殺気で分かっているのだが気付いてないふりをしているのである。
高「負けてるな。まぁ、相手が悪いよな」
紗「そうね。私は一筋縄ではいかないのよ」
紗奈恵がハンマーを手にとってそう言う。
それを見た高雅は蓮田とログナを抱え、真っ先に跳び下りた。
シリアとレオも分かっており、すぐに下りた。
そして、紗奈恵は思いっきりハンマーを振り上げた。
あのまま乗っていたら、また上に逆戻りされていただろう。
高「よっと、いきなりだな」
高雅は着地してすぐに蓮田とログナを置き、紗奈恵に向き合う。
レオとシリアも着地して紗奈恵の方に顔を向けた。
紗「どうやら、二人は倒したようね」
高「まあな。一人はこっちがやってくれたようだが」
そう言って、高雅はレオとシリアの方を見た。
紗「全く、あの二人はやる気あるのかしら」
高「過ぎたことを考えてもどうにもならないだろ。それよりも、早くアリアの居場所を教えろ」
紗「・・・高雅、アリアの気持ち分かってるの？」
高「分からないから殴りに行くんだ。問い詰めてやる」
紗「・・・はぁ、乙女心が分かってないわね」

高「俺は男だ。そんなもん、知るか」
高雅は紗奈恵の言葉を聞こうとしない。
A「なぁ、何で片方だけ裸足なんd「シリア、こいつ食ってろ」ちょっ！？」
シ「わぁい」
A「ちょ、良く考えると至福のしゅんk〈ガブリッ〉いってえええええええええええええええ」
シリアがAの腕にかぶりつき、Aは悲痛な声を上げる。
Aはさっきまで倒れていたのに、急に跳ね起きて走り出した。
高「で、お前一人でどうするつもりだ？」
高雅は再び紗奈恵に向き合う。
すると、紗奈恵はその言葉を待っていたかのようにニヤリと笑った。
紗「一人じゃないわよ」
高「？」
紗奈恵が手を叩いた瞬間、全方位から空間が開き、大量の天国兵が現れた。
その数は軽く１００を超え、いきなりの登場に皆驚いていた。
高「ほぉ、こんなにいたか」
レ「まずいぞ。数で差がある」
紗「さぁ、どうするかしら？」
高「・・・・・・」
高雅は何故か目を閉じた。
それを見たレオが何かを悟り、急に走りだした。
紗「・・・殺気で全滅させるつもりね、させないわよ」
高雅の考えが紗奈恵にバレ、紗奈恵は動き始めた。
しかし、レオの方が先に分かっており、紗奈恵の前に立ち塞がった。
レ「やらせはせんぞ！！」
紗「いい反応ね、けど私だけじゃないのよ」
紗奈恵が動くと同時に、兵も動き出していた。
狙いはもちろん高雅である。

レ「くっ」
紗「彼らも少しは度胸があるのよ」
既に紗奈恵と話をつけていたのだろう、兵達は怯えることもなく突き進む。
すると、高雅はまだ未完成な殺気を放った。
完全な殺気でないため、兵の半数しか瀕死に出来なかった。
残った兵は全員それなりにできる奴らである。
高「くそっ」
レ「ぐはっ!?」
高「!!、レオ!!」
兵に気を取られている内に、レオが吹き飛ばされていた。
助けに行きたくても、既に兵が目の前まで迫っていた。
兵「行け!!。力がない今がチャンスだ!!。全員で一気に決めろ!!」
一気に高雅を囲んだ兵達は集団で襲いかかった。
高雅は兵に埋もれてしまい、見えなくなってしまった。
レ「つぅ・・・コウガ殿!!」
紗「さぁ、どうするかしら?」
紗奈恵は高雅の方を見物していた。
レ「くっ・・・今助けに・・つっ!!」
思ったよりダメージが大きく、レオは立ち上がれなかった。
すると、兵達に異変が起きた。
高「くぎぎぎ・・・じゃ・・邪魔だあああ!!」
高雅は大量の兵を思いっきり吹き飛ばした。
勇人から奪った活性がまだ残っていたのだ。
だが、そのタイミングを見計らったように紗奈恵が巨大なハンマーを振り下ろしていた。
高「いっ!?、謀ったな!!」
紗「当然」
完全にこうなることを分かっていた紗奈恵。

その絶妙なタイミングにもう避ける事は出来ない。
高雅は真っ向から受け止めた。
高「ぐっ！！」
紗「受け止めた！？」
A「すげっ！！」
Aですら受け止められなかったハンマーを高雅は受け止められた。
しかし、受け止めるだけで精一杯のため、身動きできないでいた。
紗「でも、その余りものの活性でいつまで耐えられるかしら？」
高「くっ・・・全くその通りだな・・・」
活性が無くなればすぐに潰れてしまう。
たとえ受け止めたにしても万事休すの状態だった。
A「タイト！！、高雅の武器になって来い！！」
タ「承知した」
Aはタイトを刀に変え、高雅に向かって滑らした。
A「使え！！」
高「じゃあ、遠慮なく！！」
高雅は滑って来た刀を足で引っ掛け、少し浮いたところを蹴飛ばした。
それも、まっすぐに紗奈恵に向かってだ。
紗奈恵は止むを得ずに手を放して刀を避けた。
その瞬間に、力が無くなったハンマーから高雅は逃げだした。
高「ふぅ、助かった」
紗「素直にやられてくれないわね」
高「そっちも素直にアリアの居場所を教えろ」
どちらも一歩も引かない。
すると高雅はポケットからある物を取り出した。
それは勇人から奪った静寂の力が込められた青い球体だった。
高「これをお前に打ち込めばこっちの勝ちだ」
紗「そうね。さすがにその静寂を喰らえば私の負けは確定ね。それで？」

高「絶対に当ててやる」
紗「えらい自信ね。どこから湧くのかしら？」
高「さあな」
紗「ッ！？」
紗奈恵が僅かな殺気に気付き、後ろを向く。
そこには刀を構えるタイトの姿があった。
紗「おっと」
高「ちっ、気付かれた」
紗奈恵は紙一重でタイトの一太刀を避けた。
高雅の殺気で気付かれないようにしていたがタイトが力んで殺気が出たのだろう。
タ「くっ」
紗「甘い殺気ね」
紗奈恵がハンマーを構える。
すると、高雅が飛び出して紗奈恵の後ろから奇襲を掛けた。
紗奈恵が高雅の存在に気付いていない訳が無い。
しかし、気付かれるだけでいいのだ。
それが十分な隙になってくれるのだから。
タ「もらった」
紗「！？」
てっきり避けるのかと思っていた紗奈恵だったか、タイトは攻撃に出た。
紗奈恵はぎりぎり反応出来て攻撃を避けたが、さらに大きな隙を見せてしまった。
紗奈恵は真っ先に高雅の殺気を読みとろうとしたが、高雅は殺気を消していた。
視界にも入ってなく、殺気も読みとれない相手ほど怖いものはない。
高「この一撃で・・・」
高雅の声が聞こえたのは紗奈恵の真後ろだった。
紗奈恵は瞬時に背中を活性し、防御に備えた。

しかし、高雅は紗奈恵の目の前に現れたのだ。
紗「はっ!?」
完全に殺気に騙された紗奈恵は隙だらけだった。
高「終わりやがれえええええええええええ」

ドグォ!!!!!

活性全開の拳を紗奈恵にぶつける。
全ての活性を出し切り、紗奈恵を吹き飛ばした。
紗奈恵を思いっきり壁に叩きつけ、高雅は全力を尽くしたのか肩で息をしていた。
紗「くっ・・・やるわｎ〈ザクッ!!〉!!」
高「悪いな・・・容赦できるほど余裕が無いんだよ」
高雅は追撃でタイトを刀にして飛ばしていた。
油断していた紗奈恵は避けれず、刀は腹に突き刺さった。
紗「な・・・」
高「再生なんてさせねえぞ。タイトにはあの静寂の塊を持てせてある」
紗「・・・完全にやられたわね」
高「さあどうする。死ぬかアリアの居場所へ案内するかどっちだ?」
紗「分かったわ、ここで死にたくないわ」
紗奈恵は諦め、剣を抜いてもらうように言う。
高雅は剣を抜くが静寂は解いてなかった
さすがに完全には信用していないようだ。
高「ログナ、再生してやれ」
ロ「おｋ」
ログナが紗奈恵の傷を再生をしてあげた。
傷が治ったと同時に
高「で、アリアはどこだ?」
紗「・・・異空間にいるわ。それと、本当に会いにいくつもり?」

高「何度も言わせるな。俺は絶対に殴りに行く。異空間のどこだ？」
紗「そうね。口で言うなら現世と天国と地獄の境。そんなところよ」
高「・・・レオ、分かるか？」
レ「済まないが全く理解できぬ」
流石に異空間という言葉では漠然とし過ぎでどこに空間を繋げればいいか分からなかった。
高「もっと具体的に教えろよ」
紗「さすがに口ではあれが限界よ。実際に動ければ繋げてあげるわ」
高「信用できるか！！。そのまま反撃だってされる可能性がある」
紗「そこまで私は汚くないわ。負けは認めるわよ。ただ・・・」
高「？」
紗「後悔しないわね？。そして、アリアを軽蔑しないわね？」
高「するか！！」
紗「！！」
少しも迷うことが無く、高雅は即行で答えた。
紗奈恵は少し驚いたが迷いのなさに安堵の息を零した。
紗「分かったわ。静寂を解いてくれないかしら」
高「・・・・分かった。どのみち、解かないとどうしようもないしな」
高雅は紗奈恵に掛かってある静寂を解いた。
そして、紗奈恵は素直に空間を開いて上げた。
紗「まずは高雅だけが入りなさい。後から私達もついて行くわ」
高「わざわざ気を利かせる必要はねえだろ」
紗「これもアリア自身のためよ」
高「あっそ」
そう言って、高雅は空間の中へと入って行った。

アリアのノート　七ページ目

さようなら、みんな。
そして、ごめんなさい。
みんながわからなくてごめんなさい。
ひとり、わたしはここできえます。
すべてをなくしたわたしにみれんはないです。
みんなのそんざいがわたしにとってなんなのか・・・
わたしがひつようかわからないけど・・・
きえていいそんざいかもわからないけど・・・
じかんてきにもうむりです。
このなにげないぶんもこれでおわりです。
さいごのねがいとしてはわたしのそんざいをひつようとしてくれる
ひとに――――

書いている途中で何かあったのか、文はここで終わっていた。

# 絆編　その１０、再会

高雅は異空間に入った瞬間、棒立ちになっていた。
目の前にはアリアがノートに何か書いている時であった。
すると、アリアは書いている途中に高雅に気付いたのか、手を止めて高雅を見ていた。
珍しそうな目で見ているアリアの最初の言葉がこうだった。
ア「・・・だれ？」
高「・・・・・・・・」
高雅の心が一瞬痛んだ。
既に高雅の記憶が消えていた。
高雅は表情を変えずにゆっくりとアリアに近づいた。
高「俺はお前を殴りに来た」
ア「え・・・なんで？」
高「お前が自分勝手だからだ」
ア「もしかして・・・知り合い？」
高「ちぃ！！」
ア「ひっ！？」
高雅は怒り、拳を振り上げた。
それをみたアリアが震えながら手で顔を隠していた。
だが、高雅は落ちついたのか拳をゆっくりと下ろして溜息を零した。
高「自分が悪いことが分からないのに、殴っても仕方ねえな」
ア「？」
高「それは何だ？」
高雅はノートに指を差して尋ねる。
ア「あ・・こｒ「ちょっと貸せ」あ・・」
アリアに聞いたところで分かる訳が無いと思った高雅は勝手にノートを拾い上げた。
高雅はパラパラとめくり、１０秒でノートを閉じた。

高「・・・・ざけんな・・・」
ア「？」
高「訳も分からないのに謝ってんじゃねえ！！」
ア「ビクッ！？」
高雅がいきなり怒鳴り、アリアは再び震えだした。
高雅はアリアの頭を鷲掴みし、顔を近づけた。
高「いいか！！。謝るってことは反省してからするものだ！！。それなのに、何も分かってないのにごめんなさいだ！？。ふざけるな！！」
ア「は・・はい！・・」
アリアは怯えながら返事をしていた。
目尻に涙を浮かべながら、一生懸命に聞いていた。
高「意味を持たない気持ちほど、腹が立つものはない。その頭に叩きこんどけ！！」
ア「はいいい！！」
高雅は本当に分かったか数秒睨みつけた後、手を放した。
高「ったく、ほんとお前はムカつくことばかりさせるな」
ア「ご・・ごめんなさい・・・」
高「どうして謝った？」
ア「わたしが・・・コウガに迷惑を掛けたから・・・」
高「そうだ。これからはちゃんと理解してから謝罪しろ」
ア「ごめんね・・・コウガ・・・コウガ・・・コウガ？」
ふとその言葉を繰り返し、目を丸くする。
そして、高雅の方を振り向くと高雅はダルそうに寝っ転がっていた。
ア「コウガ・・・サキムラコウガ・・・」
高「ん？、今さら名前を呼んで何になるんだ？」
ア「コウガ・・・・忘れたくなかったのに・・・また・・」
高「・・・・・・・」
アリアは肩を震わし、静かに涙を流し始めた。
高雅は見るに耐えれず、アリアから目を逸らした。

ア「どうして・・・」
高「？」
ア「どうして・・来たのよ・・・」
高「は？」
ア「嫌だったのに・・・コウガにみられるのが嫌だったのに・・・どうして！！」
アリアは立ち上がろうとしたが足に力が入らず、そのまま倒れた。
高雅はただ黙ってその姿を見ていた。
ア「こんな・・・酷い姿を見られるなんて・・・私・・・」
高「・・・・・・・・・・・」
ア「せめて・・・記憶だけでも・・綺麗でいたかったのに・・・」
高「・・・そんだけの理由で・・」
ア「え？」
高「そんだけの理由で俺との契約を切ったのか！？」
高雅はアリアを怒鳴り、殺気を出して睨みつけた。
高「お前、分かったんのか！！。お前のその勝手な行動で、皆が迷惑掛かっていることを！！」
ア「みんな・・・？」
高「レオやフィーラ、エクスにサミダレ、そしてシリア。他にもＡやタイトだって来てるんだ。全員お前の為によ！！」
ア「え・・どうして？」
高「皆、お前が消えて欲しくないからだ！！」
ア「・・・・こんな私が？」
高「・・あのなぁ」
高雅は座り込んでアリアと目線を合わせる。
高「こんなとか言うけどな、皆気にしないって」
ア「でも・・絶対に迷惑かけちゃうよ」
高「おい、散々トラブル運んできた奴がそんなことを気にするのかよ」
ア「でも・・・すぐに死んじゃうよ」

高「・・・そんなことはさせねえ」
ア「無理だよ・・・そんなの・・・」
？「可能よ、一応ね」
高・ア「！？」
突然聞こえた声に反応する二人。
振り向いた先にはいるはずもない人物がいた。
高「え・・か・・母さん！？」
マ「また会えるなんてね、思ってなかったよ」
いたのはマリアだった。
さらに後ろには見慣れない人が立っていた。
高「何でいるの！？。完全に消滅したはずじゃ・・・てか、後ろ誰だよ」
マ「ここは消滅した者が辿り着く場所よ。それと、この人はルシフェルよ」
高「は！？」
ル「またお前と顔を合わせる事になるとは・・・」
ふと前に出てきたのはどことなく高雅の面影があるルシフェルだった。
これが元々の姿のであったのだろう。
マ「所で、アリアちゃんを助けたくないの？」
高「そ・・そうだ！！。アリアを助けたい！！。どうやったら助けられるんだ！？」
高雅が必死に聞いて来る。
すると、マリアはアリアの頭に優しく手を置いた。
マ「アリアちゃんが壊される前に、中にある力を取り出す。それだけよ」
高「そんなことができるのか？」
マ「私を誰だと思っているの？。だてに１０００年前から存在しないわよ」
高「いや、普通にはよ消えろよ」

マ「ひどい言いようね。高雅も同じ１０００年生きるものでしょ」
高「まあ・・・ってか、できるなら早くしてくれ！！！」
マ「分かったわよ。けど、一つだけ忠告」
高「？」
高雅が首を傾げた瞬間、マリアはアリアの頭で何かを掴み、グッと引っ張った。
マ「必ず、アリアちゃんを守りなさい」
マリアがそれを引き抜いた瞬間、空間が揺れた。

紗「ッ！？」
レ「？、どうした？」
紗奈恵が突然驚き、焦り始める。
その様子をレオは見落とさなかった。
紗「空間が・・・乱れた！？」
A「なななな、どゆこと？」
紗「つまり、入れないのよ。アリアと高雅がいる空間に」
A「なんですとおおおおおおおお！？」
Aが絶叫の叫びをあげる。
その場に聞いていた全員が焦っていた。
レ「一体、何故だ！？」
紗「考えられるのは一つ。空間の中で何かがあったからよ」
レ「まさか・・・アリア殿が！？」
紗「それは考えられない。力が出て来るタイミングは狂ってないはず。なのにどうして・・・」

A「まあ、あいつが何をやってもおかしくないだろ。今は時が来るまで落ちつくとするか」
紗「え！？」
レ「な！？」
さっきまで絶叫していた本人が急に落ち着きを取り戻した。
その変わりようについて行けない二人は唖然とAを見ていた。
れ「よ・・良く落ちついていられるな」
A「ん～、あいつの事だし、どうにかしてくれるって。俺達が必要なら、どうにか俺達を使う。あいつはそう言う奴だ」
紗「よくそんなことが言えるわね」
A「あいつとは一回マジでやりあったんだ。お陰で、かなり理解できたつもりだ。取りあえず、事が来る前に皆を回復させないとな」
そう言ってAは周りを見る。
皆傷ついた状態であり、体力は全快ではなかった。
さらに、この場にいない者も何人かいるのである。
ロ「おっ、再生の出番か？俺っちなら余裕だぜ」
紗「じゃあ、ここにいる皆の回復をお願い。もうサミちゃん達の静寂も解いてるから。私は勇人と文夫を連れて来るわ」
それぞれが時が来るまでやるべきことを始めた。
Aは壁に寄り掛かって座り、ふとタイトに話しかけた。
A「・・・タイト」
タ「どうした主よ。珍しく震えているではないか」
A「へっ、バレてたか・・・そうだな。なんか怖いぜ。皆がやられるＢＡＤ　ＥＮＤを思ってしまってな」
タ「主らしくもない」
A「自分でもそう思ってるよ。まぁ、そんなバカな俺について来てくれてありがとな」
タ「拙者は主を信じておる。例え過酷な道であろうと、常に主の得物となりその身を守ろう」
A「よせよ。フラグになっちまう・・・やる時はとことんやろうぜ

！！」
タ「承知した！！」
二人は強く絆を確かめ合った。
一方でレオは虚空を眺めるように窓の外を見つめていた。
気付けば夕焼け色に空が染まっていた。
エ「どうしたんだい？」
そこにエクスが話しかけてきた。
静寂が解かれたのであろうか、普通に動けていた。
レ「いや・・・何でもない」
エ「さては怖いのだろう？」
レ「・・・実はそうだ」
エ「皆同じさ、急に恐怖を感じてる。僕も怖いさ」
レ「だが、これだけは分かる。コウガ殿はこの恐怖に直面しておる」
エ「不思議だね、僕もそう思っていた。だからこそ、この恐怖には打ち勝たなければならない」
レ「我はコウガ殿に会い、窮屈な籠の外に出られた。だからこそ、今度は我が閉じ込められたコウガ殿を救いたい！！」
エ「一人で抱え込まない方がいい。後ろを見てみなよ」
エクスに言われ、レオは後ろを向くとそこにはフィーラ達が立っていた。
どうやら、ログナのお陰で回復したようである。
フ「状況はログナから聞いたです。ボクだってコウガ様の役に立ちたいです」
サ「私ももう少し働きたいのぉ」
シ「あたしも頑張りたぁい」
エ「皆の気持ちは一緒みたいだな」
レ「そのようだ」
ロ「おーい、ふと思ったんだけどさ・・・」
ログナが横から乱入してくる。
皆はログナの方に視線を向け、話を窺った。

ロ「誰かさ、コウガっちにアリアを救う方法教えた？」
レ「？、ログナ殿が教えていないのか？」
ロ「え！？、あ・・・いやさ、話す前に流されたって言うかその・・・」
フ「つまり言ってないということです。使えない奴です」
ロ「どうせ俺っちは役立たずですよーだ・・・」
ログナはいじけて座り込んだ。
蓮田はログナの頭を撫でてなぐさめて上げた。
フ「それにしても、この妙な感覚は何です？」
サ「確かに、少しばかりか恐怖を感じるのぉ」
シ「・・・お兄ちゃぁん・・・」
レ「分からない。急に感じ始めたのだ」
エ「考えても仕方がないさ。僕らはコウガ君を信じて待とう」
レ「そうだな。取りあえず今は待とう。コウガ殿が必要としてくれるまで」
エクスとレオはその場に座り、事が起きるまで待ち始めた。
フィーラ達もそれを見て悟り、何も言わずにその場に座って待機を始めた。

高「何だ・・・これは・・！？」
マリアが何かを引き抜いた瞬間、空間が歪み始めていた。
そして、目の前には圧倒的な力を放つ人の姿があった。
本当に姿だけであり、目や鼻などは全くない。
マ「あれがアリアちゃんが持っていた力本体よ。今は人の形をして

いるけど、早くしないと暴走して皆が消滅されるわよ」
高「・・・こいつを倒せば事が終わるのか？」
マ「そうね。記憶や姿は誰かに再生してもらえば済むはずよ。ただし、アリアちゃんはもう使いじゃなくて普通の人間になるけど」
高「・・・それでもいい。アリアだけは・・・失いたくない！！」
マ「そう・・・あの力が及ぼす影響で空間が歪んでいるの。つまり、倒すまで逃げられないってことよ」
高「誰が逃げるか。あいつは絶対にぶっ倒す」
マ「ルシフェル、高雅に力を貸して上げて」
ル「分かった。どの道、このまま放っておいても私達が死ぬだけだ」
ルシフェルは自分の力を全て高雅に託した。
高「け、最後に父親らしい事をしやがって」
ル「お前が勝たなければ私が殺されるのだ。ここで消滅すれば、一体どこに逝くとなるか・・・」
高「さあな。なってから気付けばいい」
高雅は握り拳にルシフェルの力を宿す。
体が覚えているか確かめていた。
高「・・・バッチリだ」
分かったところで力の具現体を見る。
表情は分からないが堂々と待ち構えていた。
高「・・・アリア」
ア「？、何？」
高「・・・何でもねえよ」
ア「？、？？、？？？」
ふいにアリアを呼んだが、特に何もないと言って会話を終わらせた。
アリアは全く意味が分からずに首を傾げていた。
高「さあて、本気でお前をぶっ倒してやる！！」
高雅は力の具現体に向かって指を差し、宣告した。

# 絆編　その１１、絆が呼ぶ希望

まず最初に仕掛けたのは高雅の方だった。
力の具現体は待ち構える事もなく、ただ茫然と浮いていた。
高雅は思いっきり跳躍して、いっきに力の具現体に近づいた。
高「ふん！！」
力の具現体の頭に本気で殴った。
触れた感触は人間のようだったが、見た目でダメージがあるか分からなかった。
具「・・・・・・・・・」
高「何とかいいやがれ！！」
今度は蹴りを入れようとした。
しかし、頭に当たる寸前で力の具現体が動いた。
力の具現体は高雅の足を掴んだ。
高「なっ！？」
具「・・・・・・！！」

グキャ！！

高「がっ！？」
力の具現体は高雅の足を握り潰し、問答無用で放り捨てた。
相当な勢いで投げられた高雅は体勢を立て直せず、叩きつけられた。
ア「コウガ！！」
アリアが今にも飛び出そうとしたが、力が入らずに動けなかった。
マリアがアリアの肩に優しく手を置いて落ちつかせた。
高「つう・・・ってぇ・・」
足の骨が握りつぶされ、激痛に耐えていた。
すると、空中から力の具現体が高雅に向けて手をかざしていた。
具「・・・・・！！」

高「このっ！！」
力の具現体が何かをしかける前に、高雅がルシフェルの力を前に放った。
すると、ルシフェルの力が何かを打ち消し、高雅の周りに巨大な波動が撃たれた。
高「あぶねえ・・・」
普通に握られて骨が潰されるレベル。
その波動の力が直撃していたら、木っ端微塵になっていただろう。
それを思うと高雅は冷や汗を流した。
しかし、力の具現体が高雅に向かって急降下し、高雅は身を翻して避けた。
高雅は片足だけで立ち上がり、再び向き合う。
高「どうやら、完全に敵として見始めたな」
具「・・・・・・・・・・」
今度はお互いしかけずにジッと待ち続けた。
すると、力の具現体は動きを見せない高雅からアリアの方へ視線を向けた。
高「ッ！！、止めろ！！」
それを見た高雅がすぐに動き出した。
高雅の動きに気付いた力の具現体はすぐに高雅の方を向いた。
高雅はそのままの勢いでパンチを繰り出すも、力の具現体は簡単に避ける。
具「・・・・・・・・！！」
高「ッ！！、またか！！」
力の具現体は高雅に向けて手をかざした。
殺気を読みとった高雅はそれが先程の攻撃と読み、咄嗟に腕を掴んだ。
その腕を利用して、高雅は後ろに回って攻撃をやり過ごした。
高「仕返しだ」
隙だらけの力の具現体の背後にルシフェルの力を込めて思いっきり

殴った。
さらに両手を組んで叩き落とし、床につく寸前に先回りし、今度は蹴り飛ばす。
そしてトドメに思いっきり踏みつぶし、数メートル引きずった。
高「ラストォ！！」
踏んでいる足に一瞬、力を込め、思いっきり潰した。
高雅は一旦離れて様子を窺った。
高「・・・殺気はないが・・まあ、無生物だから殺気もよく分からんが」
事前に力を感じて何をするのかは分かるが、思考があるわけでもなく、正確には動きや考えまでは読んでない。
しかし、力の具現体は完全に動きが止まり、再び動き出す様子はない。
高「う～ん・・今のうちに潰すのもありだが・・・変に倒して爆発されても困るしな」
取りあえず、様子見をすることにした。
高雅はただ立っているのも暇な為、取りあえずアリア達の場所へ向かった。
高「あのまま放置していいか？」
マ「動きはないみたいね。でも、まだ油断できないから」
ア「コウガ・・・大丈夫？」
アリアが高雅の足を見ながら問う。
高「どう見ても、この足は大丈夫じゃないだろ」
そう言って高雅は握りつぶされた足を見せびらかす。
高雅はもう慣れた顔をしているが、激痛は引いてなかった。
ア「えっと・・・」
高「別に気に掛けた言葉なんて期待してない」
ア「そっか・・・」
高「何かはっきりしないな。まるで龍子だな」
ア「？」

高「・・・何でもない。さて、あいつをどうするか・・・」
高雅は再び力の具現体を見るが、未だに起き上がってない。
殺気もなく、何もないことが変に不気味だった。
マ「特に動きは見えないね・・・でも、空間が歪んだままよ」
高「確かに。まだ動けるって事だろうな・・・」
ル「歪みは落ちついて来ているが、まだ油断はできないぞ」
三人が力の具現体から目を放さない。
すると、アリアが高雅の手を握りだした。
高「？」
ア「あ・・・いや・・なんでも・・・」
不意に感じた感触に、高雅はアリアに視線を向ける。
しかし、アリアは自分で掴んでおきながら何か言いたそうにしていただけだった。
まあ、高雅に取ってそれだけで十分理解できるが。
高「・・・成程ねぇ・・・」
ア「？」
高「何でもない。安心しな」
ア「あ・・・」
高雅はアリアの頭を撫でて落ちつかせる。
アリアはキョトンとしながらも抵抗せずに撫でられていた。
マ「・・・ッ！！、動いたよ！！」
高・ア「！！」
マリアの声に反応する二人。
すぐに力の具現体の方に視線を向け、警戒する。
力の具現体は手も使わずに浮きながら起き上がった。
高「まだ動けるか。まあ、当然だな」
高雅はルシフェルの力を用意し、いつでも動けるようにしていた。
力の具現体は起き上がるとまた空中へ浮かんで行った。
高「また飛ぶか。だったら落とす！！」
高雅は跳び上がり、力の具現体へ一気に近づいた。

すると、力の具現体は高雅の目の前から消えた。
高「ッ!?」
一瞬焦ってしまうが、殺気を使って居場所を突き止める。
高「・・・ッやべ!!」
どこにいるか分かった途端に動き出す高雅。
力の具現体が現れた場所は、他でもなくアリアの目の前だった。
ア「ッ!!」
いきなり目の前に現れ、アリアは驚く。
すると、力の具現体はアリアに手を伸ばした。
高「させるか!!」
高雅が横から力の具現体の手を掴み、そのまま背負い投げをした。
そして、追い打ちで倒れた所に腹を殴った。
高「どう・・・だ?」
また動かなくなった所を見て、高雅は様子を見る。
すると、力の具現体は震えだした。
高「?」
力「――――ッ!!、――――ッ!!」
高「い!?」
突然、空間の歪みが酷くなった。
それと同時に力の具現体から強大な殺気を感じた。
高「なんだ!?」
高雅は一旦距離を取って様子を見る。
強大な殺気に歪んだ空間は力の具現体の仕業であることは分かっていた。
さらに、一部の場所では空間が裂けていた。
マ「まずい、時間が無い!!」
ル「まだ脱出できないのか!?」
高「あいつらが来ないってことはまだ繋がらないってことだろ」
焦る三人。
だが、刻一刻と状況はよくならない。

高「取りあえず、あいつを黙らせる！！」
高雅は再び力の具現体へ近づく。
しかし、力の具現体は高雅に気付いた瞬間、力の具現体の方も接近して来た。
高「やる気か！？」
力「――――ッ！！」
力の具現体はまっすぐに殴って来た。
それを避けるのは容易で、高雅は横に避けた。
そして、がら空きの背中を蹴ろうとした。
高「いっ！？」
しかし、突然の激痛が高雅の足を襲った。
先程握りつぶされた足の方からだ。
今の今まで激痛はしていたものの、今度は耐えれられないほどの痛みだった。
高雅の蹴りは弱体し、吹き飛ばすことすらできなかった。
高「やべ・・・」
高雅がそう思ったと同時に、力の具現体は高雅の足を掴んだ。
マ「まずい！！」
ル「両方やられたら勝ち目がねえぞ」
タダでさえ片足だけでも不利だが、両方持って行かれると勝ち目はなくなるだろう。
それは、高雅だって考えていた。
高「この野郎！！」
高雅は握りつぶされる前に抜け出そうと顔面を殴った。
しかし、力の具現体は手を放さなかった。

グキャッ！！

高「うぁ！！」
そして、両足を潰された。

力の具現体はそのまま投げ飛ばさずに高雅の首を掴んだ。
高「ぁ・・・」
力の具現体は終わらせるつもりだった。
激痛に苦しむ高雅に成す術などなかった。
高（終わったか・・・畜生・・・）
完全に諦めた高雅。
どうやっても、この状況を打破する方法を思いつかなかった。
高（・・・このまま死ぬのか・・・ん？）
高雅の目線には割れた空間があった。
しかし、その空間の先にはどこかに繋がっていた。
はっきりとは分からないが、別の場所であることは確かだった。
高「・・・いや・・まだチャンスがある！！」
高雅は咄嗟に『選別の飾り』を取り出し、力の具現体に押し付けた。
力「ッ！！」
高「お前は力そのものだからな、これは効くだろう」
高雅の言うとおり、力の具現体は全く動けないでいた。
しかし、莫大な量を『選別の飾り』が受け止めていたため、罅が入り始めた。
これも長くは持たないようだ。
高「ちっ・・・間に合え・・・」
罅がどんどん大きくなり、それにつれて掴まれている手の力が上がって行く。
そして、『選別の飾り』は耐えられなくなり、砕け散った。
高「くっ・・・」
高雅は覚悟を決め、目を閉じた。
しかし、いつまで経っても首が潰れる感触はなかった。
高雅は目を開くと、そこには待ち続けていた存在があった。
A「何ビビってんだよ、主人公」
レ「待っていたぞ、コウガ殿」
エ「どうやら、ギリギリだったようだ」

フ「もう少し遅かったら危なかったです」
シ「わぁい、お兄ちゃぁん！！」
サ「まあ、結果的には無事みたいじゃ」
紗「そうね」
文「情けねえ姿だけどな」
勇「ざまぁねえな」
蓮「ログナ、こうが兄ちゃんの足が怪我してるから治して」
ロ「ラジュっ！！」
高「ったく・・遅いんだよ」
A達が全員で力の具現体を抑え込んでいた。
そして、ログナが高雅の足を治してあげた。
A「よぉし、一旦離れろ」
Aがそう言うと、皆は力の具現体から離れた。
それを見計らって、Aが活性全開で力の具現体を殴り飛ばした。
皆は一旦アリア達がいる所へと向かった。
A「ふぅ、ちょろいちょろい」
高「あれだけで倒せてるなら、俺がとうの昔に倒してる」
ア「え・・えっと・・・」
レ「アリア殿、無事だったか・・・よかった」
フ「アリア様、ボク達を覚えてないかもしれないです・・・」
エ「事情が事情だから、仕方ないさ」
サ「しかし、あれはなんだったのじゃ？」
サミダレが力の具現体の事を聞いて来る。
高雅はそれを皆に手短に話した。
すると、Aがニヤリと笑った。
A「な～る。つまりあいつを倒せばハッピーエンドだな」
高「まあ、倒さないと強制的にバットエンドだ」
A「んじゃあ、軽くやりますか」
高「本気出せ。さもないと死ぬぞ」
そんなことを話しながらも、二人は余裕だった。

一方、紗奈恵達はマリアとルシフェルと話していた。
紗「まさか・・・マリア様がこんな所に」
マ「あら、現セイクリッドのものかな?。今はどんな感じなの?」
文「はっ、現在は我々3人と数が少なく、持続が難しいものかと」
マ「そ。じゃあセイクリッドは解散しよ」
勇「は?」
マリアの言葉に素っ頓狂な言葉を上げる勇人。
マ「だから、止めるのよ。もう正義の味方ごっこはお終い」
紗「え・・それはどういう・・・」
マ「天界を守ってよりよくするために、私はセイクリッドを作った。けど、それが今じゃ一人を閉じ込めたりしている・・・」
紗「それは・・・天界を守るためであって・・」
マ「そう。だから、そんなものは止めちゃうのよ。これからは自分で何を守るか決めていいよ」
文「つまり・・・」
マ「分かったら、早く高雅を助けて上げて」
紗「・・・分かりました」
紗奈恵達は立ち上がり、高雅の方へと向かった。
それは、自分で決めた事でもあった。
ル「お前、そんな滅茶苦茶なこと言っていいのか?」
マ「いいのよ。ずっと昔の私にまだ縛られてたら、今が勿体無いのよ」
ル「そうか」
マ「だから、これからは彼らに任せるの。私達はもう必要ないから」
ル「では、見届けるか。その彼らがこれからどうするかを」
マ「そうね」
マリアとルシフェルは高雅達を見守った。
どこか寂しげに、それでも背中を押してあげるように。

高雅は指を鳴らし、Ａは肩を回しながらゆっくりと歩いて力の具現体に近づいていた。
Ａ「で、どうでるよ？」
高「好きにしろ。ただ、早急に倒さないとこの世もあの世も全てが無くなるぞ」
Ａ「マジすか！？」
高雅の言葉に驚きを隠せないＡ。
しかし、高雅は冗談を言ってはいなかった。
高「マジもなにもマジだ。こうやって空間がいたるところに繋がってやがる。アリアの外に出たから力の干渉が強くなったんだろうな」
Ａ「へー、でさ、どうやってアリアの中から力を出した訳だ？」
高「ん？。ちょいと協力してもらっただけ」
Ａ「じゃあさ、俺達の救いの方法は無意味だった訳？」
高「なんだ、助ける方法しってたのか。まあ、今となっては無意味だな」
Ａ「ログナ涙ワロタ」
高「じゃあ、そろそろ行くぞ」
文「まあ、待てよ二人とも」
今にも動き出そうとしたところで文夫に止められた。
高雅は邪魔されたことに少々機嫌を損ねていた。
高「おいおい、今さら手伝うのか？。散々、敵視していたくせに」
紗「もう解放されたから仲間よ。共にアリアを救うね」
高「どういうことだ？」
勇「セイクリッド壊滅、とでも言えば分かるか？」
高「・・・なーる」
Ａ「は？、どういうこと！？」
高雅は理解できたがＡは全く理解できてなかった。

Aは高雅と紗奈恵達を交互に見るが、全く教えてもらえなかった。
高「取りあえず、頼む。俺よりは戦えるだろ」
文「おいおい、ルシフェルの力を持っている奴が何をいう」
A「え、高雅って力持ってるの？」
高「お前はいい加減黙ってろ」
A「ふぁ～い」
高「・・・確かに持っているが、それでも全体的に見てお前らが上だ。だから、主力になるなり援護するなり好きにしてくれ」
勇「じゃあ、好きにする。それで問題ないだろ？」
紗「そうね。それじゃあなた、お願いするわ」
紗奈恵はハンマーになり、文夫の得物となる。
文夫は煙草を取り出して火をつけ、口に咥える。
高「最後の一服ってか」
文「最後じゃないぞ。この先も吸い続けるに決まってる」
高「本気出さねーと一瞬で死ぬぞ」
文「本気を出すために煙草(こいつ)が必要なんだ。ガキには分からねーよ」
高「・・・まいっか」
もうどうにでもなれと思った高雅はそれ以上追及しなかった。
すると、Aが指先で高雅の肩を突っついた。
A「来るぞ」
高雅が振り向くとAは親指を差しながら手短に済ませた。
それだけ、どういう状況かを一瞬で把握できた。
力の具現体がゆっくりとこちらに近づいて来ていた。
高「さあ、手早くやるぞ」
A「俺も！！」
真っ先に動き出したのは高雅とAだった。
Aの方が活性で速く、前に出た。
A「おりゃああ！！」
バカ正直に真っ直ぐ刀を突きだす。
力の具現体は簡単に避け、手のひらに力を溜め始めた。

A「わっほう」
それを感じ取ったAはすぐに高く跳び上がった。
だが、読まれていたのか力の具現体はしっかりとAを追っていた。
A「マジ！？」
高「落ちてろ！！」
遅れた高雅が後ろから見ており、飛んだAの上に乗った。
そして、Aを思いっきり落として自分は高く跳んだ。
それと同時に力の具現体が波動を放った。
高雅はそのまま力の具現体の後ろに回るように着地しようとしているが、力の具現体は再び力を溜めていた。
A「隙やりぃ！！」
力「ッ！？」
高雅に踏み落とされたAは着地してすぐに攻撃に入っていた。
力の具現体は高雅に注意を向いており、Aの斬撃をまともに喰らった。
A「ちっ、浅いなぁ！！」
Aは一瞬で与えた斬撃を見極めた。
Aは溜息を零しながら
高「じゃあ、今度は深く斬れ！！」
力の具現体が怯んだ所に、既に着地していた高雅が後ろから蹴り飛ばした。
丁度、Aの前に倒れるように。
A「最初からそのつもりだぜ！！」
Aが居合いの構えを取る。
高雅に背中を蹴られた力の具現体はバランスを崩してAの前にやって来ていた。
A「ふっ！！」
Aが一瞬で力の具現体の横を通り過ぎた。
そして、いつの間にかAは剣を振り切っていた。
A「またつまらぬ物をきってええええええええええええええ」

高「まあ、なると思った」
居合いで斬ったはずの力の具現体は無傷。
そして、Aは刀を落とし、手が痙攣していた。
A「硬ッ!!、いや硬ッ!!」
高「否定になってない」
力「・・・ッ!!」
高・A「!?」
力の具現体がこちらの方を向いた。
それも、手に力を溜めながらである。
二人はすぐに気付き、振り向きにあわせてそれぞれ跳んだ。
力の具現体が溜めた波動を外れた隙に、今度は文夫が近づいていた。
文「全く、ガキはやんちゃなこと・・・」
振り向いた事で既に力の具現体の視界から文夫は消えていた。
そして、文夫はハンマーを立てに振った。
力の具現体は頭からハンマーを受け止めたが、全く動じてなかった。
文「軽く見ていたが、本当に丈夫だな」
勇「だったら、これでどうだ!!」
勇人が横からブーメランを投げた。
ハンマーを受け止めていいる力の具現体は動けなかったが動こうともしなかった。
そして、ブーメランは力の具現体の体で弾かれた。
勇「ちっ」
文「お前じゃ無理だ」
勇「んだと!!」
高「喧嘩する暇があるなら戦え」
発展しそうな二人に高雅が横から告げ口する。
すると、今度は力の具現体が動き出した。
力「ッ!!」
文「うおっ!?」
力の具現体がハンマーを押し返す。

そして、その場から消え、気付けば勇人の目の前にいた。
勇「何!?」
力「ッ!!」
力の具現体は勇人を思いっきり蹴り飛ばした。
勇人は寸前の所でブーメランを使ってガードした。
しかし、その破壊力を完璧に防げず、ブーメランは木っ端微塵に砕け散った。
高「防ぐな!!、避けろ!!」
高雅がそう叫ぶと同時に、今度は文夫の方に一瞬で近づく。
文夫は咄嗟に力の具現体の攻撃を避け、高雅とAがすぐに助けに向かう。
高「急にやる気を出すな!!」
高雅が跳びかかるように殴ろうとする。
力の具現体は高雅の方を向かずに、波動の壁で攻撃を防ぐ。
高「なっ!?」
A「まだ俺がいたのさ!!」
高雅の攻撃が失敗に終わり、今度はAが刀を振るう。
しかし案の定、Aの攻撃も波動の壁に負けてしまう。
A「くそっ!!」
二人の攻撃を防いでいる内に、力の具現体は文夫の腹を殴った。
文「かはっ!?」
文夫は血を吐き、その場に崩れ落ちる。
休む間も与えずに力の具現体は次のターゲットへと顔を向ける。
A「今度は俺ってか・・・やってやらあああああああああ」
Aは真っ向から勝負を挑んだ。
力の具現体が殴ると同時に、Aも殴りかかった。
高「バカ!!、死ぬ気かお前!?」
A「活性の限界を超えた俺の拳を受けてみろおおおおおおおお」
最早、高雅の声など届いてなかった。
Aは今までにない程、活性を溜め、全力で殴った。

そして、Aと力の具現体の拳が当たった。
A「・・・・・・・・・・・・・」
力「・・・・・・・・・・・・・」
A「・・・・・・・・・・・・・つぅ」
Aの拳からいやな音が響いた。
そして、力の具現体の拳は形が崩れ、光へとなった。
力の具現体は怯んで後ずさりし、Aはその場で拳を抱えて蹲った。
A「ってえええええええええええええええ」
そして、堪えていた激痛に声を上げた。
高「力で勝ったぞ、こいつ・・・」
A「っへっへっへ、活性には自信ありだからな」
高「イカれた活性だな。けど・・・」
高雅が力の具現体の方を向くと、既に腕は再生されていた。
高「無意味っぽいな」
A「おいおい・・・あれだけ全力で殴って無意味かよ・・・」
高「取りあえず、ログナに再生してもらえ。その間、俺が引き受ける」
高雅がルシフェルの力を込めて力の具現体を睨みつける。
Aは立ち上がって戦線から離脱した。
高「・・・ほぉ、再生するために少しは力が減ってるみたいだな」
高雅は殺気から力が微妙に減っているのを感じ取った。
高「自爆は延期になったな。少し猶予をくれたAに感謝でもするか」
力「・・・・ッ!!」
力の具現体は高雅の話を聞かずに襲い掛かって来た。
しかし、高雅は何もしてない訳でなく、身軽な動きで脇をすり抜けた。
高「おらぁ!!」
そのまま脇をすり抜けると同時に腹を殴った。
力の具現体を吹き飛ばし、追撃に向かう高雅。
高「んっ?」

殺気を感じ取った瞬間に立ち止まり、目の前に矢が通り過ぎた。
あのまま気付かなければ高雅に刺さっていただろう。
高「あの矢・・・どこかで」
高雅は飛んで来た矢に見覚えがあった。
そして、近づく殺気に首を向けると、そこには・・・
？「久しぶりね」
高「えっと・・・誰だっけ？」
ラ「忘れるなんて酷いわね。ラビリンスよ」
高「あ～、思い出した」
昔倒した敵のラビリンスの姿があった。
さらに、次々と殺気が増え始め、高雅は周りを見回した。
高「そうか・・・ここは消滅した奴が集まる場所ってことは・・・」
高雅が悟った時、既に全方位に昔倒した敵が無数に取り囲んでいた。
デ「久しぶりだな、小僧」
ジ「テメー、命よこせや！！」
イ「おっす、小僧。元気そうじゃねえか」
エ「アソボー・・・アソボー・・・」
ウ「ほぉ、ここで会うとは思ってもみなかったのぉ」
ア「キシャアアアアアアアアアアアア」
マ「おぉ、また決着がつけれるなぁ」
セ「まさか、再びお会いできるとは思いませんでしたよ」
ディバイト、ジゴクエー、インジ、エガル、ウルザス、アルテマ、
マック、セバスチャンｅｔｃ。
高雅がこれまで倒した敵がずらりと並んでいた。
高「そうだよな。消滅してるからここにいてもおかしくないよなぁ」
高雅は項垂れながら呟いた。
そして、次に首を上げた時には尋常じゃない殺気を放った。
それだけで過半数は減った。
しかし、言ってしまえば残った過半数はそれなりに強い奴らである。
高「時間がねえのに・・・ったく」

セ「殺気が強くなっていますね。しかし、この数では勝てないでしょう」
デ「面白い程成長してるな」
ウ「殺気でわしを倒せる訳ないじゃろ」
マ「おぉー、こえぇこえぇ」
強者だけが残り、徐々に戦闘態勢になる。
そんな時、空からある男がやって来た。
A「ローリング飛来だぜ！！」
Aが豪快にクルクル回りながら空中を駆け、綺麗に高雅の前で着地した。
A「実にピンチだな」
高「そう思うならどうにかしてくれ」
A「おｋ」
そう言って、高雅はAの上に跳ぶとAが両手を上げて、その上に高雅が着地する。
そのまま思いっきり高雅を投げ飛ばした。
狙いは当然、力の具現体が飛んで行った方に向けて。
A「よぉし、これでおｋだな。さてと・・・」
Aは刀を構え、活性を込める。
A「どいつから死ぬか？」
Aは殺気を知らないが、自然と殺気を解放していた。
しかし、相手達もまたAの殺気で怯えたりはしなかった。

# 絆編　その１３、増援（前書き）

気付いたらもうすぐクリスマス・・・そして１週間すらできなくなってきている・・・

原因はもちろんバイトと課題、さらに追加で家族のＰＣ独占が最近激しい・・・

この文章、皆が寝た後にコツコツと積み立てて作ったんだぁ。

だから、眠くて眠くてボロボロかもしれないですｗ

ここ１ヶ月、土日以外６時間以上寝てないなぁ・・・

# 絆編　その１３、増援

場所が変わってアリア達の方。
ここでも、高雅が倒した敵達が復活していた。
レ「こいつら、見たことある顔ぶれだな」
マ「ごめんなさい。ここは消滅した者が辿り着く空間。つまり、消滅した敵達も復活するのよ」
エ「それはそれは・・・また厄介なことだ」
フ「でも、暇しなくて済みそうです」
突然の事に全く動じないレオ達。
寧ろ、やる気満々と言ったところだ。
ロ「エイっちがいたら、瞬殺だろうなぁ・・・」
サ「タイミング悪く跳んで行ったからのぉ。諦めるのじゃ」
シ「食べていいのぉ？」
多勢に囲まれているが、皆の様子はいつも通りである。
ル「さあお前ら、どうするのだ？」
レ「戦うしかないだろう。我はやるぞ」
エ「加勢するよ、レオ君」
サ「私もやるかのぉ」
シ「食べていいのぉ？」
レオとサミダレはそれぞれの天獣の姿で戦意を剥きだす。
エクスとシリアも戦う気を見せていた。
レ「敵の数は多い。気をつけるのだぞ、皆」
そう言ってレオが敵勢の中へ突っ込む。
レオに続いて皆も敵の中へと突っ込んだ。
それを見ていたアリアは心配そうにしていた。
マ「大丈夫よ」
ア「え・・・！？」
マ「彼らに任せても大丈夫よ」

ア「・・うん」
常に気を配らせているマリアがすぐにアリアの不安を解消させる。
マ「あなたは高雅の事を待っていたらいいのよ」
ル「確かに、今はあいつの方が心配だ」
ア「そう・・かな？」
マ「いくら高雅でも相手は莫大な力そのものだからね」
ル「確かに、今目の前にいる奴らよりもあいつの方が危険だからな」
マリアもルシフェルも目の前の敵勢には見向きもしなかった。
それよりも心配していたのは高雅の方だった。
マ「アリアちゃんは高雅の事を思ってて。そして、いざって時には傍にいてあげるのよ」
ア「あ・・うん」
ル「時間的には結構経っているが、まだ大丈夫か？」
マ「そうね。いつ爆発してもおかしくないね。でも、何とか力を減らしたのかもしれないし」
ル「つまり、あいつにダメージを与えたってことか？」
マ「多分」
ル「・・・あいつはどんな奇跡を起こすのか・・・」
マ「無茶だけはしないで欲しいね」
ル「あいつは歯止めが効かないからな。それは分からないな」
ア「・・・・・・・・」
マ「心配なら見に行く？」
ア「え！？」
アリアの事を思ってマリアが気を利かせる。
アリアは俯いて考えだした。
そして決心した目付きで首を上げた。
ア「うん！！」
マ「そう・・・なら、記憶を回復させるね。本当は後で少しずつしたいけど、そうも言ってられないから」
ア「うん、分かった」

マ「じゃあ・・・」
マリアはログナと目を合わせ、手招きした。
ログナは意味も分からず誘われる。
ロ「なんですかいな？」
マ「アリアの記憶を回復させて」
ロ「ちょ！？、意識ある内にしたらショック受けるぞ！！」
マ「分かってる。けど、記憶があるとないとじゃ大きな違いだから」
ロ「ん～・・・アリアっちが耐えられるかどうかの問題なんだけどなぁ・・・」
ログナが頭を掻きながら迷っていた。
しかし、マリアが大丈夫と言おうとした瞬間、アリアが前に出た。
ア「大丈夫。だからお願いします」
ロ「敬語とは・・・まいっか。んじゃあ、やるぞ」
ア「うん」
ロ「・・・ショックで狂うなよ」
アリアは目を閉じ、深呼吸する。
そしてログナはアリアの頭に手を乗せた。
準備が整った所で、ログナは記憶の再生を開始した。

一方、強者ばかりに囲まれたAは大きく息を吸い込んで叫んでいた。
A「全員、かかってこいやあああああああああああ」
威勢をはりながら吠え続けるA。
すると、その言葉が合図のように、敵が全員動き出した。

A「ホントにくんなあああああああああああああ」
自分から言っておきながら、本当に来たことに驚いていた。
しかし、Aは引くことはなかった。
A「まあ、纏めて潰してやるぜ！！」
Aは刀に力を込め、３６０度に灼熱の活性を飛ばす。
その攻撃は半分が飛んで避け、半分はしゃがんで避けた。
そして、しゃがんで避けた全方位から一斉に攻撃を仕掛けた。
A「ちっ、よっと」
Aは舌打ちしながら高く跳び上がった。
舌打ちした理由は上に待ち構えている敵がいるが、跳ぶしかなかったからだ。
続けさまに上からの攻撃がやって来る。
A「ぬおおおおおおお、辛すぎるうううううう」
一人に対して多数の攻撃。
それも、遠距離攻撃の為、全員遠慮がない。
それでも、Aは神速の速さで全攻撃を受け流す。
完全に打ち消したり、互いに攻撃を相殺させたりしていた。
セ「隙だらけですよ」
A「やべっ！？、うお！？」
セバスチャンが無数の攻撃を掻い潜りながら、Aの懐まで迫っていた。
完全に見えてなかったAは隙だらけでセバスチャンがもつ槍を突いた。
ギリギリで反応したAは完全に避けきれず、横腹を突かれてしまった。
A「つう・・・」
Aが痛みに浸ってる暇はなかった。
目の前にはアルテマの巨大な拳が迫っていた。
A「くっそがあ！！」
Aは怒りながらも片手でアルテマの拳を受け止めた。

まともに受けてもなお、Aは衝撃に対してダメージが無かった。
A「あれ、軽いな。こりゃ以外だな」
余裕を見せるA。
そして、そのままアルテマの拳を敵が密着している所へ流した。
そのお陰で、敵の4分の一が減った。
A「よっしゃあ」
セ「やりますね」
ウ「やるのぉ」
セバスチャンとウルザスはAの強さを見直す。
Aは次にアルテマに向かった。
A「鈍間野郎(のろま)、お前を先に潰す！！」
ア「キシャアアアアアアアアアア」
アルテマもAの接近を見て殴りかかった。
A「うらあああああああああああああああ」
そして、Aも殴りかかった。
二人の拳が勢いよくぶつかり、辺りに衝撃を発生させた。
A「・・・・・・・・・・・・・・・」
ア「・・・・・・・・・・・・・ガ」
結果はアルテマの負けだった。
アルテマは手から罅が伝い、最終的には全身に罅が入った。
ア「アアアアアアアアアアアアアアア」
アルテマは苦しみに奇声を上げ、耐えられなくなった体はバラバラになった。
A「はっはっは、軽いぜ・・・ん?」
突然、周りが暗闇に包まれた。
そして、Aを囲むように様々な凶器が浮かび上がっていた。
デ「死ね」
ディバイトがそう言った途端に凶器がAに向けて放たれた。
A「うおおおおおおおお、あぶねえええええええええ」
さっきから叫んでばっかりだが、確実に動けていた。

しかし、Aはディバイトの夢幻に掛かっていることを知らない。
デ「愚かな小僧だ」
ディバイトが破壊の力を込め始めた。
普通に見れば空気と戦っているため、破壊を当てるのは簡単だ。
デ「さて、死ぬといい」
？「そうはさせないバーカ」
デ「何！？」
ディバイトは聞いたことのない声に反応し、振り返る。
その瞬間、０距離バズーカによってディバイトの首が吹き飛んだ。
A「だあああああああ、あり？」
急に凶器が消え、拍子抜けするA。
そして、肩に手を置かれて振り返ると、そこにはキリカの姿があった。
Aが夢幻に嵌っている内に、キリカが大半の敵を倒し、気付けばウルザスとセバスチャンしかいなかった。
A「そっか！！。消えたのは別に敵だけじゃなかったな」
キ「つべこべ言わずに戦えバーカ」
A「おっしゃぁ。仲間がいれば千人抜きも軽いぜ！！」
キ「いいから、あなたはそっちを相手してバーカ」
A「おk。ツンデレさんよ」
キ「・・・調子に乗るなバーカ」
A「お？、敵が増えたっぽい」
折角仲間になったと言うのに、キリカはAの余計なひと言で敵に回った。
すると、その隙にセバスチャンとウルザスが接近してそれぞれの攻撃をくり出す。
Aとキリカはそれぞれの攻撃を無難に受け止めた。
キ「今だけ許してやるバーカ」
A「お互い、目の前の敵でも倒しますか」
セ「くっくっく、はたして私を倒せますか？」

ウ「セイクリッドが相手とは、面白そうじゃのぉ」
お互い睨み合い、弾いて距離をとった。
そして、セバスチャンとA、ウルザスとキリカが戦いだした。

Aに投げられた高雅は綺麗に着地し、目の前には力の具現体の姿があった。
高「遠くに来たなぁ。まあ、異空間だから距離感覚微妙だけど」
力「・・・・・・・・・・」
高「・・・・やる気満々だな。さっきより妙に怖い殺気を感じる」
力「・・・ッ!!」
力の具現体は突然現れた黒い剣と白い剣を掴んだ。
それを見た高雅は溜息を零す。
高「やっぱり、アリアの力だな。最終的にはそう来るよなぁ」
?「しかし、油断しない方がいい」
高「最初から油断してないっての。てか、お前もいたんだな。ここに」
そう言って、高雅が振り返った先にはナノトムが立っていた。
高「で、お前は何しに来たんだ?」
ナ「心外だな。せっかく協力しに来てやったのにさ」
高「あっそ」
力「・・・ッ!!」
力の具現体が長々と待つ訳もなく、高雅とナノトムに向かって突進して来た。
高雅とナノトムは軽く避け、力の具現体が二人の間を抜けていった。

しかし、高雅が何もしない訳でなくすぐに後ろを追い掛けた。
力の具現体は振り返り、すぐに高雅に向かって接近した。
そして、高雅に斬撃をくり出すが、高雅は一瞬で後ろに回り込んだ。
高「鈍(のろ)いんだよ！！」
甘い攻撃によって隙を生み出した背中に肘打ちをかまして吹き飛ばす。
もちろん、吹き飛ばした先にはナノトムが待ち構えていた。
ナ「はぁ！！」
ナノトムは手のひらで力の具現体の腹に衝撃を送る。
くの字が真逆になり、力の具現体は空中で静止した。
そこに高雅が横からやって来て、手を組んで頭を叩き落とした。
ナ「やはり相当強いな、ルシフェルの力は」
高「そりゃどうも。けど、まだ伸びてないぞ」
そう言って、高雅は倒れている力の具現体に指を差す。
ナ「分かってる。これからが本番だ」
高「時間が無いんだ。まきで頼むぜ」
高雅とナノトムは後ろへと軽く跳ぶ。
そして、起き上がる力の具現体の姿を見て構え出す。
ナ「これをやる」
高「お？」
ナノトムが渡したのはマリアの力で作った双剣だった。
高雅は双剣を掴み、軽く振るう。
高「まあまあだな」
ナ「それじゃ、始めるか」
双剣の使い具合を軽く確かめてから高雅は力の具現体を睨む。
そして、力の具現体が動き出したと同時に二人も動き出した。

# 絆編　その１４、失いだす力

転機が訪れているのはＡや高雅の場所だけではない。
レオ達の所にもちゃんと訪れていたのだ。
Ｓ「ビービー、ザコ　バカリ。テゴワサ　カイム」
コ「簡単ね。こんな仕事は」
レ「本当に助かる。百人力とはこの事だな」
サ「お陰で戦闘描写はなくなったのじゃがな」
フ「しーっ！！。言っちゃダメです」
シ「せんとうびょうしゃぁ？」
・・・取りあえず、急に現れたコイカとＳ－０４、ついでにゴドにより大量の敵は速攻で片付いた。
しかし、ゴドは何もせずに後ろで見ているだけであった。
ゴ「全ては計画通りだ」
コ「何が計画通りよ。自分は何もしなかったくせに」
Ｓ「ビービー。ゴド　ハ　デオクレ　テ　タタカエ　ナカッタ
ゴ「う・・うるさいぞ！！」
コ「まあ、あなたがいても足手まといね」
Ｓ「コイカサマ　ノ　イウトオリ」
ゴ「貴様らぁ・・・」
ゴドは言われ放題だが、現実はそうであるため何も言い返さなかった。
仕方なく、ゴドは怒りを沈めた。
レ「助かった」
コ「別にあなた達の為じゃなくて命令で動いているだけ」
Ｓ「スベテ　ハ　サイコウシキカンサマ　ノ　タメ　ニ」
ゴ「そう言うことだ」
レ「そうか。しかし、本当に助かった」
マ「さて、ちょっといいかな？」

話の区切りを見てマリアが入って来た。
マリアを見た瞬間、コイカ達三人は頭を下げた。
マ「あらあら、もうセイクリッドは解散したよ」
コ「ど・・・どういうことですか!?」
マ「私がさっき解散させたのよ」
ゴ「な・・・何故!?」
マ「その方がいいって思ったからよ。私の独断で」
コ「な・・・まぁ、創始者が終わらせても別に文句はありませんが・・・」
マ「じゃあ、決まりね。これからは自分の意思で動いてね」
そう言って、マリアの話は終わった。
まだ三人は妙に納得しきれてないがマリアの言葉ともなると反論できなかった。
仕方なく、コイカ達は首を縦に振った。
ア「ん・・・あれ?」
ロ「すげえええええええええ、普通に起きたあああああああ」
記憶を回復させて気を失っていたアリアが起き上がった。
ショックなどはなく、至って正常であったためログナは驚いていた。
ア「えっと・・・私・・・」
マ「丁度いいタイミングね」
ア「え、マリア様!?。てか、何で私生きてるの?」」
マ「話は全て後よ。高雅の所に行くよ」
ア「コウガ!?、え、え!?」
記憶のショックが無いが、状況把握で焦っていた。
しかし、躊躇させる暇はないため、マリアはアリアの手を掴み、引っ張り出した。
マ「ルシフェル、ついて来て」
ル「分かった」
マ「皆はここにいて。特に力を持っている人達は」
コ「?、どういう意味ですか?」

マ「私の読みが正しかったら多分・・・全吸収が始まるから」
ル「なんだと!?。コウガはどうなるのだ!?。あいつも消されるぞ!!」
マ「だから今から行くのよ。さあ、ぼっとしてる暇はないよ」
コ「空間開きますよ?」
マ「無理よ。開く前に吸収されるのが落ちかもね」
コ「でも、まだ始まっていないのでは?」
ア「・・・もしそれが始まってたらコイカさんはどうなるの?」
アリアが最も重要な所を聞いた。
マリアは何も言わずに視線を逸らす。
それだけでコイカは息を飲みこんだ。
ア「・・・やっぱり」
マ「分かった?。じゃあ走って行くよ」
レ「いくらなんでも距離がある。我が運ぶぞ」
マ「そうね・・・けど、3人も乗せられる?」
レ「・・・・途中までなら大丈夫だ」
マ「そ。じゃあ他の人達はこの場で待機して。多分、巨大な光が見えて消えたら来てもいいから」
そう伝えて、マリア達はレオに乗った。
流石に3人も乗せて走るとなるとすぐにばててしまうのが落ちである。
と言う事で、乗り捨ての形で途中まで乗ることにした。
他の者達はこの場で待機することになった。

一方、Aとキリカはそれぞれの敵と対峙していた。
A「おらぁ！！」
セ「少々やりますね」
Aの方は少しばかりか押していた。
それはキリカの方も変わりなかった。
キ「弱いですねバーカ」
ウ「くっ、さすがセイクリッドじゃ。手強いのぉ」
完全に戦況がA達に傾いていた。
キリカがバズーカを撃つと、例え避けてもAが撥ねかえし隙を出さない。
即席のチームでそれなりにチームワークが出来ていた。
A「もらい！！」
セ「くっ・・・ぐはっ！？」
セバスチャンの隙を見つけたAは蹴りを入れようとする。
セバスチャンはガードするも、活性したAの蹴りを受け切れずに吹き飛ばされた。
その吹き飛んだ場所はキリカがウルザスと戦っている場所だった。
もちろん、キリカはいち早くそれに気付いていた。
キ「成程、バカなりに考えましたねバーカ」
キリカはウルザスの後ろに回り、バズーカを構えた。
その先はウルザスだけでなくセバスチャンもいた。
キ「終わりよバーカ」
そして、虚無のバズーカを放った。
ウ「く・・・調子に乗るでないぞ！！」
ウルザスは空間で虚無の砲撃をどこかへ送った。
その瞬間、Aがこの場から消えた。
そして、セバスチャンが体勢を立て直した。
セ「どうやら、失敗に終わったようですね」
ウ「危ない奴らじゃのぉ」

キ「失敗かどうか決め付けるの速いですバーカ」
キリカは全て計算済みである。
セバスチャンは槍を構え、キリカに向かって突き出した。
しかし、キリカは全く動く気配がない。
セ「全く攻撃する気配もないですね。何を考えているか知りませんが、そのまま死になさい」
キ「攻撃はもう終わりましたバーカ」
ウ「ッ！！、危ないぞ！！」
セ「！？」
キリカに槍が当たる瞬間に真横から虚無の砲撃がやって来た。
セバスチャンはギリギリで反応し、飛んで避けた。
急な反応のため、セバスチャンは相当な隙があった。
A「全く、一人ラリーは寂しいものだな」
消えていたAが虚無の砲撃を先回りにした。
もちろん、やることは一つ。
A「ホーーームラーーーーーーン」
セ「しまっ！？」
Aのバットスイング撥ねかえし術によって虚無の砲撃はセバスチャンへと向かった。
焦っていたセバスチャンは何もできずに直撃し、完全に消えた。
キ「やりますねバーカ」
A「まあね」
Aはウルザスが空間を使ってどこかへ攻撃をやり過ごすのは読めていた。
今、力の具現体によっていたるところに空間が繋がっているため、そこから探し出したのだ。
Aはわざわざ探しに行き、それを弾いてここまで持って来たのである。
そんな誰も考えないような事のお陰でセバスチャンを倒すことができた。

A「さぁて、呆気なく残りは一人だな」
キ「さらに弱い方ですねバーカ」
ウ「老人をなめおって・・・ん？」
キ「？」
A「お？」
三人は同時にある方を向いた。
その先には巨大な眩い光があった。
ウ「・・・うぐっ！？」
A・キ「！？」
突然、ウルザスが胸を抑えて蹲りだした。
キ「一体・・うっ！？」
A「え？、え？、え？」
続くようにキリカまで蹲りだした。
Aは訳が分からずキリカとウルザスを交互に見る。
タ「く・・・主よ・・」
A「お前もか！？」
遂にはタイトも苦しみの声を上げた。
タ「何かに・・・吸われてしまいそうな感じだ」
A「マジすか！？」
ウ「ぐ・・ぐおあああああああああああああ」
ウルザスの姿が急に崩れて光になってしまった。
そのまま巨大な光の方へと吸い寄せられていった。
A「あれが原因だよな、絶対。てか、あっちって高雅がいる方じゃねえか」
キ「く・・・力を・・・体ごと吸い尽すきです・・」
A「なん・・・だと・・・。じゃあ、タイトもやばいって事かよ！？」
キ「ダメ・・・もうもた・・・うあああああああああああああ」
A「うおい！？」
キリカもウルザスと同じように光になり、吸い寄せられていった。

Aは刀を強く握りしめた。
A「やだあああああああ、こいつは手放したくないいいいいいいいいいいい」
タ「く・・・・主よ・・拙者ももう・・・」
A「諦めんなよ!!。どうしてそこで諦めるんだそこで!!」
タ「主・・・済まない」
A「もう少し頑張ってみろよ!!」
Aが必死に声を掛けるが症状がよくなる訳がない。
それでも、Aは涙を堪えて必死に声を上げた。
遂にはタイトも少しずつ光になり始めていた。
A「やだあああああああああ、置いて行かないでえええええええええええ」
タ「く・・・限界が・・・」
A「ちくしょおおおおおおおお・・・・は!!」
絶望になっている時に、Aはある言葉を思い出した。
それは、先ほど言ったキリカの言葉である。
A「体ごと吸い尽すって言ってたよな・・・つまり、タイトの体の中に会って俺の中にないもの・・・力だ!!」
絶望状態にも関わらず、物凄く冴えているA。
しかし、肝心の力を抜く方法が分からなかった。
A「くそ・・・どうすりゃいいんだよ!!」
マ「どうしたのかしら?」
そんな時、高雅のとこへ向かう途中のマリア達にであった。
ただ、レオは既に乗り捨てられていた。
Aは慌てながらも状況を説明するとマリアはすぐに行動に移った。
マ「分かった。タイト君を貸して」
刀の状態のタイトを受け取るとマリアはすぐに手をかざす。
そして、アリアの時と同じように力を抜き取った。
抜き取った活性の力はすぐに吸い寄せられていった。
タ「ぐ・・・はぁ・・・痛みが引いた」

A「マジか!?。もう大丈夫か!?」
タ「拙者は大丈夫じゃが、もう戦うことができなくなってしまった。忝い(かたじけな)」
A「もういいって。お前が無事でよかった」
Aは安堵の息を零し、緊張が解けた瞬間に座り込んだ。
A「活性がなくったって、俺が自力で強くなればいい。それに、戦えない訳じゃない」
タ「そうか・・・」
マ「それよりどうするの?。一緒に高雅の所に行く?」
A「ここは何もなくなったし、行くしかないだろ」
例え力を失って戦力を無くしてもAの目に迷いはなかった。
それを見ていたルシフェルが感心していた。
ル(・・・いい目だ。どんなことにも立ち向かう意思を見受けられる)
マ(人間でここまで意思が強いのは本当に凄い・・・)
ア「一緒に・・・」
A「ん?」
ア「一緒にコウガを助けよう!!」
A「当たり前よ!!。仲間として当然だぜ!!」
アリアの記憶が回復しているのにAは何となく気付いていた。
Aは迷いなく答え、勝手に高雅の所へと走り出した。
アリアは慌てながらもすぐに追いかけ、マリアは笑いながら、ルシフェルは半分呆れながら追い掛けていた。

一方、高雅達はその全吸収に直面しており、大ピンチを迎えていた。
高「あがが・・・ぐ・・」
高雅は歯を食いしばって耐えているが既にナノトムは吸われていた。
高「いきなり超マジになりやがって・・・あぐ!?」
少しでも油断すれば体が崩れる。
そんな感覚に襲われ、高雅は必死に耐えていた。

時を少し遡(さかのぼ)って高雅達の様子。
ナノトムのお陰で優位に進んでいた戦闘であった。
高「お前、以外にできるな」
ナ「だてに最高指揮官についてないからな」
力「・・・・・ッ!!」
力の具現体は高雅達が話している隙を突いて必死に攻撃していた。
ただ、それは高雅達が誘い込むためにやっていた。
力の具現体が狙ったのはナノトムの方だった。
それを見切った高雅はすぐに攻撃に出向いた。
高「テメェの相手は俺だろうが!!」
力「ッ!!」
高雅に悟られないように力の具現体は二人同時に狙うように見せかけていた。
しかし、呆気なく高雅にバレテしまい、一瞬だけ隙を見せた。
高雅は構わず殴り掛かると、力の具現体は無理やり回避した。
ナ「感謝する。こんなに隙を生み出してくれて」
この流れを呼んでいたナノトムは虚無の力を溜めていた。
それを容赦なく力の具現体に極太レーザーとして撃ち放つ。
もろに直撃した力の具現体は飲みこまれ、消えはしなかったがまた倒れていた。
高「あれを喰らってもなお生きているのかよ」

ナ「とんだ化け物だな」
二人は倒れた力の具現体を見ながら話す。
高「・・・・ん？」
ナ「これなら簡単に勝てｒ「待て、おかしいぞ？」ん？」
高「こいつ・・・今のを喰らってない！？」
ナ「何！？」
高雅が違った様子にいち早く気付き、ナノトムは驚いていた。
すると、力の具現体はゆっくりと浮かび上がった。
ナ「くっ、ならばもう一発だ」
高「何だ？。このやばい感じは！？」
ナノトムがもう一度虚無を溜め、高雅はさっきまでとは違う力の具現体を感じていた。
そして、ナノトムが虚無のレーザーを放とうとした瞬間・・・

力「――――――――――――――――ッ！！！！」

巨大な光を発生させた。
その広大で強い光に二人は手で目を覆う。
高・ナ「ッ！？」
それと同時に体の異変に気付いた。
ナノトムの手が光になって吸収されていたのだ。
ナ「な・・ぐあ！？」
苦しみだすも吸収は止まらない。
ナノトムは苦痛な声を上げ、もがき苦しんでいた。
しかし、高雅もそれに似た状況であった。
ナ「ぎぎ・・体が・・・」
高「くそ・・・何だこの苦痛は！？」
二人はその場に崩れ、苦痛と戦っていた。
ナ「あ・・・づ・・・・・・・」
高「おい！！、しっかりしやがれ！！」

限界に近づいたのか、ナノトムは白目をむいて倒れた。
高雅が声を駆けるもナノトムは光となって吸収されてしまった。
高「くそ・・・こりゃ・・・死ぬかもな・・」
いきなりの事で訳が分からない高雅は自ずと死を覚悟した。
それでも、高雅は諦めずに必死に耐え続けた。

## 絆編　その１５、高雅の想い（前書き）

明けましておめでとうございます。
２０１１年は本当に色々ありましたね

そして、この小説も新年早々終わりそうです。

では、最後まで見守ってくださるド広い心の方は見守ってください
Ｍ（＿＿）Ｍ

# 絆編　その15、高雅の想い

力の具現体は何もせずに高雅をずっと見下していた。
高雅は這いつくばって耐えながらも力の具現体を睨みつけていた。
すると、力の具現体はゆっくりと高雅の目の前に下りてきた。
高「・ぐぐ・・・テメェ・・・」
力「・・・・・・・・・・・」
高「見下しやがって・・・あぐっ!?」
少しでも喋って気を散らせばすぐに体が消えてしまう感覚に襲われる。
すると、高雅は力の具現体の足を必死に掴んだ。
高「テメェ・・・調子に・・・乗るなぁ!!!!」
力「ッ!?」
突如、力の具現体に宿っている力が流出しだした。
でたらめに出て行った様々な力は辺りで効果を発動し、カオスになっていた。
高「お前を・・使っていたのは・・・俺だからな・・・こんなの・・朝飯前だ!!」
力「ッ!!」
力の具現体は高雅から離れようと足を振るいだす。
しかし、高雅はしがみ付いて簡単に離れようとはしない。
力の具現体は足を振るうだけでなく、高雅の腹を蹴りだした。
その威力は当然のごとく絶大で、高雅は口に血を含んでいた。
高「ぶ・・・ぐあっ・・」
流石に吸収と攻撃を同時に耐えている為か限界が早かった。
高雅は蹴り飛ばされて動かなくなった。
力の具現体は高雅に力を出されて一時的に膝をついた。
しかし、吸収した力ですぐに立ち上がった。
力の具現体は高雅の近くへ歩み寄り、再び見下した。

力「・・・・・・・・・・・・」
力の具現体は静かに座りこみ、高雅の頭に手を伸ばした。
その時だった。
A「人間キィィィィィィック」
力「？」
Aが全力疾走からの飛び蹴りで力の具現体の顔面を蹴った。
しかし、力の具現体は全く動じずに、Aは壁を蹴ったかのように跳ね返って転んだ。
A「いった！？」
Aは尻を擦りながら痛みを和らげていた。
ア「大丈夫？」
遅れてきたアリア、そしてマリアとルシフェル。
アリアはAに声を掛けて上げた。
一方でマリアは倒れている高雅に近づき、力の具現体と向かい合った。
マ「・・・・・・・・・」
力「・・・・・・・・・」
マリアは何もせず、また力の具現体も何もしなかった。
すると、マリアは高雅に手をかざし、ルシフェルの力を抜き取った。
当然のごとく、ルシフェルの力は吸収されてしまう。
マ「さぁ、決着をつけてね」
そう言って、マリアは身を引いた。
間もなく高雅の目が開き、起きた瞬間に関わらずに体を起して力の具現体と距離をとった。
高「・・・あれ、苦しくない？」
ア「コウガ！！、大丈夫！？」
高「え、アリア！？。何でここに・・・てか、記憶回復してる！？」
ア「コウガ・・・コウガァ！！」
高「うわっと！？」
色々と訳が分からない状態の高雅だが、アリアは高雅に抱きついた。

全く理解していない高雅は戸惑いながらもしっかりと受け止めていた。
マ「間にあって良かった」
高「なぁ、どういう事だ?。色々と訳が分からん」
マ「でも、やるべきことは分かるでしょ?」
高「・・・・まぁな」
高雅は力の具現体を睨みつける。
力の具現体は待ってくれているのか襲い掛かる様子はなかった。
最も時間をもらってもいずれ爆発して負けになってしまうが。
高「・・・もう時間がない。アリア、耳をかせ」
ア「ん?」
高雅はアリアに耳打ちをすると、アリアは目を丸くして驚く。
しかし、すぐに高雅の考えを理解して笑顔になった。
ア「ほんと・・・コウガは優しいね」
高「最終の手段だ。優しさもへったくれもない」
ア「もう・・・うん、一緒に皆を守ろう」
高「・・・ああ」
A「んで、俺は何をすればいい?。何でもやるz「皆のとこに戻って帰る準備をしろ」は?」
高「任せたぞ、主人公・・・じゃあな」
ア「バイバイ、A君」
高雅が勝手に決め付け、Aの承諾も得ずに力の具現体へと向かって行った。
Aは手を伸ばして制止の言葉を掛けるが、二人は全く聞かずに進んで行った。
すぐにでも走り出して二人を止めたかったが、何故か動くことができなかった。
二人が別れ際の言葉が妙に重く感じたのだから。
未だ唖然と二人を見送るAは手を伸ばしたまま動けない。
すると、マリアがAの肩を叩き、優しく言葉を掛けた。

マ「二人を見守ろう。私達はそれしかできないから」
A「え・・・」
ル「仲間なら最後まで見届けてやるのだ。あの二人の決意を」
Aはただ二人の背中を見守り続けた。
A（・・・結局、主人公はあいつらだった訳か・・・俺もまだまだだな）
Aは溜息を吐きながら、そう思った。
そして、二人は力の具現体の目の前までやって来た。
高「待たせたな」
力「・・・・・・・・・・・・・」
既に、力の具現体の体には罅が入り、今にも砕けてしまいそうだった。
爆発までもう十分もないだろう。
その為か、力の具現体は全く動く気配がなかった。
高「アリア、怖くないか？」
ア「・・・正直怖い。けど、コウガと一緒なら大丈夫だよ」
高「あっそ・・・いくぞ！！」
ア「うん！！」
二人は同時に力の具現体の肩に触れた。
その瞬間、辺りに力が暴発し始めた。
先程、高雅がやったと同じように力の流出を行って時間を稼いでいるのだ。
しかし、それだけじゃなかった。
高「いいか！！。空間の力を見つけたらここから空間がどこにも繋がってない所に繋げるんだ！！」
ア「分かってるよ！！」
A「ちょ！？、何やってんの！？」
二人は無数にある力の中から空間の力を探していた。
遠くで見ているA達だが、周りでは爆発したり火柱が立ったり岩が創られたりと危険であった。

それでも、逃げ出さずにずっと二人を見続けていた。
マ「・・・成程ね」
A「何ですかぁ!?」
ル「・・・一緒に死ぬつもりだ、あの二人」
A「・・・は?」
ルシフェルの言葉にAが固まった。
ル「簡単な話だ。ここから繋がっていない場所に行くだけだ。あいつを連れてな」
A「つまり・・・死ぬ気なのか、あいつら!?」
マ「そうでもしないと、私達が助からない。コウガなりに考えた結果が導き出した答えよ」
A「ふざけるな!!。絶対に止めさせｔ「無駄だ」何で勝手に決めるんだよ!!」
ル「あいつは何度もこういう危険な事を乗り切り、多くのものを救って来た。そんな奴が考えた事だ。他に救いようがない」
A「それは・・・」
Aは何も言い返せなかった。
高雅は色々な事を救って来た。
高雅は常に最良のやり方で救ってきた。
だからこそ、ああいう考えになったのだろう。
そんな高雅が考えたやり方にAは反論することすら許されないのだと自覚した。
ル「だからこそ、見届けてやれ」
A「・・・あいつら、かっこつけやがって・・・」
Aは文句を言いながらも高雅達の事を見ていた。
高雅とアリアは必死に空間の力を探していた。
ア「・・・ねえ、コウガ」
高「こんな時に何だ?」
ア「もう離れないから」
高「・・・そうかい」

ア「一緒に・・・やり遂げよう!!」
高「ああ」
二人が空間の力を探しているも、刻一刻と力の具現体の体は脆くなっていた。
もう数分も持たないだろう。
それでも、二人は諦めずに空間の力を探し続けた。
高「・・・あった!!」
ア「ほんと!?」
高「ああ、これでこいつを宇宙の彼方にでも連れて行けば・・・」
ア「皆が助かるんだね」
高「そうだ。じゃあ、さっさとこいつを連れて・・・」
遂に望んでいた力を見つけ出した。
力の具現体が爆発する前に移動することができるだろう。
すると、アリアは突然、高雅に抱きついた。
高「んがっ!?、何するんだよ!!」
ア「・・・どうせ一人で連れて行く気なんでしょ?」
高「ッ!?」
ア「分かるんだよ。私だって高雅の考えが。でも、こうしたら一緒だよね」
高「・・・放せよ」
ア「嫌」
高「こんな奴、俺一人で連れて行けばいいだろうが」
ア「・・・もう離れたくないよ・・・グスッ」
高「ッ!?」
アリアが高雅の胸で涙を流し始めた。
肩を震わせ、手に力を入れて高雅を放さないようにしていた。
そして、自分の胸に秘めた言葉を話した。
ア「私・・・コウガが好きなんだよ・・・ずっと前から・・・凄く好きで・・時が経つにつれてその思いが大きくなって・・」
高「・・・・・・・・」

ア「でも・・コウガは気付いてくれなかった・・・私がこんなに苦しんでたのに・・・」
高「・・・・だから、俺は優しくないって言っただろ・・・」
高雅はアリアの肩を掴んで優しく押しのけ、アリアの顔を見て言った。
高「・・・ずっと分かってた」
ア「え!?」
高「俺は殺気が読める奴だぞ。気付かない方がおかしいって」
ア「え・・あ・・・」
高「・・・・・・・・ずっと知らない振りして、アリアを苦しめる奴が優しいと思うか?」
ア「コウガ・・・うっ!?」
すると、高雅は不意打ちでアリアの腹を殴り、アリアはそのまま気を失った。
ゆっくりとアリアを寝かせ、力の具現体と高雅の足下に空間を開いた。
高「だから、最後は優しい自分でいさせてくれ。俺はお前が好きだから・・・失いたくないんだ。それに言っただろ、見殺しにするわけねーだろって」
そう言って、力の具現対の肩を掴み、空間の中へと押し運んだ。
力の具現体が空間の中で爆発すると同時に、高雅の開いた空間は閉じられた。
力を吸収する眩い光も力の具現体が居なくなったお陰で完全に消滅した。
そして、全てが終わったのだ。
A「・・・・・・・・・・・あのバカが・・・」
静かになったこの場所で、Aはそう呟いた。

数分後、レオ達が駆けつけてきた。
光が見えなくなってここへ来たのである。
レ「・・・どういった状況だ？」
A「全てが終わったとでも言っておこうか」
フ「・・・コウガ様はどこです？」
A「あいつは・・・」
ア「ん・・・は！？」
アリアが目を覚まし、すぐさま高雅を探した。
しかし、いない事に気付くと涙を浮かべた。
ア「・・・バカ・・・コウガの・・・バカァ・・」
エ「コウガ君はまさか・・・」
A「・・・そのまさかだ・・・」
Aの言葉を聞いて皆は絶望した。
しかし、たった一人だけが余裕の表情だった。
ロ「大丈夫！！。俺っちが再生ｗ「高雅の媒体なんて一個もないぞ」
・・・それは・・」
Aの言葉にがっくりと肩を落とすログナ。
結果、全員のテンションがゼロになった。
サ「・・・ホント、バカな奴じゃ・・・全く・・・」
シ「えぐ・・・おにいちゃぁん・・・ひぐ」
サミダレも暗い顔をしており、シリアは泣き崩れていた。
すると、地響きが聞こえ、皆は不安そうにあたりを見渡した。
マ「いけない。あれだけ力が関与されて空間が崩れてる！！。皆、
早くあの空間に入って。二度とここから出られなくなっちゃう」
マリアはいち早く状況を理解し、皆を促す。

緊急事態の為、すぐに動きだして空間を出て行った。
しかし、アリアはまだ動かなかった。
マ「アリアちゃん、早く!!」
ア「コウガ・・・」
マ「高雅からもらった命を無駄にしちゃ怒られるよ!!」
ア「!!・・・分かった・・・」
アリアはマリアの言葉を聞いて涙を拭いて空間へ走った。
殆どの人が空間へ入ったがマリアとルシフェル、コイカ、S－04、ゴドは空間に入らなかった。
紗「さあ、あなた達も早く!!」
マ「私達は一度消えた存在。もう十分よ」
ル「私も同じだ」
コ「最高指揮官様もセイクリッドもないなら、生き返る意味がないわよ」
S「ビービー　ワタシ　ハ　ヤルベキ　コト　ガ　アリマセン。ココデ　キエマス」
ゴ「生き返りたいとは思っておらぬ。ここで別れじゃ」
紗「・・・そうですか・・・ありがとうございました」
紗奈恵は最後の別れに頭を下げた。
そして、繋がっていた空間は閉じられ、皆は現世に帰っていた。
A「ここは・・・」
辺りを見渡すと、ここは森の中で少し開けた場所だった。
近くには綺麗な池があり、春の陽気で美しい花も咲き誇っていた。
ア「お墓の前だね」
レ「綺麗な場所だな」
エ「まるで秘密の花園だ」
フ「えっと・・・ッ!?、このお墓、サキムラ家(け)です!!」
サ「では、ここはコウガ殿の家族の墓か!?」
紗「実際、中には誰もいないけど・・・高雅が一人で建てたのかしら?」

文「あいつ、俺らの墓を作ってたのか・・・」
勇「まあ、当たり前と言えば当たり前だがな」
ア「・・・皆」
アリアが立ち上がり、皆を呼び掛ける。
すると、アリアは笑顔で言った。
ア「帰ろう。皆が帰る場所に」
紗「・・・・・そうね。こんな所に居ても何もないもの」
文「それじゃ、俺らは先に帰らせてもらう」
勇「じゃあな」
紗奈恵が空間を開き、先に3人は天国へと帰った。
A「・・・んじゃ、俺も帰るわ。じゃあな」
ロ「俺っちと蓮田が案内するぜ。森なら大体の事は分かるからすぐに道に出られるぜ」
蓮「この獣道、人が歩いた形跡があるからきっと道に出られるよ」
Aは後ろを向きながら手を振り、蓮田が教えた獣道を歩いて行った。
ロ「じゃあな、また飯でも食いに行くぜ」
蓮「バイバイ」
ログナと蓮田もAの後を歩き、帰って行った。
それを見送ったアリアが皆に顔を合わせる。
ア「私達も帰ろ」
アリアの言葉に皆は頷き、獣道を歩いて行った。
ただ、離れる前にアリアは墓の前に一本の花をそえた。

## 絆編　その１５、高雅の想い（後書き）

ＢＡＤ　ＥＮＤが好きでしたらここで読み終える事をお勧めします。

一応、後少しだけありますよ。

作者は無理矢理でもＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ主義ですｗ

## 絆編　その１６、結ばれる絆（前書き）

長くなってしまったｏｒｚ
しかし、分けるには分け辛く、文章が少ないｗ
申し訳ないです。
そして、これが天からの贈り物、最後の話です。

# 絆編　その16、結ばれる絆

高雅が居なくなって1年が過ぎた。
今、緑淵高校では卒業式が行われていた。
A「・・・・・・・・・・・・・暇」
B「うぅ・・・もう別れか・・・皆とも別れかぁ」
C「やだおぉ、もっと楽しみたいよぉ・・・」
D「走りてぇ・・・ぐす・・また購買部に走りてぇよぉ」
E「これが最後かぁ・・・・あぁ、皆とはしゃぎたい・・・」
Aは遠くを見つめ、退屈そうにしていた。
しかし、残りの4人は別れに泣いていた。
A「んで、お前ら進路どうなった?」
BCDE「フリー」
A「高卒でフリーって・・・終わりじゃね?」
B「うるせぇ!!。テメェは2年からいきなり頭が良くなりやがって!!」
C「そのまま名門の大学に行くだぁ?。バカキャラがふざけんじゃねえ!!」
D「お前、変わり過ぎだろ・・・」
E「3年になるぐらいから変わったよなぁ」
A「・・・まぁ、少しだけ面白みがなくなったからなぁ、変に勉強してたし」
そう言って、窓から外を見上げる。
Aは3年生で成績優秀。
今じゃ脳の活性無しでも常にテストは上位にいた。
ただ、一回も龍子に勝つことはできなかったが。
A「それに、俺決めたんだよ」
B「何を?」
A「これからは主人公キャラじゃなくて、主人公の仲間の冷静で強

いキャラ目指すって」
C「それさ、裏切ったり死んだりする立ち位置だよな」
A「主人公の次にかっこいいからいいんだよ」
D「この厨二病が。現実を教えてやるぜ」
A「ほぉ、かかってきな」
E「お前の卒業証書を目の前で破ってやらあああああ」
静粛な場所に関わらず、やっぱり購買部組は騒がしかった。
何気ない会話で喧嘩が起こり、そしていつものようにはしゃぐ姿。
もちろん、先生が問答無用で止めたのであった。
ただ、少し遅く、既に勝負はAが勝っていたのであった。
夢「ったく、本当に騒がしい奴ら」
龍「・・・そうだね・・」
夢「でも、あれも今日で最後となると、少し寂しい所もあるよねぇ」
龍「うん・・・」
夢「最後の最後まで現れないわね、あいつ」
龍「・・・・・・・・・」
夢がそう言うと、一つだけ空いている席を見つめた。
そこは本来は高雅が座る場所である。
高雅は現世では行方不明として扱われていた。
夢「全く、顔ぐらい出せっての」
龍「・・・きっと・・忙しいんだよ・・・きっと・・」
夢「はぁ、1年間も顔も出さず、連絡もなくてよくそんなことが言えるわね」
龍「高雅君は・・・強いから・・・」
夢「意味が分からないって」
龍子の言葉が全く理解できない夢。
それでも龍子だけは高雅の事を理解しているつもりでいた。
少し離れた場所でも同じように思っている人がいた。
凛「全く、高雅さんは卒業式までサボるつもりですか・・・」
凛も遠くから高雅の席を眺めていた。

凛も凛で高雅捜索隊を出すほど心配していたのだ。
凛「気持ちも伝えられないままなんて・・・・はぁ」
もどかしい気持ちを押し殺し、立ち上がる。
卒業証書をもらう順番がやって来たのだ。
A「・・・後で高雅の家でも行くかな」
そんなことを呟きながら、先生に説教されていたAだった。

一方、高雅の家は静まりかえっていた。
しかし、これは既にいつもの事である。
今は高雅の家にはアリアとシリアしかいない。
他の皆はそれぞれの目的のために家を出たのであった。
ア「・・・もうあれから1年かぁ」
シ「もぐもぐぅ・・・ん?」
シリアはアリア自作のドーナツを食べながらのんびりしていた。
しかし、アリアの呟き声に反応して動きが止まった。
ア「・・・ん?、おいしい?」
シ「うん!!。凄く美味しいぃ!!」
ア「良かった」
シリアの純粋な笑顔を見て、アリアは微笑んだ。
ここ一年、シリアを養うためにアリアは料理を学び、今じゃかなりの腕前である。
ア「また作ってあげるね」
シ「うん!!。お姉ちゃんのお菓子もご飯も大好きぃ!!」

ロ「俺っちもだぁいすきぃ」
ア「ふふ、ありがと」
こっそり現れたログナが勝手にドーナツを食べていた。
しかし、アリアは何もないように普通にスルーした。
ロ「それにしても、皆どうしてるんだろうな」
ア「きっと実現するために頑張ってるよ」
ロ「そっか。あいつらも頑張ってんだなぁ」
ア「・・・私だけだよ、頑張ってないのは」
ロ「どして？」
ア「だって・・・ずっとコウガを待ってるんだから・・・」
ロ「それのどこが頑張ってないって言えるんだよ？」
ア「だって・・・コウガの事、諦められない」
ロ「それでいいんじゃねえか？思い続けたらきっと叶うって」
ア「そっか。ありがとう」

ピーンポーン・・・

そんな時、インターホンが鳴った。
一応、家主ではないが来客には応じていた。
理由はいたって簡単、来客が限られているからだ。
レ「久しぶりだな」
サ「元気にしておったかのぉ？」
ア「レオ君にサミダレさん！！」
やってきたのはレオとサミダレだった。
二人は家を出てからは天獣を探していたのだ。
天獣は全滅されたと思われたが、やはり諦めきれなかった。
レオ自身も、サミダレを見つけたりと希望はない訳ではないのだ。
ア「まぁ、上がってよ。私の家じゃないんだけど」
そう言って、アリアは家の中へと促す。
レ「変わらないな、ここも」

サ「そうじゃのぉ」
久しぶりの場所に趣深くなる二人。
ア「お茶、出そうか？」
レ「別に必要が無いのだが？」
ア「いやいや。まぁ、しきたりみたいなものかな？」
サ「そうか。では頂くとするかのぉ」
レ「なら、我も頂こう」
ア「分かった。用意するからソファにでも座ってて」
アリアは台所へ向かい、お茶を用意し始めた。
その間にレオとサミダレはソファに向かい、そこでシリアと再会した。
シ「あぁ！！、久しぶりぃ！！」
レ「久しぶりだな。元気にしていたか？」
シ「うん！！」
元気よく頷くシリア。
すると、アリアがお茶を持ってやって来た。
ア「あれ？、ログナはどこに行ったの？」
シ「帰ったよぉ」
ア「そうなんだ」
レ「ログナ殿がいたのか。一言挨拶がしたかったな」
ア「お茶、余分に淹れちゃった」
全員分を淹れたお茶は一つだけ余ってしまった。

ピンポピンポーン

すると、今度は2連続でインターホンがなった。
ア「またお客さん？」
アリアは不思議に思いつつもちゃんと出て行った。
フ「やっほおです」
エ「久しぶりだ」

ア「フィーラちゃんとエクスも来たの！？」
今度はフィーラとエクスがやって来た。
普段はレオ達もフィーラ達は滅多に来ないのだが、偶然にも揃ってやって来た。
フ「も？」
エ「誰か来ているのかい？」
ア「あ、うん。実はレオ君とサミダレさんもいるんだ」
フ「おぉ、久しぶりに会えるです！？」
ア「うん。中にいるから入って」
エ「そうさせてもらうよ」
フィーラとエクスも家に上がり込む。
そこでレオ達と久しぶりの再会を果たした。
フ「久しぶりです！！」
レ「おお、フィーラ殿か。それにエクス殿も。久しぶりだな」
エ「元気していたかい？」
サ「お主らも元気そうじゃな」
シ「皆ぁ、大集合だねぇ」
フ「こうして集まるなんて不思議です」
レ「確かに。しかし、偶然来たって訳ではないのだが」
サ「そうじゃ。何かに呼ばれたような気がしてな」
フ「奇遇です。ボク達もそんな気がしたんです」
エ「皆、ここに来た理由は同じと言う事か」
ア「何の話？。はい、お茶」
アリアは新しく二つのお茶を淹れた。
すると、あることに気付いた。
レ「？、先程余ったお茶でも良くないか？。わざわざ二つ淹れなくても・・・」
ア「あはは、余りモノを出すみたいで家だったから新しく淹れちゃった」
フ「わざわざそこまでしなくても大丈夫です」

エ「特に気にしないのだが・・・既に淹れてしまってはな」
ア「そうだね、そのお茶取ってくれる?。勿体無いけど捨てちゃお」
サ「仕方ないのぉ」
サミダレがアリアに先程余ったお茶を渡す。
アリアは渋々お茶を流そうとした。
その時だった。
?「おいおい、勿体無いことするなよ」
ア「え!?」
不意に聞こえたその声に顔を上げるアリア。
ア「・・・今、誰か喋った?」
レ「?、どうしたのだ?」
ア「あ・・いや、何でもない・・・」
アリアは気のせいだろうと思い、再びお茶を捨てようとする。
?「だから、勿体無いことするなって言ってんだろうが」
ア「いたっ!?・・・って、え!?」
突然、後頭部に響く痛み。
それとどうに聞こえる懐かしい声。
アリアはすぐに振り返るも、そこには何もなかった。
ア「・・・コウガなわけ・・・ないよね」
きっと疲れていると思いこみ、今度こそお茶を流そうとする。
すると手を掴まれ、隣に懐かしい姿が現れた。
高「だーかーらー、勿体無いって言ってんだろうが。日本語通じないのかテメェは」
ア「は・・え・・・」
視界に入ってきたのは間違いなく高雅だった。
高雅はアリアからお茶を取ると、そのまま口にする。
高「・・・いい味してるな」
ア「コウガ・・・夢じゃ・・・ないよね?」
高「さっき叩いただろうが。痛かっただろ」
ア「じゃあ・・・」

高「ただいま、とテンプレな事でも言っておくか」
ア「コウガアアアアァァァ・・・」
アリアは高雅に飛びついた。
ずっと待ち続けていた存在が現れ、アリアは涙を流した。
アリアの声にレオ達も台所へやって来た。
レ「一体・・・!?、コウガ殿!?」
フ「え!?え!?、コウガ様!?」
エ「生きていたのか!?」
サ「何故、今になって戻って来たのじゃ!?」
シ「あぁ!!、おにいちゃぁん!!」
高「一斉に来たなおい」
纏めてやって来て、色々な質問がやってきた。
流石に高雅も困り顔であった。
レ「何はともあれ、本当に良かった」
フ「うう・・・涙が・・・出てくるです・・」
高「んな大袈裟な・・・」
ア「大袈裟じゃないよ・・・本当に皆、心配してたんだよ」
高「約一名、俺を死んだと思っていたみたいだが・・・」
そう言って、高雅はエクスの方を睨みつける。
エクスは高雅の視線にビクリと反応した。
エ「あ・・いや・・・言葉のあやと言うかその・・・」
高「殴っていいか?」
エ「・・・済まない」
高「よろしい」
ア「でも、どうやって生き抜いてたの?、この1年間」
高「あー・・・まぁ何と言うか・・・何故か生きてたって言うのが正しいかな?」
フ「どういうことです?」
高「いやぁ、爆発した後、俺死んだんだなぁって思ってた、目の前に力の具現体が微笑んでたんだよ」

エ「それとどういう関係が？」
高「ん～・・・多分、助けられたんじゃねえかなぁ？」
高雅自身もどうやって生きたか分からなかった。
ただ、高雅の勘では力の具現体が助けたんだと思っていた。
サ「何はともあれ、良かったじゃないか」
ア「・・・所で、何で1年間もいなかったの？」
高「ああ、俺さ、天国に行くことした」
高以外「えぇ！？」
いきなりの報告で全員が驚いた。
高「そんでもって色々やってたら1年経ってた。そんな感じだ」
ア「色々って何？」
高「まず、俺の存在を現世から完全になくすことだな」
ア「そんなことするの！？」
高「元々、現世（ここ）に居るべきじゃないからな。消えるのが一番だ。この家も消すつもりだ」
シ「これからどうするのぉ？」
高「のんびり天国で過ごすさ。皆はどうするか？」
レ「我はサミダレ殿と一緒に天獣の生き残りを探す」
フ「ボクはエクスと楽園復興を目指すです」
高「なんだ、やることあるのか。そりゃ良かった」
シ「あたしは何もないよぉ」
ア「私も特に何も・・・」
高「そっか。さて、事は早く進めるぞ。この家はもうすぐ消えｒ〈ピーンポーン〉誰だよこんな時に・・・」
またまた来客がやって来た。
今度は高雅自身が出た。
高「どちら様だ？」
A「うお！？、高雅いたのかよ！？」
高「今帰った」
龍「高雅・・・君・・・」

凛「高雅さん!?」
やってきたのはA、龍子、それに凛だった。
3人は卒業式の帰りに高雅の家によったのだ。
高「あー、今までありがとう。いなかった訳は聞くな」
A「そりゃ、もうどうでもいい事だから聞かないが・・・いつ戻ってきた?」
高「さっき。てか、もうすぐ出ていくよ。この家も町も」
龍「どういう・・・こと・・?」
高「引っ越す。遠い遠い場所に」
凛「また・・・会えますよね?」
高「無理」
そこだけはきっぱりと言った。
3人は唖然とし、高雅の言葉を理解するのに時間が掛かった。
高「言っただろ。遠い遠い場所だって。もう一生会えないから」
凛「そんな!?」
龍「・・・・・・・・・・」
A「・・・・・・はぁ、分かったよ」
誰も肯定しない中、Aだけがそれを許した。
A「けどさ、一つだけ条件つけさせてくれ」
高「何だ?」

A「俺達を、絶対に忘れないでくれ」

高「・・・・・・・・・人は皆、時が経てば忘れていくだろ」
A「けど、俺は忘れねえぞ」
高「無理だな。人である限な」
A「安心しろ。俺は人を超える為に旅に出る」」
高「いきなりだなおい」
A「今決めた」
高「それでいいのだか」

A「大丈夫だ、問題ない」
高「へいへい」
高雅は呆れて、もう言葉が出なかった。
すると、凛が一歩前に出て高雅と向き合った。
凛「あの・・高雅ｓ「言うな」え!?」
高「言うなって言ってんだ。俺はもう決めたから」
凛「・・・そうでしたか」
高「じゃあな。立派に生きろよ」
高雅は背を向けて手を上げる。
A「おう、立派な冷静で主人公をサポートする最強キャラになってやるぜ」
龍「さようなら・・・高雅君・・・」
凛「高雅さんこそ、逞しく生きるのですよ」
高「はいはい。せいぜい忘れないでやるよ」
そう言って、高雅は家に入り、3人は帰って行った。
高「さて、家も消すぞ。高雅家はこれに解散だ」
フ「・・・コウガ様、ボクはきっと楽園を復興させるです」
エ「そのためにも、他の皆を探し出す旅に出る」
高「ああ。ウルザスが楽園達の心臓を保管していた場所がどこか分かったらどうにか連絡してやるよ」
フィーラとエクスは先に家を出た。
楽園復興のために二人の旅が始まったのだ。
レ「コウガ殿、我はコウガ殿にあえて本当に良かった」
サ「私もじゃ。感謝し切れぬ。いつか復活した天獣界でも見せてやるぞ」
高「楽しみにしてる。手伝えることあったら言えよ」
レオとサミダレも続いて家を出た。
生き残りの天獣がいることを信じて、そして天獣の世界を復活させるために。
シ「あたしはぁ・・・えっとぉ・・・」

高「・・・庭に新しい家に繋がっている空間がある。そこに行きたきゃ行け」
シ「ッ！！・・・うん！！」
高雅の言葉を聞いた途端、シリアは一目散に駆けだした。
これからも高雅と過ごしていられる夢を抱きながら。
ア「皆行っちゃったね」
高「そうだな・・・」
ア「・・・・・・」
二人の間に沈黙が訪れる
高・ア「あのさっ！！」
そんな沈黙に耐えきれず、二人同時に切り出した。
しかし、被ってしまったことに少し躊躇(ためら)いがあった。
高「お前から言えよ」
ア「あ・・・うん。じゃあ、言うよ？」
アリアは少し恥ずかしそうに高雅の様子を窺う。
高「どうぞどうぞ」
ア「うん・・・えっと、一緒に・・・いて？／／／」
アリアは恥ずかしそうに消えそうな声で必死に告げた。
すると、高雅は少し不機嫌そうに頬を書いていた。
ア「え・・あれ！？」
高「・・・・」
ア「えっと・・・もしかして、ダメ？」
高「・・・・・・・次、俺が言っていいか？」
ア「あ、はい。どうぞ」
結局、高雅の答えも聞けずにバトンが渡った。
すると、高雅はアリアの頭に手を乗せていった。
高「ずっと俺の傍にいてくれ」
ア「え・・・！？」
有無も問わずに、高雅は問答無用でアリアを抱き寄せた。
アリアは目を丸くしたまま、何も言わなかった。

高「本当は、お前の声があったから、俺は生きてたんだ」
ア「え!?」
高「皆の前じゃ適当なこと言った・・・とはいえ、8割あってるけどな」
ア「どういうこと?」
高「力の具現体の爆発に巻き込まれて当然、死を覚悟した。まぁ、周りが真っ白になって浮かんでた気分だった」
ア「うん・・・」
高「どうしても死を感じられなかったからぼうっとしてたらお前の声が聞こえてた。それをずっと聞いてたら会いたくなったんだ」
ア「そう・・なんだ・・・」
高「これは推測だが、力の具現体は元はお前のものだし、お前の願いでも通じて叶ったんじゃねえか?」
ア「・・・それだと、何だか照れるなぁ」
高「おいおい、こうして会いに来てやってそう言うか。こっちだって、ものすげぇ恥ずかしいってのによ」
ア「あ・・ごめん」
高「で、どうなんだ?」
ア「へ!?」
高雅はこれ以上何も言わなかった。
少ししてから、アリアは気付き、高雅の胸に顔を隠しながら言った。
ア「・・・ずっと一緒」
高「分かったよ」
ア「もう、離れることはないよね?」
高「ないない」
ア「・・・やっと・・・私は・・・ずっと待って・・・」
高「ん、良く待ちました。そんでもって・・・」
高雅はアリアの肩を掴んだまま、少し距離を置き、アリアの顔を見て言った。

高「これからも、末永くよろしくな」
ア「・・・うん！！」

彼の現世での人生は幕を閉じた。
アリアと出会う前に比べ、彼は変わることができた。
孤独に生きることが全てだった存在が絆を手に入れた。
そして、絆は結びを繰り返し、次第に大きな輪となった。
この輪が大きく、そして強く結ばれているのはどんなに離れても変わらないだろう。

絆編　完
天からの贈り物　完結

# 絆編　その１６、結ばれる絆（後書き）

これにて、この小説は終わりです。
ここまで長かった、そして色々なことがあり過ぎた。
でも途中で忙しくなっても、投げ出したくはなかったですね。
無事に完結できて、自己満足な達成感に溺れてますｗ

高校生の時に書き始め、今じゃ大学生とは・・・こんなに長くなるとは自分でも思ってませんでした。
ただ、終わりに向かって書いていたら、「ん～、こんな話もありかなぁ」とか思って勝手に追加して、要は自業自得で長引かせてしまったｗ

さらにチェックはしているはずですが、どこか回収し忘れてしまってたり、誤字や脱字などがもしかしたらあるかも知れません・・・。
正直、見直していると高確率で誤字を見つけることは多かったです。
完全に不注意過ぎです、はい。

さらに更新ペース、最終的には1週間すら守れない最低な事を・・・
本当に申し訳ないです。

しかし、これで日々小説を書くことが無くなるのは自分にとって妙に物足りないので、もしかしたらまた何か書くかもしれませんｗ
今度書くときは更新ペースをなるべくゆとりをもつように心がけます。

では最後に、このような稚拙で自己満足な小説を読んでいただき、本当にありがとうございました。
感想や批判、評価などは自由で構いません。

ただ、する時はちゃんとしてくださいね。荒らしに近いものは見つけ次第、削除しますので。

本当にお疲れ様でした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8094i/

天からの贈り物

2012年1月11日02時49分発行